

---

# 街中がネットファイター(完全版)

鳥井雫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

街中がネットファイター（完全版）

### 【Nコード】

N1503T

### 【作者名】

鳥井雫

### 【あらすじ】

架空の街、大井蒼空町では、ケーブル配信されているんラインゲーム『ファンタジー スカイ』が大流行。ケーブル配信の特性上、ゲーム参加者は街に住む住民だけ。そんなゲームの5月の期間限定イベントが始まり、街はちょっとした盛り上がりを見せ始める。

そんな中、中学生ギルドを結成する弾美や瑠璃の幼馴染みコンビは、ネット内のもう一つの架空世界で今日も縦横無尽の活躍をみせる！

\* 以前にこのサイトに途中まで投稿していた、作品の投稿し直し作品です。前のIDではどうやってもログイン出来ず、泣く泣く連載を中断してました。

作品自体、既に最後まで書き終えています。後は仕事の合間に、ぼちぼち投稿して行きたいと思っております。途中まで読んで下さっていた皆さんが、ここを見つけれられる事を願っております。

## 01 期間限定イベント開始！（前書き）

ブラウザのエラーで、連載中のこの小説が投稿出来なくなったりは一年余り。楽しみに読んで下さっていた皆さん、穏当にご迷惑をお掛けしました！

思えば、以前に愛用していたパソコンがクラッシュしてから不幸の始まり。新しいパソコンでのログインで、何度も回線切断を知らせるウィンドウが……。

それが鬱陶しくて、ログインし直せば直るかなってログアウトした所。何度やってもログイン出来なくなっ、自分の能力では手の施しようもなくなってしまいました（笑）。

今度は大丈夫……な筈ですので、頑張っ最終話まで投稿して行く所存。お久し振りの皆さん、始めましての皆さん、どうぞ最後までお付き合い下さい。

……とは言え、22話まではほとんど変化はありませんが（笑）。

## 01 期間限定イベント開始!

5月の始まりと共に、街中にはどこか不穏な空気が漂っていた。今の季節に丁度良い感じの青空が広がる平日の午後、他とは根本的に違う理念で創り出された、環境モデル都市『大井蒼空町』<sup>\*</sup> 区画整理も住居環境も設計段階からきっちりとなされ、住民もIT企業関係者とその家族を優先的に受け入れた街。

学園都市の側面も併せ持つており、街の南側にはエスカレーター式の有名な公立学園が建ち並んでいる。もちろんその周囲には、学園生活に必要な設備もそこかしこに目立っている。

例を挙げると、国内屈指の書籍量を誇る図書館、総合体育館、音楽ホール、文化会館、毎月企画の変わる芸術会館など。<sup>\*</sup> 学生達の質も、それにつられて高いとの認識が公然と存在している。

もちろん学校に通う生徒達は、恵まれた環境の中で学園生活を過ごす事が出来る。学校のカリキュラムも、他とは変わったユニークで独創的なものが多く存在する。

小中高一貫の地元の付属学校の教育システムは別として、大井大は全国的に名前が有名である。各学部を取り揃えてある総合学部を誇る私立の大学なのだが、特に情報や理系の学部はレベルが高いとの噂である。

その一方で、全く関係ないケーブル事業でのゲームイベントが、学生を中心に流行しているのも事実だったりする。まあケーブル事業という範囲の狭さが、この街のみにその流行を留めているとも言えるのだが……。

その流行も、ある意味奇跡なのかも知れないけれど。

\*

\*

「ようやく5月だ、フランスカの季節限定イベント始まるなっ！」  
「おっつ、朝のうちにダウンロードしといたけど、結構時間掛かったぞ？」

「えっ、そうなのか……今回は4週間の長丁場らしいし、それだけ内容も凝ってるって事かも？」

大井蒼空町の、自慢の学園エリアのほぼ西南に位置する中学棟。一学年平均5クラスは、少子化の進む今の時代多い部類だろう。さらにその中の2年B組の教室内。時間は放課後、校内清掃ももうすぐ終わりで、残りはホームルームを残すのみ。

後はもう、学生の特権の放課後の自由時間が待っている。

「前情報が、今回はほとんど出て来なかったからなあ。凄いひねった舞台とかかもな、今回は」

「よく分らないけど、前回のイベントは不評だったからな。それなりに力を入れてるかも」

教室掃除の行われる最中、主に雑談と掃除音楽の奏でる喧騒の中。たちはなはずみ立花弾美とえおかすすむ江岡進は、箒を片手にオンラインゲームの内緒話で盛り上がっていた。一応、真面目に手は動かしているが、どちらかと言えば二人とも早く学校から解放されたいがため。

小学校からの恒例行事なので、特に面倒とかかったらという事は無いのだけれど。早く家に戻りたい日などは、やっぱり気もそぞろになってしまふのは否めない。

何度と無く時間をチェックしても、もちろんその分時が速く進む訳でもなし。

「今日は部活の無い日で良かったな、ギルドメンバー全員でイン出来る」

「そうだな、ゲーム内の集合場所とか決めて、夕食までに素早くイベント内容を把握したいかな」

オンラインゲームと言ったが、実際はちよつと違う。このモデル都市は、全家庭というか全建物に高速光ファイバーで情報通信末端を提供している。その通信元のケーブル会社が、2年前から立ち上げたケーブル通信参加型オンラインゲームが『ファンタジースカイ』  
通称フアンスカである。

ケーブル通信の性質上、ネットのように全国からのゲーム参加はあり得ず、プレイヤーは大井蒼空町の住人に限られる。それで採算が取れるのかは謎だが、環境モデル都市にはこれに限らず採算度外視のテストケースが至る所に存在しているのも事実。

さつきからそのゲームの話で盛り上がっている立花弾美と江岡進は、かなり初期からこのゲームの参加者である。同じ中学の友人同士で、早々とギルドも作っていた。

気心の知れた者同士の、少数精鋭なギルドである。

キャラ名ハズミンを操る立花弾美は、そのギルドマスターをやっている。『蒼空ブンブン丸』と言う名前前のギルドで、幼稚園の頃からの友人の江岡進は、そのサブマスター。

まあ、メインの団員6人は、やっぱり幼稚園からの友人で構成されている。ライトユーザーのサブ団員を合わせても10人ちよつとしかいないギルドなので、ギルマスと言ってもたいした権威も無いのだが。

行動力とリーダーシップは人一倍ある弾美、自然とギルマスに祭り上げられたのが実情。

「パーティの概念が通用しないイベントだったら、皆で集まっても無意味だけだな。去年のイベントに、確か一回無かつたっけ？」

「あつたなあ、虚しいソロでの競い合い……あれも伝説の外れイベントだったな」

進はため息をついて、教室の各机に配置されているパソコンのモニターをチラツと見た。ファンスカはパソコンのネット環境とは違うカテゴリに位置するゲームではあるが、学校の環境からなら接続は可能だ。

しかし、万一パソコンの不正使用がばれたら、先生から大目玉を喰らうのは周知の事実。女生徒の一人が、ハタキでモニターをパタパタして歩いているのを見て、進はもう一度ため息をついた。

不確実な情報収集を目論むより、あと20分我慢すれば済む話なのだ。

「他の有名ギルドには、負けたくないなあ……」

「まあ、初日から脱落者の無いようにしようぜ？」

どことなくのほほんとした表情で、箒を杖代わりにしながら弾美は言葉を返す。今までの期間限定イベントは、結構な難解試練が多かったのも事実である。その振り落とりに引っ掛かると、酷い時には初日で参加条件を失ってしまうのだ。

弾美達の運営するギルド『蒼空ブンブン丸』は、過去にベスト5位に入った事が実は一度だけある。その時の賞品の蒼空商店街専用商品券5千円と図書券3千円分は、とても美味しかった。

学校内でも英雄視されて、鼻高々だったのは言うまでもない。

今回は絶対にそれを上回ってベスト3位に入ると、サブマスの進はイベント告知を耳にした時から意気込んでいた。一方、弾美の方はと言うと闘志は内に秘めるタイプ。朝のうちにダウンロードも済ませているし、内心ではもちろん上位を狙っている。

それでもそれは、仲間で盛り上がりながら前提の話である。ス



タンドプレーなどで一人だけ活躍するのは、ギルドの流儀ではない。そこら辺は、小さい頃からの幼馴染同士。

特に示し合わさずとも、互いに理解し合っている。

「まかせとけっ、ポーション系の消耗品も大量に買い置きしてるし、ギルドから脱落者は出させないからな。イベント中は絶対値上がりするのは、前からの経験で分かってるからなっ！」

「さすが我がギルドの参謀、頼りにしてるぜっ！」

進の用意周到で生真面目な性格には、昔から何度助けられて来たか。そんな話を教室の端に佇んで、何となく悪巧み的な雰囲気を出しつつ、二人で箸を持ってニヤけていたら。ハタキをかけていた女生徒が、こちらを変な目で見ながら声を掛けて来た。

よく見ると、委員長の星野亜紀ほしのあき、クラス一番の権力者だ。

「立花君、江岡君、話してないでちゃんと掃除してっ！」

二人は揃って顔を背けると、素早く委員長の声に反応する。知らぬ顔でかき集めた床のゴミを回収するため、ゴミの塊を求めて教室に散らばって行った。

掃除の音楽は、残り時間後僅かを示していた。

\* \* \*

「瑠璃、帰ろうぜ！」

ホームルームが終わると、弾美は隣のクラスで幼馴染の津嶋瑠璃つしまるじに声を掛けた。A組に所属する津嶋瑠璃は、部活は文学部で髪はショートカット、一見目立たない存在だ。だが、色白の肌と整った顔立ちは、学年内では意外と有名で隠れファンも多い。

性格も生真面目で、細かいところに目が届く几帳面なタイプだ。ファンスカでの所有キャラ名は通称ルリルリで、ギルド唯一の完全後衛キャラ。俗に言う魔法使いである。本当はキャラ名ルリで登録したかったのだが、既に誰かに先に登録されており、キャンセルされてしまったのだ。

始めるきっかけは、もちろん弾美に半ば強制的に引き込まれた訳なのだが。今では自分の育てたキャラにすっかり愛着を持っていて、ゲームの世界観も違和感無く受け入れている。

弾美もイベントの戦力として、瑠璃に大いに期待している。

一方の弾美は、ファンスカでのキャラは長槍使い、両手持ち武器を使用するバリバリの前衛である。ギルドマスターで、キャラの熟練度もメンバー中で一番高いのもっぱらの噂。

学校の部活動はバスケット部に所属、2年生ながら今年の春からレギュラーナンバーを貰った。身長は160センチを少し超えるくらい、日焼けした肌に精悍な目付きだが、笑うと途端に八重歯が覗いて可愛く見える。

本人はそう指摘されると怒るけど。

「あ、うん……静ちゃん、茜ちゃん、帰ろう」

「おう、二人とも5月の限定イベント参加するの？」

瑠璃が仲の良いクラスの友達に呼び掛けると、弾美の後ろから進が声を掛けて来た。この女生徒二人は、瑠璃の影響で最近ゲームに参加して来た、割と新参プレイヤーである。

相沢静香と林田茜は『蒼空ブンブン丸』の、一応サブメンバーとして登録をしているのだが。正直レベルが違うので、ベテラン陣の狩りには滅多に同行しない。それでも瑠璃とも弾美とも親しいので、ゲームの話などでのけ者にされる事も無い。

正直華がある分、ギルドの他の面子にも持て囃される存在だった

り。

会話は必然的に期間限定イベントに集中していき、グループはそのまま教室の出口付近でお喋りモードに突入。そのうち他のクラスからも、ギルドメンバーが帰宅集団に合流して来た。

C組の加藤晃と平野弘一は、幼稚園からの親しい友達。身長や性格を含めて結構なデコボココンビだが、何故か二人とも馬が合う。もちろん弾美や進とも、子供の頃から一緒に遊ぶ仲だ。

一方、E組の久保田淳は弾美と同じバスケット部員であるのが縁での加入だ。メンバーの中では一番長身だが、どちらかと言えば物静かで気弱な性格をしている。

この6人が、ギルド『蒼空ブンブン丸』のメインメンバーである。

さり気なく耳を澄ますと、周囲でもフランスカの話題が盛り上がっている様子。詳しく調べたわけではないが、この大井蒼空付属中学だけでも10を越す大型ギルドが存在するようだ。

ただし、狩り場でブイブイ言わせているやりこみ系のギルドは、進に言わせればほんの3つ程度らしい。意外と学生達の間では、ライトユーザーも多いのが実情なのかもしれない。

なにしろ、ほぼ無料でプレイできて、しかも動作環境が死ぬほどスムーズ。地域局地的な話題性もあり、ゲームに興味のある人なら一度はプレイしている筈だ。

そんな訳で、弾美の中学校でも話題性は豊富だったりする。

学校から帰っても、複数の友達とゲーム内で自由に会話出来るソースは、それだけでも強力である。しかも、イン出来るプレイヤーは街の住人と限られているので、変な遊び方やハラスメントをして来る者もほとんどいない。

ただの会話ツールとして、ゲームのシステムを利用しないプレイヤーも学生の中には多いようなのだが。そんな人達に対しても、キ

ヤラを着飾って遊んだりペットを飼うなど、システム管理者側が門戸を広げているのがよく分かる。

そんな感じでライトユーザーも、いつの間にか筐体を購入している訳だ。

普段ではまずありえない、中学生や高校生、大学に通う者や時には社会人との交流やバトルが体験できるのも、プレイ理由としては大きい。例えばだが、中学生は高校生に対して闘志を燃やし、高校生は大学生に宿題を見て貰い、社会人にバイトを紹介して貰う。

街でのイベントや発表会も、ゲーム内で告知されることがままあるし。言ってしまうえば、大井蒼空町にあるもう一つのバーチャル街と捉えている者も多いのかも知れない。

その見解は、あながち間違っではないのだろうか。

八人に膨れ上がった集団は、学校の玄関口を目指してようやく移動を始める事に。いつもの帰路へ着いた訳だが、話題が新鮮なだけにいつも以上に騒々しい。

とは言え、そこはモデル都市の宿命。住宅地として用意された場所に限られているので、自然と学生達の流れは一律になっている。他の下校集団の流れに合わせ、制服の列は細く長く続いている感じだ。

それでも15分も歩くと集団は自然に捌けて行き、弾美の帰宅チームも分かれ道ごとに一人二人とばらけていった。今は弾美と瑠璃の二人だけ、洒落た通りに面する一戸建ての建物の前で、二人は立ち止まって暫し会話する。

出ている表札は『立花』と書かれており、その隣は『津嶋』である。幼馴染と言う以前に、お隣さんの関係が十年以上続いている訳だ。幼稚園時代から一緒に通う仲なので、もはや何をするにも一緒に感じ。

そんな二人の会話に割って入るように、二軒の庭先から大型犬の

鳴き声が。

「仕方ない、先に散歩を済ませよう」

「そうだね、あんまり鳴いたら駄目だよコロン！」

立花家のマロンと津嶋家のコロンは、同じ親犬から生まれた兄弟で、同じ日に親元から貰われて来た。モコモコの毛の長い雑種で、小さい頃はとても可愛かったのだが……。

一度テンションが上がると、餌を与えるか散歩させるか、とにかく遊ばせてやらないと落ち着きが戻らないのは困った点である。二人が一緒に下校すると、いつもこんな感じで騒ぎ立てる。

鳴き声がひどいと近所迷惑になるので、二人ともそれなりに気を使うのだ。

ちなみに、仔犬が貰い手を探しているという話を聞きつけたのは弾美で、ついでお隣さんの分もと、一緒に引き取りに連れて行かれた記憶が瑠璃にはある。貰う子犬を選んで家に着いた時には、既に瑠璃が飼う予定の仔犬にも弾美によって名前がついていた。

今から飼う予定の仔犬に、自分で名前を付ける権利が無いのは、ちよつとどうかかと正直思ったのだが。3日でその名前を気に入ったから、今では良しとしている。

図体も存在も大きくなった今では、大事な津嶋家の家族の一員でもある。

「着替えて来るね、ゲームはハズミちゃんの部屋でする？」

「そうだな、夕飯までそうしよう」

二人はほぼ同時に玄関をくぐり、着替えのために各々の部屋を指す。数分後にはお互い、散歩に適した動きやすい服装で、リードを手に玄関に集合していた。

雑種の兄弟犬は、ようやくの散歩に全身で大喜びを表現。連れ立っていつもの道を、軽快なテンポで走り出している。自然と弾美と瑠璃も、並んで小走りになっているのはいつもの事。

二人とも汗を掻いても良いように、タオルを持参している。

いつもの近くの川沿いの小さな公園まで、小走りで約5分。この時間、公園に人影は全く無いので、安心してリードを外してボール遊びをさせてやる。少し歩けば、橋を渡った先にもっと立派な公園があるので、この場所はいつも人気がないのだ。

こじんまりしたこの公園は、子供の頃から二人のお気に入りなのだけれども。朝の散歩で大きい方の運動公園に行くので、夕方はこちらと自然に決まった感じだろうか。

そしてこの貸し切り状態も、いつもの事。

今頃ギルドの皆は、ゲームのバージョンアップのダウンロードに追われているのだろうか。瑠璃のクラスメイトの静香と茜は、二人とも朝の内に母親に頼んで登校して来たと、帰り道で話していたけれど。

「ここら辺の用意周到さを弾美に言うと、ニカツと笑ってこう返して来た。」

「去年の一位の賞品に、家族で海外旅行プレゼントとかあったからな。親も少しは協力する気になるんじゃないかねえの?」

「今回のイベント告知見たけど、内容も賞品も全部秘密のままだったよねえ?」

確かにそうかも知れないと思いつつ、瑠璃は前情報の少なさに少々不安な表情。もっとも、弾美の言うような賞品の多いイベントは、年に一度か二度と決まっていたような気もするが。

例えば、夏休み前とかお正月前だと、確かに豪華な旅行券とかが

上位賞品に付いていたが。期間の短いイベントだと、映画やコンサート  
のただ券や、食事券が精々だったような気がする。

瑠璃も弾美に倣って、朝の散歩のうちにダウンロードは済ませて  
おいた。そんな訳で、家に戻れば、直ぐにでも、限定イベントをプ  
レイ出来る環境が揃っている。

もつとも今日は、弾美の部屋でのインと決めてしまったが。

弾美は前情報の少なさについて、特に気にしてはいない様子。そ  
れでもいつもより早めに散歩を切り上げて、帰路につくべく犬達を  
競り立てている。兄弟犬のテンションは落ち着いたが、どうやら弾  
美のそれは朝から上がりっぱなしのようだ。

いつになく悪戯っ子のような表情に、瑠璃はさらにちよつとだけ  
不安になった。

。 だって、いつも巻き込まれて振り回されるのは自分なのだから

\*

\*

コロンの運動に対する労わりの水をやって、犬小屋に鎖で繋ぐ。  
昼間の内は鎖無しで自由にさせているのだが、両親が戻ってくる前  
には繋いでおくのが津嶋家のルールである。

仕事帰りのお出迎えに、大型犬の前足スタンプアタックは、忍耐  
力のある大人でも辟易するものらしい。仔犬の頃からの癖が抜けな  
いまま、我慢するのは人間の方になってしまっている今。

夕方には鎖に繋いでおくのが、ベストの選択となっているのだ。

その後瑠璃は、コロンの頭をひとしきり撫でてお別れを告げ。玄  
関に置いてあったタオルとお茶菓子の入った袋を持つと、しっかり  
鍵を掛けて隣の立花家にお邪魔する。

立花家は、共働きで5時〜6時過ぎまで両親共に不在なのだ。津嶋家も大体同じかもう少し帰りが遅いので、大抵は瑠璃が一品か二品、お惣菜を作って待つのが決まり。

無言で玄関を開けて侵入するのも慣れたもの。台所を見るとお茶の支度っぽい事を、弾美がしてくれていた様子。とは言っても、弾美と瑠璃の専用カップをテーブルに出していただけだが。

お茶の催促だと理解した瑠璃は、早速それに取り掛かる。

ポットにお湯は沸いていたので、瑠璃は素早くコーヒーを淹れる準備をする。トレイはいつもの所にあつたし、お茶菓子は持参してあるので問題は無し。

せつかちに弾美が二階から呼ぶのが聞こえ、瑠璃は曖昧な返事を返す。用意をすっかり整えて、瑠璃はトレイに二人分のマグカップを乗せ、そろりと階段をのぼって行った。

立花家の二階は、数年前から弾美の天下だった。歳の離れた姉が遠くの大学に通うために家を出てしまっているの、弾美は一部屋を遊び部屋に、もう一部屋を寝室に使っている。

遊び用の部屋 本来は勉強部屋？ のメイン家具はテレビと大きな本棚で、中央には小さな折り畳み机が置いてある。それから、来客用を含めて人数分の座布団。

トレイをテーブルに置いて、瑠璃は一息ついた。

テレビは二台あって、一台は俗に言う予備モニターと呼ばれる、液晶の持ち運び可能なモニターである。瑠璃が家から持ってきて、そのまま置きっ放しにしてあったものだ。

今はそれにもすっかり電源が入っており、ファンスカのオンライン画面を映し出している。弾美が用意してくれていたらしく、当人のそれはキャラ選択画面まで進んでいる。

どうやらさらに進むと、限定イベント選択画面に進むらしいのだ



が。

「はやくパスワードを入れる」

「うん、ちよっと待って」

プレイ人数を二人に設定、ゲスト用のパスワードをキーボードから打ち込みつつ、ゲーム筐体に接続されている自分専用のモニター画面の位置をちよこつと調整。

この予備モニターは、兄弟や親子などで同じ部屋でプレイする時とても便利である。オンラインを同じ部屋で遊ぶと言う、ちよこつとした流行を大井蒼空町にもたらしたのだ。

そのため、今でも電気店などではヒット商品に名を連ねている。その他にも、対戦型シミュレーションゲームで自分のターンでの戦略を見せられないゲームなどでも、大いに活用できてしまう優れものだ。

ちなみに、一つのゲーム筐体に4つまでサブモニターを繋げるこことが出来るし、今は更にマルチタップも売っているらしい。大学ではサークル活動で、日々同じ部屋でフランスカをプレイしているという噂も流れてきている。

もつとも、弾美の部屋の筐体は、今まで2台までしか繋いだ事は無いが。

瑠璃がパスワードを打ち終わると、画面はフランスカを選択画面に流れていった。プレイ選択では、季節限定イベントのイラスト入り告知と、その説明画面への移動カーソルを発見する。

ふと隣を見たら、弾美の画面は既にゲーム世界へのログインに移行していた。

「ハズミちゃん、今回の限定イベントの説明文読んだ？」

「読むわけないだろ、インして進に聞けばいいんだから」

お茶菓子をばくつきながら、事も無げに言い放つ弾美に、瑠璃は諦めたように自分も期間限定イベントへのインを決行する。下手に遅れると弾美にうるさくせつつかれる事になるし、説明してくれる仲間がいるなら、一緒に聞いたほうが断然良いとの脳内判断。

様々な選択肢を決定クリックで進んで行くと、瑠璃のサブモニター画面もようやくログイン画面に突入する。数秒の暗転ローディングが始まり、その隙にと瑠璃は、冷めない内にマグカップを手にしてコーヒーを口に運ぶ。

一息つく間もなく、隣から驚いたような弾美の声。

「ぬおっ、どこだここ？」

それは、全く見たことの無い風景だった。一足早くイベント世界に降り立ったハズミンは、陰気な感じの小さな部屋に閉じ込められていた。例えるなら、自然洞窟と牢屋を足して2で割ったような感じの空間。家具といえば小さな机と、かすかな灯りを提供するランブくらい。

出入り口は、木の根っこがすだれの様になっていて、ちょっと気味が悪い。

瑠璃のキャラもようやくログイン出来たので、彼女はいつもの癖で自分のキャラを取り敢えずチエック。ルリルリの出現場所も、ハズミンと同じく薄暗く見慣れないエリア。

チエックの瞬間、瑠璃は違和感に襲われ　隣からは、大爆笑が湧き起こった。

「あははははっ、ありえね〜っ（笑）」

「あれっ、服が……自分のと違う？」

「っっていうか、レベルが1に戻されてるっ！　酷すぎるっ（笑）」

なおも笑い続ける弾美に、瑠璃の方もちょっと可笑しくなってきた。つられる様に口元がひくついてしまうが、何とか冷静に状況判断の手掛かりを画面内に探す素振り。どうやら今回のイベントは、今までとは全く違うコンセプトで開催されるらしい。

確かに酷いが……いや、説明文を読むのをはしよったこちらも悪いとは思うが。

「メンバーと通信も出来ないっ、これ完全別世界の上、ソロ仕様だなっ！」

「えっ、そうなの……？」

「ポジション買い溜めの意味無かったなっ、進は今頃泣いてるぞっ（笑）」

瑠璃も、必要かとMP回復薬のエーテルを幾つか買い込んでいたのだが……。全くの無駄になってしまった挙句、苦手なソロの冒険に挑まなければならぬらしい。

確かに……酷い。キャラの確認ウィンドウを広げつつ、瑠璃は現状を把握する。弾美の言ったとおり、キャラのレベルは1に戻され、装備はぼろぼろの囚人服っぽい上下だけ。

ひ、酷すぎるっ！キャラの服装にこだわる瑠璃は、愛するマイキャラの萎れっぷりに泣きそうになった。しかも、武器すら持たされてない。どこかで入手するイベントがあるのだろうか？

武器も無しでは、冒険以前の話になってしまうっ！

隣で再び爆笑が湧き起こった。机をバンバン叩いて、マグカップが危ないことになっている。弾美のそれは寸胴で重いタイプなのだが、瑠璃専用のは洒落た軽量なつくりなのだ。

どうやら弾美は、瑠璃より早く何らかの仕様に気付いた様子。それが何なのか分からない瑠璃は、慌てながらもその原因を探りに掛

かる。貧相な装備より、笑える仕掛けとは何だろうか。  
コントローラー片手に、瑠璃は画面に集中する。

「瑠璃っ、アイテム欄見てみっ（笑）」

なるほど、そっちを見るのを忘れていた。装備していないだけで、アイテム欄に武器が用意されているのかも知れないと、瑠璃は慣れた操作でウィンドウを開く。

だが、瑠璃の予想に反して、アイテムはたった2個しか持たされていなかった。一つは、一番回復量の少ない小ポーション。ポケットに入れておけば、即座に使用可能の頼もしい回復薬だ。

もう一つのアイテム名は

「ありえね〜っ（笑）」

弾美はなおも笑いつつ、早速そのアイテムをハズミンに使用させたらしい。ピヨツという感じで、元気にカバンの中からモニター画面に飛び出してきたのは……。

ピロピロと飛び回る、小さな妖精だった。

\* \* \*

ここは魔力も生命力も、何でも貪欲に吸収してしまう大樹『グランドイーター』の根っこ部分なの。あなたは大きいなる魔力を欲する魔女『フリーアイル』の時空間トラップに捕まり、ここに放り込まれてしまったのネ

ワタシがあなたを見つけた時には、既にあなたの体も装備も、枯渴状態で手の施しようが無かったわ。ワタシが出来る事といえば、こうやって『グランドイーター』の吸収を遮る小さな空間を作り出す事くらい。この部屋を出ると、再び養分にされてしまうから気を

つけてネッ

まあ、ワタシが近くにいれば暫くは瘴気をシャットダウン出来るけど？

そうそう、何の武器も持たないのも危ないから、一つだけ武器をプレゼントしちゃう。あとは、ひたすら上の層を目指せば、同じように魔女に捕まった仲間に出会えるかもネ

取り敢えずは、地上目指して頑張って頂戴！

「はあ……捕まっちゃったんだ、知らない間に」

「おっ、やっと武器を手に来るのか！」

何とも強引な設定も、弾美の方はそれほど意に介していないらしい。妖精の魔法で、粗末なつくりの各種武器が空中に出現しており、それを嬉しそうに眺めている。

その画面を見て、瑠璃は脱力状態から現実に戻って来た。

自分の元の世界のキャラは後衛職なので、今まで武器のスキルも熟練度もほとんど伸ばした事は無かったのだが。両手棍の補正スキルに、MP消費量セーブなどの魔法使いに有り難いものが多かったので、必要に迫られちょこっと上げた程度。

熟練度も、高レベルの杖を装備するために、弱い敵を殴って上げた程度でしかない。ルリルリはギルドの完全サポート的存在を目指して作ったキャラなので、回復支援系の魔法使い仕様なのだ。

つまりは、お世辞にも武器の使用に慣れてなどいない。

今回のこの期間限定イベントはレベル1から、しかもソロでの出発限定らしい。と言う事は、ルリルリは否応無しに前衛デビューしないといけない？

この部屋を出れば、恐らく敵役のモンスターが徘徊しているだろ

う。このゲームのレベル1キャラは、魔法など全く覚えていない。倒して進むには、何かしらの武器が必要。

瑠璃の中にも、ちょっとした前衛への羨望が無いわけではなく。

「ねえ、ハズミちゃん……私も前衛役の武器を選んだら駄目かな？」  
「むっ、そうか……レベル1からだ、完全別キャラ作れるなっ！」

今まで使用していたせいで、慣れた両手槍を選ぼうとしていたハズミンだったけれど。慌ててそれをキャンセルし、暫し考えて片手武器から片手剣を選択しなおす。

両手武器は確かに攻撃力は高いのだが、盾を装備出来ないのも魔法の支援がないと辛い一面がある。しかも、種類があまり多くないので、一旦壊れてしまつと代わりが見つからず酷い目にあふ事もある。

限定イベントでは、それでは詰んでしまふ可能性が。

一方の片手剣は、種類は豊富だしありふれた武器の割には、特殊機能の付いた物が多く存在する。片手が空くので盾も装備できるし、ソロやブロック役のプレイヤーに好かれる、一番スタンダードな武器である。

どこまでソロで進む事になるか分からないが、限定イベントの条件は以前からシビアとの評判なのだ。参加は誰でも出来る代わりに、振り落として資格を失つとそれでお終い。

賞品付きのイベントは、そんな感じに厳しい仕様が多いのだ。

瑠璃の方は、一旦は片手剣武器から細剣にカーソルを合わせたものの。それに決定して良いものかと、暫しそこで躊躇していた。完全前衛は怖いので、ファンスカでよく見る魔法剣士のスタイルを目指したいのだが。

やっぱりいきなり前衛など、段々と無謀に思えてくる心配性な性

格が出現して。

「レイピアか、二刀流覚えるまでは辛いぞ、攻撃力ないし」

「うーん、駄目かなあ？ 魔法剣士を目指したいんだけど」

「魔法剣士は、バランス取るのそれなりに難しいけどなあ……まっ、いいんじゃないの？ 合流したら、俺のキャラとバランス取ればいいし」

「そうだね……取り敢えず、細剣スキルと水スキル伸ばす方向で成長させていい？」

「オツケ〜！ ってか、俺も回復魔法覚えないと辛いかも」

などと二人で相談しつつ、先の心配などしていたのも束の間の事。弾美のキャラは妖精に貰ったばかりの武器を装備し、さっさと部屋を飛び出していった。

目に付くのは、お城の地下牢のような薄暗い風景。部屋の中と同じように、自然洞窟と牢屋を足して2で割ったような景色に、血管のように木の根が壁沿いにはびこっている。

どうやらこれが『グランドイーター』の根っこらしい。

敵キャラは、至る所ですぐに見つかった。どうやらこのエリアはゾンビのようなのと、スケルトンタイプのがメインの雑魚らしい。戦ってみて、これは雑魚キャラだとすぐに判明する弱さ。ハズミンはほとんどダメージを追わずに、経験値を稼いで行く。

マップは思ったより広いらしく、キャラが進んだ場所は自動的に記録されていく。ここら辺の機能は、メイン世界と同様で使い方に迷う事も無い。もちろん、戦闘システムなども全く同じだ。

瑠璃のキャラも、少し遅れて部屋を出た。

「おっ、スライム発見〜。むむっ、ポーシヨン落としたっ！」

「えっ、どこどこ？ ポーシヨン欲しいっ！」

「東の端っこ。おっと、レベルも上がった」

独特の音楽が流れて、ものの数分でハズミンはレベルアップ。HPとMPがちよつとずつ上がって、ステータスに振れるボーナスが2ポイント、スキルに振れるボーナスが2ポイント入る。

弾美は少し考えて、楽しい成長方針の計画を素早く決定する。ステータスは体力に2ポイント全て振り込み、スキルは全く迷わず片手剣に2ポイント振り込む事に。

弾美の計画は、とにかくレベルアップの前半はステータス補正を体力に注ぎ込み、HPを増やして死にくくする。腕力や敏捷など、戦士に必要なステータスは後回しでも良い。

スキルに関しては、取り敢えずは片手剣で問題ない。攻撃力も上がるので、敵の殲滅時間が速くなるのだ。それはつまり、敵の攻撃を受ける回数が少なくなると言う事。

余裕があれば、回復系の魔法が出やすい、水か土のスキルを上げる。

このファンスカのシステムでは、スキルを上げるという事は、技や魔法を覚えるという事と等しいのだ。ダメージ率にも影響するので、高いに越した事は無いが、何より楽しいのは10、30、50、70と10からは+20を超えると自動的に覚える、特殊技や補正スキル、そして魔法であろう。

ただし、どうやら覚える特殊技の順番はランダムらしいので、なかなか自分の望んだキャラには育て難かったりする。スキルのポイントはアイテムでも取得出来るので、思ったよりは上げやすいのだけれども。

前もって傾向と対策を立てておかないと、使い勝手の良いキャラにはなってくれない。

前衛戦士を目指すハズミンは、取り敢えず魔法系のスキル群



光や闇、水や炎スキルには用が無い。その点、回復手段がポーションしか無くて一見不便だが、レベルアップで貰えるポイントだけであれやこれや上げるのは、とても大変なのだ。

一点集中が、やっぱり強いキャラを作る秘訣だろうか。

「わっわっ、囲まれたっ！」

「……下手っぴ」

弾美が取得ポイントを振り分けしていた隙に、瑠璃のキャラは不測の事態に陥ってしまったらしい。ゾンビに絡まれたままスライムに突っ込んで、HPが半減したのにパニックって。ついつい虎の子のポーションを、早くも使ってしまった模様。

そういう時に限って、アイテムドロップも渋かったり。

「……ポーション出ない」

「……お前、もうちょっと練習しろ」

それから1時間は、ひたすらレベル上げしながらスライムの再ポツプを待ちつつ、ポーション集めに終始して。ルリルリに限っては、敵に囲まれない練習をしつつ、ダメージを受けずに敵を倒すコツを弾美に教わっていたりして。

30分もすればマップは完全コンプリート。エリアボスのいる昇降口も発見して、ポーションが5個貯まったらボスに突入するぞと、弾美は瑠璃に到達していたのだが。

何故だか、これがなかなか難しい。

「あ、ごめん……またポーション使っちゃった」

「……お前、もう火の玉に近付くな！」

このエリアの敵キャラは、どうやら雑魚のゾンビとスケルトン、

その半分の生息数のスライムとコウモリ、さらに一番数の少ない浮遊火の玉のみのようだ。後は、エリアボスのゴーレムが一匹だけ。ボスの強さは未知数だが、雑魚の中では火の玉が一番強い。

それでもレベル5まで上がった二人のキャラなら、そこまで苦戦する筈は無いのだが。ハズミンの片手剣スキルは10に達し、めでたく最初のスキル《攻撃力アップ1》を取得した。

このスキルは補正スキルと呼ばれるもので、セツトするだけで攻撃時に常時発動する。下手な攻撃スキルを覚えるより使い勝手は良いと言えるが、瞬発性に欠けるのが難点だ。

一気にガツンと削りたい時は、やっぱり攻撃スキルが欲しい所。

一方のルリルリは、その瞬発力の高い攻撃スキル技《二段突き》を取得した。これはSPを消費して使用する技で、一気に敵のHPを削る力がある。

ただし、前衛に慣れていない瑠璃にとっては、余計に混乱の元になってしまっているのが現状だったり。一度弾美に見本を見せて貰って、その破壊力には感心したが、所詮は元のダメージの低い細剣のスキル技。

一撃で敵を屠るほどのパワーは、残念ながら無い。

補正スキルも攻撃スキル技も、セツト数に上限があるので、増えに行くに従って選択に頭を悩ませる事になる。普通は使い勝手の良いものを選択するが、狩り場や敵の属性によってセツトを変更したりも出来る。

今の二人の現状は、ひたすら数が増えるのを願っている段階だが。

「はやくスキル技出すのに慣れないと、お前マジでやばいぞ」

「うん……あれ？ ハズミちゃん、変なの湧いてる」

「ぬおっ!?!」

ルリルリが苦勞して火の玉を倒した後、ポーション回収目的でスライムの再ポップポイントに到着してみると。別ネームの一回り大きなスライムが、デンとその場に鎮座していた。

ニートラルモンスター

明らかに先ほどの雑魚とは一味違う容貌は、どうやらNMらしい。NMとは時間やら何やらの制限付きで、滅多にプレイヤーの前に姿を見せる事は無いレアモンスターの総称を指すのだが。そいつらは雑魚よりはるかに強い代わりに、経験値も美味しいし良いものをドロップする事も多い。

そんな目の前の敵は、プルプル震えてどこかユーモラス。

「NMじゃないか、行けっ瑠璃っ！」

「むっ、無理っ！ 代わって、ハズミちゃん！」

急に瑠璃のコントローラーまで持たされて、弾美は二つのコントローラーを手にあたふたする。隣の画面に目をやれば、NMに知覚されたルリルリが、今にも襲われているところ。

大慌ての弾美だが、それ以上に瑠璃もパニック状態の様。

「バカ瑠璃っ、急に渡すなっ！」

とは言いつつ、見捨てる訳にも行かない弾美は、自分のコントローラーを投げやって臨戦態勢。咄嗟にスキル技の《二段突き》を使って、先手を取る事には何とか成功する。

同時にチラッと、自分のキャラ画面も確認。大丈夫、近くに敵は湧いていない。

NMのHPゲージは、スキル技を使用したにも拘らず、まだ余裕で半分以上残っていた。結構強いかもと内心感じつつ、瑠璃のキャラのSPゲージを確認。スキル再使用まで、まだもう少し掛かる感

じである。

弾美はそれを確認しつつ、突きを出しながら敵との距離を保つ。時たま酸を吐く攻撃は確かに強烈だが、モーションが大きいので、慣れれば避けることが可能。

スキル再使用可能と、ようやく便利ウィンドウの表示が知らせて来た。弾美は慣れないルリルリを操って、深く踏み込んで再びスキル技の《二段突き》を放つ。

くっつくほどの隣で、瑠璃がはっと息を呑むのが分った。踏み込み過ぎて、こちらも浅くないダメージを受けてしまったのだ。だが、危険な酸攻撃ではなく、所詮は通常攻撃。再び酸攻撃の前のエフェクトを確認して、危険エリアを脱出する。

その途端、もの凄い範囲攻撃が来た。

「うわっ、うわっ！」

「うはっ、スライム油断ならんっ！」

360度の、全範囲攻撃。NMは特有の攻撃を持つものが多く、本当に油断ならないのだ。多人数で有利に戦闘してても、いつの間にか死人が出ていることも多かつたりするのだ。

とは言え、素早く範囲外に逃げ延びたルリルリは全くの無傷でこれを取り切っている。敵のHPゲージも、先ほどからの攻撃が効いてようやく残り3割。弾美はポジションすら使わず、スライムの残りHPを危なげなく削り切って行く事に成功する。さすがベテラン前衛キャラ持ち。

これには瑠璃も大喜びである。

「わ、ありがとうハズミちゃん！」

「おっ、何か装備落としたなっ。俺も湧きチェックするから、暫くは乱心するなよ」

「う、うん」

酷い言われようだが、とにかく助かったのは事実である。瑠璃は再び受け取ったコントローラーを持ち直し、弾美に感謝しつつ戦利品をチエツクする。

至福の一瞬だが、自分の手柄ではないので喜びは半分くらい。

「指輪と水の術書と、中ポジションとお金をドロップしたみたい」

「おつ、こつちも発見！ 指輪の性能は？」

「水スキルが+3と、精神力+1、あと防御力が1みたい」

ほんの序盤の戦利品にしては、なかなかの性能である。水の術書は、使用すると水スキルが+1される。中ポジションは、中くらいの効き目のポジション。今のレベルのHP量だと完全回復してくれるので、ボス戦には有り難い。

ハズミンの方も危なげなくスライムNM戦に勝利し、瑠璃と同じ戦利品を得たようだ。しかもレベルが6に上がっていて、一時間のプレイではまずまずの成長振りである。

それを横目で見ていた瑠璃は、自分のキャラの経験値もチエツク。先ほどNMを倒したせいか、こちらも後ちよつとで上がるとここまで来ていたようだ。

これは思わぬ副産物、有頂天で弾美に声をかける瑠璃。

「あつ、私も後ちよつとで6に上がる！ 待ってて、ハズミちゃん」

「いや、ポジション7個も貯まったし、そろそろボスを倒さないか？ 雑魚の経験値、もう完全に不味くなって来てる……」

「あ、後ちよつとだから……」

確かにハズミンは7個も持つてるかも知れないが、こちらはは小が2個と中が1個だけ。もっとも、ポジションを速攻（ボタン一発）

で使うのは、ベルトポケットに入れておける分だけなのだが。つまりは、初期設定では3つが限界なのは分かっているのだけれど。

ポケットから以外で使うには、いちいちアイテム欄を開かないと駄目なので、極端に遅くなる。だから、3つ以上持つてもソロでのボス戦では事実上使用不可能に近い。

瑠璃が引き伸ばしている理由は、強い敵に向かうのにひたすら自信が無いから。

そんな思いの中、ルリルリも何とか雑魚を倒した経験値でレベル6へと到達出来た。敵が近くにいないのを確認して、待つてましたのボーナスポイントの振り分けを始める瑠璃。

最初の数レベルは弾美に言われた通り、ステータスは体力に振り込むのは確定済み。何しろにわか仕込みの前衛なのだ、HPは多い方が良いに決まっている。その次にスキルを振り分けようと、スキル画面を見遣ると。

細剣スキルは区切りの10で、水スキルは気付けば6になっていた。ルリルリは水属性でキャラ作成したので、最初から水スキルには3ほど振り分けられているのだ。

そこに取得した指輪の補正が+3で、水スキルの合計が6になった訳だ。そういえばさっきのNMドロップで、水の術書入手したっけ。レベルアップ間近が嬉しくて、すっかり忘れていた。

瑠璃はアイテム欄を確認すると、何気なくそれを使ってみる。

見事、スキル+2アップ！ 属性というのは強力で、同属性の使用だと、たまにこういう事が起こるのだ。これでボーナススキルを注ぎ込めば、水スキルも区切りの10に達する事に。

序盤のステージから、念願の魔法が覚えられる。

「む〜ん、この突き当たりの血文字の場所なんか、いかにも怪しいんだよなあ……。でも、同じエリアで2種類もNMは湧かないかな

あ？」

ハズミンの方は、2匹目のドジョウを探しながら、目に付く雑魚を狩りまくっていた。雑魚キャラからはめぼしいドロップ品も無く、経験値も不味いといければ、確かにこのエリアに留まる理由は既に無くなっている。

瑠璃に付き合っこのエリアに滞在しているが、どうやら弾美の我慢の限界も近い様子。長い付き合いから、焦れているのが瑠璃には良く分かってしまう。

一方のルリルリは、ここ一番の引きを期待して、虎の子のポーナス2ポイントを水スキルに振り分ける。細剣スキルは既に区切りを迎えているので、今度は魔法を覚えようという目論見なのだけれども。

と、チリチリンと軽快な音が鳴って、スキル取得の合図。

《ヒール1》 念願の回復魔法である。瑠璃は思わず小躍りし、弾美はようやくルリルリの成長に気が付いた。隣からモニター画面を覗き込み、おおつと声を上げる。水スキルは回復魔法が出やすいとはいえ、必ず最初に出るとは言い切れないのも確かなのだ。

そこはランダム取得の仕様、運命の悪戯に泣く事も間々あるのだ。

「おおつ、やったじゃん。これでボス戦も楽勝だなっ！」

「そ、そうかな？ ……あれ、ハズミちゃんのモニター画面、また変なの湧いてる？」

「ぬおっ！」

そこは先程、弾美が何か怪しいと踏んでいた場所だった。ハズミンがポップ待ちで無防備に立ち竦んでいるその真横に、特殊な名前の一回り大きな火の玉が前触れも無く出現して。

瑠璃のステータス画面を眺めていた弾美は、完全に虚を突かれた

形に。慌てて戦闘態勢を取るハズミンに、襲い掛かる火の玉NM。固くてHPも豊富で、かなり強そうだ。

傍目で見ていても、苦戦しているのが伝わって来る。

「こいつっ、ひよっとしてエリアボスより強いかも!？」

「が、頑張れハズミちゃん!」

隣からの瑠璃の声援にも後押しされ、弾美は必死にハズミンを操る。片手剣が何度も青白い炎を薙ぎ払い、逆に火の玉は魔法でハズミンのHPを削いでいく。

ステップ防御と言うこのゲーム独特の防御方法も、魔法にはまるで効き目が無い。その場で踏ん張る盾防御に対して、ステップ防御は打撃の攻撃を華麗に回避する防御方法なのだけれど。

魔法は必中のこのゲーム、有効な方法と言えば、魔法の詠唱を邪魔する事くらい。得意の戦法を封じられたハズミンだが、ガチの殴り合いもなかなかのものだった。

ハズミンのポケットから、戦闘中に2度ポジションが使用されたものの。3個目を使う前に、勝負はどうやら決した模様。敵NMを倒した瞬間、おめでとうと大きなログが画面を賑わせた。

弾美は小さくガッツポーズ、瑠璃は手を叩いて喜んでいる。

「よっし、2匹目ゲット!」

「おめでとう、ハズミちゃん! 何かいっぱいドロップしたよ!」

「おっ、本当だ。今度は火のスキル関係が多いのかな?」

ドロップ告知を見ると、ちょっと良い腕輪と火の術書、初期装備よりはマシなズボンとお金が入ったようだ。経験値も結構入り、そのせいでハズミンはあと少しでまたレベルが上がりそう。

思わぬ誤算だが、ここまで来たら上げ切ってしまうのも手かも知れない。そう思い直しつつも、隣の瑠璃を確認すると。何かいいた



気な感じで、こちらを見ている瞳と目が合った。  
幼馴染の勘が、それをひしひしと伝えて来る。

「強かったなあ、こいつ。……瑠璃、倒せそうか？」  
「う、ううん……」

いかにも自信のない表情で、恐る恐るコントローラーを差し出す瑠璃。何かの伺いを立てるように、弾美に上目遣いで語り掛けて来て。申し訳無さそうな素振りだが、そこは幼馴染の垣根の無さすら伺えてしまうのも悲しい宿命。

無言の会話は数秒続き、根負けした弾美は渋々コントローラーを交換。

その日は結局、エリア攻略は出来ない二人だったり。

## 02 ステージ2? 特訓が先! (前書き)

架空の世界も、そう言えばゴールデンウィーク中のお話だと気付いてちよつとビックリしたりして。今年の自分のリアルGWは、仕事漬けで終わってしまったけどね(笑)。

何とGW前後の13日間、全く休めずに連続勤務と言う有り様…接客業は辛いですね! 暦通りの休みだという学生さんやフツの仕事をしてる人を、横目で見て羨みながら。いえ、そんな余裕も無かったかも…空ろな笑みで、接客をハイになりつつやっていた気がします(笑)。

10連休なんて人を見た日には…以下略(笑)。

幸い、昨日と今日はお休みを頂いて自宅で骨休み中です。今日は大雨です、こっちは。出掛けようかなって思ったけど、面倒だしお金も使いたくないし。

そんな訳で、お昼からアップ作業などしつつ。最近はお仕事が忙し過ぎて、執筆作業どころかオンラインゲームも出来やしないという。

そんな感じの作者ですが、温かく見守ってやって下さい^^

## 02 ステージ2? 特訓が先!

「んで、結局付き合いで、弾美までステージクリア出来なかった訳か?」

「ああ、瑠璃がレベル7まで上げたと言ってたから、エリアボス攻略引き伸ばしてたら……いきなり妖精が騒ぎ出して、ビックリ仰天!」

「……イベント説明文読めよ、2時間リミットは凄く大事なルールだぞ。その調子じゃ、ライフポイント制も知らないだろ、弾美?」

時間は5月2日の、大井蒼空付属中学のお昼休憩。立花弾美と江岡進は、給食を食べ終えたあとの休憩時間に、昨日プレイしたファンスカの情報交換に勤しんでいた。

窓辺に陣取って、プレイの報告をする弾美と進の表情は、しかしどこか渋い。

教室内は明日からの連休を控え、どこか熱に浮かされたような雰囲気にも包まれている。弾美達にしても、ゲームをやり込む絶好のチャンスなのだが、イベントの話になると話は別。

何しろ昨日始まったばかりの、振るい落とし方式の期間限定イベントなのだから。情報はまだまだ少ないし、それ故に予期せぬ不手際も当然起こり得る。

弾美のギルドも、当初の目論みは外しまくり。

「なにそれ? 妖精が何か言ってたっけ?」

「妖精は関係ない。多分レベル1からのスタートに気を遣ったんだろうけど……ライフポイント2つ分、キャラは最初から持っていてイベントを継続出来る仕様みたいだな」

先ほどまでは、昨日の二人の結末を進に話していた弾美のだけれど。その内容はと言うと、取り敢えず二人のキャラで、湧いた2匹目の火の玉NMを退治したまでは良かったのだが。

瑠璃のキャラが、2匹目のNMを倒して貰った大量の経験値のせいで。後ちよつとで弾美のキャラに、レベルが追いつくと意見を申し立てて。

雑魚を狩りまくって、必死に経験値稼ぎする事20数分。

気が付いたら、インして丁度2時間が経過していたようだ。その途端に、アイテム欄の妖精がピヨツと出現。周囲を飛び回りけたたましく喚き出して物申すには

ワタシが張り巡らせていた障壁が、これ以上持ちません。これからは徐々にHPが減っていくので、はやめに部屋に戻ってじつとしててネ

ワタシの警告を無視して酷い目にあっても、責任は取れませんからネ

その報告を聞いて、二人はビックリ仰天。大慌てで狩りを中断し、最初にインした部屋に駆け込む事に。正直、HPの消耗はそれ程酷いレベルでは無かったのだけれど。毒状態でボス戦に挑むのは、序盤からちよつと無謀だと判断した次第である。

進の話によると、HP減少の毒状態は15分毎に酷くなって行くらしい。リミット越えて15分後の毒状態は、レベル一桁のキャラには、どうにも酷だとの報告。30分後となると、戦闘どころではないだろうと言う予想がつく。

なにより、ピヨピヨと警告しながら飛び回る妖精が、とてもウザい。

「まあ、スタートは出遅れたけど、2匹もNM倒せたし。瑠璃が前

衛慣れしてないのはアレだけど……装備的には、先行する奴らよりは恵まれたかなあ？」

「うむう、先を急ぎすぎるのも考えものだしなあ。晁と弘一の事、昨日メールで報告しただろ？」

「うん。アホだな、あの二人は」

幼稚園の頃からの友達なので、弾美は言葉に容赦がない。昨日の夜にメールで、進から簡単な報告が来たのだが、ステージ2からは2人でパーティが組めるようになるとの事で。

『蒼空ブンブン丸』のギルドメンバーは、4時半にはステージ2の中立エリアで合流出来て、会話も出来るようになったらしい。中立エリアは一種の結界内のように、ここにいれば時間制限も関係ない仕様らしい。

合流したギルドメンバーで話し合った結果、進とE組の淳でパーティを組み、C組の晁と弘一でもう1パーティ結成して。情報を交換しながら攻略しようと、取り決めたまでは良かったのだが。

徐々に混み出した中立エリアに、さっさと進んでしまった方が特策だとの判断を下したC組チーム。妖精アラムが鳴ってるのにも全く意に介さずに。ステージ2に3つ存在する部屋の内の、最終エリアの難関アスレチックステージに、無謀にも挑んだらしい。

結果、無残に敗退したのは、弾美にけなされている点からも読み取れる。

こうなったら、ゆっくり攻略の弾美の作戦の方が、優れていると進は密かに感心する。レア装備を獲得出来ただけ見ても、これらの進行には有利だろうし。

4週間と言う長丁場を謳っているだけあって、今回のイベントはどうやら早歩き方式では無さそうである。広いダンジョンが用意されている事からしても、じっくり攻略して行けば思わぬ仕掛けに巡り合える確立が高いのかも知れない。

そうは言っても、ライバルが隣にいれば、そいつより早く先に進みたいと思うのが人情。

もつとも、弾美の攻略速度は考えた上の物でも無かったりする。瑠璃に合わせていたら、たまたまNMを発見出来ただけ。一人でプレイしてたら、まず間違いなく見逃していただろう。

ただ、偶然見つけたのが瑠璃一人だけだったら、振り返ちにあつてた可能性も否めない。そんな事を全て踏まえて考慮すると、意外と偶然の幸運に恵まれた巡り会わせだったのかも。

こんな事が起こるから、合同インは面白いのだ。

「じゃあ弾美は、ステージ2から津嶋とパーティ組むのな？ 今日  
は部活どうするんだ？」

「当然出るよ。進はどうすんの？」

「連休前だしな、今日はサボって淳とイベント進める」

「って、淳もサボらせる気がよ！」

E組の久保田淳は、弾美と同じバスケット部員なのだけれど。こ  
こら辺のイン時間の共有は、どうやら昨日の内にすり合わせておい  
たのだろう。ちなみに進は、バトミントン部に所属している。

今日に限っては、サボる気満々らしいが。

この調子だと、連休前の気の緩みも相まって、今日の部活の出席  
率は酷い事になるかも知れない。弾美は内心淳を恨んだが、ギルド  
マスターの身としては、イベントに力を入れる進の気持ちも良く分  
かる。

弾美としては、2年でレギュラーナンバーを貰った手前もある。  
そんな訳で、ホイホイと部活をサボるわけにも行かない。そういう  
所は、かなり律儀な性格の弾美である。

いや、元々体を動かすのが好きだと言う理由もあるが。

「まあ、先に進んで情報集めておくから、その辺は勘弁してくれ。ちなみに、ステージ2は3部屋構造で、2部屋で仕掛けを作動させて3つ目の扉を開くパターンだな。3つ目はアスレチックステージで、嫌な仕掛けがいっぱい……失敗した奴らの言葉だけだ」

「部屋の仕掛けは言うなよ、攻略する時の感動が薄れる。……ただ、瑠璃と組む上で聞きたいんだが、二人パーティで攻略した感じの、難易度的な感想は？」

「装備も貧弱だし、スキルも精々1つだけど、死なないように気を遣えば何とかいけるよ。ボスもそれ程強いのないし、問題は2時間縛りかなあ？」

それは仕方ないと、正直なところ弾美は思う。時間縛りを無くしたら、ぶつちやけ学校を休んでプレイする者も出るだろうし。時間を掛けさえすれば、キャラはどんどん強くなれるのだ。

以前のイベントでも、そういう失敗があったのだ。運営側は、相手を悩ませたのだろう。まさか、ここまで社会現象 とも言え、小さな街の中ではあるが になるとは思ってもいなかったであろうし。

ゲームの名前が売れば、それなりに問題も発生する。地域限定のゲームですら、そういう一面を抱えてしまっている。その割には、運営の景品に豪華な物を用意して、競争を煽っている様にも見えるが。

ただ、そういう反省を踏まえつつ、段々とゲーム環境が改良されていっているのも、感触として伝わって来る。もちろん他のネットゲームの運営の問題点なども、色々と参考にしたのだろう。

プレイ料を払っている訳でもないのに、プレイヤーへのサポート対応は良心的で素晴らしいとの評判も存在する。どこで儲けを出しているのだろうと訝る物もない訳ではないし、このゲーム自体が

一種の実験室だとの都市伝説も少なからず発生しているのも事実ではあるが。

もともと弾美達中学生は、とことん楽しむ事以外は考えていないけれど。

「出遅れた訳だし、こっちはのんびり行く事にするよ。それよりどうせ限定イベントの時間は限られてるんだから、連休中にメインキヤラの方でも集まってイベントしようぜ」

「それもそうだなあ……連休中にオフ会しようって話もあるし、津嶋から相沢と林田も誘ってくれるよう頼んでおいて貰えるか？」

「おっけー、じゃあ今夜インして日にち決めよう！」

学校内で集まるよりは、実はゲームにインして集合を掛ける方が楽な事もあって。皆での決め事は、こうやってゲームツールを使用する事も多くなっていて今日この頃である。

そんな訳で明日からの4連休 二人とも気分的には浮き浮きである。

\*

\*

今日の放課後は、いつになく騒々しい雰囲気だ。ホームルームが終わっても、雑談したり連休の予定を確認したりするグループが、教室や廊下のあるあちこちに点在しているせいだろう。

そんな中でも、素早く帰り支度を進める者、部活の用意をする者が混ざり合い、混雑に拍車を掛けているのが現状である。そんな喧騒が若者特有の甲高い声で、教室から溢れ返っている。

暫くは収まりそうにないなど、弾美はため息一つ。

それでも弾美は、団子になって談話する人々の集団を華麗にすり抜け、大きなスポーツバックを抱えて部室へと移動する。部活のあ



る日は、瑠璃に声は掛けない。瑠璃も、文化部の活動で図書館に入り浸る日もあるし、適当に時間を見計らって帰宅する事もある。要するに、帰宅の時間がバラバラなので、示し合わせが無理なのだ。

そもそも部活のある日は、弾美は部活仲間と一緒に帰る事になっている。これは一年生の頃からの暗黙の了解なので、瑠璃は気ままに放課後を過ごす事になっている。

今日も友達と放課後の談話をした後、ゆったりとした足取りで取り敢えず図書室に向かう。頭の中で連休中に読む本のリストを作り、部員の誰かがいる事を期待して。

文化部の部活集会は、そもそも全く熱心ではないのだ。

期待に反しと言うか、予想通りと言うか。文化部の部員は誰一人いなかったが、常勤の司書さんがつこりと笑い掛けて来た。それからいつものように、椅子と熱いお茶を勧められる。

ちょっと年配の、小柄で白髪が目立つ女性の司書さんは、驚くほど書籍全般知識が豊富である。おまけに書道やお華にも造詣が深く、瑠璃はこの人が大好きだった。

図書室に通う目的の半分は、この語らいの時間でもある。

「津嶋さん、連休の予定は何かあるの？ 家族でどこかに出掛けたりとか……？」

「全然、両親とも休みが取れないそうなので……友達とは遊ぶ予定あるんです：けど。お休み中に読む本を借りたいんですけど、お薦めありますか？」

その後は、本のタイトルや雑談で話が弾んだ。それから、丁度連休に開催される書道の展覧会に、司書さんの作品が展示される予定だから、是非見に来てと招待券を渡されて。

もつとも、入場自体は無料なので、展覽日数と今こういう催し物  
をやってますという告知の意味合いの強い招待状のよう。簡単なつ  
くりの菜みたいな招待状で、確かに習字展と書かれている。

出掛ける予定の無かった瑠璃は、是非行きますと嬉しそうに返事  
をしたものの。内心は、弾美と一緒に来てくれるかどうか、シミュ  
レーションに頭をフル回転させていたりして。

一人で観に行くのは、こういう催し物はさすがに味気ない気がす  
る。しかも、瑠璃にはもう一つ、連休中に覗いてみたい催し物があ  
った。さすがに二つも付き合わされると、弾美は難色を示す  
かも知れない。

って言うか、かなりの確率で怒り出すかも。

内心冷や冷やしつつも、いざとなったら同じクラスの静香と茜を  
誘って行こうと考え直していた瑠璃。そんな密かな夢想中に、突然  
開かれたドアと聞き慣れた声には、瑠璃は跳び上がりそうなほど驚  
いた。

入り口には、部活中の筈の弾美が制服姿で無然とした顔付きで立  
っていた。

「ありえね〜っ！ 部活出席者たったの4人で、ランニングだけで  
動終わりになった！」

「……………帰る？ それとも、お茶飲んで行く？」

「お茶飲んで、一息ついて帰ろうぜ」

司書さんが率先してお茶の用意を始めたので、瑠璃は恐縮して礼  
を言った。司書さんは話し相手が増えるのは大歓迎だと笑い、弾美  
は先程の顛末を不満気に話し出す。

瑠璃繋がり、弾美もこの司書さんとは顔見知りである。部活の  
無い日などには、本を借りたり返したり瑠璃に付き合わされて、

いつの間にか知り合いになっていた感じだ。

弾美も割と、家では読書をする方なのだ。

弾美の話によると、意気揚々と部活に出たら、部室に集まったのは3年生のキャプテンと2年は自分だけ、後は1年生が2人で合計4人の有り様だったとの事で。

これではさすがに、フォーメーション形式の練習は出来っこない。そんなこんなで、ストレッチとランニングだけで今日の部活動は終わりになったらしい。気の毒な話だが、元々この中学は部活動に熱心ではなく、月曜と木曜日は練習を休みに定めている。

そんな訳で、部活動の士気も有り体に言うと全く高くない。

まあ、この方式は進学校ならではのモノというか。生徒の中には、習い事や塾に通うものも自然と多く存在するので。学校の周辺の至る所にそういった教室の多い事から、学校側が取り決めた配慮である。

瑠璃の友達の相沢静香と林田茜も、ピアノ教室に週2日通っている。大井蒼空付属中学はエスカレーター式にもかかわらず、3割の生徒は学習塾に通っているようで、中にはユニークな教え方の個人塾も結構あるそうだ。

学校の授業だけでも大変だと感じる弾美には、ちょっと信じられない話だったり。

そういう、部活はおざなりのな雰囲気は学生にも伝わるもので。本気で部活動に勤しむ生徒は、実際あまり多くない。全国的に名を馳せる強豪クラブも皆無に近く、弾美の所属するバスケット部も、良くて3回戦進出が精々。

県大会など、噂に聞く類いの都市伝説だと冗談で言われている程。

そういう話はさておいて、司書さんが弾美にも書道展の招待状を

渡してくれたので。それを見た瑠璃は、内心ホッと胸を撫で下ろした。口は少々悪い弾美だが、人を傷つけるような事はしないし、実際かなり面倒見の良い性格なのを、幼馴染の瑠璃はよく知っている。とにかくこれで、二人で出掛けるきっかけが出来た訳だ。

お茶を飲み終え歓談も一息ついた後、二人はようやく腰を上げる事に。瑠璃は貸し出された3冊の本を鞆にしまい込み、司書さんにお礼とおいとまを告げる。

学校内とは言え、放課後たった一時間しか経過していないのに、人影はほとんど確認出来ない有り様だった。どうやら、活動を断念したクラブは予想のほか多かった様子だ。

声出しが原則の運動部の喧騒も、全く聞こえて来ない。

「おまたせ、帰ろうハズミちゃん」

「おうっ」

瑠璃は扉の前で、司書さんに最後の挨拶。扉を閉めると、図書室の外で待っていた弾美の横に並び歩き出す。さつき司書さんから仕入れた本のネタで、弾美もビックリする面白い話を口にしながら。弾美も、これで結構読んだ本の数は多い。お互い、好きなジャンルの傾向はまちまちだったりするが、読んでみて二人とも好評価を付ける作品も多いのだ。

人影のまばらな校庭を、二人は他愛ない雑談をしながら帰路についた。

\*

\*

マロンとコロンの散歩をいつものように済ませると、時間は午後5時を過ぎていた。昨日より1時間以上、弾美の部屋でゲームを起

動させるのが遅れてしまっているが、元々今日は夕方のインはしない予定だったし、それは仕方が無い事だ。

特に気にする風も無く、いつもの手順でオンライン接続を進めていく二人。それでも瑠璃は、ゲームを始める前に一応時間の区切りを口にする。

「2時間しかプレイしちや駄目なんだっけ？ 私、夕御飯の支度あるから、6時半が限界かも」

「おうっ、取り敢えずステージ1だけクリアしよう。そしたらギルドメンバーと交信出来る様になるそうだから」

「わかった、今日は頑張るよ、私！」

「進の話だと、レベル5キャラで楽勝だったらしいけどな、エリアボス。皆40分でクリアしたらしい」

「……………」

そんな話をしている間に、ログインから昨日の洞窟のような部屋に降り立つ二人の分身キャラ。瑠璃は早速、いそいそと癖になっている自分のキャラのチェックを始める。

ルリルリは相変わらず泣きたくなる様な外見だが、NM二体を倒した功績は大きかった。そのせいで貰えた経験値で、レベルも何とか7まで上がっていた。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：07

取得スキル：細剣10《二段突き》：水10《ヒール》

装備：武器 粗末なレイピア 攻撃力+5《耐久4/10》

：胴 端切れの服 防+3

：両手 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

：指輪1 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防+1

：両脚 端切れのズボン 防+2

ポケット(最大3) : 中ポーション : 小ポーション : 小ポーション

まだまだ装備欄はスカスカで、頭装備から始まって、盾やマント、靴すらも無い。アイテムにしても、ポーションをポケットに入れるのが精一杯という感じ。

ただ、昨日弾美に倒して貰った火の玉NMから、恐らく当たりアイテムの『炎の短剣』をゲット出来たのはラッキーだった。攻撃力も初期装備より高いし、良い武器なのだが、短剣スキルの振り直しが必要のため、現在は使用を保留している。

それはともかく、状態異常を回復できる万能薬くらいは欲しいのだが……。

それでもまあ、取得スキルをこの段階で2つ持っているのは心強いかも。そんな感じで自画自賛しつつ、ふと隣の画面を見ると。弾美のキャラは、既にエリアボスに突入していた。

驚いている瑠璃を尻目に、あっという間にボスのHPを削っているハズミン。

ここで慌てて追従しても仕方が無い。瑠璃はアイテム欄から、昨日の調子で何気なく妖精をクリックしてみる。カバンに入っている持ち物の中で、唯一使用しても消耗しないアイテムだ。

考えた人は、ちよつと変だと瑠璃は思う。

そう言えば、ライフポイント制というのが便利ウィンドウから確認出来るらしい。って言うか、ハートマークが二つ、確かに並んでいるのが直に確認出来ている。

昨日見落としていたのが、どうにも不思議でならない瑠璃。

あらまあ、まだこんな最下層でウロウロしてるの？ 仕方な

いなあ……アナタつてば、余程自分の腕に自信が無いのネ、可愛ソウ

ちよつとでも力を貸してあげたいんだけど、今のワタシにはこれが精一杯。大変だとは思うけど、ここを脱出できるように頑張っ頂戴ネ

陰ながら応援してるから、ドウゾ元気を出してネ

画面確認をしていた瑠璃は、いきなり語りだした妖精に暫し啞然とする。今日のご機嫌を伺おうと思って、何の気なしに『使用』したのだが……。

間を置かずに、アイテム取得の音楽とログが表示され、ルリルリのアイテム欄に『妖精のピアス』の文字が。思わず身を竦めて、事の成り行きを見守る瑠璃だったり。

瑠璃は暫し、完全に思考停止　これってブービー賞？

「ハズミちゃん……妖精にブービー賞貰った」

「んあ？　こっちは倒し終わったぞ、どした？」

「あつ、まだ移動しないで。ステージクリアすると貰えないかも？」

そもそも、ボスを倒した時点で条件を外した可能性もあるのだが。弾美のキャラは、倒し終わった褒美のアイテム確認に忙しい様子。ボスを倒して通行可能になった昇り階段には、まだ移動してはいない。

つてか、こっちのログにも無関心。妖精も、ここまで無視されるとは思っていなかったかも。

「おつ、エーテルと中ポーションとお金だけか、ちえっ」

「ハズミちゃん、妖精の話聞いてあげて……」

んっ？　と言う顔で、弾美は妖精と言うワードに反応する。そう

言えばと思い出したように、アイテム欄から妖精をクリック。何となく、過ぎ去る沈黙の時間。

瑠璃の方が、逆に弾美の所有する妖精の言動にどきまぎしてしまっただが。弾美が急に笑い出したので、条件をクリアしていたのが判明し、ようやくホッと一安心。

妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

妖精に、頑張れという言葉と共に貰った装備は、こんな感じでそれほど強くは無かったけれど。それをいそいそと装備して、満を持して挑んだルリルリの初ソロでのボス戦だったが。

余裕過ぎる勝利に、どことなくモジモジする瑠璃であった。

\* \* \*

中立エリアがあるというのは、話には聞いていたのだけれど。小さな村くらいのスペースに、もの凄いキャラの数かひしめき合っていた。入ってすぐさまそれを目にした二人は、軽い眩暈に襲われたように、上体を同じリズムで揺らせていたり。

思考を停止させていたルリルリに、ハズミンからパーティお誘いのコール。すぐに承諾してパーティを結成しつつも群集の多さにちよつとだけ辟易する。

これでは、NPCを見つける事すら大変かも？

「人が目茶苦茶多いねえ……………」

「そうだな…………取り敢えず、ちよつと分かれて情報収集しよう」

「分かった、あっちの方見てくるね、ハズミちゃん」

指で左の方を指差して、そちらにキャラを移動させる瑠璃。中立エリアの壁のグラフィックは、もろに土と根っこのみ。天井も同じ



く、さらに不気味な虫の徘徊なども付加されていたり。

瑠璃は、見てしまった後思わず体を身震いさせる。

弾美はキャラを反対側の壁に移動、キャラの作り出す列をすぐに確認する。不自然に美麗な造りの階段に沿って、恐らくは攻略エリア突入待ちのキャラ達の列なのだろう。

その先には、根っここの塊に埋もれた石造りの扉が。全部で同じ構造の扉が、3つばかり確認出来る。右と真ん中の扉前には、ざっと数えてそれぞれ50人以上のキャラが列を成しており、一番左はその半分くらい。

恐らく、左の扉が次のステージに繋がっているのだろうと弾美は推測する。そのためには、右と真ん中の攻略が不可欠のようだが、それを信じて並ぶには列は長過ぎる気が。

ここは、ギルドで確認を取ってみるのが一番かも。

弾美は困った時のサブマス頼みと、フレンドリストから進のキャラ『シン』と交信を試みる。他のギルドメンバーも皆インしているみたいだが、同じエリアにいるかどうかは不明。

ギルド会話で呼びかけても良いが、攻略中だと他人のログは気が散る事が間々あるのだ。その点進が相手だと、長い付き合いから気兼ねが必要ない。万一攻略中なら、何らかの方法でそう伝えてくるだろうし。

その頭の回転の速さも含めて、進は信頼出来るサブマスターなのだ。

『進、今ステージ2に着いた』

『あれ、弾美？ 部活出てたんじゃ？』

『人数集まらなくて中止になった。それより今どこ？』

『ステージ3で、2つ目の部屋のイン待ち。ちょっと混んで来てるなあ』

『こっちは凄い混んでる。多分50人以上、並んでるように見えるけど』

『うえっ、まじか！ 一組インするのに5分として、2時間以上待つ計算だぞ』

うげっ、と思わず口に出す弾美に、瑠璃は不思議そうに隣から顔とモニター画面を覗き込む。瑠璃の方はあちこち歩き回った結果、鍛冶屋さんのNPCとアイテムの売店を発見した。

残念ながら、武器や防具を扱うお店は無い様子だったのだけれど、アイテム屋ではポーションや万能薬、エーテルを扱ってるのを何とか確認出来た。鍛冶屋では武器の修繕が出来て、これは必須のサービスである。使っている武器の耐久度が0になると、武器は壊れてしまうのだ。

薬品に関しては……品薄で、思いつきり高くなっていたが。

「ハズミちゃん、万能薬1200ギルもするよ？」

「なんでだっ！」

「品薄状態みたい、みんな買ってたんだね」

弾美は暫し熟考し、さっと頭を切り替えて夕方の攻略を断念すると発表。進にその旨の会話を送信し、瑠璃にもさっさとログアウトするようにと促す。

チラツと時計を見ると、まだ5時半くらい。瑠璃のタイムオーバーまで、まだ1時間はある。弾美はオンライン画面から、メイン世界へのログインを再実行して、瑠璃に話し掛けた。

「まだ時間あるから、ちょっとメイン世界で細剣の練習するか？」

「あゝ、そうだね」

いくら幼馴染とは言え、そして虚像のゲーム世界とは言え、あま

り弾美に負担を掛けたくはない。瑠璃は素直に、弾美の提案に従う事にする。

何だか久し振りのメイン世界に思えるが、実際は3日振りくらい。こちらのルリルリも、レベルが下がって、しかも変な服を着せられてたらどうしようという怖い疑念もすぐに晴れる。

当然とは言え、無性にホツとってしまう瑠璃。

お気に入りの衣装もそのまま、自分の部屋で寛ぐマイキャラの姿に、張り詰めていた緊張もほぐれていく。瑠璃は一発攻略のイベントや、大物討伐のギルドの集いなどは、緊張してしまっても苦手なのだ。

逆に、ストーリー性のあるミッションや、物語の奇抜で楽しいクエスト、キャラ性が全面に出て楽しませてくれるファンタジーの世界観は大好きなのだけども。

せっかくの連続ミッションなどの壮大なお話を、連続スキップで読み飛ばす他のメンバーの価値観は、自分とは相容れない感覚だと瑠璃は認識している。

表立って非難こそしないが、弾美にだけはヤメテと常日頃から注意している瑠璃である。

ほんわかしながらキャラチェックしていたら、案の定弾美が焦れて来た。慌ててキャラを移動させて、架空の街中に飛び出るルリルリ。街はどこか閑散としていて、期間限定イベントの存在感を改めて感じてしまう。

ちょっとした悲しい街のありように、NPCがやけに目立っている。

「安い奴でいいから、細剣買えよ瑠璃」

「うん……あっ、スキルも熟練度も無いから初期の武器しか装備出来ないや」

「それもそうだな」

そんな訳で、武器屋を覗いて初期の武器を購入する瑠璃。装備欄から装備交換させてやると、ルリルリのグラフィックが細剣持ちに変化する。その後、狩り場というか訓練場をどこにするのかと、弾美の言葉を待っていたら。

弾美の指は、弾むようにキーボードを叩いていた。どうやら、誰かと通信している様子。

「狩り場、どこがいいかな、ハズミちゃん？」

口にしながら、弾美のモニターを覗き込む瑠璃。画面下に表示されるログを追うと、キャラ名でマリモと言うのが目に入って来た。どうやら会話相手は瑠璃も知り合いの相手、街で唯一のペットショップを経営する店長のようだ。

店名も同じく、そのまんま『マリモ』と言う名前である。ブラジル系のハーフだと自称する、大柄だが性格の穏やかな店長は、リアルでも二人の顔見知りである。

ゲーム度も高いようで、ゲーム世界でもよく目にする人物だ。

「おうっ、ブアマに移動して、街のすぐ外でやろう。経験値は入らないけど、簡単には死なないモンスターがいるから」

「うん……店長、仕事なのにインしてるんだねえ」

「暇だから、こっち来るって……仕事中なのにお気楽だな」

二人して何となく虚ろな微笑を浮かべながら、目的地にキャラを移動させる作業をこなす。ブアマ行きの街間ワープを利用して辿り着くと、早速ハズミンからパーティ勧誘のコール。瑠璃が慌てて承諾すると、パーティ人数は3人を表示していた。

既にマリモもパーティの一員で、街の入り口でハズミンと一緒に

ルルリを待っていた様子。瑠璃のキャラを確認すると、マリモは小さな体でいっぱいの喜びを表現して来る。

『店長さん……いつも思うけど、お仕事平気なの？』

『さすがにイベントは進められないけど、レジ以外は基本店番だからね。お客がいない時は、モニター見ても平気だよ。今日はどこも空いてるから、NM倒しに行こうよ！』

『やだよ、客が来たらこっちほったらかしじゃん！ この間酷い目にあっただし！』

うんうんと、思わず同意する瑠璃。自分のキャラにも、額きのモーションを取らせるのを忘れない。部活の無い平日にフアンスカにインすると、たまに狩りに誘われるのだが。

大事な時に限って接客が入るのか、突然動かなくなる通称フリーザー。敵との戦闘中でもそんな事がしょっちゅう起こると、組んでるこっちもピンチに陥る訳で。

それでも全く悪びれない店長、困ったものである。

小さな体が、怒ったように地団駄を踏む。店長のキャラは、土属性で見た目は肌の茶色いモグラ人間。人間を基準とすると、その3分の1くらいの身長でコミカルな容姿が売りである。

体の割合からすると異様に大きな腕は、いかにも力持ちのモグラっぽい。土属性魔法に秀でているのは当然だが、腕力や防御力の高い、前衛向きのキャラである。

盾キャラ用に使用される頻度が、一番高いキャラでもある。

一方、弾美の閻属性キャラの見た目は、灰色の肌と黒髪の、ダーク系をふんだんに取り入れた人間タイプ。能力はSPが豊富で、スキル技で追い込む戦術に秀でている。

ステータスに目立った強みは無いが、種族スキルと言うレベルが

上がると自動取得する能力には、探索や隠密系が多い。そのため、狩りや戦闘には自然と強みを発揮する。

前衛にも後衛にも力を発揮出来る、万能キャラの面を持っている。

瑠璃の水属性のキャラは、空色の肌に青色の髪の毛、魚をイメージさせる背ビレがチャームポイントの可愛い外見である。精神力やMP量に優れ、回復支援ではナンバーワンの安定力。

ちなみに瑠璃が水属性のキャラを選んだのは、別に後衛がやりたかったからでも容姿に惹かれたからでもない。自分の名前から藍色を連想し、対応する色のキャラを選んだのだ。

それでも魔法職の選択は、瑠璃にとっても相性が良かった様子。

弾美の方は、キャラ選択を散々悩んだ挙句に光と闇の2択まで絞り込み、能力を考慮して闇属性に決定した。今では使い慣れた、お気に入りのキャラに育っている。

仲間内からの評判も高く、今ではギルドパーティーでの狩りでは、安定感を醸し出す存在と言われる程。削りアタッカーとして能力は高い上、時にはサブ盾までこなす万能タイプ振り。

ギルドの顔としても、無くてはならない存在である。

『そんな事言わないで、こんなに空いてる狩り場なんて滅多に無いんだから！』

『今日は、瑠璃の前衛練習がメインだよ』

その言葉を受けて、瑠璃は装備したばかりの細剣を、キャラに掲げさせて店長に見せびらかす。とは言っても、一番安い初期の安物武器なのだけれど。

こんな感じでゲーム内のキャラは、色々と楽しくてユーモラスな動作をする事が出来る。相手とのコミュニケーションを、このエモーションで取ることが可能なのも、架空世界の人気の一つ。

エモーションで瑠璃が調子に乗っていると、弾美に後ろからチップされた。

「フィールドに移動するぞ」

「うん……」

ちょっと涙目になりながらも、瑠璃は素直に返事を返す。それからは、フィールドを移動しながら敵モンスターを見つけ、細剣で殴りかかる修行の時間。

店長の我がまま混じりのぼやきは、取り敢えず弾美に一任。ひたすら敵の攻撃危険エリアと、それをすり抜けて攻撃する技術の習得に余念が無い。

分かっていたが、これが意外と難しいのだ。

「ちがうちがう、背中向けずにバックステップ又はサイドステップでかわすんだってば！」

「うう、難しい……」

「何でいちいちタゲ切ってるんだよ、モンスターをタゲって攻撃範囲を表示させなきゃ。敵に近いほうがSP回復しやすいから、懐に潜り込むテクも覚えたほうがいいぞ」

「そこまでは、無理かも……」

前衛の難しさを改めて噛みしめつつ、早々と弱音の泥沼にはまり込みそうな瑠璃。いつも後衛担当なので、敵との微妙な距離感とか、効果的なSPの溜め方など考えもしなかった。

後衛の距離感なんて、せいぜいが仲間に回復が届く範囲を確認する程度。それから、敵対心<sup>ハイト</sup>を取らないように注意しながら、仲間を回復したり、支援魔法や攻撃魔法を掛けたり。

後は近くに、アクティブな敵がないかの確認くらい。

戦い方のコンセプトが全く違うので、瑠璃が戸惑うのも無理は無いのだが。アクション性の強い戦闘と、美麗で繊細な3Dグラフィックが、そもそもこのゲームの売りでもある。

多少の敵とのレベル差も、操作が上手なら何とでもなるのが面白い。アクション操作が苦手な人なら、仲間でパーティを組むのを前提に、戦術を駆使して戦えばよい。

魔法剣士を目指せば、少々のダメージは無効に出来るのでソロも可能になって来る。育てるのに相当苦労はするが、繊細なアクション抜きでも強い敵に挑めるようなキャラが出来てしまう。

その他にも、範囲攻撃で敵を一掃したり、瑠璃のように後衛支援系を目指したり、育て方で色々幅広いキャラが誕生する。それがオンライン内で仲間と遊ぶ、フランスカの売りでもある。

考え方で、門戸が広がるアクションゲームが『ファンタジースカイ』なのだ。

『あつ、そうだ……明日暇なら、お店の方に遊びにおいでよ。せっかくの連休なんだしさ』

愚痴にも飽きたのか、店長も今はお手伝いヘルプ依頼発動中。近くの敵が枯れてきていたので、わざわざルリルリのために、遠くから敵を釣って来てくれていたマリモだったけど。

思い出したように、二人にそう提案して来た。

『いいけど……何かあるの？』

『いやあ、そう言う訳でもないんだけど、姉さんも会いたがっていると思うしさ？』

二人は揃って顔を見合わせつつも、ちょっと警戒気味に探りを入れる。マリモの店長は基本良い人ではあるのだが、性格的にずばらで頼りない所もあるのだ。



マロンとコロンの餌やペット用品で、再々お店の世話になっていた二人。それが縁で店長と知り合ったのだが、気が知れてくると事ある度に店の仕事などを頼まれ出して。

まあ、バイト扱いでお小遣いをくれるので、それはそれで別良いのだが。

「そう言われちゃ、断れないな」

「そうだねえ……明日、夕方のマロンとコロンの散歩コース変えて寄ろうか？」

普段は繁華街とは反対方向の、街の外を流れる河の河川敷の公園が散歩のコースなのだけねど。瑠璃の意見に弾美はそうしようかと頷いて、店長にその旨返信を送る。

ただし、ちよつと警戒は入ってるけど。

『了解、先生に会いに夕方の散歩がてら向かうよ!』

『つれないなあ、僕は二の次?』

店長のお姉さんは、ペットショップに隣り合った建物で獣医さんを開業しているのだ。マロンとコロンも散々お世話になっており、その人の名前を出されてはさすがに断れない。

この人は弟と違ってしっかり者で、二人の事も犬の健康管理の事も、とてもよく気に掛けてくれる。お医者さんとしての腕も確かで、街でも評判の良医である。

とは言え、向こうも忙しい人なので気楽に会いには行けないけれど。

「何だか、予定立たないうちに行く所いっぱい増えていくなあ」

「4日も休みあるから、全然平気だよ!」

自分も弾美と行きたい場所があるので、間違っても大変だとは言えない瑠璃。勢い込んでそう口にしながら、何となく曖昧な笑みを浮かべてみたり。インドアで既に、限定イベント一日2時間と読書3冊分のスケジュールは……実は結構な重圧なのだけれど。

まあ、学校から出された宿題はそれほど多くはないし平気だろう。何にしる、4日もある大型連休なのだし、楽しまなければ損と言うもの。家族でのイベントは全く無いけど、それは弾美も一緒。

そう考えてみたら、意外と暇な時間は多いのかも。

その後の3人パーティでの戦闘修行は、雑多な無駄話が大半を占める事になってしまい。瑠璃の前衛慣れに関しては、残念ながら中途半端に時間切れを迎えた。

別れ際に二人で相談して、夜の8時ごろにも一応様子を見る事を約束する。限定イベントのエリアの混み具合によっては、次のエリア攻略にトライしてみようとの事で合意を得て。

可能性は薄いけど、と弾美は付け加えていたが。

\*

\*

夜には約束通り、瑠璃はリビングのモニターの前で、自分のキャラをインさせて弾美の報告を待っていた。キャラのログインはメイソ世界の方で、静香や茜のキャラと情報交換や世間話をしたり、連休の予定を話し合ったり。

弾美はイベントの方の世界にインしており、しばらくは混み具合を調べていたようだ。やがて今日は諦めたと言う通信が来て、明日の夜はギルドで集まって何かするから、8時から空けておく様にとの文面の通達が来た。

静香や茜にも、同じ文面を回すようにと付け加えられて。

文面でのやり取りと言うのは、何だか味気ないと瑠璃は思う。さ

さすがに夜中に弾美の部屋に、しかもゲームのためにお邪魔するのは論外だが。隣に存在を感じつつ、言葉を交わしながら一緒にイベントを進める事の出来る空間は寛げて良いものだ。

楽しくて手放したくない瞬間だと、瑠璃は切に思う。

瑠璃の家は、兄が大学進学で家を出て行ってしまつて以来、彼女が独りでいる時間が極端に増えてしまつていた。読書する時でさえ、瑠璃は両親がいる時は、一階のリビングに降りるのが習慣になつて

いる。  
時には、こんな感じでゲームも階下でする事もある。それもまあ、予備モニターがあるから出来る事なのだけれど。チャンネル権をゲーム画面で奪うのは、さすがに両親に対して申し訳ない。

瑠璃の家庭での両親のゲームに対する理解は、他の家庭とそれ程変わらず低いのだが。瑠璃の成績はかなり優秀なので、うるさく言われた事は今までに無い。

その点は有り難いし、友達にも羨ましがられる事も多かつたりする。

リビングでは、母親の恭子きょうこさんがテレビを見ながら色んな話題について喋っていた。他の人に言わせれば、頭が良過ぎて色んな事象を幾つと同時に思考する人独特の、ひっきりなしな思考の飛び方をする女性らしいのだけど。

要するに、話題について行く方はもの凄く大変だという事でもあつたりして。世間は連休なのに両親共に休みが取れない事を、ここ数日の夕食時に何度も詫びられていた瑠璃なのだが。

その話題が出るたびに、こっちは平気だから仕事頑張つてねと、一応の気遣いを見せるのはそれなりに大変。お隣さんの弾美が、家族で旅行に出かけてしまったなら、恐らく留守の間にとつともなく寂しい思いをしただらうけれど。

こう思つては何だが、弾美の両親も休みが取れない事を、瑠璃は

密かに感謝していた。

画面の中では静香も茜も、そろそろ落ちてお風呂に入ると言うので。瑠璃もそろそろ潮時かなと、弾美とギルドメンバー全員に向けて、今夜は落ちますとのメッセージを送る。

その途端に返って来る、たくさんのお疲れ様のメッセージ。

『んじゃ、おやすみ( ^ - ^ )ノ』

『おやすみ、また明日!』

『お疲れ様〜、またね〜』

今日の放課後に図書館で借りた本は、まだ一章も読んでいない。お風呂が空くまで少しでも読み進めようと、瑠璃はゲームを終了させながらハードカバーの本を手取る。

これはこれで至福の時間。母親の雑談をBGMに、いそいそと読書の用意を始める瑠璃。

ログアウト中のイベント告知画面では、妖精が魅惑的な笑みを浮かべていた。

### 03 ステージ2と連休開始！（前書き）

ええつと、リアルが忙し過ぎて大好きなゲームの時間が取れないって事は、以前にもちよこつと書きましたっけ？ オンラインゲームは、ここに掲載している小説の基礎と言うか大事な基盤なのですけど。

その大元となっているのが『FFオンライン』ですね。8属性とか装備欄16個とか、そんな感じの設定を密かに拝借してます（笑）。もつとも、他の主要のゲーム部分はオリジナルですけど。

その『FFオンライン』をパソコンクラッシュ事件から休止して次に始めたのが『グランドファンタジア』という無料オンラインゲーム。ここでもギルドを結成したり、PVPを初体験したり、年下の少年少女から人生相談を受けたりと、色々と設定のネタに触れ合ってみましたけど（笑）。

リアル転職で途端に忙しくなつて、泣く泣く休止状態に追い込まれ。

むーん、正直言つて小説を書く時間もなかなか取れません（苦笑）。家に帰れるのは7時過ぎだけど……割と体力仕事なので、帰宅後に何かしようつて言う気力が湧かないのです^^；

おまけに朝が早いので、10時過ぎには寝てしまふ健康的な生活サイクルだったり（笑）。

そんな時に辿り着いたのが、お世話になつているヤフーのトップページからの『Yモバゲー』だったりして。これも一応ゲームだし、何よりちよつと空いた時間でお気軽にプレイ出来る……（笑）！

ゲームしていると自慢するには、ちよつと切ないけどね（苦笑）。

### 03 ステージ2と連休開始！

時刻は朝の、とても早い時間。庭にいる飼犬の鳴き声に、瑠璃の意識は何度目かの覚醒を試み始めた。……それともあれは、お隣のマロンの鳴き声だろうか？

その考えが、完全に少女の眠気のヴェールを取り去った。低血圧の体質なりに気張りつつ、瑠璃はガバツと上体を起こすと、慌ててカーテンを開け外を見遣る。

外はまだまだ薄暗いが、朝日の気配は街の輪郭を綺麗に浮き上がらせている。

お隣さんの玄関前の庭先で、幼馴染みの弾美が大型犬を従えて屈伸をしている姿を確認。その雰囲気を察して、自分も散歩に連れて行けとコロンが騒ぎ立てている。

瑠璃は目覚まし時計を確認。17分も、いつもの起床時間を過ぎていた。慌てて窓を開け放ち、弾美に向かってなるべく小声で寝坊をした事実を告げる。

ここから焦って支度しても、どうしても10分近くは掛かってしまふ。

「ハズミちゃん、ごめん寝坊しちゃった。すぐ支度するから、コロンをお願い」

弾美が軽く手を振り返すのを確認して、瑠璃は大急ぎで窓を閉めて着替えに掛かる。昨日の夜に、つつい夜更かして本を読み耽ってしまったのが明らかな敗因。

何にしる、弾美があまり怒ってなくて良かった。ついでに、コロンの鳴き声も止んでくれた。

いつものジョギング姿に身を包み、タオルと家の鍵、財布と犬のフンの始末袋を用意。素早く顔を洗ってトイレを済ますと、両親を起こさないように静かに玄関を出る。

いつもの行為なので、そこら辺は全く淀みは無い。

出るなり、大型犬のコロンが思いつきぶつかって来た。この子の甘え癖は、家族一同困ってはいるのだが。取り立てて真剣に直そうと思った事は、実は今まで一度もない。

犬とはそういうものだ、家族全員が思い込んでいるせいかも知れない。小さい頃はそれでも良かったのだが、今となっては大人が抱え上げるのも無理なほどの体格に成長を遂げている。まあ、愛情表現なのだから目くじらを立てるのも可笑しな話だ。

お隣のマロンに限っては、そんな癖は全く無いのだけれど。

「屈伸くらいしとけ、怪我するぞ」

「うん」

弾美が二匹の手綱を操っている間に、瑠璃は簡単にストレッチを済ます。兄弟犬のテンションは引き絞られた弓の弦さながら。弾美の前では、何故か大人しいコロンである。

それでも走り出すと、いかにも楽しそうにいつもの道を先導する二匹。

休みの日でも、もちろん犬の散歩は欠かせないのだが。朝の6時起きジョギングも兼ねるようになって、お隣同士の間で余程の事が無い限りは、休まないルールが出来てしまった。

正直、瑠璃は早起きが最大の苦手だったのだけれど。慣れとは怖いもので、今ではすっかり平気になってしまっている。テスト期間中は、もっと早起きして朝型にしている程だ。

その効率の良さは、弾美も瑠璃も身をもって体験している。

そんな訳でいつものジョギングは、軽やかなペースを保ちつつ、毎日通っている目的地へ。二人の通う中学校のすぐ南に位置する運動公園は、朝からジョギングしたり早朝の体操をする人が、連休初日の今日もちらほらと見て取れた。

広い芝生や小さな運動コート、端の方には散歩コースや子供の運動玩具やアスレチックコースも設置されており、開放感のある清潔に整備された場所である。

ここに辿り着くまで軽いランニングスピードで、片道10分あまり。その後は、運動公園のジョギングコースを廻ったり、犬達と芝生でかけっこしたり、バスケットコートでシユート練習したり、体操をしたり。

とにかく二人と二匹は、思い思いに時間を過ごす。

今日も軽い柔軟体操の後、コートに入ってシユート練習をこなしていた弾美。30分程度でようやく一区切りつけて、休憩のついでにタオルで汗を拭いている。

コートの端で犬達とボール遊びをしていた瑠璃は、ようやく働き始めた思考をめぐらせ、弾美に話しかけた。あまり誘うのが遅れて、変にスケジュールを気にしなくても済むように。

つまりは、連休中のスケジュールについての計画である。

「今日はこの後どうするの、ハズミちゃん？」

「そうだなあ……早起きしても、意外にする事ないかもな。夕方までポツカリだ」

夕方には、散歩ついでにペットショップ店に遊びに行くと言う予定はあるのだが。それ以外は取り立てて予定が無い事に、弾美はちよつとシヨックを受けていたり。

普通の休みの日は、何だかんだで友達と遊ぶ予定が入ったりして



いるのだが。大型連休と言う事で、家族で旅行したり出掛けたりする者も少なくないという周囲の現状をかんがみて。

特に前もって、こちらから遊びの予定を振らなかつた結果かも知れない。

「文化会館で押し花展やつてるんだけど、一緒に見に行こうよ。昨日ネットで調べたら、司書さんに誘われた書道展と同じ会場だったの」

「へえ……んじゃ、一緒にまとめて行くか。でも、昼から出掛けるにしてもそれまで暇だなあ」

適当に計画を練りながら、公園の大きな時計を見る弾美。帰り支度を始める様子を見て、瑠璃もマロンとコロンを呼び戻す。二匹は仲良くじゃれあいながら、飼い主の指示に従う。

周囲はまだほんわかとした朝日の明かりのみで、それでも二匹は元気いっぱい。散歩が大好きを、その大きな体躯全体で表現している。大きな生き物の純粹で無邪気な仕草は、それだけで心がホンワカしてしまう。

リードに二匹を繋げながら、瑠璃は予定の再確認。

「じゃあ、お昼まではなにもしない？ お昼ごはん食べてから、展示会に行くでいい？」

「ん〜、そうだな……そう言えば、朝なら空いてそうだなあ、ファンスカの期間限定イベントエリア。おおっ、これは逆転の発想かもっ、帰ってすぐインしてみようぜ！」

「えっ、朝から……？」

弾美は良い事に気付いたと、ずるそうな笑みを浮かべて指を鳴らす素振り。それから勢い込んでマロンのリードを受け取ると、戸惑う瑠璃をせき立てて家路につく。

ところが弾美は、公園を出る前に思い出したように足を止める。それに合わせて瑠璃と二匹も、立ち止まって弾美を見遣る。弾美は運動公園の端の川べりにあるコンビニを見つめており、何やら暫し逡巡している様子。

それから瑠璃を振り返って、こんな提案をして来た。

「瑠璃、朝飯買って食べながら、一緒にゲームしよう。金持ってる？」

「あるけど……こんな朝早くにお邪魔して平気なの？」

特に弾美の家にお邪魔する事に、遠慮する訳ではないけれど。時間から逆算するに、弾美の両親は、今頃丁度起き出して仕事に出掛ける準備をしている筈である。

朝の忙しいこの時間に、お隣さんだからと言ってのこのこ上がりこむのもどうかと思う。

「別にいいじゃん、親も瑠璃なら何も言わないって」

そう言いながら、財布の催促。弾美は邪魔になるので、朝のジョギングにはお金を持って出ないのだ。仕方ないので、二匹のリードを預かって、弾美に財布を渡す瑠璃。

その頃には、まあいいかと思いき直し始める瑠璃であった。心の中では、ちよつとずるい言い訳を浮かべる事に余念がない。昼から遊ぶため、学校の宿題を一緒にするって言えば良いと。

どうせゲームは2時間で終わるし、その後に本当に宿題もすれば良い。

「サンドイッチでいいよな。飲み物は何にする？」

弾美の方は、まるで気にしていないようだったが。

\*

\*

「あら、瑠璃ちゃん。お早う、いつも早いのねえ」

「お早うございます、律子さん。朝早くから済みません……」

弾美の母親の律子りつこさんが、ダイニングで二人を見てちょっと驚いた表情を浮かべる。まだ寝間着姿で、トーストを焼いたり朝食の支度をしているようだ。

ちなみに、この律子さん。おばさんと呼ばれるのが嫌で、彼女は瑠璃に自分の事を名前で呼ばせるようにしている。この事実を、弾美も甘んじて受け入れているのは、自分も瑠璃の母親を名前で呼ぶように、本人からきつく命じられているから。

女性は自分の歳を、一瞬でも若く感じていたらしい。

「朝食、買って来たからいらないよ。今から2階で、ゲームしながら食べるから」

「あら、そつなの？」

「べつ、勉強もちゃんとしますからっ！」

あまりに正直過ぎる弾美の告白に、逆に瑠璃が焦って言葉を継ぎ足す。律子さんはニコニコしながら、朝っぱらからのゲーム大会については特に気にしていない様子である。

それどころか、恐縮している瑠璃に一言添えて来る。

「瑠璃ちゃんが勉強見てくれるなら、私も一安心だわ！ 恭子から瑠璃ちゃんの成績、いつも耳にタコが出来るほど聞かされてるからねえ」

「い、いえっ……言うほどのものじゃありませんからっ」

あんまり自分の娘の成績を触れ回って欲しくないと、瑠璃は内心母親を恨む。もっともその母親は、技術研究職で長年チームを引っ張っているような才女なのである。超仲の良いお隣さんに、自分の遺伝子を継ぐ者を自慢したい気持ちも分るのだが。

瑠璃には全く、母親の仕事に興味は無いし関係ない話だ。

引きつった愛想笑いを浮かべ、家から持ってきた問題集を目立つように抱え直して。瑠璃はとつくに姿を消した弾美に続いて、立花家の階段をのぼって行った。

部屋のドアを閉めると、何となくホツとため息をついてしまう瑠璃。既にゲームの用意に移っていた弾美は、呆れたように幼馴染みの少女を見つめていた。

さっさと座れと催促しながら、そんなに親の目を気にするなと悟った物言い。

「向こうも、連休中どこにも連れて行けない負い目があるんだぜ？ゲームしてるくらいじゃ、目くじら立てる訳ないだろうに」

「朝早くからってのに、問題ある気がするんだけど……」

それはそうと、ネット内はさすがに弾美の読み通り。休みとは言え朝の7時過ぎにインする粹狂なプレイヤーは、見た限り殆どいよいよだ。昨日の混み具合はまるで嘘のよう。二人のキャラは、がらがらの中立エリアに無事ログイン。

薄暗いエリア内を、自由自在に動き回る。

「万能薬、640ギルだつて。まだ高いね」

「消耗品に300以上は使いたくないな、勿体無い。おっと、武器の補修しとかないと」

「うーん、一部屋見てから決めようか。あつ、今日の妖精チェック忘れてた！」

妖精はいつものハイテンションで、おざなりにそれぞれの部屋の説明をしてくれた。要するに、鍵の掛かった扉を開けるには他の部屋の仕掛けを操作解除しなければならぬらしい。

それから、地上に近付いた分だけ大樹『グランドイーター』の影響力が薄れたらしい。二人分なら何とかバリアを張れるから、同じ目的を持つ仲間を見付けてみたらと来たもんだ。

さっさと地上に出れるよう、頑張つてネ　　みたいな。

瑠璃は妖精の言葉にいちいち頷いて、おざなりな応援にも頑張るポーズを返す。ちよつとずつだが、この小さな案内人を好きになつてきているし、強引な理由付けもちよつと笑える。

後半この娘がどんな導入に絡んでくるのかも楽しみでもある。

弾美の方はサンドイッチをぱくつきながら、何やら妖精に毒づいていた。もごもごと聞き取り辛かったが、もつとまじな情報をよこせ、さもなければ装備をよこせと言う事らしい。

瑠璃もちよつとだけ思ったが、せめて薬品類の融通程度は欲しい所。

先日の混み混み具合で、完全に後発となつてしまった二人だが、ようやく1日遅れで、限定イベント最初のパーティ戦に挑む事に。パーティを組んだら、ハズミンからトレードの申込み。何かと思つたら、昨日の冒険で取った水の術書を渡された。ありがたく頂戴し、さっそく使ってみたり。

薬品が高くて買えないせいで、あまり意味の無いダンジョン突入前の用意を整えて。ハズミンを先頭に階段を昇り切つて、最初の部屋の石製の扉をクリックする。

緊張気味の瑠璃は、朝食もおぼつかない。

「だ、大丈夫かな？」

「最初は俺がタゲ取るから、瑠璃は平気だよ。俺が殴った奴を殴ればいい」

「わ、分った。回復は任せといて」

暫しのロード時間の後、いきなり見慣れない部屋に突入する二人のキャラ。石をくりぬいたような味気ない様式の通路が、前方に真っ直ぐ続いている。弾美はオートマップを確認しながら、ゆっくりキャラを進ませる。

十字路が出現し、ハズミンは左を選択。ルリルリも後に続く。

ちよつと進んだ突き当たり小さな部屋が現れ、その中に2種類の敵が居座ってるのが見て取れた。ふわふわと浮かぶ手の平の形のモンスターと、地面にはネズミ型の敵が数匹。

数は4匹ずつだが、弾美は画面を見て唸り声を上げる。

「うっつ、遠隔攻撃無いと辛いなあ。部屋に入ると、囲まれてボコられそう」

「リンクするのかなあ？」

リンクとは、同じ種類の敵同士が、敵対行動を共にすること。これを無視すると、一匹相手にしていたつもりが、気が付けば数匹にボコられる嫌な事態になってしまう。

アクティブな敵も要注意で、こいつらはプレイヤーを見つけた瞬間、問答無用で襲ってくる。ステイジ1にはリンクする敵はいなかったが、アクティブの敵は多かった。

敵のタイプの探り分けも、冒険者には重要なポイントである。

「するかもなあ、見た目だけじゃ何とも……むっ、一匹離れたっ。

あいつを倒して、何匹か連れて来るから、瑠璃はここにいろっ！」  
「りよ、了解」

ふわふわと海に浮かぶクラゲを思わせる動きで、一匹が弾美の言う通り、単独で部屋の角へと離れていった。ハズミンは部屋の端を突っ走り、その生き物に斬りかかる。

敵対行動を感知したそいつに、動きの変化が現れる。急にクワツと手の平の部分に顔が出現して、ハズミンを平手で押し潰しに掛かる。最初の見た目はユーモラスだっただけに、その豹変振りにはちょっと怖い。

瑠璃は思わず悲鳴を上げそうになるが、とっさに回避したハズミンのダメージは軽微。追撃にまたもや軽傷を喰らうが、片手剣を10回も振るうと、そのモンスターは動かなくなった。

咄嗟に自分のキャラの攻撃力から、敵の強さを逆算する弾美。

「う、こいつちょっと強い……」

弾美の言葉を裏付けるように、パーティに大量に入る経験値。ハズミンは更に、近くにいたネズミに用心しながら近付いて行く。触れるほど接近してから、ノンアクティブだと確信。取り敢えず無害なネズミを無視し、ハズミンは今度は飛ぶ手の平へとゆっくり近付いて行く。

ぐりんと向きを変えたそいつの動きを見て、ハズミンは通路へとダッシュ。

「釣ったぞ、確保頼む！」

「わっ、わっ！」

慌てながらもカーソルで迫り来る敵をキャッチ、言われた通りに瑠璃は取り敢えず一撃を見舞う。そのせいでこちらにターゲットが

移り、手の平に現れた厳しい顔と目が合ったと思った瞬間。

ルリルリが二撃目を放つと同時に、手の平の反撃に押し潰された。

「きゅっ……」

ルリルリのHPが3割くらい減り、しかも目を回し座り込み状態に。しかし、モンスターの攻撃はここまで。反転して斬り込んで来たハズミンに、あっという間に倒される。

危機は去ったけど、何となくプライドを傷つけられた思いの瑠璃。

「おっ、こいつ皮のグローブ落としたぞ。でも、腕装備は俺ら良品あるから、別にいらなかな」

「……こいつら、全部倒そう」

とんでもない危険技に自分のキャラが恥をかかれ、瑠璃の殺意はマックス状態へ。それ以上に、瑠璃の前衛意欲は、既に完全に折れかけていたのだけれど。魔法を使って、安全に狩りのサポート役に回りたいと、今は切に願う。

まだまだ攻撃を受けても余裕だと判断したのか、休憩も取らずに弾美は次の敵を釣りに行く。地上のネズミは再び無視して、再び浮遊する手の平の知覚範囲に入り込む。

ちよつと不用意なその動きに、今度は2匹の敵が追いかけて来る。

「やべっ、こいつらリンクするのか！」

弾美の言葉通り、仲良く連れ立った残りの2体が、敵とみなしたハズミンを追いかけて来る。念のためにと自分に回復魔法を掛けていたルリルリは、弾美の後を追ってくる敵に慌てふためく。

倒すと言った手前、自分で何とかしなければと建前では思う瑠璃なのだが。



「瑠璃、一匹頼む！」

「えっ、うあっ！」

今のルリルリで、敵のターゲットを取れる行動と言ったら殴る事だけ。最後尾の敵に細剣で切りかかり、半ギレの瑠璃は攻撃ボタンをひたすら連打する。

幸いにも、敵に近付き過ぎていたので、敵の潰し技は発動しにくかったようだ。弾美の助言「スキル技使え」の言葉に、思い出したように《二段突き》を使用する。

隣の余裕過ぎる声が、今はちよつと憎く思える瑠璃である。

放ったスキル技のせいで、敵のHPゲージは一気にぐわんと減少するも。技の使用動作のせいで、敵との距離が思いがけず開いてしまった。しかも、敵のHPはあとちよつと残っている。

この最後の好機に、敵の手の平モンスターは最後っ屁の悪あがきを選択したようだ。先ほどルリルリがモロに喰らった、押し潰し技のモーションが発動する。

ほとんど偶然的な動きで、瑠璃は昨日練習したバックステップを使用出来ていた。技を外した敵は隙だらけ、思わず身体中に広がる感動の波動の中、自然とルリルリは止めのモーションへと突き動く。華々しい勝利に、心拍数が上がっているのが自分でも分かる。

「おおっ、やるじゃん瑠璃。応援いらなかったな！」

こちらも敵を倒し終えて、応援に向かおうとしていた弾美の率直な褒め言葉に。瑠璃は思わず、泣きそうになる程の喜びを覚える。それから、前衛も良いかもと呆気なく考えを翻してみたり。

笑みでほころんだ顔のまま、瑠璃は調子に乗って次なる獲物を指し示す。

「次はネズミをやっつけよう！」

難なく雑魚モンスターのネズミを蹴散らし終えて、二人は十字路の反対側に移動する事に。途中思い出したように、弾美が手の平モンスターのドロップの結果を口にした。

何しろ下の層からこちら、雑魚からろくなアイテムが拾えてなかったのだ。

「あれ……防具のドロップ、4匹倒して1個だけかあ。ここは防具揃えるためのエリアかと思っただけだな」

「うん……あ、でもまだ落としそうな敵いるよ？ 今度は足だけど」

瑠璃の言う通り、反対側の部屋には、くるぶしから下の裸足の肌色足型モンスターが。別の種類のモンスター、空中に浮遊するコウモリと一緒に4匹ずつたむろしていた。

弾美は念をこめるように画面の中の敵をにらみつけ、ドロップ率アップを低い声で願掛けし始める。確かに今のスカスカの装備欄を思うと、一刻も早く埋めたいと思うのは当然かも。

ステージ1のボスゴーレムのドロップで当たりを引き、割と性能の良いブーツを入手していた瑠璃は、何となく気まずい思い。弾美に融通しようかと思っただが、種族の違いのせいでルリルリのHPはハズミンと較べて低いのが判明して。

その分MP量は、自慢出来るほど豊富なのだが。弾美と相談した結果、ブーツは瑠璃が持っていて良い事になって。自信のない瑠璃は、有り難くそれに従った次第である。

そうは言っても、瑠璃にしる半分以上の装備欄はスカスカである。

この部屋での狩りも、さっきと同じ程度の波乱と順調さで進行を見せた。その過程で、足型モンスターは蹴り飛ばしのスタン技を持

つてる事を、ルリルリは身をもって確認する。

それでも、二人ともHPを半減させる程の苦戦もせず、念願のドロップも皮のブーツが2つほど。防御力しか上がらない装備だが、弾美は嬉しそうにキャラに装着させる。

それを見て瑠璃もほっとしつつ、軽い罪悪感を払拭してみたり。

3つ目に廻った部屋は、先程の手の平型モンスターとスライムの2種類のセット。数も4匹ずつで、構造的には前の2つの部屋と一緒にである。慣れて来た狩りのペースで、弾美は危なげなく敵の各個撃破を披露する。

お手伝いの瑠璃も、ようやく操作に慣れて来た様子。

「おっ、こいつは指輪落とすのか。もう一個来いっ！」

「このスライムは、ポーション落とすかな？」

戦闘もそっちのけで、取らぬタヌキの皮算用を始めてしまう二人イベントでレベル1から、ほとんど何も持たない状態でのスタートなので、ある程度それも仕方ないのだが。

スライムはポーションを落としたし、指輪の2個目も何とかドロップしてくれた。ほくほくしながらアイテムの分配を終えて、二人は軽快な足取りで4つ目の部屋へと向かう。

4つ目の部屋は、足型のモンスターと鳥型のモンスターの2種類のよう。どうやら全部屋、地上と空中のモンスター2種類での編成となっている模様である。

そういふこだわり配分は、ダンジョンなどでは良く見かける仕掛け。

「あつ、ここはズボンなんだね？ 股下無いのにねえ」

「……本当だな、股下無いよなあ」

この部屋のドロップは初期装備よりはマシなズボンのようで、二人は順調に装備を整えていく。4部屋回り終えたところで、残りの通路は北へ真つ直ぐ伸びている一本のみ。

弾美はメニュー欄からマップ表示、それをしばらく観察して、それをボスエリアへのルートだと推測。時計を見ながら、瑠璃にこの後のルート相談を持ちかける。

「このまま北に行くと、ボスエリアになっちゃうかな。まだ30分も経ってないし、もう少し経験値貯めておくか？」

「うん、それより貯まったスキルポイント、何に振るう？」

ここに至るちょっと前、ルリルリは4部屋目で、ハズミンは3部屋目でレベル8に達していた。弾美は迷わず、ボーナスポイントは全て片手剣に振り込んだのだが。

瑠璃は2度のレベルアップ分、貯まった4ポイントを保留してあるのだ。何しろ、武器系のスキルはダメージ率などに影響するので伸ばし甲斐もあるのだが、水や闇などの属性スキルは、スキル10まで伸ばさないと無用の長物になってしまう。

かと言って、属性スキルを伸ばさないと魔法を覚えられない。パーティーのバランスを考えると、ルリルリが便利魔法を覚えていくべきだろうとは思っただが。

要するに、他の魔法もスキル10ポイント払って、覚えるべきかを迷っているのだ。

「状態回復魔法、あつた方がいいかもな。装備で半端に伸びてる属性を伸ばすのも、まあ一つの手だけ。貯めとくだけなら勿体無いから、武器スキルに振れよ」

「何の魔法を覚えるか、ランダムなのが怖いよね。……光か炎、伸ばしてみようかなあ？」

「炎伸ばすなら、下の層でNMの落とした術書渡すぞ？」

現在、装備で半端に伸びている属性は、風と光が+1に炎が+3である。光の属性魔法の初期魔法に、状態回復魔法があるので、それを目指すのが良いかも知れない。

瑠璃はちよつと迷って、結局光スキルを+3、攻撃ダメージ増量を目論んで細剣スキルを+1伸ばす事に。武器スキルはともかくとして、属性スキルは偶数に揃えておいたほうが管理しやすいとの考えである。

レベルアップで貰えるポイントは、偶数の2と決まっているから。

「あれ、装備落とすモンスター、湧いてないぞ？」

瑠璃が振り分け操作をしている間に、弾美は通路を戻っていたようだ。しかし、最初の部屋に再ポップしていたのは、ネズミ型のモンスターののみ。

これはとんだ期待外れ、防具類は売れば金策にもなったかも知れないのに。

「ん〜、ドロップ装備の個数管理のためっばいな〜。あの敵、経験値おいしかったのに」

「あ〜、弱い奴しかいないのかぁ……どうする？」

弾美はちよつと考える素振りの後、取り敢えずこのエリアを攻略しようと言った。もう一つ、隣のエリアには、おいしい経験値のモンスターが存在するかも知れない。

2時間縛りのルールもあるし、変なところで時間を掛けるのも危険かも。

「そつだね、一回は攻略して勝手を把握しとかないとね〜。あ、スライムだけは倒しておこう！」

瑠璃の提案は受け入れられ、スライムを倒した経験値とポーションをゲットした後。二人のキャラは、ようやく未踏のボスエリアへと向かう事に決めたよう。

一直線の通路の先には、さつきより一回り大きな部屋が。モンスターも2種類4匹ずつの配置は先程と同じ模様である。空中には蜂のモンスターが4匹、地上を徘徊するのは一見スライムを2匹くつつけたような、肌色のユーモラスなモンスター。時折、触手を伸ばして周囲を観察している。

「あれも、身体の部位のモンスターなのか？ お尻に見えるが……」  
「あれに踏み潰されたら、痛そうだね」

普通に、素で言葉を返す瑠璃。二人でそろりと近付いて、一斉に殴りかかってみると。触手で、鞭のようなお返し攻撃が飛んで来た。案の定、お尻モンスターは踏み潰し技も使って来たが、ハズミンの方がタゲを取っていたので、コントローラー操作で直撃は受けずに済んでいる。

戦ってみると、手前の部屋の敵より明らかにHPも多く難敵だったが。二人パーティで息が合っていれば、どうと言う事も無く戦闘は無難に終了する。

しかし残念ながら、期待のドロップは無し。

次の敵に向かおうと部屋を移動するハズミンに、空中から蜂が攻撃を仕掛けてきた。ノンアクティブだと思っていた弾美は、不意をつかれて一撃を喰らってしまう。

大慌ての弾美に、さらにステータス異常の告知が襲つ。

「うおっ、麻痺したっ！」

「ええっ、状態回復魔法も万能薬も無いよっ！」

ハズミンの動きが、途端にカクカクと遅くなる。どうやら蜂は、麻痺毒をもっていた模様。ルリルリが慌てて駆け寄り、蜂に攻撃。二段突きで一気に勝負を決め、ここは事無きを得る。それからしばらく、麻痺が去るのをじっと待つ二人。

「……考えたら、毒受けたりしたら怖いよねえ」

「二人揃って麻痺するのも、充分怖いけどな。この部屋は、ちょっと慎重に行こう」

「そうだね、そうしよう」

フランスカでは、麻痺も毒も、ステータス異常はほとんど万能薬で回復する。細分化してしまうと、ポケットからの使用が面倒過ぎるのがその理由だろうけれど。

それ故に、ポケットに状態回復薬が無いと言うのは、麻痺や毒を使ってくる敵を相手にする時には、結構な重圧になったりするのだ。しかし在庫の品薄で値上がりした薬品を買うほど、現時点で二人のキヤラはお金を持っていない。

普段の店売りはそれ程高くないのだが、イベント時に高騰するのはどの薬も一緒。

2匹目と4匹目のお尻モンスターから、布のマントがドロップ。順調に防御力が上がって行くのは嬉しいが、この敵の謎は深まるばかり。やっぱりお尻なのだろうと言う弾美に、瑠璃は心臓か背中の肩甲骨なのではと推論を口にする。

蜂の麻痺毒に苦しめられつつ、何とか部屋の敵を一掃、次の部屋へ。

「おっ、初めての獣人だ」

「ゴブリンだ、気をつけないと！」

部屋の敵を発見した二人の言葉は、警戒レベルに合わせてやや緊張していた。ファンスカでも知性のある敵は厄介で、特に平気で魔法やスキル技を使ってくる獣人の類いは、低レベルでも強敵の部類に入るのだ。

ただし、彼らなりの文化を持っているせいか、ドロップも色々豊富なのが嬉しかったり。

一匹倒すごとに必ずHPを全快させる念の入れようで、部屋の獣人を駆逐して行くハズミンとルリルリ。それでも一度は魔法の詠唱を止め損なつて、ハズミンのHPが激減。炎の魔法に焼かれて二人で大慌ての一面も。

瑠璃は悲鳴を上げながら、水スキルの回復魔法を唱えに掛かる。戦闘中に回復魔法を飛ばすのは、実はこれが初めてである。これまでは、そこまで切羽詰った場面は訪れてなかったのだ。

弾美も超接近戦を仕掛けて、追撃を何とか阻止に成功。

「魔法は怖いっ！ おっ、ゴブリンが服を落としたな……これで端切れシリーズから卒業か？」

「怖いね〜、私も服欲しいけど……もうすぐボスの筈だから、ハズミちゃんが先かなあ？」

「防御力が3つも上がるしな、じゃあボス戦だけ借りておこうか」

オートマップの地図の完成度から、あと1部屋が精々と二人は見取ったのだが。案の定、次の部屋は今までと全く別の造りになっていた。精巧な石の細工の、どこか神殿を思わせる壁と石畳の間。しかし、見渡す限りでは敵の姿は無いのが逆に不気味かも。

気合いを入れ直して、最後の部屋に入る二人。

「仕掛け部屋かな、敵がないねえ？」



「……鏡と、足の位置を置く印があるな。瑠璃、導き出される答えは？」

「……ドツペルゲンガー？」

フランスカでは、結構有名な仕掛けである。当たり外れ式のトラップで、当たりだと扉が開いたり宝箱が湧いたりする。外れだと、作動させた本人のドツペルゲンガーが湧くという仕組みなのだ。

ちなみに、湧いたドツペルゲンガーは、他人から幾ら攻撃を受けようと反撃して来ない。自分を湧かせた本体をひたすら殴り、取り憑き殺すという厄介な存在なのだ。

つまりは、湧かせたキャラが常に的になると言う事で。

そんな訳で、ハズミンが印に乗っかり、ルリルリは少し離れた場所待機の運びに。一瞬の間の後、仕掛けが作動。鏡の割れる音と同時に、ドツペルゲンガーが出現した。

どうやら、否応無しにこいつと戦闘となる仕掛けのようだ。閻属性のオーラを発し、ハズミンと同じグラフィック姿のドツペルゲンガー。影のような容姿は仕様で、どの属性キャラが湧かしてもどの道閻属性の敵でもある

但し、装備は分身の方が良い物を装着している模様なのがずるい。

仕様の金縛り中に一撃を受けたハズミンが、怒涛の反撃を開始する。敵の攻撃も重く、武器の射程も攻撃間隔も一緒なので、回避が上手く取れないのがネック。

かなりの熱戦が繰り広げられたが、二人パーティの底力、瑠璃の回復が勝負の明暗を分けた。勝ちを決めた瞬間、弾美と瑠璃はハイタッチ。ドロップ品には、初期武器よりは上等の片手剣や闇の術書など、良い物がちらほら。

これには興奮の歓声も上がるうと言うモノ。

「むっ、俺のキャラの分身だから片手剣落としたのかな？」  
「そうかも〜……あっ、ハズミちゃん！ 鏡の割れたところ、通路になってるよ」

ぼつかりと空いた鏡の後ろの空間に、確かに薄暗い通路が見て取れる。二人がいそいそと入って行くと、すぐに行き止まりになっていて、正面の壁に小さなレバーが一つ。

弾美はそのレバーにカーソルを合わせ、選択ボタンをゆっくりと押す。瞬間、短いイベントCGが挿入されて、どこかの扉の門が一つ取り外された映像が流れる。

映像が終わった後、二人のキャラは元の中立エリアに戻されていた。

「一面クリアか〜、掛かった時間は40分くらいだな」

「うん〜、もうすぐ8時だね。……ちよっとサンドイッチ食べる」

緊張が解けたら、思い出したようにお腹が空いてきた。瑠璃は朝食を取りながら、ちよっとお行儀悪く、コントローラーをいじって自分のキャラの装備チェック。

弾美も追加のハムサンドを食べながら、ルリルリにトレードを申し込んできた。さっきの部屋で取得した皮の服や指輪を、どうやらこちらに融通してくれるようだ。

ルリルリは有り難く受け取って、いそいそと着替えタイム。何しる操作の下手な点は、装備でカバーしないとやられてしまう。一部屋クリアしたただけなのに、結構装備が充実して来た気が。

レベル1からの育て直しは、考えてみれば新鮮かも？

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：08

取得スキル : 細剣11《二段突き》 : 水14《ヒール》

装備

：武器 粗末なレイピア 攻撃力+5 《耐久8/10》

：耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

：胴 皮の服 防+6

：腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

：指輪1 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

：指輪2 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

：背 皮のマント 防+2

：両脚 皮のズボン 防+4

：両足 ゴレムのブーツ MP+3、防+2

ポケット(最大3) 　：中ポジション 　：小ポジション 　：小ポ

ーション

NMドロップの指輪を弾美に融通して貰ったお陰で、ヒールの回復量アップが期待出来そう。前衛に必要な防御力も、先ほどのエリアでの取得で、ちよつとはましになった気がする。

後は、メイン世界では割とポピュラーな、MP+の装備が、もうちよつと欲しいと思う瑠璃なのだけれども。まだまだステージは序盤、この先に期待だとはやる心を抑えてみたり。

今日の攻略も、あと1時間以上残っている。

「ハズミちゃん、ちよつと装備見せて」

「ん……今、着替え終わった」

ハズミンも、今の休憩時間で入手した武器などを装備し直していたらしい。瑠璃に見せるため装備ウィンドウを開いて見せた後、紙

パックの牛乳を口に運ぶ。

バスケット部員だけに、弾美が自分の身長を常に気に掛けているのを瑠璃は知っている。いつか訊ねてみたところ、牛乳は一日に1リットルは必ず飲むらしい。

弾美の成長期は、キャラも含めてまだまだ伸びしろ充分の様子。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：08

取得スキル : 片手剣16《攻撃力アップ1》

装備 : 武器 シミター 攻撃力+10《耐久12/12》

: 耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

: 胴 端切れの服 防+3

: 腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

: 指輪1 皮の指輪 防+2

: 指輪2 皮の指輪 防+2

: 背 皮のマント 防+2

: 両脚 なめしズボン 攻撃力+1、防+5

: 両足 皮のブーツ 防+3

ポケット(最大3) : 小ポジション : 小ポジション : 小ポ  
ーション

指輪やブーツで防御力は格段に上がったが、やはり瑠璃に較べて勝るのは攻撃力の高さであろう。前衛への慣れもあるが、殲滅スピードなど瑠璃は全く敵わない。

弾美は食べ終わったサンドイッチのビニール袋を片付けると、次のエリアに続く階段へとキャラ移動。瑠璃も慌てて口の中のパン切れを嚥下し、ルリルリを従わせる。

慌ててる瑠璃を見て、弾美はのんびりと声を掛けた。

「待っててやるから食べ切れよ。次はどんなエリアかな？」

結果を言ってしまうと、最初に入ったエリアと全く同じ構造、全く同じ敵配置だった。弾美はこの手抜きにブー垂れながら、新しく入手した片手剣でどんどん敵を駆逐して行く。

武器の攻撃力が上がったせいか、攻略速度が最初に入った隣の部屋とは格段に違う。瑠璃は必死に後についていて、弾美の殴る敵に標準をあわせ、何発か攻撃を入れるのがやっと。

楽は楽だが、達成感はちよつと物足りない。

防具のドロップも、最初の部屋と同じくらいで1〜2個がせいぜい。ボス部屋に辿り着くまでに、弾美も何とか皮の服を入手に成功する。これで弾美も、初期装備を脱する事が出来てご満悦。

レベルもエリアの最初で9に上がり、もう少して10が見えて来た。

「レベル10で種族スキル覚えるんだっけ？ ボス倒す前に覚えておく？」

「そうだな、今インして30分くらいだから……後30分、雑魚倒して回りながらNM湧くかチェックしてみよう。ちなみに、次にボス部屋の仕掛け作動させるの、瑠璃だからな？」

「……が、頑張る」

あんまり美味しくない敵も、それなりの数を倒せば経験値は入って来る。二人はそれぞれ部屋に散らばり、再ポップした雑魚をサクサクと狩って行く作戦を実行。

2部屋目のエリアインから1時間が経過、予定通りレベルは上がったがNMの影は未だ無し。瑠璃はボス戦を前に、ちよつと怯えた声で時間縛りを口にする。

瑠璃はどちらかと言えば、心配性の部類らしい。

「2時間経過したら、毒状態になっちゃうよ？ そんな状態でボス戦は嫌だなあ」

「むっつ、確かにそうだな。種族スキルも覚えたし、そろそろ行くか？」

覚えたスキルは、闇属性のハズミンが《敵感知》 範囲内の敵を簡易リーダーマップに捉えて、敵の接近や不意打ちを察知する事が可能になるスキルだ。

水属性のルリルリは《魔法回復量UP + 10%》 そのものずばり、回復効果が上昇する効果で、回復魔法の得意な水属性らしい初期スキルである。

オマケ的な感じに捉えられがちな種族スキルだが、あると無いとではやっぱり違う。

種族スキルは、補正スキルみたいにセットしなくても効果が発動するのが特徴なのだ。レベルが10上がることに取得し、大体はその種族属性に見合った物を覚えていく。

スキルを振り込んで覚えなくて良い上に、冒険や戦闘に便利なスキルも豊富に存在する。逆に属性スキルみたいに、スキルを振り込めば誰でも取得できる物ではない。その種族特有のオリジナル特性なので、欲しいスキルがあっても種族が違っていると取得は不可能なのだ。だから最初の種族選択は、重要だしみんな悩む事になるのだ。

「か、回復量増えたから、ハズミちゃんがボス湧かせてもいいよ？」  
「そっちも武器必要だろっ？ びびってないで、さっさと向かえ！」

ところが、待ち望んでいたNMはボスエリアの手前の部屋に湧いていた。しかも、手強い獣人タイプで、二人を感知するといきなり攻撃魔法を使ってくる始末。

気持ちの準備もなしに、とにかく距離を詰めて特攻を掛ける弾美。魔法はこのゲーム必中なのだが、詠唱時に潰す事は可能なのだ。強いイメージの魔法のバランスを、そうする事で取っているのだろう。逆にプレイヤーに魔法使いがいる時は、仲間は必死に壁になって敵の接近を防がねばならない。後衛職は何より防御力が無いし、詠唱中断は味方にとっても致命的なのだ。

咄嗟の弾美の特攻と、瑠璃の後方支援の甲斐あって。何とか勝ち出したのだが、思いつきりHPもMPも削られた。瑠璃は過ぎる時間にじりじりしながらも、戦闘後のヒーリング終了を待つ。

ボス戦にすっかり気を向けていた瑠璃は、あまりな演出におカムリ。

「何か酷いつ！ これって、嫌がらせの時間稼ぎ？」

「大丈夫、まだ時間はあるから焦るなつて、瑠璃」

休憩を終えていざボス部屋に入ってみると、今度は焦りよりも緊張感が湧いてきた。自分のドッペルゲンガーは、自分しか殴って来ない。心強い相方は、タゲを取る事が出来ないのだ。

何も出来ないまま、倒されてしまったらどうしよう……。

「心配するな、殴られている間に削り切つてやるから。自己回復しつかりな！」

「う、うん……お願いね、ハズミちゃん！」

迷う心にようやく踏ん切りをつけ、ルリルリは鏡の装置を作動させる。出て来たドッペルゲンガーは、予想通りの水の属性キャラ。

切れの良さげな細剣を装備していて、シャープな動きでこちらに近付いて来る。

もの凄く強そうに見えた気がするが、瑠璃の記憶はあまりはつきりしない。自分のHPゲージばかり気にして、あやふやな思考のままに戦闘していた気がする。

たまに敵のHPゲージが目に入るのだが、ずるい事に敵も回復魔法を使っているらしい。隣の席の弾美の荒い非難の音が、やけに瑠璃の心に響いた。

こちらは二人掛かりなので、あまり文句も言えないが。

弾美の声が敵を倒した雄叫びに変わった瞬間、瑠璃は思わず身体を硬直させて、自分の分身キャラのHPを確認する。何とか生きている事実には、瑠璃も思わず叫んでいた。

今日一番の、熱のこもったハイタッチが幼馴染同士で交わされる。自分のキャラにも劣いの視線を送りつつ、これでこのエリアにも用事は無くなった事を確認して。

妖精の警告が発される前に、仕掛けのレバーを操作して脱出。

「時間も丁度いい感じかな、今日はここまでだなあ」

「っ、疲れたあ……」

2時間ちよつとのプレイに、思わず脱力感を覚える瑠璃。気合いが入り過ぎたと自己反省しつつ、身体の凝りをほぐしてみたり。弾美の方も、隣で同じく伸びをしているのが伺える。

何にしろ、二人での合同パーティは順調な滑り出しのよう。

時計を見たら、まだ朝の9時過ぎ　連休は、まだ始まったばかり。

\* \* \*



穫。

追記

ちなみに、今日の2部屋目のエリアのNMとボスの収

木綿のローブ MP + 3、光スキル + 1、防 + 4

ブロンズレイピア 攻撃力 + 8 《耐久 11 / 11》

後は水の術書とか、エーテルとか中ポーションとか。術書のお蔭でルリルリの水スキルは、順調に育って行きそうな模様ではあるのだが。

前衛操作に関しては……及第点はまだまだ遠いかも？

### 3・5 ゲームに関わる者の休日の過ごし方（前書き）

このスペース、別に埋めないといけないって事はないんですが…  
…何となく近況や苦労話を書きたくなるのは何故でしょう（笑）？  
特に愚痴やトホホな話などには、多くの人に耳を傾けて欲しく（  
笑）。

愚痴と言うほどでも無いんですが、最近ゲームに費やす時間も  
取れない感じで。せっかくオンラインで仲良くなった友達とも、す  
っかり距離が開いてしまつて……。

そこらへんの経緯も、そのうちに書いていきますけど。ぶっちゃ  
けて言えば、全ては忙し過ぎる職場が悪い（笑）。

せめて、週に2日は休みが欲しいです……。

さて、今後の掲載スピードですけど。だいたい週に2回程度のペ  
ースは守って行きたいかなと。チラッと見てみたら、3分の2は既  
に古い方のタイトルで閲覧可能みたいです。

最終話まで10話ちよつと。未公開のお話の掲載まで、しばしお  
待ちを^^^

### 3・5 ゲームに関わる者の休日の過ごし方

「でね、静ちゃんと茜ちゃんの発表会は中学生の部だから連休中にはさせて貰えなくて、もつと後なんだって。その代わり、大人の発表会があるから、それを聴きに行くって」

「んじゃ、明日はオフ会無理だな。やるとしたら6日の最終日かなあ？」

時間は休日の朝の10時過ぎ、小さい折りたたみ机を挟んで座っている二人。弾美と瑠璃は時折談話を交えながらも、一応真面目に勉強会を開いていた。

クラスは違うが同じ中学校、連休中の課題がちょびつとずつあるのだ。後顧の憂いを無くすために、早い内に片付けておこうと言う瑠璃の提案だ。弾美にしても、否は無い。

弾美は教科書の英訳を延々と、瑠璃は数学か何だかの問題集をやっつけている。

「ピアノとか弾けたらいいよねえ？ ハズミちゃん、今度一緒に習いに行こうか？」

「やだよ、あいつら一日2時間とか平気で練習してんだろ？」

正確には、発表会前はそのくらい以上は、余裕でするらしいのだが。静香と茜は普段から練習熱心らしく、ピアノ教室をズル休みしたという話は全く聞かない。

弾美は前もって進に念を押されていた、オフ会の日程を瑠璃に相談していたのだが。瑠璃は彼女達のスケジュールを思い出しつつ、思い切り脱線した話題を振って来る。

習い事など、ゲームの時間がなくなるだけだと弾美は渋い顔。

「イベントの賞品が音楽ホールの貸切とかだったら、私は絶対静ちゃんとか茜ちゃんにコンサート開いて貰うけどなあ。二人とも凄く上手だし！」

「どんな賞品だ、それは？。俺はまた商品券とか図書券で、充分嬉しいけどなあ」

「あ、私もそうだなあ……そうだ、後で本屋に寄ろうよハズミちゃん」

本の虫の瑠璃は、図書館で3冊も本を借りているにも拘らず、平気でこんな事を口にする。実際学校の得意科目は数学などの理系なのだが、好きな科目は国語などの文系なのだ。

文学部に所属してから、週に平均4冊は本を読む。自他共に認める、立派な活字病である。そんな系統の好みから、オールラウンダーの才女が誕生したらしい。瑠璃の学校の成績は、母親が自慢するまでもなく、とても優秀である。

全国模試でも、一度凄い点を取った事もあるのだ。

\*

\*

外はようやく気温が上がり始め、開け放した窓からの風の通過が心地良い。連休初日の天気は上々の様子で、外に遊びに出るには本当にもってこいだ。

ケーブル通信の気象情報によると、連休中は大きく天気は崩れないとの事。各家庭に必ずある、パネル式の簡易伝達情報末端システムは、慣れた者には超便利。こういう日常の瑣末事から、いざと言う時の災害時まで、利用者に迅速な情報を提供してくれるのだ。

ここら辺は、モデル都市ならではのシステムだ。

作動した事はないが、防犯システムもケーブル通信で制御されているらしい。これも最先端モデル都市の試験導入、各家庭に使用さ

れており、一旦不法侵入者を感知すると、平均5分で警備会社から警備員が駆けつけるらしい。

保安も万全な大井蒼空町。犯罪発生率もかなり低いとの統計もあるらしい。

「お昼どうする、ハズミちゃん？　ウチに材料あるから、私作ろうか？」

11時を過ぎた頃、瑠璃が何気なく話題を振る。母親から連休中の特別お小遣いを貰ってはいたのだが、外で食事するよりも本を買ったほうが特だと瑠璃は考えるタイプ。

ちなみに、弾美の所有するコミックや雑誌類も、瑠璃は全て読み漁っている。さらに自分が面白いと思っただ本があったら、わざわざ弾美の部屋に置いて帰る手の懲りよう。

そして、そうやって強引に貸した本は、感想を聞くのを絶対に忘れない。弾美の読書癖は、実は瑠璃によって形成されたとも言える。まあ、当たりの本を探すのは大変だし、それを勝手にしてくれる存在がいるのは、本当は有り難い事なのだろうけど。

お蔭で弾美の国語の成績も、平均以上をキープ出来ている。

「あ、母ちゃんが瑠璃と昼飯でも食えって、小遣いを台所に置いてつたらしい。折角だし連休の初日くらいは、外食にしようか」

「私も特別お小遣い貰ってるから、折半でいいよ？」

「朝飯代払うの面倒だから、今度は俺が昼飯奢るでいいだろ？」

結局は、弾美の意見が通ってそういう事になった。お昼までは勉強したり本を読んだり、休憩にちよつとファンスカのメイン世界にインして進達と情報交換したり。

連休の初日で学校の課題を全て終わらせてしまった弾美は、ちよつと得した気分である。瑠璃が隣にいと、何故だか勉強の進度は

容赦ないハイペースになるのだ。

理由は定かではないが、子供の頃からの刷り込みではないかと弾美は推測する。

その後、弾美はテーブルの上でお小遣いの一万円札を発見し、有頂天になってみたり。これだけ軍資金があれば、連休中は思いつ切り楽しく過ごせるであろう。

進達とのオフ会が少々ハードになっても、これだけあれば恐らく平気。

「マロンとコロンを連れて行くか？ 食べれる場所決まっちゃうけど」

「ん〜……アーケード通りなら、ペットショップ近いから、あの子達預けられるかな？」

「そうだな、一度戻るのも面倒だし、そうするか」

そんな訳で、二人は取り立てて着替えもせずに、お昼過ぎには兄弟犬を従えてアーケード通りへと歩き出した。すっかり家に鍵をかけ、カバンや財布も忘れずに。

住宅街の人影は、いつもよりは確かに多かった。休みを取れた家の主が、愛車の掃除をしていたり、庭で寛いでいる姿もぼつぼつと見える。窓際に布団を干している家も結構多い。

平均的な休みの風景の中、二人と二匹は歩を進めて行く。

二匹の大型犬は、行くべき場所が分るのか、一度も道を間違わずに駅前を通りへの道を選択する。いつもの散歩道とは真逆なのに、なかなか侮れない能力である。

小学校の頃は、容赦なく遊びに連れ歩いたものだ。友達の家に行く時も、連れて行って庭で放置しておく。外で遊ぶ時は、鎖を外して一緒に駆け回る。そこまで元気になれない瑠璃が一緒だと、彼女

が犬の世話係に回る。

そんな接し方から、生まれた能力かも知れない。

大井蒼空町の駅前広場は、平均より広く小綺麗な造りに設計されている。何しろ、人待ちやバスの乗り継ぎなどで、街の施設でも利用頻度の高い場所である。半分はレンガ造りの洋風な駅の建物は、似たような構えのビル群を脇に従えるように建っている。

その駅の向かって右にアーケード通りへの入り口が存在し、その入り口の通りの外れの一面に、オーブンカフェの洋食屋さんが存在する。弾美達が犬を連れての散歩の途中でも、一緒に休める事が出来る、ここら辺りで唯一のお店だ。

ペットショップと獣医さんにも近いところがミソ。寄った帰りにお茶したり出来るのだ。

幸い、通りに面したテーブルが空いていたので、二人は迷わず自分の席を確保する。マロンとコロンも、白い丸テーブルの下に、勝手にのそりと陣取って行く。

小学生の頃、学校が終わった後など散々連れ回ったせいから、二匹は騒いで良い場所と駄目な場所を的確に感知出来るようになっていた。例えば人の視線が多い場所でも、二匹は動じる事無くおとなしく待機モードに移行出来る。

賢さとは、様々な経験の中から培うものだと、瑠璃は二匹を見て思ってしまった。しかし今は、そんな事よりオーダーが先。お腹がきゅーきゅー鳴いていて、早く空腹を満たせとせつついている。

「ん〜、朝にサンドイッチ食べたから、スパゲティ食べたいなあ。でも、パスタは犬達に分けてあげられないしなあ……」

「俺がチキンバケット頼むから、瑠璃は好きな頼めよ」

自分が奢ると言った手前、瑠璃には好きにオーダーする権利があ

る。弾美はそう言つてオーダーを通し終えた後、寛いだ感じで何気なく周りの景色を観察しに掛かった。

知り合いの顔は見つけられないが、学校の体育系の遠征なのか、揃いのジャージ姿の一団が少し離れたテーブルで食事している。恐らく高校生だろうか、地元の学生とは違うデザインだ。

朝に散々身体を動かしたと言つのに、弾美はちよつとつづつづ。

「あゝ、そう言えば連休始まつたんだねえ。どうりで賑やかだと思つた！」

「どっかの運動部が遠征に来てるな。他の街の人から見たら、この街どう見えるのかな？」

恐らく変わった街に見えるであろうと、二人は思う。街の基礎設計段階から、色んな分野の専門家が意見を出し合い、採算度外視のテストケースで創られた街、それが大井蒼空町なのだ。

住民も、初期に入居する家族は厳しく選ばれた者達だったらしく、今もその名残りは存在する。知能の高い子供達の数が潜在的に多く、街ぐるみでそれを伸ばすような教育方針が義務教育の時点から見え隠れしている。

傍目には、楽しく自由に授業をしているようにしか見えないのだが。

ランチが運ばれて来て、二人はさつそく空腹を満たし始める事に。途中、給仕さんの目を盗んで、素早く鳥の肉片がテーブルの下の二匹の口の中に消えていく。見つかったら怒られるので、弾美もちよつと必死だ。

瑠璃も何食わぬ顔で、食事を続ける。

食後の飲み物を口にする頃には、遠征軍らしき高校生の一団は席を立っていた。二人の隣を通る時「この街でしかプレイ出来ない才



ンラインゲーム』の話題が、彼らの口にのぼっていた。  
ファンスカは、他地区の学生にとっても余程好奇心をくすぐる異世界らしい。

「……ファンスカの話、してたねえ？」

「知名度高くてビックリだな！　そう言えば、ゲーセンにキャラグ  
ツズ置いてるの知ってた？」

「えっ、そうなの？　それっていつの間に！」

「よく知らないけど、弘一がつい最近見つけたって。クレインゲ  
ムの景品らしい」

その話を聞いた瑠璃は、驚き顔で弾美を見遣る。どうやら初耳らしいが、ゲームセンターになど滅多に立ち寄らない瑠璃なら、知らなくて当然かも知れない。

弾美もクレインゲームやぬいぐるみにあまり興味が無いので、そ  
ち系にお金を使った事はほとんど無い。仲間との付き合いで、ゲ  
ーセンに寄った時にちよつと嗜む程度である。

ギルドメンバーで一番よくゲーセンに通うのは、やはり帰宅部の  
C組ペア、晃と弘一の二人であろう。その割には、ゲーム全般を通  
して得意なジャンルが無いと、仲間内では言われているが。

好きと上手は、一致しない良い例かも知れない。

「……後でちよつと、寄つて見ていい？」

「おっつ……んじゃ、出ようか」

そのお店でお勘定を済ませると、二人はちよつと離れたビル群に  
向かう。アーケード沿いではなく、その通りに90度交差する感じ  
の、駅前通りと呼ばれるメイン通りである。人通りも割と多く、当  
然だが駅を利用する人の7割近くが、この通りを利用する。

駅の反対側は、住宅街やビル街は全く無い。ほとんどが倉庫街だ

ったり、途端に田舎の風景になったりである。アーケード通りを通勤や通学に利用する人も、殆どいない。

つまりは、集客立地条件の良い通りと言う事だ。

駅から数分離れた場所に、二人の目的地のペットショップ『マリモ』がある。結構広い店舗で、ペットショップの癖に動物の数がやけに少ないという変わったお店だ。

子犬や子猫の展示はほんの数える程、鳥や爬虫類の数もそこそこ。殺風景に感じる反面、動物の入ったゲージが山積みになって、商品扱いの雰囲気はお店のどこにも無い。

それがある意味、このお店の売りである。

その代わりに、熱帯魚を始めとする水槽の数はやたらと多かったりする。それから、ペットフードや各種ペット用品の置き場も、そこそこスペースを取ってある。

一番多く場所を取っているのは、犬や猫との『ふれあい広場』で、15畳近くはゆうにある。専属の癒し系ペットは何匹か存在するのだが、お客が展示されている以外の子犬や子猫を買おうと思ったら、このお店ではまずモニターで欲しい種類を確認しないといけない。

ペットは生物、店頭に置くと人件費や食費、売れ残りのリスクなどを背負う事になる。衛生面や体調にも気を遣わなければならないし、鳴き声だつてもちろんする。

そんなマイナス面を省いて、モニターディスプレイで表示するのがマリモ方式である。

5面あるモニターは、ひっきりなしに子犬や子猫の可愛い映像を写している。お客さんが気になる種類がいたら、パネル操作でその犬なり猫なりの特徴や性格を呼び出して調べる事も可能である。即日持ち帰りは出来ないどころか、場合によっては数ヶ月待ちになる場合もある。直接、信頼のおけるブリーダーさんのところに出

向いて、子供を選んでもらう場合もある。

ここまで来ると住居探し並みの苦労だが、昨今のペット飽和事情を考慮する姿勢は、概ね町民に理解を得ている。

おまけにマリモの店長さんは、隣のビルで獣医をしている姉の影響もあるのか、簡単なペットの健康診断までしてくれる。弾美いわく「人当たりが良く、傍目にはまともな人」である。

ふれあい広場の癒し効果も相まって、客足は平日でも割と多い。それでも営業中に、店内のモニターを利用してオンラインゲームにインする店長は、ある意味立派だと言える。

もちろん、嫌な方向にはあるのだが。

「こんにちは〜っ、店長！ ちょっと買い物してくるから、その間犬達を預かってて！」

マリモの店に着くや否や、弾美は元気に挨拶してマロンとコロンを連れて店内に入る。大柄な店長は一瞬ぱつと顔を明るくさせたが、再び二人が店を出ていく姿を見て思わず文句を口にする。

その落胆具合は、オヤツ抜きを宣言された子供のよう。

「そんなっ、休みの日はお店忙しいんだよっ！ 手伝ってくれてもいいでしょっ!?!」

「1時間したら戻ってくるよ〜」

「ごめんなさい、本屋に寄る間この子達を預かって下さい」

軽く手を振って、弾美はそ知らぬ顔。瑠璃はちよつと可哀想に思ったが、考えてみたらこの店に正規に雇われている訳でもない。ちよつと春休みに、店内のディスプレイ変更や配達の手伝いをした程度である。

いつもお店で二匹の餌を買ってるのとフランスカでの縁で、親し

くはしているのだが。

「話って、やっぱりお店手伝ってって事みたいだね」

「本当に忙しそうだったしな……たまには働く気が出ていいんじゃないか？」

「それもそうか」

お店を出た後の会話でも、同情の余地は無いと軽く流されしまった店長。二人はアーケード通りにある本屋へと向かいつつ、いつもより多目の人の流れにちよつと戸惑う。

どうやら世間も、連休真っ只中のようなのである。

ようやく辿り着いた本屋では別行動、弾美はコミックコーナーや若者向けライトノベルを中心に回る。瑠璃の方は、真面目な本の置いてあるコーナーや文学小説が中心。ハードカバーの新刊にも目を通すが、値段を知っているので購入には至らない。

瑠璃の方は、とにかく目が真剣。あらゆるジャンルからバランス良く購入しないと駄目だという、よく分からない使命感がメラメラと湧き起こっている様子。まるで栄養士が食材を選ぶ時のような感情だが、瑠璃の脳内思考はそれに関して、一片の疑う余地すら見出せていない。

本能すら全肯定、これが正しい本の選び方だ、と。

先にお気に入りの新刊コミックを購入し終えて、焦れ始めたのはやはり弾美だった。店内を見渡して瑠璃を発見するが、その手の中に既に4冊も本があるのを確認し、会計を急かす。

最近の本も高いし、幼馴染みの懐を心配しての行動なのだけども。

「ちよつと待って……もうちよつと見たい」

「お前、何冊買う気だっ！」

「あ、あと1冊買わないとバランスが……」

結局瑠璃は、5冊目の小説を10分掛けて選ぶと、そそくさとレジへと急ぐ。弾美と本屋に行くと、大抵はこんな感じになってしまうのだ。今日に限っては、貰ったお小遣いが多かったせいで、いつもより時間を掛け過ぎてしまった様子。

離れた場所で怖い顔をしている弾美を見て、瑠璃はちょっと反省。

本屋の斜め前に、ゲームセンターが建っているせいなのか、この辺りは若い人の集団が多い気がする。ちょっとだけ覗いて見ようと言う事で、二人はその店内へ。

瑠璃はゲームセンターなど、数える程しか入った事が無い。興味津々で店内を見回すが、結構混んでいてゲームの奏でる騒音と人の喧騒がとてもうるさい。

人混みを避けつつ彷徨っていると、ファンタジースカイの宣伝ポスターが店内に貼ってあるのを発見。弾美がその前で立ち止まったので、瑠璃もつられてそのポスターを注視する。

かなり大き目の、最近貼られた物らしい。

というのも、それは期間限定イベントの宣伝ポスターだったのだ。敵役の魔女と冒険者達が対峙している美麗なイラストで、瑠璃もちよつと欲しくなる。背景には大きな樹が描かれており、小さな妖精が飛び回っている。

ポスターの一番下に、実施期間や参加条件など、イベント条件の細々した事が要約して書かれてあった。但し、賞品のところは曖昧で、10位から7位までしか発表されていない。

その辺りはオリジナルグッズや音楽CD商品券など、当たり障りの無い賞品になっている。

「弘一の言つてた限定イベントのポスターって、これの事か。過去最大級のオリジナル大規模広大ステージと、豪華賞品だつてさ！」

「でも、7位から10位までしか書かれてないねえ？」

「それに対応して、販促グッズも充実つて……クレーンゲームの事かな？」

「ハズミちゃん、取るの得意……？」

「やった事がほとんど無いからなあ……欲しいのか？」

二人は問題のクレーンゲームの場所まで移動。大きな透明ケースの中に入っている様々な景品を、時間を掛けてまじまじと品定めする。元々3Dデフォルメされたキャラクター群達なので、ぬいぐるみになって可愛らしさは減じるどころか大幅アップした感がある。

クレーンゲームは結構人気があるようで、高校生らしき10代の若者の列が順番待ちの状態。瑠璃は自分の使用している水属性キャラを探すが、残念ながら見当たらない。

代わりに、メイン世界で有名なモンスターを発見した。

「ハズミちゃん……ヘソクリにゃんこがいる！」

「ああ、いるな……あれにも招福効果があるのかなあ？」

「ちよつと欲しいかも……」

しばらく二人で見えていたが、順番待ちの列は増えこそすれ、なかなか減らず。その間ずっと、ヘソクリにゃんこはチャレンジャーの挑戦をことごとく跳ね返していた。

焦れる弾美の横で、瑠璃は何となくホツとしていたり。

「ああっ、爪掛かったのに……アーム緩いのか？」

「あゝ、もうゆづに1時間過ぎてるよ……ハズミちゃん、そろそろ出よう」

店長の存在を思い出し、弾美も渋々諦める事に。とは言っても、今回は順番待ちに並んでさえいないのだが。ゲームセンターを出ると、大きな音に順応した耳が暫くは変な調子。

こんな場所に足しげく通う人達の気持ちだが、弾美にも瑠璃にも良く分からない。

時間はようやく3時を過ぎた程度で、遊ぼうと思えば中学生でもまだまだ宵の口の時間帯。けれどまあ、約束は約束だと二人はペットシヨップ・マリモへと舞い戻る事に。

店に入ると、歓迎してくれたのはもちろん兄弟犬の二匹。それに負けず劣らず、店長も熱弁を振るい始める。マロンとコロンは、ふれあい広場に入れられていたのかと思いきや、店内を自由に闊歩していた。

ふれあいが売りとは言え、客もさぞかし驚いたであろう。

「バイトの子が、二人も同時に連休休み取っちゃってさあ！ シフトがどうにも回らなくなって困ってるんだよ。二人は連休暇らしいから、良かったら手伝ってくれないかなあ。いや、暇な時に商品補充とか配達とかしてくれるだけでもいいんだよ。バイト料はずむからお願い！」

「……………えっと」

話の内容は予想通りだったのだが、普段は穏便な店長のマシンガントークに、二人はやや怯み気味。カウンターの中の店長はどこか切羽詰った様子で、さながら天敵に怯えるシマリスのよう。

弾美は店内をそれとなくチラ見。お客の姿はちらほら見えるが、確かに店員の姿は全く見えない。どうやら朝から、本当に店長一人での操業らしい。

店長がキレ掛けているのも、何となく理解出来る。

「ひよつとして、朝から一人なの、店長？」

「そうだよつ！ 夕方から潮崎君が来てくれるんだけど、それまでは僕一人だよ。お昼とか、隣の姉さんの所のスタッフさんに来て貰ったり、大変だったんだから！」

まるで大変なのは自分達のせいみたいな言い方だったが、一応心遣いは察してあげるべきであろう。二人は目と目で相談して、不定期バイト員として店の手伝いをする事を了承。

店長の喜びようは、獲物を捕獲したサバンナライオンの如し。

「エプロンどこだっけ？ タイムカード打たなくてもいいよね店長。潮崎さん何時に来るの？ 商品補充からすればいいかな、バックヤードどうなってる？」

「エプロンあったよ、ハズミちゃん。マロンとコロンはどうするの、広場に入れておいた方が良くないかな？ 店長がバックに入るなら、私レジやるけど？ 店長さん、商品発注までした方がいいかな？」

やると決まったら、途端にできばきと働き始める弾美と瑠璃。1ヶ月前の春休みには、結構仕事を任せて貰っていたので、ある程度の勝手は分っているのだ。

マロンとコロンは、商品補充作業に邪魔なので、ふれあい広場に収容の運びに。小型犬の可愛さに和んでいた利用者に、思い切りびらかれていたりして。

それでも、子供達には意外に好印象なのか、途端に数人の子供が集って来ていた。

弾美と瑠璃はバックヤードから手を付ける事にしたのだが、いきなり昼に届いた荷物が手付かず放置されているのを発見。その量にちよつとやる気を削がれそうに。

瑠璃は商品管理のパソコンシステムを立ち上げて、バックにも店



の商品棚にも在庫の無い補充商品を告げて行く。バックに古い在庫があつたら、そちらから先に出すのが常識。

商品補充は、出来るだけ迅速にしないと駄目である。このお店のメインの売り上げはペットの餌などの消耗品なので、品切れで購買チャンスを損なうのはよろしくないのだ。

二人掛かりでできばきと、陳列棚に減ったアイテムをどんどん補充して行く。いつしか無心で作業している弾美の脳裏に、何故こんな状況になっているのか疑問符が。

楽しい連休は、どこへ行つた？

それでもある程度片がついたら、流れに従つて弾美はバックの整頓に引つ込む。在庫の整頓は、分り易いように機械管理に対応させないと忘れ去られてしまうから要注意。商品も、犬のペットフード袋だと5キロとか平気であつて、結構力仕事なのだ。

もっとも、その重さのせいで配達の利用が上がっているとも言えるのだけれど。ペットフードの簡易配達サービスは、マリモの重要なサービスの一環だったりする。

弾美も春休みは、ほぼ毎日外回りをしていた。

「表の商品棚の補充、だいたい終わったよ。発注にパソコン使うから、ハズミちゃんと表交代していい？」

「おうつ、こつちも終わった。管理装置の情報、パソコンに入れておいてくれ」

「わかった。あと、配達リストも出しておくれ？」

弾美が店内に戻ると、メインバイト店員の潮崎が店長の代わりにレジに立っていた。ひよろつとした容貌の青年で、確か地元の大学生だった筈。店内を見渡すと店長は接客に追われており、それなりに忙しそう。

弾美はレジの若者に軽く手を振って、悲鳴の上がつているふれあい広場をチェックに向かう。動物の粗相はいつもの事、現場を素早く清掃して消臭スプレーを振りまく。

幸い、お客の服には被害は無かった模様。たまにあるのだが、こうなるとジャージを用意したりと対応が途端に面倒になる。犬や猫のやる事に、それ程目くじらを立てる利用者がいないのが有り難い。マロンとコロロンが、ここは飽きたと言いたげに、弾美に付いて店内に出て来た。それを追って、子供達がきゃいきゃい言いながら追従して来る。この良く分からない、列車ごっこはナニ？

兄弟犬も弾美も、ちよつと迷惑そう。

「やあ、弾美君、ご苦労様。何時から入ってるの？」

「3時くらいかな、店長に泣きつかれちゃって」

「僕も店長に、朝10時から来てくれって言われたけど……さすがに丸1日シフトは無理。連休全部入ってるし、こつちも色々大学の用事があるからねえ」

「潮崎さんも被害者か……さては、犯人は村つちだな！」

村つちとは村重春奈むらむしげはるなと言う名前の、バイト店員の中で一番の古株のフリーター女性である。お金は稼いだら使ってナンボという思考の、キップの良い姉御肌の性格で、弾美や瑠璃も春休みのバイトの帰りによく奢って貰った。

フランスカモプレイしているので話も合ったのだが、今回は連休を満喫する気らしい。

「うん、連休を利用して友達と旅行に行くって……よりによって、隅田さんも一緒らしい」

「うわっ、バイト仲間も道連れかあ！ そりゃあ……店長も泣くな

あ

「泣くよねえ……」

バイトの店員が二人も旅行に行ってしまったら、それは大変だっただろう。隅田さんも女性のバイト店員で、村っちの紹介で入って来たものだから、そういう事態もあり得るだろう。

シフトに大穴が開くのも、当然の結果である。

雑談している内にレジが少し混んできたので、弾美はカウンターに入って包装を手伝う。その内接客が一区切りしたのか、店長もカウンターに戻って来た。

店長はブラジル系のハーフで、少しだけ浅黒い肌の、大柄な体躯の持ち主。ただ、顔付きは愛嬌があるというか、やや甘い性格が顔に出ていて、商売に不向きだと皆によくからかわれる。

ペットの知識もかなり豊富で、バイト店員との接し方も友達感覚で甘々である。そんな感じで良い人なのだが、仕事熱心でないのが玉に瑕だったり。

最近では、バイト店員の方が危機感を覚えて、逆に仕事熱心なほど。

「バック片付いたよ店長。今、瑠璃がパソコンで在庫整理してる」

「ああ、本当に助かるよ！これで残業せずに済んだ……！」

「配達あつたら、俺行くし。店長休憩に入っついていいよ」

「店長朝からですもんねえ……本当に休憩しないと持ちませんよ？」

二人の提言に、店長の顔はみるみるほころぶ。お言葉に甘えるよと言いつつ、外にコーヒープレイクにでも行くのかと思つたら。買置ききのコーヒーク缶を取り出しつつ、ネット接続を始める店長。

予備モニターを取り出して、当然のように弾美にサブコントローラーを勧める素振り。瞳を子供のようにキラキラ輝かせ、フランスカの期間限定イベントの話の二人に振って来る。

弾美はちよつとたじろぎながらも、隣の潮崎と目で会話。相手をしてあげてと言う、優しい大人のアイコンタクトが返って来たので、

バイトを頼まれながら何故ゲームの相手？ というアンビバレンツを体現しつつ。

店長の求めに応じで、マイキャラを呼び出すパスワードの打ち込み。

カウンターの隅とは言え、お客からは丸見えである。しかも大型犬二匹が弾美の傍に控えているので、悪目立ちする事この上ない。そんな細かい事は気にせず、店長は自分のキャラを起こしに掛かる。

仕方なく、それに追従する弾美。メイン世界のハズミンは、長槍とがっしりした鎧を着込んだ、凜々しい前衛アツカーである。店長のマリモの方は、いかにも堅そうな鎧と盾を着込んだ、小さいが愛嬌のあるブロッカー。

盾役のキャラは、上手に育てれば強敵相手に必須の存在になるのだ。

「弾美君は、ステージ2から瑠璃ちゃんとパーティ組んでるんだよね。調子はどうなの？」

「ん〜……1日混雑で出遅れちゃったし、瑠璃が前衛慣れしてないから前途多難かなあ？ 店長の方は、パーティを誰と組むとか決めてるの？」

「うん……一応イベント始まる前には、村重さんに誘われてたんだけど……」

「あ〜……」

その肝心の村っちは、店長を置き去りに旅行に出掛けてしまったようだ。って言うか、同じ職場でシフト回しているのに、二人ともインの時間が合うのだろうか？

弾美は疑問に思ったが、敢えて口にはせずに聞き流す事に。拗ねられても困るし、大人は夜遅いインでも平気なのだろう。自分や瑠

璃は、朝6時には起きてる事もあって、毎日10時を過ぎると眠くなるのが通例である。

その事実を知ってる者は、健康的だねと驚くのも通例。

「おっと、空いているかと思ったけど、メイン世界もそれなりに混んでるね」

「限定イベントエリアの攻略始まったって言っても、2時間縛りあるしなあ。追加されて馴染みの無い新エリアなら、空いてるんじゃないかな？」

「でも僕、そっち関係のトリガー持ってないなあ。NM湧き情報も、ろくに調べてないし」

「俺トリガー持つてるから、それ使おうか。二人でNMやつつけて、すっきりしよう、店長！」

店長の顔に、ふわっと幸せそうな笑みが広がる。街中ワープを駆使して、二人のキャラは途中で回復系の薬品を買い込みつつ移動。

10分後には目的地のポイントにトリガーがぶつ込み、ハズミンとマリモは巨大な亜竜型のモンスターと熱い戦闘を繰り広げていた。

かなりの巨体と膨大なHPを誇る、それなりの強敵だ。

「店長、キープしててっ！ ポケットの薬品入れ替えるっ！」

「弾美君、こいつひよっとして多部位モンスター！？ 僕、こんなのと戦ったこと無いよっ！」

「大丈夫、一気に範囲スキル技で追い込むから！」

スキル技攻撃可能状態に回復したハズミンは、モンスターと距離を置くと複合スキル技の《シャドースピア》を放つ。闇と土と両手槍の3種の複合スキル技の一撃は、地面からの複数の闇色の槍の棘で、モンスターのHP群をこっそりと削って行く。

多部位モンスターと言うのは、巨大なモンスターの一つの特徴で

もある。顔や胴や尻尾という部分別にHPゲージを持ち、それ故に超タフで攻撃も多彩な訳である。

フランス力内では、倒すのにとても時間が掛かるので有名だ。

「おおつ、すごいよ弾美君っ！ もう一発いつちやえっ！」

「ここからチャージ喰らわすから、店長防御お願い！」

離れた位置からしか作動しないスキル技《稲妻チャージ》が、モンスターの尻尾のHPを完全に削ぎ取る。これも雷と両手槍の複合技で、習得にはかなりの努力が必要な技だ。

その代わり、とても強くてNMにも通用するのは見ての通り。

やり過ぎてこちらにタゲが来た所を、店長の《マジックウォール》が割り込み遮断をする。一安心と思いきや、敵の熾烈な反撃が侮れない。手持ちのポジションはあつという間に減って行き、それと引き換えの殴り合いの末、敵の胴体のHPを0にするのに成功する。残りは頭部分のみ。敵の怒涛のプレス攻撃に耐え、マリモが終盤の必死のタゲキープ。

「後もうちょっと！ 弾美君、キープしておくからさっきのお願いっ！」

カウンター内の喧騒に、お客さんのギャラリもちらほらとモニターを注視していたり。大迫力のNM戦に、フランス力体験者のお客から声援が飛んで来る。

ハズミンが派手なスキル技で止めを刺した途端、ちよつとした拍手と歓声が周囲から巻き起こった。レジ前にいた筈の潮崎も、思わず観衆と一緒に拍手している。

もの凄く嬉しそうな、店長の表情が印象的である。

「…………なにやってるの？」  
「…………うっ！」

バックで作業を終え戻って来た瑠璃が、呆れた顔で二人を見ていた。手には配達リストと発注リストを持って、今は仕事中ですよのオーラを全面に漂わせて。

弾美は思わず我に返り、後ろめたさと言いつの渦が脳内を駆け巡る。何というか、とてもバツが悪い思いの中、同じ思いの筈の店長がそろりと瑠璃を振り返る。彼も、その本能で後ろからの氷点下の雰囲気を感じたのだろっけれども。

口を突いて出たのは、ある意味あっぱれな言葉だった。

「弾美君、ドロップ品…………どう分けようか？」

「…………ゲーマーだね、店長」

店長の評価は、日々こんな具合で更新されて行く　主にトホホな方向に。

\*

\*

今夜の津嶋家の夕御飯は、ちょっとしたご馳走だった。ゴールドンウィークにどこにも連れて行ってあげれない罪滅ぼしにと、両親が気を遣ったのがその理由。

上握り寿司の入ったお皿が、テーブルの中央にデンと置かれていた。後は生ハムのサラダや酢の物や、いつものお惣菜が彩りを変な方向に添えている。

結局は瑠璃の作った品も並んで、ややアンバランスなのは仕方が無い。

その代わりに、デザートにはケーキが買い置かれてあり、ポットに

はコーヒーが沸いている。家族の人数分より多い分は、明日お隣さんと食べなさいと言う事らしい。

弾美も瑠璃も、甘い物は結構好き。もっと言うなら、甘いものを食べて幸せな時間が好き。

夕食も滞りなく終わり、テーブルの片付けも済んでしまうと、母親の恭子さんがさっそくケーキをお皿に分けて行く。津嶋家の両親は、二人ともお酒を嗜む習慣がないので、記念日を作っては食後のデザートがテーブルに出現する事が実に良くある。

今日は良く分からないが、連休に休めなかった残念記念日らしい。恭子がそう宣言して、家族全員にコーヒーを注いで行く。良い匂いだと、父親が言葉を発する。

父親の目の前のお皿には、可愛らしい苺のショートケーキが。それを黙々と食しながら、恭子さんの会話に適当な相槌を打つ瑠璃の父親。割と厳しい顔付きの瑠璃の父親だが、家庭では威厳や存在感が極端に低下する。

母親の恭子さんが、インパクトの強い性格のせいかも知れない。

「あ、8時だ……インしなきゃ」

洗い物の手伝いをしながら、今日あった事を母親に話していた瑠璃は、弾美に言われていたオン会の約束を思い出す。今日は昼間に色々あったので、うっかり忘れそうになっていた。

面倒なので、いつものように一階の予備モニターを使う事に。メイン画面では父親が野球を見ている。母親が洗い物を終え、話の続きを聞きたがって瑠璃の横に陣取った。

ペットシヨップでの顛末が、余程面白かったようだ。

「店長さんは、基本寂しがり屋なのねえ。一緒にイベントを予定してた人が旅行に行っちゃったから、誰か身近な人に構って欲しかっ



たのよ、きつと」

「そうかなあ……？　でも、仕事放っぱり出してゲームするのはどうかと思う」

「それで、お人好しな瑠璃は、明日も店のお手伝いするの？」

「ん〜、ハズミちゃんが行くって言ってたし、明日も行くかなあ？

あ、明日一緒に押し花展行くの」

母親の恭子は、二人の仲の良さを知っているだけに、微笑ましいとは思いつつ。付き合い方が恋人のそれではなく、まるで兄妹みたいな態度なのにやきもきしていたり。

自分が焦れても仕方が無い事だが、瑠璃の色気の無さに少々いただけない思い。

「弾美ちゃんと出掛けるなら、ちょっとはお洒落しなさい。あなたももう年頃なんだから！」

「ん〜……でもお出掛けは近場だし、コロンが抱きついて汚すかも知れないし」

ああ、なんて色気の無い会話！　父親がリビングで耳をそばだてているのを無視して、恭子は女の手練手管を伝授し始める。瑠璃は不思議な顔をしつつも、母親の言葉を受け流して行く。

才女との噂の母親は、時々訳の分らない事を口走る癖があるのだ。

『遅いつ、みんなもうインしてるぞ！』

フランスカのメイン世界では、既に全員がインして瑠璃を待つていた様子。ギルド内の会話が盛んに飛び交い、盛況な雰囲気醸し出している。弾美が瑠璃のログインを察知し、ルリルリに文句を言った後、全員揃った事を告げる。

総勢10名、今日はサブメンバーも全員参加してのオン会らしい。

『ごめんなさい、お母さんが張り付いて何だかんだか言って邪魔するの』

『……恭子さん、隣にいるのか？』

『今はいない、お風呂沸かしに行った』

一瞬、弾美の安堵した顔が脳裏に浮かぶ。瑠璃の母親は、恐らく弾美をもの凄く気に入っているであろう。一旦捕まえたら平気で長話に持ち込んで、二人のスケジュールなどお構いなしである。そのため弾美は、少々瑠璃の母親を苦手としている。

瑠璃が父親を尊敬するのは、あの母と付き合う忍耐力の度量によるものが大きかったり。

久々の大人数でのオンライン会は、ギルマスの弾美の発言により統制を取り戻していた。架空の自室にいたり、別々の場所にいたメンバーが、集合場所を告げられ集まり始める。

普段はどちらかと言うと活発でお調子者の弾美だが、何故か同年代から厚い人望がある。集団をまとめたり揉め事を仲裁したりするのが、嫌味が無くとても上手いのだ。

小学生の頃は、6年を通して半分以上は学級委員長に推薦されていたのを瑠璃は思い出す。取り立てて勉強が出来るタイプではないのに、妙に先生からの信頼も厚いのだ。不思議な事に弾美が委員長に選ばれるたび、副委員長の座が瑠璃に巡って来る。

それはセットのように、同じクラスの時はほぼ必ず。

そんな弾美の運営するギルド『蒼空ブンブン丸』は、前回の限定イベントでは5位入賞を果たし、一躍人々の知る所となった。中学生のみの構成で上位に食い込んだ事が、どうやら街の人々の関心を買っただけらしい。

高校生や大学生の運営する大型ギルドからも、それから次第に声

を掛けられるようになって。何度か共同戦線を張って、超大型モンスターに縄張りへと出向いた事もあったりして。

かなりドキドキの体験だったが、とても面白かったと言うのが皆の感想。集団戦闘は疲れるし、互いの息が合わなければ途端に全滅に追い込まれる特性があるのだが。

それでもまたやりたいねと、たまに計画が持ち上がる。

今夜はそんな上級者が出向くような狩場に、初心者マークがやつと取れた程度の、静香や茜、それより少し前に入った進の弟と弘一の妹　二人とも小学生6年生　を招待しようと言う意図らしい。レベルが足りない分は根性でカバー、上級者は進んで庇って散るよーに！

いかにも不安そうな初心者組と、妙な盛り上がりの上級者組。瑠璃の心情はその中間、それでも頼ってくる静香と茜は死んでも守らなければと、やっぱり変なハイテンション。

エリア移動する前から、あっぷあっぷの状態である。

進のキャラのシンが、出掛ける前にちよつと情報提供の時間をくれと提言した。慎重タイプのサブマスの進は、盛り上げるだけ盛り上げて肝心な所は根性論の弾美とは違い、丁寧な段取りや細かな注意事項を、いつも必要に応じて語ってくれる。

性格がそうさせるのか、運営の細々した取り決めは進が担っている。今もイベントの為に買い置きしていたポーション類を弟に配分を頼みつつ、狩り場での注意すべき点を述べていた。

少しでも皆の生存率を上げようとの、気配りの行動である。

『それから、これは今日の狩り場探検とは関係ないけど、ここ数日で皆から集まった期間限定イベントの情報だな。ギルドでもパーティがばらばらになってるけど、今後の参考にして欲しい』

みんなの持ち寄った情報をまとめると、こんな感じらしいと進はレポートを読み上げていった。後でホームページを運営している組の弘一が、箇条書きにしてアップすると明言する。

ここら辺の分担も、幼馴染みならではかも知れない。

\*あらゆる中立エリアは、2時間縛りの影響を受けない。何時間インしていても大丈夫。フレンドとも通信可能で、同じイベントエリアの別ステージにいる者とも、たとえメイン世界にいる者とも通信は出来る。

ただし、エリア攻略中はパーティ内での通信以外は不可能である。

\*ステージ2〜3は二人パーティ、4〜は三人パーティでの攻略が可能、それより少ない人数での攻略情報もある。それ以降の情報は、まだ入って来ていない。

最終的には6人パーティでの攻略ではないかとの噂あり。

\*同じエリアに1時間滞在で、NMが湧く条件を満たすと考えられる。それ以降は30分か？ 恐らく、全部のエリアに存在するが、アスレチックエリアは確認した者おらず。

ドロップ品には性能の良い防具が多いため、スピード攻略が無意味なら狙うべし。

\*スピード攻略した者には、それなりの褒賞が貰えるらしい。妖精にクリア後に話す事で、装備品や薬品セット、さらにはギルや金のメダルが貰える事がある。

逆に、同じエリアで何日か足踏みすると、妖精に装備品が貰えたとの報告があるので、最速攻略にもものんびり攻略者にも、妖精はプレゼントをくれるとの推測が成り立つ。

妖精は邪険にしない様に、常に話し掛けるのが吉。

\*メイン世界とは異なり、スキルポイントの振り分け+10ごとに武器も魔法もスキル取得が可能なようだ。エリアボスからの術書のドロップは、今の所ほぼ確実の様子。

合流できたら、ギルド内で必要術書の交換をするのも良いかも。

\*エリア攻略中に2時間が経過したら、HPが徐々に減少していく仕様になっている。この状態は15分ごとに酷くなるので、2時間過ぎのエリア攻略は自粛するべし。

さらに、イベント限定のライフポイント制も大事なので確認しておく事。ライフポイントはスタート時に2個所有し、死亡することによって行くが、ステージ攻略によって増えて行く事もある。

ステージ4到達で、+1の増加を確認。

\*メイン世界でも見掛けない仕掛けやモンスターが、多数登場しているのは周知の事実ではあるが。期間限定イベントが終了した後にバージョンアップでメイン世界で公開される予定があるとか無いとか噂されている。

今後のバージョンアップ情報は、要注意である。

\*期間限定のイベント実施期間は、今回は4週間という長さ。一日のプレイ時間に2時間縛りが存在するとは言え、異例の長さである。故に、今度のイベントは最速でのクリアプレイヤーが優勝とは限らない可能性がある。それとも、攻略の難易度がやたらと高いのかも知れない。

なお、今回の優勝賞品は、未だに発表されていない。期待して良いのやら？

レポートの合間に、へ〜とかお〜とか、質問などが飛び交ってはいたが。長い情報の羅列が終わって、やはりみんなが気になるの

が今後の展開と賞品の未公開振りだったり。

最後に進は、今後も引き続き情報提供を求め、他の学生ギルドには負けないよう頑張ろう、と言って報告を終了。その言葉に、おーっと合いの手が上がるのは、若者独特のノリの良さか。

お互いに、限定イベント頑張ろうと称え合う仲間達。

『弾美の方は、ステージ4からパーティどうすんの？ こっちは辛い、仲間割れする事なく3人パーティ結成出来たけど……』

『あゝ、適当に探すかなあ？ まあ、晃の離脱が争いを無くして良かったよw』

『全然よくねえっ!!』

実は、C組パーティの二人に異変と言うか災難が発生して。片割れの晃の方が早々とライフポイントを2つ喪失して、何と3日目にしてイベント資格を失ってしまったのだ。

それでもパーティだった弘一は、何とかかんとかステージ4までソロでの到達に成功。こうなってはもう、後悔もやり直しも不可能と言う結論に達した弘一は。

進と淳のパーティに合流して、更に高みを目指す事に。

この3人は、既にステージ4の攻略に取り掛かっており、弾美と瑠璃のパーティとはかなり差が開いてしまっている。それが良い事か悪い事かは別として、どちらかでも優勝圏内に入って欲しいとの思いはギルド全体の思いでもある。

ある意味別々の方法での攻略は、共倒れにならない分良い案かも知れない。

『静ちゃんと茜ちゃんは、今ステージ3だっけ？』

『一回、今日全滅しちゃった……クリア無理かも』

『難しいよね？』

静香と茜も、プレイはしているようだが苦戦している模様である。連休中はイン時間が割と自由に選べるので、各々空いている時間を模索しながら進めているらしい。

ギルド会話はそれから、これから先の展望や、まだ知らされていない賞品の推測などに移って行った。妖精の話にしか未だに出て来ない魔女とは、一体どんな奴なのかとか、ステージの長さは一体どれだけあるのかとか。

賞品がイベント開始時に知らされていない事態も、今回が初めてである。もったいぶっているのか、まさかまだ決まっていないのか。期間の長さを考えれば、徐々に発表して気を持たせる作戦なのかも知れないけれど。

まさしく、期待して良いのか悪いのかさえよく分からない。

ギルド『蒼空ブブン丸』主催のオンライン会は、ようやく雑談も一段落着いたよう。進の案内で、全員揃って狩り場に移動を開始する運びに。メンバーの半数は、未体験の狩り場に揃って不安とドキドキ感でいっぱいになっている様子だ。

弾美が今日は晃の残念会だと明言したので、道中は離脱した晃への慰めと叱咤激励の言葉が飛び交う事に。お気楽な一行に、進が何度注意を呼びかけても効果は皆無。

襲ってくれと言わんばかりの、隙だらけの集団に。

案の定、地中から不意に現れた大型モンスター。襲い掛かれた集団は、阿鼻叫喚の慌て振りよう。ベテラン陣が咄嗟にタゲを取って、何とか最初のコンタクトでの死者は出さずに済んだのだが。やっぱり不意に始まる戦闘だったが、異変に気付くのもやはりベテラン陣が先だった。

雑魚ではあり得ない大量のHPと凶悪な各種スキル技に、これはエリアボスくさいぞと通信で確認がなされて行く。それに呼応して、

ベテラン冒険者一同は嬉々として自身の得意な武器を振るい始める。  
滅多に出会えない大物に、燃え上がらない方が嘘である。

\*

\*

もしかしたら全滅するかも知れない危機の中、一瞬の情熱を精一杯に体感しつつ。

ギルド『蒼空ブンブン丸』のメンバー達は、今日も元気である。



#### 04 初のアスレチックエリア！（前書き）

はうつ、ようやく1週間振りのお休みだ……でも習慣で早起きしちゃったので、朝から投稿作業に時間を費やしますよっ！

恒例の前書き作業、今回のネタを考えなければ（笑）。

物語は、まだまだ序盤ですね。ダンジョンも簡単な仕掛けしか出てこないし、基本構造を流用する感じに設定しちゃったので、そんなに詰まらずに書き進めた記憶があります。

思い起こせば、この原稿を書いたのって2年かそれ以上前だったような……。ゲームの設定とかダンジョンの仕掛けとか、楽しんで考えていた気がします。それを攻略する醍醐味は、本当にキャラ達が自然に編み出していつてくれた感じですね。特に美井奈がパーティに入ってから、一身に引掛かり役を背負ってくれて（笑）。

お陰で、意地悪な仕掛けを考え出すのが楽しくって仕方が無い（笑）。

それはさておき、何とか前書きスペースが埋まった模様。未投稿の原稿部分まで、まだまだ遠いですねえ。

この辺りを既に読み終えてる読者の皆さん、もう暫しおまちを^^

## 04 初のアスレチックエリア！

「あゝ、今度はアスレチックエリアかあゝ」

連休2日目の朝、昨日とほぼ同じスケジュールを経てモニター前に座る二人。昨日と同じ、早い時間でのインで限定イベントの攻略をすべく、二人は弾美の部屋でコントローラを手にしていた。

今日も取り敢えずの目標は、縛りの2時間で2部屋のまったり攻略。瑠璃の言うアスレチックエリアをクリアすれば、ステージ3へと辿り着くことが出来るのだが。

ダンジョンには付きものとは言え、瑠璃に限っては嫌な思い出しかない。

他のギルドメンバーのチームとは差がついてはいるものの、まだまだ先は長い。そもそもゴールして一番になる条件が、未だに明確に発表されていないのも不思議である。

ボスの魔女を最終的に倒せば良いとは予測出来るものの、それに当たって必要なのはスピード攻略とは限らないのがミソ。レベルの高さとか特定アイテム入手とか、色んな要素が必要になって来るとも考えられる。

ステージ間は後戻り出来ないのだ、慎重に進んで悪い事は何も無い。

ただし、瑠璃の苦手なアスレチックエリアは別とも言える。明確に時間を使わせる事が目的の仕掛けや道のりは、駆け足でさっさとクリアしてしまうに限る。

居座り続けても、嫌な仕掛けでダメージが増えるだけ。

「へマするなよ、瑠璃！ 朝イチから攻略失敗なんかしてたら、今日一日ブルーに過ごす事になるからなっ！」  
「う、うん……頑張るよっ！」

確かにそうだ。今日は待望の押し花と折り紙展、更には書道展に行つて、バイトも夕方から入つてるのだ。初っ端から躓いてたら、確かに一日重い気分で過ごさないとイケなくなる。

苦手だなどとは言つてられない。

とは言つても、一般的にアスレチックエリアは敵の数はともかく、色んな仕掛けがプレイヤーの行く手を邪魔して来る。トリッキーで、意地悪なステージ構成となっているのが常識。

例えば、タイミングを合わせてすり抜けないとダメージを受けてしまつ罨や、細い通路を落ちずに進まないと時間を消費してペナルティを受けたりなどの仕掛け等々。

特にフランスカの中でも、アクション要素が強いのが特徴なのだ。

入つてみた感じでは、そんなに幅の広くはない空間が、つづら折り状の坂道となつて広がっている感じ。相変わらず根っこがあちこち張つていて、それが障害物にもなっているよう。さらにはいかにも邪魔つぽい所に、モンスターや罨つぽい装置が配置されている。

ハズミンの敵探知レーダーは、一見何も見えない場所の敵も、見逃す事無く存在を知らせてくれる。こういう意地悪なエリアでは、とても便利なスキルに違いないのだが。

後ろに従うパートナーも、果たして守りが得られるものかどうか定かではない。

「俺が先行するから、遅れずに付いて来いよ」

「わかつたよ、ハズミちゃん！」

いかにも時間を使わせるように設計されたつづら折り状の階段坂を、二人のキャラは軽快にのぼって行く。3D表示のエリアに、早くも障害物が行く手を阻むよう設置されている。

ハズミンは、ためらわず片手剣で攻撃を繰り返す。派手に壊れ去る、ぼろぼろの木樽。これを壊さないと、キャラの通るルートが確保出来ないのだから仕方がない。

壊した木樽が10個目を数える頃、木樽の中からネズミ型のモンスターが飛び出て来た。不意を突かれたハズミンは攻撃を受けてしまい、慌てた瑠璃はそいつを倒そうと殴り掛かる。

しかし細い通路で、慌てて場所移動したのが不味かったようだ。

「うあつ、落とされたっ？」

小さなネズミの体当たりで、何とルリルリは階段の端から真つ逆さま。丁寧に落下ダメージまで受け、上って来た道を半周分ほど強制的に戻される始末。

隣に座る幼馴染みの冷たい眼差しが、とても痛い。取り敢えず瀕死のネズミに止めを差し、ルリルリは何も無かったように再び階段をのぼり出す。

待っていてくれる弾美に追い付こうと、顔には出さないが必死な瑠璃。

「……ハズミちゃん、回復いる？」

「いいから、さっさと追いついてくれ」

他の仕掛けも結構意地悪で、ハズミンの敵感知レーダーは、覚えてのせいかほとんど役に立たなかった。いないと思っっている場所からの攻撃で、何度か階段を落とされたりHPを減らされたりと、色々忙しい。

一度は急に操作が利かなくなったマイキャラに、瑠璃が不思議そ

うに首を傾げる場面も。

「あれ、障害物あるのかな？ 前に進まなくなっちゃった」

「おバカ、鳶型モンスターに絡まれてる。HP減っていつてる！」

そのトラップは先頭のアズミンをスルーして、後に続くルリルリをピンポイントで狙ったようだ。瑠璃は半ギレで細剣を振るい、自分を掴んでいる鳶モンスターを切り刻んで脱出。

戦闘後にHPゲージを見たら、ルリルリの体力は半分まで減っていた。倒した敵がドロップした万能薬が、お情けみたいでちょっと悲しい。

「……アズミちゃん、万能薬いる？」

「いいから、さっさと追いついてくれ！」

そんなこんなで、10分後にはおよそエリアの半分を踏破。丁度中間地点の、踊り場のような広い空間に辿り着いた二人は、おかしな仕掛けを目にして足を止めていた。

カーソルでクリック出来る、ドラックストアのポスターが右の壁に貼ってあったのだ。佐々木ドラッグと書かれており、大井蒼空町のアーケード通りに実在するお店である。

二人ももちろん知っていて、故に悩んでいるとも言えるのだが。

「これって、普通の宣伝ポスターだよなぁ？」

「うーん、ポスターに変な罫は仕掛けないと思うけどなぁ。………悩む時間が勿体無い、無視するのも可哀想だから作動させるぞ！」

「わ、分った！」

佐々木ドラッグでは、連休中のビックチャンス、ポイント3倍セール実施中！ さらに、スポーツドリンク、栄養ドリンク、化

粧品の激安セールも併せて行っておりませう！

学生諸君、サラリーマンや主婦の皆さん、連休中のお買い物は佐々木ドラッグをよろしく！

ポスターのクリックにより、仕掛けが作動。画面いっぱいのコマィシャルにそれは変化する。派手なBGMと共に、流暢な宣伝文句が流れて来て。CMの終わりにもたらされるのは、アイテム取得の軽快なメロディ。

二人それぞれ、エリクサーをゲット！ HPとMPを同時回復する、普通のNPCショップで買えば、かなりお高い薬品である。どうやら、佐々木ドラッグが提供してくれたらしい。

ドラッグストアらしいと言えば、そうなのかも知れないが。

「わあい ボス戦に取っておこうつと！」

「……まったく普通の宣伝ポスターだったな」

やや脱力しつつ、弾美は感想を口にした。アイテムを入手出来たのは嬉しいが、紛らわしい場所に設置しないで欲しいと思う。それともこれも、計算された時間を消費させるためのトラップなのだろうか。

疑心暗鬼に苛まれる、自分の心がちよつと悲しい。

エリアの後半も、似たような意地悪な仕掛けに加えつつ。更に加わるのが、剣の範囲外からの段差を利用した遠隔攻撃の仕掛け。そんな嫌味な能力を持つ敵が、二人の進行を妨害する。

おまけに踏み込み式の罠の発動で毒を受け、二人はなけなしの万能薬も使い切る破目に。今更ながら、ケチってお店で買わなかった事への後悔の悲鳴を上げてみたり。

「うつつ、万能薬買っておけば良かった〜！」

「妖精チエックで舞い上がって、買うの忘れてたなあ……失敗失敗」

弾美の言う通り、インして恒例の妖精チエック中の出来事。今日は何かが貰える予感がすると張り切る瑠璃の言葉に導かれるように、妖精は今回はネックレスをくれたのだった。

それに舞い上がってしまったので、お店チエックのうっかり忘れと相成った訳で。これも遠大な、妨害工作の仕掛けの一端だと考えるのは、こちらの考え過ぎだろうか。

何にせよ、今更後悔しても遅いのだけれど。

あらまあ、昨日あんなに尽くしてあげたのにまだこんな最下層でウロウロしてるの？ 仕方ないなあ……アナタってば、余程腕に自陣が無いのネ

ちよつとでも力を貸してあげたいけど以下略

もっとも、ステージ2の時点で混雑していたせいもあるが、同じエリアに3日間も滞在していたのだ。今までのパターンから何か貰えると勘繰っても、それほどの外れではない。

結構良い性能の装備だったせいもあり、二人とも有頂天になってしまつて、アイテム屋のチエックをすっぽり忘れてしまつていた。今日くらいの人寂れ方だと、いい感じに薬品も値下がりしていただろうに。

取り敢えず、戻る事は不可能なのでこのまま突っ切るしかない。

過ぎ去ってしまった事は、あまり深く考えない性質の弾美の反省はそれでお終い。二人は受けたダメージを魔法で回復し、ボス攻略前の最後のヒーリングを取ろうとお互いに合図を送る。

このゲーム、HPをヒーリング座りで回復させるより、MPを座つて回復させる方が時間が掛からないのだ。その分MP回復薬は、ポーションの3倍くらいの価値があるので、ほいほいとは使い辛か

ったりするのだけれど。

要するに、戦闘中以外での効果的な回復方法は、一般的に決まっていると言う事。回復魔法でMPを使ってHPを回復させた後、ヒーリング座りでMPを回復させるという方法だ。

もっとも、回復魔法を持っていないキャラには不可能な時間節約術だが。

そういった一般理論を鑑みて、二人の取った方法は至極当然なのだ……。座った途端、階段の仕掛けが作動して、ゴロゴロと丸い岩が上から転がって来た。

何とも悪質なヒーリング潰しに、休憩も何もあつたものではない。慌ててその岩を避けようと立ち上がるのだが、岩が大き過ぎて避難場所が階段の上には皆無。仕方なく殴り掛かるうとするキャラを、轢き逃げして転がる岩は走り去って行く。

ピキッと、弾美の額に青筋が浮かぶ。

「腹が立つっ！ 行くぞ瑠璃、速攻でスキル技使って倒してやるっ

！」

「う、うん……MP無くて回復1回しか飛ばないから、ポジション使おうね？」

MPが回復し切れていない瑠璃とは違って、弾美の方は自信満々。というか、直前の意地悪な仕掛けに、いくらか切れ気味だったり。自信を支えているのは、昨日レベル10になって片手剣に2ポイントスキルを振り終わった途端に覚えた、片手剣の新スキル《二段斬り》である。

メイン世界では10の次は30まで上げないと覚える事の出来ない新スキルなのだけれど。どうやらイベント世界は短期集中と言う事もあるのか、20で取得出来てしまった。

話には聞いていたが、この事実には弾美は小躍り。瑠璃も育成方針



を少し修正する事に。

「特殊攻撃受けると面倒だから、二人でスキル技使って短期決戦な！」

「りよ、了解！」

既に視界に入っている、のぼり階段の終わりの位置。簡素な杭が2本、丁度ゴールか玄関のようにしつらえてあつて。二人がそこを通り過ぎると、途端に変わるBGM。

簡単な強制演出ムービーが、動き出すゴーレムを5割り増しに強く見せる。ハズミン達より3倍近く大きくて、それだけでなくも強そうなのだが。いかにも堅そうで、力もありそうな中ボスだ。

何故か体の節々に蔦が絡まっていて、そこがチャームポイントと言えなくもない。

ハズミンのいきなりの先制攻撃で、アクションを起こす前に大きくHPを削られるゴーレム。瑠璃も負けじと、素早く近付いてスキル技を使用。猛り狂うゴーレムに、二人は必死に応戦。死角を探して移動しつつも、SPが回復するまで軽く斬撃を見舞い続ける。

お返しとばかりに、ゴーレムの重い一撃がハズミンを捉えた。一瞬びくりと肩を震わせ、急いで回復魔法を使用する瑠璃。ステータス異常は起こってないかとチラ見したら、弾美は笑いながら勝負を決めに掛かっていた。《二段斬り》のスキル技が再度ゴーレムを襲い

勝敗は弾美の言葉通り、短期で決した。

「おっし、スキルあればボス戦も割と余裕だな！」

「そうだね、それにしてもハズミちゃんのスキル技は強いね！」

二人のキャラは、スキル技の感想を口にしながら次のエリアへと移動。瑠璃は弾美の覚えたスキル技の威力に、羨ましそうに感想を述べる。って言うか、キャラレベルは同じなのに、自分の《二段突き》とは出せるダメージが倍くらい違うような気が。

その事実には驚いているのが、正直なところ。

「取得したポイントを全部武器に振ってるし、補正スキルの攻撃力アップも効いてるからなあ。瑠璃も武器にポイント振れば、スキル技も強くなるって」

そんな話をしながら、ようやくステージ2をクリアし終えたハズミンとルリルリ。ステージ3の中立エリアは、相変わらず人影もまばら。朝の8時前なので、当然とも言えるけれども。

中立エリアのつくりに関しては、前の層とあまり変わらないように見える。NPCの数も建物の数も、それほど増えたようには見受けられない。問題は、店売りの薬品の値段だろうか。

情報収集の前に、二人はここで一時休憩。

「菓子パンも買っておけば良かったかなー。まあいいか、下にも何かある筈だし」

「ゲーム終わったらコーヒー淹れるね。ハズミちゃん、キャラ情報見せて？」

朝食のサンドイッチを頬張りながら、弾美は瑠璃に促されてコントローラのボタンを操作する。区切りのレベル10に達したキャラには、どこことなく弾美も満足そう。

何より、瞬発力のある削りスキル《二段斬り》を覚えられたのが大きな要因。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：10

取得スキル           : 片手剣20《攻撃力アップ1》   《二段斬り》  
種族スキル           : 闇10《敵感知》

装備           : 武器 シミター 攻撃力+10《耐久8/12》

                  : 首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+  
2、防+2

                  : 耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1  
                  : 胴 皮の服 防+6  
                  : 腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4  
                  : 指輪1 皮の指輪 防+2  
                  : 指輪2 皮の指輪 防+2  
                  : 背 皮のマント 防+2  
                  : 両脚 なめしズボン 攻撃力+1、防+5  
                  : 両足 皮のブーツ 防+3

ポケット(最大3)       : 小ポーション   : 小ポーション   : 中ポ  
ーション

一方のルリルリは、どことなく中途半端な感じが漂って来ている。妖精のネックレスのお陰で、光スキルが8まで増えたのは良いが、10にするのを迷っているせいもある。

スキルが+される防具を装備しての新スキル技の取得は、一見かなりお手軽な方法ではある。+2とか+3とか、メイン世界でも付与されている装備は幾らでもある訳だから。

しかしそれ故に、強力で無慈悲な制約もあるのだ。

例えて言えばスキル+3の指輪を装備した状態で、取得したスキルがあるとする。その後、もっと優秀な性能の指輪を入手して、+3の指輪を取り替えたいと思ったとする。

しかし、そう簡単には事は運ばないのだ。スキル取得の際に装備していた+3防具は、装備を解除した途端、問答無用で破壊されてしまう。そしてその部位は、しばらくの間他の装備の取り付けが不可能となってしまうのだ。

それが装備の固定化と言われる現象である。

古い装備が壊れる位ならまだしも、壊れた部位（この場合は指輪）が一定時間、装備不可能状態になってしまうのはとても痛い。それなら誰しも、無理やり付け替えをしたいとは思わない。

無論、その時点でスキルが-3され、せつかく覚えたスキルも忘れてしまう事態も。

+1くらいの装備なら、壊れるのを前提で装備しても構わないと誰もが思うのだけど。覚えたスキルや魔法を使えなくなり、装備が出来なくなるのは洒落にならない。

このジレンマを解消するのが『同化』と言われる作業である。簡単に言うと、ある程度長い時間、その+装備を装着し続けていたり、同じスキルを伸ばし続けていると。装備に+されていたスキルが、キャラの方に同化されて行くのだ。

そうして同化が完了すると、防具を外す際のペナルティも完全に無くなる仕組みだ。

序盤で装備を限定、固定化してしまうと、後々困ると弾美にも脅されておろ。瑠璃は何となく、水スキルや細剣にポイントを振って誤魔化しているのだった。

本当は、新しい魔法を覚えたくて仕方がなかったり。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：10

取得スキル : 細剣12《二段突き》 : 水17《ヒール》

種族スキル           : 水10 《魔法回復量UP + 10%》

装備           : 武器   ブロンズレイピア   攻撃力+8 《耐久10/1

1》

      : 首   妖精のネックレス   光スキル+2、風スキル+

2、防+2

      : 耳1  妖精のピアス   光スキル+1、風スキル+1

      : 胴  木綿のローブ   MP+3、光スキル+1、防+4

      : 腕輪  炎の腕輪   火スキル+3、知力+1、防+4

      : 指輪1  水の指輪   水スキル+3、精神力+1、防

+1

      : 指輪2  水の指輪   水スキル+3、精神力+1、防

+1

      : 背  皮のマント   防+2

      : 両脚  皮のズボン   防+4

      : 両足  ゴーレムのブーツ   MP+3、防+2

      : ポケット(最大3)   : 中ポーション   : 小ポーション   : 小ポ  
      : ション

新しい武器を装備しても、さほど強くなつた印象を受けない瑠璃。前衛を目指すならやっぱり武器スキルを上げるべきかなと、瑠璃は育成のプランを練り直してみる事に。

魔法関係の取得は、敵が術書を落とす具合を見て決めても良いし。

そう言えば、さっきのボスゴーレムも土の術書を落とした。二人とも土スキルは0なので、一応ルリルリが持つておくことにしたのだが。他のドロップは中ポーションに、素材が少し。

今回のドロップは、外れっぽいと瑠璃は思う。

「素材系のアイテム、結構貯まってるけど……何に使っただろうかねえ？」

「ん、クエストあるのかなあ？ 合成に使っても、スキルも0に戻されてるしな（笑）」

笑いながら、そう弾美が返して来る。ファンスカにも合成スキルは存在するのだが、キャラのレベルが1に戻されていた時点で、合成スキルも全てキャンセルされてしまっていた。

限定イベントの仕様で、メイン世界のキャラには被害はないのだが。案外真面目に色々な合成スキルを伸ばしていた瑠璃が、泣きそうな程ショックを受けたのは言うまでもない。

そう言う訳で、自分で合成はイベント中は無理な仕様のようだ。

「さっきの土の術書、どうする？」

「そっちで使ってもいいし、持っていてくれ……よしっ、休憩終わり！」

先に朝食を終えて、自分のキャラのアイテム整頓をしていた瑠璃。弾美が動き出すのにつられて、アイテムウィンドウを閉じて移動準備を整える。お約束通り、二人は妖精やNPCに話を聞いたり、お店を覗いたりといったもの行動。

このステージ攻略の準備を進め始める。

「ハズミちゃん、万能薬320ギルだっつて」

「おっ、ちよつと買い貯めしておこう！」

他に使えるお店と言えば、後は鍛冶屋位しかなかった模様。二人はこのアイテム屋で買い物を行った後、いよいよ新しいステージの攻略に本腰を入れる事に。ここも中立エリアから、3つの扉へと

続く階段が見える。

要するに、ステージ2と基本のつくりは一緒。

「ん……？ ひょっとして、エリア構造も前と一緒じゃないか、コレ？」

「あゝ、でもモンスターは違うみたいだよ……？」

弾美と瑠璃の言う通り、ステージ3の最初の部屋のマップは、下の層と全く一緒の構造。最初の十字を左に進むと、4匹ずつ2種類の敵がいたが、敵の種類は微妙に違う。

使い回しは、ダンジョン構成には良くある事だが。

「耳……かな？」

明らかに体の部位モンスターらしい、耳の左右をくっ付けたような容姿。パタパタと飛ぶ敵は、まるで大きな蝶のようにも見える。部屋の中を好き勝手に飛び回っており、肌色に朱色の紋様がやけに際立って見える。

それはともかく、瑠璃の感想は安直な推論のみ。

「イヤリングが揃いそうだね」

瑠璃のその言葉の通り、蝶のようなモンスターは耳装備をドロップ。二人は難無く殲滅後、隣の部屋へと移動する。そこで覗き込んだ次の部屋の体の部位モンスターは、何と生首だった。

長い髪の毛を真ん中で分け、地面に垂れ下がったその髪が足代わりになって周囲を歩き回っている。顔は達磨さんのそれで、ぎよろりとした目など、何と云うか愛嬌がある。

どこかのアニメに、出て来そうなキャラかも知れない。

「生首だ、顔がリアルだったら怖かったね」

「……確かにそうだな。ってか、合体したら嫌だな」

生首モンスターは合体こそしなかったが、攻撃時の顔付きがちょっと怖くなる特性があるらしい。特殊攻撃は、長い髪の毛を伸ばしてのがんじがらめ。遠くからでもこちらを察知したら、髪の毛を伸ばして引き寄せを使って来る。

ドロップは頭装備のバンダナ。これでほぼ全ての部位の装備が埋まった計算になる。

「おつ、後はベルトだけだな。次の部屋かな？」

「時間余裕だね。今日はもう一エリア回るの？」

「ん、もう一エリア回るか、レベル12まであげながらNM待つかどっちかな」

瑠璃はレベルを上げるほうが良いと提案し、結局は前日の殲滅コースをなぞる事に。残りの部屋を回って部位モンスターと獣人を倒しつつ、掃討が終わったら今度は再ポップ待ち。

1時間が経過する頃には、経験値は1レベルと半分貯まっており、ドロップもまらず。

「あれ、獣人NM湧いてない……そっちはどうだ、瑠璃？」

「ん……。あつ、生首湧いてる……3匹も！」

入り口に近い部屋に、顔の色違いの生首NMが何と三匹も鎮座していた。それを見つけた瑠璃は、その数の多さに喜んで良いのか驚くべきなのか戸惑うばかり。とにかく二人は合流して、どうやって釣るかを検討し始める。

動き回らないので、リンク必至だという結論には早々と達したのだが。1匹の強さが果たしてどれ位なのかは、想像がちよっとつき



難しい。中ボスのゴーレム程度なら、何とかなりそうかも。とにかく、1匹は速攻で倒そうという作戦に。

ところが実際は、そうは上手くは話は運ばなかった。コイツらの特性を、うっかり見落としていたのが原因ともいえるのだけれど。二人がそろりと近付こうとした途端に、モンスターの髪の毛の引き寄せが発動したのだ。

しかもハズミンとルリルリが、別々の生首に引き寄せられてしまい、各個撃破の大ピンチ。ここから立てた作戦とは、全くの別ルートと言うか逆ルートへと暴走してしまう。

運悪く2匹にたかられた瑠璃は、パニックに陥り攻撃どころではない。

「攻撃しないなら、ぐるぐる逃げ回れ、瑠璃っ！ 部屋から出でもいいから！」

「わっくっ、早く助けてハズミちゃん！」

もちろんそのつもりだが、とにかく最初の1匹を倒さない事には助けにも行けない。生首NMは攻撃力こそ低いのだが、特殊攻撃とHPの高さがいやらしい。焦っている時には、最悪の相性かも知れない。

弾美はSPが溜まるたびにスキル技を使用しつつ、足を止めての殴り合い。回復はポーション頼みで、とにかく一步も引かない構えだ。攻撃を受ければ、それだけ早くSPも溜まる。

莫迦っぱいが、時間短縮には仕方ない戦法でもある。

ルリルリの地獄のマラソンは、弾美が1匹目を倒した後も、辛うじてまだ続いていた。HPは2度レッドゾーンに飛び込んだが、回復魔法の詠唱に立ち止まる訳にも行かず。仕方なく、虎の子のポケットのポーションでの即席回復で、命を永らえている。

自分のキャラと敵モンスターの足の速さはほぼ同じなので、一度引き離してしまえば安全に思えるのだが。敵の特殊技の引き寄せに捕まると、アドバンテージが一瞬にして消え、しかも2匹いっぺんにぼこられる事に。

とにかく敵との距離を引き離そうと、反対側の部屋に飛び込んでしまった瑠璃。良い感じに引き返せばよかったのだが、弾美と離れてしまったのもちょっと不味かった。

ポップ待ちの無人の部屋内を、必死に駆けて行くルリルリ。

ポケットの残りが万能薬だけになって、いよいよ命の灯火がピンチの頃。ようやくハズミンが、瑠璃のモニターをチェックして追いついて来た。瑠璃も反対の部屋を一周して、丁度戻って来ようとした途中の巡り合いだ。

必死ながらに、なかなかのナイスマラソンである。

「1匹取るから、瑠璃はマラソン続けてろ！」

「わ、分った、お願いハズミちゃん！」

そんな訳で、弾美は苦もなく有言実行。追いかけて来る敵が1匹に減ってしまうと、地獄のマラソンも途端に楽になった。極楽とまでは行かないが、幽冥界手前くらいだろうか。

ちよつと距離が開いたのを確認して、瑠璃は回復魔法を自分に使ってみる。NMが湧いた部屋に戻る頃には、ルリルリのHPは完全回復していた。瑠璃は完全に平常心を取り戻し、弾美のモニターを確認する余裕も出てきたり。しかし……そんな余裕をかましていたら。

部屋に再ポップしていた雑魚にぶつかって、NMに追い付かれたのは内緒。

「よしっ、2匹目倒したっ！ 残りはどこだっ？」

「そつ、そつちに連れて行く〜」

こうなったら、勝負は決したも同然だ。残りの1匹を、最後は仲良く二人掛かりで倒し切る事に成功する。ポーションの手持ちを減らした甲斐もあって、ドロップも割と豊富。

お楽しみの報酬は、色違いの頭装備のバンダナが2枚、それから素材や薬品類が幾つか。そしてお金の代わりに何かと猛威を振るう、金のメダルというアイテムが一枚ドロップ。

メダル関係は、特殊なアイテムと交換可能な擬似通貨である。

「倒せた〜、良かったよ〜！」

「良かったな、時間も丁度いいかな。そろそろボス行こう、瑠璃」

ダンジョンにエリアインして、既に1時間以上の経過である。アスレチックエリアで掛かった時間を加えると、ボス攻略の時間で本当に丁度良いくらい。

ヒーリングしたり、途中に湧いた雑魚を倒したりしながら最終ボスエリアに進んで行く二人。ダンジョン手前まで戻っていたので、ボス部屋までの到達に時間が掛かるのは仕方が無い。

そして、はたと気付くのは。

ボスエリアの手前で、魔法を詠唱してくる獣人NMだったり。

「うおつ、2匹目湧いてる〜！」

「さっきのは3匹連れ立ってたから、これは正確には4匹目だよね」

魔法に焦げ目をつけられたハズミンに回復を行いつつ、冷静な口調で訂正する瑠璃。何というか、時間に追われているのに邪魔が入る、デジャヴな感じが心地良い。

ハズミンは、さっきのNMでめでたくレベルが上がった。ルリルりも今度の戦闘で、間違いなく上がるだろう。ボス戦に向けて、ま

あ弾みの一戦だと思えば良い。

さっきのマラソンに較べると、温過ぎると思える瑠璃だった。

「もはやお約束なお邪魔虫だよね、ボス前のこの子」

「いいから、一緒に殴れ！」

一緒に殴った結果、敵の魔法攻撃も尻すばみ。二人掛かりのスキル技の使用で、割と呆気なく勝利の運びに。ルリルリは戦闘終了時に入ってきた経験値で、目論み通りレベルアップ。

残り時間をかんがみて、あまり考える暇も無いまま、キャラの補正ポイントの振り分けを行う瑠璃。ステータスのポイント補正は器用さに、スキルも細剣に振り込む事に。器用さを上げると防御時に回避が、攻撃時にクリティカルが上がるらしい。

弾美の話だと細剣使いは、クリティカルの出やすい華麗な前衛を目指すべきらしい。

時間も残り少ないので、さっさとボスエリアへ入る二人。下の層のまるつきりパクリの、鏡と足を乗せる仕掛けだけが存在する部屋が視界に入ってくる。

敵影がまるで無いのも、下の層と全く一緒。

「まるつきりおんなじだね、ここもドッペルゲンガーかなあ？」

「ん、でもちよつと……足を乗せる位置が近くないか？」

言われてみれば、確かにそんな気も。鏡のすぐ前にある、仕掛けを作動させる為の足裏の形の黒いペイントマーク。くつきりと目立つそれは、下の層より鏡に近い位置に描かれてあるような。

だからと言って、見ているだけでは何も始まらない。ハズミンはボスを湧かせるために、用心しながら鏡の前のマークに移動。離れた位置でそれを見ていた瑠璃だが、もう一箇所、正確には二箇所ほ

ど、ふと気になる差異を発見した。

部屋の両端の壁も、一ヶ所ずつ鏡張りになっている。ステージ2でもそうだったけ？

弾美に確認を取る前に、仕掛けは既に作動してしまっていた。目の前の鏡は無反応、代わりに割れたのは、瑠璃が訝しがっていた左の壁の鏡のほう。

2体同時のドツペルゲンガーの出現は、二人の度肝を抜いた。

「うわっ、騙されたっ！ しかも……弓攻撃してくるぞ、コイツ！」  
湧いたドツペルゲンガーはその場を動かさず、弓での遠隔攻撃をハズミンに見舞い始める。しかも左右両側からの同時攻撃なので、何とも始末が悪い。

弾美は左のドツペルゲンガーを、最初の標的に定めたようなのだが。瑠璃も同じ敵を殴りに駆け寄った途端、戦況に次なる変化が訪れた。しかも悪い方向に。

真ん中の鏡が割れて、もう1体のドツペルゲンガーが出現！ それは何故か、仕掛けに全く触っていない筈のルリルリのコピー、つまりは水属性だ。弾美が二段斬りで削ったばかりの敵のHPをちやっかり回復し、ルリルリに向けて遠隔攻撃を開始する。

この敵も、どうやら弓がメイン武器らしい。

「うわっ、なんで私のコピーがっ!？」

「ひどっ、回復されたぞ、おいっ!」

弓は本来とても強い武器で、熟練するとその削り能力は計り知れない程である。目の前のドツペルゲンガー達は、それ程まで凶悪な削り能力は無いらしいけれど。

それでも、3体同時の遠隔攻撃はさすがに堪える。じりじりと、

成す術もなく下がって行く二人のHP。逆に敵は離れた位置から回復が飛ぶので、なかなか削り切れない有り様だ。

このままでは、何も出来ないまま倒されてしまうのは必至だ。

「うわっ、このままじゃギリ貧だっ……瑠璃のコピーから倒すしかないか！」

「りよ、了解……って、うそっ？ 2時間過ぎちゃった!？」

再々度の戦況の変化は、何と妖精の加護切れと来たもんだ。2時間縛りのペナルティである、バットステータスの毒状態のHP減少。妖精がピヨピヨとカバンから飛び出して、二人の周囲を飛び回って危険を知らせているのだが。はつきり言ってそれ所では無い。

中央の割れた鏡前に引き戻った二人は、接近戦で回復魔法の詠唱を無理やり止めつつ。辛うじて水属性、ルリルリのコピーを激破することに成功。

弓は距離を詰めると、撃てなくなる事も幸いしたようだ。

それでもその時間の間に、支払った代償は大きかった。ハズミンは2体によって矢ぶすま、回復に追われたルリルリのMPはほぼ枯渇状態。しかし魔法を温存などと言ってられない瑠璃は、アイテムメニューを開いて虎の子のエリクサーを使用する。

勿体無いなどと、悠長な事は言っていられない状況である。毒状態のHP減少は、今もじりじりと効いているし、回復の為のMPはどうしても必要なのだから。

延命のために、出来る手は全て打たないと。

立ち止まっていちいちウィンドウを開いていたせいで、2体目のコピーとの戦闘に出遅れたルリルリだったが。弾美は今度こそ順調に、自身のドッペルゲンガーを追い詰めていた。

瑠璃は弾美に、その場所から回復支援を送る。更に目前に辿り付

いてからの細剣スキル技使用の援護で、程なく2体目との戦闘にもケリが付く。

ここまで来たら、毒状態と言えど余裕が出て来る二人。

「よしつ、何とかかなりそうだなっ！」

「冷や冷やしたよ、3体同時の遠隔攻撃で、しかも時間切れはするい〜！」

「まだ終わってないぞ、瑠璃。こいつらの近距離攻撃も、割と痛いんだからな！」

そうは言いつつ、3体目は軽口を叩き合いながらの余裕の表情の二人。もはや数に勝る攻撃手段で、怒涛の圧勝へと持ち込む事に成功する。ハイタッチも軽やかに、しかし戦闘後は慌ててエリア脱出に奔走されたりして。

ペナルティのHP減少は、結構侮れない模様である。

「うーん、水属性の敵は敵に回すと怖いなあ。回復が超ウザイ」

「そうだねえ、でもルリルリを後衛仕様にしちゃうと、回復量はこんなもんじゃないよ？」

自分の選んだ属性を褒められて、何となく鼻高々な瑠璃だったり。攻略も思ったより順調、って言うかまだ一度もライフポイントを失っていない事実が嬉しい。

駄目かもと思った瞬間は、この短いイベント中何度かあったのだけれども。やはりパートナーの弾美のフォローに、その都度助けられている結果だろうと瑠璃は思う。

静香と茜のチームは、早くもイベント期間の序盤で全滅という苦汁を舐めたと報告していた。そんな彼女達のゲームの腕前は、自分とどっこいどっこいだと思う。

やっぱりそこは、頼れるパートナーの存在の違いかも。

「あつ、しまった……！　せつかくボス戦前にスキル注ぎ込んで魔法覚えたのに、肝心のボス戦で使うの忘れてた！」

「……そうなの、ハズミちゃん？」

ちよつと、性格的には抜けてる所もあるかもだけど。弾美は全く気にしていない様子で、ボス戦のドロップ品の分配に忙しい様子。中立エリアに戻った途端、毒状態は解除されている。

安心して時間を使いながら、ドロップ品の鑑定を行う弾美。今回の敵からも武器のドロップはあるとは思ったが、何と遠隔系の弓と矢のセットと言う嬉しい誤算である。

あとは闇と水の術書が1冊ずつ、攻撃力がアップする妙薬の炎の神酒など。

さつそく術書を使用する二人、キャラの成長もなかなか順調な感じた。各々自分の属性のスキルを上げて、弓矢の方は弾美が持つ事に。これで遠くの敵を釣るのがずっと楽になると、弾美はちよつと嬉しそう。

もつとも、本気で熟練度やスキルを伸ばす気は無さそうだが。

それから二人は、中立エリアのアイテム屋さんで安めの薬品を補充。これは明日以降のための作業で、つまりは落ちる作業に入る。何しろ、今日はたくさん薬品を使ってしまったし、値上がりしない内に買っておかなければ。

さらに落ちる前に、弾美は進たちにメールを打っている模様。瑠璃はテーブルの上を片付けて、昨日買ったばかりの『読み間違えやすい漢字、熟語500選』を取り出す。

嗚呼、何て楽しそうなタイトルの本だろう……

\*

\*



勉強の途中にトイレに立った弾美は、今日もリビングのテーブルの上にお小遣いが置かれているのを発見してご満悦。ただし、今日はメモの文字が父親のものらしい。これは父親のポケットマネーから出たお金だと、弾美は瑠璃に推測を口にした。

共稼ぎなのに、弾美の父親はお小遣い制である。その中から身を切るように捻出してくれたのだろうと聞いて、瑠璃は思わず会社ビルのある方向に、手を合わせて拝んでしまった。

どちらの親も、連休なのに構ってあげられない心の重荷は同じらしい。

今日は文化会館の開催展巡りと言う事で、マロンとコロンは連れて出歩けない。昨日のような外食案も出たが、結局は瑠璃が作る事に。お小遣いは、いざと言う時のへそくり用に回す算段だ。

ただし、勝手の違う台所は怖いと瑠璃が言うので、津嶋家に弾美がお邪魔する事に。

弾美が瑠璃の家を訪れるのは、実はそんなに多くない。瑠璃の母親の恭子に捕まると、大変な苦行が発生するからだ。瑠璃の父親も、弾美を見ると何故だか妙にそわそわし始める。

男親と言うのは難しいのだと、いつかの恭子さん談。

そんな訳で、弾美のラーメンが食べたいと言う案は却下され、うどんが二人分、15分でテーブルに現れた。ちゃんと肉と卵とかまぼことネギが、綺麗にトッピングされている。

まずまずの及第点だと弾美が評価すると、瑠璃はにこりと笑った。

食べ終わってしばらくは胃を落ち着けていた二人だが、やがて瑠璃が着替えへと自分の部屋に上がって行った。それを機に弾美も出掛ける準備をと、一旦家に戻る事に。

連休初日と同じくジョギングの為に家を出、そのまま弾美の部屋にお邪魔した瑠璃は、部屋に戻るのは早朝以来の事。だから母親が今日の外出用の服を、わざわざ出して用意してしてくれたのを、部屋に戻って初めて知ったのだが……。

手にとって確かめて脱力。持っている中で、一番可愛くて丈の短いスカートだったり。

瑠璃はしばし考えて、この衣装を着用するのと、母親からうるさく小言を頂く事態を天秤にかけ。脳内でシミュレーションする事数秒、答えは割とすぐに出た。

他の衣装をわざわざ出すのも面倒だし、母親の顔を立てる事も大事だろうし。そうと決まればさっさと着替えて、頭は楽しいお出掛けのイメージへと移行させる事が大事。

……あれ、でも夕方にはバイトも入ってるんじゃないか？

まあ、マリモは文化会館とは反対方向だし、一度着替えに戻るのもアリかも知れない。そんな弁解も、瑠璃の心中の照れから来るものなのだけれど。肝心の弾美は、瑠璃の格好を見て明らかに驚いていたが、微かに面白がっているようにも見えた。

目的地の文化会館は、運動公園の敷地の向こう側でちよつと遠い。朝はジョギングで毎日走っているだけに、昼くらいは自転車を使おうと車庫から出していた弾美だったが。

元の位置に戻しながら、ちよつと皮肉めいた言葉で瑠璃をからかう。

「それじゃ自転車乗れないな、歩いて行こうか」

「う、うん……」

何となく照れながら、ついて来ようとするコロンを強引に敷地に押しとどめつつ。瑠璃は俯き加減のまま、曖昧な返事を返す。それ

でも歩き出してしまつと、いつもの位置取りに瑠璃は平常心を取り戻した。

弾美の隣で、マロンとコロソコそいないが、散歩気分です歩を進める。

\* \* \*

目的地の文化会館に着いてみると、既に入り口付近で群集が結構な賑わいを見せていた。二人は催し物の案内板を頼りに、吹き抜きのロビーから取り敢えず2階を目指す。

会館は結構な敷地面積を誇っているせいもあって、催し物展が重なりすぎると、一度に5つの展示会があったりする。今回も連休のせいも、そんな感じの盛況振りらしい。

それでも案内板を見れば、簡単に展示状況は把握出来る。

「結構人が多いな、どっちから見ようか？ 両方、2階の展示室らしいけど」

「ん、書道展からにしようか？ 司書の永田さん、会場のお手伝いしているかも知れないって」

「へえっ、じゃあそっち先に行こうか」

「んつと……2階のF会場だつて、ハズミちゃん」

書道展示会の会場は、それ程大きなスペースでは無かつたものの、展示の数は結構あつて、小学生の賞を取った作品から、先生と呼ばれる人の作品まで様々のよう。

作品も授業で使う半紙のサイズから、畳1畳のサイズのものまで幅広い。中には板切れのようなものに直接書かれていたり、色画用紙に書かれていたり趣向も多様な感じである。

作品群に法則があるとすれば、この街の住民の応募作品からの選出がメインという事だろうか。知っている人の名前がチラホラ出て

来るのは、案外この街が狭いせいかも知れない。

残念ながら、会場に司書さんの姿は見えなかった。会場入り口で案内役の人が、住所と名前の記入をお願いして来たので、いたらここで目にしたのであろう。

瑠璃はひたすら残念がったが、それはそれで仕方が無い事態である。取り敢えずは、あとでちゃんと司書さんに感想を言えるように、作品をじっくり見て廻らなければ。

そんな訳で、取り敢えずは弾美と一緒に見学に集中する事に。

「瑠璃、これ何て書いてるんだ？」

「ん〜、草書で書かれていることはわかるけど……」

「どこかで習った気がするなあ、草書とか楷書とか。そもそも読めない字って、果たして価値があるのかな？」

「昔の人は、ちゃんと読めたんだよ。それでもやっぱり、崩して書いているには変わりないけど」

二人は書道の基本とか良し悪しが、そもそも良く分からないので評価するのはもっぱら取り上げられている言葉や文章とか、バランスの感じとか。たまに、書かれている素材などにも感心をしてみたい。

ただついて来た感じの弾美も、それなりに書道展の雰囲気を楽しんでいるようである。瑠璃の分かる範囲での展示物へのウンチクになるほどと耳を傾けている。

おおよそ30分で全てを見て廻り、次のエリアへ。

押し花・折り紙展になると、会場は3倍くらいの大きさとなっていた。展示品も圧倒的に書道展より多く、さすがに入場料を取るだけはあると思わせる催し物になっている。

とは言っても、学生はたったの200円で、しかしその分物販は充実している感じ。出口付近に設置されているお土産売り場の人だ

かりは、入り口の二人から見てもビックリする程。

入った途端、賑やかな色彩や華やかな展示物の数々に圧倒される。二人は作品を見て廻りながら、感心する事しきり。弾美も正直言つて、押し花の手法がこんなに多く存在するとは思っていなかった。

ただ綺麗な色の花を、花束のように並べて作品としているものもそれなりに綺麗なのだが。自然に咲いている花々で絵画のような作品に仕上げたり、一つの物語のような表現力の演出があったり、パッチワークやキルトのようなパターンの作品があったり。

瑠璃も感動を全身で現しつつ、見学にも自然と熱が入る。

折り紙のコーナーは大作は存在せず、それでも細々とした作品は見応えがあった。季節柄なのか、こどもの日にあわせて鯉のぼりや兜などの作品が、目立つコーナーとして設えてある。

それでも折り紙を使った立体的な作品は、何とも迫力があって面白い。くす玉のようなカラフルで小さな折り紙の集合体を合体させたものなど、見応えは充分である。

出口の物販にも折り紙の本や色紙セットなど、結構な数が取り揃えてある模様。

瑠璃はその物販で、すっかりお土産品を購入してホクホク顔。花の絵の便箋セットや、メモ帳や折り紙セットなども買い込んでいた。弾美にもお小遣いをくれた両親へのお礼に、何かお土産を買って帰るべきだと主張。何故かその品を、瑠璃が選んで行くという運びに。弾美も結構、同じ事を瑠璃にするので文句も言えない。

「そうだ、明日一緒にお兄ちゃん達に手紙書こう!」

「はっ、何で?」

唐突の瑠璃の言葉に、弾美は思わず変な声を上げてしまう。弾美の姉は県外の大学に、瑠璃の兄は何と海外の有名工科大学に在籍し

ており、それぞれ今は別居中。家を出てから1〜3年経っていて、連休中も戻って来る予定は無し。

兄弟で連絡は取っているが、メールでの遣り取りがメインである。随分前から、連休休みには帰郷しない事は聞いているので、それなら心のこもった物を贈りたいとの瑠璃の考え。

直筆での手紙など、今まで出した事は無い事だし。

「せっかく便箋セット買ったんだから、出さないと駄目だよ！この感動を直接届けなきゃ」

「買ったのはお前だけだろ！ 変だぞ、その理論！」

「変な事ないよ、たまには直筆で遣り取りするのもいいじゃない？」

瑠璃の瞳は、明らかにキラキラと輝きを発している。自分の立案した計画の素晴らしさに、既にどっぷり浸かっている感じだ。こうなってしまうと、弾美が幾ら理論立てて言い包めようとしても無駄な事。

瑠璃の意志は、ちょっとやそつとじゃあ揺るがない。

「私が清書してあげるから、ハズミちゃんは文章考えるだけでいいよ！」

「そんな手間を掛ける必要があるのか？ メールで書けば済むことだら！」

「メールなんて味気ないよ、手紙買った方が絶対嬉しいってば！」

瑠璃には子供の頃からの付き合いで、ちょっと変わった所があるのは知っていたけど。さすがはあの恭子さんの血を引いてると、弾美は何ともなしに血の気の引く思い。

会場を出ても会館を出ても、二人の論争は止む気配も無く。

幼馴染故の垣根のない言い争いは、バイト場に着くまで続いたそうなの。

## 05 連休3日目と新しい仲間！（前書き）

さて、この回から弾美のパーティも3人編成となつて行くわけですよ。美井奈の参入で賑やかさも5割増し、珍道中振りも益々アツプかな（笑）？

この物語は、ある意味『ミイナ』の成長記録かもですね（笑）。

リアルの方では、あまりパツとしない毎日ですね。仕事が忙しいせいでオンラインゲームから手を引いて、自分のキャラの成長を体感出来ないもどかしさ。

一応、Y！モバゲーで『DIVINE』ってカードゲームにはまってるんですが。まあ、戦術も似たり寄ったりな感じで、カードを集める楽しさを味わってる感じです。

一日のプレイ時間も、精々が20分程度ですし（笑）。

今はそれが精一杯な感じですね。他にも手を出してるモバゲームも少々ありますが、それもプレイ時間は10分程度です。

小説のネタ的な要素に、出会える確率がグングン減って行ってるのは仕方の無い事実ですね。それでもアンテナを張り巡らせて、意欲的にアイデアをストックして行きたいかなと。

それが生きるかどうかは、今後の時間の取れ方次第ですが（笑）。

では、本編の方を楽しんで下さい^^



## 05 連休3日目と新しい仲間！

今日も朝早くのお隣さん家へのお伺いに、瑠璃は恐縮しながら律子さんにお早うございますの挨拶。しかしそれが3日目にもなると、挨拶の合間に不憫がられる始末だったり。

何しろ立花家の両親も、瑠璃の両親とは同じ系列の企業の、ほぼ同じ部署勤めである。お隣同士、休みのパターンも勤め時間もだいたい一緒と来ているのだ。

つまりは立花家が休めない時は、津嶋家も休めないと言う事で。何故か律子さんからも、瑠璃に対して世間並みに休みを取れなくて御免ねとの謝罪の嵐。

昨日は日曜日だったのに、どちらの家庭も出勤だったのだ。

そんな話はさておいて、瑠璃的には充実した休み期間だと思っている。連休と言っても、休みが2日伸びただけである。わざわざ遠出をして、疲れて戻るのもバカらしい。

瑠璃は元々インドア派なのだ。本がたくさん読めれば、それは良い休日。

昨日の夜に読んだ物語の粗筋を頭から追いつつ、瑠璃はモニター前で精神統一。自分のキャラを操作しながら、エリア突入前の装備チェックも怠らない。

装備欄がほぼ完全に埋まった自分のキャラを見て、しばし感激にひたる瑠璃。生首NMのドロップのバンダナも高性能だったし、昨日も割と豊作だった。

レベルアップともども、装備とかスキルの充実も嬉しい成長なのだ。

遠隔武器もようやく入手した弾美のキャラ装備も、瑠璃はついで

に見せてもらう事に。特に色違いのバンドナの性能を見比べてみて、どうせなら水性能のが欲しかったと内心贅沢な欲求も。

弾美の話だと、光とか闇スキルの+装備は滅多に見ないらしいので、闇装備が出ただけでも凄い当たりだとの事。黒いバンドナでS P量に補正が掛かるので、弾美は結構嬉しそう。もう一つ攻撃スキル技を覚えたら、低レベルでも連続スキル技使用も夢ではないらしい。

確かに、当たりが1つ出ただけでも良い事だ。瑠璃は先程の贅沢心を深く反省。

ハズミンが初めて覚えた魔法の《S Pヒール》は、M Pを使って徐々にS Pを回復させる、前衛のスキル技持ちには有り難いモノ。スキル技の連続使用にも拍車が掛かり、その快感を知る者には必須の魔法かも知れない。こんな序盤に出たのは、かなりラッキーだそう。

前回のボス戦で使い忘れたのはアレだが……。

入手した遠隔武器の弓と矢は、それぞれの攻撃力を足してダメージが計算される。つまり、熟練度とスキルを上げて行けば、とても強い攻撃手段になる訳だ。

ただし、近接レンジでは使用不能になるので、ソロには不向き。武器の持ち替え　と言うか、弓矢使用後の硬直時間　に他どの武器より長い時間が取られるので、そういう意味では一長一短かも知れない。

ファンスカ内でも、意外とメインで使用する者は少ない。何より、消耗品の矢が高いというデメリットが大きい。一回狩りに出るだけで結構な出費、場合によっては赤字と言う話もある程だ。

限定イベントでも、矢束の補充が定期的に可能か不安なところ。

名前：ハズミン　属性：闇　レベル：12

取得スキル     : 片手剣21《攻撃力アップ1》     《二段斬り》  
: 闇11《SPヒール》  
種族スキル     : 闇12《敵感知》

装備     : 武器 シミター 攻撃力+10《耐久8/12》  
: 遠隔 木の弓 攻撃力+8《耐久11/11》  
: 筒 木の矢 攻撃力+6  
: 頭 黒いバンダナ 闇スキル+3、SP+10%、  
防+3

2、防+2  
: 首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

: 耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1  
: 耳2 玉のピアス 防+1  
: 胴 皮の服 防+6  
: 腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4  
: 指輪1 皮の指輪 防+2  
: 指輪2 皮の指輪 防+2  
: 背 皮のマント 防+2  
: 腰 皮のベルト 防+2  
: 両脚 なめしズボン 攻撃力+1、防+5  
: 両足 皮のブーツ 防+3

ポケット(最大3)     : 小ポーション     : 小ポーション     : 万能薬

一方のルリルリだが、水の術書が意外にたくさん手に入るお陰で、  
水スキルも次の区切りに近付いてしまっている。ただ、アスレチック  
クエリアに向けて光系の回復魔法も覚えたい気もする。

細剣スキルも上げ切ってしまったし、色々と悩ましいところだ。  
弾美に相談したら、同化させる気なら早めに魔法を覚えてしまった

ほうが良いと言われた。確かにそうかも知れない。

光 水の順番で、魔法を覚えてしまおうと瑠璃は決意、なるべく今日中に。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：12

取得スキル : 細剣16《二段突き》 : 水18《ヒール》

種族スキル : 水12《魔法回復量UP+10%》

装備 : 武器 ブロンズレイピア 攻撃力+8《耐久10/1

1》

: 頭 赤いバンダナ 火スキル+3、腕力+1、防+3

: 首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

2、防+2

: 耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

: 耳2 玉のピアス 防+1

: 胴 木綿のローブ MP+3、光スキル+1、防+4

: 腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

: 指輪1 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

: 指輪2 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

: 腰 皮のベルト 防+2

: 背 皮のマント 防+2

: 両脚 皮のズボン 防+4

: 両足 ゴレムのブーツ MP+3、防+2

ポケット(最大3) : 小ポーション : 小ポーション : 万能薬

妖精チエックもお店チエックも、たいした進展は無し。それでも上手く行けば、今日でステージ4に辿り着ける。ちよつと気合いを入れ、瑠璃はコントローラーを握りなおしてみる。

そうこうしている間に、弾美の方も準備は整った様子。昨日使い損ねた新魔法もチエックを終えて、態勢は万全の様子。隣から突入の号令が掛かって、エリア攻略の開始。

この瞬間だけは、どうしても毎回緊張する。

ところが、ステージ3の2つ目のエリアは、やはりどこかで見た構造。言ってしまうえば、下層の2エリア、そして隣のエリアと全く同じ部屋の位置で、敵の配置も変わらぬ有り様。

使い回しも、ここまで来たら立派かも知れない。

「あゝ、ここも前回と同じマップだね？ 昨日の怖い生首もいる」

「いるな、ひよつとしたらNMもまた生首かもなあ」

「それはちよつと……嫌だなあ」

そんな文句も交えつつ、各部屋のモンスターを駆逐して行くハズミンとルリルリ。経験値の入りもまずまずで、装備のドロップの確率も先日と変わらぬ程度。

ただ、二人の装備は幸いにも、昨日の時点で揃っている。嬉しさはそれ程無いけれど、余った分は売ってお金にしまえば良い。

そんな風に軽く考えながら、弾美はエリアを往復。

一時間が経過し、そろそろNMタイム。

「瑠璃、そつち湧いたか？」

「あつ、今湧いたつぽいよ、ハズミちゃん！ けど、生首1匹と耳が2匹だ……あれっ、耳の特殊技って何だっけ？」

「何だっけ……？ 何か鱗粉攻撃みたいな奴だっけ？」

「あ〜っ！ ……耳なのは何で鱗粉？」

心底不思議そうに、画面の中を舞っている敵を見ながら瑠璃は首を傾げる。耳は二枚くっ付いて、蝶の動きを真似ている。それを見れば分るだろうと、弾美は内心想うのだが。  
からかう様に、口にしたのはこんな言葉。

「んじゃ、あれは鱗粉じゃなくて耳クソ？」

「汚いよ、ハズミちゃん……」

弾美の上品な冗談に、瑠璃は嫌そうに顔をしかめる。それからチラツと弾美を盗み見て、何やら考える素振り。耳掃除って、あんまりサボっていると病気になるんじゃないかなかったっけ？

天然少女は、ぽつつと一言。

「ハズミちゃん、耳掃除してあげようか……？」

「いらんっ……！」

弾美は全力で拒否しつつ、瑠璃の言葉にちよつと照れてみたり。

\*

\*

ハズミンがようやくNMの湧いた場所に辿り着き、作戦を瑠璃に伝達する。ルリルリに遠隔武器の弓矢を渡し、耳を遠くから釣って貰う。瑠璃がマラソンしている間にハズミンが生首を倒す。  
遠くから釣る分、昨日よりは安全な筈。

「わかった。いくよ〜、ハズミちゃん？」

「おっつ……おっと、新しく覚えた魔法使っておっつ」

弾美は前回使い忘れた闇魔法の《SPヒール》を使用、これで《二段斬り》が幾分使い易くなる。ハズミンの魔法使用を確認して、瑠璃は離れた場所から耳モンスターにアタック。

一斉に襲い来る3匹のNMに背を向け、ルリルリは通路を逆方向へと駆け出した。その内の生首モンスターを、ハズミンが殴りかかって引き止めを願う。

昨日と違って引き寄せ技が無いので、マラソンも結構楽だ。反対側の部屋に到着して、壁沿いにくるりと反転。ルリルリが部屋を出た途端に画面からレベルアップの音がした。

どうやらめでたく、レベル13に達した模様。

「倒したぞ、瑠璃。次はどこだ？」

「はいはい、今持って行く」

レベルが上がったものの、ポイントを振る間も無のまま、瑠璃のマラソンは続く。程なく弾美と合流、耳が一匹ランデブーから離脱。瑠璃はそれを確認し、さらにキャラを走らせ続ける。

昨日のつまづくような失敗はもうしない、湧いた敵を避けつつ部屋を駆け巡るルリルリ。

「結構強いな、コイツ等。ひょっとして、補正掛かっているのかな？」

「補正って、どんなの？」

「入ったキャラのレベルに合わせて、敵のレベルが決まっているのになって。経験値も昨日より多いくらいだし、そもそもレベルの上がりメイン世界より早い気もするかなあ？」

言われてみればそうかも知れない。瑠璃もレベルアップのテンポが、やたらと早いとは感じてはいたのだが。普段はソロや少人数での狩りをしないので、その按配がよく分かっていなかった。

時間を掛けてレベルを上げていけば、ステージ後半で楽になるか

もと期待していたのだが。弾美の話が本当だとすれば、その期待は思いつ切り薄そうだ。

逆に、ボスやNMがやたら強いと感じていたのは、レベル補正が自分達の首を絞めている可能性が高い。このレベル帯は、1つレベル差があるだけでHP量やスキル技のダメージに違いがはっきりと現れてしまうのだ。

ボスになるとさらに補正が掛かるので、そりゃあ強い訳だ。

「キャラのレベルが一定以上だと、敵のレベルも補正で上昇するって事？ 逆に一定以下だと、元々の決まった難易度の中で、攻略もそれ程難しくないとか？」

「そんな感じかもなあ……でもまあ、今更言ってもレベル下がる訳でもないし……っと、2匹目倒したぞ、瑠璃」

「ほいほい、連れて行く」

3匹目は二人がかりで殴り倒し切り、今日のドロップもすこぶる良い感じ。弾美によく言われるが、瑠璃のドロップ運は並みを軽く上回るモノらしい。自分では自覚の無い瑠璃なのだが。

二人でドロップの分配をしながら、瑠璃はレベル上昇のポイント振りも同時進行で行う。今回のスキルポイントのボーナスで、いよいよ新魔法も取得出来そう。

楽しいひと時に、顔もほころびまくり。

「筋力と器用、どっち上げようか？ あっ、MPの上がるピアス私

貰うね スキルは……光の魔法取っちゃおう！」

「状態回復、意地でも出せよ、瑠璃」

ちなみにNMのドロップは、光のバンダナ、白玉ピアス、青玉ピアスなどの属性防具類一式。さらには、金のメダルが1枚と剣術指南書まで出る始末。



金のメダルは、メイン世界ではNMのトリガーやレア装備、スキル向上の為の道場への入場券などに変換出来る優れもの。お金よりも、更に価値の高いモノである。

剣術指南書は、使えば武器スキルが2Pアップする、前衛なら誰もが欲しがるアイテムである。メイン世界では、出たらラッキーという類いのNMからのドロップ率なのだが。どうやら限定イベントの世界は、サービス過剰なのかも知れない。

相談の結果、弾美が指南書を使用。金のメダルは瑠璃が持つておく事に。

弾美の声援を受けて、ルリルリは光の魔法をスキルの振りこみで習得。念願の異常ステータス回復魔法……かと思いきや、武器に光属性を付与する《光属性付与》の魔法だった。

不満そうなのは、弾美はもちろん瑠璃も一緒である。状態回復魔法を覚えれば、万能薬を買うお金が節約出来ると思っていたのに。それでもまあ、攻撃力が上がるのは有り難い事だ。

瑠璃は渋々、自分をそう納得させる。

時間に余裕がある時に限って、お邪魔獣人NMは影も形も見当たらず。二人は顔を見合わせつつも、その部屋を無難にスルー。今日は3匹NMの討伐がスムーズだった為、湧くにはまだ時間が掛かるのかも知れない。

ボスの間の構成も、昨日訪れた場所の構成とまるで変化無し。3面に張られた鏡を見遣りながら、二人でキャラ配置の場所確認。回復魔法を持つルリルリのコピーから倒す事を織り込んで、今回もハズミンが湧かせる事に。

回復キャラが2体も湧いたら、ちょっと洒落にならないとの考えだ。

ところが今回左右の鏡から湧き出て来たのは、闇属性のドッペル

ゲンガーと水属性のドッペルゲンガーが1体ずつ。左の鏡の側に待機していたルリルリは、目の前に出現した自分のコピーにビックリ仰天。

しかもそのドッペルゲンガー、盾こそ装備しているが武器は何も持っていない様子。どうするのかと思っていたら、水属性の攻撃魔法を問答無用でルリルリに撃ち込んで来た。

なるほど、今回の攻撃は魔法オンリーらしい。

「えっえっ、何で!？」

「バカ瑠璃、応戦しろって!」

弾美の言葉に我に返って、光の魔法を付与した細剣で咄嗟に応戦するルリルリ。駆けつけようとしたハズミンも、自身のコピーに魔法攻撃を受けている様子。

動きがやけに遅いと思ったら、グラビティの魔法を受けていたらしい。これを受けると、動きがとても遅くなる。これに掛かった後に遠隔攻撃されると、かなり最悪だったりする。

弾美のコピーは追って来ず、その場からの魔法攻撃を選択した模様。

「おっ、敵は魔法攻撃だけかな。ラッシュで倒すぞ、瑠璃!」

「わっ、わかった!」

殴ってみると、光の追加ダメージも結構良い感じ。最初の魔法攻撃にはびひったが、魔法は詠唱中に攻撃を受けると、発動が高確率で止まってしまうと言う弱点がある。

その分強いのだが接近戦では剣には敵わず、1体目沈没。

中央の鏡がようやく割れて、ハズミンの分身の2体目が出現。こいつも盾を装備していて、攻撃は魔法のみらしい。しかし、今回飛

んで来たのは圧力球の超ダメージ魔法だった。

ハズミンのHPは、一気にレッドゾーンに突入。体力メインに育成して来たキャラでなければ、倒されていたかも知れない。手の空いていた瑠璃が、慌てて回復魔法を飛ばす。

紙一重の攻防だったが、最悪のピンチは去ったよう。ハズミンのHPは、取り敢えず安全圏に。飛び上がりそうだった心臓を落ち着かせ、近くに出現したコピーから倒そうとの意思疎通。

数を減らしてしまえば、確実にもつと安全になる。

「やべっ、鈍い魔法の効果、まだ解けてないっ！」

「さ、先に殴ってるねっ！」

鈍い状態のハズミンを取り敢えず放って置いて、中央の闇分身に殴りかかる瑠璃。タゲはどうやっても来ないので、その辺は気が楽なのだが。ハズミンが死んでも瑠璃はきつと同じくらい凹むから、余り関係無いとも。

魔法の詠唱を潰そうと奮起する瑠璃だが、どうやってもフリーなもう一体の攻撃は素通しである。幸い先ほどの超ダメージ魔法は、滅多な事では飛んで来ない様子だが。

ちくちく魔法で削られているハズミンは、目を離すと沈んでしま  
いそうで怖い。

「うわっ、光属性の追加ダメージ凄いかもっ？　かなり効いてるよ、ハズミちゃん！」

「敵は闇だからな、いいタイミングで覚えたかもな」

光の追加ダメージが、闇属性のドッペルゲンガーのHPを見る間に削って行く。ハズミンが追いつく頃には、瑠璃の細剣だけでHP半分まで追い込んでいたほどだ。残りは、とどめとばかりに二人掛かりでのスキル技使用。

3体目に向かう前に、酷い事になっているハズミンのHPを回復。敵の攻撃魔法は頻繁には飛んで来ないが、一度喰らうとごっさり削られるので油断ならない。

それでも数の優位に持ち込んだ二人は、最後は余裕の戦闘に持ち込んで勝利をもぎ取る。

「おおつ、今回は闇の術書2個も出たな」

「水の術書も出たね、後は……盾が1個と薬品各種かな？」

「おおつ、盾は貰うぞ。一応、二人パーティの盾役だからな、俺は」

お馴染みのボス戦後のドタバタ騒ぎの中、思い出したようにクリア条件の装置に向かう弾美。中立エリアに降り立った後、初期装備には違いないが存在感がバリバリ漂う丸型の盾を装備。

防御力が上がるのも嬉しいが、これで操作次第で敵の攻撃をブロック出来る様になった。弾美はメイン世界では両手武器を使っているため、盾の操作には慣れていないけど。

それでもやっぱり、あるのと無いのでは心強さが違う。

「ハズミちゃん、コーヒー淹れて来ようか？」

「うん、飲みたい。お願い」

いつものエリア間休憩を利用して、しばしのリラックスタイムを取る二人。弾美の両親は既に仕事に出掛けており、瑠璃はコーヒーを淹れに階下へ向かう。

昨日までは、ゲーム完全終了時のコーヒーブレイクだったのだけれど。さっきの仕掛けが凶悪過ぎて、まだ心臓がバクバクいつてる気がする二人である。コーヒーと談話で気分転換、エネルギーとやる気を再補充に掛かる。

アイテムチェックの後、ステージ3の最後のエリアへ。

色々問題のあるアスレチックエリアだが、造りはステージ2とほぼ一緒。今回は嫌な仕掛けに引つ掛からないぞと気合いを入れる弾美だが、相方がかなり心配でもある。

それでも最初だけは足取りも軽く、階段になっている坂道をジクザクにのぼって行く二人。少し後ろからルリルリが追従、前方に障害物の木樽があるが、弾美は敢えて無視。

次の障害物は、さらに前方の虫型モンスター。

始まってしまった戦闘だが、瑠璃は後ろで見学の運びに。道幅が狭いので、二人掛かりで殴るスペースがないのだ。暇なので、何気なく近くにあった木樽を殴ってみる。

ピロリンと音がして、壊れた木樽からポーションゲット。中に隠されていたらしい。

「ハズミちゃん、ポーション取れたよ」

「畏があるから、程々にしとけよ」

のぼって行くに連れ、虫型とトカゲ型の敵の数が徐々に増えて行き、細い通路にすし詰め状態。大量リンク状態のような有り様で、さすがの弾美もちよっと焦っている模様。

焦っているのは瑠璃も同じ。邪魔な木樽を壊しつつ、自分も戦闘に加わろうと奮戦していたのだが。壊した木樽の一つに、弾美の心配していた仕掛けがしてあったらしい。

ダメージ付きの爆風が巻き起こり、木樽の真横にいたハズミンが階段から落下。弾美がいなくなつてタゲの切れた敵の大群は、今度はルリルリに襲い掛かって来た。

二人の慌て具合度は、果たしてどちらが大きかったのか。

「バカ瑠璃っつ、気をつけろって言っただろっつ！」

「きゃっ、こつち来たっつ、助けて、ハズミちゃん！」

慌てて逃げ出したルリルリと崖から落下したハズミンは、のぼり切らねばならない筈の階段を、何故か下った場所で合流。今度は開けたスペースでの戦闘と相成って、何とか敵の殲滅に成功する。

気まずく流れる空気の中、瑠璃はすっかり冷めたコーヒード喉を潤す。

「……ごめん、ハズミちゃん」

「……回復頼む、何故か落下でダメージ受けてるから」

「……………うん」

その後はなるべく、瑠璃も木樽は敢えて無視してみる作戦に変更。下層で体験したアスレチックエリアよりは、今回は敵の多さが目に付くのだが。幸い、それ程強い敵はいない様子。

丁度真ん中の平らなエリアに辿り着く頃には、ハズミンのレベルは14に上がっていた。敵の多さが程よい経験値となったよう、弾美の機嫌もちよっと回復した様子。

瑠璃も思わずホツとして、貼ってあるポスターをチェックする。

ゲームセンター・ジョイフルでは、現在『ファンタジー スカイ』の期間限定イベントと連動して、オリジナルキャラクターグッズ満載のゲーム機をご用意！

これまた期間限定の配信となっておりますので、在庫切れにはご容赦を！

「あゝ、これってこの前のクレーンゲームの事だね」

「そうみたいだな、連動してたのか」

CMの終了と共に、二人はそれぞれ銀のメダルを1枚ゲット。銀のメダルは5枚で、金のメダル1枚の価値となる。獣人系の敵が

落としやすく、この限定イベントのダンジョン内でも今までに数枚お目見えしてはいるのだが。

ゲームセンターの宣伝に、メダルが景品とは洒落のつもりだろうか。

「交換所、どこにあるんだろうな？」

「もっと上の方かな？ 4週間って長いから、ステージもかなり大きいんだろうねえ」

「今までに無い力の入れようだなあ。ちょっと不気味ではあるかも」

弾美の裏読みの入った感想に、瑠璃も素直に頷いてみたり。まあ、4週間の長期戦なら自分のキャラを育てながら楽しめるし、それも良いかなとも思う。

最初はポロポロだった装備も、今ではそれなりに揃って来ているし。二人パーティになってからは、瑠璃は緊張も含めて結構ゲームを楽しんでいるのも事実。

……弾美にはかなり、迷惑を掛けているかもとは思うが。

二人は小休憩を終え、残り半分になったのぼり階段を進み始める。今度は蜂やサソリ系の、毒を持つタイプの敵が路上に配置されている。それを受けて、弾美の動きはやや慎重に。

何しろ、万能薬の数には限りがあるのだ。

敵のHPは幸いそれ程多くない。道なりになぎ倒しながら、時折毒や麻痺を受けて右往左往。今更なら、光属性の異常状態回復魔法が欲しかったと悔やむ瑠璃。

万能薬の個数は減って行くが、HPとMPにはまだ余裕があるハズミン。しかし、エリアの高みに近づくにつれ、仕掛けとモンスターへの強さは次第に凶悪になって来ている気が。戦闘は慎重になって行き、進行のペースも落ち加減に。

そんな中、ルリルリのレベルが弾美に追いつき14にアップ。

「やった〜、でもポイント振る時間ないよね？」

「何に振るか決めてるんなら、さっと振り込んだじゃえよ、待っててやるから」

「んつと、器用度と水スキル上げるから……」

「むっ、なんか上に中ボスつばいのがいる。雑魚掃除してるから、早く振り込め」

弾美の言葉に甘えて、瑠璃はステータスウィンドウを開いての振り込み作業を始める事に。途中一度、腕力にポイントを振った事もあったが、レベル10を超えてのステータスのボーナス値は器用度アップと決めている。

次いでスキルにポイントを振り込んだので、水の新魔法の取得を狙う瑠璃。水は回復や防御系の魔法が多く、魔法剣士のキャラで伸ばしている人も結構多いようだ。

大いに期待しつつ、ポイントを振り込んだ結果 覚えた魔法は《ウォーターシエル》というダメージカットの防御系魔法。序盤にぜひ欲しいと思っていた、使い勝手の良い魔法である。

大当たりの引きに、瑠璃は嬌声を上げる。

「むあつ、どうした瑠璃？」

「防御魔法覚えたよ、ハズミちゃん！ 今掛けてあげるねっ」

「おおっ、凄い助かる、ナイス瑠璃っ！」

離れた場所から、得意気にハズミンに魔法を飛ばす瑠璃。ついでに自分にも掛けてしまうと、ルリルリのMPはすっかり枯渇状態。仕方なく、奮戦する弾美の後塵を浴びつつヒーリング。

しかし相手は、こちらを気軽に休ませてくれる気遣いは全くない様子。ルリルリが座った途端、背にしていた壁の仕掛けが作動。ス



テージ2では転がる石だったが、ここではモンスターの湧き出る通路が開いてしまった模様である。

渦巻き型のつむじ風みたいな敵キャラが、呑気に休むルリルリに迫る。

「ふあつ、ハズミちゃんっ！ 壁から敵が出て来ちゃった！」

「バカ瑠璃っつ、ヒーリング場所には気をつけるって！」

「ごっつ、ごめんっ、ハズミちゃんっ！ うあつ、こっち来たっ！」

つむじ風の突き飛ばし技で、ゴロゴロと階段を転がり落ちるルリルリ。それを追い掛けるように、半ダースの同じ形の敵が階段を下りて来る。一度に殴られると、高確率でやられてしまう。

完全に弾美と引き離され、瑠璃はパニックに。

「うわっ、中ボスも何故か仕掛けに反応したっ！ 瑠璃、そっち行けないから自分で処理しろっ！」

「ええっ、だってMPスツカラカンなんだよっ？」

「自業自得だっ、死んだら罰ゲームだからなっ！」

それは困る、弾美の罰ゲームは体育会系のものがやたらと多いのだ。いつだったか、罰ゲームで毎朝のジョギングが片道2キロになった時があったのだけれど。その後は、さすがに学校に歩いて行く気力も無くなった程のダメージを受けた記憶が蘇る。

あの時も確か、フランス力での狩りの最中でのミスが原因だったような。理不尽な言い付けではあるが、弾美も一緒にその罰を受けるので、瑠璃は強く文句も言えない。

そんな叱咤を受けて、必死に戦況を把握する瑠璃。MPは無いとは言え、ルリルリのHPには程々の余裕がある。ポケットにはポーション2個と万能薬しか入っていない。

エーテルを入れておけば良かったと今更後悔しつつ、近付いて来

た敵を迎え撃……。

「うあつ、崖から落とされたっ！」

「死ななきゃ許す、落ち着け、瑠璃っ！」

つむじ風の1匹目を殴っていたら、横から乱入した敵の再度の突き飛ばし技がルリルリに炸裂。受けた向きが悪かったのか、今度は階段の端から真つ逆さまの破目に。

落下ダメージを受けたものの、敵の集団は道なりに降り来ている。再接近まで少し掛かりそう。時間に余裕を得た瑠璃は、エーテルをアイテム欄から使用する事に。

更に《光属性付与》の魔法を細剣に掛けて、これで何とか迎え撃つ準備は完了。これ以上落とされては堪らないので、階段の端には近付かない事に。

かなり慎重に、遅れて降りて来たつむじ風を迎え撃つ。

何とか1匹目を倒し終わった時点で、瑠璃は敵が余り強くない事を感じ取っていた。これなら何とかなると、なるべく囲まれない位置取りで応戦し、その甲斐あって2匹目も撃破。

3匹目の相手をしている最中に、弾美の呻り声が聞こえてきた。赤い甲殻を持つサソリ型の中ボスに苦戦しているのかと思いきや、今は別の一団と戦っている。

ひととき大きなつむじ風と、その部下達と言うセットの敵影だ。どうやら仕掛けの扉はまだ閉じていない模様。それどころか、一目見て大型の中ボスクラスの敵が混じっている。

瑠璃はやっちゃった感漂う声で、弾美に確認を取る。

「……ひよつとして、それも湧いちゃった？」

「おうっ、この大きいのが何か落としたら許す！」

落とさなかつたら罰ゲームなのですか？ 瑠璃は多少顔色を曇らせながら、なるべく無心に目の前の敵に細剣を振るう。幸い瑠璃の腕前でも、光の付与魔法とスキル技の定期使用で、無理なく敵の数を減らせて行くのに成功している。

水の新魔法の防御力のアップも地味に効いているようで、ようやく余裕が出て来た瑠璃。それでも、全ての敵を倒し終わったのは、弾美の方が早かったのだが。

「おっ、風の術書落としたぞ！ 良かったな、瑠璃」

「う、うん……それよりここでヒーリングしても平気かな？」

湧いた敵を全滅させて、結局は階段の真ん中でヒーリングをする事に。このエリアに突入して、既に30分が経過している。意外と手こずっている感じがするが、まあ仕方が無い。

このまま何も無ければ、つづら坂3往復ほどで頂上のボスエリアだ。

「回復終わった〜、もう何も起こらないで〜」

「起こしてるのは、大抵瑠璃じゃんか……」

「わざとじゃないもん！」

瑠璃の心底の願いが届いたのかは不明だが、二人の登頂からのボス攻略は、その途中の道のりを考えると呆気なく終了した。むしろ細かい階段でのごちゃごちゃした戦闘より、広いボスエリアの方が伸び伸びと戦闘出来たような気さえしたり。

ともあれ、今日の使用時間は2ステージの攻略時間を足して、1時間と45分くらい。5日目にして、ようやくステージ4に到着した二人パーティである。

進たちの情報と照らし合わせると、ようやくの感のあるステージ突破ではあるものの。弾美は早解きには興味が無かったので、特に

気にする風も無く。時計を見ながら、今日の限界稼働時間をはじめ出す。

瑠璃の方は、前の2つと趣の異なる中立エリアに、早くも興味津々の様子。

「今日はもう、後15分位しか時間が残ってないな。落ちる前に、こここの探索だけでもしておくか？」

「お店のチェックもしなきゃだけど、ここから先は3人パーティ可能なんでしょ？ パーティに入ってくれる仲間を、まずは探しておいたほうが良くないかな？」

「ああ、っ、そうだったなあ、でもなんか面倒くさい……ってか、こんな朝の内じゃ、ほとんど人なんていないだろ……」

確かに、下の層の中立エリアより、更に広いステージ4の中立エリア。見た限りでは、その広いエリアに存在するキャラは、朝の9時ではぼつぼつとほんの僅か。

弾美は一応エリア検索を掛けて、パーティを組んでいないソロ行動のキャラを探し始める。ほとんど、何の期待もしてないのは傍目にも明らかな覇気のなさ。

それでもリーダーの役目は、ちゃんと果たそうとはしている様子。

弾美の画面操作を横目に、瑠璃はと言えば別行動。暇な時間を利用して、一人で新エリアのお店の探索に移っていた。NPCはと言えば、魔女の噂やこのステージの攻略のヒントを話してくれた程度で期待外れ。

お店の数も、NPCの人数も、下の層より格段に増えているようだけれど。お店に並ぶ商品なども、下の層より充実している。瑠璃は一応、簡単にマップを手書きする事に。

後で、こういいう手間が役に立つ事もあるのだ。

更に瑠璃は、アイテム屋の薬品の値段をチェックし、安いものは高騰する前にまとめ買い。武器屋と防具屋では自分の装備と見比べ、買う価値のある品をリストアップ。

他のめぼしいお店といえば、武器の耐久度を回復してくれる鍛冶屋と、下の層には無かった合成屋。ようやく敵モンスタードロップの素材が役に立ちそうだが、合成リストの品数は下級の装備に偏っている感じ。

後は消耗品がその大半を占めている模様だ。

武器屋と防具屋に置いてある人気装備や、ちよつと性能の良い装備は、品不足からかなり割高になっていた。しかし、前のステージで散々NMを倒したせいで、二人の懐には他の人達よりお金が貯め込まれている筈なのは確か。

瑠璃は二人の所有金額と欲しい装備一覧とを頭の中で計算し始めた。まずは、高騰した装備が下がってくれないと話にならないのだが。余った装備や不用な素材を売り払えば、金額も足りるかも知れない。

炎のナイフも、このまま使わないのなら売ってお金にしても良い。消耗品のアイテムや万一の時の武器や防具の予備も、それなら買っておく事も可能である。

弾美の考えを聞こうと、瑠璃は隣の幼馴染みに声を掛ける。

「ハズミちゃん、買い物しておこう。炎のナイフとか、要らない物売ってもいい？」

「ああ、いいけど……なんだコイツ？」

そう弾美が指し示したのは、モニターの中の事。ハズミンの前に、もじもじと近づく人影が一つ。思いつきり貧相な初期装備で、見た目はキツネ人間っぽい容姿をした キャラである。

つまりは雷属性の冒険者なのは見て取れるが。

検索の結果を見る限りは自分達より3つもレベルが低く、ソロらしいのだが。何かを話しかけたそうに一定の距離までは近付くのだが、ハズミンが近付くと慌てて逃げてしまふ。

ハズミンは歩くスピードを保ちつつ、そのキツネ娘を追いかけ始める。ちよつと笑える光景だが、瑠璃は弾美からコントローラーを取り上げてそれを止めさせる。ハラスメント行為に取られ兼ねない行動は、フランスカに限らずオンラインゲームでは厳重に禁止されているのだ。

キャラのポリゴンの上に表示されている名前は、ミイナと読めた。

「パーティにあぶれた子かなあ？」

「かもな……つてか、装備も金も持つてなさそうだ。きつと、キャラ操作も下手だな」

「ずつと誘われずに、声掛けられるの待ってるのかなあ……可哀想」  
「期間限定イベントは、参加者全員ガチでの真剣勝負だからなあ。  
誘っても戦力になりそうもない奴は、皆がパーティ遠慮願うだろうなあ……」

弾美はキツネ娘のサチコメを確認。仲間募集の告知の言葉の下に、一応、セールポイントとして、ヒールと状態異常回復魔法　　ライトヒールは覚えてますと書き込まれている。

とは言え、わずか3人パーティで完全後衛キャラ、攻撃手段を全く持たないキャラが入る余地があるかと言えば、バランス的に大いに疑問である。

足手まといとまでは言わないが、魔法は所詮MPを消費しないと使えない。今の自分達のキャラレベルだと、精々回復魔法を5〜7回唱えたら、座って一定時間ヒーリングしないと魔力は回復しないのだ。

エーテルは高価なので、ポーション程にはホイホイ使えない。

そんな訳で何と言うか、2時間縛りのエリア攻略には、足並みが遅くなり過ぎる。スピード重視なら、ポーションを買い込んでしまえば、回復は充分事足りる訳だから。

レベルを見合わせての取得スキル計算からすると、この雷娘は武器スキルには全くポイントを振り分けていない様子。一応、初期装備の両手棍棒は持っているようだが。

よくここまで上がって来れたと、弾美は逆に感心してしまう。

『おいつ、お前。誘われ待ちか？』

『J h q i i t t !』

何となく面白くなって、弾美はキツネ娘に話し掛けてみた。その言葉に、どうやら余程慌てて返事を打ち返したようだ。変換ミスの上、キャラの挙動も変。弾美は瑠璃と顔を見合わせ、どうしようか、コイツ誘うのやばくない？ 的な会話を目と目で交わす。

『はいっ！一緒に遊んでくれる仲間を募集してます！』

すぐさま、まともな返事が返って来る。どことなく必死な様子が、文面から見て取れたり。

『期間限定イベントは、遊びじゃねえっ！』

『は、はいっ！』

今度は言葉で追い詰めて遊ぶ弾美に、瑠璃はキーボードも取り上げるべきか一瞬悩んでしまう。それでも、困っていきそうな人に話し掛けるのは、それはそれで勇気がある行動だ。

瑠璃は、そういう事が平気で出来る弾美を、子供の頃から凄いと尊敬していた。瑠璃など、心の中では心配したりと感情が動くもの

の、行動に移す事がなかなか出来ない。

『それにしてもヘナチヨコ装備だな……どうやってここまで攻略出来たんだ？』

『ええと……ステージ2からは、パーティ組んでも良いって人に誘って貰えて。ドロップ品は全部その人が取るという条件で、自分は後ろで回復だけ』

「ひどいつ、回復だって立派な支援じゃない！ 自分だけドロップ持って行くって、どう言う事っ？」

「いや、俺に怒られても……ってかコイツ、たかられ属性だなあ」

たかられ属性と言うのはファンスカの世界での造語で、一般にはドロップのすこぶる良いモンスターを指すのだが。酷い時には、ポツポツ待ちするプレーヤーがエリアの隅々に待ち受けていて、再ポツと同時に倒されてしまう時もある。悲しい運命を持つ者に付けられたあだ名、それがたかられ属性だ。

現実の世界でも、財布の紐が緩い人物に、たまにこの称号が贈られたり。

恐らくミイナとパーティを組んだ元パートナーは、彼女を踏み台にして、今はもっと上の層を別パーティで攻略しているのだろう。おいていかれた者の事など、微塵も気に掛けず。

そう思うと、弾美も段々と腹が立って来た。

『イン出来る時間が合うなら、仲間に加えてやるぞ。ミイナは学生か？』

『は、はいっ！ 付属小学校の5年生ですっ！』

「……小学生か」



「いいじゃない、小学生でも、へたっぴでも！ せつかく知り合っただから誘ってあげようよ！」

知り合ったと言えるほど、正直話し込んではいないのだが。弾美は隣で騒ぎ立てている瑠璃を落ち着かせ、自分のコントローラーを取り戻すと、アイテム欄を確認する。

売り払うつもりは、掻き集めれば余裕で一人分にはなりそう。

『俺たちは中学生だから、生活サイクルは合いそうだな。こっちのパーティに加わるつもりがあるなら、余ってる装備をやるよ。この先のイベント、一緒に攻略するか？』

『……………神様』

「……………は？」

二人は揃って疑問符付きの言葉を口にして、顔を見合わせる。

『あなたは神様ですっ！ あいつ、オフで会ってくれませんか？ お礼をしたいと思います！』

二人とも、いつの間にやらミイナの勢いに押されっ放し。今日は夕方までは暇だよ的な発言から、じゃあお昼に駅前のアーケード通りで会いましょうとの約束に持ち込まれ。

本当に、いつの間にやら駅前で会う約束を取り付けられてしまっただけでした。

「最近の小学生は凄いなえ……………」  
「……………全くだな」

瑠璃の発言が、やたらとリアルに染みた午前のひと時だった。

\* \* \*

駅前の広場は、大井蒼空町の街並みのを象徴するような綺麗で奇抜な造りだった。そんな駅前の待ち合わせのシンボルに、色鮮やかなベンチや野外テーブル、奇抜な彫刻の入った日陰を提供するモ二ユメント群。

街の住人が『駅前』で待ち合わせと言えば、ここだと決まっている。

弾美と瑠璃はゲームを終えた後、お昼まではほぼ昨日と同じスケジュールを過ごした。微妙に違っていたのは、勉強の内容が瑠璃が購入した、テレビのクイズ番組で出題された問題集に変わっていた事。

四字熟語やことわざ、地理や歴史、英単語や都市名、常識問題や一見無駄に思える豆知識などの詰まった問題集も、二人で出題し合えば結構盛り上がった。

2時間ちよつとが、まさにあつという間に過ぎたのは言うまでも無く。

更に微妙な相違点を上げれば、台所のテーブルに置いてあったお小遣いが千円に減っていた点だろうか。ただ、折り紙展で買ったお土産のお礼が切々と書かれていたので、本音ではもつとあげたかったとも取れるけれど。

それが許されなかったのは、父親の財布の財政破綻問題に関する云々。

それはともかく、マロンとコロンも目印代わりにと連れて来たので、やたらと悪目立ちする二人だったり。反対に人混みにも動じな

い二匹は、駅前の喧騒にも全くペースを崩さない。瑠璃がベンチに腰を下ろすと、兄弟犬は大きな体軀をその足元に運んで優雅に寝そべる。

アーケードの入り口は、その場所からでもすぐそこに見える。弾美はベンチには座らず、立ったままアーケードのほぼ直線に延びる通路を注視していた。

相手の目印は、小学生の女子だという以外は特に聞いていない。こちらが中学生の男女で、大型犬を二匹連れているから声を掛けてくるように言い聞かせただけである。

まあ最悪会えなくても、フレンド登録はしてある。連絡は、オンラインでなら可能である。

「もうすぐ12時半だねえ。ハズミちゃん、それっぽい子いる？」

「……変なお子様っぽい不審者ならいるが」

アーケードの入り口の街灯の柱の後ろに、隠れるようにしてこちらを伺う少女が一人。本人は見えていないつもりのようなのだが、腰まである金髪がやたらと目立っている。

大井蒼空町には、意外に外国人居住者が多い。子供もそうで、弾美の学年にも何人か肌や瞳の色が違う子が居たりする。企業に優秀な人材を、幅広く募った結果だとも言われている。

瑠璃が立ち上がり、コロンの手綱を弾美に預けると少女に歩み寄って行った。金髪少女は一瞬逃げ出しそうになったが、近付いて来るのが優しそうなお姉さん一人だと気付くと、おずおずと柱の影から姿を現す。

しばしその場で話し合う少女二人。緊張気味なのがその仕種から見て取れる。やがて落ち着いて来たのか、瑠璃が少女の手を取ってこちらに嬉しそうに歩いて戻って来た。

後ろに従う少女は、何となく恥ずかしげにぽおつとしている。

「美井奈ちゃん、こっちがお隣の立花ハズミちゃん。私の幼馴染だよっ」

「はっ、始めましてっ、橋本ジュリス美井奈ですっ！」

「おうっ、何か外人に見えるけど、日本語上手いな」

「はっ、はいっ……日本語しか喋れないので！」

「何だ、なんちゃって外国人か！」

「よく分かりませんが、済みませんっ！」

緊張気味に言葉を発する美井奈に、瑠璃は手を繋いだまま落ち着くよう話し掛ける。さすがに悪目立ちの人の目が増えたような気がして、その元凶の少女に平静さを取り戻して欲しいがため。

弾美も面白がってはいたが、瑠璃の心情を察したのだから。さり気なく場所を移そうと提案すると、近くにあるいつもの洋食屋さんの名前を口にする。

大型犬が、歩き出した美井奈に追従して左右を囲んだ時、少女が思わず驚いて瑠璃に抱きついたのは、多分仕方の無い事だろう。瑠璃は大丈夫と安心させる言葉を発するが、少女の緊張はそう簡単には取れそうも無い感じである。

弾美は、本当は心優しい犬達が傷つかないよう、内心で祈っていたり。

\*

\*

場所をいつものオープンテラスに移動して、三人と二匹はランチタイム。なかなか緊張の取れない美井奈は、図体の大きな兄弟犬にも未だにビビリ気味だったり。

注文を終えると、弾美がメインになって話を始める。内容はイン可能な時間だったり、メイン世界のキャラレベルだったり、小学校

でどの程度フランスカが流行っているかなどなど。

答えやすい質問は、段々と美井奈の緊張をほぐして来たよう。

「はいっ、放課後から夕方までの時間はどの曜日も平気ですっ！

夕御飯とお風呂は6時半から8時の間です。夜は10時半には大抵眠くなっちゃいますねえ」

「私、ゲームを始めたばかりで……メインは全然レベル高くないです。30くらい？」

「男の子がよくゲームの話してますけど、女の子はあんまり居ないですかねえ？ あ、私はゲームセンターの前のポスター見て、楽しそうだなあって思って親に申し込んでもらったんです！」

「イベント参加は、じつは今回が初めてで……勝手が全然分んなくって」

会話が進むにつれ、ようやく硬さがほぐれて来たのか、美井奈は段々と饒舌になる。元々は人懐っこくて元気な子なのだろう。見た目は完全に、金髪碧眼のお人形さんのような可憐で可愛い女の子なのだ。

そんな少女が丁寧な日本語を話す違和感に、弾美は少し眩暈を覚える。

「あ〜っ、私も一緒だ。私もいつもそのくらいに眠っちゃっ」

「私はねえ、ハズミちゃんに誘われて始めたの」

「ハズミちゃんはねえ、中学生同士でギルド作ってて、そのリーダーやってるの。10人くらいいて、私もその一員だよ」

瑠璃の相槌も、ほんわかとした雰囲気を作り出すのに役に立っているのだろう。女性のプレイヤーが周囲に多くないせいか、美井奈も積極的に瑠璃とコミュニケーションを取っている。

美井奈の服装は、二人とは対照的に細かなパーツであしらえた、

お洒落感漂う衣装。それが良く似合っていて、普段の散歩着の二人が逆に浮いて見える。

垢抜けているが、逆に小学生に見えない。アンバランスな華やかさが一際目立つ少女だ。

ようやくテーブルに届いたランチセットとスパゲティセットに、三人は揃って食事を始める。女性陣二人の食事の仕方を何となく見比べ、弾美は吹き出しそうになった。

年恰好は実年齢より大人っぽい美井奈だが、食べ方はまるでお子様。逆に瑠璃はもの凄くきちっとしたお行儀の良さを発揮している。瑠璃の方が、逆に歳不相応でさえある。

不審気にこちらを見る二人に、弾美は慌てて話をそらした。

「それにしても、あんな朝からパーティ待ちしてたのか。美井奈は根性あるな」

「ええ……正直3日も待ちぼうけだったので、結構辛かったです」

「ええっ、3日も待ったの？ それは大変だったねえ……」

「いえ、それはいいんですが……そのう……」

その後美井奈は手に持つフォークを止め、ちょっと押し黙っているにも言い辛そうに二人を上目遣いに見つめた。何かと身構える弾美と、心配そうに見つめる瑠璃。

美井奈の口に出された台詞は、ゲーマーとしては確かに言い辛い内容だった。

「私……既に2回ゲームオーバーで、ライフポイントが1個しか残っていないんです……」

「ん……？ ステージ4到達で、1個増えるって話じゃ無かったか？」

「ええ……到達前に1回死んで減ったポイントは、ステージ到達し

て増えはしたんですが……。あまりに誘われずに暇だったので、ちよっと扉の中が見たくなつて。ソコで入ってみたら、戻れなくなつちやつて奥に進んだら敵に絡まれて死んじゃつて……」

やつちやつた告白に、顔を見合わせる弾美と瑠璃。確かにそれは、これからパーティーを組むにしても厳しいものがある。何しろ、1回でも全滅なり死亡なりすれば、ミイナはイベント世界から完全になくなるのだ。

組んで行動するこちらにも、いきなり欠員が出れば大変なりリスクを背負う事になる。

「むう……。それは厳しいな。って言うか、アホだな」

「だ、大丈夫よ……。ねえ、ハズミちゃん！」

厳しいと言つてるだろうにと、弾美は瑠璃をジトツと睨む。けれども瑠璃も必死に眼力で応戦、しゅんとなつている美井奈の為に、励ます言葉を弾美に言わせようと圧力をかけて来る。

幼馴染みだから出来る、目と目での通じ合い。

しばし無言の、眼力での壮絶な空中戦。それに反応したのは、何故か机の下に寝そべっていたコロンだった。急にのそりと起き上がり、談美の太腿の上に顔を乗せて来る。

ケンカをしないで……。ここはジブンに免じて許してあげて。コロンのつぶらな瞳がそう言っているようで、弾美は思いつ切り怯んでしまう。マロンはマロンで、どちらの味方をするべきか迷っている様子。視線が忙しなく動いているが、何故か弾美とは目を合わせようとしない。

自分の味方はいないのかと、弾美は天を仰ぎたくなつた。

「……分かつた、それじゃあパーティーに加える条件としてひとつ、

新しく付け加えさせてくれ。要約すると全部で3つだな。インの時間は必ず守る、攻略が遅くても文句は言わない、ミイナの育成方針は俺と瑠璃に必ず相談する事、以上だ！」

「……………神様」

美井奈は陶醉した表情で、弾美を仰ぎ見る。年下の少女の尊敬と崇拜、場違いな感情の露呈に、軽い気持ちでの了承を出した弾美は再び眩暈を覚えた。

軽く後悔しつつ、逃げ場は無いかと自然に視線が彷徨うのが自分でも分かる。

「神様って言うなっ！ 条件を守れるか、美井奈？」

「は、はいっ！ 全然オツケーですっ……………ってか、それをお願いします、お兄様っ！」

「お兄様もよせっ！」

瑠璃は思わず吹き出して、慌てて自分の口元を隠す。せっかく弾美が折れてくれたのに、不機嫌になられたら元も子もない。内心で気持ちを落ち着かせ、嬉しそうに顔の前で手を組み合わせて弾美に感謝の声を掛ける。

気持ちの昂りは美井奈も同じで、飛び上がらんばかりに嬉しそう。満面の笑みのまま思わず隣の席の瑠璃に抱きついて、瑠璃に向かってお姉様っ と嬌声をあげる。

瑠璃の笑顔も、この辺りで凍りつきそうに。

「ね、ねえっ、休みの日は三人で同じ部屋でインするのはどうかなあ？ 意志の伝達とか指示の速度とか、キーボード使って会話するのは全然違うから、パーティィするのにすぐ馴染むかも」

「あゝ、確かにそうだなあ……………美井奈が良ければ、ウチに来ても構わないけど。瑠璃の家に、モニターとかコントローラーの予備はあ



「たっけ？」

瑠璃は予備はあとと答え、美井奈は是非遊びに行きたいと答えたので、話ほとんどん拍子に合意に至った。何にしる、散々難航した新パーティの結成に、三人はほつと安堵感をにじませる。

前途は多難かも知れないがと、内心弾美は冷や汗たらたら。

昼食の会計は美井奈が絶対、何が何でも払うと言い張ったので。

年上の二人は、少女の顔を立たせて結局は奢ってもらう事に。その代わりにゲームセンターの人形を見たいと、ゲームの時の話に出て来たネタに年下の少女は飛びついた。

やはり小学生で女の子、ゲームセンターの前は通るものの、そういう場所には入った事は無いと言う。そんな訳で、一緒に入ってみようと、三人でアーケード通りへと移動……

の前に、二匹の兄弟犬をマリモに預かってもらいに。

「へ、お二人はマリモの店長さんとお知り合いなんですか。私ん家も熱帯魚でお世話になってるんですよ！」

「店長さんもゲームするしねえ。夕方からお店のお手伝いを約束してるの」

アーケード通りは今日も程々の混雑具合。人混みを避けるように端っこを歩いていた三人だったが、瑠璃が店並みの一つにあるものを見つけて弾美に報告した。

ゲーム内広告も、立派に宣伝効果はある様子。

「あつ、ハズミちゃん。佐々木ドラッグにフランスカ協賛のポスターが貼ってある……」

「むっ、それは何かを買わないと駄目だな。お小遣いのお礼に、両親に栄養ドリンクでも……」

「あゝ、ゲームの中でのポスターって、こういう意味だったんですか！」

「エリクサー貰ったもんねえ、ちょっと待っててね、美井奈ちゃん」

美井奈は感心する事しきり、店頭のポスターに書いてある『ゲーム内でエリクサー配信中！』の文字を声に出して読み上げている。自分も貰ったのは確かだが、こういう形式の宣伝になっているとは考えもつかなかった。

現実とゲーム世界のリンク、何だか面白い。

美井奈が呆けている内に、弾美と瑠璃は素早く買い物を済ませてしまっていた。そのままゲームセンターへと歩くこと2分、店内は相変わらずの賑やかさ。

店頭にいても、その喧騒ははつきり分かるほど。

それでも幸いな事に、目的のクレーンゲーム前は、以前に来た時ほど混んではいなかった。是非ぬいぐるみをゲットしたいと言う美井奈のために、列の最後尾に並ぶ三人。

列に並んでいる最中やたらとハイテンションな美井奈に、弾美は気になった質問を口にする。

「美井奈、クレーンゲームやったことあるのか？」

「いいえ、一回もないです！」

「……取れる自信は？」

「お兄さん、取ってくださいー！」

「あ、じゃあ私の分もお願い、ハズミちゃん」

女性陣二人に頼られるのは悪くない気分だが、弾美もそれ程クレインで遊んだ事は無い。全然自信がないと伝えるも、自分達よりはマシだと返って来る答えは同じ。

先頭的美井奈に早くも順番が廻って来て、少女は呑気に小さく書かれた説明文を読み始める。景品が大きいせいか新物のせいか、1プレイが2000円と結構割高である。

説明文を読み終えた美井奈は3プレイ5000円を発見、迷わず硬貨を投入。

「お兄さん、早速ですがお願いします！」

「最初から頼るなっ！　ってか、何を取るか決めないと話にならないぞっ」

「あっ、そうか。じゃあ……あの雷っ娘の人形お願いします！」

結果として、三人で10000円を投入。6回のチャレンジの3回目に、美井奈の欲しがっていた人形は取れたものの。6回目の最後の1回は弾美の渾身、執念のトライ。

1個の人形に10000円なんて、冗談ではない。

「わっ、わっ、アームが何か掴んでるよハズミちゃん！」

「やりました、お兄さんっ！　2個目ゲットですよっ！」

アームの掴んだ人形は、何とか無事に取り出し口まで到達した模様である。転がるように出て来たのは、今日は偶然取りやすい場所に配置されていた人形。

へソクリにゃんこだった。

\* \* \*

その他の場所も三人で結構歩き回ったせいで、時間はあっという間に過ぎて行き。一行の親密度も、それなりに上昇した模様。美井奈の二人の呼び方も、一応の落ち着きをみせつつ。

懐いた美井奈は、何故かペットショップのお手伝いまでついて来

る有り様。

「……ひよっとして、美井奈は一人っ子か？」

「はい、お兄さん……何で分かったんですか？」

「お前の行動パターンは、実に分かりやすく面白いわ！」

「よく言われます！ 私、お兄さんかお姉さん、欲しかったんですよえ……」

遠い目をして言われても、こちらにはいかんともし難く。妹は年上の兄弟に理不尽にこき使われるものだという刷り込みを与えるべく。弾美は店内でのエプロン支給後、美井奈に店内掃除の指令を与える。

瑠璃はどうしたものかと戸惑っていたが、楽しそうにお手伝いをする美井奈を見て口出ししない事に。今日はお客も多い様子で、それでも大変だったし。

美井奈はマリモの店長ともすぐに仲良くなれたようで、取り敢えずは一安心。夕食離脱の時間まで頑張ってくれた小さな店員に、店長も感謝していたようだ。

後は、弾美が帰りに言い渡した、今夜の様子見インを頑張るだけである。

\*

\*

掻き集めた装備はNMのドロップ品も含め、それなりの性能を誇っていた。何よりも、ほぼ全部揃っているのが強み。問題があるとすれば、ミイナが遠隔スキルを伸ばしていない事。

お昼の会合後には、どうやら弾美のミイナ改造計画案は整っていたようだ。まあ、ライフポイントが1しか残っていないキャラを、前衛に押し出すのは無謀と言う事もあって。後衛の弓矢持ち遠隔キアラ、ここまででは我ながら良い案だと弾美は自画自賛。

ただ、せめてミイナの弓の熟練度を上げないと、敵に与えるダメージが期待出来ない。熟練度を上げるためには、ひたすらその武器を使う事が必須となって来る。

つまりは時間が必要である。

そんな訳で、お昼の会合の合間に飛び出した、今夜の様子見イン作戦。弾美の大丈夫だから、取り敢えずミイナの経験値を稼ごうと言言葉を受けて、一応は皆の合意を得るに至り。

夜の8時、それぞれの家からの限定イベントエリアへの接続と相成った訳だ。思いは三人三様、呑気だったり心配だったり、はたまたひたすら感動していたり。

まあ、緊張でコントローラーも操れないよりは、具合は良いかも知れないが。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：11

取得スキル : 水10《ヒール》 : 光17《ライトヒール》

種族スキル : 雷11《攻撃速度UP+3%》

装備 : 武器 粗末な長棒 攻撃力+6《耐久10/11》

: 遠隔 木の弓 攻撃力+8《耐久11/11》

: 筒 木の矢 攻撃力+6

: 頭 白いバンダナ 光スキル+3、武器スキル+1、

防+3

: 首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

2、防+2

: 耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

: 耳2 玉のピアス 防+1

: 胴 木綿のローブ MP+3、光スキル+1、防+4

: 腕輪 皮のグローブ 防+4

・指輪 1 皮の指輪 防+2  
・指輪 2 皮の指輪 防+2  
・腰 皮のベルト 防+2  
・背 皮のマント 防+2  
・両脚 皮のズボン 防+4  
・両足 皮のブーツ 防+3

ポケット(最大3) : 小ポーション : 小ポーション : 万能薬

二人に渡された装備を身にまとい、あっという間に劇的な変身を遂げたミイナ。装備欄が次々と埋まって行くに従って、雷娘は何と使えるキャラに変貌を遂げる。

二人の情けが身に染みて、少女は思わずモニターの前で泣きそうに。

「神様……見捨てないで下さってありがとうございます……！」

一方の瑠璃は気が気ではない。何しろステージ4の情報はほとんど無いし、美井奈はともかく自分達は15分しか時間が残されてないし。さらに言うと、美井奈は一度も死ねないし。

弾美にそう言っても、やっぱり返ってくる言葉は大丈夫、平気だからの一点張り。

『心配し過ぎだ、瑠璃。美井奈、装備終わったか?』

『はっ、はい隊長! 矢の予備が1セットしか無いですが平気ですよっか?』

『30分で戻るから平気。って、本当に30分でエリア離脱出来るんだろっか?』

『その前に死んだから分かりませんが、妖精はそう言っていました!』

準備の合間に、瑠璃は朝と同じく防具屋のチェック。朝に見かけた性能の良いベルト装備をミイナに買ってあげようとしたのだが、今は在庫切れなのか置いていない様子。

シヨックを受けつつ佇んでいると、弾美から集合の合図が届く。

『順番廻って来たぞ、扉前に集合！』

『了解！』

さすがに夜のこの時間ともなると、扉前は結構他の冒険者の列で混んでいた。それでも今夜は、以前2日目に体験した超混雑振りとは程遠い感じである。

それもその筈、イベント参加者の半数以上は、既にもっと上のステージに達している。さらにパーティが三人制になった事で、パーティの数自体が凝縮され、待ち時間が短縮されているよう。

10分程度の待ちで、弾美達のパーティに順番が廻って来た。

『ハズミちゃん、合成屋で色々消耗品が作れたよ？ 合鍵とか神水とか、待ち時間でちよつとだけ合成して貰ったけど……』  
『いらんっ、とにかく突入！ ……いや、神水1個くれっ、瑠璃』

神水は一定時間だけHPがちよつとずつ回復して行く、とても便利な回復薬。合鍵はその名の通り、鍵の掛かった宝箱や扉を開く事が出来る消耗アイテム。

どちらも冒険やダンジョン攻略には必須アイテムで、普通なら持てるだけ買い込むもののだが。今は後回しで良いと弾美は判断。せつかく廻ってきた突入順序は、なるべく譲りたくない。

瑠璃からのトレードで、ハズミンは神水を2個ゲット。突入準備は完了。

「昼にも言ったが、今夜は美井奈の弓の熟練度上げと、経験値稼ぎだからな！ エリア攻略は無視して、美井奈がたくさん敵を見掛け たって言うこの扉に入るぞ！」

「はいっ、お手数かけますっ！ お願いします！」

「そ、そうだね……わかった。美井奈ちゃん、頑張ろう！」

「はいっ、お姉ちゃま！」

独特の緊張感のエリアインのブラックアウト後、三人が入り込んだのは白い宮殿のような大通路。白い柱が等間隔に立ち並び、壁も天井も白い石板造りとなっている。

肝心の敵影は、至る所にうようよ確認する事が出来た。取り敢えずそいつらを見無視して、念の為に美井奈の情報の確認。弾美は、今は閉まっている入って来た扉をチェックする。

途端に、リュックから勝手に出現する妖精。

えっ、もうここから出るつもり？ アナタってばせっかちな のネ！ 残念ながら、扉には仕掛けがしてあるから、30分経過するまでは開かないようになってるみたいネ

もう一つ、ここを出る手段は奥の仕掛けを作動させることかな？ クリアタイムによつてはご褒美上げるから、頑張つてネ

……なるほど、こんな仕掛けがあったとは。弾美は軽くシヨックを受けつつ、今までの妖精関係の仕掛けを見無視していた事を軽く後悔。実際、ただのお笑い担当キャラかと思っていたのだが。

二人が指示を待つて話し掛けて来るのに我に返り、弾美はミイナに狩りの指令を下す。とにかく、熟練度は武器を使用しないと上がらない仕様なのだから。

武器による攻撃ダメージを上げるには、実は色々方法が存在する。スキルを上げたり熟練度を上げたりするのが一般的で、時間が



あれば割と簡単でもある。

他の方法で言えば、より攻撃力の高い武器を手に入れるか、キャラの腕力を上げたりなど多様だが。こちらはキャラバランスや入手経路などの関係もあって、気軽に取れる手段でも無い。

スキルの上昇は、レベルアップなどで貰えるポイントを振る事で上げるのが通常である。つまりはどんな戦い方で経験値を稼ごうが、スキルさえ振り込めば望む武器のダメージは増えるのだ。もちろん一定ポイントで、スキル技を覚える事も可能である。

つまりは、極端な話をしてしまえば、片手剣で経験値を稼ぎ得たスキルポイントがあつたとして。それを細剣に振り込めば、細剣のダメージの上昇が可能なのだ。

変な話だが、スキルポイントとはそう言うものだから仕方がない。

一方、熟練度はそれとは正反対。その武器を振るう事でのみ上昇し、経験値を貰えない敵であつても、武器の熟練度内の適正レベルであつたら上昇する。なので、スキルを振り込んでいない武器であっても、ある程度までは高いダメージを出す事も可能。

ただ、スキル技を覚えてないと、戦闘に華が無く寂しいというデメリットが。

熟練度を上げる事で、武器の耐久度の消耗具合を軽減出来たり、スキル技の命中率が上がったたりする事も分かっている。そのためベテランの前衛キャラは、この値を疎かにはしない。

そしてそれは、もちろん遠隔武器にも言える事なのだ。

『ミイナ、遠慮せずバンバン撃ちまくれっ！ 寄って来た敵は、俺と瑠璃がやっつけるから』

『了解しましたっ！ ミイナ、バンバン撃ちまくりますっ！』

言い終わった後に、ミイナはちょこちょこ前に移動。次に1匹

だけ離れている敵を見つけると、ちよつと間をおいてピツと矢を射掛ける。それから敵がこちらを向くのも確認せず、脱兎の如く駆け戻って来る。

ハズミンが向かってきた敵に、すかさず殴り掛かってタゲを取る。弾美のオツケーの声の後は、皆で攻撃を仕掛けて止めを刺す。最初の戦闘後にルリルリは、思い出したように皆に防御魔法を掛け、自身に光の付加呪文を。

その後、ミイナが新しい敵を釣ってくるまで、大人しくヒーリング。

初めはたどたどしかった美井奈の釣りも、段々と様になってきた感じ。瑠璃もようやく三人での戦闘に慣れ始め、殴りとサポート回復の按配もきっちり確認してこなし始めているよう。

敵の種類は獣人や蛮族、鳥やサルなどの動物系で占められていた。獣人はギルやコイン、素材系のドロップを、蛮族は良く分からない薬品や武器などのドロップが目立つ。

相談というよりは半ば押し付けで、ドロップ管理は瑠璃の仕事になっている。お陰で瑠璃のカバンは常にパンパンで、何を幾つ持っているのか把握がもの凄く大変だったり。

幸いこのゲーム、カバンの容量は最初から結構大きい。

『あれ、今の武器は……インゴットにして、防具に打ち直して貰えるんだっけ？』

『知らん……ってか、どのキャラにも装備出来ないアイテムだから、そうかもなあ』

『きゃ〜、隊長！ また飛び道具持ちの蛮族を釣ってしまいました！』

飛び道具持ちの敵は、弓で釣っても遠隔での反撃があるので、安心し切っているととても痛い目に合う。範囲外に逃げないと追い掛

けて来ないし、釣りに慣れていないと怖い敵である。  
しかし弾美は思う。ログ打っている間に逃げて来いよ、と。

瑠璃が前に出て、HPを減らして戻ってくるミイナに回復魔法を飛ばす。律儀に礼を言う美井奈に、弾美は疲れたように1本でも多く矢を射るように再度命令。

今夜だけで、既に5回目くらいの遣り取りに、さすがに弾美も眉間にしわが寄り始める。

そんな事を繰り返すうちに、弾美と瑠璃の2時間縛りが発動。妖精の忠告と共に、HPが徐々に減り始める毒状態。弾美は慌てず騒がず、瑠璃が合成屋で作って貰った神水を使用。

これは5分は持つ優れものアイテムだった筈だが、残念ながら二人とも2本ずつしか所持していない。明日のイン時には、忘れずに再度入手しようと弾美は決心する。

まあ、忘れてても瑠璃が覚えているだろうが。

『あゝ、最初の15分の毒状態と神水の回復効果、丁度ダメージ相殺されるくらいかなあ？ これなら15分くらいのオーバーなら、何とか持つかも知れないねえ』

『だから平気だと言っただろ。狩りを続けるぞ、ミイナ』

『さすが隊長です！ 的確な判断、ナイスですっ！』

『ミイナ……いいからお前は釣りに集中しろっ！ キーボードに触る時間が惜しいっ！』

『えっつ、それは失礼に当たるじゃないですか！ 第一、喋らないと面白くないです！』

弾美はとうとう、モニター前に座っているのに立ち眩みに似た感覚を覚える。美井奈の辞書には、どうやらゲームー根性という言葉は載っていないようだ。純粹にゲームを楽しむもうと意気込むその姿

に、弾美はむしろ諦めに似た爽快感さえ感じ始めたり。

人種が違うよ、この子。でもまあ、一緒にゲームを楽しもうとする気持ちがあるならいいか。

『え〜と……ミイナちゃん、残り時間頑張ろう？』

『了解です！』

恐らく、今の弾美の心理状態を的確に察したのであろう瑠璃が、上手に美井奈を言葉で誘導。ダンジョン内の狩りは、何も無かったように再開する。そんな筈は無いのだが、ポリゴンで出来たルリルリが、モニター内で必要以上にギグシャクしている感じを受けてしま

う。爆弾はね、爆発したら自分自身も被害を受けちゃうんだよ〜、と表現しているようないいな。

『瑠璃……俺はそこまで癩癩持ちじゃないぞ？』

『そ、そう……？』

『むしろ今は、心穏やかだ』

『そ、そう………？』

『？ 何の話ですか？』

二人は揃って、何でもないと同時に返信。それから3匹目の敵を倒した所で、めでたくミイナがレベルアップ。瞬く光にキャラが包まれ、レベル12に上昇したとのログ通達がなされる。

おめでとう、ありがとうを女性陣が言い合う合間に、弾美の指示が飛ぶ。

『ステータスは敏捷度に、スキルは遠隔に全部振り込め〜』

『はい、隊長！ あっ、スキルポイント2ポイント保留していましたが、それも遠隔でいいですか？』

『もちろんだ！　じゃあ、今遠隔は4かあ』  
『バンダナの効果が、遠隔武器にも効いてるみたいですねえ。スキルは5つて表示されてます！』

それでもまだまだ半分、スキル技取得には程遠い感じた。弾美は自分のキャラも一応チェック、経験値は半分近く貯まっている。やっぱり、メイン世界より断然成長が速い。

短いイベント期間でテンポ良く成長出来るよう、調整がなされているのだろう。

2本目の神水の効果が切れると、そろそろ無理も出来ない。ダメージ状態ではヒーリングも出来ないし、そうなると魔法も安直に飛ばせなくなる。弾美はミイナに釣りのペースを落とすように指示を出し、狩りを慎重に指揮し始める。

残り時間が過ぎると、弾美は扉チェック。妖精の言葉に嘘は無く、三人はエリアを後に出来た。

『良かった、みんな無事だったよ』

『はいっ、レベルも上がったし、ありがとございました！』

『やるせない程に元気だな、美井奈……』

『そうですか？』

いつもの半分にも満たないイン時間なのに、いつもの倍は疲れた気のする弾美。美井奈の無軌道振りには調子を狂わされたが、まあやる気が無いとか自己中で我侷だという痛い理由ではないだけ良いとしたい。

ゲームの腕はともかく、礼儀だけは申し分なく、しかも元気は売る程ある。新メンバーを迎えて不安は少々あったが、何とかやって行ける手応えは何故か充分に感じた弾美であった。

何故だろうと一瞬疑問が頭をよぎるのだが……答えはもちろん帰

って来ない。瑠璃も美井奈を気に入っているし、それだけでも納得する理由としてはOKだろう。

『今日はもう解散でいいのかな、ハズミちゃん？』

『ああ、明日はウチで朝9時から合同インな。美井奈が俺の家までの道のりが分らないだろうから、途中まで迎えに行っちゃれよ、瑠璃』

『うん、分った。よろしくね、美井奈ちゃん』

『お手数かけます、お姉ちゃまつ！』

……まあ、いい拾い物をしたと思う。いや、そう思いたい。弾美の思考はぐるぐると同じ場所を巡っては、美井奈の妹属性攻撃に怯んだ音色を軋ませる。

まあ、瑠璃もその呼び方を気に入っているなら、それはそれでOK、か？

## 06 連休最後の合同イン！（前書き）

うっ、連休中の仕事での疲労を思い出すと、今でもゾツとしますけど（笑）。昨日は全社会議と言うのが四国の松山であって、車を飛ばして行って参りました。

片道、約4時間程度……雨が降ってて高速が怖かった（笑）。

残念ながら、観光とかは全く出来なかつたんですけどね。会議とは名ばかりで、会長さんの話を聞いたりバーベキューを食べたりと色々。ポロツちい本社にいるよりも、車の中にいる時間の方が長かったという。

疲れたけど、とにかく投稿ペースは崩さない構えです（笑）。

自分の仕事先にも土日には、割と子供が訪れて来ますね。弾美達と同じ中学2年生の子もいれば、美井奈よりもっと小さい子供もいたりして。週末の忙しさも相当な物ですが、子供達からパワーを貰って乗り切ってます（笑）。

この小説の登場人物達からも、読んだ皆さんがちょっとでもパワーを貰えるといいですね。今では学生時代にもっと学んでおけば良かったかなと思いつつ、あの頃の自由さが懐かしくもあつたりして今は使えるお金に少しだけ自由が増えたけど、果たしてどちらが良いのかは判然としません。まあ、人間は学ぼうと思えば年齢は関係ないんですけどね。

自分としては、もうちょっと小説を書いたりゲームしたり出来る自由な時間が欲しいです（笑）。

## 06 連休最後の合同イン!

時間はもうすぐ朝の9時、今日も爽やかな良い天気恵まれている。午後になれば日差しが幾分強く感じる事だろうと、瑠璃は待ち合わせ場所の住宅街の外れの公園前で思考を巡らせる。

そうなるともう、春つららなどと言っていてられない、初夏にシフトする季節感を味わう事になる。

公園内には人影は無し、祝日の朝の早い時間だから当然とも言える。子供だけで遊ぼうと思ったら、少し歩けば大きな公園が学区エリアの端に存在するのだ。弾美と瑠璃が毎朝ジョギングで訪れる、立派な敷地面積を誇る運動公園が。

今日も早朝に、犬達の散歩に出掛けたばかり。

今日はこの連休中恒例となっていた、早朝からのイベント攻略は取り止めになっている。その代わり、新パーティー仲間である美井奈を招いて、朝9時からの合同インの運びとなったのだが。

合同インの企画者の瑠璃が、美井奈が住宅街の番地だけで弾美の家を探すのは大変だろうと。遊びに訪れる予定の、少女との待ち合わせ場所を公園に指定したのだった。

そんな訳で、10分前から美井奈が現れるのを待っている。

昨日話した感じでは、少女ははきはきした感じの人懐っこい素直な性格に見て取れた。もろ外人風の外見や、たまに突飛な行動を取るのにはちよつと驚いたけれど。

何より弾美の性格と言うかペースと言うかノリに、自然に付いて来れる所が良い。

「瑠璃お姉ちゃま〜!」



自分を姉と慕ってくれる所も、もちろん良い。……呼び方はちょっとアレだが。ちょっとだけ駆け足で、レンガ歩道をこちらへと向かって来る美井奈に、瑠璃は軽く手を振った。

完全な駆け足で無い理由は、すぐに判明。片手と言うか両手で抱えないと重いのではないかという感じの荷物を持参している様だ。予備モニターはこちらで用意すると言っておいたので、コントローラーと布巻きタイプのキーボードだけ持って来ている筈なのだが。

「おはよう、美井奈ちゃん。……荷物重そうだけど、何が入ってるの？」

「えへへ、昨日の事母さまに話したら、お礼とお近付きの印にお土産持って行きなさいって」

「あらあら、そんなお気遣いは無用なのに。お母さんにお礼言っておいてね？」

瑠璃の返答に、美井奈は嬉しそうな笑みを顔いっぱいに広げ、やっぱりお姉様っぽい発言だと口にした。自然に手を繋いで来る美井奈に瑠璃は何となく照れながら、荷物を持ってあげる。

美井奈の突飛な行動は、余り気にしない事に。どうせ歩いて3分の距離だ。

弾美の家の中に案内されると、美井奈は好奇心を丸出しにして家の中を見て回りがった。自分の家がマンションだし、モデルルームの珍しさもあつたのだろう。瑠璃は少女を落ち着かせるのに一苦労。

コロンの行動を思わせる美井奈に、朝からペースを狂わされっ放しだ。

「さっさとコントロールを繋げ、美井奈。イベントエリアが混み出

したら、余計な時間が掛かる！」

「は、はいっ。お兄様っ！」

「お兄様はやめろっ！」

鶴の一声、弾美の言葉には素直に従う美井奈に、瑠璃もちょっと一安心。思えば、マロンもこんな感じで弾美は調教していたっけと、瑠璃は思い至る。

何というか、懐かれるだけでは良しとせず、適度な距離を置くことも必要なのだと実感。津嶋家は女性の方が強いので、どうしても情が先走ってしまうのではと、瑠璃は思いに耽ってしまう。

昨日読んだ恋愛小説も、情が深すぎたせいで途中から憎愛劇になっっていたし。

以後気をつけようと、歳不相応の感情を泳がせる瑠璃であった。

\*

\*

昨日のお遊び的な経験値と熟練度アップ目的のエリア突入とは違い、今朝のパーティにはどこか緊張感が溢れていた。先程まではしゃいでた美井奈の面影は、コントローラーを握ってモニター前に居座る今は全く無い。その緊張を察した瑠璃も、つられて表情が固くなる。

本格的な三人パーティでの行動だし、よそ様の家にお邪魔している緊張もあるのだろうし。さらに一度のゲームオーバーも許されない美井奈の心情を考えれば、ガチガチになるのも仕方ないとは弾美も思うのだが。

しかし何故瑠璃まで緊張しているのかは、弾美には理解不能。

「……なんで瑠璃まで緊張してる？」

「だって美井奈ちゃん、一回死んだらイベント終了だよ？　しっか

り守ってあげないと！」

「どうやら瑠璃は美井奈の妹属性に、すっかり脳を浸蝕されてしまっているようだ。弾美はため息をついて、今日の攻略手順を頭の中のリストから引っ張り出す。

慎重に行こうとは思っていたが、これはさらに時間を掛ける必要があるかも。

「あゝ、今日はゆっくり行こうな？ 2時間で2エリア攻略、行けそうなら3つ行く感じで。昨日のフォーメーションを復習しながら行くから……装備チエックいいな？」

そう言いながらも、弾美は自分の装備やアイテムをチエック。妖精もちやつかり使用したが、昨日のようなプレゼントは用意されていない模様。進達の話では、小ポーションなどの薬品を貰える事もあるそうなのだが。

「ここの辺はランダムなのか、いまいち法則がよく分らない。弾美はハズミンの武器の耐久度をチエックし、ポケットの薬品も抜かりなく使い易いように組み替える。

他にも色々、朝の内にアイテム合成で薬品や防具を仕入れた弾美と瑠璃。やや割高だったが、ポケットが倍に増えるベルトも購入しておいて良かったと思う。

これでいざという時の状態異常にも、素早く対応出来る。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：14

取得スキル : 片手剣27《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

: 闇14《SPヒール》

種族スキル : 闇14《敵感知》

装備 : 武器 シミター 攻撃力+10《耐久12/12》

防+3

・盾 木の盾 防+4 《耐久7/7》  
・頭 黒いバンダナ 闇スキル+3、SP+10%、

・首 皮の首輪 防+1

・耳1 玉のピアス 防+1

・耳2 白玉のピアス HP+5、防+1

・胴 皮の服 防+6

・腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

・指輪1 皮の指輪 防+2

・指輪2 皮の指輪 防+2

・背 皮のマント 防+2

・腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

・両脚 なめしズボン 攻撃力+1、防+5

・両足 皮のブーツ 防+3

ポケット(最大6)

・小ポーション : 小ポーション : 万能薬

・中ポーション : 中ポーション : 万

能薬

もつとも、薬品に頼ってばかりいると、魔法を覚えている仲間達から非難と不審の目を向けられるだろうが。このあたりの調整が難しいと、弾美は内心冷や汗をかく。

何しろ、一度ヘソを曲げると瑠璃は いやいや、女は面倒。美井奈ですら、一応は女の子なのだし、仲間内に敵を作る愚策だけは何としても避けたいと、真剣に思う弾美だった。

弾美と瑠璃が、そんな感じで物思いにふけている頃。一番最後にインしてアイテムチェックをしていた美井奈が、不意に驚きの声

を上げた。隣で覗き込む二人にしきりに指差し、画面の中のログを見せびらかす。

ログを見るに、どうやら妖精チェックをした際に指輪をプレゼントされたらしい。

あらまあ、昨日あんなに尽くしてあげたのにまだこんな最下層でウロウロしてるの？ 仕方ないなあ……アナタつてば以下略

妖精の指輪 光スキル+2、風スキル+2 HP+2 防+2

「おおつ、結構いい性能だな。得したな、美井奈！」

「嬉しい〜、私初めて妖精さんに防具もらいました〜！」

「良かったね〜、美井奈ちゃん！」

はしゃぎながらも、美井奈は貰ったばかりの指輪を早速装備。瑠璃が朝一で仕入れてくれていた高性能のベルトも、泣きたくなる程嬉しかったのは言うまでも無く。お礼に一刻も早く、仲間に信頼されるような頼もしいキャラになりたいと願う美井奈。

メイン世界では湧かなかった感情に、戸惑いつつも新たな決意表明。

「私っ、頼られるくらい強くなりますっ！」

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：12

取得スキル : 水10《ヒール》 : 光19《ライトヒール》

種族スキル : 雷12《攻撃速度UP+3%》

装備 : 武器 粗末な長棒 攻撃力+6《耐久10/11》

: 遠隔 木の弓 攻撃力+8《耐久11/11》

防+3

：筒 木の矢 攻撃力+6

：頭 白いバンダナ 光スキル+3、武器スキル+1、

2、防+2

：首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

：耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

：耳2 玉のピアス 防+1

：胴 木綿のローブ MP+3、光スキル+1、防+4

：腕輪 皮のグローブ 防+4

：指輪1 皮の指輪 防+2

：指輪2 妖精の指輪 光スキル+2、風スキル+2

HP+2 防+2

：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

：背 皮のマント 防+2

：両脚 皮のズボン 防+4

：両足 皮のブーツ 防+3

ポケット(最大6) 小ポーション 小ポーション 小ポーション  
：小ポーション 小ポーション 小ポーション

：小エーテル 小エーテル 万能薬

一方、ルリルリは瑠璃の心配性な所や勤勉さを反映しているのか、取得魔法の数が一番多い。しかも回復や防御が得意な水属性の特性を發揮しており、縁の下の力持ち的な存在に。

美井奈がバリバリの前衛なら、もつと破壊力のあるパーティ編成を組めたのだろつが、それは言わないお約束。でこぼこっぽい組み合わせも楽しみつつ、瑠璃はパーティの支え役を今日も担うつもり充分である。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：14  
取得スキル 細剣16《二段突き》 光11《光属性付与

《水20《ヒール》 《ウォーターシエル》

種族スキル 水14《魔法回復量UP+10%》

装備 武器 ブロンズレイピア 攻撃力+8《耐久11/1

1

：頭 赤いバンダナ 火スキル+3、腕力+1、防+3  
：首 妖精のネックレス 光スキル+1、風スキル+

1 防+1

：耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1  
：耳2 青玉のピアス MP+5、防+1  
：胴 木綿のローブ MP+3、光スキル+1、防+4  
：腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4  
：指輪1 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

：指輪2 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

：背 皮のマント 防+2  
：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

：両脚 皮のズボン 防+4  
：両足 ゴレムのブーツ MP+3、防+2

ポケット(最大6) 小ポーション 小ポーション 万能薬  
小エーテル 小エーテル 万能薬

各自装備のチェックを終え、まず最初に入るのは昨日も経験値稼ぎにお世話になったエリア。ステージ4から扉の数が4枚に増えるのだが、どうやら最初に選べるのはその内の2枚のみとの妖精の話相変わらず、規則的な造りの石畳の通路が真っ直ぐに続くエリアである。両脇には太い柱が等間隔で並んでおり、たまに敵キャラの発見が遅れてしまう事態も。

釣り役の美井奈は、その度に大慌て。

今日は直接パーティ仲間の声の指示が出せる分、女性陣二人はともかく、弾美はリラックス出来る。美井奈に釣りの催促をして、エリア攻略は半ばまでは割と順調。

昨日のペースを思い出したのか、美井奈も調子に乗って来る。

「もつとどんどん釣って来ていいぞ、美井奈。敵を倒しながら奥に行く感じでな」

「このペースより速くていいんですね？ 分りました、隊長！」

「あ、隊長って呼び方はいいね？」

よく分からない、瑠璃のほのぼのとした突っ込みを無視しつつ。

リンクが厄介な獣人や蛮族の群れをひたすら撃破して進む事10分余り。ようやくマップに変化が現れて、壁の両サイドに佇む中ボスっぽいモンスターの影二つ。

左側の敵は、ステージ3のアスレチックエリアで見掛けた中ボスの大サソリ。尻尾の先端に炎が灯っており、両手の鋏も殴られると痛そう。右の敵は、もはやすっかりお馴染みのゴーレム。

動かない敵2体の後ろには、大きな扉が見える。どうやら扉のガーディアン模様。

「む、見慣れたサソリとゴーレムだな。近くの敵が再ポップしない



内に、ゴーレムから倒すか」

「サソリは私、見た事無いですね。特殊攻撃は、やっぱり毒ですか？」

「えっ、すぐ下のアスレチックエリアにいなかった？」

「見てないですねえ……そう言えば、ここに一人で入って死んじやった時、獣人は1匹も見掛けなかったし、まるで別のエリアみたいです。………なんででしょうか、隊長？」

弾美は眉をひそませ、以前自分で立てたイベント内でのレベル補正の仮説を修正。恐らく、エリアインしたキャラに合わせて敵キャラにも補正が為されるのは当たっているのだろう。

ただ、他にも中ボスクラスの敵を投入したり、敵の種類や数を増やしたりして攻略の難易度を上げているという事態が推測出来る。下の層でレベルを上げて挑んでも、決して楽には攻略出来ない仕様にしてあるのだろう。

逆に、低レベルでの早解きにも対応出来ているし、さらには慎重な攻略者にも適正な経験値の提供が可能。今回は、そういう細かい所の設定が良く出来ているようだ。

弾美がそう仮説を述べると、二人は感心して同時にこっくりと頷いた。

「なるほどお、凄いですねえ！」

「逆に言うと、俺達くらいレベル上げちゃつてると、既に早解きで妖精に賞品貰う可能性は極端に薄くなってる訳だな。敵の数や強敵が、エリアに増えちゃってるんだから」

「じゃあ、これからもゆっくり攻略でいいんだね。よし、ヒーリング終了！ 美井奈ちゃん、釣っていいよ」

ゴーレムとの戦闘は滞りなく終了、合鍵とステージ1で見たMP付きブーツをドロップ。ついでに真向かいの反対側の扉を守る、大

サソリもやつつける。こいつも合鍵と合成素材の甲殻をドロップする。

ハズミンが戦闘中に毒を受けたが、ミイナの状態回復魔法がささず飛んで事無きを得た。コストの掛からない回復に、パーティの戦術も少しは増えて行きそうな気配。

瑠璃がそう持ち上げるので、美井奈はテレテレ。勢いでまた抱きついて来たり。

「お姉ちゃまっつ！」

「み、美井奈ちゃん、ゲームの途中だから……」

扉の方には鍵は掛かっておらず、中に入ると宝箱が2つ。ガーディアンが落としたのは、1つの扉に付き1個の合鍵だから、必然的に1つしか開けられない事になる。

ただ、瑠璃が素材をしこたま合成屋に持ち込んだお陰で、手持ちの合鍵は10個を超える所有数となっている。瑠璃がそれを告げる前に、弾美は意地悪く美井奈に問いかける。

「美井奈、2つに1つだ！ 右と左、どっちを選ぶ？」

「えっ、私が選ぶんですかっ！？ えっ、ええと………左？」

「よしっ、外れてたら責任を取るようにつ！」

「えええっ………！」

ハズミンは左の宝箱に歩み寄り、中ボスドロップの合鍵を使用。宝箱は一瞬の間の後、パカッと開いた。美井奈はそれを確認して安堵のため息をついた後、一転して元気に万歳の掛け声。

中には剣術指南書が入っていた。かなりの大当たりに、弾美の顔もほころぶ。

「あの……合鍵合成で持ってるけど、使う？」

「ええつ、両方開けたら聞かれた意味無いじゃないですか！」  
「無いな、まあ畏かも知れないが開けてみよう」

ブー垂れる美井奈を無視して、ハズミンは2個目の宝箱もオープン。今度はギルが入っていたようで、ログにそれ程多くない金額が貰えたとの表示が。

瑠璃はちよつと嫌な予感。畏じゃなかった事で、逆に警戒心が湧いてしまう。

「ハズミちゃん、何だか嫌な予感がするんだけど……」

「そうだな、欲張りすぎると何かあるかもな。ただ。何かがあるかが分らない」

「あゝ、大きいつづらと小さいつづらですか？」

美井奈のたとえ話は、言い得て妙な感じはしたのだが。それが何かは分からないまま、一行は反対側の小部屋に移動。同じような配置で宝箱が2つ鎮座しているのを目にする。

今度は美井奈は、考えた末に右の箱を選択。ハズミンが開けると、雷の術書が出て来た。またも喜ぶ美井奈に、弾美は剣術指南書と一緒にトレードする。

美井奈はしこたま感激し、弾美に向けて例の神様発言の騒ぎの後、両方いっぺんに使用して、遠隔スキルが+2、雷スキルが+1上昇したのを報告して来る。

まだまだひよつ子だが、希望は見えて来たかも。

「よかったね、美井奈ちゃん！」

「はいっ、後3つでスキル技取得です！」

その後も、迷った拳句にこちらの宝箱の残りも開けてみたり。中身はポーシヨン1個のみで、かなり微妙な感じ。不審に思いつつも、

再び一直線の石畳を進む一行。雑魚の数は少し減って来たが、通路の終わりはまだ見えない。

しばらく進むと、先程と同じガーディアンを守る扉が左右の壁に2つ。今回違うのは、少し進んだ場所によろやく終焉の門が見えた事。割と大きな門で、扉は元から付いてない。

さらに奥へと続いている感じで、ボス部屋では無さそうだが。

「おっ、よろやくボスエリアかな？ ちょっと中を調べておくか」  
「ほいほい、敵に見つからない感じて、そつとだね？」

用心して覗き込む、3対の眼。中は少し大きな部屋になっていて、4匹の巨人が佇んでいた。中ボスか、ひよっとしたらエリアボスなのかも知れない。いかにも強そうな敵に、三人は見つからない様にそつと退避。

宝物庫のガーディアンは、ぬり壁みたいな変なモンスターと、いかにも堅そうなガーゴイル。苦心して倒した結果、薬品数個と合鍵2個、少し上等なマント、風の術書をゲットした。

マントはハズミンが装備、風の術書は瑠璃が保管となり、いよいよ宝箱に直面。

「……開けるぞ」

今度の宝箱は開けた途端にハズミンがレベルアップ。どうやら経験値が入手出来る宝箱だった模様。仲間の祝福に答えつつ、ステータスとスキルポイントを振り分ける弾美。瑠璃がためらいつつも、もう1個を開錠する。

小エーテルが1個のみ、凄く微妙。

反対側に移動する途中、瑠璃は門の中の部屋に変化があるのに気付いた。敵の中に赤い色が混じっていた気がして、思わず足を止め

る瑠璃。巨人は薄い灰色で、衣装の腰ミノも暗い色だった筈なのに。気付かれない様に覗くと、さつきは明らかにいなかった赤い肌の蛮族が2体増えている。顔には紋様の入った木製の仮面、手には凶悪なつくりの長槍を持っている。

ひよろつとした体躯はボス補正なのか、雑魚より二廻りは大きい。

ログ画面に、金のメダルゲットの文字が流れた。感動する美井奈の声と共に、ルリルリの目前でさらに1体追加されるボス蛮族。成る程と、瑠璃は思わず感心してしまう。

大きなつづらには、モンスターがいつぱい入っていましたとき。

「ハズミちゃん、宝箱の仕組みが今解けたよ……箱を開けた数だけ、奥の部屋のボスが増えるみたい……」

「なに〜っ!?」

「ええっ、じゃあ今……7匹もいるんですか?」

指を折って数え上げる美井奈に向けて、いるんですよと瑠璃はちよつと虚ろに脳内で返答してみたり。慌てて駆け寄る仲間が見たのは、室内にぎつしり詰め込まれているボスクラスのモンスターの群れ。

大きい敵ばかりで、部屋が小さく見えるのは如何なものか。

「やばいなあ、全部リンクしたら死ぬるぞ……」

「ど、とうしまししょうか隊長?」

「リンクさせないように釣ってくれ、美井奈」

「無理ですっ、あんなひしめき合っているのに!」

確かにそうだ、言われなくても良く見える。弾美は考えた末に、マラソンに少しは慣れいてる瑠璃に釣ってもらおう作戦に変更。その間にハズミンが敵を1匹ずつ倒し、ミイナが回復補助をする。

ミイナのMPが無くなったら、ルリルリとマラソン役を交代してもらおう。

「うつつ、マラソンなんてやった事無いです……」

「慣れる、それともタイムマン勝負に持ち込んで、一人ノルマ1匹ずつ倒すか？」

「それはもつと無理です〜！」

「7匹全部来たらどうしよう、ハズミちゃん……？」

「……その時は全力で、入った扉まで逃げる！」

それはかなり無茶な命令ではあるが、諦めるよりはいい作戦かも知れない。例えそれが竹槍で大戦艦に立ち向かうような、無謀な類いのモノであつても。

瑠璃は、残りの二人に用意は整つたかの伺いを立て、そろりと単身大きな門をくぐる。敵の感知範囲は、思ったよりは広がった模様。呆気なく見つかつて、すくみ上がるルリルリ。

ぐるりと振り向いたのは、4体の巨人の方。

「き、来たよっ！」

「瑠璃は2匹でいい、何とか引き回してくれっ！」

ところがどこで狂つたか。3番目に出て来た敵に殴りかかったハズミンに、2番目にスルーした筈の巨人も戻つて戦闘参加。予期せぬでつかい巨人3体同時相手に、ミイナからはハズミンの身体が見えない有り様。

みるみる減つて行くハズミンのHPに、美井奈も瑠璃もパニック状態。

「ふえ〜ん、ハズミちゃんごめん！戻つてもう1匹引き抜くの無理っばい！」

「ど、ど、どうしましよ隊長？ かつ、回復！」  
「落ち着けっ！ 美井奈、1匹弓で釣って瑠璃みたいに引き回してくれっ！」

いくらなんでも、3方向からの攻撃ではバックステップも盾防御も効果がない。弾美は内心焦りまくりつつも、戦闘前に仕込んだ虎の子の炎の神酒と神酒をポケットから使用。

美井奈から回復魔法も飛んで来て、取り敢えずはHPは安全圏に。

「お姉ちゃまっ！」

よく分からない叫び声の後、美井奈は巨人の1体に攻撃。その一撃でヘイトを取って、一目散に瑠璃を追って逃げ出す。地面を揺らしながら追い掛けて来る敵が余程怖いのだろう。半べそをかきながら、怖いという単語を連続で口に出している。

瑠璃の先導する声も聞こえているのか、いないのか。ぐるぐる廻つてとの助言に、今度はぐるぐるという言葉を繰り返し始める美井奈。あんまり奥まで戻らないでと、再び瑠璃のアドバイス。傍目で見えていたらきつと大笑いしただろうが、あいにく弾美にはそこまでの余裕はない。

それでも、炎の神酒の攻撃力アップ効果は凄まじく、弾美は何とか最初の1体を倒し切れた。これで残りは1体ずつ、まずは目の前の残った方の敵の相手をすれば良い。

しかし弾美が1匹減らして一息ついた頃、予断を許さない追加シナリオの幕開けが。美井奈が瑠璃の言い付けを守らなかった（聞こえていなかった？）せいで、再ポップした雑魚獣人2匹にも絡まれてしまっていたのだ。

状況は何だか、あまり変わっていないらしい。

「きゃっ、助けてっ！ お姉ちゃま、もう嫌だっ！」

「諦めちゃ駄目、美井奈ちゃん！……どうしょ、ハズミちゃん？」  
「……瑠璃の巨人、こつちによこせ。瑠璃はフリーになって、絡んだ雑魚の退治と回復支援。美井奈はそのまま、マラソンの練習……上手くなるまでずっと」

マジ泣き一歩手前の美井奈に、生暖かい声援を送りつつ。瑠璃の連れて来た巨人にスキル技を喰らわせて、まずは瑠璃をフリーにする弾美。お返しにルリルリから回復魔法が飛んで来て、再びハズミのHPは安全圏に。

肝心のミイナも、HPは半分まで減っていた。回復魔法を飛ばすと、こちらにヘイトが来るかも知れないと、瑠璃は代わりに光属性付与の魔法を掛けて、雑魚獣人2匹に殴りかかる。

「ほら、追い掛ける数が減ったよ、美井奈ちゃん！ポーションで回復して」

「ふえ〜っ、巨人がまだいます！」

「それを取ったら練習にならないよ……大丈夫、殴られない距離を保って、ぐるぐるだよ！」

「ぐるぐる、ぐるぐる……」

今度は少し吹いた。弾美は笑いを堪えて女性陣の会話を聞き流しつつ、大急ぎで2体目の敵を倒しに掛かる。何しろ炎の神酒、効き目は凄いのだが……効果が切れた途端、酔っ払いのバットステータスになるのだ。

魔法の詠唱が出来なくなるのはまだいいが、千鳥足で勝手に向きが変わるのは痛い。

瑠璃が雑魚2匹を倒すのと、弾美が2体目の巨人を倒すのはほぼ同時だった。これで瑠璃は完全フリー。ハズミの元に駆け寄り、残りの敵の討伐に力を貸し始める。



ちらりと美井奈の様子を見るのも忘れない二人。少女は今、少し落ち着いてコントローラーを握って画面に集中出来ていた。それでも時折、唸るようにぐるぐると口から言葉がこぼれる。

ミイナのHPゲージも、今は安全圏で落ち着いているよう。

3体目を倒した後、瑠璃は自分のレベルがいつの間にか上がっているのに気付いた。ポイントを割り振りながら、今は安定したマラソンに従事している美井奈に報告する。

「レベル上がったよ、美井奈ちゃん！」

「ぐるぐる？」

「そう、こっちに巨人連れて来て！」

今度は盛大に吹き出した弾美に、瑠璃はきつい顔付きでお黙りなさい的な視線を向ける。最後の戦闘は、いつの間にやらハズミンが炎の神酒の効果切れ、かなりグダグダに。それでも山を乗り切った後の感動に、美井奈は泣き出す寸前だったり。

抱き付き合って喜ぶ女性二人に、弾美は蚊帳の外。……ちょっと寂しい。

ハズミンの酔いの回復待ちとヒーリングの後、大部屋に残ったボス蛮族を二人で見遣り。作戦の発表を待つ二人の視線に、弾美はお気楽に口を開く。

爽やかな口調で、苛めに聞こえないよう努力して。

「よしっ、今度は2匹マラソンしてみようか、美井奈！」

「えっ、お姉ちゃまと1匹ずつじゃ……？」

「お姉ちゃまがサポートしてくれるから、今度はテン張らずに頑張れよ！」

怯える小動物の目を向ける少女に、瑠璃は一応励ましの言葉を掛ける。今日は慣れない美井奈が弾美に弄ばれない様にと、自分の席の位置を二人の真ん中にしたのだが。

全く効果がない様子で、自分の力の無さを改めて嘆いてしまう瑠璃だったり。自分程度のサイズの防波堤では、自然災害的なビツクウェーブには敵いません。

それでもパーティ内で分担して、強い敵に立ち向かう技術を身に付けるのも大事な事。これから先も、似たような場面やもつと酷い場面が出て来るかも知れないのだ。

いざとなつたら交代してあげると告げると、美井奈は少し安心してたようだった。

「い、いきますっ!」

始まってしまえば、遠隔釣りのアドバンテージを生かしてのマラソンは意外と余裕がある事が判明。美井奈はそれでも緊張感を漂わせつつ、時折ぐるぐるの呪文を口にしつつ、2体の蛮族を引き連れて駆け回る。

ルリルリはミイナのサポートにも駆けつけられる様、ぐるぐるの真ん中付近で支援体制。ハズミンはひたすら1体目の蛮族と殴り合い、スキル技で派手に敵を追い込んで行く。

今回は薬品類は使っていないが、その削り力は安定しているよう。

「美井奈、マラソンの調子はどうだ?」

「は、はいっ! 何とかなってます!」

「次の敵、引っこ抜くね、美井奈ちゃん?」

「は、はいっ、お姉ちゃま!」

先程の慌ただししい戦闘とは大違い、まともに言葉を掛け合う余裕も出て来ている。これと言ったハプニングも無く、順調に蛮族の数

減らしは進んで行く。

数分後には、ボス蛮族戦は無事終了。

「おっ、片手剣落とした……俺が貰うな、コレ」

「私もレベルアップしました、嬉しいっ」

「おめでとく、美井奈ちゃんっ」

他の主なドロップは、片手斧や短剣など一行の使えない武器や、薬品やメダルや素材類。辛うじて弾美の装備出来る片手剣がドロップして、攻撃力は少々のアップをみせた。

弾美は早速装備し直して、先頭に立ってダンジョンの奥へと向かう事に。部屋数は残り1つだけ、ボスエリアに辿り着いて、ラスボスを目のあたりにする一行。

待ち受けるのは、ゴーレムにも負けない巨大な体躯の猿人である。その体躯の半分はメタルコーティングされており、禍々しい雰囲気漂っているエリアボスだ。

素手だが、殴られるととても痛そうだな。

「……大つきいし、何か堅そうですねえ……」

「俺と瑠璃が前衛な。状態異常が来たら頼むぞ、美井奈」

「あつ、待ってハズミちゃん。魔法掛け直しておくね」

瑠璃が防御や支援系の魔法を掛け直して、三人は勇んでボスの眼前に。部屋に入ると同時に、挿入されるイベント動画。天に向かって咆哮して、ゴリラのように胸をドラミング。

端っこに座る美井奈が、驚きでひあつと声を上げる。今までのパターンだと、こけ脅しにしか過ぎない演出だけど。初めて見る敵なので、強さが測れないのが怖いところだ。

挿入画像はすぐ終わり、戦場に引き戻される一行。

「皆で削れ、容赦するな！」

「はいっ、軍曹！」

苛め過ぎたのか、弾美の階級が隊長から軍曹に下げられてしまっていた。瑠璃は苦笑しながら、弾美と一緒にボスを殴りに前衛へ。目の前を丸太のような腕の一撃が通り過ぎて行き、一瞬冷やりとさせられる。

想像していた通り、堅い外皮に削りダメージは芳しくない。スキル技の使用でもHPゲージの減少は微々たるものである。ましてやミイナのヘボ弓術では、一桁のダメージがやっと。

数分経っても半分削るのがやっとで、反対にこちらは危ない場面が何度か。

「うわっ、範囲攻撃来た、痛いっ！」

「美井奈ちゃん、毒受けちゃった。治して！」

「MPもうすぐ無くなります！ ヒーリングしていいですか？」

それでも何とかパーティー丸となつての踏ん張りで、粘りに粘つて落伍者を出さない構え。堅さを誇る巨大猿も徐々に削られて行き、約5分後には音をたてて崩れ落ちていった。三人はテンションも高くハイタッチ。苦戦した分、喜びもひとしおだ。

エリア攻略を振り返るに、かなり危ない場面もあったものの。何とか機転を利かして痛手を負わずに済んだ。何より、美井奈の戦闘経験値を得ることが出来、先の展開も楽になりそう。

「最後のボスは、ひよっとして魔法攻撃が弱点だったのかもなあ」

「あ、誰も覚えてないよねえ……ウチのパーティーの、今後の課題だね」

「私、光スキルがもう少しで20ですが……都合よく覚えられますかねえ？」

中立エリアに飛ばされて、そんな感じで戦闘後のお喋りをしつつ。瑠璃は思い出したように、改めて戦利品のログチェック。盛り上がり過ぎてチェックすら忘れていたので、何がカバンに入ったのかさえ分らない。

堅そうな素材や薬品類、それから聞いた事の無い名前の武器がドロップしたようだ。片手剣のようで、それならさっきの蛮族戦でも出たので被ってしまったかも。何気なく、その性能を目で読み進む瑠璃の、顔色があっという間に変わる。

レイブレード 攻撃力+40《耐久0/2》

「うわ、ハズミちゃん！ 攻撃力40もある武器が出てる！」

「え、何ですかそれっ！」

「マジかつ、何でこんな序盤に……って、耐久度が0/2って何だ？」

確かにそうだ。耐久度が0の武器は、極端に切れが悪くなっており、使い続ければ壊れて完全に無くなってしまふのだ。しかし、そうなる前に鍛冶屋で砥ぎ直してもらえば済む問題。

瑠璃は慌てて鍛冶屋に直行、言い渡された修理代を見てビックリ仰天。

「うわっ、修理代に2万ギルも掛かるよ、ハズミちゃん！」

「ひ、ひどいなそれは……耐久度1の修理で1万ギルかよっ！」

「私、そんなに持ってませんよ！」

美井奈には期待していないが、確かに高いと弾美も思う。今までNMやボスの討伐で入って来たパーティ資産が、丁度そのくらいだ。最近ではエリア攻略のために薬品を買い足したり、合成にも依頼代金が掛かるので、出て行く出費も多かったり。

弾美は仕方なく、修理を保留。瑠璃にそのまま持っていてもらう事に。

代わりに瑠璃は、代理合成屋さんの合成リストの中から、サソリ皮使用のレシピを発見。通いつめて依頼している内に、いつの間にかレパトリーが増えたようだ。

サソリ皮のパーティーストックは2枚しかない。念のために1枚を取っておき、1枚使用で盾を合成して貰う事に。出来上がりを弾美に渡すと、代わりに木の盾が返って来た。

サソリ皮の盾 防+6 ≪耐久8/8≫

\* \* \*

「さっきのエリアは45分くらいか、もっと長くいた気がしたけどなあ」

「ボス戦がやたら長かったからね、次はどこだっけ？」

「一番右の扉ですね、そこをクリアでその真ん中の大きい扉に入れるみたいですよ」

「んじゃ、入るか……装備と薬品チェックいいな？」

「オツケーです、隊長！」

美井奈の機嫌もようやく治って来ているし、固さも何とか取れてきた模様である。弾美は突入の掛け声を掛けて、本日2つ目のエリア攻略の開始を告げる。

入って最初の感想は、薄暗くて不気味な風景のダンジョンである。初っ端のソロステージのような、牢屋みたいな雰囲気。道も細くて入り組んでいるよう。

そして目に付く敵も、最初のダンジョンとほぼ一緒。ゾンビやスケルトン、火の玉やコウモリなどの、地下生息モンスターばかりの構成となっている様子である。

雑魚なりにレベル補正が効いてはいるが、ルリルリの光属性付与の剣攻撃が面白いほど良く効く。弾美はお付き合い程度の攻撃にとどめて、瑠璃の前衛スキル上達を催促する。

ミイナの弓も、少しずつではあるが熟練度の上昇が見られるようだ。大体レベルに対して2.5倍の数値まで上昇するので、ミイナなら30位の数値が理想なのだが。

今はやっと10を越えた程度、伸びしろはまだまだたっぷりある。

陰湿な通路は入り組んでおり、行き止まりになった場所を何度も引き返しの破目に。パーティで正解の道を探す事15分あまり、ようやく開けた場所に出て来た。

目に付いたのは、湯気の上がる水溜りと赤茶けた地面のエリア。湿地にも見えるが草の変わりに真っ赤な水晶のオブジェがあちこちに立ち並んでいる。

辿り着いた空き地も、やはりどこか不気味な感じに見えるのは否めない。モンスターもサソリや毒キノコ、ヒルやゴーストなど嫌なカテゴリーの物ばかり。

「何だか嫌なエリアですね、ここ」

「そうだな、毒や吸血や呪い、掛かると雑魚でもやばいぞ」

「ポケットの中身、入れ替えた方がいいかな？」

「私が全部回復します、平気です！」

意気込む美井奈に、暖かい信頼の笑みで返す瑠璃。一方の弾美は平気な顔でポケットの中身に万能薬と聖水を追加する。聖水は飲めば呪い状態解除だし、攻撃アイテムとして使用すれば、光属性付与の魔法と同じ効果を得る事が出来る。意外に重宝する一品だ。

獣人やボス級の敵がたまに落とすのだが、街の教会でも売っている。

「あゝ、お兄さんっ！ 何で万能薬と聖水、わざわざポケットに増やしてるんですかっ。私を信用してくださいよ！」

「無茶を言うなっ、第一呪いは聖水か上位の光ヒールのみの回復だろ！」

「だったら聖水だけでいいじゃないですか、万能薬は外して下さい！」

「念のためだろうが！ だいたいMPもブーストしてないのに、前衛二人分の回復は無理があるだろうに！」

瑠璃を挟んで、やいのやいのと言い始める二人。瑠璃は完全に板挟みの心情で、どちらをなだめて良いのやら。取り敢えずは美井奈に、自分の回復をメインにお願いすると、少女の機嫌は安直になおったようだ。

「お兄さんなんて、毒で痺れちゃえばいいんですっ！」

「いいからさっさと釣れ、美井奈！」

パーティ内に漂う不穏な空気の中、湿地帯の狩りはスタート。サソリや毒キノコの特珠技が来るたび、ひらりと華麗に避けるハズミン。瑠璃の隣に座る美井奈の口からは、その内敵の応援が小声で漏れて来る始末。

その内に、美井奈の願いが叶ったのか、毒キノコの範囲技の孢子飛ばしで全員が痺れ状態に。技を潰し損なった弾美はケラケラ笑いながら、自分はさっさと万能薬を使用。

「わはは、痺れ状態って詠唱不可も付くんだなっ。美井奈、魔法掛けれなくて残念だなっ（笑）」

「ぐぬぬっ……っ！」



半泣き状態で、弾美を睨みつける美井奈。手の中のコントローラーが怒りにプルプルと震えて、反動でミイナの拳動もカクカクし始めて。瑠璃が注意を飛ばそうと思った時には、雷娘は湿地の水溜りにはまり込んでいた。

毒の水によるダメージで、あつという間にミイナのHPは減って行く。弾美の笑い声は、呼吸困難の域に達し、見かねた瑠璃は弾美の太腿を思いつきりつねり上げる。

最後は自分の悲鳴で我に返った弾美。瑠璃の睨みつける表情より前に、大人気なかったとちよつと自己反省。

「笑って悪かった、美井奈。今はへなちよこなのは、仕方ない事だもんね……近い将来、必ずお前を一流のハンターにしてやるっ。約束と仲直りだ！」

「そうそう、最初は失敗したっていいんだよ！一緒に頑張つて頂点を目指そう！」

一流とか頂点とか、傍目にはちよつと胡散臭いかなとは思いつつ。二人が場を盛り上げるために口にした言葉に、少女は意外に好反応を示したり。

半ベソだった顔にわかに朱が注し、復活した元気を示すように、両手でガッツポーズ。

「やります私っ！頂点を取りますっ、キラメク星を目指しますっ！」

「が、頑張ろう？」

まだひりひりする内腿をさすりつつ、弾美は一行に狩りの再開を告げる。美井奈は今回は慎重に、敵から位置を取る事で同じ過ちの回避を目指している模様。

障害物や段差のある複雑な地形での釣りに、遠隔武器の弓矢は大

活躍だった。前衛役の二人は安心して、安全な場所で戦闘する事が出来るのだ。そうこうしている内に湿地帯のモンスターは減って行き、一行は場所移動。

先行していたミイナは、小高い丘に不気味な影を見掛ける。

「はやっ、見た事無い敵がいます！ 中ボスかな？」

「むっ……アンデッド？ 死神っぽいな」

大きな鎌をもつ衣を纏ったボス級の敵は、ハズミン達を感知すると瞬間移動で襲い掛かって来た。パーティを驚かせたその奇策も、しかし実際はたった数回の攻撃で撃沈。

丘の頂上に現れる明らかな出口用魔方陣と、何か鍵のようなアイテム。黙り込む一同。

「……すごい弱かったね」

「あのアイテム取ったら、このエリア終わりかな？」

「あっ、でも丘の後ろに通路がありましたよ、3つ」

ドロップは初期装備よりはマシな大鎌、不審がる一行はエリアボスは奥の通路にいると判断を下した。鍵のようなアイテムは後で取る事にして、右端の通路から探検を開始する事に。

途中に点在するゲジゲジ型モンスターを蹴散らし、一行は奥へと進んで行く。辿り着いたのは清浄な雰囲気のある泉と、その周囲を徘徊する色彩豊かなスライムの群れ。

狩りの号令は、もちろん瑠璃から。嬉しそうに、細剣を振り出す。

「ポーション〜 落とせ〜！」

「あっ、オレンジ色のスライムはエーテル落としましたよ！」

敵を全て狩り終わると、やたらと目立つのは泉の中央に存在するポイント。カーソルは移動するのだが、タゲってボタンを押しても何も起こらないのは如何なものか。

何かトレードするのかと、弾美がポーションを試してみても反応は無し。

「トレードと違うのか、何か別の場所でアイテム見つけるのかな？」

「名前が『F・ポイント』ってあるね？」 Fって何だろう？」

「ん、ふあ、ファンタジーとか……？」

「泉の精とか出て来ないかなあ？ そしたら何かねだるのに」

弾美の泉の精という言葉に、瑠璃がぴくつと反応する。なるほど、妖精と言う単語は思い浮かばなかった。瑠璃はアイテム欄から妖精を使用。エリア攻略中は呼び出さないで頂戴というお叱りを受け、第一案は没の運びに。

それならばと、今度は泉のポイントに妖精を恐る恐るトレードしてみる。

ああつ、何て清浄な雰囲気、久々に生き返るわネツ　ここ

はワタシ達妖精に力を蘇らせてくれる、この地下では数少ないポイントみたい

お礼に何か、トレードして御覧なさい？　た・だ・しつ、欲張らないでネ

「おおつ、やるな瑠璃！　問題解決かつ、どうやった？」

「すごいです、お姉ちゃまつ！　何を使ったんですかつ？」

「えへへ、ハズミちゃんの泉の精から妖精を思い出したの。ほら、フェアリーのFかもって。それで妖精を、泉のポイントにトレードしてみたの」

話を聞いた残りの二人もそれぞれ妖精を使用して、問題は次に何をトレードするかの議論。欲張るなという事は、多分一人1回のみなのだろう。取り敢えず、美井奈が試しにエーテルを投入。回復量の多い、中エーテルになったとのログ。おおっと、盛り上がる一行。

「武器や防具は駄目なのかな？ 指輪トレードしてみようか」

弾美の試みはあえなく失敗、妖精はそっぽを向いて何の反応もなし。それを隣で見ていた瑠璃が、今度もまた何か思いついたよう。自分のキャラのアイテム欄から、泉にトレードを実行。

妖精への祈りが通じたのか、瑠璃は万歳しながら嬌声を上げた。

「すごいっ、お姉ちゃまって天才ですっ！」

「おおっ、レイブレードが使えるようになった、でかしたぞ瑠璃っ！」

締めて2万ギルの儲け、妖精が望みを叶えてくれて本当に良かった。耐久度を取り戻したレイブレードをハズミンに渡しながら、瑠璃はこの上なくご満悦の表情。

これでいざという時のボス戦などが、断然有利になった。

ウキウキ気分で元来た道に戻ってみると、丘の上には先程の死神が。どうやら完全復活しており、通路から出た一行に瞬間移動で襲い掛かって来るデジャヴ。

両手武器の大鎌の一撃で、ざっくり大幅に減るルリルリのHP。驚きと怒声の中、唐突に始まりやっぱり唐突に終わる戦闘。先程よりは強かったボスの死神だが、ハズミンの二段斬りで案外楽に倒す事が出来た。先程と同じく、丘の上に魔方陣と鍵らしきアイテムが再出現する。

何となく仕掛けが分かって、重い空気が一行を支配。

「……あと2回、今の奴生き返っても平気かな？」

「……攻撃受けた時のダメージが、結構凄かったんだけど……」  
「段々と強くなる仕掛け……ですよね？」

それでも、未開の地があるならば踏破しなければなるまいと。弾美の掛け声と共に、今度は真ん中の通路に進む一行。雑魚を倒している最中に、ハズミンがレベルアップ。

おめでとうの祝福の言葉の中、ハズミンは一足先に16へ。片手剣にポイントを振り込み、覚えたスキルは《下段斬り》。ダメージと共に、敵の回避や移動速度を低下させる技である。

これで連続スキル使用の追い込みが来ると、弾美は満面の笑み。いそいそと、スキル技を発動枠の一つにセットする。

通路の行き止まりには、今度は扉と両端に佇むガーディアンが2体。犬の顔をした人型のモブで、武器はサーベルの二刀流と、片手斧の二刀流らしい。二刀流の連続攻撃は、ベテランでも避けるのが非常に厄介だ。

パーティで相談した結果、2対にたかられての戦闘は非常に危険だと結論が出て。弾美と瑠璃で1体ずつ受け持ち、美井奈が両方の支援をする態勢を取る事に決定。

なるべく先に弾美が1体倒して、瑠璃の応援に駆けつけるという作戦だ。

「な、なるべく早く応援お願い、ハズミちゃん」

「おうつ、でも勿体無いから奥の手は使わない」

「奥の手……ああつ、あの剣ですか！」

戦いはかなりの一進一退振りで、特に瑠璃の方はピンチの連続だ

った。敵の攻撃には特に嫌らしい特殊技は無いものの、二刀流自体が反則っぽい削り能力なのだ。

幸い敵の防御力もHPも、それ程高くは設定されてなかった様子。ハズミンが敵の猛攻に手こずりながら、自分の相手をようやく撃破。ルリルリは辛うじて生き延びていたが、ミイナのMP切れで大ピンチ。割って入ったハズミンが《下段斬り》と《二段斬り》の連続技でヘイトを奪う。

残った敵のHPは、ほぼハズミンだけで削り切った。

「もちつと防御、上手くなれよ瑠璃」

「め、面目ない……」

倒した敵から宝箱の鍵が2個出たので、部屋の中に入る時には期待大の一行。案の定、小さな室内には宝箱が2つ並んで置かれてあった。弾美が代表で、喜び勇んで開錠する。

宝箱の中からは、両手斧と両手槍が1つずつ。表のガーディアンもサーベルと片手斧を落としたので、このエリアのテーマは武器の新調なのかも知れない。

いらぬ武器が増えて来たので、戻ったら全部売ろうと決意する瑠璃。それにしても、肝心の自分がスキルを伸ばしている細剣が出ないのが何とも憎たらしい。

それより弾美の言う通り、防御の練習をしたほうがいいのかも。

通路を戻ると、やはり再ポップしていた死神モンスター。今度は充分な用意で持って、丘の麓に躍り出たので苦戦をする筈もない……との考えは浅はかだった。

先程よりはるかに強く、HP補正も高い様子のボスモンスター。元からの凄まじい攻撃力は、ブロックしてもお構い無しにこちらを消耗させて来る。さらに麻痺や呪いなどのステータス異常を起こす

特殊技には、危ない場面も何度か。

ハズミンのスキル技の連続使用と、ルリルリの光属性での削りが地味に効いて、3度目の死神は消滅。闇の術書とエリクサーを落とす、再度丘の上に魔方陣の発動。

「強かったですねえ……」

「瑠璃、聖水あと幾つある……？」

「ん、こっちは全部使っちゃった……」

ハズミンのカバンの中にも、かろうじて後1個残っているだけ。呪いの状態になると、ランダムで座り込んだり近くの味方を殴ったり、勝手にポケットの薬品を消費したり、とんでもない行動を起すのだ。はつきり言って、戦闘どころではない。

それでも、時間はまだインして50分くらい。もう1本、進んでない通路がある。行かねばなるまいと弾美が言うと、美井奈が悲壮な顔付きで激しく同意して来た。

無理をせずに攻略するって約束はどこに行ったのかなと、瑠璃はちよつと呆れ顔。

3本目の通路には、今度は獣人がたむろしていた。結構手強い雑魚相手に、一同は手こずりつつも奥を目指す。今度の通路には細かな分岐が存在しており、時間を取られつつもマップでチェックして廻る。

行き止まりの小部屋にはサル型の敵や蛮人の群れが。そいつらを全て倒すと、中央に鍵の掛かっている宝箱がポップする仕掛けのようだ。

「おつ、聖水が入ってた。瑠璃、これ持ってる」

「えっ、美井奈ちゃんは……あつ、後衛だから範囲に入らなければ平気なのかあ」

そんな小部屋が途中に4部屋。中には聖水が2本、炎の神酒や工  
ーテルもゲット。いかにもボス戦に使ってください、使わないと確  
実にあの世行きですよみたいな融通である。

そんな弾美の邪推も、あながち的外れではないのだろう。

ついでに瑠璃と美井奈が、途中の雑魚の経験値で同時にレベルア  
ップとなった。抱き合って喜び合いつつ、二人とも新スキル取得で  
ハイになっている模様である。

取得したスキルは、瑠璃が《クリティカル1》 文字通りクリ  
ティカル率がちよつと上がる細剣スキルである。通常時でも発動す  
る補正スキルなので、細剣の攻撃力の低さを少しは補える。

美井奈は弓術から《みだれ撃ち》 矢は多く消費するが、格段  
に高い瞬間ダメージを与える事が可能なスキル技だ。さらには光属  
性から《ホーリー》 光属性の攻撃魔法を覚えた。

こんな最初に覚えられるのはラッキーで、パーティ待望の攻撃魔  
法に場も盛り上がる。

「これで死神も怖くない……かなあ？」

「弓じゃ全然ダメージ出なかつたですからねえ」

「へっぽこから、少しだけ卒業だな」

軽口を叩き合いつつ、最後の部屋へと辿り着く一行。迎え撃つ  
のは、部屋の中央に鎮座する雪男と大キツネの中ボスペア。そして何  
故か周りには、サルと蛮族の雑魚がうじゃうじゃ。

ご丁寧に周囲を歩き回っていて、思い切り決戦の雰囲気の水をさ  
している。ボスと雑魚の混合に戸惑いつつも、それでも全部倒すの  
は確定の事実ではある。

サルと雪男は、同種族っぽくてリンクしそうでちよつと怖いのだ  
が。それをかんがみて、弾美は蛮族から掃除しようと美井奈に釣り



の指示を出す。

頷いた少女は緊張気味に、離れた奴にアタック開始。

「わっ……リンク無しで釣れましたっ！」

「……いいじゃないか、何を騒ぐ必要がある？」

「いえっ、絶対何かやらかすと、謝る準備をしてたもので」

「……………」

順調に雑魚の蛮族は減って行き、お次はお猿さんの番。1匹目は何事も無く、2匹目で案の定リンクの発生。雑魚同士ならまだ良かったのだが、思惑に反して雪男と大キツネがミイナを追い掛け始めていた。

美井奈の悲鳴は、果たして用意されていたものか否か。

「マラソンは無理っばいから、瑠璃がキツネをキープ、美井奈は雑魚をたのむ！」

「キツネは雷属性だよ、ハズミちゃん」

「むっ、そうか……じゃあ美井奈がキツネな！」

「にゃあっ!？」

雪男のタゲを《下段斬り》で素早く取ると、ハズミンは上手に反撃をかわしながら雑魚に殴りかかる。美井奈は動転しながらも、何とか大キツネと睨み合い。幸い大キツネの主要攻撃は、狐火飛ばしと放電のようで、自分からは近付いて来ない。

ルリルリは水属性なので、火には強いが雷には弱い。属性の強弱という相関関係を疎かにすると、余計なダメージを受けてしまい、気付いた時には昇天の憂き目を見る事もあるのだ。

美井奈の戦況を気にしつつ、弾美と瑠璃が雑魚を始末し終えた時には。美井奈は受けた遠隔ダメージを自己回復しつつ、逆に弓での

遠隔攻撃を仕掛けていた。

孤軍奮闘する美井奈の口からは、今度は小さくにやあとの呟きが。敵から魔法が飛んでくるたびに、自然とこぼれている様子。ぐるぐるよりはマシだけだと、弾美は暫し思いに耽る。

猫なんだか狐なんだか、もうよく分からない。

弾美の《下段斬り》で動きの鈍っていた雪男だが、範囲攻撃の氷雪攻撃でハズミンとルリルリのコンビも一転ピンチに。ダメージだけでなく、麻痺も受けてしまう。

幸い、ポケットに1個だけ残っていた万能薬で状態異常を回復し、弾美は雪男に殴り掛かる。再び《下段斬り》から《二段斬り》の連続スキル技使用。雪男の体力は一気に半分へ。

ルリルリも少し遅れて、キャラの麻痺を解除に掛かる。それからハズミンの隣に滑り込んで、こちらもスキル技の《二段突き》で雪男に攻撃を仕掛ける。

その一撃が弾美に負けないダメージだったので、瑠璃は一瞬驚きの表情。画面に表示された数字を見つめ、クリティカルだったと思いに至り、途端に小さくガッツポーズ。

その後瑠璃は、弾美が横目でこちらを見て笑っているのに気付きしばし赤面。

雪男をやっつけてしまうと、後は三人で大キツネを囲みに掛かれて一安心。範囲放電で痛い目に合いつつも、殴り倒す事に成功する。その後、恒例のハイタッチで再び盛り上がる一同。労いの言葉を受け、美井奈も満更ではない表情。

ドロップは雷の術書と氷の術書、薬品やギルに混ざって良質の棍棒と皮素材も出た模様。消費したポケットの中身を補充し、気は重いが再び死神とご対面に道を戻る一行。

「よしっ、マップ全部制覇したし、多分最後の戦闘だ。気合い入れ

る〜！」

「はいっ、頑張りましょ〜！」

「ハズミちゃん、聖水これだけで足りるかな〜？」

「足りない分は気合いでカバーだっ！ 美井奈、覚えた魔法をぶちかませ！」

「美井奈、ぶちかましますっ！」

盛り上がりだけはマックスのまま、再々度の訪問の丘の見える場所へ。通路を出た途端、挿入されるイベント動画。死神の鎌が暗闇で不気味な光を放ち、ぼろぼろの端切れが風になびく。

最初の一撃は、やはり死神モンスターから。4度目の登場で、完全にエリアボスへと変貌を遂げた死神は、瞬間ワープでミイナの遠隔攻撃をかわす。さらに、ハズミンの眼前に登場しての横薙ぎの一撃。

予測出来ない攻撃に、一気にHPが削られる。

弾美と瑠璃の揃ったの反撃も、敵の体力の1割を削った所まで。再び瞬間移動で距離を取られ、離れた距離からの魔法攻撃を飛ばされる。結果、二人のステータスが毒状態に。

構わず近付いたハズミンの目の前で、再度掻き消える死神。

「うぜえっ、じっとしてろ〜！」

「みやあつ、こつち来たっ！ ワープは卑怯っ！」

「ハズミちゃん、毒治さないっ！」

奇妙な追いかけっこで焦れる前衛陣、慌てふためいて距離を取る美井奈。やっと追いついた弾美が《下段斬り》を放つも、やっぱり飛んで来た呪いの魔法で痛恨のスキル技空振り、追撃を放てない。

それでもルリルリが意外な頑張りを見せ、弾美の一時離脱の空隙を埋めている。光の付与魔法がじりじりと死神の体力を奪うが、反

撃の大鎌の一撃は強烈過ぎた。

ルリルリのHPは一気に半減、女性陣の悲鳴と共にさらに追撃の一撃。

ルリルリが生きていたのは奇跡としか言いようが無い。真つ赤のHPゲージ、残りの生命力はたった一桁。無防備に立ち尽くすしかない彼女を救ったのは、ミイナの覚えたての新魔法だった。

光スキル20と言うのは、このレベルでは結構高いほう。更に敵は閻属性なのだ、効かない訳がない。一撃で死神のHPの2割強を削り取る、光魔法ホリの強烈なダメージ。

再詠唱可能になるや、もう一度同じ呪文をぶつ放す。

「お姉ちゃまつ、今のうちに回復をつ！」

「美井奈つ、こつちに走つて来いっ！」

慌ただしい指示が飛ぶ中、再び死神の瞬間移動。ミイナを次の犠牲と決めたようだが、既に雷娘はそこにはいない。弾美の指示に従って、二人の待つ丘の麓へと駆け下りていた。

ルリルリも自己回復、種族スキルの効果もあり、1度の回復で半分近く生命力を取り戻す。殴る相手を失った死神は、魔法範囲からもまんまと逃げ出した獲物を追うべく、再びワープを選択。

しかし、今度こそ固まって待ち構えていたパーティは、死神の逃亡を許さない。ハズミンが連続スキルでタゲを取り戻すと、ルリルリも光魔法を帯びた細剣でスキル技を見舞う。

止めは再び、ミイナの光魔法。死神の残りHPをきっちり削り切り、4度目の丘の上攻防戦にようやくのケリがついた。

歡喜と脱力、瑠璃に抱きついて喜ぶ美井奈の頭を、ぐりぐりと撫でて労わりを現す弾美。瑠璃は主に脱力の感情が強かったが、表情には喜びが隠し切れずに湧き出ている。

最後はやっぱりハイタッチで締めて、出口の魔方陣に飛び込む一同。宙に浮いた鍵を取るイベント動画が挿入され、1時間振りに中立エリアに戻って来れた。

エリアボスの死神は、凄く性能の良い両手鎌をドロップ。後は希少素材や薬品、呪われたペンダントが1つ。血の色の首装備は非常に高性能なのだが、装備した者は常時呪い状態になってしまう。

聖水を飲めば一定時間は正気に戻るのだが、いったん装備したら装備解除不可。教会で解除して貰うまで、戦闘中に味方を殴ったり敵を回復したり、装備を全部外してしまったりと、戦力にはならない有り様となる。

「美井奈、頑張ったご褒美に呪い装備をやる。大事に持ってろよっ！」

「これって、使い道あるんですか？ ってか、凄い性能ですねえ…」

「装備しちゃ駄目だよ、美井奈ちゃん。教会があれば呪い解除で使えるようになるのかなあ？」

「高い金、取られそうだけどな。レア装備には間違いないかな」

時間は11時を少し廻ったところ、瑠璃が入手した武器や何やらを換金している間に、弾美にギルドメンバーの進から通信が入った。内容は午後のオフ会の集まりの最終チェックと、集まる人数の確認である。

マメな進らしく、こういう所はきちつとしている。

「ハズミちゃん、死神の鎌が9千ギルで売れた」 他の武器も合

わせて、全部で2万くらい」

「お金持ちですっ、お姉ちゃまつ　でも、ここじゃあんまり使い道もないですねえ」

「美井奈、午後からオフ会あるんだけど一緒に来るか？　進と弘一の小学生兄弟も来たいって騒いでいるらしいから、こっちも追加で参加させて貰ってもいいぞ」

「えっ、いいんですかっ？　是非行きたいですっ！」

電車で10分も移動すれば、学生がよく利用するアミューズメントスポットが存在する。場所はそこに決まっていたのだが、寸前で計画が兄弟にばれたのだろう。

追加のお伺いの通信に、こちらも一人連れて行くとの返事を飛ばす。

そうと決まれば、リアルでのお祭りに美井奈はハイテンションな様子。どこに行くのかだの何を着ていくのかだの、騒がしく二人にまとわり付いて来る。

拳句の果てには、瑠璃のお出掛け衣装を一緒に選ぶと言う名目で、瑠璃の部屋まで転がり込む始末。弾美の支度は5分で済んだが、待てど暮らせど女性陣が降りて来ない。

いい加減いらだった弾美が家の内庭から声を掛けると、がらりと窓が開き美井奈が顔を出す。その後ろからは、慌てた感じの瑠璃の悲鳴のような声。

……何故かまだ、着替えの最中だったらしい。

「隊長、ミニのスカートとフリルの可愛いワンピース、どっちがいいですかねえ？」

「……ボウリング行くんだ、程々にな」

どうやら瑠璃は、美井奈に色々と着せ替えされて遊ばれていたよ

うだ。弾美の隣ではコロンも、やや心配そうに窓を見上げている。

「……………男で良かったよな」

弾美の呟きに、コロンはもちろん返事を返しはしなかった。

## 07 連休終了と攻略データ（前書き）

ちょっと前まで『グランドファンタジア』という、無料オンラインゲームをやってたんですけど。動機は『FFオンライン』をやめてしまつて、新しいゲームに食指が動いたんですかねえ。

やってみてすぐに、まあシステムの物足りなさは感じたのですけど。FFと違って少人数でプレイ出来るし、流行のPVPってのも体験出来るし。

物は試しで、数ヶ月ほど続けてました。

その間に、なぜかギルマスまで務めてギルド経営したりとか、パトナシステムに翻弄されたりとか、恋愛や人生相談をうけたりとか色々ありましたけど（笑）。結局は今の仕事が忙し過ぎて、続ける事が困難になつてしまつて……。

後ろ髪ひかれつつも、引退と相成つた訳で。

懐かしいですね、出来れば続けたかったです。今は新しいゲームも、話のネタに始めて見たい気もありますけど。ゲーム内で構築した仲間との絆は、失いたくは無かったです。

まあ、それ以上に弾美や瑠璃の物語を、世に出したかったというのもありますけど。以前に「必ず完結させる！」と豪語した手前、こちらにも時間を費やさざるを得なくなつて。

いえ、嫌々に投稿活動してる訳では無いんですけどね（笑）。

それでは、既に世に出てる最新話ですけど。取り敢えずは、早いサイクルで投稿して行く予定です。もうしばらく、ご辛抱の程を

^^



## 07 連休終了と攻略データ

久し振りの登校に思えるが、実はそうでもない。平日がたったの2日、休みになっただけ。その連休も滞りなく消化され、いつもの日常が戻って来たただけだと言うのに。

弾美のクラスと言えば、朝から早くも気だるい雰囲気漂っている始末である。こんな調子で一日持つのかという感じの、休み気分の抜けていない生徒もちらほらいたりする。

弾美に限って言えば、仲間と会うのも部活動も、楽しいイベントの一つではある。

同級生でありサブマスの進が、クラスの友達からフランスカの限定イベントの情報を入手するのは、案外と容易かった。連休中に脱落した者も意外と多いのを耳にして、自分の中の情報と照らし合わせてみる。

午前中最後の休憩時間の賑わいの中、進はポケットからメモを取り出して弾美に見せた。二人して窓際に陣取って、いつもの他愛ない遣り取りに見えるが、まあ、他愛ないと言えば他愛ないのだが、フランスカの期間限定イベントの、諸々の中間報告が公式サイトから発表されたらしい。専用のホームページから、朝の内に進が主だった内容を書き写したのが、メモの内容だ。

「へえ、早解き挑戦者が7割以上……遅解きはたった3割か。って言うっても、ただ単に攻略が遅れているだけの奴等もいるんじゃない？俺もだけど」

「今回はどっちのルートも正解だったさ。早解きでも性能のいい装備入手出来るし、何より中立エリアで限定装備を買い占めれるしな。遅解きはNMから術書や装備を入手出来て、レベルのアドバンテージは後で役に立つそうだって書いてあったよ」

「進、レベル幾つって言うてたっけ？ 早解きで何かいい装備貰えたのか？」

「今レベル14でステージ6の攻略中。そこをクリアすると、地上に出れるらしいけど。早解きで3回くらい、パーティ全員が迅速の装備シリーズ貰ったっけ。器用度とか腕力とか、火と雷対応だったかな？ あと、武器防具屋で色々な装備が買えたよ」

「へえ、迅速って名前、そのまんまだな。進達は、もう地上見えてるのか」

そう言えば、地上に出るのが取り敢えずの目標だった。何とかの大樹に養分を吸い取られたんだっけ。すっかり忘れていたが、魔女も黙って冒険者達を解放してはくれないだろう。

そもそも、妖精は何故にカバンに入っていたのか、外に出たらどんなイベントが待っているのか？ 限定イベントも、ようやく5日が過ぎたばかりである。

設定や攻略情報など、色々興味は尽きない。

情報交換は授業開始のチャームに中断され、進はまた後でと言い残して自分の席へと戻って行った。弾美は次の授業のテキストの用意に、カバンを漁り始める。

その経緯を見ていた、隣の席の委員長 星野亜紀が呆れた調子で弾美に話し掛けて来る。

「呆れた……休み中、ずっとゲームしてたの、立花君？」

「ずっとじゃないよ、イベントは2時間限定だし。でも、旅行とかには行かなかつたな、遊んだのは近場ばかり」

「……津嶋さんも、一緒だったの？」

探るような訊ね方。瑠璃は学年でも有名な頭腦の持ち主らしく、全国统一模試で凄い点を取って以来、広く名前を知られるようにな

っていた。エスカレーター式の付属学校で、ほとんどの者が顔見知りです。学園生活を送る中、そういう噂は広がるのも早い。

元々小学校の頃は、瑠璃はクラスでも変わり者の子供という認識が強かった。そのせいで中学に上がっての豹変振りに、周囲の興味が向かったのだろう。

本人は全く気にしていない、と言うより母親の恭子が盛り上がっているのを結構嫌がっていたりする。弾美の認識で言えば、瑠璃のトロい所を子供の頃から色々知っているのだ。

有名になった今も、人間ちよつとは威張れる長所もあるんだなという程度。

「ああ、ゲームも一緒にやったよ。あとは色々、結構遊びまわったけど」

「ふうん……」

鈍い弾美には、委員長の含みのある言葉は、勉強の出来る者同士の牽制くらいにしか思っていない。会話は先生の到着で中断され、午前最後の授業が始まった。

弾美としては、瑠璃のお陰で予習はバッチリ。そのせいで気を抜いていると言う訳ではないが、先程進に貰ったメモをばれない様こそつと開いて覗いてみたり。

隣の席で、弾美の愚行に気付いた委員長が、凄い目で睨んでいるが気にしない。メモには1日から昨日までの、限定イベントの主だったデータが書き込まれていた。

几帳面な進らしい、丁寧な文字が目飛び込む。

\*ステージ1突破率、97%

\*ステージ2突破率、89%（内、下層ステージ滞在率 2%）

- \* ステージ3突破率、81% (内、下層ステージ滞在率 4%)
- \* ステージ4突破率、62% (内、下層ステージ滞在率 9%)
- \* ステージ5突破率、43% (内、下層ステージ滞在率 17%)
- \* ステージ6突破率、21% (内、下層ステージ滞在率 41%)

読み方がちよつと複雑に見えるが、要するに昨日の時点でステージ6を突破した人数が、イベント参加人数に対して2割程度いて、その人達からみた追って来る者達の内数は全体の4割。さらに、全体の4割が既に脱落しているという事だろう。

ステージ5の突破率が43%というのは少なく感じるが、まだ17%の冒険者がエリア攻略に挑む権利を持っている訳だ。

イベント参加者数の正式発表は無いが、恐らく1千人近い参加だとの噂がある。大井蒼空町の都市人口が5千人に満たない程度だから、町民の約2割強が参加した計算になる。

それが多いかどうかは分らないが、1千人の2割として2百人が既に地下ステージを突破し、4百人が脱落したと言う事らしい。

ライバルの数を改めて目にして、弾美は小さくため息をつく。だが、逆に言えば1週間足らずで既に4百人がイベント資格を失っているのだ。結構な振り落とし振りかもしれない。

メモには他にも細かなデータなどの記載があったが、弾美の目を引いたのはシリーズ装備の入手率についての書き込みだった。

#### シリーズ装備

- \* 妖精シリーズ 入手率、23% (全4部位) …… 補足、光&風属性
- \* 迅速シリーズ 入手率、64% (全8部位) …… 補足、火&雷属性

- 性 \* 流水シリーズ 入手率、6% (全4部位) …… 補足、水&氷属性

\*暗塊シリーズ 入手率、 1% (全4部位) …… 補足、闇&土属性

弾美は思わず吹き出しそうに息を詰まらせ、慌てて咳払い。1% って何だ？ 6%もいい加減酷い入手率だが、1%は無きに等しい イベント生存者が6百人として、三人パーティで活動しているとみなして2百パーティ。その内の1%だから、発見入手したのは僅か たった2パーティという計算になる。

隣の席の委員長の視線が再び鋭くなったが、弾美は全く気にしない。暗塊シリーズというのが闇属性を含んでいるのが気に入った。是非とも欲しいものだ、せっかちにもどんな性能かを想像し始める。

授業中の妄想に、時間は飛ぶように過ぎて行った(……程々にネ)。

\* \* \*

「地上ステージは結構広くて、自由度も高いらしいな。最終的には大樹をのぼって行く事になるらしいんだけど、今は封鎖されてるから皆レベル上げとか装備強化とかしてるらしい」

「封鎖？ 何か鍵とかトリガーアイテム、探さないと駄目なのかな？ 地上ステージは何人パーティで行ける様になるんだ？」

昨日会ってオフ会したというのに、情報交換どころではない騒ぎようだったせいで。昼休みにもこうしてプレイヤー談話会。イベント生存者は弾美のB組にも数人いて、参加者は輪を作って真剣に聞いている。

話の中心は、ほとんどが弾美と進が担っている。

「4人らしいな、もっと上ではどうなるかわからないけど。封鎖の原

因は諸説あるなあ。レベル25は無いとイベントが始まらないとか、あるアイテムを集めないと駄目だとか、そんな噂が有力かな。早解きのプレイヤーのレベルは20あるか無いかだから」

「へー、4人か。……一人ずつって、何か嫌な増やし方だな。あぶれる奴とか出てきそうだし、イベント主催者は何考えてんだ？」

同意の声はあちこちで起き、その問いに関しては進も首を傾げるしかなかった。確かに2人から3人になった時も混乱は起きたし、3人から4人で組む際にも、どこかのパーティは完全にばらける必要が生じる。

ずっと2人で層をのぼって来た者同士とか、そのまま3人で更の上を目指すとか、そんな稀なパターンでもないと上手く行きっこないと思うのだが。

他にもシリーズ装備の質問や情報、レアなアイテムの入手方法などの話題では盛り上がりを見せる。どうやら早解きパーティは、雑魚や中ボスすら時には無視して、クリア一直線の戦法を取っているらしい。ボス戦も、回復はポーション任せで、とにかく全員で殴り倒すのが主流とか。

聞いてて全然華が無い。

その点、弾美の話はと言えば、聞きどころが超満載。起承転結どころか驚くようなオチも存在するので、聞いてて面白いしドキドキする。宝箱を欲張って開け過ぎたら大変な目にあつた話とか、何度も蘇る死神とか。

大抵は欲張って後で苦労する話なのだが、その分報酬が増えるとなるとみんなが声を揃えて羨ましがる。攻撃力+40の武器を閃きで蘇らせた話になると、歓声は頂点に膨れ上がった。

「津嶋って、ゲームでも凄いんだな……」

「いや、あいつはキャラ操作は全然下手だけど。本をいっぱい読んでいるから、想像力とか豊かなんだろうな。それが謎解きに生きるのかも？」

「んで、弾美のパーティの3人目が小学生ってマジなの？」

「ああ、こいつも下手だけど……腕は無くても性格良ければ何とかなるもんだな」

弾美の言葉に、クラスメイトは全員揃って不審顔。ゲームに性格は関係ないんじゃないかの霧囲気が一瞬にして出来あがる。それでもその言葉は、弾美の偽らざる思いだったりする。

ゲームというのは、一緒に時間を楽しんだもの勝ちなところが確かにある、と。

「別に攻略をなめてる訳でも、諦めてる訳でもないぜ？ 目標は最初と変わらず、ベスト3位入り」

「大きく出たなあ、でも弾美んところは実績あるからなあ」

「うちの大学生の兄貴の話だと、今回のイベントも、絶対ベスト3位までは大学サークルが占めるって息巻いてるらしいよ」

同級生の話に、進を始め一同渋い顔。大学生のプレイヤーにも色々傾向があつて、中には大人気無いプライドの高い一団も存在するのは確か。狩り場で大きな顔をするし、数に物を言わせて素材を買い占めたり、利潤に走って空気を読まないプレイは、とても見習えるモノではない。

それ故に、イベントで一泡吹かせてやろうと言う思いも強かったり。

「大学生はズルいよなあ……組織力とか凄いらしいし、サークルって部活動の事だろ？」

「そうそう、部活動でゲームするってズルいよなっ！ でも、攻略

本の自主制作とか同人誌とか、そういうの作って楽しんでるサークルもあるらしいよ。大学祭とかで売っていると見たし、今でも結構な数が出回ってるって」

「おおっ、面白そう……それって、何冊か手に入らないかな？」

「どうだろ？　じゃあ俺、帰ったら兄貴に頼んでみるよ」

弾美の頼みに、気楽に頷く同級生。それからは大学祭に遊びに行つて、変な同人誌を買った話から週刊少年漫画のタイトルの話に変わって行き、ゲームとは脈絡の無い世間話に。

周囲でもワイワイガヤガヤ、学生達の騒がしい談話が弾んでいる様。

弾美は今日は部活動があるので、イベントのインは夜からとパティの面々には告げてある。期間限定イベントを始めてから、初の夜攻略になるのだが。

進たちも今日は、珍しく夜のインらしい。お互いいたら、通信を取り合おうと約束してはいるのだが。エリア攻略中に入ってしまうと、誰もが真剣そのものである。

頑張れよ、そっちもな　攻略前はそれで充分だったり。

学生達の本業は勉強の筈だが、休憩時間にはそんな事は関係ない。思い思いのグループで好きな話題を話しながら、ゆっくりと時間は過ぎて行く。

弾美たちイベント冒険者にとって、その時間は攻略までの力ウントダウンに過ぎないのだ。

\*

\*

『美井奈、ちゃんと宿題終わらせたか？』

『はいっ、ばっちりです！　御飯もお風呂も、トイレも歯磨きも済



ませましたっ!』

『ばつちりだなっ!』

『はいっ、ばつちりです、隊長!』

弾美がイベント限定エリアにインしてみると、既に美井奈が待ちわびた様子で中立エリアをウロウロ。約束の時間は夜の8時で、頑張って10時には落ちる予定ではあるものの。

平日だから、突貫での攻略になるのは仕方がない。何しろ明日も学校があるし、寝る時間を削ってまでゲームをしているのがばれたら、何をしてるのってな親からの雷が落ちるのは間違いないのだ。

そんな事を考えていたら、瑠璃もインして来た。時間を見たらきっかり8時。パーティに誘うと、ルリルリはこちらに近付いて来て薬品などの消耗品をトレードして来た。

どうやら夕方の時間の隙間を見て、買うとか合成で消耗品を作って貰っていた模様。

『よし、全員揃ったしエリア攻略始めるぞ〜!』

『はいっ、隊長……でも、一度同じ部屋からの合同インを体験しちゃうと、離れたインは寂しいですね〜、ちよつと心細いかも』

『あ〜……分かるなあ、その気持ち』

『空いている内に入ろう、装備チェックはいいか〜?』

自分も瑠璃に貰った薬品を整理しつつ、ちよつとずつ混み始めた中立エリアの、一番大きな扉前へ。左右の小さな青白い扉は、昨日の合同インで攻略済み。これでこの大扉も攻略可能になっている筈。後ろに従う少女達を確認し、弾美は扉をクリック。

エリアの中は、やけに視界が悪かった。茅だか木の根っこだかの障害物が迷路を形作り、一行の前に立ち塞がって来る。その上、不意を突くように物陰からモンスターが飛び出てくる嫌らしさ。

ハズミンの種族スキル《敵感知》が、ようやく役に立ち始め、不  
用なダメージを減らしてくれる。ミイナに敵の位置を教え、逆に弓  
矢で自分達の前に誘い出して息の根を止める。

敵を感知出来なくなったら、散らばって道の探索の指示を出す弾  
美。扉の大きさの違いからの想像通り、このマップは左右のエリア  
より2倍近く広い気がする。

序盤ではあまり時間を使いたくないと、弾美はそう考えたのだが。

やれダメージ沼に落ちただの、モンスターが襲って来ただのと、  
仲間からの通信が途端に賑やかになる。作戦的には正しい筈だと、  
弾美の返事は自分達で処理しろとの冷たいもの。

ついでに正解の道も見つけて欲しいものだが、見つかったのは宝  
箱。

『鍵は掛かってないタイプですかね?』

『ああ、鍵付きは青いグラだから……開けるぞ』

中からは聖水が1個と経験値がちょびつと、おおっと上がる歓声。  
ダンジョンに宝箱はつきものとは言え、見つかることややはり嬉しいも  
のだ。弾美も思わず、画面の前でガッツポーズ。

次にやるべき事は、1つも見逃してなるものかの気持ちの詰まっ  
た言葉を発する事。

『分ってるな……1個も見逃したら承知しないぜ!』

『了解です、隊長!』

『ん、探す範囲を決めところか、ハズミちゃん』

瑠璃の言葉を受けて、取り敢えずミイナが真ん中を受け持ち、右  
と左をハズミンとルリルリが逐一チェックしては戻ってくる作戦に。  
ハズミンはもはや雑魚などには遅れを取らないし、ルリルリは自分

で回復も出来る。

一番不安なミイナは、真ん中で目印代わり。呼ばれた方向に移動して、ひたすらマップの上を目指す。

次に宝箱を見つけたのは瑠璃だった。中からは神水と、今度は近くにいたキャラの全HPとMP回復。経験値の方が良かったとは弾美の感想だが、次の宝箱からはしっかり頂いてご満悦。

いつしか正しい道より宝箱の探索に熱が入り始め、弾美は感知のリーダーにたくさん赤点が灯っているのに気付く。苦労して辿り着いてみると、ちょっと開けた場所に大カマキリと八手型のモンスター姿が。

その後ろには宝箱が2つ、やるしかあるまい。

『敵と宝箱発見。敵は多分、中ボスかもな。後ろにも何か……なんだアレ?』

『どこどこ? ミイナちゃん、私が行くまで待ってて〜』

『はい、お姉ちゃま!』

自動マップはパーティで共有だ、しかもパーティ仲間の位置はマップに表示される。女性陣がハズミンの表示位置を頼りに合流すると、やっぱり出てくるのは驚きの声。

目の前の敵はともかく、その後ろの物体はナニ的な会話が。

『なんだろ、アレ……蜂の巣かなあ?』

『もう1個は、カマキリの卵に見えますねえ。田舎に行くと、結構原っぱにあるそうですよ?』

そんな豆知識は、今はどうでも良いのだが。大井蒼空町も周囲は完全に田舎なので、弾美も瑠璃も子供の頃に見た事はある。問題なのは、アレが戦闘時にはどう作用するのかという事。

増援がとめどなく出てきたら嫌だが、果たして攻撃で壊れるものか。

『タゲれますねえ、って事は攻撃も出来るのかな？』

『んじゃ、もし増援が出て来たら、美井奈が撃墜頼むな。俺はカマキリやるから、瑠璃は八子の相手をしてくれ』

『わかった、魔法掛けるね』

ハズミンとルリルリがそれぞれ支援魔法を掛け終わり、いまいち不安な中ボス戦がスタート。モンスターの反応と共に、案の定蜂の巣からは雑魚の八子が空中に飛び出す。

さらにカマキリの卵からは 大量のカマキリの子供が、地面を覆い尽くすように飛び出して来た。大量といっても、恐らくは一塊で1匹扱いなのだろうけど。

女性陣からは気持ち悪いとの悲鳴が上がったが、弾美から見ても充分気持ち悪い。

眉をひそめていたら、大カマキリのカマが飛んで来た。ブロックが遅れそうになり、慌てる弾美。お返しに《下段斬り》から《二段斬り》の連続スキル使用。上手く決まって、敵のHPは一気に半減したが、フリーのカマキリの子供達には攻撃され放題。

美井奈はどうやら、こちらを視界に入れない事に決めたようだ。

雑魚の八子と蜂の巣ばかり攻撃して、こちらはまるで知らん顔。

『美井奈っ、こっちの雑魚も倒せよっ！』

『……こっちって、どっちです？』

あくまで無視を決め込むつもり的美井奈である。ルリルリの様子を見たら苦戦しているようなので、弾美は怒らずまあ良い事にする。向こうのサポートに従事して貰おう。

こちらの戦況はと言えば、範囲攻撃があればかなり楽なのだが、無いので仕方ない。邪魔な子供を蹴散らしつつ、大カマキリと距離を取ってSPが貯まるのをひたすら待つ弾美。

《SPヒール》の魔法のお陰で、意外と早くスキル連続使用可能になった。一気にけりをつけようと近付いた時、不意に地面の子供の群れが飛び上がって虫柱を作り、ハズミンの視界を奪う。

一撃で倒せる雑魚だと侮っていたが、こんな特殊能力があるとは。

視界不良に慌ていたら、大カマキリの二段斬りにハズミンのHPは4割近く削られていた。敵の特殊技は、どうやら親子でのコンビプレイのようだ。

虫柱を何とか蹴散らし、取り敢えず視界を確保する弾美。その間にも攻撃を受けてしまったが、敵の親カマキリは何とか2度目の連続スキルで撃破。悪態をつきながら、子供の群れを放出している卵もようやく壊す。

その頃には、ハズミンのHPは残り3割まで減っていた。

『だ、大丈夫、ハズミちゃん？』

『美井奈……明日会ったら、お仕置きだからなっ！』

『だって気持ち悪かったんですよ、仕方ないじゃないですかっ！』

女性コンビも、どうやら丁度倒し終わったようだ。ルリルリから回復魔法が飛んで来て、ハズミンの体力は安全圏へ。瑠璃がドロップを見て、神水の合成材料が入手出来たと喜んでる。

ついでに中ボスのハチから細剣がドロップ、瑠璃が喜んでゲット。

『神水って、蜂蜜から出来るんですかあ』

『そうだよ、栄養があるんだよ、蜂蜜って！』

だから何だと言いたい弾美だが、取り敢えずドロップした鍵で2

個の宝箱を開けるのが先。箱の中からは、炎の水晶玉と剣術指南書が1個ずつ出て来た。

炎の水晶玉は、範囲攻撃が可能な炎の魔法が込められたアイテムである。かなり強力だが、1度っきりの使い捨てとなっている。今のように、たくさん雑魚に囲まれた時には超便利。

面倒なので、全部ミイナにロツトして貰う。

『美井奈、水晶玉の使い方分かるな？』

『ん、分かんないです。どうやって使うんですか？』

『ポケットに入れて、バックが赤表示になるだろ？ そしたらアイテムを攻撃用に使える。聖水とか、切り替え出来るのあるから注意な』

美井奈はさっそく、ポケットの入れ替えを行って表示の確認。弾美の説明では、たくさんリンクした時の緊急用に良いそうで、しっかり心に記憶しておく事に。

アイテム攻撃は、使用者にヘイトが向かないのでとても便利なのだそう。

茅と根っこの迷路は、中ボスのいた場所で間もなく終了となっていた。その代わり雰囲気は同じく、似たような湿地帯へと徐々に変化して行っているようだ。

モンスターの種類もイモ虫やトンボや獣人、少し奥に入り込むと大カエルと蛮族が目立ち始める。サクサク狩り進めながら、一行はどんどん奥へ。蛮族の遠隔武器に苦しめられつつ、その内の1匹から待望の弓のドロップ。

ケチって武器の修理をしていなかった美井奈は大喜び。

矢筒のドロップもちらほら、残りの矢数を心配してスキル技を自粛していた美井奈は、これにも大喜び。途中までは有頂天で、蛮族

大好きとのたまった少女なのだが。

それが蛮族関係で、まさかあのような惨事を引き起こすとは……。

最初に美井奈に降りかかった災難は、大カエルの特殊技だった。油断していた訳ではないのだろうが、釣った時の距離がやや近かったようだ。弓を射掛けて釣り、反転して逃げようとしたミイナを、大カエルの伸びた舌が絡め取る。

次の瞬間ミイナは消失しており、残された二人は何が起きたか把握するまでしばしキョトン。

『何ですかっ、真っ暗です！ 隊長、ここどこですかっ？』

『何だ、どうなった？』

『ハズミちゃん、美井奈ちゃんのHPが減ってるっ！』

瑠璃の言葉にパーティ表示のHP欄を見れば、なる程ミイナの生命力がじわじわと減少している。その事実から、弾美はとっさにミイナに降り掛かった状況を把握。どうやら、消化されているらしい。

『カエルに吞まれてるっ！』

ダメージ沼にもお構い無しで、大慌てで大カエルに突っ込む二人無理やり接近して一撃喰らわすと、ポンツと吐き出されるミイナ。そして沼の毒でダメージはそのまま継続。

大慌てで脱出するように指示され、何とか事無きを得た時には、ミイナのHPは残り2割だった。

『こ、怖かった……！』

『大カエル怖いねっ』

カエルに消化されかけるといって、笑えない事態にびびりまくる女性陣。調子に乗って、痛い目に合うといういつものパターンだと自戒しつつ、警戒しながら先へと歩を進める。

毒の沼は次第に少なくなり、乾いた大地とこんもりとした茂みが目立ち始める。自動マップはようやく半分くらい、時間はようやく40分を過ぎたあたりだ。

周囲には松明を設えた台座や、集落のようなものが目立って来た。どうやら蛮族の集落のようで、敵も蛮族と豹のような四足動物ばかりがわらわら固まっている。

『わっ、変なところに来ちゃいましたね!』

『美井奈の好きな蛮族の集落だな。固まってるから注意しよう!』

集落の敵はなかなかの強敵で、集団行動を取ってきたりスキル技を使用してきたり。吹き矢などの飛び道具には麻痺効果が付随して来るし、侮れない相手である。囲まれないよう用心しつつ、パーティは慎重に戦闘をこなしながら移動する。

ただし、貰える経験値もかなりのモノで、ミイナとハズミンが同時にレベルアップ。

『二人とも、レベルアップおめでと〜!』

『ありがとうございます、お姉ちゃまつ!』

『むっ、ここは経験値美味しいな!』

経験値も美味しいけれど、蛮族はドロップも色々と値打ちものが多いようだ。銀のメダルや買えば値段の張る薬品系、更には売れば良い値になる武器や素材など。

そんな狩り場で調子に乗ったミイナは、先行してエリアに散らばった敵を釣りまくる。視界内にとうとう居なくなった敵影に、ミイナはどんどん先に進む破目に。



そんな少女の目についたのが、蛮族の奉っていたであろう祭壇らしき立派な構造物。その中の、煌びやかな貢ぎ物にカーソルが移動する事に気付いた美井奈。

何となく、本当に何となくそれをクリックしてしまう。

弾美が視界にいたら、絶対に止めていたであろう。合同インで隣同士で話せていたら、美井奈も一応相談したであろう。完全な事後報告で、台の上のアイテムを入手したとの言葉を受けて。

弾美の顔色が一気に変わる。

『アホく、それは貢ぎ物だっ！ 蛮族の神様が光臨するぞっ！』

『ええっ、そうだったんですかっ？ その神様って……強い？』

『めっちゃ強いわっ、6人パーティでも全滅する事あるしな！ もうエリアに放出されてる筈っ、とにかくみんな固まれっ！』

弾美の言葉に、慌てて身を寄せ合う一同。周囲を見回した瑠璃は、そう言えばBGMが変わっている事実に気付く。弾美は迷わず、右手の武器を虎の子のレイブレードにチェンジ。

すぐ使えるように、アイテム欄を開いて神水と炎の神酒にカーソルを合わせる。

『ハズミちゃんっ、来たよっ、右側っ！』

『範囲攻撃が来たら、全滅コースだからな。俺が前に出るから、二人は離れて回復な！』

『ひくん、ごめんなさいっ！ アイテム返しても、もう遅い？』

遅いに決まっている、既に一行は蛮族の神様の逆鱗に触れてしまったのだ。壮大なオーラを放ちつつ、蛮族の神は真っ直ぐ貢ぎ物を盗んだ不届き者を目指して来る。

美井奈は完全にびびって謝りまくっているが、瑠璃の一言で幾分

落ち着きを取り戻したよう。

『落ち着いて、美井奈ちゃん。ハズミちゃんを死なせないよう、回復頑張ろう！』

『はっ、はいっ、お姉ちゃまっ！』

上半身裸の体躯に象徴的な紋章、巨大な両手剣を掲げた褐色の肌の蛮族の神。顔だけは豹のそれで、いかにも精悍そうではある。蛮族の神は不屈き者を目にする、挨拶代わりの範囲攻撃。飛ぶ斬撃で、ハズミンの生命力が一気に削られる。

ハズミンの方は、まだ剣の届く範囲にも入っていない。用意していた神水と炎の神酒を、取り敢えず一気に使用して。後衛の回復を信じて、自分より2廻りは巨大な相手に挑み掛かる。

再度やって来た、両手剣の大雑ぎの一撃を弾美はブロック。しかし剣に付与されていた光の追加ダメージが、容赦なくHPを削って行く。

こちらは一撃も入れていないのに、ハズミンの身体はもうポロポロ。

それでも後衛の回復支援と共に、弾美の怒涛の反撃が始まった。攻撃力40の削りの威力は凄まじいが、さすがは相手は神様だけはある。強烈な防御力と自己回復能力を備えているようで、体力バーはなかなか減ってくれない。

今度の範囲攻撃は魔法の攻撃だった。魔法の動作を潰すつもりで連続スキル技を振るうハズミンだが、全く効果なし。強烈な光の柱が周囲を焼いて、一気に7割近いHPを奪って行った。

範囲内に自分一人しかいなくて、弾美は正直助かった気分。魔法攻撃を受けた瞬間、瑠璃の回復がささず飛んで来る。HPは瞬時に、取り敢えずの安全圏に。

さすがに瑠璃は後衛慣れしていると、弾美の重圧も少し軽くなる。

『美井奈ちゃんも遠隔で削ってみて、こっちのMP切れたら回復を交代しよう!』

『わ、分かりました!』

会話をはさむ余裕のない弾美に代わり、指示まで出してくれる瑠璃。美井奈の遠隔攻撃とスキル技の《みだれ撃ち》は、蛮族の神の自己回復を打ち消す程度のダメージは与えてくれている。

この美井奈の攻撃が、弾美の攻撃を再び勢い付けさせる呼び水となった。強烈な範囲攻撃が来る前にと、敵の動作の間隙を縫って削り作業に集中する。

短期決戦をと、炎の神酒を服用したのだ。切れるとマジでやばい。

蛮族の神の、剣技での特殊技をかわせたのは、完全にラッキーだった。ハズミンの横の地面が、音を立てて陥没する。敵のHPは残り2割にまで減っている。

連続スキル技使用で残り1割、最後の追い込みにハズミンの剣が唸る。

エリアボスより確実に強い蛮族の神が、地響きを立てて倒れた瞬間。弾美は思わずコントローラを放り出して、歓喜のガッツポーズ。女性陣からも万歳の通信が飛んで来る。

瑠璃のポケットに入っていたエーテルは完全にすっからかん。美井奈のMPも、とっくの昔に枯渇している。よく勝てたものだと、恐らく皆が感じたであろう。

ご褒美のドロップには、見た事の無い光の宝珠というアイテムと、凄く良質の大剣。光の術書に光の水晶玉、金のメダルは2個と、かつて無い大盤振る舞い。

『神様、ごめんなさい!』

『まったくだ、神様にちゃんと謝つとけ!』

『大丈夫、みんな生き残ったのは、神様が許してくれた証拠だよ!』

ヒーリングとポケットの整理をしながらの、パーティ内での他愛ない会話。弾美はドロップしたアイテムの品定めの場合に、美井奈を苛めてみたり。

そんな秘密のパーティ会話に割って入る人がいようとは、よもや思ってもいなかったのだが。美井奈に取りついた後ろの人が、何と謝罪の言葉を述べて来た。

『こんばんは、美井奈の母です。娘が不始末を仕出かして本当に申し訳ございません』

『ほえっ、美井奈ちゃん……のお母さん?』

弾美も瑠璃も、これにはビックリ仰天。まさか母親が近くで、娘のプレイを見ているとは思ってもいなかった。特に弾美は、結構際どい言葉を美井奈に対して口に出している。

冷や汗ダラダラ、美井奈の悪戯であつて欲しいと内心願ってみた

り。  
『至らない娘で済みません……昨日も遊びに連れて行ってもら

q d  
『えへへ、何でもないですよ!』

『えっと……美井奈ちゃん?』

恐らく、キーボードを取り戻した美井奈が、母親を遠ざけて取り繕っているのだろう。恥ずかしげな言葉と共に、いつもの子供特有の元氣口調に戻る。弾美も瑠璃も、何と言って良いのやら。

取り敢えずは、誤魔化した美井奈の言葉に乗っかる事に。

『何でもないなら、次に進もうか……美井奈、昨日はボーリングと  
かカラオケ、楽しかったな!』

『はいっ、楽しかったです!』

『俺も瑠璃も、美井奈が大好きだからな。ハマしたって、怒ってな  
いぞ?』

『は、はいっ! ありがとうございますっ! 嬉しいですっ!』

何となく必死の弾美に、瑠璃も察してくれたのだろう。たまにフ  
オローの言葉をはさみつつ、ゲームの進行を催促してくれる。イン  
してそろそろ1時間。美井奈はまだ全然平気だと言うが、どうして  
も小学生相手には気を遣ってしまう。

どうやら何とか、蛮族の集落エリアは抜けたよう。地面に石畳が  
目立つようになり、人工的な建造物の匂いが漂い始める。モンスター  
の数も極端に少なく、壺や鎧や影型の人工物モンスターばかりが  
目立つように。

道中の戦闘が極端に少なくなった中、瑠璃がびっくりしたように  
声を上げた。

『あっ、私レベル上がった……ってか、次のレベルアップももう  
すぐだあ!』

『おめでとございますっ! 神様効果ですねぇ』

『いっぱい経験値入ったみたいだな、俺ももうすぐ上がるっばい』

風景はいつしか人工の建造物に変わり、両方の壁も天井も白塗りの  
立派なもの。変な石造やオブジェは点在するものの、やはり敵  
の姿はちらほらとしかいないまま。そんな中、大きな扉前に鎮座す  
るゴーレム2体。

マップから推測すると、ボスエリア前の守護者のようだ。

『ここ抜けたらボスエリアっばいな、気合い入れ直すぞ』

『了解です、隊長!』  
『待つて〜、ハズミちゃん。ヒーリングする〜』

幸いゴーレム達も待つてくれる様子で、敵を目の前にのんびり休憩する一行。作戦はいつも通り、ハズミンとルリルリが1体ずつ相手をして、ミイナが距離を置いてのサポート。

それぞれ適度に距離を置いて、範囲攻撃に巻き込まれないように。

体力こそ多めの守護者達だったが、特殊技のモーションが大き過ぎて、瑠璃でも避けられる単調な攻撃。両者ほとんど傷つく事なく、ゴーレムを一蹴する。ドロップも時化したもので、中ポーションが精々。

一行は門を通り抜け、最終エリアに突入。

\* \* \*

いきなり挿入される、ボスの挿入動画には驚いたものの。地面と一体化している、動物の顔に似た風化した岩のようなオブジェを見せられて、一体誰がエリアボスだと思っだろう。おまけに部屋が広すぎて、ボスの姿は遠くに辛うじて見える程度。

緊張感が、まるでありません。

『ここって……ボスの間、だよな?』

『ボス、動かない、動けないんですかねえ?』

『んむうっ……あれ、本当にボスなのか?』

今までとは完全に違うパターンの演出に、戸惑いまくるパーティー一同。取り敢えずとハズミンが近付いてみようかと前進すると、女性陣もそれに従って歩き出す。

近付くにつれてボスの形ははっきりしてきたが、どうみても自然

洞窟が偶然顔に見えるという類いの印象しか持てない。穴から空気が漏れ出しているのか、うゝとかあゝみたいな呻き声に似た音が聞こえて来る。

それとも、これも演出なのだろうか？

矢を放って良いものか決めかねていた美井奈だが、先程のオイタがよつぽど懲りたのだろう。今回は弾美の後ろで自粛しつつ、リーダーの言葉を大人しく待っている。

ある距離まで近付くと、敵にようやく変化が現れ始めた。洞窟の口の部分から、小さな泥の人形が数体出現して来たのだ。それぞれ歩みもゆつくりと、パーティに近付いて来る。

洞窟の目の部分にも光が灯り、ちよつと不気味に。

『あつ、ようやくなんか出て来ましたねえ、可愛い？』

『可愛いけど……ここからこの後、本当のボスが出て来るのかな？』  
『成る程ありえるな、しばらく様子を見ようか』

ちよつと距離をおいて、泥人形が襲ってくるのを待つ一同。とても歩みが遅く、よちよち歩く姿は可愛いとも言える。念のため弾美がもうちよつと距離を取ると、女性陣も同じく後退。美井奈は特に遠隔武器を意識して多めに距離を取る。

その移動の際中に、美井奈は右の壁に大きな横筋があるのに気付いた。亀裂という感じではなく、人工的な人の背丈くらいの隙間のような。階段状に奥に向かって続いており、部屋の奥の壁には、やっぱり横に真っ直ぐな、人が入れるくらいの空間。

人がそこから観戦出来そうな場所だと、美井奈はちよつと思う。報告した方が良さだろうか？

『お兄さんっ、何か壁に人の通れそうな隙間があるんですけど……』

『あゝ、本当だ……右側だけだね、左には無いや』

「んんっ？　そこ入れるのか？」

ようやく攻撃レンジに入って来た敵を殴りつつ、弾美は二人に聞き返す。美井奈は確かめるために、右の壁に向かうが、段差が高すぎてどうやっても入れない。

泥人形は、殴ってみるととっても弱い事が判明した。ハズミンの一撃であっけなく四散、地面に土塊となって倒れ落ちる。ますます訳が分からずに、弾美は首を傾げるばかり。

ただ一つの相違点と言えば、壊された後の敵の処遇だろうか。普通はこのゲームでの敵の死骸は、倒されたらしばらくして自然に消えて行く。そもそも死骸は触れないのだが、この土塊はそうでは無かった。完全に障害物となって、邪魔で仕方が無い。

敵の数は、倒された分だけ補充されて行くようだ。それ以外にエリアボスからのアクションは皆無である。弾美は首を傾げて自問自答、美井奈の見つけた壁の通路も気になるし。

それよりこのボス、倒して良いのやら？

「ハズミちゃん、見て見て〜」

瑠璃の嬉しそうな通信が、弾美の思考を中断させた。何しろ泥人形の歩みが遅すぎて、こちらの攻撃範囲に到着するまで結構な時間が掛かるのだ。

見てみると、ルリルリは土塊の作り出した階段にのぼり、ハズミンを見下ろしている。同じ場所で戦闘していたせいで、偶然土塊が積み上がって階段を作ったようだ。

「ハズミちゃんより、ノツポだよ〜」

そんなアホな会話より、身体を中心に貫く電撃に弾美は震えた。急いで仲間に、土人形に絡まれて壁際に向かうように指示を出す。



二人は何の事やらな感想を呟きつつ、言われた通りにカルガモ親子よろしく、泥人形と即席パレード。

右の壁の、一番段差の低い場所。ボスの位置とは結構な距離があったが、泥人形は大人しくついて来てくれた。壁沿いにくっ付くように、ザクザクと敵を狩り始めるハズミン。

その途端、美井奈から驚きと感嘆の声が掛かる。

『あゝっ、泥人形で階段を作るんですかっ！ お兄さん、天才っ、頭いいですっ！』

『なるほど、全然気付かなかったよ！』

『気付かず階段のぼってたのか。まあ、二人の会話で思い付いたんだけどな』

得意満面の弾美の言葉、それでも照れてしまつて何となく謙遜してみたり。程なく簡易階段は出来上がり、一行は難なく見えている隠し通路へ。壁伝いに段差を上がって行くと、丁度中間地帯にご褒美とばかりに宝箱が3つ置いてあった。

喜び勇んで開けて行くと、火の術書や風の水晶玉、防御の高いブーツが出て来る。ブーツだけ弾美が貰い、その他は取り敢えず瑠璃が保管しておく事に。

そのまま通路は部屋の奥、ボスの真後ろの隙間へと続いている様子。断崖から覗いて見ると、ボスも今は小休憩しているようだ。道が続くなら行ってみようと、ハズミンを先頭に通路を駆け上がり、左に直角に曲がる。

白い空間には更に3つ、目立つ感じて鍵付きの宝箱が置かれていた。

『また宝箱、大盤振る舞いですねえ！』

『鍵付きの宝箱だね、合鍵あるけど……』

『油断するなよ、罨があるかも』

罨は確かにあった。三人が白い空間に足を踏み入れると、意外な所からの敵の急襲が一同を驚かせる。やたらと低い天井から魚の背ビレが出現したかと思うと、サメ型のモンスターが襲い掛かって来る。さらに地面からは巨大な岩の手が、最後はやはり天井からフグ型のトゲトゲモンスターがお出まし。

大サメは天井という海面からは完全に飛び出せないようで、それは巨大な手の平も同じ。フグと言うかハリセンポンは完全に宙に浮いており、自在な移動を見せる。

作戦を立てる暇も無いまま、複数のボス級を相手にする事となった一同。入り口の壁はいつの間にか塞がっており、出口は今は封じられている。

弾美は一番手近の巨大ハンドに殴りかかり、その堅さに舌打ちする。土属性の敵は大抵強いが、一応タゲはこちらに向いたよう。《下段斬り》を見舞って敵の移動速度を落とし、バックステップで距離を置きつつ《SPヒール》の魔法を使用。

ついでに仲間に、ログで慌てて指示を送る。

『無理せず、タゲ取った奴を引つ張りませ。神出鬼没なサメは後回しっ』

そう言い放って、今度はハリセンポンに《二段斬り》を見舞う弾美。毒か麻痺を引き起こす反撃がありそうで怖いが、速攻で数を減らすには防御力の低い敵から鉄則だ。

ルリルリが自分に魔法を掛け終わり、同じ敵に殴り掛かってHPを減らす手助けに入る。という事は、ミイナが大サメの相手をしているのだろうか。ハズミンの視界に丁度、ミイナが写っている。その後ろからはサメの背ビレが。

ひよつとして、少女は敵の姿を見失っている？

警告を発する間もなく、今度も雷娘は大サメに一呑みされた。背ビレだけ残して、再び回遊するサメ型モンスター。じりじりと、消化され減って行くミイナのHP。

気付いたら、ハズミンは大型ハンドのデコピン攻撃を喰らっていた。弾き飛ばされ、思いつ切りダメージを受けてしまう。絶壁側に飛ばされていたら、ひよつとして落下してボスの前に転げ落ちていたかも知れない。

飛ばされたせいで、ハリセンボンから思わず視線を切ってしまった。飛ぶ弾美。そして、気付いたら目の前にサメの鼻先が迫っていた。暗い洞窟のような口内、大きな口で2体目の餌にありつこうとしている大サメ。

絶叫しつつ振るったハズミンの剣技が、何とか一瞬速かったよう。

こちららもダメージを受けたが、大サメはミイナを何とか吐き出してくれた様子。キーボードを打つ暇も無いのがもどかしい。瑠璃も向こうで苦戦しているようで、パーティ表示でのHPは美井奈と同じく半分近くまで減っている。

動きもどこかぎこちない。麻痺を受け続けて、万能薬が尽きたのかも知れない。

『美井奈、瑠璃の麻痺を回復っ！ それ終わったら水晶玉使えっ。』

瑠璃、こっちに来れるか？』

ぎこちないながらも、ミイナは麻痺解除と回復魔法をルリルリに飛ばす。今まで真つ暗闇の空間に隔離されていて、相当堪えているのだろう。瑠璃も回復が飛んで来ると同時に、敵を引き連れてこちらにダッシュ。

3体が綺麗に並んだところに、ミイナの使用した炎の水晶玉が見

事に炸裂した。水属性の大サメとハリセンボンには大したダメージは無いが、それでも2割くらいの減少。

直接ダメージには強いが、魔法には弱いらしい大型ハンドは、かなりヘタって来た模様。

『美井奈の魔法と瑠璃の殴りで、手を仕留めてくれっ!』

『了解!』

相変わらずわたたしている美井奈と違い、瑠璃は落ち着きを取り戻したようだ。美井奈に回復魔法を飛ばし、素早くエーテルを使用する。戦況を持ち直した安堵と、弾美に対する信頼で持つて、再び敵と対峙するルリルリ。

弾美は大サメは取り敢えず無視して、大型ハンドと同じくらいコレレのハリセンボンに猛チャージ。針飛ばしや体当たりなどの特殊技を何とか捌きつつ、毒を受けながらも何とか削り切る事に成功する。

瑠璃と美井奈の女性コンビは、弾美程には苦戦しなかったらしい。距離を置いた場所からの《ホーリー》の魔法の連続使用で、力技ながら大型ハンドを粉碎していた。それはまるで、苛められて泣き出した子供の駄々っ子パンチみたいな攻撃。

瑠璃は殴る相手を失い、ちよつとモジモジ。

残った敵の大サメは神出鬼没ではあるものの、数に物を言わせて最後は押し切る形となった。丸呑みや尾びれアタックは強烈で、3匹の中で1番タフで強かったのは確か。

積極的に敵を追尾する機能が備わっていたら、犠牲者の一人や二人、出ていたかも知れない。

『倒した〜、勝った〜!』

『やった〜、レベルも上がりました〜!』  
『おめでと〜、あれ、みんな上がった?』

1匹目で美井奈が、2匹目で弾美が、3匹目で瑠璃がそれぞれレベルアップしていたようだ。みんなそれぞれ祝福し合い、その後に敵の落とした鍵を使って宝箱を開ける運びに。戦闘後のお楽しみタイムを、一同はしばし満喫する。

中ボスからは水の術書や金のメダル、ポケットの増える服や皮素材などがドロップ。宝箱からは土の宝珠や流水のスカート、土の呼び水などが出て来た。

初めての流水シリーズだが、どうやら女性キャラ限定のようだ。かなりの良装備で、パーティの底上げをしてくれるのは間違いない。

ややこしい分配は、時間を取れる明日と言う事で皆は納得。代表して瑠璃がカバンに放り込んでおく事に。時間にせかされているようだ、それもまあ仕方ない。

残ったのは、眼下に広がる部屋にポツンというエリアボス。何だかちよつと寂しそう。

落下ダメージが怖いので、来た道を素直に歩いて戻る一行。ポケットの補充やヒーリングも、事前にしっかり整えて。準備万端で挑んだエリアボスの、特殊攻撃はといえば。

ひたすら泥人形を吐き出す事だけと判明。

期間限定イベントで、一番簡単なエリアボス攻略でしたとき。

\* \* \*

ちなみに、主な今回の入手装備。

蜂のレイピア 攻撃力+9 器用度+2 《耐久10/10》

蛮族の弓 攻撃力+9 《耐久9/7》

骨の矢の矢筒 攻撃力+7

編み上げブーツ 攻撃力+3、防+6

カンガルー服 ポケット+2、MP+6、防+7

流氷のスカート 水スキル+5、氷スキル+5、MP+2

5、防+10

掛かった時間は1時間20分、まだ平気だとの美井奈の言葉を受けて。中立エリアでの薬品補充もそこに、ステージ4最後のアスレチックエリアに挑む事に。

そこからの所要時間は約30分。畏だの仕掛けだの狡猾な敵だので、途中色々波乱はあったものの。幸い一人の脱落者も出さず事も無く。

次の層へのステップアップに成功するパーティー同でしたとさ。

## 08 同化してるっ！（前書き）

今夜もお疲れモードですけど、投稿作業をするためにインしましたっ。と言いつつも、片手間にモバゲーしてたりしますけど（笑）。

『英雄クエスト』っていう、お気楽キャラ育成ゲームなんですけど。よく分からぬままに、適当に朝と晩に経験値を稼ぐためにインしてます。キャラは盗賊で、まあ自分好みの中途半端な性能だったりますけど（笑）。

さらには梅酒のソーダ割りを飲みつつ、週末の夜を迎えています（笑）。

今週末も忙しいですね、仕事先で運動会が待ってるので。競技に参加するのは会員さん達なのですが、実際に走るのは動物です（笑）。でも、ある競技ではスタッフも走るそうです（笑）。

梅雨入りしたというのに、忙しい事ですね^^；

さて、改めて見るとこのスペースは前書きなのだそう。チラッと本文にも触れておくべきなのでしょうかね？

自分的には、この辺りから出て来る仕掛けが読んで楽しいかなって思います。アスレチックエリアは、かなり意地悪に作ってあったりもしますけど（笑）。そんな各エリアを弾美達が苦労して進んで、もがき苦しむ姿を見るのがこの上ない楽しみだったり（笑）。

もちろん、強くなって行く主人公達を見るのも楽しいですが^^

「そりゃもう、学校で持てはやされちゃいましたよ！ 意外とプレイしている人、小学生にも多いんですね。兄弟とか、クラスメイトとかと一緒にしてる人多いみたいです」

「へえっ、でもステージ5程度で、そんな威張れるレベルなのか？」  
「いえ、毎回強いボス倒してるって話したら、噂になっちゃって。あと、レア装備？」

「ああ、あれは凄かったな。今のところ、6%の入手率らしいぞ」

その言葉に、素直に驚きの表情の美井奈。隣で歩いている瑠璃の手を握つての帰宅途中だが、話すのはもっぱら弾美とである。三人揃つての帰宅は、昨日の相談で決まつた事。

HRが終わり次第、小学校に迎えに行くと言っていたのだが、美井奈は聞いちゃいない。中学校の靴脱ぎ場に忍び込み、二人を待ち伏せしていたりして。

今日は木曜日、大井蒼空付属中学の部活動は全面的にお休みの日である。学校から真っ直ぐ帰れば、夕方まで2時間は一緒に遊べる按配だ。

美井奈は幸い習いものなどは何もしておらず、この日ももちろんフリー。そんな訳で、三人で弾美の家に向かいながらゲームの談話や学校の話などをしてる次第。

美井奈は学校指定のポロシャツに、薄いカーディガン、黒のスウエットという格好。カバンはリュックタイプの物で、手提げカバンも持っている。どちらかと言うと地味な装いなのだが、美井奈が着るとどこか華やかになるのは、元の派手な容姿のせいか。

一方の弾美と瑠璃は中学指定の学生服。男子も女子も、似たよう



な紺と藍色のブレザーだが、女子の制服の方はリボンやチェック模様でお洒落感が演出されている。

「今日は急に視界から消えるなよ、美井奈」

「昨日は2回も呑み込まれましたもんねえ、もうこりこりです！」

話は昨日の厳しい戦闘に及び、カエルと大サメに呑み込まれた経験を持つ美井奈は、ぶるつと身体を震わせた。瑠璃と繋いだ手からもそれは伝わり、昨日のゲームでの出来事が蘇る。

確かに蛮族の神様を怒らせたり、最後のボスの部屋の謎を解いたり、アスレチックエリアでもやつぱり破天荒な行動をしたりと、ミイナは昨日も結構なやんちゃ振り満載だった。

そしてそれをフオローする弾美は、とつても大変そうだったのは言うまでも無く。

「そう言えば……美井奈ちゃん、いつもお母さんと一緒にゲームしてるの？」

「え、ええと……昨日はちょっと、隣で笑われたり憐れまれたり、手伝って貰ったり……」

手伝いもして貰っていたらしい。そう言えば、後半やけに弾美の指示にてきぱき動いていた気がしたけれど。弾美も瑠璃も、それを聞いてちよつと生暖かい表情に。

それに気付かない美井奈は、母親は過保護で困ると、一応子供なりの主張があるらしい。

「今日も夕方に、車で迎えに来るって言うんですよ！」

「あら、いいじゃない、優しいお母さんで。家の場所、ちゃんと分かるかなあ？」

「ん、俺のとこの親はペーパードライバーだからなあ。言えば送

つてくれると思うけど……」

美井奈は自分の母は運転が上手だし、地元の地理にも詳しいので平気だと口にした。美井奈も一度訪れた事があるので、何となくの場所は既に伝わっているようだ。

それならばと、一応安心の弾美と瑠璃。

二人の家に辿り着くと、毎回の事ながらも犬達がハイテンションでお出迎え。今回はお客が一人混じっているので、マロンもコロンも大喜び。フレンドリーに飛びつこうとして、美井奈に悲鳴を上げさせている。

美井奈の荷物を弾美が預かり、代わりにマロンのリードを少女に渡す。二人が着替えにそれぞれの家に入ると、美井奈は大型犬を従えて玄関前で硬直しまくりに。

マロンは隣の少女に好奇心から鼻をこすり付け、コロンも外を伺おうと扉に足を乗せる。そのたびに、美井奈はびくつと身体を震わせて過剰反応。

何しろ、自分より大きい生物なのだ、怖いのが当然。

「おまたせ、美井奈ちゃん。駄目だよコロン、騒いだら！」

飼い主の威厳を示しつつ、瑠璃がコロンに手綱を付ける。弾美もすぐに出て来て、夕方前の散歩がスタート。ゲームの前に15分くらい犬の散歩をはさむ事は、帰り道で聞いてはいたのだが。

大きな体躯の癖に子供のようににはしゃぐ犬達を見て、美井奈も段々楽しくなってきた。

「私の言う事も聞いてくれますかねえ、この子達？」

「ふむつ、やってみるか？」

公園に着くと、好奇心で自ら犬達の相手を買って出た美井奈だったが。弾美が手をさっと上げると、二匹ともちゃきつと揃ってお座り。手元をじつと見る二匹の目は、瑠璃がゴムボールを見せると興奮が増すのが伝わって来る。

掛け声と共に弾美の放った赤いゴムボールに殺到する姿は、かなりの迫力だったが。争奪戦は結局マロンが競り勝って、意気揚々とボールを口に戻って来る。

美井奈は思わず拍手でお出迎え。

今度は美井奈がやってみると、弾美は手順を教えて後ろに下がる。ボールを受け取った美井奈は、緊張した面持ちでボールを犬達に示し、さっと手を上げた。

素直に美井奈の前でお座りするマロンとコロロン。次はその手をぐつと腰まで降ろす。犬達は今度は揃って伏せのポーズ、美井奈が手を再び上げるとお座りに戻る。

美井奈が投げたボールは、お世辞にも勢いは無かったのだが。犬達はお構い無しに1つの獲物を取り合って遊ぶ。今度はコロロンが勝利、弾美が笑いながら追加した黄色いボールを、戻ってくる途中のマロンが空中キャッチ。

美井奈は、その運動能力にはしゃいで大喜び。ボール返しではスルーされたが、何度かトライする内に、二匹に『今日遊んでくれる人』と認定されたらしい。

ちゃんとボールを口渡しされた時には、泣き出しそうな程の感動を覚えたり。

\* \* \*

犬との散歩も結構良いものだと、美井奈は先程の出来事を思い出しながらモニター前に腰掛ける。普段積極的に散歩や身体を動かす事をしないので、真新しい体験だった。

それはそうと、ゲーム画面にインして、まず真つ先にするのは妖精チエック。妖精に新しいステージ情報と、もう半分来てるよ、地上は近いよと励まされ。

貰えたのは情報だけ、まだ半分あるんだと軽くショックを覚える。

ハズミンからのパーティ勧誘に答えて、それから皆でする事は。手分けして昨日辿り着いた中立エリアの探索と、昨日のドロップの分配らしい。瑠璃が防具屋と合成屋のチエックをして、他の二人がNPCやアイテム屋を廻る。

消費したアイテムの補充や、まだ売り切れていない武器や防具のチエック。NPCは大した情報を持っていないのは、まあいつもの事なので仕方が無い。

期待していた呪いを解除してくれる筈の教会も、この中立エリアには無い模様。バタバタと走り回った甲斐も無く、今回は主だった収穫も得られず残念な結果に。

それはともかく、今日は波乱の無い攻略を目指すという目標を、弾美が発表したのだが。意に反して、何故か攻略前から騒ぎが何度も起きる破目になったのは、果たして誰のせいかな。

まあ、最初に騒ぎ出したのは弾美だから、あまり二人に対しても強く言えないのだが。瑠璃が武器屋でも防具屋でも何も買えなかったので、合成での装備力アップを提案し。一人でブツブツと考え始めたのを見た弾美は、これは長くなるぞと危機感を抱き。

昨日ドロップして分配していないアイテムを、丸々瑠璃から預かったのがまずは始まり。

「うおっ、昨日はスルーしてたけど、宝珠って凄い性能だな……種族スキル取得か、属性スキル+10かどっちか選べるらしい」

「ええっ、って事は術書10枚の価値ですかっ？ 目茶苦茶凄いアイテムじゃないですかっ！」

「ああ……種族スキルも、スロット塞がないから便利で捨て難いけど、スキル伸ばしたら魔力も上がるしなあ……瑠璃、戻って来い！分配先に済ませるぞっ！」

「ふえっ、何っ？」

思考の波間から瑠璃を強引に引き戻し、弾美は三人で話し合つて分配をさっさと済ませてしまふ事に。流水のスカートと水の術書は瑠璃に、光の宝玉と術書は美井奈に、ついでにカンガルー服と風＆光の水晶玉も美井奈に持つていて貰う。

弾美は属性スキルに興味は無かったが、取り敢えず土の宝珠を貰ふ事に。

いい物をたくさん貰つてご満悦の美井奈は、アイテム欄から宝珠と術書を一気に使用。光の属性スキルが一気に+11されて、当然新魔法を取得する運びに。

覚えたのは《フラッシュ》と言う、短時間だが敵の目を眩ませる魔法。ダメージこそ出ないが、敵の方向感覚を狂わせる事も出来る便利魔法である。防御支援にも敵前逃亡にも、割と使い勝手の良い魔法には違いない。

ただ、融通して貰つた上着装備をミイナが着用出来ないのが残念でならない。何故なら、既に装備している上着に光スキルが付いているため、取り替えがまだ不可能なのだ。装備した状態で光スキルを上げたので、ペナルティの対象になるのだ。

瑠璃は、上着だけは外した状態で魔法を取得したらしい。さすがだと、美井奈は思う。

そんな事を考えながら、美井奈が自分のキャラのアイテム欄を見ていると。ふと、見た事の無い装備品が目についた。呪いのネックレスは、死神からドロップして弾美に押し付けられた物だが……もう一つ、呪いの腕輪というアイテムを所有している事になっている。

一体自分は、いつこんな物を入手したのだろうか？

「お兄さん……私、呪いの腕輪なんて持ってましたかねえ？」

「うん……？ 死神の奴じゃないのか？」

それは別にちゃんとあるというと、弾美は横から美井奈のモニターを覗き込み。しばし一緒になって頭を寄せ合い、昨日入手した筈とのヒントで思い当たるものを羅列して行く。

呪われた記憶がいっぱいありすぎて、難解だったのがちよつと悲しい。

「ああっ！ これって、蛮族の神の貢ぎ物なんじゃ……？」

「あつ、そう言えば……そのアイテムは無くなってますね！」

「美井奈……お前は呪われ属性かつ？」

そんな属性は嫌だと半泣きになる美井奈。ようやく現実に戻って来た瑠璃が、二人の騒ぎを聞いて美井奈のモニターを覗き込む。次いで自分のアイテム欄と見比べて、ふと違和感を覚え。

隣にいた弾美の肩をバシバシと叩き始める。

「何だよ瑠璃、痛い痛いつ！」

「ハズミちゃん、同化してるっ！ 妖精のアイテムっ！」

今度は二人で瑠璃のモニターを覗き込み、なる程言う通りのスキル同化に皆が驚きお祝いモードに。2日目に貰った耳装備、妖精のピアスが早くも同化終了。確かに、外すと破壊される事を示す暗い色の装備欄が、元の明るい色に変わっている。

異例の同化速度に、弾美もちよつと興奮気味である。この作用は妖精シリーズだけが異例なのか、イベント期間中の特例なのか、判断に迷う所である。

「お兄さんに貰った私のピアスは、まだ同化されてませんねえ」  
「私のは、装備して丁度一週間かな？ 美井奈ちゃんに会ったのが3日前だから、美井奈ちゃんのは後4日くらい掛かるのかなあ？」  
「ん〜、確定情報じゃないけど、期待しててもいいかもな。でも変わりに装備するモノ持ってないと、喜びも半減だな（笑）」

弾美の言う事はもつともで、ここの中立エリアの防具屋の商品も品揃えが極端に悪い。残っている商品も割高で、手を出すのをためらわれる値段だったり。

そこで瑠璃が提案した、合成屋を利用したの装備補充なのだが。散々下の層から通い詰めたせい、ここに来て合成可能なレシピが大幅に増えている。

ボスドロップのレア物の素材も、お金は掛かるが装備にして貰えるみたいである。ボス級からのドロップ素材、サソリ皮製品や黄銅製品は、結構安価で装備にして貰える。

瑠璃がノートに取った合成可能なリストを見て、弾美も美井奈も熱心に、これは欲しいの討論会状態。素材に数の限りがあるので、全員分頼めないのが少し悲しい。さらに、レア素材を合成依頼するのに2千ギルも掛かってしまうとの事。

それでも何とかリストから、合成依頼品を選択。消耗した薬品類や武器の修繕も終え、分配はこんな感じに。

ハズミン 黄銅の鎧、深紅のマント  
ルリルリ サソリ皮の盾、黄銅の鎧、黄銅の靴  
ミイナ ゴーレム石の矢束×3、黄銅の籠手、黄銅の靴

「やった〜 お姉ちゃま、ありがとう〜！」

美井奈は大喜びで、いそいそと自キャラのミイナの装備変更。矢の交換で、攻撃力がちょこつとアップ。弓術スキルも優先して指南書を融通されているので、急激な成長を見せている。

削り手としての期待も上昇中、光属性も3つ目の魔法取得で作戦にも幅が出そう。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：16

取得スキル : 弓術16《みだれ撃ち》 : 水10《ヒール》

: 光31《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》

種族スキル : 雷16《攻撃速度UP+3%》

装備 : 武器 粗末な棒 攻撃力+4《耐久11/10》

: 遠隔 蛮族の弓 攻撃力+9《耐久9/9》

: 筒 ゴレム石の矢束 攻撃力+9

: 頭 白いバンダナ 光スキル+3、武器スキル+1、

防+3

: 首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

2、防+2

: 耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

: 耳2 玉のピアス 防+1

: 胴 木綿のローブ MP+3、光スキル+1、防+4

: 腕輪 黄銅の籠手 HP+4、防+6

: 指輪1 皮の指輪 防+2

: 指輪2 妖精の指輪 光スキル+2、風スキル+2

HP+2 防+2

: 腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

: 背 皮のマント 防+2



：両脚 皮のズボン 防+4  
：両足 黄銅の靴 防+6

ポケット(最大6) : 小ポーション : 小ポーション : 万能薬  
: 小エーテル : 小エーテル : 風の水

## 晶玉

専属前衛のハズミンは胴装備の交換で、グラフィック的にも頼れる前衛風に様変わり。武器も先程のエリアで落とし物を拾ったので、少しはマシになった。

装備の補正で攻撃力も上がったし、何より宝珠使用による土の種族スキルを取得で、防御力が上がったのが大きい。地味に思えるが、防御力は生き残るのに直結する大切な数値である。

削りと防御に特化して来たが、欲を言えばスパイス的なスキルが魔法が欲しい所。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：18

取得スキル : 片手剣35《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

《下段斬り》

: 闇15《SPヒール》

種族スキル : 闇18《敵感知》 : 土10《防御力アップ+10%》

装備 : 武器 蛮刀 攻撃力+11《耐久8/8》

: 盾 サソリ皮の盾 防+6《耐久9/9》

: 遠隔 木の弓 攻撃力+8《耐久11/11》

: 筒 木の矢束 攻撃力+6

: 頭 黒いバンダナ 闇スキル+3、SP+10%、

防 + 3

：首 皮の首輪 防 + 1

：耳1 玉のピアス 防 + 1

：耳2 白玉のピアス HP + 5、防 + 1

：胴 黄銅の鎧 防 + 1 2

：腕輪 炎の腕輪 火スキル + 3、知力 + 1、防 + 4

：指輪1 皮の指輪 防 + 2

：指輪2 皮の指輪 防 + 2

：背 深紅のマント 攻撃力 + 4、MP + 4、防 + 4

：腰 マジックベルト ポケット + 3、MP + 2、防

+ 2

：両脚 なめしズボン 攻撃力 + 1、防 + 5

：両足 編み上げブーツ 攻撃力 + 3、防 + 6

ポケット (最大6) 　：小ポーション 　：小ポーション 　：万能薬

　　：小ポーション 　：中ポーション 　：万

能薬

ルリルリの最大の変更箇所は、何と言ってもレア装備の流水のスカート。防御力もMPも格段に高くなったし、より前に出やすくなった。ただ、せっかく盾を持ってもらってもそれを使うアクションに不慣れなのがトホホな感じ。実質、盾の防御力のための恩恵しか無いとも言える。

せっかく妖精のピアスが同化したのに、代わりの装備が無いのが恨めしい。合成の黄銅シリーズには、指輪や耳装備はリストに入っていないかったのだ。

他の二人と同じく、攻撃力も少しだけ上昇。ただ、純粋な削りキヤラとも違う、微妙な育成方向ではある。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：18

取得スキル : 細剣24《二段突き》 《クリティカル1》 :

光10《光属性付与》

：水26《ヒール》 《ウオーターシエル

種族スキル : 水18《魔法回復量UP+10%》

装備 : 武器 蜂のレイピア 攻撃力+9 器用度+2《耐久

10/10》

: 盾 サソリ皮の盾 防+6《耐久9/9》

: 頭 赤いバンダナ 火スキル+3、腕力+1、防+3

: 首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

2、防+2

: 耳1 妖精のピアス

: 耳2 青玉のピアス MP+5、防+1

: 胴 黄銅の鎧 防+12

: 腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

: 指輪1 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

: 指輪2 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

: 背 なめし皮のマント 攻撃力+1、防+4

: 腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

: 両脚 流水のスカート 水スキル+5、氷スキル+

5、MP+25、防+10

: 両足 黄銅の靴 防+6

ポケット(最大6) : 小ポーション : 小ポーション : 中ポ

ーシヨン

：小エーテル　：小エーテル　：万能薬

「結構防御力が上がったなあ。俺は装備で攻撃力も上がったけど」

「他にもレア素材あるけど、レシピが出ないね〜、残念」

「お姉ちゃまのレア装備のスカート、見た目も可愛くていいですねえ」

イン前なのに、和気藹々。入る前から強くなった気がするという、ちよつと稀なパターンではあるが。グラフィックの大幅な変化に、色んな角度からキャラを眺めて楽しんでいる瑠璃と美井奈。

三人パーティーでの行動も、初日を含め今日で4日目である。慣れも出て来てお気楽ムードのパーティーに、弾美が気合いを入れなおす一言を呈する。

たった今、進達からの通信内容がその源である。

「おおつ、進達は最終ステージ攻略終わったってさ！俺達も頑張るぞ〜！」

「了解です、隊長！今日は隣から直接指示を聞けるので、気分が楽ですよっ！」

「そうだね、頑張ろう〜！今日はどこから？」

ハズミンが歩いて示したのは、大扉の左の扉。選択としては、下の層と同じ順序である。女性陣もそれに従って、リーダー指令のエリア進入中のログが流れる。

三人が目にしたのは、下の層で一度見たのと同じ感じの景色。灰色の石畳の続く通路は、両端に石柱が等間隔に立ち並んでいる。真っ直ぐなダンシヨンは、奥へとひたすら続いている。

モンスターの種類はさすがに微妙に違って来ているが、獣人や蛮

族系が混ざっているため結構釣りに気を使う。その他、無生物の鎧や泥人形、影型のモンスターも多く目立っている感じ。獣人達よりは弱い、当然ながら経験値もあまり美味しくない。

さくさくと進みながら、前回と同じ場所まで辿り着く一行。同じ感じに両端に存在する、扉とそれを守護するガーディアンズ。中ボスと言うほどには強くないが、雑魚よりは確実に強い雪豹とゴレムを始末し終え、素材系と宝箱の鍵のドロップまでは下の層と全く同じ。

問題はここから。鍵の付いてない扉を開いた小部屋の中には、やっぱり宝箱が2つ。

「美井奈、右と左どっちだ？」

「両方開けると後で酷い目に合うんですよねえ？ ……じゃあ、左！」

美井奈の言葉を受け、ハズミンが左の宝箱に鍵を差し込む動作。

その途端、宝箱がモンスターに大変身、目の前にいたハズミンに襲い掛かって来る。ダンジョンにはお馴染みのミミックだ。

襲われると思っていなかった一同は、大仰天。

「うわっ、パターン変えてきやがった！ ここでミミックかよ！」

「畏だ、ミミックって結構強かったはずだよ！」

問答無用の連続攻撃で、ハズミンのHPはほとんど減って行く。

反撃の剣技も敵の固い外皮をなかなか貫けず、焦れた弾美は美井奈に魔法使用を催促。

光の攻撃魔法は強烈で、ミミックをこんがり焼くには十分な威力。しかし、反撃がミイナに及び始めると、図らずもパーティの弱点を突かれる形になってしまった。

ミミックの残りの体力を削り切った時には、ミイナもボロボロに。

「ひどい、タゲがこっちに来たら、私出来る事が何も無いじゃないですかっ！」

「正解を間違えた美井奈が悪い。だが、確かにそうだなあ……弓は撃てなくなるし魔法は殴られて潰されるし、一人だけレベルが低いからHP少ないし、怖いよな」

「そうだね、ハズミちゃんがタゲを固定する技持っていないから、乱戦になると怖いねえ」

会話しながらヒーリング中の女性陣から離れ、弾美が残りの宝箱を開錠。ミミックが丁寧にも、これを使ってくれと言わんばかりに鍵を落としたのだ。それから、結構な量の経験値とギルも。

反対の宝箱からは氷の術書が出て来た。瑠璃が保管して、反対側の扉前へ。

「よしっ、美井奈。今度こそばっちり当てろよっ！」

「ええっ、また私ですかっ……お姉しゃまっ！」

「わ、私……？ じゃあ、左かなあ？」

瑠璃の選択に従って、ハズミンが左に移動する。それと共に、一同は緊張の面持ちで戦闘準備。しかし、簡単に開いた宝箱からは肩透かしの土の術書ゲットの知らせのみ。一発での命中に、美井奈は瑠璃を尊敬の眼差しで仰ぎ見る。

実際はまあ、2分の1の確率でしかないのだが。

残った宝箱は畏だろつと言う意見で一致を見た一同は、それを放置したまま移動を開始する。雑魚を倒しつつ、一度経験したマップという慣れもあり、道中は結構お気楽だ。

変化が現れたのは、エリア攻略開始から約15分。マップを分析するように川が設置されており、対岸に渡る橋の中央に宙に浮かぶ

タコ型のガーディアンと2個の宝箱の姿が。

回数が多い攻撃手段とがなじがらめに苦戦しつつ、何とか倒して鍵を入手。

「……今、幾つ開けたっけ、宝箱？」

「まだ3つだね、でも奥にも2×2あるとしたら、全部で10個？」

「中ボス10匹相手なんて、嫌ですよ隊長！」

自分だってそんな事態は嫌に決まっている。弾美は気合いを入れて、右の宝箱に鍵を差し込んで運試し。パカッと開いた箱からは、剣術指南書がポロツと出て来た。

思わずガッツポーズの弾美に、拍手喝采の美井奈。指南書の使用も、ミイナへ決定。

「私ばかり済みません、ご恩には必ず報いて見せますっ！」

「これでスキル18？ 美井奈ちゃん、レベルアップはもうすぐ？」

「はい、今日も順調ですよ」

順調でないのは、実はここらだったり。弾美と瑠璃は、既に1つずつ当たりの宝箱を当てたからと、美井奈が半分の確率のくじ引きを言い渡され。ガーディアン戦の後の賭けに、何と2連敗の美井奈。

何となく見慣れ始めた美井奈の半泣き状態に、掛ける言葉をオロオロと捜す瑠璃であった。

「おっ、今回は首の数が増えて行くらしいな……見事、8本首のヒドラになった」

「っ、強そうですね……私のせい？」

「へ、平気だよきつと！ 美井奈ちゃんもレベルアップで新スキル

「覚えたし！」

一方の宝箱からは土の水晶玉と、経験値入手の仕掛け。その前のミニミック戦でメイナがレベルアップ、仕掛けの経験値でハズミンがレベルアップの運びとなり。

弓術スキルが区切りの20に達した美井奈が覚えたのは、強烈な削りを発揮する《貫通撃》というスキル技。武器の耐久度を1つ減らし、その代わりに大ダメージを敵に与えるスキルである。

S Pの使用量が半端でなく掛かるし、弓の耐久度も減るので連続使用は出来ないけれども。ここぞの削りが欲しい時には、確実に頼れる攻撃スキル技ではある。

強烈過ぎてタゲまで取らないか、心配はそこなのだが。

「3つの選択全部外れてのも、ある意味伝説だな……やっぱ呪われてる？」

「ひゅんっ、ごめんなさい神様！」

「だ、大丈夫……多分……」

もはや勇気付ける言葉さえ思いつかない瑠璃である。前回も上手く行ったから今回の中ボス戦も大丈夫と、確信に思いつ切り欠ける言葉を少女に掛けるのみ。

そんなしよっぱい雰囲気の中、弾美の掛け声と共に切つて落とされる戦闘の火蓋。その思いつ切り初っ端に、パーティの空元気を吹き飛ばすヒドラのプレス炸裂。

範囲技の炎攻撃に、先行したハズミンのHPは8割削られ、一気に大ピンチ。

ポーションで半回復、とにかくタゲを取らないといけない弾美は、初っ端からボロボロのキャラを駆使して連続スキル技使用。まずは普通の武器での様子見のせい、敵のHPは1割も減らない。苦戦



必死の戦闘状況に、思わず舌打ちする弾美。

混乱する仲間回復を貰いつつ、とにかく最善と思われる指示を飛ばす。

「瑠璃っ、ブレスは前方範囲らしいから横に廻って殴ってくれ。削らないと話にならない！ 美井奈は斜め後ろに移動、俺と瑠璃の間くらい！」

「了解ですっ、新スキル技使いまししょうか？」

「タゲが行く可能性があるからまだ駄目っ！ 普通の削りと回復メインで頼むっ！」

殴りも強烈なヒドラ相手に、回復魔法を持つ女性陣は、ハズミンのHPをほぼ全快にキープし続けている。何しろ最初のブレスの印象が、強烈に頭に焼き付いているのだ。

攻撃もままならず、エーテルの消耗ばかり激しくなる。

再びのハズミンのスキル技連続削りで、少しだけペースを取り戻し始める一行。幸運の女神が舞い降りたのは、ルリルリのクリティカルの乗った《二段突き》からだった。

正面で戦っていた弾美は、ヒドラの首が1本消滅するのを確認する。それを仲間知らせると同時、湧き上がる歓喜に合わせるように再びヒドラのブレスが炸裂。

歓喜は悲鳴に早変わり。瑠璃のヒールがヒドラの不興を買い、尻尾攻撃でこちらも惨事。

「むっ、首が減ったからか、ブレスの威力が減った！ 瑠璃、もつとクリティカル頼む！」

「狙って出せたら苦労しないよっ！ 尻尾の攻撃で、私もそんなに余裕無いっ！」

「かつ、回復……隊長、エーテル本数もMPもそろそろきついです

っ！」

弾美は思い切って、美井奈にポケットの補充後に、新スキルの《貫通撃》と《ホーリー》の魔法の連続使用を指示。タゲを取ったら逃げ回れと告げると、美井奈は悲壮な覚悟の表情で頷いた。

ウィンドウからもエーテルを使用して、MPを8割がた回復し終えた美井奈。生贄の羊となるべく光の魔法をまず飛ばし、次いで弓術新スキル技の《貫通撃》を放つ。

ヒドラのHPは1割近く一気に消耗、再度の魔法攻撃にと《ホーリー》をぶち込む。完全に激怒したヒドラは、地響きを立ててミイナに殺到。美井奈は悲鳴を上げて逃げだす前に、弾美に言われた通り《フラッシュ》を使用する。

これで敵は盲目状態、追いかけれながら殴られる目も減るかも。

「おおっ、何が効いたか知らないけど、ヒドラの首がもう1本消えてるぞっ！」

「こっ、怖いです、隊長っ！」

「ちょっと待ってくれ、こっちもポケット入れ替える……瑠璃はヒリングといてくれ」

「うん、エーテル使い切ると辛いもんね……了解っ」

目潰しの光魔法が効いたのか、意外と殴られる気配もなく部屋を走り回るミイナ。立ち止まっただけの再度のプレスにはびびったが、幸い誰も範囲には入っていなかった。

数分後には、元気になったハズミンが再び連続スキル技の使用でタゲを取り戻す。どうやら敵はプレスの再使用には、結構時間が掛かる様子。幾分か攻撃パターンも解明出来て、勢い付いて反撃に転じる一行。

美井奈の《貫通撃》と、念願の瑠璃の再度のクリティカルで、ヒドラの首も一気に4本まで減らせる事に成功して。敵のHPも、気

付けば残り3割まで追い込んでいた。

最後に飛んで来たプレスは、ハズミンのHPに4割程度のダメージ。美井奈のマラソン後の猛攻にと、虎の子のレイブレードを装着して炎の神酒を使っていたハズミンはある意味必死。肉を切らせて骨を絶つ勢いである。

そんな意気込みの甲斐もあつて、残りを程なく削り切る事に成功。

「やった〜、勝った〜っ！ 私、ちゃんと役に立ちましたよね!？」

「凄かったよ、美井奈ちゃん！ 私より敵を削ってたかも!」

「そうだな、途中のタゲ交代からの装備チェンジは結構使えそうだなあ。でかした、美井奈!」

二人に褒められて至福の表情を浮かべる美井奈。恒例の抱きつきから瑠璃に甘え、しばらくは収集が付かなくなる。まあ、ヒーリング中だから許される事だが。

ドロップは炎の術書と、炎のフレイルという棍棒武器。後はレア素材に薬品が少々。スキルは無いのは全員一緒だが、MPが増える武器だったために、炎のフレイルは美井奈が所有する事に。

「わっ、お姉ちゃま……たくさん術書持つてるんですね。勿体無い、使わないんですか?」

「うん、土とか風とかは半端な数しかないから」

「知り合いと合流出来たら、水や光と交換してもいいしな。よしっ、酔いから醒めた、行こうっ」

あれだけ強い敵と激闘を繰り広げても、所詮は中ボスという残念な設定。奥に繋がる通路を進めば、しっかりとエリアボスが待ち受けている。瑠璃のレベルもめでたく上がっており、取り敢えずは後顧の憂い無し。

強制イベント動画を見終わって、対峙するのは大きな樹木モンス

ター。木の洞が目と口になっており、ちょっと気持ち悪い。ハズミンが先行して近付くと、樹木の身震い。

虫がボロボロと落ちて来て、女性陣から悲鳴が上がる。

「ひいつ、何これっ、気持ち悪い……！」

「いいから削れ、こいつ結構強いぞ……！」

落ちて来た雑魚は瑠璃と美井奈に任せて、弾美はボスと一騎打ちの構え。敵が強いのは本場で、それでもさっきのヒドラに較べると案外そうでもないという。

削りの順調さに勢い付く弾美。そしてスキル技を放って気付く、  
衝撃の事実。

「やべっ、武器交換するの忘れた……レイブレードのままだ！」

「……壊さない内にやっつけてね、ハズミちゃん」

たった2しか無い耐久度。先日の使用で1に減っており、無茶な使用は命取りなのだ。それでも削り速度が超速いのは快感で、あつという間に敵の生命力は半減。

再度の特殊技で落ちてきたのは、巨大な木の実。点滅したかと思つたら、皆を巻き込む大爆発。再び起こる悲鳴には、今度は弾美の怒声も交じっていた。

怒りの連続スキル技使用に、敵も応戦。再び落ちてくる虫の群れ。

そんな激しい攻防の末、敵は既に瀕死状態までに追い込まれているにも関わらず。弾美が舌打ちして、いきなりボスから撤退して逃げ出したのを見て。

追い掛ける敵とのマラソンに、美井奈が恐る恐るお伺いを立てる。

「あの、隊長……？ とどめ刺してもいいですか？」

「頼むつ、これ以上殴つたらレイブレードが壊れるっ！」

それならと放つ最大奥義の《貫通撃》に、エリアボスは音を立てて崩れ落ちた。歓喜の声を上げてのハイタッチに付き合わされた瑠璃は、まだ始末し切れていなかった雑魚にたかられ、てんやわんや。エリア脱出用の魔方陣と鍵のアイテムも出現したと言つのに、まだ戦闘が続く珍しい現象。

ドロップは各種ステータス系の上昇する果実が3つ、胡桃のペンダント、薬品やレア素材など。ペンダントは取り敢えずは弾美が所持、中立エリアに戻って改めて果実の分配に。

「体力の果実が体力度、力の果実が腕力、器用の果実が器用度を上げる感じだな。何が欲しい？」

「私は器用度が欲しいかな？」

「私は何でもいいですよ」

話し合った結果、弾美が体力、瑠璃が器用度、美井奈が腕力の果実をそれぞれ頂戴する事に。ちよつとだけ強くなって、次のエリア攻略に備える一行。

ほぼ使い切つた薬品類を、瑠璃がショップで補充。幸い、下の層のような高騰振りは見られないのが有り難い。何しろ敵も強くなつて来ている為、買い渋つてはいられないのだ。

全員の用意が整つたのを確認すると、弾美は突入の指示を出す。

「おっと、さっきのエリア、時間どの位掛かつたっけ？」

「んと……45分くらいかな？ 前半が単調だから、後半苦労しても意外と早いんだよね」

「そうですね、次は癖のあるエリアだから、2つ合わせて丁度いいかもです」

果たして美井奈の言う通り、癖のあるエリアに一同が入ってみると。やっぱり下の層と同じような造りで、最初は地下牢獄のような雰囲気迷路。進むにつれて牢屋から地下死体置き場の雰囲気も混ざって来て、出て来る敵もゾンビやミイラ男などのアンデット系ばかり。

演出の不気味さの格段の向上に、瑠璃や美井奈の口からは恐怖に似た咳きが漏れる。

迷路の突き当たりの小部屋に入るたび、ミイラが棺桶から蘇り、細い針金のような体躯の狼男が飛び掛かって来る。こちら辺りは下の層でも体験した敵も多く、戸惑う事なく処理して行く一行。

経験値稼ぎと割り切って、怖い場所での戦闘を我慢している女性陣。それが思わず微妙な顔になったのは、入って15分過ぎに辿り着いたやや大きな薄暗い部屋だった。とは言っても、モンスターの姿は無し。

その代わり、石壁の部屋の一番奥に設置されている、大きく立派な洋風の棺桶。

「むっ、敵影無いけど何か湧きそうだな……ヴァンパイアとか」

「うん、いきなり洋風になると、ちょっと笑えるねえ……」

「でも、さっきから狼男とか出てますから、和洋折衷のごった煮？」

世界観に今更文句を言っても仕方が無いが、出てくる敵の強さくらいは見極めないと。弾美がゆっくり近付くが、しかし黒い棺桶に変化は無し。30秒待っても何のアクションも無く、息を詰めていた後衛陣も拍子抜け。

1分が過ぎてしまうと、ここは恐らく时限式なのではとの推測に辿り着く一行。つまりは、エリアインして一定時間経たないと湧かない敵と言う事で、取り敢えずは放っておくしかない。

部屋を後に進んで行くと、やがて迷路は終わって湿地帯エリアに。

今回のエリアは、どうやら亜熱帯の雰囲気盛りが盛り込まれているよう。出て来るモンスターが恐竜系なので、どちらかと言うとジュラ紀とかの資料が元なのかも知れない。

出て来る恐竜系の敵は強力で、固体それぞれHPや攻撃力が高くて厄介である。その分経験値も多いのだが、油断すると噛み付きと尻尾の二段攻撃であつという間に瀕死のダメージを負う破目に。

大きなシダを掻き分けて、ダメージ沼に気をつけて、大きさのまちまちな恐竜を狩りながらの前進。草食系の恐竜はノンアクティブなのだが、倒すと木の実を落とすので積極的に狩る事に。

「わっ、これはさっきのステータスの上がるアイテムですか？」

「いや、さっきのは果実でこっちは木の実。こっちは食べれば15分だけステータスとか上がる」

「生命の木の実はHPが+30上がるんだっけ？ ボス戦前とか、すごい重宝するよっ」

ちなみに、ポケットにも入れておけると瑠璃は締めくくった。この辺は、メイン世界でも積極的に取り引きされているアイテムである。調理スキルがあれば、もつと時間の延長や2つのステータスを同時に伸ばしたりなど、付加価値を付けたり出来るのだが。

美井奈は感心しつつ、こんなの食べてるから恐竜は大きくなるのだろうと思いが変な方向に。

ドロップ率は程々で、辛うじて人数分出たくらい。そうこうしている内に、パーティは開けた場所に出る。例のこんもりした丘の上には、鳥の巣のような藁敷きの上に卵が1個。

人が両手で抱え切れるかどうかの大きさ。かなり大きい。

「卵だ……」

「あれも進化するのかなあ？」

「とりあえず、最初はサクっとやっつけるか」

一行が近付くと卵にピキッとひびが入り、中から小さな恐竜が襲い掛かれても大した恐怖もダメージも受ける事なく、呆気なく第1ラウンドは終了。

丘の反対側には、やっぱり見える3つの洞窟の入り口。全員一致で迷わず進む事となり、湧き出た魔方陣と鍵は無視の方向で。

雑魚を蹴散らしながら進むと、やっぱりありましたよの妖精の泉。仕掛けが分つていれば、考え込む時間のロスも無く。近くのスライムを蹴散らし終えて、まずは妖精のトレード。

妖精の感謝の言葉を聞き流し、はたと困ったのは弾美以外の女性陣。弾美はさっさと耐久度0になったレイブレードをトレード、ちやっかり修理して貰っている。

瑠璃と美井奈は、どうしようかと互いを見つめ合って迷う事暫し。散々迷った拳句、ようやく決定してトレードしたのは瑠璃が先だった。単なる思い付きで、同化が終了して使い道の無くなった妖精のピアスを泉に投げ込む。

途端に妖精がピヨッと出て来て饒舌に喋り始め、瑠璃はびっくり。

あなたが泉に落としたのは、この使い過ぎて擦り切れたピアス？ それとも、この銀で出来たピアス？ もしかして、この金のピアスかしら？ さっさとどれか選びなさいナ

「わっ、お姉ちゃまっ……何したんですか？」

「えっ、んと……使い道の無くなった妖精のピアスをトレードしたんだけど」



「おおつ、王道の三択だなっ！ 瑠璃っ、金のピアスをゲットしろっ！」

瑠璃はほとんど迷わず選択肢の決定を。欲しいのは確かに金のピアスだが、落としたのは妖精のピアス。そう答えると、正直者には全部あげちゃうとの嬉しい返事が。

隣では美井奈が、歓喜の叫びをあげて大喜び。もうすっかり慣れた抱きつき攻撃に、瑠璃もにっこり笑って抱擁を返す。思わぬプレゼントに、ますます妖精が好きになった瞬間だったり。

「さすが瑠璃だなあ……美井奈、お前も負けていられないぞ！」

「あゝ、何か持っていないかな、美井奈ちゃん？」

弾美にプレッシャーを掛けられ、途端に我を取り戻す美井奈。瑠璃と一緒にアイテム欄をガン視しながら、瑠璃と一緒に必死に考えを張り巡らせる。

傍目に目を引くのはやっぱりこれだと、瑠璃と美井奈の意見は一致、駄目元でトレードしてみる事に。それに反応して、再度妖精がピヨツと出て来た時には、美井奈の心臓はドキドキバクバク。顔には完全に朱が差して、妖精の次なる言葉をじつと待つ。

ナニツ、呪われた装備を浄化したいの？ そんなの教会に頼めば良いじゃない……と言いたい所だけど、今回は特別よっ 清  
浄な泉パワーで、清めちゃうゾ

「うおっ、まじかつ！ 暗塊シリーズってこれだったのかっ！」

「わっつ、これも多分数万ギルお得コースだよっ！ やったね、美井奈ちゃん！」

泉から浄化されて戻って来たのは、呪いが解けて名前の変わった、

暗塊の腕輪という高性能の腕装備。弾美にバンバンと背中を叩かれ、呆けていた表情は喜びの余り、一転泣き出しそうに。

美井奈の気持ち落ち着くまで、一同は装備交換の時間を取る事に。腕輪はハズミンが、銀のピアスはルリルリが、金のピアスはミイナが所有する運びに。

銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2

金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2

暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+10

腕輪の闇スキル+5のせいで、うっかりハズミンが覚えた新魔法《シャドータッチ》という名前で、敵の視界を遮りつつHPを吸い取る魔法なのだが、射程が短いのが難点。

もちろんアンデット系や無生物系には効かないが、ハズミン初の条件付き回復魔法とも言える。

ようやく落ち着きを取り戻した美井奈を引き連れ、戻った先には恐竜の卵。再度卵から孵った敵はちよっぴり身体も大きかったが、大して取り立てる特殊能力も無く。

ドロップしたのも、中ポーションや牙素材くらい。戦闘時間も1分も掛からない有り様である。一行は今度は真ん中の通路を選択し、雑魚を蹴散らし進むこと3分ちよつと。

やっぱり下の層の構造と同じく、扉の前に守護者が2体。

「リザードマンだ、水属性だね」

「短槍と長槍かあ、スキル技使われると厄介だなあ」

気をつけるように言い渡して、例のフォーメーションで戦闘開始。弾美と瑠璃で1匹ずつ押さえ付け、美井奈が後方支援のパターンだ。美井奈は最近、回復だけでなく削りも手伝えるようになっていて、

頼もしい限りではあるのだが。

ハズミンの相手の長槍使いが、大車輪の範囲技を使用。ルリルリがそれに、うっかり巻き込まれた辺りから状況は一転。ピンチの連続に。次いで短槍使いが、支援に奮闘するミイナに遠隔技の槍投げを使用。防御の薄いミイナは、一気にHPが半分に。

慌ててタゲを取り戻そうとする瑠璃だが、なかなか上手く行かない。弾美が美井奈にフラッシュを使えと指示を飛ばし、ようやく短槍使いはピヨピヨ状態。ハズミンが長槍使いに殴られながらも目潰しを喰らった短槍使いのタゲを強引に取り返す。

気付いたら混戦状態、誰が誰を殴っているのやら。

「二人とも、HPの低い敵に集中しろっ！　まずは数減らし、そして楽になるからっ！」

「わっ、わっ、また範囲攻撃が来たっ！」

「かつ、回復？　それとも殴ってる敵を削り切りましょうかっ？」

攻撃と支援の按配を計りきれない美井奈は、軽いパニック状態。弾美は瑠璃に回復をまかせ、美井奈に攻撃の支援を頼む事に。最大攻撃力を誇る、美井奈の《貫通撃》がやっとこさ1体を屠ると、ようやく流れがパーティ側に来たようだ。

2匹目を倒し切った時には、歓喜と言うよりも安堵感が漂っていたり。ドロップは性能のちよつと良い短槍と長槍、それから水の術書、さらには恒例の宝箱の鍵が2つ。それを使って開けた宝箱からは、知恵の果実と水の水晶玉を回収。

両方美井奈に渡して、一行は来た道に戻る。

3度目の卵は、明らかに前より大きく淡い色に光って不気味だった。敵が1匹の時と2匹の時のフォーメーションをお互いに良く確認して、いざ敵のテリトリーに侵入すると。

卵が割れて、雄叫びを上げつつ登場する肉食恐竜。体躯の大きな

恐竜は、いきなりの尻尾殴りの範囲技を使用。しかし喰らったのは弾美一人で、ブロックもすっかり間に合っている。

瑠璃が横に張り付いて、美井奈は二人の丁度後ろから矢を射掛け始める。時たま来る範囲技に苦戦しつつも、何とか3度目の撃破には成功したものの。

3度目にして結構な強敵、この事実を敢えて無視する事に決めた弾美であった。何にしる、今の経験値でミイナのレベルが上がってスキルポイントの振り込み先に逡巡する少女。

先ほどドロップの雷の術書を使用して、雷スキルが+2上昇していたのだ。

「隊長、雷スキルが8まで上がりましたっ！ ポイント振り込んだら魔法覚えませうけどっ？」

「あゝ、美井奈ちゃん雷属性だもんね」

「覚えるのはいいけど、お前ちゃんと使いこなせるのか？ たくさん魔法覚えても、使いこなせないじゃ仕方ないぞ」

「隊長が指示して下さいっ！」

あつけらかなと元気良く言い放つ美井奈に、弾美は呆れ顔。合同インはともかく、各家庭でのインの時にはキーボードでいちいち指示を出さないと駄目なのだろうか。

とは言え、覚えたのは《俊敏付加》と言う支援魔法で、動作を加速させると言う効果のもの。かなり便利のだが効果時間がやや短く、他人にも掛けられるようになるにはスキル30以上無いと駄目らしい。

大事な戦闘前には必ず自分に使用するよう言い含め、この件は終了。

「次は小部屋の敵全滅させたら、宝箱が湧く仕掛けだっけ？」

「確かそうだったね、頑張ろうっ！」

ヒーリングとポケットの補充が終わり、最後の通路を慎重に進む一行。出会う敵を全てなぎ倒し、小部屋に生息する蛮族にも同じ運命を。宝箱からはやたらと聖水や神水が出て来て、ここで瑠璃は脳内で嫌な妄想。

そう言えば呪いを使ってくるような敵、このエリアにいたのだろうか？

最奥の部屋では、気味の悪い肌の色をしたお肉のゴーレムと、そいつを従えた呪術者のような

蛮族。やけに小柄でフードをかぶり、いかにも魔法を使って来そうだ。

お肉のゴーレムは動きは鈍そうだが、腕力はあるような感じ。嫌な組み合わせに、戦闘前のミーティンクも慎重になる一行。結果、ハズミンがゴーレムのタゲを取ったら、三人で速攻で呪術者を倒す方向に。

「よしっ、魔法連発される前に速攻で倒すぞ！ 美井奈、加速魔法忘れるなっ！」

「あ、防御魔法も掛け直すから待って〜」

「魔法掛けますね〜、MPもうちよっつとミイナに欲しいですね〜」

一行が部屋に入ると、案の定お肉ゴーレムが突進して壁役になり、その後ろから魔法詠唱の気配が。範囲魔法を警戒して先行したハズミンが麻痺魔法を受け、さらにゴーレムに重い一撃を貰う。

ミイナの状態回復魔法とルリルリの突入で、ペース奪取を計るパーティ。弾美はようやくお肉に連続スキルを見舞って、敵のタゲを奪う事に成功する。

呪術者に駆け寄ったルリルリは、毒の魔法を受けつつも何とか接近に成功。スキル技を交えての接近戦で魔法潰しに掛かるも、敵も

分身の術で有効打を貰ってこない。

範囲火炎魔法を喰らって、ハズミンともども一転ピンチに。

「美井奈、魔法で削れっ！魔法は分身関係なく本体焼くから！

瑠璃は接近戦のまま、回復頼む！」

「了解ですっ！」

美井奈の《ホーリー》と瑠璃の回復魔法、分身が解けた隙を狙つての弾美のスキル技攻撃に、呪術者のヘイトはもはや誰が取っているのか分からない状態。飛んで来る魔法は半分は止めているもの、こちらのダメージの累積もバカにならない。

特にお肉ゴーレムの相手もしているハズミンは、気を抜くとHPを一気に削られる目に合う。適当にゴーレムを引きずり回し、SPが貯まつたら呪術者にスキル技をぶち込む弾美。

そんな何度目かの交差が効いて、ようやく厄介な呪術者を倒し終えた一行。その途端に、室内に皆で気合いの入ったよしっとの声が響く。残ったお肉ゴーレムは、皆が集まってフルボッコ。

厄介な特殊技も持たない敵は、反撃の手段もなく呪術者の後を追う結果に。

経験値の入手と共に、ハズミンがめでたくレベルアップ。それより何より、ドロップ品を確認した一行は戸惑いを隠し切れず、どうした物かと額を寄せ合い話し合う。

ドロップは魔力の果実に生命の果実、金のメダルと 問題なのは、白木の杭というアイテム。

どうやら、短剣扱いの武器のようなのだが。

「あ〜っ！ そう言えば、入り口近くの部屋に棺桶あったね〜」

「あつたな、今から倒しに行けと……？ ちょっと待て、時間とか蘇る仕掛けとか大丈夫なのか？」

「さすがにそんなに意地悪な仕掛け、無いと思いますけど……」

ぼそぼそと話し合う一行だが、時間を見ればまだエリア攻略を始めて45分くらい。弾美が取り敢えず、卵を倒し終わってから考えようと促すと、パーティはようやく元来た道を戻り始めた。

4度目の邂逅は、堂々のエリアボス仕様の強制挿入動画入りの運びに。ズームアップされる紋様入り卵にひびが入って、生まれたての筈の恐竜は何故か元の卵よりも超デケエ。

電撃に覆われた皮膚は、恐竜と言うよりもや怪獣のよう。

「強そうだね、これがもう一段進化したら怖いよね！」

「さ、さすがにそこまで意地悪しませんって！」

「そうであることを祈ろうっ、さっきの陣形で削るぞ！」

エリアボスの大恐竜はHPも豊富で、何より直接殴ると雷ダメージを受けてしまう魔法が掛かっている。範囲攻撃の尻尾殴りも健在、更には前方範囲の雷プレスは、怪獣と呼ぶしかない威力。

戦闘は一進一退、何しろ普通に殴るだけでダメージが来るのだ。神水や魔法で強化して、ダメージも構わずに殴り続ける前衛陣。後衛のミイナの削り能力が地味に頼りになった。

ポケットの薬品の数が気になりだした頃、気が付けば怪獣のHPも残り僅か。ハズミンの《二段斬り》で長かった戦闘は終了し、湧き出る退出用の魔方陣と鍵アイテム。

何故か喜び合う事も無く、黙り込む一同。

\* \* \*

「……二人とも、薬品の残りどれ位ある？」

「ん、ポーシオンは結構残ってるけど、エーテルはもうほとんど無いね」

「私もです。お兄さんにポーション渡しでしょうか？」

ポーションを美井奈に融通してもらい、時間も薬品もギリギリ持つかもとの話し合いで、パーティは来た道を戻る事に。実際はちょっと苦しいんじゃないかと言う瑠璃の言葉に、美井奈は怯えた表情。弾美が一人、障害があるなら壊して乗り越えるべきとの意見を押し通した結果である。

再ポップした雑魚の恐竜に絡まれつつ、木の実を落とす恐竜も少々狩り進める。時間の経過によってあの部屋の棺桶は本当に開くのかと言う議論も熱く、気付けばインして1時間が経過。

本当にポップするかも分らないまま例の部屋に辿り着き、取り敢えずは強化魔法を掛けての突入。薬品は様子を見てとの話し合いだったが、果たして部屋に入った途端の動画挿入。

洋風の豪華な装飾の棺桶が不気味に少しずつ開いて行き、冷気と共に現れる人影。青白い肌、伶俐な眼光、黒いマントの吸血鬼が出現し、パーティに襲い掛かって来る。

敵はどうやら1体のみのような。勢いに乗って殴りかかるハズミンの斬撃は、しかしまさかのダメージ0のログ。連続スキル技まで使ってしまった弾美は、啞然として敵を見遣る。

反撃は、ハズミンも覚えてたの魔法シャドークラッシュによるHPの吸収。モニターがいきなり暗くなり、慌てる弾美。全く見えないわけではないが、敵が見えにくい。

後から殴りかかったルリルリの細剣は、何とかダメージを与えているようだった。光属性の付与魔法が掛かっているせいだと気付いた弾美は、自身に聖水を使用。

飲む方ではなく、身体にかける事で付与魔法と同じ効果があるのだ。



「隊長っ、弓の攻撃が全く効きません！」

「聖水持ってるか？ 赤表示で自分に使ってみろっ！」

「ハズミちゃんっ、私がタゲ取ってるっ！ 早く取り返してっ！」

混乱するパーティだが、画面が暗く不鮮明な弾美も同じく混乱中。隣の瑠璃のモニターを使いながら、何とか戦線に復帰すると言う離れ業を使ってみたり。

今度の魔法の餌食はルリルリだった。SPをこっそり取られ、逆に特殊技の風の牙でダメージ付きで吹き飛ばされる。弾美はその隙を突いて、再び連続スキル技でタゲを取り戻す。

ミイナは最初こそ、聖水効果の弓での攻撃に従事していたものの、光魔法の方がダメージを与えられると知って、MPの続く限りの連続使用に踏み切る事に。

苦手属性の魔法の連打に、吸血鬼のHPはみるみる減って行く。

ようやくモニターの明るさが戻って来た弾美だが、今度はグラビティの魔法で足止め。ひらひらと動き回る敵相手に、なかなか接近戦に持ち込めない。

美井奈が一番、今回は頑張ったと言えるだろう。エーテルを最後の1本まで使い切り、拳げ旬には光の水晶玉まで使って、ひたすら敵のHPを削って行く。最後は瑠璃のスキル技で吸血鬼のHPは0に、しかし油断した瑠璃に反撃の《シャドータッチ》が。

吸血鬼の動きは、まだまだ止まらない。

「ええっ、何でっ！ 今、敵のHP0にならなかった？」

「むむっ、吸血鬼だけに、お決まりの不死身パターンか……？」

「そんなんっ、コイツ倒せないんですかつ！？」

戦闘中にも関わらず、思わず顔を見合わせる一同。吸血鬼の無軌道振りに、こちららも危うい状況なのだ。誰ともなしに、十字架だの

ニンニクだの、吸血鬼の苦手なアイテムを皆で羅列する。  
そして一斉に思い出す、先程手に入れたアイテム。

「……白木の杭だ……!!!!」

代表して持っていた瑠璃が、慌てて装備の変更。スキルは短剣に全く振っていないが、それは皆同じ事である。敵に近付きエイヤツと突き刺した白木の杭は、ルリルリから奪われたHPをあっという間に再び0へと滅して行く。

気が付いたら敵影は黒い霧と消え、経験値とドロップ品が入ったとのログが表示され。奥に設置されていた棺桶まで消失、残された空間に宝箱が2つ出現していた。

それはともかく、歓喜でコントローラーを離しハイタッチする一同。

「ちよ〜やばかったな……よくやった、よく勝てた!」

「美井奈ちゃんがお手柄だよ、半分以上一人で削ってたもん!」

「いえっ、そんな……えへへ」

ドロップ品は、風の術書とカメレオンジェルという初お目見えの薬品に、良品のマント……と思ったら、ユニークアイテムで吸血鬼のコスプレにしか使えない装備性能だったり。

宝箱からは闇の宝珠と、極めつけの呪いのブーツが出現。どうやら呪い装備や宝珠を得るためには、死にそんな戦闘や謎解きをくぐり抜ける必要があるらしい。

3つ目の呪い装備に上機嫌の弾美に、瑠璃が思い出したように言葉を掛けた。

「ハズミちゃん……時間は平気?」

気付けばインして1時間10分、計算すると2時間縛りのリミットまで後5分しかない。平気な訳は無いと正気を取り戻し、二人をせかして一目散に出口の丘へ。

雑魚を必死に避けながらも、辿り着いて目にしたのは　　白く大きなひび一つ無い卵。

「私、もうエーテル1本も無いんですけど……」

「うん、残りの薬品全部使い切っても、みんな生きて戻ろうね……」

「おうつ、レイブレードも使うし、時間切れもすぐだから、みんな神水飲んどけよ」

「私もっ、武器が壊れるまでスキル技使いますよっ！」

果たして、何に対して怒って良いのやらのパーティの面々。怒りを向ける矛先だけは、取り敢えず決まっている。少なくなった薬品をポケットに詰め込んで、4度目の蘇りの怪獣に挑む一行。

卵から孵った怪獣は、目茶苦茶な暴れ放題。ガツンガツンと殴る弾美たちに、怪獣もガツンガツンと殴り返して来る。挙げ句の果てには、恐竜の特殊技での尻尾の切り離し。ビチビチと勝手に跳ね回るそれに、パーティは跳ね飛ばされ被害甚大。

2時間のリミットもいい感じに切れて、弾美は《シャドータッチ》でエリアボスからHPの拝借。

美井奈が遠隔で、無軌道に暴れまわる尻尾を撃退した頃から、ようやくこちらのペースに持ち込む事が出来たようだ。MPは早々に尽きた一団も、ポジションと残り少ないエーテルを使い切り、何とか最後の修羅場を乗り切る事に成功した。

ラスボスを倒し終わった時には、全員ほぼポケットはすっからかん状態、逃げ込むように退場用の魔方陣に飛び込み、一息ついてから安堵のハイタッチ。

諦めかけていたエリア攻略に、感極まって弾美と瑠璃に向かつてダイブを敢行した美井奈。揉みくちやにされながらも、喜びの波はしばらく引きそうにも無い模様。

どうでもいいが、少女の愛情表現は段々派手になってきている感も。

「きつかったなあ……昨日の蛮族の神様と裏エリアボスの2連戦もきついと思ったけど、今日も同じくらいだったなあ」

「そうだねえ……今度から、もうちょっと多めに薬品買っておこう！」

「成長しても、やっぱりボス戦はきついですねえ。二人とも種族スキル2つ目取ってるのに」

「ん〜っ、直接戦闘に関係ないスキル来ちゃったからなあ」

今日のエリア攻略も全て消化と終わり、ドキドキだったダンジョンの感想戦へと移行する三人。落ち着いたところで、落ちる前にようやくのラスボスのドロップチェック。

さすがに、5度もエリアボスを倒した事の評価だろうか。装備だけでも鉤爪付きの上衣や鉤爪付きの腰布、古代の指輪と3つも良装備が出ている。

他にも剣術指南書や金のメダル、さらには薬品も少々。鉤爪付きの装備2つは、雷スキルが付いている事もあり、美井奈が貰う事に。弾美は恐竜から指輪を貰い、さらにヴァンパイアが落とした闇の宝珠も貰う事に。

あと2ポイントで細剣スキルが上がる瑠璃が指南書を使用、見事新スキルを取得した。

バタバタしていたので用途不明だった、同じく吸血鬼ドロップのカメレオンジェルというアイテムの効能を調べてみると。どうやら装備に付いている属性スキルの同化を、ある程度の数字まで一瞬で

終了させてくれるらしい。

せつかく胴装備を分配して貰っても、装備出来なかった美井奈が試しに使ってみると。説明文に違わぬ効果の結果に、一同驚きの声を上げてみたり。

目茶苦茶レアなアイテムである、たかだか+1の同化に使った事が悔やまれる。

それはそうと、今日の主なドロップの性能。

鉤爪付きの腰布 雷スキル+2、器用度+1、防御+7

古代の指輪 体力+1、防御+5

鉤爪付きの上衣 雷スキル+3、器用度+2、防御+8

「美井奈、親に電話しろよ。2階の電話、そこにあるから」

「はいっ、お借りします、お兄さんっ！」

素直に受話器を拝借して、家の番号をダイヤルし始める美井奈。既にキヤラはゲームから落ちており、弾美だけ通信用に中立エリアに佇んでいる状態である。

さつきまで三人でのんびり会話しながら、週末の計画などを立てていたのだが。時間も6時半を過ぎたので、母親にお迎え催促の電話を掛ける事にした美井奈。

話し合いは簡潔で良好、すぐに迎えが来るとの事で、場は一転解散モードに。

「今日も楽しかったです、またお家に誘って下さい！」

「おっつ、今度は土曜か日曜だな。また一緒に合同インしよう」

「土曜日、美井奈ちゃんお休みなら、お昼から一緒に何かしようか

？ ハズミちゃんは、部活があるから駄目だけど」  
「はいっ、ぜひお願いしますっ！」

帰り支度をしながら、優しい言葉を掛けて貰っている美井奈は上機嫌。階下では仕事から帰宅した弾美の母親の律子さんに捕まって、その容姿に驚かれてひと悶着あつたりして。

主に可愛いとか、お人形さんみたいとかの嬌声だったのだが、美井奈はそう言われるのに慣れていている感じなのが凄い。瑠璃の紹介も耳に入っているのか怪しく、律子さんはハイテンション。

基本的に大人との対応も申し分ない美井奈は、車が到着するまでの間、律子さんと普通に会話をこなしていた。玄関で外の様子を窺っていた瑠璃が顔を出すまで、かなり親睦を深めていた程である。

弾美も美井奈の母親には興味をそそられたので、車が来たよとの瑠璃の言葉に表に出てみると。どう見ても二十代にしか見えない美人ママが、にこやかに玄関先でマロンを撫でていた。

美井奈によく似た、明らかに欧米人の血を引く容姿なのだが、どこと無く大和撫子の雰囲気が出ている感じを受ける。話してみても、実際にそんな感じ。

優しそうな性格のママさんは、やっぱり日本語しか喋れないと自己紹介の後にそう言った。

「娘がお世話になりました、あなたが隊長のハズミンさん？」

「ええ、そうです、あっちが幼馴染のルリルリ。いつも夜遅くまで美井奈をゲームに付き合わせて……済みません」

どことなく緊張しつつ、一応言っておいた方が良さそうな気がした弾美は、相手の様子を窺いながらそう口にした。美井奈の母親は、ニッコリ笑って弾美の心配を吹き飛ばす。自分もネットやゲームは好きだし、子供からそれを取り上げるつもりも無いと口にして。

玄関の踊り場で、瑠璃が心配そうにこちらに視線を送っている。その隣で美井奈が、律子さんと何やら話し込んでいるのが外からも見えた。

「子供の頃から、学校以外で交流の場を作るのって、とっても素敵じゃない？ 私はそういうの賛成だから、厳しく言つつもりありません。これからも良ければ遊んであげてね」

そう言っつて、美井奈の母親は女性陣の集まっている玄関へと、弾美に案内を促す。母親同士の挨拶と会話は、夕食前という事もあって短いものだったが。

お近付きになれて嬉しいとか、今度ゆっくり食事でもという言葉と共に、美井奈親子は車で帰路についたのだが。親子揃って車内から手を振る姿は、なんとも微笑ましかったり。

何かに打ち込むのに、周囲の環境って大切なんだなあ。美井奈親子を見て、そんな事を思う弾美だった。

## 09 火の仕掛け突破！（前書き）

はいっ、今夜も梅酒のソーダ割りを飲みながらの投稿作業となってます。でもまあ、まだまだ酔っ払う程ではないのでご安心を（笑）。

明日はようやくの休みなので、勘弁して下さい（笑）。

さて、今回は投稿サイトの色々な事柄について、ちょっと書いていこうかなと。読む方が中心の読者さんだと、このサイトの各種サービスがいまいちピンと来ないと思いますけど。

かなり凄いですよ、ここ。毎時間ごとのアクセス解析とか、携帯とパソコンのどちらのアクセスかとか教えてくれたりとか。点数制もあるのは、皆さんご存知だとはおもいますが。

ただそのせいで加熱し過ぎて、他の投稿サイトに迷惑がかかったりしてたりとか、そんな問題も耳にしましたが。読者をいっぱい増やそうと、ミラー作ってはリンクみたいな投稿者もいたみたいです。自分とは言えば……気にしないで言えば、嘘になりますけど（笑）。現在の自分の連載の毎日のアクセスですが、平均50人くらいですかね？

以前のログイン出来なくなる前の連載では、100人平均でした。

一番気になるのは、以前読んでいてくれた読者さんが、どれだけ復帰に気付いてくれるかどうかです。いえ、新しくお気に入り登録して下さった方も有り難いんですけどね（笑）。

うん、自分的には点数よりも、感想をくれたりお気に入り登録して貰った方が嬉しいですね。他にも便利な機能あるかもですが、使いこなせてないので良く分かってなかったりもしますけど（笑）。

以前に使ってた時より、確実に知らないクリック先が増えてます（笑）。



取り敢えずは、新投稿の小説の方をお楽しみ下さい。とは言っても、既に昔の投稿先に載っていたりはしますけど。個人的には、アシチックエリアの凶悪な仕掛けやヒーリング潰しの件が好きですね。物語はようやく三分の一、まだまだ先は長いです^^

## 09 火の仕掛け突破！

『静ちゃんも茜ちゃん、ステージ4で限定イベントの資格喪失しちやっただって……せつかく進君に三人目紹介して貰ったのに、ゴメンって言った』

『ありやっ、それは残念だな。まあ、今回のイベントはシビアな仕掛けのエリアがやたらと多いから、やり込んでないプレイヤーじゃないときついかなあ』

『そうだね、でも二人とも月末にピアノの発表会があるから、練習しないと駄目だから丁度いいかもって。発表会はみんなで聴きに行こうね』

『それはいいけど、ステージ6の振り落しが結構きついつて進が言ってたな。向こうのパーティも苦戦したらしいし、こっちも気をつけないとな』

エリア攻略前のお喋りで、さっきまでの通信相手の情報交換をしていた弾美と瑠璃。今日の夕方の攻略で、とうとう静香と茜のコンビは脱落リストに載ってしまったとの話。二人ともおっとり系なので、弾美としてはそれ程の活躍は期待していなかったのだが。

権利を失ったと聞くと、やっぱり残念ではある。

一方、進をはじめとする、もう1つのギルドメンバーの構成パーティはと言うと。途中からじっくり攻略路線に切り替えたりしつつも、ようやくステージ6を突破して、地上エリアに達したらしい。

今は補充のメンバーを探しながら、エリア探索とレベル上げなどに時間を割いているとの話。補充人員の確保が難航しており、次のエリアが解放されても手の出しようが無いとぼやいていた。

こちらは未だに、地上の影さえ見えない。贅沢な悩みだと思う。

『すみません、お待たせしました！ 友達から電話で、宿題範囲の事聞かれましたっ！』

『おっつ、美井奈は明日休みだし、精神的にも余裕だよな。落ち着いて行こうぜ！』

『了解しました、隊長！ 今夜クリア出来たら、次のステージ進出ですよ？』

『ああ、ステージ6まで行けたら、もうすぐ地上に出れるらしいぞ』

地上に出れるという言葉は、女性陣の想像力をいたく刺激したらしい。どんな風景の所だろうかとか、どんなお店があるのかとか、通信会話に華が咲く。

聞いていると良いイメージしか持っていない様だが、弾美は内心考えが甘いと思っている。自由度が高くなるし、色んなイベントが待っているとかの話は確かに聞こえては来るが。反面、何らかの振り落としは確実に存在する筈。

まあ、その辺は自分が気を付けていればいいか、と弾美も結局は呑気に構えていたり。

さて、そろそろ各自装備や薬品のチェックをして、エリア攻略を始めようという話になった8時過ぎ。装備や魔法取得やアイテムでの成長で、各自の出来る事がどんどん多くなっている。

弾美と瑠璃は種族スキルも取得したし、チェックは怠れないところ。

\*

\*

レベル20に達したハズミンは、めでたく種族スキルの2つ目を取得。《影走り》という閻属性のスキルは、ダンジョンなどで移動速度が少し上昇する上、物陰に隠ればアクティブモンスターから

隠れたり、敵の追跡を振り払えるという特徴を持っている。

アイテムと装備で飛躍的に上がった闇スキルのせいで、戦い方にちよっと幅が出て来た。《シャドータッチ》でHPを吸える敵相手なら、ソロでも長期戦闘に立ち向かう事も可能かも知れない。

さらに闇の宝珠の使用で、《闇の腐食》という闇系の新魔法を取得に至った弾美。こちらは敵に掛ける弱体魔法で、掛けられた相手は毒状態になり、さらに攻撃力も落ちてしまうというもの。

釣りにも使える燃費の良い遠隔魔法の取得に、弾美としてはニンマリである。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：20

取得スキル : 片手剣39 《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

《下段斬り》

: 闇30 《SPヒール》 《シャドータツ

チ》 《闇の腐食》

種族スキル : 闇20 《敵感知》 《影走り》 : 土10 《防

御力アップ+10%》

装備 : 武器 蛮刀 攻撃力+11 《耐久8/8》

: 盾 サソリ皮の盾 防+6 《耐久9/9》

: 遠隔 木の弓 攻撃力+8 《耐久11/11》

: 筒 木の矢束 攻撃力+6

: 頭 黒いバンダナ 闇スキル+3、SP+10%、

防+3

: 首 胡桃のペンダント HP+4、防御+4

: 耳1 玉のピアス 防+1

: 耳2 白玉のピアス HP+5、防+1

: 胴 黄銅の鎧 防+12

: 腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、

HP + 25、防 + 10

：指輪 1 古代の指輪 体力 + 1、防御 + 5

：指輪 2 皮の指輪 防 + 2

：背 深紅のマント 攻撃力 + 4、MP + 4、防 + 4

：腰 マジックベルト ポケット + 3、MP + 2、防

+ 2

：両脚 なめしズボン 攻撃力 + 1、防 + 5

：両足 編み上げブーツ 攻撃力 + 3、防 + 6

ポケット（最大6） 小ポーション 小ポーション 万能薬

中ポーション 中ポーション 万

能薬

ルリルリも20の太台に乗り、ハズミンと同じく種族スキルを取  
得出来た。水属性のスキルから《水上移動》という、文字通りマッ  
プの沼や河の流れの上を歩けるといっただけの技なのだが。

他の属性のキャラが水中に入ったら、歩行速度が半減、または進  
入出来ない場合もある。それを考えると、場面によっては重宝する  
事もあつたりするのだ。

細剣武器の《麻痺撃》は、ダメージこそほとんど出ないスキル技  
だが、使い方次第で大抵の相手の特殊技や魔法の発動を潰す事が出  
来る。守りの技とも言えるが、パーティに使える人がいるといた  
いでは、安心度が違つたりするのだ。

ルリルリの装備では、上着の補正でポケットの数が植えたのが大  
きい。防御力こそ落ちたが、エーテルを使う事でヒーリングせ  
ずに継続して戦える時間が増えたのは確か。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：20

取得スキル : 細剣30《二段突き》 《クリティカル1》  
《麻痺撃》

ル》 : 水27《ヒール》 《ウォーターシエ  
ル》 : 光10《光属性付与》

種族スキル : 水20《魔法回復量UP+10%》 《水上移  
動》

装備 : 武器 蜂のレイピア 攻撃力+9 器用度+2《耐久  
10/10》

: 盾 サソリ皮の盾 防+6《耐久9/9》

: 頭 赤いバンダナ 火スキル+3、腕力+1、防+3

: 首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

2、防+2

: 耳1 銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2

: 耳2 青玉のピアス MP+5、防+1

: 胴 カンガルー服 ポケット+2、MP+6、防+7

: 腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

: 指輪1 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

: 指輪2 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

: 背 なめし皮のマント 攻撃力+1、防+4

: 腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

: 両脚 流氷のスカート 水スキル+5、氷スキル+

5、MP+25、防+10

: 両足 黄銅の靴 防+6

ポケット(最大8) : 小ポーション : 小ポーション : 中ポ  
ーション

ーテル

：小エーテル      ：中エーテル      ：中エーテル  
：水の水晶玉      ：万能薬

ミイナの大きな変更点は、何といつても新しく入手した装備で外見がジャングル少女のような格好になった事。敏捷度や器用度も補正で上昇し、矢を放つ回転数も段々と上がって来ている。

自分の属性の雷スキルから魔法を覚えた事も、敵の殲滅時間の短縮に役立つている。MPは相変わらず戦闘の度に足りない不満は募るが、攻撃力はパーティに入った頃からは考えられない程の上昇値を示している。

もう一つ、美井奈が不満なのは弓の耐久度が低い事。弓術スキルの《貫通撃》はとても強いのだが、耐久度を問答無用で使用毎に1つ減らすので、SPが貯まっても使いにくいのだ。

魔法の《ホーリー》も単発でさえ凄く強いが、4回も使えばMP枯渇に追い込まれる。《みだれ撃ち》も矢を一度にたくさん使用するし、ミイナのスキル技や魔法は、だいたいこんなばかり。

課題は継続しての戦闘力かも知れないと、美井奈は自己分析してみたり。

名前：ミイナ      属性：雷      レベル：18

取得スキル      ：弓術20《みだれ撃ち》      《貫通撃》      ：水1

0《ヒール》

：光31《ライトヒール》      《ホーリー》

《フラッシュ》      ：雷15《俊敏付加》

種族スキル      ：雷18《攻撃速度UP+3%》

装備      ：武器      炎のフレイル      攻撃力+14      MP+10《耐

久14/14

：遠隔 蛮族の弓 攻撃力+9 《耐久9/9》

：筒 ゴーレム石の矢束 攻撃力+9

：頭 白いバンダナ 光スキル+3、武器スキル+1、

防+3

：首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

2、防+2

：耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

：耳2 金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2

：胸 鉤爪付きの上衣 雷スキル+3、器用+2、防

御+8

：腕輪 黄銅の籠手 HP+4、防+6

：指輪1 皮の指輪 防+2

：指輪2 妖精の指輪 光スキル+2、風スキル+2

HP+2 防+2

：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

：背 皮のマント 防+2

：両脚 鉤爪付きの腰布 雷スキル+2、器用度+1、

防御+7

：両足 黄銅の靴 防+6

ポケット(最大6) 小ポーション 小ポーション 万能薬

小エーテル 中エーテル 風の水

晶玉

『さすがに強い敵いっぱい倒すと、装備のドロップが凄いですねえ』  
『そつだな、色々と装備とかスキル技の追加や変更あったし、各々  
確認怠るなよ』



『カンガルー服で防御落ちちゃったけど……ポケット増えるからいいよね?』

中立エリアに集合しての、恒例の突入前の話し合い。パーティは合成屋の前で輪になって、瑠璃が依頼して得た薬品や消耗品を受け取っている所である。

時間は夜の8時を少し過ぎた所、既に一同は各家庭からインしてパーティ結成済み。中立エリアの混み様は程々だが、今日入る予定の大きな扉前には人の列は見られない。

そんな訳で呑気に談話したり、各々お店チェックや妖精と話し合ったりの時間の後に。最後の物資補充にとルリルリの依頼待ちの一行。矢束や神水はもちろん、エーテルを素材に中エーテルにして貰ったりも出来るので、長期戦になりやすいボス戦用に是非欲しい。いらぬ装備を売っていたら、知らない内に三人の合計資産は8万ギルを超えてしまっていた。かと言って、品不足でバカ高くなっている普通の装備を買う気にもなれず。

いつしか全員、強い敵のドロップ装備を当てにし始めていたり。

『お金はあるけど、素材がなくなっちゃった。レア素材用のレシピもなかなか出ないなあ』

『んじゃ、合成品の分配も終わったし突入するか。今日は広いマップだし、気合い入れる』

『了解です、隊長っ!』

そんな訳で、気合いも新たに恐らくステージ5の最大の難関に挑む一行。パーティリーダーの弾美が、代表して大扉をクリック。画面が一瞬暗転し、程なくエリアに侵入する。

その風景は、やはり一度は見た感じの迷路エリア。茅や木の根で細い通路が形成されており、一同はモンスターの影や畏れに気をつ

けつつ歩みを進め始める。

今回は迷路の至る所に、蜂の巣トラップが最初から設置されている様子。不用意に近付くと、たくさんのハチが襲って来る仕組みである。瑠璃だけは神水の素材が手に入ると言って、無邪気にはしゃいでいる様だったが。巣を壊すまでは、こちらも被害を受けまくり。期待の宝箱も、やはり設置されているのは間違いなさ気で、一行の士気は初っ端から上がり気味。経験値やステータスアップの果実の大盤振る舞いで、探索にも力が入る。

例の中ボスゾーンまで、薬品の無駄な消耗も無く。手前での後衛陣のヒーリング中に、暇な弾美が覗き込んでみれば。沼地の真ん中の中洲に、設置されている3つの宝箱。

『沼の空き地の周囲に中ボスが見当たらないのが、ちょっと不気味なんだけど』

『沼はダメージ受けないタイプ？ 私、種族スキルで水上歩けるようになったよ』

『凄いですお姉ちゃま！ でも、畏は絶対あると思います！』

疑うことを覚えた雷娘は、ヒーリングを終えると率先して沼のふちを調べに掛かる。ハズミンもルリルリも続いて不審な点を調べるが、沼は濁っていて敵の姿を隠している雰囲気。

ミイナが焦れて不用意に沼に入った時に、敵はやっと姿を現した。

『わっ、わっ、また真っ暗ですデジャヴですっ！』

そして姿を消すミイナ。一瞬見えたワニ型のモンスターは、ミイナを啜えると再び水中に姿を消す。ただし、今度は目の部分だけ表示されてはいるようで、ゆっくり水中を移動中の様子。

大慌ての弾美だが、瑠璃の方が水中移動の移動力低下を受けない

で済むのが幸いして。最速で追いついて細剣を振るうと、ワニは再び姿を現し、ミイナはようやく吐き出された。

瑠璃はワニのタゲを取って貰おうと反転し、弾美の元へ。しかし助かった筈の雷娘は、今度は真後ろに出現した大力エルの舌技に、再びイリユージョン魔術の憂き目に。

そして再び、姿を消すミイナ。

『油断し過ぎだ、アホ美井奈〜!』

『ごめんなさい〜、助けて〜!』

大忙しのルリルリは、またまた反転して大力エルの元へ。パーティ表示のミイナのHPは、残り3割まで減ってしまっている。ワニの呑み込みは噛み付きダメージも負荷されていたようだ。

幸いこの敵も、ルリルリのひ弱な一撃でミイナを吐き出してくれた。美井奈がよく祈っているゲームの神様(?)に感謝しつつ、瑠璃は大力エルを引っ張って美井奈から引き離す。

『瑠璃、こいつら呑み込みあるからマラソンは怖いっ。殴りつつスキル止める!』

『わ、分った!』

なる程、舌を伸ばしての呑み込みを持つ敵相手に、マラソンは確かに無理っぽい。新しいスキル技の《麻痺撃》をいつでも出せるように構えつつ、瑠璃は大力エルに挑む。

一方の弾美は、瑠璃の防御魔法に加え、新魔法の《闇の腐食》で、敵の攻撃ダメージを低く抑える事が出来るようになった。加えて土種族スキルの防御アップの加護に、中ボス相手に盾防御を少々失敗しても、問題にはならないレベルになっている。

順調にスキル技でワニを削りつつ、他の二人の具合も気にする余裕も。

ようやく解放された美井奈は、何とか自己回復で戦線に復帰しようとして頑張っていた。瑠璃に較べて美井奈の回復量は、スキル差もあって半分程度。それでも安全圏にHPが回復すると、遠隔技で苦戦する瑠璃の手助け。

ところが強すぎる攻撃力のせいで、スキル技を使うたびにタゲを取ってしまいそうでは上手く行かない。一度は再びの呑み込み技を喰らいそうになって、瑠璃の《麻痺撃》に助けられる始末。

思い切って、遠隔攻撃のターゲットを弾美の相手をしているワニに変更。がちりキープされている敵相手なら、思い切り武器の威力を発揮出来るという理屈だ。

美井奈のもの凄い切羽詰った追い込みに、ワニは10秒で昇天。

『でかした美井奈、ヒーリングしてる！』

『は、はいっ！』

フリーになった弾美は、次なる獲物へと飛び掛かる。ヒーリング前にMPを使い切るべく美井奈から回復魔法を貰い、瑠璃の助太刀へと大カエルの目の前へ。

ルリルリはへろへろに消耗していたが、何とか無事だった。ハズミンがタゲを取るのを確認して、自分にヒールを掛ける。その頃には大勢も決まっていて、美井奈も復活して削りに参戦。

終わってみれば、薬品もほぼ使わずに楽勝ペース。

『美井奈、毎回死に掛けたり居なくなったりするのはヤメロ！』

『好きで死に掛けたり居なくなったりはしてませんよっ！』

『あれ、ドロップした鍵は2つだけだね、1個は罫なのかな？』

ヒーリング中の瑠璃の言う通り、中州に3個置かれている宝箱に對して鍵は2つ。その他には薬品や素材が少々、宝箱の中身に期待

しようとはまずは右の箱の開錠。雷の水晶玉が出て来て、瑠璃がさっそくポケットへ。多数決で今度は真ん中を開けたが、箱はミミックに早変わり。

ままならない選択結果を嘆きながらも、何とかそいつを苦勞しつつ撃破する一行。それでも、経験値とギルはまあ良い感じなので許せるけれど。

合鍵を使用して、残った宝箱からは氷の術書をゲット。

『前の怪獣とヴァンパイアが効いてますねえ、私もうすぐレベル上がりそうです』

『はいねえ、そう言えば次のマップはどんなかなあ？』

『さあな、美井奈が変な事しなきゃ、すんなり行けるだろ』

『しませんよっ！ 私だって学習するんですから！』

憤慨する美井奈をなだめながら、次へと進み始めるパーティ。風景は段々と、乾いた赤茶けた大地のエリアへ。徘徊する敵は、何と久々の身体の部位のモンスター達。

手や足や顔、お尻や耳の肌色モンスターが、今回はログハウスっぽい集落の点在するエリアをうろつき回っていた。出合ったのはつい数日前だというのに、何となく懐かしい感じを受ける。

美井奈はどんどん釣りながら、ちよっと興奮気味だったり。

『わゝ、懐かしいけど……色々と装備落とすんですけどっけ？』

『そうだな、ドロップ率は良くなかったような気はするが』

『これだけいっぱいいると、ちよっと不気味だねえ』

確かにちよっと、見ようによつてはシユールではある。狩り進めて行く内に、そいつらからプニヨン装備というシリーズ装備が幾つかドロップ。前の皮装備シリーズよりはちよっと良いが、取りたてて付加された性能も無く。

美井奈はその内、顔部位が逃げ出したとパーティに報告。意味が分らない弾美は、現場に駆けつけてみる。ログハウス風の建物は、入り口の扉は付いておらず、その中にダルマ風の顔部位のモンスターが逃げ込んだと言うのだ。

詳しく聴いてもやっぱり分らないが、キャラは入れない仕様になっている模様。

『入って行けないなあ、本当に中にいるのか、敵？』

『本当ですつてば、赤いのとか青いのとかが、3匹くらい逃げてお家に入っていたんですつて！』

『あゝ、NMでやつつけたのがそんな感じだったねえ？』

一行は家の周囲を搜索しつつ、狩り残した雑魚を経験値へと変えて行く。搜索結果は、雑魚以外何も見つからず。その内美井奈がレベルアップ。お祝いとか雑談をしている内に、エリア攻略を始めて1時間が経過。

先程のログハウスに変化があるかもと期待しつつ、弾美は一行を引き連れ道を戻ってみる。案の定、傍目には分らないがハウスの入り口にカーソルが移動するよう仕掛けの変更が。

何かとじつとよく見れば、小さな呼び鈴だった。一同に微妙な間が訪れる。

『……呼び出しているのかな？　つてか、呼び出せば出て来てくれる？』

『中ボスかNMか知らないけど、多分出て来るんじゃないかな？』

『3匹くらいいましたよ！　油断しちゃ駄目ですよ！』

3匹も出て来るのなら、やっぱりマラソン役は必要だろうとの弾美の呟きに。美井奈がその役を買って出て、その気風の良さに弾美はちよつと不安顔だった。

悪い予感とまでは行かないが、何かやらかしそうで、ぶっちゃん怖い。

『大丈夫ですって！ 実はお母ちゃんに文字打つの手伝って貰ってるんで、私コントローラーに集中出来るんですよっ！』  
『またいるのか！』

弾美の驚き発言に、いますよ〜（ハハハ）と美井奈を通じて顔文字付きの冷静な答えが返って来る。弾美はさつきからの言葉の応酬に、失礼な発言とか無かったかと顔面蒼白。

アホとか言ったかも……まあ、思い返すと怖いし、怒っていないようなので弾美はスルーする事に。向こうからも、気にしないで空気だと思っただけの言葉。

授業参観で元気よく手を上げ、間違った答えを言っちゃった時みたいな空気。家に戻って顔を合わすのが気まずいと思ったらありやしないな感情に、弾美は一人身悶えてみたり。

まあ、本当に気にしないで行こう。瑠璃に呼び鈴を押して貰い、弾美は後ろで身構える。

強制挿入される動画があるという事は、こいつらが特別なモンスターだと言っ事を示すのだが。映し出されたその敵の姿は、達磨の顔にやたらと大きな耳、ひよろつとした管にあばら骨をくっ付けただけの胴、手足はあるが存在するのは手首と足首から先だけと言う、とっても変な生き物。

デイトラボッチのようにやたらとでかく、各ログハウスから無理やり這い出るのは、赤と黄色と緑色の3体の巨人。迫力はとってもあるし、良く出来た動画だと思う。

でも、映っている生き物はやっぱり変。

丁度3軒のログハウスの真ん中の広場にそいつらは出現し、戦闘

はいよいよスタート。弾美が手近な奴に殴り掛かると、3体は敏感に反応する。美井奈はそれより速く1匹目に矢を射り、タゲ取りに成功。

殴り掛かられつつ、2匹目にも攻撃。弾美に言われて、近くの敵に《フラツシュ》の呪文。怯ませてから脱兎の如く駆け出して、遠目で見ていた弾美は取り敢えず安心する。

『隊長、はやく倒して下さいね〜！』  
『油断するなよっ！』

励ましの言葉もそこそこに、目の前の青ダルマモドキを殴り始めるハズミン。ルリルリがすぐにフォローに入る。二人とも強化系の魔法は唱え終わっているの、後はひたすら削るだけ。

連続スキル技のダメージも上々、敵の踏み潰しや叩き潰しも、連続で来るのが厄介だが、モーションが大きくなってる分避け易くなくてもいる。

体力は結構あるが大した事無いかたと弾美も瑠璃も思い始めた頃、青ダルマモドキはとんでもない特殊技使用して来た。初めて見るモーションに、瑠璃は潰すべきかどうか一瞬迷う。

急に脱力のポーズをして来たかと思ったら、各部位がポロポロと分離して行く。

気付いたら2対7の超乱戦。ハズミンはタコ殴りの目に遭っている、隣のルリルリもパニック模様。間の悪い事に手の平の特殊技の叩き潰しが飛んで来て、スタン状態のハズミンに新部位のお尻の付属のあばら骨ががちり縛り付けキープ。

動けなくなつた弾美は、仲間に指示を飛ばすしかない。美井奈からの通信も、敵がたくさんに分解したと慌てふためいた内容のもの。

『瑠璃っ、水晶玉使えっ！ 美井奈も追い付かれそうなら、フラッ



「シユか水晶玉で何とか対応しろっ！」  
「了解ですっ！」

瑠璃も何とか了解したようだ。すぐさま間近で雷の水晶玉が炸裂し、範囲に巻き込まれた敵の縛り付けが外される。弾美は《シャドータッチ》の呪文で敵のHPを拝借、いい具合に弱り切ったお尻部位にスキル技を放って、何とか1匹撃破。

それがきっかけなのか、再び合体する青ダルマモドキ。瑠璃の回復が飛んで来て、弾美の体力をほぼ満タンまで治療する。やっつけた筈のお尻部位の部分は、何故か消えてはいない。

その事をどう考えれば良いのか、ちよつと悩む弾美。

「敵が再びくっ付きました、マラソンはまだまだ平気です！」  
「おうっ、頑張れっ！」

美井奈の方もまだ平気らしい。こちらはもう一度袋叩きの目に遭ったら、ちよつと不味いかも知れない。一斉攻撃からの特殊技は避けようもないし、こちらが各個撃破されてしまう。

唯一の範囲攻撃手段の水晶玉は、瑠璃のポケットにはもう無い筈だ。敵のHPは既に半分を切ってはいるものの、予断を許さない状況には変わりなく。

弾美は瑠璃に、一縷の望みを掛けて通信を入れる。

「瑠璃、脱力のモーションが来たら麻痺撃で潰してみてくれ！ 次来たらヤバイ！」  
「わ、分った！」

自分の取得したスキル技の特性を、大カエル戦を通してもよく理解していなかった瑠璃。さっきのカエルはルリルリが接近し過ぎていたから、呑み込み技を使って来なかったようだし。

たまに雑魚に使ってもダメージがたった1しか出ないので、封印しようと思っていたのだが。弾美に相談して初めて、敵の特殊技を潰すのに使うのだと理解した瑠璃であった。

意識して使ってみると、なるほど敵の特殊技を潰せるという事実はかなり有利かも知れない。そんな訳でSPは保存して、地味に光付与とクリティカルに頼って削る事に。

スキル技を撃ち込むタイミングを計りつつ、瑠璃はじっと集中。

果たして、青ダルマモドキの再びの脱力モーション。それしか待っていないかった瑠璃は、すかさず《麻痺撃》をお見舞いする。敵は脱力したまま、しばし固まった状態。

何をしたかったのか完璧に忘れてしまったように、身体を起こす青ダルマモドキ。思わず笑いそうになった瑠璃だが、なる程こういう使い方をするのかと自分の新スキル技に納得の表情。

程なく、1匹目のダルマモドキは沈没。ルリルリがヒーリングに入ったのを確認して、ハズミンは2匹目を引き抜きに向かう。

『1匹倒したぞ、美井奈つ。次行くぞ』

『お願いします、隊長っ！』

2匹目の赤ダルマモドキは、美井奈が分離中に水晶玉でも使ったのだろう。弾美が引き抜いた時には、7割がたHPが減っていた。

瑠璃は先程の戦法を見習って、ここぞと言う時に《麻痺撃》を繰り返す。敵のきよとした感じがツボにはまって癖になりそうな頃、2匹目も撃破。

3匹目は全員でタコ殴り。途中瑠璃の特殊技止めの失敗で慌てた場面もあったのだが。弾美がすかさずマラソンに引っ張って行き、瑠璃と美井奈で各個撃破に成功。

結局元に戻ったときのダルマモドキのHPは2割足らず、難なく削り切りジ・エンド。

『やった〜！ でも、今回も結構手間取りましたねえ！』  
『手強かったな、まあ、ドロップが良かったから許すけどな』  
『あんな仕掛けは反則だよ〜！ 最後、特殊技止めるの失敗しちゃってごめんなさい〜』

ドロップは赤ダルマが炎系、黄色が土系、緑が風系の装備に対応していたようだ。主に胴装備のドロップだが、何とかもう1部位当たりが出た感じ。ただ、パーティ内で伸ばしている属性の品は無かつたので、ちよつと微妙かも。

それでも、防御が上がったりは素直に嬉しい。弾美が赤の胴装備を貰い、瑠璃と美井奈はそれぞれ靴と籠手を貰うので決定。後の鎧は取り敢えず保留で、売るか予備にする事に。

超ブニヨンの赤鎧 火スキル+3、腕力+2、防+14  
超ブニヨンの黄鎧 土スキル+3、体力+2、防+14  
超ブニヨンの緑鎧 風スキル+3、敏捷+2、防+14  
超ブニヨンの黄靴 土スキル+2、体力+1、防+7  
超ブニヨンの緑籠手 風スキル+2、敏捷+1、防+6

他にも風の術書や土の水晶玉、薬品類と消耗品関係も結構なサービス振り。おまけに弾美と瑠璃はレベルが上がり、ボスエリアに向けて弾みがつきそうな予感。

片手剣スキルの振り込みで、ハズミンは久々に峠越しのスキル取得へ至った。残念ながら補正スキルの《種族特性吸収》で、瞬発性の向上とはいかなかったが。

これは種族に対応する特性を、たまに吸収する作用のあるスキル。ハズミンは闇属性だから、斬撃の何度かに1度、敵のSPを吸収する事があると言った感じだ。例えばルリルリがこれを覚えれば水属性なので精神力、ミイナなら雷属性なので器用度を吸収すると言った所。

もつともステータス吸収で加算された分は、数分で消えてしまう。加算の上限も、もちろんある。

\* \* \*

ヒーリングと装備の交換、ポケットの補充を終え、一行は意気揚々と仮称ボスの間へ向かう。途中の雑魚を軽快に狩りつつ、ようやく見えて来た不気味な景観の大きな入り口。

アーチを造っている柱は古めかしく、数ある彫刻は半壊していて障害物に成り下がっている。そんな遺跡めいた建物内をちよつと進んだだけで、すぐにもう一回り小さな門が出現する。

緊張する面々だが、怯えの色は無い。ここまで来たら引き返せない、開き直りとも言うが。

『用意はいいか？　今回も仕掛けがあるかもだから、しっかりと観察する事！』

『了解ですっ！　私も考えますっ！』

『……今のは美井奈ちゃん言葉？　それとも……お母さん？』

えへへと誤魔化し笑いが響く中、ヒーリングと魔法強化も程良く終わり。ハズミンを先頭に、ボスエリアへと突入する一行。そして、差し出がましくも挿入される強制演出動画。

今回のフィールドには、からからに枯れた大木が数本、さらに部屋奥に鎮座する火釜のような物体が配置されていた。踊るように立ち上がる炎が、不気味に人の顔を形作る。

そして今回も、動きようの無いセットに成り下がっているエリアボス。恐らく倒すのは簡単なのだろうが、エリア内に仕掛けは確実にありそうだと推測出来る。

それを解き明かそうと、真剣なパーティーメンバー達。

『今回は、どんな仕掛けがあるのかな？』  
『ん〜、今回も敵は動きそうにないな。ちょっと俺だけ近付いてみるか』

弾美が独りで、そろそろと火釜に近づく。他の二人は、そちらを注意しつつもフィールドの観察も怠らない構え。早くも美井奈から下の層と同じく、右の壁に隙間があるとの報告が。

弾美が一定距離に近付くと、今回釜から湧き出たのは炎の形のモンスター。釜から零れ落ちるように出現し、その場に暫し佇んでこちらの存在に気付くと。

ヨチヨチと歩みも鈍く、近付いて来る。

『炎……を利用して、壁を昇るって可能なんですかねえ？』

『ん〜、よく分からないけど……枯れ木を利用するんじゃないかな？』

『そうだな、二番煎じは絶対無いから、敵を倒した時のアクションも違うんだろうな。試しにちょっとやってみようか、枯れ木の近くでこいつら倒すぞ』

数匹の炎型モンスターは、やっぱり弱くて一薙ぎで倒れてしまう。その代わり、倒れてもしばらくはその場で燃え続けて、不用意に近付くとダメージを受けてしまう仕様のよう。

身を持ってそれを知った美井奈は、恥ずかしそうに炎と距離を置くように移動。

そして、自分の方向に倒れて来た枯れ木に腰を抜かしたようだった。

『び、びっくりしたっ！ 木が倒れて来ましたよっ！』

『うわあ〜、良い具合に倒木の道が出来たねえ……ちょっと拍子抜

け？』

『お、下の層を解いてたからかな、簡単に感じたのは』

倒木は斜めに壁に寄りかかり、いい塩梅に壁の隙間の空間に移動できる架け橋になってくれた。ちゃんと移動出来る事を確かめて、弾美は先頭に立って進み始める。

後に続く女性陣、下の層と変わらないのは、宝箱の設置も同じ。

『下の層と同じだね、のぼり切ったらボス戦かな？』

『かもな、心の準備しとけ』

『了解ですつ、隊長！』

宝箱は2つは当たり、1つはミミックだった。光の術書と闇の水晶玉、それに戦闘の結果手に入れた宝箱の鍵。その結果を目にして、一同はあれつと言う顔になる。

何しろ、前回はボスを倒しての鍵のドロップだったのだ。何だか様子が違う。

のぼり切ったボス裏の壁の隙間には、やっぱり3つの宝箱が配置されていた。ただし、もの凄い用心のパーティをあざ笑うかのよう  
に、ボスの姿は影も形も無し。

宝箱の1つからは生命の果実、食べたキャラはHPが永続的に+10も上がるアイテムが出て来た。残りの2つは、エリアボスの代用にもならないミミック×2匹。

やっぱり鍵を2つ落として、さあ鍵付きの宝箱はどこ？

『……あれつ、今回は凄い装備や強いボス戦は無し？』

『無いのかな……調べる場所を間違えたのかも、分からないけど』

『えっ、でも……他の壁には隙間なんてないですよ？』

エリア内を見渡す限りでは、確かに美井奈の言う通りである。少女は無用心に断崖の端っこに立ち、ボスエリアをじっくりと眺めているよう。他の仕掛けはないかと宝箱をチェックしていた弾美は、ちよつと諦めモード。

瑠璃は雷娘の隣で、全く動かないボスを見ていた。他にヒントになる物は無いか、しばらく視線を彷徨わせる。

『あれ……あの枯れ木だけ、不自然に大きい気がしませんか？』

『あゝ、ボスの裏にある？ こつちから見たら手前だけど……何か中が空洞に見えるね』

どれどれと、弾美が見下ろしグループに混じってみると。なる程確かに、背の高さの2倍程度で上辺を消失している枯れ木は、他のものより大きく、中が空洞に見える。

仕掛けがあるとしたら、他と明らかに違うというのは大きなヒントかも。

『時間もまだあるし、ちよつと行ってみよう。駄目なら、諦めてエリアを出ればいだけだしな』

『了解、何かあるといいな』

一行は、元来た道を辿ってボス前へと到達。再び、せつせと生み出される火の粉モンスター。程々のスピードでその敵を誘導して、一行は部屋の上から怪しいと睨んだ、太い枯れ木の前へと陣取ってみる。

ハズミンがちよつとずつずらしながら、枯れ木のすぐ側で寄って来た敵を倒して行く。仲間が息をのみながら、倒した場所に変化が無いかをじつと観察している。

燃え落ちた枯れ木の表面の一角は、見事に通路を出現させた。歓声と共に、ヤッターの声。

『おおつ、危なくダミーに騙されるところだった!』  
『やった〜、美井奈ちゃんよく見つけたね〜!』

本当に美井奈だったのかは敢えて触れずに、三人は恐らくのボス戦に備えての準備。強化魔法を掛け終わると、弾美を先頭に滑り台のような隠し通路に滑り込んで行く。

前回の苦戦を覚えているので、弾美は既に武器をレイブレードに代えている。神水と炎の神酒もすぐに使えるように用意しつつ、一同は隠しボスエリアへ。パツと見た感じは、薄暗い巨大な洞窟内を思わせる。

エリアに入った途端にBGMがチェンジ、ボス戦のスタートだ。

目立つのは中央に鎮座する、巨大な昆虫の親玉みたいなモンスター。腹の部分は女王アリとか女王ハチみたいに膨んでおり、巨体さ故に動けそうも無い感じ。

その代わり嘘みたい長い6本の前足が、広範囲に自在に動くようだ。さらに、飾りにしか見えない翅が不快な音を立てたと思ったら、ボスの両脇に渦巻き状の敵が2体湧く。

ギチギチと不快な音を立てて、巨大蟲が鳴く。口は鋭い鋏状だが、上体は真っ直ぐ立ち上がっているので直接噛み付いてくる事は無いだろう。

弾美はウィンドウを開いて、まずは神水を使用。打ち合わせ通り、まずは単独で突っ込んで一撃を見舞う。すぐさま見舞われる反撃と渦巻き2体の囲み込み。

瑠璃はその内の1体を相手にしようと思ったのだろう。ボスの範囲攻撃が来ないと知ると、ハズミンとの間に割り込むように動く。美井奈も、瑠璃とは別の渦巻きに果敢に攻撃。タゲを取ってしまったが、HPの値を見る限り雑魚である。



連続攻撃でさっさと削り切ろうと攻撃を仕掛ける。

『わっ、ハズミちゃんっ……壁際に何かいるっ!』

『わっっ、渦巻きに突き飛ばされましたっ……っ、うわっ、卵が  
いっばいっ!』

渦巻きの突き飛ばしを喰らったのは、まずはルリルリ。壁際まで飛ばされたと思ったら、恐らくは仕掛けで用意されていたのである。ずらりと並んだ蟲の卵の列が反応する。

そいつ等は卵の中から酸を吐いたり、生まれ出て来て殴りかかって来たりとやりたい放題。拳句の果てには変な蔓が絡み付いて来たり、卵とは関係ない仕掛けまで作動する始末。

渦巻きを倒すつもりが、余計な敵を増やしてしまう結果に。

接近される前に削り切るつもりだった美井奈も、スキル技をケチったせいで第2犠牲者に。瑠璃とは違う方向の、奥の壁に飛ばされて同じく幼虫にたかられる悲惨な運命を背負い込む。

やたらと騒がしい、女性陣の協奏曲。

一方、弾美もボスの固い甲殻と多彩な攻めに苦戦中。左右から飛んで来る節くれだった昆虫の前足攻撃を盾で防ぎつつ、お返しにと斬撃を振るうものの。真上から降り掛かって来る酸の唾攻撃は防ぎようが無い。

意外にダメージが少なくて助かったとの思いも束の間、ログに盾と剣の耐久度が1つ減ったとの表示が。一瞬にして顔色を失う弾美。それもその筈、今装備してる武器は虎の子のレイブレード。

耐久力は元々、初めからたった2しか無いのだ。

弾美は決意して、巨大女王蟲の側面に廻り込む。一向に来ない仲間の応援に苛立ちつつも、削られたHPをボスから魔法で奪い取る。

少量だったが、一息ついた。

ボスはやはり動けない模様で、代わりに前足攻撃が2本から3本に増えた。しかもたまに尻尾から毒針の遠隔攻撃を見舞われる。それでも耐久度減の異常よりはマシと、弾美は悲壮な覚悟で女王蟲を殴り続ける。

『お姉ちゃま、助け合ってまずは1匹、ぐるぐるを倒しましょう！』

こちらの凸凹コンビはと言えば、いまだに渦巻き2匹に苦戦中。つて言うより、壁にぶつかって増えた敵相手に、余計な経験値を稼いでいる状態だったり。

機転の《フラッシュ》で難を逃れた美井奈が、離れた場所の瑠璃にやつとの事で合流する。合流して分かったのは、各々の残りHP。瑠璃が4割、瑠璃前の渦巻きが9割、美井奈が6割、美井奈の相手の渦巻きも同じく6割である。

卵から生まれた、軍隊アリのような雑魚も割と多数。瑠璃はヨレヨレのまま美井奈に近付いて、敵の中心に向かって水の水晶玉を使用。さすがに水属性の瑠璃が使うと強烈である。

雑魚はあつという間に瀕死に、弱っていた方の渦巻きも更にヨレヨレに。

『……この仕掛け、酷すぎるっ！』

『お、お姉ちゃま？』

完全に仕掛けに翻弄された瑠璃は、久々の半ギレ状態。腰の引けている美井奈を引き連れて、まずは弱り切った渦巻きを撃破して。雑魚を蹴散らしすつきりした所で、HPの半減した最後の渦巻きを二人で削りに掛かる。

瑠璃と美井奈の攻撃だと、今では美井奈の方がダメージが高い。タゲが時々ふらつきながらも、それが逆に吹き飛ばしの特特殊技を避

けるきつかけになった模様。最後は瑠璃のクリティカルで、2匹目の渦巻きも昇天。

大急ぎで弾美のフォローに廻る二人。

『遅いつ！』

『ごめんなさい〜！』

驚いた事に、弾美はソロで既に半分近くもボスのHPを削っていた。自身のHPも、取り敢えずの安全圏で、それでもかなり必死な様子。美井奈に自分の毒の回復を、瑠璃に毒針飛ばしの特殊技の潰しをそれぞれ頼み、ルリルリが張り付いたのを確認して炎の神酒を使用する。

女王蟲の毒針飛ばしは、来る前に尻尾の先に針の生えるエフェクトで、見分けるのは簡単だった。すかさず《麻痺撃》で技を封印、弾美への毒攻撃を回避する。

状態異常回復に待機していた美井奈も、これで安心して削りに集中出来るように。武器が壊れる回数ギリギリまで《貫通撃》を放ち、ボス蟲のHPはみるみる減って行く。

いい加減、蟲の発するギチギチと言う鳴き声も聞き飽きた頃、ようやくとどめの一撃で巨大女王蟲は死骸へと姿を変えて行った。途端に、周囲のグラフィックにも変化が現れ、蔦の中に挟まっていた卵の列が萎れて行く。

気付いたら、女王蟲の背後に階段が出現していた。虫の卵が消えたため、のぼれる様になったようだ。頂上には3つの宝箱、その奥には上へと続く梯子が設置されている。

『ハズミちゃん、ごめん〜！ 途中まで全然役に立てなかった……』

『そんな、ちょっとぐるぐるに翻弄されていただけですよ。気にしちゃ駄目です、お姉ちゃまつ!』

『二人とも翻弄され過ぎだっ……まあ、ああ言う仕掛けは喰らってナンボ、なのか?』

『それはそうと、ちょっと蟲とか卵とか気持ち悪かったかも……』

少々回復時間を取りながら、軽口の叩き合い。その後はお楽しみ  
の宝箱チエック。ボスの女王蟲からは顎鋏の短剣、女王蟲の翅飾り、  
風の術書と水晶玉、金のメダルにあとはレア素材や薬品などが。

宝箱には炎の宝珠、流水の髪飾り、炎の呼び水というNMのトリ  
ガーアイテムが入っていた。

詳しい性能はこんな感じ、短剣は使用できる者がいないので売る  
か交換に廻す事に。

女王蟲の翅飾り 風スキル+3、敏捷度+3、SP+10%  
流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+5、MP+25、

防+8

2つ目の流水装備も、やはり女性専用らしい。瑠璃が持つ事に満  
場一致で決定し、ルリルリのMPとか水スキル、氷スキルは大変な  
数値に跳ね上がって行く。

結果、水スキルから《ウオータスピア》の魔法を取得。文句無し  
の攻撃魔法で、スキルが上がることに威力も上がる。氷スキルから  
は《魔女の囁き》という強化系の呪文。

これを先に唱えると、次の呪文の威力や効果時間がアップする補  
助系の魔法だ。

『おめでとうございます、お姉ちゃま!』

『ありがと、これでルリルリも遠隔攻撃出来るよ〜!』

『炎の宝珠、誰が取る? 美井奈欲しいか?』

『ん〜、私MP少ないから……それにやっぱり、魔法をたくさん覚えても使い切れないかも……』  
『雷属性キヤラは、アツカー向きだからなあ……後衛系のステータスは確かに弱いかな』

そんな相談や魔法取得の報告を終えた後、一行はエリア攻略がまだだという事実気付いて。用意されていた梯子をのぼると、さっそくエリアボスの火釜とご対面。

ダミーの宝箱の置いてあった丁度真下に隠し部屋があり、スイッチの仕掛けでパカッと扉が開いて。そうしたら、丁度ボスの真後ろに出たと言う訳だ。

反応した火釜は何はともあれ火の粉を飛ばし、脅威にもならない業火の音色を奏でている。

『せっかくだから、瑠璃の新魔法でやつつけて貰うか』  
『そうですね〜、私の弓ももう壊れちゃいそうで怖いですし』  
『わかった〜、行くよ〜？』

雑魚の掃除は弾美にまかせ、覚えたての《魔女の囁き》から《ウオータスピア》のコンボ技。豊富なMPから放たれる水の槍は、ボスのHPをあつという間に半減させてしまう。

おおつという、パーティ内の歓声、はつきり言って凄い威力だ。今までのルリルリからは想像出来ないダメージを叩き出し、思わず調子に乗る瑠璃だったり。

もう一度と魔法の準備に掛かるルリルリに、火釜の反撃の炎系魔法。

不意を突かれて大慌ての一行。完全に下の層の仕様と同じで、反撃は無いと舐めて掛かっていたのだ。再度飛んで来たのは、範囲攻撃の炎系魔法だったりして。

阿鼻叫喚の地獄絵図の中、とにかくやつつけてしまえと女性陣から次々と魔法が飛んで。気付いた時には脱出用魔法陣の前に、ヨレヨレの三人の冒険者の姿が。

誰も言葉もなく、呆れているのやら怒っているのやら。

今回も攻略時間は1時間20分くらい、ステージ5最後のアスレチックエリアに挑む時間は充分ある。最後の戦闘で無駄に消費したHPやMPを中立エリアで回復しつつ、残った薬品のチェックと補充、ポケットに仕舞い込む一行。

『……何か、どうしようもなく意地悪ですね、イベントの製作者の人？』

『そうだな、油断させて襲うのが異様に上手だな……』

『酷いよね、突き飛ばしといてトラップに追い詰めたりとか、そういう事しちゃ駄目だよ！』

駄目だよと言われても、そう言う仕掛けとモンスターを攻略してこそその冒険者。って言うか、達成感も高まるというもの。アスレチックエリアは今回もきつと酷いぞと弾美に脅され、女性陣は早くも批難モード。

まるで弾美が悪いような言われよう、話の論点がずれまくっている。

とにかく、凶悪なボスやNMが出ない分、仕掛けが異様に嫌らしいアスレチックエリアである。三人でのアタックは、これが2回目。まだまだ慣れているとは言えないが、遠隔攻撃を使える美井奈がいた分、前回はちょっとだけ余裕があった。

何しろ、近付くまで攻撃されっ放しという事態だけは避けられる。

『おっと、今回は瑠璃も遠隔魔法が使えるなあ……それじゃ、ヒーリングトラップだけ気をつけて、さっさとクリアしような』

『了解です、弓の修理も完了しましたけど……矢束の残りがちよつと、心許ないかなあ？』

『うーん、実は武器屋の矢束は売り切れなんだよねえ。合成は素材が足りないし、困ったなあ』

『俺の持つてる、予備の矢束やるよ。でも、次のステージで売ってないとヤバイな……』

この中立エリアを起点にしている冒険者の数も、もうそれ程多くないとは言え。それより遥かに多い人数のプレイヤーが、ここを通り過ぎて行ったのだ。品不足はなかなか回復しない模様。

次の中立エリアも恐らく似たようなものだろうが、敵の素材ドロップも思うように行かないのも事実。何とかどこかで入手しないと、削り手段の一つを失う事態にもなりかねない。

これもイベントの意地悪な仕掛けなのかと、人間不信に陥りそうなパーティーだったり。

不満ばかり並べていても仕方が無い。少しでも輝かしい未来を求めて、一行はいざステージ5の最終エリアに挑む。残り時間は充分あるし、余裕を持ってクリアしたいものだ。

見慣れた筈のステージは、しかしのっけから趣を変えて来ていた。

『あれ……前回のマップと違いますねえ』

『むっつ、思いつ切り二手に分けて、各個撃破を狙っている感じが見え見えだな』

ステージ2から見慣れていたつづら坂は、今回はお休みの様子。

代わりに真っ直ぐな階段がどこまでも続いており、階段の真ん中に

は石製の人の背の高さの灯籠や柵が設置されている。その中央のオブリジェが、左右の行き来が出来ないように障害物となっている。

右の階段と左の階段。どちらか一方を三人で選んでも良いのだが……丁度視界ギリギリに、宝箱がどちらの道にも置かれていて、取って下さいと言わんばかり。安全策を取るなら、片方は完全無視が良いのだろうが。

弾美は、そういう挑発めいた仕掛けは敢えて乗るタイプ。

『よしつ、俺と美井奈が右に行くから、瑠璃はソロで左な。いざとなったら、美井奈が遠隔でこっちに釣ればいいから』

『あゝ、そうだねえ。それならこっちも安全かな？』

呆気なく納得する瑠璃。タゲを取って貰えるなら、そこまで危険な事は無い筈である。何より宝箱のスルーは後で何が入っていたか気になって、精神衛生上よろしくない。

そんな訳で、初めての二手に分かれての変則攻略のスタートである。最初の登りは敵影も全くなく、一行は余裕の移動で一気に宝箱まで辿り着く事に成功。

宝箱は左右それぞれ1個、階段の踊り場に置かれている。

『おつ、雷の術書か。美井奈取つとけ』

『ありがとうございます、お兄さんっ！』

『こっちは魔力の果実だ……MP伸びるから、美井奈ちゃんあげるよ』

『えっ、いいんですか、お姉ちゃまっ？』

感謝しまくる美井奈をせかし、一行は更に上を目指して階段を登って行く。ちらほらとモンスターも出て来るが、それ程強くもない感じ。今のところ、瑠璃でもサクサク倒せているようだ。

宝箱は要所に点在し、中からはエリクサーや炎の神酒などの薬品



類から、片手斧や片手槍などの高価な武器が。パーティを二つに分けて正解だったと、弾美は内心喜んでいたが。

仕掛けが作動するのは、実はここからだったり。

階段はやがて、赤い鳥居の様なものを潜るように細くなっていた。そしてその横に、やたらと大きなちようちんの飾りが。弾美達の方だけ灯っていて、瑠璃の方は暗くて不気味な感じ。

仕掛けが作動していたのは、灯りのついていない瑠璃の方。暗闇が邪魔して鳥居を潜れない。

『あれ、ハズミちゃん……先に進めなくなってるよ？』

『ふぬっ？ ……あゝっ、何かちようちんがタゲれるな。多分仕掛けが……』

なる程、確かにちようちんにカーソルが移動する。瑠璃はこわごととそれをクリック。ちようちんに明かりが灯り、鳥居が明るい表示に切り替わった。ところが反対側にいた二人には、突然の暗闇とダメージに加え、鈍いといいでにドーム効果のプレゼントが。

大混乱のパーティメンバー。通信を通じて弾美にお叱りを受けた瑠璃は、一体何の事やら。通れるようになった鳥居を抜けてみると、反対側の二人は闇のドームに囲まれて全く見えず。

その闇に突入して行く、化け猫やコウモリなどの暗視付きの敵を見て、瑠璃は顔面蒼白。

『ハズミちゃん、敵がいつぱい入っていった！ 逃げて！』

『どこですか、逃げられません、真つ暗です！ また食べられちゃった！？』

『ちようちんどこだっ？ こっちは操作出来ない、瑠璃頼むっ！』

慌てていた瑠璃は、離れて操作すれば良いものを。鳥居の真下から移動するのを忘れて、ポチッとちょうちんクリック。その途端に向こうの闇は、きっかりと晴れたらしい……瑠璃は闇に見舞われて全く見えないけれど。

なる程、モンスターに食べられるとこんな感じで画面が真っ暗になるらしい。変なテンションで感心しながら、瑠璃は全くなすすべ無し。その内、こちらの闇ドームにも敵が侵入して来たらしい。

HPが素敵に下がって行くのだけは、パーティ表示のバーから確認できるのだが。

半ギレで何か分からないモノを殴っていたら、急に視界が晴れた。目の前には3体の敵がいて、自分にたかっている。ミイナの遠隔攻撃の手助けで、何とか死なずに済んだのだが。

肝を冷やした瑠璃は、二人にしっかりお詫びと謝礼。闇ドームの範囲から出たのを確認した弾美が、再びスイッチを切り替えてのぼり始める。

ところが、少しものぼっていない内に次の仕掛けが待ち受けていた。一番単純な、上から岩が転がり落ちて来る罠なのだが、全員闇トラップの鈍いに掛かっているため始末が悪い。

幾つかぶつかって洒落にならないダメージを受けつつ、なかなか収まらない落下に焦れ始める一行。ふと見れば、中央の灯籠にカーソルが移動するのに気付いた美井奈。

『隊長、真ん中の石の灯籠にカーソル移動しますけど！ これは落下を止めるスイッチでは？』

『よく分らんが、取り敢えず試してみる、美井奈っ！』

隊長の弾美の了承を得た美井奈は、勢い込んで灯籠をクリック。ポツと明かりが灯って、マップの中央の柵に変化が。弾美と美井奈

の通路に蓋をするように傾くと、転がる岩は全部瑠璃の通路へと押し寄せていく。

もはや避けようもない瑠璃は、自分に回復魔法を掛けるよう専念するだけ。しばらくしたら、ようやく落下は止まり、ルリルリのHPの減少度も辛うじて持ちこたえた模様。

「……………ハズミちゃん？」

「仕掛けを触ったのは美井奈だぞっ！」

「ええっ？ 触っていいって言ったじゃないですか、隊長っ！」

しばらくは收拾の付かない罪の擦り付け合い。MP空っぽの瑠璃は、それでもこのエリアでのヒーリングを躊躇していたが。座っても何も起こらない事に、最大限の安堵のため息。

口論は取り敢えず、お互い様で言いつこ無しという結論に。

実の無い喧嘩より、形に残る宝箱の中身が何より嬉しい。左右併せて8個目の宝箱からは、経験値と剣術指南書が。これにより、美井奈がレベル20に。2つ目の種族スキルも覚え、使えるかどうかは別として割と戦闘向け。

指南書も貰えると聞いて、美井奈はもはや感謝を通り越して恐縮しきり。

「だって…………私ばっかり貰って悪いですよ！ これはお二人どちらかが使って下さい！」

「だって美井奈が一番弱っちいじゃん」

「弱いかどうかはともかく、私とハズミちゃんはスキル技取ったばかりだしね〜」

二人に押し切られる形で、美井奈は結局指南書を有り難く頂戴する。スキルに更に+2して、3つ目の弓術スキル技取得も、後もう

一息と言う感じである。

ゲーム初心者の美井奈は、自分のキャラがそこまで強くなったためしがない。

15分も経てば、半分以上は来れただろうかと言う感じだけれど。ようやく広い踊り場が見えて来て、中央に大きな岩のオブジェが。相変わらず合流は出来ないのだが、真ん中にあるのでどちらからもタゲれる仕様になっている。

何かと思えば、やっぱりポスター広告の仕掛けらしい。これには嫌な仕掛けはないだろうと、みんなで一斉にクリック。

ファッションプラザ・ヨシナガでは、5月の春物在庫一掃セール中！ 梅雨に備えて、まだまだ暖かい羽織り物系は必要ですよ！ この機会を、ぜひお見逃し無くっ

『わっ、駅ビルのお洋服屋さんですね……って、何かTシャツ選んで下さいって出てますけど？』

『色に対応して、何か属性効果が付いて来るらしいな……俺は黒でいいや』

『ん〜、属性効果なら私は水色かなあ？ でも、白の光スキルもいかなあ』

結局瑠璃は白を、美井奈は紫色のTシャツを選択。胴装備のように、防御力は+1と無きに等しいのだが……それぞれ属性スキルが+3付いており、2時間着用ごとに+1同化されて行く仕様だとの説明文が。

有り難いのだが、ダンジョンをTシャツでうろつく冒険者というのも、シュールで笑える。

『中立エリアでもいいんですかね、これ着るの？』

『そりゃそうだろ、これ着たまま、さすがに敵と戦えないぞっ!』

取り敢えず明日試してみようと言う事で話はまとまり、再び階段に挑む一行。後半エリアは段々と敵が増えて来て、パーティの休憩を誘う気満々な気がしてならない。

拳句の果てに、ここに来ての中ボス登場。どこから見てもトーマムボールのような木の積み木は、丁度真ん中の台座の上にピンとそびえ立って一行を見下ろしている。

その脇に、宝箱が左右に1つずつ。

『ヒーリングしたいけど……しないほうが良い?』

『エーテル使うの勿体無いしなあ……美井奈は余裕あるか?』

『俊敏の魔法を結構使っちゃってるんで、私もヒーリングしたいですけど……』

見渡してみても、周囲に不審なものはないっぽい。女性陣から見ての確認も、だいたい同じ答え。相変わらずの下から登って来た道と同じ景色で、中央には灯籠と柵の障害物。反対の壁側にも、特に目立った痕跡は無い。

大丈夫だろうと結論を出して、女性二人はヒーリング。中ボスは視界ギリギリで動きは無し。変化が訪れたのは、一番近くの石の灯籠だった。少しずつ明かりが灯り始め、気付けはキャラ達の影が放射状に長く伸びて行く。

そしてその影、本人とは別行動を取り始めたり。

『わっ、わっ、何か湧いてる……ドッペルゲンガー!?!』

『げげっ、コイツその上位種の魔人だっ、強いぞ!』

『え〜っ? これが噂のヒーリング潰し!?!』

現れたモンスターは、ドッペルゲンガーの上位種の影盗魔人。キ

ヤラのデータを盗んだ上に、相手の通常攻撃半減や魔法攻撃などを多用してくる手強い相手だ。しかもドツベルゲンガーの、自分のコピーした本体のみを付け狙う特性は全く同じと来ている。それを知っている瑠璃は、再び顔面蒼白。

剣の応酬では、まず勝てない相手ではある。ましてやタイマンでは、全く勝てる自信が無い。一応身構えていた弾美は、先手を取って自分のコピーを殴り始めたのだが。女性陣はMPもほとんど無い状態で、いきなり苦戦を強いられる。

美井奈がコピーの攻撃で、かなり不味い状態になっている。弾美は助けの通信を聞くと、ミイナのコピーに照準を切り替え、詠唱しかけの魔法を間一髪で止める事に成功。

瑠璃もほとんど絶望状態。ただ、魔法を喰らって大幅にHPを削られる事態は《麻痺撃》で食い止める事が出来ているだけマシな程度。コピーもやっぱり細剣使いなので、直接攻撃はたまのクリティカルがちよつと痛い程度。

こちらから殴るのは、SP稼ぎ程度の効果しかない。瑠璃の攻撃は、ほとんどが一桁のダメージしか出せず、これで勝てるなら魔人は評判倒しである。

美井奈は取っておきのエリクサーを、弾美の指示で使用したようだ。回復した魔力で、弾美を小回復。更に《ホーリー》の魔法で自分のコピーを追い込んで行く。

『ついでだ、水晶玉も使っちゃまえ、美井奈！』

『了解です、カバンの中からの使用なので、ちよつとお待ちを！』

言葉通り、ちよつとの間の後に炎の範囲爆発が作動。それでもさすがに魔人の名を冠するだけあって、魔法攻撃にも耐性がある模様の3体の敵。

弾美と美井奈の二人掛かりで削っているコピーのHPが、やっと半分に減少した程度。残りの2体は8割も残しており、瑠璃のコピーに至っては回復魔法を唱える有り様。

絶望感の波紋の中に、しかし微かな光明も。

瑠璃が気付いたのは、交戦している敵への違和感ではなく、明かりの灯った灯籠。美井奈の水晶玉の攻撃に、一瞬だけHPバーと名前が浮き出たのだ。今はネームレスの非キャラ表示だが、いつの間にかカーソルが移動出来るようになっていた。

ほとんどヤケっぱちの瑠璃は、なけなしの魔力で《ウォータースピア》の使用に踏み切る。ただし、標的は目の前の分身ではなく、灯籠に向けての魔法の撃ち込みだ。

魔法の詠唱は奇跡的に止まらず、瞬間、戦況に大きな変化が。

『うおっ、なんだっ？ 瑠璃、今何した？』

『もう一個、水晶玉あったんで使いますよ、隊長っ！』

周囲に風の爆風が轟き渡る。灯籠の光を得られなくなり、極端に弱った影盗魔人達はその一撃で揃って消滅。その前に、既に瑠璃の機転で3体のHPは1割までに衰弱していたのだが。

魔法と水晶玉の攻撃で壊れた灯籠を見遣りながら、瑠璃は諦めるものでは無いなと実感する。正直、今回こそ駄目だと諦めかけてしまっていたのだ。

『光の点いていた灯籠、攻撃出来る事分ったから……攻撃したら壊れちゃった』

『な、なるほど、元を破壊して弱らせれば良かったんですね、さすがお姉ちゃまですっ！』

『凄い機転だな……でかしたぞ瑠璃！』

弾美が上機嫌なのは、ドロップ内容にも起因していた模様。各自の属性の術書と水晶玉がそれぞれドロップしており、灯籠からは光の呼び水というトリガーも出た。しかし、何よりの当たりは《複合技の書：細剣》である。

武器のスキル技は、普通はスキルポイントを割り振って一定の数値で取得するものである。しかし、複合スキルに限っては全く話が別。複合スキル技は非売品の書を消費して覚えなければならず、書を手取るのも覚えるのも結構大変なのだ。

瑠璃のコピーが落とした細剣の複合スキル技は、細剣のスキルが30、氷が20無いと覚える事が不可能らしい。今の瑠璃には使う事はもちろん、覚える事すら無理のだが……取得すれば強力な切り札になるに違いない。

更にはハズミンとルリルリ、同時にレベルアップ。影盗魔人は経験値も良かった模様。

こうなると、次に控えるトーテムポール風の中ボスなど雑魚扱いされてしまう始末。一度仕掛けが作動した場所では、ヒーリング潰しは二度と起こらない事は分っていたので。

休憩後、一行は中ボスを軽く一蹴。中エーテルや木製武器のポールや木の素材、宝箱からは精神の果実や金のメダルをゲットして、そのまま見え始めた頂上へと急ぐ。

道中MPはなるべく節約して、ヒーリング無しで最後の決戦場へ向かうパーティ。ボスよりも仕掛けが怖いとの意見は、実は全員一致の言葉だったり。

ボスの強制動画も大した感銘を受けず、何よりようやくパーティが合流出来た事実が瑠璃にとっては嬉しい事この上ない。強化魔法もそこそこに、ボスに取り付き殴り始めるハズミン。

ボスは、このエリアのお決まりにすっかり定着した感のあるゴー



レム。外装甲はやや堅いけど、中ボスよりは多少強い程度の敵を、一行は苦も無く撃破する。

安堵の通信は、ボス打破では無く、このアスレチックエリア走破に対しての感想である。

『やった〜、途中怖かったけどクリアですっ!』

『怖かったな……色々文句言いつつも、仕掛けの意地悪さを舐めていたかもなあ』

『私は半分諦めてたけど……ソロで登れって言われた時点で』

『それは諦めるのが早過ぎだ、溜璃っ!』

土の術書や中エーテル、素材などのドロップを確認しつつ、ようやく訪れるに至った6番目のステージ。ここをクリアすると、念願の地上である。パーティの土気もさらに上がり気味。

何にせよ、三人で無事に到達したいものだ。

凶悪な仕掛けに毎回たじろぎつつも、やっぱり攻略は楽しみな弾美だった。

## 10 美井奈家訪問と小さな騒動（前書き）

今日はお休み、朝からまったりしています。そんな訳で、暇な時間にパソコンのモバゲーでもしようとしたら……お気に入りのカードゲームが、何度やってもログイン失敗！

ひどいっ、せっかくのお休みなのにっ（笑）。

気を取り直しつつ、こっちでは素直に投稿作業を進めてみたり。

文章は書き終わっているの、読み直して気になった箇所を修正するだけですけど。

実はこの前書きのネタを考えるのが、一番時間を使うのです（笑）。

この（完全版）に移行するまでに、結構時間が空いちゃったのはアレなんです。自分としても試行錯誤しつつ、他の投稿サイトを探したりログインIDを再発行して貰ってみたりと色々。

結果として、一度はこのサイトに見切りをつけて。新たに出発したのは『Eエブリスタ』と言う、携帯専用の投稿サイトでした。そこで一から、この小説を投稿して行っただけですが……そこでも再ログイン不可の破目に陥って（笑）。

呪われてるんですかね、一体何なんでしょうかこのパソコン（笑）。

新しく買ったこのパソコン、安かっただけあって聞きなれないメーカーです。一応大手の家電屋さんで購入したので、安心してたんですが。

それはともかく、新しい投稿先でも、携帯の画面に合わせて読みやすいようにとの試行錯誤などありまして。特にキャラのスキルや装備の箇条書きの行なんか、悩みのタネ以外の何者でもなく。

これはいらないんじゃないかなあって、何度思ったことか！でも、あつた方がキャラの成長が一目で分かるし、何より自分が混乱せずに書きやすい（笑）。

そんな訳で、消さずに数字やカナを半角にするなど工夫を凝らしたり。

以前の小説投稿では、携帯からの読者さんも半分位に迫る勢いで多かつたんですけど。今では6分の1くらいで、ちょっと寂しい感じですかね。

まあ、取り敢えずは本文の方をお楽しみ下さい^^

ようやく訪れた週末だと言うのに、気候的にはどんよりと曇った朝。時間的には6時15分、早朝散歩の時間だ。マロンとコロンは、そんな天気などお構い無しに今日も元気である。

リードを外しても、2匹はちゃんと瑠璃の隣を離れずに、運動公園の散歩道を一緒に歩いてくれる。元気があり余っているものだから、時折瑠璃に視線を向けて、ちよつとダッシュをしようよと誘って来る。

そんな2匹が駆け出したら、もう瑠璃の手には負えない。ひゅんと樹木を縫って駆けて行き、しかし一回りしたらちゃんと戻って来るから良いのだが。

今回もそうなると思っていた瑠璃だが、樹木の向こうで女性の叫び声が聞こえて来た時には、内心大慌て。急いで2匹の消えた方向に駆け出したのだが、兄弟犬に構われているのが知った顔だと気付いて、ちよつと胸を撫で下ろす。

週の半分くらいは、散歩中に顔を合わせている女性である。相手の名前も知ってるし、挨拶とかたまに話し込んだりとかして結構親しい間柄。犬達とも、もちろん大の仲良しだ。

瑠璃は安心して、繋ごうと手にしていたリードをポケットに戻す。

「おはようございます、薫さん。……あれ、しばらく振りですよね？」

「おはよう、瑠璃ちゃん。連休中に里帰りしてたからね」

「あゝ、そうかあ。薫さんって、故郷どこでしたっけ？」

無礼にも女性の胸に前脚を乗っけているコロンを引き剥がしつつ、瑠璃は早朝散歩の常連さんに朝の挨拶。若くてしなやかな身体つき

の女性だが、瑠璃よりはずっと年上。

学園都市でもある大井蒼空町の集大成、メイン的存在の大井私立大学の大学院生に籍を置いているのは以前聞いて知っている。名前や歳も紹介し合ってインプット済み。

からしまかある  
辛島薫、22歳。薬理学系の学徒さんで、自称優秀な成績の助教授見習い志望？らしい。

「東北の大田舎だけど、ちょっと行くと温泉街とかもあって、結構栄えてるかな？ 春休みに帰れなかったから、家族が顔見せろってうるさくて……」

「へえ、温泉はいいなあ……」

「温泉まんじゅうなら、ゼミのみんなに配る用で買ってあるから、明日持つて来てあげるよ！」

マロンを撫でながら、薫は里帰りの話を瑠璃に語り出す。薫の服装は、ダボダボの濃い色のジャージの上下に、白いTシャツ。その下の膨らみは結構大きくて、瑠璃は少し羨ましかったり。

色白で田舎育ち特有の元気の良さがあり、それに秀才特有のちょっと澄ました感じが覆い被さっている。ただ、潤んだ感じの大きな瞳や話し方から、根は素直なのが伺える。

顔は美人の部類に入るが、あまり手入れしていない髪型とか服装は大きなマイナス点かも知れない。瑠璃でさえ、もう少し身支度には気を配る。女子寮に一人暮らしと聞いた事があるが、そう言う所からズボラな原因が根を張っているのかもと推測してみたり。

薫と瑠璃が喋りながら散歩道に戻って歩き出すと、兄弟犬も揃って付き従う。すっかり会話モードなので、歩みはかなり遅くなっているが、広い芝生に出ると、薫は率先してボール遊びに付き合ってくれる。

犬との付き合いが上手なのは、以前実家で飼っていたかららしい。

「瑠璃ちゃんは、ゲームするんだっけ？ ほら、この街でしか配信してないネットゲーム。弾美君はするって言ってたけど……あれ、同じギルドって言ってたっけ？」

「はい、でもメイン世界のレベルはハズミちゃん程は伸ばしてなくて。でも、期間限定イベントは頑張ってますよ。今、丁度ステージ6に着いた所ですねえ」

薫はちよつと驚き顔で、隣の瑠璃を仰ぎ見る。犬からボールを受け取りながら、おおつと言う表情に。それからにかつと笑って、自分を指し示す。何かの合図かと、兄弟犬は競って薫の顔元に殺到。ついでにぺろぺろと舐めてみたり。

「ひゃあつ、ちよつと！ お姉さんの唇は安くないわよっ！」

芝生に倒れ込みながら、何の抗議をしているのやら。瑠璃は慌てて救出したが、薫の機嫌はむしろ上々。瑠璃に向かって、もう一度自分を指し示して瞳をキラキラ。

「私も丁度、昨日ステージ6に辿り着いたところなのよ！ いや、帰郷から根詰めて、友達と攻略を頑張ったのよ！ その友達も、ゴールデンウィークは一緒に旅行に出たから、丁度いい感じだったんだけどね」

「あ、そうなんですか。早解きはやった事無いから私は良く分からないけど、凄いですねえ」

「そうなの、苦労したのよっ！ それでさ、地上に出たらパーティー人数が4人になるって情報あるでしょ？ 瑠璃ちゃんのパーティは補充のアテあるの？」

瑠璃は少し首をかしげ、思案顔。そういっ話は、弾美とは深く話

した事は無かった気がする。ギルドのもう一つのパーティの進の組も、補充で苦労していると言っていたような。

瑠璃がそう口にするると、薫はウンウンと深く頷いた。

「そうなのよねえ……私達もステージ4から急に3人つてのでかなり苦労して。開始から1週間経ってたら、人なんていやしないしねえ」

「ああ、そうかあ……それで薫さん、どうしたんですか？」

「うん、2人で攻略出来るか試してみたら、結構行けちゃって。結局、補充のアテが出来るまで2人で頑張つて。今は3人だけど、その人とも地上までの契約なのよ」

「私達のパーティは、3人目が小学生なんですよ！ その女の子、パーティ組む時に知り合つて、それからすっかり親しくなっちゃつて」

事の顛末を話し出すと、短い間なのに結構色々あった事に瑠璃自身がちよつとした驚き。実は今日も、午後から美井奈の家に遊びに招かれていたりするのだ。

薫はちよつと羨ましそうに、一緒の部屋での合同インの話など聞いていたが。最後にやっぱり自分を指し示し、こう締めくくつた。

「私の友達が、地上に出てばらけた方が誘われやすいならそうしなにかつて。瑠璃ちゃんのパーティに空きがあつたら、私を候補に考えといてくれたら嬉しいな！」

「んと、地上に出るのに多分今日と明日いっぱい掛かると思つけど……それでも良ければハズミちゃんと交渉してみたらどうです？」

薫は大喜び、その後コートでシュート練習をしていた弾美と、何やらヒソヒソ話し合つてみたり。瑠璃は呑気にバスケットボールを触つて、ドリブルやシュートの真似事。

ちつとも思った方向に飛んでくれないボールに、マロンとコロロだけは大喜びだった。

\* \* \*

大井蒼空付属中学の土曜日のスケジュールは、授業が3時限まで、1時間のお昼休憩の後、部活のある者は12時から4時間みっちり出来る事になっている。

瑠璃の所属するような文科系の部活は、そこまで熱心ではないにしろ。運動系の部活動は、一番力を入れて練習出来る曜日なので、楽しみだったり地獄だったり。

たまに高校生との合流練習もあるようで、交流に充てられる曜日でもある。

今週はゴールデンウィークのせいで、2日も休みが多かったため、休みの雰囲気待ちわびた帰宅部の学生達は、早々に群れるように帰路について行った様子。

そんな中、隣のクラスの弾美は、真面目に昼食を取って部活動に。瑠璃はお昼から、美井奈の家に遊びに行く予定。HRが終わると、早々と帰宅の準備をして友達と校門を出る。

相変わらず天気はあまりよろしくないが、雨が降る気配も無いといった感じ。

前の待ち合わせの時には、美井奈が学校に忍び込んで来て泡を食った瑠璃だけねど。今日は校門から少し歩いた、橋の前での待ち合わせをしっかりと言い含めてある。

美井奈は今度こそ、ちゃんと待ち合わせの場所にいた。そして出合つや否や、素早く瑠璃の腕を取ってレッツゴーホーム。一緒に帰宅していた静香と茜にも元気に挨拶は忘れず、しかし二人は呆気に取られている時間の方が長かったり。



瑠璃は本当は、一旦家に戻って着替えたかったのだが。美井奈に手を引かれるまま、友達にお別れの挨拶をしつつ大人しく連行されて行く。

いつも通りと言うか、いつも以上に元気な少女に、瑠璃は早くもお疲れモード。

「お待ちしてましたよ、お姉ちゃま！ 家にお昼を用意してるので、早く帰りましょう」

「うん……美井奈ちゃん、元気だねえ」

「何を年寄り臭いこと言ってるんですか！ 今日にはお兄さんの家でスタンバイする予定だから、後4時間半しか遊べないんですよっ！」

それだけ遊べれば充分だとは思うのだが。美井奈は元気よく、瑠璃を先導して自分の住むマンションへと向かっている模様。本当は大学のキャンパスを突っ切った方が近道らしいのだが、さすがにそれは止めてと瑠璃がNGを出したのだ。

今通っている道は、駅へ続く道を途中右に曲がった、オフィス街を横切る道である。ここを10分も歩けば、美井奈の住むマンションの棟が見えて来るそうだ。

美井奈がいつも通学に使っている道のようで、ちらほらと学生服の姿も見える。

大井蒼空町のオフィス街は、あらゆる意味で街の中心を担っている。場所もちろんそうだが、IT企業や大手の会社がオフィスやビルをたくさん構えているのだ。

有名プロジェクトチームや、複合企業での企画プロジェクトの進行などもあるそうで、言ってしまうえばこの街自体が実験室でもあるのだが。瑠璃はあまり詳しくないが、そういう話は母親がとても詳しいのは知っている。

長期に渡る企画は、この街が出来た時から進行しているのは割と有名な話。

街造りを企画、構築して長年に渡って調査研究するプロジェクトチームも、複合プロジェクトチームとして存在している。瑠璃の母親の恭子さんも、そういうチームを一つ抱えており、地元の大学で講演したりと結構有名なのだそう。

その分家を不在にする事も多く、あまり威張れた話でもないのは、娘から見た見地でもある。

そんな話を話のネタに振ってみると、美井奈の顔は生き生きとして来る。少女の家も共働きで、昼間など寂しい思いもしているのだろう。母親の働き口は、割と時間に融通が利くそうなのだが、土日を丸々休めた事など無いそう。

遠くへのお出掛けも、学校が長期休暇の時以外は皆無。一人っ子としては、家に帰ると誰もいないのは寂し過ぎる。ゲームで歳上とは言え知り合いが出来て、この上なく幸せを感じているのも無理のない事なのかも知れない。

瑠璃も、妹がいた事などあったためしもなく。ちよっと新鮮な気持ちではあるのは確か。

マンションの棟は、数えられるだけで5つ以上は存在していた。結構大きく象徴的な外観の造りで、周囲の自然も心穏やかな配置振り。無理なく調和していると言う感じが、大きな建物の威圧感を見事に減じているように見受けられる。

建物の中に待ち構えていた驚きの演出も、瑠璃にとっては結構新鮮だった。ペットショップ・マリモでいつも見ているが、これだけ長くて大きな水槽はお店にも置いていない。

中の熱帯魚は種類も豊富。落ち着いた採光のエントランスが、水族館に思えてしまう。

「初めて見た人は、だいたいこの水槽の並びを見て驚きますねえ。各家庭にも、最初から水槽が設置されてるんですよ。このマンションのこだわりですかね？」

「うわ、凄いねえ。マリモのお店のお得意さんなんだあ！」

「そうですね、餌とか新しい種類の熱帯魚とか。ロビーが向うにあるじゃないですか？ 休みの日なんて、住人同士がお魚の飼い方で討論してたりするんですよ」

それは何とも凄い話だと、瑠璃は素直に感心する。そのままの勢いで、端から端まで水槽のお魚を見て歩きたい誘惑を振り払い、瑠璃は少女に手を引かれエレベーター乗り場に向かう。

エレベーターのドアにペイントされていた絵も、やっぱり熱帯魚の泳ぐ姿。採光の良い場所には決まって緑も豊かな観葉植物。なかなか徹底して、寛ぎ感が演出されている。

美井奈の住居は4階のようで、到着したエレベーターは二人を何事も無く指定階へと運んで行った。鍵を取り出した少女は、自宅の扉を開くと瑠璃を恭しく中へと導く。

お邪魔しますの言葉にも、家人は誰もいない模様。美井奈がいらっしやいませと、凄く嬉しそうに瑠璃の学生カバンを取り上げてリビングのソファに運ぶ。

「えっと、お母ちゃまが二人分の昼食を用意してくれてるんですよ！ あっ、お母ちゃまにお昼に電話するように言われてるんですけど！」

「あ、じゃあ私が昼食の用意しておいてあげるから、場所だけ教えて？ いつも美井奈ちゃん達は、どこで食事するの？」

実際は、殆どキッチンのテーブルの上に、きちんと用意されてい

たのだが。布を被せてあった二人分のサンドイッチと、冷蔵庫からデザート用にフルーツポンチが出て来た。

お茶のセットも用意されていて、ポットからお湯を注ぐだけ。

どこに何があるかのメモも、きちんとした字で用意周到に置かれている。どうやら美井奈の母親は、かなり几帳面な性格のようだ。部屋の中も可能な限り片付けられていて、津嶋家とは大違いなのが見て取れる。

美井奈が先程話していた、水槽と言うのはキッチンのシンクのすぐ近くに造り付けになっているようだった。派手な色の熱帯魚が数多く泳いでいる。

確かグッピーとか、そんな名前だったか。マリモで半端に覚えた知識だが、グッピーにもかなりの種類がいるようなので、その内のどれかまでは瑠璃には分からない。

美井奈の電話は、10分はゆうに掛かっていた。瑠璃は水槽の魚を見たり、リビングの家具を眺めたりと全然気にならなかったが、戻って来た美井奈は済まなそうに陳謝する。

礼儀の良さに、瑠璃はニッコリ。すっかり準備の整った食卓と一緒に座り、ランチタイムに。

「お姉ちゃん、外食とかよくするんですか？」

「ん、弾美ちゃんと一緒に、たまにランチとかするけど……ほら、この前美井奈ちゃんと一緒に食べた洋食屋さん。他はあんまり行かないかな？」

「あ、いえいえ。家族と夕食とかはどうです？ ちょっと遠くのお店とかに出掛けたりとか」

「あ、そういうお出掛けは……いつ以来かなあ？ 両親の研究チーム？ が一段落付いた時とか、お兄ちゃんが外国の大学に決まった時とか」

「あゝ、お兄さんいるんでしたよねえ……って、じゃあ年に1回とか2回？」

瑠璃は可能な限り記憶をほじくり返すが、はじき出された答えはイツツ・ライトと言うしか無く。その通りだと答えると、弾美の家庭もそうなのかと再び訊ねられた。

その答えも至極簡単。お隣さんという立場もあるが、向こうの情報も殆ど把握している。弾美の母親の律子さんも、その旦那さんも車の運転があまり好きでは無いのだ。

長い事ペーハードライバーで、たまの外出には津嶋家に運転を頼む程の徹底振り。瑠璃の兄の渡英祝いの時は、さすがに2家族で2台車を使っただけでも。

そう言えば、たまの外食は立花家と一緒にの時間が極端に多い気がするが。両親の職場が同じで仲も良いので、当然と言えるのかも知れないが。

美井奈の家庭では、外食に出掛ける回数は月に1度はあるとの事。父親が仕事で遅くて夕食と一緒に取れない時など、母親と二人で外食に出掛ける事も多いそうである。

贅沢と言うより、一種のコミュニケーションという感じなのかも知れない。美井奈とその母親は姉妹のように仲が良いようだ、瑠璃はこの前初めて会った時に思ったものだ。

取りとめの無い会話と共に、二人昼食を取り終わると。美井奈は何をして遊ぶうかと、早くもトリップモード全開な感じ。瑠璃は戦々恐々、取り敢えずゲームを接続してみようと提案してみると、それが良いと意見は一致。

二人してリビングの大きなモニター前へ移動する。ふと見ると、テレビの隣の明るい色のラックに、弾美がクレーンゲームで取った雷キャラ人形が飾られていた。

その周囲には、ハズミンとルリルリ、そしてミイナの冒険写真のスナップが数枚、誇らしげに飾られている。ゲームのスクリーンショットは、ゲーム筐体から家庭のプリンタに直接接続して、簡単にプリントアウト出来る様になっているのだ。

この機能は、学校などで自分の体験した冒険などを友達に自慢する時などに重宝する。NMや変わった中ボスの目白押しなイベントエリアでは、きっと大活躍であろう。

それよりも、少女が自分達との冒険をとても大切に記録している事に、瑠璃は胸がジーンと熱くなる思い。

美井奈が予備モニターを用意してくれている間、つい最近知り合ったばかりの少女が、本当に昔からの妹に思えてきてしまう。その出会いも、ファンスカあつてのものだ。

大切にしたいなあと、瑠璃は姉のような感情を抱いてみたり。

\*

\*

ステージ6の中立エリアに立って、周囲を見回す二人。美井奈の家にも、ちゃんと予備モニターとサブコントローラーは存在していて大助かりな瑠璃。何しろ、装備類はほとんどルリルリがストックしているのだ。

聞いてみるに、母親とたまに一緒にゲームをするらしい。市販のゲーム筐体とソフトも、確かに周囲に転がっていた。ジャンルはまちまちで、レースやスポーツなどが多い。

結構盛り上がるらしいとの事で、時間があつたらしましように誘われた瑠璃だったが。ゲーム全般下手な事がばれるのを恐れ、丁重にお断りを入れてみたり。

しばらくは貰った白いTシャツに着替えたり、妖精と語らいをし

たりしていたのだが。ふと見ると、妖精から貰った二つ目のアイテム、ネックレスの同化が完了している事が発覚。

喜んでいると美井奈が隣から覗き込んで、お祝いの抱きつき攻撃をして来た。ちよつと家族同然の、犬のコロンを思い出す瑠璃。こんな事を考えるのは、美井奈に対して失礼なのかもと、思考がフワフワ宙を彷徨う。

その後ステージ6の中立エリアを散策、武器屋も防具屋も置いてある商品は皆高い。特別な性能が付加されている訳ではない防御力だけの防具が、平気で1万ギル以上するのだ。

ちよつと良い性能の物だと、平気で2万とか3万ギルを超えている。ベルトの時は必要だと1本1万5千ギルを涙を呑んで払ったが、このステージではそれ程欲しい装備も無い感じ。

後に備えて、財布の紐はきつめにしておくべきかと思案する瑠璃。

考え込んでいると、美井奈が隣でもぞもぞしていた。何か一緒に遊びたくて仕方が無いのだろう。遊ぶ前には勉強を済ませるのが当然との信条を持つ瑠璃は、少女に提案。

「ごく当然のような口調は、よく天然が入っていると弾美にからかわれる類いのモノ。」

「よしっ、キャラ放置しておいて、お勉強会でもしようか？」

「ええっ、せつかくなんだから遊びましょうよ、お姉ちゃまつ！」

「だって、今日の4時からのイベント攻略も遊びなんだから。それまでに宿題とか済ましておいた方が気が楽だよ、美井奈ちゃん？」

勉強は刷り込み次第で楽しくなると、瑠璃は熱弁を振るう。何より今から5月ほぼいっぱいの間、一緒にイベント攻略を楽しむ仲でもある。もしそれが原因で、美井奈が非行に走ったり成績が落ちたりしたら、自分達は美井奈の母親に対して申し開きが出来ない。

そう話すと、さすがの美井奈も神妙になった。

「逆に成績が上がったり、家事の手伝いを進んで始めるようになっていたら、美井奈ちゃんのお母さんはどう考える？ 誰かから良い影響を受けているんだなあって、そう思う筈でしょ？」

「な、なる程、凄いですお姉ちゃまつ！ そのままで考えてるとは……」  
「取り敢えず、宿題は全部済ましちゃおうか？」

大人しく頷く美井奈に、何とか主導権を取れた事に気を良くする瑠璃。美井奈が勉強道具を出している内に、瑠璃は余った装備があるのでいらぬ術書や装備と交換しますとサチコメ表記。さらに、キャラは放置気味の言葉も忘れずに書き添える。

バザーで余った装備を、一応高値で表示。間違つて買われずに性能を見て貰うのに手っ取り早いのだ。売りに出すのは、蛮族の神様の落とした大剣や超ブニョンの黄鎧や緑鎧、女王蟲の落とした女王蟲の翅飾りや顎鋏の短剣など。

それより前に倒したNMや中ボスからの戦利品は、残念ながらお店でお金に換えてしまった。

大剣などは、通常のものより遥かに性能が良いのだが。お店に売っても2万ちよつとなので、それなら物々交換した方が良く、以前弾美も言っていた。今回の件も了承済みなので、弾美に怒られる心配も無い。

勉強の用意は出来た美井奈だが、自分のキャラの胴装備はうっかり固定化してしまっている。同化が終了するまでは、紫色のTシャツに着替えれないと言う有り様である。

それを嘆く美井奈だが、逆に背中に『ファッションプラザ・ヨシナガ』の文字が並んでいるルリルリの姿は、宣伝っぽくてちよつと笑える。



「準備出来ました、お姉ちゃま！ 安心して遊べるように、先に宿題やっつけちゃいましょう！」

「そうだね、頑張ろう！」

それからしばらくは、二人とも集中力も途切れずに教科書や問題集に立ち向かう。質問した所を懇切丁寧に教えて貰える美井奈は、結構得した気分で勉強時間も苦にはならない気も。

たまにモニターに目をやる瑠璃だが、チェックまではしても買うために声を掛けて来る人は皆無。まあ、Ｔシャツの同化実験がメインなので、それでも全然構わないが。

美井奈の集中力は、結局宿題を片付け終わるまで持ったみたいである。元々、学校の方針も小中高と一貫していて、ハードなスケジュールなどは負わずに学力を伸ばす工夫を成されているのだ。片付けるのが大変なほど、宿題が出る事態も無かったりする。

宿題が終わると、美井奈の好奇心は勉強から瑠璃自身の事に移って行く。先程言っていたお手伝いとか、どんな事をしているのか、どんな感じてすれば良いかなど。

憧れのお姉ちゃまのようになりたいと、その口調は物語っているよう。

「ん、私の両親が帰って来るの、いつも6時過ぎだから。お米研いで簡単な料理を1、2品作ったり、食器洗ったり。洗濯物を取り込んだり、ゴミ出ししたりはハズミちゃんだってやってるよ」

「へ、でも私は家で包丁持ったら駄目だって言われてるし、手伝いって言っても魚の餌やりくらいですかねえ？ 後は、新聞取って来るくらいです」

「包丁使わなくても、サラダとか酢の物なら平気かなあ？ 今はスライサーみたいなものもあるし、1品くらいならチョー簡単だよ。家

の人も喜んでくれるし」

美井奈はたちまち、料理づくりに興味を持った様子。好奇心旺盛に、色々と瑠璃のレシピ内容を聞いて来る。サラダだけでも、中の具材を変えたら軽く10種類とかレパートリーを持っている瑠璃は、実際冷蔵庫の中身を見せてもらって、色々とアドバイス。

最後は結局、料理も想像力頼みな所があると、瑠璃は華麗に締めくくった。

「ほら、緑モノが無くても大根と人参のシャキシャキサラダにしてもいいし、酢で軽く漬け込んで漬け物風にしてもいいし、色々出来るでしょ?」

「なるほど、勉強になります……あつ、お母ちゃまがおやつにケーキ買ってくれてました! そろそろ3時だし、休憩にしましょう!」

「そうだね、じゃあお茶淹れようか」

美井奈は何とか、お茶の場所がどこか答える事が出来たので。隣で瑠璃の手際を眺めながら、感心する事しきり。それ程歳が離れていると言う訳ではないのに、ちょっと完璧過ぎると思う。

ケーキとお茶をモニター前のテーブルにセットし、そこからしばらくティータイム。のんびりと昨日のゲームの内容や、学校での出来事を話し合う。

学校での美井奈は、目立つ容姿も手伝ってなのか、それなりに苦労している模様である。実際に苛められたりえこ贖されたりという感じではないが、特別視されている雰囲気は漂う時もあるのだそう。

特に気にしない事になっているし、良い関係の友達も大勢いるのだが。年頃の女の子に、容姿のコンプレックスを持つなど言うのは、

逆に無理な問題であろう。

そういつのを気にしない瑠璃の方が、逆に少数派だとも言える。

『おつ、すげえレア装備……なあ、どうやって取ったんだ？』

いきなりじろつと装備を見られ、ルリルリの開くバザーを見もせずに、その氷属性のキャラは話し掛けて来た。この時期にまだ地上に出ていないのだから遅解き組のパーティの一員なのだろうが、外から装備を見る限りは大して良いものを着用していない。

瑠璃と美井奈はモニターの变化に顔を見合わずが、どう答えてよいのやらと戸惑いの表情。

『おいつ、聞いているのか？ 流水の装備って、どうやって取ったのか教えるよ！』

『えっ、あの……土と炎のボスエリアの仕掛けを解いて、隠し部屋で敵を倒して入手したんですけど』

ちょっと嫌だと思っただが、素直に質問に答える瑠璃。どうせ下の層の情報だ、戻って取りに行く事も出来ないし、支障は無いだろう。もし欲しいと言われても、がっちり固定化しているので、外したら消滅してしまう。

ところがその氷キャラは、苛立った調子でなおも詰め寄ってきた。

『アホかつ、下の層の情報聞いても何の役にも立たないだろうが！』  
『……この層の攻略なら、他を当たって下さい。どの扉もまだ入った事無いですから』

『嘘つけっ！ こんだけ装備揃えてるんだ、ほとんどのエリア廻り終わってんだろ！？』

アホ呼ばわりの挙げ句に、嘘つき呼ばわりである。瑠璃は嫌な気持ち一杯になつて、無視する事に決めたのだが。教えるだの自分だけ良ければいいのかだの、尚も側で騒ぎは納まらない。

いい加減腹が立つて、落ちようかと美井奈と相談していたら。不意に仲裁の声が背後から掛かつて来た。

『あんたちよつと、いい加減にしたら？ さつきから聞いてたら、言い分が自分勝手過ぎて引くんだけど？』

近付いて来たのは、光属性の女性キャラ。白い肌のプラチナブロンドの長い髪の毛、金色の瞳が強い意思を語るように光っている。表示されてるキャラの名前は、メグミと言つらしい。

見るからに前衛装備で、彼女も立派な装備を各部位取り揃えている。典型的な遅解きプレイヤーである事が、外見からも見て取れる。

『何だよ、テメエ。関係ない奴は引つ込んでろよ！』

『あんたと彼女も、関係あるようには見えないけど？ クリア情報聞きたいなら、礼儀覚えてから出直しなさいっ！』

『んだと、テメエ！』

『語彙が不足してるんじゃない？ 礼儀覚える前に、国語を小学1年からやり直したら？ 何なら、直に教えてあげてもいいわよ坊や？ 名前と番地言える勇氣あるなら、会いに行くけど？ それともハラメント行為でGM呼ぼうか？』

恐らく、最後のGMへ通達するとの脅しが効いたのであろう。暴言を繰り返していた氷男は、捨て台詞さえ残さずその場を立ち去り、そのまま直ぐにエリア落ちしてしまった。

それを確認した瑠璃は思わず安堵のため息。隣的美井奈も、同じように脱力したのが窺える。

「凄いポンポンと啖呵の切れる人ですねえ！ 助けて貰ったけど、このメグミって人はお姉ちゃまの知り合いですか？」

「うん……確か前に何回か、一緒にプレイした人だと思うけど……」

ゲームする時はほとんど弾美と一緒になので、ギルド同士の付き合いだと下っ端の瑠璃はフレンド登録までに至らない事が多いのだ。しかもギルド同士だと、一気に10人単位での人数での交流となるので、名前を全員分覚えるのは至難の業。

それでも何となく覚えているのは、ギルドの上の方の人なのかも知れないが。

「大丈夫だった？ 確か、冬休みに合同で狩りに参加した事あるよね？」

瑠璃はここではつきりと思い出す。確か高校生の女性のみで結成されたギルドで、全属性キャラをコンプリートしていた、華やかな一団のギルドのマスターの人だ。

弾美のギルドと同盟を組んで、確か2回くらい強敵の狩り場に挑んだ事があった筈。今年の冬休みだったか、それで1エリア制覇して、そこが未踏の地だった事から話題にもなった。

弾美やサブリーダーの進とは、恐らくフレンド登録しているのだろうが。このギルマスのメグミというプレイヤー、どうやら瑠璃の事も覚えていてくれた様子。

「はい、覚えてます。ありがとうございます、助かりました……ハズミンのギルドのメンバーです、で通じますか？」

「うんうん、後衛で頑張ってくれていた女の子よね！ 私のギルドも女性ばかりだから、頑張ってる女の子は自然に目に入っちゃうのよね……そっちの子も知り合い？」

「どうやら何とか力になろうと、いつの間にかミイナが側に寄って来てくれていたようだ。本当に心細かった瑠璃は、それだけでゾーンとしてしまう。一緒に攻略しているメンバーだとメグミに紹介すると、キャラがエモーションでお辞儀をして来た。」

「ミイナも丁寧にお辞儀で返す。何となく、それだけで打ち解けてしまったり。」

「不思議ですねえ、これだけでさっきまでのギスギスしてた雰囲気が無くなっちゃいました」

「そうだねえ、高い谷間の揺れるつり橋を恐々と渡りきったら、向こう岸にいた人に温かいお茶を振舞われた様な気分？」

「あゝ、何となく分ります！ 嫌な人もいるけど、親切にしてくれる人もいっぱいいるのは、ゲーム続ける原動力になりますよねえ！」

メグミもこの時間は攻略は手掛けないという事で、どうせならみんな談話しようという話に。フレンド登録を二人ともして貰いつつ、和気藹々とした雰囲気。その後、中立エリアの端っこでキャラを座り込ませての座談会に突入。

メグミが呼んだ、同じ攻略メンバーの一人が着いてから、話はさらに華やかに。ケイトと言う炎キャラで、逆立った赤毛が気の強そうな雰囲気醸し出している。

メグミが彼女を呼んだのは、瑠璃が宝珠も1個余っていると口にしたのも理由の内。ケイトが炎スキルを伸ばしているの、こちらも使うのを戸惑っている宝珠と交換してくれないかという商談を持ち掛けられたのだ。

渡りに船と、瑠璃はすぐさま快諾する。

「ウチのギルドは今、3パーティに分かれて攻略してるのよ。1つはもう地上に出ちゃったけど、もう1つのパーティの荷物番の娘呼

んだから、物々交換しよう！」

『あゝ、ぜひお願いします。遅解き同士だと、装備は被っちゃうかもですけど』

『でも、属性や武器選択の違いで余っちゃうのも出て来るからね。緑鎧とかは欲しがる娘がいるかも』

そこからは更に二人追加、風属性と雷属性の女性キャラで、瑠璃が中学生ギルドの一員だと知ると、妹のようにちやほやされてしまったり。ノリの良い人ばかりで、商談しているのか雑談しているのか分らなくなつて来るほど。

しばらくは失敗談に華が咲いて、美井奈はそれなら参加出来ると大張りきり。ほぼ同じルートを辿つて来た高校生ギルドのメンバー達は、装備もレベルも瑠璃たちに引けを取らない。

失敗から引き起こした美井奈の蛮族の神様降臨の話は、皆さん大ウケ。

『ひどつ、ハズミンが知らない内に仕掛け作動させちゃったの？w

そりゃあ焦るわねえw』

『ええ、怒られました！ お母ちゃまは隣で笑つてたけど』

『あははw でもドロップ良かったから、まあ許されるわよね。その時大剣出たの？ 私達の時も頭装備だったから、それ欲しいわ！』

『術書1枚じゃ、安すぎる性能よね……ケイト、3枚は出さなきゃ』

『うつ……2枚プラス、他の物じゃ駄目かしら？』

瑠璃は遠慮気味に1枚で構わないと言ったが、結局は色々と便宜を図つて貰える事に。4時に一旦落ちて、それから4時半からの攻略だと瑠璃が口にする、先に交換を済ませてしまおうと慌ただしくなつて来る。

そんな訳で、物々交換の交渉がスタート。

- \* 炎の宝珠 II 氷の宝珠
- \* 神気を纏った大剣 II 闇の術書、雷の術書、尖骨の矢束 × 6
- \* 超ブニヨンの緑鎧 II 雷の術書
- \* 炎の術書 × 2 II 土の術書 × 2、知恵の果实
- \* 赤いバンダナ II 白木の弓

やっぱり水や光の術書は、どのパーティも誰かが分担して伸ばしている系統の魔法のよう。出たとしても、すぐさま内輪で使ってしまう模様。スキルが伸びた分、回復量やダメージが上乘せされるので当然とも言えるが。

物々交換で、雷や闇の術書を貰えたのはラッキーだった。何より炎の宝珠が氷の宝珠に変わった事により、細剣の複合スキルをステージ6 攻略前に覚える事が出来る。

瑠璃がそう話すと、場は凄い盛り上がりように。

『えっ、複合スキルの書なんどこで手に入れたのっ?』

『えっと、アスレチックエリアで……中ボス前の、ヒーリング潰しの影の魔人からです』

『ひゃ〜、それってわざと湧かしたの? 普通は避けるでしょ、その仕掛け』

『ん〜、私達は結構MP消費しながら進むから、ヒーリングは頻繁にしないと駄目なんですよ』

『3匹倒して1個しか出ませんでしたから、お姉ちゃまのドロップ運は凄いです!』

魔人が3匹湧いたと言う時点で、ドロップどころか命の危機なのだ。瑠璃が灯籠の仕掛けを話すと、一同感心しきり。この娘、見かけによらず侮れないわ的な視線がチクチク。

さらに、リーダーの弾美が暗塊の装備を所有していると聞くに及ぶと、どこかソワソワとした空気が流れ始める。何しろ話を聞くに、



自分達の所有していない思いつ切りのレア装備を、年下のパーティが持っているのである。

それでも、呪いの解き方や未確認の情報を気楽に与えてくれるのには、リーダーのメグミは素直に感謝を述べた。瑠璃の方も、助けてくれた上に有意義な時間を提供して貰い、大助かりだとお礼を口にする。

最後はお互いに攻略頑張ろうねと、地上に出ても連絡取ろうねの言葉と共に、即席の座談会は解散となり。華やかな場だっただけに、分かれる時に少しだけ寂しさがあつたりして。

それでもおべっかではなく、瑠璃にとっても本当に有意義な時間だったのは確か。

\*

\*

ログアウトしてしまうと、途端にリアルで忙しくなった。食事の片づけをちゃんとして、美井奈にも部屋を片付けるように指示を出す。それから着替えや出掛ける準備を終えた美井奈に、食器を仕舞う場所を尋ねる瑠璃。

やっぱり他人の家の台所は使いづらい。それでも瑠璃は、見回した範囲ですっかり片付いた室内に気を良くする。隣で美井奈も、外出の支度を終えてウキウキの顔。

「準備は出来た、美井奈ちゃん？ 家の鍵とか、ちゃんと持ってる？」

「はいっ、ばっちりです、お姉ちゃまつ！」

「じゃあ、今度はハズミちゃん家でイベント進行だね。その前に犬の散歩するから、ちよっと時間頂戴ね？」

「了解ですっ、私も散歩の役に立ちますよっ！」

外はいつの間にか、風が強くなっていった。少しだけ肌寒さを感じた瑠璃は、美井奈の服装を横目でチェック。一応、暖かそうな上着を着ている事に安堵し、お姉さんっぽい思考にちよつと照れてみた。

街のこの辺りはあまり歩いた事のない瑠璃は、ちよつと不思議な感じに捕らわれつつ。ここから少し行けば、両親の在籍している研究所もあるらしいのだが。美井奈に訊いても、さすがに企業の並び順は知らないらしい。

ただ、この通り一帯がもの凄く治安が良いのは有名だとの事。

「地域一安全な通学路だって、以前先生が仰ってましたけど。車もほとんど通らないし、何かあれば30秒で通りに並ぶ企業のガードマンが飛んで来てくれるらしいですよ?」

「へえ、それは知らなかったなあ」

何しろ瑠璃は、ここを通学路として使ってなかった訳だし。そんな他愛の無い話をしている内に、景色は段々と瑠璃の知っている住宅街へと変わって行く。程なく津嶋家に辿り着き、愛犬の熱烈なお出迎え。

ついでにマロンも散歩させようと、着替えの終わった瑠璃は2本のリードで兄弟犬を誘導する。美井奈も1本手渡され、意外な力強い引きに思わすすっ転びそうに。基本小走りで無いと、犬達はどうにも満足しないらしい。

二人でワイワイとやってると、帰宅途中の弾美が声を掛けて来た。

「おーい、瑠璃っ、美井奈っ！ 散歩なら俺も混ざるぞ」

「あつ、お兄さんっ、お帰りなさいっ！」

帰宅集団の同じ部活のメンバーに手を振って別れを告げながら、弾美は尻尾を振って飛んで来たマロンをがっちりキャッチ。公園へ

の道を、今度は三人と二匹で賑やかに行進となり。

いつものハイな調子で美井奈の話す内容は、今日の楽しい出来事や、お昼のインでの不愉快な顛末。その説明に眉をひそめていた弾美だが、知り合いが助けてくれたと訊くとしたり顔で頷いて見せる。しかし、因縁をつけられた事に対しては、かなり憤慨している模様。

「何て名前のキャラだっ、俺からも文句言ってる！」

「ああ、名前覚えてないし、もういいよ？ ハズミちゃんが出たら騒ぎが大きくなるから駄目だよ」

瑠璃は慌てて、本心からそう口にする。美井奈もそれには激しく同意。直接的な被害は何も無いのだから、消極的な解決法だが無視してしまえばそれで良い。

弾美はブラックリストという手もあると、使い方を説明するのだが。そもそも、名前を覚えていないのだから仕方が無い。それより新しい知り合いが出来ての物々交換の話に盛り上がりを見せる、リアルパーティの面々。

マロンとコロンは、蚊帳の外で少し寂しそうだったが。

美井奈のさり気ない話題転換に、瑠璃も勢い込んで複合スキルを覚えた事を報告する。まだ使った事は無いのだが、武器スキルを伸ばした事のない瑠璃には初めての体験である。

今からインが、楽しみで仕方が無い。

「そりゃあ強いよ、複合スキルは！ 範囲攻撃とか、後は付加でスタンさせたり麻痺させたり色々種類はあるけど。瑠璃のは氷スキルだから、それを伸ばせばどんどん強くなる筈だな」

「私も複合スキルって、覚えた事無いですねえ……レベル30無いんじゃない、当然かもですが」

「うん、メイン世界じゃレベル50以上のエリアから、やっと出て来るくらいかな？ イベント限定の仕様だなあ」

それを聞いた美井奈は、自分も覚えられる可能性があるを知って、  
「またもハイテンションに。こう言っただけはアレだが、メインの美井奈のキャラは破天荒である。つまりは育て方を試行錯誤した結果、かなりへボい出来なのだ。」

イベントのキャラはレベル20だが、そちらの方が強いくらいだ  
と思う。

弾美だつて強い武器や防具以上に、複合スキルは欲しいのだが。  
メイン世界では削りキャラ、つまりは派手な複合スキルでガリガリ敵を削る前衛だったのだ。今のハズミンの片手剣の技では、ストレスを感じずにはいられない。

とは言っても、パーティバランス的にも自分が強くないと、せつ  
かくの厚い防御とHPが役に立たなくなる。タゲがふらついで女性陣が殴られるのは、あまり好ましくない。

片手剣を選んでちよつぱり後悔を感じなくもないが、展開が先ま  
で全て見通せる訳でもなく。これからの、強力なタゲ取り手段の入手に期待するしか無い。

犬達は公園で、勝手にはしゃぎ回る事に決めたようだ。話し込む  
飼い主の元を離れると、公園の障害物を縫って二匹で楽しそうに駆け回っている。

それを何気なく見ていた弾美だが、あんまり夜まで時間がないこ  
とを思い出し、少し慌てた感じでベンチから立ち上がる。まあ、最悪1エリアだけクリアして、後は各自宅からでも良いのだが。

そう話すと、美井奈が秘策があると言い出した。悪戯っぽい表情  
で、何かを画策しているよう。

そんな話をしている間に、犬達が喉が渴いたと戻って来た。満足  
そうな犬達を確認して、これにて散歩は終了。帰宅しながら、二人  
して美井奈に秘策の何たるかを問い質してみるのだが。

笑いながら、まだ秘密だとの答え。計画が上手く行かないかもと、  
巧みにはぐらかす少女だったり。

\*

\*

弾美は部屋で、ジャージ姿になって完全にリラックスモード。運  
動後の気だるさを全面に出していたが、コントローラーを握るその  
瞳にはエネルギーが満ち溢れている。

その隣に座る瑠璃は、通い慣れた弾美の部屋で一息ついた感じ。  
変な話だが、先程までの初めての美井奈のお宅訪問で、ちよつと緊  
張していたようだ。

兄弟犬との散歩も弾美の部屋でのゲームも、瑠璃にとっては日常  
の1コマ。肩の力も抜けると言うもの。

「メグミさん、いないねえ……もう落ちちゃったみたい。今日は夜  
からの攻略だつて言ってたし」

「そうみたいだな、俺からもお礼のメール送っておくよ」

「うん、お願い。ありがと、ハズミちゃん」

「今度会えるとしたら、地上ですかね？」

まだ見ぬ地上を夢見つつ、美井奈が瞳をキラキラさせながらそう  
口にする。時間がないから、取り敢えずはメールより攻略が先と、  
お互いキャラやポケットのチェック。

物々交換で得た術書や買い置いてあった薬品をトレードしたり、  
新しく覚えた魔法のチェックをしたり。慌ただしく中立エリアで動  
き回ったキャラ達は、最終的には大扉の左の小扉前に集合。

みんな今日と明日の攻略で地上エリアに辿り着こうと、やる気満

々である。

ハズミンのレベルは順調に2エリアで2つ上がっており、装備も鎧の入手でいきなり硬くなった感じを受ける。ただ、プニヨン装備の見た目は、勇猛と言うよりユーモラスなグラだったり。倒して入手した相手が相手なだけに、それも仕方が無いとも言える。

新しい片手剣スキルは補正スキルで、セットすれば闇属性のハズミンが使えばSPをたまに吸収する斬撃となるのだが。瞬発力のあるスキルが欲しかったと、残念な結果の弾美であった。

他の主だった装備の変更はなし。今日の呪い解除に期待は大である。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：22

取得スキル : 片手剣43 《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

《下段斬り》 《種族特性吸収》

: 闇33 《SPヒール》 《シャドータツ

チ》 《闇の腐食》

種族スキル : 闇22 《敵感知》 《影走り》 : 土10 《防

御力アップ+10%》

装備 : 武器 蛮刀 攻撃力+11 《耐久8/8》

: 盾 サソリ皮の盾 防+6 《耐久9/9》

: 遠隔 木の弓 攻撃力+8 《耐久11/11》

: 筒 木の矢束 攻撃力+6

: 頭 黒いバンダナ 闇スキル+3、SP+10%、

防+3

: 首 胡桃のペンダント HP+4、防+4

: 耳1 プニヨンのピアス 防+2

防+14

：耳2 白玉のピアス HP+5、防+1  
：胸 超ブニヨンの赤鎧 火スキル+3、腕力+2、

：腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、  
HP+25、防+10

：指輪1 古代の指輪 体力+1、防御+5

：指輪2 ブニヨンの指輪 防+3

：背 深紅のマント 攻撃力+4、MP+4、防+4

：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

：両脚 なめしズボン 攻撃力+1、防+5

：両足 編み上げブーツ 攻撃力+3、防+6

ポケット(最大6) 小ポーション 小ポーション 万能薬

中ポーション 中ポーション 万

能薬

流水の髪飾りを入手して、ますますMPにゆとりの出来たルリルリ。しかしカンガルー胴装備とブニヨン靴装備が、流水シリーズのグラと激しく喧嘩して、何とも不釣り合いな見た目になってしまっている。キャラの見た目にこだわる瑠璃が、この事をどう思っているかは訊ねるまでも無く。

そんな事より、複合スキルの《アイススラッシュ》と《魔女の囁き》からの《ウォータスピア》と言う、2つの必殺技を覚えたのは、パーティの削り速度アップにとっても大きい。

新魔法の《魔女の足止め》は、文字通り敵の足元を凍らせて足止めの出来る便利系魔法。レジストされればそれまでだが、敵から離れて倒すのには重宝するのは確か。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：22

取得スキル 細剣34《二段突き》 《クリティカル1》

《麻痺撃》 《複・アイススラッシュ》

：水33《ヒール》 《ウオーターシエル

》 《ウオータスピア》

：光11《光属性付与》

：氷20《魔女の囁き》 《魔女の足止め》

種族スキル 水22《魔法回復量UP+10%》 《水上移

動》

装備 武器 蜂のレイピア 攻撃力+9 器用度+2《耐久

10/10》

：盾 サソリ皮の盾 防+6《耐久9/9》

：頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+5、

MP+25、防+8

：首 妖精のネックレス 防+2

：耳1 銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2

：耳2 青玉のピアス MP+5、防+1

：胴 カンガルー服 ポケット+2、MP+6、防+7

：腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

：指輪1 水の指輪 水スキル+2、精神力+1、防

+1

：指輪2 水の指輪 水スキル+2、精神力+1、防

+1

：背 なめし皮のマント 攻撃力+1、防+4

：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

：両脚 流水のスカート 水スキル+5、氷スキル+

5、MP+25、防+10



防+7

：両足 超ブニヨンの黄靴 土スキル+2、体力+1、

ポケット(最大8) 小ポーション 中ポーション 万能

薬

小エーテル 中エーテル 万能

薬

中エーテル 水の水晶玉

弓と矢を新調した美井奈は、攻撃力の合計が既に20を超えており、数字だけ見ればいっぱしのアツカーではあるが。SPの貯まり方は弾美に比べて全然遅いので、スキル技の乱用でタゲをとる事態は、今の所心配ないようだ。

防御も少しだけ上昇したが、術書の使用でうっかり胴とズボンも固定化してしまったのには本人も参った模様。そのせいで覚えた《俊足付加》は、自身の移動速度を上昇させる魔法。

これでマラソンもばっちり。ただし新しく覚えた種族スキルは、なるべく発動して欲しくないと願う美井奈であった。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：20

取得スキル 弓術26《みだれ撃ち》 《貫通撃》

雷21俊敏付加 《俊足付加》 水

10 《ヒール》

光31 《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》

種族スキル 雷20 《攻撃速度UP+3%》 《雷精招来》

装備 武器 炎のフレイル 攻撃力+14 MP+10 《耐

久14 / 14

：遠隔 白木の弓 攻撃力+12 《耐久12 / 12》

：筒 尖骨の矢束 攻撃力+12

：頭 白いバンダナ 光スキル+3、武器スキル+1、

防+3

：首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+

2、防+2

：耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

：耳2 金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2

：胸 鉤爪付きの上衣 雷スキル+3、敏捷度+2、

防御+8

：腕輪 超プニヨンの緑箆手 風スキル+2、敏捷+

1、防+6

：指輪1 プニヨンの指輪 防+3

：指輪2 妖精の指輪 光スキル+2、風スキル+2

HP+2 防+2

：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

：背 プニヨンのマント 防+3

：両脚 鉤爪付きの腰布 雷スキル+2、敏捷度+1、

防御+7

：両足 黄銅の靴 防+6

ポケット(最大6) 小ポーション 中ポーション 万能薬

小エーテル 中エーテル 雷の水

晶玉

弾美の号令と共に、キャラ達はステージ6の最初の攻略に挑む。

事前の噂では、かなり振り落としの仕掛けが意地悪なのだそうだが。そういう意味では今日と明日、合同インで攻略出来る体制は大いに助かった感じもする。

美井奈の秘策という言葉も気になるが、今は攻略に集中するのが先。

合言葉は『地上に向かって一直線！』 弾美パーティの挑戦は、まだまだ続く。

## 10・5 クモ騒動と秘密結社？（前書き）

今週は忙し過ぎて、間の平日にすら投稿作業が出来ませんでした。今も結構へとへとで、疲労と筋肉痛の二重打撃に苛まれてます。風呂上りにぼんやりとしながら、アイス食べてまったりしてますけど（笑）。

筋肉痛の原因は、運動会で全力疾走してしまったから。今さら運動会と言う年でもないのですが、仕事のためなら仕方が無い。アンカーをつとめさせて貰って、途中逆転で1位に立っただんですが……コースを間違えて、最終的に再逆転で2位に甘んじてしまいました（笑）。

チームの皆様、本当に申し訳ない（笑）。

さて、今回の章では大井蒼空町の根本的な存在理由の説明などしてみたり。特殊な環境で運営されるオンラインゲームと言う設定なので、そのこじつけに頭を悩ませた結果がこれです。全部フィクションなので、あしからず（笑）。

それでも昨今のペット飽和事情とか、野良犬や野良猫の大量殺処分とかのニュースを聞くにつけ。その問題に町ぐるみで取り組んでいる姿を、フィクションとは言え書いておきたかったのも事実。それは現代の苛めや引き籠もり問題に対しても同じで、ネットの力だから出来る事というものもあるのかなって。

そんな思いも、ちょっとずつ込めて書いています。読んだ人が少しでも共感してくれたら、苦労して書いた甲斐もあると言うもの。今流行のネットダイブとかの形式を取らなかったのも、より主人公達の住む街を身近に体感して欲しかったから。

まあ、半分以上は流行に乗るものかと言う反骨心からですが（笑）。

## 10・5 クモ騒動と秘密結社？

ステージ6も、まずは左の小部屋から。メグミ達からちょっとだけ中の仕掛けを聞いている瑠璃と美井奈だが、攻略中は敢えて口にしない事に。弾美がネタばれを凄く嫌がるからだ。

インした感じは、やっぱり下の層とほとんど変化は無し。白い石畳と石柱が等間隔に続き、真っ直ぐで何の変化も見られないマップ構成である。

ミイナの釣りで、早速攻略の開始。ここら辺りの流れは、打ち合わせももういらぬ程。順調に経験値を稼ぎながら進んでいると、いつもと違う変化が早々と訪れる。

「石柱がトータルタイムポールにすり換わってる……あれって、昨日見た中ボスかな？」

「特殊技も攻撃力も、全然大した事なかったけど……ここにいるのに、何か意味あるのか？」

「何ですかね？ 片方ずつ、取り敢えず釣りますね？」

主力武器の弓の久々の交換で、ちょっとウキウキ模様の美井奈。両手武器の通常の攻撃力と言つのを実感して、弓を射るのが楽しくて仕方が無いらしい。

弾美に言わせれば、両手武器は強いけれど盾役とのバランスが大事だとの事。タゲを後衛アタッカーが取ってしまったら、戦術自体が成り立たないのだ。

全力で攻撃してタゲを取りそうな時は、わざと弱い弓や矢に交換する事も大事だと言われ、以来美井奈は何種類か弓矢のセットを持ち歩く事になっている。

確かに自分がタゲを取って良い事は、一つも無いのは分かり切っている。

取り敢えず、雑魚なのか中ボスなのかも定かでないトーテムポールに攻撃を仕掛けたミイナだったが。反応が無い事にちょっと拍子抜け。HPバーも減らないし、飾りなのかと思っただけ。

そう報告すると、パーティの面々は顔を寄せ合い作戦会議。ハズミンが今度は側まで寄ってみるが、動く気配は感じられない。その代わり、近付いた事でポールに変化が。

中央の口元がカパツと開き、『Rポイント』という表示がカーソルの移動元に出現する。

「何でしょう、これ？ 泉みたいにトレードするんですかね？」

「そう言えば、昨日のトーテムがアホみたいに指輪落としたなあ」

「あゝ、売らずに一応持つてるけど……Rってリングの事？」

昨日のトーテムポールは近付いたら4つに分裂、一同は泡を食ったが実力は全然大した事も無く。サクツと倒されて、しょくも無い性能の指輪を4つも落とすたのだった。

ただ、指輪に属性がそれぞれ表示されていたので、相談の結果持つておく事に。ひよつとして全部集めたら何か起こるかも知れないし、何かのトリガーかもとの思いだったのだが。

早々と試すチャンスの到来かもと、弾美に促されルリルリは期待を込めてのトレード。次の瞬間、爆ぜた様な衝撃がパーティを襲い、全員がパニックに。

いきなりの範囲攻撃だったらしいが、それは油断していたこちらも悪い。ただ、ポールが4つに分裂して宙に浮いているのは予想外何しろ、剣先が届かない程高い位置にいて、向こうはキャラの真上を取つての丸太落として攻撃して来るのだ。

どっから丸太出しているんだと言う弾美の突っ込みも何のその。油断していると、特殊攻撃の本体落下の踏み潰しで、座り込みスタ

ン状態から殴られ放題のループに追い込まれる。

逃げ回る一同だが、弾美の指示は的確だった。遠隔で取り敢えず1体やつつけると言われた美井奈は、しかし逃げ回るのに必死で半狂乱で言葉を返す。

「どっ、どれ倒せばいいんですかつ!？」

「どれでもい……ぬっ、あの派手な顔の奴がボスか？」

「あゝ、最初に口を開けた部分だね、そうかも！」

逃げ回る間隙を縫って、瑠璃は《魔女の囁き》からの《ウォータースピア》で派手な彩色のポールに魔法攻撃。一気に7割近くHPを削ったのは良いが、魔法の撃ち終わりを2体に狙われ、大慌てで逃げまくる。

弾美が今度は真下に陣取っての《シャドータッチ》。更に美井奈の《みだれ撃ち》で、何とか1体を撃破。すると残りは地上すれすれまで落ちて来て、こうなれば左程怖さも感じなくなり。

ハズミンが片手剣でガシガシ削って行き、何とか被害を最小限に抑えての勝利。敵のドロップはポーションやエーテル、万能薬などの薬品類が主。

リングと言えば、光の2級リングと言う名前に変わっていた。

「おやつ、ただのリングが2級に換わったな」

「……という事は、1級にもなるのかな、ハズミちゃん？」

「性能は上がるかもですが、敵も強くなるんじゃないですかねえ？」

他のリングの属性は、炎と風と氷。見事にパーティの欲しい属性を外している。ちなみに性能は2級で光スキル+2、防御+2である。ただのリングでは光スキル+1のみだったので、防御が付いただけ良品になっている。

問題は、続けてこの指輪をトレードしても良いものかどうかだが。

反対側のトーテムポールを見ながら、予想や意見がパーティ内に飛び交う。トレード出来るのかもまだ分っていないが、育てられるとしても手元に欲しい属性が無い。

結局は、光のリングで試して、駄目だったら炎か氷にでもしようと言っ事に。

「んじゃ、2度目のトリガー投げ込み試すぞ〜」

「どうぞっ、隊長!」

今度は遠隔の苦手な弾美がトレード役に。女性陣は離れて遠隔攻撃の準備。万端の布陣で臨んだトレードは成功だったのだろう、ハズミンは吹っ飛ばされて宙に4つの影が。

準備していた遠隔攻撃を、ボスの1体に集中する瑠璃と美井奈。

雑魚共々に二人の頭上に押しかけるかと思いきや、4体が一斉に攻撃魔法を唱えて来た。

慌てる女性陣、魔法攻撃を止める手段も無く、それぞれ2撃ずつ《ホーリー》を直撃被弾。

「うわっ、2発ずつで助かったな。全部一人に来てたら死んでたぞ!」

「にゃ〜、やられる前に撃ち落としますよっ!」

回復は瑠璃にまかせて、美井奈の渾身の《貫通撃》が炸裂、ボスのポールを瀕死に追い込む。その瞬間、隣のポールがふらふらとボスに近付き2体で上下合体。小さなトーテムポールを作ったと思ったら、HPを交換していたり。

下で見ていた弾美は慌てて魔法を使おうとするも、特殊技の発動中はどうやら無敵状態になるらしい。横槍も叶わず、敵のボスのHPは満タン回復。



「ひどいつ、せつかく削つたのに〜！」  
「もっかいボス狙えっ！ 雑魚は俺が倒すから！」

光属性に設定されているせいか、弾美の《シャドータッチ》は事のほか良く効く。雑魚の1体を吸い殺して、今度は近くの雑魚に弓矢でちよっかいを掛けてボスとの距離を引き離す。

これ以上特殊技で回復されたら、たまったものではない。ほぼ間を置かず、再びの魔法と弓矢攻撃。ボスの生命値は半減するも、お返しに魔法が瑠璃を襲う。

勝負は美井奈のSPが貯まった瞬間に決まっていた。武器の耐久度を惜しまぬ《貫通撃》でボスは崩れ落ち、他の相方達は抵抗むなしく地上へと墜落して来る。

SPの使い場の無かった弾美が、ここぞとばかりに雑魚掃除。第2戦、終了。

「お、1級はHP+が付いてるよっ！」

「ふむ、いいな……美井奈、持っておけ」

「わっ、ありがとうございますっ！」

1級の性能は、光スキル+3、HP+10、防御+3と先程よりはかなり良い感じ。さっそく美井奈は指輪を交換、ヒーリング後にさらに奥を目指す一行。

今回の雑魚も、まあまああの強さ。相変わらず蛮族や獣人はウザいが、ギルや経験値は美味しいので良しとする。進んで行くと、前回と同じく河と橋と中州のガーディアンセット。

しかし、守る宝箱は何故か3つ見えていたり。

「……今回は大判振る舞いだな。宝箱が増えたのは、素直に喜ぶべきなのか？」

「完全な罠だよ、絶対につ！」

「わ、私は今回は選びませんからね、宝箱！」

中ボスはいつぞやのワニ型モンスター。呑み込みと噛み付きに気をつけてサクッと倒せば、やっぱり出て来たのは宝箱の鍵が1つ。あとは素材とポーションくらいのもの。

弾美が隣を伺うと、サツと瑠璃の影に隠れる少女。狭間の瑠璃は微妙な顔。

「美井奈……当たるまでは逃げられないぞ？」

「お、お姉ちゃま……？」

「が、頑張つて美井奈ちゃん……」

「……………じゃあ、真ん中……………は、外れだと思えます」

付け加えて、小さい声で訂正してみたり。真ん中に進みそうになっていたハズミンはくるっと反転。隣の瑠璃が指を真っ直ぐ上げたかと思うと、少し躊躇して右に傾けた。

弾美は右の箱を開錠。中には当たりの炎の術書が。弾美はちょっと詰まらなそうに、他も開けてみようかと提案してみたのだが。二人の猛反対にあつて、敢え無く断念。

仕方なく、次の宝箱を目指す事に。

雑魚を掃除しつつ進んで行くと、程なく見えて来た次の宝物庫。

ガーディアンは火の玉モンスターとアンデットのマミーで、それ程強そうにも見えず。弾美は瑠璃に、覚えたばかりの複合スキルを試しておくようにとの指示を出す。

確かに中ボスへのぶつつけ本番は怖い。ただ、相手の火の玉は炎属性なので、氷系の技は効き難いかも知れない。そう話すと、隣の包帯男と効きを比べれば良いと言われ納得。

戦闘は実にあっさりした物だったが、守護モンスターが格段に弱

いと言う訳でもなかった。ルリルリの新複合技の《アイススラッシュ》は、弾美の連続スキル攻撃にも負けないダメージを叩き出し、何よりエフェクトがとても素敵。

ただし、SPを9割近く消費してしまうため、弾美のような連続スキル攻撃は絶対に無理。殴りで貢献しようと思ったら、何かしらでSPに細工をしないと駄目だろう。

強烈な技だけに、高燃費なのは仕方ない気もするが。

そんな事を考えている内に、あっさりと2体目も倒し去り、お待ち兼ねの開錠タイム。弾美は楽しそうに、美井奈に無言のプレッシャー。まずは右側の宝箱のセット前に陣取るハズミン。

美井奈は小鼻を膨らませ、さっきよりは大きな声で選択肢を口にする。

「右……じゃないですねっ、多分……きっと」

「じゃあ、真ん中を開けてみようか」

弾美は簡単に言葉を付け足して、ドロップした鍵を真ん中の宝箱に差し込む。途端に大爆発、範囲ダメージがパーティ全員を襲い、全員思わずのけ反って画面から顔を遠ざける。

硬直していた瑠璃が、ようやく立ち直って全員に回復を飛ばす。最初に回復を貰った弾美は、せっかちにもすぐに左の箱を合鍵で開けてみると。

金のメダルをゲット。一同、ほっと胸を撫で下ろして、視線は思わず美井奈へ。

「まあ、当たってはいなくもないが。取り敢えずこの方式で全部行こうか」

「うう……」

左側では、美井奈は真ん中を除外。弾美は右の宝箱を開けて土龍の尻尾というアイテムをゲット。説明文には、アイテムを使うと一発でエリアから退場出来るとの事らしいのだが。

何故にこんな後半に出るのかと、全員から非難殺到。一応、エリアに入つてすぐ使つても30分縛りは無効にしてくれるし、ポケットからの使用も可能な優れたもののだが。パーティではなく、使用者一人にしか適用されないので結構微妙。

取り敢えず、ライフが1しか無い美井奈が持つておく事に。

「そう言えば、ライフポイントが1しか無いの、すっかり忘れていました」

「地上に出れば、1個貰えるそうだから、それまで頑張れよ」  
「了解です、隊長！」

無理をさせているのは、いつも弾美のような気もするのだが。瑠璃は敢えて何も言わず、弾美の後ろに付いて進む。少し行くと、再び河の流れと中州のモンスター。

今回は、6つもポイントがあるらしい。

歯並びも鋭い魚型モンスターを倒した後、瑠璃は簡単な計算を頭の中でこなしてみる。6箇所のお宝出現ポイントに宝箱が3つずつ、つまりは合計で18個！

果たして全部開けたら、今までの流れからしてどついう事態になるのだろう。今のところ、美井奈の奇跡的な除外率で、何とか半々の確立に持ち込んでいるが。

今も美井奈は左を除外して、弾美があまり考えもせず真ん中を開けたようだ。少し身構えていた瑠璃だが、結果は結構な量の経験値を入手する運びに。恐らく美井奈は、直感で当たりと思つた宝箱を、自ら外れたと言っているのだろう。

弾美の嬉しそうな褒め言葉にも、少女は微妙な顔。

ところがその微妙顔は、次の守護モンスターを目にしたパーティ全員のものになってしまった。門の前には何も居ないのだが、その近くの石柱がトールポールにすり替わっている。

弾美が近付いて扉をチエックするが、ガーディアンがいるためか開かない。指輪が無かったら開ける手段を失っていた所だ。そしてここで問題が一つ、1級の指輪を使用するかどうか。

直前の敵でさえかなり厄介だったし、ここは思案のしどころ。

「どうする、他に欲しい指輪無いし……光で行くか？」

「うーん、作戦ちゃんと思えば行けると思っけど……」

「そう言えば、こいつら無生物なのにHP吸えるな……何でだろ？」

「トールポールは精霊とか、妖精扱いだった筈だよ、ハズミちゃん」

なる程、そうだったらしい。そんな訳で作戦は、まずは弾美がボスの直隣の1匹のタゲを取って引き離す。それから後は、女性陣でボスを早めに殲滅すると言う流れに決定。

美井奈からリングを預かって、弾美はカウントダウン。トレードと共に、かつて無い程の爆風ダメージ。離れていた女性陣は無事だが、ハズミンはHPに4割程度のダメージ。

それでも何とか近付いて、弾美が闇魔法でHPを吸い返すのを合図に、水の魔法と美井奈の弓術がボスのポールを襲う。今度の敵はHPも多いらしく、最強の瑠璃の魔法にも、ようやく3割削れたかどうか。

光魔法の詠唱より先に、美井奈の《貫通撃》が敵のHPを更に削って行く。もう一度ずつ必殺技を打ち込めば勝利は確実だろうが、反撃のレーザー光線は強烈だった。

あっという間に、後衛の瑠璃と美井奈は火だるまに。

「ひゃあつ、やばいやばいつ、ハズミちゃん死んじゃうつ！」  
「ポーション全部使えつ、もう1匹タゲ取ってみるかっ！」  
「もう一撃で倒せますよ、お姉ちゃまつ、死んでなるものかっつ！」

たった一撃で、半分近く削られる程の威力。ただ、連射はさすがに出来ない仕様なのだろう、ゆっくりと宙を飛んでポールは近付いて来る。2発喰らった瑠璃は瀕死状態、数ミリ残った生命力で、なんとか生き永らえていた。慌てて薬品で回復しつつも、美井奈と共に敵との距離を取る。

弾美がさらに、隣の雑魚に魔法を打ち込んでの強引なタゲ取り。これで遠隔組はかなり安全度が上がった筈。レーザー光線を喰らったのは弾美も同じで、しかも光魔法なので始末が悪い。

自分もポーションを使いながら、ダッシュで敵をあらぬ方向に移動させる。

瑠璃の新魔法の《魔女の足止め》が、追隨する敵のボスポールを凍らせて足止めした。さらに再度の《魔女の囁き》からの《ウォーリースピア》が敵のボスを追い詰める。

美井奈はSPが貯まるまで、弓でのけん制の通常攻撃。光魔法では、全然削れなかつたので仕方が無い。新戦術だが、これで接近戦で美井奈が不利になる事は無い。

ただ、足止めはそんな長くは持たないようで、数十秒が精々だ。

最後は同時の瑠璃と美井奈の必殺攻撃が炸裂、空中からの一方的な狙い撃ちの事態を逃れる事に成功した。とにかく怖いレーザー光線を撃たせない様に、後はひたすら雑魚の3体を接近戦に持ち込む。フリーの雑魚に、弾美が何度かこんがり焼かれたもの。取り敢えず全部倒し終わり、リングの育成戦闘は完了。最終的には数個の薬品と共に、光の特級リングが入手出来た。

性能は光スキル+4、HP+15、攻撃距離+4%、防+4とユニークで優秀。命中範囲が伸びるのは、後衛の美井奈にはそれ程有り難くない。とは言っても、瑠璃は同化するまで指輪は外せないし、弾美はいらぬと言う。

そんな訳で、当分は美井奈が保有所持する事に。瑠璃も光スキルを20まで伸ばしたいと言うので、いつかは融通されるかも的な感じの約束を交わす。

「お姉ちゃま、光の魔法で覚えたいのあるんですか？」

「うん、ライトヒールは二人持ってた方が安全だからね。麻痺と毒、一緒に貰う事もあるし」

「あゝ、確かにそうだな。万能薬なら一緒に全部消せるけど、魔法じゃ無理だもんな」

談話しながらのヒーリングも終わり、隣のトーマポールは適当にリングを与えて起動させ、サクッと倒す事に成功する一同。等級が違つと、強さも経験値も全く違つたり。

ここで美井奈がレベルアップ。レベル21になり、次の弓術スキルも見えて来た。

宝箱を開ける前に、やっぱり中ボスの部屋のチェック。パツと見は長髪の巨人に見えたが、よく観察すると腕が4本あり、2体の内の1体は脚が4本ある。

4つ腕4つ脚のケンタウロス巨人、完成するとどんな形や数になるのやら。

最後の2箇所も、美井奈の直感は鋭い冴えを見せた。半々の確立に一度はミミックを引いてしまったが、それはまあ愛嬌というものの。6回の選択の内、1発で当たりを引けたのが何と4度。素晴らしい命中率である。

宝箱からは氷の水晶玉と、腰袋というユニーク装備。矢束の装備欄に装着出来て、性能はポケット+2らしい。その装備欄がフリーなのは瑠璃だけなので、必然的に瑠璃のものに。

これにより、ルリルリのポケットは10にまで達した事に。ポケットの余裕が出来たため、水晶玉の連続使用など範囲攻撃も担えるキャラに成長したとも。

「これで何個開けた計算だ？ それにしても、美井奈の的中率は凄いな！」

「8個だね、今回は美井奈ちゃんのお陰で楽な展開かも」

「えっ、私の功績ですか？ それは……複雑な気分ですねえ」

そんな訳で中ボス部屋には、恐らく不完全体の阿修羅ケンタウロスが2体。見た目は右が剣と盾と両手武器のハンマーを装備している。左は片手斧の二刀流に弓矢を装備、見るからに攻撃力が高そうだ。

パーティは作戦会議で、美井奈のマラソン案と弾美と瑠璃で1体ずつ引き受け案のどちらかで紛糾するも。4脚モンスターは足が速いのが定説でもある。

追いつかれたら、攻撃力の高そうな中ボスに為すすべも無い可能性も。

「私の新魔法の《俊足付加》は出番なしですか？」

「うーん、魔法が切れたら怖いなあ。じゃあ折衷案で行くか。外におびき出して、1匹を瑠璃と美井奈で交代で抑える。手の空いてる方が俺とマラソン役の補助な」

「ちよつと複雑っばいですけど、お姉ちゃまの指示に従います。頑張りますよー！」

そうして貰えると、弾美も非常に助かる。今回の敵は非常に攻撃



力が高そうなので、よそ見して指示を出している暇などない感じ。ポケットの薬品も入れ替えて、武器をレイブレードに交換する。ステージ6は厳しいと聞いて、自前で鍛冶屋で修繕して貰ったのだ。

強化魔法を全て掛け終わり、美井奈の釣りでいよいよ中ボス戦スタート。遠隔持ちの敵は不味いので、ハンマー持ちを引きずり回す作戦なのだ。

ハズミンと一緒に来て来た弓矢持ちに殴り掛かり、ルリルリは様子見で距離を置いてサポート体制。いきなりの範囲攻撃は無かったが、それでも片手斧の二刀流と言うのはかなり強い。

弾美は早くも苦戦模様、パーティの中で一番防御力が高くてこれなのだ。それでも攻撃力では負けてはいない、レイブレードで順調に削り、瑠璃に回復を貰いつつ臨戦態勢の維持。

瑠璃のサポートに横槍を入れたのは、弾美が殴っていた弓矢持ちの中ボスだった。弓術による遠隔攻撃、しかもスキル技の使用で瑠璃のHPは途端に半減。一気にピンチへ。

一方の美井奈は《俊足付加》の魔法で移動速度アップ、順調にハンマー持ちから逃がっている。ぐるぐると部屋の前の空き地を回遊しつつ、魔法の持続時間を必死に計算。掛け直す時間が取れば、瑠璃の手を煩わす事も無いのだ。

ただ、やっぱり敵も脚が速い。なかなかアドバンテージが取れない美井奈は不安で一杯。

「わっ、わっ、ハズミちゃんっ、弓が飛んで来たっ！」

「こいつ複数攻撃使ってくる、瑠璃取り敢えずくっつけ！」

「えっ、えっ、お姉ちゃん、サポートは……？」

「何とか短期で終わらせるっ、魔法切れたら美井奈はこっちに敵を連れて来いっ！」

「りよ、了解です！」

不完全体だと思つて舐めていた訳ではないが、意外に強い中ボスに一同騒然。瑠璃はくっ付いて必殺の複合スキルを見舞つたが、まだまだ半分も削り切れていない。

ピンチは続くもので、いよいよ美井奈も俊足の魔法切れ、たちまち追いつかれて振るわれるハンマーのスキル技。悪い事にスタンしてしまい、追い討ちの剣技も全く避ける事が出来ない。

美井奈の悲鳴を聞きつけ、瑠璃が駆けつけようとするが厳しい距離。美井奈のHPが3割を切つた時に、奇跡は起きた。

覚えたての種族スキルの《雷精招来》は、キャラのHPが3割を切らないと発動しない。一旦条件をクリアすると、雷精が召喚されて呼び出した者を護る動きをするのだ。

殴りかかった中ボスは、雷精の効果で反撃の麻痺&スタン状態になった。ようやく追いついた瑠璃が回復魔法を飛ばすと、任務を果たし終えた雷精はフツと姿を消す。

続いて瑠璃は足止めの氷魔法。便利な魔法だが、何度も同じ敵に使っていると効果はどんどん薄くなる。ここぞという時に使用しないと、後で痛い目に合うのは自分なのだ。

「怖かったです、お姉ちゃまつ！」

「遅れてごめん、美井奈ちゃん！今度は私が抑えところか？」

心配無用と、美井奈は再びの俊足魔法を自分に掛ける。この魔法は便利だが、俊敏付加《と同様に他人に掛けるにはスキルが30以上にまで育てる必要があるのだ。

魔法が切れるまで1分と半。何とか行けそうな雰囲気。

「こつち後ちよつとで終わる！美井奈、頑張れつ！」

「了解です、隊長！」

美井奈のスキル技攻撃に、再び怒りをそちらに向けたハンマー持ちのケンタウロス。マラソンに気合いを入れて挑む美井奈を、地響きを立てて追い回す。

弓矢使いの中ボスの方は、レイブレードの削りに良く耐えていたと言ってもいい程。HPの量が多かったせいもあるが、最後は瑠璃の魔法攻撃により敢え無く撃沈。

お返しの最後の弓術スキル技は痛かったが、これで二人フリーになった。

ここまでくれば後は楽勝と思いきや。前衛で削る弾美と瑠璃に、別々に攻撃が見舞われる事態に冷や汗の連続。特にハンマーの一撃は、結構なダメージを文字通り叩き出す。

4本腕のケンタウロスの強烈な攻撃に、パーティは最後まで手こずりつつも。今度は後衛で削りと回復に頑張る美井奈が、結構な後押しとなってくれて。

何とか数分後には勝利を手にして、全員で喜びのハイタッチ。

「やばかったな……こいつが3匹とか出て来てたら危なかったかも」「私、種族スキル発動してなかったら死んでたかもです〜！」

「ごめんね美井奈ちゃん、サポート遅れて……でも、私がソコで殴り合い引き受けてても、多分死んでたかも？」

「私が役に立って何よりですっ！ お姉ちゃまが生きてて良かったですっ！」

互いに抱き合って、生きてた喜びを実感し合う瑠璃と美井奈。よく分からないノリだが、最近それが浸透しつつあって妙な気分。これも美井奈のパワーなのかと、ちよつと慄く弾美だった。

ケンタウロスの戦利品には優良武器がたくさん。弓と矢のセットに片手剣、ハンマーと片手斧はパーティには不要だが、剣術指南書も1冊あったし、防具ではマントが1つ出た。

ここに来てピンポイントで使えるような装備の補充に、分配も和気藹々。

「ドロップって、やっぱり運なのかな？ ボスやNMでも、結構出る装備の部位がパーティによって違ってるって聞くけど」

「あ、こういうイベント企画では、均等に装備を入手出来るようになってるかもだけと。ボスやNM辺りはランダム性もあって当然かも知れないなあ」

「何にしても、弓矢が補充出来て良かったですよ！ あつ、新しいスキル技覚ええました！」

指南書によってようやく3つ目のスキル《近距離ショット1》を覚えたミイナ。これは補正スキルで、セツトすればある程度の近距離からでも攻撃出来るようになる仕様である。

弓術の弱点を少しだけ補えるが、パーティ戦術に大幅な変更を与える程ではない。さらに弾美と瑠璃もレベルアップ。それぞれ武器スキルにポイントを振ったが、やはり大きな改善点はなし。

おめでとうを言い合った後、ヒーリングとポケットの補充をしてボスの間へ。

「大クラゲだ、麻痺とか毒があつたつけ、ハズミちゃん？」

「あんまり覚えてないな、範囲とかもあつたかも」

「柔らかそうですねえ、サクツと倒しましょう！」

一行は例の如く、まずは弾美の先制で殴り掛かる。大クラゲの触手が迎え撃ち、次いで瑠璃も前線に参加。二人のスキル技で初っ端から大ダメージを与える。

大クラゲは柔らかく、攻撃力も些細なもの。とても強そうに見えないが、殴るたびに体表を覆う電撃でこちらもダメージを喰らう。さらに、案の定特殊範囲技が炸裂。

いきなりクラゲが回転したかと思ったら、触手が鞭のように前衛に浴びせられる。

触手の連撃で、かなりのダメージと麻痺を受けてしまった弾美と瑠璃の前衛組。さらに小さなクラゲが、ポコポコと周囲に湧き始める。子供クラゲには攻撃力こそ無いものの、抱きつかれたら動けなくなり、さらに毒状態になる特殊能力があるらしい。

身をもってそれを知った瑠璃が、逐一報告をしてくれる。

「動けない、ハズミちゃん助けてっ！」

「お姉ちゃまつ、ちっちゃいの多過ぎて倒してもすぐ取り付かれちゃいますっ！」

「面倒くさいっ、水晶玉使えっ！」

「あっ、そうか」

瑠璃がポケットの水晶玉を使用、呆気なく散って行く子供クラゲ達。大クラゲにも少なからずダメージを与え、さらに美井奈の弓術のスキル技で一気に戦闘終了。

中ボス戦に比べたら割と呆気なく感じたが、小クラゲの仕掛けには肝を冷やした一行。範囲攻撃の手段が無かったら、全員小クラゲにくっ付き殺されていたかも知れない。

そう思うと、やっぱり怖い特殊技だった。

脱出用の魔方陣とその上に浮かぶ鍵が出現する中、ドロップの確認もそこそこに脱出する一行。前回は次のエリア攻略で時間が足りなくなったので、急いだ方が良いとの判断だ。エリア攻略時間は、それでも40分以上は掛かってしまっている。

足りるかと問われれば、ちょっと不安ではある。

「あっ、細剣もドロップしてる。あとは、出た装備はベルトくらい

「？」

「おつ、これで全員武器の交換が出来たなっ！」

何となくハイタッチで祝う弾美と瑠璃、それを見て美井奈も横から割り込んで来る。防具もそうだが、やっぱり武器が良い物と交換出来るのは、前衛としては嬉しいものだ。

そんな感じで、一行が装備出来る主な入手アイテム。

光の特級リング 光スキル+4、HP+15、攻撃距離+4  
%、防+4

ケンタの刀 攻撃力+13、知力+1《耐久11/11》

ケンタの弓 攻撃力+14、知力+1《耐久14/14》

剛毛のマント 攻撃力+3、防+5

クラゲのレイピア 攻撃力+11、器用度+1《耐久9/9》

\*

\*

小休憩を挟んで、いよいよ難関の右の扉前に集う一同。用意もばつちり、武器の交換もあつたし、みんな少しずつ強くなっている。気分的にもイケイケ状態である。

そんな時に鳴り響く電話は、タイミングが良いのか悪いのか。弾美は一旦席を外し、戻って来て口にした言葉は、実は二人にも関係あつたりして。

「なんか、今日は3家族で外食しようってさ。美井奈の母ちゃんが、こっちの両親に連絡とって、段取りをつけてくれたらしいぞ」

「あゝ、お昼に美井奈ちゃんが電話してたけど……」

「はいっ、連絡してみてもツケーなら、こっちに電話するって言うてました！ 車も出してくれるって言うてたけど、もう1台どうしまししょうか？」

「うちの親父か恭子さんかな、まあ大丈夫だろ？ 7時に迎えに来

るそうだから、これで気兼ねなくゲーム出来るな」

今日のスタート時間が4時半だったので、少し終了時間が夕食に被りそうだったのだが。美井奈がどうしても合同インの方が良いと言うので、強行したという経緯があったのだ。

弾美と瑠璃は、家の台所に夕食が遅くなるとのメモまで残していたのだが。美井奈の悪巧みと言うか計らいで、無駄……もとい気にしなくても良くなった模様である。

本人はしてやったりと凄く嬉しそうだが、そこまでやるかと弾美などは思ったり。

何はともあれ、気を取り直してのエリア攻略スタート。左の扉も大きなマップ変更は無かったので、こちらも恐らくパクリだろうとの妙な信頼関係など芽生えたりして。

果たして、最初は迷路っぽい地下牢風味のダンジョン。違いがあるとすれば、通路に少し水が貯まっているくらい。足首程度までの水位だが、演出のみのようで移動力の低下は見られない。

歩き出してみると、演出と言うより配置モンスターの理由付けという感じがして来た。行く手を阻む敵は、魚やワニ、クラゲや水蛇など、水棲モンスターばかりのようだ。

雑魚とは言え、侮れない特殊能力持ちが多く、一行は慎重に進む。

10分も歩けば、迷宮エリアもほぼ制覇出来てしまった。下の層との照らし合わせが時間短縮に効いているのだが、吸血鬼の棺桶のあった部屋に訪れたパーティは、今度は古井戸を見つけて騒然となる。

特に美井奈は、かなりお気に召さない様子である。

「い、井戸は駄目ですっ！何か出て来たら、私泣きますよっ!？」

「古井戸は、粗末にしたら祟るって言うしね」

「いや、ゲームの常識の範囲で物を言ってくれ、瑠璃。あと、ちびるなよ美井奈」

ここを一刻も早く立ち去ると言う事は、皆が賛同してくれた模様程なく迷路は終わり、湿地帯には樹木型のモンスターがうようよ。鳶で絡み付いてくる奴や、球根のようなタイプ、一番多いのは洞が顔の形に見える、お化けの木タイプ。

このタイプは結構木の実を落とすので、簡易ステータスアップやHPアップに役に立つ。ケチって死んでしまっただけは元も子もないので、30分程度の効果時間だけど積極的に使う事に。

「おっ、生命の木の実出たぞ。HP上がるから食っておけ、美井奈」  
「ボス戦前とかで無くても、使っちゃっていいんですか、隊長？」  
「また出るだろ、ケチって死んでも仕方ないぞ」

たまに木の上から落ちてくる虫や、木の洞から飛び出すハリネズミに驚かされつつ、やっと辿り着いた通称ボスの丘。出迎えたのは若木のお化け木、小さ過ぎて顔の位置が良く分からない。

ケリはあつという間について、一行はいつものルートで3本の通路から右を選択して進む。3度目の妖精の泉には、全員が期待に満ちた目で立ち並んでいた。

頭の中では、各々が取らぬタヌキの皮算用。

「さて、誰が何をトレードしようか？」

「呪いのブーツと、呪いのネックレスと……私、同化の終わったネックレス持ってるけど」

「レイブレードは鍛冶屋で直して貰ったし、今回はいいか。他に修理する物も無いしな」

そんな訳で、まずは美井奈が呪いのネックレスをトレード。呪い



は見事浄化され、サファイアの首飾りに変化した。続いて弾美が、呪いのブーツを待望の暗塊のブーツに変えて貰う。

ネックレスも暗塊シリーズだと思っていた弾美は、ちょっと拍子抜け。取り敢えずは2部位揃ったものの、残りの情報が無いので何ともいえない微妙な心情。

最後に瑠璃が、同化の終了した用済みネックレスを泉に投げ込む事に。他に候補が無いので、パーティは気楽に承諾してくれた選択肢である。まあ、前回の結果も知っている一同なのだが。

そんな訳で、やっぱり妖精がピヨツと出て来て申すには。

あなたが本当に欲しいのは、この使い過ぎて擦り切れたネックレス？ それとも、この銀で出来たネックレス？ もしかして、この金のネックレスかしら？ さっさとどれか選びなさいナ

「むうっ、ネックレスも暗塊シリーズかと思っただけと違うんだな。暗塊のブーツは俺が貰うけど、サファイアは誰が取る？ 結構性能いいぞ」

「わっ、腕力とSPが増えるんですか……アタッカーにはいいですねえ」

「……ハズミちゃん、これって引っ掛けかな？」

「んっ、何が？」

瑠璃のモニターを覗き込む弾美だが、相方が何を悩んでいるのかさっぱり分らない。美井奈も同じく、妖精の言葉を口に出して読むが、瑠璃が言う引っ掛けの場所を探し出す事叶わず。

瑠璃が指し示したのは『本当に欲しい』という部分。前はここが、落としたとか何とかだった筈。

「本当だもんっ。昔話とおんなじ文章たなぐって、私心の中で思ったから、覚えてるもんっ」

「……じゃあ、前と同じに擦り切れたネックレスを選んだら、それが戻って来るって事か？」

「……………ええっ、そんな意地悪あるんですかっ!？」

堪えきれなくなつて、弾美は爆笑。瑠璃の背中をバンバン叩いて、よく気付いたと絶賛の嵐。二人もつられて笑い出したが、どちらかと言えば呆れた系の笑いだつたとも。

弾美はなおも、この皮肉に満ちた引つ掛け言葉を思い返しては笑つていたが。瑠璃は大人しく金のネックレスを選択、MP付きのまあまあの性能を貰う事に成功。ついでに妖精、このガラクタいらないから返すと言って、擦り切れたネックレスの返品。

この無体振りに、弾美は再び大爆笑。

「何か凄いキャラに見えて来ました、この妖精」

「そうだねえ、もっと神秘的な存在であつて欲しかったような気が……………」

「あゝ、笑つたな。面白い奴だなあ、コイツ……………」

ここで得られた装備品を、皆で相談して装備の変更。弾美は暗塊のブーツ、瑠璃はサファイアのネックレスをそれぞれ貰う事に。美井奈は首装備の同化までは、我慢な感じ。

暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+10

サファイアのネックレス 腕力+3、SP+10%、防+5  
金のネックレス MP+8、防+3

一同、何となく名残惜しそうに泉のポイントを後にして。ボスの丘に再び戻ると、やっぱり若木は生長を遂げていた。まあ、それもちよつとだけ、人の背丈より大きい程度。

戦闘もさっぱりしたもので、なにやら木製の両手棍棒を落とした

だけの結末。出現した魔方陣を無視して、今度は真ん中の通路を当然のように進んでみる一行。

無視され続ける光の通路は、何だかちよっぴり寂しそう。

今回の扉前のガーディアンは、2体の虫人間だった。顔は蟻や蜂に似ているが、尻尾はサソリのモノの様。甲殻を纏った外殻は硬そうな上、大きな盾まで装備している。

盾の模様は、サソリの全身画。武器は湾曲したサーベル、殴られると痛そう。

「硬そうだし、強そうだし、毒持ってそうだな。範囲はなさそうだから、俺と瑠璃で1匹ずつな」

「了解、毒の解除お願いね、美井奈ちゃん」

「任せて下さい、お姉ちゃまっ！」

戦闘は案の定、敵の硬い装備に長引き模様。SPが貯まってるスキル技で、何とか一気に削って行っている。特に瑠璃の氷系の複合スキルは、敵のHPを面白いほど減少させる。

気付いたら美井奈の攻撃支援もあって、弾美よりはやく1匹倒し切っていたり。

「わっ、わっ、もうこっち倒しちゃった。そっち手伝うね！」

「スキル技が面白いほど効いてたな。こいつ魔法の方が効くタイプかも」

珍しいパターンに、逆に慌ててしまう瑠璃だったが。弾美の助言を買っての魔法攻撃に、一発で弱っていた2匹目も撃沈。ドロップは薬品数種と宝箱の鍵、当たりはサソリの大盾くらい。

中の宝箱からは、大金の1万ギルが出て来て、一同大喜び。とは言っても、パーティの台所事情に換算すると、レイブレードの修理

代の半分程度なのだが。

もう1つの箱からは、嬉しい金のメダルが1個。

「ハズミちゃんの持ち金が、これで3万ギル？ 私と美井奈ちゃん  
で7万あるから、全員でまた10万ギル超えたね、嬉しいっ」  
「まあ、強い敵に備えて、俺の金はレイブレードの修理代に充てる  
けどな」

「泉ポイント、3つ全ステージ使い切りしましたしねえ。地上でもあ  
るんですかね？」

あつたら良いなどは、全員の偽らざる思いと言つか願望なのだが。  
地上の話題は、今のところ聞き伝えて断片的なものでしかない為に、  
完全に情報不足である。

それはともかく、回避不能な3度目のボスとの邂逅。完全に巨大  
なお化け木に変化したそれは、何時ぞやの虫落しや爆弾実落しで、  
一同を混乱に陥れる。

とは言っても、一度体験した事のある戦法に、そうそう何度も引  
つ掛かる程お人好しでもなく。逃げ遅れた瑠璃が一度、爆弾に削ら  
れた程度で被害は微少に抑えられた。

ドロップは土の術書と力の果实程度だが、経験値の取得で美井奈  
がレベルアップ。弾美が果实を貰って、腕力を+1する。土の術書  
は取り敢えずのストック。

溜め込んでいる内に、土の術書は結構な枚数になって来た。

「土の術書、使わないでいいの？ ハズミちゃん、魔法覚えたんで  
しょ？」

「ん、何冊くらいある？」

物々交換で9冊まで増えていると瑠璃が答えると、弾美は複雑な

表情。暗塊のブーツを装備したため、土のスキルが10に達して思わず覚えた新魔法を瑠璃は示しているのだが。

覚えたのは《クラック》という、地上の敵にのみ有効な中距離魔法。ダメージこそ少ないのだが、移動を一瞬だが止められる能力がある。MPはあまり使わないが、再詠唱まで少し時間が掛かるのが難点か。

元々魔法に頼る戦い方ではないハズミンに、強化系以外の魔法はあまり必要ない。

「暗塊装備をもう1個取れて、スキルが15になったら5冊使おうかな。取り敢えず交換材料として、引き続き取っといってくれ、瑠璃」  
「わかった。そう言えば、氷の術書も結構あるけど……私もそうしようかな」

「魔法つて、意外と使い所難しいですしねえ」

「だよな、前もって掛けられる補助系とか強化系が、実は一番使いやすいんだよな」

とは言っても、さっきの虫人間のような防御のやたらと硬い敵など用に、攻撃魔法も必要だったりするのだが。魔法論争を熱く語り合いながら、一行は3つ目の通路の探索に向かう。

3度目ですっかり馴染みの、部屋の敵を全滅させての宝箱入手の流れ。蛮族たちを蹴散らして出て来た宝箱からの戦利品に、場は異様な盛り上がりを見せる。

それもその筈、珍しい範囲攻撃用の矢束を獲得出来たのだ。

炸裂弾という、遠隔の弓術で打ち出される矢束の一種で、矢の先に爆弾が仕込まれている物だ。4つある部屋の2つから出て来て、合計20本。もう2つからは風と雷の水晶玉が出て来て、まるで範囲攻撃手段を確立して下さいと言わんばかり。

前の層の例もあるので、あながち違うとも言い切れない。弾美は

いざという時の為に、美井奈に炸裂弾の使い方方を伝授する。とは言っても、矢束を交換して打ち出すだけなのだが。

「勿体無いから、敵が複数いる時以外は使わないよ、美井奈。水晶玉ほど威力は高くないけど、普通に連続射撃の攻撃が出来るからな」  
「なる程、矢束の交換が面倒ですけど、複数の敵相手の攻撃手段が出来て、心強いですね」

20本では、案外すぐに使い切ってしまうかもだが。最後の大部屋には、水が張り巡らされたフィールドが半分以上、乾いた大地の端っこに鍵付き宝箱が2個程見えた。

敵は大タコが数体、それから中ボスっぽいサメとクラゲのペア。ただし、サメはハンマーシャークと呼ばれるタイプで、先端の部分が斧のような形をしている。クラゲは何故か、半透明な身体が後付けされており、ちょっと異星人のよう。

ヒーリングの後、雑魚の大タコから釣り開始。リンクしたらサメを弾美が、クラゲを瑠璃が受け持とうと話し合っていたのだが。幸いそんな事態も起こらずに、大人しく残ってくれた中ボス2匹。

殴り掛かろうと近づくパーティに気付いたクラゲ人間は、バリバリと放電を開始する。ハンマーシャークの方は、何と魚雷を発射、ハズミンに少なくないダメージを与える。

その攻撃手段に、思わず感動の絶叫をする弾美だったり。

「何だっ、今の攻撃……小判ザメ撃ち出して来やがった、すげえコイツッ！」

「……文字通りの魚雷だね。それよりクラゲ人間、雷属性だ〜嫌だなあ」

「何なら相手を交代するか？ サメはちょっと、殴りが痛そうだけど」

「私がマラソンしましょうか、お姉ちゃま？」

ところが部屋の中の半分は移動力低下の水地帯、美井奈の代案は  
敢え無くボツに。1対1の状態で、仕方なく殴りあうハズミンとル  
リルリだったが。特殊能力の嫌らしさに結構な苦戦。

ハンマーシャークの呑み込み技は何とか潰せるものの、ヘッドバ  
ットや尾ヒレ攻撃、更には魚雷攻撃と短時間で次々披露してくれる  
芸達者な中ボス。瑠璃の方も、麻痺や放電、触手のムチムチ攻撃に、  
HPは早くもピンチな状況に。

美井奈との共闘で、敵の生命力も結構削ってはいるが、先にどち  
らが倒れるかと問われれば瑠璃の方であろう。そんな訳で、弾美の  
アドバイスで、タゲチェンジ+凍らせ+遠隔でホイという作戦を遂  
行する事に。

まずは美井奈が渾身の攻撃。魔法とスキル技の連撃で、クラゲ人  
間のタゲを強引に取る。ドスドスと敵が怒って美井奈に近付こうと  
したら、瑠璃が《魔女の足止め》を使用。

美井奈のSPの回復を待つて、二人一斉に遠距離の弓術と水属性  
の魔法攻撃。初めてやったにしては、タイミングばっちり、後半は  
無傷での勝利に女性陣から歓声とハイタッチの気配。

……こっちはまだ戦闘中なのだがと、弾美はちよっと寂しげだっ  
たり。

とにかくも中ボスを倒し切ったパーティは、鍵と諸々の戦利品を  
ゲット。両手斧や魚の呼び水というトリガーと、宝箱からは炸裂弾  
が2セット。

これで合計40本になったと、美井奈が報告して来る。

「いっぱい揃いましたけど、使いどころ難しいですねえ」

「矢束の装備の交換は、サブウィンドウから簡単に出来るだろ、文

句言つな美井奈。取り敢えず、ここのボスが虫を落とす時が使いどころかなあ？」

「水晶玉も、結構いっぱい貯まって来たよ？ 4戦目はともかく、5戦目は使い惜しみせず戦おう」

そんな打ち合わせ後に迎えた第4戦。遠目からも見える大樹お化けを前に、パーティはいそいそと戦闘準備。丘に踏み入ると、毎度お馴染みの強制動画が挿入される。丘の頂上に育った大樹という感じでスタートした動画は、次第にもの凄い振動と共に動き出す。

丘の頂上がめくれ上がったのは、大樹が動き出したからではない。何と地面に埋もれていた大亀が、その姿を現したからだ。丘の頂上はとうとう吹き飛んだように削れてしまい、背中の甲羅に大樹を生やした大亀がこちらへと襲い掛かる。

どよめく一同、まさかこんな展開になるとは思わなかった。いきなりの大亀のブレスで、先手を取られての戦闘スタート。弾美が上手い具合に動いて、瑠璃と美井奈を範囲から外す。

殴り掛かってみると、案の定の大亀の硬さ。弾美の連続スキル技にも、左程痛がった様子を見せない。瑠璃が横に張り付くと、美井奈が二人の真ん中後ろに陣取る。

こちら辺の流れは計画通り。前方範囲のある敵用の戦術は何度も経験済み。

ところがやつぱり来たのは、上に乗っている大樹モンスターの特殊技、その名も虫落し攻撃。一気に振りまかれる雑魚モンスターの出現に、一同思わず悲鳴を上げる。

その数6匹、結構バカにならない多さである。

「美井奈、ちよつと範囲矢束の威力を確かめておけよ」

「了解です、隊長！」



初の炸裂弾による攻撃は、数匹の雑魚と本体を巻き込んだ。その威力は、ボスにはともかく雑魚には効果絶大の様子。見れば一気に、3割以上のHPを喰い尽くしている。

続いている2撃目では、タゲを取った雑魚がかなり接近していた。悲鳴を上げつつ攻撃する美井奈に、瑠璃が助け舟を出す。水の水晶玉の使用で、雑魚の半分以上を一掃。

残りは殴って昇天させ、一息つきつつ再び雑魚が湧かないことを祈る一行。弾美の活躍で、ボスのHPは半分程度にまで減っている。大亀と大樹は部位別モンスターかと思いきや、どうやらそこまで凶悪では無い様子である。

追い討ちをかけるように、美井奈と瑠璃の魔法攻撃が炸裂する。弾美も爆弾弾実攻撃を華麗に避けつつ、パーティで最後の追い込みの指示を飛ばす。

その結果、割と余裕を持ちつつの勝利となった。

「わゝ、割と余裕の勝利でしたね。範囲攻撃って強いですねえ！」  
「そうだな、井戸でも恐らく使って出された武器だから、使う心の準備しとけよ、美井奈」

「了解です……やっぱり行かなきゃ駄目？」

「そんなに怖くないと……思うけど」

瑠璃のフォローも積極的な行動の原動力とはなり得ず。それでも時間は、前回よりはまだ多めに残っている。休憩とポケット整理のあと、弾美の号令でエリアを後戻りし始める一同。

丁度エリアインして1時間が経過したくらいに、古井戸の部屋に辿り着けた。弾美は武器をレイブレードに交換、大物の予感に身を引き締めて部屋に入る。

果たして、待ち構えていたようなNMの気配が。

強制動画は、やっぱりこちらの恐怖を煽る様な作りだった。薄暗い部屋の不気味な古井戸がクローズアップされて行き、不気味な音と共に中から何か飛び出て来る。

驚くハズミン達キャラのアップ。その映像が引かれて行くと……  
一同の頭上には、クモの巣と巨大なクモが。

「うわっ、気持ち悪っ！ お化けじゃなくてクモかよっ！」

「ハズミちゃんは、クモ嫌いだもんね」

「そうなんですかつ？ わっ、真上にいますよっ！？」

呑気に挿入映像を觀賞していたら、何と真上からの不意打ち攻撃。井戸ばかりに注意を払っていたパーティは、思い切り大クモの一撃を受けて大わらわ。

どうやら、頭上の大クモがNMの本体のようだ。弾美が反撃しようとするが、こちらの剣は届かず、思わず悪態をついてしまう。しかも古井戸から湧いたたくさんの子グモが、わらわらと一行に迫って来ている。

範囲行けとの弾美の言葉に、美井奈は躊躇せずに炸裂弾をお見舞いする。瑠璃も遅れず、たくさんポケットに忍ばせた水晶玉を敵の中心に投げ込む。

突然の不意打ちに怯んだパーティだったが、容赦ない範囲攻撃での反撃で分かった事が2つ。1つは、子クモのHPはたいした事は無いと言う事。もう1つは、天井に貼られたクモの巣にもHPが存在すると言う事。

美井奈と瑠璃の攻撃で、余計な障害物は全て消滅した。その結果、天井から落ちてきた大クモの姿が、ようやく皆の前に晒される。クモの身体に人間の女性の上半体がくっついており、その女性の顔はやっぱりクモに似せてある。

はつきり言って、弾美は大のクモ嫌い。ちよっと拒絶反応で、画

面から顔を反らしてみる。

その隙を突かれた訳ではないが、いきなり目の前に現れるクモの巣。それを伝って再び天井に避難した大クモは、今度は魔法で攻撃を繰り返す。床を湿らせていた水が生命を得たかのように渦巻いたかと思つたら、槍となつて一同に襲い掛かつて来た。

強烈な魔法に、パーティー同4割近いダメージを受ける。場に湧き上がる、悲鳴と怒声。

「わっ、油断してたっ！ クモの巣狙つて、本体を叩き落してくれ。俺が殴れないっ！」

「魔法使うよ、多分相手も水属性みたい」

「増援来ない内にやっちゃいましょう！ 私も魔法使いますっ！」

矢弾の交換に時間を使いたくない美井奈も、瑠璃と揃つて魔法攻撃。瑠璃の《ウォータスピア》で再び地上に落とされた水クモは、美井奈の《ホーリー》に焼かれてさらにダメージを追う。

ようやくハズミンの活躍の場が巡つて来た。近付いての連続スキル技攻撃に、さらに《シャドータッチ》で失つたHPを回復する。後ろで女性陣も、間隙を縫つてお互いを回復している。さらに瑠璃が接近戦に参加しての《アイススラッシュ》で、追い討ちをかけて行く。

ようやくの押せ押せムードに水を差す反撃は、やっぱりクモの巣だった。

今度はネットのようにキャラに覆い被さつて来て、ハズミンとルリルリは壁に強制貼り付けの行動不能状態。前衛を封じてしまうと、水クモはゆうゆうと避難用のクモの巣を張り巡らせ始める。

そうはさせじと、美井奈の炸裂弾が再び炸裂する。その範囲攻撃に、前衛を封じていたクモの糸は焼き切れたが、本体は部屋の奥の

天井に既に避難済み。

そこから放たれる、再度の水属性の魔法。パーティ全員のHPは半減、さらに追い討ちの子グモの発生。接近戦を挑むため、古井戸に近付き過ぎていた弾美と瑠璃。

避ける暇もなく、子グモの群れにたかられる結果に。

毒と硬直状態はまだしも、自分のキャラがクモに押し掛かられている映像が余程ショックだったのだろう。その姿を目にした弾美は本気で悲鳴を上げてしまう。つられて美井奈も怖くなったのだろうか、泣きそうな声を出しながら遠隔で攻撃。

標準も目茶苦茶、半泣き状態の美井奈は、目に止まる敵に向け炸裂弾を放って行く。結果的に、2度目の瑠璃の水晶玉の使用が、パーティの生死を分ける事となった。

天井から3度目の魔法を放とうとしていた水クモは、ぽとりと地上に落とされ詠唱中断。これが通っていたら、毒状態の弾美と瑠璃は恐らく死んでいただろう。

容赦のないレイブレードの斬撃は、水晶玉のダメージも喰らっていた水クモをかなり追い込んで行く。背後からの回復と毒消しの魔法が飛んで来るが、弾美はもはや一刻も早く敵を倒す事しか頭にな

い。  
再度の連続スキル技の使用と、女性陣の魔法攻撃で、手強かったクモ部屋の敵は全て沈黙。漏れる安堵のため息と、弾美の鳥肌のたつた肌をさする音。

興奮状態から抜けた弾美は、100メートルを全力疾走した後みたいに息も荒かったり。

「……酷いな……井戸と来たら、普通はお化けだろうに」  
「怖がり過ぎだよ、ハズミちゃん……」

ともかく、色んな意味での危機は去って、ホッと一息のパーティの面々。戦利品にはお待ち兼ねの呪いの兜に水の宝珠、カメレオンジェルやクモの巣のマント、水の水晶玉など。

呪いの兜は弾美が、水の宝珠は瑠璃が、クモの巣のマントは美井奈が貰う事に。

「何か出る装備が偏ってる気がしますねえ、今日はマントと首装備が多いです」

「あゝ、そうだねえ。まあ、泉のトレードはこっちの都合な感じもあるけど」

「確かにそうかもですねえ。まあ、強くなるなら文句は言いませんけど」

確かに文句を言う筋合いはない。ヒーリング後、最後の戦場に向かいながらドロップ談話をしている女性陣。弾美は何か立ち直るうと、呼吸で気合いを入れ直している所。

瑠璃がちょっと心配そうに、小首を傾げて弾実を窺う。

既にこの時点で全員が1つずつレベルアップ。スキル技こそ増えてはいないが、水の宝珠効果でルリルリが新魔法の《ウォーターミラー》を取得した。掛けた相手に水の反射鏡を張り巡らせ、受ける魔法攻撃のダメージを軽減してくれるのだ。

運が良ければ魔法を反射したりも可能だが、スキルの低い内はそう上手くは行かない模様。

時間がないという事で、強化魔法を掛け終えた一行は、情緒の欠片もなく最終バトルに突入。弾美の突破から敵の行動を窺いつつ、それぞれのスキル技で敵のHPを削って行く。

大亀と大樹のコンビは、今回は何と別々にHPを持つ部位モンスターへと変貌を遂げていた。厄介なのは足したHPが前回の二倍な

上、特殊技も別々に発動させて来る事。

倒す時間は、当然な事に単純計算で倍近く掛かってしまう。つまりは、こちらの被害もそれだけ増えるという事だ。洒落にならない敵の仕様に、パーティも悲壮な覚悟を決める。

薬品を惜しげもなく使い、範囲攻撃手段も大盤振る舞いで猛攻を耐えて行く構え。

長引くボス戦だが、魔法攻撃を有効に使った事もあって。ようやく大亀が完全沈黙、その代償と言う訳では無いが、2時間縛りが発動してしまったようだ。

悲鳴を上げつつ、今度は厄介な大樹に取り付くパーティ。今まで大亀のせいで、剣先が届かなくて一方的に特殊技を浴びていたのだ。その分、恨みも相当溜まってはいるのだが。

弾美はレイブレードに加えて、さらに炎の神酒も使用。最後の追い込みに目も真剣だ。幸い、先程までの範囲攻撃のダメージで、大樹のHPバーも3割がた減っている。特殊技の虫落しも、今のところたった2度きり、その度に瑠璃が水晶玉を使っている。

お蔭で、手持ちの水晶玉もあと僅かだったりするのは仕方が無い。

「お兄さん、そう言えば炸裂弾でスキル技使ったらどうなるんでしょうっ？」

「むっ、どうなるんだろうな？ 次に虫が落ちたら試してみろっ！」

「了解です、隊長！」

大亀戦で、既にポケットのポジションを使い切ってしまった弾美は、回復は女性陣に頼るしか無い。神水の使用で、何とか2時間縛りの衰弱は逃れているが、大樹の鞭のようにしなる枝攻撃は避け難い事この上ないのだ。

ハズミンのHPは、半分のラインを行ったり来たり。その分、どうしてもルリルリも攻撃に集中出来ないでいる。そんな感じの、不

味いこう着状態が場を支配している。

そんな中、再度の大樹の虫落しが炸裂。今度の悲鳴は弾美の音が一番大きかったり。それでも美井奈が、待ち構えての《貫通撃》を炸裂弾でお見舞いすると。

何と、落ちて来た雑魚は一瞬にして蒸発。一瞬だが大樹のタゲまで取ってしまい、本人は大わらわで逃げ出す始末。その隙に弾美はポケットの交換を、瑠璃も慌てながらそれに従う。

速足の魔法など掛ける暇も無かった美井奈は、本気の悲鳴を上げながら丘の周りを逃げて行く。大助かりの弾美と瑠璃は、連戦形式のボス戦に一息つく感じである。

思わず、身体の凝りを解して身体のリラックスを促したり。

「はっ、はやく助けてっ！ 隊長っ、何リラックスしてるんですかっ！」

「美井奈も強くなったなあ……よしっ、あと半分削り切るぞっ！」

「ほいほい、エリクサーでMPも回復したし、魔法から行くよ」

言葉通りの《魔女の囁き》からの《ウォータスピア》は、水スキルの+10上昇の効果もあって、結構なダメージを与えて大樹のタゲを取り戻す。近付いて来たボスに、今度は弾美の連続スキル技、更には瑠璃の複合スキル。

ターゲットは目まぐるしく移動するが、恐ろしい程の終盤の猛攻に、エリアボスはたじたじ。最後は美井奈の遠隔スキル技で、長かったボス戦によやくの終幕が訪れた。

「やった、勝てた」でも、部位モンスターはやっぱり苦労するねえ」

「ちよつと、最後に出すのは卑怯だよな。明らかに時間足りなくなるっのー！」

「そうですね、でも戦利品は多いみたいです！」

勝利のハイタッチもそこそこに、ダメージ状態を解除するために早々のエリア脱出。今日の攻略はこれにて終わりの弾美の言葉に、ようやくの脱力ムードが訪れる。

ラスボスのドロップは確かに多く、装備だけでも盾やベルト、両手棍に首飾りと4種類。更には土の水晶玉に果実が数種類、薬品類に金のメダルに木の呼び水というトリガーなどなど。

取り敢えずの装備品の分配を済ませ、一同はお気楽ムード。

主なパーティ分配装備の性能はこんな感じとなっている。使う当ての無い、亀のベルトや金のネックレスは、予備として瑠璃の保有という事に。

クモの巢のマント HP + 7、MP + 7、防 + 7

サソリ模様の大盾 耐毒効果、防 + 7 ≪耐久12 / 12≫

大亀の大盾 耐水魔法効果、防 + 10 ≪耐久15 / 15≫

鬼胡桃のペンダント HP + 8、体力 + 2、防 + 6

大樹の長杖 攻撃力 + 11、知力 + 3、MP + 20 ≪耐久1

2 / 12≫

\*

\*

階下では、6時を過ぎた辺りから少し賑やかな雰囲気漂って来ていたのだが。一度部屋の扉を開けて、瑠璃の母親が覗いていたのを弾美と瑠璃は気付いていた。

美井奈はゲームに夢中で気付かなかった様子、一番扉に近い位置に座っていたのだが。

完全にログアウトを終えて、三人が階下に下りて行くと。出掛ける支度の両親が2家族と半分、揃ってテーブルで談話中。7時との



話だったが、それより前にすっかり打ち解けあっている模様。

美井奈の家庭は母親だけの参加のようで、母親の姿を見て美井奈が思わず抱きつき攻撃。それを見た立花家と津嶋家の面々、子供の無邪気さにあてられ顔がメロメロ。

親戚に生まれた赤ん坊を見に行った時の対応みたいだと、瑠璃は美井奈の恐ろしさを改めて実感。

「瑠璃、もうちょっと洒落た格好に着替えてらっしゃい？ 運転は私がするけど、子供達は橋本さんの車に乗せて貰う事になったから」「連休中にどこにも連れて行ってあげれなかったから、外食のお誘いは丁度良かったわねえ」

「バイキング形式のお店で良かったかしら？ うちの子供が肩の凝る所を嫌うものですから」

3家族揃えばやたらと騒がしいお喋りっ振りだが、喋っているのは10割が奥方ばかり。男性陣は蚊帳の外、弾美も大人しく外出用の服装に着替えて来る事に。

車に乗って、ようやく母親達のお喋りから解放されたものの。今度は美井奈が皆を巻き込んでのハイな談話大会。今日の冒険の結末を、1から10まで母親に報告している。

それを楽しそうに聞いている母親も、割とハイレベルなゲーマーなのかも知れない。

15分後、美井奈の母親の先導で、2台の車はレストランの駐車場に滑り込む。半地下が駐車場になっていて、その上が割と大きめのレストランになっている模様。

入ってみると、お客の入りはまあまあな感じ。割と値段が張る上にお酒の類いは全く置いていないので、変な客層で無いのが有り難い。律子さんと恭子さんも気に入った様子、さっそく子供達を引き連れてお皿に料理を盛って行く。

最初の数十分こそ、3家族全員での食事会だったのだが。お腹がふくれて来る順番で、デザートや飲み物を手に小さなグループに分かれて行く。最初に戦線を離脱したのは、母親三人グループ。お茶を出してくれるカウンター席に陣取り、時々笑い声を交えての談話会。

父親グループも、次いで逆の静かなカウンター席に移動。二人ともお酒もタバコも嗜まないの、コーヒー片手に何やら静かに話し合っている模様。

「美井奈、バイキングって名前、何から取ったか知ってるか？」

「ん、海賊？ 獲物をぶん盗るぞみたいな？」

「残念、北欧の方にそういう食事形式があつて、そこから取ったらしいね」

ほ、という顔で瑠璃を熱くみる美井奈。三人の食欲は旺盛で、テーブルの上にはまだお肉や主食の乗ったお皿がてんこ盛り。ほとんどは弾美が食べているのだが、女性陣も、何となく釣られて口に運んでしまう。

それでもしばらくすると、食事のペースも落ちて来て。デザートか食後のコーヒーへと移行する子供組。デザートも捨て難いと申し立てる美井奈に瑠璃が付いて行き、弾美はコーヒーを選択。

完全に、主食でお腹がパンパンな弾美。もうコーヒーくらいしか入らない。

「弾美、食事は終わったのかい？」

「あ、うん。結構旨かったよ。中華のコーナーとか、全部制覇したいくらいだった」

「そりゃ良かった。……ちょっとお父さん達と話さないかい？」

意外な申し出に、弾美はちょっと嫌な予感。父親は普段から仕事人間で、趣味と言うものをほとんど持たない程。家においても、共通の会話というのが存在せず、かと言って弾美の成績についてとやかく言うような性格でもない。

弾美が訝しがるのも当然だが、振られた話題は『ファンタジースカイ』の期間限定イベントの話題のよう。しかも、進行具合はどうだとの質問に、弾美は完全に虚を突かれる。

「そりゃ、まあ普通かな。もうすぐ地上エリア……って言っても分らないだろうけど。美井奈ともゲームで知り合えたんだし、悪い事じゃないだろ？」

父親の隣の席に座り込みながら、ちょっとけん制気味に話題を返す。今日も7時近くまで、部屋に小学生を連れ込んでゲームをしていたのだ。確かに体裁は悪いかも知れないが、本人達は健全に楽しんでるつもり。

ところが弾美の父親は、笑いながら息子の思考を読み取ったように言葉を返して来た。

「ああ、否定したり勘繰ったり、ましてや止めさせるつもりは全く無いんだよ。弾美が楽しんでるなら、それでいい。学校以外の場で友達を増やしたり、勉強やスポーツと同じ程度にのめり込むのも文句は言わない。ただ、そうだな……」

「つまりだね、ちょっとイベント参加者の1プレイヤーとしての意見を、我々は訊きたい訳なんだ」

瑠璃の父親の助け舟に、弾美の父親も深く頷く。瑠璃の父親は恭子さんという強烈な人格の前に、弾美の父親以上に影が薄くて謎な人物だったのだが。弾美にしてみれば、瑠璃の父親と言う格付けで

しか無いのも当然かも知れない。  
趣味や娯楽に興味があるのかさえ、判然としない人物である。

「つまりだな……もしイベントのご褒美の中に、ある企画のスタッフの一員になる権利が貰えるとしたら、プレーヤーとしてはどう思うかな？」

「ある企画って？」

「郊外のアウトレットモールの、発案部門スタッフ」

素できっぱり返され、弾美は言葉を失う。何でこんな話になったのだろう？ 郊外のアウトレットモールの建設計画は3年も前から噂されており、今年ようやく土地の買収が終わったという話だ。

今はその土地周辺の道路整備が始まっており、付近は工事関係の車両やら何やらで結構賑やからしい。大井蒼空町の付近には無かった巨大ショッピングモール建設の話は、結構あちこちで話題になっている。

父親の研究グループが、何故に建設関係や街整備にまで手を広げているのかも謎。それとも今の質問は、あくまで人づての調査依頼なのだろうか？

「ええと……もし学生が1位とかになってその権利を取得したら、一体どうなるの？」

「ん、完全なスタッフとして、企業に入って貰う訳ではなく、あくまでアイデアを出す権利というのかな？ 仮にそのアイデアが通ったら、金銭的な見返りは得られる訳だけど」

「君の歳位の学生には生臭い話だとは思うが、例えば建物の外観に描く絵とか、そんなレベルでもいいんだよ。つまり、アイデアと言ってもピンキリな訳で……」

「いや、そもそも何でそんな話になる訳？ 父さん達の研究って、そもそもゲームの分野とは全く関係ない……よね？」

途端に気まずい沈黙。まさか、イベントのあの意地の悪い仕掛けの数々を、実は身内が編み出したのかと、弾美は冷や汗モノ。だが父親達が、ゲームの開発関係に携わる事はまずあり得ないのも、弾美は聞いて知っている。

そこら辺を恐る恐る訊ねると、さすがに完全否定が返って来た。

「もちろん、我々の研究チームはゲームの分野とは畑違いだよ。しかし、大井蒼空町の架空世界、つまりは弾美達のプレイしているネットゲームだが。あれは完全なテストプレイで、わが社の研究チームは毎日膨大なデータを貰っているのは事実だ」

「……これ以上話すと、引き返せなくなるかな。つまり、これを知るとゲームする事自体に支障が出る程度の、重い裏事情なんだ。故に、我々は秘密結社並みの情報漏えいの禁止を約束させられている。例え身内であろうとね」

「秘密結社って、俗に言うフリーメーソンとか？ 瑠璃の貸してくれた小説に、そんなのがあったけど……」

瑠璃の父親はにやりと笑い、少し自嘲的に鼻を指でこすって見せる。その表情は、弾美に瑠璃の兄を思い出させ、ちよっとだけノスタルジックな想いが蘇った。瑠璃の兄には、弾美は子供の頃によく遊んで貰ったのだ。

弾美にとつて、世界で一番好きな同姓かも知れない。

「会員数不定の友愛団という点では一緒かな？ 我々の活動は、いや仕事は要約すると人知れず住みやすい街を作る事だから」

「そのために、郊外にアウトレットモールを造るのにも、膨大な計画パターンやシミュレーションを何度も繰り返すのさ。集客の程度で、町内の店舗にどのような影響が出るかとか、集客がいくら伸び悩むパターンまで考え出すときりが無いがね」

「へえ……まあ、イベントのご褒美の与太話は置いて。ゲームのデータなんて、一体何に使うのさ？俺もそのフリーメーソンに入るから教えてよ」

二人とも、真面目に振った話を与太話と一蹴されて、少し傷ついた顔を見せたものの。やがて弾美の父親がため息をついて、顎を扱きながらおもむろに語り出した。

その表情は全くの真剣で、研究データを淡々と読み進むような飾りの無い口調である。

「ゲームと言うのは、人の色々な側面を露出してくれる、見ようによつては便利な媒体だ。街限定のネットゲームから、我々が得る情報は大きく分けて3つだ。3つしか無いと言っているのではなく、研究のテーマが今の所3つあると言つ事だが」

「そう、1つはネットワークの構築の調査。例えば我々社会人は毎日会社に出掛け、昼食を外で食べ、ある程度の顔見知りでない人数との接触がある訳だが。主婦や学生など、ほぼ毎日同じ顔触れとしか会わない人種に、ネットゲームはどういった影響を与えるのか？」

良い悪いの程度を含めてね、と瑠璃の父親は締めくくった。話を次がれた弾美の父親は、息子の顔を推し量る様に、さり気なく弾実を窺っている。

なおも言葉を続けたのは、毒を喰らわば皿までの精神か。

「非行やいじめや引き籠もり、いわゆる現代病への効果の程も、調査には含まれている。他県、他地域との比較になるが、ネットゲームをしている者とそうでない者の比較ももちろんする」

「最後は実際にデータを使う事も可能な、性格分析……と言つのかな？ プレーヤーの言動や選択から、性格のカテゴリー分けを行うのさ。飽きっぽい者、乱暴な者、機知に富む者、上手にリーダーシ

ツプを取れる者……光や闇の種族を選ぶ者の6割以上が、ギルドマスターに就いている事実を知っているかね？」

驚き顔も定着してしまった弾美は、ただ緩慢に首を横に振るだけだが、言われてみれば自分も闇の種族でギルドマスター。知り合いのギルドのマスターにも、思い出せば光や闇の種族が多い気がする。もっとも、と瑠璃の父親は言葉を重ねる。これはその地域の風俗や学習経験で塗り固められた、曖昧な特別視による選択に過ぎないと。水の神を祭る地域で選択が為されるならば、水を特別視するデータが間違いなく得られるだろう。

「さて、これは本当に口に出すのは不味いんだが……」

二人の父親は顔を見合わせ、しばし無言。弾美は手の平の中で完全に醒めてしまったコーヒーに気付いて、それをカウンターの奥へと押しやった。

それでも自分が長い事携わって来た、ゲームの裏事情なら訊いてみたい気がする。薄暗いセットのカウンター席から、弾美は頑として動こうとせずに続きを父親に促した。

弾美の父親は声量をもうトーン落とし、周囲に気を配る素振り。

「そうやって取られた性格のデータは、実は大井蒼空町の企業の入社試験にも影響を与える。考えてみたまえ、たった一度のペーパー試験や面接で、その人物の深奥まで見通せる訳が無いだろう？ 企業が欲するのは、途中で簡単に退社する事がなく、機転の効いた頭脳の持ち主。または、リーダーシップを持って場をまとめる性格の持ち主なのさ」

「幸い、地元の大学生のプレイ人口は5割を超える勢いでね。データ取りは順調と言って良い。そして、今年の新入社員のデータでは、満足な数値を得られている」

むろん、性格の良さのみを考慮する訳ではなく、多少姑息な手を使っても利益を生むプレーヤーも、企業にとっては良質とみなされる事もある。上澄み理論と言って、どんな集団にも必ず優れた者と落ちこぼれは生まれてしまうのだ。

それを上手にコントロールするのは、企業にとっても至難の業だ。同じ工場から同じ過程で生み出された家電にも、最良品と欠陥品は低い数値ではあるが存在する。

だが、常に良品を自社に迎え入れたいと言う願望は、どこの企業でも同じように存在するのだ。その手助けのデータ提出も、自分達の研究チームの課題なのだと言う。

上澄み理論の考えで言うと、街作りにもそれは当て嵌まり、良質な人員を厳選して入居させて作ったこの街でも、やはり問題を起こす人々は居たようだ。

完璧な街作りと言うのは、自分達の研究チームの悲願でもあるが、それを行うには膨大な資料や過去のデータ、ネットゲームのコミュニケーションからの情報など、まだまだ様々な研究が必要らしいとの事だった。

「昔の人の遣り方と言うのは、実に参考になるんだがね。人類は退化してるんじゃないかと、時々思うよ。香港ではビルを建てる際には昔から風水を参考にし、京の都の街並みなど実に合理的だ。現代の都市作りはヒートアイランド現象は言うに及ばず、流通や住む人間の事などまるで念頭に置いてない、稚拙なアイデアとエゴの塊だよ」

「我々は大井蒼空町の駅前で自動車事故が起こったら、街の道路の作りに欠陥があったのでは無いかと、何通りも分析を行う。小学校の給食で食中毒が起こったら、流通や生産過程でのチェックで原因の洗い出しを欠かさない。エゴとは無関係だね。街中にやたらと高



いビルを乱立して、一体何になる？ 物質とはいずれ地に還るものなのだよ」

いつに無く饒舌な二人の父親のトークに、弾美は酔った様に頭の芯が麻痺していた。父親達の携わる研究の全貌を一気に聞いて、頭の中で全く消化し切れていない。

「大井蒼空町のような街ぐるみでのテストケースは珍しいパターンだし、途方も無い金が必要になる。これからはネットゲームでの人間観察が主流になる気がするね。何しろ、街を動かす主役は常に人間なのだから」

「そういう事だね。人間の引き起こす様々な問題を、これからどう処理して行くかも手腕を問われる所だね。上澄みの澄んだ上の水と沈殿した下の泥の部分。ネットゲームでの取捨分別と、更には沈殿した泥の救済に役立つコンセプトが、ネットゲーム内に存在するの可否か」

「それって……引き籠もりの人間が、ゲームで立ち直れるかって事？」

「端的に言うと、そんなパターンも在り得るかも知れない。地域限定のネットゲームだと、簡単にオフ会が開けるし、新しい出会いの構築は前向きな感情を喚起するだろう？ また、家庭不和から夜の街を出歩いて、犯罪に巻き込まれる子供を未然に防ぐ事が出来るかも」

「違う楽しみを提供して、寂しさを紛らわせる？ それって、引き籠もりを増やすだけなんじゃ？」

「そうかも知れないが、程度差と言うものも存在するんだよ、弾美。暴力団予備軍を増やしたり、覚せい剤に手を染めたり、年端も行かない子供が身を売ったり……引き籠もりとどちらがいい？」

口にしていて、自らの言葉に身を震わせる弾美の父親。弾美の正

義感は、どちらかと言えば父親譲りらしい。倫理に沿わないニユースが流れると、弾美の父親は必ずモニターに向かって文句をのたまう癖があるのだ。

その姿を見て、弾美も悪い事は悪いと頑とした態度を外で取るようになったとも言える。

「ネットゲームと言うのは繋がっている安心感を、どうやらプレイヤーに与えるらしいしね。実は弾美君のプレイしてるゲームも、学生や社会人用の相談窓口が存在するんだよ。もちろん、資格を持った専用のカウンセラーが、随時相談を受け持っている。大井蒼空町でも、利用率は低くないようだね」

さすがにその内容までは、秘密厳守規定によって、研究チームは目にする事は無いと瑠璃の父親は語った。そう言えばそんな機能があるのを、瑠璃や友達が話していた覚えがある。

何にしる、ネットゲームにそんな可能性を見出していたとは、弾美は素直な驚きを覚える。最初は完全に話の大きさにびびっていたが、今は興味の方が先行している。

内容はしかし、フリーメーソンの秘密結社張り。確かに、他人にペラペラ喋れる内容ではない。

「他には、ネットゲームを通じて、何かやってる事ないの？ 何か面白くなってきた」

「興味を示してくれて、こちらも嬉しいよ。後はそうだな……学生主役のクイズ番組のようなものをテレビで見掛けた事があるだろう？ ああいうのをネットでも行って、優秀な人材を研究チームで青田刈りしようと言う話もあるな。野球のドラフトみたいに、契約金を払っても優秀な人材が欲しい企業は、世の中にはいっぱいあるんだよ」

優秀なその人材が、研究チームでパテントを生んでくれれば、契約金など安いものらしい。そのテストケースを今回の期間限定イベントのご褒美で提供し、試してみようと言う事らしいのだ。

弾美自身も、そのテスト生の中に入っているとと言う事実は複雑ではあるが。そういう事情を全部聞き終わった後に考えてみると、そういう積極的な人材確保もありかと思う。

でなければアウトレットモールの企画考案など、そういう事業に関わる事など皆無だろうし。

弾美がそう言うと、父親二人は少し安心した顔付きになった。テストケースを仕掛けると言っても、相手のいる事である。思った通りの反響を得られない事も、もちろんあるのだ。

元の席では瑠璃と美井奈が、食事を完全に終えての寛ぎモード。瑠璃はたまにこちらを窺って、何の話をしているんだらうと首を傾げているようだが。

そろそろ店を出るかなという雰囲気、男性陣の方から湧き上がっている。しかし、ママさん陣に了承を得なれば、それもままならないのも当然の理。

弾美が率先してお伺いを立てに、母親陣営に訊きに行こうとする。弾美の父親が、やや大仰に先程の約束を持ち出して来た。つまりは、フリーメーソンの掟である。

今日聞いた事は、絶対に誰にも漏らさない事。

「今夜お前に仕事上の秘密を話したのは、完全に父親としてのエゴなんだろうな。息子に自分の仕事の苦労話を聞いて欲しい、少しでも理解して欲しいっていう。お前の事は信頼しているが、もう一度だけ言っておく。今夜の男同士の秘密話は誰にも漏らさない事を願



## 11 囚われの天使と氷の仕掛け（前書き）

梅雨ですね、こっちは朝から雨模様となっております。なので今日は、どこにも出掛けず部屋でまったりする予定（笑）。買い物は昨日のうち済ませちゃってるし、そこら辺はいつもと違うパターンですけど。

自分の勤め先は山の中なので、仕事帰りに本屋に寄ったりその他の買い物しようと思ったら、かなり大変。車を飛ばして、30分ほど大回りしないと駄目なのです（笑）。

それが可能になったのは、昨日は営業に出る事になったから。営業一本の人が今月いっぱい辞める事が決まったので、自分が引き継ぎする事になって。

新しい仕事を覚えつつ、今までの内勤もこなさないといけない訳で。そんな感じで先週は忙しかったり、頭の中がパニック状態だったり（笑）。はっきり言って残業なんかしたくないけど、月に何度かはする事に決まっちゃってるし。

ただでさえ、休みが極端に少ない業種なのにねえ……。

でもまあ、営業に出るようになったら、少しは自分のペースで仕事が出来ようになるのかな？ 炎天下の中、歩き回って喋り続ける作業が少しは減る訳だし。ちゃんと休憩も取れるし、したら安いノートパソコン買って、車の中か喫茶店で執筆作業を再開しようかなって考案中。

実は、新章の方もかなり書き進めてたりします（笑）。

今回の章でようやく、長かった地下ダンジョン編が終了しますね。最初の原案では、ここら辺までしか頭の中に浮かんでなかったりして。慌てて考え付いた地上エリアだったけど、何故か弾美達がいい感じに廻ってくれたお陰で。丁度良い具合に、4週間の期限で話数

が収まりを見せました（笑）。

そんな区切りの話ですが、前後編に分かれてたりします、お楽しみあれ^^

## 11 囚われの天使と氷の仕掛け

天候は昨日から肌寒い日が続いており、連休中の好天気が嘘のよう。朝日はとつくと出てくる筈だが、窓からの景色はどこか薄ら寒い。毎度の弾美の部屋からの合同インも4回目を数えるまでになり、美井奈もすっかり場慣れした感じを受ける。

今日もお土産を家からわんさか持って来て、弾美には呆れ顔をされたものの。瑠璃の隣に座ってゲームにインするこの至福感は、少女にとって何物にも換え難かい様子だ。

今朝は起き抜け、少し調子が悪かった美井奈だが。一日遊ぶ気満々で、朝からの限定イベントのインを指定したのだ、へこたれている場合ではない。

弾美としては、美井奈が持って来た勉強道具も気になるし、パーティが今日上手く行けば地上へ到達すると言う事態ももっと気になる。美井奈の勉強道具は、十中八九瑠璃に何か吹き込まれた証拠だと言つのは推測出来る。ダテに長い事、幼馴染をやっている訳では無いのだ。

まあ、昼から勉強会になってもそれはそれでいい。

実は瑠璃も、朝の散歩からどこか調子が悪そうだった。朝の冷え込みが急だったもので、家の人共々体調不良に見舞われているらしい。それでも朝の起き抜け時に比べれば、ずっと調子は戻した模様。弾美は気を利かせて、部屋の室温管理を少しだけ温かめに設置する。季節の変わり目は油断ならないと、母親が注意を促していたのを思い出す。

特に女性は、色々と大変なのだそう。詳しくは話してくれなかったが。

全員既に中立エリアで、イン前の支度に余念がない。弾美も同様、昨夜父親達に聞いたゲームの裏事情を、頭の中から追い出して。コントローラーを持って、攻略に集中を始める。

薬品系の消耗品の補充も、あらかじめばっちりである。イベント当初から考えるとかなり遅くなったキャラを確認しつつ、パーティ仲間に出発の合図。

「用意できたら、真ん中入るぞ」  
「了解です、お兄さんっ！」

レア装備の暗塊シリーズが二つに増え、防御力もHPも格段に上昇、頼れる前衛になったものの。タゲを確実に取る手段が無いまま、ここまで来てしまった感じは否めない。

炎や闇や土の種族スキルや魔法に、ヘイトを取るブロッカー適性のスキル類が存在するのだが。後は盾スキルを伸ばして行けば間違いない取得が可能ではある。

その手段を持たないパーティは、アタッカーが複数でスイッチという技を使って、敵のタゲを交代でパスして行く。その間隙を利用して、フリーになった者はポケットの補充や回復をして、一息付くのを繰り返すのだ。

弾美のパーティでは、美井奈が割とタゲを取る手段に富んでいる。そこからマラソンに変化して、スイッチをしているのが今の所、弾美のパーティの現状である。

武器と盾も新調出来たが、正直盾スキルを伸ばすゆとりも無く、連続スキル技使用で、タゲ取りを頑張るしかないと思う今日この頃だったり。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：24



取得スキル : 片手剣47《攻撃力アップ1》 《二段斬り》  
《下段斬り》 《種族特性吸収》

チ 《闇の腐食》 : 闇38《SPヒール》 《シャドータツ

種族スキル : 闇24《敵感知》 《影走り》 : 土10《防  
御力アップ+10%》

1 / 1 1  
装備 : 武器 ケンタの刀 攻撃力+13、知力+1《耐久1

2 / 1 2  
: 盾 サソリ模様の大盾 耐毒効果、防+7《耐久1

: 遠隔 木の弓 攻撃力+8《耐久11 / 11》  
: 筒 木の矢束 攻撃力+6  
: 頭 黒いバンダナ 闇スキル+3、SP+10%、

防+3  
: 首 鬼胡桃のペンダント HP+8、体力+2、防

+6  
: 耳1 プニヨンのピアス 防+2  
: 耳2 白玉のピアス HP+5、防+1  
: 胴 超プニヨンの赤鎧 火スキル+3、腕力+2、

防+14  
: 腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、  
HP+25、防+10

: 指輪1 古代の指輪 体力+1、防御+5  
: 指輪2 プニヨンの指輪 防+3  
: 背 剛毛のマント 攻撃力+3、防+5  
: 腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2  
: 両脚 なめしズボン 攻撃力+1、防+5  
: 両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+5、

HP + 25、防 + 10

ポケット(最大6) : 小ポジション : 小ポジション : 万能薬  
能薬 : 中ポジション : 中ポジション : 万

ルリルリの変更点は、何と云ってもまたまたポケットの数が増えた事。水晶玉を忍ばせておける余裕も出来たし、エーテルのストック数も増え、継戦能力が格段に上昇している。

細剣の複合スキル技攻撃と、《魔女の囁き》からの水属性魔法という2つの必殺技も覚え、削り手としても存在感が出て来た感じもする。

弾美と同じく、武器と盾の新調も叶ったが、前衛としてまだまだな感じは否めない。何より弾美と大きく操作性に関しては水を開けられている事は、本人も自覚している通り。

水属性の新魔法も覚えだが、本人は光属性をもう少し伸ばしたいと願っているようだ。

名前:ルリルリ 属性:水 レベル:24

取得スキル : 細剣38《二段突き》 《クリティカル1》

《麻痺撃》 《複・アイススラッシュ》

: 水43《ヒール》 《ウォーターシエル

》 《ウォーターピア》 《ウォーターミラー》

: 光11《光属性付与》 : 氷20《魔女

の囁き》 《魔女の足止め》

種族スキル : 水24《魔法回復量UP + 10%》 《水上移

動》

装備 : 武器 クラゲのレイピア 攻撃力+11、器用度+1  
《耐久9/9》

5/15》  
: 盾 大亀の大盾 耐水魔法効果、防+10《耐久1

: 筒 腰袋 ポケット+2

: 頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+5、

MP+25、防+8

: 首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP+1

0%、防+5

: 耳1 銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2

: 耳2 青玉のピアス MP+5、防+1

: 胴 カンガルー服 ポケット+2、MP+6、防+7

: 腕輪 炎の腕輪 火スキル+3、知力+1、防+4

: 指輪1 水の指輪 水スキル+2、精神力+1、防

+1

: 指輪2 水の指輪 水スキル+2、精神力+1、防

+1

: 背 クモの巣のマント HP+7、MP+7、防+7

: 腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

: 両脚 流水のスカート 水スキル+5、氷スキル+

5、MP+25、防+10

: 両足 超プニョンの黄靴 土スキル+2、体力+1、

防+7

ポケット(最大10) : 小ポーション : 中ポーション : 万  
能薬

万能薬

: 中ポーション : 小エーテル :

: 中エーテル : 中エーテル : 水

の水晶玉           : 土の水晶玉

うっかり胴装備を固定化してしまい、Tシャツの恩恵を受けられなくなったミイナだが。その甲斐あって覚えた《俊足付加》で、マラソンでは有利なキャラ付けになっている。

朝のチェックで妖精シリーズの同化を知って大喜びだったが、ピアスの予備が見当たらずに喜びも半減。その代わり、長杖やネックレス、マントなどの装備変更でMPがかなり上昇し、後衛の位置取りから出来る選択肢に幅が出て来ている感じもする。

弓と矢の合計値もとうとう26となつて、いっぱしのアタッカーと言つて良い数値だ。削りの速度にも期待出来るようになったが、その分タゲ取りの危険が増したとも言えるかも。

パーティ的には、もどかしい問題である。

名前: ミイナ   属性: 雷   レベル: 22

取得スキル       : 弓術32 《みだれ撃ち》   《貫通撃》   《近距離シヨット1》

                  : 雷20 《俊敏付加》 《俊足付加》       : 水

10 《ヒール》

                  : 光36 《ライトヒール》 《ホーリー》 《

フラッシュ》

種族スキル       : 雷22 《攻撃速度UP+3%》   《雷精招来》

装備           : 武器   大樹の長杖   攻撃力+11、知力+3、MP+

20 《耐久12/12》

                  : 遠隔   ケンタの弓   攻撃力+14、知力+1 《耐久

14/14》

                  : 筒   尖骨の矢束   攻撃力+12

防+3

・頭 白いバンダナ 光スキル+3、武器スキル+1、

・首 金のネックレス MP+8、防+3

・耳1 妖精のピアス

・耳2 金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2

・胸 鉤爪付きの上衣 雷スキル+3、器用度+2、

防御+8

・腕輪 超プニヨンの緑籠手 風スキル+2、敏捷+

1、防+6

・指輪1 光の特級リング 光スキル+4、HP+1

5、攻撃距離+4%、防+4

・指輪2 妖精の指輪 光スキル+2、風スキル+2、

HP+2、防+2

・腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

・背 深紅のマント 攻撃力+4、MP+4、防+4

・両脚 鉤爪付きの腰布 雷スキル+2、器用度+1、

防御+7

・両足 編み上げブーツ 攻撃力+3、防+6

ポケット(最大6)

・小ポーション : 小ポーション : 万能薬  
・小エーテル : 小エーテル : 雷の水

晶玉

「隊長、武器の弓矢の合計値が26まで上がったっちゃってますけど……もう少し低いのに変更しておいたほうがいいですかねえ？」

「わっ、もうそんなにあるんだ……両手武器って凄いやね」

「まあ、盾無しで防御捨ててる分、強い事は確かだな。じゃあそうだな……雑魚釣る時は弱めにセットしておいてくれ、美井奈」

「了解です、隊長！」

そんな事前の話し合いの後、いよいよステージ6の主要エリアに入る大扉を潜る一行。広いマップの攻略も3度目となれば、いい加減パターン慣れして来るといふもの。

案の定の茅と木の根の迷路エリア、今回の雑魚は角の生えた四足動物や鳥型モンスター。更にはゴーストやお化け木など、割と多彩な種類を集めている様子である。

そんなマップを狩り進めて行く内に、何だか不穏な空気が流れて来る。

「わっ、動物の死骸がありますけど……これは背景の一部？」

「カーソルが移動しないからそうだろうけど……なんか気持ち悪いな」

「そうだねえ、あつ、宝箱あつたよハズミちゃん！」

自然の迷路に設置されている宝箱の中からは、結構期待出来る品物の数々が出て来て一行を喜ばせてくれる。炎の神酒や経験値、炎の術書や氷の水晶玉など、入手は確かに有り難いのだが。そろそろマップも中盤、仕掛けを気にし始めるパーティの面々。

報酬に見合った意地悪な仕掛けが、絶対何かある筈だと疑ってはみるものの。それにわざわざ陥るのが、律儀な美井奈らしいと言いか。変な白いガスに単身突っ込んで、キャラが操作不能になったとうるたえる少女。

何の事やらと弾美が駆けつけてみるが、雷娘の姿は既にそこにはなく。

「どこ行つた、美井奈っ。そこどこだ？」

「わっ、わかりませんっ！ 勝手に白いガスと一緒に歩いて……うあつ、死骸がたくさんっ！」

「どこどこっ、美井奈ちゃん？ うわっ、動物の死骸が山になってるねえ、かなり不気味かも……」

瑠璃は慌てて探し回っているが、弾美は少し冷静にオートマップでキャラの居場所チェック。それによると美井奈は、少し進んだ広場の中心にいる模様。

瑠璃と合流して、弾美は慎重に急ぐという離れ業で通路を進んで行く。美井奈の自由を奪った白いガスというのは、弾美たちの視界には見当たらない。

だからと言って、油断していたら少女の二の舞に陥ってしまう可能性が。

広場に出る一本道の道の脇に、これ見よがしに何かの装置が置かれていた。壊れているような、そうでもないような、時折電気がショートしている気もするけれど。

カーソルが移動するので弾美が調べてみると、白ガス分解液と言うのが4本人手出来た。瑠璃も同じく何気なく触ってしまうが、同じ数のアイテム入手とのログが。

首を傾げる瑠璃は、説明文章を呼んで使い方を理解。どうやらポケットから使用可能らしい。

「白ガスって、美井奈ちゃんをさらったアレのことかな？ このアイテムで、救えるっぽいね」

「だろうな、問答無用で操作不能に陥ったらしいから、これが無いと倒せないのかも」

「はやく助けて下さい〜！」

美井奈のモニターをチェックする弾美だが、取り立てて目立った変化は無し。どうやら助けに来る仲間を待ち受けているらしい。それなら堂々と赴いてやると、弾美はポケットの中身を交換、広場に

飛び出す。

二人に反応したのは、まずは白いガスの群れ。左右から2つずつ出現し、ごつごつした岩肌の広場を漂ってハズミン達に迫る。弾美は左に展開、ポケットから分解液を振り撒くと、呆気なくガスは消滅して行った。

それを見た瑠璃は、右から来た2つを受け持つ事に。前もって打ち合わせた訳では無いが、何故か息はぴったり合っている二人の動き。2つとも消し去った弾美は、一足先に広場の中央に進み出て周囲を窺うが。

次いで仕掛けは、弓での一撃。ハズミンを射抜く攻撃は、何とミイナが放ったもの。

「美井奈っ！ 裏切り者っ！」

「にやあつ、ミイナの操作不能ですつ、隊長っ！ ごめんなさいっ！」

「多分、白ガスの効果かな？ 分解液かけたら治るかなっ？」

やってみるしかあるまいと、盾を構えてミイナに近づくハズミン。弓矢の攻撃のブロックは難しいのだが、味方からダメージを受けていたのでは話にならない。

慎重に攻撃をブロックしつつ、弾美はキャラを近づけさせる。前もって美井奈に、弱めの弓に替えて貰っていて良かった。そんな思いも、新たな敵が湧くまでの事。

動物の死骸の山が爆せて、おどろしい人型のモンスターが姿を現す。体躯に対して、顔と手の平がやたらと大きく感じるそいつは、大きな目を光らせて侵入者を睥睨する。

女性陣から悲鳴が上がったが、叫びたいのは弾美も同じ。美井奈の容赦のない《みだれ撃ち》をブロックし損ない、かなりのダメージを受けてしまった。さらには、中ボスの悪霊使いの酸攻撃でダメ



ージ+盾の耐久度を減らされる始末。

どちらから相手をすれば良いのか、判断に迷う弾美。ボス級をフリーにさせておくのはもの凄く怖いのが、味方を増やすのが先と美井奈に近付いて分解液を放つ。

これで美井奈が正気に戻らなければ、かなり不味い事態だったが。

幸い、美井奈は行動の自由を得て、こちらの目論みは成功。後ろからルリルリが、ハズミンに回復魔法を飛ばして来た。更に《光属性付与》を自分に掛けて、こちらに向かって来ている。しかし、その間悪霊使いをフリーにさせていたツケは重かった様子。悪霊使いの特殊技、死霊召喚が発動してしまった。

地面からゾンビが数体湧き出て、ボスに辿り着けていない内からパーティは大ピンチ。

「わっ、ゾンビにも白いガス附着してますよっ？ このまま倒していいんですかね、隊長？」

「よく分からんが、分解液取りに行くならすぐその装置から貰えるぞっ。俺がボス抑えてるから、そっちは頼む！」

「了解っ、私は分解液持つてるから、試しに一匹倒してみるねっ」

弾美がようやく、悪霊使いに張り付く事に成功する。連続スキル技でタゲを取り、先程までの鬱憤を晴らすような攻撃を仕向ける。

美井奈は最初オロオロしていたが、分解液は持っていた方が良く二人に諭されて。それならばと、自分に《俊足付加》を掛けて戦線離脱。

一刻も早く手助けに戻ろうと、必死に戦場を駆けて行く。

一方の瑠璃は、弾美の元にゾンビを近づけまいと悪戦苦闘中だった。雑魚には違いない敵なのだが、一斉にたかられるとそれなりに手強いし、何より気持ち悪い。

一匹目を倒すと、案の定筋書き通りのサプライズが。本体は地面にばったりと倒れたのだが、白ガスはそのまま宙を漂って、あるう事か瑠璃を呑み込んでしまった。完全に不意を突かれた瑠璃は大慌て。

それも後の祭り。操作不能のキャラは、ゾンビと仲良く弾美の元へと殺到し始める。

「わゝ、ごめんハズミちゃん！ 分解液使ったつもりが、標準合わせる前に乗っ取られちゃった！」

「アホ〜！ ここは裏切り者の巣窟かつ!?」

「お姉ちゃま、今お薬取れましたっ！ すぐに行きますよっ！」

美井奈の俊足が、事態の收拾に果たして間に合うのか。ボスに背を向けられない弾美は、ひたすらその場で殴り合い。死霊使いのHPは、まだゆうに半分以上残っていると言うのに。こちらはポーシヨンを使い切って、そろそろ厳しい状況と言う有り様。

ゾンビの歩みが遅いのが幸いし、疾風と化した美井奈は辛うじて間に合ったようだ。勢いで連続使用してしまった分解液は、瑠璃を正気に戻し、さらにもう1体を屍に変えて行く。

ゾンビ本体を殴り倒さなくても、白ガスを消滅させれば良いと知った女性陣。瞬く間に数の優位は反転、召喚されていたゾンビはあっという間に元の骸に戻されて行く。

そのままの勢いで一行は死霊使いを追い詰めて行き、1分後にはボス昇天。

「こ、怖かった……この仕掛けは怖いっ、はやくここを離れよう？」  
「うわっ、爆ぜた死骸のボス出現の場所に、宝箱が置いてあった。悪趣味だなあ……貰うけど」

「お兄さん、開けておいて下さい。私達は装置のところにいますから」

そそくさと広場を離れる、ガスに操られ組。それも仕方が無いかと、弾美は一人で宝箱の開錠。宝箱からは上物の片手斧を入手、中ボスのドロップはピアスや聖水、呪いの短剣など。

血色のピアス 耐呪い効果、HP + 10、防 + 2

パーティで使えそうなのはピアスのみ、美井奈に分配して一行は休憩後に更に奥へ進む。初っ端からパンチの効いている仕掛けに、弾美たちは早くもグロッキー状態なのだが。

それでも迷路地帯を抜けて、広い場所に出た開放感から、少しは持ち直した感じ。順調に狩りを進めて行くと、風景にも変化が。大きな岩や階段状の岩場が増えて来て、敵もサボテンの化け物やサソリ、蛮族や肉食獣に変化して来ている。

いつかのステージのように、蛮族の集団の襲撃を受けた時には、皆かなりびびったが。10人単位の、集団での組織だった攻撃に苦戦しつつも撃退してみると。蛮族が輸送中だったのか、オンボロ荷車が3台残されていた。

調べてみると1台目からは2万ギルの大金に、金のメダルや銀のメダルが数枚。2台目には生命の果実などの果実系や、1時間の間ステータスやHPなどの上昇する食事アイテムが数個。

喜ぶ一同だが、気分は複雑。何だか追い剥ぎみたいで後味が悪い。

そんな事を思っていたせいか、3台目に弾美が入り込んだ途端に仕掛けが作動。坂道を転がり出した無人の荷車は、崖を下まで転がり落ちて岩場にぶつかり大破する。

中に乗っていたハズミンは洒落にならないダメージを受け、おまけにパーティ分裂の危機に。

「び、びっくりした……画面見てたら目が回りそうになったぞっ！」

「ハズミちゃん、大丈夫？ その崖、のぼって来れる？」

「この崖は、ちょっと無理っばいですねえ……私達が降りましようか、お姉ちゃま？ 道が無いですから、落下ダメージ受けますけど」

その間弾美は散らばる荷物の残骸から、馬車に置いてあつた武器防具の回収。大した性能の物は無いが、売ればお金の足しにはなる。そんな作業で油断してたら、背後から砂力エルの襲撃が。危うく呑み込まれそうになって、大慌てで距離を詰めての退治。

油断のならない場所に、パーティはやはり分離行動は危険と判断。落下する女性陣。

「あいたたっ！ ふうっ、リアルだったら確実に死んでるねえ」

「あまり怖い事言わないで下さい、お姉ちゃまっ」

変な会話を挟みつつ、岩場の底で合流を果たしたメンバー。回復と休憩を終え、元の崖上へと戻る道を探し始める。インしてまだ30分程度だから、それ程の焦りも無いのだが。

ようやくマップの端っこに、細いのぼり階段を発見。岩場を縫うように上がって行き、大鳥やハリネズミの襲撃をかわしつつ、ようやく元の高さまで到達出来たよう。

それでも細い自然の階段は、まだまだ上まである模様。地図を見て判断するに、完全に寄り道となってしまうのだが。話し合った結果、時間もあるし寄ってみようと言う事に。

ところが幾らも行かない内に、行く手は意外な物で塞がれていた。その向こうは開けた広場のようになっていて、何本か太い杭が地面に打ち込まれた平らな土地が見える。

道を塞ぐ物体を目にした女性陣は、怯んでしまってキャラを近づけようとしない。弾美は笑い出しそうになるのを堪え、二人に向けて取り敢えずのお伺い。

「さっきの分解液、まだみんな持つてるか？ 一応、またセットしておいた方がいいかもなあ」  
「うう、まだあるけど……また操られるのは、とつても嫌だなあ」  
「これって、三人全員が操られたらどうなるんですかねえ？」  
「さあ、どうなるんだろ？ 皆で殺しあうか、時間切れまで操作不能でゲームオーバーか。どっちにしろ、良い結果は待つてないだろ？なあ」

怖い思考に陥りそうな美井奈にはつばをかけ、道を塞いでいる白いガスを分解液で消し去る一行。再度の白ガスの不意打ちが無いかを注意しながら、慎重に開けた高台に入っていく。

敵影は今のところ無し。代わりに広場の中央に高い台場が木材で組まれており、杭の1本に磔にされた女性の影が。よく見ると、他の杭の側の地面には、白骨化した生物の骸が。

一行が恐々と近付いて行っても、囚われている人影に変化はなし。どうやらNPCのようだが、話しかけても『助けて』と言うばかりである。ここに至って、額を寄せ合い相談する一行。

せめて、助けるのに必要なヒントくらいは欲しい所。

「助けていけど、どうやって助けたらいいんだ？」

「ん、どっかで鍵とかのアイテムの入手が必要なんですかねえ？」

「鍵って言うても、紐で結ばれているようにしか見えないぞ」

「……………この女性は天使？」

へっ？ という顔で瑠璃を見つめる弾美。美井奈の神様発言の影響で、自分の幼馴染もちよっと変になったのかと思わず訝しがる。瑠璃の顔は真剣で、モニターを注視する瞳は何かを読み解こうと忙しく瞬いている。

瑠璃が自分の画面で指し示した場所は、囚われの女性の頭の位置

だった。つられて弾美が見つめていると、なる程時たまキラリと輪っからしきモノが光って見える。

本当に時たまなので、余程気をつけて見ていないと分らない。

「あゝ、本当だ……ってか、よく見つけたな瑠璃」

「凄いですお姉ちゃまつ、これは有力なヒントですよっ！」

「うん、多分トレードするとしたら……妖精？」

それは幾らなんでも、泉の仕掛けの二番煎だろうと弾美は訝しげな反応。妖精と天使の間に、一体どれ程の親密感があるのかとかの議論は、取り敢えず置いておくとして。

瑠璃がトレードした瞬間、パーティのモニターに強制動画が。女性を縛っていた紐を妖精が解いて、自由を取り戻した女性は感謝の言葉と共に威厳を取り戻す。

その頭上には光り輝く天使の輪が浮かび上がり、周囲を妖精が嬉しそくに飛び回っている。

この辺りで弾美は危機感を抱き始め、動画の終了と共にパーティに戦闘準備の指示を出す。自由になった天使は、立ち上がったまま次のモーシオン待ち。弾美達が戦闘用の強化を終え、瑠璃が代表して再び話し掛けると。

再度の強制動画は強烈だった。周りの岩が崩れ始め、高台のそこかしこで地盤崩壊のムービーが。天使が慌てた様子で『奴が来るっ！』とこちらに向かって注意を呼び掛ける。

恐らく『奴』とは、天使を捕まえたボス級の敵である事は、容易に察しが付くが。

「うわっ、地割れで行動制限掛かるのか！ 遠距離組っ、削り頼むぞ！」

「敵は飛べるんですか、ちょっと卑怯ですよっ！」

「私とハズミちゃん、なるべくタゲ取るうねっ！」  
「おうっ、取れない時は武器をレイブレードに替えるからっ」

舞い降りて来たのは、身体中ほぼ真っ黒な人型のモンスター。身体よりも大きなコウモリのような翼も黒で、割と大きな片手剣と、もう片方の手は鞭のような形状になっている。

鋭く釣り上がった瞳からは残忍そうな赤い光が漏れ、口から覗く歯はサメの様に尖っている。天使が警告を発するよりも先に、危険な相手だと判断は付くものの。

その魔人の能力までは教えて貰えずに、取り敢えず先制で近付いて殴り始める弾美。

お返しの前方範囲プレスには驚いたものの、地割れを利用して距離を取る事も無く、正面から殴り合いを受けて立つ魔人。瑠璃が殴り合いに加わって、複合スキルで打撃を与える。

美井奈も少し距離を取っての遠隔攻撃。時たまの《みだれ撃ち》にも、タゲが来る気配も無く一安心。おまけにNPCの天使の回復補助まで飛んで来て、何故か楽勝ムード。

早くも敵のHPは半分を切っており、皆のMPもポケットも全然余裕。

暗雲が立ち込め始めたのは、魔人の鞭が弾美を絡め取った辺りから。敵の特殊技が発動してらしく、ハズミンの豊富なHPがぐんぐん減って行き、逆に魔人が回復し始める。

吸われてるとの弾美の叫びも虚しく、女性陣の攻撃にもびくともしない。ようやく瑠璃の《麻痺撃》で弾美が解放された時には、魔人は8割がた回復している有り様。

これには吸われた弾美、怒髪天をつく怒りよう。

「ひでえっ、目茶苦茶吸い取られたっ！」

「あつ、天使の手助けも、この有り様じゃあ上手くないねえ」  
「あつ、敵が距離を取りましたよっ？ 何か来る気配……」

美井奈の予言通り、油断していたこちらに魔人の次なる奥の手が炸裂。地割れの亀裂が不気味に光ったかと思うと、そこから太く長い触手が数本飛び出して来たのだ。

触手は変な所に目が複数付いていて、先端は十字槍のような形状をしていた。むろん、殴る時にはそれを使用して来て、一行は複数  
の敵相手と戦うと言う大ピンチに。

瑠璃の判断は、今回は素早かった。魔人が入るように投げられた光の水晶玉は、敵の群れに結構なダメージを与えた様子。さすがに閻属性には、効果大の光の水晶玉である。

それに乗じて弾美のスキル技で、目の前の2体の触手は呆気なく朽ち果てる。

弾美の命令で、とにかくボスを狙い撃ちしていた美井奈。敵が近付いたらフラッシュを撃てる様に準備しつつ、一人触手の範囲外からボスのHPを削って行く。

瑠璃も目の前の触手を倒し終わると、魔法詠唱の準備。はっきり言つてこのレベルでスキル40台での魔法は、主力と言つて差し支えない。《魔女の囁き》を乗せた《ウォータスピア》は、こちらに敵を引きつけるのに充分だった。

タゲ取り目的の魔法攻撃だったので、瑠璃に慌てる様子は無し。

「ハズミちゃん、こっち来たよっ！」

「おっけ、美井奈も魔法とスキル技ぶち込めっ！ こっちも触手倒し終わった！」

「了解です、隊長！」

瑠璃の前に迫った魔人は、怒りの剣の一撃を少女に見舞う。傷つ



いたルリルリだが、致命傷には遠く、そこに美井奈の《ホーリー》からの《貫通撃》が。

既に魔人のHPは再び半分を切っている。鞭の範囲外からのタゲ取りに、魔人は怒りの間合い詰めを敢行。瑠璃の足止め魔法はレジストされたが、美井奈の逃げ足もチョー速い。

武器をレイブレードに持ち替えた弾美の、渾身のスキル技に足止めされた時には、再び瑠璃も魔法の詠唱を開始していた。魔人の足が止まったのを確認した美井奈も、再び光魔法の詠唱を開始する。

最後の悪あがきにと伸ばされた鞭伸ばしも、弾美は完璧にブロックしてのけ。奥の手を防がれては、さすがの魔人も形無しである。おまけにこちらには、地味に回復を飛ばしてくれる天使までついているのだ。

気付けば、フォーメーションもばっちり決まったの完勝で終わっていた。

「やった〜、けっこう綺麗な勝ち方だったね〜！」

「そうだな、よくやった。もう少し、地形効果とかで苦労するかと思っただけだな！」

「嬉しいです〜、何だか強くなった気がしますっ！」

恒例のハイタッチの後、綺麗な流れの戦術に興奮するパーティの面々。強敵だった筈の相手にすんなり勝った事で、自分達が強くなつた事を実感出来た様子だ。

魔人のドロップも良かったが、まだ消えないNPCの天使に代表で瑠璃が話し掛けると。感謝のこもった言葉と共に、結構な報酬をパーティに提供して貰う運びに。

ありがとう、優しき心と知恵を併せ持つ冒険者の皆さん。危うく魔女『フリーアール』の姦計で、こんな場所で『グランドイーター』の養分となって朽ちてしまう所でした。

私は天使のマリアベル。妖精の導きを司るべく、天界から遣わされた者の一人です。あいにく魔女の奸智が今は上回っていて、魔女の企みを止めるどころか、力の殆どを吸い取られてしまいました……。  
お礼にこの品を差し上げます。どうぞ貴方がたのその優しき力で、悪しき魔女『フリーアイル』を止める堰となつて下さい。でないところの世界はとんでもない方向に向かい始めるでしょう。  
地上で会えれば、もう少し力になれるかも知れません。どうぞ貴方がたに御武運を……。

「おおつ、なんか羨びかけてたらしいな、この天使」  
「妖精の上司だったんだね、天使さんは」  
「地上でも出て来そうですねえ、ちよつと楽しみです」

天使と魔女の因縁めいた物語は、ちよつとだけ横においといて。今回の魔人戦の主な装備ドロップと、天使の報酬の一覧はこんな感じ。他にも、消耗アイテムも盛り沢山の結果となった。

天使のレイピア 攻撃力+14、知力+2、MP+8《耐久14/14》

天使のピアス 光スキル+3、知力+2、MP+8、防+3

魔人の剣 攻撃力+17《耐久14/14》

魔人の下衣 攻撃力+3、体力+2、腕力+2、防+10

三者三様の驚きと共に貰えたのは、光の宝珠に天使のレイピア、天使のピアスに光の矢束。魔人の戦利品は魔人の剣に闇の術書に水晶玉、魔人の下衣に呪いの指輪、その他薬品など。

かなりの武器と装備の補充に、一同大喜び。その後天使は消えてしまったが、こちらはまだエリア攻略の途中である。ヒーリングと新装備の分配&着替えを終えると、パーティは岩場を降りて行き、エリアボスの間を目指す。

それにしても、とんだ寄り道だったと改めて思う一行であった。

「私が光の宝珠使ってもいいの、美井奈ちゃん欲しいんじゃない？」

「欲しい魔法あるんだろ、瑠璃？ 美井奈はアタッカーに成長させる予定だから、瑠璃が使えよ」

「私はMPありませんし、たくさん魔法を覚えても使い切れないのでどうぞ、お姉ちゃまっ！」

元の台地まで降り切ると、瑠璃は天使から貰った光の宝珠の使用をパーティに相談したのだが。そういう事ならと《ライトヒール》を覚える事を願って、素直に使用に踏み切る瑠璃。

ところが覚えたのは、全く聞いた事も無い《エンジェルリング》という魔法だった。効果は大半が不明だが、リング発動中は全ステータスや攻撃力、防御力が倍近く上昇するらしい。

オマケに浮遊効果も付くらしいが、それはともかく何やら強烈な魔法っぽい。

説明を聞いた弾美は絶句、スキル20で覚える魔法ではない。これはどうやら、天使のプレゼントの宝珠効果と言っしか無い模様である。強烈な切り札を引いた感に、全員驚愕状態。

パーティから絶賛の声の中、瑠璃はしばらく新魔法の文字を眺めていたが。効果の大半が不明と言うのも、ちよつと怖い気もしてみたり。試しに一度使ってみようとして、ある事実に気付く。

あれつと声を出して、思わず脱力する瑠璃。

「何だ、どうしたっ、瑠璃？」

「うん、この魔法MP250も使うみたい。木の実や食事でもMP底上げしても、まだ足りない……」

「ええっ、何でそんな魔法が、こんな序盤に出るんですかっ！ わ、私覚えなくて良かった……」

それもその筈、ミイナのMPは装備を含めてやっと1000くらいである。肝心のルリルリは、さすがに流氷シリーズも手伝って180もあるが、それでも魔法使用には全く足りない。

弾美は、期待させておいてからの余りな落差の仕様に大ウケ。ネタスキルと言うのは見た事はあるが、ネタ魔法は初めて見たと転げ回って大笑いしている。

瑠璃からすれば、欲しい魔法も引けなくて2度ガツクリと言う結果に。それでも気を取り直して、笑い転げている弾美の復活待ちなどしてみたり。

まあ、幼馴染みのツポには嵌まったようで、それはそれで良かった。

\*

\*

弾美の復活後、パーティは再出発。途中の雑魚も段々と減って行き、視界の向こうに横へと広がる灰色の絶壁が見えて来る。入り口の複雑な飾りの大きな門は、案外簡単に見つかって。

入り口のゴーレムを一蹴。ポーション類をドロップで補充しつつ、建物の中に入って行く。

「あれ、今回はすぐにボスエリアなのかな？ 入り口がすぐそこだよ？」

「本当ですなえ。何ででしょう？」

「中身が広くなってるのかな？ まあ、入ってみれば分かるか」

中身は確かに下の層のどれよりも広がった。入ってすぐの強制動画情報によれば、全面ほぼ氷張りの地面に、部屋の中央付近に大きな雪だるま。部屋の中心から端の壁に走る溝は、落ちると這い上がるのに苦労しそう。

どうやらアクションゲームにありがちな、凍って滑って止まらない床の仕掛けのようだ。溝は一度落ちると、壁沿いを伝って入り口まで戻らないと、再チャレンジ出来ない感じ。

幸い今回のエリアボスも、全くその場から動こうとしない。考える時間はあると一行は相談タイム。弾美がマップを開くと、一応このボスエリアの概要を知らせる地図が見れる仕様のようだ。

瑠璃がそれを眺めて、本気の熟考タイムに突入する。だがどうやっても、出口らしき場所まで辿り着けない事を知ると、ちよっと本気で怒り出してみたり。

「この謎解きマップ、酷いよっ。どうやっても解けないようになってるっ！」

「ん〜、瑠璃の話が本当なら……また雪だるまから出る敵を倒して、障害物作るとか？」

「ああ、そうかもしれないですねえ！」

「……………だったら、何とかなるかも？」

2度目の熟考に、弾美は完全にお任せモード。こういつ時の瑠璃は信用して良いと、長い付き合いから把握している。美井奈はもちろん、お姉ちゃまを疑うなどとは思えない。

弾美が見る限りでは、障害物の背丈の氷柱がエリアに10本程度。更には鍵の付いていない宝箱が、露骨に3つ程窺える。

完全な障害の溝だが、マップを分断するように横に1本。橋が左右2箇所にかけており、左端に見える小さな扉に辿り着くには、どちらかを通らなければならない感じ。滑らない床は入った場所に少しと、左奥の扉前の2箇所しかなく。

見るからに手こずりそうで、考え込むと頭痛に襲われそう。

「……………宝箱、開けたら消滅するタイプ？」

再度の瑠璃の質問に、弾美は恐らくとしか答えられず。まずは手前のエリアの、宝箱2個を回収すると言う瑠璃の言葉を受け。一行は、おとなしく後ろに付いて行く。

雪だるまは反応せず、恐らくキャラ達が感知範囲に入っていないせいだろう。2つの宝箱に見事辿り着くパーティ。中からは、性能の良い両手斧と土龍のしっぽが出て来た。

そして、目論見通り消滅する宝箱。

「消えた後に、むき出しの床が出て来たな……」

「うん、これなら手前に障害物1個、奥のエリアに1個作ればちゃんと行ける……かな？」

「凄いです、お姉ちゃまつ！ どんどん行きましょう！」

ツツーっと滑つてのエリア移動は、手間要らずだが自分で止まる事が出来ないのが悪い。ボスの前を滑り過ぎるのは愉快だったが、コイツを倒す時にはどうすれば良いのだろうと、後の苦労が忍ばれる。

それでも近付いたキャラ達に、ようやくボスが反応。ダルマの下の部分はカマクラのように穴が開いていて、そこから雪製のウサギが緩慢な動きで這い出して来る。

女性陣からは可愛いとの声上がるが、来るまでに長い時間が掛かり、弾美はイライラ。

「あつ、ハズミちゃん。ここで倒したら駄目だよ！ もう2回滑ったとてお願い」

そんな訳で、また滑って移動。2個で良かったと、弾美は胸を撫で下ろす。こんなのを5個も6個も作っていたら、イライラの限界でボスに突っ込んでいただろう。

弾美の一撃で、ようやく追い付いた雪ウサギは氷柱に早変わり。瑠璃は満足したのか、わざと溝に落ちて、スタート地点に戻ろうとする。

「さつき滑ってた時に、ボスの真後ろに大きな穴が見えましたね」

「んっ、何だそれ？ この溝が繋がってるのか？」

「分かりませんが、多分……」

弾美は確認しに行こうと、溝で出来た道を逆行してみる。丁度エリア分断する横溝を辿り、ボスの後ろに廻り込む。ボスは何故か反応せず、美井奈が見たと言う穴は、実はそれ程大きくな。

見逃さないで良かったねと、宝箱2つがお出迎え。ただしそれに挟まれた、カボチャの作り物が1つ地面に置かれている。ハロウィンと言えば分り易いだろうか。

カボチャをくり抜いて、怪物の顔みたいにつくっているアレだ。

「……あれは、何？」

「ハロウィンのカボチャのお面ですかねえ？ お菓子をくれないと悪戯しちゃうやつですよ」

「よく知ってるな、美井奈……んで、あれは何？」

瑠璃も分らないと首を傾げるのみ。弾美は一応戦闘準備の呼びかけをして、単独近付いて行く。案の定、弾美が近付くとそいつは浮き上がり、パーティに向かって言葉を吐いた。

お菓子をくれないと、呪っちゃうぞ〜！ と。

「呪っちゃうぞと来ましたか！」

「アホっ、聖水用意しろっ！ 俺はそんな暇無いから殴ってるぞっ！」

あいにくポケットに聖水を用意していなかった弾美は、とにかく先に倒してしまおうと、先程入手した片手剣を振るい始める。連続スキルを受けても、カボチャ頭はびくともしない。

反撃技はやっぱり呪いの言葉。呪われたハズミンは、勝手にポーションを飲み始める。

「わ〜っ、呪われたっ！　ってか、強いぞこいつっ。HP全然減ってない！」

聖水をポケットに仕込んだ女性陣が、続いて助太刀に入ろうとするが。弾美の言葉を裏付けるような、反則的な強さ。そんな敵相手に、ルリルリでは前線を支え切れず。

フォローに入った美井奈が、どうやらタゲを取ってしまったよう。あつという間に美井奈にワープして近付いたカボチャ頭。一撃殴つた後、呪いの発動。カオスを振り撒きつつ再びワープ。

お菓子をくれないと、呪っちゃうぞ〜！

「わ〜っ、一撃で3分の1も削られちゃいましたっ。このお化け強いっ！」

「不味いな、聖水も手持ち少ないし……タゲが自由だから、宝箱開けて逃げるか？」

カボチャ頭は攻撃されれば反撃するが、それ以外は割と気ままに飛び回っているだけ。ただし、宝箱の番人らしく、宝箱に近づくものには容赦しない気もするが。

瑠璃も2回殴られてHP半減の憂き目に。自己回復しつつも考えていたのは、蛮族の馬車から入手した食料の事。確かその中に、タルトが入っていたと思っただが……。

やっぱりあつた。他は肉だの何だのばかりで、このデザートだけ妙に浮いていたのだ。瑠璃は咄嗟にそれをポケットに入れて、赤に



反転して外使用出来るようにセット。

それから欲しがるカボチャに近付いて、ポイツとタルトを投げ掛ける。

飛び回っていたカボチャ頭は、それを機に急に大人しくなった。呆然と見守るパーティは、実は半壊状態。うつすらと透けて行くカボチャ頭、それからやがて姿を消してしまふ。

最後に一言、言葉を残して。

ありがとう……。

「わっ、消えちゃいましたっ！ お姉ちゃま凄いつ！」

「あゝ、希望を叶えてあげれば、弱体するくらいかなって思ったけど。お礼まで言われちゃった」

「おおっ、やるなっ瑠璃！ 普通に殴り合ってたら、全滅させられてたなあ」

喜び褒め称えつつ、弾美が残された宝箱を開ける。経験値が入って来て、それにより美井奈がレベルアップ、再びお祝いムードが沸き起こる。もう一つの宝箱には2万ギルが入っていて、地上に向けて貯めておいてくださいと言わんばかり。

今度こそ一行は、溝を伝ってスタート時に戻る。先程と微妙に違うルートを使い、新しく出来た氷柱と宝箱を取り終えたあとのむき出しの床を上手に利用しつつ。

雪ウサギを数匹従えて、見事に右の橋を渡って奥のエリアへ進出が叶ったパーティ。

「んと、雪ウサギは1匹でいいよ。そこ戻った氷柱の左で倒して、ハズミちゃん」

「難しい注文だな。失敗したら許せ」

ちよつと余計に倒してしまつたが、取り敢えずルート的には問題ないとの瑠璃のお墨付き。上手に3つ目の宝箱を回収して、中から嬉しいカメレオンジュエルをゲット。

ビックプレゼントに意気が上がる一行。そのまま塊となつて、ルリリの先導でツツーつと滑る事12回。見当違いの方向を目指しているのかと訝っていたら、さにあらん。たつた2ブロックしか無い左奥の扉前に、一行は見事辿り着けてしまつていた。

その瞬間、吹き荒れる万歳の嵐。

「やつた〜、お姉ちゃまサイコーですよっ!」

「美井奈、あんまり暴れてキャラを溝に落とすなよ……お前だけ一人で最初からになるぞ」

「うっ……はっ、早く扉の向こうに進みましょう!」

すぐ横が両端とも溝になつているため、うっかり踏み外したら弾美の言う通りになつてしまつたろう。美井奈は明らかに動揺し、道順を覚えていないのがバレバレである。

そついう弾美も、自信はそれ程なかつたりするのだが。瑠璃の頭脳明晰さに、今回は救われた感じである。

扉を開けると、白くて細い階段が上へと続いてた。列を組んでのぼつていくと、やがて反対側に下りる階段と、左手に外に出るよつに続く通路が出現する。

下りる階段は、恐らく氷のボスエリアに戻る際にでも使うのだから。そんな推測を元に、ハズミンを左へと移動させると、そこは見事な造りの空中庭園だつた。

歓声を上げる女性陣。確かに美しい風景だが、弾美は先に造りをざつと見渡して頭にインプットする。長方形のタイル敷きの床は、下の氷のボスエリアのように、溝で分断されていた。

そして奥には鍵付き宝箱が3個。今回は渡れる橋も無い。どうや

って向こうに？

「花壇があつたりして綺麗な所だけど……向こうには行けないみたいだねえ」

「また溝がありますね、落ちたら……ああ、手前のスロープから出ればいいのか」

「取り敢えず、強化魔法掛けて進んでみようか。注意は怠るなよ？」

魔法を使用して、MP回復のヒーリング後、用心しながら空中庭園に進み出るパーティ。今回はムービー付きの演出のようで、一陣の風の出現に一行が驚いて空を見上げれば。

大きな影が宙を舞い降りて来て、巨大な飛行生物が庭園の一行へと急襲を掛ける。更に庭園の奥の茂みからは、巨大な薔薇がこんもりと湧き上がり。

一陣の風は、竜巻モンスターへと姿を変えた。

戦闘が始まった時には、3体のボス級の敵が既にマップに配置されていた。不意を突かれた一行はパニック状態。とは言え、奥の薔薇は剣の届かない間合いである。竜巻か飛行生物　ワイバーンを相手にするしかなく。

弾美は混乱から立ち直ると、空に逃げてしまわない内にワイバーンを倒してしまえと号令を掛ける。3匹もの敵の出現は想定外だったが、奥の薔薇は今の所何のリアクションも無し。

数を減らすなら今の内だ。

ワイバーンのプレスや鉤爪攻撃も何のその、正面から殴り合うハズミンと、側面からの援護のルリルリ。ミイナは離れた場所で、竜巻が二人にちよっかいを掛けない様にけん制しつつ、SPが貯まったらワイバーンへとスキル技を見舞う。

いい調子の連携で、ワイバーンのHPがようやく半分に減って来

た頃。完全に存在を忘れていた薔薇の鳶が、何とこちらに向かって来ていた模様。いつの間にかミイナの自由を奪っていた。

悲鳴を上げる美井奈に、竜巻の突き飛ばしが炸裂。

「きゃ〜っ、薔薇が生長してますっ、隊長！」

「うわっ……っ、どうやって溝を渡ったんだ、美井奈？」

「竜巻に突き飛ばされて……あれ、こっちに渡れたのはラッキー？」

そんな事は近くの鳶を倒してから言えと弾美に叱咤され、伸び放題の鳶を魔法で焼き始める美井奈。鳶は土のゴレムや雪ウサギのように、どうやら別HP扱いらしく、簡単に倒されてくれる。

それでも攻撃を受けると結構痛い。周囲の鳶を掃除し終え、取り敢えずは安全確保なのだが。

前衛ペアはそうでも無かったよう。フリーになった竜巻が、弾美に突き飛ばしを敢行し。溝に落とされた弾美は戦線復帰に大わらわ。ワイバーンの尻尾攻撃で、瑠璃も毒状態に。

必死に回復魔法を飛ばす美井奈だが、後ろからも不穏な気配が。鳶の繁殖は旺盛なようで、またぞろこちらに向かつて棘の生えた触手を伸ばして来る。

焦れた美井奈は《貫通撃》でワイバーンに強打攻撃を敢行。タゲが向いたかと思ったら、ワイバーンは再び飛翔状態に。

「瑠璃、今の内に、俺達もそっちに渡ろう！」

「えっ、溝の近くで突き飛ばしをわざと受けるの？」

瑠璃のチャレンジは、案外簡単に1度で成功してしまった。続いで弾美も、竜巻との角度の調整に手間取りつつも、何とかこちらも1度で溝を飛び越えられて。

竜巻はどうやら、溝を越えて追っては来れない模様。ほっと安堵

の一行に、空からの急襲再び。タッチダウンの範囲攻撃で、全員のHPが一気に半減。

巨体の衝撃は、一体如何程のダメージを負わせるつもりか。畳み掛けるような鉤爪攻撃を受ける美井奈からタゲを取るうと、弾美と瑠璃は大慌て。

気付いたらミイナは2度目の《雷精招来》を敢行しており、伸びてきた鳶は呆気なく蒸発。

「にゃ〜、死んじゃうつ、怖いっ！」

「安心しろ、タゲは取った！ 瑠璃、今度鳶が伸びて来たら水晶玉使えっ！」

「了解〜！ 美井奈ちゃん、見える位置に移動してっ！」

ワイバーンが大きすぎて、回復魔法を掛けようにも美井奈の姿が見えない瑠璃。弾美はポーションと《シャドータッチ》で自己回復溝を飛ぶ前に装備交換していたレイブレードで、がしがしと敵を削り始める。

ワイバーンの後ろで、水晶玉が使用されたようだ。範囲に巻き込まれた巨大生物はもうヨレヨレ。とどめの弾美の連続スキル技で、地響きを立ててようやく倒れ伏す。

その途端、アクティブに切り替わった巨大薔薇。数本の根っこをタコ脚のように使い、パーティにのそのそと近付いて来る。弾美の咄嗟の《クラック》と、瑠璃の《魔女の足止め》で突進を止められると、その場で範囲攻撃の薔薇の芳香を使ってくる。

すっかりその特殊技の範囲内にいたら、睡眠状態になっていたのだらう。その想像に慄きつつも、一行は今の内にとポケットの整理と薬品使用で立て直しを図る。

1匹倒して余裕を得たパーティは、今度は薔薇退治にと武器を振るい始める。

たまの芳香攻撃に苦しめられつつ、ワイバーンよりは素早い勝利。こうなると後は楽なもの。遠隔オンリーで竜巻を倒すと、空中庭園の敵は完全沈黙。

再び静けさを取り戻した庭園だったが、巨大薔薇の隠れていた前方の空間に。最初からその存在をお披露目していた、お楽しみの鍵付き宝箱が3つ。

敵が1つずつ鍵を落としていたので、いつものように代表して弾美が開錠。宝箱からは流水のイヤリング、氷の宝珠、氷の呼び水が。それに加えてモンスターからは風の術書や金のメダル、薔薇のロブや飛竜の兜や飛竜の長槍。

あとは薬品やレア素材など、結構な報酬振りである。

今回も結構しんどかったと、みんなで休憩回復しながら感想を口にする面々だったのだが。うっかり本気で、まだエリアボスを放置している事を忘れていた事実が発覚。

それはともかく、主なドロップ装備品の性能一覧。

流水のイヤリング 水スキル+5、氷スキル+5、MP+2  
5、防+5

薔薇のロブ ポケット+2、HP+10、MP+10、防+9

飛竜の兜 敏捷度+4、腕力+2、HP+10、防+8

ボス攻略はツツっと滑りながらの、てんやわんやの魔法の撃ち合い。ボスの唱えるブリザード系の派手な魔法と、雪で出来たウサギのコラボは混戦に拍車を掛けるに充分だったり。

雪ウサギの倒し過ぎで、戦闘の終わった後に退出用の魔方陣に辿り着くのに一苦勞の場面もあったけれども。何とかクリア出来て、

恒例のハイタッチで締めくくり。

「やった〜、クリア出来た〜！ あっ、イヤリングも貰っていいの？」

「もちろんだ。MP増やして、あの魔法使えるようにしないとね」  
「やりましたよ〜、今回は変なアイテムも結構貰えましたね〜？」

美井奈の言ってる変なアイテムとは、カボチャ頭が消える際に落としたカボチャのパンツ、雪だるまの落とした雪だるマスク、雪だるマントなど。性能は微妙なユニークアイテムだが、グラはかなり面白い見た目だったりする。

カボチャのパンツ 攻撃力+5、HP+15、時々呪い、防+6

雪だるマスク 氷スキル+5、体力+2、防+1

雪だるマント 氷スキル+5、攻撃力+3、防+1

他にもエリアボスは金のメダルと氷の術書、その他薬品をドロップ。地上前の最後の大きなエリアだけあって、今回も豊富なドロップ品の数々である。分配にも熱が入るが、流水シリーズは瑠璃に決定済み。

ついでに氷の宝珠や薔薇のローブも貰って、瑠璃は今回かなりのパワーアップ。弾美は魔人の剣と魔人の下衣を、美井奈はカメレオンジェルを貰う事に決定した。

氷の宝珠の使用で、瑠璃が新しく覚えた魔法は《魔女の接吻》という、敵からMPを吸収する魔法。MPを持たない敵には無効だが、魔法を頻繁に使う瑠璃には有り難い新呪文である。

空中庭園での戦闘で、弾美も瑠璃もめでたくレベルアップ。これぞ地上に向けて弾みがついたが、更に瑠璃が細剣スキルで《幻惑の舞い》という新技を覚えた。

これは攻撃ではなく、SPを使って敵を惑わすスキル技。これの前もって掛けておけば、敵の攻撃を最低1〜2回は自動的に避ける事が可能なのだ。細剣は攻撃スキル以外に、防御系の技も多く存在する。

何にしろ、回避の苦手な瑠璃には有り難いスキルである。

小休憩と消耗品補充の後、一行は最後の扉前へ集合。ステージ6のアスレチックエリアへと、意気込んで突入をかける。地上はもうすぐ、士気も上がると言うものだ。

入って見たらみただ、一行を驚かすいきなりの仕掛けは。パーティ分断の最たるもの。何と今度は、どこまでも真っ直ぐなのぼり階段が、2つの仕切りで仕切られている。

主に柵だが、やっぱり灯籠や紅葉の飾られた花瓶、変わった形の岩などが隙間塞ぎに飾られている。階段も苔むした感じで、ちょっと神秘的だったり。

端的に言つと、今回のルートは3つあるという訳だ。

「わゝ、いきなり3つのルートって……各個撃破する気満々？」

「んゝ、ここは……遠隔の一番得意な美井奈が真ん中かなあ？」

「えっ、私が真ん中ですか？ それはとつても怖いんですけど……」

誰がどこを通るかで喧々諤々。押し切られる形で回復魔法を飛ばせる瑠璃が真ん中と言う事になり、本人はかなり緊張気味。仕掛けが酷いルートでない事を祈りつつ、それぞれ登頂開始。

最初は何事も無く、たまにシャドウや壺型モンスターが出るくらい。設置された宝箱はやはり道別にそれぞれ置かれていて、銀のメダルや炎の神酒など、まあまあの中身。

序盤から気を抜かないつもりだったが、意外と順調かもと思いつ



めた一行がルート上に発見したのは。エリアボスで思い出深い、例の泥ゴーレムを吐き出す洞窟型モンスター。

近付いて来た泥ゴーレムを思わず殴ってしまった弾美は、あっと声を上げてトラップの凶悪さを仲間に警告。

「やべっ、殴っちゃ駄目だ！ 美井奈、殺すなって！ こいつ等死んだら障害物になって通れなくなるっ！」

「……あっ、そうでしたっ！ ぼ、ボスを倒せばいいんですよ？」  
「そうそう、ってかボスしか倒しちゃ駄目だ！」

美井奈は遠隔攻撃で、既にかんりの数を倒していたのだが。慌ててボスのみに攻撃を集中。危つく自ら進路を断つ結果を何とかぎりぎり免れる事に成功する。

冷や汗をかきながら、通り過ぎたあとにウザい雑魚掃除。ほっと息をつくのも束の間、次も見た事のあるエリアボス。火の釜から生まれた火の粉が、ヨチヨチと階段を下りて来る。

これも小型版が、各々のルートに1つずつ。

「わっ、こいつらも厄介ですよね！ ちっちゃいのって、倒しても消えませんかよ？」

「消えなかつたけど、ダメージ覚悟でなら飛び越せたかなあ？ よく覚えてないなあ」

「さっさとボスを倒しちゃおう！ ハズミちゃん、魔法で手伝ってあげるねっ」

水の攻撃魔法で、あっという間に自分の前の火釜を倒してしまつた瑠璃は、弾美の前の敵にも同じく魔法攻撃。美井奈は弓矢のスキル技で、手痛い目に合う前に火釜を消滅させる。

ある程度上がって来てしまつたパーティは、ここら辺りからもう必死。何しろこんな場所で通路を塞がれてしまつたら、下まで降り

て再びのぼるのにどれだけ時間が掛かるのか。  
考えるだけでも恐ろしいが、やっぱり出て来た最悪の雪だるま。

「うわっ、コイツは土ゴレムと違って、一発で道を遮断する障害物に化けるぞ！ 絶対に倒しちゃ駄目だからな、みんなっ！」

「わっ、わっ、本体も雪球で遠隔攻撃して来ましたよっ！」

「範囲魔法で攻撃されるよりはマシだけど……きついなあ」

遠隔組が反撃にあって苦労している中、弾美は一気に近付いてただ殴るのみ。雑魚の雪ウサギの攻撃力がさり気なく引き上げられており、意地悪な事この上ない。

ようやく仕掛けを超えた時には、パーティの面々はボロボロ、ポーションも使いまくりの状態。すぐそこに置いてあった宝箱からは、ご苦労様の大ポーションの補充。

なんともヤルセナイ表情を浮かべつつ、恐る恐るヒーリングする一行。

景色は段々と狍犬の銅像なども混じって来て、神聖な聖域の感じが見え隠れ。それでも下の層では鳥居のトラップで酷い目にあっているのを、皆忘れてはいないけれど。

慎重に進んでいると、各々の階段の小さな踊り場に、おみくじ箱がポツンと置かれていた。棒の上に小さな白い箱と言う簡素なものだが、試しに弾美がクリックすると。

ちよつとあり得ない説明文が、ログ表示される。

1□5,000ギルのビックリおみくじと書いてある……。

「ビックリおみくじって何だっ？ こんなのも、本当に存在するのかな？」

「5,000ギルは高いねえ……何かいいもの、貰える仕掛けなのかなあ？」

「お姉ちゃま、信用し過ぎですっ！ 絶対変な仕掛けに決まってるって！」

完全に疑い性になってしまった美井奈だが、それも仕方ない事か。弾美にしてみれば、興味を引きまくりの口上に、好奇心がウズウズ。思わず指定金額をトレードしてしまう。

1番左端の仲間に5秒後、災いが降りかかると書かれてある……。

んっ？ という不明の内容だが、災いが何なのかはジャスト5秒後に判明。1番左端のルートを攻略していたミイナの頭上に、いきなり大ダメージが出現。ゴン、と言う凄惨な音と共に命中して、HPに10のダメージ。

ちよつと身構えていた弾美だが、ささやかな悪戯の様な仕掛けの発動に大ウケ。転げ回って大笑いし始める。自分のダメージの原因を弾美のモニターで知った少女は、完全に機嫌を損なってしまった模様。勢いで自分もお金をトレード。

…… 5秒後に大ダメージが命中したのは、今度は瑠璃の頭でした。

「おっ、お姉ちゃま、ゴメンなさいっ！」

「……謝らなくてもいいけど」

つい自分も吹き出しそうになるのを我慢して、ちよつとにやけつつも瑠璃もおみくじ購入。再び自分の頭に大ダメージが落ちてきたのを見て、瑠璃も完全に笑い出してしまう。

弾美はと言えば、息をするのも苦しそう。女性陣のコントを、笑い転げながらも目にしていただ。笑いの発作が治まると、不意に正気に戻って思うのは。

失ってしまった、パーティの膨大な所持金の額だったり。

「……こんな仕掛けに、パーティで1万5千ギル使っつて」

「……勢いって、怖いですねえ」

「あゝ、面白かった!」

瑠璃だけは、良い出費をしたという顔で後悔も無い様子。どうやら思考が人とは違うよう。気を取り直して皆で進み始めると、一際大きな鳥居が出現。そして一旦パーティが合流出来るように、道を作っていた柵は途切れていた。

砂利の敷き詰められたその場所は、まるでどこかの境内のよう。

小さな和風の建物が中央に建っていて、NPCが何かを売っていると弾美が報告する。

「破魔矢だ。1束5,000ギルだつてさ……おみくじは売ってないな(笑)」

「あれだけ買ったんだし、もういりませんよっ!」

「あゝ、でもこれは魔族とかアンデッドにチョー効くって書いてあるよ?」

瑠璃の取り成しで、渋々と瑠璃が購入した破魔矢を受け取る美井奈。先程思いつきり笑われた事を、まだ少し根に持っている様子の少女であった。

それより、と瑠璃は思う。勘繰るようだが、ここでこんな物を買っていると言う事は。この先に魔人とか妖魔系が配置されている証拠では無いだろうか?

弾美は気にせず、売ってあった商品の中から首装備のお守りを1つ購入。もう売り物に目ぼしいのが無いと分かると、さっさと奥へと進み始める。

再び3つの分かれ道とのぼり階段が見えて来たが、その手前にNPCが一人立っていた。その人物の隣には、岩をくり抜いてつくら

れたお手水が3つ程並べて置いてある。

何の仕掛けだろうと弾美が話し掛けると、そのNPCはお辞儀をしておみくじ購入のお礼を述べ始める。どうやら、この境内に関わりのある人物のようなのだが。

そのお礼の変わりに、ここの水で装備の呪いを解いて行かなくてはとうですか？

「あ〜っ、そうかつ。3つおみくじ買ったから、3回トレード出来るみたいだねえ！」

「お〜、これは……良かった、無駄な出費じゃなかったな！ 瑠璃、呪い装備幾つある？」

「ん〜と……丁度3つかな、短剣と指輪と兜だね」

持っていた瑠璃が、1つずつトレードして装備を浄化して行く。

そして、暗塊装備の3つ目ゲットに湧くパーティ。弾美が取り敢えず兜と指輪を貰い、先程売店で購入したお守りは、美井奈に仲直りのプレゼント。

途端に機嫌がよくなる、根に持たない素直な少女。これも5 / 00ギルしたが、ポケットが増える装備は割と貴重なので痛くも無い買い物だったと弾美は思う。

暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+15

サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、防+5

暗黒の短剣 攻撃力+12、器用度+4、与毒効果《耐久8

/8》

幸運のお守り ポケット+2、移動速度UP、耐呪い効果、防+2

再び3つのルートに別れてのぼり始める前の柵の前に、2つのポスターが一行の目を引く。1つはシューズ屋さんの宣伝ポスターで、

見終わると靴……では無く敏捷の果実が1つずつ。

もう1つのポスターからは、ちよつと不気味で意味不明なムービーが流れて来た。階段でけんけんぱをして遊んでいる子供……のだが、顔の無いのっぺらぼう。歌の歌詞も不気味で、白いタイルは命を奪い、黒いタイルは気が狂うなどと子供の声で歌っている。

場は完全に沈黙。女性陣は怖がっているのか、訝しがっているのか。

「……多分、次の仕掛けのヒントかな？ 悪質な嫌がらせで無い限りは」

「そうですねえ……ルートはさっきと一緒にいいですか、隊長？」

「えっ、また私が真ん中……？」

そんな訳で、先程と同じ並び順で再び頂を目指し始めるパーティ。ここまで約15分、前のエリアでは1時間と20分掛かっていたから、まだまだ時間の余裕はある。

歌詞の一端を示すように、しばらくすると階段に白と黒で塗り分けられたタイルが出現する。弾美が試しに白いタイルに乗ると、HPがじわじわと減って行く事が判明。

顔を見回す一同、恐らく黒のタイルはMPを減らす仕掛けだろう。

「……MPって0になると、どうなるんですっけ？」

「気は狂わないから安心しろ、美井奈。ただ、魔法が使えなくなるだけだから」

「すす……って、通り過ぎちゃえば問題無いよね、ハズミちゃん？」

「まあな……敵が出現しなければ、全くその通りなんだが」

敵はやっぱり出現し、パーティは悲鳴やら非難やら、賑やかに苦情をモニターに浴びせ掛ける。HP減少かMP減少か、どちらか選ぶならやっぱり命に直結していないMPの方。

凶悪な魔法潰しは、後のヒーリングへの誘いへの布石か。

出て来た敵は、例のダルマ顔の頭だけの部位モンスター。しかし演出か何なのか、顔が消されてのっぺらぼう。後は唐傘のお化けとか、火の玉モンスターなどなど。

和風なお化けテイストに、妙な戦闘風景だが。くっ付かれたら大変な目に合う美井奈は目が真剣。シューティングゲームさながらに階段上に出現した敵に素早く矢を射掛ける。

何が出て来たかなど、一々見ている暇もなく。

「美井奈、平気か？」

「な、何とか……最強弓矢セットが強くて助かってます！」

「美井奈ちゃん、強くなつたね！」

普段の戦闘では二人に隠れて余り目立たないが、成長振りでは断トツな感じのミイナである。最強弓矢セットだと、雑魚などは2〜3撃で倒れてしまう。余程敵の数が多い限りは、何とか行けそうな感じ。

いち早く白黒タイルトラップを抜け終えた弾美は、少し心配そうに女性陣のモニターを見遣るのだが。瑠璃は遠隔魔法と直接攻撃を上手に使っており、程なくクリア出来そうである。

美井奈も少し危ないが、敵はもうすぐ打ち止めな気配。

「美井奈……白い方踏んでる。HPが減ってるぞ？」

「わひゃっ……!？」

接敵されてもいないのに、HPを減らしながら仕掛けを抜け出た美井奈。もちろん三人ともMPはすっからかん状態。抜け出た地点で、トータムポールが上の方に鎮座しているのを見て、顔を見合わせる一同。

前回のトーテムは見掛けに敵わず弱かったが、今回もそうだとは限らない。MPが無いのはもの凄く不安。しかし瑠璃の場合で言えば、中エーテル4本も使わないと全回復しないのだ。

もの凄く不経済な計算に、やっぱりヒーリングしようかとの話し合いの結果が導き出され。

座り込んだ瞬間に、やっぱり作動する怪しい仕掛け。しかし今度は、真ん中のルートの階段に変化があっただけの静かなもの。瑠璃の目の前の階段は仕掛け階段だった模様で、ポツカリと一部分がのぼりで無く陥没して下りへと変化していた。

やっぱりあったと身構える一同だが、そこから敵が出てくる気配も無く。何となく沈黙したままキャラ達は休息を続け、うっかり全回復してしまったり。

瑠璃がキャラを前進させて、恐る恐る中を窺うと。小部屋には明かりが灯っており、中には全身鏡が一枚。見なかった振りをして先に進もうとしたら、隣の弾美ががちり瑠璃の手を掴み。

にこやかに嬉しげにこう告げて来る。

「ドロップ何か良いもの出るぞ、頑張れ瑠璃！」

「一人じゃ絶対勝てないよう！」

幼馴染み同士でそうこう言い争っている内に、美井奈が別の仕掛けを見つけたようだ。飾られた花瓶にカーソルが移動して、どうやらスイッチになっているらしい。

調べてみると、左側だけでなく弾美のいる右側の仕切りにもそれはあった。試しに弾美が押してみると、瑠璃の前の小部屋は隠されてしまい、弾美の前の階段が音を立てて沈み始める。

おおっという感じで場は湧いたが、それは主に助かったという安堵感から来るもの。これを利用すれば3人分のドツペルゲンガーを倒せるという弾美の案は、素気無く却下された。



しかも、女性陣から猛烈な勢いで。

「お兄さんっ、私に倒せる筈が無いじゃないですかっ！」

「欲張りすぎだよっ、ハズミちゃん！ 時間も無いし、その中のだけでいいよっ！」

ちょっと必死な物言いで返されて、弾美は仕方なく自分の案を断念する事に。取り敢えず自分の分身を湧かすぞと言うと、攻撃出来る範囲までおびき出してくれとの返事。

パリンと鏡の割れる音で、特殊な戦闘はスタート。恒例の金縛りで初撃を受けるが、連続スキル技からのバックステップで間を取り、さらに土魔法の《クラック》で動きを一瞬封じる弾美。

階段を出る前に闇魔法の《グラビティ》を浴びたが、無問題。既に柵越しにルリルリの姿が確認出来る位置まで漕ぎ着けているハズミンである。

これで何とか、数の優位に持ち込める。

敵から攻撃魔法がもう一度飛んで来たのは、素敵に計算外だったのだが。更にハズミンが距離を取ると、ようやく分身は追い掛けて来た。近付いて来ての一撃を盾でカバーするが、次の影分身のスキル技には驚かされた。

独楽のような回転での5連撃。全て喰らってしまい、ハズミンのHPは一気に持っていかれる。

「ほらっつ、目茶苦茶強いじゃないですか、お兄さんっ！」

「あんなの喰らったら、私達じゃ持たないよ、ハズミちゃんっ！」

「うるさいっ、いいから削るの手伝えっ！」

二人の茶々もどこ吹く風の弾美である。瑠璃に回復を貰って、美井奈の遠隔援護を受けつつ、お返しの斬撃を容赦無く振るいまくる。

時折来る魔法とスキル技がチョー敵しいが、女性陣にして見れば、  
どれだけ攻撃してもタゲは来ないのだ。

最大奥義でドツペルゲンガーを追い込んで、ようやくハズミンの  
分身は没。

ドロップを見て弾美は狂喜乱舞。闇の術書や水晶玉に混じって、  
待望の《複合技の書：片手剣》が出て来たのだ。残念ながら片手剣  
のスキルが30、風が20無いと覚えられないようで、風スキルを  
全く伸ばしていない弾美にとっては敵しい条件。

手持ちの風の術書は、瑠璃によると8枚らしい。全然足りないが、  
文句を言っても始まらない。

「なんだ、美井奈も欲しくなったか？」

「いえ……まあ、欲しいですけど死にたくはないからいいです」

再度のヒーリング中、ちょっと羨まし気な美井奈に、からかいの  
言葉をかける弾美。瑠璃が気を遣って、次は絶対美井奈ちゃんの番  
だからねと口にする。

パツと顔を輝かす少女。何より瑠璃の心遣いが嬉しく、抱き付い  
て喜びを表現してみたり。

トータルポールは、右と左の柵の区切りの台座に、左右2つずつ  
の合体で鎮座していた。長さが半分のポールは、傍から見ると威厳  
が全然無い感じである。

そしてやっぱり弱かったのが判明。属性の指輪をジャラジャラ落  
とす、それだけの存在なのかも知れないが。水や闇や雷がようやく  
出て、それは一同にとって嬉しい誤算だった。

育てるつもりの指輪を、各々で取り敢えずはキープする事に。

そのままボスエリアまで一直線の一行。分身湧かせ騒ぎで、予定

よりも時間を食ってしまったのだ。あと10分程度はあるが、念の為にヒーリングを飛ばして例の如くの強制ムービー観賞。

いつもと様子が違うと感じたのは、ゴーレムの全身あおりのシーン。毎度のゴーレムだと安心し切っていたメンバーを嘲笑うかのような、一部位のみの変更が。

ゴーレムのお腹にポツカリ穴が開いており、灯籠を思わせる作りに変わっていた。そこに爛々と輝くロウソクは、周囲にくつきりと陰影を投げかけている。

嫌な想像を掻き立てる、それは煩惱の灯火か？

「あのロウソクは……ひよっとして？」

「いや、そんな……待て待て、魔人が3体とゴーレムと一緒に相手にするのは無茶だろっ？」

「はわわっ、でもでもっ……先にロウソクの火を消せばいいのでは？」

「影盗魔人に殴られながら、ゴーレムと戦うのか……むっ、美井奈！ 破魔矢セツトしておけ！」

おおっと、そこに一条の光を見出した一同。それから各自、使う足止め魔法の確認。先程の闇の術書のゲットで、ハズミンが闇の新魔法の《グラビティ》を覚えたのだ。

美井奈は俊足の呪文を掛けて、とにかく距離を置いて削る事を言い渡される。そう言えばと、先程の売店に白木の木刀などが売られていたのを思い出す弾美。攻撃力が低いくせに5千ギルもするので見向きもなかったのだが。

今更遅いが、影盗魔人には効果観面だったのかも知れない。

そんな事を考えている内に戦闘スタート。陰影のやたらはつきりしたボスエリアに流れる不穏な空気の中。やっぱり、キャラ達の後ろから湧く影盗魔人×3体。

ゴーレムの直接的な動きはなし。今のうちにと、装備の変更と魔法の準備に追われるパーティ。属性の相性を考えて、弾美が瑠璃の魔人に《グラビティ》を、瑠璃が弾美の魔人に《魔女の足止め》をかけ、弾美はゴーレムにダッシュ。

影盗魔人からの容赦ない魔法攻撃は取り敢えず無視しつつ、ゴーレムに殴り掛かる弾美。

破魔矢の攻撃がもの凄く効いているとの美井奈の情報に、緊張感が少しだけ和らいだものの。魔法攻撃の強烈さに、こちらのHPも早くも酷い有り様。一人でもフリーになったら、かなり戦況も有利になるのだが。

瑠璃が上手に4体巻き込むように、光の水晶玉を使用した。これによって、影盗魔人はかなりヨタツて来たものの。足止め魔法が早々に切れて、距離の有利も消滅してしまふ。

ゴーレムと影盗魔人相手に殴り合う弾美は、かなり不味い状況。自分の分身魔人に《魔女の足止め》を掛け直した瑠璃が必死に回復を行うのだが。

気を抜くと、ハズミンのHPはレッドゾーンに突入しそう。

「お姉ちゃまつ、もう1回水晶玉お願いしますっ！」

「いけいけっ、とにかく数減らしてくれっ！」

範囲攻撃の要請に、瑠璃の2度目の水晶玉投げ。さらに美井奈が自分の影に《貫通撃》をお見舞いし、1体目の影盗魔人を即効で撃沈。意気込むパーティの面々、さらに弾美は美井奈に《フラッシュ》の要請。ハズミンの影の目を眩ませて、さらにゴーレムに《グラビティ》を掛ける。

敵から距離を置いて一息ついた弾美は、素早く敵の残りHPを確認する。ゴーレムは5割、ハズミンの影盗魔人は7割、瑠璃の影もまだ7割残っている。

美井奈の破魔矢の威力は捨てがたいが、ゴーレムの消滅で影盗魔人が弱体する事態は大いにありえる。弾美は美井奈に武器の交換を指示、徹底してゴーレム狙いに絞る作戦に。

了承した美井奈は、自分のHPを魔法で回復。自分の影盗魔人との遠隔合戦で、実は残りHPが3割を切っていたのだ。もはや定番の《雷精招来》は回復してもしばらくは消えない模様。

美井奈は安心して、ゴーレムに攻撃を開始する。

影盗魔人に追い掛けられつつも、スキル技はゴーレムに振るう弾美と瑠璃。更には容赦の無い美井奈の遠隔攻撃に、硬さを誇るゴーレムも、割とあっさり崩れ去ってしまった。

歓声を上げるパーティの面々。今度は今までの腹いせとばかりに、やっぱり弱体化した影盗魔人を逆に追い掛け回したり。1割に減った敵のHPを削り切るのに、それ程時間は必要無く。

気付いたら地上へのゲートが開いて、感動的な音楽が演奏され始めていた。

\*

\*

ただっ広いクリーム色の荒野を、長い列を作って進むキャラバンの馬車隊。様々な種族で形成されたそれは、何かの調査隊のよう。地図を見ながら彼方を指し示した先には、遠目からも巨大な大樹『グランドイーター』が見て取れる。

キャラバンは何か、長い旅路の果てに大樹の元に辿り着いたようだ。根の又に潰されたように広がる遺跡群。それを足掛かりに、調査隊は小さな集落を形成して行く。

調査の進行具合は、一言で言えば難航しているようだった。至る所に敵対するモンスターや、崩れた遺跡や張り出した根っこが、複雑なダンジョンを造り出してしまっているせいだ。

大樹に近付くにつれ増大する、不可解な疲労も原因の一つだった

が。

やがて、キャラバン隊の知らぬ内に、大樹グランドイーターに変化が起こり始める。長く太く張り出された枝や葉が、魔力を供給されて魔方陣トラップを作り始めたのだ。

その魔方陣トラップは、夜な夜な時空を越えて、各地に散らばる力ある冒険者をさらって来る。それが魔女の姦計とも知らずに、自らの生長の為の養分とするべく。

それは負の連鎖の筈だったが、ある瞬間からイレギュラーが発生する。

全てを失った筈の冒険者が、妖精に誘われて地上に姿を現し始めたのだ。驚く調査隊の面々と、この事態を生み出した魔女に関する情報を交わす冒険者達。戦いはもう、避けられない。

それを遥か高みの大樹の枝の上で眺める『フリーアイル』の魔女。楽しそうに下界の騒動を眺めながら、周りに生っている果実を手にとって口にする。

瞬間、グランドイーターの魔力を吸収した魔女は、青白い光に包まれる。

狡猾な笑みを浮かべ、魔女　フリーアイルは、より強力な力を得るための手段を講じるのだった。

## 11・5 地上へ！（前書き）

ショック……お昼前に投稿した筈が、今見たら何の更新もされて無い事に気付きました。パソコンの不具合で強制終了したら、ログイン画面から飛ばされちゃって、一度ログイン失敗の告知が。

以前の二の舞になってしまつとちょっと怖かったです、何とか投稿画面まで辿り着いた矢先の出来事。今度はちゃんと更新されている事を祈りつつ。

せっかく、前書きを頑張って書いたのにつ（笑）。

物語はようやく地下ダンジョンを潜り抜け、地上に出たところですね。この時にはまだ地上の仕掛けを決め兼ねていて、あやふやな見切り発進だったような気がします。

特にイベントエリアをパズル風味にしたいと、頭を悩ませていた記憶が。

地上に出た一行に、パーティメンバー増員のビックイベントが。文章内でも触れてますが、ネット内でも信頼関係と言うのはとても大事ですね。

良く知らない人、友達だと思ってたプレイヤーとのいざこざと言うのは、実は少なからず存在します。自分もFFやっていた頃に、貸したお金を持ち逃げされた経験がありますし。

それでも最近は、悪い人と言うのも必要なんだと思えるようになりました。小説書いてると、適役と言うものの必要性が分かる様になって（笑）。

もちろん、現実の世界ではそんな人がいない方が望ましいのも事実。僭越ながら、皆さんが楽しいネット生活を送れる事を祈ってます^^

長いムービーになると予測して、早めにコントローラーから手を離れた弾美だったが。案の定5分近くの超大作、動きも滑らかで見えていて感心はするものの。

何というか、今更なオープニングムービーの挿入の感は否めない。半数近くの、脱落して行ったイベント参加者が見れない事態ってどうなのだろうかと思ってしまう。

魔女の初出演だが、散っていった冒険者達は、見る事も叶わずリタイアして行った訳である。

弾美の隣の女性陣は、文句も言わずムービーを観賞していた様子であるが。宿敵の魔女が出て来ると、途端に盛り上がって何やらきやいきやい感想を言い合っている。

時間はまだ11時を少し過ぎた辺りだが、弾美はと言えばもうお腹がぺこぺこ状態である。いつも習慣の早起き散歩で、7時過ぎには朝ごはんを食べているのだ。

時間的にも、そんなものはとくに消化されている。

「あゝ、腹減ったなあ……二人は平気か？」

「お母ちゃまが、フルーツケーキとスコーン作ってくれたんです。持って来た袋に入ってますよ？」

「おゝ、美井奈ちゃんのお母さんは洋菓子作るんだ。それ食べる？ 3時に取っておく？」

弾美が下に母親の作り置きのおにぎりとかの昼ごはんがあると。瑠璃も実は自宅に、朝に母親と一緒に作っておいた、お弁当があると告白した。

そんな訳で、ちよっと早い昼食会に。地上に出た感動も何も無い



振る舞いだが、昨夜のバイキングみたいに、あれこれ摘んでのお食事の方が楽しいのだから仕方が無い。

昨日の食事会の感想なども交えながら、しかし食事の大半は弾美が腹に納める結果に。満腹状態の弾美が重い腰を上げて、電話を掛けに部屋を出たのは12時少し前。

「どこに電話掛けてたの、ハズミちゃん？」

「二人ほど、電話で召喚して来た。もうすぐインして、合流する手筈になってる」

「ギルドメンバーの人とかですか？ 地上エリアって、どうなってるんでしたっけ？」

弾美は簡単に、ここからは4人パーティでの攻略で、クエストやらエリア攻略やら、自由度が高くなる筈だと説明をする。他にも色んなお店やフリーエリア、裏エリアなども存在するらしい。

あくまで噂の類いだが、信用出来る入手経路なのも確かである。

「裏エリアって何ですか、お兄さん？」

「よく知らないけど、闇市に入れたらそこから行けるって噂らしいな。取り敢えず腹も膨れたし、地上の街マップ、別れて探索してみるか！」

「あつ、さっきの戦闘での戦利品、全部私の所に来てる。分けておくね？」

最後のアスレチックエリアの熾烈な戦闘の結果、色々と豪華な戦利品が舞い込んだ様子。影盗魔人からは各属性の術書と水晶玉、雷鳴の弓矢、水切りのレイピア、闇呼びの剣、呪いの指輪などの消耗品から武器装備が。

さらにゴーレムからは命のロウソク、土龍のしっぽ、金のメダル、土の術書、後は2万ギルや薬品など。今まで見た事の無い命のロウ

ソクというアイテムは、どうやら使用する事でライフポイントを1つ回復してくれるらしい。

美井奈がライフ1つしか無いという事で、そのアイテムは美井奈の元へ。思い出したように、妖精チェックをしないと、瑠璃がアイテム使用の催促をして来る。

みんなで使用すると、地上脱出おめでとの言葉とライフポイントが+1された。これで美井奈はライフポイントが3つとなり、何とか一息つけた。弾美と瑠璃も4つまで伸び、安全圏をキープ。

妖精は他にも、地上には大樹『グランドイーター』の調査隊が来ているようだから、接触して情報を集めてみたらと勧めて来た。ただし、地下ダンジョンを脱出した事で、自分達は魔女に目を付けられたらしいとの事。

脅すような口調で、ここから逃げ出しても意味は無い。命のある限り抗いなさいと釘を刺される。

「酷いな、退路は無いのか。まあ、元から用意されてないだろうけど」

「身も蓋も無いですねえ。それじゃあ、探索始めていいですか？」

ところが、パーティが別れて行動し始めた途端、弾美の前を塞ぐ影が。未だにパーティを組んでいないらしいキャラが、弾美のパーティに入れてくれと誘いを持ち掛けて来る。しかも、数分で3人以上、最後の一人は結構粘って食いついて来る始末。

そのキャラを見て、美井奈があつと声を上げた。何事かと弾美が訊ねると、前にステージ4まで組んでいた人物だと言う。

「えっ、アイテム全部取っていった人!？」

「ええ、まあ……そういう契約だったんで、それはいいんですけど」

「何か、迅速装備2セット持つてるって言うてるけど……まさか、

「それも取られたのか？」

「ええ……まあ、約束だったんで……2つ差し出しまして」

何となく恐縮して、小さくなる美井奈。何故か怒られている様で、とてもバツが悪い。弾美は完全に腹を立てて、その装備を取られた女の子とパーティを組んでる、お前はバカか盗人か？ そんな奴と組む気は全く無い、と言い放つ。

言い足りない罵詈雑言だったが、相手が何も言わずに立ち去ってしまったので仕方が無い。代わりに話し掛けて来たのは、ギルドのサブマスの進のキャラのシン。

何をそんなに興奮してるんだと、ちよつと呆れた感じ。長い付き合いなので、左程驚いてる風も無く。

『何かいちゃもん付けられたのか、弾美？ 地上は今、ちよつとギスギスしてるからな』

『おつ、来たか進！ ギルド会話モードにしよう、そこら辺の事情とか詳しく聞かせてくれ！』

『いいよ、淳と弘一にも電話したから、昼飯終わったらインしてくる筈』

その後は、4人交えてのギルド会話で、進が地上のショップの位置やイベントエリアの入り口の場所を説明してくれる。地上には鍛冶屋や武器防具屋、アイテム屋の他にも、合成ショップやレアアイテムショップ、更には教会やレストランも存在するらしい。

そこら辺は、自分達の目で確認してくれと言いつつも。扱っているアイテムや装備品で、既に品切れの商品も多々存在するとの情報を付け加えて来る進。

『グランドイーターの果実もそうだな。1個買うのに金のメダル2枚もするけど、あつという間に売れてもう品切れしてる。レベルが

1つ上がるっていう、結構レアな性能だったから』

『お、そう言えば25レベルまで上げないと、次に進めないって噂があったけど?』

『そうそう、それで今地上がギスギスしてるんだ。早解き組のレベルが低いせいで、フリーエリアでレベル上げしようにも適正レベルに達していない。クエストで金のメダルを稼ぐ方法は、果実の売り切れでもう無理。そんな訳で、レベルの高い遅解き組にちゃっかり混ざろうって連中がね』

結構ウロウロしているらしいと、進は締めくくる。なる程それかと、弾美は納得。進のパーティは平均21だが、それでもフリーエリアでは苦戦必至らしい。何しろ、まだ三人パーティ。がつついた低レベル者のソロはこちらも遠慮したいし、向こうも話し掛けてさえ来ない様子。

それでも進のパーティのレベルはまだ高い方らしい。弾美の話を聞いて、ステージの途中から遅解きに変更したために、装備や金のメダルもまあまあゲット出来た。

今はクエストエリアの攻略をしつつ、廃墟エリアも覗く感じでイン時間を使用中との事。

『クエストエリアも廃墟エリアも、敵の数が少ないし、再ポップ時間が長いからレベル上げには向かないんだ。でも、色違いの木の葉を集めないといけないから、無下には出来ない』

『いっぱい情報あり過ぎて、ちょっと訳が分かんなくなって来ましたねえ』

『そうだね、んと……レベルを25以上に上げて、さらに色違いの木の葉を集める?』

進の説明によると、レベル25以上は門を潜る為の条件で、それ

でやっといベントエリアに進出出来るそうだ。木の葉集めは、更  
上に進む時に必要なキーアイテムのよう。

NPCから聞き漏らさずに訊ねて行けば、これも簡単に出て来る  
情報らしい。ちなみに進のパーティは、廃墟とフリーエリアで既に  
2枚入手済みとの事。

進の情報を、真面目にメモする瑠璃。美井奈はそれを見て、感心  
する事しきり。

取り敢えずは、レアアイテム屋だけでも見ておいたほうが良いと  
進がキャラを案内するので。そろそろと付いて行く一行に、今回突  
然話し掛けて来たのは。

ようやくの感じの、弾美が電話召喚していた二人目の人物。風と  
炎の女性キャラの二人連れで、双方きつちり迅速シリーズを着込ん  
だ、両手武器持ちの前衛キャラ達だった。

名前はカオルとムラツチ。瑠璃があれっと言う声を上げて、炎キ  
ャラを注視する。

『遅れてゴメンっ！ 村っち捕まえるのに、ちょっと苦労しちゃっ  
た』

『だって、食事中だったんだもん！ 弾美君、ちょっと時間とか考  
えなさいよっ！』

「ハズミちゃん、この村っちって……マリモの春奈さん？」

「そうみたいだな、俺も村っちと薰っちが知り合いだって聞いた時  
はビックリしたけど」

「この方達は、ギルドの人じゃ無くって、お二人の知り合いなんで  
すか？」

「おうっ、風の種族キャラがウチの四人目のメンバーだ！ 美井奈  
の後輩になるから、よろしく指導してやってくれ」

「こ、後輩……！」

美井奈の顔が、後輩と言う言葉にはあっと明るくなる。しかしその直後、瑠璃に薫はずっと歳上だと聞かされて微妙な表情に。序列は崩れそうに無いと、どうやら悟ったらしい。

村っちはチーム分けの話聞いて、ちよつとだけ弾美のチームに来たそうな素振りを見せたが。うだうだ言う様な性格では元から無く、進に対してこれからヨロシクと熱く宣言。

それでも、こちらのパーティとも密に連絡を取る段取りだと聞いて、ちよつと安心したようだ。

「ふつ、モテる男は辛いな……！」

「そうですねえ、私もお兄さんの事好きですけど……それはお姉ちゃまも同じですよねえ？」

「えつ、うん、まあ……」

不意を突かれた瑠璃は、美井奈の爆弾発言にビックリしていたものの。無邪気な少女の告白に、思わず頬を染めてみたり。コントローラーで口元を隠して、ちよつとモジモジ。

弾美も負けずに照れ隠しモード発動中。変な切り返し方をするなと、美井奈に怒鳴ってみるもの。迫力不足は如何ともし難く、天然少女が最強に見えてくる暗示に襲われる。

天の助けか、ギルドメンバーが続々インして来て弾美達に合流して来た。騒々しくログ話題も流れて行き、部屋に漂う気まずい雰囲気も少しずつ薄れて行く。

淳も弘一も、新しいメンバーの合流に大盛り上がり様子である。淳の風キアラが例の属性Tシャツを着用していたので、瑠璃も慌ててその存在を思い出す。

それは弾美も同じ事。そそくさと着替えて、同化作業を開始。

「私のキャラは胴装備固定しちゃってて、Tシャツ無駄なんですけど……どうしましょ？」

「向こうのパーティは迅速装備だから、雷スキルなら欲しがる奴いるかもな。ついでに、いらぬ装備とか全部渡しちやおうぜ」

「そうだねえ、あつ……でも薫さんの装備も見ておかないと、欲しい装備あるかも？」

「確かにそうだな、ちよつと見せて貰うか」

『薫つち、ちよつと装備見せてもらうぞ。それからスキルとか報告頼む。進、要らない装備とか術書とかあるから交換しようぜ！ 弘

一、歳上のお姉さんを口説くなつw』

『あつ、うんいいよ、いや、口説かれるのがいいって訳じゃ無くてw』

『了解、こつちはあんまり装備は余ってないけど……先に装備屋とかレアアイテムショップ見ておいた方がいいかもな、ってさつきも言っただけどw』

『口説いてた訳じゃ無いっ！ ちよつと自分のホームページ用に、取材のオフ会をだな、そのう……弾美団長の方からも是非一席！』

弘一の必死な物言いに、お姉さんの村つちもちよつとほだされた様。イベントで好成绩が残せたら、一席立ち上げて奢ってあげるとの言葉に、少年達は異様な盛り上がりよう。

メンバー達は進の提案で、揃って商店の立ち並ぶ通りへと移動を再開する。中立エリアの西側にあるそこは、他のキャラ群で結構な混み具合を示していた。

それはそうと、新パーティのカオルの現時点でのデータを見せて貰うと。

名前：カオル 属性：風 レベル：16

取得スキル : 長槍36《二段突き》 《攻撃力アップ1》  
《脚払い》

: 炎15《炎属性付与》 : 雷15《俊

敏付加》 : 風13《風鈴》

種族スキル : 風16《回避速度UP+3%》

装備 : 武器 鋼鉄の長槍 攻撃力+22《耐久12/12》

: 頭 迅速の兜 炎スキル+4、雷スキル+4、器用  
度+2、防+7

: 首 妖精のネックレス 光スキル+2、風スキル+  
2、防+2

: 耳1 妖精のピアス 光スキル+1、風スキル+1

: 耳2 玉のピアス 防+1

: 胴 皮の服 防+6

: 腕輪 迅速の腕輪 炎スキル+4、雷スキル+4、  
腕力+2、防+7

: 指輪1 迅速の指輪 炎スキル+3、雷スキル+3、  
防+4

: 指輪2 皮の指輪 防+2

: 腰 迅速のベルト ポケット+3、器用度+2、防  
+7

: 背 迅速のマント 炎スキル+4、雷スキル+4、  
防+7

: 両脚 迅速のスボン ポケット+2、腕力+2、防  
御+7

: 両足 迅速のブーツ 腕力+3、器用度+3、防+7

ポケット(最大8) : 小ポジション : 小ポジション : 万能  
薬

: 中ポジション : 中ポジション :



『うおっ、薰っち……レベル16かよっ!?　でも、装備は優秀だなあ』

『うん、私と村っち、早解きの王道キャラらしくって。連休中にプレイ出来なくて、その分店売り装備は購入出来なかったけど。その代わり、妖精に宝珠とか金のメダルとかいっぱい貰えたw』

『そうそう、1日5エリア制覇して宝珠貰ったり、指定クリアタイムより3分下回ることに、追加で報酬増える仕様らしくって。ライフポイントなんて、無駄に6つあるしw』

おおっとどよめくメンバー達。どうやら二人とも、かなり前衛の殴りキャラスタイルに馴染んでいる、遣り込みプレイヤーの模様である。これなら安心して前衛の一角を任せられるが、さてこのレベル差をどうするべきか？

弾美が頭を悩ませていると、進がグランドイーターの果実が手元に丁度2つあると言う。お近づきの印に、二人に1個ずつプレゼントすると言うと、お姉様方は大喜び。

買い置いていたのと、遺跡エリアの探索で見つけた物で、3個揃えばパーティで使用するつもりだったらしい。

お返しのお返しと言う訳ではないが。薰がパーティリーダーの弾美に、地下で揃えた戦利品を丸ごとトレードして来てくれた。好きに使ってくれて良いとの大盤振る舞いに、村っちもサブリーダーの進に同様の素振り。

内訳は風の宝珠が1個、金のメダルが6枚、カメレオンジェルが1つ、土龍の尻尾が1つ。術書や水晶玉は自分の属性のが出たが使ってしまい、トリガーの類いは全く出なかったらしい。

お金は2万ちよつと。ほとんど消耗品に消えてしまい、最後の報酬で盛り返した感じだとか。

『おおつ、風の宝珠くれるのかっ！　ありがたいぜ、薫っち！』  
『何だ弾美、風のスキル伸ばしてるのか？　こつちにも何枚かあるぞ』

淳のキャラが風属性なのだが、風スキルは目当ての魔法が出て、もう必要ないらしい。今伸ばしているのは炎と雷スキルだと言うのを聞いて、美井奈がすかさずTシャツをトレード。喜んで貰って、本人もご満悦の様子。

弘一のキャラは土属性の、しかも　キャラで、土と氷と水スキルを伸ばしているのだそう。流水の装備を何とか2つ集めており、超プニヨンの黄鎧をいたく喜んでくれた。グラの変化を見て、瑠璃は思わず超プニヨンの黄靴も差し出す。

コミカル装備が、背の低い土属性のキャラにとってもマッチしている。愛嬌のある容姿は、本人もお気に入り。自身でキャラのイラストなんかを描いて、HPで紹介したりの活動も積極的だ。

キャラを選択して、周囲にネカマとからかわれても、本人は見栄えが全てと言い切る男振りを示していたり。

そんな感じで、いい加減などんぶり勘定での装備や術書の交換がしばらく続き。どちらが得したか損したかなどは、同じギルドメンバーのせいなのか、それとも弾美の性格の浸透なのか、皆が全く気にならないよう。

淳のキャラは二刀流の短剣使いで、女王蟲の翅飾りや呪いを解いた暗黒の短剣を貰って感謝し切りの模様。二刀流を瑠璃に覚えさせたい弾美は、淳をやたらと羨ましがっていた。

それを聞いた進が、闇市に修行所があるとの噂を耳にしたと打ち明ける。

「闇市って何だっ、進？ レアアイテム屋より凄そうだなっ、入れないのか？」

「紹介状があれば入れるけど、金のメダルが10枚も必要なんだ。ちなみに金のメダルは、1枚3万ギルもする。どっちもレアアイテム店に売ってるよ」

「こっちのパーティの金のメダルは、最初はグランドイーターの果実に使ってたけど……クエストで入る事が分かって、今は溜め込み中。出来れば流水装備か暗塊装備の取れなかった部位を買いたいけど、闇市も覗いてみたいなあ」

進と淳が、金のメダルの使用経緯を報告する。村っちに融通して貰って10枚に近付いたみたいだが、全部使って入ってみて、中でメダル不足で何も出来なかつたら全く意味が無い。

そう話す進に、こちらの所有枚数を尋ねられ。弾美が瑠璃に顔を向けると、アイテム欄を開いた幼馴染から答えはすぐに返って来た。

「10枚なら余裕で足りるねえ……銀のメダルも勘定に入れたら、薫さんから貰った分も含めて27枚くらいかな？」

「うわあ、一財産ですねえ……でも、ここで10枚使っちゃうとちよっと心許ないかも？」

「ふむ、でもまあ、行けないエリアがあると言うのも腹が立つ。買っちゃうぞ！」

勢いにまかせてそう言い放つ弾美に、美井奈も拳を振り上げて、おっつと嬉しそうに呼応する。瑠璃としてはどちらでも良いのだが、取り敢えずは他のお店もチェックしておきたかった。

武器屋や装備屋、特に見ておきたかった合成屋をスルーして、キヤラの塊はレアアイテム店の前を陣取る形となり。他の冒険者キャラ達が何事かと、視線がチラチラ。

レアアイテム店のNPCは、妖しい容貌の背の低い闇種族の男だった。一見さんお断りと口にした後、渋々と言った感じでアイテムリストを提示する。

初めて見る弾美達には、刺激の強いリスト群だったりしたものの。

- \* 各属性の水晶玉 1枚
- \* 各属性の術書 1枚
- \* 土龍の尻尾 1枚
- \* 剣術指南書 2枚
- \* グランドイーターの果実 2枚(売り切れ)
- \* カメレオンジェル 3枚
- \* 各属性の宝珠 10枚
- \* 色々な種類の呼び水<sup>ランダム</sup> 5枚
- \* 2時間制限に+10分 4枚
- \* シリーズ装備(迅速、妖精) 3枚
- \* シリーズ装備(流水、暗塊) 5枚
- \* ライフポイント+1 3枚
- \* 金のメダル×1 || 銀のメダル×5 or 3万ギル
- \* 闇市への紹介状 10枚

シリーズ装備やライフポイントまで買い足せると知って、一行は驚きの表情。2時間制限に+10分の効能には、便利かも知れないけど、4人全員が買わないと意味がないと批難轟々。

パーティが一番欲しいのは、実はカメレオンジェルかもと言う意見が強かったり。瑠璃は指輪を同化したいし、美井奈も胴装備と脚装備は、良い物が出たら交換したい気満々。

弾美も頭装備に、手持ちのカメレオンジェルを使ってみたいのだが。半端な感じの数字が同化して、結局駄目だったら怖いと先延ばしにしていたのだ。

ところが進は、合計+5まで平気だとの情報を聞いた事があると  
言う。

「んじゃ、使ってみるか……美井奈、一緒に使うぞ！」

「了解です、お兄さんっ！」

同じく怖くて使えなかった美井奈と、同じ頭装備のバンダナに同時使用。一瞬の後、感動の同化完了の合図を受け取った二人は、瑠璃を真ん中においてハイタッチ。

そして恒例の抱きつき攻撃に、瑠璃もちよつと羨まし気な表情。

「私も、指輪を同化させたいなあ……使ってもいい、ハズミちゃん？」

「光スキル伸ばすんですよね、お姉ちゃま？ 私の持つてる指輪、差し上げますよっ！」

そんな訳で、薫から貰ったカメレオンジェルと美井奈が手渡してくれた光の特級リングを手に、瑠璃も指輪の同化完了と同時に装備交換。両側からおめでとうのコールに、ほのぼのとした気分でありがとつと返答する。

動かなくなつた弾美のパーティに、いい加減焦れていたギルドの面々だが。ハズミンとミイナの頭装備のグラが変わると、おおつと言つ驚きの声上がる。

『弾美、それって3つ目の暗塊装備かよ……すごいなっ！』

『いいなあ、こっちは1個しか見つけられなかつたんだよなあ』

『すごいねえ……金のメダル5個分の装備かあ、遅解きルートもやってみたかったなあ！』

周囲の称賛を浴びつつも、水面下では瑠璃が銀のメダルを金へと

交換し、弾美に10枚きつかり渡すという作業が。ギルド会話をしながらの、部屋の中では普通に会話。さらにキャラを操作して、闇市への紹介状を買う弾美、ちょっと忙しい。

購入手続きで、今のパーティの登録をすからと、全員の名前の確認を言い渡された。どうやらこの時点で登録した者以外は、絶対に入れてくれない仕様らしい。

ハズミンとルリルリ、ミイナとカオル。これで登録完了との言葉が返って来た。

『買ったぞ〜、闇市の紹介状。ちょっと見て来て、入る価値あるか確認するから待っていてくれ』

『おうっ、助かる……ギルド会話は継続出来るよな?』

入ってみたなら、どうやらそれは平気な様子。ダンジョン扱いの場所だと、駄目な可能性はあったのだが。四人であちこち動き回るが、闇市は住人からしてかなり変。

獣人が店番をしていたり、自動販売機が置いてあったり……通信でそう報告すると、かなりウケたようで、何か買って来てくれとせがまれてしまった。ノリで自販機の前に立つハズミン。

実際は、修行の塔への入場券だったので、地上に持ち帰っても無意味な事が判明したが。いつぞやの力ボチャ頭が店番をしている防具屋チエックで、瑠璃がはしゃいだ声を上げている。

どうやら良品が置いてあったようだ。地上で買わなくて良かったと、美井奈と仲良く報告し合う。

「美井奈ちゃん、武器屋さんで良さそうな性能のある?」

「無いですねえ……でも矢束は結構ダメージの良いのあるから、買っておきますね」

「防具屋さんは、防御の高いのと、防御が普通で付加価値の付いているの、2種類置いてあるね。耳装備とか指輪で1個5千くらい、布

装備で1万くらい、鋼装備で2万くらいだね」

「進に地上に置いてあるか聞いてみよう……おっ、ソウルイーターが店番してる……」

ソウルイーターとは、魂を喰らう悪霊モンスター。メイン世界ではかなり強くて、特殊技には誰もが苦渋を舐めさせられた覚えがある筈の敵だ。見た目もかなり不気味なのだが、ちんまりと店のカウンターに納まっている姿は結構笑える。

近付くのも怖いのが、カボチャ頭も平気そうだったしと、弾美は思い切って話し掛けてみた。途端に画面を見て笑い出した弾美に、女性陣の対応もいい加減慣れたもの。

弾美のモニター画面を覗き込んで、ログの確認をしてみれば。

「アナタのイノチ、金のメダル3枚で買い取りマス……だってさ、美井奈ちゃん」

「……ブラックキューモアが過ぎますねえ」

詳しく見てみれば、ライフポイントやトリガーの呼び水が、レアアイテム店と同等の価値で金のメダルと交換が可能らしい。術書や土龍の尻尾は、残念ながら価値が下がってしまい、銀のメダル3枚で交換との事。

使わない道具は、メダルと交換してしまえば良いと思うが。シリーズ装備さえ金のメダルと交換出来るとのメニュー表示に、固定化した物をどうやって交換するのかと、瑠璃は思わず首を傾げたくなる。他はどうやら、情報屋とかレア素材の合成屋さんで全部のよう。

何とか戻って来た弾美が発した第一声は、瑠璃をビックリさせるのに充分だった。

「瑠璃、俺達の命を売ろう（笑）」

「えっ、売るの……？」

弾美の言い分は尤もで、瑠璃も何となく納得。要するに、これからも死ぬつもりは無いし、パーティのライフポイントは美井奈の3に合わせれば、足並みも揃うと言うものらしい。

言い切られた形の瑠璃は、せつかく増えたライフポイントを躊躇無く1つ減らす事に。一緒にいた薫も納得してくれて、取り敢えず2つ分減らしてくれとの言葉に素直に従う。

これでライフ4つ分、12枚の金のメダルが出来た計算である。弾美はそれを預かると、地上のギルドメンバーの元へ。程なくして、全員引き連れて戻ってくる。呆れた行動力だが、瑠璃にも美井奈にも全く異存は無い様子。

むしろ、良かったと安心している感もあつたりして。

「すまないな、弾美。貯まったらきつと返すよ」

「別にいいよ、イノチを売って得たメダルだから、価値は相場次第

W

「このお店で命売れるの？ 私も6つも要らないから、2つ分売って渡すね？」

そんな会話の後、すぐに6枚返って来たメダル。お礼の言い合いになって、和む場の中。穴場な感じの装備屋の品揃えに、一同揃って何を誰に購入するか頭を悩ませ始める。

2つのパーティは10分以上掛かっただの武器装備の変更を終える。弾美パーティの購入履歴はこんな感じとなった。

遺跡のピアス 器用度+1、HP+5、防+2

遺跡のリング 器用度+2、HP+5、防+3

ゾゲン鋼の鎧 体力+2、HP+8、防+12

ゾゲン鋼の手甲 体力+2、HP+6、防+10

ゾゲン鋼の戦靴 体力+2、HP+6、防+10



\*

\*

薫から貰った風の宝珠と、片割れパーティからの術書の融通で、一気に風スキルを20まで上げ切ったハズミン。見事に《トルネードスピン》の複合スキル技を取得出来た。

その風スキル上昇により、一気に二つ魔法をゲットした弾美。まずは《風鈴》と言う魔法は、サイドステップの使用で、敵の注意を引き付けヘイトを取る事が可能である。

もう1つの風魔法の《風の鞭》は、斬撃を1度だけ遠隔攻撃にするというもの。飛び道具が無いに等しいハズミンには、なかなか使い勝手の良い魔法かも知れない。

更に暗塊装備で覚えた土スキルの《石つぶて》も、MPを使つて敵のタゲ取りを可能にする魔法。ハズミンのヘイト取りは、これによりかなり楽になった算段である。

超プニヨン装備よりゾゲン鋼の硬質なデザインを選んてしまったが、暗塊の兜の装備により防御力に問題はなし。HPも大幅アップで、より頼れる前衛になった。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：25

取得スキル : 片手剣47《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

《下段斬り》

《種族特性吸収》 《複・

トルネードスピン》

: 闇46《SPヒール》 《シャドータッチ

》 《闇の腐食》

: 風20《風鈴》 《風の鞭》 : 土20《

クラック》 《石つぶて》

種族スキル : 闇25《敵感知》 《影走り》 : 土10《

防御力アップ+10%》

装備

：武器 魔人の剣 攻撃力+17《耐久14/14》

：盾 サソリ模様の大盾 耐毒効果、防+7《耐久1

2/12》

：遠隔 木の弓 攻撃力+8《耐久11/11》

：筒 木の矢束 攻撃力+6

：頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、HP

+25、防+15

：首 鬼胡桃のペンダント HP+8、体力+2、防

+6

：耳1 銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2

：耳2 遺跡のピアス 器用度+1、HP+5、防+2

：胴 ソゲン鋼の鎧 体力+2、HP+8、防+12

：腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+15

：指輪1 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10

%、防+5

：指輪2 古代の指輪 体力+1、防御+5

：背 剛毛のマント 攻撃力+3、防+5

：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

：両脚 魔人の下衣 攻撃力+3、体力+2、腕力+

2、防+10

：両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+10

ポケット(最大6)

：小ポジション 小ポジション 万能薬

：中ポジション 中ポジション ：

万能薬

ルリルリは《幻惑の舞い》で、弱点の防御面が少しだけカバー出来るようになった。さらに攻撃力は複合スキルの《アイススラッシュ》が、氷スキルの上昇で効果がアップしている。

魔法に関しても、《魔女の接吻》で敵からMPを盗めるようになったのは大きい。弾美にネタ仕様だと笑われた《エンジェルリング》も、流氷のイヤリングを獲得出来た事で詠唱可能まで後一步といったところ。

ゾゲン鋼装備で防御力も上がり、前衛的にも自信に繋がる場所である。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：25

取得スキル : 細剣40 《二段突き》 《クリティカル1》

《麻痺撃》

《複・アイススラッシュ》 《

幻惑の舞い》

: 水43 《ウォーターミラー》 《ウォーター

ーシエル》

《ウォータースパ》 《ヒール》

: 光28 《光属性付与》 《エンジェルリン

グ》

: 氷30 《魔女の囁き》 《魔女の足止め》

《魔女の接吻》

種族スキル : 水24 《魔法回復量UP+10%》 《水上移

動》

装備 : 武器 天使のレイピア 攻撃力+14、知力+2、M

P + 8 《耐久14 / 14》

：盾 大亀の大盾 耐水魔法効果、防 + 10 《耐久15 / 15》

：筒 腰袋 ポケット + 2

：頭 流水の髪飾り 水スキル + 5、氷スキル + 5、MP + 25、防 + 8

：首 サファイアのネックレス 腕力 + 3、SP + 10%、防 + 5

：耳1 天使のピアス 光スキル + 3、知力 + 2、MP + 8、防 + 3

：耳2 流水のイヤリング 水スキル + 5、氷スキル + 5、MP + 25、防 + 5

：胴 薔薇のローブ ポケット + 2、HP + 10、MP + 10、防 + 9

：腕輪 ゴゲン鋼の手甲 体力 + 2、HP + 6、防 + 10

：指輪1 光の特級リング 光スキル + 4、HP + 15、攻撃距離 + 4%、防 + 4

：指輪2 水の指輪 水スキル + 3、精神力 + 1、防 + 1

：背 クモの巣のマント HP + 7、MP + 7、防 + 7

：腰 マジックベルト ポケット + 3、MP + 2、防 + 2

：両脚 流水のスカート 水スキル + 5、氷スキル +

5、MP + 25、防 + 10

：両足 ゴゲン鋼の戦靴 体力 + 2、HP + 6、防 +

10

ポケット(最大10) : 小ポーション : 中ポーション : 万能薬

万能薬

：中ポーション   ：中エーテル

：中エーテル   ：小エーテル   ：土の

水晶玉   ：水的水晶玉

弓矢が更にグレードアップして、合計攻撃力がとうとう30に達してしまつた美井奈。前衛の弾美がタゲ取りの魔法を覚えた事で、安心して削れるようになったと言える。

幸運のお守り効果でポケットが増えて、継続戦闘能力が5割り増しの感があるが。なにより消費アイテムの水晶玉を除けば、唯一の範囲攻撃持ちキャラである。今ではもう、パーティに欠かせない後衛削りキャラとの呼び声も高い感じ。

頭装備などで敏捷度が上がったお陰で、問題の攻撃間隔も割と速くなって来た。まだまだ伸びしろのあるキャラであるとも言える。

名前：ミイナ   属性：雷   レベル：23

取得スキル   ：弓術34《みだれ撃ち》   《貫通撃》   《近距

離ショット1》

：光32《ライトヒール》   《ホーリー

》《フラッシュ》

：雷22《俊敏付加》   《俊足付加》   ：

水10《ヒール》

種族スキル   ：雷23《攻撃速度UP+3%》   《雷精招来》

装備   ：武器 大樹の長杖   攻撃力+11、知力+3、MP+

20《耐久12/12》

：遠隔 雷鳴の弓矢   攻撃力+17、器用度+4、

敏捷度+4《耐久12/12》

防+8

：筒 貫きの矢束 攻撃力+14  
：頭 飛竜の兜 敏捷度+4、腕力+2、HP+10、

耐呪い効果、防+2

：首 幸運のお守り ポケット+2、移動速度UP、

+2

：耳1 血色のピアス 耐呪い効果、HP+10、防

防御+8

：耳2 金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2  
：胸 鉤爪付きの上衣 雷スキル+3、器用度+2、

1、防+6

：腕輪 超プニヨンの緑箒手 風スキル+2、敏捷+

+3

：指輪1 遺跡のリング 器用度+2、HP+5、防

%、防+5

：指輪2 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10

+2

：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

防御+7

：背 深紅のマント 攻撃力+4、MP+4、防+4  
：両脚 鉤爪付きの腰布 雷スキル+2、器用度+1、

：両足 編み上げブーツ 攻撃力+3、防+6

ーション

ポケット(最大8) : 小ーション : 中ーション : 中ポ

: 小エーテル : 中エーテル : 万能薬

: 中エーテル : 雷の水晶玉

『あれっ、美井奈ちゃんは弓術使いなの？』

『はい、そうですよ？ 何か問題でも？』

『いや、弓術使いってメイン世界でも稀だから。前衛とバランス取るの難しいし、お金掛かるし』

『瑠璃が前衛慣れしてなくて、さらに美井奈が前衛に参加したら、まとめる自信が無かったからな。ステツプ系使わず済んで、範囲攻撃外から攻撃出来る弓術使いなら行けそうかなって』

なる程と、周囲のメンバーからはいい作戦だ的な称賛が湧き上がる。何より、今までパーティが上手に噛み合って地上まで登って来れたと言う事実が大きい。

美井奈にしても、今では弓術使いとしての誇りと楽しさを持っているという。メイン世界でも挑戦してみたいのだけだと、ちよつと弾美におねだり顔。

すっかり弾美団長のギルド『蒼空ブンブン丸』に入る気満々の美井奈だが、メンバー全員否は無い。

「イベントが終わったら、しっかりメイン世界でも鍛えてやるからな！」

「はいっ、お願いしますっ、隊長！」

二人の呼吸もすっかり合ってきた今日この頃、瑠璃としても微笑ましい限りだ。時間はようやく2時に差しかかるうと言う頃。薫がちよつと安心した感じで、話し掛けて来た。

顔見知りを利用して無理やり入れて貰った事に、ちよつと抵抗があつたのだろう。

『じゃあ……レベルは別として、私達が入っても変な構成にはならない？』

『平気だと思っぞ、むしろ瑠璃の変わりにバリバリの前衛が一人欲しかった所だし』

弾美の言葉に、ホツとした雰囲気の薫。ギルドの男子からも特に弘一だが、大歓迎だとの声が掛かる。弘一はこういう奴だから相手にしないでと言われても、へこたれずにフレンド登録から自分をアピールしようと画策中らしく。

久々のギルドメンバー間での楽しい会合だったが、時間が過ぎるのは早いよう。村っちが少し家の片付けをして、4時からのバイトに備えないといけないから落ちると申し出た。

それに合わせる様に、瑠璃も少しそわそわし始める。部屋は昼食の片付けがおざなりにされているだけ、几帳面な瑠璃はそれが我慢ならない。

『俺のパーティー三人は、今日は時間全部使ってるから中立エリア以外は移動出来ないな。薰っち、悪いけど本格始動は明日からでいいかな？』

『了解、明日からヨロシクね』

改めてよろしくと挨拶を交し合い、弾美のパーティーも落ちる事に何だかんだと言いながらも、9時からインしていたのだ。皆が落ちる頃合いだとの判断だ。また今度との挨拶と、明日のイン時間の確認を行った後、三人揃ってログアウト。

そして揃って、盛大なため息をついてみたり。

「あゝ、何て言うか……たっぷり遊んでたっぷり喋った感じですね  
え」

「そうだな……おおっ、ようやく地上に辿り着けたんだよな、俺達  
！」

「そうだね、長かったねえ……」



改めて感慨に耽る一同。ここまで約12日間、長かったと思うのも当然である。寛ぎモードに移行する弾美と、片付けモードに入る瑠璃。美井奈は一瞬迷ったが、瑠璃の片づけを手伝いに階下へとくっ付いて行く。

弾美は先程のギルドメンバーや新メンバーとの交流を思い出しつつ、そう言えばマリモの店長はどうなったのだろうと思いを巡らせる。村つちと合同でイベントを攻略する約束だったが、彼女が連休中に旅行に出掛けてしまい、その目論見は没になったまでは聞いた記憶があるが。

まさか村つちと薫が知り合いだとは思わなかったが、何にせよ身元のしつかりしたメンバーをパーティに迎えられて良かった。

全くの初対面とのイベント攻略もあり得なくは無いが、信頼不足と言うのは怖いものだ。例えば、今日薫が信頼して宝珠やメダルを預けてくれたが、初対面では危ない行為なのだ。

あまり言いたくは無いが、貴重品を持ち逃げする不届き者もネット世界では存在するのだ。顔の見えない気安さからか、逆にそういう犯罪も珍しくないのが現状。

有名な世界的ネットゲームでは、ネット金銭の売買行為やハッキング行為、不法有利プログラムの流用やレア装備の不法入手など、次から次へと問題が持ち上がっている。

『フアンスカ』では半分閉ざされた性質上、そこまで酷い問題は無いけれど。対人トラブルはそれなりにあるのは確かである。

そんな事を考えていると、昨夜の父親との会話が蘇って来た。父親は直接的には、ゲーム開発室には関わりは無いとは言っていたが、意外なゲームデータの流用の話は、弾美にはそれなりにシヨックだった事も確か。

今日の自分の罵詈雑言も、データとして父親の元に届くのだろう

か？ だとしても、自分の感情を抑える楔にはならなかったのは、  
燦然たる事実である。

自分より弱い立場の者、小学生を力モにするような行為を、どう  
して見逃せようか？ むしろ、その事実を突きつけて、悔恨の思念  
を湧かせられなかった事実が悔やまれる。

ドロップを全て渡すと言う約束をしてしまった美井奈にも非があ  
ると、相手は言い逃れるかも知れない。だがそれは、ゲームの本質  
を逸れた行為であると弾美は思う。

ゲームと言うのは、参加した者全員が楽しむためにあるのだ。ド  
ロップ品の分配と言う、楽しみの半分を占める醍醐味を取られてし  
まって、どうしてゲームが楽しめようか？

女性陣がなかなか戻って来ないので、何となく悶々とした思考に  
嵌まり込んでしまった弾美。ようやく賑やかな声が、温かな湯気と  
共に階下から上がって来た。

遅いと思ったら、おやつの支度をしていたらしい。

「おまたせ〜。3時には早いけど、美井奈ちゃんの持ってきたおや  
つにしよう〜」

「お母ちゃまの手作りですよっ！ ぜひ感想を持って帰ってと、お  
母ちゃまの厳命です！」

先程片付けられたテーブルに、再び美味しそうな洋菓子が並んで  
いく。フルーツケーキは、取り分けしやすいように既にナイフが入  
っていた。細やかな気遣いに、なる程美井奈が過保護だと言うのも  
判る気がする瑠璃だった。

フルーツケーキとスコーンは、文句無しに美味しかった。手作り  
のお菓子というのは、絶対に市販のものとは違う独特の風味が存在す  
ると瑠璃は思う。

それが変な風に転がると、店売りのものと反対に不味くなるのだが。市販の物では出せない美味しさだと瑠璃が評すると、美井奈は自分もそう思うとニッコリ。

弾美は難しい評価は瑠璃にまかせて、半分以上一人で平らげてしまった。

それから楽しい勉強会。小さな机に、三人分のテキストが所狭しと並ぶ。瑠璃は張り切って仕切っていたが、おやつを食べ過ぎたので今日の夕方の散歩はちょっと遠出をしようという提案。

美井奈は、今日はもう少し犬達と仲良くなりたいと目を輝かせて口にする。確かに可愛いとは思うのだが、どうしてもあの体格を目にすると怖じ気付いてしまうのだそう。

マロンとコロンの小さい頃の写真が瑠璃の部屋にあると言うと、美井奈はぜひ見たいとせがんで来た。実は弾美の部屋にもあるのだが、それはまあ、内緒と言う事で。

自分の子供の頃の写真を見られると言うのは、酷く恥ずかしいものだと思う。

取りとめの無い話をしながら、静かに時間は過ぎて行く。勉強のはかどり具合も、まあまあといったところ。ところが時間が経つうちに、弾美は美井奈の容態がちょっと変な事に気付く。

何となく顔が赤くて、最初は知恵熱だと思ったのだが。ぽくっとしていた少女の感じに、弾美は風邪の症状を疑って。頭に手を当ててみると、案の定熱を持っている。

昨日からはしゃぎ過ぎの所を、昨夜の急な冷え込みだ。瑠璃も美井奈の異変に気付き、心配そうに少女を見ている。

「美井奈、お前朝から調子悪かったんじゃないのか？」

「……ちょっと寝冷えしてしまいましたけど、1日くらい持つかなと思って」

「いや、1日持っただけじゃ駄目だろ。明日学校あるんだし」  
「私もちよつと調子悪かったんだけど、やっぱり風邪ひいちゃってるかも」

美井奈に訊ねてみると、少女の自宅は今の時間無人だと言う。立花家も津嶋家も、親は今日も仕事中で不在である。タクシーで送ろうかと言ったが、美井奈は頑なに辞退する。

仕方が無いので、厚着をさせて弾美が自転車で送る事に。瑠璃も少ししんどそうだったのだが、どうしてもついて来ると言い張って自分の自転車を出して来る。

騒ぐ犬達は取り敢えず置いておいて、最徐行で歩道を進む2台の自転車。10分も掛からず、美井奈のマンション前に到着した。

美井奈の自宅に到着した時間は4時半を過ぎたくらい。5時半には母親が戻ってくると言うので、瑠璃が少女をパジャマに着替えさせて布団に押し込む。

弾美が冷凍庫から見つけて来たアイスノンは、キンキンに冷えていた。タオルで包んで後頭部に押し込むと、少女は一息ついたようだった。

母親に電話で知らせておいた方がいいだろうと、美井奈に番号を教えて貰う。瑠璃と美井奈が交代で状況を知らせた結果、美井奈の母親は帰りに風邪薬を買って帰ると報告して来た。

症状が酷いようなら、明日学校を休んで病院行きだと弾美が言う。電話の向こうで母親も調子が悪そうだったので、親子でお医者さんに掛かるかも知れないと返って来た。

「どうやら親子とも、揃って寝冷えが原因らしい。」

「母親が帰るまで居てやるうか、美井奈？」

「いえ、お姉ちゃんも具合悪そうだから……私寝てますから平気で

す  
」

弾美と瑠璃は、ちょっと相談してメモを残して家路につく事に。美井奈にお別れを言っ、自分達が扉を出たら鍵を掛けておくようにと厳命する。

そこから自転車で、再びゆつくりと帰宅する二人。家に着くと、瑠璃の両親とばったり出会った。いつもより早い時間の帰宅だが、瑠璃の父親の顔色を見ると納得。辛そうなのは、どうやら親娘とも一緒に様子である。

この調子では、明日は学校や会社どころでは無いかも知れない。

「ゆつくりやすめよ、瑠璃。何か用事あったら遠慮せず言っ来いよ。今日の夕方と、明日の朝の犬の散歩、俺一人で行ってるから」「ありがと、ハズミちゃん。あつ……明日学校休む事になったら、代わりに図書館で借りた本返しておいてくれる?」「オツケ」

そんな会話を交わしつつ、各々自宅へと戻っ行く。灰色の雲の向こうに確実に存在する太陽は、ゆつくりと確実に地平線の向こうへと姿を隠して行く所。

テレビのある2階の部屋は、先程の華やかさとはうって変わって静か過ぎる気がした。瑠璃がすっかりと片付けて行ったので、一見しても人のいた気配は感じないのだが。

それでも人のいた温もりだけは残っっている気がして、何となく心和んでみたものの。

限定イベントの攻略は、しばらくは灰色の雲の向こうだなと

気付いてしまふ弾美だった。

## 12 風邪っひきのゲーマー達（前書き）

先週は色々とおあって、休日しか投稿作業が出来ませんでした。読者の方々に申し訳ないなあと思いつつも、仕事上のごたごたは自分にはどうしようもなく。

昨日も強制残業があったり、先週は2日ほど応援出張に出されたり。何となく自分のオフ時間を計ってみたら、一日の平均が3時間しかありませんでした。

しかも、その時間内でご飯やお風呂を済ませないと駄目な訳で。モバゲーをちよろつとやったりすると、本当に小説に割ける時間はごく僅かだったりします。

自分にとっても、大切な時間なんですけどねえ。

最近はブログとかも手掛けてないので、ここがそんな感じと化していますけど。投稿の遅れている理由と称して、愚痴や不満が溢れ返っていますけどご了承くださいませ（笑）。

ちよつと今、職場の人事の異動で大変な事になっているのです。営業の人が今月いっぱいまで辞めちゃうので、自分がそれを引き継ぐ事になるらしく。

訳の分からぬまま、新しい仕事を覚えるのに四苦八苦してたりして。

そんな現状はともかく、小説では風邪が蔓延してるみたいですね。実は自分も今、喉が痛くて風邪の初期症状状態です。梅雨の雨降りかこちらは酷くて、やたらと気温が下がったせいかも。スタッフの一人が風邪を引くと、あつという間に皆に行き渡るので（笑）。

そんな訳で、小説内の元気なメンバーは揃ってレベル上げ。FFオンラインをしていた頃は、ありふれた日常でしたけど。改めて小説に書いてみると、何だか変なNM風味に彩られて。

昔のゲーム風景を思い起こしながら、懐かしさと共に書き綴った記憶があります。何だかんだと行って、あのゲームはレベルを上げないと始まりませんでしたから。

今ではそんな苦勞にまみれたプレイも、良き思い出？



## 12 風邪っひきのゲーマー達

「さむっ……！！」

たまらずに飛び起きた、真つ暗闇の自室の中。暗闇から伝わるのは、圧倒的な気温の低さ。昨日から寒いとは思っていたが、ここまですぐに温度が下がる事は稀ではなからうか。

弾美は身体を震わせながら、ベット脇の照明に灯をともす。夕方に美井奈を送って行った時に使った上着を羽織りつつ、寝ぼけた頭の働きで次に何をすべきかと思考を働かせる。

枕元のデジタル時計を見れば、まだ午前2時過ぎ。起きるには早過ぎる。

部屋の戸棚に、毛布が入っているのを思い出した。暖かい冬の布団だが、全然違和感が無い程の気温である。取り出しながらも、暖房を入れた方が早かったかとも思うのだが。

庭先から、マロンの寂しげな鳴き声が聞こえて来た。外はどれだけ寒いんだと、弾美は窓に歩み寄って確認。寒い夜の外気は触れられそうだと、変な感傷に浸りつつ。

これは愛犬も家に避難させた方が良くないかなという気になってみた。

この辺りの地方の独特の気象現象なのか、季節の変わり目に時々こんなぶり返しがやって来る事がある。放射冷却だとか何とか、詳しい仕組みは弾美も知らないが。

階段を下りて行きながら、両親の心配もした方が良くないと思いついて。リビングの全部屋操作の室内調節器で両親の寝室を、堂々と明かりをつけながらオンにする。

普段もオンにしておけば、1年を通して快適な生活を過ごせるの

は間違い無いのだけれど。そんな勿体無い事をしている家庭は、そこから探しても滅多に無い筈。

電気代の事を考えると、どうしてもそちらに軍配が上がるようだ。子供の頃はこのスイッチ類で遊んでいて、散々家族に怒られたものだが。今日に限っては風邪予防の手助けになっている。先進技術も捨てたものではないと、弾美は一人納得顔。

それが終わると、庭へ続くガラス戸をそつと開けて、マロンの名前を呼んでやる。呼ぶまでも無く明かりと人の気配に側にいた大型犬は、主人の了解を得ると、のそりと家に上がりこむ。

冬の寒い日などは、玄関やリビングの隅っこで夜を越す事を許されているのだ。仔犬の頃には弾美の部屋まで連れ込もうと画策していたが、それは母親に全力で阻止された記憶がある。

愛犬の脚の裏の汚れをボロタオルで拭いてやっていると、後ろから不意に弾美に声が掛かった。母親の律子さんが、気配を感じて起きて来た様である。

室内の寒さに、やはり少し震えながら。羽織るものを探して視線を彷徨わせるのだが、適当なものが見付からず困っている感じ。弾美は仕方なく自分の羽織っている上着を差し出した。

感謝の言葉と共に、さつそくそれを肩にかける律子さん。

「ありがとう、弾美、暖房入れてくれたの？ これだけ寒いんじゃ、仕方ないわねえ……あなたの部屋も使いなさい、風邪引いちゃうわ」「毛布出したから大丈夫……マロンも一晚避難させておくよ？」

「それはいいけど……お隣さんは大丈夫かしらねえ？ 昨日も旦那さん、調子悪そうだったけど」

心配そうに窓の外を見遣る律子さん。だが幾ら親しいとは言っても、こんな夜中に警告に出向いたり電話をしたりするのも常識外れ

である。お隣の家は、こちらと違って静かなもの。

弾美もそれは同じ事で、夕方からこちら、幼馴染の瑠璃の事が心配ではあるのだが。近くに居てもどうしようもないもどかしさを感じ、何となく犬の背を撫でてみる。

母親が明日も早いと口にして、寝室に戻りたそんな素振りを見せたので。弾美もお隣の心配は、ひとまず脇に置いておいて。ひとまずは、素直に寝室に戻る事にする。

今度はちゃんとした眠りに就くべく、再びベットへと向かう弾美であった。

\* \* \*

朝になっても気温はなかなか上がろうとせず、マロンも外出にたじろぐ気配を見せたものの。やっぱり散歩はしたいようで、もやの掛かった街道にえいやつと飛び出す。

ところが津嶋家はほぼ全滅模様。予想した通りに、瑠璃とその父親がまずダウン。ペットのコロンも具合が悪そうで、弾美は代わりに散歩に連れ出すのを断念したのだった。

今朝はさすがに、公園で人の気配を探すのも一苦労な感じである。その分マロンの手綱を外して、好き勝手に一緒に駆け回れたのは良かったのだが。

薫も今日は、さすがに外出を控えたようだった。公園で姿を発見出来ず、弾美は少し寂しい思い。仕方なく、ボールを使うのを断念して、土のトラックを延々と走り続ける事に。

こんな寒い日は、さすがにボールを触る気になれない。

ところが幾らも走らない内に、隣と一緒に走るマロンの気が、芝生の斜面の方に逸れたのに弾美は気付いた。知り合いで発見したのかと、弾美もそちらに目を向けると。遅れて登場の薫が、普段より厚着をして立っていた。

寒そうに身体を震わせながら、こちらに手を振りつつ慎重に斜面を降りて来る。

「弾美君、おはよ〜」

「おはよう、薫っち。今日はさすがに来ないかと思った」

「ウチの田舎は寒い所だからねえ。このくらい平気、多分」

そう言いながらも、やっぱりブルブルと震えている薫。言っている事と行動が一致していないが、マロンを見るとにぱつと笑い、元気良くついておいでと駆け出してみる。

弾美もそれに追従、今日はとことん走りたい気分。

「今日は瑠璃ちゃんお休み？ 珍しいけど、ひよつとして風邪でも引いた？」

「うん、ウチのパーティは俺と薫っち以外、風邪で全滅」

走りながらの会話は、それなりに労力を必要とするのだが。あっちゃーという顔付きの薫だったが、弾美が意外とさばさばしているのを見て首を傾げる。

昨日の夕方からの事情を説明して貰いつつ、しばらく限定イベントの進行が停止するかもとの言葉に、薫は黙って頷くしかなく。知り合ったばかりの少女達の心配などしてみるのだが。

昨日初めて少しだけ会話した、美井奈という女の子の事を弾美に訊ねてみると。変な奴だとのさっぱりした答えが返って来た。最初の人見知りから抜け出すと、途端に手がつれられない程の甘えん坊になるらしく、からかうと面白いとも付け加えて来る。

既に何度か合同でインしているので、自分とも瑠璃ともかなり親しくなっていると聞くと。歳上の薫としても、黙ってはいられない。自分もその輪に加えて貰いたいと申し出る。

弾美はそれをあつさり承諾。今日は無理だが、木曜日の放課後には合同インするかもとの事。

「わ、わかった。是非私も出席させて頂戴。何が必要かしら？」

「ん〜、簡易モニターとか、コントローラーとか……結構な荷物になるけど、平気かな？」

「自転車持つてるから大丈夫だと思う。わっ、わっ、今から楽しみだなあ……！」

子供のようにはしゃぐ歳上の女性を横目で見ながら、弾美もそうなれば良いと切に願う。それまでに瑠璃と美井奈には、体調をしっかりと戻して貰わないと。

なかなか明るくならない周囲の景色に、二人ともうんざりしつつも。それでも太陽の存在は、確実に時間の経過を提示してくれている。身体を動かした事で、ようやくしゃきつとして来た弾美。

今日も頑張ろうと、持って来たタオルで汗を拭うのだった。

\*

\*

散歩から帰ると、家の中が少し慌ただしかった。お隣さんが会社を休むというので、そちらの研究チームへの申し合わせみたいな事を、母親二人が話し合っていたのだ。

旦那さんと娘が風邪をひいた事で、恭子さんも看病で休みを取る事にしたようだ。津嶋家で無事だったのは、恭子さんだけだったようで、その事実についての発言を弾美は控える事に。

ただ、学校が終わったら瑠璃の見舞いにも来てくれるよう、さり気無い誘いは恭子さんからあったのだが。

「学校の方はどうなの、弾美？ ひょっとして休校とかあるのかしらっ。」

「どうだろ、8時にメール通信があるかも知れないけど。情報パネルには何も無かったよ」

「私、今日こっちで朝食取るわ。パンとコーヒーお願い、りっちゃん」

マイペースな恭子さんは、家族の看病も何のその。弾美の母親に朝食をねだった後、新聞を広げて読み始める。もっとも、向こうの家庭では朝食をとる元気のある者は皆無なのだろうが。

母親同士の戯れ合いは放っておいて、弾美は自室に戻って学校の支度を整える。まだ時間は7時を過ぎた程度である。いつも8時過ぎに家を出るので、まだまだ急ぐ必要は無いのだが。

週明けの登校日は、いつも何かと油断をしてしまいがちなのだ。気を引き締めて時間割のチェックに時間をかけてみる。

着替えを終えた弾美は、そろそろクラスメイトが起きた頃かと、隣の部屋でメールチェック。親しい者同士でも、何かの折にはフアンスカのシステムを利用してメールを送ってしまうのだ。

案の定、フレンドからのメールが結構貯まっている。薫からのメールは、朝寒すぎて起きれなかったけど、風邪はひいてないとの事。そっちは大丈夫かと、心配する文面。

美井奈名義の差出人は、確実に母親からのものらしかった。昨日のお礼とお詫び、結局今日は母子ともお休みモードですとの事。ゲームは出来そうに無いのでごめんなさい、励ましの連絡待ってますと結んであった。

取り敢えず、簡単な文面でメールの返事を出す弾美。今日のイベント攻略は中止です、学校から帰って詳しい連絡を取りますと文面を結び、ちよつと一息。

あとの面々は、学校でも顔を合わす奴らばかり。進は風邪ひいてないか心配する文面、弘一は風邪ひいたけどゲームにイン出来なく

なるから、学校は休まず行くとの根性のある内容。

ここまで来たら執念なのかもと、弾美は無理するなどと書いたメールを返してみる。

母親が食事の催促をして来たので、弾美は階下に下りて行く事に。マリモの店長からのメールは、相変わらず遊びにおいでとの文面なので無視。行けば必ず、風邪っ引きで人手の足りなくなったお店の手伝いに駆り出されるに違いない。

キッチンでは、父親が酷く肩身の狭い思いをしているようだった。恭子さんの広げている新聞に読みたそうな視線を向けつつ、テーブルの端っこでコーヒーを飲んでいる。

弾美は席につくと、パンをかじりながら何気ない一言。

「姉ちゃんからメール来てたけど。連休に帰って来るようあれだけしつこく誘っておいて、両親が休み取ってないって何事かって」  
「そ、それは……戻って来てたらちゃんと取るつもりだったんだけどねえ」

恭子さんは大笑い、確かにそれは無いわねと、酷くツボに嵌まった様子。だが、他人の家族の事は笑えないと弾美に言われると、恭子さんの笑いはぐっと詰まってみたり。

確かに事情は向こうも同じ。引きつった表情で、律子さんにお互い大変ねと持ちかける。

「りっちゃんも風邪って事で、今日休んじゃえば？」  
「そんな世間体の悪い事出来ませんか！」

確かに、大の大人がズル休みなど出来やしないだろう。しかし最近の両親達のハードスケジュールは並ではない気がする。弾美も気掛かりではあるが、これと言って出来る事も無く。

食事を早々と終え、学校へと向かう算段をする弾美であった。

\* \* \*

大井蒼空付属中学校の弾美の教室では、朝から波乱含み。弾美のクラスの担任の先生も風邪で休みを取ったようで、そうになると数学の時間が確実に自習になるという事。

教室の中を見渡しても、空いた席がポツポツと目立つ。学校でも風邪がはやっているのは間違いないようだ。具合の悪そうな生徒もちらほらいるし、そういう意味でも教室は騒がしい。

副担任が出席を取って、風邪が流行っているから気をつけてと分りきった事をHRで述べた。進の情報によると、他のクラスの欠席率も似たような感じらしい。

それから、率と言えばまた中間発表が出たから自習中にデータを持っていくと一言。

自習の時間は4時限目で、プリントの提出の義務はあったものの、弾美や進が手分けして範囲分担を決めてしまったので、半分以上の空き時間が出来てしまった。

強引に作ったと言えばそれまでだが、弾美と進が揃った事でゲーム仲間も自然にぞろぞろと集まって来る。隣の席の委員長、星野亜紀は迷惑そうにその集団を睨んでいたが。

騒ぐと言うより、研究会のような佇まい。プリントも終わっているので、強く文句も言えない。

「データ見せてくれ、進。今回はどんな内容だっ？」

「ステージクリア率もそうだけど、今回は活動パーティの数がかかるようになるよ」

「へえっ！ じゃあ、はつきりライバルの数も分かるんだ」



進の持つて来た紙切れを、弾美はせっかちにめくってみると。前回に見たのと似たような内容に、今回は少し違った付随文が書き添えられていて。

ステージ突破率は、この際どうでも良いが。確かに活動確認済パーティーというのが見て取れる。シリーズ装備や木の葉&果実入手率も、今回はパーティーでの数値のよう。

これは、この先パーティーの人数制限が4人で変更が無いという証だろうか？

#### ステージ突破率&地上滞在率

- \*ステージ1突破率
- \*ステージ2突破率
- \*ステージ3突破率
- \*ステージ4突破率、60%（+下層ステージ滞在率 1%）
- \*ステージ5突破率、57%（+下層ステージ滞在率 1%）
- \*ステージ6突破率、46%（+下層ステージ滞在率11%）
- \*地上滞在率、44% 活動確認済パーティー……87パーティー

#### シリーズ装備

- \*妖精シリーズ 入手率、24%（全4部位）……最終部位入手率0パーティー
- \*迅速シリーズ 入手率、67%（全8部位）……最終部位入手率0パーティー
- \*流水シリーズ 入手率、18%（全4部位）……最終部位入手率1パーティー
- \*暗塊シリーズ 入手率、7%（全4部位）……最終部位入手率0パーティー

木の葉&果実入手率

\* 1〜3枚…… 59パーティ

\* 4〜6枚…… 4パーティ

\* 7〜9枚…… 0パーティ

「活動確認済されているのが87パーティって書いてるだろ？ 多分一緒にクエストこなしたり、木の葉を取りに行ったりしてるパーティの数を言ってるんだと思うけど」

「じゃあ、俺のパーティは入ってないな、地上に出たばかりだし。つてか、今日もメンバーの半分が風邪で、攻略出来そうに無いや」  
「ウチの兄貴がリーダーのパーティ、これ見ると結構進んでるかな？ 木の葉3枚集めてる」

高校生の兄と一緒にパーティを組んで攻略している、高野茂というクラスメイトが弾美のメモを覗き込んでそう言った。典型的な早解きで挑んで、果実を買い込んでレベルを上げ、クエストエリアと廃墟エリアでさらに経験値と金のメダルを稼いでいるらしい。

早解き組は、だいたいこんな感じでのルートを進んでいるらしいのだが。フリーエリアは敵のレベルが高すぎて、最初に近付いて手痛い目にあって以来、攻略の範囲から外していると言う。

そんな感じで、地上で4日と少し過ごして、今のレベルは24だそう。

「おつ、じゃあ茂のパーティはもうすぐ門を潜ってイベントエリアに進めるんだな！」

「うん、いきなり行くか、全部エリアを廻り切るかはまだ未定だけど」

「早いなあ、俺が勝ってるのはレベルだけか」

「何言ってるんだよ、弾美のパーティ、シリーズ装備をほとんどコンプリートしてるじゃんか」

進の言う事はもつともだが、果たしてそれを有効に使えるかどうかは、これからの展開に掛かっている。早解きのパーティが苦も無くさっさと先のステージを駆け上がったしまえば、レア装備を苦勞して揃えた甲斐も無いと言う物だ。

弾美がそう言うのと、イベント攻略はそこまで甘くないだろうとの意見が大半。しかし、友達との話を総合すると、レベルの補正は相だなものらしく。同じ敵と戦った情報を照らし合わせても、使ってきた特殊技や配置された中ボスの種類が結構違うのだ。

これからも、上げたレベルが自分の首を絞めるのではと、内心冷や冷やしている弾美である。

レア装備の最終部位の入手率も、データを見る限りはハードな道のりのよう。薫の迅速装備を見ても、胴装備が出ていなかったため、恐らく最後の部位は胴なのだろうが。

ヒントは今の所、全く無しと言っていいだろう。進も地上の中立エリアのNPCは全部話したと言っていたが、レア装備の情報は聞いた事も無いという。

それはそれで、自分で解く楽しみが増えて嬉しいものだ。もちろん狙うは全部位コンプリート。

「あれっ、ステージ1から3のところ消されてるけど、これは何故？」

「うん、どうやらステージごと消滅したらしい。つまり、もう新規参入者は受け付けないって事」

ひゃあつと、クラスメートから悲鳴のような声上がる。時間の経過と共に下から切り捨てると言うパターンは、今までのイベントでも存在したのだが。やはりその事実を聞くと、ちょっと焦ってしまふ心理というものは誰しも働くようだ。

地上滞在率から察するに、4百人以上の冒険者が地上の中立エリアで活動しているようだ。あぶれた半端者達が、高レベルの遅解きパーティのあまった椅子を狙っている時間も、もうそれほど残されていないかも知れない。

自分のレベルを上げて行かない事には、門を潜れず脱落者リストに入ってしまう可能性が高くなる一方な気がする。

「まあ、厳しい気もするけど当然かなあ？ もうイベント始まって2週間経つし、ステージの情報もいい加減出回ってるしなあ」

「確かにそうだなあ……もう2週間か、長かったような短かった様な気がするけど」

「苦労したよなあ、弾美は地上エリア全然廻ってないんだろ？ すっごい苦労するぜ!？」

「うん、更に闇市の紹介状買って裏エリアも行けるようにしたから、廻る所いっぱいだな!」

「4位から7位の賞品も発表されたみたいだよ。やっぱり商品券や家電とかのセットになってて、今までのイベントと比較したら、賞品も結構凄い内容みたい」

メモの賞品の欄を指差す進に、おおっという言葉と共に群がる同級生達。4位からして、既に2万円程度の商品券や文具・音楽商品券なのは凄い。しかも、キャンプ用品セットやラジカセ、最新掃除機や特選お米1年分など、副賞の幅も選べる仕様になっているようだ。

家族も思わず応援したくなる、そんなコンセプトが見え隠れしている気もするが。

闇市の情報は、さすがに誰も持っていなかったようである。早解きのパーティは、やっぱり金のメダルを果実でのレベルアップに使ってしまうから仕方ないのだろうけど。

大きなギルドに所属してイベントに参加しているクラスメイトも、ほとんどが早解きパーティのよう。好奇心で闇市に入って、魂を売って金のメダルを増やしたと言う弾実の行動に、皆が驚き呆れている様子だ。

金のメダルは喉から手が出るほど欲しいが、ライフポイントはイベント継続の命綱。おいそれと売り払うのは考えものという意見が、常識的に考えると大半の者が思う事。

弾美のやんちゃに慣れている同級生の面々も、それは不味いだろうという顔色。

「でも、パーティの一人でも欠けたら、どっち道攻略は上手く行きっこ無いんだし。それならライフポイントを、最低ラインのキャラに合わせるのも一つの手じゃないか？」

「弾美は1回も死んだ事が無いからなあ、かなりきつい戦闘繰り返してるくせに。1回でもゲームオーバー経験したら、考えも変わってたと思うぞ？」

「そうそう、欲しいレアアイテムの上位だもん、ライフポイントって」

そんなものなのかと、同級生の苦言に弾美は思案顔。考えてみたら、崖っぷちの美井奈を引き連れての地上エリア到達は、奇跡的な出来事だったのかも知れない。

グループでは、この話をきっかけにレアアイテムの話で盛り上がっていた。術書や水晶玉は、買うほどの価値が無いとか、トリガーで出現するNMは何なのだろうかとか。

「弾美は遅解きだから、トリガーたくさんあるんだろ？」

「あゝ、5つくらいあったかなあ……珍しいのでは、アスレチックエリアで取ったのもあるぞ？」

「えっ、何でそんなところでトリガー取れるんだっ!？」

「トリガーとか複合スキルの書とか、結構美味しく頂いたぞ。一步間違えると死んでたけど」

メンバーのざわつき具合は、今日の最高のボルテージを示し。事の顛末を詳しく聞きたがる皆に答えて、弾美は思い出しつつアスレチックエリアの仕掛けを話し始める。

隣の席の委員長もプリントを終え、弾美の話に聞き入っているようだった。目が合うと、ちょっと不自然に視線を逸らし、慌ててクラスメイトの持って来たプリントを回収している。

委員長がゲームに興味があるとは、聞いた事が無かったが。

今度誘ってみるのもいいかも知れないと、何となく内心でいい案だと思ふ弾美。ギルドの運営の事に思いを馳せながら、割と的外れな考えに辿り着くのだった。

\*

\*

放課後の教室は、先生の指導で早く家に帰ってくれた的な雰囲気一色だった。明日も休みが多ければ、ひよっとしたら休校になるかも知れないとの伝達もあり。それを受けて、生徒達の多くは微妙な表情に。

学校が休みなのは嬉しいが、外に出回れないのではあまり関係ない。学校と各家庭がネット接続されているのが標準なこの街では、部屋に居ない事態が簡単にはれてしまうのだ。

おちおち悪さもしていられないのなら、友達と会える学校の方が具合が良い場合もある。

「弾美ちゃん、ちょっとお願いいい？」

急に呼び止められて、進と帰り支度をしていた弾美は驚いて振り

返る。まさか瑠璃かと思ったが、声の主はその友達の茜だった。彼女も小学校からの知り合いで、瑠璃と仲が良いものだから、弾美の事を下の名前で呼ぶのに慣れてしまっている。

茜は一人で、手にはコピーしたプリントを数枚ほど持参していた。どうやら今日の授業のノートのコピーのようで、それも何故か二人分の分量に見える。

静香はどうしたか聞いてみたら、瑠璃と同じく風邪で休みだったらしい。

「私、これから静ちゃんの家にお見舞いに行くから、瑠璃ちゃんの前には弾美ちゃんに行つて欲しくて。一応、今日の授業のノートのコピーと、あとは私から早く良くなってねって伝えておいて」

「真面目だな、茜。でもネット接続で、今日の授業範囲、全部分かるじゃないか」

「弾美、お前は……人の親切を無にするような事を……」

進かちよつと呆れ顔で、弾美の発言を聞いてよろめいて見せる。

茜も少しおカナムリな表情。自分の親切心に待ったをかけられ、病人にはこういう心遣いが必要なのだと力説。

おっとり系の茜にすこまれても、あまり怖くは無いのだが。自分で直接行った方がその心遣いはより伝わるのではと弾美が言つと、瑠璃はお隣さんに来て貰つた方が喜ぶ筈と言い返された。

どちらにせよ、見舞いには行くつもりだった弾美。肩をすくめてコピーを受け取る。

帰り道で合流した弘一は、メールの通りにいかにも具合の悪そうな顔付きをしていた。一緒に帰る同級生に、何となく生暖かい声援を貰う姿は、割と哀愁が漂っていたが。

弾美がイベントの切り捨てトラップが怖いから、元気な者同士でレベル上げしようと提案したら。必ず行くのでヨロシクと、元気で

はない弘一も掠れた声音で答えて来た。

「ゲームー根性全開の態度は、もはや褒めて良いのか貶すべきなのか。」

夕方の帰宅路は、日が射していて結構温かである。昼夜の温暖さが激しいのも、あまりよろしくは無いのだが。弾美が家の前に着いた時には、元気に吠えるのはマロンのみ。

いつもの通りに、一旦部屋に戻って着替えてからマロンを散歩に連れて行って。習慣的にやっている事なのだが、一人だと何となく味気ない。コロンの具合は朝と変わらず、恭子さんが犬小屋に暖かくする工夫をしていたが、効果は上がっていないよう。

マロンも兄弟が隣にいない散歩は、何となく物足りない感じを受けている様子だ。

お土産のノートのコピーと、冷蔵庫においてあった賞味期限ぎりぎりのプリンを持って。弾美がお隣の扉を開けて声を掛けると、恭子さんが喜んで迎え入れてくれた。

父娘とも、熱は高いが容態は安定しており、医者に掛かる程ではないらしい。1日安静にしていたので、明日か明後日には良くなるだろうと弾美に告げて来た。

ただ、飼い犬のコロンの事が実は一番心配で。犬は自分の具合を説明する事が出来ないのです、明日も調子が悪かったら、獣医に連れて行ってくれと弾美に頼んで来る恭子さん。

弾美は快く了承したが、さすがにそう言われると心配で。瑠璃に会う前に、コロンを見舞ってみたり。

津嶋家の階段を上がるのも、実はかなり久し振りだったりする弾美。瑠璃の兄が海外留学する前は、ほぼ毎日のように遊びに訪れて



いたのだが。

その頃の瑠璃は控えめな少女だったが、やっぱり頑張り屋さんで、瑠璃の兄は遊びの発明に関しても天才で、ちゃんと弾美と瑠璃と一緒に遊べるゲームを作るのがとても上手だった。

その頃はもちろん、ネットゲームなどませた遊びなど眼中に無く、ファンスカもまだ配信前で、その存在すら知られてはいなかったのだが。一緒にみんなで楽しむという喜びを教えてくれた第一人者は、やはり瑠璃の兄だったと弾美は思う。

瑠璃の部屋に入る前に、何となく瑠璃の兄の部屋で足を止めていたら。その隣の部屋が開いて、当人が顔を見せた。顔色は、ちょっと熱を持っているのが分かる程度の朱が差している。

ちょっと驚いたような顔をして、少女はじつと弾美を窺っている。

「寝てないと駄目だろうが、病人なんだから」

「うん……下で声がしてたのに、なかなか入って来ないからどうしたのかと思って」

「ちよつと、昔を思い出してた。兄ちゃん元気か？」

「うん、手書きの手紙をありがとうって……エメールがさっき届いたの、見る？」

弾美は是非見たいといい、瑠璃の背中を押して部屋に入り込む。

瑠璃をベットに寝かせて、しばらくは手紙と一緒に送られて来た写真の話で盛り上がる。

メールでもたくさん、瑠璃の兄が写した授業風景やキャンパスの景色、街の風景などが送られて来るらしく。瑠璃はそれをきっちりパソコンでフォルダ分けして管理していたようだ。

弾美が目にするのも初めてな画像が多く、水臭いぞと瑠璃に釘を刺す。自分は弾美の姉のメールをいつも真っ先に見せて貰っている癖に、瑠璃の兄の海外生活はあまり話したがない風なのだ。

弾美にそう言われると、瑠璃は躊躇いつつも本音を口にした。

「だって……ハズミちゃんがお兄ちゃんを追って、海外の大学に行くって言い出したら嫌だもん」

「なんだそりゃ、その時はお前も来ればいいじゃんか……第一俺は、そこまで頭良くないし」

「外国に住むのはちょっと怖いし、飛行機に乗るのも嫌かなあ……？」

何となく拗ねたような甘えたような口調に、弾美は少し気まずくなつて。ベット脇に置いてあったへそくりニヤンコのぬいぐるみを手に取り、さり気無く話題を変える。

弾美の姉からは、メールでの返信しか今の所無いのだが。瑠璃に感謝しているので、その内何か良い物を買って郵送するとの言伝を賜っていたのだ。

弾美の名前で出した手紙だったのだが、モロに瑠璃の文字で書かれていたため。聡い姉には、簡単に首謀者がばれてしまっていた模様。

話はさらに、飼い犬のコロンの具合とか、学校の話になって行き。気が付けば、30分以上の長話に突入していた。最近ゲームばかり一緒にしている気がしていた弾美は、ちょっと意外な表情。

ほとんど毎日顔を合わせているのに、ここまで話題が事欠かずによく喋れるものだど、弾美は率直に意見を口にした。自分は特に、お喋りに飢えている訳でもないのに。

瑠璃は不思議そうに、自分も会話には飢えていないと反論。

「別に話題がなくても、そんなに気まずい感じはしないんじゃないかなあ？　ウチの家族は、お母さんは別にして、いつもそんな感じだよ？」

「そうかな……？ 普段は一緒に勉強したりして、無口になることはあるけど。何もしてなかったらやっぱり変な空気になるだろ……？」

「そんなことないよ。散歩中でも喋らなくても、全然平気じゃない？」

「散歩中は、散歩という行為がすでに、思考を塞いでるじゃないか。よし、じゃあ今試してみよう」

「いいよ？」

そんな訳で、しばらく二人で無言の状態に突入してみたり。変な空気とか気まずい感じの前に、二人が気付いたのは……部屋の扉の外でこちらを窺う誰かの気配。

弾美が静かに席を立て、そろっと部屋の扉を開けてみると。お茶の用意の整ったお盆を持って、瑠璃の母親の恭子さんが、やっぱりそろっと佇んでいた。

お盆のお茶は、何故かすっかり冷めているよう。

「……お気遣い無く」

「あら、いえいえ！ こちらこそお気遣い無く」

微妙な雰囲気の中で会話を交わす二人を、瑠璃が不思議そうに眺めていた。

\*

\*

夜の8時、弾美がイベント世界にログインすると。既にギルドメンバーの面々はギルド会話で談話中。何故か美井奈もその中にいて、弾美が驚いて問い質すと。

昼間たっぷり寝たので、今は全然眠くないらしい。それで会話だけでもと、母親の監修の元にログイン中との事。もしかと思ひ、弾

美はケーキのお礼でカマをかける。

普通に、また娘に持たせますね（＾　＾）／との答えが返って来た。

『美井奈はゲームすると、全力ではしゃぐから。歯止めが利かなくなったら、無理やり布団に押し込んで下さい』

『実は娘の寝室からなので、もう布団に入ってるんですけどw 無理はさせないので、ご安心を』

『ええと……私達はどうか対処すればいいのかな？』

戸惑い気味の薫をパーティに招きつつ、弾美は何と言って説明すれば良いか考えている。本人から、空気だと思ってくださいの言葉と、お母ちゃまばかり喋らないでと怒られました（；；）との悲しいお知らせが。

躊躇っているのは進パーティの面々も同じだが、女っ気があれば幸せというメンツが大半を占めるため。弾美が美井奈の母ちゃんは若くて超美人と言つと、大盛り上がり。

そんなアホな会話で盛り上がっていると、バイトから速攻で戻って来た村っちが、遅れてゴメンと飛び込んで来た。早速三人ずつのパーティに別れて、一同はフリーエリアを目指す。

ただっ広いフリーエリアだが、ギルド会話が可能なため一安心。パーティは弾美と薫と村っちの17〜25の格差組と進と淳と弘一のレベル21組の2組構成。

フリーエリアでの今夜の目的は、ただひたすらレベルを上げる事。メイン世界ではキャラを強くするために、当たり前のように行われている行為なのだ。

適正エリアで適正人数で行えば、2時間も掛ければ高レベル者でも1は確実に上がるこのレベル上げも。今回は変則な狩りになるた

め、狩り場を慎重に選ぶ所から始める事に。

微妙な分かれ方の2組だが、装備やスキルの充実振りから弾美のパーティの方が強敵を狩るのに適している。そこで弾美が考え付いたのが、種族スキルを利用した、2組でのレベル上げである。

闇種族のスキルである《影走り》は、ダンジョンなどで足が速くなる特性があるのだが。他にも物陰に隠れると、タゲを取った敵の追尾から逃れられる事が可能なのだ。

そこで考えたのが、次なる作戦。まずは弓矢攻撃のダメージで敵の強さを判断し、強い敵なら弾美チームが、弱そうならば進チームが狩り進めようという戦法だったりする。

上手く行くかは、さっぱり分からない行き当たりばったりな計略ではある。

『上手く行くかなあ……？ 取り敢えず、柔らかそうなスライムのいる沼縁に来たけど』

『多少のリスクは仕方が無いだろ。その大木が丁度木陰だし、ここを拠点にしよう。敵も多いし』

『分かった、んじゃ釣りを頼む弾美！』

『頑張ってください〜、お兄さん方〜』

美井奈の心のこもった応援に、異様に盛り上がるギルドメンバーの面々。何故か薫や村っちまでも、美井奈の応援にお姉さんも頑張るよ〜 と熱いコールを返している。

こんなノリで大丈夫なのかと思いつつも、まずはたくさんいるスライムにアタック。ハズミンは弱い攻撃力の弓矢で、遠くの敵に矢を射掛けて反転して戻って行く。

木陰を目指しつつ、ログのダメージをメンバーに伝える。

『5……試しにこっちで倒してみる』

『オッケー、じゃあ殴るよ〜薫っち〜！』

『ほいさっ！』

スライムを舐めている訳ではないが、一通り試した結果、こいつは安全パイだと言う結論に。そんな訳で、2組で枯れるまで狩り尽くし、次なる獲物はパタパタと沼の上を飛んでいるインプ。

魔族の使い走りと言う印象だが、HPは左程高くなかった筈。ただ一つ、特殊能力で仲間を呼び寄せる技を使って来た記憶があるのだが。それも、厄介な事に格上の魔人まで幅広く。

仲間に相談したところ、生息数も割と多いし、何より魔族はドロップと経験値が非常に美味しい。そんな訳で、狩りの対象にはいいんじゃないかの的な答えが返って来た。

『仲間呼んだら、空いてる方が取るって事で！』

『了解っ、じゃあ釣るよ』

ハズミンは忙しく走り回り、パタパタ浮遊しているインプに弓矢攻撃。くわっとタゲが来て、もの凄い勢いで追いかけてくる敵を、ハズミンは木陰でやり過ごす。

『6……防御は弱いな、そっちで』

『オツケー、タゲ切れた！釣るぞー』

土属性の弘一のキャラが、挑発魔法でタゲの切れたインプを搔っ攫う。淳の二刀流と、進の両手鎌が、あっという間に貧弱なHPの魔族を倒し切る。

これも行けそうだと、弾美はどんどん遠慮なく釣りに掛かる。

何となく、暇な者が狩りの様子を実況するようになったのは、美井奈を暇にしないようにとの配慮なのだろうか。たまにインプが仲間の魔人を呼び寄せると、パーティは絶叫しつつも不意の事態を楽

しんでる風でもあったり。

何しろ、呼ばれた魔人は大抵銀のメダルや大量のギルをドロップするのだ。強い敵には違いないのだが、進のパーティーでも油断せず時間を掛ければ何とか行ける程度。

つまりは、美味しい敵には違いないという事でもある。

沼のインプが綺麗に掃除された頃、進と淳が早くもレベルアップの運びに。その頃には、スライムの第二陣が再ポップしており、割と美味しい狩り場だとのパーティー評価。

ここまで危険な道のりを、10分以上掛けて来た甲斐があった。スライムは全て進パーティーに譲る事にして、弾美は近くで邪魔な大カエルを狩るとパーティーに知らせる。

アクティブらしく、何度か絡まれそうになって、狩りの潤滑さを妨げる存在なのは間違い無く。大型モンスターは経験値も良いので、薫達にも異存は無く狩りの対象に設定する。

近くの邪魔な存在の敵を、特殊技の呑み込みに注意しながら狩り始める変則パーティー。

『弾美、スライム狩り終わった』

『了解、こつちも邪魔な大カエルの掃除終わった。次はインプ釣って持っていくな』

『オツケー、こつちからでいいのかな？』

弾美の種族スキルを使用したの釣り作戦は大当たり。最初はパーティーでは使いようが無いネタスキルだと莫迦にしていたのだが、こんな風に役立つ日が来るとは思わなかった。

何しろ敵がリンクしても、簡単にタゲを切れるので安全に釣りが出来るのだ。

インプ2週目で、薫と村っちがレベルアップ。その次のスライム

で弘一がレベルアップして、1時間を待たずにそれぞれがいい感じである。さらに狩りに熱が入り始める2組のパーティ。

久々のレベル上げパーティに、弾美達は忘れていた初期の頃の情報 誰よりも強くなりたいたいという渴望を思い出す。あの頃は放課後のインが待ち遠しく、夕食休憩もそこにレベル上げに従事していたもの。

今はそこまでやり込む事は無いが、期間限定イベントは別。組む相手は微妙に違えど、渾身の力で突き進むのみ。

単調な狩り作業に、そこまで熱くならないだろうと思っていたのだが。戦闘中にも拘らず、美井奈を交えたトークが大盛り上がり。1時間が過ぎる頃にはスライム>インプ>大カエルのサイクルが完全に出来上がり、狩りのテンポも程よく順調。

今夜中にもう1つずつのレベルアップを目指そうと、意気も上がる2組のパーティのだが。ところが狩り場での異変は、意外な所からやって来てしまう。

まずはスライムの色違いがポコポコと生まれて来て、一同揃って不審顔。

『あれっ、スライムの色がオレンジ色に変わってる……？』

『あゝ、それはエーテルを落とす奴じゃないですか？』

『美井奈ちゃん、物知りね。でも、何で急に変わったんだろ？』

NMが湧く前兆かな？』

実際戦ってみた感触では、微妙に強くなっていたりして。今までの戦利品で豊富なポーションを惜し気もなく使いながら、取り敢えず狩りを続けてみる一行。

こうなるとちよつとの油断も命取りと、周りに気を配る待機パーティ。次の変化は、沼の付近に湧き上がる蚊柱。ちゃんとHPが存在して殴る事も出来るのだが、一撃で消滅してしまう。



何のネタだろうかと、思わずそれを追いつめる連中もチラホラ。

『あはは、虫柱……経験値5だつてw』

『いやいや、明らかにおかしいだろっ！ 周囲に気を配った方がい  
いって！』

『何で急に敵の種類が変化するの？ わっ、虫柱にカエルが寄つて  
きたっ！』

『カエルは注意ですよっ、呑み込まれない様に気をつけてください  
！』

『美井奈は呑み込まれのプロだからな……カエルに2回、ワニとサ  
メに1回ずつだったか？w』

バラさないで下さいと騒ぐ美井奈を尻目に、冒険者にたかり始め  
る蚊柱の群れ。それに釣られて、大カエルがいつの間にか周囲に集  
まってきた様子なのだが。

2組いる余裕で、何とか敵を退けて行くパーティ。全て何とか倒  
し終わった頃には、軽い達成感すら湧き起こる。ところが背丈より  
も高い藪の間から、大蛇が顔を覗かせているのを目にして。

どうやら食い物を探しに現れたらしく。食物連鎖、ここに極まれ  
り。

『わっ、カエルに釣られて、今度は蛇が来たっ！』

『NMだっ、強いんじゃないの、コレ？』

『弾美中心に、パーティ組みなおそう！ レベル高いキャラ4人で』

見付からない様避難しつつ、話し合いにより弾美と進、弘一と淳  
の『蒼空ブンブン丸』の生え抜きで大蛇退治に乗り出す事に。敵の  
強さは不明だが、これで倒せないなら仕方が無い。

戦闘前に、進が転移の棒切れというアイテムを弾美に渡して来た。  
アイテム屋のクエストをこなすと買える様になるアイテムで、一瞬

で地上の中立エリアに転移出来るアイテムだ。

緊急の際には、これで逃げるといふ事らしい。

悲壮な覚悟からの戦闘は、一進一退の過激な攻防がしばらく続いた。近くにアクティブの大力エルが再ポップしていたら、そうも言っていないらなかつただろうが。

弾美ががちりタゲを取るのだが、弘一も片手剣と盾持ちキャラ。氷属性キャラの進は、両手鎌持ちだがスキルは魔法にもかなり振り込んでいるため、削り力がやや不足気味。

弾美の複合スキルと淳の二刀流で、手強い大蛇のHPを削って行くものの。大蛇の毒や呑み込み、尻尾範囲での反撃がこの上なく容赦ない。純粹な回復役がないので、ポジションが見る間に減って行く戦闘組の面々だったり。

弾美はいつもと勝手の違うパーティの構成に困惑しつつも、ひたすら敵の攻撃をかわす仕事に集中。SPが貯まったらスキル技で削り、敵が沈黙するのをひたすら待つ。

進の氷魔法のスタンでの範囲攻撃止めから、ようやく流れはこちらへと来たようだ。噛み付き攻撃をブロックした後の、弾美の新複合スキル《トルネードスピ》で、ようやく決着がついた。

一応周囲を警戒しながら、美井奈に実況してくれていた薫と村っちから歓声上がる。結構な経験値と、ドロップも金のメダルに剣術指南書、両手剣と蛇皮のベルトとマントなどなど。

喜びながらどうやって分けようかと話していたら、薫がもう1体NMを発見したとの報告。

『みんな、オレンジ色のでっかいスライムがいるよ？ こいつもNMみたいw』

『うわっ……フリーエリア人気無いから、出番待ちのNMが多いのかもな？』

『チャンスじゃないですかっ、みなさん頑張ってくださいっ!』

美井奈の応援を受けて、今度はレベルの低い薫と村っちを軸にパーティーを組んでみようという話に。所詮スライムだし、経験値稼ぎにいいんじゃないかの意見の中、張り切り出す女性陣。

進と弘一が加わり、弾美は今回は解説者に回る事に。淳と一緒に見学をしながら、美井奈と呑気に語り合ったりなどしつつ。それでもレベルの低い女性陣の削りは、なかなかどうして侮れない。

あっという間に、特大スライムを削って行っているよう。

『コロンがな、風邪引いてて調子悪いんだって。明日病院に連れて行かないと駄目かも』

『えっ、コロンはお姉ちゃまの方の子ですよ？ なんでお兄さんが?』

『津嶋家が、ほぼ風邪で全滅してるからな。明日部活休んで行くって言っちゃったし』

『犬も風邪引くんですかあ、よっぽど急激に寒さが来たんですねえ……』

『おっ、スライムの範囲攻撃を進が止め損なった、ちょっと悲惨な事になってる……w』

『弾美……何故失敗を嬉しそうに話す?w』

ほとんど関係ない話を繰り返す中、割とあっさり特大スライムを平らげる特選パーティー。こちらからも金のメダルや大エーテル、水属性の指輪や術書や水晶玉のセットがドロップ。

経験値も戦利品も、ほくほくの結果にメンバーが盛り上がっている中。何故だか狩り場には、大カエルとスライムが再ポップしないという事態が生じていた。

どうやらNMが湧いた後は、しばらくの間雑魚は出現しない模様である。レベル上げの狩りが再開出来ず、困った一同はそれならば

インプだけでもと探し始めるも。

真っ赤なベストを着たインプが1匹、沼の上空を滑空しているだけ。

『……NM3連発って、メイン世界でも記憶に無いんだけど？w』

『無いなあ……限定イベントって、大盤振る舞いだなあw』

『ってか、アレもやっぱり仲間呼ぶのかなあ……？』

今回は仲間を呼ぶモンスターなだけに、パーティ分けも慎重に。

HPの低いインプを薰と村うちと盾役の弘一でキープし、手強い魔人は弾美と進と淳で倒そうという作戦に。

敵が増援を呼ぶまでに、結構間があるのかと油断していた弾美パーティだった。弘一が挑発で釣ると同時に、インプは手に持った角笛をいきなり吹き鳴らした。

聞きつけて現れた真っ赤な肌の魔人は、炎をまとった両手鎌を手にしてヤル気満々。いかにも強そうな外見の敵の出現に、パーティからは悲鳴が上がる。

弾美が攻撃を盾で受けると、やっぱり炎の追加ダメージ。おまけに闇系の魔法攻撃が、ウザい事この上ない。

やはり強いのは魔人の方だが、削り力に関して言えば負けてはいない構成である。弾美は範囲攻撃の炎のブレスに手間取りながら、攻撃的なパーティ布陣で魔人を追い詰めて行く。

インプ殲滅班は、魔法を確実に止める手段を持たずに苦戦しているものの。やはりHPが元から少ない弱点に助けられ、あと一息という所まで追い詰めていた。

こっちは片付きそうとの余裕の通信が、しかし一瞬後には悲鳴と罵詈雑言に変わる。

『キヤー、インプが死に際に、もう1匹魔人呼んだーっ!!』

『信じられねえっ、弾美っ、そっち終わりそうかつ！？』  
『まだ半分以上削れてないっ！ そっち弘一だけで抑えられるかっ！？』

絶対に無理！ との答えが返って来たが、やって貰うしか無いとギルドの面々。昔馴染みなだけに容赦のない押し付けだが、補佐に進が廻る事で何とか折り合いがつく。

そんな訳で、削り班から進が抜けてキープ班に。2匹目の魔人は炎をまとった大斧を携えており、こちらもかなり強そうだ。薫と村っちの女性コンビが削り班に合流して、さっさと数を減らすべくHPの半減した魔人をガンガン殴り始める。

幸い側面に回って殴れば、魔人の攻撃はやって来ない。敵が単純な特殊技しか持ってなくて助かった。弾美だけブレスや大鎌の攻撃に晒されながら、何とかポーションがぶ飲みで命を繋ぐ。

レベルが低いとは言え、アタッカーのみの構成は強烈。程なく1匹目を屠ると、漏れる安堵のため息。

『こっちようやく魔人倒したぞっつ、でも、俺はもうポーション切れた〜！』

『こっちはやばいつ、早く応援来てっ！』

『おめでとっございます〜』

『いや、まだもう1匹いるってば、美井奈ちゃんw』

戦闘中のパーティメンバーの入れ替えは、戦闘テクニックとして主流ではあるものの。認められているのは3回までで、それ以上すると経験値やドロップの削減というペナルティが生じる。

熟考の末、淳と村っちが殲滅パーティに合流する事になった。初っ端に何とか弘一からタゲを奪い取って、弘一がその隙に薫からポーションの補充を受けて戦闘続行。

削り削られの激戦の末、時間は掛かったものの2匹目も撃破に成

功。喜ぶ一同だが、一番喜んでいるのは美井奈だったかも知れない。

『おめでとうございます、皆さんっ!』

『ありがとう、美井奈ちゃん』

『……美井奈、ちよっと興奮し過ぎじゃないか？ お前は病人だろ。

戦利品をお土産に貰ってやるから、もう寝ろっ!』

『そうですね……風邪を長引かせてもいけないから、そろそろ寝かせる事にします。皆さんお休みなさいm( - - )m』

本人の意向はまるで無視。それでも暖かいお休みなさいの大合唱がしばらく続き、敵影の完全に途絶えた沼縁で、休息を取りつつしばし歓談。弾美の複合スキルは片手剣の癖にかなり強いとか、いやいや母親の前であんな物言いをする度胸の方が凄いとかが、いや

弾美にすれば、さり気無い気遣いを見せたつもりだったのだが。時計を見れば、時間ももう9時半を過ぎている。病人が床に就くには、程好い時間には違いない。

それにしても、言い方つてもものがあるだろうとメンバーは結構呆れ顔。

それはともかく、魔人とインプの経験値とドロップは良好だった。薫と村っちは今日2度目のレベルアップ。弾美もつられて26に上がったしまい、進達ももう少しで上がりそうとの事。

戦利品には闇の術書と水晶玉、闇火の大鎌に闇火の大斧、呪いのネックレスに魔人の下衣、後は金のメダル2枚とインプの角笛という、用途不明のアイテム。

『お、大斧は性能良いねー、私貰って良い?』

『スキル伸ばしてるの村っただけだから、全く問題無しだろ。大鎌は進だな』

『魔人の下衣も性能いいなあ、ポケット減るけど俺貰おうかな?』

そんな訳で淳が魔人の下衣をお持ち帰り。薫は特に要らないと遠慮するので、剣術指南書を押し付ける事に。弾美は遠慮無く金のメダル2枚と、瑠璃のお土産用に水の術書と大エーテル、美井奈のお土産に呪いのネックレスとインプの角笛を貰う。

今夜一番頑張った筈の弘一は、元々流水氷装備2つと暗塊装備1つを装備しているという事もあって。余りもので良いだろうと、何故か不遇の扱い振り。

本人は文句を言いつつも、闇の術書を貰えて鉾を収めるという遣り取りが。

その後しばらく、他のモンスターを狩りながら沼の東南を探索して歩いてみたが。魚人やザリガニ型、水鳥やカメ型のモンスターばかりで、3人で狩るにはちよつと辛い強さ。

ポーションのストックも残り少ない一行は、用心しつつの狩りを強いられ。結局は、残り時間で何とか進達のレベルを上げる程度の経験値を稼ぐに留まった。

それでもパーティは進達がレベル23に、薫と村つちが19へと上がって、1日の成果とすれば上々の大満足。明日も同じ場所に行こうかと、誰かの提案に同意の声も大多数。

インの時間も8時で良いと、これも全員の同意で決定された。

2時間縛りの仕掛けが、丁度いい感じで発動したので。各自、持っている転移の棒切れで中立エリアに舞い戻る事に。便利なアイテムに、弾美は思わず進に買い置きを頼んでしまう。

進が請け負いつつも、アイテム店のクエストについて弾美に説明している。薫がさり気なく横から、クエスト表を製作中だと打ち明けた。そんな訳で、弾美は彼女をクエスト大臣に任命。

ちなみに、瑠璃はカバン大臣らしい。金のメダルや余計なアイテ

ムは全部彼女持ち。いないと不便でどうしようもない。押し付けられた事を知っている進などは、ちよつと不憫に思ってみたり。

幼馴染みがいなくて寂しいんじゃないのと、村っちなあたりがからかってくるが。弾美にしてみれば、瑠璃は空気みたいな存在なので、何ともコメントの仕様がなない。

だから返答は、ちよつと強がった感じて返したのだが。

一刻も早い体調の復帰を待ち望んでいるのは間違いない。何となく隣の家を窺ってしまう弾美だった



### 13 フリーエリアと母参戦！（前書き）

激動の一週間がようやく終わって、何とか一息ついてる所ですけど。身体を覆う変な疲労は、果たして週末からの仕事疲れなのか、潜伏中の風邪のウィルスのせいなのか。

分からないけど、とにかく疲れました。

はやく仕事関係の引き継ぎも、落ち着いて欲しいんですけどねえ。そうしたら、小説を書く余裕も生まれて来るかとも思っんですが……。

実は、新たな物語を結構書き綴ってる最中なのです^^

今回の章ですけど、テーマ的なものも織り込みつつ。果たしてオンラインゲームで、1個のキャラを別々の人間が操っても良いものかどうか？

逆は結構、問題になってますよね。1人の人間が2つも3つもアカウント取って、同時に同じ鯖で動かしたりする行為。ゲームによっては、最初から禁止している所もあるくらいで。

これの有利な点は、強いNMに出会った時に、気軽に応援が呼べる事でしょうか。もちろん器用に2キャラを操らないと駄目なのですが、強化や回復魔法が飛ぶだけでも違って来ますもんね。ずるいって言われても、まあ仕方ないかも。

さて、それじゃあキャラの共有は果たして可か不可か？

育てたキャラを、お金で他人に売っちゃうという行為は、もちろん論外でしょうけど。兄弟でとか親子でとか、そんなパターンならオッケーって気がします。

たまにゲーム友達とかでも、雰囲気違ってたりする時もあったり。果たしてキーボード打ってる人、自分の昔から知ってる人だろうか

と思う時もあったりして（笑）。そういう疑問を感じた人、案外と多いんじゃないかって気もします。

オンラインゲームって、色々と奥が深いのですよ^^

### 13 フリーエリアと母参戦！

弾美のクラスの担任は、引き続き今日も休みのようだ。美井奈と瑠璃も同じく病欠。風邪の様子見でもう1日経過を見るとい話を、弾美は昨日の夜のうちに聞いている。

そうになると、期間限定イベントの進行も焦っても仕方が無い事。弾美のギルドでは、メンバーが完全復帰するまで待とうという雰囲気、落着いている。

学校の方も、実は停滞ムードだったりする。先生の病欠数も昨日より増えてしまい、どうやら生徒の欠席も昨日より多い様子。午後からの授業は中止になるとの話がHRで言い渡され、それも仕方が無いという空気が教室に流れる。

「弘一の奴、今日も何とか休まずに来れたみたいだな」

「あいつ根性あるなあ……瑠璃と美井奈は、明日には復帰出来そうだった」

「そりゃ良かった。じゃあ、明日からイベント攻略に戻るのな？」

「出来ればそうしたいけど……あんまり無理もさせられないから、ちょっと微妙」

そんな会話を交わしつつ、午前中のみ授業はやっぱり感覚的にも早い感じもする次第。給食は用意されているとの事で、それを食べて掃除をして、それから解散となるらしい。

変則的な時間割だが、急遽決まった半ドンなのでそれも仕方無い。

今日も2限目が自習となり、恒例となったフランスカのイベント評論会の面々。弾美の席を中心に椅子を持ち寄って集まり、たった1日振りだが進行状況や裏話などの定期報告。

さすがに、昨日の今日ではそれ程の変化は無いのだけれど。今日

はクラスメートの一人が、弾美のリクエストの大学サークルのオリジナル攻略本を持って来てくれていた。

同人誌とは思えないぶ厚い作りで、データの取り方など玄人はだしである。皆が顔をくっ付けるようにして覗き込み、その内容の充実振りに感心する事しきり。

値段を聞くと、ポツキリ1000円らしい。同人誌は大抵は大量生産などしないので、原価が高くなってしまいうらしいから、それを聞くと安く感じてしまう。他にもイラスト中心のものとか、好みのキャラで漫画を描いているものなど、合計5冊。

一同いつの間にか会話も忘れて、同人誌の読み直しなどしてみたり。買い取る事は可能かと訊ねたら、これはもう古い奴だからただで良いと返事が返って来た。

しばらくは、誰がどれを貰うか揉め合いになったりしたのだが。欲しいデータはコピー機を使って共有すると言う事で、何とか弾美が本を貰える事になった。

「良かった、俺は長槍のスキル技なら分かるけど、他はよく知らないからなあ。結構カテゴリー分けとかも綺麗にされてるから、見やすくていいな、コレ」

「凄いやなあ、コレ。何人くらいでデータ取ったのかな？ 全部の武器データ網羅してるし、種族スキルもレベル100超えまで載ってるしなあ」

「弾美、短剣スキルのデータのコピーお願い。あと、雷と風系の魔法のページもっ」

「イラスト集は、コピー欲しい人いない？ 俺貰っちゃうよ？」

また面白そうな同人誌を見つけたら、買い取るから持って来てと同級生にお願いしつつ。そう言えばパーティに新規加入した薫は、確か大学の寮に住んでいたとか言う話を聞いたのを思い出す弾美。

彼女に言えば、もっと簡単に色んな同人誌を入手出来るかも知れない。大学の寮というのも見てみたいし、薫の部屋に押しかけての休日合同インを画策するのも面白いかも。

企む顔つきになった弾実を、進がちょっと不安げに観察する。長い付き合いなので、弾美の行動で誰かが犠牲になりそうな気配を、ついつい感じてしまっていたり。

変な方向に転ばなければ良いがと、進は内心念じるのであった。

\*

\*

今日も茜は授業のノートのコピーを、瑠璃のお土産にするようだ。購買部のコピー機コーナーで偶然出会うと、茜は自然に弾美のグループに吸収された。

帰宅の集団は、波の様に学校の出口へと向かっている。友達にコピーをと思っている生徒も多いのか、2台あるコピー機もそれなりの列が出来上がっていたが。

弾美達はそんな殊勲な気持ちからではなく、例の同人誌のデータのコピーが目的。弾美が本体を貰うので、コピー代金は弾美持ちとなっている。そのため、枚数が4人で20枚を超えていて、それなりの出費になっていたのだが。

「終わったぞ、茜。今日もノートのコピー持って行ってやるうか？」  
「ありがと。でも今日はお昼から丸々休みだから、私が両方行くつもりだよ」

「なんだ、相沢は今日も休みなのか……お大事にって言っておいてくれ」

礼儀正しく、進あたりはそんな感じで済むのだが。弘一や晃辺りだと、お見舞いに行こうかと大騒ぎ。そんな事をされたら治る風邪も酷くなると言われた二人は、それなりに傷付いた顔付き。

それでも土曜日に予定されている、弾美と淳の所属するバスケの練習試合に、薫や村つちが見学に来ると話してやると。すぐに立ち直って、これはチャンスと二人で顔を見合わせる。

自分達も行くから、終わった後にオフ会のセッティングをと懇願する二人。

茜のコピーが終わるのを待ちながら、そんな雑談をしていると。クラス委員長の星野亜紀が、帰り支度で近付いて来た。弾美を中心にしたクラスの男子達と、他のクラスの弾美のギルドメンバーの面々という顔触れの前で立ち止まり、ちよつと思案気な素振り。

誰に話があるのかと、皆が訝っていたら。亜紀は少し躊躇った後、弾美に向かってこう切り出して来た。茜など、ちよつと緊張しつつも興味津々な顔で成り行きを見守っている。オンナの勘で、何となく分かってしまう気のある素振りだが。

亜紀はそんな態度も、あまり隠すつもりも無い模様。

「立花君……今日も津嶋さんのお見舞いに行くの？」

「ん、どうだろう……昨日行っただし、まあ家は隣だからそんな面倒がる事も無いけどな」

「そう……私も伺っていいかしら？」

「それなら、茜と一緒に行けよ。今から行くそうだから」

「ぴゃっ……!？」

急に話を振られた茜は、豆鉄砲から鰻が飛び出したかのようなビツクリ顔。何となく他人の三角関係的な雰囲気成り行きを眺めていたら、自分にも糸のもつれが絡んで来たみたいだ。

弾美は全く、亜紀の思惑に気付いていない様子。瑠璃と亜紀が、どういふ関係というか立場なのかも、我関せずなしれつとした表情で、本当に気付いていないみたいなのが逆にスゴイ。

茜は急に額に汗を掻き始め。亜紀によろしくと言われた時には、

何をと訊き返しそうに。

我関せずなのは、クラスメイトも同じ事らしい。弾美からコピーを受け取ると、そそくさと別れを告げて帰路につく。事情を何となく察している進は、やはり困った顔で顎に手を当てて考え込む素振り。茜と目が合うと、憐れむ様に頷いてみせる。

そんな同情はちっとも嬉しくない茜だが、お見舞いに来るといふ人間を無碍に断る訳にも行かず。亜紀にそれと無く、瑠璃とそんなに親しかったかと問い質すも。

いいえと、素で返されてしまう。相手の無表情なのがかえって怖い茜は、愛想笑いで返すしか無い。

「学年で一番の秀才との噂のある人ですもの。一度じっくり話をしてみたかったの」

「委員長も勉強出来るもんな。小説とか持って行ったら、瑠璃も喜ぶぜ。一応最近は、色んなジャンル読み漁ってるみたいだし」

弾美が後ろから、それと知らずに焚き付けて来る始末。茜は精一杯の眼力で持つて、弾美にそれ以上は何も言わないでと電波を発していたのだが。

軽く無視され、一団は用事も終わったし帰ろうかと動き出す。茜にとつては、地獄の裁判の審判人の役割をこなしに行くようなもの。足取りも重く、一番後ろをトボトボとついて歩いていたが。

いつの間にか、立花家と津島家の家の前に。横にいるのは弾美と亜紀の二人だけ。

「あっ、俺ちよつと出掛けないと。瑠璃の母ちゃんに、犬を獣医に連れて行くよう頼まれてんだ」

「そつ……残念だけど仕方ないわね。大人数で病人を訪ねるのも悪いし」

「ぴやつ……!？」

強制的に二人きりにされた茜は、もうどうしてよいのやら。泣きそうな顔で、何度も訪れた事のある津島家の呼び鈴を押す。いつも賑やかな番犬が、今日は全く反応なし。

確かに弾美の言う通りのよう。茜にとっては、全く何の手助けにもなっていないが。

瑠璃の母親の恭子さんが、今日も休みを取っていたらしく、同級生の少女達を笑顔で迎え入れる。事情を話すまでも無く、茜は家内へと引き込まれてしまった。

瑠璃の母親は、さっそく主導権を握ったのマシンガントークに突入。さすがの委員長も、これには戸惑っている模様だ。茜は慣れているので、適当に聞き流しているが。

肝心のお見舞いは、当分先になりそうだと茜は内心喜んでいたり。

玄関先で5分以上、そんなやり取りをしていたら。いつの間にか着替えを終わった弾美が、話し込んでる女性陣の後ろを通過して庭へと入り込んでいた。呆れるようにこちらを見遣り、お見舞いはどうしたという目付き。

こっちの事情は放つといてと、茜も視線で送り返す。

「恭子さん、旅行カバン用のカート借りるよ。コロンを獣医に連れて行くから。それから、いい加減一人を2階に案内したら？」

「そうそう、そう思ったたのよ! 弾美ちゃん、コロンをお願いね……それとも車出そうかしら？」

それには及ばないと、弾美はてきぱきと要らないダンボールを取り出し、コロンの仮住まいを丁寧に作り始める。側のコロンは、やっぱりぐったりしてしんどそう。



その優しさの半分もこっちに欲しいと、茜は内心恨めしく憤慨するのであった。

\* \* \*

獣医の名前は『いわさきペットクリニック』と言って、お昼時にもかわらず結構な繁盛振りだった。大きなダンボールを院内に持ち込むのに苦労したが、入ってみると置き場も無い。

どうしようかと佇んでいると、受け付けのお姉さんが急き込んで自分を手招きしている。何事かと、コロンの入ったダンボールごと移動する弾美。

かなりの重さに、足元もふらふら。

「こんにちは、受診の紙を1枚頂戴。結構待つ感じ……だよな？」  
「うん、それはいいんだけど……スタッフが2人も風邪で休んじゃって、先生二人でも全然廻らないのよ！ 立花君、悪いんだけど手伝ってくれない？」

またこのパターンかと思いつつ、知り合いが困っているのならば手助けしない訳には行かない。受け付けのお姉さんに案内されつつ、ダンボールごと奥の診療所に入ると。

てんでこ舞いの唯美先生を発見。マリモの店長のお姉さんで、弾美や瑠璃とも知り合いの30半ばの美人獣医さんである。もう一人、獣医の資格をもつ20代後半の神田さんという男の先生と、今は荒ぶるネコを相手に格闘している。

動物は人間と違って、治療を受けているという感謝が圧倒的に無い。治療は常に、こんな感じらしい。

「先生、立花君が手伝ってくれるそうです！」

「ありがたいつ、軍手とエプロンその戸棚ねっ！ 消毒終わった

ら、この子の固定手伝って！」

受け付けの女性スタッフに、コロンの順番のキープをお願いしつつ。弾美は翻弄されるように、治療と言う戦場に放り込まれる。小型のネコならまだマシな方。注射や治療を嫌がるペットは、時には飼い主にも牙を剥くのだ。

気性の荒い中型犬は特に厄介だが、弾美は何年も犬を飼っているだけあって慣れたもの。時には両膝や全身を使って、まるで動物と格闘している気にさえなってきた。

その合間には、粗相した動物の糞の始末や機材の消毒。二人の先生に言われるままに、あれを用意したりこれを片付けたり。たまに専門用語の羅列に苦しめられたり、逃げ出した動物の捕獲に奔走したり。

こんな修羅場を毎日体験しているのかと思うと、唯美先生や神田さんに対する敬意が自然に湧いて来るのだが。仕事の多さと忙しさが、常にそれを上回っている感じである。

好きでないと出来ない仕事と言うのも存在するのかもしれない、弾美は内心悲鳴を上げてみる。

いつの間にか、コロンの順番が廻って来ていたようだ。体温やベロや鼻の具合を見られている間、コロンはひたすら大人しく。弾美は心配しつつ付き添っていたが、恐らくただの風邪との判断に胸を撫で下ろす。

注射をして貰っている間も、コロンはちょっと悲しそうな表情をただけ。そのまま診察室の端っこにダンボールごと放っておかれる感じで、弾美は再び治療現場に戻される。この部屋なら暖かいし、居心地もよいだろう。

コロンの具合を心配しつつ、お手伝いの格闘はもうしばらく続く気配。

ようやく一息つけたのは、もう夕食の時間も迫ろうかという頃合いの時刻。へとへと弾美は、座り込んだままじっと手を見る。気取つての行動ではなく、動物に傷つけられた爪や何やらの後を調べているためなのだが。

ヒリヒリする傷跡も、腕には幾つか付いているけれど。何にせよ、地獄の忙しさが終わってホッと佇んでいると。神田さんと唯美先生がコーヒーを手に近付いて来た。

弾美の分も用意されていて、有り難く受け取ってみる。

「本当にご苦労様、弾美君。今日は特にしんどかったわねえ……気候のせいで、風邪がペットの間でも流行ってるみたいだわね」

「そうみたいですわねえ、スタッフも風邪で休みで困ってたんだよ。有り難う、立花君」

神田さんは、ノッポで人当たりの良い感じの好青年。治療中でも全く声を荒げないし、獣医というのは優しい人が就くのかと思わせる、典型的な感じの性格の持ち主である。

一方の唯美先生は、逆にテキパキとして、ややきつめのリーダー型の性格。手術などでははっきりした物言いで、場に緊張感を行き渡らせる術を心得ている。

腕ももちろん良い様で、街でも信頼されている女医さんである。その分忙しくなるのは仕方が無いのだが、時には泊り込みで入院ペットの世話までしているらしい。

頭が下がるとは、こういう事だと弾美はただ感心するのみ。

表の窓口では、まだ来客の気配がしているが。後はもう、急患しか受け付けられないらしいので、弾美としても一安心。神田さんが車で送ってくれるとの事なので、コロナ共々お世話になる事に。

家に1本、電話を入れて今から帰ると伝えると。隣の家の恭子さんが、治療から戻らない愛犬を心配していたとの事。しまったなと思いつつも、母親に事情を簡単に説明する。

帰る前に伝えて貰うように、親に頼み込む弾美。

神田さんが、支度が出来たと言って来たので。まだもう少し残って後始末をする唯美先生にお別れの挨拶をしている時に、代金の事をふと思いついてみたり。

ペットの治療代金は、結構バカにならない。神田さんに訊ねると、思い出したように額を叩く。

「ああ、そうだった。今日のバイト代と折半でどうかな？ それと、今度の犬の予防注射をただにしておいてあげるよ」

「それは助かるけど……こっちが貰い過ぎじゃないの、それ？」

「ああ、それ位はさせて貰わないとね。また頼む時に誘い辛くなっちゃうからね」

おどけた調子で口にする神田さんだが、その目が本気っぽく見えるのは、弾美の強迫観念が考え過ぎだろうか。とにかく弾美は礼を言っ、コロナを車に運び込む。

帰りはそれ程の距離では無いのだが、弾美の住宅地に車で入ろうと思ったら話は別。車での出入り口は住宅地の端に1箇所ずつしかなく、そもそも車での出入りは難しい造りなのだ。

歩いて10分余りの距離にも、車でもやっぱり同じくらい掛かってしまう。面倒だが、住宅街の安全性を重視した結果、そういう造りになっているようだ。

「スタッフの人、明日は来れそうなの、神田さん？」

「ああ、電話ではそう言っただけど……住みやすい街だけど、気候には敵わないよねえ」

「そうだねえ……そう言えば、神田さんは人を雇う立場なんだよね？ スタッフを雇う条件みたいなので、明確にあるの……こう、これだけは先に分かったら良いなっての？」

「ん、難しい質問だねえ。確かに獣医の仕事をじかに体験して、こんな仕事だとは思わなかったって辞めていった人も多いけど……」

時間潰しに何気なく訊いた一言だったが、神田さんは割と真面目に考え込んでしまったよう。弾美にしてみれば、土曜日に父親に聞いた話を、自分なりに消化したかったのだが。

大きな会社と、スタッフ数名で回している獣医とでは、そもそも条件付けが違うかも知れないが。弾美が、もし応募して来た人の性格や個性などが、詳しく分かるファイルがあったらどうかと付け加えると。

それは欲しいかもと、少し考えの答えが返って来る。

「薄っぺらな履歴書と数分の面談じゃ、その人の性格や仕事への適応性を見分けるのは不可能だからねえ……スタッフの苦労話は、自営業やってる友達と逢ったりすると、幾らでも飛び出す類いの話題だからなあ」

「へえっ、やつぱりそうなのか……苦労話って、例えばどんな？」

「ウチだと、動物が好きだったのにこんな筈じゃなかったって、1日で辞めていったりかな？ 後は電話もよこさず来なくなったりとか、病院の物を勝手にくすねたりとか……」

段々と怖い話になって来たが、こういう話は子供にするべきでは無いと神田さんは気が付いたのである。はっと気付いて口を閉じ、夏休みはウチで働いてみないかと持ち掛けて来る。

隣のペットショップで春先に働いていた時には、よく声を掛けられたのだが。考えておくと返事すると、夏休みは結構忙しいのだと気になる一言がついて来た。

あつちこつちで社会勉強の場を貰えるのは、弾美としては嬉しいのだが。何でも楽な体験というのは在り得そうも無い。

その後の雑談は、風邪引きのお隣さんの情報とか、コロンのその後の看病方法とか色々。家の前まで送って貰い、弾美はお礼を述べて神田さんと別れる。

迎えに出て来た恭子さんに、コロナを無事渡し終え。獣医でのちよつとした経緯とか看病方法とかを全て伝えてしまつと、恭子さんはこそつとお礼を手渡しして来る。

あまり渡し過ぎると律子さんに怒られるから、内緒にしておくよつと小声で通達。こういう時だけは、悪知恵の働く女性ではある。それはそうと、弾美は有り難く今日のバイト代を頂戴する。

お隣さんとは言え、身内同然。親戚から貰うお小遣いみたいな感覚である。

瑠璃の顔色も窺つておこうとは思っていたのだが。既に時間は7時を過ぎていて、8時からギルドメンバーとインの約束になっているのを思い出す弾美。

恭子さんによく伝えておいてと伝言を頼み、そそくさと自宅に戻る事に。その後は速攻で食事して風呂に入って、ゲームのインの準備をしなければ。

忙しいほど燃えて来る気質の弾美は、今からワクワクしつ放し。気分上々で自室に戻るのだった。

\*

\*

学校が半ドンだったせいもあり、宿題や課題の類いが一切今日はお出なかった。有り難い事には違いないが、来月には中間試験が待っている。あまり気を抜いてもいられない。

それでも弾美には、瑠璃という心強いブレーンが付いているのも

確かである。試験では滅多に下手な点を取った事が無いのも事実、素晴らしい安全装置である。

几帳面すぎて、たまに口煩くなるのが玉に瑕だが。

そう言えば、自分のクラスの委員長と瑠璃は、どんな会話をしたのだろうかと一瞬興味が湧いたのだが。ファンスカのオンラインでメグミからのメールを発見し、綺麗に頭から流れ去る。

以前、瑠璃が中立エリアで世話になった件でお礼のメールをしたのだが、そのお返しのような。地上で会えたら改めてお礼や情報交換をしたかったのだが、まだ会えていない。

向こうは結構、大所帯で活動しているらしい。その報告なども添えられてあった。

簡潔な内容だったが、中にはこんな愚痴も。早解きパーティの情報を当てに地上の各エリアを攻略しようとする、まるで敵の強さや種類や特殊攻撃が違って苦労するらしいのだ。

フリーエリアの敵は別にして、他のエリア攻略に関しては、レベル補正はかなりきついのでそちらも注意してとの忠告が添えられてあった。

フリーエリアは、どうやら23レベルの4人パーティ程度で適正らしいとの報告も書かれていた。メグミのギルドの早解き組は、レベル上げに相当苦労したとも。

上手く立ち回った連中は、レベル18くらいで地上に到達し、果実&クエストや遺跡エリアで23程度までレベルを上げ、そこから適当にフリーエリアを利用して、イベント扉を潜って行くらしい。

正解はまだ不明だが、遅解きの方が波乱があつて楽しいよね、と最後は締められてあった。弾美も全く同じ意見である。

フリーエリアは、エリアチェンジ付近の近場に蛮族が多きたむる

しているので、確かに絡まれやすく危険なのだが。その奥は結構ア  
クティブが少なく、楽に移動出来てしまうのだ。

出来れば自分達のパーティも、人が揃ってさえいれば謎解きの方  
に挑戦したいのは事実だが。揃っていない時に進めるのは、弾美と  
しては絶対にやりたくない。

それに何より、レベル16という低レベルでパーティに迎え入れ  
てしまった早解き組が2人、今ギルドにいるのだ。フリーエリアを  
有効利用して、レベルの底上げをしてみたいのも本音である。

イン前の時間を利用して、お礼の返事の文面を考えつつも。こち  
らは風邪っ引きが続出してろくな情報も差し出せないと、素直に詫  
びなど入れてみたり。

借りはあまり作りたくないのだが、頑とした事実なので仕方が無  
い。

ちょっと約束の時間より早かったが、インしてみると既に何人か  
ギルドメンバーが先にいた。薫は元気にクエストをたくさん受けた  
と報告し、メンバーが復帰した時には時間短縮に役に立つと浮かれ  
模様。

受けたクエストは、エリアごとに選別してちゃんとノートにまと  
めてあるらしい。聞いて貰いたい感じだったので、取り敢えずフリ  
ーエリアのクエストを弾美が聞いてみると。

意に反して、フリーエリアのクエストはたった1つ。後は噂とか  
情報ばかりらしいとの事。

\*\*\*カオルのクエスト・噂レポート\*\*\*

……クエ……

蛮族3種（猿人、魚人、馬人）の落とす素材を持って来て、お礼は  
する 合成屋



……噂……

煌く葉っぱが山の北側に落ちて行くのを見た！

果ての地域に友好的な種族がいる

その種族は何やら争い事で困っている？

その種族と天使が一緒にいるのを見た？

この地域は変種（NM？）が多いので注意して、餌に釣られてやって来る変種（トリガーNM？）も多数いるらしい？

『おおつ、薰さん凄いマメだなあ！』

『えへへ、後はマップが完成すれば完璧なんだけど。種族分布とかも込みでね』

『ただだけ滞在するつもりだ、薰うち。でも、明日瑠璃達が復帰するなら、フリーエリアの面倒事を全部終わらせておくのも手かな。そしたら安心して本筋を攻略出来るしな』

『そうだな、レベル上げメインで、暇が出来たら蛮族のドロップ狙ってみようか？』

薰のレポートに、弾美や進があだこつだと意見を並べ立てる。何しろ、移動するだけで結構な時間を食うエリアなのだ。出来ればついでの事情で、クエや面倒事を始末しておきたい。

ドロップ狙いなど完全に運なので、時間の配分など計画出来ない。2時間縛りがある期間限定イベントだけに、些細なクエのドロップに拘っていると命取りになる恐れがあるのだ。

そう言う点では、進の方が冷静なのだが。弾美は熱くなると、細かい事が吹っ飛ぶタイプ。

淳が風呂から上がったから誘ってくれと、恐らくギルド会話の口グを読み直しながら言ってきた。皆もたまにやるが、集合時間前にログインしての離席は、こういう会話を後から拾えるのが有利な点である。

村つちも昨日の夜より5分も早く、バイトから戻ってインの挨拶を告げて来た。やる気満々のテンションで、今日はどういう組み分けをするのかと弾美に訊ねて来る。

そこに、波乱を呼ぶあのキャラが参戦。しかし今日の口調は、やけにアダルティ。

『こんばんは、皆さん。今日も同じ場所でレベル上げでしたよね？』  
『美井奈ちゃん……のお母さんでいいのかな？』

『はい。今日は娘の要望で、私が操作と一緒に狩りに同行したいんですけど……いかがでしょう、ハズミンさん、皆さん？』

おおっと、途端にどよめく一同。ギルドメンバーにせがまれて、土曜の食事会の時の美井奈の母親の写真を男どもに見せてしまったのだ。弾美はその事を軽く後悔していたが、反面美井奈の母親の支持率は急上昇の様相である。

もちろんとか、是非ご一緒にとの誘いの嵐の中、一人弾美は美井奈の本音を鑑みていたり。出来れば自分でプレイしたいのが本当の所だろうが、学校を休んでいる手前、ゲームをするのとはばかられるのは良く分かる。

瑠璃などは、そういう所がもの凄く几帳面である。少女はそれを見習おうとしつつも、やっぱりどこかで一緒に繋がっていたい気持ちがあるのだろう。

結局、少女の気持ちを汲んだ形で弾美は了承を伝えるが。直接会った時には、こっそり絞ってやろうと不穏な目論見を画策していたり。病気の時にはきっちり休む、それが常識だ。

瑠璃の遣り方の方が、やっぱり正しいと弾美は思うのだが。

それはそれとして、今日はイベント進行組で、ちゃんと二つパーティを組む事に。進の方に村つちが加わり、弾美の方は美井奈（母

親)と薫の3人でのパーティ結成に。

進が真面目に、新パーティでの戦術や位置取りを練りながら行うと提案。こちらは前衛であり最大の癒し手の瑠璃がないので、そこまで詰めて考えられないのだけ。

自分が魔法の挑発技でタゲを取るから、みんなで削るう的な作戦で了承を得たりして。

『美井奈の母ちゃん、弓矢は弓と矢の種類を組み合わせて攻撃力変わるから。タゲ取りそうなら、ちよつと弱くしてみて』

『了解しました。あと、今日は沙織と呼んで下さいな』

それだけの言葉で盛り上がる男衆、はっきり言ってアホである。

恐らく、村つち辺りは冷ややかな顔付きになっているだろうと、弾美は予想してみるが。

フリーエリアに出てみると、沙織さんのキャラ操作は結構上手い事が判明。村つちはアホな男性陣に早々と見切りをつけて、沙織さんと競って釣り競争。

エリアチェンジ場所近辺の猿型蛮族を、上手に二等分してそれぞれで殲滅して行く。

『沙織さんって、結構上手だねえ？ 実は遣り込んでるんじゃない？w』

『いえいえ、前衛でのやり取りをしないキャラだから、ボロが出ないだけですよ？w』

『あんまり褒めると美井奈が拗ねるから、村つちも程ほどにな？w』  
『……ちよつと拗ねちゃってますねえ』

沙織さんの返答に、思わず弾美はモニター越しに苦笑い。この短時間で少女の性格をだいたい把握出来ているのは、一緒に冒険をこなした密度の濃さゆえか。

付近の蛮族は掃除出来たのだが、肝心のドロップはギルや粗末な装備品のみ。視界を高い山が塞いでおり、昨日はそれを右に進んで沼に向かったのだが。

今日はちよつと遠回りして左に進もうかと、サブマスの進が提案してきた。

『なんで、遠回りじゃんか？』

『だから、フリーエリアの葉っぱの場所教えておこうって。昨日も言っただけど無視してただろっ』

『あゝ、全員いた時に取ればいいかなって。パーティに1個あればいいの？』

『いや、全員集める必要あるんだけど。場所が分かれば、次真っ直ぐ取りに来れるだろ？』

それではそうしようと、進の先導で北回りのルートで進む事に。意外に蛮族の姿が多く、倒しつつの移動をしている内に。何匹目かの討伐で、ようやく目的の素材が1個出る結果に。

収集すべき葉っぱは、荒涼の地に緑の丘を作り上げていた模様。遠くからでも目立つので、簡単に見分ける事が出来た。入手すると、他の人には譲渡不可の特殊アイテムのよう。

アイテム名は『赤色の葉っぱ』と言うらしい。見た目は普通の紅葉した葉っぱなのだ。

『ここまで20分掛かっちゃったな。2個目のドロップ狙おうか？』

『いや、レベル上げを優先しようか。ドロップ運のいい津嶋もいないしなあ。アイテムは弾美が持っていていいよ』

『オツケー、じゃあ沼に向かうか』

『瑠璃ちゃんはドロップ運がいいのかあ……私はあんまり良くないなあ』

皆でドロップ運の良し悪しを自己申告しながら、5分後には沼に到着する二つのパーティ。ところが沼には先着のパーティが2組、距離を置いて猛烈に獲物の奪い合いをしている。

検索するとレベル21〜22のパーティらしいが、ちょっと見ていて危なっかしい。戦闘中にもかかわらず、見切りで次の獲物を釣って来るので、盾役がふらついてしまっている。

獲物を取り合って、我を忘れている感じ。命は貴重だと言つのに。

ここが割と美味しい狩り場だと、ひよっとして昨日見られて嗅ぎ付けられてしまったのかも。昨日はたまたま空いていて、今夜は混んでいるだけなのかも知れないが。

25レベル制限と言つのは結構シビアな条件なのかもと、弾美は改めて感じてしまう。そこまで深く考えていなかったが、確かに廃墟エリアやクエストエリアをいくらか攻略しても、イベントエリアを進めないとクリアには近付いていない事になる。

全部のエリアを廻る気満々の弾美は、そこまで切羽詰まっていけないのだが。

『うわ、ここは駄目だなあ……別の場所探そうか？』

『そうだなあ……今日はポーションも多めに持って来たし、手分けして良さそうな場所探そうか』

『そうだねえ、時間がもつたないし、よし行こう！』

村っちの掛け声で、弾美組は南東の方向へ、進組は北東へと探索スタート。ちよつとワクワクしながらも、探するのはHPが低くて柔らかな敵の群れである。

ところが弾美組は早くも、こつちは昨夜のNM湧き後にやっつけた敵しかいない事が判明。水鳥はともかく、カメやザリガニは硬くて厄介、魚人に至っては特殊技が結構きつくて嫌らしい。

別の場所を探索しようとしたら、ミイナ（沙織）が何かを発見。

変な魚人がいると言う。

『あれあれ、NMっぽい魚人が見えましたよ？』

『なにっ、誰かの湧かし逃げか……っ！？』

『えっ、俺達も行った方がいいかな……？』

周囲を見渡してみても、リンクしそうな魚人や敵影はなし。強化魔法を掛け終わった弾美は、久々な気のするレイブレードを装備して、すぐ終わらせるから平気と返信。

ミイナ（沙織）が行けるなら釣りますよ〜と言って、戦闘開始。薫も張り切って殴り始めるが、ハズミンの最強形態は両手武器の削りにも全くひけを取らない。

ミイナの遠隔攻撃を見るのも、何だか久し振りの気もするが、実際は2日振りでしかなく。アタッカー3人揃いで削り力は凄まじく、魚人NMの反撃もいつの間にか尻すばみ。

宣言通りに、魚人NMは見せ場も無くあっという間に撃沈されてしまった。ドロップはトライデントや水の術書、ギルも2万くらい出て有り難いことこの上なし。

さらに、魚人の鱗と魚人の目玉という用途不明のアイテムも入手してしまい。

『あつ、魚人の鱗は合成店のクエストの指定品だよ、弾美君』

『おつ、じゃあ猿壱族に続いて2個目か、やったな弾美！』

薫の言葉でアイテムの一つは使用目的が判明。その後ハズミン組は、進と合流すべく北へと進んで行く。進のチームは、沼地から岩地へと変わる場所で、サソリやハゲタカ、サボテン型の敵と戦っていた。

経験値はまあまあだが、特殊攻撃の辛い敵ばかり。相談して奥へと向かうと、団子虫のような敵と砂虫のような敵、更にはケンタウ

ロス獣人が混ざって来た。

虫形は、一般的なゲームデータではHPが少ないのだが。倒してみるといい感じなのが発覚。

『むっ、進！ 団子虫を連続3匹倒して行ったら……経験値が急に上がったぞ！』

『えっ、マジかっ！ 間に他の敵を挟んだら駄目なのか！？』

『条件はよく分からないけど、団子虫だけに3繋ぎなのかも……？』

どんな洒落だと騒ぎつつ、しかし確かに団子の2匹目は2倍に、3匹目は急に経験値が3倍まで跳ね上がる。ここは美味しいと、ギルドメンバーのテンションも急に上昇。

フリーエリア40分後で、やっと見つけた新天地。団子虫も気持ち悪い外見の砂虫も、強敵で無い上にすぐ倒れてくれる。ケンタ獣人やサソリが時たま絡んで来るので、団子虫のチェイン中でない方が受け持つ段取りに。

その内ケンタ獣人から、偶然に大麻袋という装備がドロップした。矢筒に装備するタイプの防具で、性能はポケットが+3、HP+5、SP+5%という優れものである。

フアンスカのシステムにおいて、ポケットが増えると言う事は継続戦闘時間が大幅に延長されると言う事。中ポーション1個のHPの回復量が80なので、ポケット+1されるだけでHPが+80されたのと同じ恩恵を受けるのだ。スカスカの装備欄のキャラに+3装備となると、相当な良品だ。

そんな訳で、遠隔装備欄の空いてる前衛達からは欲しい！ の熱烈コール。ギルド『蒼空ブンブン丸』では、こういう時の解決方法は弱い者から+譲り合いに尽きる。

そんな訳で、レベルの低い薫と村っちか、昨日ポケットが-2と

なってしまった淳が候補に。薫は先程の魚人NMのドロップのトライデントを貰ったから、今回は遠慮するとの事。

紳士の淳も今回は譲ると言う事で、村っちが1個目を貰う事に。

『ありがと〜！ 淳君、今度奢ってアゲル 』

『えっ、淳だけずるいっ！』

弘一の焦った物言いも、いつもの笑いのタネ。フリーエリアで1時間が過ぎて、村っちと薫がようやくレベル20台へと到達した。皆からのお祝いにお礼を返しつつ、それぞれ覚えた新種族スキルの子エックに余念が無い。

狩りの対象も、大麻袋のドロップを受けてケンタ獣人を積極的に狩り始めるハズミン組。獣人だけに、たまに銀のメダルや換金性の高い装備品のドロップも美味しいし、経験値もまずまず。

弾美は団長をやっているだけあって、サービス精神も旺盛。皆に大麻袋を行き渡らせようと大張りきり。

団子虫を譲り受けた形になった進チームは、さすがに経験値の入りが良い。1時間半が過ぎる頃には進達も24へとレベルアップとなった。イベントエリア進出レベルまで、あと一息である。

弾美チームは、熱くなった弾美がとにかくケンタ獣人を追い掛け回す。進達がレベルアップを告げる頃には、努力と言うか執念の甲斐あって大麻袋の追加のドロップが2つほど。

さらにクエストアイテムらしい、ケンタ族の馬蹄というのを2つ入手。クエストアイテムは、これで1セット揃った計算だ。

ついでにミイナもレベルアップ。これで24なので、後1つ上げればイベント資格に到達である。それはそうと、はしゃいでいるのは本人か、はたまた今日の操作人である沙織さんなのか。

いそいそと、ステータスやスキルの振り込み先を弾美に訊ねて来



る。

『おめでと〜！ それよりも大麻袋、やっと2つ程出たぞ〜。薰っちは次出たの貰うそうだから、そっちで分けてくれ』

『おおつ、ありがとう！ ところで、そっち経験値は貯まってるのか……？』

『NMも倒してるし、ミイナはたった今上がりましたよ〜』

『うん、悪くない感じだな。俺もそろそろ上がりそう』

それなら問題ないと、進は大人しく引き下がる。何しろ弾美とは長い付き合い。一度脱線したら路に戻るどころか、そのまま荒野を突き進むタイプなのは分かっている。

1時間40分が過ぎる頃には、メンバーの中にそわそわとした雰囲気。今夜は狩りを始めるのが遅かった分、NM湧きタイムが早いか2時間縛りの時間切れが早いか、とつても微妙な所。

じりじりと時間が過ぎて行く中、弾美チームは荒野の端に異変を発見。報告した美井奈（沙織）は最初張り切っていたけど、近付いてみると拍子抜けのコメント。

『ああつ、変なケンタウロスって思ってたら、NPCでしたっ……』

『あー、このNPCがクエ情報にあった、友好的で争い事に困っていて、天使と一緒にいるのを見掛けた種族……なのかな？』

『お〜、話し掛けたらクエが発生したっばい……クエスト大臣、進めてくれ』

『それって、今弾美君が持つてるアイテムじゃないの？ トレードすれば終わる筈だよ？』

むっ、他種族の者がこんな所まで、はるばるとご苦労な事だな。それはそうと、この先には我等の集落があるゆえ、この付近で

騒ぎは起こさぬように。

……その格好から考察するに、どこかから流れて来た、腕に自慢のある冒険者のようだが。良かったらその腕前を、諍いに困っている我等の種族に貸してくれまいか？

この近辺には、魚人とインプと、我等と袂を分けて久しいケンタウロス族が、それぞれ縄張りを張っているのだ。日々の争いが最近激化して、我々としても気を抜けない状況なのだ。

『魚人の目玉』と『インプの角笛』と『タウロスのたてがみ』というアイテムがある。それぞれの首領がボスの証として誇っているものだ。そいつらを倒した証に、その3つを取って来てくれ。そうすれば、我等の集落に入れる手形を渡してやるう。

どうやら集落前で見張りをしているケンタウロスNPCは、偉そうな感じでそう語り終えた。弾美はアイテムをチェックして、薫の言う通りトレードしようとしたら。

アイテムが1つ足りない事に気付いてショックを覚えてみたり。

『薫っち、1個足りないぞっ！』

『えっ、あれ……？ あっ、ゴメン、合成屋のクエストアイテムとごっちゃになってた！』

『クエスト内容を読んでみるに、タウロスのたてがみというアイテムが足りないみたいですね』

ミイナ（沙織）の指摘通り、未だ見掛けていないのはケンタ獣人のNMのみなのだが。しょんぼりしつつ、荒野を引き返している内に、向こう側のパーティはギルド会話で盛り上がった。

どうやら団子虫NMが湧いたらしい。ポコポコと生まれるそれは、倒すごとに経験値が倍になって行く仕様のようだ。最初しょぼかった数値が、数をこなすごとに大変な数値に変わって行く。

強さも硬さも、比例して上がっていくようなのは、まあ仕方の無

い事態と言えるか。

『目茶苦茶硬くなってきたーっ、でもレベルあがったー』

『おめでとうっ、そろそろ打ち止めなのかな？ 団子虫の巣が萎れて来たっばい』

『おめでとうっ、村っちゃん！ 弾美のくれた大麻袋が何気に心強いぞっ！』

同意の声が重なって上がる。前衛にしても、ポーションが+3個追加で使える事態は、かなり大きな差異なのだ。スイッチが上手に作動しなかった際など、大幅に危険を軽減してくれる。

攻撃魔法を使えるキャラが進だけな為、硬質化したNMの討伐に向こうは手間取っているようだが。こちらで出来る事は無いと、周囲のケンタ獣人を再び狩り始める弾美パーティ。

そろそろ縛りの発動する時間かなと皆が思い始めた頃、やっぱり発見報告があつたのはミイナ（沙織？）からだつた。

『あつ、タウロスNM発見ですっ！ 娘が見つけたつ』

『なにっ……！ まだ起きてたのかっ、さっさと寝ろっw』

『弾美君、気持ちは分かるけど……せめて褒めてあげようよw』

『娘が……ちよつと口に出せない状況に（^-^-）』

身内のごたごたは取り敢えず置いておくとして。確かにちよつと遠めに、異色のタウロス獣人の姿が。赤茶色のたてがみの一際大きな体躯のそいつは、豪華な鎧を着込んでおりかなり強そう。

弾美はすかさず強化魔法を身に纏い、NM相手の戦闘準備。時間が無いので、やっぱりレイブレードを装備して、短期で決着をつける気満々。

って言うよりも、こちらはやはり3人パーティなので。瑠璃のいない穴を心配しての事なのだが。

戦闘は初っ端から、特殊技と複合スキルの撃ち合いで熾烈な削り合戦に。油断していると、横から殴っている薫にも、不意打ちのように蹄の蹴りが飛んで来る。

タゲがどのと言っよりも、攻撃されたら一定の確率で反撃が飛ぶような仕掛けらしい。メイン回復キャラ不在のハズミン組は、死なないようにと皆必死である。

弾美の《シャドータッチ》でのHP吸いと目潰し効果で、蹄蹴りの命中率は何とか低下してくれた。しかし、タウロスNMのHPを何とか半分まで追い込んだ時に、無情にも2時間縛りが発動。

程なく団子虫NMとの戦闘を終えた進パーティが、心配して声を掛けて来る。

『おい、大丈夫か、弾美？ 2時間縛りが来ちゃったみたいだぞ！』

『あっ、いたいた……余ったポジション渡そうか、薫？』

『頑張れー、沙織さんっ！』

『心配無用っ！』

余裕はそれ程ある訳ではないが、戦闘中なので短い返答しか出来ない弾美。ケンタNMは短槍と大きな盾を装備しており、盾の使い方が何となくいやな感じを受ける。

そんな事を思っていたら、やっぱり盾を使つての特殊技の連続使用を隠し持っていたケンタNM。盾での突き飛ばしから、距離を取つての短槍チャージ。

ハズミンのHPは一気に6割近く持つて行かれる。強烈な一撃に、画面のブレも凄かったり。

『わーっ、やばいやばいつ！ 弾美回復っ！』

『心配無用っ！』

近付いた敵に、スキル技の《下段斬り》からの再度の《シャドータッチ》を使用。ミイナの回復と合わせて、取り敢えず一息つく。慎重に間合いを計り、今度は盾でのブロックでは無く、サイドステップでの防御に切り替える弾美。

盾ほどの確実性には欠けるが、メイン世界のハズミンが一番慣れ親しんだ戦術である。両手武器持ちのキャラだけに、敵の攻撃を弾くのではなく避ける防御。

これが出来ない内は一人前の前衛とは言えないと、自分に課した課題のテクニク。再度の盾の突き飛ばしを華麗に避けてしまえば、チャージを繰り出す距離がある筈も無く。

ギルド通信での、わっと言う歓声が凄い。弾美の興奮度も、じりじりと上がっていく。SPが満タンに貯まったのを見計らって、今度繰り出すのは複合スキルの《トルネードスピン》。

回転の5連撃に、幸いにも3度補正スキルのSP吸収が乗った模様。撃ち終わっても4割残っているSPを利用しての《二段斬り》で、合計7発連続ヒット攻撃！

これにはさすがのタウロスNMもたじたじ。自慢のHPもあつという間に2割を切り、やんやの声援の中、さらに美井奈と薫の追撃も加わる。

最後はどうやら、圧勝に終わったようではあるものの。こちらの状況も2時間縛りの衰弱や、回復し切れていない傷で、見た目も大変な有り様なのは隠せない。

この経験値で弾美と薫がレベルアップ。弾美は27に、薫はやつとの21である。まだまだ前途は厳しいが、2日で4つのレベルアップは、慣れない土地では上々と言えるだろう。

『ナイスファイト、弾美！ やっぱり弾美の削りっ振り燃えるな』

っ！』

『片手剣持ってるのが、凄く不自然に見えるけどなw 盾要らないじゃんw』

『お兄ちゃま、凄いですって、美井奈からの伝言ですよ（^-^）』

『仲良いのねー、弾美君と美井奈ちゃん……本当の兄弟みたいでうらやましー』

『お兄ちゃまと呼ぶなっ！ ってか、衰弱で座れないから傷が治らないっw』

『おおっ、確かに不味いな……ポーション勿体無いし、そろそろ転移で帰ろうか？』

タウロスNMの待望のドロップは、タウロスのたてがみ以外にも豪華な感じ。絹の腰袋と豪華な大盾、豪華な短槍に金のメダル、炎の神酒にギルも1万以上でやっぱり上々。

弾美は絹の腰袋を薰へと融通。残り物には福がある的な性能の良い筒部分の装備に、薰は感激もひとしおの様子である。これでポケットは最大上限数の12になったと大喜び。

弾美もそれを聞き、ちよつと羨ましくなる。自分も弓矢を止めて腰袋に変更しようかと思案顔。

絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、SP+10%

豪華な大盾 体力+4、防+12《耐久8/8》

『性能の良い盾が出たから、防御力8の盾いらないや。弘一いるか？』

『性能のいい方くれっ』

『そんな事言う奴にはやらね〜w』

『コントしてる場合じゃなくて、本当に衰弱やばいってば！w』

村っちの悲鳴もごもつとも。こんな状態では雑魚に絡まれただけ

でも、うっかり死亡してしまうかも知れない。次々にギルドメンバーが転移して行く中、しかしハズミン組に衝撃の事実が発覚。

急遽、今日参戦を決めたミイナの分の、転移の棒切れが足りないのだ。

弾美が進に補充を頼んだ時、進は念の為にと5本程度渡そうとしたのだが。1本が1千以上すると聞いた弾美が、変に遠慮して人数分しか受け取らなかつたため。

手持ちが薫の分を含めて、2本しか無いのだ。

『進っつ、帰つて来いっw』

『すまんっ、つられて戻つちゃった；； 弾美が2本、女性陣が0だった、よね？』

『ごめんなさい、私が急に参加しちゃったばかりに（；￥；）』

『私がライフポイント4つあるから、1個減らしても問題ないよ？ そうしよっか？』

薫の献身的な意見も飛び出すが、それもやっぱり可愛そう。そんな思案中に、弾美はふとクエストのタウロス族の事を思い出す。集落が近くにあるって言ってたような、違つたような？

クエスト大臣に尋ねてみたら、そういうえばそんな事を言つたよ。うな気もするとの答え。歩いて帰つても、ここからだと言つてたよ。分以上掛かつてしまう。その間にもう1段衰弱レベルが上がり、更に絡まれての戦闘も何度かあるとしたら。

ポーションが圧倒的に足りず、やっぱり全滅コースなのは容易に想像出来てしまう。

すぐる思いで、タウロスNPCにアイテム3種のトレード。イベント動画の時間が、いつもの1千倍も鬱陶しく感じる。ピロリ〜ンとの軽快な音と一緒に、発行されたタウロスの手形を手に、東の岩場を必死に探索する一同。

幸い、絡まれての戦闘はたったの1度で済んだ。何より執念を發揮して、2分でタウロスの集落を見つけた一行は、滑り込むようにエリアに飛び込んで行く。

待望のエリアチェンジの情報と、減って行くのを止めたHPバーを目にした弾美パーティの面々は歡喜の嵐。今日一番の冒険だったと、危機一髪な状況を振り返る。

『助かったよ、集落見付かった！』

『おおつ、良かった……どうやって償おうかと考えてたよ』

真面目な進の意見が逆に笑えてしまうのは、やっぱり全員助かった安堵からだろう。滑り込んだタウロス族の集落は、いかにものどかな感じのつくりで、住人は全てタウロス族のよう。

弾美はさっそく集落を見学しながら、ギルド会話でその町並みを報告しつつも。そろそろ夜も遅い時間なので、落ちる人は遠慮なくどうぞとの催促も忘れない。

特にミイナ（沙織）には、きつく釘を刺してみたり。

『美井奈……明日元気にゲームしたいなら、ちゃんと休息取って風邪治せよっ！』

『そうですね、それではミイナは一足お先に落ちる事にさせて頂きますね。今日はご一緒させて貰って楽しかったです、ありがとうございます』

『お休みなさい、美井奈ちゃんお大事に』

『お休み、明日もヨロシクね』

ギルド会話でお休みコールの響く中、薫も朝型だからと早めに落ちて行き。集落に一人残された弾美は、落ちる前にお店チェックだけでもしようかと思っただけれど。

パーティが自分だけになってしまつと、何となくやる気も出なく



なり。明日でいいかと、結局自分も落ちる事に。

2日病欠の瑠璃からは、明日は学校に行けそうですとのメールが夕食の後に入っており。コロナを獣医に連れて行ってくれたお礼も、しっかりと書き添えられていた。

瑠璃からメールなど、毎日顔を合わせているお隣同士の関係上、滅多に無い事態なのだが。美井奈共々、何とか復帰出来そうな様子でホツとする弾美。

せっかく4人目のパーティ仲間がすんなりと決まって、限定イベントの進行に弾みが付きそうだったと言うのに。思わぬ横槍が入ってしまい、痛い足踏みをした感もある。

短期間の限定イベントの性質上、かなりしんどいマイナス点を貰ってしまったかも。

それでも、と弾美は考える。4人揃ったパーティの化学反応は、きっと他のどこのパーティよりもすごい筈だと。きつとこの劣勢を跳ね返せると信じて疑わない弾美は、既に何パターンか最終ボスとの仮想戦闘をこなしてみたり。

ライバルは多いが、きつと平気な筈。その自信だけは誰にも負けない弾美だった。

## 14 再出発の地上エリア！（前書き）

梅雨の合間の、今日は良い天気。お休みなので、久し振りに布団など干す事が出来てご満悦だったりします。ってか、久し振りに太陽が顔を覗かせたら、室内も暑いほどですねえ。

昨日も更新したので、ブログ的な日常報告はもういいかもって気もしますが。だいたい、ここはそんな事に使うスペースじゃないみたいだし（笑）。

取り敢えず午前中はまったりと身体を休めつつ、モバゲーしたり小説のチェックをしたり。午後はお給料出てるか銀行にチェックしに行つて、出たら買い物したり支払いしたりと時間を費やす予定です。

今月は車検があつたので、暴力的にお金を持つていかれました（笑）。

まだ地デジ対応のテレビにも買い換えていないというのにつ！他にも仕事に使う道具を買つたりとか、色々と使い道ばかりが増えて来ている今日この頃。

余裕が出来たら、ノートパソコンも欲しいですねえ。安い奴で良いので、仕事の休憩時間にちょこつと小説を書き進めたり、案をまとめたりするのに便利かも。

外回りになつたら、少なくとも体力の消費は抑えられるかもです。でも自分は、あんまり車の運転は好きじゃないんですけどね。

やっぱり最初は不慣れなので、しばらくは大変かも？

さて、今回の章はタイトル通りの再出発のお話だったりします。

風邪から復帰したメンバーの、新たな活躍をご期待下さい

ちなみに『へそくりニャンコ』は、何となくその場の雰囲気で作りに上げたキャラだったりします。自分が昔やってたゲームには、存

在してない筈ですのでご了承を（笑）。

ドロップの超良い敵ってのが、普通のゲームにはまずいないのも確かだったり（笑）。

## 14 再出発の地上エリア！

週末から流行した風邪も、ようやく沈静化の方向に向かっているようだ。弾美のクラスの担任も、今日から何とか復活。まだ休みの生徒もちらほらいるが、全体の学生数に対しては微々たるもの。

瑠璃も今日からの復帰組に名を連ねる事が出来、本人もホツとしている様である。同じクラスの友達の静香も今日から登校して来ており、共に復帰を喜び合うシーンも。

茜もこれには一安心。お見舞いなどの心遣いに感謝する友達に、ちよつと照れてみたり。

瑠璃にしてみれば、ようやく動き回れる程元気になったのだが。風邪でダウンの最中に、何が一番不満だったかと言えば。暇な時に小説を読むのだが、字が急に大きく見えるのには参った。

どういう作用か、脳が風邪のウイルスに誤作動を起こしていたようだ。目も乾燥して痛くなるし、本すら満足に読めないのなら、学校を休んでも退屈だけである。

さすがに朝の散歩は今朝はお休みしたのだが。コロナも復調しつつあると、登校時に弾美から報告があった。

報告によると、美井奈の容体も今朝は順調の様子らしい。朝のメールで通達があったと、同じく弾美から聞かされていたのだが。これには瑠璃も大喜び。止まっていた時も、これで何とか動き出しそうな気配。

リーダーの弾美としても、素直に嬉しい日である。

「それじゃ、そっちの組も今夜から本格始動になるんだな、弾美？」  
「ああ、ようやくフリーエリア以外に挑戦出来るよ。進の組はどうするんだ？」

「こつちも、クエストエリアと遺跡エリアを、もう一度全部制覇しようって感じで話し合ってる」

「微妙に出遅れちゃったかな？ まあ、焦っても仕方ないけど」

「遅解き組は、確かにほとんどイベントエリアを攻略してるらしいな。連中はレベルを気にしないででも平気だから、アイテム収集に尽力してる感じかなあ」

ポカポカと日の当たる窓際で、お昼休みの時間を利用しての会話中。今朝も少々冷え込んだのだが、そのせいか日差しの割には空気は冷たく感じる。

教室の雰囲気はこの2日間に比べると、賑やかさが違うように感じるのは気のせいだろうか。担任の先生も昼休みを利用して、休日だ生徒達の授業進行のケアをしているようだ。

パソコンのモニターを指し示しながら、2日間で進んだ範囲を説明している。

「村つち、どんな感じだ？ 半分強引に、そつちに押し付けちゃったけど」

「ん？ そんなの気にしなくていいぞ、こつちも人が足りなくて困ってたんだし。実際ゲームは上手だし、気風はいいし。弾美の知り合いだから、何より信頼出来るしな」

「それを聞いて、ちよっと安心したな。イン時間とか合わなかったらどうしようかと思ったけど」

「昼間イン出来ないのは、それは仕方ないよ。パーティバランス的には問題ないし……問題があるとすれば、ぶっちゃけレベルだけかなあ」

ふうむと考え込む弾美。そればかりは、時間をかけないと仕方ない問題ではある。そちらも実は同じ問題を抱えていると進に指摘され、そうだったかと思い出すのだが。

薫も全く同じレベルである。装備は充実しているが、イベントエリアの入場資格と言う点では関係のない事。取り敢えず、今夜の冒険でのレベルアップを願うのみ。

問題は割と山積みだが、それでも再スタートの待ち遠しい二人である。

\*

\*

メンバー各員のテンションが何となく高いのは、やはり攻略が再開出来る喜びからだろうか。瑠璃はメンバーが揃うと早々に、病気にしてしまって迷惑を掛けてごめんなさいと謝って来た。几帳面にも程があるが、弾美は病氣中にも関わらず、平気にインしていた者もいるとチクツてみたり。

美井奈が慌てた調子で、自分は画面を見ていただけだと言いつくする。

『だめだよ、美井奈ちゃん。病氣の時はちゃんと安静にしておかないとー！』

『ごめんなさいっ、お姉ちゃまつ！ 隊長っ、密告するなんてズルイですよっ！』

『告げ口しなくても、ミイナのレベルが上がってるからばれるっての。お前はテンション常に高いから、瑠璃に叱られてしょげてるくらいで丁度いいだろ？』

どういう理屈ですかと、やっぱり美井奈のテンションは高めをキープしている様子。瑠璃は昨日の様子を前もって弾美に聞いているので、あまり深くは追求しなかったが。

美井奈の身体を気遣ったの言葉だというのは、本人も充分察知しただろう。初っ端からあまり拗ねられても困るので、弾美も追求はこれ位しておく事に。

恐らく今夜も、沙織さんはモニターの前にいるのだろう。

薫からも攻略スタート前に、些細な報告があった。自分が帰郷して、中立エリアにキャラを放っておいたせいで貰えた妖精装備が、同化を完了したとの事。

これでもう少しマシな防具を装備可能になったと嬉しそうではあるが。さっそく皆で買い物……の前に、何と弾美と美井奈と薫の三人は、今いる所がタウロス族の集落だったりする。

事の顛末を瑠璃に説明すると、自分も転移の棒切れと言うアイテムは持っていないとの事。

『さっき一通り見たけど、こっちのアイテム屋には売ってたみたいよ？ あと、奥に転移ゲートがあったから、アイテム使わずに中立エリアに戻れそうかな？』

『おおつ、さすが薫っち！ 装備屋はどんな感じだった？』

『昨日3つドロップした大麻袋？ あれが8千ギルで売ってた。あと、マントとピアスと矢束は、性能いいのあったよ』

『むっ、じゃあ俺金持つてるから、買っておこう。その間にNPCから話聞いておいてくれ』

『それも済ませておいた〜、クエが3つ出て来たね〜』

\*\*\*カオルのクエスト・噂レポート\*\*\*

……クエ編……

天使の腕試し。『光の呼び水』を奥の魔法陣にトレードせよとの事。地上に最近出来た街の食べ物食べてみたい。『チェリーパイ』を持ってきて

タウロス族の弓術は、昔から素晴らしかった。使い古した弓を持って来れば、教えてやる

……噂編……

昔袂を分けたタウロス族は、今は凶暴なので気をつけて！  
私達の集落の店の品揃えは、他の街にも勝るものだ

集落の外の魚人やインプの争い事は酷いものだ  
タウロス族と天使と妖精は、昔から仲が良い。大樹に取り付く魔女  
は共通の敵だ

用意周到な薫の調査能力は、まさに脱帽モノ。弾美は感心しつつも、クエストの内容にかなり興味を惹かれた様子だ。光の呼び水は、確か瑠璃が持っていた筈。弓術を伸ばしている美井奈もパーティにいるので、使い古した弓クエも是非進めてみたい。

美井奈が使い古した弓と言うのは、耐久度が0の状態かと訊ねて来た。弾美が恐らくそうだろうと答えると、今は持っていないが、スキル技を使えば割と簡単に出来ると楽し気である。

死ぬ思いで立ち寄ったタウロス族の集落だが、どうやらまた今度訪れる事になりそう。

美井奈が矢束は自分のお金で買うので、弾美にはお姉ちゃま方のお土産をお願いしますと頼まれて。性能をギルド会話で確認し、闇市の装備と比較して選んで貰う事に。

スキル+装備だけあって、割と高いが防御も高く良い性能。弾美は自分用にも買う事に。

砂嵐のマント 風スキル+3、敏捷度+4、防+8

砂塵のピアス、土スキル+3、体力+1、防+3

大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+5%

砂嵐の矢束 複・攻撃力+16

『この矢束……高いと思つたら、ひよつとして範囲攻撃出来るタイプなんでしょっか？』

『あゝ、本当だ。風系の魔法扱いかな？ 風は無属性扱いだから、かなり使い勝手いいぞ』



『へ〜っ、じゃあ高いけど……2セット程買っておきますね!』

『買い物終わったら、戻って瑠璃と合流するぞ〜。瑠璃、レストラ  
ンでチェリーパイ買っておいで』

『えっ、チェリーパイ? わ、分かった』

何の事が良く分からずも、弾美の言う事に素直に従う瑠璃。初っ  
端から諸事情でごたごたしたが、ようやく四人はめでたく中立エリ  
アで合流を果たす。

エモーションでお互い挨拶を交わす姿は、どれも生き生きとして  
いて嬉しそう。弾美が買って来た装備をさっそく配りつつ、パーテ  
ィに瑠璃を招く。ようやくの四人パーティ結成である。

各自出来る事や新スキルなどを報告しあって、お互いの隙間を少  
しずつ埋めて行く。

片手剣スキルが50台に突入し、攻撃力アップの補正スキルが2  
段階に突入したハズミン。素の削り力も冴えを見せ始め、複合スキ  
ル技のトルネードスピニング共々、前衛としていい感じ。

更に風と土系で、2種類のタゲ取り魔法を覚え、盾役としてその  
防御力を生かす道が開けて来た。風魔法の《風鈴》は、サイドステ  
ップの使用時に、敵の注意を引き付ける事が可能。土魔法の《石つ  
ぶて》は、逆に敵に対して使用する。つぶてをぶつけて、敵の注意  
を引く魔法である。

弓矢を持つのを止めて、大麻袋でポケットを増やしたのも、大き  
な変更点と言える。いざと言う時には、装備の変更で遠隔釣りも行  
う予定ではあるけれど。

魔法で一番スキルの高い闇属性の《グラビティ》での足止めで、  
戦術にも変化が付けられる様に。ソロでも粘れるキャラに成長して  
いるハズミンである。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：27

取得スキル : 片手剣53《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

《下段斬り》

《種族特性吸収》 《攻撃

力アップ2》 《複・トルネードスピン》

: 闇48《SPヒール》 《シャドータツ

チ》 《闇の腐食》 《グラビティ》

: 風23《風鈴》 《風の鞭》 : 土23

《クラック》 《石つぶて》

種族スキル : 闇27《敵感知》 《影走り》 : 土10《防

御力アップ+10%》

装備 : 武器 魔人の剣 攻撃力+17《耐久14/14》

: 盾 豪華な大盾 体力+4、防+12《耐久8/8》

: 筒 大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+5%

: 頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、HP

+25、防+15

: 首 鬼胡桃のペンダント HP+8、体力+2、防

+6

: 耳1 砂塵のピアス、土スキル+3、体力+1、防

+3

: 耳2 遺跡のピアス 器用度+1、HP+5、防+2

: 胴 ソゲン鋼の鎧 体力+2、HP+8、防+12

: 腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+15

: 指輪1 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10

%、防+5

: 指輪2 古代の指輪 体力+1、防御+5

: 背 砂嵐のマント 風スキル+3、敏捷度+4、防

+ 8

：腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+ 2

：両脚 魔人の下衣 攻撃力+3、体力+2、腕力+

2、防+10

：両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+10

ポケット(最大9) 小ポーション 小ポーション 万能

薬

中ポーション 中ポーション 万

能薬

中ポーション 中エーテル 闇の

水晶玉

2日間完全休養で、レベル的には変化の見られないルリルリだが、金のメダルで光の術書を1枚購入して、念願の《ライトヒール》の魔法を覚える事が出来た。

これで癒し手としても充分に働く事が可能になり、本人としても満足のいく所。しかも、ゾゲン鋼装備の購入により、前衛としての防御力にも大幅な上昇が見られる事に。

光の特級リングの効果で攻撃距離が少し伸びたため、曖昧な攻撃での空振りが少し減る仕様になったのも嬉しい瑠璃である。大麻袋でのポケット数とSPの増加も、何気に心強い。

ただ、相変わらずMPが250に達していないので、天使魔法の《エンジェルリング》を唱える事が出来ないと言う珍事は解消されておらず。このままネタ魔法に終わらせておくのは、あまりに勿体無い。

弾美にからかわれるネタを、早く失くしてしまいたい瑠璃であっ

た。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：25

取得スキル : 細剣40《二段突き》 《クリティカル1》

《麻痺撃》

《複・アイススラッシュ》

《幻惑の舞い》

: 水48《ヒール》 《ウォーターシエル

》 《ウォータースパア》

《ウォーターミラー》

: 光30《光属性付与》 《エンジェルリ

ング》 《ライトヒール》

: 氷30《魔女の囁き》 《魔女の足止め

》 《魔女の接吻》

種族スキル : 水25《魔法回復量UP+10%》 《水上移

動》

装備 : 武器 天使のレイピア 攻撃力+14、知力+2、M

P+8《耐久14/14》

: 盾 大亀の大盾 耐水魔法効果、防+10《耐久1

5/15》

: 筒 大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+5%

: 頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+5、

MP+25、防+8

: 首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP+1

0%、防+5

: 耳1 天使のピアス 光スキル+3、知力+2、M

P+8、防+3

: 耳2 流水のイヤリング 水スキル+5、氷スキル

	+ 5、MP + 25、防 + 5
	：胸 薔薇のローブ ポケット + 2、HP + 10、MP + 10、防 + 9
10	：腕輪 ゾゲン鋼の手甲 体力 + 2、HP + 6、防 + 5、攻撃距離 + 4%、防 + 4
	：指輪 1 光の特級リング 光スキル + 4、HP + 1
	：指輪 2 水の指輪 水スキル + 3、精神力 + 1、防 + 1
+ 2	：背 クモの巢のマント HP + 7、MP + 7、防 + 7
	：腰 マジックベルト ポケット + 3、MP + 2、防 + 2
	：両脚 流水のスカート 水スキル + 5、氷スキル + 5、MP + 25、防 + 10
10	：両足 ゾゲン鋼の戦靴 体力 + 2、HP + 6、防 + 10
能薬	ポケット（最大11）
	：小ポジション
	：中ポジション
万能薬	：中ポジション
	：中エーテル
	：中エーテル
水晶玉	：大エーテル
	：水的水晶玉

母親の参入で、病床中にもかかわらずにレベルを1つ上げてしまったミイナだが。うっかり妖精装備で風スキルが+5されているのを忘れ、腕とマント装備を固定化してしまうという大失態を演じてしまった。弾美に怒られたの言うまでもないが、敏捷度が上がった。

た事で弓矢の回転率もかなりの上昇を示している。

その際覚えた風スキルの《風の陣》は、敵からの攻撃を軽減してくれる防御系の魔法。使い勝手はいいのだが、後衛のミイナが覚えると言う事態は微妙。

タウロス族の集落で購入した範囲攻撃の矢束により、攻撃面ではより凶悪さを増した。遠隔でさらに範囲攻撃のスペシャリストへの道を、確実に進んでいるミイナであった。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：24

取得スキル : 弓術36《みだれ撃ち》 《貫通撃》 《近距離ショット1》

《フラッシュ》

: 光32《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》

: 雷22《俊敏付加》 《俊足付加》

: 風10《風の陣》 : 水10《ヒール》

種族スキル : 雷24《攻撃速度UP+3%》 《雷精招来》

装備 : 武器 大樹の長杖 攻撃力+11、知力+3、MP+20《耐久12/12》

20《耐久12/12》

: 遠隔 雷鳴の弓矢 攻撃力+17、器用度+4、

敏捷度+4《耐久12/12》

: 筒 貫きの矢束 攻撃力+14

: 頭 飛竜の兜 敏捷度+4、腕力+2、HP+10、

防+8

: 首 幸運のお守り ポケット+2、移動速度UP、

耐呪い効果、防+2

: 耳1 血色のピアス 耐呪い効果、HP+10、防

+2

: 耳2 金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2

防御 + 8	・胸 鉤爪付きの上衣 雷スキル + 3、器用度 + 2、
	・腕輪 超プニヨンの緑籠手 風スキル + 2、敏捷 +
1、防 + 6	・指輪 1 遺跡のリング 器用度 + 2、HP + 5、防
+ 3	・指輪 2 サファイアの指輪 腕力 + 3、SP + 10
%、防 + 5	・腰 マジックベルト ポケット + 3、MP + 2、防
+ 2	・背 砂嵐のマント 風スキル + 3、敏捷度 + 4、防
+ 8	・両脚 鉤爪付きの腰布 雷スキル + 2、器用度 + 1、
防御 + 7	・両足 編み上げブーツ 攻撃力 + 3、防 + 6
	ポケット (最大 8) : 小ポーション : 中ポーション : 中ポ
	ーション
	: 小エーテル : 中エーテル : 万能薬
	: 中エーテル : 雷の水晶玉

弾美パーティと合流して、確実な成長を見せているカオルではあるが。長槍スキルオンリーで伸ばしているだけあって、メンバー中最低レベルだが、かなりの前衛能力を備えている。

獲得魔法の数こそ少ないが、前衛とは元々そんなもの。基本戦法は《炎属性付与》と《俊敏付加》を自分に掛けて、ひたすら殴るだけのシンプルさなので問題なし。

妖精装備の同化も終了し、お金は掛かったものの良品と交換出来

た。NMドロップの腰袋でポケットは最大の12になっているのも、レベルが低いのに前衛を任されている負担を軽減している。弾美と比べると、どうしてもHPが100程度低くて見劣りするのだが。

長槍の新取得スキル技の《石突き撃》は、たまに長槍の石突き部分で追加攻撃をするというもの。ダメージは大した事は無いのだが、SPも貯まるし良い補正スキルかも知れない。

武器の交換で、前衛としての削り力は更にアップ。攻撃間隔では片手武器に遅れを取るが、一撃の威力は更に高まっていくであろう。

名前：カオル 属性：風 レベル：21

取得スキル : 長槍48《二段突き》 《攻撃力アップ1》

《脚払い》 《石突き撃》

: 炎15《炎属性付与》 : 雷15《俊敏

付加》 : 風13《風鈴》

種族スキル : 風21《回避速度UP+3%》 《魔法詠唱速

度+6%》

装備 : 武器 トライデント 精神力+2、攻撃力+25《耐  
久111/11》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、SP+  
10%

: 頭 迅速の兜 炎スキル+4、雷スキル+4、器用  
度+2、防+7

: 首 金のネックレス 敏捷度+2、MP+8、防+3

: 耳1 遺跡のピアス 器用度+1、HP+5、防+2

: 耳2 銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2

: 胴 超ブニヨンの赤鎧 炎スキル+3、腕力+2、

防+14

: 腕輪 迅速の腕輪 炎スキル+4、雷スキル+4、



腕力+2、防+7

：指輪1 迅速の指輪 炎スキル+3、雷スキル+3、

防+4

：指輪2 遺跡のリング 器用度+2、HP+5、防

+3

：腰 迅速のベルト ポケット+3、器用度+2、防

+7

：背 迅速のマント 炎スキル+4、雷スキル+4、

防+7

：両脚 迅速のズボン ポケット+2、腕力+2、防

御+7

：両足 迅速のブーツ 腕力+3、器用度+3、防+7

ポケット(最大12) 小ポーション 小ポーション 万

能薬

：小ポーション 小ポーション 小ポーション 小ポーション

万能薬

：中ポーション 中ポーション 中ポーション 中ポーション

万能薬

：中ポーション 中ポーション 中ポーション 中ポーション

炎の水晶玉

『美井奈つ、お前は一体いくつ装備を固定化すれば気が済むんだっ  
』！

『ごめんなさい、でもマント渡してくれたのお兄さんじゃないで  
すかつ！』

『敏捷度上がるから欲しいって言ったのはお前だろつ、そんな事言  
う奴は明日お仕置きだつ！』

『ごめんなさい、お姉ちゃま助けて！』

何と言っていていいか分からない瑠璃は、取り敢えず手持ちの金のメダルの枚数の報告。ライフポイントを売りまくったお陰で、招待状の元が取れて何と27枚も残っている。

それならお高いカメレオンジェルも買えると瑠璃が言つと、裏エリアに入るのに使うからあまり無駄使いするなと釘を刺された。地上のエリア構成に疎い瑠璃は、そう言われても良く分からない。

それを聞いて、薫が助け舟を出す。エリアの情報を簡単にまとめおいたらしい。

\*\*\*カオルのクエスト・噂レポート\*\*\*

…… エリア編……

クエストエリア 全部で3つ。クエストを受ければ鍵が貰える。

金貨や報酬が入手可能

遺跡エリア 全部で2つ。仕掛け有り。レベルアップ果実、葉っぱが入手可能

イベントエリア 25以上でないと駄目。葉っぱ入手可能。次の扉を開く条件でもある

裏エリア 全部で??? インに金のメダル必要。闇市の噂では、レア装備が入手可能?

フリーエリア 大きいのが1つ。様々なNM、トリガーNMも多い? タウロス族の集落あり

『おおつ、さすがクエスト大臣、情報に抜かりがない。当分は遺跡とクエストエリア中心かな?』

『薫さんはクエスト大臣ですか、お姉ちゃまは何?』

『私はカバン大臣なんだつて、美井奈ちゃんは何かな?』

『私は何ですか、隊長?』

『お前は釣り人だ、今日も程ほどに頑張れよ。薫っち、景気付けにNM行こうか、どこかある?』

薫は確かあったと言い、星の鍵のエリアにNMの目撃情報があると報告した。それに行くか、先に遺跡エリアで葉っぱを回収するか、どちらもポピュラーな選択肢らしい。

美井奈は美井奈で、自分は釣り大臣だと一々言い直している模様である。気楽な会話を繰り返している内に、時間は既に8時から10分以上経っている。

病み上がりを抱えるパーティとしては、夜遅くまでプレイしている訳にも行かない。弾美はまず先に遺跡エリアに行こうと宣言すると、瑠璃と美井奈が入り口はどこかと訊いて来た。

弾美も実は良く知らないので、薫が皆を先導して中立エリアを横断。東西に長いエリアの、丁度北の中央に大樹をのぼって行くイベントエリアの入り口があるらしく。

遺跡エリアはその丁度右、つまり東側にあつて、キャラバン隊の集落の反対側にあたる。さらに東に進めば、フリーエリアの入り口になっている模様である。

遺跡エリアも地下でこなして来た攻略エリアと同様に、各パーティが占有出来る仕様であるらしい。つまり、フリーエリアと違って他のパーティに出会う確立は全くのゼロ。

弾美達にとっては、敵のレベル補正に苦しめられるエリアでもあるのだが。

『んじゃ、パーティの戦闘配置とか、前もっての打ち合わせ通りにな。瑠璃は殴りか回復支援か、場面によって変えてくれ』

『分かった。闇市の方が薬品安かったから、買い込んでおいたよ。今から配るね〜』

『ありがとうございます、お姉ちゃま〜!』

『ありがとう、瑠璃ちゃん』

瑠璃がパーティの皆に、先ほど買い込んだ薬品とHPやMPが30分アップする食事を配って行く。それをポケットに押し込んで全ての準備が整うと、ようやくの突入指令となり。

実に久し振りのエリア攻略開始。しかも、初の四人体制での突入である。ようやくの感もあるが、やっぱりワクワクしてしまう一同は、勢い込んでエリアに飛び込んで行く。

遺跡エリアはその名の通り、昔の建物が廃墟となつて広がっていた。風化し、苔や樹木が好き勝手にはびこっており、時折進めない場所も出てくる始末。昔は綺麗に整備されていたであろうタイル舗装の路地も、がたがたで見栄えが悪いことこの上ない。

進の情報通り、敵の姿は最初は全く見えなかったのだが。歩を進めて行く内に雑魚らしき蟻型の蛮族やスライム、シャドー族やアンデット族などがちらほら出て来た。

虫型の敵も多く、サソリや団子虫、その他色々。クモが出て来た時はびびったが、それ程敵の数も多くなか。

オートマップで確認しても、やっと3分の1程来たくらい。マップの広さは、どうやら下の層のステージの大きい方くらいだと思われる。その割には、敵の数はずっと少ないけれど。

入り口から迷いつつも、ようやく大通りらしき道に出た一行だが、通りの端に案内板を見つけ、みんなで眺めて思案顔。大通りの西に大きな塔が、東に大掛かりな広場が、北に公共の施設らしき建物があるようだ。見ただけでは、さっぱり目的の葉っぱがどこにあるのか分からないが。

3方向のいずれかにあるのだろうという事で、意見は一致。

『じゃあ、どこから行くこうか？』

『建物の中より、外の方が葉っぱ落ちてる確率が高いんじゃないかな？』

『なるほど、じゃあ東の広場ですかねえ？』

そんな訳で、揃って東に進む一行。敵影はやっぱり少なく、殆ど障害の無いままに東の外れに着いてみれば。見えるのは公園のような整備されたタイル張りの地面。

その中央の場所は、綺麗に半円にすり鉢状にへこんでおり、何かの絵が描かれているようだ。風化によってよく見えないが、ちゃんと降りれるように階段もついている。

降り切った底の部分には、台座のような仕掛けが見えた。

『……なんでしょうか、ここ？』

『なんかの仕掛けなのは間違いないよなあ、闘技場とか野球場にも見えるな』

『降りた所のあれが、スイッチみたいだねえ……』

黙って見ても仕方が無いし、時間も勿体無い。弾美を先頭に、階段を恐る恐る降りて行く一行だが。降り切って何も起こらない事に、逆に不安になってしまう。

終いにはミイナがその辺を走り回って、どこかの誰かを挑発してみたり。結果はこれも不発で、俊足魔法の掛け損な感じ。底から見ると、野球のグラウンドに立っているみたいを感じるが、観客などいる筈も無く。うら寂しい雰囲気、そこら中に蔓延しているのみ。

正直、確かに闘技場にいるような気もしてきた弾美だが。

瑠璃が台座を調べてみると、奇妙なマークが時計の数字状に12個描かれていた。どこかで見た事があると思ったら、星座のマークに間違いないと瑠璃は断言。

そしてやっぱり、起動スイッチがあるよう。弾美が隊長命令で、

美井奈に押ししてみると催促。

『分かりました！ 釣り大臣として、仕掛けのスイッチを押しましようー！』

『まあ、何でもいいからそれで頼む。おっと、各自戦闘準備な』

強化魔法を掛け終わった一同を確認し、美井奈は起動スイッチを押ししてみる。その瞬間、降りて来た階段が壁で遮断され、パーティは完全にすり鉢の底に隔離されてしまった。

どこからか不気味なアナウンスの声が鳴り響く。台座は不気味に光を放ち、星座の旅をお楽しみ下さいとか何とか、そんな囁きの口グが表示されたと思ったら。

台座の左側に突如出現する大きな天秤。子供が腰掛けられそうな秤が二つ、均等に左右に配置されバランスを取っている。

『……天秤、はかり？』

『左側に、金貨みたいなのが乗ってる様に見えない、コレ？』

『あゝ、あるな……金のメダルが7枚乗っているってさ』

『はゝ、バランスいきなり崩れてるじゃ無いですか？』

美井奈の言う通りなのだが、クリックして天秤を調べてみても『等しき対価を』との表示のみ。意味が分からず戸惑う一行を尻目に、台座の光が2回目の瞬き。

次の瞬間、左斜め奥に、サソリのモンスターがポップ。驚く一同にスツと接近して来ると、容赦なく攻撃を仕掛けて来る。分かり易い敵の出現に、しかしパーティも張り切って殴り返す。

敵は中ボス仕様なのか、HPが多く強敵だったが。程なく倒され、そして間を置かず湧く次の敵。

『タウロス族？ あっ、これって射手座だ。この仕掛けは星座の順

「番なんじゃない？」

「あゝ、そうだね薫さん！　って事は12種類湧くのかなあ？」

「少なくとも天秤は攻撃して来ないけどな。あれも謎を解かないといけないのかも」

「お姉ちゃまに任せとけば、あんな謎はイチコロですよっ！」

少しは自分も考えると、弾美などは思うのだが。薫もその案に便乗しているようで、歳上の威厳もどこへやら。とにかく遠隔仕様の相手に近付こうと、弾美と薫が駆け出そうとすると。

何故かいきなり、更に3つ同時に仕掛けが作動。山羊頭の魔人と古代魚のような大きなモンスター。その中間に出現した大きな水瓶は、フィールドをいきなり水場に変化させて来る。

湧き上がる悲鳴に全くお構い無しに、戦場は水浸しで移動力は半減。しかも古代魚はまさに水を得た魚状態で、嬉々としてこちらに接近して来ている始末。

射手に取り付くのを諦めた弾美は、古代魚をブロック。遠隔組に射手の始末を頼むと、薫と二人で魚を料理に掛かる。天秤の反対側での戦闘と言う事は、これでやっと半分らしい。

遠隔組は、範囲ギリギリからのアタックで射手の削りに従事しているよう。山羊頭の魔人に、瑠璃が足止め魔法を掛ける。魔法の反撃が来そうになって、慌てて範囲外に脱出。

美井奈は自分に《風の陣》を掛けたの、真正面からの矢の射掛け合い。威力の程は、美井奈に分があるようだ。瑠璃が《ウォータースピア》で手助けすると、射手のHPは一気に半減まで落ち込んで行った。

「まずいよゝ、山羊さんがフリーになってる。魔法解けちゃうー！」  
「薫っち、魔人頼む！　ってか、瑠璃にこいつをマラソンして貰えば良かったな」

『魔人了解、早めにサポートお願いします』

古代魚はもうすぐ倒せそうなのだが、敵の数も多くて大変。射手の方も、美井奈と瑠璃の頑張りで、あと3割といった所。回復をあちこちに飛ばす瑠璃は、水上移動の種族スキルのお陰で苦勞せずに水上を走り回っている。

薫と魔人は程なく接敵、戦いの火花を散らせ始める。3匹の中で一番厄介な敵だけに、薫も気を引き締めての戦闘だ。

程なくタウロス族の射手と古代魚は、ほぼ同時に没。瑠璃は種族特性の機動力を生かして、薫の側まで駆け寄ると、スキル技を駆使して魔人削りの手助けを始める。

美井奈は弾美の指示で《ホーリー》と《俊敏付加》の魔法を使用した後にヒーリングに入る。まだまだ戦闘は続きそうな雰囲気、薬品節約の工夫も大切である。

水瓶もタゲれますけどと、ヒーリング中の美井奈の言葉。コイツを攻撃して破壊すれば、水没の状態が解除されるのかも知れないが、そうでないのかも知れない。

台座の右側に羊とミノタウロスが湧いた事で、水瓶は結局無視の方向に。

『牛と羊押さえるぞ、魔人は行けそうか？』

『もうすぐ終わりそう、終わったら私もヒーリングしていい？』

『おっけ、薫っちはすぐこっち来いよ』

『はい、水瓶は無視でいいって事ね？』

大きな斧を振るうミノ牛を一人で相手をしつつ、羊に《グラビティ》でちょっかいをかける弾美。ところが、羊はそのモコモコした毛に水を吸い込み、10歩も歩かない内にやる気を失ってしまったらしい。勝手に元の場所に戻って消えてしまう、見事な自滅っぷり。



パーティ会話で、今のは何？ と混乱した言葉が飛び交うが。どうやら水瓶を取り除かない事でも、ちょっとした恩恵は与えられるのかもとの推測が。

この調子なら薬品の消耗を避けてのクリアも平気かなと思いはじめる弾美。魔人のドロップが凄いとログも心地良く、ミノ牛戦も、ソロでも充分な程の好調さ。

いつもの如く、調子に乗り始めた頃から暗雲が立ち始め始めるのは如何な事か。次に湧いた双子のゴーストは、いかにも儚げで大して強くも無さそうである。

ヒーリングの終わった瑠璃が駆け寄って来て、1匹持つよと殴り掛かったのだが。

何と渾身の複合スキルのダメージがゼロ！ 焦った美井奈も攻撃を仕掛けるが、やっぱりダメージは皆無。逆に殴り掛かれ麻痺まで受け、混乱した遠隔組は魔法に頼ってみたものの。

やっぱり、魔法攻撃にもダメージはゼロ。渾身の《ホーリー》がゴーストに効かないという事態は、弾美にとっても寝耳に水だった。

『ミノ終わった、そっちに行くぞ！』

『えっと、今何だっけ。双子座？ そこにヒントがあるのかな？』

薫の冷静な考察を遮るように、巨大な力ニが台座の真後ろに出現。弾美は謎解きを女性陣に任せると、単身力ニを押さえ込みに掛かる。こっちも正直きついのだが、何とかポケットの補充の時間が取れている分だけマシな感じ。

一方女性チームは、ゴーストを1匹ずつ瑠璃と薫で受け持っていたのだが。正直、ただ後衛の美井奈に近付けさせないと言う消極的な盾作戦。美井奈の破魔矢も駄目だと言う報告に、もう打つ手が無

いと思った瞬間、ゴーストが初のダメージを受けた。

理由は不明なのだが両方同じだけの量のHPの消耗に、薫がさすが双子と思った瞬間。閃いたように敵の特性を推測。

『瑠璃ちゃん、多分こいつ同時攻撃じゃないと傷付けられない！  
ちよつと同じペースで殴つてみて！』

『えっ、あつ！ 了解！』

瑠璃の攻撃のペースに合わせる様に、薫の突きが炸裂。薫の読みは正しかったようで、ゴーストはたった2撃でへろへろになって行く。元々HPは少ないようで、だったらと美井奈が範囲攻撃の矢尻を装てん。

矢弾による範囲攻撃で、呆気なく双子のゴースト昇天。

『やった〜、薫姉ちやま凄い読みですっ！』

『えへへ、やつぱ最年長だしね〜』

そんな言葉を交わしている間に、ハズミンは黙々とカニを一人で平らげて行く。大型モンスターは一撃が当たると怖いのだが、モーションの大きさと特殊技の発動を読みやすいのだ。

弾美くらいのレベルになると、完封するのも容易い程。

『カニ終わった〜、次は何だ〜？』

『後は、獅子座と乙女座……かな？』

薫の言葉を受けるように、獅子頭の黒マントを羽織った大柄の戦士が出現。一目見て強そうだと直感した弾美は、近づく前に武器をレイブレードに交換しようとしたのだが。

いきなりの獅子の咆哮で、全員が座り込みスタン状態。パーティ内に上がる悲鳴が終わらぬ内に、ゆっくりと近付いて来た両手剣持

ちの獅子は薫に斬撃を見舞う。

たった2撃で薫のHPは半減。ようやくスタン状態から復帰したパーティから回復魔法と遠隔攻撃のタゲ取りが飛ぶ。弾美も取り替えた武器を手に、ようやく接敵に成功する。

仕掛けの最後に、とんだ強敵が出現である。

獅子の戦士は、今度は容赦ない範囲攻撃。範囲内にいた弾美と薫は、避け切れずにモロに被弾する。それでも殴り返して、ようやく敵のタゲを弾美ががちりキープ。

正面からの《トルネードスピン》で反撃の狼煙を上げる弾美。続いて横から近付いた瑠璃が《アイススラッシュ》を見舞う。はつきり言つて、卑怯なくらいの追い討ちの畳み掛け方。

それでも、HPも多い獅子は怯む様子も無く。

熾烈な戦闘は、しかし数の優位は最後まで揺るぐ事も無く。四人での削りは凄しい勢いで、こちらの被害を最小に抑えての勝利に辿り着く。ようやく強敵が倒れてしまうと、一行ははやるの喝采。それでもあと1体残っていると薫が口にする。

MP持ちは慎重にヒーリング、前衛陣は油断無く湧き待ち状態に。

ところが、最後に湧いた乙女は何とNPC。トコトコと一行に近寄つて来ると、祝福の光を注いで呆気にとられている一行を無視して一礼。その場でスツと消えてしまう。

乙女の祝福は、パーティの傷や魔力をフル回復したばかりか、どうやら武器の耐久度も直してくれたようだった。一同は拍子抜けしつつも、何となく感謝の言葉を述べてみたり。

そして残ったのは、割と大量な戦利品と最初に湧いた天秤。水瓶は乙女と共に消滅したようだ。

『戦利品は大量だけど、未だに階段は消えたままなのよねえ』

『天秤の謎を解かないと、ここから出られないって事じゃないか？』  
『お姉ちゃま、お願いします！』

術書などもそうだが、薬品類やら水晶玉やら、他のドロップも豊富。特に最後の獅子戦士からは、大剣や質の良いベルトもドロップ。瑠璃の思案中に、分配に湧く他の面々。

相談の結果、ベルトは弾美が貰う事に。

獅子王のベルト ポケット+2、攻撃力+4、HP+15、  
防+8

他の人間もちよつとは考えると、パーティ会話が騒がしくなる中。薫などはひたすら戦利品を数え上げている模様。どうやら、早解きではほとんど敵も仕掛けも無視して来たため、一度にこんなドロップを見る事が無かつたらしい。

瑠璃は取り敢えず、対価というキーワードから思考を拡げて行く。金のメダルの対価とは、銀のメダル5枚か、お金だと確か3万ギル。しかし、7枚分のお金など持っている筈も無く。

そう言えば、連戦でのドロップでやたらと今回、術書や水晶玉が入手出来た。術書が水や土や闇と3枚、水晶玉がそんな感じで5個もドロップした。

お店で買うとしたら、金のメダルで8枚分だと思つた瞬間謎が解けた。

『あゝ、術書とか水晶玉が1つで金のメダル1枚分だから……』

『あつ、なるほど！ 反対側の秤に、7つ分それを乗せればいいんだ。頭いいつ、瑠璃ちゃん！』

『そうかつ、じゃあ要らない術書とか放り込め。土龍の尻尾ついていないな、幾らだっけ？』

それも確か1枚だった筈と、皆がそれぞれストックを瑠璃に差し

出す。イベントエリアで必要になるのではと薫辺りは心配気味だったが、退路など必要ないと弾美は強気。

結局必要のなさそうな土龍の尻尾や炎の術書辺りを処分的な感じで秤に置いてみると。天秤と階段を封じていた壁が消滅。仕掛けのクリアと共に、金のメダル7枚ゲットの知らせ。

いきなりの大盤振る舞いに、一同大喜び。

『すご〜いつ、こんなに儲かって良いのかしらっ？』

『よし、道が開いた。次は反対側行ってみるか！』

何しろ、既に突入して30分くらい経過している。星座の仕掛けで、結構時間を取られてしまったようだ。急ぎ足で大通りの案内板の所まで引き返し、今度は逆の西の塔を目指す。

目的が何かをすっかり忘れてしまっていた弾美は、薫にもう一度確認。遺跡エリアって、一体何する所？

『葉っぱが1枚あるみたい、それからレベルアップ果実？』

『おお、そうだった。じゃあ、ラスボスとかいないのかな？』

『クエストエリアはいないらしいねえ。ここはどうなのかよく分からないけど』

初のエリアの攻略なのだし、慎重に行こうと言っては見たものの。釣り大臣の美井奈は、ほとんど敵がいなくて見せ場が無いとブツブツ愚痴をこぼしてみたり。

お陰で移動はかなりスムーズなのだが、確かにレベル上げには向かない仕様。3分余りで辿り着いた街の端の塔は、外見は廃墟の建物の1つつぽくて、所々壊れたり植物の侵食を受けていたりと荒れ模様。

入り口の扉は壊れていて、エントランスも明かりに困らない程なのだが。侵入者撃退用のロボに襲い掛かれて、一同驚きつつもそ

いつらを撃退する。

1階には撃退ロボの小型のタイプがうるちよろしっていて、入り口に塔の案内図が見付かった。奥の部屋には宝箱が2つ。開けると素早さの果実と聖水が1つずつ。

ホールに戻った一同は、やっぱり2階にあがるべきかと相談し始めるものの。

『エレベーターと回廊、どっち使おうか、ハズミちゃん？』

『エレベーターは定員二人らしいですよ？ 一気に全員は無理ですねえ』

『運動不足を自覚している奴が、階段を使うべきだ』

『うん、それはそうだと思うけど、これは分断トラップでしょw』

喧々譁々、取り敢えず前衛と後衛を混ぜて分かれようと、瑠璃と薫組をエレベーターに放り込む事に。絶対怖い目にあうと駄々をこねる瑠璃だったが、弾美とペアを組んだ美井奈が、これも強固に嫌がったのだから仕方が無い。

ところが、先に敵の急襲にあつたのは、階段組の弾美と美井奈ペアだった。回廊は何故か手すりの無いタイプで、落下の仕掛けが怖いとは思っていたのだが。

実際の仕掛けは、シャボン玉攻撃。どこかから漂って来た透明な玉は、キャラに近付くと破裂してダメージを与えて来る。仕方なく殴って壊していたら、シャボン玉に混じって敵影が接近。

宙を漂っているマンタに乗っているのは、いつか見たクラゲ人間。しかも結構、数がいるよう。

『敵が出ましたよ、ってか、シャボン玉が邪魔で射線が確保出来ません、隊長！』

『面倒だから、範囲矢弾に取り替える。こいつらHP別々にあるか』

ら厄介だぞ！』

一方、戦況の変化を聞きながらエレベーターに乗り込んでいた瑠璃と薫ペア。向こうの心配をしつつも、こちらも絶対何かあると勘繰っていたのだが。

階数指定など受け付けない封鎖空間は、なんだか不思議な造りになっているよう。上昇する感覚は確かにあるのだが、それは四方がガラス張りになっているから。

周囲は壁だつたり吹き抜けだつたりするのが当然なのだが。気が付けばいつしか、小さな二人乗りの箱は宇宙空間らしき場所を移動しているのだつた。

遠くで瞬く星や、壮大な天の川。ほうき星が視界を横切っていく。

『わあ、綺麗……これは宇宙疑似体験装置なのかなあ？』

『どこに辿り着くのか不安だけど、ちよつと神秘的だねえ……』

『美井奈、その階段ヒートトラップだ！ 移動しないと火傷でダメーシ喰らうぞー！』

『うにゅっ、いつの間につ！ お兄さんっ、2階はまだですかっ！』

2階に辿り着くまでに、マンタとクラゲのペアを何とか殲滅した弾美と美井奈ペア。シャボン玉の地雷（？）地帯からも抜け出してようやくひらけた場所に。しかし2階フロアで息つく暇も無く、今度は大型の侵入者撃退ロボの手荒い歓迎を受ける破目に。

これがまた硬くて手強く、しかも2台も出てくる始末。

『わっっ、こいつ硬いから時間掛かるかもっ！ 美井奈、1匹マラソンしてるっ！』

『お兄さんっ、ミサイル飛んで来ますっ！ タゲ取って下さいよっ』

『あつ、宇宙空間終わっちゃった……ここどこ？』  
『わっ、ハウス……温室みたいだねえ。綺麗な花がいっぱい咲いてるよ、瑠璃ちゃん！』

正反対なログなのは、2組とも重々承知なのだが。だからと言ってどうする事も出来ず、片方は熾烈な戦闘を、もう片方は現在状況を報告するのみ。

弾美は1台目を、容赦なくスキル技の連打で屠ったようだ。弾美の《グラビティ》でマラソンに余裕を得た美井奈は、離れながらの遠隔削りでそれを手助け。

2台目も何とか壊し終えた弾美と美井奈組は、宝箱の鍵が出たと一転はしゃぎ始める。休憩して一息つくくと、宝箱を探し始めた模様。

一方、温室を探索していた瑠璃と薫の周辺でも、ようやく動きが起き始めた様子である。なんだかのつぺりとした、壁のようなゴースムが出現したとの報告がログに入る。

変な植物が頭上に取り付いており、弾美達が回廊で出合ったマンタとクラゲ人間のように、各部位でHPが存在するよう。取り敢えず殴ってみるねと、薫が勢い良く突進して行き。

戦闘は結構な乱戦となっている感じ。頭上の植物に呼応して、周囲から薫がパーティを絡めようと伸びて来ているのだ。

『きゃ〜、瑠璃ちゃん何とかしてっ！』

『水晶玉使うね、薫さんっ。頭の奴を倒したら薫の攻撃止まるのかなあ？』

『美井奈、宝箱あったか？ こっちは上への階段しかない』

『あつ、こっちに2つ並んで置かれていますっ、隊長っ！ お母ちゃまが見つけてくれました！』

お母ちゃまは、今日も一緒に参加しているらしい。もはや慣れた



弾美は驚きもしないが。薫のログからは、やっと下のゴーレムが倒れたとの報告。向こうも苦労しているらしい。

鍵付き宝箱からは、星人の腕輪という光と闇スキルをプラスする珍しい装備と、闇市で売っていて既に購入済みの遺跡のピアスが入手出来た。喜ぶ弾美と美井奈ペア。

星人の腕輪 光スキル+2、闇スキル+3、MP+8、防+8

先程までの苦労もどこへやら。まだ宝箱があるかもと、喜び勇んで3階への回廊をのぼり始める弾美・美井奈ペア。ところが今度は、所々腐敗した階段が行く手を阻む。踏み外すと下まで落ちて、当然ながら落下ダメージを喰らってしまう。

仕掛けが判明すると弾美が先頭に立って、そのすぐ後ろを美井奈がべったり付いて回る作戦に。それでも落ちる少女に、弾美は冷たい表情とログ通達。

『美井奈……母ちゃんに代わって貰っても、気付かない振りしててやるぞ?』

『心配無用、余計なお世話ですっ！絶対自分の力でのびりますからっ!』

瑠璃・薫ペアは、何とか危機を乗り越えたようだ。こちらも宝箱の鍵が出たので、いそいそと宝箱を探し始めるのだが。見付かったのは巨大な蜂の巣で、温室での第2ラウンドスタート。

薫が前線を維持している間に、瑠璃が魔法で蜂の巣を潰してしまおうと奮戦中。その間にも宙に放たれた蜂の数はとうとう5匹を数え、薫一人では手に負えそうも無い。

ようやく蜂の巣を壊してしまうと、蜂の群れに混乱が。麻痺中の薫から安堵の声が漏れる。

『瑠璃ちゃん、ちょっと離れようっ！タゲが今乱れてる、また来

「たら怖いっ！」

「了解、麻痺治すね、薫さん」

「美井奈、早くのぼって来いっ！ 3階で敵に絡まれたっ！」

「い、今行きますからっ！」

今度のログは、お互い混乱状態中の報告。弾美のいる3階は、下の階より少し小さな間取りで、出て来た敵はのっぺらゴーレム2体。温室に出たタイプだが、植物の付加は無い模様。

美井奈の遅れでやや劣勢に立たされている弾美だが、防御の硬さとHP量は伊達ではない。軽快にステップを踏みながら、巨体の敵を華麗に翻弄してみせる。

相手は数の有利を活かせずに、接敵場所の取り合いにオタオタ。

温室での瑠璃・薫ペアの戦闘は、どうやら一息ついたよう。しかも、思いがけず蜂の巣の奥に宝箱を発見したらしい。向こうのペアは、和気藹々な感じのトークテンポに変わっている。

瑠璃の開けた2つの宝箱からは、星人の帽子という頭装備と遺跡のリングを入手出来たよう。喜びのコメントの中に、美井奈のやつとのぼれたとか細かい声。

弾美は既に1体を屠っており、美井奈はしゅんとなりつつも戦闘参加。離れた場所から慰めの声を掛けるお姉さん達。

「あ、美井奈ちゃん、こっちだったら活躍出来たのにねえ。組分けしたハズミちゃんが悪いよ」

「そうそう、ちょっとくらい遅れて来るのが女の子のテクニクなのよ」

何のテクニクだと、弾美は思わず突っ込んで聞きたかったが。程なく弾美組の戦闘は無事終了を迎え、今度は階段脇に置いてあった宝箱を開錠する。星人のマフラーという首装備と、土龍の尻尾が

入手出来た。

しつかり美井奈ちゃんをエスコートしなさいと、うるさい外野に従った訳ではないけれども。4階には二人一緒に到達、今回は進路を妨害する敵や障害は全く無し。

かと思つたら、瑠璃と薫にばつたり出会う。この階の4割を占める温室は探索済みとの言葉。更に左側は階段まで辿り着くまでに通つて、何も無かつたとの報告。

残るは階段の右側のみ。四人揃つたパーティは慎重な足取りで進み始める。

『あれっ、屋根が半分無くなってますね、ここ』

『本当だ……しかも、温室からの樹木が変な育ち方してるねえ』

『むっ、奥の暗闇に何かいるなっ？ みんな、戦闘準備しとくぞ』

外から差し込む光が、逆に部屋の奥に影たまりを作っていた。そこでカサカサと動き回っているのは、どうやら小さな虫の群れのよう。強化の終わったパーティがそろりと近付くと、そいつ等は暗闇で赤く光る眼をこちらに一斉に向けて来た。

赤黒い甲殻を持つそいつは、最初はただの虫の群れかと思つたのだが。陰から飛び出してみれば、1匹の大力マキリとナナフシを掛け合わせたような細長い不気味な生物。

どうやら別々の虫達が、塊となって巨大な姿を模っているようだ。

弾美の号令で、前衛二人が一斉に敵を殴り始める。硬い甲殻の大蟲は、攻撃手段も豊富のよう。殴り手段だけで大鎌と小鎌の2セツト持ち合わせており、長い尻尾は特殊攻撃が発動するたびに、切り離されて増えて行く。

口の部分からの毒霧攻撃と、大鎌の振り回しは範囲攻撃扱いらしい。どの特殊技が来ても、被害を受けたメンバーと回復役から大きな悲鳴が上がる。

切り離しの小蟲が湧くたびに、瑠璃が素早く対応を迫られる。基本的に弾美と薫は本体オンリー。美井奈は場合によって、瑠璃を助けたり本体にスキル技を放ったり。

後衛組は、リーダーの指示を受けて臨機応変な戦い振り。

『HPは減って来たけど、何か嫌な感じだなこいつ、ひよつとして分離するんじゃないか？』

『えっ、分離はもう3回くらいしたよ、ハズミちゃん？』

『ええっ、全部位の分離って事？ それはヤバイんじゃない？』

『念のため、SP貯めておきましょうか、隊長？』

余裕があればそうしてくれと、弾美はさらに削る事に集中して行くのだが。4本の鎌の攻撃は弾美に集中したり、たまに薫の攻撃に反応したり。何度目かのスキル技の応酬で、やっと大蟲のHPは半分にまで減って行き。

その途端、弾美の懸念していた事態が事実となってしまう。耳障りな音と共に大蟲が仰け反ったかと思うと、爆ぜるように各部位が分裂して行ったのだ。弾美が素早く反応するも、タゲを取れるのはどうやっても精々が2〜3匹程度。

ばらばらになった小蟲は全部で10匹。パーティは大わらわ。

美井奈は離れた場所にいたので、その為に幾分かショックは少なかつたようだ。待つてましたとばかりに、いつかの必殺技、範囲可能な砂嵐の矢での《貫通撃》を見舞う。

その威力はやっぱり凄まじく、範囲にいたら5匹以上があつたという間にHPを減らして行く。しかしそのせいで倒し切れなかった敵が、わんさかミイナへとたかってしまう事態に。大慌ての美井奈は、反対方向に逃げる素振り。

瑠璃の水晶玉の使用も一足遅く、美井奈は3匹の敵を引き連れてフロアを逃走して行く。

『わっ、わっ、倒し切れませんでした、隊長っ!』

『小さいのは弱いから、そんな焦るなっ。適当に引き回して戻って来いよ、美井奈っ!』

『こつち後5匹くらい、すぱつと倒しちゃおうっ!』

小蟲のHPは、幸い大して多くも無かったため。三人掛かりで、何とか素早く倒し切る事に成功。後は美井奈がマラソンしていった奴だけと、連れて戻るように話し掛けたのだが。

何だか様子がヘン。パーティ表示のミイナのHPバーはどんどん減って行っている。皆が大慌てで駆けつけた時には、雷少女は《雷精招来》を発動中だったり。

小蟲は3つでタイヤの形に合体変形しており、遠距離からの轢き逃げスタン技で、美井奈をサンドバック状態に。

『助けて、死んじゃうっ!』

『わっ、わっ、美井奈ちゃんっ!』

皆で駆け寄り、無理やり必死にタゲを取り返す。危つく向こうが仕掛けた場所以外で、各個撃破されるところだった。瑠璃に回復を飛ばして貰って、少女は放心状態ながらも、見た目は無事な状態に戻って行く。

敵が完全にいなくなっても、しばらく美井奈は呆けている印象のまま。

『ん、美井奈がタゲ取った時用に、装備を硬くさせるべきか?』

『これから先、範囲攻撃が必要な時もあるだろうしね』

『今はスキルアップ装備ばかりなの? それは危ないね』

こつち何度も雷精招来をされたのでは、過重労働で雷の精もヘソを

曲げかねない。弾美は思案しつつも、取り敢えず生き残った事へのねぎらいの言葉を少女に掛ける。

美井奈は何も言い返さず、何となく落ち込んでいる感じにも見えて。そんな空気を讀んだ弾美は、明日は美井奈の強化のためにメダルを使おうとパーティに提案する。

瑠璃と薫が喜んで承諾すると、少女はおずおずと口を開いた。

『あの……やっぱり私、足手まといじゃないですか？』

『そんな事は全然無いよっ？ 美井奈ちゃんがいなかったら、私達は地上に来れなかったよ。そうだよねえハズミちゃん？』

『そうだな、少なくとも俺はこのメンバーで、期間限定イベントを最後までクリアするつもりだからな。途中下車は不可能だぞ、美井奈』

『そうだね、せっかく知り合えたんだから、一緒に頑張ろうよ！』

どうやら少女は、感極まった状況に陥った様子。娘はしばらく操作不能なので、次の敵を見掛けるまで付いて行くだけになりますと、母親がログで告げて来る。

どういふ状況なのかよく分からないが、そこは優しさで皆敢えて触れない事に。薫が、さっきの敵の戦利品と宝箱の話題を振ってきたので、弾美が率先して回収に向かう。

宝箱は2つ、星人のローブとグランドイーターの果実が出て来て、果実の融通により薫は22へとレベルアップ。大蟲からは両手鎌や蟲の腕輪、精神の果実や薬品類がドロップ。

パーティで何とか使えそうなのは、星人シリーズではローブくらい。

星人のローブ 光スキル+2、闇スキル+3、MP+12、  
防御+12

塔にはもう、仕掛けも敵もないようだ。そんな訳で、階段を使用して一団となって外に降りて行くパーティ。何にせよ、目的の一つは達する事が出来たのだ。

遺跡エリアであと残るは、北の1方向のみ。恐らくそこにメインの目的の葉っぱがあるのだろう。マップ攻略の段階で、一番奥はやっぱり一番怪しいので。弾美はいつも、癖のように後に取っておく事が多いのだが。

今回もやはり、怪しさを嗅ぎ取る嗅覚は衰えていなかったよう。

塔でも20分くらい時間を取られてしまい、しかし北に直進する大通りは脇道もほとんど無く順調な道のり。敵もほとんどいないので、一行の行く手を遮る者もなし。

そんな事を考えていたら、意外な超大物が行く手を阻む事になるのだが。薫が建物に入れる脇道を見つけ、次いで瑠璃がすぐそこに何か仕掛けがありそうだと報告した。

どっちを先に調べるか迷った弾美だが、大通りの何とかポイントはずぐそこにある。

『ん〜っ、先にポイント調べてみるか。一応みんな戦闘準備な〜』

『了解〜、道の奥はもう行き止まりっぽいな〜。ラスボス出て来るかも?』

『美井奈ちゃん、そろそろこのマップも終わりだよ〜』

『りよ、了解です、お姉ちゃまっ!』

強化魔法を掛け終わると、ぞろぞろとポイント前に向かうパーティ。ところが代表者が調べる前に、強制イベントが発動。ムービー動画に出て来たのは、何とフリーアイルの魔女その人。

空を浮遊した人影は、冒険者達を見下ろしながら楽しそうな笑み

を浮かべている。その腕が上がったかと思うと、魔女の遙か上空の分厚い雲に異変が。

厚い雲が雷鳴と共に真っ二つに割れ、隕石が地上目掛けて落ちてくる映像。

『うわ〜っ、最強魔法のメテオだ〜!!』

『きゃ〜、やだっ、ちよっとタイム〜!』

『あんなのぶつけられたら死んじゃう〜!』

画面のブレは相当なもの。パーティの混乱も同様で、こんな終わり方があって良いものかとの思いの中。イベントにもう一つの飛翔する影が出現し、魔女に果敢に攻撃を仕掛ける。

白い翼の天使と黒いローブの魔女は、宙を飛び交いながらやがて小さくなっ行って行った。

『あれっ、敵……行っちゃいましたねえ?』

『ああ、隕石で路が通れなくなってる……そういう仕掛けの布石だったのかな、魔女の出現?』

『メテオすげえ……でも、天使を初めて見たプレイヤーは、話の筋分かり難いかもなw』

『本当だねえ……美井奈ちゃん、あの悪い魔女、絶対一緒にやつつけようね!』

『はっ、はいっ、お姉ちゃまつ!』

美井奈がようやく元気を取り戻したのは良いが、通れなくなった大通りはもうどうしようもない。先に進めそうな通路は、先ほど薫が見つけた脇道のみである。

全員でその細い路を辿って行くと、それはどうやら建物の外縁に取り付けられた階段のよう。いつの間にか屋上に出る事が出来て、見晴らしの良い景色が一行の前に広がる。屋上は何だかんだで通行



が可能になっていて、辿って行くと北の端に辿り着けるよう。

さらに、屋上の隅に設置された宝箱からは、転移の棒切れが人数分ドロップ。歩いて帰らずに済む親切設計だが、肝心の葉っぱが何故かまだ見付からない。

屋上は迷路のように入り組んでおり、高低差の把握をしないと途端に行き止まって引き返す破目に。敵はいないが、段々と一行のフラストレーションは貯まって行く。

瑠璃と美井奈のコンビが、いつの間にかかなり先行していた。道順を教えながら、なおも丸太の道を進んで行くと。何となく見えて来た、古く厳めしい遺跡のゴール地点。

それは奇妙な彫刻が施された、入り組んだ外観の建物だった。その屋上には、何かの怪物をかたどった石像も見受けられたが、有り難い事に動き出す気配は無い。

その場所の草のクッションの中、空色の木の葉が地面からほんの少し浮いて存在していた。

『あつたよ、美井奈ちゃんが見つけたよっつ、ハズミちゃん！』

『えっと、これを全員で触れば良いんですけどっけ？』

『そうそう、全員8枚分集めないと、次のステージに進めないらしいからな。取り忘れるなよっ！』

最後の迷路で少し時間を取られたが、何とか遺跡エリアの探求はお終い。見事にクリアとあいなって、全部で1時間ちよつとの冒険。何とか順調に攻略を済ます事が出来たようだ。

全員触つたのを確認して、パーティは揃って転移の棒切れを使用する。

\*

\*

地上に出て来て初のまとまったエリア攻略に、結構神経を使った気がする一行である。弾美は他のメンバーにまだ大丈夫かと訊ねるが、みんな平気だと元気な返事。

次の予定は、クエストエリアの攻略となっている。1エリア廻り切るのに、大体1時間と聞いていたので2つ行けると踏んでいた弾美。ただ、入り方をどうしたら良いか知らない弾美は、薫に進行役をバトンタッチ。

薫は全員、まずはクエを受けて貰わないと、中立エリアをテクテクと案内し始める。あつちでNPCに依頼を受けて、こつちで噂を入手して、全員で広いマップを行き来して回り。薫の下調べは完璧で、時間短縮に役立つたの言うまでも無い。

それでも鍵を渡して貰って、全ての準備が整ったのは10分程度が経過してから。

『時間取られちゃったけど仕方ないな。これでは、鍵使ってイベントエリアに入るだけ?』

『そうそう、クエの報酬は色々だろうけど、NM情報は間違いないと思うよ?』

『ん〜、中でも時間取られそうだったら、最悪NMだけでいいか…』

『これって、受けた依頼は全部同じエリアでこなせるの?』

『そうだよ、今日受けたのは、全部星の鍵のエリアのクエストばかりだよ〜』

薫の答えに、ちょっと納得の様子な瑠璃。美井奈に頑張ろうと振ると、少女も病み上がりとは思えない張り切りよう。母親が隣にしているのなら大丈夫かと、弾美は心配しない事に。

入る前に、フリーエリアで集めた素材収集クエを終わらせておけばとの薫の振りに。そう言えば苦労して集めた素材があったと、弾美は合成屋へとダッシュする。

お礼に貰った装備は、なかなか良さ気なベルト装備。相談の結果、美井奈が貰う事に。

複合素材のベルト ポケット+4、器用度+4、MP+8、防+6

用意はだいたい整ったと、買い足したポーション類を整理しつつ、突入の指示を出す弾美。四人が今回入り込んだエリアは、割とどこかで広々とした感じの景色を見せる。

入った場所にはワイプ用の魔法陣があつて、その後ろは牧場で見かけるような柵が長く続いている。太陽は天高く昇っており、原っぱの景色が遠くまで続いている感じ。

遠くに森の木立や、古ぼけた建物が辛うじて見えているのが、ちよつとした変化だろうか。

『えつと、研究者の迷子探すと、変わった苔の持ち帰りと……目撃情報が、妖精の泉と山の中の薪釜付近のNMだったつけ？』

『そんな感じかな？ あと、倉庫の工具を置き忘れて、これもクエ？』

『よく分からないけど、同じエリアらしいね。持って帰れば、報酬貰えるかも？』

『とにかく探してみましようか。どうやって探索しますか？』

弾美はちよつと考えて、行き止まりの後ろ以外の3方向に散らばってみようかと提案。弾美が左を、瑠璃が右を、レベルに不安のある薫は美井奈と一緒に真つ直ぐ進んでの探索へ。

最初の5分は、パーティで散らばつてのマップ作成。幸い敵はほとんどおらず、いてもノンアクティブの様子。弾美は好奇心で殴つてみたが、それほど強くは無い印象を受ける。

真つ直ぐ進んだ薫と美井奈組は、前方にポプラの田舎道を発見との報告。

『左に進むと、古い建物の建ってる場所に辿り着くようですね』  
『こっちは森に辿り着いたよ、モンスターがちらほらいるかな？』  
『ソロじゃ危ないな。瑠璃はそのまま左に進んで、道まで出れるか？』

『わかった、美井奈ちゃん達と合流するね』

10分も経てば、クエストに関係あるっぽい怪しい家屋の軒並みを発見出来た一行。そのほとんどが廃墟で、中には壁だけしか残っていない建築物も。廃墟の入り口で合流した一行は、他には主だった怪しい場所も発見出来なかったため。

ここに賭ける意気込みは割と大きく、全員一丸で廃墟の探索に挑む事に。

廃墟にはネズミのモンスターがうじゃうじゃ。全然強くないのだが、邪魔だとばかりに弾美と薫が大掃除。釣り大臣としては探索にいい所を見せたい美井奈は、瑠璃と一緒に怪しい場所や迷子を見つけてようと大張り切り。

ところが見つけたのは、何とフリーエリアの沼で出合ったNMの大蛇だった。弾美に釣って来いといわれ、そこから廃墟の通りの真ん中で殴り合いの遣り取り。

ネズミは全部逃げて行き、結果的にすっきり。四人がかりで、結局大蛇も倒し切る。

『あれっ、迷子は大蛇に呑み込まれていたとかってオチはないかな？』

『ネズミがいっぱい、あの建物に逃げて行ってみましたけど。ホラ、痛みの少ないあの赤い建物』

『むっ、それはヒント？ ちょっと入れるか試してみようか』

建物は入れるようになっていて、邪魔なネズミを倒しながらあちこち探索してみると。のぼれる階段が上がった突き当りの1室に、何と迷子の研究者というNPCを発見。

その手掛かりを見つけた美井奈は狂喜乱舞。

おおつ、外にいるあの大蛇を退治してくれたのか。あいつが外をうろついていたせいで、この建物から出る事が出来なくて困っていたのだよ。

助かったよ、有り難う。後で私の研究所まで来てくれないか？

なに、見送りは結構！

『やった〜っ、美井奈ちゃん大手柄だよ〜！』

『よく見つけたな、これで1つク工終了だ。時間もそんなに掛けずに済んだし、良かった』

『有り難うございますっ！ 次も私が見つけますよっ！』

ところが少女が次に見つけたのは、廃墟の裏に広がる墓場。ちょっと不気味な雰囲気、あまり近付きたくないのだが。インプが数匹飛んでおり、さらに嫌な感じ。

瑠璃はク工を先に進めようと、敵は相手にしない方針をパーティに提言する。苔と倉庫と泉の探索をさっさと終わらせた方が、精神的にも楽になる筈だと。

時間も惜しいしそうしようと、一行は敵を無視して再び探索に神経を集中する。

廃墟の近くに小さな川が流れているのを、今度も美井奈が発見した。これを辿って行けば、ひょっとして妖精の泉を発見出来るのではないかとの憶測だが。

近場で倉庫を見つけたのは薰だった。丁度、墓場の向こうに離れた感じで農家の家屋の廃墟が建っているそう。その隣に大きな倉

庫が建っていて、中にモンスターの影が見えたとの事。  
近場から片付けようと、一行は農家の倉庫前に集合。

『あれっ、日が暮れてきましたね……ここは時間が存在するっぽい？』

『だな、ダンジョンとは違うみたいだし』

『メイン世界じゃ当たり前だけど、何か新鮮に感じるよねw』

そんな夕暮れ時に、倉庫の中のモンスターと一戦交える冒険者達。巣くっていたのは、巨大な黒い体躯のケルベロス。3つ頭と尻尾の蛇は、いかにも強そうに弾美達を威嚇している。

戦闘はいきなりの咆哮とプレスで、一同大ピンチ。戦況を建て直す前に、ハズミンのHPは半減までに追い込まれるもの。巧みなタゲコントロールで、他のメンバーは傷を負っていない事がかなりの余裕を生む結果に繋がった。

立ち直りも素早く、反撃に転じる弾美達。

敵のHPは豊富なのはある程度予想出来たが、攻撃の回数が多いのが盾役のハズミンを苦しめる。3つの頭での噛み付き攻撃は、全て避けるのは不可能に近い。横で削っている薫にも尻尾の噛み付きが何度も襲い掛かって来る。

回復に追われて瑠璃と美井奈は、なかなか攻撃に集中出来ず。それでも瑠璃の氷系の複合スキルがヒットすると、3頭巨犬は苦しそうに呻り声を上げる。

『おっ、瑠璃のアイススラッシュ効いているな、プレスが来なくなつた』

『私も貫通撃行きますよ〜！』

解毒や回復に追われていた二人が、間隙を縫って攻撃に転じ始め

ると。あっという間に3頭巨犬のHPは削られて行き、ようやくHP半減まで敵を追い込むパーティ。

それに応じたケルベロスの逆襲か、形態が微妙に変化。赤黒い炎が身体を覆い、殴る度に炎ダメージをこちらに与えて来るようになった。しかも3つの頭が同時に呪文の詠唱を開始し、渾身のHP吸収魔法を唱えて来る。《シャドータッチ》でHPを吸われたメンバーは悲鳴の嵐。

殴っても魔法を止められなかった弾美は、モニター前で思わず悪態を付く。

『きゃ〜、ちょっと何でこんなに強い敵が、こんな倉庫の中とかにいるのよ〜!』

『たいした宝物守ってる訳じゃないのにね〜?』

『むかつく〜! 瑠璃、魔法で削ってくれっ。殴ったら反撃が厄介だ!』

了解との言葉と共に、瑠璃の水の槍魔法と、ついでに美井奈の光の槌魔法が炸裂。魔法攻撃の2発目で何と、3頭巨犬を覆っていた炎のガードが解けてくれた。

ポーションで自己回復をしていた前衛陣も、これなら安心して削れるとラストスパート。弾美は次の魔法が怖いので、瑠璃に《麻痺撃》のスタンバイを頼みつつ、薫と共にスキル技を放つ。

凶悪HP吸収魔法は、結局2度目の詠唱は来ず仕舞い。そのせいと言う訳でも無いけれど、何とかパーティは大きな被害を出さずに勝利を収める。

『勝った〜、しんどかったね〜』

『戦利品、意外としよばいな……宝箱隠されてないか?』

倉庫の中には宝箱など無く、代わりに工具セットというアイテム

を発見。クエアイテムらしいので、それぞれ持ち帰る事に。すっかり薄暗くなつた農家の周囲を探索するが、やっぱり何も無し。

薫がこの戦闘で、23へと順調にレベルアップ。ここまで来ると、両手武器の攻撃力はパーティの重要な戦力である。皆に祝福されつつ、薫はパーティ間のレベル差が埋まって来た事に安堵の表情。

これでそれ程、足手まといの存在にはならなくて済む。

探索を続けようと移動しようとしたパーティは、しかし夜の墓場で異様な影を発見してしまふ。今度は川沿いに探索しようと来た道に戻る近道を選んだのだが、それが仇となる事に。

あれはちよつとヤバイと、弾美でさえも怯むモンスターは、墓場の中央で静かに佇んでいた。引き返そうかと相談する一行に、墓場の地面の下からご無体なお出迎え。

気付けばスケルトンやグールが、ポコポコと湧いて出て来る事態に。

『わ〜っ、これってヤバイ？』

『ソウルイーター、もう反応してるかもっ！』

『やばいつヤバいつ、余裕ある奴は聖水をポケットに入れ替えるっ！』

そんな余裕は、湧き出た死体の群れに与えては貰えなかったが。気付けば最悪の死霊、ソウルイーターがパーティを丁寧にお出迎え。死肉で出来たヘドロ男のような容貌だが、その特殊能力は冒険者キラーとして悪名高い。

やけっぱちに殴りかかった弾美に、いきなりの片手剣の耐久度減のログ表示。思いつきり怯みつつも、何となく予期していた事態でもある。これもやっぱり、ソウルイーターの特殊能力。

この特殊能力がある限り、奥の手のレイブレードにも交換出来ない。



湧き出たスケルトンやグールは、戦力的にはただの虚仮脅しだったのは助かったが。パーティーで殴り始めた死霊のボスが、それならこちらもと周囲に呪いを撒き散らす。キャラの頭の上に急に現れた数字は、20から順にカウントダウンを始めて行く。

その特殊効果に、パーティー同大パニック。

『わくっ、何ですかこの数字はっ、不吉!?!』

『はやく聖水を使えっ! 0になったら強制死亡だぞっ!』

『たっ、確か、聖水も1分くらいしかもたなかった筈だよなっ?』

初めて死のカウントダウンを喰らった美井奈は、その怖さを知らないようだったが。薫の言う通り、聖水を使っても秒読みはジャスト1分間止まるだけである。

それでも一時止まるだけマシと、一同はウィンドウを開いての聖水の使用。全員何とか1桁になる前に静止出来たが、死の宣告はソウルイーターを倒さない限り解除されないと来ている。

冒険者をここまで必死にさせる仕掛けも、滅多に無いだろう。

聖水使用のモーション中攻撃されっ放しだった弾美も、やけっばちの反撃を繰り出す。連続スキル使用からタゲを取り、光系の魔法での削りを仲間に要請する。

美井奈が渾身の《ホーリー》を放ち、瑠璃も光属性の掛かった細剣で削りに参加。パーティー丸となったの削り作業、回復魔法など飛ばしている暇も惜しむ程だ。

しかし殴れば殴るほど、武器は腐食して行くと言う仕様、はつきり言っって酷い。

1分が過ぎても、もちろん戦闘は続いていた。ソウルイーターのHPはようやく半分程度。聖水は瑠璃の補給のメメさに救われた形

で、パーティ全員在庫をもう少しは抱えているものの。

2度目の使用のごたごたで、皆の頭上の数字は1桁に突入。美井奈はエーテルを使つての《ホーリー》の連打に踏み切ろうとしたが、お返しにソウルイーターの特殊技の死霊召喚が発動。

雑魚のゾンビにたかられて、魔法処ではない状況に。

『あと3割つ、あと30秒くらいだつ、美井奈踏ん張れっ！』

『頑張りたいけど、ゾンビが邪魔で魔法が撃てません〜！』

『そつ、そつだ……あの魔法試してみていい？』

瑠璃がエーテルを連続使用したかと思つたら、光魔法の詠唱に入る。ルリルリの初使用の《エンジェルリング》は何とも派手なエフェクトで、周囲を明るく照らし出す。

頭上の数字が、いつの間にか消滅しているのに気付いたのは、薫が一番先だった。その眩しい光には、雑魚ゾンビも一瞬動きを止めるほど。滑らかな動きで美井奈のヘルプに入った瑠璃は、いとも簡単にゾンビの群れを倒し切ってしまう。

戦況は一気に好転し、美井奈の《ホーリー》と弾美の《トルネードスピン》で《強敵のソウルイーター》はようやく活動を止めた。攻撃を一手に引き受けていた弾美はボロボロ。

ゾンビにたかられていた美井奈も、同じくボロボロ。

ただ一人だけ、頭上に天使の輪を載せたルリルリだけは、HP自動回復状態にある模様。一人だけ浮いた存在だったが、キャラも見事輪っか効果で浮いている。

MPだけはスツカラカンだったが。本人も呪い解除効果の発動には、驚いている様子。

『すごいですつ、お姉ちゃまは天使ですよっ！』

『MPぎりぎり足りてたんだな、瑠璃。しっかし、この魔法すげ〜』

！』

『食事のMPアップ効果で、辛うじて足りてただけだ。さすがに全部MP使い切るのは怖いから、使うのは自粛してたの』

『今の魔法って何！？　すごいじゃないっ、瑠璃ちゃんっ！』

入手からの事情を知らない薫も興奮しているが、初めて見たのは皆一緒。激戦の後の興奮に浸りながら、墓場からそくさと離れつつ、感想などを言い合っている。

ソウルイーターのドロップは、闇の術書や命のロウソク、呪いのピアスや呪いの斧など。命のロウソクは金のメダル3枚の価値があるので、結構な報酬である。

さらに美井奈が25に、瑠璃が26にとそれぞれレベルアップ。

美井奈はイベントエリアの入場資格を得た事になり、瑠璃はMPの余裕が少しだけ上がった。

クエストエリアも侮れないと、弾実は思わず内心を口にしたが。

確かにその通りと、他のメンバーも同じ意見。パーティ会話で、油断しないようにとの意志の統一が為されていたり。

休憩が終わると、先ほどの予定通りに川沿いの道を進む事にした一行。大きな満月の下の散歩もオツなものだと、はやくも緊張感の無い会話が始まってしまふ。

その道中に、星の輝きだと思っていたのが、実はグラウンドイーターの枝から発せられる魔方陣の光だと気付いた一行。その神秘的な円形の光は、あっという間に冒険者達を魅了してしまった。

大きな森の塊だともって眺めていたのは、どうやら例の大樹の一部だったらしい。

『キレイですね、魔方陣のイルミネーションが、まるで花火みたいです！』

『本当だね、天使との出会いの話もみんなに聞いて理解出来たし。』

ようやく私も、話の筋が分かって来たよ！」

『そうそう、あの魔方陣に私達は捕まって、連れて来られたって設定らしいしね〜』

『美井奈、ちゃんと前見て歩け。川に落ちてるぞ』

川沿いに何故が残っていたレンガ造りの建物跡のせいで、パーティはいつの間にか分断されていた。思わぬ襲撃があつては不味いと、余所見を後悔しつつ一同はぐるぐると合流のための移動を繰り返す。誰かが止まれば早かつたのだが、先ほどの大慌ての死霊戦がまだ頭の中にあつたのか。どこかパーティ全員が切羽詰つた行動振り、はつきり言つてコントの一幕のよう。

そんな騒ぎの内に、美井奈がふとレンガの1つがクリック出来る事に気付いて。調べてみたら、苔の付いたレンガというアイテムを偶然入手出来た。

全員やいやい言いながら、クエが一つ片付いたと大喜び。

『美井奈ちゃん、ナイス！ 早くもクエが3つ片付いたよっ』

『まだエリアインして30分だけど、順調だね〜』

『後は妖精の泉と山の薪釜ですかね？ 張り切つて見つけましょう！』

意気揚々と、まだ続いている道先頭で進んで行く美井奈。段々と夜は朝へと変わつて行き、道も山道のように荒れて来る。川の流れも急になつて行き、大きな石もゴロゴロした風景に。

そうになると、モンスターもちらほらと木陰から姿を見せるようになって来て。アクティブな敵は、絡まれるより先に経験値に変えてしまえとの弾美の号令の元。戦闘をしながらの山道ハイキング。

朝日が射し始める頃には、一行は小さな滝の元に行き着いていた。

『あつ、あそこ見てっ！ あつた、ポイントだ〜』

『んっ、ここであってるのか？ 名前がちょっと、ヘンな気がするのは俺だけか？』

『呪いの装備とか丁度持ってますし、見付かったのはラッキーですよ！』

『ヘンな気はするけど、取り敢えず妖精をトレードしてみるね？』

瑠璃が代表で、ちょっと名前の変なポイントに妖精をトレードしてみる事に。しかし弾美の懸念の通り、出て来た妖精は微妙な身振り肩を竦めて来る。

ザンネン、ここはそんなに清浄な土地では無いようだわネ。

ワタシの嗅覚によると、フリーエリアの沼の端っこに、清浄な泉が存在する筈なんだケド

もし興味があるのなら、ひとつ走り行ってみたら？ そうそう、ワタシが上げた装備で使い古したものがあつたら、まとめて持って来て頂戴 そうネ、5個くらい集めてくれると嬉しいナ

ワタシの存在に興味がある人がいるって？ 良く分からないケド、泉の水でも汲んで渡しちゃえばいいんじゃないジャ？

『あれ、妖精の泉って探す感じのクエだっけ？ 何か、ここは違うって言われたけど』

『どうだっけ？ ってか、はるばる来たのに無駄足？』

『何か妖精が、泉の水ってアイテムくれたよ？ 一応みんな、入手しておいた方がいいのかな？』

そんな訳で、全員妖精騒動に振り回される結果となった感じである。泉のある広場から、道はまだ山の奥へと続いているよう。泉の水をゲットした一同は、まだ時間もあるしついでに言ってみようと思いが一致。

細く険しいのぼり道は、約2分間で小さな開けた場所に出てお終

いとなった。小さな小屋と薪を焼いて木炭にする釜が、その広場の端に並んで建っており。

釜にはポイントの表示が、どうやら呼び水トリガーをトレードする場所のよう。

『おつ、やつと発見、NMポイントだつ！ 瑠璃つ、トリガー投げ込めっ！』

『えつと、ここは……土かな？』

『みたいですねえ、何で釜が土なんですかねえ？』

戦闘準備しところかと、一応薫辺りは慎重なのだが。瑠璃辺りは瀬戸物を焼くのが土を連想させるのではと、美井奈と連想ゲームを繰り広げている。弾美は弾美で、トリガーNMは昔からドロップが良いと、期待を高めて嬉しそう。

限定イベントでも期待が出来ると話すと、美井奈からもちよつとワクワクした感じのコメントが帰って来て。はやく見たいのでお姉ちゃまお願いしますと、元気な催促を口にする。

皆の用意も整って、瑠璃の持っていた土の呼び水をトレードすると、ポンと湧き出る大きな影。

『……へそくりニャンコだ〜っ！』

瀬戸物っぽい光沢のあるその外観は、やはり土属性の証だろうか。メイン世界でも超有名なそのトリガーNMは、出現と同時に甲高い奇妙な鳴き声を奏で始める。

へそくりニャンコとの出会いに、最高潮の盛り上がりを見せる一行。戦闘の興奮よりもその後のドロップを想像しながら、パーティは各々得意な武器を振るい始める。

最後の戦いの締めに対応しいドロップに、パーティが湧くのはもう数分後の話だったり。

## 15 パーティ初の裏エリア！（前書き）

自分の勤め先は山の上なんですけど、今年の梅雨はじめじめ+蒸し暑い感が満載ですね。例年は山の上だと、雨が降ると肌寒いくらい気温が下がるみたいなんですけど。

雨に濡れて風邪を引きそうになったり、色々と体調管理も大変だったりしますけど。それでも最近は部署変更で、体力的にはちょっとは一息つけそうな感じですよ。

慣れない仕事を引き継いで、精神的にはキツいんですけどね。

そんな訳で、いつものように前半はブログ的な記述でのスタートです（笑）。ついでに言うと、今日は定休日だったにもかかわらず、当番で山の上に詰めてました。しんどかったけど、取り敢えず明日は代休ですよ！

投稿作業も、連日続けて行っ予定ですよ^^

物語は、裏エリアが初めて出て来た章ですね。入る時の謎解きとか、どんなステージにするのかとか、色々と悩んで作った筈なんですけど。

実はあんまり悩んだ記憶がなくて、実はその場のノリで出来ちゃってたみたいですよ（笑）。妖精と言えば童話だろうって、安直な思考から内容が定まって行った感じでしょうか？

本当に、何にも覚えてないや（笑）。

後半はトリガーNM戦……って分かりますかね？湧かすアイテムを持っていけば、必ずNMが出てくれるって仕様が自分は好きなんですけど。ポップ待ちは、ライバルとかいると途端に殺伐とした取り合いが始まるから嫌いです（笑）。

それでもお宝のドロップは運に左右されて、せっかく苦勞して倒



したのにつてパターンが多いのも事実。自分のやってたゲームつて、とにかく膨大な時間か課金を費やした者が、最後には笑うって感じ  
で。

それが嫌で辞めてった人を、どれだけ見て来た事か。

今はモバゲーが精一杯な自分ですが、いつかは楽しいオンライン  
ゲームが見付ければ、また復帰したいなって考えてます。今はとて  
も、そんな時間が取れるほどの余裕は無いですけど。

ってか、小説の次回作の締めはまだ時間が掛かりそうです（笑）。

## 15 パーティ初の裏エリア！

朝の散歩もそうだったが、ようやく元気を取り戻したマロンとコロンの兄弟犬の散歩の同行に。何となく、飼い主の弾美と瑠璃の気持もウキウキである。

ペットも家族の一員、当然と言えばそうかもなのだが。

美井奈が瑠璃の隣で、はしゃいだ声を上げている。今日も学校の終わりに合流して、家まで一緒に歩いて来たのだった。日曜のしんなりした感じは完全に払拭されており、これには弾美と瑠璃も一安心の様子。

代わりにちよっと心配しているのは、美井奈と薫のファーストコソントクト。待ち合わせの夕方の公園で、薫は元気に手を振って一行に合流を果たすのだが。

美井奈の様子がちよっとへん。厳しい目付きを作って、新メンバーを観察してみたり。

「はじめましてっ、あなたが美井奈ちゃんね……可愛いつ！」

「……あなたが薫さんですか。何か大学院に通う優秀な方って聞いてましたけど、ちよっともお洒落じゃないですねえ」

「えっ、そうかなっ……一応この服、お出かけ用なんだけど」

戸惑う薫の服装は、いつものジャージ姿よりはかなりマシなのだが。おしゃまな小学生から見れば、部屋着と大差なく見えても仕方ない。荒いざらしのジーンズに白いＴシャツ、その上にクリーム色の上着を羽織っているだけ。

何と言つか、コロンにじゃれ付かれても被害は無い程だ。

「アホだな、美井奈。都心の洒落た文系短大生じゃあるまいし、実

験やレポートに追われる理系の大学在校生が、お洒落に気を遣って暇なんかある訳無いだろ」

「そうですかねえ……それでも人に会う時には、それなりの格好つてモノがあるじゃないですか」

「普段はボロボロのジャージに白衣で歩き回ってるんだ、勘弁してやれ。寮生活で、バイトもしてないんだ。服買う余裕もある訳ないだろ」

そこまで言われる謂われも無いのだが。弾美の言葉はほぼ当たっている、言い訳の仕様も全く無い。たまに校外でばったり会うのだが、その時の格好を強烈に覚えられていた様だ。

瑠璃が同情に似た視線を送って来るのが非常に痛い。確かに毎月仕送りの中でのギリギリの生活を送っているのも確かな話。家に無理を言つて、大学院まで上がってしまった身分なのだから、仕送り額に文句など言えた義理でもない。

そこら辺の事情を初対面の子供に話す訳にもいかず、もじもじする薫。

マロンとコロンは公園で勝手に遊び始め、時折遊びに誘うように弾美たちの間を駆け抜けて行く。言い訳じみた説明を受けた美井奈の顔は、それでもなおも納得いかない様。

弾美が美井奈の頭をくしゃくしゃと撫でて、少女のご機嫌を取ろうとする。要するに、新しく入ったメンバーに強く出て、順位付けを確定させたいのだろうと察するのだが。

それでもやっぱり子供らしく、弾美にちょっかいを掛けられると嬉しそうに声を上げて、瑠璃の方へと逃げて行く。それから、いい所も見てやれと弾美に諭されると。

難しい顔をして、薫をジロジロ。

「……む、胸が大きい所？」

「あゝ……薫さん、胸大きいよねえ」

少女二人が、羨ましそうに薫の胸元に目を遣る。弾美は何と返答して良いのやらと、ちよつと醒めた様子。薫はひたすら恥ずかしそうに、自分の胸元を隠してみたり。

とにかく四人でパーティーを組むと決めた手前、皆で仲良くやっで行かないといけない。弾美はその四人のリーダーなのだから、色々難しい舵取りもこなさなければ。

美井奈はあれでも少女らしく、多感でちよつと扱いにくい所がある。なにしろ一人つ子で育って来たので、我が侂が顔を覗かせる時がしばしばあるのだ。

そんな少女に、前衛で操作の上手なプレイヤーは是非必要なのだと道理で攻めても、かえってむくれるだけのような気がする。美井奈より前に知り合っていると云う点でも、恐らく気に入らないのだろう。

弾美にしてみれば、頼りない美井奈の穴埋めを実力者にして欲しいのが本音。

瑠璃が必死に、薫のフォローに回っているのだが。美井奈の偏見から入っているいちやもんなので、道理によつて予先を収め難い面もあつたりする感じである。

それでもお姉さんと慕う瑠璃から皆で仲良くしようと言われれば、自分の我が侂を通す訳にも行かず。渋々と言つ感じで、自分から薫に握手を求める少女。

取り敢えずは休戦的な雰囲気にも包まれる、最年長と最年少の二人。

「薫っちは、最後のパーティーメンバーだからなあ。みんなと早目に打ち解けるために、次の日曜日にでも薫っちの所で合同インを企画するかっ」

「ええっ、うちは大学の女子寮だよ？ そりゃあ、遊びに来るの

は構わないけど……とつても狭いし、ちょっと掃除もしないと駄目かも……」

「大学の寮ですかぁ……私ちよつと、大学の中とか見て回りたいかも？」

「私のマンションからも近いですけど……裏山に眺めの良い神社とかあつて、散歩にもいいんですよえ、あそこら辺はっ」

弾美の週末の合同インの提案で、会話もようやく程よく盛り上げて来た。女性陣も、大学やその周辺の区域の情報交換では、結構言いたい事が多い様子。

マロンとコロンの兄弟犬も、そろそろ放つたらかしには飽きたよう。いそいそとご主人の元に戻つて来て、家に帰つて水を飲ましてくれのサインを送つて来ている。

何とかギクシャクした雰囲気から脱した一同は、それをきっかけに弾美の家へと移動する事に。今日のインの予定などを話し合いながら、ゆったりとした歩調での移動。

四人での冒険は、地上エリアで既に体験済みなのだし。弾美はあまり思い煩わない事に。

\*

\*

昨日の2つの地上エリアの冒険で、めでたく28にレベルアップしたハズミン。闇のスキルも50の区切りを迎え、新しい魔法の《闇の断罪》を取得した。近距離使用に限られるが、ダメージに加えてスタン効果も与える、使い勝手の良い魔法である。

装備ではベルトの交換で、様々なステータスが上昇した。ポケットの数は1つ減つたものの、総合力では確実にアップしている感じに、本人も満足そう。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：28

取得スキル : 片手剣55 《攻撃力アップ1》 《二段斬り》  
《下段斬り》

《種族特性吸収》 《攻撃  
力アップ2》 《複・トルネードスピン》  
: 闇51 《SPヒール》 《シャドータツ

チ》 《闇の断罪》

《グラビティ》 《闇の腐食》

: 風23 《風鈴》 《風の鞭》 : 土23

《クラック》 《石つぶて》

種族スキル : 闇28 《敵感知》 《影走り》 : 土10 《防

御力アップ+10%》

装備 : 武器 魔人の剣 攻撃力+17 《耐久14/14》

: 盾 豪華な大盾 体力+4、防+12 《耐久8/8》

: 筒 大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+5%

: 頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、HP

+25、防+15

: 首 鬼胡桃のペンダント HP+8、体力+2、防

+6

: 耳1 砂塵のピアス、土スキル+3、体力+1、防

+3

: 耳2 遺跡のピアス 器用度+1、HP+5、防+2

: 胴 ソゲン鋼の鎧 体力+2、HP+8、防+12

: 腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+15

: 指輪1 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10

%、防+5

: 指輪2 古代の指輪 体力+1、防御+5

: 背 砂嵐のマント 風スキル+3、敏捷度+4、防

+8

：腰 獅子王のベルト ポケット+2、攻撃力+4、  
HP+15、防+8  
：両脚 魔人の下衣 攻撃力+3、体力+2、腕力+  
2、防+10  
：両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+5、  
HP+25、防+10

ルリルリは装備の変更は全くなし。ただし、レベルの上昇などのMP上昇で、条件付きながら《エンジェルリング》を詠唱出来るようになったのは大きいかも。

まだまだ謎の多い呪文なのだが、パーティの呪い解除効果は前回立証された。他にも何かありそうなのだが、MP消費量が多すぎてホイホイ使えないのが痛い。

術書で覚えた新しい水系の魔法の《波紋ヒール》により、範囲回復が可能になった。癒し手としての立場が更に向上、縁の下の力持ちキャラの立場は磐石である。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：26

取得スキル 細剣42《二段突き》 《クリティカル1》

《麻痺撃》

《幻惑の舞い》 《複・アイ

ススラツシュ》

：水50《ヒール》 《ウォーターシエル

》 《波紋ヒール》

《ウォーターミラー》 《ウォーター

タースピア》

：光30《光属性付与》 《エンジェルリ

ング》 《ライトヒール》

：氷30《魔女の囁き》 《魔女の足止め

《魔女の接吻》

種族スキル 水26《魔法回復量UP+10%》 《水上移

動》

装備 武器 天使のレイピア 攻撃力+14、知力+2、M

P+8《耐久14/14》

盾 大亀の大盾 耐水魔法効果、防+10《耐久1

5/15》

筒 大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+5%

頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+5、

MP+25、防+8

首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP+1

0%、防+5

耳1 天使のピアス 光スキル+3、知力+2、M

P+8、防+3

耳2 流水のイヤリング 水スキル+5、氷スキル

+5、MP+25、防+5

胸 薔薇のローブ ポケット+2、HP+10、M

P+10、防+9

腕輪 ゾゲン鋼の手甲 体力+2、HP+6、防+

10

指輪1 光の特級リング 光スキル+4、HP+1

5、攻撃距離+4%、防+4

指輪2 水の指輪 水スキル+3、精神力+1、防

+1

背 クモの巣のマント HP+7、MP+7、防+7

腰 マジックベルト ポケット+3、MP+2、防

+2

両脚 流水のスカート 水スキル+5、氷スキル+



5、MP + 25、防 + 10  
：両足 ソゲン鋼の戦靴 体力 + 2、HP + 6、防 + 10

前回防御力の低さを露呈してしまったミイナだが、星人装備との交換でちよつとはマシになった感じである。更にクエで貰ったベルトに交換して、ポケットや防御力が増えた。

攻撃力が高いので目立たないが、実はパーティで一番武器スキルの低いミイナ。しかし後1つレベルが上がれば、何とか4つ目のスキル技を習得出来そう。

何だかんだと言われつつ、期待を持たれている削りキャラである。その点では、本人も進化の頂点を模索中だったり。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：25

取得スキル : 弓術38 《みだれ撃ち》 《貫通撃》 《近距離シヨット1》

: 光36 《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラツシュ》

: 雷22 《俊敏付加》 《俊足付加》

: 風10 《風の陣》 : 水10 《ヒール》

種族スキル : 雷25 《攻撃速度UP + 3%》 《雷精招来》

装備 : 武器 大樹の長杖 攻撃力 + 11、知力 + 3、MP + 20 《耐久12 / 12》

: 遠隔 雷鳴の弓矢 攻撃力 + 17、器用度 + 4、

敏捷度 + 4 《耐久12 / 12》

: 筒 貫きの矢束 攻撃力 + 14

: 頭 飛竜の兜 敏捷度 + 4、腕力 + 2、HP + 10、

防+8

：首 幸運のお守り ポケット+2、移動速度UP、耐呪い効果、防+2

+2  
：耳1 血色のピアス 耐呪い効果、HP+10、防

：耳2 金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2

：胴 星人のローブ 光スキル+2、闇スキル+3、

MP+12、防御+12

：腕輪 星人の腕輪 光スキル+2、闇スキル+3、

MP+8、防+8

：指輪1 遺跡のリング 器用度+2、HP+5、防

+3

：指輪2 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10

%、防+5

：腰 複合素材のベルト ポケット+4、器用度+4、

MP+8、防+6

：背 砂嵐のマント 風スキル+3、敏捷度+4、防

+8

：両脚 鉤爪付きの腰布 雷スキル+2、器用度+1、

防御+7

：両足 編み上げブーツ 攻撃力+3、防+6

武器スキルがレベルアップと共に、急激に上がっているカオルだが。新しく覚えたのは補正スキルの《クリティカル1》である。突きの武器には出易いとは言え、本人はもっと強いスキル技を覚えたいと思った模様である。

魔法系は全く伸ばしていないので、そちらに関する変更は無し。

レベル20で覚えた種族スキルの《魔法詠唱速度+6%》が、少しと言っかなり勿体無い気もするが。

ポケットが最大の12まで伸びた事は嬉しいが、前衛だけに防御力の高い装備に交換したい気もする薫である。削り力は今の所問題の無いレベルと太鼓判を押されているだけに、他を伸ばしたいと思うのは当然かも。

パーティに加入して、今の所可もなく不可もない働き振り。問題児のミイナをフォローしてくれればもつといいと、リーダーのハズミンは思っているとかいないとか……。

名前：カオル 属性：風 レベル：23

取得スキル : 長槍52《二段突き》 《攻撃力アップ1》

《脚払い》

《石突き撃》 《クリティカル1》

: 炎15《炎属性付与》 : 雷15《俊敏

付加》 : 風13《風鈴》

種族スキル : 風23《回避速度UP+3%》 《魔法詠唱速

度+6%》

装備 : 武器 トライデント 精神力+2、攻撃力+25《耐

久11/11》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、SP+

10%

: 頭 迅速の兜 炎スキル+4、雷スキル+4、器用

度+2、防+7

: 首 金のネックレス 敏捷度+2、MP+8、防+3

: 耳1 遺跡のピアス 器用度+1、HP+5、防+2

: 耳2 銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2

: 胴 超プニヨンの赤鎧 火スキル+3、腕力+2、

防+14

腕輪 迅速の腕輪 炎スキル+4、雷スキル+4、  
腕力+2、防+7  
 ・指輪1 迅速の指輪 炎スキル+3、雷スキル+3、  
防+4  
 ・指輪2 遺跡のリング 器用度+2、HP+5、防  
+3  
 ・腰 迅速のベルト ポケット+3、器用度+2、防  
+7  
 ・背 迅速のマント 炎スキル+4、雷スキル+4、  
防+7  
 ・両脚 迅速のスボン ポケット+2、腕力+2、防  
御+7  
 ・両足 迅速のブーツ 腕力+3、器用度+3、防+7

「4人での合同インは初だな、今日はどこを廻ろうか？」

「美井奈ちゃんの強化に、裏エリアに行くんじゃないかなかったっけ？」

「えっと、裏エリアの情報も、私集めておいたよ？」

6畳の部屋に4人のプレイヤー。最初の位置取りのごたごたから  
 やつと解放され、予備モニターの数も4つとなると。やはり、ちょ  
 っと手狭な感も出て来るのは仕方の無い事。

ぎゅぎゅぎゅ詰めとまではいかないが、お互い肩が触れ合うくら  
 い。右端から薫、弾美、瑠璃、美井奈の順番なのは、弾美のモニタ  
 ーを動かすのが不向きなタイプな為の配慮。

弾美としても、全員のモニターをチェックし易いのは文句ないの  
 だが。

「何か、女性率が異様に高いパーティになったな……」

「そうですねえ……こういうのをハーレムパーティって言うんです

か？」

「そんな単語、良く知ってるねえ、美井奈ちゃん……」

そんな笑えない話も交えながらの、昨日の戦闘での戦利品の整頓や妖精チエツク。ク工大臣の薫からも、昨日のク工報酬をちゃんと貰わないととの提言があつて。架空世界でのごたごたも、それなりに収拾が大変な様子。

忘れない内にク工の報酬を貰おうかと言う話になって、改めて薫を先頭にNPCの元を廻る事に。昨日はNMを倒した後、エリア脱出してそのまま全員落ちたのだ。

迷子の研究者からは報酬5千ギルのお礼をそれぞれに、工具のお礼には炎の神酒を、レンガ持ち帰りの報酬は1千ギルだったが、どうやら連続ク工のようで、他にもあつたら持つて来てくれと頼まれてしまった。

妖精の泉での水汲みの報酬には、何と金のメダルを貰いかなり恐縮する一行。何しろ、本当は清浄な場所でも何でもないと、妖精のお墨付きだったのだ……。

「これは……ちょっと気まずいねえ。詐欺みたいな結末じゃないの」「本人が嬉しそうだから、いいんじゃないのか？ 信じるものは救われるって昔から言うし」

「それはそれで、エセ宗教みたいな話になっちゃうじゃないですかっ」

「うん……メダルを有効に使う事で、この人も喜んでくれるんじゃないかなあ？」

何とか上手に締めようと、前向きな言葉を継いでみる瑠璃だったが。報酬を返す手段もない訳だし、貰っておく事に。それから弾美は、報酬の総合計をカバン大臣に訊ねてみる。

昨日の結果は、最後のNM戦でハズミンが28にレベルアップしたのを含めて上々だった。

へそくりニヤンコのドロップは興奮モノで、何と金のメダルだけで8枚！ 更にお金を8万ギル、土の術書と水晶玉、カメレオンジェルまで落とすと、カバン大臣は報告する。

昨日の2エリアだけで、何と金のメダル15枚も入手してしまったパーティ。何より瑠璃が喜んだのは、ギルの補給が出来た事。闇市やタウロス族の集落で装備をたくさん買い込んでしまったために、パーティ財産が4万ギルを割り込んでいたのだ。

廃墟エリアと星の鍵エリアでのクエストは、そんな感じで上々の制覇具合だった。

「うわあつ、金のメダルが40枚超えちゃった。美井奈ちゃんにカメレオンジェルを買って上げて、まだまだ余裕だねえ……」

「美井奈が昨日出た装備、胴と腕を固定解除して交換したんだろ？ 今日出た装備次第で、足と背中も解除していいぞ」

「えっ……そんなにメダルを注ぎ込んで貰っても、ちょっと心苦しいものが……」

「でもまあ、また泣かれちゃ困るからな」

「なっ、泣いてませんよっ！ 誰ですかそんな事言ったのはっ、お母ちゃまですかっ!？」

真っ赤になつて否定する少女だが、慌てるその動作でバレバレなのがちょっと悲しい。瑠璃が隣で必死にフォローなどしつつ、恒例のイン前の薬品補給も同時に進めて行く一行。

少女はなおも納得が行かない様子だったが、今日の主役は美井奈だと薫や瑠璃が巧みに持ち上げると。途端に頬を紅潮させて、満更でもない顔付きを見せる。

いよいよ弾美が闇市で裏エリアのチケットを購入すると。初のス

テージ攻略に、一行のドキドキ感は否応無しに増して来る。その裏エリアのチケットは、たった1枚がメダル5枚もするらしい。

果たしてこの入場券、高いのか安いのか。

扉前で薫が、闇市にいた情報屋から買った情報を皆に報告して来る。持って来たノートには、結構びつしりと書き込みがされていて、それには皆が驚きの反応を示す。

これでも限定イベント専用の情報ノートなので、それほど量は多くないと薫は口にするのだが。結構な気合いの入り方な気がするが、情報を制する事は時間縛りのあるイベントでは、かなり重要だと本人談。

読んでみて納得。裏エリアの選別には、この情報が無いと無理らしい事が判明。

\*\*\*カオルのクエスト・噂レポート\*\*\*

……噂……

\*裏エリアの修験の塔では、4つあるシリーズ装備の最後の部位が入手可能。入りたいエリアにそれぞれ『お供え物』を捧げよ、さすれば路は開く。

\*暗塊装備は鬼に遭え、流水装備は地面の無い大地に在り、迅速装備は視えても遭えぬ朧なる土地に、妖精装備は人に近き場所に。

\*修験の塔には何度もトライ可能だが、装備を入手した場合はそのエリアは消滅する。シリーズ装備が3つ揃っていない場合も、一応はチャンス有り！

\*『技』の修行場は完全に一人専用、最大で武器スキル+10が可能。その他、スキル強化やスキル取得にも使用可能である！

\*技の修行場の利用チケットは、利用者のスキルに応じて金のメダルが必要となる。

「裏エリアって、こんな感じに分かれてたのか。ええとっ、今日は

美井奈用に妖精装備を取りたいから……人に近き場所に、お供え物を捧げればいいのか。お供え物はどこにあるんだ？」

「ん〜、闇市には売ってなかったし、多分中じゃないかな？」

「そっか、じゃあ準備出来たら入ろうか」

「了解です、隊長！」

美井奈の隊長発言に、隣の薫は面白そうに弾美を盗み見る。それからこのノリが普通だと理解すると、楽しそうに身体を震わせて気合いを入れる仕種。

チケットを使用して入った裏エリアの最初の部屋は、それ程広くはなかった。床の紋様と壁際の自販機が、やけに目立つ感じで置かれている。瑠璃と美井奈が自販機に近付き、弾美は床に書かれた字を判読に掛かる。薫はと言えば、必死に間取りや仕掛けをノートに書き取っている。

自販機がまたあるという衝撃の事実は、パーティにそれなりの動揺を与えた。その隣にいるNPCの言葉は、メダル1枚で何やら貢ぎ物を販売しているとの恭しい入手勧告だったり。

間違えたらメダルを丸損してしまうっばい仕掛けに、一同困惑の表情。

「もう1回ゆっくり読み上げて、瑠璃ちゃん。ノートにメモしておくから」

「んつと……お供え物が全部で4つです。『鬼の金棒』と『月の宝珠』と『永久氷土の欠片』と『忠実な卵』ですね〜。全部メダル1枚で買えるみたいです、薫さん」

「薫っちが情報買ってくれてて大助かりだな。無かったら、全く訳分かんなかったよ」

「そうだね〜、そっちはどんな仕掛け、ハズミちゃん？」

地面の仕掛けは、見た目には6等分された円グラフのような感じ。



中央には供え物を置く石製の台がせり上がっており、円の外周には漢字が等間隔で書かれている。

地面の文字は、どうやら干支の巡りを東西南北の方向に6等分したセツトのようだった。結構大雑把だが、2つの干支が1つの枠に入るように区分されている。

薫はそれも、しつかりノート取り。簡単に整理するとこんな感じらしい。

\*カオルのクエスト・噂レポート\*

……裏エリア情報……

\*北……猪、鼠

\*東北……牛、虎

\*東南……兔、竜

\*南……蛇、馬

\*西南……羊、猿

\*西北……鶏、犬

「ん、鬼に遭う暗塊装備のルート巡りは簡単だな。鬼の金棒を北東にトレードだろ」

「えっ、何でその組み合わせなんですか、お兄さん？」

「桃太郎の謎って、前に見たテレビ番組でやってたからな。北東が鬼の出る鬼門になったのは、鬼が牛の角を生やして虎模様のパンツを穿いているからだって」

「あゝ、あゝ！」

美井奈は感心したように、弾美の言葉に何度も頷く。瑠璃はモニターを指差して、それじゃあ人に近き場所はどこではないかと皆にお伺いを立てる。

瑠璃の推理は、至って簡単な導き出しによるものだった。

「犬と鶏は、昔からペットと家畜として飼われてたし。人に1番近い存在なんじゃないかなあ？」

「お、さすがです、お姉ちゃまつ！でも、ネコとかもそうじゃないですか？」

「ネコは干支にいないだろ、アホ美井奈。んじゃ、卵を産む生き物をこの中から選んでみる」

「ええと……ね、ネズミと竜？」

瑠璃越しに頭にチョップが飛んで来て、美井奈は悲鳴を上げて瑠璃に抱きつき批難顔。その瑠璃も微妙な顔付きをしているのを知ると、美井奈はちよつと間違えましたと訂正。

再度必死に考えて、鶏がいましたとやや小さな声で答え合わせの確認。

「蛇もそうだねえ、竜はどうか知らないけど。でも、お供え物に忠実な卵つてのがあるから、それが犬と鶏を示してるのかな？だから、多分それを西北にトレードでいいんじゃないかな？」

「そうだな、薫っちもそれでいいか？美井奈にはもう聞いてやらない」

薫はそれで良いと答え、美井奈はちよつと不貞腐れた模様。毎回弾美に弄られていて、いい加減慣れて来た様子ではあるが。クラスの子にも、あんな感じで意地悪な子がいると、瑠璃に甘えながらもチクリと反撃。

瑠璃もやつぱり、そういう感情にはほど遠く。薫がさり気無く、会話を割り込んでみる。

「きつとその子は、美井奈ちゃんの事が気になってちよつかい掛けて来るのよ。ひよつとして、美井奈ちゃんの事が好きなんじゃないかしら？」

「私はその子、嫌いですけど」

実も蓋も無い返し方だが、少女の中では何かが解決したようだ。少し余裕を持って弾美を見つめると、瑠璃と顔を見合わせて幸せそうに微笑み合う。

モニターの中ではハズミンが、金のメダルをお供え物に交換し終えた模様である。パーティに突入の合図が掛かって、さて今日最初のエリア攻略へと突入。皆の画面は一斉に暗転。

西北のゲートに固まっていたパーティは、どうやら無事にエリア進出したようだ。

「うわわっ、何だかポエミーなマップだね」

「キノコ型のハウスとか出て来そうだね。あっ、あそこに何かいる！」

一行が排出されたのは、一見のどかな原っぱのような場所。ファンタジー童話の田舎のようなマップに、ポツンと佇む人影だけが不審点というか次への変化の手掛かりか。

近付いて行くと、それは人ではなくネコだった。直立して赤いベストと可愛い帽子、何よりも長靴を履いているネコは、パーティが近付くと慇懃に一礼して来る。

そして、断りも無くパーティの一員に無断籍入り。

「わ、可愛いネコですねえ。武器は細剣のようですよ、お姉ちゃまっ！」

「そうだねえ、名前何て言うんだろう。礼儀正しいねえ」

「長靴を履いたネコだそうだ……勝手にパーティに入ってきて来やがった」

弾美の言う通り、パーティの名前リストの一番下に、長靴を履いたネコというのが見て取れた。ビックリ仰天しているパーティだが、反対に長靴ネコは知らん顔。

それでも定期的に一礼する長靴ネコに対し、ルリルリが調子に乗ってエモーションで礼を返す。それを見てミイナも真似して一礼。いつの間にか、パーティ全員が恭しく礼をし合ってる始末。

それがトリガーだったのか、長靴ネコは新たな動きを見せ始める。

くるりと方向転換したネコは、細剣をシャキンと抜き放つと、あの丘を剣先で示した。そこに鎧を着込んだブタ顔の獣人の軍隊が、突如として出現する。

展開についていけないパーティの面々は、ひたすらに困惑顔。喜劇かムービーでも見ているつもりで、ただただ成り行きを見守るばかりだったのだけれども。

長靴ネコが単独、ブタ顔の軍隊に突っ込んで行くのを見た弾美は絶叫を上げる。

「わく、あいつ今俺等のパーティメンバーだつ！ 死なせちゃ不味いっ！」

「えっ、えっ、向こうの奴等が敵なのねっ？」

敵とみなされたブタ顔の軍隊の連中は、容赦なく長靴ネコを取り囲んで殴り始める。突如始まった動物大戦争は、パーティを巻き込み大混戦の状態へと突入する。

いち早く遠隔攻撃で、敵1匹のタゲを取った美井奈。そいつがもの凄い形相で、こちらに突進して来る。それを薰が、スキル技の撃ち込みでかつちりキープ。弾美と瑠璃は、ひたすら長靴ネコのいる戦場を目指す。

気付けば長靴ネコのHPは半分を切っており、慌てて瑠璃が足を

止めて回復を飛ばす。すると長靴ネコは戦闘中にもかかわらず、慇懃に瑠璃の方向に向き直って感謝の一礼。

どこまでも礼儀正しいネコに、しかし一行からは批難殺到。

「こつち向いてんじゃねえっ！ オマエは今戦闘中だっ、殴られ放題だろっ！」

「かつ、薰さんっ、もう1匹釣っていいですかっ!？」

「オツケ、長靴ネコを助けてあげようっ！」

「わっ、私もタゲ取った方がいいみたいだね……」

長靴ネコの命を救うために、パーティ総出でタゲの取り合いを敢行する破目に。何とかブタ顔獣人を退治し終わったと思ったら、時をおかずに今度は、違う丘にサル顔の獣人がポップ。

そして細剣を手に果敢に突っ込んで行く、長靴ネコ。

どこか憎めない飛び入りパーティメンバーに、一同は10分あまり引き回されて。それでも、自分の都合のみで動き回る長靴ネコに、一同の堪忍袋の緒も切れかけの様子。

何しろ、ネコの実力は一言で言うところ、チヨ一弱い。10回も敵に殴られると、恐らく死んでしまうだろうし、何より回復を貰うたびに剣を納めて一礼する礼儀正しさ。

何というか、戦士に向かないですよ？

ようやく戦闘が終わった時には、メンバー全員ホツとした様子。長靴ネコも何とか生き延びていたようで、剣を納めるとやはり一礼して感謝を表明して来る。

メンバーも渋々と言った様子で、取り敢えず礼を返すと。ポンっと音がしてネコが宝箱に変化。

「おおっ、何とかクリアしたみたいだなっ、良かった！」

「わ〜いつ、この中に、妖精の装備が入ってるのかなっ？」  
「美井奈ちゃん、代表して開けてみて？」

瑠璃の言葉に、おずおずと進み出たミイナが箱を開けると。中から出たのは妖精シリーズでは無かったものの、結構な性能の装備の一覧がわんさか。

戦闘ネコの長靴 敏捷度+2、MP+6、防+10

戦闘ネコの細剣 攻撃力+15、敏捷度+2、MP+8《耐

久12/12》

戦闘ネコの尻尾 敏捷度+15、MP+15、防+1

長靴は文句無く美井奈に、細剣は瑠璃へと渡されたが、ユニークアイテムの尻尾は微妙な所。敏捷度の上昇は凄まじいが、いかなせん防御がぐんと下がってしまう。

ちなみに尻尾は背中、つまりマントと同列扱いの様子で、本人は付けてみたいと楽しそう。グラの変化が楽しそうだと、瑠璃と何やら盛り上がっている。

そんな話をしていると、今度はパーティの前を直立兎が横切って行った。時折立ち止まっては懐中時計を見る、タキシード姿の紳士ウサギだ。雰囲気は急いでいるらしいのだが、短い足なので歩いても追い付くほど。

休憩していた一行は、やんやと盛り上がりながら後を追尾に掛かる。今度は『不思議の国のアリス』だと瑠璃が盛り上がっていると、美井奈が悩みながら訊ねて来た。

「えつと……アリスって、どんなお話でしたっけ、お姉ちゃま？」  
「今流行りの、異世界召喚ファンタジーの先駆けだな。不思議の国に召喚されたアリスが、ブリキの戦士やライオン戦士と熾烈な戦いを繰り広げるんだ」

「へっつ、ウサギはそれじゃあ、魔女っ娘のマスコットみたいな存在？」

「全然違いますっ、オズの魔法使いも混じってるじゃない、それっ！ 美井奈ちゃん、ハズミちゃんの言葉を信じたら駄目だよっ！ 今度、ちゃんと本貸してあげるからっ！」

洗脳されそうな少女を必死で守ろうとしながらも、奇妙な行進はなおも続く。弾美が更に、アリスの話を作成して行こうとするが、瑠璃がさかさず訂正してしまう。

薫辺りはその遣り取りまで含めて楽しめるのだが、美井奈はひたすら混乱するばかり。そんな事をしている内に、紳士ウサギはいつの間にか、小さな町並みに辿り着いていた。

ファンシーな造りの家屋が多く、やっぱりここは創作ファンタジー世界を思わせる。しかしその住人が扉や窓から顔を出しては、驚いたように冒険者を見つめて隠れてしまうのは如何な事か。

不審に思う間もなく、次の変化は何となく察してしまう一同。当然の如く湧いた敵は、笛を吹き鳴らしながらの登場。トランプの兵隊の一团は、距離を置いてパーティを取り囲む。

って言うより、紳士ウサギとの間に割り込む素振り。

「あれっ、兵隊さんに道を塞がれちゃったね。どういう事かな？」

「……なんか、さっきから変だと思ってたけど。街の人にひよっとして、不審者って思われた？」

「ちっちゃいウサギをストーキングしてたからな。通報されても仕方ないかも（笑）」

ケラケラと笑い出す弾美だが、トランプの兵士には言い訳は通用しない様子。手に持つ長槍を構えて、冒険者達をひっ捕らえるべく、問答無用の態度で一斉に襲って来る。

その間にも紳士ウサギは遠ざかって行き、ようやく弾美にも焦り

の色が。

「やつ、やばいつ、このままだとウサギを見失う。さっさと倒して追いかけよう！」

「了解です、隊長っ！」

戦ってみると、意外に弱いトランプの兵士達だったが。数字が高くなって行くにつれ、段々と強敵にと変化して来る。10を超えるのと、HPも高く厄介なスキル技まで使用して来るトランプ兵士。

4種類のカードで揃えて来られなかったのが有り難い、などと思っていたのもジョーカーが乱入して来るまで。範囲攻撃で雑魚を掃除していた美井奈にタゲが向かいそうになり、慌てて瑠璃がブロックしたのだが。何とその瑠璃が、ジョーカーの特殊能力でいきなり無力化。

カードに閉じ込められてしまい、移動すらままならない状態に。

「わっ、わっ、カードにされちゃった！ 美井奈ちゃん、逃げてっ！」

「調子に乗って、範囲攻撃続けてるからだっ。俊足魔法、指示通りに掛けるなっ？ ちょっとマラソンでキープしてる、美井奈っ！」

「りよ、了解ですけど……お姉ちゃんまは放置……？」

「うーん、呪い状態なのかな……？ 駄目だ、ポケットアイテムも使えないや。多分、時間が経てば元に戻ると思うけど」

強敵のクイーンとキングを相手にしているため、動きの取れない弾美と薫コンビ。クイーンは回復魔法を唱えて来るし、キングは攻撃威力が高く、スキル技を連発して来る。

クイーンから倒すつもりパーティは、強敵のキング放置が祟って殴られ放題である。頼みの回復キャラの瑠璃は、まだ一風変わった呪い状態から復帰出来ず。



美井奈は付いて来た雑魚は片付けたものの、ジョーカーが奇抜な動きで怖いとの報告。

複合スキルを使用しての追い込みで、ようやくクイーンを仕留めた弾美達。それを機に瑠璃のカード状態が解け、一行は一気に数の優位でキングへと襲い掛かる。余裕を感じた途端に、範囲攻撃の連続使用をして来る厄介な難敵だったものの。

皆で力を合わせてのスキル技で、ようやくキングも昇天してくれた。

「美井奈っ、こっち終わったぞ。ジョーカーどこだっ!?!」

「今連れて行きます、隊長っ!」

ジョーカー戦は、かなり熾烈を極める戦いとなった。弾美の《闇の断罪》でのスタンと、瑠璃の《麻痺撃》での特殊技止めの2段階構えで、カードの呪いを何とか完封出来たのが大きかった。

美井奈が言っていた怪しい動きと言うのは、すぐに解明というか体感出来てしまった。範囲技のカード乱舞で、視界を奪われつつダメージを与えてくる特殊技らしい。

さらに長槍でのスキル技も使ってくるので、全部止めるのはとても不可能。

それでも何とか、大きなダメージを受ける事も無く戦闘は終了する。ヒーリングも後回しで、大急ぎでウサギを探すパーティだったが。どうやら何とか間に合った様子。

道なりに進んでいた紳士ウサギは、一行には全く構わずマイペース。そして、前方に出現した草むらの中の縦穴に近付いて行く。そこで立ち止まったかと思うと、再び懐中時計を一瞥。

それからいきなり、ドロンと宝箱に変化してしまった。

中身は進みがちな懐中時計、幸運ウサギの尻尾、タキシードなどの装備類。それから先程の戦利品にジャックの切り札、クイーン札、キング札などの消耗アイテム類など。どうやら水晶玉のように、範囲攻撃手段として使えるらしいのだが、他の装備同様にユニークなのかも知れない。

進みがちな懐中時計 SP + 10%、攻撃速度UP、防 + 4  
幸運ウサギの尻尾 器用度 + 15、HP + 15、防 + 2  
タキシード ポケット + 2、SP + 10%、MP + 15、防 + 10

「あゝっ、何だか妙に疲れるエリアだね？ やたらとユニークアイテムも多いし」

「そうだなあ、せつかく入手出来ても、使えるかどうか微妙なの多いよな」

「お姉ちゃま、背中も服も固定じゃないですよ？ ちょっと装備して見せて下さいっ！」

「いいよ〜」

ヒーリング座り状態のままに、ルリルリのグラは目まぐるしく変化する。タキシードを着たりお尻にネコの尻尾が生えたり、ウサギの尻尾になったりドラキュラに化けたり。

少女達は大喜び、薫も楽しそうに笑いながら手を叩いている。

そんなパーティーの視界を、再びよぎる赤い影。小さな子供のようだが、今度はウサギほど歩みは遅くない。森に入る道を行くその姿は、まさしく赤頭巾ちゃんである。

一同は、またストーカーになってしまつのかとため息一つ。しかし、不意に森の木立から現れた狼男にはビックリ仰天。赤頭巾に戦闘能力を求める訳にも行かず、助けようと飛び出すものの。

狼男の数が半端でなく多い。視界に入るや否や、美井奈が弓で釣

るのだが、倒すと同時に次が湧く感じである。終いにはお化け木も出て来て、パーティーは大慌て。

赤頭巾は狼男に捕まると、どうやら攻撃をされる訳ではない様なのだが。予定の道を逸らされて森の奥へと連れ込まれるようで、恐らくそれでゲームオーバーなのだろう。

一応抵抗の素振りを見せる赤頭巾ちゃんなのだが、弾美達が敵を狩って行くとスタスタ先へと進んでしまう。そこでまた被害に遭うのだからこちらとしてもやっつけられない。

ぶん殴ってでも引き止めると弾美が口にしたのも、無理の無い事なのだろうが。

「弾美君、あれは守る対象なんだから……殴るのは不味いよ？」

「ああいう身勝手な奴は腹が立つ！ 守って欲しいなら側にいろっ！」

弾美の魂の叫びは、とうとう最後まで届く事は無かったようだ。

それでも、何とかかかんとか赤頭巾ちゃんの貞操の危機は回避出来た模様、良かった。

そう弾美が思わず口になると、聞いた事の無い言葉にやっぱり美井奈が不思議そうな顔つきになり。初めて聞いた言葉の意味を、隣の瑠璃に尋ねて来る。

瑠璃はちよつと赤くなり、狼には気をつけないととモゴモゴ口にする。

「狼はね〜、下心がいつぱいなよ？ だから男は狼で、女は気をつけないと駄目なのよ？」

「そうそう、薫さんの方が説明上手だよねえ。それより美井奈ちゃん、宝箱出たよ！」

はぐらかされた気がしないでもない美井奈は、今回の宝箱もドウゾと進められて開けてみる事に。入っていたのは、案の定のユニークアイテムやお酒や食事の類い。

赤頭巾は頭装備だが、その他には炎の神酒やSPを一瞬で回復させる闇の秘酒という薬品も入っていた。ボス戦などで、一気に追い込みをかけた際には超便利である。

赤頭巾    ポケット+3、移動速度UP、MP+10、防+3

インしてそろそろ30分も過ぎ、ヒーリング中も今度は何が通り過ぎるかと身構えていた一行だが。何も起きないまま時間が過ぎ、弾美は少し焦れ始める。

先ほどの赤頭巾ちゃんが配達に訪れた簡素な小屋が、視界の先にあるのだけれど。何気なく美井奈が近付いて行き、扉がタゲれると報告して来た。

他にこれと言った不審点も見られないマップに、パーティは揃って扉前に移動。

弾美が代表して開けてみると、何とそこはお祖母ちゃんの室内などでは無かった。海に続く石畳の坂道が目の前に広がり、左右には低い軒並みの石造りの港町。

驚くのも束の間、宙を横切って現れたのは小さな体躯の羽根の生えたフェアリー。女性陣は興奮で声を発し、きゃいきゃい言いながらフェアリーの後を追い始める。

どうやら坂を下った港の方向へと、パーティを誘っているよう。仕方なく弾美も後を追う。

「妖精さんに、やっと逢えたね〜！ 今度は何の物語かな？」

「外国の童話だと思うけど……大きな船が見えて来たよ、海賊船かな？」

「あゝ、この前映画でやってた奴じゃ無いですか？ 何とかカリビ

アンって海賊の映画ですよ！」

「あれは童話でもないし、妖精も出て来ないぞ……もう少し本読め、美井奈」

ぐつと言葉に詰まる美井奈だが、言い返せないのが悔しい。それよりも隣の瑠璃の目がキラリと光って、幾らでも貸して上げると語っているのが何となく怖かったり。

瑠璃には既に答えが分かっているらしく。ネバーランドとか時計を呑み込んだサメとか、キーワードらしき言葉を次々口にする。薫はそれで理解したようで、分からないのは美井奈だけ。

弾美もとうとう、海賊船の乗り込み口まで案内された一行に対し、気をつけろと指示を飛ばす。

「フック船長がラスボスかな？ 何か強そうだし、気をつけるよ」

「ああっ、ピーターパンですかっ！」

ようやくの回答だが、既に戦闘は始まってしまっている。雑魚らしき手下共が船の看板に陣取っており、パーティを発見するとわらわらと襲って来始めた。

手にしているのはシミターや短剣、さらに細剣使いや銃を持つ者もいて侮れない。前衛が壁になり、美井奈のSPが貯まったのを確認して、スキル技で1匹ずつ確実に沈めていく。

高低差のあるマップに、周期的に混乱がやって来るものの。何とかパーティの息も合い始め、美井奈を守るフォーメーションが出来上がって来る。

フィニッシュャーに成長しつつある美井奈だが、武器の壊れるのも早いとぼやいてみたり。

「そう言えば、耐久度0にした弓矢、ちゃんと作っておいたか、美井奈？」

「あつ、忘れてました！　今から作っておきますね！」

まだまだ指導が必要な下っ端少女だが、薫の参入によって破壊力を発揮しやすい環境を得つつあるのも事実。前衛がHPを減らした敵に全力の《貫通撃》を見舞いながら、着実に敵の数を減らして行く。

しかし今回に限っては、敵の数が減っていった事が新たな仕掛けへの導火線だったようだ。船首に設置されていた大砲を、雑魚の一人が触っていたかと思うと。不意に、大きな音と共に範囲ダメージに見舞われるパーティ。

強烈な一撃だが、そこはゲーム内でのお約束。甲板や敵の雑魚には被害は皆無。慌てて瑠璃が大砲使いの手下を引き止めに行くが、今度は甲板の上から銃の支援。

段々と熾烈になって行く戦場に、いよいよフック船長が乱入。

「美井奈、範囲矢束で銃使いを潰せっ！　瑠璃っ、大砲潰したら戻って来いよっ！」

「了解ですっ……わっ、妖精から回復貰っちゃった！」

「ハズミちゃんっ、また大砲の導火線に火がついてるっ……！」

「うげっ……薫っち、さっきのトランプでこっちも範囲攻撃返したっ！」

了解との薫の元気な返事と共に、クイーンのカードがフック船長や銃使いの手下を切り刻んで消えて行く。前衛が相手にしていた雑魚がほとんど倒れる程の、なかなかのダメージ具合。

フリーになった弾美がすかさずフック船長をブロック。船長は鉤爪と片手剣の二刀流で、その攻撃力は半端ではない様子だ。ハズミンのブロックを破って攻撃がヒット、HPがぐんと減る。

薫がフォローに入った事で、敵の数がある程度絞られた事がわかった。大砲の範囲攻撃も何とか3度目は喰い止められ、瑠璃が回復

魔法を唱えながら戦線復帰。

美井奈が遠隔合戦に勝利を収めると、いよいよ勝利の方程式が完成したっぽい。

終盤、フック船長のハイパーモードが炸裂し、弾美が危ない場面があったものの。瑠璃と妖精の回復支援で、何とか持ちこたえて倒し切る事に成功。

それでも以前ほど切羽詰っていないのは、削り役が一人増えたのも大きな要因だろうか。敵の種類にもよるが、割と安定した戦闘が増えてきた感じがする。

フック船長のドロップは船長の帽子と船長の鉤爪。帽子は例の海賊帽で、鉤爪はどうやら短剣扱いの模様。更に案内役でもあり回復もしてくれていた妖精が、パーティの前で宝箱に変身。

開けてみると、妖精のドレスと妖精の呼び鈴と言うアイテムが出て来た。

これが最終戦だったようで、甲板に脱出用の魔法陣がようやく出現する。エリア攻略に掛かった時間は45分くらい、初の裏エリア攻略にしては、まずまずな感じである。

ちなみに妖精の呼び鈴は、妖精を助っ人に呼び出せるアイテムらしいのだけれど。他の装備の性能はこんな感じ。

船長の帽子 腕力+4、SP+10%、HP+5、防+10

船長の鉤爪 攻撃力+14、腕力+2、《耐久9/9》

妖精のドレス 光スキル+4、風スキル+4、MP+20、

防御+20

「おおつ、さすがメダル5枚分のエリアだけはあるな。妖精のドレス、見た目は柔らかそうな装備だけど、防御力高いな〜！」

「あつ、私が装備するんですね！ 光スキル……あつ、大丈夫です！」

「うわっ、見た目もなかなか可愛い感じねっ！」

女性陣が再び勢いで、ファッションショーを始めそうなのを察知した弾美。さっさとエリアアウトして、時間の減少を一度止める事に。闇市には幸い人の気配は皆無。

美井奈が調子に乗って、頭装備を赤頭巾に変えたり海賊帽子に変えたりして遊んでいる。海賊帽子は、何故かアイパッチまで付いてくるようで、皆がやんやの喝采を上げている。

最終的には、赤頭巾に妖精のドレス、ネコの尻尾が可愛いんじゃないかとの結論に。

「そうかなあ……でもやつぱり、微妙かも？」

「そうですねえ、色合いが悪いかもです。尻尾はグッドですけど」

「尻尾誰が使うの？ 私は固定してて無理だけど」

「防御が高ければ、かなり使える装備なんだけどな。取り敢えず瑠璃か美井奈、持ってる」

ドロップ品の整頓や薬品の補充、範囲攻撃アイテムの分配やあとどの位の経験値でレベルが上がるかの報告まで。弾美がテキパキと指示を出し、再びの突入の準備を進めて行く。

それからクエ大臣の薫が、情報ノートを見ながらクエストを提示してくれるNPCを案内して歩く。今日は月の鍵のエリアに入ろうとの事なので、クエを受けるのはそこだけなのだが。

進が言っていた転移の棒切れを買い取るようになるクエをこなすが、今日の主な目的だ。

「ああ、エリアに近いNPCが鍵をくれるんだなっ！」

「そうそう、3つともそんな感じ。クエストの数も、3エリアとも一緒くらいかな？」

「昨日のエリアと同じくらい広かったら、ちょっと厄介ですねえ」



「そうだねえ、ええと……木の実と木の枝を探すのと、あとは迷子の犬の搜索、それから目撃情報がトーテムポール？」

例のアレかと一同は不思議顔だったが、それならそれで性能の良い指輪がゲット出来る。先日の失敗も踏まえて、強敵も紛れ込んでいるつもりで探索しようとの弾美の言葉。

念のためにと、ポケットに聖水を常時入れておく事にした一同。肝の冷える経験は、もう懲り懲りだ。地上エリアでポケット数に余裕が出来たから、選べる選択肢でもあるのだが。

気を引き締めての月の鍵のエリア進出。今回はいきなりの夜模様  
に、ビビリまくるパーティ。

「ちよつと、何か嫌だなあ……」

「……別行動するの、怖いなあ」

「仕方ない、じゃあ今回は2手に分かれようか」

尻込む女性陣に、折れた感じで弾美は提言。今回も弾美と美井奈、瑠璃と薫でエリア探索に挑む事に。とは言っても、見える範囲では進める方向は決まっているようだ。

このエリア、やたらと樽や障害物が多く、海辺に流れ着いたガラクタ置き場な雰囲気。段差も多く、しかも一度落ちたら上って来れないような嫌らしい仕組みのようだ。弾美は相棒の美井奈に、散々と酸っぱく注意を飛ばすのだが。

それがプレッシャーになるのが、人生の俣ならない所だったり。

このエリアもほとんど敵はおらず、たまに見掛けるネズミや小カエルはノンアクティブ。木の箱や板のトンネル、折れた枝が古い街の下水道やレンガの通りと素敵なコラボ。

自然に出来た感じの迷宮に、パーティは歩みも遅く進むしか無い。

薫が街の細い路地の向こうに、やっと広い場所に抜ける道を発見した。付いて行った瑠璃と一緒に調べていると、大型の鳥系の敵に突然襲われたと報告して来る。

一方弾美組は、そちらと合流しようにも出来ない事情が。美井奈が結局、プレッシャーに打ち勝てず道を転落。上って来る場所を探している内に、どんどん訳の分からない場所に。

多分、一人だと泣いていたであろう。今もちょっと、半泣きではあるが。

「うつつ、ごめんなさいい、お兄さん。でも、こっちも何か道が続いていますっ……！」

「仕方ないな……薫っち、美井奈とコントローラー交代してくれるか？　んで、後で案内出来るよう、簡単にマップ作っておいてくれ」

「オツケ、さっきチラツと犬の姿が見えたから、多分クエのあの犬だと思っよ？」

「うつつ、済みません薫さん、薫さんのキャラ、大事に扱いますからっ」

プレイヤーの場所の交代と共に、ハズミンが瑠璃達に合流。街の外れに廃墟の教会が見付かり、教会の子供から迷子の犬の搜索を受けたのと、どうやら符合が一致する。

襲って来る敵を撃退しながら、一行は廃墟の教会を目指す。美井奈は初めて操作する、カオルの両手武器キャラに興味津々。とりや、とかうりや、とか口にしながら、殴り掛かっているのは平和な風景に見えてしまうのだが。

反対にミイナのキャラを任された薫は、真面目な顔付きでマップ作りに専念。幸い敵は襲って来ないタイプばかりで、キャラは独りで下水道に迷い込んでいる模様。

弾美が、一区切り付いたら転移の棒切れで一旦脱出してからの場合

流にしようと思っただけ。薫はニパツと笑って、その時になつたら知らせると返して来る。

しかしその薫も、一転難しい顔をして黙り込んでしまった。教会に犬の姿を発見した弾美達は、クエの達成が4人で出来ないとして2度手間だと言つ事態にやつと気付く。

ミイナを迎えに戻るため、せつかく来た道を引き返す事に。

「薫っち、どうした？　ってか、そこどこだ？」

「ん、なんか隠し通路っぽいところを見付けちゃって……下水を筏で下つて、途中の広場でポンって降りたのよ。そしたら地面に『満月の鍵』ってのが落ちてて」

「あ、あんまり危険な場所に、ミイナを連れ込まないで下さいね、薫さん……」

「自業自得だろ、美井奈。構わないから、もうちょっと進んで見てくれ」

そんな訳で、ミイナ一人での地下探索。皆が見守る中、雷娘は薄汚れた下水道をひたひたと進んで行く。しばらくして少し開けた場所に出ると、そこにあるのは紋様の描かれた扉と、鍵付きを示す色の宝箱。

鍵付きはヤバイと弾美が言うと、隣に移動していた美井奈がぎゅつと腕にしがみ付いて来る。確かに今までのパターンだと、どこかに鍵を落とす中ボスが潜んでいる可能性が高い。

これ以上の危険は無意味だと、薫が転移の棒切れを使用。弾美がタウロス族の集落で、結構大量に買い込んでおいたのだ。それでも無くなると補充はきついで、さつさと中立エリアで買える様にしたというのが本音なのだ。

入り口付近で無事合流した一行は、キャラの交換もちゃんと終え、再び廃墟の迷路を目指す。今度は落ちるなよと釘を刺された美井奈

は、真剣な目でキャラ操作。何とか危険区域を抜けると、ホッと安心して脱力。

余分な時間を掛けつつ、一行は犬探しのクエストをクリア。

「1つめクリアだ、次は向こうの大樹の方向かな？ 廃墟の町工リアは、下水道以外は狭いね」

「えっと、次のクエは……アイテムが大樹に関係してるから、多分そうかもね」

「平原を突っ切る感じの移動になるな、敵が結構いそうだなあ」  
「何でもいいですつ、もう変な仕掛けさえ無ければ！」

平原には先ほど襲ってきた大鳥や猛獣系のモンスターが、大樹に近付くにつれて昆虫系が混じって来るように。慎重に歩みを進める一行は、東の空が白んでくるのを見て安堵のため息。

強敵はどうやら混じってはいないようだが、それでも大樹に近付くにつれ異変が起こって来る。昆虫系の敵が魔法を唱えて来たり、魔法生物のモンスターが出没し始めたり。

弾美が試しに、瑠璃に《魔女の接吻》を使ってみてくれと指示したら。何故か昆虫からしつかりMPが吸い取れて、これはどういう仕様かと一同困惑。

普通、昆虫型の敵にMPなど、メイン世界ではあり得ない仕様である。

「バクじゃ無いって事よねえ、MPがしつかりあるって事は？」

「そうだな、特に強くないから、中ボスでも無いよなあ」

「大樹に関係あるんじゃないかなあ？ さっきの敵は魔力の果実落としたし、ここはちよつと美味しい狩り場かも？」

「お姉ちゃまのMPアップのためにも、ちよつとここで果実集めましょうか！」

美井奈が張り切って敵を釣り始めるので、何となくそんな感じで敵のドロップ目的の狩りが始まり。20分以上も移動しつつ狩りを続けて行く内に、それなりに果実も貯まってしまった。

更に景色が木材置き場みたいな感じに変化して来ていたりして。古い切り株も増えて来て、これはひよつとして目的の場所ではないかと期待も高まるパーティだが。

木製の奇抜な姿のゴーレムがわらわら湧いていて、何だか変な雰  
囲気。

木材の中には、トーテムモドキの作りかけ放棄なども見付かつて。不用意に近付くとビームを撃って来たり爆発したりと、パーティの危機感を煽って来る。

木製ゴーレムはなかなか強く、操り人形のようなコミカルな動きから放ってくる格闘攻撃は侮れない。しかも魔力の乗った拳は、盾でのブロックなどお構い無しにダメージを与えて来る。

なおかつ木製ゴーレム、組織だった動きでパーティをトーテム地雷地帯に誘い込む周到さ。

「美井奈、そつちに逃げたら地雷に捕まるって！」

「ええっ、じゃあどこに逃げればいいんですかっ？」

「わっ、爆発した後に吹き飛ばし効果のタイプもあるよっ！ こつちも駄目みたい、ハズミちゃん」

パニックに襲われるパーティだったが、とにかく安全な場所へと戦場を移動させるのが先決とばかりに。広い場所から木立の茂る森の中へと、敵を引き連れながらじりじりと逃げて行く。

敵の数がようやく4匹になった頃に、瑠璃と美井奈からそれぞれ怪しい場所を発見したとの報告が。戦いは雑魚戦にはかなり熾烈だったが、何とか全て倒し終わると。

パーティの戦利品の中に、大樹の木の実というクエ用のアイテム

が3つ。あと一つ足りない、弾美が美井奈をちらりと見遣る。

クエストアイテムが、モンスターのドロップだと分かったのは結構な事である。しかし、人数分ドロップしてないので、結局美井奈が木製ゴーレムを探してうるつく事に。

瑠璃が見つけた怪しい場所は、切り出した木材を重ねて保管している空き地。木材の1つにカーソルが移動するので、逃げている途中に目をつけていたのだそう。

ところがメンバーがそこに移動した途端、美井奈が新しい木製ゴーレムの一団を連れて来る。

「美井奈っ、何で5匹も釣って来るんだっ！ 1匹ずつが常識だろうっ！」

「仕方ないじゃ無いですかっ、ついて来ちゃったんですからっ！」

そんな訳での再戦闘で、何故か無意味に3つもドロップするクエストアイテム。先ほどは10体以上倒して3つしか出なかったと言うのに、結構雑なランダム性である。

さらに瑠璃が発見した木材保管場所からは、これもクエストアイテムの大樹の枝をゲット。これでインして45分で、目標の3つのクエストをこなし計算となった。

色々回り道をした割には、なかなかの達成率のような気が。

後は何があるだろうか、パーティでござこそと相談会モードに移行する。薫が情報ノートを取り出して、後残っているのはトームポールの目撃情報だけだと報告して来た。

それって今の場所ではどの問いに、誰も答える術なし。

「あっ、でもでも、さつき森の奥に道らしきのが続いてましたよ？」

「むっ、他に情報も無いし、仕方ないから行ってみるか」

仕方ないとは何ですかと、瑠璃の隣で暴れる少女は取り敢えず放つておいて。森の小道は変にくねくねとしていて、一行を惑わしているようにも伺える。

その内、見覚えのあるトーテムポールの、乱立する広場に出る事が出来た一同。どれがトレード出来る奴だろうと、嬉しそうに探し始める美井奈に悲劇が舞い降りる。

クモの巣の仕掛けに引つ掛かり、美井奈は悲鳴だか泣き声だかを上げる破目に。

「きゃ〜っ、木の上に何かいっばいいますよっ！ 私今、動けません〜！」

「わっ、ハズミちゃんの苦手なクモだ〜！」

「えっ、弾美君、クモ苦手なの？」

呻り声を上げつつ、クモの巣を破壊してミイナを救出した弾美だったが。頭上からポトポト落ちてくるクモを見てしまい、思わず美井奈と一緒に悲鳴を上げる始末。

雑魚ばかりだと思っていたクモの巣エリアだったが、トーテムポールの柱を伝って降りて来た大グモには一同大仰天。クモの糸でパーティの動きを封じつつ、地面からは何と、追加の木製ゴーレムが2体も湧き出てくる。

雑魚のクモすらまだ地面に蠢いており、收拾のつかない戦闘場面。大グモのクモの糸で薫が捕まってしまい、反撃しようにも動ける人がいない有り様に陥るパーティ。

取り敢えず、嫌々ながら大グモをブロックしに行ったハズミンだつたけれども。不意をついての出現の2体の木製ゴーレムは、動けない薫を遠慮なくガシガシ殴り始める。

これは不味いと助けに入ったルリルリだが、2体を相手取るには

役不足か。ミイナはとにかく殴られないように、必死に距離を取っての雑魚の小グモ掃除。

弾美が範囲攻撃を使えとの指示を出すと、薫がトランプを、瑠璃が水晶玉を使用。ついでに美井奈も矢弾を交換、へろへろの雑魚を一掃する範囲スキル技の使用。

何とかこれで、雑魚の姿は戦場からいなくなってくれた。

ところが木製ゴーレムはどうやらボス仕様のようで、HPも豊富で力も強い事が判明。何とか薫は自由になれたが、今度は木製ゴーレムの特殊技が発動する。

操り糸の特殊技で、1体のゴーレムの動きは完全停止。代わりに操られたルリルリが、近くにいたカオルを殴り始める。

「わっつ、薫さんごめんなさい！ ゴーレムの糸に操られちゃった！」

「ええっ、これってどうしたら解除出来るのっ!？」

「操ってる奴を殴ったら、取り敢えず止まる筈っ！ 美井奈っ、1匹マラソンしてくれっ！」

「りよ、了解ですっ、隊長！」

雑魚は片付いたが、まだまだ相手のペースのままの状態。美井奈の遠隔攻撃で、何とか瑠璃の操り状態は解除されたもの。大グモも木製ゴーレムも、特殊技が侮れない。

緊張した戦闘場面が続くが、追い討ちをかけるように木製ゴーレムが範囲土魔法を使用して来る。運の悪い事に、離れた場所の弾美まで巻き込まれて、一行は大ピンチ。

揺れる地面にダメージと共に動きを封じられ、弾美は大グモに余計なダメージを貰ってしまう。

瑠璃の水の新魔法の《波紋ヒール》で、パーティは何とか崖っぷ



ちから寄り戻す事に成功。弾美は《闇の断罪》で敵をスタンさせてから、ステップで距離を置いて素早く装備の変更。

虎の子のレイブレードに武器交換し、アイテム画面から炎の神酒をぐいっとあおる。手強い相手にちよっと焦った弾美の選択だが、その隙に大グモが毒の霧を範囲に放出。

またまた3人が範囲に巻き込まれ、阿鼻叫喚の戦場に新たな悲鳴が。

回復を担う瑠璃はてんてこ舞い。万能薬をケチる訳ではないが、先ほどからハズミンは通常攻撃で何度も毒を受けているのだ。弾美のポケットには、既に万能薬は皆無である。

瑠璃の回復の頑張りを受けるように、弾美も最強装備で反撃に転じる。《トルネードスピン》で派手に大グモのHPを減じさせて行くと、そこからは一気呵成な攻撃振り。

目の前のコイツを、早く倒した方が良いとの弾美の指示に。瑠璃は水の槍魔法の《ウォーターピア》から、近付いての複合技の《アイスラッシュ》の連撃を炸裂させる。

これが決め手で、ようやく1匹目の敵が倒される運びに。

「やっと1匹倒れてくれたっ、次は薫っちの前の敵な。範囲魔法は絶対潰すぞ、瑠璃っ！」

「わ、分かった、ハズミちゃんっ！ あっ、操り技は複数で殴るから怖くないのかなっ？」

「隊長、そろそろこっちも連れて戻りますよっ！」

三人で殴り始めると、ペースは終始こちらのものに。ハズミンが無理やり魔法でタゲを取ってしまえば、薫も瑠璃も攻撃に集中出来るようになるという寸法だ。操り技も、常に敵にダメージが通っている状況では怖くは無い。

あっという間に木製ゴーレムも屠り、残りの敵を美井奈が連れて

来る……箒が。

「美井奈つ、なに操られてんだっ！」

「すみません〜！ 最後タゲ切れそうだったんで、攻撃してたら捕まっちゃいましたっ！」

「弾美君〜、私レベル上がったよ〜！」

そんな呑気な薫の報告に、戦闘中のおめでとうコールが湧き起こって。そのお蔭もあって、美井奈への叱責はうやむやに。感謝の念を込めつつ、反対側の薫を見遣る美井奈だったり。

最後の木製ゴーレムも、意外と呆気なく殴り殺してしまつと。残されたのは24に上がったカオルと、各種ドロップ品。金のメダルに混じって、グランドイーターの果実がある事に一同興奮模様。

その他には木人の操り糸というのが2つ、敵を一定時間操れるモノらしいのだが。

ヒーリングとポケット交換が終わって、森の小道の奥の探索を続けようとしたパーティだったが。1分も経たない内に、トーテムポイントの並んだ集落らしき入り口に辿り着き、たじろぐ破目に。

危険な敵はいないらしいが、話し掛けるべきNPCも視界には見当たらず。大きくは無い木立ちの多い集落を手分けして探索するが、怪しいのは丁度真ん中の壁の無い建物だけだと判明。

そこにあるのは、大きな板に描かれた生き生きとした精霊の絵画だった。一面だけ存在する壁に描かれたその精霊は、やっぱり近付くとパカッと口を開けて、一行にトレードを促して来る。

「あれっ……パターンを変えて来ましたねえ。トーテムポールかと思ってたんですが」

「そうだなあ。これじゃまるで、湧かしNM仕様みたいだな……ちよっと嫌な予感」

「私これは初めてなんだけど、何をトレードするの？」

瑠璃が自分の指輪を見て貰って、段階を得てこれが出るのだと説明すると。かなりの性能の良い指輪装備に、薫も何気に乗り気になって来たりして。

しばしの間、どの属性を誰のために成長させるかの議論が熱く交わされる。今日は後半も美井奈でいいよとの優しい言葉に、感激の美井奈は瑠璃に抱きつき甘え始める。

雷か風か、炎が良いんじゃないかと言われ、美井奈は自分の属性の雷を選択。

湧かしNMの要領で、前もって強化魔法を掛けての戦闘準備。どちらにしる、出て来る敵はボス仕様だという読みだ。最初から最強装備の弾美は、やる気満々で瑠璃にトレードを催促する。

促されてのトリガー投入に、一面しかない壁の木面の床の間が淡く光を放ったかと思ったら。エリアは一転、円形のバトルフィールドへと瞬間移動。等間隔にトーテムポールが辺りを囲っており、広さはまあまあと言っ感じ。

敵は既にスタンバイ中の模様。6本の尻尾を持つ大キツネと、3本の尻尾を持つ、大槍を手にしたキツネのお面を被った女性のペアが中央に。女性の紫色の髪は長く、大柄で手強そうだ。

手にした大槍は雷を纏っており、大キツネは身体中带電している状態だ。

大キツネは足が速そうだということで、キツネ面の女性を美井奈がマラソンする事に。弾美が大キツネを魔法で挑発、タゲを取ろうとした途端に大キツネが透明に。

マラソンをする筈の美井奈も、いきなりのチャージ技に大ダメージを喰らって大わらわ。

「あれっ、キツネはどこ行った!？」

「隊長っ、槍が痛いですっ、削られましたっ!」

「えあっ……あれっ? ハズミちゃん、回復魔法が使えないっ、このエリア水魔法不可だっ!」

「ええっ、それは思いつ切り不味いんじゃあっ!？」

いきなりの混乱模様、さらに拍車を掛けるエリア制限。ゲームの仕様で雷は土に弱く水に強い性質があるのだが、このエリアはそれがモロに体现されているらしいのだ。

試しにキツネ面の敵に《クラック》を飛ばした弾美は、その効きの良さをパーティ報告。

「んじゃ、土の《石つぶて》のせいで、大キツネは消えたのかな?

あっ、出て来たよっ!」

「取り敢えず、もう人間タイプを殴り始めちゃったから、こっちから片付けるか。チャージ技持つてるから、マラソン不向きだしな。薰っち、タゲ半々でやってみよう!」

「了解、同じ槍使いとして負けられないねっ!」

現在フリーの大キツネに、弾美が定期的に土系魔法を飛ばして、動きを封じ込める方向に。ついでの闇魔法の《グラビティ》が通って、何とか作戦は上手く行きそうな気配。

ところがお相手中のキツネ面の女性は、ステップも軽快にこちらの攻撃を翻弄して来る。今までに無い敵の動きに、パーティは面食らって追い掛け回すのだが。

なかなか決め手に欠ける間に、大キツネに新たな気配が。

ステップに惑わされない唯一の攻撃手段を持つ、美井奈がメインの削りを担っていたのだが。再びチャージが来ないかと、ややビクビクしているのは仕方が無い。

その背後で、土魔法に翻弄されていた大キツネ。その呪縛も次第に薄まったかと思われた瞬間、6匹の雷のキツネに分離する。それからは、放電しながらパーティにアタック&アウェイ。

雷の奔流に全員巻き込まれ、回復手段を封じられた一行は必死でポーシヨンがぶ飲み。

「わっつ、何でもいいからキツネの行進止めるっつ！ 範囲攻撃行ける奴っ？」

「お助けアイテム、取り敢えず何か使ってみるねっ！」

瑠璃の使ったアイテムで、ピヨツと湧き出た妖精とジョーカーのカード。余程慌てていたのか、2つ同時使用でフィールドに出現したお助けキャラ達。パーティのピンチを尻目に、勝手気ままに動き始める。

妖精はパーティに光魔法の回復を与え、ジョーカーは雷化したキツネを次々とカードに封じ込めて行く。ダメージこそ与えてくれないものの、その足止め振りには結果的に大助かり。

その間隙を縫って、弾美が闇の水晶玉を使用。薫もカードの範囲攻撃の使用に踏み切り、キツネの群れはかなり弱体化されたようだ。

美井奈が弱った小キツネの掃討に掛かり、瑠璃がその手助けに入る。弾美と薫はキツネ面のキープを続けているが、大槍のスキル技には相変わらず苦労させられている。

タゲキープを半々のスイッチでこなしているのも、幸いポケットの交換をする時間を得られているのが大きい。近付いた小キツネにもついでに《クラック》を喰らわして、弾美はとにかく邪魔でダメージを与えてくる敵を減らす手助けも忘れない。

カード化された小キツネ以外を倒し終わると、何とか戦場は一息ついた模様。

「あつ、ジョーカー消えちゃった。でも大助かりだったよね？」  
「大助かりでしたよ！ 小さいキツネの残りは、後はカードになっている2匹だけです、お姉ちゃま」  
「妖精はもう少し頑張ってくれるみたいだね。弾美君、今の内にやっつけよう！」  
「おうつ、土魔法で翻弄してやるっ！」

雷の附加された両手武器の攻撃力とスキル技は侮れないものの。キツネ面の女性のHPはそれ程高くない様子。複合スキルのヒットで、やっと落ちそうになったと思ったら。

カード化から解除された小キツネが、キツネ面の女性に同化すると言つ反則技を使用され。尻尾の数が合計5本になると、女性は徐々に獣化して行き、HPもぐんぐん増えて行く。

あゝあとと言いつつも、手出し出来ない一同は見守るしがなく。

無敵状態の解除後に、気を取り直して再び陣形を組んで殴り始めるパーティだったが。敵の数が1匹だけになったのは良いが、最終形態の敵は防御力もHPも格段に上がっている。

キツネのお面は完全に皮膚と融合し、半獣半人模様のボスである。せり上がった鼻面での噛み付き攻撃は、スタン効果が付属しているよう。更に狐火召喚で、数の優位をあやふやにして行く。

さらにステップを使わなくなった分、範囲攻撃の放電でバリバリ削って来るように。

「うっ、やばいつ！ 回復くれてた妖精が、範囲攻撃の放電で落ちちゃったよ？」

「ポーションが持たないつ、こいつの放電強過ぎるぞっ！」

弾美のスタン魔法か瑠璃の《麻痺撃》で止めようにも、放電はモーションが無い技なので基本的に無理。1回来る度に、パーティに

50近いダメージを与えて来るので、水属性のルリルリなどは3回も喰らったらもうへ口へ口である。

その流れを食い止めたのは、薫のクリイティカル入りの《二段突き》だった。その途端に、キツネ獣人の尻尾が1本減少してしまう。更に美井奈の《貫通撃》によって、もう1本消滅。

放電のダメージの半減に気付いたパーティ、これなら行けると俄然やる気もアップ

こうなつて来ると、狐火を一人で相手していたルリルリも、削りに再び参加出来る雰囲気。《麻痺撃》のターゲットを、大槍のスキル技のみに絞つて潰す作戦も功を奏して来る。

気付けは女性の獣化も解けており、四人での総攻撃にステップも儘ならず。

ようやく狐ボスが倒れての戦闘終了に、わつと湧くパーティメンバー。四人でのハイタッチも華々しく、エリア排出の画面暗転に、勝利の雄叫びを重ね合わせる。

ドロップは雷の大槍や雷キツネの尻尾、そしてお待ち兼ねの雷の特級リングが1つ。今回は段階を重ねるのではなく、いきなり最良品が獲得出来る仕様のようだ。

相談するまでも無く、大槍を薫が貰い、雷のリングは美井奈の手に。

雷の大槍 器用度 + 4、攻撃力 + 28 《耐久14 / 14》

雷の特級リング 雷スキル + 4、器用度 + 4、攻撃速度UP、

防 + 4

雷キツネの尻尾 器用度 + 4、狐火召喚、防 + 4

エリアの突入から、ゆうに1時間は過ぎている。そろそろお終いな雰囲気はあるのだが、この指輪トレードの仕組みが知りたいと、弾美がトレード場所を弄っていたのだが。

どうやらリアル1日過ぎないと、再度のトレードは無理な事が判明して。それより戦闘のご褒美の経験値によって、美井奈が26に、瑠璃が27へとレベルアップとなった。

瑠璃のMPが、このエリアで入手した果実の効果もあって、250を何とか突破したと報告され。これで食事無しでも、光の奥の手魔法が詠唱可能にはなった訳である。

レベルアップ果実で突入前に25になっていた薫共々、頼れる戦闘力は増加中である。

「は〜っ、お疲れ様〜！ 今回も仕掛けとかきつかったね〜！」

「お疲れ様〜っ、今日もきつかったね〜」

「けど、美井奈には良い装備補充だったな。裏エリアは良かったけど、さっきのエリアは半端な攻略になっちゃったなあ。行ってない場所もあるし」

「裏のエリアって、結構面白かったですよねえ！ また今度行ってみたいですよ！」

「そうだねえ、後はNMのトリガーもまだたくさんあるし、木の葉も集めるんだっけ？ まだまだやる事が多いよねえ」

転移の棒切れでエリア脱出を終え、中立エリアでのんびり雑談などしつつ。クエストの報酬を貰って落ちようと、パーティは先ほど請け負ったクエのNPC巡り。

教会の子供の犬探しでは、報酬に聖水をそれぞれに貰う運びとなり。大樹の木の実探索の報酬は2千ギル、大樹の枝の報酬は聞いた通りの転移の棒切れ。

以降、アイテム店でも買える様になって、これで移動がスムーズになった気分。



「あれ、私ともう25になったから、これでイベントエリアも攻略出来るようになったんだよね？」

「あゝっ、そっか！ でもまだ、遺跡エリアとかで木の葉が全部集まってないしなあ。先にそっちを、全部やっとした方がいいのかな？ 明日はどこに行こう？」

「うゝん、進行に欠かせない木の葉は、先に集めた方が気分的に楽かもねえ……」

「そうですねえ、強くなるのも楽しくていいんですけど。先のエリアに進めないと困りますからねえ」

呑気に談話を交えながら、時計を見ると既に6時過ぎ。美井奈は今日は、薫に送って貰う事に。各自落ちながらバタバタした時間を過ごしつつ、美井奈と薫は長居も迷惑だと、そそくさと帰り支度を整える。

弾美の家から笑顔で飛び出す女性陣。それを見送りつつ、仲の良いパーティーで良かったと何となく感謝の思い。元気に手を振る美井奈は、薫の隣で帰りの道順の確認中。

この二人の仲も最初は心配したが、何とか折り合いがつきそうな雰囲気は何より。

波乱があるとすれば、ゲームの中での事だろう。何しろ、自分達の順位と言いか立場がさっぱり分かっていないのだ。このままのペースで行けば良いのか、裏やクエストエリアを放っておいて、素早い攻略を目指した方が良いのか。

それでも自分達のペースを崩したくない弾美は、最近イベントの順位にはそんなに拘っていなかったり。そんな内心の感情に気付いて、ちよつとした驚きを発見する。

この先の達成感より、いまの充実感が勝っているせいかも知れない。

瑠璃と二人で遠ざかる二人を見送りながらも。隣に立つ幼馴染も、確かに同じ充実感を共有しているとはつきり感じる弾美だった。

## 16 3つ目の木の葉ゲット？（前書き）

今日は代休、漫画を読んだりモバゲーしたりと、完全にまったりしてました（笑）。買い物に行く予定だったけど、何となくキャンセルしちゃったりして。

車検が今月あったせいで、お金も無くて大変だし。家の片付けなどをちよこつと挟みつつ、暑さと戦ってる最中です。本当に暑くて体力を消耗しちゃいますね。

気付けばもう、7月も間近ですか……。

日差しもどんどん強くなって来ていて、日焼けの上から更に日焼けするのも日常茶飯事だったり（笑）。今年の夏はどんななんでしょうねえ？

こちらの冬は豪雪で、山の上に通うのがしんどかったですけど。

さて、今回の章はちよつと思い出深いドラゴン戦。話を書くのに力が入ったのも確かなんですが、その事を前書きに書いたら、感想にコメント貰っちゃいました。

ゲーマーの人、ちゃんと読んでくれてるっ！ って、とても感激したので覚えてます（笑）。まあ、普通にコメント貰っても嬉しいのには違いないんですけど。

小説を書き続ける原動力と言うか、そんな感じですかね。取り敢えずは、何とか書き終わってる全ての章の掲載を頑張る所存です。

そんな訳で、地上編の続きをお楽しみ下さい^^

## 16 3つ目の木の葉ゲット？

おかしな寒暖差の天候具合は、もう完全に街から去ったよう。日課の早朝散歩の空気は、週始めのような張り詰めた寒さなど、もう完全に無くなっている感じ。

それでも用心して、上着を厚手のものにしていた瑠璃だったが、逆に暑くなり過ぎて、途中のベンチでそれを脱ぎ去ってしまう。コロンが近付いて来て、上着で遊んで良いかとお伺い。

汚されたり破られたりしたら堪らない瑠璃は、駄目ですとやんわり拒否。

代わりにボールを取り出してやると、マロンとコロンは大喜びで口に咥えて駆けて行った。散歩道の視界の隅で、早くおいでと仲良く瑠璃を待つ二匹の犬達。

散歩のリーダーシップは、完全に向こうにあるようだ。荷物になった上着を手に、瑠璃はテクテクと歩き始める。しばらくすると、ボールの弾む音が聞こえて来た。

弾むという言葉の響きは、瑠璃にとっては常に弾美を連想させる。

運動用のコートには薰も顔を見せていて、弾美と何やら早朝から話し込んでいた。今は二匹の犬に捕まって、その相手も律儀にしている様子なのだが。

ちよつと元気の無いような歳上の女性の態度に、瑠璃は小首を傾げて近付いて行く。

「おはようございます、薰さん。どうしたんですか、何だか元気が無いような……？」

「おはよう、瑠璃ちゃん。ちよつとね、美井奈ちゃんとの接し方をどうしたらいいのかなって、弾美君に相談してた……」

「あのな〜っ、子供相手に気を遣い過ぎだつて、薰っち。美井奈がまた生意気な事言つたら、一発頭突きを喰らわせてやればいいんだよ」

「子供は繊細で傷付き易いんだよ！ あ〜っ、やっぱり第一印象が悪過ぎたかなあ？ もっとちゃんとした、お洒落な服を着て行けば良かった……！」

そんな見当違いの懺悔を聞いて、ケタケタと笑い出す弾美。確かに、子供とゲームを遊ぶためにお洒落をするというのは、行き過ぎと言つか笑える行為だろう。

瑠璃は何と言つて良いのか分からず、ただ何とかしての眼力を込めて弾美を見るのみ。小学校時代でも、子供同士の争いや感情のもつれは数知れずあつたのだが。

大抵は、学級委員長をやっていた弾美が上手に仕切つて、解決に持ち込んでくれていたのだ。もっとも、殴り合いの大喧嘩に発展した事も何度かあつたりはしたものの。

今度は悪い方に転びませんようにと、瑠璃は割と必死に瞳で幼馴染に語り掛ける。

瑠璃の無言の圧力は、弾美ばかりか敏感な二匹の犬にも届いたようだ。瑠璃の前でお座りのポーズを取つて、何かを期待する目付きでじつと佇んでいる。

手の平でひたすらボールをくるくると回したりして弄つていた弾美は、やがてその圧力に屈してしまったよう。渋々とボールを椅子にして、悩みに埋もれている薰の隣に腰掛ける。

それから言葉を選びつつ、薰に対してアドバイス。

「だから子供の我が儘に、一々敏感になる事無いつて、薰っち。後から入つて来た仲間が、自分よりゲームが上手くて瑠璃とも親しいから、ちょっとひがんでるだけだつて」

「あ〜っ……えっ、だから最初冷たくされたのかな、私？」

「そんなの昔からよくあつた事だよ。飼い猫のアレだな……甘やかされたネコは、構ってくれないと憤慨して、厄介事起こすつての。子供も一緒だから、ちよつと構つてやれば気が済むつて」

「そうかあ……昨日は何だか、美井奈ちゃんがいつもより甘えて来てた気がしたけど。そういう理由だったのかあ」

人の心の機敏を全く理解していない奴らだと、弾美はやや呆れた顔付き。放つて置いても次第に打ち解けるだろうと、弾美は余り気にかけていなかったのだが。

念のためにと薫の所での合同インを企画したのも、それを早めてパーティのムードを盛り上げるため。そう諭すと、薫は何だか感激したように弾美の手を取つてみたり。

歳上の癖に頼りないなと、弾美は心の中でちよつと呆れた様子。

「有り難う、弾美君っ！ 私、頑張つて部屋の掃除するよっ！」

「そ、そんなに汚れてるんですか、薫さんの部屋……？」

「汚れていると言うか、何と言うか……研究の資料とか、長年の雑多なあれこれとかが、人の生活領域をちよつと……本当に、あそこに四人も入れるのかしら？」

「まあ、美井奈と仲良くなる第一歩だと思つて頑張れ。だいたい俺も、一人っ子の性格は理解出来ないしなあ。美井奈は普通に、自分の母親と友達感覚で喋つたり遊んだりしてるし」

「あ〜っ、あれは私も驚いたよ。同世代の友達に一人っ子つて少ないから、美井奈ちゃんとの比較は出来ないけど……でも、だからこそ歳上の薫さんとも、仲良くなるのに苦労はしないつて思ったんだけどなあ」

薫も自分は妹が二人もいるが、美井奈とはまるでタイプが違うと打ち明ける。二人共に気弱さが前面に出てるから美井奈も付け上が

るのだと、弾美に少々苛立つて来た感じも出て来た。

こうなったら八つ当たりが来るのは体験上知っている瑠璃。さり気なく後退して、自分からも美井奈と話し合ってみると提案などしてみるのだが。

大事な練習時間を取られたと、弾美は聞いてなどいない。

「あゝっ、明日練習試合があるってのに！ 負けたら罰ゲームだからな、瑠璃っ！」

「えっ、だって……わ、私っ!？」

何となくとばっちりを喰らった気分の瑠璃に、薫も気の毒そうな表情を向けて来る。ひよっとして自分のせいかとオロオロする薫に、確かに自分達は気弱さが前面に出ていると認めない訳にはいかない秀囲気だったり。

コートをそつと後にする女性陣に、マロンとコロンも大人しくついて来る。二匹とも、会話の前より気落ちしている飼い主に、何となく気を遣う素振りなのだが。

取り敢えず今夜のインは頑張ろうと、お互いを励まし合ってみる瑠璃と薫だった。

腕時計をチエックすると、後10分程度は散歩タイムの余裕があるのだが。すっかりと精神的な疲労で参ってしまった二人は、犬達の相手をするので精一杯。

後ろのコートでは、ボールの弾む音がもうしばらくは続きそうだった。

\*

\*

パーティのみんなは定時前にはインしていて、それぞれお喋りしたり事前に準備に時間を取ったりしているよう。弾美もメールのチ

エックやギルドで会話をしたりと、入るなりやる事が多いのは確かなのだが。

瑠璃が会話のためにと、既に美井奈と薫を誘ってパーティを作っていたようだ。自分も誘うようにとの指示を送りつつ、弾美は進達との会話を一旦打ち切る。

向こうのパーティも、今夜はクエストエリアを中心にもうすぐ始動するそう。

『こんばんはっ、今キャラのファッションチェックしてた所だよっ』

『こんばんはっ、後は今夜回る所の候補とか出し合ってたの。イベントエリアにも、もう行けるらしいけど……どうしようか、ハズミちゃん？』

『私は、まだ怖い気がするんですけど……パーティでもう少し、パワーアップしませんか？』

『そうだな……進達もまだ行けないみたいだし、俺達も遺跡の葉っぱとか取ってないしなあ』

こうしてみると、テンションも高くて和気藹々のパーティに見えるけれど。早朝から不安いっばいで、歳下の少年にまで悩みを相談したなどとはおくびにも見せず、薫はノリノリな調子。

もっとも、画面の奥の本心など見通せる事は出来ないのだが。

瑠璃が丁寧に、パーティのリーダーの資格を弾美にパスして来た。うっかり保持していると、他のパーティといざこざが持ち上がった際に、リーダーが矢面に立つ事になるのだ。

その他のドロップ配分の権利などは、アイテム管理上、全部瑠璃が保有しているのだが。それ以外のややこしい話は真っ平だと、主張するかなのようなパスである。

それはともかく、昨日のおさらいを脳内で始める弾美だったり。



パーティでの戦力アップだが、薫が25へとレベルアップし、とうとうイベントエリアの挑戦権を得る事となった。瑠璃と美井奈も1つずつレベルが上がり、美井奈は弓術の補正スキルの《攻撃速度UP1》を取得。雷の特級リングの性能も加えて、通常攻撃速度が飛躍的に上昇する事となった。

美井奈は他にも、胸装備や靴の交換で防御力が上昇。船長の帽子の効果で、SPもやや上昇して、スキル技も使いやすくなった。

反面、矢束の消費速度が格段に上昇。パーティの財源は、あつという間に火の車状態に。へそくりニャンコから授かったお金は、冒険のたびに万単位で減って行くという事態に。

薫も首装備の交換で、同じくスキル技が使いやすくなり、更に武器の交換で攻撃力が上昇したのが嬉しいところ。瑠璃も全く同じで、胸装備でSPが上昇し、武器の交換で攻撃力が少しだけ上がった。

ただし、瑠璃と美井奈の見た目がちょっと変になったのは、仕方の無い事なのだろうか……。

『パーティに変な格好の奴が、二人もいるな……』

『男装の麗人と、海賊風な妖精娘だ！ 結局、その装備使う事にしたんだねw』

『仕方ないじゃ無いですかっ！ SPとか防御力とか、お姉ちゃまと色々相談した結果なんですからっ！』

『ハズミちゃん、今呪い装備が3つあるんだけど。1個呪い解くの1万ギル以上掛かるから、お金無くて自粛している状態なの。出来たら今日、妖精の泉探さない？』

『あゝ、トリガーもいっぱいあるしなあ。沼にトレード場所あるんだっけ？ そっち周りで行こうか』

ついでをついでに、合成屋クエのベルトが欲しいと、瑠璃が珍しくおねだりするので。美井奈を始め、皆が異様な盛り上がりで絶対取るうと掛け声も高らかに宣言するという事態に。

何気なく言葉を発した瑠璃は、どんな態度を取れば良いのか分かんずくに。取り敢えず、やっぱり時間があつたらで良いと、思わず怯んで訂正に走つたり。

弾美に我侭を言うのは慣れてる瑠璃だったが。パーティ発言は以後気をつけようと、密かに心に誓うのであった。

『えっと、情報ノートによれば、蛮族3種、猿人と魚人と馬人の落とす素材を集めるんだったね』

『それじゃ、ついでに集落に寄つて、弓術のクエも進めちゃってもいいですか、隊長？』

やけについでが増えてしまったが、廃墟のエリア攻略で葉っぱも入手しなければならぬので。1時間を区切りにする事でパーティの行動指針が決定した。

昨日の苦戦で消費した薬品を買い込んで、瑠璃と美井奈(?)は初のフリーエリアへと向かう事に。サーチした限りでは、今夜は結構フリーエリアも混んでいる模様。

10パーティ程度が、どこかで活動中らしい。

エリアに入つて、さっそく美井奈が猿型の蛮族を数匹釣ってくる。つい数日前にはあれだけ苦労していた筈の敵なのだが、テンポ良く狩りを進めて行ける事実には驚く弾美と薫。

2匹目を倒した時点で、早々と猿型の蛮族から目的のアイテムをゲット。皆が噂する瑠璃のドロップ運は、あながち嘘ではないと薫は実感してしまう。

そこから真っ直ぐ東を目指し、めでたく瑠璃も赤の木の葉を獲得。

所要時間、たったの5分。

『あれっ、私はこの場所の木の葉持ってました』

『母ちゃんが取ってくれてたんだろ。よしっ、このまま南下して沼の捜索に進もうか』

『あゝ、そうだったねえ。その後沼に行っただけど、2パーティがレベル上げてたんだ』

ところが沼場は、2パーティ所ではない混み具合。どうやら完全に、人気狩り場に認定されてしまったようだ。しかし、これだけ賑わってしまうと、美味しくも何とも無いだろうに。

パーティはその盛況振りを横目で眺めつつ、時計回りで沼岸を進み始める。途中までは全く敵に出会わなかったが、その内待望の魚人やザリガニ、水鳥などが行く手を阻み始める。

魚人のク工用素材も、たっ3匹目でドロップ。お陰で妖精ポイントの捜索に集中出来る。

そのせいという訳では無いが、沼に流れ込む小川の道を程なく発見出来たパーティ。深い藪を掻き分けてしばらく奥へと進んで行くと、ようやく水源へと辿り着く事に。

何か敵でも待ち構えているかと思っただが、全く何もいない。ただ清浄な泉が存在するのみ。

『あつたゝ 結構沼から離れてたねゝ？』

『そうだねゝ、よしっ、マップに書き込みオツケゝ 呪い解けるの、ここで？』

『薰っちは初めてか。呪い解いたりとか、武器の修復とかを口八でしてくれる、有り難い場所だぞ』

『さて、何をトレードしましょうかね？ 確定なのは呪い装備3つですか、お姉ちゃま？』

『1つは斧だから、別にいいかな？　ハズミちゃんの武器は修理しなくていいの？』

弾美は1つ分しか破損してないからまだいいと答え、それなら瑠璃は5つの妖精装備を同時トレードしてみたいとパーティに了解を得る。

クエエリアで妖精に聞いた、とっておきの方法らしいが、何が出るかは今のところ不明。美井奈や薫から集めた同化終了装備は、5つどころかそれ以上あるので問題なし。

妖精を呼び出した後に、早速瑠璃がネックレスやイヤリングを5つまとめてトレードすると、妖精はもの凄く上機嫌で、ルリルリの周囲を勢い良く飛び回り始める。

今までに無い反応に、瑠璃もビックリ仰天。

まあっ、今までの大変な冒険のお供に、こんなにたくさんワタシのあげた装備を使ってくれてたのねっ　嬉しいわっ、アナタってば、ワタシ達の仲間になる素質があるかもっ！

まずは格好から入ってみるのがいいかもネ　これをプレゼントするから、ちよっとは気分出るんじゃないかな？　ちなみにこれは、ドレスを持っているアナタだけに特別ヨツ？

頑張ってもっと集めると、イイ事あるかもネッ

特別扱いは嬉しいのだけれど、持っているのは実はルリルリではなくミイナだったりする。パーティ視点で見て貰ったらしいのだが、ラッキーだったのかは謎である。

集めると良い事があると言われた妖精の装備は、今回はスカートのようなだった。つまりは脚部位の装備である。瑠璃はパーティに、妖精の言葉をそのまま伝える。

よくイラストに描かれている、裾口がギザギザにとんがってそ

の先にポンポンがくっ付いているタイプだが、美井奈の脚装備は固定されていて、すぐに着替えられないと嘆く少女。

スカートなのにこの装備は、キャラでも装備可能らしい。本当に可能かどうか、美井奈にちよつと着てみて下さいと薦められた弾美。渋々ではあるが、まあ話のタネにと着用してみると。

尖りスカートに緑のタイツ姿の、奇天烈な格好を晒す破目に。

妖精のスカート    ポケット+2、光スキル+3、風スキル+3、防御+12

『アホ〜、変な事を薦めるんじゃないっ、美井奈！    ちよつと傷付いたぞっ！』

『ちよつ、これっ……あはははw』

『可愛いねえ、ハズミちゃん。もう人の事笑えないよ〜？』

『うるさいっ……って、アレ？    妖精のシリーズ装備って、確か4つで全部の筈じゃ？』

『えっ、そうなの……？    じゃあこれは、隠し装備？』

パーティ内で大ウケだったが、他人に見られずに済んで内心安堵している弾美。それよりもデータに無かった追加の妖精装備に、ちよつとワクワクな隠しルートを発見したような気分。

取り敢えず弾美は、さつさと危険な脚装備を美井奈にトレードで押し付ける。それから自分は、持っていた呪いのネックレスを、さつさと呼び出した妖精にトレード。

薫にも呪いのピアスをトレードするように指示して、解除のお金を節約に走る一行。

サファイアのネックレス    腕力+3、SP+10%、防+5

サファイアのピアス    腕力+2、SP+10%、防+3

前衛には有り難い、腕力とSPの増える装備の補充に、パーティ内での分配も和気藹々。結局ピアスは薫に、ネックレスは美井奈に

と譲渡される事になって。

アタッカーの攻撃力の上昇には、パーティとしても嬉しいところ。

『あと一人分、トレード出来るけどどうしよう?』

『うーん、妖精は3日後にまたおいでって言うてるけど……』

『天使の情報も言っただけど、それもこっちの知ってる情報だなあ』

『あつ、私が妖精の指輪持つてるんで、それをトレードしてみたいですか? ひつよとして選択肢が出て、良いのが貰えるかもですよっ!』

あなたが泉に落としたのは、この使い過ぎて擦り切れ……もういいわ、ネタ切れちゃったしネ これから熾烈になる冒険のお供に、アナタには勿体無いほどの装備をア・ゲ・ル

だからこれからも、天使様のために馬車馬のように働きなさいヨッ

『……馬車馬のように働けと言われました』

『わはは、さすが悪知恵の効く妖精だなっw んで、装備は貰えたのか?』

『一応、私には勿体無い程の性能のをくれたみたいですけど……使るのが屈辱ですっ!』

『み、美井奈ちゃん、妖精に何を言われたんだろっ……?w』

妖精の毒舌振りにへソを曲げた美井奈は、指輪をいらないうたので。相談の結果、今日何も貰っていない瑠璃が貰う事に。固定装備を同化させないと交換出来ないが、この後のNM戦でのメダルドロップに期待する事に。

プラチナの指輪 腕力+3、HP+15、攻撃速度UP、防

+4

パーティはようやく泉を立ち去って、今度は湧かせNMのポイント探しに奔走する。いったん沼まで戻って、やっぱり時計回りに沼の近場を探索する事2分。

意外と簡単に見付かった『魚』のトレードポイントに、さあ戦闘だと張り切る弾美。

『弾美君、取り敢えずフリーエリアだし、シャウトで通告しておいたら？』

『そうだねえ、あとは雑魚の掃除も、一応は必要かなあ？』

『面倒だな、近くにパーティいないみたいだし、別にいいんじゃないか？』

『普通はするものなんですか？ 良く分からないけど、しないと失礼？』

薫は少女に、メイン世界では大抵は誰もがする行為だと説明。NMを湧かせると、近くの雑魚が変わった反応をする事もあるし、マラソンなどと近くパーティに迷惑をかける事もある。

だから事前に近くにいる人に、大声で通知しておくのが一般的な行為になっているのだが。勝手の違う限定イベントでの情事だけに、そこは意見の分かれる所。

美井奈がどういう風に呼びかけるのか知りたいと言うので。弾美はそれではと、模範的な言葉を選んで不特定多数に呼び掛ける事に。

『今からG-7ポイントで、トリガーNM戦を行います。近くにいる人は注意をお願いします』

『了解です、見学してもいいですか？』

『わっ、普通は返事返って来るんですか？ 確かに私も、こんな報告聞いたら見学したいって思うかもですけど』

『え、普通はあんまり無いパターンかも……どうするの、弾美君？』

『見られて困るものでも無いし、別にいいだろ。ってか、時間縛りあるのに粹狂な申し出だな。薫っちの知ってるプレーヤーか？』

薫は知らないと答えて来たが、どこかで見掛けているかもとあやふやな感じ。弾美は了承の返事を返しつつ、やって来るパーティを待つ事に。返事をして来たキャラの名前は、ハヤトというらしいのだが。

程なくやって来たパーティは、雷属性や土属性など、種族的に背の低いキャラばかりの構成。唯一背の高いのは、リーダーらしい光属性のハヤトのみ。

このパーティは典型的な遅解き進行らしく、土属性のキャラは暗塊装備を、氷属性の女性キャラは流水氷装備をしつかり装着していた。それだけで、腕が立ちそうに見えるから不思議である。

リーダーと雷属性の男性キャラも、かなりの良装備なのが見取れる。

中には弾美達の見た事の無い装備も含まれており、それはお互い様らしい。挨拶し合いながらも、お互いに情報交換。向こうの平均レベルは何と30前後で、今はタウロス族の集落に入るためのアイテム集め中だったらしい。

トリガーNMの話になると、このエリアの中央の山でポイントを見た話し出す相手パーティ。どうやら『炎』のポイントらしく、蛮族の集落の1つにゲートの仕掛けがあるらしいとの事。

お返しにこちらも、タウロス族の集落に『光』のポイントを見つけたと報告。

『おおつ、それじゃあ集落のクエをこなすのも無駄じゃない訳だね。有り難う、いい事聞いたよ』



『それよりそつち、みんなレベル高いのね。こつちは私だけ早解きでバラバラなんだけど』

『エリア廻つてると、自然とレベルアップ果実も集まるよ。そつちは面白い装備集めてるね？』

『メンバーが風邪引いて、エリア探索がようやく3日目なんだけどな。まだまだ木の葉も2枚だけ』

『裏エリアで揃えたの、その変わった装備？俺達ももつとチャレンジすべきかなあ、リーダー？』

『中に入ってもメダル結構必要ですし。自分達はまだ1箇所だけですけど』

NMを湧かすどころか雑談会に突入した一行。そのうち誰かがい出したように、時間縛りがあると言ふ事実を口にする。もう少しで尻尾を使ったファツションショーに突入する所だった一行は、それを聞いて弾かれたように動き出す。

向こうのパーティが、有り難い事に雑魚掃除の手伝いを申し出てくれた。それを受けて弾美パーティも、近辺の雑魚を倒しながら強化魔法でNM戦の準備を始める。

ところが、ハヤトのパーティの戦闘シーンを見た一行は、向こうパーティの範囲スキル技の使用に驚く事に。派手なエフェクトもそうだが、とにかく強烈この上ない。

レベルの平均が30という事もあるが、あつという間に雑魚モンスターを片付けて行く。

トリガーをトレードする事も忘れて、相手パーティの戦闘を見つめる一行だったが。負けず嫌いの魂に火がついたのは、もちろんリーダーの弾美だったり。

こちらにも負けずに全力でNMを叩き潰すと、高々と宣言する。

『くそつ、あつちは範囲スキル技なんか使つて、強さの誇示してや

がる。こつちも出し惜しみせず、最速で敵を倒すぞ！」

「特に見せびらかしている様には見えないけど。まあ、こつちも手の内隠さず戦えばいいのね？」

「ケンカしたら駄目だよ、ハズミちゃん。じゃあ、トレードするよ？」

魚の呼び水を瑠璃が勢い良くトレード。トリガーで湧いたのは、巨大で奇抜な色合いのお化けナマズ。波を立てたせての出現に、しかし一行は怯む事なく突っ込んで行く。

敢えて水中での戦闘を挑むも、ルリルリは種族スキルのせいで全く苦は無い。弾美と薫は沼の浅い場所で削り始め、美井奈はその後ろから速い回転で矢を射掛ける。

複合スキルも惜しみなく使用。いつしか見物する立場のハヤト組も、息をのむ削りの速さ。

巨大ナマズの特特殊技は、大きな口での丸呑みや、水中での渦巻き起こしなど多彩なようだ。範囲攻撃の渦巻きをスキルや魔法で早目に潰し、敵にペースを渡さずに削って行く。

ミイナの《貫通撃》でタゲが動きそうになっても、ハズミンの《トルネードスピン》で強引にタゲを取り戻す。最後はカオルの《二段突き》とルリルリの《アイスラッシュ》で、水上決戦は案外早く終わりを迎える事に。

ドロップは金のメダルに剣術指南書、水の術書に水の水晶玉と、意外と平凡だった。武器防具の類いは全く出さ終いだっただが、それでも強さから考えたらこんなものかも知れない。

トリガーNMと言っても、やっぱりピンキリなのは仕方が無い。

反対にハヤトパーティは感心しきり。複合スキルを限定イベントで覚えているキャラは、恐らく2桁もないだろうとの話である。そう言う向こうは範囲スキル技を覚えているのだが、その事はどち

らも敢えて触れず仕舞い。

お互いをライバルとして認めたからか、その後は両者とも口数も少なく。情報有り難う、またどこかでとの別れの挨拶も簡素なもの。お互い無事クリアを祈ると言ったが、果たして内心は。

ハヤトパーティは弾美達の前で、転移の棒切れでエリアを脱出して行った。

『見られながらの戦闘って、何だか緊張しちゃいますねえ！ 思わず張り切りすぎて、タゲ取りそうになって済みません、隊長』

『まあ、あんなものだろ……美井奈の攻撃速度が、思ったより速くなったのか？ これから先は、ちよつと注意が必要かもなあ』

『そうだねえ、私にも強力なスキル技があればバランス取れる感じなのに、残念』

パーティ内では、割とホンワかな会話が為されているのだが。ここ2日程度で、ハズミンの装備やレベルに変更が無いのが微妙に響いているのかも知れない。タゲの取り方など相談しながらも、次はどこに行こうかという会話になる。

そうなると、もう1つ『炎』のNMに行くか、最後の素材取りに向かうかの2択しかなく。当初の予定からするとあまりもう時間も無く、それなら集落の近くでベルトの素材を取ろうという事に。

移動だけでも10分は掛かってしまい、欲張らなくて良かったと安堵の声の中。ケンタ獣人を殴れば、5匹目のドロップで今日の目的の素材集め終了。

ついでに弾美のレベルも29へと上昇。おめでとうの掛け声と共に、全員やり遂げた気分でタウロス族の集落へと入り込んで行く。ここが初の瑠璃は、珍しそうにあちこち行き来している模様。

美井奈はこの前のクエを進めようと、耐久度を0にした予備の弓をトレードするNPCを探し回っている。結局は薫に聞いて、この

件は一件落着だったのだが。

その報酬に貰ったのが、何と《複合技の書：弓術》だったのには一同仰天。

『わ〜っ……お兄さんっ、凄いもの貰っちゃいました、感激です〜っ！』

『うおっ、こんな簡単なクエ報酬にしては破格だなっ。美井奈も複合持ちの仲間入りかっ！』

『うわ〜っ……いいなあ美井奈ちゃん、羨ましいっ！』

残念ながら、使用条件が弓術スキル30と風スキル20だったので、すぐに利用という訳には行かなかったのだが。棚からボタ餅的な取得に、少女は狂喜乱舞の状態のよう。

パーティ的には、後衛の美井奈がこれ以上強くなるのは、タゲが揺れてきついんだけど。それでもフィニッシャーとしての立場から見たら、ミイナの決定力は欲しい所。

幸いミイナの風スキルも、妖精装備のお蔭で既に17もある。中立エリアまで戻れば何とかかなりそう。

そんな騒ぎの後で一息ついた後に、今度は瑠璃がチェリーパイがどうのと言って来た。何でそんな洒落たものを夜食にするのかと、弾美は不審げに訊ねるのだが。

呆れた調子で、ハズミちゃんが数日前に頼んだのだと答える瑠璃。ようやく判明したのは、薫の口添えがあつてから。弾美が瑠璃に、通信でクエスト用に買うのを頼んだ筈だったと。

最初に訪れた際に、確かに言ったような記憶が微かに蘇る気のする弾美。

薫の案内で、クエストをクリア出来た瑠璃。報酬に風的水晶玉を貰い、風の術書でなかった事を残念がつてみたり。とは言え、水晶

玉も激しい戦闘の末にその数を減らしており、補充は有り難い事なのだが。

他のお店を覗いていた瑠璃も、ようやく納得がいった様子。中立地帯にワープで戻り、今夜の冒険の前半戦は終了。光の呼び水を使おうかという案も出たのだが、時間が中途半端に残る可能性もあるので。

廃墟エリアに残り時間を、全力で注ぐ事に意見は一致したのだった。

『前回もかなり手強かったもんね、引き締めてかからないと駄目だね！』

『そうだな。瑠璃、買い物終わったか？』

『もうちょつと、メダルかなり減っちゃったよ』

メダルを使つての買い物は他でもない。瑠璃の指輪と美井奈の脚装備の同化のためのカメレオンジェル×2個と、美井奈の風スキル20に伸ばすための術書×3枚の購入だ。

合計9枚のメダルの使用だったが、それでもパーティ的には強力な戦力を得た事となった。美井奈が風の魔法と光の魔法を、それぞれ取得したのだ。

風の魔法は《風の癒し》と言い、どうやらパーティ全員に神水のような、緩やかなヒーリングを施してくれる効果のよう。光の魔法は《フェアリーウィッシュ》という名前で、3つの願いが何とかと、美井奈からはあやふやな説明があるのみ。本人も良く分かっていない様子だ。

さらに弓術の複合スキルは《スクリューアロー》というらしい。風の属性の突き飛ばしが付与しているらしく、近付いて来た敵と距離を取るには良い技かも知れない。

以上、急激な成長振りに、本人も混乱気味の模様の美井奈である。

『雑魚で1個ずつ、新魔法とスキルを確かめながら進もうか。複合スキルは、弱い矢束と範囲矢束で確かめてくれ、美井奈』

『了解しました、隊長！ はっきり言つて、大混乱ですっ！』

『でも、美井奈ちゃんが回復寄りにも動けるようになったら、大助かりだよな〜』

『本当ですかっ、お姉ちゃまっ！？』

それは本当に大助かりだと、弾美も請け合う。後半戦に向けて、詳細な打ち合わせと薬品類の補充。入る前に、瑠璃が慌てたように素材をベルトにでもらうのを忘れていたとUターン。

その間を利用して、弾美はフレンドとの通信チェックを数点消化する事に。進や知り合いからちよくちよく入っていたのだが、時間を気にして長話出来ないでいたのだ。

進のチームは、あれから廃墟エリアとクエストエリアを中心に廻っているようだ。メダルが貯まったら、こちらの情報を元に裏エリアにも挑戦してみるとの事。

そこそこ順調そうな報告に、弾美も胸を撫で下ろす。

ところがこちらのパーティは、廃虚のエリア2つ目の攻略にお世辞にも順調とは言えない展開。まずは美井奈の《フェアリーウィッシュ》が、実はMP100も必要だと判明。ミイナのMPが150ちよつとなので、一応足りてはいるのだが。

それで何が起こったかと言えば、浮遊する光球を3つ呼び寄せたのみ。フワフワと周囲を飛び回り、楽しそうな魔法ではあるのだが用途は不明という始末。

敵との戦闘中でもこれと言った支援はして来ず、その光は数分で消えてしまった。

『あれっ、消えちゃった……何だったんでしょっか、隊長？』

『ん〜……雷精みたいなのに、ピンチな場面限定で手助けしてくれるのかもなあ。よく分からない』

『取り敢えず、もう1つの魔法も試してみようか、美井奈ちゃん』

ここのエリアも、やっぱり敵の数が少ないために。戦闘相手を探す事自体が、実は難しくもあつたのだが。こちらの廃墟は、前回攻略したマップと違って、年季の入った用途不明の建物が多く。完全に崩れ去って、広場と化している場所もちらほら目立つ。

そのせいか、大型のモンスターや魔法生物との遭遇率が高い。数は少ないが、嫌らしい強さの敵に手間取りつつも、ミイナの新風魔法の《風の癒し》はまずまずとの評価を受けた。

風スキルが低いせいで強烈な効き目では無いが。神水程度の回復力はある様子。

薫にマップピングを任せて進む一行だが、別に目標も無く歩き回ってなどいない。インしてすぐに見えたのは、霞む様にして背景の半分を占領するグランドイーターの大樹。

そして台地には、昔に何らかの原因で枯れ落ちたのか、巨大な枯れ枝が丸太のドームのような仮の構造物に変化を遂げていた。マップの東の4分の1を占領しており、遠目からでも嫌でも目に付く。進達からの情報では、そこでレベルUP果実を見つけたらしい。

皆で相談して、果実を先に回収に向かう事に。

廃墟の各地に散らばる自立歩行ゴーレムに、美井奈は新複合スキルの《スクリユーアロー》も試してみたのだが。削り力は強烈だが、ヒットすると敵を吹き飛ばしてしまうため、パーティ戦闘では余り使い道が無い事が判明した。

ソロでピンチの時はそれなりに役には立つだろうと、弾美に慰められるのだが。SPの消耗も結構高く、連発もしにくいスキル技に

美井奈は微妙なりアクション。

強くなっている筈なのに、何故か腑に落ちないスキルや魔法ばかり集まっている気が。

くり抜き丸太の巨大ドームは、そうこうしている間にも一行に大きな影を落とし始めていた。目の前には奇妙な平原が広がり、そこを渡らないとドームに辿り着けないようになってきているようだ。

平原の奇妙な所を一言で表せば、それは赤く色付いた突起を持つ植物だろうか。収穫を待つように頭を垂れているのだが、大き過ぎる形状もちよつと怖い。

試しに誰か、安全性をチェックして来てくれと弾美が言つと。お調子者の美井奈が、自分に俊足と風の陣の魔法を掛け、自分の万能さをアピールしようと進み出る。

瑠璃が止める間もなく、ミイナ出勤。その後の騒動は、ちよつとした見物だった。

『美井奈ちゃん、危ないと思つたらすぐ戻って来てね？』

『あゝ、赤い植物が点滅してる風に見えるのは、私の気のせい？』

『美井奈っ、いい所見せようとするのはいいけど、慎重に進めつてば。走るなっ、アホっ！』

雷娘が不用意に入り込んだのは、やはり仕掛けの施されたエリアだったらしく。侵入者を発見した赤い実を持つ植物が、破裂して種子を次々に飛ばし始める。

その威力で侵入者を始末し、養分にしてしまうという自然界の知恵の発露なのだろうか。人より大きな植物の飛ばす種子の威力は凄まじく、美井奈のHPはあつという間に半減して行く。

それを一身に受ける雷娘は、平原の真ん中でボロボロに。

『きゃゝっ、何ですかここっ！？ 地雷が埋まっていますっ、助けて



「！」  
「だから走り回るなっ！　ってか、それを調べるために入ったんだろっが！」

リーダーの弾美のお叱りで、ようやく大人しくなつた美井奈……と思つたら、蟹鋏の食虫植物のトラップに捕まっていただけのよう。更にHPを減らしていく少女は、もはや哀れですらある。

HPが3割を切つたところで、ようやく雷精発動で罠を脱出した美井奈だったが。慎重に近付いて来た瑠璃に回復を貰つた途端に、何かかブチ切れた模様。

周囲の植物に範囲矢束を打ち込んで、一斉掃討に取り掛かる。何というか、破壊神光臨？

「あゝあ、範囲矢束も安くないのに……　ってか、こいつら攻撃出来るのな」

「環境破壊も何のその……？　いやいや、安全な道が確保出来て何より？」

「美井奈ちゃん、その……　そろそろ泣き止んで？」

「泣いてませんよ、お姉ちゃまつ！　……　うえ〜んっ（> <）」

最後の顔文字で、これは美井奈の母親の沙織さんの悪戯なのかと、皆ちよつとほのぼのとしてみたり。その後、危険区域を脱出して、不必要にMPを消費したルリルリの回復を待っている。遠くから何かの機械音が、こちらに近付いて来る気配。

昔は街の自動清掃機として作動していたのだろうか。それにしてもその機械、腕の部分にシヨベルや植物の蔦を生やしていて、原型を著しく歪められている気もするが。

美井奈が矢弾で作つた道を、そいつは清掃しながらパーティに近付いて来ている。結構大きくて、地面の吸い込み口はキャラクター人位なら簡単に呑み込めそう。

嫌な想像は大抵当たるもの。パーティをゴミと認知したのだろうか、その巨大清掃機は一行を片付けに襲い掛かって来た。

『うわっ、美井奈が変なNM呼んだっ！ 大人しく渡り切ってたなら、絶対遭遇しなかっただろうに』

『し、仕方ないじゃないですかっ！ ムカつと来たんですからっ！』  
『この敵、植物が操ってるのかな？ 部位が2つあるね』

瑠璃が冷静に指摘した通り、この敵は植物と機械の二部位を持っているらしい。まずは吸い込みやすいようにと、機械のシヨベルでゴミを細分化する事に決めたよう。

振り回してきた腕をブロックした弾美だったが、侮れないパワーを持つているようだ。反撃しつつも、今度は鞭のようにしなる蔦の一撃。範囲にいた前衛に強烈なダメージを与えて来る。

部位モンスターなどの巨大な敵の侮れない所は、攻撃が不意にタゲを持っていないキャラに向く事。弾美は反撃を注意しながら戦闘しているが、瑠璃や薫はたまの範囲を警戒する程度。だからと言って、敵の攻撃をがつつり受ける言い訳にはならないのだが。

瑠璃が急に消えたのには、一同驚いて姿を捜し求める事態に。

『あれっ、お姉ちゃまっ、どこですかっ!?!?』

『瑠璃っ、吸い込まれたのかっ!?!?』

『うにゅっ……すぐ吐き出されたみたい、今敵の後ろにいるのかな?』

言葉通り、トコトコとHPを半減させた瑠璃が敵の背後から姿を見せる。敵の正面にいた訳でもないのに、特殊技の吸い込みに引っ掛かってしまった瑠璃はおカナムリ。

今度は絶対に特殊技を潰してやると、細剣を片手に《麻痺撃》の準備に余念が無い。先にHPを回復しとけと弾美に忠告されて、少

しだけ冷静さを取り戻す瑠璃であった。

今日は何だか、メンバーの沸点が低いようだ。弾美は別の意味で冷や汗たたり。

敵の特殊技は、後半いよいよ冴えて来た様。排出口をこちらに向けての、風圧での吹き飛ばし技で、今度は薫が後方に戦線離脱。周囲に植物の地雷が残っていたら、強烈で凶悪なコンボ技だったと安心したのも束の間。

どうやら美井奈のかんしゃくも、地中の食虫植物までは掃討出来ていなかった様だ。蟹鋏に捕まった薫は、慌ててヘルプの信号を出して来る。美井奈の弓矢で、何とか脱出できたものの。

怪しげな場所を迂回しての戦線復帰のタイムラグは痛手だったり。

吹き飛ばしと吸い込み技が、いよいよ後半激しくなってきた。

弾美と瑠璃でのスキル技潰しばかりにも、頼っていられなくなってきた。硬い装甲に手間取っていた削りだが、魔法での攻撃に切り替えた途端に程なく機械部分が没。

掘り所を失った植物部分は、とうとう奥の手を出して来る。蔦を器用に動かして、ハンマーやシャベル、鉄球やドリルを振り回す凶悪な攻撃に切り替えて来たのだ。

攻撃を与えて来る者に、漏れなくの反撃が来る仕様はかなりきつい。

『反撃きついな、瑠璃も後衛に下がれ。魔法での攻撃と回復に切り替えてくれっ！』

『了解、ちよっとだけヒーリング挟むね』

『私が《風の癒し》を使いますね、SP貯まったら《貫通撃》行きますよー！』

幸い後衛からの攻撃は、反撃も届きよりの無い蔦植物。後衛から

の容赦のない魔法と弓術の削りが降り注ぎ始めると、機械部分に続いてようやくその活動を止めたのだった。

インして10分余りの強敵の出現も、何とかケリが付いてホツとする一同。

ドロップは金のメダルに剣術指南書、雷の術書に水晶玉、体力の果実や精神の果実など。後は古びたバッテリーとかボロボロの地図とか、訳の分からない物ばかり。

これは何かと相談するパーティだが、入手した地図を広げてみてもやっぱり良く分からない。どうやら廃墟の端にある貯水地に、入り口のマークが為されているようなのだが。

擦れたマップを見る限りでは、このエリア内なのは間違いない筈である。巨大丸太ドームの丁度反対側に当たるようで、同じエリアなら後で行ってみようとの話し合いに。

宝の地図ではないかと、美井奈や薫は楽しそうなのだが。

『これが宝の地図なら、絶対に強い番人がいるな!』

『ドラゴンとかですか? お宝を貯めこんでいそいで、いいじゃないですか』

『私はちよつと嫌かなあ? さすがにこのレベルで、ドラゴンは出さないでしょ?』

そんな事を言われても、弾美には回答のしようも無く。瑠璃は瑠璃で、ドラゴンの出てくる有名な童話の話を披露し始める始末。収拾の付かなくなる前に、弾美は皆を促して慎重にドーム内へと進み始める事に。

トラップの食虫植物は、あるパターンで地面に生えているようだった。それが分かかってしまうと、地中にびよこって飛び出している茎を見分ける事に集中して歩を進める一行。

ところが、今度は物理的な方法での足止めのつもりか。段々とモ

ンスターが増えて来て、昆虫やお化け木、ゴーストや壺型の敵が行く手を阻み始める。

奥に進み始めるにつれ、奇天烈な形のキノコや発光苔が迷路を形成して来るようになった。空中からは定期的にコウモリの襲撃、こちらを疲弊させる気満々である。

おまけに休息の姿勢になると、周囲のキノコが毒の胞子を飛ばして来る嫌な仕掛けが。久々感のあるヒーリング潰しに、今度は弾美がプツンしそうになる。

どうせ近くにボス級の敵がいるはずと探し始める一行。見つけた敵の姿に、一同騒然。

『キノコ魔人だ……格好いいっ?』

『何かユーモラスな中ボスだな……何故に侍装束なんだ?』

『笠繋がりなのかな……ほら、時代劇とかで浪人が被ってる奴とキノコの笠?』

『あそこにはどうやって行くんでしょう? あっ、ここからかな?』

キノコ魔人は、巨大なキノコの笠のフィールドに直立していた。そこまで行く道を美井奈が見つけ、一行は慎重にそこまで上がって行く。キノコ魔人はノーリアクション、不気味な佇まい。

一定の距離までキャラ達が近付くと、舞台は途端に賑やかになった。発光苔が頭上のドーム型の屋根をカラフルに照らし出し、菌糸の繊細なオブジェが浮かび上がる。

いつの間にか鳴り始めたBGMも、何故か歌舞伎調。緊張感があるのか無いのか。

大きなキノコ笠のフィールドを囲むように、細いキノコが伸びて来て。戦闘用のリングは、いつの間にか形成された様子である。そして先手はキノコ魔人から。日本刀での居合い斬りは、ハズミンの

HPの半分を削り取って行く。

パーティの混乱は一瞬で治まり、弾美と薫がすかさず前衛キープへと動き出す。美井奈は距離を取り矢弾でジャブ攻撃、瑠璃は回復を飛ばしつつ範囲攻撃の警戒。

範囲攻撃は当然のように起こり、キノコらしい毒孢子攻撃が定期的に発射されるようだ。美井奈の《風の癒し》で何とか被害を最小にとどめつつ、前衛の削りも順調な様子。

先ほどの敵よりも断然防御力が低いため、何だか楽勝ムードが漂い始めるのだが。そんなに甘くはないよとの意思表示、魔人の再度の特殊技はキノコ召喚だった。

フィールドにポコポコと生まれるキノコは、毒を振り撒きつつ足を走り回る。攻撃はして来ないのだが、毒状態は最悪の数値。一定秒毎に10近くずつ減って行くHPに、パーティは絶叫しつつ子供キノコを追い払う。

瑠璃の《波紋ヒール》も、根本の改善には役立たず。範囲を使えと弾美の言葉に、薫がカードの残りをばら撒き始める。そこに追い討ちをかけるように、砂嵐の矢を使用しての美井奈の《スクリューアロー》が炸裂。

もの凄い勢いで、矢弾の一撃は範囲に散らばっていた子供キノコを薙ぎ払って行った。

生き残ったキノコはごく僅か。しかもフィールドの端っこまで飛ばされて、パーティの毒状態は解除された模様である。安堵の通信が湧きあがる中、弾美が《トルネードスピン》からの連続スキル技使用で、キノコ魔人にとどめを刺す。

残りのキノコも掃討されて、毒状態も魔法で回復。何故かキノコ魔人の死んだ場所には、日本刀が刺さったままになっている。その近くには、小さなキノコが転がっていた。

クリックすると、宝箱にチェンジ。BGMも元に戻って、良く分

からない仕様であった。

『果実ゲットだ〜……あつ、刀は両手剣扱いか〜。性能いいのに残念だね、弾美君?』

『そうだなあ、地上に来てから武器交換してないな、俺』  
『それは意外ですねえ、私は矢束を新調出来てますよ』

ドロップは金のメダルと日本刀、グランドイーターの果実と防毒マスク、土龍の尻尾と薬品類などなど。パーティに利用出来そうな装備は皆無だが、レベルUP果実は目論み通り取得出来た。

金のメダルも、今夜3つ目の獲得となり。減った分の補充もまずまずな感じ。

キノコの戦闘用リングも、主人がいなくなつたせいか元通り通行可能な状態に。休憩の後、そそくさと抜け出す一行だが、止めに入る雑魚ももうほとんどいない状態。

問題の赤い果実の平原も、まだ回復の兆しは見せていなかった。植物の地雷に再び通せんぼされては敵わないと、パーティはそこも素早く渡つて戻る事に。

スタート地点まで戻つたパーティは、廃墟で巡つてない場所を地図でチェック。残つたのは、地図にあつた西の貯水池を含む施設跡地と、北へと伸びる大通りくらい。

地図の怪しい場所を目指すか、木の葉集めに集中するか?

『さて、今度はどっちへ行く? 地図の貯水池か北の通りか、二択だなっ』

『ん〜、北はやっぱり最後じゃない? 木の葉が落ちてるとしたら、こつちな気もするけど』

『そうだねえ、全部廻つてから、最後に北に向かうのがいいのかなあ?』

相談の結果、北は全員が最後だと口にしたので。意気揚々と入り口を通り過ぎて西の建物群へ。雑然とした狭い通りを抜けると、さらに廃墟独特の雑然とした景色が広がり始める。

敵の影を追いかけつつ、たまに2階まで登れる場所などがあると階段の上に宝箱が設置されていたりするので気が抜けない。中には闇市で買った遺跡シリーズや神水など。

光の水晶玉や金のメダルをゲット出来ると、メンバーの目の色も変わり始める。一つも逃がしてなるものかとの視線の先に、不意に奇妙な動きをする小さな影が。止まっては動き、動いては不意に止まり、敵意は何えないが不自然この上ない。

そんな動きを示す小型のロボットは、美井奈が近付くと完全停止する。

『あらら、お手伝いロボットですか？ 止まっちゃいましたよ、お兄さん？』

『何でもかんでも壊すなよ、美井奈』

『私は何もしてませんってばっ！ ど、どうしましょう、お姉ちゃまっ？』

瑠璃が近付いて調べてみると、活動停止したロボットから差し込み式のカードをゲット。地図と同じく、用途は不明のアイテムだ。他にも何かあるかと、皆であちこち探し回るのだが。

いつの間にもやら屋根のある建物群に入り込んでいた一行。まだまだちらほらと、宝箱は微妙に隠されて置かれている様子。誘われるように、しかしマップを確認しつつ、良く分からない探索は続く。怪しい物があるかと言われれば、はつきりしないのだが。

そもそも、探し物は何だっけ？

その内に、壊れたトンネルのような通路が、建物の奥へと続いて



いるのを薫が発見した。恐る恐るその細い通路を固まって抜けると、どうやら外に通じているよう。

古いコンクリート製の貯水池は、奇跡的に水を貯め続けていたようだ。階段を上って行くと、池の中を覗き込めるようになっていた。そんな場所に出た一行は、ここが地図のマークポイントだと知ってちよつとドキドキ。

さらに水の中にうつすらと、閉ざされた遺跡の入り口が見えるのに大興奮。

『むっ、いかにもゲームっぽい仕掛けかなっ？ 水を抜いて入りなさいって事よね？』

『なるほど、見つけただけじゃ駄目なんだ。でも、水はどうやって抜くんだろっ？』

瑠璃が不思議そうにそう言うと、トテテと水の上を歩いて扉の上まで移動する。皆が謎を解いてくれるのかと期待したのだが、ルリルリはそのままトテテと歩いて戻って来ただけ。

拍子抜けの行動に、弾美から紛らわしい真似をするなど苦情が殺到。

『瑠璃っ、何がしたかったんだっ！』

『えっ、何だろう？ 水の上を歩けるアピール？』

『お姉ちゃまつ、華麗に謎を解いてくれるのかと期待しちゃったじゃないですかっ！』

『そんなにはっばと解けないよ、もうちよつと辺りを調べてみよっ？』

瑠璃の提案通り、あちこち調べて回つてみると。近くの小屋みたいな場所に、トレード出来る場所とスイッチを発見。スイッチは無反応だったが、電気が通っていないかららしい事が分かった。

それならばバッテリーのトレードが正解だと、パーティ内で意見が出たのだが。バッテリーは電気が抜け出て貯まっていない様子。まだ何か足りないのかと、探し始める一行。

施設内のまだ使えそうな部屋を見つけて入り込み、側面に光るランプを美井奈が発見。ようやく見つけ出した装置は、辛うじてまだ生きていた様子なのだが。

残念ながら、使い方が分からない。

『他に回れそうな場所、ありましたっけ？』

『2階にも上がれないし、この施設は全部回った筈なんだけどな。何か無いか？』

『この生きてる装置に、2箇所ほどトレード出来る場所は見付かったよ？ 後は何のアイテムを使うかじゃないかな？』

装置はチカチカとたまに点灯している程度。それにコードで繋がるように、お手伝いロボが待機モードで鎮座している。美井奈がロボに訊いてみようと、何気ない一言。

それに呼応して、さっきのカードが使えるんじゃないかと瑠璃が提案。試してみると案の定、ロボは目を覚まして指示を待つ。バッテリーの復活方法を訊いてくれとの、弾美の無茶な振りも。

電力が足りないとのロボの言葉に、瑠璃は思い切つてある物をトレードする。どうせ間違つても、いきなり壊れる事は無いだろうとの思い切つた行動に。

いきなり生き生きと動き出す装置群。

『うおっ、何したっ、瑠璃？ 装置が急に動き出したぞっ！』

『えっとね、持ってた雷の水晶玉を装置にトレードしてみたの』

『えっ……それだけ？』

呆れるほどの明快な謎解きだが、それで通じてしまったのだから

仕方が無い。むしろ、攻撃用のアイテムをここで使うかと、弾美などは驚き顔である。

続けてトレードしたバッテリーは、無事に充電出来たとログ報告がなされたようだ。とにかくこれで先に進める様になるかもとの話に、しかし弾美が待ったを掛ける。

廃墟エリアにインして、既に40分以上経つ。寄り道に時間を掛け過ぎると、本末転倒の結果になるかも。

『えっ、それじゃあの水の中の秘密の道を放っておくんですか？

それは寝てる間中、ずっと気になっちゃいますよっ！』

『そうだねえ……エリアに再度入り直した時に、もう一度謎解き用のアイテムが出てくれるかって言うのも不確定だし、このまま最後まで進む方がいいかも？』

『んじゃ、瑠璃の活躍に敬意を表して、このまま進む事にするか。時間足りなくなるかもだけど』

何も活躍などしてないと謙遜する瑠璃だが、道を開いてくれたのは間違いない事実。復活したバッテリーを小屋の装置にぶち込むと、水の排出装置はちゃんと作動してくれた。

ムービー演出まで使って、水が排出口から流れ出るシーンを数秒で見せてくれて。お陰で無駄に時間を使って、扉の出現を待たずに済んでホッとしてみたり。

階段を使って貯水池の底に辿り着いたパーティは、扉をクリック。しかし開かない。

今度は扉の鍵越しに光を灯せとのログが、クリックした弾美のチャット窓に流れて来た。これ以上一体どうして欲しいんだと、ハズミンはその場で地団駄を踏む。

各々調べてみて、まだ仕掛けが残っているのかと微妙な顔付きに瑠璃がおずおずと、光の水晶玉もカバンに入っているけどと申し出

て来るのだが。瑠璃の考えが正しければ、メダル計算で既に2枚の出費になる。

果たして、そこまでして進む価値が？

「あつ……関係ないけど貯水池の底の端っこに、苔の生えたレンガが落ちてたw」

「本当に関係ないな……でも拾っておこう！w」

「さすがクエスト大臣ですね、薫さん！」

「それより先に進みましょうよ！ 水晶玉なんて、戦闘してても消えていくんですから！」

乱暴な意見だが美井奈の言う通りだと、弾美がオーケーを出して来たので。瑠璃は扉の鍵口に光の水晶玉をトレード。静かに扉は反応して、重々しく隙間を覗かせ始め。その奥に続く通路にも、点々と光が灯り始める。

中はいかにも昔風のダンジョンみたいな感じで、丁寧に一定の床を踏んだら発動する罠なども取り付けられており。皆できやいきや言いながら、3分程も進んだだろうか。

ようやく広い場所に出たと思ったら、天井との距離がやけに遠い。

弾美と薫が、その部屋の造りを慎重に調べ始める。瑠璃と美井奈は、何故か減ってしまったMPの回復中。なかなかに激しい罠の連続に、苦渋を吞まされた結果だ。

今回は先頭を歩く弾美も結構引っかけたので、美井奈としても文句を言われないとお気楽模様。ポケットの確認などしながら、何が見えるか前衛陣に訊ねてみる。

暗くてよく見えないが、深い溝がコの字に走っていて進めなくなっているらしい。その奥は低い階段状の小山が見えるのだそうだが。

「ハズミちゃん、入った通路の真横に何か窪みがあるよ？ 私の真

後ろ』

『あゝ、本当だ。前ばかり見てて、全く気が付きませんでした！』  
『粗忽者。瑠璃、調べてみてくれ』

お兄さんだつて気が付かなかつたじゃ無いですかとの美井奈の批難声も。軽くスルーされて、瑠璃の報告に耳を傾ける一同。今度は眞実を見極めるには炎を灯せとのメッセージ。

反対側の壁の窪みには、戦いの指南を得たければ相応しき物を授けよとの言葉が。ただけ搾取するんだとの、弾美の言葉も当然と言えるのだが。ここまで来て引き返すのも業腹だ。

行けとかやれとか、弾美のちよつと自棄な言葉が飛び交い始める。

瑠璃が3つ目のお供え物の、炎の水晶玉をトレード。途端に周囲が明るくなつて、部屋の構造が丸分かりに。天井から吊るされている、古風なロウソクのシャンデリアに火がついたようだ。

溝の向こうの段差の頂点には、やはり古風な騎士の姿の悪魔顔のガーゴイルが2体、宝箱を守るように佇んでいた。硬そうな鎧に引き締まつた体躯。コウモリのような黒ずんだ象徴的な羽。

宝箱は段差の頂点に赤い豪華のが2つ、その下の段に普通のが4つほど設置されている。意気の上がる一行だが、もう一つの仕掛けの解き方が分からない。

恐らくフィールドを分離している溝を消してくれるのだろうか、何をトレードすれば良い？

『んゝつ、余つた武器トレードしてみたけど、全く駄目みたい』

『戦いたければ、相応しい物をトレードしろと言ってるんだろ？

まさか命とか差し出せつてか？』

『戦いの指南……ひよつとして剣術指南書？』

薫の言葉に、それなら今日ドロップしたのが2枚あると瑠璃が答

える。今日だけでそんなに稼いだっけとの弾美のボケた言葉に、瑠璃はちよつと呆れ模様な返答を送る。

弾美が配分を指示しなかったから、自分が持っていたのだと瑠璃は言うのだが。このパーティ、自己主張とか欲とかが無さ過ぎだと思つのは、リーダーの弾美だけだろうか。

誰かが欲しいと言わないと、配分する方も皆のスキル数値など覚えていないのに大変だ。

瑠璃に文句を返したい弾美だが、ここはぐつと堪えて戦闘準備の指示を出すのが先。敵は2体なので、片方は瑠璃のキープか美井奈のマラソンが前提である。

もう片方を弾美がキープして、薫と手の空いたアタッカーでさつさと削り切る。そう告げると、それぞれから了承の答えが返って来た。フィールドがマラソン出来る地形になってくれれば良いと、美井奈はちよつと不安そうだったが。

瑠璃が指南書をトレードすると、溝はきれいにせり上がったブロツクで塞がってくれた。

—安心のパーティは、それぞれ作戦通りに動き出す。《幻惑の舞い》を掛けた瑠璃は、手強そうな敵を一人で果敢に押さえにかかると、弾美と薫も、タゲを取った敵を下段まで誘い込み、ガシガシと殴り始めた。

美井奈も2つの場所の戦況を観察しつつ、弾美組の削りのお手伝いに矢を射掛ける。たまに前衛に回復を飛ばしたり、瑠璃のHPの確認も忘れずに行っている様子。

今まで培った、なかなか統率の取れた美しいフォーメーションだ。

それが崩れ始めたのは、やっぱり瑠璃から。ガーゴイルの砂塵のブレスからHPを減らした瑠璃は、慌てた様子で《幻惑の舞い》を

掛け直そうとするのだけねど。

一步遅く、その後自己回復に繋げようとしたの瑠璃の目論みは潰える結果に。敵の特殊技の、鉤爪飛ばしという技でスタン状態にガーゴイルの左腕は、ルリルリに絡みついたまま本体から離れた状態。

魔法生物らしい技だが、また生えて来ている所が憎たらしい。

『わっ、わっ、鉤爪に捕まっちゃった！ 魔法も詠唱不可だよっ！』  
『了解です、お姉ちゃまつ！ タゲ取りますねっ！』

美井奈の溜め込んだSPを使用しての、《みだれ撃ち》から《貫通撃》の連続スキル技は本邦初公開。最近の装備でのSPの上昇で、可能になった連続技である。

ついでにホーリーをぶち込むと、さすがの感情を持たない石魔人も美井奈にタゲを変更する。ダッシュも素早く逃げ出す美井奈、これで瑠璃は安全になった。

与えたダメージの大きさに、ちょっと楽しそうでもある美井奈だったり。

弾美達の方は、かなりの激戦を繰り広げていた。何しろ相手の防御力は、折り紙つきの硬さを誇っている。両手武器の薫の攻撃でも、なかなか有効打は与えられない情況だ。

それでも手酷い反撃を喰らう事もなく、二人掛かりで徐々に敵のHPを減らして行く。気が付いたら、周囲をミイナがマラソンを敢行しており、ヒーリングから蘇ったルリルリが攻撃魔法で手助けに入っていた。

魔法の効きは素晴らしく良く、硬い外皮を物ともしない。再度の詠唱で、ガーゴイルは飛翔形態に移行。空中からルリルリばかりにブレス攻撃、さらには再度の鉤爪技の披露。

どうやら、完全に敵を怒らせた模様である。

「わっ、わっ、また怒らせちゃった！ 鉤爪飛んで来てまた動けない〜！」

「焦るなって、瑠璃。魔法でこっちにタゲ取り戻すから！」

「私は何にも出来ない〜！ 二人とも頑張って、地上にコイツ降ろして頂戴〜！」

ハズミンが《クラック》を飛ばすが、石魔人は知らん顔。頭にきた弾美は、今度は《風の鞭》での遠隔斬りを試してみる。全く慣れない魔法だが、スキル技の《下段斬り》との併用で、敵の飛行スピードは鈍った模様。

その後の《闇の断罪》で完全に停止、地上に落ちて来る石魔人。

薫が張り切って再度殴り始めると、タゲもようやく落ち着いたようだ。弱ったところに瑠璃のとどめの《ウォータースパア》で、1体目のガーゴイルは倒される運びに。

2体目に移ろうと敵に取り付く一同だが、タゲの横取りには一苦労。美井奈はマラソン中に《スクリューアロー》まで使用したらしく、石魔人もカンカンのご様子振り。

仕方ないので、美井奈に新魔法の《フェアリーウィッシュ》を掛けて止まってくれと頼み込む。瑠璃が回復にスタン張っているし、雷精もいるから恐らく死にはしないだろう。つまりそれは死ぬ寸前まで追い込まれる事を意味するのだけれど。

それでも恐々と、美井奈は止まって魔法詠唱を開始。

ところが今回の光の粒子達は、美井奈が殴られるのを黙って見てはいなかった。巧みに敵の攻撃をブロックして、本体の美井奈の命を懸命に守ろうと見事な活躍である。

なる程、こんな魔法なのかと周囲から感嘆の声が上がる中。弾美と薫の懸命の削りに、何とかガーゴイルもソワソワとし始め。光の



粒子が1つ2つと消滅する頃に、ようやく弾美がタゲ取りに成功する。

ここまで来たら、後は何とかこちらのペースで削り切る事に成功して。戦闘終了を喜び合うコメントが、程なく数分後にパーティ間を飛び交い始める。

『やった〜、鍵が2個出たのは、赤い宝箱のだよね？』

『だなっ……こんな色のは初めて見たけど、何かいいの入ってそうだな！』

『お兄さんっ、使えそうな片手剣も出てますよっ！ 良かったですねえ！』

『ここまで水晶玉3つと指南書1つ使っちゃった訳だから、それに見合う報酬だといいいね〜』

確かに瑠璃の言う通りである。ガーゴイルは赤い鍵の他にも、石割りの剣と闇の秘酒、土の水晶玉などをドロップするも。全然報酬の釣り合いは取れていないのが現状。

普通の色の宝箱からは、光の術書にバトルグローブ、グランドイーターの果実に命のロウソクをゲット。待望の赤い宝箱からは《複合技の書：竜技》と天使の呼び鈴というアイテムが。

2つとも超レアな予感の間違い無いが。竜技とは何だろうとどよめく一同。

石割りの剣 攻撃力+19 《耐久10/10》

バトルグローブ 攻撃力+3、HP+8、防+12

この戦闘で、薫が26にレベルアップ。果実も使えばとの言葉にも、ひよっとして村っちが困っているかもだから、良ければ融通したいとの話。弾美もそれには簡単に同意。

2個とも上げて良いと、こちらも全く欲のない答えだったり。

『ありがと、弾美君……それより、反対側にもまだ扉があるの知ってた？』

『えっ、この先まだあるんですか？ もうそろそろこのエリアで1時間経っちゃいますよね？』

『うーん、この先に敵がいたとしたら、強敵な気がするけどなあ。』

『帰りの魔方阵があるだけとか？』

『ヒーリングしてるから、仕掛けだけでも調べてみて、ハズミちゃん』

扉には絶対に仕掛けがあるとの前提で、ヒーリング中の瑠璃が問うて来る。調べてみると案の定、最終の試練を受けるには命を捨てよとのメッセージが流れて来て。

扉の左にトレード出来る窪みがあり、右側の窪みには闇にて退路を閉ざせとのコメントが。再びのダブルの謎解き試練に、今度もみんなで解こうと意気揚々なメンバー達。

しかし美井奈の答えは頓珍漢過ぎて、参考にならず。

『命を捨てるって……仲間内で攻撃し合えませんか、このゲーム。友達が言っていましたけど、出来ちゃうオンラインゲームもあるらしいんですけど』

『それが出来たら、美井奈が生贄候補だな……』

『なんでですかっ！ 私はちゃんと役に立ってるじゃないですかっ！』

『んと……素直に考えると、命のロウソクで良いんじゃないかな？』

結局は瑠璃の推理力におんぶに抱っこで、次の部屋への扉開けとなくなってしまった。右の窪みは闇の水晶玉で良いだろうと、順番を迷いつつも先にトレード。

部屋がいきなり暗くなって、溝が再び退路を断ってしまったのには一同驚いたが。これで完全に前に進むしか無くなった訳である。

用意を整えて、瑠璃が扉を開けに掛かる。

次の部屋も、かなりの大きさだった。そしてその中にいる敵も、遠目から見たら小山のよう。

強制動画の挿入も、久々に思える気もするが。これ程の強敵相手だと、盛り上げ効果も必要ない気もしたり。ゆっくりと首をもたげた生き物の双眼が、鈍い光を放ってこちらを見遣る。

光沢のある灰色の鱗が、部屋に灯る明かりに反射する。鋭い牙が口元から覗いた時、まるで犠牲者を望むようにクローズアップされて、その良く出来た映像は終わりを告げた。

パーティはもちろん騒然、美井奈が招いたと批難も殺到。

『うわっつ、美井奈ちゃんが番人を指定しちゃうから、招いちゃったよ〜！』

『どうしてくれるっ、美井奈っ！　ってか、改めて見ると目茶苦茶でかいなっ！』

『メイン世界でも数度しか見たことないね〜！　勝率はちよつと言えないけど……』

瑠璃の言葉も当然で、今まで3回蒼空ブンブン丸で戦って、1回しか勝った事が無いと言う有り様だ。団長の弾美にしても、苦々しい記憶。しかも、余り思い出したくない類いの記憶である。

それでも出て来たものは仕方が無い。何しろここに辿り着くまで、一体幾つのアイテムを犠牲にして来たか。是が非でも倒して、その元を取るのみである。

弾美がそう宣言すると、パーティのヤル気度も上昇して行く。勢い込んで、戦闘開始！

攻撃範囲内に飛び込むと、いきなりの炎のブレスがハズミンを襲って来た。それを予想していた後衛組が、すかさずヒールを飛ばし

て回復を行う。タゲ取りもこれだけ大きい敵だと、攻撃の当たる範囲が見極め難く大変である。

前衛が順次取り付くと、いよいよ勇んで削り始めるパーティ。瑠璃も、普段はMPコストを考えて使わない《ウォーターミラー》まで使用して、ダメージの軽減を図る。

宝物庫の番人は、容赦のない攻撃力と体力で一行に立ちほだかる。数の優位など無いに等しい程だ。

硬い鱗は、普通に殴っていても武器の耐久度を消耗させて行く仕様となつている。戦闘が始まって数分は経過したが、まだまだドラゴンのHPは旺盛である。

反対にパーティは、牙と尻尾とブレスのローテーションの攻撃で、徐々にギリ貧に追い込まれて行く。魔法やスキル技のスタンでは、竜のブレス攻撃は全く止められない。

ドラゴンの強さの一端たる所以の、スタンや毒攻撃無効化である。

「ハズミちゃん、回復が追いつかないよ〜！ ヒーリングしていい？」

「ちよつと長丁場になりそうだな、オツケ〜」

「回復足りなさそうなら、さっきの天使の呼び鈴使うよ？」

「瑠璃ちゃん、お願いっ！ 尻尾がガンガンぶつかって来るのよ〜」

とにかく回復の手が足りないパーティは、とうとう先ほど手に入れた天使の呼び鈴を使用。ピヨツと出現した天使は、細剣を手に凜々しく戦場に立つ。

パーティの希望は回復支援なのだが、天使はそんな事はお構い無しにドラゴンに斬り掛かって行く。よく見れば、光の粒子が3つ付き添っており、天使の動きをサポートしているようだ。

薫の叫び声に呼応するように、ようやく回復魔法も使い始める天

使。どうやらパーティメンバーのHPが5割に近くなると使用するようだ。

ポーシヨンの残り少ない一行には有り難い恵み。瑠璃の復帰で、攻撃に幅も出てくる。

ドラゴンに変化が出て来たのは、敵のHPがようやく7割まで減った時だった。鱗の色が赤へと変わり始めたと思ったら、急に上体を起こして翼をはためかせ始める。

何事かと見守る一同だが、距離を詰めるのはちょっと怖い。あの巨体に踏み潰されたら、どんな結末が待っているのやら。竜は歯軋りのような音を口から発しており、やがて手前の空間に3体の骸骨兵士を召喚した。

骸骨兵士は骨の隙間から炎を吹き出し、両手持ちの大鎌を振り上げてパーティに襲い掛かる。

『わっつ、竜の召喚魔法っ？ この現状で、それは反則だよっ！』

『ドラゴンは俺と天使で何とか抑えておく！ 範囲アイテム全部使っつていいから、雑魚頼むっ！』

『りよ、了解っ！ 雑魚と言っても、骸骨強そうだけどねっ！ 時間掛け過ぎると弾美君が持たないから、アイテムケチらずに速攻で片付けようねっ！』

『妖精も召喚するねっ、1回使っただけどまだ壊れてなかった！』

そこからはまさに総力戦。呼び鈴で召喚された妖精も乱入して、更には範囲アイテムの水晶玉やカードが乱舞する。殴り合っているのはカオルと炎の骸骨兵士、そしてハズミンと竜の2ペアのみ。フリーの骸骨は、ふらふらとミイナを追い掛け回している。

気付いたら、炎の骸骨兵士もドラゴンも、HPは半分を割っていた。ドラゴンは骸骨兵士の召喚の代償に、HPを数割ほど減じていたようだ。

戦況はと言えば、弾美の回復手段のポジションと瑠璃のMPが、いよいよ危うくなって来た感じ。走り回る骸骨兵士に水魔法で攻撃を行う瑠璃は、エーテルもほぼ使い切る勢い。

何より、召喚された天使もいよいよ虫の吐息。HPが半減したドラゴンは、防御力は下がって来た代わりに、攻撃力とブレスの威力が徐々に増して来ているのだ。

弾美の悲鳴と共に、とうとうドラゴンの尻尾攻撃を受けて消滅してしまう助っ人天使。ポジションも使い果たしてポケットに無い今、ソロではとてもドラゴンの相手は無理。

絶望感が漂う戦場に、しかし天使の残した奇跡が2つ。

最初に気が付いたのは瑠璃だった。ルリルリの頭上に天使の輪っかが出現し、MPがちよつとずつ回復して行く。次に美井奈が、周囲に飛び交う3つの光球を確認。

唱えていない筈の《フェアリーウィッシュ》と同じ効果を確認した少女は、立ち止まっていた《スクリューアロー》に踏み切る。砂嵐の矢の効果で、2匹の骸骨がダメージと同時に吹き飛ばされる。

美井奈は更に、ウインドウから闇の秘酒を使用。全回復したSPで更に複合スキルを放つ。

何がきつかけなのかは分からないが、ミイナの攻撃と同時に、3つの光球も矢の軌道を描いて敵に突き刺さって行った。威力は凄まじく、怒涛の追い込みに炎の骸骨兵士2体が消滅。

もう1体も、瑠璃の輪っかをまとった複合スキルの《アイスラッシュ》に呆気なく蒸発して行った。もの凄い効き目に感動している暇も無く、全員が慌てて弾美のサポートへと舞い戻り。

ハズミンのHPは3割まで減っていて、妖精の支援もスズメの涙。瑠璃は最後のエーテルを使用してMPを回復、弾美に回復魔法を飛ばしてHPを安全圏に引き上げる。

それでも相変わらず、危ない状況に変わりはないのだけど。

『後はコイツだけ〜っ、攻撃通る様になったけど、向こうの殴る力も上がってるね〜!』

『コイツ《シャドータッチ》すら効かないっ! 後3割、何とか削り切れ〜っ!』

『お姉ちゃまつ、私のエーテル使って下さい!』

『有り難うっ、美井奈ちゃんっ!』

嫌な特殊技を使って来る敵も手強いが、何よりこちらのスタン技や魔法が全く効かない相手というのも難儀だと言わざるを得ない。薫が最初使っていた《炎属性付与》の魔法は、追加で炎ダメージを与える効果があるのだが、それすら完全に無効化されてしまっていたのだ。

瑠璃の水系の攻撃魔法なら、ひよつとしたらある程度ダメージが通るかも知れないが。回復ばかりにMPを割いているので、攻撃に回す余裕など無いのが現状である。

それでもようやく敵のHPは2割を切った。後衛のMPも微妙な所、何とか持って欲しい……と思っていたら最悪の事態が。

2時間縛りの発動で、ヒーリング中だった瑠璃は強制的にその行為を中断させられる。ダメージを負っている状態では、休息は一切出来ないゲーム仕様なのだ。

パーティ内に悲鳴が飛び交い、これはいよいよ腹を括るかという空気が流れ始める。諦めを良しとしない前衛達が、半分ヤケでの踏み込んでのスキル技発動。懐に飛び込んだのが、結果的に幸いしたようだ。

竜は対象を一瞬見失い、牙の攻撃を空振りしてしまう。

そこに美井奈が《みだれ撃ち》からの《貫通撃》をお見舞いする。

炎の神酒まで飲んでしまった雷娘のダメージは、フィニッシュャーとして面目躍如である。

さらに2本目の闇の秘酒を使用して、今度は《スクリューアロー》を見舞う。ドラゴンのHPが残り1割を切ったので、何とかなると踏んだのだろう。しかしドラゴンは吹き飛ばされもせず、逆に美井奈との距離を詰めて来る結果に。

反撃のブレスでこんがり焼かれてしまったが、弾美が《トルネードスピン》でしっかりタゲを取り戻す。既にパーティのHPは、全員仲良く危険区域に突入している。

再度のドラゴンの牙攻撃が、ハズミンのHPを赤表示に追い込んだ。その攻撃と刺し違えるように放った弾美のスキル技が、とうとうドラゴンのHPバーを消滅させる。

どつと倒れこむ巨体に、歓喜に湧くパーティだったが。残りのエーテルを融通し合っただけの回復が先と、大喜びには至らないのが悲しい所。前衛が保険に持っていたエーテルが、瑠璃と美井奈に渡される。それからようやく、安堵と歓喜がパーティに吹き荒れる。

喜び合う一同の前には、お待ちかねの宝箱の山が。

まずはドラゴンのドロップした武器や装備の数々。龍鱗の盾や龍鱗の鎧、赤龍の大槍や炎の術書や水晶玉など。他にも薬品類がちよっと、ギルと経験値は上等の部類だ。

部屋の奥にあった宝箱の山は、見ているだけでとても幸せな気分になってしまう程。美井奈が記念写真を撮るから並んでくれと注文を言ってくるが、その気持ちは重々分かるメンバー達。

ようやく美井奈の許可が下りて、ポコポコと宝箱を開けて行く一同。ギルや術書や水晶玉の入ったのが10個程度。更に金のメダルに関しては、何と7枚の大盤振る舞い。

当たりの箱には、カメレオンジェルやレベルUP果実が入っていた。



一同を驚かせたのは、段の上にこれ見よがしに置かれた赤い豪華な宝箱2つだった。ドラゴンの落とした鍵でそいつを開けると、出て来たのは2つの宝珠だったり。

炎の宝珠は分かるのだが、もう1つの竜の宝珠と言うのは誰も聞いた事も無い。

先ほど入手した《複合技の書：竜技》と併せて使用するのだろうとの推測は立つのだが。何しろ複合スキル取得の条件が、武器スキル60、竜スキル10と明記されているのだ。

危険に見合った報酬だとは思うが、どんなスキル技なのだろう？

『もう開け忘れないかな？ 衰弱がそろそろ不味いから、戻ろうよハズミちゃん』

『そうだな……美井奈、もう写真はいいな？』

『今日はいっぱい撮りましたよ！ 今度見せてあげますねっ！』

パーティは部屋の隅にあった転移の魔方陣を無視して、転移の棒切れで中立エリアへ戻る事に。下手な場所に放り出されて、毒状態で戦闘に巻き込まれる事を恐れたのだ。

時間も夜の10時をとうに過ぎていく。明日が休みの美井奈は良いとしても、学校のある弾美と瑠璃はそろそろ落ちたい所。薫も先ほどまでの冒険の興奮を引きずりながら、分配は明日にして今夜は落ちようかとの提案。

それに従う形で、今夜の冒険はこれにて終了。

それにしても、弾美は先ほどまでの興奮を引きずったままに思う。ゲームでこれほどワクワクしながら明日を待ち遠しく感じたのは、いつ以来だろうか？

初めて見るスキル技の出現は、それ程パーティを熱狂させたのだ

ったが。考えてみたら、肝心の葉っぱ取りは失敗に終わっていたと言っ、この顛末は如何なものか。

明日も同じマップを巡るのかと思うと、ちょっとうんざりな気にもさせられるのだが。

何となく、竜の宝物に包まれたような眠りにつけそうな夜の出来事だった。

## 17 土曜日のオフ会！（前書き）

毎度の近況報告は、あんまり良い知らせも無かったりします。毎日しんどいなあって感じて仕事して、帰りも遅くて自分の時間も取れません。現実逃避したくても、オンラインゲームもプレイ時間が無い状態で。

フラストレーション溜まりまくり、小説の方で何とかお茶を濁してる状況です。とは言っても、新しい小説を書き起こす時間も足りなかつたりしますけど。

せいぜい、アイデアを溜めておく程度ですかねえ？

さて、作品の投稿状況ですけど、ようやく半分を過ぎた感じですよ。もうすぐ、未投稿の章に差し掛かるかなって具合ですね。

何となく覚えてるのが、この章を書いている最中にパソコンのハードディスクがクラッシュしちゃった事。オフ会の話を書き進めて、どんな場所が良いかなって色々と頭を悩ませていたような気が。

結果、かなり変なお店が出来上がってしまいました（笑）。

オフ会、自分はほとんど縁が無かったですね。オンラインの知り合いは、ほとんどが東京やさらに東寄りでしたから。名古屋の知り合いもいるんですが、そっちは顔見知りからのオンライン仲間でしたし。

一度、ネットで知り合った友達が遊びに来た事もありましたけど。その時はこっちが地元と言う事で、名所を案内して回りました（笑）。最近では、親しくなったらメアド交換とかすぐしちゃうのが主流なのかな？

そんな感じのネット関係での仲間構築も、自分はアリだと思いません（笑）。

それでは、一度は時空のあなたに消失してしまった本文の方、ご  
ゆっくりお楽しみ下さい（笑）。

## 17 土曜日のオフ会！

大井蒼空付属中学校の体育館は、ちよつとした熱気に包まれていた。ギャラリーが多いという訳ではないが、普段の練習風景とは一線を画する雰囲気漂っている。

時間は土曜日の午後1時半。近所の中学校とのバスケット部同士の練習試合は、既にスタートを切っていた。弾美もスターターの一人、張り切りようは傍から見ても分かる。

蒼いユニフォーム姿で、勇ましくコートを駆け回っている。

試合は最初からずっと、一進一退のシーソーゲーム。弾美の中学も強くは無いが、相手もレベルは似たようなものらしい。もっとも弾美の中学は、ちゃんとした指導者もいないような超アマチュアチーム。ハイレベルな戦術など、当然ある筈も無く。

ゾーンディフェンスも適当で、機能してるんだか怪しい感じ。

「お兄さん、頑張ってください！」

「弾美、しっかりボール追え！」

今日に限って、弾美の私設応援団となった『蒼空ブンブン丸』の一同。それにプラスして、イベントで知り合った美井奈と薫達は、ゲームの始まりから元気に声援を飛ばしている。

幸い敵の補欠の声出しや他の見学者の声援で、ブンブン丸の一団も浮いてはいない様子。肝心の弾美も、結構な活躍振り。チームの得点源となり、カットインを主体に得点を叩き出す。

さすがに毎朝、個人練習を欠かしていないだけある動き振りだ。その度に湧き上がるブンブン丸のメンバー達。特に女性陣のはしゃぎ様は、声質も手伝ってテンションも高い。

美井奈など自分事のように、弾美にパスが通るたびに嬌声を上げ

ている。

「お姉ちゃまつ、お兄さん活躍してるじゃないですかっ!」

「2年生なのに、レギュラー取ってるだけでも凄いのかなあ。淳はまだ出番無いみたいだな」

「弾美君、上手いわねえ……でも、ディフェンス頑張り過ぎてファールがもう3つかあ」

「前半もまだ途中なのに……ちょっと不味いなあ、薫さんはルール知ってるんですね?」

はしゃぐ女性陣、瑠璃とそのクラスメートの静香と茜、薫と美井奈の5人の中で。バスケットのルールを完全に把握しているのは、実は瑠璃と薫のみの様子。

残りの三人は、本当に弾美の活躍しか目に入っていない感じである。まあ、ルールが分からないから、そこでしか盛り上がれないというのが実情なのだ。

村っちは残念ながら、バイトのシフトの関係で遅れるとの通達があつて。男性陣、特に弘一と晃のテンションは、若干下がりが気味なのは仕方の無い事かも知れない。

後に予定されているオフ会から、一応合流する予定ではあるのだが。

試合は薫の懸念通り、ディフェンスに頑張り過ぎた弾美のファールがかさみ。前半を何とかリードで折り返す事に成功したチームだが、後半に入ると途端に失速模様。

後半早々に退場になってしまった弾美は、チームの3分の1以上の得点に絡んでいたのだが。味方のレギュラーのうち一人も退場を喰らってしまうと、あっさりと逆転を許してしまい。

淳も弾美の代わりに出て来たけれど、ガチガチに緊張していい所無しの結果に。

「あゝ、お兄さん下がっちゃいましたねえ、お姉ちゃま。もう出て来れないんですか？」

「うん、ファール5つしたら、その試合もう出れないんだよ」

「残念ですねえ、他の人は外からしかシュート打たないじゃないですか。お兄さんは頑張って敵を掻い潜って行って、とつても格好良かったのに」

「まあ、果敢な弾美君らしいスタイルだね！ あの14番の選手もブンブン丸のメンバーらしいから、美井奈ちゃん一緒に応援しよう？」

薫の言葉に、少女は一応頷いて見せるものの。美井奈をはじめとする女性陣のテンションは、どうしてもやや下がりが気味。それでも静香や茜は、健気に同級生に声援を送り続ける。

しかしその声援も、結局は空回りに終わってしまう結末に。一度離されてしまった点差は、そのままじりじりと広がる一方。一度も追いつく気配も無く、試合は残念ながらの逆転負け。

声援の努力も報われず、応援陣もがっかりである。

進や弘一、晃達同級生も、一応最後まで応援は続けていたものの。負け試合の事は、終わってしまえば頭の片隅に追いやられ。あっさりど、この後のオフ会に思考を移してしまう。

冷たいようだが、彼らにとって今日のメインイベントは完全にこの後の行事に違いないのだ。幹事というか進行役を担っている弘一と晃は、もの凄い気合いの入れようである。

バスケット部の方は、このあと4時までは試合をした中学校と合同練習をするらしいので。邪魔してはいけないと、応援団は近くのファミレスに移動する事に。

元気に別れの挨拶を告げる美井奈に気付いた弾美も、返事は力の抜けた頷きのみ。

「お兄さん、落ち込んでましたねえ……」

「そうだねえ、後で瑠璃ちゃんに慰めて貰うように頼んでおこうか？」

「茜ちゃん……聞こえてるけど？」

「途中退場はねえ、全部出し切れてないだけに辛いよねえ？」

オフ会は慰め会に変更だと、特に気楽な男性陣の外野は呑気に構えている様子。実際、大井蒼空町の学校は中学高校と、スポーツには力を入れていない。地区大会でも勝ち上がる方が珍しがられる始末なのだ。

そこまで深刻に友達の負けっぷりに感じ入らないのも、道理と言えるかも知れない。

総勢八名の団体は、ぞろぞろと体育館を後にして。それから校庭を横切って、繁華街へと向かう道をしばらく進んで行く。待ち合わせのファミレスは知らせてあるので、残りのメンバーが到着するまでそこで待つ事になっているのだ。

先ほどのバスケットの試合をネタにしているのは、美井奈ただ一人。初めての試合観戦に、感受性をいたく刺激されたい。薫が相手になって、色々とルールの説明を始めると、目を輝かせてそれに聞き入っている。その他のメンバーも、話に聞き入ったり他の話をしたり。

騒々しい団体は、ゆっくりとお店に入っていく。

4時を過ぎるまで、賑やかな集団の話の中心はやっぱり美井奈だった。つい昨日の夜に体験した、竜退治や裏の装備取りの苦労話を勢い込んで話しまくっている。

薫が時々補足を入れて、話の潤滑さの手助けに入る感じ。瑠璃は



同意の言葉を挟むくらい、実際に美井奈の話を聞いても、自分がその場にいたとは信じられないのが実情。

進達同じギルドメンバーは、結構仰天して聞き入っていたのだが、美井奈が証拠の写真を見せると、食いついて来たのは静香と茜の女性陣だった。朝から学校が休みで暇だった美井奈、こんな事をして時間を潰していたらしい。

ワイワイはしゃぎながら、皆で美井奈のプリントアウトした写真を眺め始める。

美井奈は持参したデジカメを見せびらかし、オフ会の写真も撮るのだと大張り切り。進が気を利かせて、写真を眺める女性陣を、美井奈を中心に数枚撮影してみたり。

土曜の昼下がりだけあって、ファミレスは結構な混雑振りを見せている。あまり目立つ訳にも行かないが、他のテーブルにも話に興じる学生達の姿をちらほら見掛ける。

賑やかなのは、どのテーブルも同じ事だし平気だろう。

先に一行に合流したのは、弾美と淳のバスケット部員ペアだった。二人とも試合のダメージで、練習疲れとは一味違った憔悴振り。暗い顔付きで、盛り上がっている一団に近付いて来る。

お疲れ様とか仲間の労わりの言葉にも、呻き声に似た言葉でしか返答出来ない始末。弾美は詰めて貰って出来た席に腰を降ろすと、ふうつと重いため息一つ。

試合の結果に騒ぎまくる美井奈をゲンコで黙らせ、これ以上の失言と慰めに睨みを効かせる弾美である。

「弾美はレギュラー貰って、初めての試合だったからなあ。練習とは言え、似たような強さの中学相手だったし、勝ちたい気持ちが強かったみたいなんだ」

「は、それで退場するほど力んでたんですか！」

淳のフォローにまたも失言の美井奈。再び殴られそうになって、慌てて薫の膝元に逃げ込む素振り。瑠璃が何とかフォローに入るが、弾美はその必要も無い落ち込み振り。

負け試合の話の矛先は、いつの間にかほとんど活躍をしなかった淳にも向いていた様で。弘一や晃に、応援してやったのにあの体たらくは何事かと詰め寄られてしまっている。

反論も出来ずに、大きな身体をモジモジさせる淳であった。

実際、弾美より淳の方が身長は8センチ以上高いのだが。ルールを知っている薫も、まさか大きい身体をして情けないなどと追い討ちをかける訳にも行かず。

傷付きやすい少年相手に、ドンマイなどと差し障りの無いコメントを掛けるのみ。

そんな騒ぎの治まらない集団の中に、遅れてゴメンとやって来たのが村うちこと村重春奈。マリモ店員の仲間である潮崎も、何故か後ろに引き連れている。

薫が事情を聞くと、どうやら会計役にと強引に付き合わされたらしく。ご愁傷様と痛み入るが、村うちにしたら連休中の宿泊旅行で、只今絶賛金欠中らしいのだ。

彼もしかし、若い子達と喋るのも嫌いじゃないし、限定イベントの話の聞けるとあっては嫌は無いよう。いつもの様にニコニコしながら、この場も持ってあげるから場所を変えようと言って来る。

太っ腹な発言に、メンバーからはここの会計くらい出しますと遠慮の声も出るのだが。幸いコーヒーや紅茶やジュースバーとか、全員安いモノばかりでの2時間近い長居だったので。

年長者に任せなさいと、いなされてしまった少年少女達。各自お礼を述べながら、店を続々と後にする事に。顔見知りの弾美は、潮

崎に大丈夫かと小声で訊ねるのが。

指先でオーケーのサイン。それより、面白い場所に連れて行ってあげると、意味ありげな言葉。

「あの男の人誰だ？ 春奈さんの彼氏かっ？」

「村つちと同じく、マリモの店員さんの潮崎さんって人……付き合ってるかどうかは知らないけど。なんか、今から面白い場所に案内してくれるらしい」

「はあ……マリモのペット広場でお茶会とかだと、私はちょっと嫌ですけど」

「安心しろ、それは俺も潮崎さんも、きっと全力で嫌だ」

美井奈の言葉には、力いっぱい同意の言葉を返す弾美。村つちの彼氏発言に否定の言葉を聞けなかった弘一や晃は、ライバル出現かと色めき立っているのだが。

本気で狙っているのかどうかは定かでないが、薫などは内心面白がっているよう。村つちはそこそこ美人だし、気風も良いし。こっそりと弾美に、彼らは歳上が好みなのかと訊ねて来たりして。

弾美は肩を竦めて、それでもないと返すしかない。

「一時期、静香や茜にモーション掛けてたけど、一向に相手にされなかつたからな。ノリのいい村つちなんかは、モロ好みなのかも知れないなあ」

「はあ……要するに振り向いてくれる女性なら、誰でもいい感じなのかしらねえ」

村つちと潮崎が会計を終えて出て来るまで、一行は勝手な会話で盛り上がる始末。静香と茜が改めて潮崎に礼を述べに近付くのを見て、弘一と晃は男の嫉妬メラメラ。

変な事にならない内にと、弾美が村つちに盛り上げてくれと耳打

ち一つ。先ほどまで落ち込んでいたのも忘れるほど、世話の掛かるメンバー達だったけど。そこまで計算していたとも思えないのだが、結果的に弾美の落ち込んだ気分をガラリと変えてしまったようである。

村っちは言われるままに最大限のノリで、今からオフ会のメツカに皆を導くと宣言。聞き慣れない言葉だけど、何だか秘密っぽいセリフ廻しに盛り上がる一同。

「何だ、オフ会のメツカって？ ちゃんとしたお店なのか？」

「大丈夫だよ、弾美君。もつとも、以前は居酒屋だったんだけどね。今は未成年でもちゃんと入店出来るし、寛げるお店には間違いないよ」

「へえ、そんな店が近くにあるんだ。知らなかったなあ、弾美？」

「ほ、本当に大丈夫なの？ 小学生もいるんだし、変な雰囲気の場合はNGだよ？」

潮崎の返事に、興味津々の様子の進や他の男性メンバー達。元が居酒屋だったと言う怪しさも、少年達の好奇心を刺激するのには充分だったらしいのだけれど。

心配する声も、ちらほらと瑠璃や茜あたりからこぼれるのだが。男性陣の勢いに待ったを掛けるほどではなく、隣の弾美をつついてみるのが精々。主に美井奈を心配しての行為だが、当の少女は同じく好奇心いっぱいワクワク顔。

ワイワイと先頭の村っちをせかしながら、移動を開始するメンバー達。静香や茜は、このノリには少し不安そうだったが。瑠璃や薫の存在に信頼を見出したのか、後ろをおどおど付いて来る。

美井奈は心配の素振りも見せず、相変わらず瑠璃と手を繋ぎながら弾美と会話の日常振り。

「バスケットって面白そうですねえ！ 私、中学に上がったらや

つてみようかなあ？」

「おうっ、面白いのは保証するぞ。今なら、俺の弟子にして練習見てやるっ！」

「あゝ、いいねえ！ 今度、公園で一緒にやってみようか？」

「午後よりは朝の方がいいかな、運動公園はいつも混むからなあ」

後ろで会話を聞いていた静香と茜は、弾美チームの仲の良さにちよっとホンワリした気分。先ほど拳骨で脅されていた美井奈だが、弾美と本当の兄弟のような雰囲気醸し出している。

ゲームをしていなかったら結ばれなかった、不思議な縁を感じつつ。年齢も性別もばらつきのある集団は、いつしか繁華街の端っこの、小さく古ぼけた感じの扉前へ。

店構えも小さいのかと思いきや、中は案外広がりを見せており。

古木をふんだんに使い、中世の洋風に統一された雰囲気はどこか哀愁を漂わせている。中二階や階段下の奥まったテーブル、カウンタ―などの設えは、さながら洋風のRPGの冒険者のギルドのよう。

入った途端に、どよめく年少者一同。ここまで徹底したセットの店があるとは驚きだ。

お客の入りは、午後の遅い時間にしてはまあまあ。前もって空気を確認しておいた潮崎は、一同を店の奥へと導く。十二名の大所帯となると、奥の大テーブルしか収容出来ないのだ。

潮崎が、入店するなり店のマスターらしき人と何やら話し合っている。マスターはスキンヘッドの厳つい顔付きで、そこまで雰囲気作りに貢献しなくてもと思うほど。

ウェイトレスの洒落た格好も、特に男性陣には大ウケである。何というか、メイドさん姿やネコ耳装着は当たり前な感じで。他にも色々、コスプレ衣装が盛りだくさんのよう。

美井奈もはしゃいで、撮影は可能なのかと訊ねる始末。

「大丈夫だよ、話は通しておいたし……ネコ耳とかも貸してくれるサービスあるんだ、ここ。無料だから、飲み物が届くまでは撮影会しようか」

「しまった……俺もデジカメ持って来れば良かった！」

「静香……何逃げようとしてんだ？ 茜と一緒に、ネコ耳姿を撮影して貰え」

はしゃぎながら、瑠璃や薫を撮影に巻き込んでいる美井奈組はともかくとして。照れのある静香や茜は、弾美が乱暴に強制参加の方向に持って行く始末。

アンティークの椅子が飾られた小さなステージが設えてあり、そこが撮影場所となっているようだ。後悔する弘一や晃と違い、潮崎はちゃっかり自前のデジカメを持参している。

お店からもデジカメを借りられると聞いて、再び盛り上がる男性陣。一番はしゃいでるのは美井奈と村っちで、巻き込まれた瑠璃や静香達は、最初やや表情も固かったり。

それでも、弾美が壁に掛けてあった作り物の剣を持って乱入すると。茜辺りから固さもほぐれて来るように。

「ほらほら、短槍もあるよっ！ 誰か使ってるキャラいない？」

「おっ、こっちには弓矢もあるなっ……美井奈、そらパスだっ！」

「はいっ、お兄さんっ！ ……これ、矢筒って背負えばいいんですかね？」

「いいね、ハイ、ポーズ よしっ、今度はイベントチームで撮影しようか！」

いつの間にか茜が、積極的に撮影指揮に携わるようになって。コスプレ撮影から記念撮影へと、現場は速いサイクルで被写体を代えて行く。和気藹々の撮影会だが、やがてスタッフの一人がテーブルの支度が出来たと告げて来た。

テンションの上がっていた一行は、落ち着くまでに一苦労だった。ようやく全員がテーブルに席を定めると、潮崎が乾杯の音頭を取るようと弾美に振ってくる。

純粋な蒼空ブンブン丸の会合ではないのだけれど。まあいいやと、弾美が乾杯の合図。

団長の音頭取りに、盛大に声を揃えての乾杯が返って来る。各自のグラスに注がれている怪しい飲み物は、この店一押しのも「エリクサー」なる飲み物らしいのだが。

何がベースなのか不明な味だが、意外と美味しくて一同には好評な様子。フルーツ系のミックスジュースらしいのだが、どこかスパイシーな口当たりも感じられる。

おつまみも数種類用意されていて、焼きマシユマロに『スライム焼き』との名前が付いていたモノは大好評。金のメダルが周囲に散らばっているが、これは包装されたチョコのようだ。

しばらく全員で、この穴場的なお店の話題で盛り上がる事に。

「面白いな、ここ。冒険者の気分が満喫出来て、コスプレ風味も混じってたりと、何か変な感じはするけど。有名なギルドとかも、ここでオフ会してるのかな？」

「そうらしいね、大学生のギルドとか、常連もいるらしいよ？ 夜はお酒飲めるみたいだし、割と盛り上がりつてるところ見た事あるね。だから夜は、ちよつとガラが悪くなる」

「そうなんだ……それじゃあ夜は、お子様連れでは来れないなあ。道理でメニューに、おつまみ的な料理が多いと思った」

「そうだよ……別に定食モノをオーダーされたら財布にダメージあるからって理由で、ここを選んだ訳じゃないからねっ！ まあ、そういう理由もちよつとあるけど」

「だから俺らも払うって、村っち。金欠なんだから、無理するなっば」

村つちと潮崎の大人の事情と、弾美と進のギルドの締め役コンビが、何となく小声でせめぎあってみたりして。他のメンバーはデジカメの出来を確認し合ったり、笑えるメニューを探して大笑いしてみたり。

オーダー控え目な理由は、学生組は夕食前だから。名物の飲み物と、笑える名前のサブメニューを古めかしい感じのテーブルに並べて、もっぱら会話で盛り上がるメンバー達。

獣人古銭型クッキーとか、矢弾ポッキーとか、出て来るのは至って普通のスナックなだけ。そんな名前のお遊びだけで、結構笑ってしまうのは若さ故なのかゲーマーだからか。

アルコール抜きでこの盛り上がりようは、立派だと思う。

現在は、会話の場は全くの2つに分断している感じ。ゲームの話題を中心に騒がしく語り合うメインの集団は、最近の攻略であった出来事をそれぞれ報告し合っている。

地上エリアはこうやって廻った方がいいとか、金のメダルの使い道だとか。2パーティともようやく固定メンバーが決まって、手強いイベントエリアを前にして。いかにキャラ強化するべきかを、皆で熱く語り合っている。

お互いに本腰をすえて巡ったエリアは、まだまだ半分位しか無いのだけれど。それでも裏エリアの情報をかんがみるに、実際に用意されたマップはもつと多いと推測する一同。

弾美チームは、用意されたマップは全部廻るのだと鼻息も荒い。

もつとも、それを主張しているのは、リーダーでもない美井奈だつたりするのだが。肝心の弾美は進と一緒に、村つちと塩崎を相手にライバル有名ギルドのチェックを小声で行っている最中。

上位入賞を狙っている『蒼空ブンブン丸』としては、競い合う相手の動向も気になるところ。一番気になるのは、やはり大学のサー



クル関係の巨大ギルドの噂あたりか。

メイン世界では、その大人数の勢力を活かしてブイブイ言わせているその彼等も。今回の限定イベントでは、いささか分が悪いと風の噂で聞こえて来てはいるのだが。

こつちも風邪引きや混雑でインを諦めたりで、数日を無駄にしている事情が。

「今回の限定イベントは、皆がレベル1からって事もあって公平ではあるね。数の優位もあまり関係ないし、色んなルートが用意されてるのは順位付けにどう影響があるのかな？」

「噂では、早解きとか遅解きとかのルートが分かれてるし、順位付けの採点方法がかなり複雑になってるって。キャラのレベルとか持つてるスキル数とか、NMを倒した回数や訪れたマップの数とか……早解きボーナスも、もちろん相当に影響して来るらしいけど」

「早解きかあ……大学サークルの連中、一度地上エリアですれ違っただけだよ。皆で迅速装備着込んで、同じユニフォーム着たどっかの体育系みたいで笑えたなあ」

「大人数と一緒にプレイするのも、そういう意味では考え物だわよね。思考が偏っちゃうから、間違える時は一蓮托生だもんねえ？」

弾美君たちは、今のところNM遭遇率やマップコンプリート率に関しては凄いつて聞いてるけど。レア装備だけでも高得点上げてる予感があるわよねえ！」

そうだと良いけどと、弾美はやや謙遜気味な返答。金のメダルも今のところ潤っているが、キャラの強さや所持スキル技、所持魔法数も得点に加わるという村っちの話が本当ならば。

そちらにメダルを使うのも、あながち間違っではないという意味で、その点では安心出来るかも知れない。自分のチームは暗塊装備や流水装備を地下で入手している分、他にメダルを使えるのも大きい気がする。

リーダーの弾美としては、皆で強くなってこれからの難関強敵に挑みたいところだ。

向こうの話の輪では、美井奈がまだまだ昨日の出来事で場を盛り上げていた。昨日の妖精の泉から水のトリガー使用まで、そしてそこで変なパーティが加わって来た事も。

弾美は思い出して、何気なく村つちと塩崎にハヤトというキャラについて聞いてみる。とにかく装備の良さとスキルの充実振りに、かなりの凄腕冒険者的な雰囲気か漂っていたのだ。

それを耳にした進が、また揉め事を起こしたのかと呆れ顔を弾美に向けて来る。違うと目で返事をしつつ、何故か信頼の無い自分の行動に慥然とした表情を浮かべてしまう。

それはともかく、塩崎の方がその名前に心当たりがあったよう。

「前回の限定イベントの、優勝ギルドのリーダーじゃなかったかな？ 僕らの所属ギルドのメンバーの一人が、確かそのハヤトって人と知り合いでさ。大学生だけど、ゲームサークルには所属して無かったような。高校生から大学生、社会人のごった煮ギルドだった筈？」

「私たちのギルドは、フリーターが8割占めるもんねえ。お蔭で時間が揃わなくて、合同イベントやり難いんだけどさ。まあ、オフ会は盛り上がるし楽しいよ？ 弾美君達のギルドも、かなりノリが良いし仲良さそうだけどさ」

「ノリが良いっていうか、ただのお莫迦な連中なだけのような気が。いやいや、仮にも同じギルド員だし友達だもん……多少の品性の無さには目を瞑ってもらおうとして……」

ブツブツ言い始めた進の視線は、主に弘一と晃のニヤケ顔に向けられている様子。小学生の美井奈は別として、茜や静香や瑠璃や薫と、周囲を見回せば美人揃いである。

自然と顔の筋肉が緩むのも、まあ男としては無理の無い事なのかも知れないけど。傍で見ていると、確かにお莫迦ヅラと言われても仕方の無いワンシーンではある。

それぞれギルド内で、色んな諸事情を抱えていてちょっと笑えるような。

村っちと塩崎は、同じギルドに所属しているらしいのだけど。元々が自由人の集まりな感じのギルドだけに、がっちり横の繋がりというのは、実は希薄だったりするらしい。

マリモの店長も、しっかりそこに在籍しているとは村っちの話。その店長であるが、限定イベントでは切り捨てにあって資格を失ったと、本人から耳にしている塩崎たち。

村っちなど、店長と限定イベントを勧めると約束していただけにかなり後ろめたい気分になっているらしいのだが。職場で顔を合わすたびに、恨みがましい視線を向けられる身になってくれと、変な同情を欲する彼女ではあるのだが。

約束を破る方が悪いと、弾美などは素っ気無い。

「だってさあ、急に旅行に行きたくなっちゃったんだもん。薫がただで泊めてくれるって言うし、そしたら電車賃だけで済むわけじゃないっ！ あっ、そう言えば店長が弾美君を呼んでたよ。連休中に手伝ってくれたバイト代を払うから、瑠璃ちゃんと取りに来て頂戴っ  
て」

「ああっ、了解……って、旅行って薫っちの帰郷について行ったのかよっ！ まあ俺たちも、明日は薫っちの部屋で合同インする予定だけどな」

「なにつ、弾美……お前そんな美味しい事を企んだのかっ！」

うっかりと弾美が口にした企画が、何故か反対側で話に興じていた弘一の耳に届いてしまって。物凄い地獄耳、場は結構他の者たち

の歓談で騒がしいほどだったのに。

その後は喧々諤々、矢面に立たされた弾美は滑った口に一抔の後悔。責めてる方の弘一と晃が、何故か涙目のおかしな構図。そんなに悔しいのかと、何故か責められてる弾美の心中に同情心が湧き起る。

村っちが機転を利かせて、入賞したらもつと豪華にお祝いしようと思えた男どもにセクシーアピール。なかなか堂に入ったのコントロール振りに、塩崎と弾美は笑顔も引き攣り気味。

簡単にほだされる弘一と晃は、それはそれで幸せそうだったり。

時間はあっという間に過ぎて行き、6時になろうかという頃には。学生たちは慌て出し、そろそろ家に戻らないと駄目な時間帯だと思にする。夕食が控えているので、スナックをつまむペースも控え目な面々だっただけに、外食の醍醐味を満喫出来なかったのは残念なところ。

それでも仲間とのオフ会は楽しかったし、このお店の独特な雰囲気も味わえたし。非日常というスパイスは、ちよつとした事で味わえるものだという事も再発見出来た。

ゲームの中だけでなく、こんな場所でもレアな体験が出来るとは。

会計は有言実行で村っちと塩崎が受け持つ事に。薫も払おうかと思つそり友達に尋ねたが、ここは任せておけとの頼もしい言葉。実際はどうか分からないが、塩崎もまた呼んでと不満のなさそうな顔付きである。

メンバーたちは、ここでもやっぱりご馳走になったお礼を口にして。門限のある女子たちは、やや早足で岐路につく模様。薫は美井奈を送って行くので、店の前で別方向に。

少女と一緒に皆に手を振り、また今度と爽やかに別れを告げる。

弾美達パーティにとっては、限定イベントの進行があるのでまた今夜という事でもあるけれど。茜と静香の早足に合わせて、学生組も急ぎ足で住宅街のゆるい坂道を登り始める。

夕暮れが地上に降り注ぐ頃には、弾美と瑠璃も自宅の玄関をくぐって遅い散歩の打ち合わせ。犬達が、いつにも増して飼い主に抗議模様なのは仕方が無い事だろう。

二人の幼馴染みは、大急ぎで着替えて玄関口で再合流。

「マリモの店長が、バイト代くれるから寄ってくれて。散歩のついでに寄ろうか？」

「ああ、そっか。それじゃあ……ドックフードとか買い足しておきたいなあ。でも今の時間だと、あんまり話し込めないよね、平気かな？」

「そんなに話し込む必要も無いだろ、店長も仕事なんだしさ。さつさと戻る口実があった方が、むしろいいんじゃないか？」

それもそうかと、ちょっと薄情な少年少女。頑張りの割には報われない評価のマリモの店長、そんな性格なので仕方が無いとも言えるけど。弾美は家から引くタイプのカートを持ち出し、重たいペットフードの買い込みに準備万端。

何しろお隣さんのと合わせて、大型犬2匹分の買い込みである。担いで帰ろうと思ったら、ちょっと大変な事になってしまふのは体験済み。春休みには配送のバイトもしていた身なので、そこら辺の事情は良く分かっている。

店長も実は腰痛持ちで、くどい位にそんな話は耳にしている二人である。

散歩のルート変更には、2匹の兄弟犬は渋々の同意。それでも駆け足で道を進む姿は、全く行き先の迷いは無い感じである。マリモにも、その隣の動物病院にも、二人と2匹は何度も通った事がある

ので当然かもだけど。

それでも一行が店に辿り着いたのは6時半くらい。瑠璃は母親宛にメモを残しておいたものの、遅い時間の外出には少しだけ後ろめたさを覚えている様子。

それでも店長は上機嫌で二人を迎えてくれて、寛いでくれと言わんばかり。時間的に、ゆっくりしている暇はないと、すかさず牽制を入れる弾美の読みはばっちり。

店内はほどほど混んでいるのに、相変わらずお客は放っておく方針らしい。

「村重さんの伝言が届いたみたいだね、良かった。ええと、こっちが津嶋さんの、こっちが弾美君の5月分のバイト代、二人とも、有り難う！」

「こちらこそ、有り難うございます。ついでだから、ペットフードとか買って行きますね、店長さん」

「有り難う、店長。夕食の時間があるから長居出来ないけど、限定イベント終わったら、ゆっくり顛末を話しに来るから」

「限定イベント終わったら、すぐに中間テストが始まっちゃうよ、ハズミちゃん。あつ、その前に茜ちゃんと静ちゃんのピアノ演奏会があるんだった」

瑠璃にとっては、店長に限定イベントのあらましを言って聞かせるより、友達の演奏会の方が大事なのは当然なのだけど。どこまでも放っておかれる体質の店長は、ちよつと寂しそう。

瑠璃が品物を選びにレジ前を去ってしまうと、犬たちもそれに追従の構え。弾美は店内の客の流れをチェックしつつ、少しくらいなら話し込んでも大丈夫と判断して。

寂しそうな店長に、地上エリアで廻った場所をかいつまんで説明してあげる。

「葉っぱを8枚集めながら、クエストエリアとか遺跡エリアとか、フリーエリアを探索するんだけどさ。裏エリアなんかも存在してて、まだまだ半分も廻れてないんだよね。ライバルとの差がどれだけあるか分からないし、取り敢えずは楽しみながらクリアして行くつもりだけだ」

「へえっ、社会人のギルドから流れて来る噂では、今回は自分たちみたいに、じっくり腰を落ち着けて攻略しているパーティが有利だつて言ってるみたいだけど。僕はそっちにも在籍してるから、今回上位に入るのは案外社会人チームかもつて思ってるけどなあ」

「ギルドを掛け持ちなんかして、節操がないな店長。確かに今回の限定イベントは、勢いだけでは攻略が難しい感じだけど。順位をどうやって付けるかが不明だから、有利不利は何とも言えないかもなあ」

弾美の言葉にも、店長は大して感銘を受けるでもなく。どちらにせよ、自分はもう資格を失ってるので関係のない事だと肩を竦める素振り。大きな体躯だけに、その動作は少しコミカル。

ところで店長のように、ギルドの掛け持ちしているキャラは意外と多いとの噂。ギルドによっては、活動時間に大幅なばらつきが生じてしまつて、それを緩衝する為でもあるらしいのだが。

例えば夜の8時から12時までしか人が集まらないギルドがあるとして。週の半分も、その時間に自分が入れなかつたら、やっぱりそれは寂しく感じてしまう。

それなら深夜過ぎに活動するギルドとか、夕方に活動するギルドとか、はたまた知り合いに誘つて貰つたギルドと掛け持ちするのも悪くはないという考えなのだが。

それを実践している人は、少なからずいるらしいのだ。

それはともかく、瑠璃が品物を選んでしまつまでに、他にも色々二人で世間話を交えたりなど。それから店員割引をして貰つて、

品物を数点購入。貰ったばかりのバイト代は、すぐさまペットフードや何やらに変化する。

それをキャリーカートに乗せてしまつて、岐路に着こうと店長に別れの挨拶。合計が20キロ以上の荷物は、引くのも割と大変だったり。力持ちの犬たちに引かせたいとか、犬糞にコイツ等は適しているのかとか、帰りの会話も他愛ないものだったけど。

食事を済ませたら、素早くインまでの準備を済ませないと、もう時間が無い事に気づく二人。

マリモの店長との会話で、弾美が一つ気になった点があったんだけど。さっきまで居酒屋風のお店でオフ会をしていたのだと、弾美が店長に報告をした時に。

羨ましそうな店長がポツリと漏らしたのは、自分もかなり前にギルドのオフ会に参加した時に。前回の限定イベントの優勝者が、確か同じ席にいたとの事。

何でそうなったのかは定かではないが、とにかくギルマス同士が知り合いだったらしくて。大学生のその優勝ギルドのリーダーは、確かにハヤトという名前だったとか。

食事を終えて風呂に浸かりながら、弾美はこのハヤトなる人物を勝手にライバル候補に指名する事に。何事も、目標が明確でないと弾美は盛り上がりがないタイプなのだ。

目を付けられた見知らぬ相手からすると、ちょっと気の毒な話ではある。

初めてのスタメンでの練習試合に負けてしまつて、内心落ち込んでいた弾美だったけど。新たな目標に切り替えて、自分を鼓舞するのも弾美ならではのやり方。

風呂上りに、気分も疲れた身体もリフレッシュしつつ。そろそろゲームにインする態勢を作っておかないと、リーダーなのに集合時間に遅刻してしまつ。



他のメンバーは、女性だけあって時間にはやたらと律儀なのだ。

お馴染みの集合時間には、ちゃんと全員がインして雑談に興じているいつもの風景。話題はやっぱり、夕方のオフ会の感想とか明日の合同インについての打ち合わせとか。

女性陣はかしましく、明日の準備などを計画中らしい。薫がやたらと、狭いし綺麗じゃないから期待しないでねと連呼しているのが気になるのだけど。結構朝の早い時間なのは、昼から大学内を案内して貰うため。

そのために、午前中に限定イベントの攻略を終わらせてしまおうという目論見なのだけど。休日を一日遊び倒してしまおうという、子供たちの熱意も見え隠れしているよう。

薫としては、パーティに馴染む絶好のチャンスと言えなくもないのだが。特に最年少の美井奈との確執も、最近はようやく薄らいで来た感じもあるので。

そんな事を思いつつ、ただしこちらにも部屋の事情などある訳で。

『部屋がなかなか片付かなくて、どうしようって悩んでる所なの。一応、明日早起きしてスペース作ってみる予定ではあるんだけど』  
『そんなに狭い部屋なんですか、薫さんの入ってる寮って。時間があれば、お掃除とか手伝うんだけど……』  
『お姉ちゃまは甘やかしさんですよっ！ 部屋の掃除なんて、基本中の基本じゃないですかっ！』

小学生に諭されて、初っ端から意気消沈の薫だったけど。それでヤル気も注入されたようで、何とか明日は全力でメンバーをもてなしますと、新たに決意の固まる年長者。

そこまで気持ちを入める問題ではないだろうと、弾美などは思うのだけ。同級生の部屋に遊びに行くと言っても、片付けるのに半日待ってくれと返事をする者などまずいない。

女子寮を借りているとの話だが、その辺がネックになっているのだろうか？

とにかく、もう決まってしまった合同インの計画だ。出来るならば、そのままスムーズに進めてしまいたい。サブ行事の大学見学など、弾美だけでなく皆が楽しみにしている事なので。

明日の9時に、大学の正門前に集合という事で全員に通達済みである。もてなし役の薫に対しては、来なかったら皆で押しかけるぞと脅しを掛けるのも忘れない弾美だったけど。

逃げはしないよと、薫はやや冷や汗まじりの返答振り。

『うつつ、ちょっと気が重いけど部屋を片付ける良い機会かなあ？

よしっ、気を取り直して今日の冒険頑張ろうっ！』

『そうですねっ、頑張りましょう。買った薬品配るから、みんなどこにいるか教えて』

『ここです、お姉ちゃまっ！ 今日はどこを攻略するんですか、隊長？』

それを受けて、今まで巡った場所と行ってない場所を、頭の中で探り始める弾美。時間縛りがあるので、なるべく効率的に攻略を進めたい所ではあるのだが。

そんな事を考えつつ、取り敢えずはメンバーの現状チェック。

先日29にまで上がったハズミンだが、皆の厚意によって竜の宝珠と複合スキルの書を貰う事となった。それによって覚えた魔法の《竜人化》と、スキル技の《ドラゴニックフロウ》は、もの凄いレ

アな存在に違いないのは確か。

久々の武器の交換と共に、胴装備と盾の交換で防御力も格段のアップを見せた。見た目がなり変わったが、タゲ取りキャラ的には頼りになる成長振りである。

ちなみに新スキルの《上段斬り》は、しばらく魔法を唱えられさせなくさせる技。魔法がウザい敵には良いかも知れない。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：29

取得スキル : 片手剣60《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

《複・トルネードスピン》

《下段斬り》 《種族特性

吸収》 《攻撃力アップ2》

《上段斬り》 《複・ドラ

ゴニックフロウ》

: 闇52 《SPヒール》 《シャドータツ

チ》 《闇の断罪》

《グラビティ》 《闇の腐食》

: 竜10 《竜人化》

: 風23 《風鈴》 《風の鞭》 : 土2

3 《クラック》 《石つぶて》

種族スキル : 闇29 《敵感知》 《影走り》 : 土10 《防

御力アップ+10%》

装備 : 武器 石割りの剣 攻撃力+19、防+4 《耐久10 / 10》

: 盾 龍鱗の盾 耐ブレス効果、防+18 《耐久

15 / 15》

: 筒 大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+

5%

: 頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、

HP + 25、防 + 15	：首	鬼胡桃のペンダント	HP + 8、体力 + 2、防 + 6
防 + 3	：耳1	砂塵のピアス、土スキル + 3、体力 + 1、	
+ 2	：耳2	遺跡のピアス	器用度 + 1、HP + 5、防 + 2
18	：胸	龍鱗の鎧	耐プレス効果、体力 + 4、防 + 5
HP + 25、防 + 15	：腕輪	暗塊の腕輪	闇スキル + 5、土スキル + 5、
防 + 5	：指輪1	サファイアの指輪	腕力 + 3、SP + 10%、
	：指輪2	古代の指輪	体力 + 1、防御 + 5
防 + 8	：背	砂嵐のマント	風スキル + 3、敏捷度 + 4、
4、HP + 15、防 + 8	：腰	獅子王のベルト	ポケット + 2、攻撃力 + 2、防 + 10
2、防 + 10	：両脚	魔人の下衣	攻撃力 + 3、体力 + 2、腕力 + 5、HP + 25、防 + 10
	：両足	暗塊のブーツ	闇スキル + 5、土スキル + 5、HP + 25、防 + 10
ポケット(最大8)	：中ポジション		：中ポ
ーション	：闇の水晶玉		：中ポ
	：中ポジション		：万
能薬	：万能薬		

ベルトや指輪の交換で、細部に少しずつ変更のあったルリルリだ

が。今回はこれと言った大きな成長も無く、他のキャラに譲った形となった。昨日はレベルアップもしなかったし、色々譲り過ぎた気もする結果となってしまったかも。

それでも装備ではバトルグローブも貰える事となって、ハズミンからお古の盾も回って来た。防御力も見えた目も結構様変わりを見せたのだが、やっぱり黒いタキシードは悪目立ちしてしまう。

当分はからかわれるのを覚悟しつつ、でもちよっと格好良いかもと思いはじめてる瑠璃であった。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：27

取得スキル : 細剣44《二段突き》 《クリティカル1》 《複・アイススラッシュ》

《麻痺撃》 《幻惑の舞い》

: 水50《ヒール》 《ウォーター

シエル》 《ウォータースパア》

《ウォーターミラー》 《波紋ヒ

ール》

: 光30《光属性付与》 《エンジェルリ

ング》 《ライトヒール》

: 氷30《魔女の囁き》 《魔女の足止め》

《魔女の接吻》

種族スキル : 水27《魔法回復量UP+10%》 《水上移動》

装備 : 武器 戦闘ネコの細剣 攻撃力+15、敏捷度+2、MP+8《耐久12/12》

: 盾 豪華な大盾 体力+4、防+12《耐久8

/8》

: 筒 大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+

5%

: 頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+

5、MP + 25、防 + 8  
     : 首            サファイアのネックレス    腕力 + 3、SP  
 + 10%、防 + 5  
     : 耳1            天使のピアス    光スキル + 3、知力 + 2、  
 MP + 8、防 + 3  
     : 耳2            流水のイヤリング    水スキル + 5、氷スキ  
 ル + 5、MP + 25、防 + 5  
     : 胴            タキシード    ポケット + 2、SP + 10%、  
 MP + 15、防 + 10  
     : 腕輪          バトルグローブ    攻撃力 + 3、HP + 8、防  
 + 12  
     : 指輪1          光の特級リング    光スキル + 4、HP + 15、  
 攻撃距離 + 4%、防 + 4  
     : 指輪2          プラチナの指輪    腕力 + 3、HP + 15、攻  
 撃速度UP、防 + 4  
     : 背            クモの巣のマント    HP + 7、MP + 7、  
 防 + 7  
     : 腰            複合素材のベルト    ポケット + 4、器用度  
 + 4、MP + 8、防 + 6  
     : 両脚          流水のスカート    水スキル + 5、氷スキル +  
 5、MP + 25、防 + 10  
     : 両足          ゴゲン鋼の戦靴    体力 + 2、HP + 6、防  
 + 10  
 ポケット(最大12) : 小ポジション : 中ポジション : 中エー  
 テル : 水の水晶玉  
 能薬            : 闇の水晶玉  
                 : 中ポジション    : 中エーテル    : 万  
                 : 中ポジション    : 大エーテル    : 中  
 エーテ            : 万能薬

昨夜の最終ドラゴン戦の結果、27にレベルアップを遂げたミイナだが。フリーエリアから集落への冒険によって、新たな隠し装備らしき妖精シリーズをゲット。

そのせいかどうか、覚えた魔法は《風の癒し》と《フェアリーウィッシュ》という、強力な支援系の効果を発揮するものだった。特に光魔法の《フェアリーウィッシュ》は、使い次第では強力なサポート力を揮いそうである。とは言え、MPはどちらもそれなりに必要なのだが。

弓術の複合スキル技の《スクリユーアロー》も、本人の活躍の場を広げるものになりそうな気配がする。使い過ぎるとタゲが離れなくなるが、《フェアリーウィッシュ》と一緒に使えば、ソロでのキープ&撃破も夢ではない。

装備によるSPの上昇で、連続スキル技使用も可能になったミイナ。フィニッシャーとしての立場も固まりつつあるが、更に矢束や修繕費にお金が掛かると言う弱点は酷くなったとも。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：27

取得スキル : 弓術40《みだれ撃ち》 《近距離ショット1》

《攻撃速度UP1》

《貫通撃》 《複・スクリユー

アロー》

: 光41《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》 《フェアリーウィッシュ》

: 風20《風の陣》 《風の癒し》 :

水10《ヒール》

: 雷26《俊敏付加》 《俊足付加》

種族スキル : 雷27《攻撃速度UP+3%》 《雷精招来》

装備 : 武器 大樹の長杖 攻撃力+11、知力+3、MP+20《耐久12/12》  
 : 遠隔 雷鳴の弓矢 攻撃力+17、器用度+4、敏捷度+4《耐久12/12》  
 : 筒 貫きの矢束 攻撃力+14  
 : 頭 船長の帽子 腕力+4、SP+10%、HP+5、防+10  
 : 首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP+10%、防+5  
 : 耳1 血色のピアス 耐呪い効果、HP+10、防+2  
 : 耳2 金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2  
 : 胴 妖精のドレス 光スキル+4、風スキル+4、MP+20、防御+20  
 : 腕輪 星人の腕輪 光スキル+2、闇スキル+3、MP+8、防+8  
 : 指輪1 雷の特級リング 雷スキル+4、器用度+4、攻撃速度UP、防+4  
 : 指輪2 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、防+5  
 : 腰 複合素材のベルト ポケット+4、器用度+4、MP+8、防+6  
 : 背 砂嵐のマント 風スキル+3、敏捷度+4、防+8  
 : 両脚 妖精のスカート ポケット+2、光スキル+3、風スキル+3、防御+12  
 : 両足 戦闘ネコの長靴 敏捷度+2、MP+6、防+10  
 ポケット(最大9) : 小ポジション : 中ポジション : 中



ポーション                   : 万能薬                   : 万能薬  
                                  : エーテル                   : 中エーテル  
                                  : キングのカード

レベルUP果実と、真正銘のレベルアップにより、27になったカオルだが。長い事決定力不足に悩んでいたが、武器の交換と新スキル技の《貫通撃》の取得により、ようやく削り力の大きな飛躍へと漕ぎ付けた次第である。

さらに炎の宝珠の使用で、いきなり《炎のプレス》という範囲魔法を取得した形になり、パーティ的にも大助かりである。何しろ昨夜のドラゴンとの激戦で、範囲攻撃アイテムを綺麗に使い切ってしまったのだ。

ただ、カオル的にはMPの少なさは気になるところ。プレスの威力を上げる為にも、炎スキルを伸ばそうかと密かに思案中な年長者である。

名前:カオル                   属性:風                   レベル:27

取得スキル                   : 長槍60 《二段突き》 《攻撃力アップ1》 《

脚払い》 《石突き撃》

《クリティカル1》 《貫通撃》

: 炎28 《炎属性付与》 《炎のプレス》 :

雷15 《俊敏付加》           : 風13 《風鈴》

種族スキル                   : 風27 《回避速度UP+3%》 《魔法詠唱速度

+6%》

装備                   : 武器                   赤龍の大槍 攻撃力+32 《耐久15/15》

: 筒                   絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭                   迅速の兜 炎スキル+4、雷スキル+4、

器用度 + 2、防 + 7	：首	進みがちな懐中時計	SP + 10%、攻撃
速度UP、防 + 4	：耳1	サファイアのピアス	腕力 + 2、SP + 1
0%、防 + 3	：耳2	銀のピアス	器用度 + 2、HP + 4、防 + 2
2、防 + 14	：胸	超ブニヨンの赤鎧	火スキル + 3、腕力 +
腕力 + 2、防 + 7	：腕輪	迅速の腕輪	炎スキル + 4、雷スキル + 4、
防 + 4	：指輪1	迅速の指輪	炎スキル + 3、雷スキル + 3、
防 + 7	：指輪2	遺跡のリング	器用度 + 2、HP + 5、防 + 3
4、防 + 7	：腰	迅速のベルト	ポケット + 3、器用度 + 2、
御 + 7	：背	迅速のマント	炎スキル + 4、雷スキル +
+ 7	：両脚	迅速のスボン	ポケット + 2、腕力 + 2、防
	：両足	迅速のブーツ	腕力 + 3、器用度 + 3、防
ポケット(最大12)	：中ポジション	：中ポジション	：
万能薬	：万能薬		
	：中エーテル	：聖水	：中ポジション
	：中エーテル	：中ポジション	：中ポジション
	：中エーテル	：クイーンのカード	：中ポジション

ドラゴンの秘宝とレベルアップ果実の取得で、パーティ的にも大いに強運が舞い込んで来た前回の冒険結果だったけど。どちらかと言えば、全員のレベルが均等にこなれて来たのが嬉しい変更点かも知れない。

特に一人だけレベルの低かったカオルの追い付きによって、前衛として頑張れるHPの値に。風種族は元々前衛に向いている種族なので、その辺は心配は要らないとも言える。

SPこそ少ないが、武器を振るう回転速度はかなりのものなのだ。範囲魔法も覚えて、存在感が途端に出て来た前衛の片翼に。前衛の成長は、つまりは後衛の安心感に繋がる訳で。

美井奈も安心、さらには瑠璃も後衛に徹する機会も出て来るかも。

強敵相手の場合には、色々とフォーメーションを選べる事が可能になって来るかも知れない。とにかくこれから先のエリアも、一筋縄では行きそうもない気配がブンブンである。

パーティー丸となって、これに対峙しなければ。

そんな訳で、物語は後半の冒険編に続くのであった。

## 17・5 迅速装備取り！（前書き）

昨日は結構な土砂降りだったけど、今日は暑すぎもしない感じの快晴ですかね。名古屋からの友達のメールでは、向こうは既に35度超えの真夏日よりだとか……。

今年の夏も、暑くなりそうですね。

何となくヤル気も出ないまま、モバゲーなどしつつ午前中を過ぎましたけど。その合間に、投稿作業もしなくちゃと気も急いでみたり。

午後からちょっとだけ出掛ける予定ですが、そんな事している内に短い休日も終わっちゃうんですよ。せめて休みが2日あれば、遠出したりと気分もまぎらうのにねえ。

憂鬱が頭から、離れそうに無いっ（苦笑）。

物語の方は打って変わって、楽しい遊園地モードだったりしますけど。最近は近場の行楽スポット、軒並みいつの間にか姿を消しているパターンが多い気が。

キャラが裸でうろつき回るのは、ネット内では間々あることだったり（笑）。ジョブチェンジの度に装備が外れるので、某FFでは良くある出来事でした。さらにレベル制限のエリアに行く時には、競売所の前で裸で面白い物をしてみたりと（笑）。

某GFでは、クマさんプリントのパンツが有名でしたね（笑）。

その他にも、笑える敵や笑えない特殊能力の敵が目白押し。弾美達の新装備ゲットや、新スキルのお披露目も盛りだくさんの章となっております！

それでは、ごゆるりとお楽しみ下さい

## 17・5 迅速装備取り！

「今日はどこに行くんだっけ？ 昨日取れなかった木の葉の回収かな？」

「何かそれも間抜けだな……昨日いっぱいメダル出たから、裏エリア行こうか！」

「いいですねえ！ 今日は誰の装備取りですか？」

「あれ、そっち行くの？ あちこちに行き残しがあるのに……まあ、忘れなければいいかな？」

瑠璃の言う行き残しとは、遺跡エリアの木の葉はもちろん、フリーエリアとタウロス族の集落のトリガーNM。更には月の鍵のクエストエリアの未踏の地とか、指輪トリガーなどなど。

トリガー系は、早急に行かなくても別に逃げはしないのだが。戦えば必ず、何かは良いものが貰えるのも分かっているのだし。先に処理しても悪い事は何も無い訳でもある。

しかし、弾美の考えは完全に別のよう。ノリの方を大事にしている感じに見受けられる。

弾美の軽いノリで、完全にパーティは裏エリアに挑む考えの虜になっちゃったようだ。何しろ前日の熾烈な冒険の結果、10枚以上金のメダルを入手出来たのだ。

団体で闇市まで移動して、瑠璃が入場キップを購入する。弱い順番で行くと、今日は薫だと弾美が口にする。それなら迅速装備になると、瑠璃が真剣に考え始める。

何しろ、裏エリアに入る前に謎解きをしなければならぬのだ。

「迅速装備取りはどんな情報だっけ、薫さん？」

「んと、迅速装備は視えても遭えぬ朧なる土地に……かな？」

『は、謎掛けですか。朧と言えば月夜ですかねえ、歌の歌詞ですけど。確かお供え物に、月の宝珠って無かったですか？』

『冴えてるねえ、美井奈ちゃん……朧って漢字、月と龍で出来てるの知ってた？』

『おおっ、さすが瑠璃だなっ！ 月と言えば兎だし、中国の龍は前脚に宝珠を持つてるもんな。視えても遭えぬ土地も月の事で確定かな？』

皆の意見は呆気なくまとまり、東南の兎と竜の方角に月の宝珠をトレードする事で決定。昨日の戦闘を踏まえて、ポーシヨンとエーテルの買い込みは多めに。

インの準備が出来た所で、弾美が代表してお供え物を台座にトレード。モニター画面が暗転したかと思ったら、パーティーは無事にエリインに成功した手心えを得る。

キャラはそれぞれ、暗闇の中で平和なメロディを聞いていた。遊園地やサーカスでかかっているような音楽で、そのうち小柄なぬいぐるみが2体、視界に入ってくる。

顔の部分だけやたら大きな動物の覆面着ぐるみで、下は普通の子供服に見える。キャラ達の周囲で音楽に合わせて踊るそいつ等は、全部で8体。

一人につき2体の着ぐるみが、やたらとキャラ達の周辺に接近して来る。踊りの調子はそのままで、触るような身振り手振り。暗闇の中で動けないまま、やがて視界に新たな変化が。

今度はサーカス団長のような、小柄でコミカルな3頭身キャラが出現。2体のノツポのピエロを従えるように連れており、仰々しい口調で言葉を発して来る。

目の前で踊るキャラの特徴を覚えたですか？ これから始めるのは、生死の掛かった鬼ごっこであります。ただそれだけでは、

必死になつて頂けぬ事態を想定しまして……。

あなた方の武器と防具を、幾分勝手では御座いますが。一時こちらに、預からせて頂く事と相成りまして。取り返したいと望むならば、8人の鬼役を見事確保なさいませ。

それでは、遊園の地での鬼ごっこを楽しみ下さいますよう。

サーカス団長とピエロの二団は、説明を終えるとそれぞれ一礼して退出して行く。2組の盗人共は、キャラ達を突き飛ばしたと思つたら、やっぱり視界から逃げ出して行つた。

気付いたら、一同のキャラは操作可能な状態に。長い前振りだったが、気になるキーワードは鬼ごっこと武器と防具を取り返せという言葉。遊園地やピエロは、この際どうでも良い。

ふと弾美が、違和感を感じて自分のキャラの格好を確認すると。何と、見事に素っ裸にひん剥かれていた。周りのキャラも全て裸の格好で、駅のホームに突つ立っている。

駅には古い型の列車が、発車準備の様子で佇んでいた。

『きゃ〜っ、みんな裸じゃ無いですかっ！　そ、装備どこですかっ！？』

『盗まれたっ？　ちよっ、酷すぎる〜っ！　戦闘になったらどうするのよっ！？』

『……恥ずかしいなあ。うわあ、本当に装備欄スツカラカンだ……』

女性陣は、それぞれ微妙なりアクション。弾美にしても、限定イベントに最初にインした時に、レベルが1に戻された時以来のショックを覚えてしまう。裸で戦闘など、そもそもあり得ない。

慌てて予備の武器防具を装備しようとした一同だが、ことごとくキャンセルされる仕様を知らされるのみ。オリジナルを取り返すまでは、下着姿でいると言う事らしい。

血のにじむ努力をして集めた装備を取り戻そうと、一行は仕方な

く犯人を視界内に捜し求める。完全に相手のシナリオ通りに動くのは業腹だが、そんな不満も言っていられない。

真つ直ぐ進むと駅のホームだが、着ぐるみ犯人が行けるとしたらそこしかない。

駅員さんがいるにもかかわらず、一行は堂々とホームに入って犯人探し。列車の窓から手を振る着ぐるみの群れを見つけると、それぞれの怒りも頂点に。

列車の入り口を探すとメンバーに通達し、一番後ろの搭乗口を発見するや否や、全員で勢い良く列車に乗り込んでしまう。無論、搭乗切符など持っていないのは皆一緒。それを知った怒れる駅員さんが、メンバーの後を追って来て。

得体の知れない鬼ごっこは、混迷の度合いを深める結果に。

『駅員さんが追って来てるけど……お金払わずに、列車に乗っちゃったせいだ〜！』

『裏エリア入る時に、金のメダルしこたま払ってるから問題ない。文句言う方がおかしい……』ってか、装備盗むって設定からして頭どうにかしてるぞっ！』

『う〜ん、そう言われれば、そうかなって思っちゃいますねえ。ところで、これはどこに向かっているんでしょう？ 列車、走り出しちゃってますけど』

美井奈の口にした懸念は、至極もつとである。走り出した列車は、綺麗な夜のイルミネーションの中をゆっくりと走っており、まるで観覧車のよう。レトロな造りの内装には、NPCだか何だか結構な数の乗客が。

中には紛らわしい着ぐるみの子供がいて、見分けるのもプレイヤーの腕次第のよう。瑠璃がそのうち、1体の窓の外を眺める着ぐるみの後ろで立ち止まった。



しばらく悩みつつも、どう接すれば良いのか考えあぐねている様子。

『うーん、この子が犯人の一人だと思うんだけど……どうすればいいのかな、ハズミちゃん？』

『鬼ごっこだろ、タッチ……は無理だから殴れ！』

『殴ろうにも、瑠璃ちゃんも裸だから武器持ってないよ？ あっ、

素手パンチは出来たかな、それか魔法を撃ち込むか？』

『今出来る攻撃選択肢だと、魔法くらいしかないですねえ』

その言葉を間に受けた薫が、新魔法の《炎のプレス》を選択する。瑠璃の推理は当たっていたようで、犯人キャラは見事宝箱に変化。開けると武器とポーションの中身が丸ごと戻ってくる。

報告に欢喜していた一行だが、薫の不用意な範囲魔法にNPCも傷付き走り回っている。それを聞きつけたのだろう、追い掛けて来た駅員さんが片手に巨大切符切り鋏を持って参上。

いきなり戦闘に持ち込まれた一同は大パニック。

武器を持っているのは瑠璃しかない。そうは言っても下着姿のまま、戦闘員という雰囲気でも無いのは確かなのだけれど。文句を言っているも始まらず、皆が魔法で支援する中、変てこな戦闘風景が出現する。

幸い駅員さんの能力は、それ程強くは無かった様子。弾美の《シヤドータッチ》と美井奈の《ホーリー》の手助けもあり、程なく瑠璃の細剣に倒される運びとなった。

一同何故か、いたたまれない雰囲気。これではまるで、キセル強盗だ。

『はあっ、倒しちゃいました、駅員さん……これで良かったんですかねえ？』

『当然だ、障害は全て排除する！ それより、ここまでで分かった事を整理しようか』

『んと、NPCは攻撃したら駄目とかですか？』

『ペナルティ、当然あるみたいね、ゴメン！ 範囲魔法使いにくくなっちゃった、素直に素手殴りが一番いいみたいかなあ？』

パーティは前の車両へと、どんどん移動しながらNPCチェック。綺麗な夜景を楽しんでいる暇などは全く無い。レトロの車内には隠れる場所など無いので、その点は安心なのだが。

こんな展開になるとは予想もしていなかった。自分の装備を取っていった犯人のキャラ衣装を、おぼろげにしか覚えていない者がパーティの中に数人、と言つかほとんど。

着ぐるみの動物顔はともかく、シャツやズボンの色柄となるとあやふやである。

『犯人は、無駄な抵抗しないのかな？ でも、逃げてる時点で厄介だよなあ？』

『最初はサービスなのかもな……ここにも、後ろ向いて隠れてるつもりの奴いるぞ？』

この帽子を被ったコアラには見覚えがあると、薫が発言。下の衣装も、だいたいこんな感じだったと証言が得られたので。瑠璃が思い切って殴り掛かると、ポンと音をたてて宝箱に変化する。

どうやら何とか正解を引いたようで、これで薫も武器持ちになった。ちよつと余裕が出て来たところで、列車は止まる気配を見せ始める。一行が見守る中、広いホームに滑り込むレトロ列車。

止まるや否や、着ぐるみ犯人が改札口に列を成して走りこむ。

『シルクハットを被ったサル発見、捕まえてやるっ！』

『えっと、私のは何でしたっけ？』

『お母ちゃんに訊けっ！ 出口どこだっ？』

搭乗口は前後に1箇所ずつしかなく、大慌てて先頭の出口に駆けつけるパーティ。1両分の差を開けられたが、急げは魔法の範囲には掛かるかも知れない。

ところが、改札口には仁王立ちの着ぐるみ駅員が2名。キリンとサイのぬいぐるみの頭部、下は普通の制服を着用しており、手には先ほどの巨大切符切り鋏を持っている。

ダッシュで無視する無賃乗車パーティの一团に、襲い掛かって来るのもある意味当然か。弾美は武器持ち二人にブロックを頼んで、ソロで犯人の群れを追いつめに掛かる。

外はまさしく、パレードの進行中。イルミネーションの広場には、ぬいぐるみの大きな群れが。

焦る弾美は何度目かの試行錯誤の末、ようやく《グラビティ》で目的の犯人の足止めに成功した。魔法は完全に立ち止まってからでない、詠唱が出来ないのだ。

そんな訳で、捉えられたのはたったの1匹。他はパレードの喧騒に紛れ込まれる結果に。弾美は自分の武器を何とか取り戻し、戦闘を手伝いに戻りながらそう報告しつつ。

外から見た女性陣の戦闘風景に、しばし絶句。

『何とか俺の武器、取り戻したぞ〜！ でも傍から見ると、素っ裸で戦闘してる姿って……もの凄い恥ずかしいなあw』

『傍から見なくても恥かしいよ〜w はやくこいつ等やっつけて、装備を取り戻さなきゃっ！』

『私の武器はまだですか？ MP使い切っちゃいましたっ！』

魔法で支援していた美井奈は、今は下着姿でヒーリング中。もっとも戦っている他の女性陣も同じく下着姿のだが。薫の風キャラ

は、ゲーム内でも炎キャラに次いで背が高くプロポーションも抜群である。

下着姿になると否応なく目立つ胸の膨らみには、健全な色香が存在している。薫本人の話になると、バストの大きさはともかく、色香の部分では負けているのが悲しい所。

弾美の参入で、ようやく戦闘にもケリが付き。然る後に、パレードの到達を一行は眺める事に。

『あれっ、パレードのステージ車に乗ってるのって、さっきの団長じゃない？』

『本当だっ、ピエロもいるねえ……今の格好じゃ、近付くのちょっと怖いなあ』

『着ぐるみ連中、パレードの反対側にいるみたいだな……ちょっと大回りして近付こうか』

unnecessary 危険には近付かないように注意しつつ、一行は弾美の目撃証言を頼りに犯人を追跡にかかる。反対側に回ると、観客の中に着ぐるみ姿がちらほら。

一同目を皿にして、必死に記憶と格闘する中。薫と美井奈が、それぞれ犯人らしき人物を見つけたと指し示す。まずは薫が自分を信じて、次いで美井奈も瑠璃に代わりに殴って貰う。

賑やかなパレード音楽は、一転してバトルBGMに変化を遂げ。殴られたNPC達は周囲をクルクルと走り出す。

『きゃっっ、間違っただけだ！ ゴメンっ、クマだと思ったんだけど』

『トラの着ぐるみ、間違いみたいですっ、済みませんっ』><

お母ちゃまも、記憶力には揺らぎが認められるようだ。間違いの

ペナルティは、もちろんお邪魔キャラとの強制戦闘。パレードのステージ車から、2体のピエロが飛び降りて来る。

1体は大きなボールに乗ってお手玉をしており、もう1体は火の輪を両手に構えている。それと同時に小さな着ぐるみの一団が、左手のアトラクションの建物にわつと逃げ込むのが見えた。

弾美はすかさず、美井奈に《俊足付加》を掛けてソロで追う様に指示を出す。犯人が見える内に、一人でも捕らえて装備を取り戻せればしめたものだ。

武器を持たない美井奈は、電光石火で魔法を唱えるとダッシュで犯人追跡に掛かる。

一方の戦闘組は、装備も無いまま強敵っぽいピエロ達に対峙。いきなりの玉乗りピエロの暴走で、瑠璃が轢き逃げされそうに。更にお手玉がパーティの頭上に降り注いだと思ったら、いきなり爆発してダメージを与えて来る。

奇襲に仰天したパーティが玉乗りピエロに集中していると、もう1体のピエロが火の輪を投げつけての攻撃を仕掛けて来る。狙われた薫は火の輪に締められ、持続ダメージと行動不能状態に。

何もしない内から大ピンチのパーティは、反撃のきっかけを探してあたふた。

『追いつきましたよ、わっ、ミラーハウスの迷路に入っちゃった！  
何とか1匹とりゃあっ！』

『無理せずに戻って来い、美井奈っ！  
ってか、こっちピンチだっ！』

『捕まえて宝箱出現っ  
あれ、私の武器じゃ無かったみたい…』

その瞬間、瑠璃の装備が戻って来て裸状態からの解放に。何よりMP量が急激に上昇して、戦闘にも少し余裕が。通信で美井奈にお

礼を言いつつ、瑠璃が皆に回復を飛ばす。

弾美が薫を解放している間に、装備の戻って来た瑠璃が火の輪ピエロを抑えに掛かった。玉乗りピエロは玉の操作が上手く行かないのか、戦場からフラフラ遠ざかりつつあったりして。

その隙を見逃さず、パーティは火の輪ピエロを総攻撃。反撃も許さず、1体目撃沈。

2体目の玉乗りピエロは、ほぼ自爆の状態。魔法を撃ち込まれると、玉から転げ落ちて勝手にダメージを受ける。挙げ句の果てには、恐らくは最後のドツキリ手段だったのだらう。

乗っていた大玉の爆弾に巻き込まれ、勝手に昇天してしまう。そして瑠璃は28レベルアップ。棚ぼたの出来事に、パーティも喜んで良いのか拍子抜け状態。

ちなみに、敵の装備のドロップも変なアイテムばかり。

ピエロ服    ポケット + 4、器用度 + 6、MP - 6、防 + 7  
ピエロ靴    SP + 20%、器用度 - 4、MP - 4、防 + 4

『おめでとうございます、お姉ちゃまつ……それで、何だったんですかねえ、今の？』

『戻って来てたのか、美井奈。ピエロらしい最後だったけど、ちょっと笑えないなw』

『お兄さんが戻って来いって言ったんじゃないですかっ！ それよ、早く鬼を追いましょ！』

『鬼ごつこの鬼は、実は私達の方なんだけど……泥棒と刑事って遊びの方が近いよねえ、ハズミちゃん？』

『確かにそうだな、んじゃ、泥棒を捕まえに行くぞ！』

一同はヒーリングも取らずに、美井奈の案内でミラーハウスの迷路へと場所を移す。既に犯人達の姿は見えないのだが、どこに抜け出たのかだけでも調べておかないといけない。

迷路を抜け出すのに時間が掛かるかと思ったが、案外簡単に裏へ  
と出る事が出来た。美井奈が途中まで、逃げた一団の足跡を覚えて  
いたのだ。お陰で時間の短縮は出来たのだが。

抜け出した場所の仕様には、ひたすら呆気に取られる一同。

『ジャングルのセット……？ 道もちゃんとついでるし、崖に続く  
道も用意されてるわね？』

『崖の道は、宝箱がわからさまに置いてあるねえ。外は夜だったか  
ら、ここは室内セットなんだね、きつと』

『いや、裏設定なんてどうでもいいから。いきなり道が二手に分か  
れてるし、瑠璃と美井奈で上の道頼む。魔法あれば、何とかなるだ  
ろ？』

天使魔法と妖精魔法の使い手達なら、万が一崖から落下しても平  
気だろうとの弾美の読みだったが。いまいち不安なのは、美井奈の  
装備が全く無いと言うのもあるし、美井奈のドジ振りももちろんあ  
る。

それでも、弾美と薫チームにしても回復は薬品頼りだし、装備も  
まだ盗まれたままだという不安材料の事欠かない状況である。罨に  
掛からなければ敵は襲って来ない事を前提としても、ちょっと怖い  
パーティ分けには違いない。

それでも歩みを止める訳にも行かず、二手に分かれての探索開始。  
瑠璃と美井奈組は右手に向かう坂道を登って行き、岩だらけの崖  
の道を慎重に探索する。着ぐるみ犯人の姿は見当たらないが、宝箱  
は道なりに設置されていて嬉しい限り。

箱の中には大ポーシヨンや風の水晶玉、炎の神酒に銀のメダルな  
ど、消耗品を中心に置かれている様だ。はしゃいだ報告を弾美達に  
飛ばすが、いよいよ道のりが高い崖の上に達すると、周囲の変化に  
細心の注意を払い始める。

崖の上には、半壊した廃墟とくねりまくって育った樹木と蔦のオブリエが。中央の空き地には大きな巣の上に卵が鎮座しており、その周囲に3人の着ぐるみ犯人が突っ立っている。

卵も犯人も、今の所リアクションは無し。

弾美と薫のペアは、真っ直ぐに進む手入れされた道をひたすら突っ走る。時折椰子の木の下にあるのは、やっぱり宝箱。こちらからも消耗品を入手出来るのは良いが、やがて大きな水音が響いて来る。気が付けば、流れの急な川辺と滝が。反対側へと渡る吊り橋はいかにも脆そうで、その中央に佇んでいる着ぐるみ犯人には余り近付きたくない状況ではある。

それでも装備を取り戻すには確認に行くしか無い。こちらも3人、どれが本物？

『トラと帽子トラとネコ発見、色はみんな黄色だな。見覚えあるのいるか？』

『こっちはクマとブルドッグとネコだね、薫さんクマだったけ？』

『お母ちゃまが、帽子被ってるトラっぽいそうだと言ってますが。』

確信は無いそうです（＜＞）

『クマの服が赤っぽかったら、当たってる確率高いようない……』

2組とも、外れたら相当なペナルティを受けそうで怖いと報告し合うのだが。迷うだけでは、時間を徒に消費するだけ。思い切って弾美の組から帽子トラにタッチ。

当たりだったとの報告は、美井奈から。武器が戻ってきたと大喜びの通信が。

勢いに乗った瑠璃チームも、卵を恐れずクマを捕獲。薫の装備が戻って来て、当たりの報告にホッとする一同。後は弾美と美井奈の装備をもった犯人のみだ。



探すのはこのエリアの出口と、探索し忘れの場所のチェックくらいだろうか。再び移動を開始する2組だったが、程なく弾美組は滝壺へと下る道を発見する。

瑠璃と美井奈のチームも、川の流れを発見して。川沿いに進めば合流出来るとの目論みは大当たり。ただし、パーティは滝の上と下での邂逅となつて。瑠璃が見つけた階段は、踏み外したらかなり怖そう。

階段と言うより、ただの岩の出っ張りだ。

『だから瑠璃達を崖の上の探索に回したんだよ。魔法掛ければダメージ軽減出来るだろ?』

『あつ、そうか! 試してみるね』

瑠璃が《エンジェルリング》を、美井奈が《フェアリーウィッシュ》をそれぞれ自分に掛け終わってから。そろそろと、ほぼ垂直の段差下りのスタートとなつただけだ。

結論を言うと、魔法はもの凄く役に立ったと言わざるを得ず。瑠璃は中程で浮遊状態が役に立ち、美井奈に至ってはかなり高い位置からの落下ダメージを軽減して貰えた。

弾美達が待つている場所へと、恥ずかし気に近づく美井奈。決して下着姿だからでは無いのは明らかだったり。

『俺の作戦は至れり尽くせりだよな? わざわざ証明してくれなくても良かったんだが』

『ええ……まあ、そうですね』

『じ、時間節約出来て良かったじゃない? それよりここに、丸太のポートあるんだけど』

『あゝ、これでここを脱出すればいいのかな?』

一行は多少警戒しながらも、四人でも充分乗り込める丸太のポ―

トに搭乗する。しばらくすると、勝手に岸を離れたボートは、流れに乗って下流へと進み始め。

両側に崖のそそり立つ岩ばかりの景色だが、それなりに楽しい渓流下りだった。スピード感や波の飛沫感ほリアルだったし、何より邪魔な敵が全く出て来なかったし。

安全に勝る快適さは存在しないと、パーティ皆の心からの言葉である。

ボートは、またも勝手に波止場を見つけて無事に一行を船旅の終点へ。まだジャングルエリアは終わりではないらしく、最後の道の両端に6本の椰子の木がそびえ立っている。

1本道は、エリアの終点のゲートへと続いているのだが、その前に選択は用意されていた。今度は宝箱の代わりに、6人の着ぐるみ犯人が立っており。良く見れば椰子の木の上には鈴生りの椰子の実ならぬ、サルやヤシガニなどのモンスターの群れ。

弾美はしばらく眺めた後に、自分の探している犯人はいないと断言。

『うーん、もう1人は確か……アライグマ?』

『俺のは豹だった、でもここにいる奴は違うと思う』

『アライグマも豹も、2匹ずついるね。難易度が上がってるみたいだよ?』

更には、外れた時のペナルティも凶悪になっている筈。6本の椰子の木に3体ずつ、出動待ちの敵を皆がなるべく見ないようにして美井奈の解答をひたすら待つ一行。

どうやら、母娘の秘密会議は終了したようだ。1匹の犯人前で、立ち止まるミイナ。

『これです……だと思えます! ファイナルアンサー?』

『いや、こつちに訊かれても……戦闘準備は出来てるけど、弾美君盾出来ないから私がタゲ取りメインで行くね?』  
『オツケ、いつでも来い!』

何故かパーティー同、外れ前提で陣形を構えているのが悲しい事実ではあるけれど。瑠璃はさり気無くフォローの言葉を挟みながら、自分もやっぱり戦闘準備。

美井奈母娘のファイナルアンサーは、どうやら正解の様子。宝箱の出現に、大盛り上がりの女性陣。先ほどまでの信用度から考えると、もの凄い手の平の返し方だけ。

本人さえ信賴していない記憶なら、それで丁度良い位なのかも。

ポーナスのように、他のNPCが宝箱に変化を遂げたのには驚いたが。木の上の敵も、いつの間にかやら姿を消していた。安心して宝箱を開けつつも、そろそろ最終戦の気配に気を引き締める一行。

美井奈が弾美に、写真を撮るからポーズを取れと言って来たのは屈辱だったが。装備を盗まれて素っ裸の姿を晒していたのは、先ほどまではみんな共々平等だった訳で。

怒鳴り散らすのも大人気ないと思いつつ、武器を片手に先を急ぐ素振り。

ゲートを抜けると、なお一層の夜景が一行を迎えてくれた。天井に飛来する観覧車の明かりは、まるでキャンバスに描かれた甘い夢の景色のよう。

イルミネーションの華麗さに、これこそ撮影する価値のある景色だと美井奈が呟く。確かにそうだ、裸のキャラをパパラッチするよりは数倍マシだろう。

気付けば、少し離れた暗がりに見慣れたキャラ達が立っていた。例の3頭身のサーカス団長が、2体の新たなピエロを従えて、佇んでいたと思ったら。

サツと手を上げ、スポットライトを要求。光の輪の中で、団長は高らかに宣言する。

遊園の地での鬼ごっこはお楽しみ頂けましたかな？ 8人の鬼役も残り1名、取り返すべき預かりモノも、後1つと相成りました……少しは必死になって頂けましたでしょうか？

さて、生死の掛かった鬼ごっこも、そちらの武器防具の関係で、多少の手加減を施していた訳ではありませんが。最終ステージでは、そんな野暮は言いつこ無しのデスバトルをご用意しました。

最後まで、命がけで盛り上げ役をこなしたく思う次第ですので良しなに……！

団長の合図と共に、後ろの立体セットにもパツと光が灯った。モンスターの巨大な顔が浮かび上がったが、それはどうやら張りぼてのよう。外見から察するに、何となく工事途中のビル現場に見えるのだが。

セットのモンスターの口の部分へと、身を翻して歩き出す団長。どうやらそこが入り口の様子。連れているのは、背の高い2体のピエロと、反対に背の低い豹の着ぐるみ犯人。

瞬間迷った弾美だが、無闇に突っ込むよりここは強化を優先。時間には取られたが、一団となって追跡に掛かる事に。

『私の遠隔武器が復活しますから、犯人は簡単に捕まりますよ！』  
『だけど、今回はちょっと様子が違う気がするよね？ 用心して行くっ！』

『そうだな、団長とピエロが今回はブロッカーなのかも。戦闘になっても慌てるなよ！』

了解との返答と同時に、一行は犯人を追って建物の中。ところが、敵が逃げ込んだのは建物の中では無かった。工事の基礎組みの

ような板組の、縦の迷路の中への誘い。

上って行くには階段を利用する他、資材運搬用の昇降機を使っても良い。常に動いている振り子を使わないと渡れない場所も、所々存在する。

要するに、簡易版のアスレチックエリアで鬼ごっこをしようと言  
う訳だ。

操作に難のある瑠璃と美井奈は、早くも弱気発言。保険にと、早くも自分達に天使魔法と妖精魔法を掛け始めている。弾美と薫は、さつさとのぼり口を発見して敵との距離を詰め始める。

敵の一団は、ずるい手口は使わずに普通に階段で移動中。こちらの知恵次第では、先回りも距離詰めも可能な仕掛けではあるようだが。前後をがちり、団長とピエロがガードしている。

今回のピエロは、鉄砲を持っているようだ。

『先に行ってるぞ。縦の構造だから、敵のいる場所良く見える。迷  
うなよ!?!』

『了解、他に敵はいないんだよね?』

『いないみたいね……弾美君、こっち行けばショートカットにならないかな?』

昇降機の乗り場までの道を発見して、そちらに進む弾美と薫。出遅れた瑠璃と美井奈は、一つ上の層にあったトロツコに乗って、端から端へと短縮移動。壁の陰に隠されていた螺旋階段を発見して一気に追いつく気配を見せる。

先に追いついたのは、何故か瑠璃と美井奈の弱気ペアだった。腰が引ける割には、装備回収すべく美井奈が犯人に矢を放つ。しかしその攻撃は、身代わりにとピエロが受けてしまう。

反撃の遠隔攻撃は強烈で、瑠璃共々の吹き飛ばしダメージを受ける結果に。

『あつ、危ない〜！ もう少しで落ちちゃうところでしたよっ！ お兄さんっ、作戦どうしましょ？』

『範囲で吹き飛ばしちまえっ！ 時間稼いだら、俺達ももうすぐ追いつくっ！』

『落ちないように、タゲが来たら安全圏に避難してみたら？』

弾美と瑠璃のアドバイスに、美井奈は俄然やる気になった様子。

範囲矢束に装備交換して、SPが貯まっているのを確認。《スクリユーアロー》で全員が吹き飛ぶのを確認し、嬌声を上げながら離れた場所にサツと隠れる。

範囲攻撃には、さすがにブロックも無駄だった様だ。目論見通りに、最後の犯人も宝箱に変わってしまったのだが、開けるには近付かないといけない。

瑠璃は近付くのが怖くて、1層下からの魔法攻撃でのヒット&アウェイの繰り返し。

それでも敵の一団は、守る者を失って、その場で臨戦態勢を取っている。遠隔での反撃を警戒しながらの攻撃で、ピエロの1体はもうへろへろ。

そこによくやく合流した弾美と薫が、階段をのぼり様に敵へと殴り掛かって行く。吹き飛ばししの反撃や、団長の鞭攻撃に苦しめられながらも、一瞬の隙を突いて、弾美が宝箱を開錠。

ようやく自分の装備を取り戻し、上機嫌でピエロの1体目と2体目を同時に屠るハズミン。そのままの勢いで、残った団長に刃が迫る。

団長は、もつと強敵仕様で粘りを見せるのかと思ったのだが。特殊技の鞭でのスタンプが多少ウザかった程度で、呆気なく昇天。一行は喜び合って、皆の装備の無事の返還を祝う。

ここまでだいたい40分程度、ヒーリングしつつも次の展開を皆で予想してみるのだが。果たしてこのまま上に進むべきなのか、それとも地上の別の建物に答えはあるのか。

案内人は倒されて、既に口のきけない身の上。ところが団長から抜け出た靈魂、ゆっくりと上昇を開始する。

『おおつ、これこそ案内人の正しき姿だな……仕事は最後まできつちりこなす美しさ！w』

『地獄への案内人だったりして……あつ、今の嘘。招かないでw』  
『それじゃ、上に向かいますしょうか。次はラスボスですかね〜？』

建物の屋上には、何の波乱も無く辿り着く一行。一転して無機質なコンクリ仕立てのフィールドは、広々として戦闘には持って来い。その場に、どこからとも鳴り響く馬の蹄と馬車の轍音。

宙を滑空して出現したのは、2頭だての馬車に乗った甲冑を着込んだ騎士だった。かなりの大きさなのは、幌付きの馬車のせいか。変わった点と言えば、甲冑の騎士の頭の部分は元の位置に無く、小脇に抱えている所だろう。

モンスター知名度も高い、亡霊の騎士デュラハン　はつきり言  
って強敵だ。

案内役の団長の亡霊が、けたたましく笑い声を発し始めた。それよりも、馬車がパーティを轢き殺そうと突進して来るのを懸命にかわす一行。引き返して来るかと思われた馬車は、後ろの幌部分をガチャリと外してしまい。操縦していた亡霊の騎士も馬車を降りてしまふ。

パーティがあたふたしている内に、なんと3部位へと分離してしまったフィールドのモンスター。最初に行動を起こしたのは、黒いチャリオット馬車だった。

軽くなった車体を生かしての、強烈なチャージを弾美に仕掛けて

来る。

避ける事は出来なかったが、ブロックは成功した弾美。1部位だけ突出したのを良い事に、各個撃破を狙って速攻でパーティで集中攻撃を浴びせ始める。

貯まっていたSPを惜しげもなく使用してのスキル技の連発に。チャリオット馬車は、得意の距離からの攻撃も俣ならず。再度チャリ用の距離を取る暇も無く、HPを半減させて行く。

黒馬達の単体特殊技も、弾美は丁寧にブロックして行く。フィニッシュは薫と美井奈の、ダブル《貫通撃》。もの凄い威力に、派手な演出で出現した敵は何と瞬殺される破目に。いい所の無かった相手に、瑠璃などはちよつと同情してみたり。

これではまるで、露払いの雑魚扱いである。

その出来事を、一体どのように感じ取ったのだろうか。ようやく大剣を抜いて、臨戦態勢で近付いて来たデュラハンだが。もう一人、空中で不穏な動きをしている人物が。

団長の亡霊は、騎士の後ろで停止している幌馬車に近付くと、仰々しくその扉を開け放つ。何をしているのかと思つたのも束の間、中からぞろぞろと出てくるゾンビの軍団にパーティは絶叫。

これを盛り上がりと認識しているのか、団長の行為に一同批難轟々。

『きゃ〜っ、何してくれるのっ！ デュラハンはただでさえ強いのにっ！』

『馬が簡単に倒れたんで、おかしいと思つたら！ これは不味いぞっ！』

『わっ、これは早めに止めないと、雑魚の群れは際限なく出て来るんじゃないでしょうか！？』

『だなっ、騎士は俺と瑠璃が抑えとくから！ 範囲攻撃手段のある、



美井奈と薫で馬車を早めに壊してくれっ！」

弾美の指示に、薫が素早く反応。近付いてくるゾンビに《炎のブレス》をお見舞いし、いきなりの範囲ダメージ。接近しての《二段突き》で、たちまち雑魚のゾンビ1体が没する。

美井奈も負けてはいない。遠隔の範囲矢弾を使用しての、惜しめない削り攻撃で薫を支援。MPは回復に残しておき、その内馬車の本体にもHPが存在するのを発見する少女。

元を断たないとゾンビの群れは減らないと察した美井奈が、スキル技の《貫通撃》を馬車に使用すると。馬車の本体はブルツと震え、かなり体力を減らしたよう。

雑魚を産み出す際にも、体力を使用しているようなのだが。そんな訳で馬車から吸血鬼登場。

装備盗難騒動に、弾美はすっかり忘れていた竜魔法の《竜人化》だが。MPも結構使用するので、雑魚にホイホイと使う訳には行かないのが実情。このこと言う場面での初の使用に、ハズミンの皮膚が見る見る鱗化して行く。

しばらく戦ってみて、防御力と腕力の上昇を実感する弾美だったが。敵も然るもの、両手剣の威力は並ではない。しかも、殴りながらの小脇の頭の魔法詠唱は、ほとんど反則である。

瑠璃に魔法潰しを頼むのだが、スキル技でも止まる確立は半々といったところ。近付くと呪いの散布や両手剣の範囲スキル技に巻き込まれるし、たまったものではない。

瑠璃の《エンジェルリング》の魔法はとっくに切れている。呪いが来るたびに使おうと思うのだが、弾美の回復も担う立場上、いきなりMPを空にする訳にも行かず。

魔法と呪いと両手剣の息を継がせぬ攻撃に、膠着状態のラスボス戦である。

馬車本体からの吸血鬼の登場に、軽いパニック状態に陥った薫と美井奈だが。雑魚のゾンビをブレスと両手槍で始末してしまうと、何とか立ち向かう余裕も出て来た二人。

試しに薫が殴ってみると、外見の割には案外弱い事が判明する。こいつはレッサーだと通信で確認し合うものの、飛んで来た呪いと《シャドータッチ》の魔法には大わらわ。

前衛の薫のピンチに、美井奈が遠隔スキル技を放つのだが。新たに放たれる馬車本体からの刺客の狼男が、素早い動きで美井奈にまとわり付き始める。

コイツも雑魚とは言え、ゾンビより遥かに俊敏だ。戦場の混乱は、更に輪を広げそうな気配。

『わ〜っ、狼男と吸血鬼がまた増えたっ！ 弾美君、ポケット補充する暇もないよっ！ 次呪いが来たらヤバイかもっ！』

『隊長、殴られて身動き取れません〜！ わ〜んっ、妖精魔法掛けておけば良かった〜』

『私、みんなに回復してる状態だけど、美井奈ちゃんの敵を引き受けた方がいいかな？』

瑠璃の作戦だと美井奈はフリーになるが、瑠璃が敵を倒すまで回復が飛ばなくなる。その間に美井奈が妖精魔法を掛けてしまえば、確かに強力なアタッカーが復活するのは確かだが。

実は、弾美のポケットも聖水に場所を取られて、ポーションの数はいつもの半分。回復役の瑠璃がいなくなるのは、とても怖い。薫にも回復を飛ばしている現状だと、下手したら二人前衛が崩れる可能性が出てくる。

こんな事なら新複合スキルの性能を、前もって試しておけば良かったと後悔しつつ。名前からしたら範囲攻撃っぽいかなと勝手に納得、本番で試す事に。

弾美はちよつと前に効果が切れた竜魔法を再び唱えつつ、パーテ

イに指示を出す。新複合スキルは、竜魔法が掛かった状態で無いと使えない仕様のようなのだ。

「瑠璃っ、氷魔法で雑魚どもを近場に足止めしてくれ。美井奈っ、フリーになったら妖精魔法、それから破魔矢まだ持ってただろっ、交換しろっ！」

「あっ、そうか！ ありますっ、了解しました！」

「レッサー吸血鬼は、美井奈ちゃんに任せればいいのかな？」

「新しい複合スキル、範囲攻撃っばいから試してみる！」

女性陣から驚きのコメントを頂いたのだが、弾美は至って本気でいる。瑠璃と美井奈の指示の遂行を見届けると、くるりと反転。固まっていた狼男にタゲを切り替える。

初公開の《ドラゴニックフロウ》は、弾美の想像通りの範囲攻撃だった。派手な演出で宙に竜が出現したと思ったら、地上に向けて巨大な牙を振りかざす。

雑魚の狼男は一撃受けただけでへろへろ、レッサー吸血鬼のHPも一気に半減してしまう。もの凄い威力に、パーティは驚きで言葉も無い程。さらに美井奈の破魔矢攻撃で、弱っていた方の吸血鬼が沈んだ。

ここから反撃とばかりに、パーティが途端に活気付く。

凄まじい威力の複合スキルだったが、掛け直したはずの竜魔法は切れてしまっていた。ハズミンのMPはもうスツカラカン。元々魔力の消費の大きな魔法だけに、連発は到底無理。

薫と美井奈の踏ん張りに、瑠璃もようやく《エンジェルリング》を使う機会を得る事が出来た。フィールドの呪いを無効化しつつ、何故かヒーリングを始めるルリルリ。

この魔法の掛かっている状態で休憩すると、あっという間にMPが満タンまで回復するらしいのだ。エーテルを節約しつつ、回復を

終えた瑠璃は薫と前衛を交代、その間に薫はポケットの補充に勤む事に。

弾美の回復支援は、その間美井奈が請け負っている。素晴らしい役割ローテ振りだ。

『瑠璃ちゃん、ありがと〜！ 前衛交代するね〜！』

『馬車のHPがもう3割切りましたね、そろそろ追い込んで壊しちゃいましょうか！』

『最後に何か召喚するかもだから、気をつけるよ。デュラハンはまだHP半分残してる、魔法が超ウザイっ！』

『了解〜、後ろに下がる前に、馬車を殴っておくよ〜』

瑠璃の置き土産の《アイススラッシュ》と、美井奈の渾身の《貫通撃》で、馬車には最後の異変が。やっぱりブルツと震えたかと思うと、音を立てて崩れ落ちていく。

最後の召喚はやはり演出と共に存在したよう。崩れた馬車が消滅すると、そこには 再び肉体を得た団長が佇んでいた。手下のつぽのミイラ男を2体連れており、足取りの覚束無さからピエロの成れの果てではと連想してしまうが。

薫の《炎のプレス》に、いきなり逃げ惑うミイラ男達。追い討ちの美井奈の破魔矢で、それぞれ見せ場も無く昇天。

『最後、むっちゃ弱い敵でした、隊長！w』

『か、可哀想なピエロさん達……せめて成仏してw』

『団長が全部悪いんですよっ！ 薫さんっ、やっちゃって下さいっ！』

『了解っ、月に代わってオシオキよ〜っ！w』

ノリノリで団長を殴り始める薫。やっぱり頑張り所を得ない団長は、程なく2度目の昇天。恐らくは、最後の演出に満足しての成仏

であって欲しいと願う一行だったり。

こうなつては、さすがのデュラハンも強敵とは言え不利な立場に追いやられる破目に。何しろ呪いを封じられ、削り役のアタッカーがいきなり二人も増えたのである。

削られる速度の上昇に、超ウザかった魔法の詠唱も止まり気味に。最後は怒涛のスキル技の連続攻撃に、散々と粘った甲斐も無くラスボスもようやくご就寝。

10分以上の白熱の戦闘の終焉に、一同ようやく肩の力を抜く事が出来た。

「勝った〜、終わった〜、長かった〜っ！」

「あれ、裏エリア恒例の宝箱はこっちじゃなくて……団長の方？」

「うん、デュラハンが倒された途端に、団長の方が宝箱に変わったみたい。最後まで役目を果たしてくれたんだね〜w」

「うわっ、団長すごい仕事熱心だったな〜w」

何故か最後は、ライバルだった団長を褒め称えるパーティー同。案内役からライバル役、最後には褒賞役までこなしてくれたのだ。あっぱれと言う他無いと、本心から思ってしまう。

ラスボスのデュラハンからは大剣を含め、呪われた兜や装備品などがドロップ。団長の化けた宝箱からは、お待ち兼ねの迅速胴装備が出て来て一同大喜び。

迅速の鎧 炎スキル+5、雷スキル+5、腕力+5、防+25

重厚な戦靴 体力-2、HP-10、SP+5%、防+12

重厚な手甲 体力-2、HP-10、SP+5%、防+16

戦闘の終了時に、弾美もようやく30へとレベルアップ。とうとう3つ目の種族スキル《SP量10%アップ》を得て、スキル技の連続使用にも拍車が掛かりそうな気配。

弾美的には新複合スキルも試す事が出来たし、勝利以上に得たも

のも大きい。なにより薫が迅速の鎧を装備した事で、新魔法の《レイジング》と《パライズ》を取得した。

胸装備による防御力のアップも嬉しいし、前衛の成長はパーティにも大きな比重である。

『結構しんどかったね〜！ わ〜、迅速のこの装備の見栄えどう？』  
『いいじゃないですか！ 上下揃うと格好良いですねえ！』  
『本当だね〜……あつ、この服はどうかかな？』

瑠璃が先ほどのエリアで入手した、ピエロ服を着て見せびらかす。既にエリアを抜け出ているから良いのだが、毎度のファッションシヨールはやっぱり盛り上がっているよう。

苦勞の甲斐があつて、シリーズのレア装備の2つ目をゲット出来たパーティだが。肝心の木の葉とイベントエリアを、ほとんど手を付けていないと言う事実をどう見るか。

今夜の後半の残りの時間で、行ってみようかと言う話も出たのだが。美井奈はどちらかと言うと、大事なエリアは合同インでの方が安心出来ると口にするので。

それなら明日にしようと思気なく決定。今日は最後のクエストエリアに行く事に。

『も〜、ハズミちゃんは……手を付けたまま放置の場所も結構あるのに〜』

『別にいいだろ、暇な時に行けば。今日は太陽の鍵のエリアに決定！』

『んじゃ、クエストみんなで受けようか。私の後について来てね〜』

\*\*\*カオルのクエスト・噂レポート\*\*\*

……クエ……

\* 虫が湧いて、集落にも被害が。退治して来て

\* モンスターの苦手な素材がある。その素材を持って来てくれたら、  
装備に打ち直してあげる

\* 向こうの水は、成分が変わっている。汲んで来てくれたらお礼を  
する

\* 木の根っこから薬を作りたい。探して見付かったら取って来て

……噂……

\* 白いガスの向こうに、巨大な影を見た

\* 森の中に、動く樹木を見た

\* 水晶の生る土地があるらしい

毎度の薫のリサーチで、エリアに入って何をするかは迷わなくて  
済むのだが。どこに何があるかが分からないのはいつもの事。そこ  
は自分達の足で頑張るしかない訳で。

前半の1時間、変なキャラに思いつき振り回されたせいでくた  
くたの一同。後半はのんびりマイペースで、エリア内を回りたい所  
ではあるが。薫の報告では、結構調べる場所が多い気配。

個人それぞれの力も付いて来た所だし、探索も分かれて行っても  
良いかも知れない。

『今回は虫退治と素材集め、後は水と根っこ取りかな？ 噂も含め  
ると、調べるもの多いよね』

『噂話は良く分からないですねえ、NM目撃情報でしょうか？』

『調べるもの多いから、取り敢えずは何か見付かるまでは、別行動  
で探索してみようか』

太陽の鍵を使って、早速クエストエリアに入った一行。周囲の景  
色を見渡すが、前の2つのクエストエリアとは打って変わって深く  
暗い森の中。視界は悪く、辛うじて見渡す限りでは。

遠くの方に、石で出来た細長い塔が幾つか見えるのみ。他に変わった事と言えば、木の種類だろうか。気味悪くうねる様な生長の樹木が、数多く目立っている。

下生えの植物にも、変な色のモノや孢子類のモノが目立っていてのっけから不気味な景色を覗かせるエリアに、一同微妙な表情とコメントではあるのだが。

幸い強そうな敵の姿も見えず、打ち合わせ通りにエリアに散らばる一行。

4方向に散らばって探索するのは、このパーティでは初の試みである。オートマップ機能にはメンバーの位置が常に表示されるので、迷子になる恐れは無いけれど。塔の方向に進んでいた美井奈から、早速道が石畳になって来たとの報告が入る。

薫からはアクティブの鹿のような獣に遭遇したとの報告。瑠璃も同じく、猪の獣人が絡んで来たと言ってくる。意外と多いアクティブな敵に、弾美はやっちゃったかなと心配するのだが。

程なく倒したと、二人が同時に報告して来る。心配無用と、やる気のコメントの女性陣。

一方の弾美は、森を抜けてしまっただけでそびえ立つ崖に突き当たった所。マップを確認すると、左の端まで来てしまっていたらしい。他のパーティもいい感じに散らばっており、マップの下半分はほぼ完成に近い。

マップの上に向かって進み直しながら、地図の完成具合に手応えを得た弾美。美井奈のいる場所で取り敢えず合流しようと言げると、一同から了解との返答が。ところが肝心の弾美が、川の流れに突き当たって向こう岸に渡れないと言う事態に。

渡る場所を探していると、木の切り株や流れ着いた枝などで、自然に出来たダムのような場所を発見。おまけに切り株が橋の役割を果たしてくれていてラッキー。そして、そこにあるポイントはもは



や何度も見慣れたモノだった。

弾美は何となく、持っていたアイテムをトレードしてみる。

ザンネン、ここはむしろ水が淀んでて清浄さの欠片もありやしないわネエ？ この自然のダムを壊してくれば、ワタシがお礼をしてあげても良いケド

そうねえ、人間の合成屋の発明した、水源式爆弾を持って来て頂戴。それでここの淀みが解消出来たら、アナタにとっておきのプレゼントをア・ゲ・ル

それじゃ、待つてるわネ

『お姉ちゃまつ、大丈夫ですか？ 獣人が多くて危ないなら、私が迎えに行きますよ〜？』

『うん、ちよつと数多いし、リンクするから怖いかな〜つ。お願い、美井奈ちゃん〜』

『本当にこのエリア、アクティブな敵が多いね〜？ 私ももうすぐ、そっちに合流出来そう』

『おうつ……ここにも妖精のポイントがあつたぞ〜。何か変なクエ受けた』

弾美の報告に湧く一同だが、瑠璃は戦闘中で手が放せない。薫が自分のクエウインドウで検分したところ、パーティ全員が受けている状態らしく。いわゆるパーティ内なら誰か一人でもこなせば良いクエの模様。

戻ったら、誰か忘れずに合成屋に話を聞きに行くようにとの打ち合わせで、この件は終了。

打ち合わせた場所へ急ぐ弾美だが、ただでさえ出遅れているといふのに。魚の群れに絡まれてしまい、予期せぬ待ったをかけられる。薫は鹿エリアを抜け、瑠璃の方へと救済に向かっているよう。

同じく猪の獣人に手こずる瑠璃と合流しようと、森を進んでいた美井奈だが。空き地の廃墟に崩れていない黒い扉を見つけたと、興奮した様子で報告して来る。

扉だけ崩れずに佇んでおり、とっても奇妙でポイントも存在するよう。

『おっ、でかした美井奈っ、その場所チェックしておけよ！ クエの1つかないかな、どのクエだろう？』

『碑文があるみたいですね……えっと、これは封魔の扉と言って、モンスターが近付かない材質で作られた不滅の扉だそうですけど』

『周りの壁が崩れてたら意味ないね？ あっ、薫さん発見！』

『私の方が先に合流出来たね、このまま美井奈ちゃんのとこに行こうか！』

女性陣は順調に合流を果たしているようだったが、弾美だけは離れた場所で孤軍奮闘。それでも何とか敵の群れを撃破し、ようやくうねった樹木エリアを抜け出せた。

ここはどうやら、美井奈の言っていた石畳の道のようにだ。マップをチェックして、今度は女性陣のいる場所を目指して歩き始める弾美。一応、自分もクエをこなしておくためだ。

パーティは、程なく廃墟の一角で合流。めでたく封魔の鉱物というアイテムをゲットする。

『ふうっ、ようやく合流出来たなっ。さて、ここからどうしよう？』

『えっと、マップの上の方がまだ全然調べられてませんねえ』

『そっち行くのはいいとして。絡む敵多いから、みんなで行動した方が良くないかな？』

『そうだね、獣人が多すぎだし、ちょっと怖いかも……』

そんな訳で相談の結果、ここからは団体行動に。しばらく進むと、

視界にやたらと枯れた樹木が目立つようになって来た。それからちらほらとアクティブの虫系の敵が混じり出し。

気が付いたら、何かの巣に紛れ込んだのではと思われる大量の虫型のモンスターが。強くは無いのだが、相手をするのも面倒な数に美井奈の範囲攻撃が大活躍の運びに。

クエに虫退治があつたと薫が言い出すのだが、これでクリアかは大定かではなく。

困っていたら、瑠璃が枝で出来た構造物を発見。蓑虫の蓑の様に、繋ぎ合わせた枝で身を隠している謎の敵。大き過ぎてぶら下がる事を放棄して、地面にでると横たわっているのだが。

小さくて気持ち悪いのがたくさん出てきたらどうしようかと、瑠璃をはじめ女性陣は超弱気。クエをクリアするためには必要だと、弾美は近付いて挑発魔法を飛ばしてみる。

もぞりと反応したそれは、急に膨れ上がって姿を現した。

見た目はイソギンチャクの胴体に、節のある足を8本付けた様な、とっても奇怪な化け物蟲。触手の1本は酸を吐き、もう1本は粘性の糸を吐いて敵を行動不能にして来るようだ。

胴体にある大きな口は、もちろん呑み込み技を持っているよう。薫は驚きながらも、華麗にステップで避けている。さすがに瑠璃や美井奈とは一味違うキャラ捌きである。

弾美は《闇の断罪》で敵の特殊技を牽制しながら、手馴れた感じでタゲ固定に成功する。程なくパーティで削り始めるが、酸攻撃が範囲で来るととても痛い。

瑠璃が何とか《麻痺撃》で止めに入るが、粘着糸の絡め技も喰らいたくないのには変わりない。

化け物蟲の特殊技に苦しんでいたが、パーティの削りスピードも知らずに上昇していた模様。薫の新魔法の《レイジング》は、パー

テイの攻撃力を底上げしてくれる効果があるのだ。

ダメージを受けつつも、削りの速さで被害を最小限にとどめ。間もなく化け物蟲はお亡くなり。倒した蓑のあった場所を調べると、大蟲の蓑の欠片というアイテムを得る結果となった。

インして20分で、幸先良く2つ目のクエ終了。

『薰っちの新しい魔法、使い勝手いいな〜』

『攻撃ダメージ、結構上がるね〜！ これも迅速の胴効果の魔法なのかな〜？』

『天使とか妖精魔法みたいな、限定イベントだけの特殊魔法って事か？ 確かに、メイン世界では確認されてない魔法ではあるみたいだけどな』

『へ〜、弾美君はそういう情報詳しいの？』

『いや、大学のサークルの情報同人誌を友達に貰った。薰っちのコネで、もっと欲しいんだけど』

薰はそういうサークルとの付き合いに関して、言及されるのを避けたようだった。それでも何とか繋ぎは取れるかもとの、曖昧な返事だけは返してくれる。

明日遊びに行った時に、用意しておいてとの弾美の無茶振りには、かなり慌てた様子だったけれど。掃除で手一杯ですとの言葉は、案外本音なのかも知れない。

ヒーリング後にパーティは、新たな道を探そうとするのだが。割と近くの枯れた切り株に、NMポイントを発見。トリガーの要求は『木』らしく、それも持っていると思えば瑠璃が返してくる。

NMの連戦になってしまいが、絡んで来る雑魚の相手よりはマシである。強化を済ましてし皆が準備完了の言葉を口にする、瑠璃が湧かしトレードへと移行する。

出て来た樹木のモンスターは、懐かしのトーテムポール。NM仕

様なのか、以前見た時よりも大きくて敵つい感じを受けるのだが。

戦ってみた結果は、見た目倒しと言うしかなく。4つに分裂したトーテム群は、あろう事かエリアを逃げ出す始末。攻撃の威力こそ強いものの、何だか物足りない戦闘結果だった。

ドロップもチヨイ渋い結果なのは仕方ない事かも。程度の低い両手棍と、木の実が数個、いつぞやの属性リングの初期段階も数個ドロップして、帳尻合わせなのか数だけが多いのだが。何だったのだらうと、拍子抜けのパーティ。

トリガーが腐っていたのだと、弾美は冗談半分に言い放つ。

『……案外、そうなのかも？w』

『私の保管の仕方が悪かったのかなあ？』

『お姉ちゃまは悪くないですよっ！ 虫がこの辺を枯らしてたせいじゃないですか？』

『あゝ、それが一番合ってそうだねえ！』

詮索はその辺にして、探索に力を入れると弾美の洒落の効いた一言に。パーティはそろそろと移動を開始。森はしばらくして途切れ、風化から逃れている遺跡の壁に突き当たる。

マップを見たら、右側は行き止まりっぽいのだが。俊足魔法を掛けた美井奈が、ひとつ走り見て来ますとの事。こういう時の美井奈の張り切り行動は、実はちょっと不安なのだけれど。

何事も無く戻って来て、行き止まりで怪しい場所は見当たらなかったとの報告。

反対の方向に、壁沿いに移動となった一同だが。時折崩れが見れる壁だが、入る隙間とまではいかない様子で。焦れつつも数分に渡って、入る場所を探して歩く事に。

その甲斐あって、入り口の大門ゲートに辿り着く結果に。しかし、

ここもどうやって開かないと言う事態は、完全にパーティの想定外。弾美もいい加減、イライラも頂点に。

美井奈が今度は、率先して反対方向に偵察に行ってくれたのだが、入り口も見つけたが、敵も引き連れて戻って来たのは美井奈らしいと言っか。

「にや〜っ、獣人がここにもいましたっ！」

「3匹か……1匹ずつ取るぞ〜」

「了解〜、最後の1匹取るね〜」

猪顔の獣人は、エリアに広く分布しているようだ。三人でタゲを取ってやると、美井奈は戦闘を手伝いながら、ちよっど行つた所に入り口を見つけたと報告して来る。

ようやく進むべき道を見つけ、パーティのやる気も少しだけ上昇。

敵を倒して美井奈の案内で、ようやく壁超えに成功した一行。遠くに見えていた塔は、施設の奥にあるようだ。手前は何かの研究施設のように、用途不明な機材が並んでいる。

温室のような建物も存在し、スプリングラーや庭園のようなスペースも遠くに見える。立体的な白亜の建造物は、緑に囲まれてお洒落ではあるのだが。建物の崩壊は外見はそうでもない様だが、中はぐちゃぐちゃ。

変な色の苔や崩壊した壁などで、入ってくれるなど言わんばかり。

左手を搜索していた瑠璃と美井奈が、崩れかけた井戸を発見した。近くに巣くっていた蜂の群れと戦闘になったらしく、それを聞いた弾美と薫も慌てて駆けつける。

井戸にポイントが移動するので、これはクエに違いないとの推測も。戦闘終了後に調べてみると、まさにその通り。レアアイテム屋の水汲みクエのようで、マップの探索につれて、予定通り順調にク

工も消化出来ている感じた。

もつとも、事前の情報があまりに少ないので、この方法しか無いのだが。

『建物には入れないみたいだな、少なくとも正面からは……左か右から回り込んでみようか』

『左は行き止まりっぽいですねえ……さっき調べたんですけど』

『それじゃ、右回りかな？ 残りのクエは木の根っこ探すと、後は白いガスと水晶の噂だけかな？』

『白いガス……何だか嫌な記憶が蘇りますが……』

研究施設らしき場所に白いガスと言えば、美井奈が操られたあの地下でのステージを思い出さずにはいられない。死霊使いの手強い敵の事を記憶から掘り起こしてみるが、再び遭いたい敵では断じてない。

移動して行くと、施設らしき建物と少し離れた場所に、かなりの広さの温室を発見した一行。入り口には何かの装置が設えてあり、ターゲット可能なポイントになっている。

もう一つ、壊れかけの装置からは懐かしの白ガス分解液が入手出来たのだが……。

『うわっ、これは……温室の中に何かいるって事か？』

『もう1つの装置は、薬草から薬品を作る装置だつて。色別に、ポーションとかエーテル、エリクサーを製造できるらしいよ？』

『……ポーション入手も、命がけなんですかねえ？』

『あれ……？ 何か近付いて来るよ？』

温室の入り口で、打ち合わせ中のパーティにキヤタピラ音が近付いてくる。NPCのようだと、ネームカラーで知れるのだが。様子見て油断していると、いつぞやのネコのようになり、勝手にパーティの

一員に居座ってしまった。

パーティネームからは、従者ロボットと判読出来ただけれども、瑠璃が恐る恐る話し掛けると、園芸バサミを貰えたらしい。どうやら、これで薬草を採取しろと言う事らしく。

至れり尽くせりなのだが、少々厚かましいと思うのは筋違い？

『しかし、遺跡に温室がやたらと多いのは気のせい？』

『西洋の歴史では、ハーブの栽培なんかは一般的だからね。貴族の館とかでも、何種類も温室栽培してたりするんだよ。何せ、薬にも料理の素材にもなる万能の草だから』

『へえ、薰つち詳しいな』

『ウチの大学にも、割と大きな温室あるしね。管理が学生の仕事だから、大変なんだけどw』

ほおおとパーティから、感心した雰囲気が漏れる。お母ちゃまがハーブテイ好きなんですと、美井奈が話に乗つくと。採れ立てのハーブを分けてあげるよと、薰が軽く請け合つて来る。

それはそうと、温室の薬草採集は大した危険も無く終了出来てしまった。白ガスの仕掛けがあるのかと警戒した一行だが、出て来た敵は芋虫やハチくらいだったのだ。

手分けしてポイントを見つけ、従者ロボットから貰った園芸バサミで採集して回る。ポイントはあちこち出現し、一度取ると別の場所に飛んで行くようだ。

多人数での採集は、宝探しみたいでなかなか楽しかったのだが。時間もあるし、適当に切り上げる事に。

『ロボットの話だと、黄緑でエリクサー、紫色でエーテル、橙色でポーシヨンだつて。赤と青と黄色の葉っぱしかないから、どうなるのかな？』

『ええと、紫は赤と青ですよ。橙色は……赤と黄色？ 緑が無



いのは何ですかねえ？」

「葉っぱなのにねえ？ 黄色にちよつと青を混ぜたら、緑になるけど……」

「へえ、そうなのか……瑠璃、黄色2つと青を試してみるよ」

黄色は実は、1番たくさん採れた葉っぱなので。遠慮なく使ってみると、推測通りエリクサーゲット。盛り上がるパーティは、どれが必要だろうかとか、全部の葉っぱを効果的に使い切ろうと意見が飛び交う。

結局は買うと高価なエリクサーが良いだろうと、何と大量6本もゲット。余りの薬草でポーシオンを作ってみたら、何と大ポーシオンを貰えてちよつとショックだったり。

大ポーシオンならそちらをたくさん欲しかったと、前衛の本音の意見がポロリ。

何にしろ、薬草摘みを楽しんだ一行は、つつい白ガスの事を念頭からすっぽり忘れてしまい。薬品入手で浮かれつつ、次の建物へと向かっていると。温室の角を曲がった瞬間に、待ち構えていたガスに飲み込まれる犠牲者が約2名。

油断していただけに、ショックも大きく。途端にパーティは大騒ぎの仲間割れ。

「美井奈つ、またお前か〜！w」

「ごっつ、ゴメンなさい〜！ あつ、でも近過ぎて弓矢撃てなくてラツキ〜かも」

「うわつ、何コレ？ 操作不能だよ〜！」

「薫さん、これが白ガスの恐怖ですよ〜。いま解除しますね〜」

弾美と瑠璃が解除する前に、カオルの槍にハズミンが横腹を1度抉られる騒ぎはあったものの。それ以上の被害はなく、何とか2次

被害までには至らずに済んだ。

弾美は、美井奈が逃げようとした方向を素早くチェック。どうやら、建物のエントランスに向かおうとしていた模様である。パーティは、再度白ガス分解液をしっかりポケットに仕込みつつ。

大きな間口のエントランスに慎重に忍び寄る。

強化を済ませて、いつ白ガスやアンデッドが湧いても驚かない心境に保ちながら。しかし、いきなり敷かれた足拭きマットが動き出すのは、完全にパーティの想定外。

建物の中に強引に招くように、動く歩道のような動きでパーティを未知の世界へご案内。思わず逃げようとした前衛陣も、茂みから姿を見せた白ガスに一瞬怯む。

結局逃げ出せるものもないまま、一行はまとめて建物のエントランスに。弾美たち学生には見覚えの深い、靴箱の並びや傘立ての間取りであるが。

その大きな靴箱や傘立てに入っていたステッキ、天井の電灯が襲い来るといふ事態は初体験。

「わっ、何だこれっ！ ポルターガイストかつ！？」

「ひよっとして……今回は無機物を白ガスが操ってるとか？」

「わっっ、ツボが飛んで来ましたよっ！ かなり痛いですが、隊長！」

「瑠璃っ、分解液試してみてくださいっ！」

慌てて動いた美井奈や薫は、建物の中から飛んでくるツボにぶつかったり、背丈の靴箱に挟まれたりと被害甚大。瑠璃は下手に動かなかったせいで、ステッキに小突かれた程度で済んでいるよう。

弾美は飛んで来るものを、盾でブロックしつつ。瑠璃と一緒に分解液を試してみる。

推理は当たっていたようで、ポトリと力無く落ちるツボヤステッキ。ここで使わずにどこで使うのかと、一行はほとんど厄介な靴箱やマット達を沈静させて行く。

あらかた分解液を使い切ると、動く物の気配はようやく無くなって。残る飛んできそうな怪しい物体は、上り口に置かれた椅子とその上に鎮座する人形だけ。美井奈が呑気に、それにも分解液を振り掛けるのだけど。それは大いなる間違い、完全に敵対行動と取られてしまつて。

動き出したそいつは、完璧自分の意思を持っていた。

『アホ美井奈つ、そいつは敵だつ！ ドール型モンスターは手強いぞつ！』

『ええつ、こんなに可愛い……くないつ、怖つ！』

『美井奈ちゃん、下がつて……呪い振り撒いて来るよ！』

椅子に置かれていた時には、確かに可愛い容貌だったのだが。フワリと動き出した途端に、両手に巨大な包丁を構え、顔付きも不気味に変化する呪い人形。

アンデッドの中でも嫌われる理由は、その凶悪な特殊技と小さな身体。的が小さく素早い動きで、直接攻撃が当たりにくいのだ。ソウルイーターよりも、ある意味性質が悪いかも知れない。

慌てて逃げ出す美井奈だが、敵は待つてなごくれぬ。いきなりの回転削り技で、ミイナのHPは瞬時に半減。更に毒と呪いを、大きく裂けた口から吐き出して来て。

パーティは一気にパニック状態、悲鳴と怒号が飛び交う有り様。

弾美が何とか、美井奈と人形の間割り込んだのだが。分身の術が掛かっていたのか、攻撃はいきなり空振り。しかも続いて近付いた薫には、呪いの操り人形の特殊技が降り注ぐ。

天井まで伸びた髪が、薫に頭上から舞い降りて。操り人形と化し

た力オは、呪い人形の手下と成り果てて。後ろで毒の解除や回復に追われていた瑠璃は、弾美と薫の悲鳴を聞きつけて。

こうなっては仕方がないと、エーテルでMPを最大回復。奥の手の《エンジェルリング》を使用。

この奥の手の魔法が無かったならば、こんなに早く立て直しは出来なかったであろう。下手したら、同士討ちで前衛からパーティは崩壊していたかも知れない。

とにかく操り状態と呪い状態から回復出来た一行は、小さなながらもようやく狙いを定め始める。華麗なステップや分身効果で攻撃は当たりにくい、こちらも魔法などの小技を絡めて徐々に呪い人形を追い詰めて行く。

操り技は不発と見た敵は、今度は椅子やツボや掛け軸を操って、自分の盾に使用し始める。

『うわっ、また邪魔者が出て来たよっ！ あれっ、人形回復してない？』

『あゝっ、こっちMP減って来てますっ！ 何ですかっ！？』

『やべっ、闇のフィールド発動してるっ！ SPも貯まりにくくなってるぞ、結界作られてるっ！』

『うあっ、天使の魔法も切れちゃった！ どうすればいいっ？』

『色違いの髪の毛が結界作ってる筈だっ、4本全部切らないと！』

何と、知らない内に闇の結界のお陰で、敵の有利な状況を作られてしまっていた。パーティは再びパニック、何とかそれを打ち破ろうとするのだが。掛け軸やステッキが後衛にまで邪魔に入って、身動きもままならない。

むきになったハズミンが、範囲技の《ドラゴニックフロウ》で本体ごと攻撃を仕掛ける。雑魚のツボや椅子と共に、端っこにある結界の1本が音をたてて切れた。

それに呼応するように、薫と美井奈の範囲攻撃が炸裂。あわよくば、境界ごと消えて頂戴との本心だったのだが。雑魚は掃除出来たが、残念ながら境界はまだ健在である。さらに飛んできた魔法に、薫が麻痺を受ける。

それから再度の呪いと毒の散布。生き生きと動き回る、仮初めの命のアンデット人形。

追い討ちの特殊技に続き、人形も持っている範囲攻撃を披露。回転斬りを始めた人形は、独楽のように回転しながらフィールドを縦断し始める。攻撃を受けて弾き飛ばされた前衛はともかく、後衛の瑠璃や美井奈はあつという間に虫の息。

特にタゲを取ってしまったのか、一番後ろにいた美井奈は、回転攻撃が終わった後も攻撃を受け続け。気が付けばHPが残り1割の危機に。悲鳴を上げて靴箱置き場を逃げ回る雷娘。

雷精のお陰で何とか生きているが、このままでは危ない。

『助けて〜っ、お兄さんっ！ みんなっ、HPオレンジ色ですっ！』

『瑠璃っ、境界あと1本壊してくれっ！ 美井奈っ、こっち逃げて来いッ！』

『ひ〜っ、私が一番近いのにな……呪いと麻痺で動けないっ！』

ぎりぎり何とか間に合った弾美の割り込みフォロ。すれ違い様に《トルネードスピン》を叩き込み、呪い人形の動きを止める。同時に瑠璃が、最後の境界を壊す事に成功する。

この時の薫と瑠璃のHPは残り3割、硬い防御を誇る弾美ですら5割程。

麻痺のせいで、聖水をなかなか使用出来なかった薫だったが。MPを回復した瑠璃が、再び《エンジェルリング》を使用。今度こそ、敵に自由に行動させない布陣に持ち込む決意を見せる。

瑠璃のヒーリング中に、美井奈が《ライトヒール》で前衛の毒や麻痺を治して行く。自分の回復は《風の癒し》任せだが、今度はしつかり《フェアリーウィッシュ》も掛けてある。

入手したばかりのエリクサーを早くも使ってしまったが、死ぬよりはマシだ。

「今までの恨み〜っ、避けるなこの〜っ！」

「薫っち、熱くなるな……っって言っても無駄か。追い込み行くぞ〜！」

「りよ、了解ですっ！ 《みだれ撃ち》からの《貫通撃》から行きますよ〜！」

武器をレイブレードに交換してあったハズミンは、怒涛の追い込みで厄介な敵を始末に掛かる。最後は全員の連続スキル技の豪華プレゼントで、ようやく小さな難敵は消滅。

天井に伸びていた糸製の髪の毛が萎びて行くのを見つめつつ、パーティーは安堵のため息。

薫が今の戦闘で、レベルが28へと上がったようだ。いつの間にか抜かれていた美井奈は、軽くシヨックのコメント。何故か平謝りの薫だが、美井奈ももう少しで上がりそうだとこの事。

ドロップは呪いの装備を始め、結構良いアイテムや武器が満載の様子。大刃包丁は短剣らしいが、他にも呪いのピアスや呪いの人形、闇の術書や水晶玉、金のメダルに命のロウソクに闇の秘酒など。

盛り上がったのは、呪いの人形という装備品。どうやら背中装備らしいのだが。

「えっ、呪いの人形って背中に背負うの……それは怖いねえ？w」

「どっという装備ですか……私はちよっと遠慮しますけどー！」

「背中はユニークアイテム多いからなあ……まあ、瑠璃持っておい

てくれ』

どんな装備だろうかと色々会話が盛り上がっていると、再度パーティに近づく小さな影が一つ。薫が驚いた様子で、慌てて後衛を守ろうと動き出すのだが。

キヤタピラ音を響かせる主は、先ほどの従者ロボットと判明。一同を案内するように、私設らしき建物を移動していく。調べてみると、どうやら他の道は障害物で進めないよう。

仕方なく、従者ロボットの後ろを付いていくパーティ。案内されたのは中庭のようだった。

『あれっ、従者ロボット止まっちゃったねえ。瑠璃ちゃん、話し掛けてみていい？』

『何で瑠璃に一々伺うんだ……ここは中庭？ 野菜畑に見えるけど』  
『話し掛けてみたけど、シャベル貰ったよ？ また何か掘れって事かな？』

『変な野菜が埋まってますねえ、ポイントいっぱいあるし、掘ってみましょう、お姉ちゃまっ！』

パーティは従者ロボットからシャベルを貰って、いそいそとポイントを掘りに掛かる。ちょっととした嫌な仕掛けなのか、掘られた木の根っこが悲鳴を上げてMPにダメージを与えて来たり。

せっかくヒーリングしたのにと文句を言いながら、たまにポイントから出て来るモグラ型モンスターに、こちらも悲鳴を上げつつ。そんなに強くない敵を倒して集めた、『絶叫木の根』が合計10個以上。

クエスト達成には、十分な数量である。

ここまでで、既に1時間程度。そろそろマップも完成したし、行ける所ももう無いかたと相談していたパーティなのだが。ここに来

た時からずつと気になっていた、キープアウトの表示板と紐で隔離された中庭の一角。

隙間から覗いた美井奈は、水晶の結晶が綺麗ですとの感想を口にするのだが。何やらポイントがあるのが気になりつつ、入れないのでは仕方が無いと諦める素振り。

瑠璃が何気なく、貰ったシャベルを従者ロボットに返却する。貰った採集用アイテムは使用限界があるらしく、使っている内に壊れてしまっていたのだ。

奇跡的に瑠璃のシャベルだけ壊れずに残ったのだが、これ以上持つていても仕方が無い。そう思つての返却行為が、まさか従者ロボットの次の行動の引き金になるうとは。

マメな瑠璃だからこそ、発見出来たルートだろう。

『わっ……あれっ、今度はつるはし貰っちゃった』

『んっ、誰に？ むおっ、ロボット動き出してるぞっ？』

『あゝっ、立ち入り禁止の場所、入れてくれるみたい！』

お姉ちゃま凄いですとの、毎度の美井奈の賞賛の中。従者ロボットは封印のための紐を、割とあっさり解いてくれた。パーティーは、貰ったつるはしを手に大盛り上がり。

布で隔離されていたのは、美井奈の見立て通り水晶の畑だった。キラキラ輝く水晶の結晶が、畝に従つて綺麗に育っている。つるはしをポイントに使用すると、採集出来たのは範囲攻撃アイテムの水晶玉。

大喜びのパーティーは、調子に乗って四人掛かりで掘り始める。

『これは凄いくっ。最後にボーナスステージだね！w』

『俺だけで、もう4個も取っちゃってるぞっ。まだつるはし壊れないなっw』

『負けませんよ、お兄さんっ！ 私もここで4つ目ですよ』



『……あの、今地面揺れなかった？ 何か嫌な予感がするんだけど』

美味しい話には裏と言うか畏があると、一人瑠璃が嫌な予感を覚えていたのだが。はしゃいで物欲に走る一行は、地面の揺れにも気付かなかつたらしい。

メンバー内の水晶玉獲得数が15を超えた時、瑠璃の危惧する異変が焔を襲った。パーティごと否認無しに巻き込まれる、地盤沈下の一斉落下。悲鳴を上げる暇も無く、全員仲良く盛大に落下ダメージを受け。

ふと見たら、みんな揃って陥没した大地の底に。

見上げる空は、遙か遠く……と言う程落ち込んだ訳ではないけれども。どうやって上がるかと相談し始めるパーティに、またもや忍び寄る怪しい影が1つ。

先ほどの焔でも、やたらとモグラが出て来ていたと思ったら。巨大なモグラNMがどうやら地下に潜んでいた様子。ちょっと土の種族キャラに似ていて、ユーモラスな外見だが。

両手に長く鋭く伸びた爪が、いかにも硬くて痛そうだ。種族的に土属性は体力と腕力、それに防御力に優れているのは周知の事実だ。敵に回すと、それなりに厄介ではありそうだが。

それよりも、サングラスを掛けて、装備を着込んでいるのは何故？

『……何であるのモグラ、装備をまとっているんですか？』

『さあな……瑠璃、接敵前に強化くれっ！』

『了解、時間的に最後の戦闘だね』

細かい事は置いておくとして。戦闘準備が整う前に、狭いフィールドでは見つかってしまうのも当たり前。素手で殴って来るのかと思いきや、大モグラはつるはしの両手持ちらしい。

ブロックしてもかなりのダメージが、盾越しにキャラに見舞われ

る。見掛けのユーモラスさに騙されると、痛い目に合いそうだと弾美は気を引き締めるのだが。

いきなりの範囲地震攻撃には、一同驚きを隠せず。

『きゃあつ、何ですかつ、地面が揺れましたよっ!』

『敵の範囲技みたいだな……瑠璃、今の範囲攻撃潰せそうか?』

『モーション大きいね、やってみるっ』

大モグラの防御力とHPは、やっぱりかなり高いようだ。それでも四人掛かりで削ってしまえば、順調に敵は弱って行く。時折やって来る地震攻撃も、弾美と瑠璃で潰しまくる。

案外楽勝かなと思つた頃に、大モグラの武器での特殊技が炸裂。

畑を耕すように、周囲に群がるキャラをつるはしで高速乱打して行く。遠くで見ていた美井奈は、余りの敵のアクション振りに、コントローラーを落としそうになったと後に語つたとか。

前衛のHPは一気に半減、それより精神的ダメージも大きかったり。

魔法や薬品での回復で、立て直しを図るパーティだが。一瞬の隙を突かれて《ストーンウォール》が通つてしまふ。キャラと敵を隔てる土壁が出来上がり、直接攻撃が阻まれる。

敵はすかさず、遠隔魔法の《クラック》や《ストーン》、さらには地震攻撃でダメージを与えて来る作戦に切り替え。こちらの前衛は、全く為すすべ無しかと思いきや。

弾美は後衛に号令を掛け、遠隔での反撃を支持。瑠璃と美井奈が、被弾しながら反撃の魔法攻撃。自分は《竜人化》しての範囲攻撃で、壁を一気に壊しに掛かる。

遠隔攻撃に転じていた大モグラは、急な反撃に対応出来ずにオタオタ。

その隙を逃がさず、魔法の壁を突破して大モグラの懐に飛び込む前衛陣。SPを溜めまくっていた薫の連続スキル技で、一気に大モグラのHPを食い干切る事に成功。

結局は大モグラの、遠隔で一方的に苦しめると言う作戦は当て外れに終わった模様である。戦闘はそのまま、パーティ優勢のテンポのまま終了を迎える事となった。

時間も丁度良かったようで、戦闘終了と共に2時間縛りが発動。

ドロップは土竜のグローブに土竜のつるはしに安全ヘルム、金のメダルや土の術書、神水やエリクサーなどなど。つるはしは両手ハンマー扱いのようだが、パーティの誰も使えない。

美井奈がこの戦闘でレベル28に上がって皆に追い付いた。お祝いを貰いつつ、少女も感慨深げである。まさかここまで成長出来るとは思っていなかったらしい。

土竜のグローブ 土スキル+2、HP+20、防+14  
安全ヘルム 土スキル+2、HP+20、防+15

気が付いたら、従者ロボットが梯子を下ろしてくれていたのだが、これ以上行く場所も無いしと、全員で転移の棒切れを使用。3つ目のクエストエリアでの冒険に終止符を打つ。

時間も夜の10時を過ぎており、恒例の落ちる前のごたごたが巻き起こるのだが。クエの報酬や使った薬品の補充は、明日の合同インで良いだろうと弾美が判断を下して。

それより明日の待ち合わせを、きっかりと薫にお願いしておいて、それぞれ順次、オンライン世界からお休みなさいの言葉と共に落ちて行くのだった。最後に残った弾美も、フレリストを見ながら落ちる算段をしていると。

進から、こっちも終わったとの通信が入って来た。ご苦労さんなどと呑気に労わりの言葉を返す弾美だが、いつも冷静な印象の進の

様子が少しおかしいのに気付く。

どうしたのかと訊いてみると、進は幾分調子を取り戻し。あくまで噂のただと前置きして。

『イベントエリアを、全部突破したパーティが出たらしい。それがどうやら……弾美、お前が昼間に口にしたハヤト組みみたいで。地上は今、凄い騒ぎになってるぞっ！』

7月に入って、ようやく梅雨も明けた模様ですかね？ 先週末までは雨の割合が多かったけど、今日なんかはかなり暑くて外営も大変……。

最近は内も外もと、仕事の割り振りが不規則なせいで。ストレス溜まりまくりで、本当にどっちかにして欲しいと切に願っている次第。手当てはつくとか言われてるけど、単純に仕事が増えて面倒くさいし。

自分としては、小説を書く時間がもつと欲しいんですけどねえ。

先週ようやく買った、地デジ対応のテレビ。これも面倒なので、まだ接続すらしてません（笑）。お蔭でテレビの左端に、邪魔な吹き出しが入ってイラツと来てたりしますけど。

そのテレビもかなり安かったんですが、最近はそんなものですか？ しかも宝くじで久々に万越えて、半分は貰ったようなモノだったり。

明日の休みで、取り敢えずは接続しなきゃ（笑）。

お話の方は、初のイベントエリアの攻略となっております。それから、合同インが何やら変な事になってますけど（笑）。個人的には、パズル的な要素の強いゲームってのは、あんまりやった事がないですね。

嫌いな訳じゃないんですが、ちょっと面倒かもって意識が先に立つちゃいます。将棋とかパクロスとかは、割とのめり込んじゃう性格なんですけど。

色んな仕掛けとかも考えてるのに、エリアの攻略シーンを書きながらも、キャラに変に同情してみたり。瑠璃がいるから、そんな必要はないんですけど（笑）。

そんな感じの章ですが、  
実際読んでお確かめを^^

早朝の散歩タイムでは、いつにも増して走り込みを行っていた弾美。昨日の練習試合での敗戦が、どうにもショックだったのは瑠璃にも理解出来るのだけれど。

とても同じペースでは走れないと、付き合う身の上としては厳しい状況。マロンとコロンの兄弟犬は、二人のちぐはぐなペース配分にちよつと混乱している模様。

薫は今日は顔を見せていない。準備に忙しいのか、寝坊したのか。

日曜日の朝なので、瑠璃としても寝坊したかった気もする。夜遅くまで小説を読んで、お気楽な時間を過ごしたかった。今は散歩を終え、コロンの朝ご飯を出して家の扉を潜った所。

朝からヘトヘトなのだが、8時40分には再び出掛ける予定が待っている。

両親に限っては、今日も出勤のようだ。最近は何に5日も休みが取れたら良い方だと、母親が愚痴をこぼしていた。風邪で休んだ事が、受け持ちのプロジェクトに幾分響いているらしい。

一緒に朝食を取りながら、そんな話を聞かされている瑠璃だったけれど。今日の予定で、瑠璃が大学の見学に行くと口にする、母親の恭子さんは興味津々。

娘はいなくなると不便だから、やっぱり大学は近場が良いと少々勝手な物言いなのだが。

「今年は忙しくて、臨時講師もやってないわねえ……若い人に教えるのも、なかなか面白いんだけど。瑠璃が生徒で通うようになったら、意地でも教えに行つてあげるわよ」

「そんなの、まだまだ先の話だよ。大学院の生徒さんに知り合いが

いて、ハズミちゃんと遊びに行くついでに敷地内を見て回ろうかなって」

「へええっ……確かに大学の施設は、義務教育の中学校なんかとは段違いだけどねえ。その学生さんの学部は何？」

そんな話から、話はいつの間にか両親のキャンパス時代の出会いに移行していた。照れながら話す恭子さんに、父親がもう仕事に出掛ける時間だとはぐらかして来るのだが。

やっぱり父親も照れた様子で、瑠璃はちょっと笑ってしまった。

両親が仕事へと出掛けてしまうと、家の中は途端に静まり返ってしまう。こう言う静けさがあまり好きではない瑠璃は、読み掛けの本を片手に家の中をうろつき回る。

最終的にベランダを開け放って、コロンと戯れながら時間を潰す事に。外の空気に触れながら、読み掛けの本を寝転がって読み進めてみたり。日曜の市街地は、静かで庭先にいても気にならない程。ふと気が付いたら、弾美が迎えに来てくれていた。

「何やってんだ、瑠璃。コロンが変な動きしてると思ったら、庭に通されたぞ」

「あっ、ハズミちゃん……もう出掛ける時間？ 仕度して来るね」

慌てた感じで、瑠璃が家の中へと引つ込んで行く。コロンと一緒に庭に残された弾美は、暇潰しに犬の毛並みチェック。春先の毛の生え変わりは、お庭犬でも注意が必要。

やんちゃなコロンも、弾美の前では何故かネコを被って大人しい。いつしかブラッシングにも熱が入って、コロンもどこか気持ち良さげではある。完全に身体を預け、リラックスマード。

そんな事をしてしていると、瑠璃の用意が整ったよう。



「お待たせっ……あゝっ、コロナ綺麗になったねえ！ 私がブラシ持ってても、全然じつとしてくれないんだから」

「お前は犬達に嘗められてるんだよ、散歩の時とか自由にさせ過ぎてるから。びしっとリーダーシップ取らないと、どっちが飼い主か分からなくなるぞ」

「そうだねえ……もう遅い気もするけど」

そんな話をしながらも、二人は予備モニターを抱えて集合場所へと歩き出す。そんなに重くは無いのだが、かさばる事は確か。傷つくと大変なので、持ち運びも慎重になる。

学区地区は休みの日の午前中だけあって、人通りもほとんど無く閑散としていた。大学区に行くには中学校の敷地よりも、もう少しだけ坂を上る感じで歩かなければならない。

弾美も瑠璃も、ほとんどここら辺は訪れた事が無いのだけれど。

何しろお店や飲食店の類いは、全部大学とは逆方向に集まっているのだ。道はなだらかな坂となっていて、ちよっとした高台にキャンパスは存在している。

高低差の余り感じられない大井監蒼空町なのだが、町の東側には高台が存在する。大学の敷地のほとんどがそこに存在していて、薫の暮らしている女子寮もそうらしい。

今日の待ち合わせ場所は、大学の正門前となっているのだけれど。辿り着いてみると、薫と美井奈が並んで二人を待っていたよう。こちらに気付いて、大きく手を振って来る。

予定通り、午前9時に約束の場所で全員合流。

「おはようっつ、二人共っ！ あのう……やっぱり部屋の整頓が間に合わなくて。今から弾美君の所に、場所の変更出来ないかなっ？」

「何だよ、薫っち。今日はお昼を大学の学食で食べるって決めてるんだから……今変更は利かないからなっ！」

「意地悪言わないのっ、ハズミちゃんっ。薫さん、時間あるんだし、ゲーム始める前に掃除手伝いしましょうか？」

「はっつ、女の人でも一人暮らししてたら、人を寄せ付けられない程に汚い住まいになるんですか」

美井奈の言葉に、そこまで酷くは無いと薫は弱々しく抗議して来る。ただ少しだけ、四人の入る余地を作るのに片付けが間に合わなかったのだと弁解。長年の研究資料などの、多大な荷物が邪魔をしているらしいのだが。

弾美の指示で、美井奈が薫の背を押して女子寮へと歩を進め始める。休日のキャンパスとは言え、人気は少しはあるようだ。休みの日も、学食など開いている施設もあるのだから当然とも言えるかも知れないが。

瑠璃は物珍しそうに、そんな風景をキョロキョロ見回してみたり。

美井奈はマンションからの近道で、よくこの敷地を無断で抜けさせて貰っているようだ。背を押されている薫が、気を取り直して点在する建物の説明を一行に始める。

総合学部を誇る大学内は、それなりに校舎の数も多いようだ。何故か大講堂とか体育館に相当する建物が見当たらない。すぐ近くに公共の総合会館があるので、入学式とか卒業式関係はそちらを使わせて貰って不便は無いらしい。

体育館も同じ事で、近くに運動公園すらも存在するので体育の授業に全く不便はナシ。お陰で広々とした敷地には、緑豊かで落ち着いた雰囲気を感じられる。

そんなお洒落で落ち着いたキャンパスを、一行は歩いて行く。

「わっつ、何だか面白いねえ……ゲームの冒険で、見知らぬフィールドに入った時みたいじゃない、ハズミちゃん？」

「確かにそうだなあ……むっ、チビツ子モンスター発見！」

「何ですかっ、お兄さんっ……きゃ〜っ、私はモンスターとは違いますよっ！」

美井奈が後ろから弾美に抱え上げられ、きゃいきゃいと楽しげに声を上げる。ぐるぐると回転が加わると、美井奈は実に楽しそうにアンコールの雨嵐。

3度目のアンコールで、遂に弾美もダウン。大学のキャンパスで一体何をやっているのだと、瑠璃と薫は呆れ顔。それでも楽しそうな美井奈を見て、ほのぼの感は上昇中。

そんな事をしている内に、校舎の奥に温室と登り階段が見えて来た。

「ほらっ、あれが私達の管理してる温室と花壇だよ。色々珍しい植物も育ててるの。だから本当はここら辺は、関係者以外は立ち入り禁止なんだけど」

「ああっ、薬学部で危ない植物とか育ててるってアレな？ 何でか知らないけど、そういう噂が中学まで流れて来てたりするのはなんですか？」

「その噂は小学校にも流れてますよっ！ 大学生が、口に出せないようなハイな薬草を栽培して、それを使って夜な夜なパーティをしているとかっ！ 本当なんですか、薫さんっ!？」

薫がやや疲れたような顔で、そんな噂が自分の学部にあるのかと驚いた感じ。案外、自分達の事を外野がどんな風に捉えているかなど、本人からは見えないものらしい。

美井奈が温室に張り付いて、中の様子を覗い始める。瑠璃も興味が湧いたのか、少女の隣から同じ動作。分かったのは、良く分からない植物ばかりという事だけ。

毎日の管理は、薬学部の寮生が行っているらしいのだが。

そんな寮の建物は、すぐその階段を上がった場所に建っていた。割と綺麗な外観で、3階建てで収容人数も多そうな感じ。今は町の外周近辺にもコーポやアパートが増えたので、規則のうるさい寮は敬遠されがちらしいのだが。

長年住み慣れた薫などは、既に5年越しを記録していて寮の主扱いだった。家賃も安いし大学の敷地内なので、門限などの規則を抜きにすれば割と快適なのだ。

そんな説明を皆にしなから、薫は一同を入り口に案内する。

女子寮の周囲にも、緑や花壇が豊富なのが目立つ。ハーブが多いようなのだが、弾美でも聞いた事のある名前が幾つかあった。ただし、名前と見た目が一致しないのがほとんど。

これはパスタとかに入れたり出来るとか、これはレモンの香りがあるとか、薫はいったん話し出すときりが無い感じ。さすがに育てている者の話は軽快で、知識量が違うのだが。早く中に入れると、容赦の無い弾美の言葉。

「何を必死に時間伸ばしてるんだよっ、薫っち。さっさと中に入らないと、午前中にゲーム終わらなくて予定が狂うじゃんかっ！」  
「うっ……じゃ、じゃあどうぞ中へ……靴をそこでスリッパに替えて頂戴。靴箱はそこだから」

「わっっ、中は結構古風な作りなんですねぇ、薫さん」

スリッパに履き替えたと同は、薫に続いて寮の中へと入って行く。管理人室らしき場所には、人影は無し。話によると、今は最古参の薫が兼任しているらしい。

なかなかの薫の権力者振りに、弾美もテンションが上がって行く。しかし、2階の奥の一室に通された同は、その中の有り様を見て言葉を失うしかなく。

とにかく荷物が多くて、とても四人が入れる空間は無さそう。

「こ、これは……想像以上に凄い部屋だなあ」

「うわあ……2段ベットのの上まで、荷物が溢れてますけど。一体どこに寝てるんですか？」

「その隅に、布団を敷いて……一応、邪魔な物はゼミ室に持って行ったり、押入れにしまったりと努力はしたんだけど。なにぶん荷物が多過ぎて」

「資料とかクリップとか、ファイル関係が多いですねえ……これはいくら整頓しても、スペースを減らしようが無さそうな？」

弾美が部屋に入って、テレビの周辺を一人チェック。それからその前に置かれている荷物の山を、手でポンポンと叩いてみる。窓際に置かれている棚の前も、荷物を置く余地は無し。

2段ベットの上も下も、机の上も下も、同じようにファイルや本が山を作っている。これは大事なものなのかと問いに、薫は大真面目にモチロンだと答えて来る。

捨てれる物ならば、とつくにそうしている。

「それじゃあ仕方ないな、一時だけ廊下に置かせて貰おう。それ位なら、怒られる事もないだろ？ 瑠璃、ついでにちよっと掃除しておこう」

「はいはいっつ、じゃあハズミちゃん荷物運びお願い。薫さん、掃除道具ありますか？」

手際の良い少年少女の働き振りで、あっという間に6畳の部屋に床が出現して行く事に。美井奈も元氣にお手伝い。弾美の後について、本の山を廊下にきちんと並べて行く。

部屋の中にある程度の空間が出来たら、今度は中の整頓に走る一同。ここでも指揮権は瑠璃が握っており、部屋主の薫は何だか身が縮む思いだったり。

部屋が小さ過ぎて、弾美は入り口で待機モード。幼馴染の働き振りを、扉の向こうから眺めていたのだが。美井奈が資料の間から取り出した布を広げるのを見て、思わず吹き出してしまった。何と言うか……女性用の下着にしか見えなかったのだ。

「美井奈……そういうのは、そつと持ち主に渡してやれ。いや、広げて見せなくてもいいから」

「えっ、何？ ……きゃあっ、美井奈ちゃんっ！ お願い、返してっ！」

恐らく部屋干しか何かしていて、資料の間に落としてしまっただけで、方不明になったモノなのだろうか。薫は顔を真っ赤にして、自分の下着を必死に取り戻す。

当の美井奈はしれっとした感じで、他に面白いものが無いかと探す素振り。

「もっと派手なパンティ落ちてないですかねえ……お姉ちゃまの方が、可愛いのでいっぱい持ってましたよっ。この前お邪魔した時、ちよっと拝見したんですけど」

「み、美井奈ちゃん……そう言うのは口にしちゃ駄目だよ」

ちよっと赤くなりながらも、瑠璃と薫が少女の言動に厳重注意を行う。同時に薫に対して、もう少し部屋の管理をちゃんとしてと、瑠璃にしては厳しいお言葉。

言い返す言葉もなくうなだれる年長者の姿は、ちよっと哀れな気が。

ようやく何とか片付いた空間に、瑠璃は満足げな表情なのだが。弾美が持って来た予備モニターを接続して行くと、あっという間にその空間も手狭に感じられてしまう破目に。

時間は既に10時に近い。それでも一行は、満足げにゲームを繋ぎ始める。

ようやく部屋の中での位置取りも決まって、肩を寄せ合うようにしてのログイン作業。いつもと勝手が違うのは仕方がないが、ちょっと狭いと美井奈あたりが文句を言ってくる。

その狭い部屋に、4つものモニターが並んでいる光景は、ちょっと異様かも。

「狭いのは仕方がないな、取り敢えず2時間だけ我慢しろ、美井奈」

「そうですねえ、でもキャラ操作が上手くいかなかったても、今日は仕方が無いって事で！」

「そうだねえ、ちょっと画面も見にくい……」

「ご、ごめんねみんな……もうちょっと、荷物を整頓しておけば良かったかな？」

メンバー全員に責められている気がして、何となく恐縮してしまう。それでも、各々のキャラがイベント画面に降り立つと、感情移入でそんな事も忘れ去ってしまう。

今日はどうするのとか、買い物をしなきゃとか、各々のキャラは自在にエリアを走り回り。突入前のあれこれを、各自分担してこなして行く。地上の中立エリアは、朝から割と混み合っている様。

闇市で買い物をしていた瑠璃は、自分の荷物を見て昨日のクエを思い出す。

「あれっ、薬品いっぱいあると思ったら、昨日結構補充出来たんだっけ？ クエストアイテムも、カバンに入ってるや。先に交換して

おいた方がいいねえ」

「そう言えばそうだった。クエ大臣、しゃきつとしてくれよ！」  
「はっ、はいっ……何か自分の部屋なのに緊張しちゃって……」

どういふ心境なのか、言葉通りに何故か緊張気味な薫だったり。それでも、皆を引き連れて中立エリア内を巡回。昨日の太陽の鍵工リアでこなしたクエストの報告へと回って行く。

お馴染みの情報ノートを取り出して、報酬をNPCから受け取る一同。虫退治クエではドロップ品を渡すと5千ギル貰えて、根っこクエでは3千ギルと、初っ端からなかなか好調。

レアアイテム屋依頼の薬用の水汲みクエでは、闇の秘酒をお礼に貰え、さらに以降買える様になったとの報告が。1個1千ギルもするのだが、アタッカーには是非欲しい所。

弾美がそう言つと、美井奈は苦しい家計から予備を幾つか購入。

次のクエストクリアの報酬には、皆がいきなりテンションアップ。鍛冶屋の素材取りクエのお礼は、何と好きな部位の装備を、1つだけ良物に打ち直してくれるらしい。

レア装備はさすがに駄目らしいが、その他の装備なら防御や何やら性能が上がる筈と言われ。途端にそわそわと、自分の装備をチエックし始める面々。

呪いの解除された装備とかも駄目らしいと、パーティでの試行錯誤があれこれと行き交う中。最初に決めたのは薫で、首装備の懐中時計を打ち直して貰うと宣言する。

両手武器使いにとつて、攻撃速度UPはとても有り難いのだが。防御力の低さが、本人は気になっていたらしく。早速戻つて来た改装備は、SPも増えて予想以上の出来栄え。

その報告を聞いて、他の面々もようやく打ち直し部位を決定した模様。それぞれ戻つて来た改装備を、お互い比べ合つて色々と批評



しあつてみたり。

魔人の下衣改 攻撃力+5、体力+3、腕力+3、防+15  
プラチナの指輪改 腕力+4、HP+20、攻撃速度UP、  
防+8

3、防+11  
複合素材のベルト改 ポケット+4、器用度+5、MP+1

進みがちな懐中時計改 SP+15%、攻撃速度UP、防+8

「むっ……ほとんどの数値が上昇してるなあ、結構いいかも。1回限りなのが残念だな」

「そうですねえ、私の改装備なんて、MPが+5も上がってますよっ。お姉ちゃまっ、良ければお姉ちゃまのベルトと交換しますよっ！」

「えっ、いいの？ ありがと〜、美井奈ちゃん」

相変わらず仲の良い二人の、装備交換など挟みつつ。ルリルリの各数値は、冒険前から結構な上昇振り。それをえこ贖んだとは、メンバーの中では誰も思わない。

何しろ瑠璃のMPは、パーティの生命線と言っても過言ではない。パーティのために踏ん張り、そして回復を飛ばすキャラを優遇するのは、当然といわんばかりの一同である。

これで全部のクエストは片付いたと、薫はクエ一覧リストを見直すのだが。何故だか1つだけ、後から書き足された文字を発見してしまい。妖精の依頼というクエストに、薫は不審顔。

弾美が自分が受けたクエだと言うと、なる程そう言えばと一同思い出した表情。

「クエストエリア内で、クエを受けるってパターン、珍しいわねえ」  
「合成屋に話を聞きに行くんだっけ。じゃあ、これも進めておいていいかな？ あっ、あと苔の生えたレンガって、これもクエアイテ

ムじゃなかったっけ？」

「あゝ、そうだった！ えっと……こっちなかな？ うんうん、このNPCだった筈っ！」

またもや皆で、ぞろぞろと中立エリアを横断しにかかる一同。目的のキャラにレンガをトレードすると、報酬に3千5百ギルと、さらにもっとあれば頼むと言われた。

苔レンガの連続クエは、まだまだ続くらしい。

妖精のクエとは言えば、合成屋さんに相談した所、水の水晶玉と3千ギル分の材料費で事足りるらしい。幸い水の水晶玉はカバンの中に入っていたので大助かり。

って言うか、カバンの中にじゃらじゃら存在している水晶玉。研究所の畑から失敬した、実りの一部なのは言うまでもない。それをお金と一緒にトレードすると、案外と呆気なく『水性爆弾』というアイテムが入手出来た。

これでクエの取っ掛かりが出来たと、瑠璃と美井奈が喜んで報告して来る。しかし、今日の予定ではイベントエリアの攻略がメインだと、弾美に釘を刺されてしまつて。

遣り残しがあちこちに結構あると、瑠璃はちよつと心配模様。

それでも、イベントを進めないといけないのは公然たる事実ではある。昨日の落ちる間際に進に聞いた、次の層への進出者が出たと言つ話は、さすがに一同に驚きと焦燥を与えた。

何しろ、弾美達はまだ1つもクリアしていないのだ。この差は歴然。

「今日のイベントエリアの初挑戦はいいとして……遺跡エリアの葉っぱの取り残しはどうするの、弾美君？」

「んゝ、先に取っておいた方がいいかな？ 条件には無いけど、そ

の方が良さそうだなあ」

「そうだねえ……あつ、ゴメン。もうちょっと時間ちょうだい、呪いの人形とか呪いの兜の料金チェックだけして来るね」

「そう言えば、そんなものを昨日入手したなあ。んじゃ、それが終わったら遺跡エリア入るぞ」

了解との声が部屋に木霊して、瑠璃だけが一人教会に走る事に。ついでに聖水も買っておこうと、瑠璃は心の中で所持金とポケットの遣り繰り計算を繰り広げていたのだが。

呪いの解除に掛かる値段を聞いた途端、そんな心の余裕は吹っ飛んでしまった。兜の方は1万ギルと通常料金だったが、人形の方は何と5万ギルと信じられない値段設定。憤慨しつつも教会を後にしたルリルリだったけど。

そのせいで、聖水を買う計画も虚空の彼方へぶっ飛んでいたりして。

「5万ギルって、信じられないっ！ とっても払えませんかっ！」

「瑠璃ちゃんがそんな怒ってるのも珍しいけど……こうなったらもう、妖精頼みしかないのかな？」

「んむう……値段からすると、かなりの性能が予想されるんだけどなあ。確か、妖精には3日後に来いって言われてたんだっけ？」

「3日後に、またトレード可能って話じゃなかったですか？ 確か、この前行ったのが……ええと、金曜日だったですかねえ？」

確かに金曜日の夜だったと、皆の記憶から正確な答えが導き出され。丸々3日縛りだとすると、次にトレード可能なのは月曜日の夜10時くらいになる筈で。

明日の月曜日は、合同インの出来る日なので、基本夕方の攻略になっってしまう。どちらにしても、今日幾ら気を揉んでも無駄な事には違いないと、瑠璃は気持ちを切り替える算段のよう。

皆に合流して、準備オーケーのサインを出す。

2度目のインとなる、不完全なマップの遺跡エリア。このマップ内で思い出深いのは、何と言っても偶然入手した宝の地図と、その番人のドラゴンとの熱き熾烈な戦いなのだ。

そのせいで思いつきり時間が足りなくなってしまい、肝心の葉っぱ取りがお預けとなってしまうのが前回の顛末。取り直しに向かう弾美は、何となく二度手間に思えて不服顔。

さつさと済ませて、次のエリアへ向かう気満々のよう。

エリアに入った一行は、有無を言わずひたすら北の方角を目指す。他の場所は、何しろ前回攻略済みなのだ。枝道が無いかだけチェックしながら、変化があるまで真っ直ぐの歩み。

薫が時々、マップを開いて現在地の確認作業。景色は相変わらずの、古びた遺跡が延々と続いている。完全に更地になった遺跡の跡地も多く、敵の姿がちらほらと存在するのだが。

弾美の口から出るのは、放っておけとの冷めた言葉。

「まあ、こんな取りこぼしの後始末に、時間を掛けたくないの分かるけどさあ。もうちょっとテンション上げて行こうよ、弾美君？」  
「そうですね、隊長！ いつもみたいに、野生の赴くままにですよ！」  
「えっつ、美井奈ちゃんは、ハズミちゃんをそんな感じに捕らえてるんだ？」

ちょっと面白そうに、瑠璃が少女に尋ねてみるのだが。美井奈は小首を傾げて、じゃあお姉ちゃまはどんな風に捕らえてるのかと逆に問うて来る。改めてそんな事を聞かれた瑠璃は、かなり困った様に唇を窄めて考え込む素振り。

薫から見れば、弾美は元気な割には大人びた所があつて、信頼のおけるリーダー格に見受けられるのだけれど。瑠璃の感想は、どうやらそれとは全くの逆であるようだ。

説明に困っている感じではあるが、ようやく口にしたのは。

「あつたかい、日溜りみたいな存在かなあ？ だからみんなが、近くに寄つて来るんだよ？」

「それは自分が能天気だつて事の証言だろう？」

弾美が辛辣にやり返すのだが、瑠璃は全く気にしていない様だ。

弾美の隣でニコニコしながら、呑気にその通りかもと言つて来る。

美井奈は不思議そうに、二人の様子を窺うのだが。

自分の両親よりも、よっぽど仲が良くて結構だとの印象が浮かんで来るのみ。

画面の中ではようやく、突き当りの終点が見えて来たようだ。キヤラが辿り着いた地点には、こんもりとした雑木林に隠れるように建つ崩れかけた建物群。それがいきなり振動を始め、大きな破片が上から降つて来る。

何事かと身構える一行に、その強制動画は不意討ちを与えて来る。呑気な雰囲気は消え去つて、強化魔法を掛け始めようとするものの、何時の間にかの、続いての強制イベントに。

もう1つ最初に入った遺跡エリアでは、魔女との不意の遭遇が記憶に新しいのだが。どうやら今回も、そんなサプライズらしい。遺跡の一つから人影が現れたかと思うと、先ほどの振動が再度巻き起こる。

崩落する建物の壁、陥没を始める大地。またかとの思いの一行。

今回のお助けキャラも、やはり天からやって来た。宙を見上げる魔女は、忌々しげに転移の魔法で逃げに掛かる。天使は追尾に忙し

いらしく、こっちはまるで見ていない様。

後に残されたのは、陥没からの落下被害に逢ったパーティ一同。

「……前もこんな目に遭ったよなあ、俺達」

「前回の遺跡エリアの事かな、それとも昨日のモグラの時の事かな？」

「あつ、今回はちゃんと通路があるみたいだよ、ハズミちゃん！」

「上には登れそうも無いですし、お姉ちゃまの言った道を進むしかない……んですかね？」

道と言うよりも薄暗い地下通路なのだが、確かにそこを進むしか手段は無いようだ。ハズミンを先頭に隊列を組んで、一行は暗く不気味な通路を進み始めてみる事に。

途中、通路に出てくるウォームは凶暴でなかなかの邪魔具合。いきなり地面から飛び出して、強烈な酸を吐いて来る。数は多くないのだが、不意討ちは心臓に悪い事この上ない。

そんな敵を片付けながら進んで行くと、次第にちゃんとした石畳の通路が出現して来た。さらに敵はコウモリや地虫に変化して行き、とにかく邪魔だと言っつけながら進む一行。

道はあっているのかと、行き先を危ぶむ声も聞こえて来るけど。一本道なので迷い様も無い。

最後には突き当たりの扉にぶち当たって、門番のゴーレムが待ち受けていた。そこそこの硬さと強さを誇る敵だったが、今更ゴーレム1匹にてこずるパーティでもない。

ものの数分で撃破して、門番ゴーレムから扉の鍵をゲット。その鍵を使って部屋に入り込むと、地下の部屋は屋根が抜け落ちて、半ば崩壊状態という有り様だった。

どうやらそこは、以前は隠し部屋だったらしい。部屋の中では、手前の本棚と抜け落ちた天井下の光る物体 目的の木の葉がクリ

ツク出来る様子。その他には、普通の宝箱が3つほど壁際に置いてある。

何かの秘密の実験室のようだが、今はかろうじて面影が窺えるのみ。

「わっ、本棚からフリーエリアとクエストエリアの地図が見付かったけど……持ち出すにはボロボロ過ぎて不可能だっ！」

「薫っちに、簡単に書き写して貰うか……ってか、今更分かっても半分は無駄になってる気が」

「そうだね、ここは先に来た方が良かったみたいだけど……取り敢えず、後半必要になるかもだし、怪しい場所が無いかだけチェックしておくね」

薫が地図のチェックに従事している間、弾美は宝箱を開けたり青色の木の葉を回収したり。宝箱からは、転移の棒切れが4本、風の水晶玉、神水が1個出て来た。

さあこれで帰れると、一息付いた弾美だったけれど。急に壁の一部が動き出したのはビックリ仰天。瑠璃と美井奈があれこれと本棚をチェックしていたのだが、その拍子に隠し部屋のスイッチを作動させてしまったらしい。

喜び勇んで一行が中を覗いてみると、設置されていたのは鍵付きの宝箱が2つ。瑠璃が合鍵を使って開錠すると、中からは金のメダルと剣術指南書が出て来て何ともラッキー

見逃さないで良かったと、皆からは安堵の笑顔。

結局、皆が木の葉をゲットして、転移の棒切れで脱出するまでの時間は20分程度。これでパーティでの木の葉収集達成率は8枚のノルマに対して、ようやくの3枚目である。

休日だけに、まだまだのんびりムードの一行。ホストの薫が、何か飲み物出そうかと皆に訊いて来る。瑠璃以外は欲しいと答え、冷

蔵庫からジュースを取り出す部屋の主だったり。

持ち上がるのは、次はどこに行くかの論議。

「お兄さん、イベントエリアって、どの位の時間が掛かるんですか？」

「さあ……今までのエリア構成からみて、1時間は掛からないと思うけどなあ」

「私が友達から聞いた情報だと、部屋ごとにタイムリミットがあるらしいよ？ アスレチック系に近いノリと、あとはラスボスがちょっと手強いつて話だったけど」

「そうなんだあ……アスレチック系かあ、私はちょっと苦手だなあ」

瑠璃の言葉に私もですと、激しく同意する美井奈だったが。取り敢えず時間の余裕のあるうちに行こうかとの弾美の問いに、渋々と頷く年少組の少女達。

ほとんど使わなかった薬品類はともかく、他に用意するものは無いかと慌しい空気の流れる中。こんなのはノリでちゃっちゃと行けば良いのだと、弾美が喝を入れる。

ノリで挑んで失敗して、怒られるのでは敵わないと二人は渋い顔で見つめ合う。

数分後には、一行は初めてくぐるイベントエリアの門前に集合していた。NPCが門番をしていて、あんた達なら資格は充分だと仰々しく請け合って来る。

葉っぱの事には何も触れて来なかったので、ここの資格とは関係ないのだろう。一行が門を通ると、登り階段が大きな幹の右手沿いに、曲線を描きながらずっと上へと続いていた。

細長く続くそれは、天へと達するかのよう。



イベントエリアはどこだと探す一同だが、やがて大きく口を開ける洞を発見。近くにナイフで紙が留めてあつて、妖精と共に更なる高みを目指す冒険者用の注意事項が書かれてある。

ざっと読み上げる一行だが、要するに時間制限があるらしい。1部屋45分以内にクリアするように。部屋内で入手したお助けアイテムは、持ち出し不能。妖精の指示には従うように。一旦入ったら、転移系のアイテムは使用不可等々……。

ここでは妖精の助けと指示は、絶対必要らしいとの事。

「ようやく妖精の出番だね、せっかく味のあるキャラなのに、活躍の場が遅すぎるよ」

「そ、そうかな？ 私は結構、妖精に装備とかアイテム貰った覚えがあるんだけど」

「あ、早解きだとそうなんですか？ 確かに私も、妖精装備とか貰いましたけど」

薫は、迅速装備や報酬のアイテム類は、全部妖精に貰ったと口にする。カバンに放り込みっぱなしの遅解き組とは大違いで、毎回活躍してくれていたようだ。

それはともかく、初のイベントエリアへのインを果たす一行。グランドイーターの幹の中は、一風変わった異空間チックな造りだった。

完全に四角に区切られた、割と広い空間の中。部屋の中に配置されているのも、四角くてキャラよりも大きな木箱の列だった。木目も鮮やかで、たまに色違いも存在しているよう。

壁際に沿って並べられた木箱は、4面ともに完全に隙間無く3段に揃えられていた。中央の木箱の山は、それよりもつと不規則で、数え上げれば4段まである。

一行が入室を果たすと、妖精はカバンからピヨツと出現。キャラ

に対して指示を出して来る。

さあつ、いよいよアナタ達が、グラウンドイーター自身に試される時が来たようネ　樹木に意思があるかって？　モチロンあるに決まってるじゃない！

彼女が敢えて魔女の姦計に乗って、冒険者を呼び集めたのも、こうして逆襲の機会を待っていたからよ！　影でアナタ達を支えていた事も含めてネ

それぞれ45分以内に、3つの部屋に配置されているスイッチを同時に押しなさい。そうすれば、最後の部屋でアナタは資格を得る事が出来るでしょう！

そうそう、移動補助のお助けアイテムを使う時には、ワタシに話し掛けて頂戴

それじゃあ、頑張つてネ

「良く分からないが、45分以内にスイッチを同時に押せばいいんだな？」

「そうらしいねえ、お助けアイテムって何だろう？」

「あそこに大きな宝箱がありますね、あの中に入ってるんじゃないですか？」

「フムフム……あつ、上の方にスイッチらしき物発見！」

薫の発言に、一行は揃って上を見る。壁際の割と目立つ場所に、小さな台座に乗ったスイッチらしき物が確かに設置されていた。わらわらと移動しながら、一行は登れる場所を探し始める。

パーティの注意力が別の所に逸れたのを見計らったように。木箱の影から、2匹のモンスターが顔を出して来た。木製のおもちゃのような、虫か何かの積み木人形のようなフォルム。

驚きながらも、戦闘へと移行するものの。4人掛かりで呆気なく撃沈。

「び、びっくりした。広くも無いマップなのに、見落としなんて洒落にならないねえ」

「薫っちが、上を見るなんてそそのかすからだろっ。いや、今は登り口を見つけよう」

「コレじゃないかな？ この茶色い木箱をこっちに動かせば……」

「あっ、この木箱動くんですか？ どうやって箱の上に乗るんだろっと思ってましたけど」

それは見た目、簡単なパズルのようだった。横に1マスずらせば、2段目から伸びている梯子に手が届くようになっていく。何しろ、その木箱にも梯子が設えてあるのだ。

弾美が近付いて、茶色い木箱をターゲットイング。思わず攻撃してしまい、木箱のHPがガクツと減って行く。一同からは、驚きの悲鳴とブーイングが湧き上がり。

弾美もちよっと焦って、キャラ操作を一時中断。

「ハズミちゃんっ、壊したら駄目だよっ。登れなくなっちゃう！」

「いや、動かすつもりだったんだが……ボタン違いだったようだな」  
「何やってんですかっ、お兄さんっ。全く粗忽者ですねえ！」

美井奈の言葉に、思わず弾美は反撃の素振り。美井奈は慌てて、瑠璃の影で丸くなる。薫が自分のキャラを操作して、木箱をゆるゆると動かしに掛かる。どうやら、方向ボタンのみの操作で良いようだ、年長者らしい何気ない報告。

これで壁際を登れるようにはなったよう。試しにミイナが、調子に乗って梯子を登り始める。動かした茶色い木箱の上に立って、そして壁の木箱に設置されている梯子へ。

どうやらここは、アスレチックと言うよりはパズル要素の強いエリアのようだ。そう薫が口にする、明らかに瑠璃は安堵したよう

に顔色が晴々として来る。

中央のパズルは、壁際よりは複雑な様子。美井奈からは、反対側にもスイッチがあるとの報告が入った。中央の木箱の上にも、3段目と4段目にスイッチが置かれている。

これで全部で4つ、人数分に丁度足りている。

「これをこっちに移動して……この木箱が邪魔だけど壊せるのかなあ？」

「上に木箱が乗っかってるけど、無視しても平気なのかな？ でないとクリア無理なんですよ、瑠璃ちゃん？」

「木箱が引つ張れるんなら、話は別ですけど……やっぱり壊すしか手は無いのかな、ハズミちゃん？」

上の段で一人騒いでいた美井奈は、ちょっと寂しそうに三人の会話を聞いていたのだが。壁際にも茶色の木箱が埋まっているのを発見して、あれで試してみればと提案する。

そこが万一2段へと陥没しても、スイッチへの到達には影響は出ない。反対側から回り込めば済む話なのだから。そう口にするのと、皆から急に賞賛の視線が。

ちよつと照れた感じで、美井奈は満更でもない様子。

「どうした美井奈、急に頭が良くなったような指摘なんかしちゃって！」

「いやいや、なかなか柔軟な考えと鋭い観察眼なんじゃない？ やるわねえ、美井奈ちゃん！」

「すごいすごい、ハズミちゃんからポイント上げたよ、美井奈ちゃん！」

「えへへ、それ程でも……」

隣の瑠璃も、しきりと少女を褒め称え、嬉しくなった美井奈は恒例の抱きつき攻撃。操作どころではない少女達の騒ぎの中、弾美と薫だけは早々と実験に赴いている。

茶色い木箱は、4〜5撃程でたやすく壊れていった。そして、周囲を巻き込んだの派手な爆発を引き起こす。思いつきり喰らってしまった弾美と薫は、あまりの仕打ちに絶句。

「気まずい空気が、小さな部屋を支配する。」

「……美井奈、お前は褒めるとすぐこれだ！」

「ええっ、私のせいなんですかっ!？」

「完全に油断してた……」

「あっ……でも、実験は成功だねっ！ 上の木箱は落ちてこないみたいだよ？」

瑠璃のフォローも虚しく、何となく悪役に祭り上げられてしまった美井奈だったけど。取り敢えず実験結果は上々で、目的の邪魔な木箱は壊してしまう事に。

弾美が強化をかけたまま、ソロで問題児に向かい始める。しかし今回引き起こった騒動は、爆破ではなくモンスターの襲撃。どうやら、箱の中にじっと潜んでいたよう。

ポリゴン模様がやたらと目立つ、恐竜のような敵が、弾美を一噛み。

虚を突かれた一行だったが、フォローに入ってしまったえば戦闘終了まではスムーズな流れ作業。なる程、色んなパターンがあるのだと、パーティで気を引き締める意思統一が。

その後は、動かした木箱で作られた通路の評論会。案外簡単に出来上がったパズルの回答に、一同やや拍子抜けな感じ。後は、スイッチを皆で一斉に押せばよいのだが。

美井奈が、やや躊躇いがちに見落としを指摘する。

「あの……どうして大きな宝箱をみんな無視するんですか？」

「おおっ、そう言えばあったな。怪し過ぎて、ちよつと本気で忘れてた」

「ちよつと警戒するよね、でも一応空けてみようか？」

言い出した薫が、近付いて宝箱を開け放つ。何事も無く入手出来たアイテムは、推理通りのお助けアイテムのようだった。聞きなれない名前ばかりで、3種類がパーティ用の予備アイテム管理欄にプールされる。

『魔法のハスの葉』と『Jの豆の木』と『次元固定スプレー』というアイテムが、数個ずつパーティ所有となったのだが。移動補助が『魔法のハスの葉』と『Jの豆の木』の2つらしく、これはどうやら横と縦の移動に使えるらしい。

最後の『次元固定スプレー』は、透明化しているスイッチを見えるようにしてくれるらしい。そういう仕掛けも出てくるのかと、思わず先読みしてしまう面々。

もう見落としては無いかと、ちよつと神経質に瑠璃などはエリアを駆け回って見渡すのだが。どうやら大丈夫との太鼓判がチームのブレインから押され、それぞれスイッチを目指し始める。

弾美と美井奈が壁際のスイッチに、瑠璃と薫が中央に積まれた木箱を登り、スタンバイオーケーだと伝えて来る。ここまで掛かった時間は10分程度、45分も必要ない有り様である。

余裕のクリアに、弾美も鼻歌交じり。

「よしっ、それじゃタイミング合わせるぞっ。いつせーのー、せいで皆で押す……」

「……あっ！」

慌てた声を思わず上げたのは、やっぱり美井奈だった。弾美の言葉について釣られて、一人先行して押してしまつたらしい。ピコツとスイッチ音と共に、ランプが明るく光る。

エリアに入ってからずっと付き添っていた妖精が、ミイナの先走りにおカムムリ。

ちよつと、ハナシ聞いてたのっ？ 一緒に押さないと駄目って言つたでシヨツ！

言葉と共に飛んで来た妖精パンチは、ミイナの鼻つ面にヒット。ダメージも丁寧に計算されていて、HPが1程減つてしまふ。美井奈はやつちやつた感と妖精の叱咤に、トホホな表情。

弾美は、美井奈の画面のランプが消えたのを横目で確認。それから何事も無かつたかのように、声をさらに張り上げて言葉を続ける。

「いいか、ちゃんと聞けよっ！ いっせーのー、せいで皆で押すんだぞ！」

「りよ、了解？」

「い、いいよ、どうぞ？」

何となく仲間外れの美井奈を気遣うような、曖昧な返事の中。美井奈も小さく、同意の頷き。今度は間違いなく、全員の動作がシンクロした模様。

仕掛けが作動して、次のステージへと移動するパーティ。

次のステージも、最初と似たような造りだった。ただし、今回は右と左で3段の木箱の列が別れていて、3段目にはボス級の敵がスイッチを警護しているようだった。

ずんぐりしたカブト虫のような体型だが、突き出した角の他にも

前脚が鋭い鉤爪仕様となっている。周囲に飛び回る3つの光球は、美井奈のあの魔法を連想させた。

カブト虫は、3つのスイッチが窺える左のスペースに鎮座し、上からパーティを見下ろしている。

「むっ、今度はボスがいるな……登り口の確保は、まだまだ簡単そうだなあ」

「そうだねえ、後の違いは床の色かなあ？ さっきは赤っぽくて、今は濃い緑っぽいねえ」

「なる程、あとの変化といえば……木箱の配置かな？ 上から見たら、右が凹で左が凸の形状で、さらにボス付きって感じかな？」

「はあ……あのボス、ここから攻撃出来ませんかねえ？」

弾美がすかさず、止めるとの制止の声。瑠璃も一応、魔法での攻撃範囲だと知らせて来るのだが。ボスの周囲を飛び回る光球は、絶対何か邪魔してくるに決まっている。

何より、敵の反撃が無い筈は無い。下手したら、範囲攻撃で仕返しされるかも。

そうなった時に、前衛が敵まで辿り着けないと話にならない。遠隔の撃ち合いで始末出来れば良いが、このパーティは遠隔持ちが回復も兼ねているのだ。

恐らく手が回らなくなつて、ジリ貧に追い込まれてしまうだろう。

敵の攻略については、リーダーの弾美の指示に従うのに全くためらいの無い女性陣。先にルートを確保してしまおうと、一斉に木箱のパズルの解読に掛かる事に。

スイッチが1つだけ設置されている右の凹の登り口は、先ほどの応用で済みそうだ。邪魔な木箱を片付けて、梯子付き木箱を押して行ってやれば良いのだが。



やはり弾美が代表して、邪魔な木箱を殴り壊してみる事に。今度はどちらに転ぶだろうと、警戒していた一行だったが。壊れた地点から出て来たのは、今度は宝箱だったり。

どうやら良い結果もあるようだ、盛り上がりを見せるパーティ。

「おつ、大ポーションか。よしっ、邪魔は排除したぞ、薰っち」

「了解、動かすね」

何となくゲーム内の雰囲気、力仕事は前衛が担う取り決めとなっていたのだが。そんな訳で今回襲われたのも、前衛のカオルだったのは幸いだったのだろうか。

茶色い木箱を動かした跡に、壁側に木箱1個分の隙間が出現して要するに、木箱で蓋をされていて、その隙間にモンスターが閉じ込められていたという仕掛けらしく。

うそぞと出てくる多足の昆虫モンスターに、一同絶叫。

「きゃっっ、隙間にいつぱい隠れてたっっ！」

「わっ、わっ、こんなパターンもあるんだねっ！」

「気持ち悪いっっ！ お兄さんっ、さっさと倒してくださいっ！」

呼ばれて果敢に、敵の集団へと突っ込むハズミン。敵の数が多くて、キープは3匹がやっとなのだけ。瑠璃と薰も前衛に出張って、必死に前線キープに掛かる。

HPが減っていった敵を見計らって、美井奈がとどめを遠隔で刺して行くいつもの流れに。一時の混乱が治まってみれば、大きな被害も無く戦闘は終了していた。

ちよつとドキドキだったが、何とか仕掛けは分かって来た。

今度は凸の登り口を作ろうと、一行は頭を寄せて相談を始めるのだが。今度は動かす茶色の木箱の数が2つ、壊す木箱が1つで上ま

での梯子が繋がりそうだ。

今度は何が出るかと用心しながら、箱を壊しに掛かる弾美だったが。今回は爆発してしまい、隣の木箱にもダメージが。これが壊れては上に行けないと慌てる一行だったけど。

幸い、他にお邪魔の影はなく。程なく3段まで到達する道のりが完成。

「さて……敵はどこまで近付いたら反応するかな？」

「どうだろう……試しに2段目から攻撃してみる？ 反応したら前衛が突っ込む感じで」

「2段目は面積が狭いから、そこで戦闘になったら怖いけどな。まあ、試しにやってみよう」

「ほいほい、それじゃあ強化掛けるね」

どの程度の強敵が良く分からないが、意外と戦闘の少ないイベントエリアの仕様である。ひよっとしたら、こちら辺でガツンと強い伏兵が登場する可能性もありそうだ。

強化とMP回復が終わって、2段目へとぞろぞろと進む一行。敵の動きは、今のところまだ無い様子。動きを合わせる確認をしつつ、前衛組がそそくさと3段目の梯子へと向かう。

それに合わせて、まずは遠隔攻撃組の攻撃。瑠璃の呪文と美井奈の《みだれ撃ち》が、カブト虫に降り掛かる。ところがその攻撃は、3つの光球が案の定のブロック。本体に毛ほどの被害も無く、カブト虫からは反撃の魔法の詠唱がやって来る。

大慌ての後衛達だが、止める手立てがないっ！

範囲の爆風魔法を喰らって、後衛陣は下段まで吹っ飛んでしまった。しかも、足場に使っていた茶色の木箱もHPが完全消滅、何と木っ端微塵に破壊されてしまった。

これには全員大慌て。3段目に前衛陣が孤立してしまう結果とな

り、しかも壊された木箱からは新たにモンスターが出現して来たのだ。さらに、カブト虫の周囲の光球にも変化が。

光るのを止めた飛行物は、矢尻状の浮遊虫へと本体を曝け出す。

「にゃ〜っ、落ちちゃった！ ど、どうやって合流したらいい、ハズミちゃんっ？」

「やばいよ〜っ、敵が4匹に増えちゃったっ！ これ二人で抑えておけるかなっ？」

「ってか、お姉ちゃまっ！ 敵が箱から出てきましたよっ！」

「雑魚っぽい、飛んでる奴から倒そう、薰っち！ 瑠璃っ、1匹足止めで止めてくれっ！」

慌しい事この上ない惨状の中、弾美の叱咤する感じの指示が飛び交う。自身はカブト虫に《グラビティ》と《上段斬り》を通して、移動能力と魔法詠唱を一時的に奪い取る事に成功。

続いている《ドラゴニックフロウ》で、矢尻状の浮遊虫に範囲攻撃をぶちかまし。タゲを強引に取ってから、カブト虫と距離を置いため部屋の隅に移動するハズミン。

すかさず瑠璃が、下段から《魔女の足止め》で浮遊虫を1匹固めてくれた。こちら辺は阿吽の呼吸、だてに長年幼馴染をやっている訳ではないバツチりなタイミング振り。

後は残りの2匹を引き連れて、薰と一緒にたこ殴りの予定の弾美だったが。

距離を取った途端に、特殊技の空中チャージを喰らい、文字通り矢に射られた感覚を味わうハズミン。その2連撃に、さすがの盾キヤラもHP半減のピンチに追いやられ。

《シャドータッチ》での反撃も、魔法耐性が強いのかあまり効果が無いよう。薰が1匹タゲを取ってくれて、そちらから二人で削りつつ。ハズミンは改めて《竜人化》で硬化を図る。

カブト虫がゆっくりとこちらにやって来るのが見え、焦る前衛陣。

一方の後衛は、何とか木箱のポリゴン猿人を倒し終えたのだが。このまま下段から、攻撃や支援をして良いものかと悩み中。何しろ一旦タゲを取ったら、段差で前衛の加護が望めないのだ。

こんな時まで、ちよろちよると妖精が後ろを飛び回っている。邪魔と言う訳ではないが、集中力が削がれるのは確か。そう言えば、さっきのエリアで何かお助けアイテムが……。

それを思い出した瑠璃は、咄嗟に妖精に話し掛けた。妖精は気安く、何かアイテムを使うかと問うて来る。縦の移動に使うのは……そう、確か『Jの豆の木』だっ！

目の前に使用スペースを確保してくれとか、色々注文が帰って来たが。出現した梯子は上々の出来だった。

「わっ、お姉ちゃまつ、何を使っただんですかつ！？」

「お助けアイテム……かな？ 美井奈ちゃん、これで上まで上がるっ！」

いきなり出現した緑色の蔦の梯子は、見事に3段上まで到達可能な優れモノ。途中の段にも降りれるような作りだが、後衛組が目指すのは今は前衛との合流のみ。

瑠璃と美井奈が合流した時も、敵の数は1匹も減っていない始末。美井奈が遠隔援護に入り、瑠璃も回復や支援に入ると、ようやくこちらのペースが戻って来た。

前衛陣は束の間ほっとした表情を浮かべ、安心して削りとブロックに力を発揮し始めるのだが。忘れていた敵のボス、カブト虫に掛けていた重力の鎖がとうとう解き放たれる。

まずはタゲを取っていた弾美に、角での強烈チャージ技がやって来た。吹き飛ばしも相まって、ハズミンは部屋の端でスタン状態。

幸い落下はしなかったものの、木箱で出来たコーナーに追いやられてしまう。さらに範囲魔法での追撃、しかし標的の弾美は孤立状態のままだったり。

その隙に、美井奈が見事に浮遊矢尻虫を1匹撃退。

「やった、1匹倒しましたよ〜っ、隊長！」

「私が1匹足止めしておくから、美井奈ちゃんと薫さんと雑魚片付けちゃって〜」

「そっち3人で片付きそうなら、俺はボスキープに回るぞっ。カプト虫は範囲魔法バリバリ使うから、こっちには近付くなよ〜」

カプト虫キープの弾美は、部屋の隅で孤軍奮闘。殴りもなかなか凶悪な敵だが、耐える程度なら何とかなりそう。魔法をスキル技で潰しつつ、ひたすら仲間の合流まで耐える事に。

浮遊矢尻虫は、チャージの他にも魔法反射などの隠し技を持っていたものの。普通に殴っていればそれほど怖い技も無く、女性陣チームに1匹、2匹と倒されて行く運びに。

ようやく合流してしまった後は、お決まりのフォーメーションでの必勝パターン。

「よしっ、勝った……けど、戦利品はほとんどないのな、ここ」

「そうだねえ、ちよっと寂しいかな？」

「時間もまだ30分経ってませんし……案外ちよろいみたいですねえ、イベントエリアって」

「そうだねえ、ここはあと1面だけ？ ってか、スイッチどうやって押そう？」

それを聞いた瑠璃は、再び妖精とヒソヒソ相談。お助けアイテムの『魔法のハスの葉』を段の端っこで使うと、凸から凹の、ハスの葉の掛け橋が出来上がる。

おおっと、部屋に賞賛のため息。コントローラーを手放しての拍手まで湧き起こり、瑠璃はひたすら照れまくる。それでもパーティに使い方を教えて、知識の共有を図ってみたり。何しろ、これから色々とお世話になるアイテム達なのだ。

これでとにかく、4つのスイッチの前にキャラが立つ事が出来た訳である。再び呼吸を合わせての作動によって、パーティは見事に最終ステージへと移動となった。

入る前の苦手意識は、今では完全に払拭されているよう。

今回は、先程のような殺風景なフィールドとは違うようだ。相変わらず立った位置から全てが見渡せる広くないステージだが、立体的な造りは統一されているよう。

木立ちの中の、遺跡っぽい風景だけど、木立ちには切れ目が見当たらない。どうやらグラウンドイーターの空洞の内側っぽいのだが、何故か日差しが神秘的に降り注いでいる。

その壁面に沿って、通路が3層くらい通じているのだが。中央は完全に吹き抜けで、下は深い水溜まりになっているようだ。グリーン色の水面には、日差しが揺れている。

さらに上を見上げると、中央の高い位置に浮島のような物体が。一応上の層の通路から細い蔦の橋が続いていて、それを渡った移動は可能なのだが。

島の地上は蔦のカーテンが覆っていて、今は何があるのか窺えない。

「ほへへ、何か急に指向が変わってますねえ。とても綺麗じゃないですか」

「そうだねえ、遺跡っぽい景色だけど、何だかロマンチックだねえ」

「いや、とにかく先に敵だとかスイッチを探してくれ、二人とも」  
「ええと……妖精が何だか騒いでるみたい。ポケットに空きを1つ作れって」

薫の指摘通り、どうやら『次元固定スプレー』というお助けアイテムが、今度は活躍するようだ。皆がそれぞれポケットに空きを作ると、強引にそのアイテムが割り込んで来た。

姿の見えないスイッチは、妖精が逐一場所を覚えてくれるみたいなのだが。一行が移動を始めた途端に、スイッチの確保より先に、石造りの階段の上から敵が押し寄せて来る。

いつか見たような、トーテムポールのモンスターや、大きなバツタ虫に乗った、小さな姿の半裸の獣人達。獣人は木製のマスクをつけており、手斧をブンブンと投げつけて攻撃して来る。

さらには、飾りと思っていたゴーレムまで動き出し、進む事も憚らない有り様。

ゴーレムは硬かったし、獣人はフォーメーションでの攻撃がとてもウザい。前衛と後衛の役割がはっきりしていて、乗り物のバツタも奇抜な動きで奇襲を掛けて来るのだ。

位置取りという点では、トーテムポールも立派な凶悪な仕掛けである。高い位置からの押しつぶしスタン技は、他の敵に混じると厄介な事この上ない。

それでもパーティーは、範囲技や複合スキル技で、HPを減らした敵から上手に殲滅して行く。ルリルリまで前衛に出張って、美井奈の安全をサポートしつつ。

安心して弱った敵に止めを刺す美井奈は、この陣形も既に慣れたもの。

敵の姿がようやく片付くと、ようやく上の層へと進む事が出来るように。右の端に最初のスイッチが見付かったが、高い位置からの

見晴らしも見事なものだと、呑気なコメントを放つ者も数名。

美井奈に拳骨の喝を入れつつ、弾美は最初のスイッチの確保を宣言。何しろ同じ層の視界内には、奇妙な蔦の形状の植物が、近付くものを捕らえようと待ち構えているのだ。

よく見れば、薔薇のような部位もあつたりして。

「あゝ、あんな感じの似たようなモンスターは、一度戦った事があるねえ」

「そう言えば、隠し通路の先の空中庭園であつたな。確かその時に、美井奈がワイバーンに連れ去られて慌てたような……」

「そんな事実はありませんよっ！ 何勝手に捏造してるんですかつ、お兄さんっ！」

「と、とにかくやつつけようか？」

薫がそういつて進み出した途端、遺跡の罟が作動。壁面の巨大な顔面の石像の口から、大きな岩が転がり出る。慌てて避ける一同だが、岩の数も結構多い。

その内に、岩を避けてる最中に仕掛けの床を踏んづけるキャラも出始めて。気が付けば、いつの間にか作動している石像の数が、3つに増えている始末。

無論、転がる岩から受ける被害も×3の有り様に。

「……遺跡はロマンチックとか、誰かが呑気に言ってたな。言い直すのは、まだ遅くないぞ？」

「ええと……遺跡は怖いねえ？ ここはアスレチックエリアだね、美井奈ちゃん？」

瑠璃が恐々と、美井奈と顔を見合わせて、素直に訂正して来るのだが。こうなると、歩を進めるのも休息するのも怖くなる、不思議な刷り込みが一同に作動してしまう。



仕掛けのせいで、危うく落下しそうになっていた美井奈も、一同に合流しつつ回復魔法を唱え始める。それから減ったMPを回復しようとして、弾美を窺って休憩の了承を得ようとするのだが。

ルリルリと二人で固まってるの休憩は、どこか挙動不審な感じ。

「な、何も起こりませんか？ 隊長、ちゃんと見てて下さいよっ！」

「あ、あれ……？ MP回復しないよ、ハズミちゃん？」

最初に瑠璃が、異変に気付いて弾美にそんな報告を。次いでの変化は、石畳に緑の苔が増え始めた事だろうか。何事かと周囲を窺う一同だが、薫が敵の接近に気付いたよう。

端っここでスイッチを守っていた筈の敵が、いつの間にか近くまで来ていた。茨の触手は伸び放題。先程までは変わった所が無かったので、どうやら地中を移動して来たようだ。

さらにカーソルを操作していた瑠璃が、上を見上げて悲鳴をあげる。石の天井の暗がりの中には、苔むした背中の巨大で平たい蟲が張り付いていた。

背中にはさらに卵を張り付かせたそいつは、田舎によくいるカメムシだ。

どうやら休憩をとってもMPが回復しないのは、こいつか苔かが邪魔しているせいだろう。嫌な仕掛けのアスレチックエリアパターンは健在。仕方なく、立ち上がって臨戦態勢を取る一同。

皆の準備が整ったのを見た弾美が、まずは薔薇の蔦に挑発魔法を打ち込んだ。途端に、何故だか天井の蟲型の敵も反応して来る。どうやら、2匹同時の相手は免れられないようだ。

しかし、その初期動作には一同引きまくるエフェクトが。

「わっっ、へこキムシが屁をひったっっ！」

「さすが田舎の出だな、薰っち！ 田舎じゃそう言うのか……」  
「ひ、酷いつ、MPが減って行くよっ！ どうしよう、ハズミちゃんっ？」

「落としちゃっていいですかっ、隊長!？」

巨大カメモシの特殊技で、一同は精神的にもダメージを喰らったよう。もちろんMP消耗も痛いのだが、臭いが充満しているエフェクトは何だか精神的にとっても嫌。

美井奈が頭に来て矢で撃ち落とそうとするのだが、お返し範囲魔法は強烈だった。どうやら大樹の歪んだ魔力のお陰で、ここいらの虫はほとんど魔法が使えるようだ。

そんな訳で、爆裂吹き飛ばし魔法でパーティは散り散りに。

完全に頭に来た美井奈は、お返しにと吹き飛ばしのスキル技を敵にぶち込む。さすがに今度は、ダメージと共に天井から落下する巨大カメモシ。  
スクリューアロー

そのままマラソンでキープしますと、皆に意気込みを語る美井奈だったが。弾美からは、するなら階段を降りてしろと言われて、さすがに視界から消えるのには不安そう。

それでもこの層の罠っぽい仕掛けは、全部引っ掛かって解いた確証も無い一同。それが万が一マラソン中に作動したら、目も当てられない惨事を引き起こすのは確かである。

渋々と、言われた通りに敵を引き連れて下の層に向かう美井奈。

匂いの攻撃は、薔薇の特殊技にも存在していた様子である。こっちはまだ精神的にもマシなのだが、誰かが寝る度に起きるコイルが湧き上がる変なノリの戦闘模様。

眠りの吐息を瑠璃がようやく《麻痺撃》で防ぎ始めると、パーティのリズムで順調に削りが進み始める。茨の鞭の反撃は痛い、エーテルでMPを回復させた瑠璃が、どんどん回復魔法で治して行く

サイクルに。

そんな訳で、ようやく薔薇のモンスターは散り散りに。

「倒したよ〜っ、美井奈ちゃん。カMEMシ持って来て〜」

「了解ですっ、こいつとつても足が遅いから、マラソン楽でしたよっ！」

「何か特殊技使ってきたか、美井奈？」

「ん〜っと……オナラくらいですか？」

そうらしい。そんな訳で瑠璃に特殊技の止めを指示して、四人で仕留めに掛かる。幸いオナラの発動前には、カMEMシがお尻をフルフルと振るわせるので、止めるのはさほど苦ではない。

魔法も弾美の《上段斬り》で、完全に止めてしまっているせいで危ない場面も来ないまま、最後まで削り切れると思つた矢先。巨大カMEMシのHPが半分を切ったくらいで、特殊技が発動。

背中に背負つた卵が割れ出して、黒い霧が立ち込め始める。

蟲の卵と思つていたのは、どうやら苔の一部だったらしい。苔が溜め込んでいた黒い霧は、パーティの視野を塞ぎつつ、SPやMPを容赦なく吸い取って行く。

慌てた時にはもう遅く、敵の姿は闇の中。ターゲットを失って右往左往する中、巨大カMEMシの攻撃だけが激化して行く。前衛は空振りばかり、その内に毒の霧まで立ち込め始める始末。

頼みの美井奈も、本気を出して良いものかと不安げに弾美を見遣る。

「わっ、毒状態になっちゃってる！ MPもSPも減って行くし、ここは嫌だっ。一旦離れるね？」

「美井奈っ、吹き飛ばして敵を燻し出してくれっ！ 魔法で攻撃したいけど、MPが無いっ！」

「りよ、了解ですつ、隊長！」

一行が黒霧のエリアを離れても、賢い巨大カメムシは追って来てくれない。それどころか魔法の詠唱音が聞こえて来て、ビビリまくるパーティー同だったのだが。

美井奈の一撃が、詠唱を止めつつ敵を後方に吹き飛ばしてくれた。ようやく姿を見せた敵に、瑠璃がなけなしのMPを使つての《魔女の足止め》での釘付け。

前衛陣が取り付いて、新たな戦闘地帯を築く。瑠璃は離れた場所までヒーリング。再びの黒霧の気配を感じて、後衛に陣取っていた美井奈が再度の《スクリューアロー》を放つ。

最後はほぼ、美井奈の遠隔と瑠璃の回復したMPでの《ウォータースピア》で削りきつての戦闘終了。凶悪な臭いと黒い霧のコラボに、ややてこずつた感があったものの。

苦勞しつつ、何とか1つ目のスイッチ確保である。

右の壁沿いの通路に、上へと登る階段が見えているのだが。妖精の話では、左の崩れかけた細い通路の先に、透明スイッチが1つ隠れているらしい。そちらを先にと進む一同だったが、下層の見える壊れかけた石の畳を見るにつけ、瑠璃と美井奈の足が止まってしまう。

どうやら自然に、ここは弾美か薫の担当になってしまいそうな雰囲気だけれど。ここから落つこちて余計な手間を掛けられても困るので、弾美は敢えて語らずじまい。

妖精がとうとう、ここだと場所を限定した。ポケットからのアイテム使用で、スイッチ出現。

「後ろの二人くっ、使い方ちゃんと見てたか？」

「う、うんっ、使い方はちゃんと見てた」

「何か光つてると思つたら、蛭が飛んでますね、お姉ちゃまっ」

弾美の制裁の拳が伸びてきたのを、美井奈がすかさずキャッチ。兄弟喧嘩のような遣り取りを楽しむ二人に、画面の中のキャラは置いてけぼり。一足先に戻っていた薫は、気を利かせてハズミンも操作して安全圏へと連れ戻す事に。

肝心の弾美と美井奈は、瑠璃を挟んで攻防中。ちよつと迷惑そうな瑠璃だったり。

何とか一息付いて、一行はさらに上の層へと向かう。雑魚が何匹かうつっている中、スイッチも2つ確認出来た。周囲の掃除を皆で仲良くしつつ、安全の確保を図りに掛かるパーティ。

この層には、見た限りでは仕掛けの類いは無いようだ。慎重に歩を進めていた前衛陣だが、何事も無くスイッチ前に辿り着いてしまつと、ちよつと拍子抜けの感じ。

この層のスイッチは、右の壁際の階段を上がって一番広い手間のフロアに1つ。手前から見て左の壁の細い通路の奥の方に1つ設置されていた。

あとは四人が、1つずつスイッチを受け持てば良いのだが。

「あれっ、これでこのエリアはクリアですか？ ここに入ってまだ40分位ですけど」

「そんなもんだろ、最初のステージだから簡単に作られてんだよ、きつと……さて、俺と薫っちが下を受け持つか？ 上は適当に二人で分けてくれ」

「あれえ……中央の浮いてる鳥の巣みたいなのは飾り？ 本当に終わりなんだ？」

「さつき調べたけど、鳶の橋みたいなのは乗れなかったよ？ もういける場所は無いかな？」

弾美と一緒に下の層に移動しながら、薫がそう報告する。それな

らしいかと、瑠璃が左の壁のスイッチに向かう事に。場所的には、丁度弾美の受け持ちのスイッチの真上の感じだ。ただし、こちらは辿り着くまでの通路は壊れていないので、瑠璃でも安心。

自然と美井奈が、最後の広場のスイッチを受け持つ事に決定して何故かそれは、手前のフロアの一番目立つ中央の場所に設置されていたのだが。

正面には、皆が首を傾げた浮島が。美井奈、ちよつと嫌な予感。

念のためと、後衛陣は休息を取ってMPの回復。弾美と薫が配置につくまでに、回復は終了したのだけれども。やっぱり仕掛けが無い事に、かえって不信感が募ってしまう。

一番距離のあった弾美が、ようやく配置についたとパーティに報告。音頭を取る声が室内に響き、リズムを揃えてスイッチを押す四人。光は確かに、ちゃんと4つ同時に灯った。

今度も転移が起こって、いよいよステークリアなのだろうと予想していた一同だったのだが。そんな安易な想像を覆す、画面上の変化はやっぱり美井奈のまん前のアノ場所から。

鳥の巣のような浮島の、ドーム状の蔦のカーテンが萎れて行く。

そうして浮島に姿を現したのは、有翼の巨大な白い豹だった。翼も白く、すらりとした体躯の神秘的な姿である。お付きに、これも真っ白で大きなトーテムポールを2体従えている。

美井奈の悲鳴は、本能的に危険を察知したためだろう。遮るものの無い視界の先に、確かに少女は孤立していたのだから。もちろん、出現した敵の狙いもソロで佇む雷娘。

浮島から真っ直ぐ飛来して、急襲を浴びせて来る。

「美井奈っ、魔法使えっ！ 光の玉呼び出せっ！」

「にゃ、にゃあっ、魔法っ！」

「い、今行くねっ。美井奈ちゃんっ、頑張って！」

「おっ、同じくっ！ でも遠いかもっ？」

少女の悲鳴と同時に、異変を悟ったパーティメンバー。ヘルプに駆けつけようとするのだが、何しろ戦場まで距離がある。同じ層にいる瑠璃でさえ、魔法攻撃範囲に入るまでもう少し時間が掛かりそう。

美井奈は下手に動かずに、弾美の指示通りに《フェアリーウィッシュ》を自身に掛ける事に辛うじて成功。何とか、敵の襲撃前に掛け終えたのは僥倖だった。

熾烈な噛み付きと、鉤爪攻撃をダメージを受けずにいなせたのだから。

その隙に《幻惑の舞い》を掛けたルリルリが、タゲを取ろうと突っ込んで来る。それに反応したのは、空中のトーテム2体だった。ブロックするように、瑠璃の前に立ちはだかる。

相変わらず宙に浮いているトーテムに、剣の切っ先は届きようもない。魔法で攻撃しながらも、何とか美井奈のサポートをと必死に動き回る瑠璃だったのだが。

美井奈の周囲の光球が1つ、2つと減って行くのにはさすがに不安顔。

次に戦場に駆けつけたのは薫だった。掛かった時間はそれでも1分程度なのだが、戦場は酷い有り様。美井奈は既にHPが半減しており、雷精まで召還して瑠璃に回復を貰っている。

その瑠璃も、決してフリーな訳ではない。敵も直接攻撃をして来ないので、魔法を唱える時間が何とか取れるのだけ。トーテムから逃げ回って、それ程余裕も無い感じ。

薫は素早く、弾美の到着時間を隣の画面からチェック。

「弾美君、私はどっちをフリーにしようか？ 美井奈ちゃん、結構

ピンチかもっ！」

「取り敢えず瑠璃をフリーにして、瑠璃がサポートに廻ってくれっ。すぐ行くからっ！」

「りよ、了解っっ！」

弾美が一番遠い場所にいた事が、これ程響くとは思っていなかった一行である。辿り着いたばかりの薫が、範囲魔法の《炎のプレス》でトーテムのタゲを取りに掛かる。

ところが、戦場は混迷の度を増して行くばかり。瑠璃が魔法で攻撃を仕掛けていた事もあり、さらに回復の飛ばし過ぎで有翼の白豹のタゲまで取ってしまった。薫がタゲを取る前に、何だか敵の標的はぐっちやぐちやに。

思うように俣ならないのは、現実でもゲームの世界でも同じ事。弾美が到着した時は、戦場はととても酷い有り様。ほとんど皆のHPが半減しており、回復にMPも底を尽いている。

呆れ顔の弾美は皆に喝を入れつつ、白豹のタゲ取りを敢行。

さすがに弾美のタゲ取りは、他のメンツとは一味違う。武器もレイブレードに取り替えて臨んだ大ボス戦。各種の魔法強化も、到着前にばっちり済ませてある。

これで何とかフリーの者が出来た。美井奈から早速ヒーリングに入り、ポケットの整頓で戦線復帰の準備に掛かる。MPが回復したら、皆に《風の癒し》と自分に《フェアリーウィッシュ》の魔法の掛け直し。

それから今度は瑠璃をフリーにすべく、トーテムに全力の《スクリューアロー》で攻撃&タゲ取り。お礼を言いつつも、瑠璃もようやく休息のサイクルに突入して行く。

反撃のビームも光球がブロック。美井奈の攻撃は続く。

「柱っっ、降りて来いっっ！ もうMPがないからブレス吐けない



っ！」

「前はどうしたら、こいつら降りてきましたっけ？」

「ボスを倒したら……かな？ よしっ、弱ってる方に攻撃を集中してみようっ！」

瑠璃の提案で、ルリルリの水魔法とミイナのスキル技がHPを減らしたトーテムを襲う。HPが半減した敵は、浮遊状態を放棄。そこにすかさず、カオルの《貫通撃》が見舞われる。

お付きのトーテムの1体が、ようやく消滅したと思ったら、有翼の白豹が急にやる気モードに突入。翼で浮き上がったと思ったら、咆哮からの特殊攻撃の三連牙を弾美に仕掛ける。

「わっっ、強化がほとんど消えた所に連続スキル喰らったっ。酷い、HP半減だっ！」

「わっっ、こつちにも届いたよっ。咆哮の効果だねっ、このスタン！」

「な、長引かせると怖いですねえ……薬品使って、ちょっと強引に行きますよっ！」

美井奈は言葉通りに、残った雑魚に《みだれ撃ち》からの《貫通撃》の連続スキルを使用。さらに闇の秘酒を使用しての《スクリュアーロー》で、近付いて来た敵と距離を取る。

瑠璃の《ウォータースピア》の加勢も飛んで、2体目の雑魚も浮遊状態を手放す結果に。それを見た薫が、こいつも槍の餌食にと勢い良く突っかかって行く。

どうやらお付きは片付きそうと、瑠璃と美井奈は弾美を気にするのだが。

弾美は強化の張り直しに悪戦苦闘。《闇の腐食》と《竜人化》を消されては、強烈な攻撃を凌ぎ切るのは困難なのだ。白豹の牙と

爪の攻撃が、なかなか途切れてくれないのだ。

手の空いた美井奈が、SP貯めの軽いジャブ攻撃を開始する。白豹には自動回復能力が備わっているらしく、ちよっとの傷はあつという間に治ってしまうらしい。

ようやく休憩の終わった瑠璃と、お付きを倒した薫も合流。ここからだ気合も新た。

「よしっ、一気に削るぞっ……瑠璃、飛行しそうになったらスキル技で止めてくれっ！」

「りよ、了解！」

「さてっ、削ろうか、美井奈ちゃんっ！」

「おっけ〜ですっ、薫さんっ！ 初っ端に、滅茶苦茶殴られた仕返しをしますよっ！」

気合も入り過ぎなパーティは、SPが貯まると強烈なスキル技で敵を追い込んで行く。反撃も強烈なのだが、弾美は硬い盾と的確なガードで何とか凌いでいる。

白豹はHPが半減すると、今度は雷のブレスやスタン咆哮での攻撃に切り替えて来た。しかしそれも、瑠璃に飛翔からの必殺攻撃を封じられてはお手上げの様子。

あれを何度か喰らっていたら、かなり怖かったのだが。

最後は美井奈が恨みのこもった《貫通撃》で、見事大ボスを仕留めるに至って。久々の全員でのハイタッチも、結構な盛り上がりを見せていたり。それだけ凶悪な仕掛けだったのだが。

一歩間違えば、各個撃破されていた所。

ようやく安堵して、一息付くパーティ。さらに瑠璃がこれで29にレベルアップ、皆に祝福を受ける。身についた癖で後衛が休息している中、薫が白豹の出現地帯に光る浮遊物を発見する。

お祝いと報告が行き交う中、弾美もそれを見て鳶のつり橋をチエックしてみると。さっきは通れなかった通路が、何と今度は通れるようになっていた。

中央の浮島には宝箱も置いてある様で。それを知り、浮き浮きと近付く一行。

「おっ、緑の木の葉ゲット！ これで4枚目だなっ」

「ここは45分リミットだっけ？ あれ、1部屋って事？ 全部でその位だったね〜」

「確か1部屋でしたね〜。今日はまだ、1時間くらい余裕あるのかな？」

「宝箱ありますねっ、開けてもいいですかっ？」

雑談と確認作業と、お楽しみ宝箱チエックに忙しい面々だけれど。4つある宝箱の中には、風の術書に金のメダル、知恵の果実と4万ギルが入っていた。

それから先ほどのボス戦では、武器や防具のドロップが割と豊富に。ピアスは特に、ユニークでありながらも実用的な1品。協議の結果、これは弾美が貰う事に。

神樹の長杖 攻撃力+25、知力+5、MP+28 ≪耐久14/14≫

白豹のマント 雷スキル+4、器用度+4、MP+10、防+10

白豹のピアス 器用度+3、HP+10、落下ダメージ減、防+5

「本当は、落下しそうな瑠璃か美井奈が持てばいいんだろっけどな。他の装備は美井奈かな？」

「放っておいて下さいっ……えっ、2つとも貰っちゃっていいんですか？」

「いいよ、って先にここ出ようか？ みんな木の葉取ったのかな？」

木の葉を全員取ったと同時に、脱出用の魔方陣が浮島の端っこに出現したようだ。皆がそこに飛び込むと、中立エリアのイベントゲート前に放出される。

さて買い物だとか、お金に余裕が出来たとか、実はマントも固定化されていてとの告白の中。取り敢えず、次はどこに行こうかとの協議がパーティ内でなされるのだが。

弾美は入って来た通信を返すのに忙しいらしく、適当に決めておいてと他人顔。

女性陣はそれを受けて、気楽にワイワイと話し始める。限定イベントの時間縛りも、まだ1時間程の余裕がありそう。それだけあれば、どこへ行くのも不自由はしない筈。

慣れない場所でのインであっても、ゲームの中では別の話だ。

薫も何とか、部屋の提供者としての責務は果たせた感じで安堵の表情。ここでエリア攻略失敗などしていたら、物凄くバツの悪い思いをしていたであろう。

ツキの悪い部屋だとか烙印を押されたら、さすがに敵わない。

そんな事を考えながら、後半の成功祈願を心に念じる薫だった。

今日も良い天気！ せっかくの休みなのに、午前中はまったりしてましたけれども……さて、午後は本当にどうしよう？

部屋の片付けとか掃除とか、テレビの設置とか。やるべき事は、色々ある筈なんですけどね。暑いせいか、いまいちヤル気が出ません。

買い物に出掛けようかな、お金は無いけど（笑）。

さて、もう少しで掲載してた章の投稿が全部終わっちゃいそうです。未投稿の小説の反響がどんなのか、今からちよっとドキドキなんですけど。全然期待されてなかったらどうしようかって、何だか心配な気がします（笑）。

物語は大学の敷地内を年少組が見学して廻るお話ですけど。自分も初めて受験する大学を見学した時には、軽いカルチャーショックを受けました。友達の受かった大学に遊びに行った時もそうだけど、一種独特な雰囲気がありますよね、系統分けされた学業を修める場所って。

自分は心理学科を専攻してましたが、瑠璃のように統計の教科書見て笑う癖はありませんでしたね（笑）。

薫のハーブのお話とか、バスケのお話なんかは、自分の実体験からの導きによるものなんですが。そんなに詳しくは学んでなくて、掘り下げて書けないのが残念なところです。

サボテンや植物の面白い本があったら、是非とも教えて下さい。それにしても、このパーティは仲が良くて羨ましいですね（笑）。

そんな感じの18・5章、まずは読んでみてください

「ジェル1個カバンにあるよ、美井奈ちゃん。ハズミちゃんに内緒で使っちゃおう！」

「思いつ切り聞こえてると思うけど……炎の術書は無いかな、瑠璃ちゃん？ 出来れば、炎のブレスを強化しておきたいんだけど」

「あつ、前はいっぱいあったんですけど。ギルドで融通し合って今は2枚しか無いなあ……はいつ、薫さん。指南書もあるけど、使いますか？」

「ん、私は炎の術書だけでいいや。ありがと」

通信に忙しい弾美にそれとなく窺った結果、瑠璃と美井奈で使っても良いとの言葉だったので。ここぞとばかりに貯まっていた術書や指南書を消費する女性陣。

結果、瑠璃の細剣スキルが50に達し、新スキル技の《Z斬り》を覚える事に。突き技程には強烈では無いが、安定したダメージとスタン効果が望めるらしい。

これでダメージのほとんど無い《麻痺撃》に頼らずに済むかもと、瑠璃は大喜び。

美井奈も同じく新しいマントの融通で、新雷魔法の《スパーク》を覚える事となった。その結果として指輪とマントを再び固定化してしまっただが、それは弾美にはナイショである。

新魔法の効果は、一言でいえば自分の周囲に放電効果なのだが。範囲の攻撃魔法と言うよりは、自分の周囲に待ち伏せのトラップ的な使い方も出来てしまう魔法である。

もちろん、囲まれた際に使えば、立派な範囲攻撃を期待出来るのだが。

「さてとっ、あと1時間だからもう1箇所は廻れるかな？ どこへ行こうか？」

「次はやっぱり、裏エリアでお姉ちゃまの装備取りが良いかと！ 順番的にもですが、ここは譲れませんかよっ！」

「私は本当は、妖精のクエを進めたいんだけど……流水装備取りでもいいよ？」

美井奈の勢いに押される格好で、瑠璃も裏エリアに1票を投じて決定の流れに。薬品類を買い足して闇市に移動して、女性陣の準備はばっちり完了したのだが。

肝心の弾美が、なかなか戻って来ない。瑠璃がログをチェックすると、器用な事にサブマスの進と、マリモの店長と、さらには他のギルマスのメグミと同時会話をしていた。

いつの間にもやら、部屋の全員が弾美のモニターの会話の流れを注視している。マリモの店長は知っての通りに、地上に達する前に敢え無く資格を喪失したそうで。

メイン世界からの通信で、しきりに続きの内容を教えたと弾美にせがむものの。

弾美はまた今度ねと無視モード。

高校生女性ギルドのメグミと言えば、順調に3パーティに別れて情報を交換しながら進めていたらしいのだが。パーティの1つがイベントエリアで全滅。時間制限に引っかけたままたらしく、奥のエリアに進むにつれ難しくなると教えてくれている。

メグミ本人のパーティは、相変わらずの遠回りモードらしく。弾美達と大体同じルートを進んでいるよう。ただ、木の葉は6枚集めているので、弾美達よりはペースは早いようだ。

上手く行けば、メグミチームも明日辺りに地上エリアをクリアしそうな勢い。

進のチームは、色々と試行錯誤があったものの。4人の装備をある程度固めて、イベントエリアをクリアしてしまおうと言う作戦に落ち着いたらしいのだが。

4つ目のエリアと5つ目のエリアで1回ずつ全滅して、もう少し力をつけようと逆戻り。裏エリアで修行したり、金のメダルを捜し求めたりと、現在はそちらに時間を使っている様子だ。

気が付けば、進のキャラはハズミンの隣に立っていた。

「うわっ、何だかみんな、イベントエリアの4つ目以降で苦労してるみたいだねえ……」

「そうですねえ、薫さん……あつ、ハズミちゃん。いらぬ武器や装備を、今の内に渡しておいてもいいかな？」

「おうっ、そうしてくれっ。メダルやロウソクは、さすがに渡せないかなあ」

「余るんないけどねえ、まだちょっと分からないねえ」

同じギルドメンバーの苦戦振りに、女性陣もちょっと心配そうではあるのだが。こちらもすんなり行きそうかと問われれば、心許ないと答えるしもなく。

瑠璃のトレードに、進は感謝の素振り。ギルド会話に切り替えて、皆にお礼と励ましの言葉を送って来る。そっちも頑張っつてね〜と、華のある返答が束の間湧き起こって。

そんな訳で、ようやく弾美の通信も一段落つき。皆で闇市に移動の運びに。

「おっ、行く場所は裏エリアでいいんだな……今度はどこだっけ？」

「お姉ちゃまの装備ですよっ、ええと……流水でしたっけ？」

「そうだねえ、チケット買っよ、ハズミちゃん？」

「おうっ、腹減ってきた。さくつと済ませて昼飯にしよう！」



その言葉に、美井奈が笑いながら弾美を見る。今日は大学の学食にお昼は寄る予定なので、差し入れの類いは持って来ていない。母親も、弾美の食欲旺盛振りには驚いていた。

それはともかく、裏エリアにインした一行は。まずは恒例の謎解きからだど、売っているアイテムと方角をにらめっこ。薫が情報ノートを読み上げながら、手掛かりを一行に指し示す。

瑠璃が小首を傾げて、即座に答えを導き出した。

「地面の無い大地に在りつて言うのは、北極の事かな？ 南極はちやんと大地があるから」

「お前は相変わらず、問題を簡単に解くなあ……つまらん。じゃあアイテム買ってくれ」

「何をお姉ちゃまに、いちやもんつけてるんですかつ！ 素晴らしい頭脳明晰振りじゃないですか」

「そうだねえ、じゃあ北の方角に『永久氷土の欠片』でいいみたいだねっ」

薫がノートに書き込みながら、問題の解答の最終チェック。褒められているのか貶されているのか良く分からない瑠璃は、恐縮しつつもアイテムを購入して北の台座にトレード。

視界が暗転し、一行が転移したのは氷の平原。

寒々とした景色が一面に広がる景色のそこは、確かに氷の平原だった。ひときわ目立つのは、一行の隣の段々の山だろつか。3段階構成になっていて、やはり氷で出来ている仕様らしい。

建造物のようにも見えるが、ぱっと見入り口や階段はどこにも見当たらない。山の周囲には松明が等間隔に設置されているが、今のところ炎は一つも灯っていない。

敵の姿は……遠くにちらほらあるようだ。

「ここは、北極？ うわっ、空のオーロラ綺麗ですねっ！」

「北極かどうかは知らないけど……ここで俺達はどうすればいいんだ？」

「ルールが分からないとねえ、動き様が無いよ？」

「そういう時は、妖精に聞けばいいんですよ！ イベントエリアでもそうでしたよねっ？」

ところが妖精は、助言をする所ではなく。呼び出された途端に、さむっ！ と一言、止める間もなくカバンに戻ってしまった。意気揚々と実行した美井奈は、完全にフリーズ状態。

それを見ていた弾美はケラケラと笑い出し、美井奈は完全にむくれてしまう。獅子身中の虫とはこの事かと、薫は味方の中に羽根付きの敵を見た思いのだが。

手掛かりは無いものかと、薫が松明を調べてみると。

案外と簡単に、火種をトレードするようにと指示が返って来た。その火種はどこかと周囲を見回すと、なんとなく遠くのフィールドに、炎の揺らめきらしき物が見えている。

薫がそう口にする、弾美が松明の数をざっと数え出した。美井奈も渋々、弾美に《俊足付加》を掛ける。スキルが30に到達したために、他人にも掛けられるようになったのだ。

瑠璃も戦闘に備えて、皆に強化を掛け始める。調子に乗った美井奈は、とうとう全員に俊足魔法を掛けてしまった。それではと、魔法を貰った薫は率先して偵察に出る。

弾美は8つ松明を確認、遠くに炎が見えたから取ってきてくと報告。

「あれっ、私も違う所目指してるけどいいのかな、弾美君？」

「時間節約でいいんじゃないか？ ってか、どう考えても火種が足

りない気がするんだけど」

「他にも取得手段があるのかも……ん、敵のドロップとか？」

「な、なる程っ、さすがお姉ちゃまつ！ 試しに何匹か釣ってきましようか？」

弾美が美井奈の提案に、すかさず待ったを掛ける。薫の画面と見比べて、近くに敵がいなかチエック。薫の目指す炎の近くには、トドの顔の獣人が何匹かたむろしていた。

弾美は獣人なら、持っていても落としやすいだろうと想像を口にする。薫は了承して、近くの炎をチエック後に《炎のプレス》で数匹引き抜いてダッシュで戻りに掛かる。

炎はチエック後、呆気なく消えてしまった。その代わりに火種をゲット。

やっぱり、どう考えても火種は足りそうに無い。瑠璃達のいる拠点を目指しながら、薫が心配そうにそう口にする。弾美も1つ、別の場所で入手に成功したようだが。

俊足を飛ばして皆の待つ拠点へ。戦いは既に始まっていて、敵はなかなか手強そう。

「ぽつぽつと敵の拠点もあるみたいだな。ちよつと散らばって、炎を探し回るのは危ないかも」

「わっ、マップ画面は使用不可だっつて、ここ！ ……山を見失ったら、ちよつとピンチかも？」

「えっ、マップ見れないんですか、お姉ちゃまつ？ それは……迷いそうで怖いですねえ」

呑気に会話などしつつ、弾美もようやく戦闘場所に合流。ガシガシと敵を殴り始めて、殲滅の手助けに掛かるのだが。氷のプレスやスケートチャージなど、敵の特殊技も氷系の変わった物が多くて、

咄嗟の対応に手間取ってしまう面々。

それでも3匹目の敵が、案の定の火種をドロップする。瑠璃の背中をバシバシ叩いて、弾美は見事な推理を労うのだが。4匹目は中ポーションしか落とさず、ドロップ率は微妙。

パーティは、ここで作戦会議。危険を承知で遠出をするか、このまま敵を狩り続けるか？

氷の山が見える範囲で、取り敢えず時計回りで周回してみようとの意見が薫から出た。それならば、自分達の位置を見失う事も無く済むので安全だ。

さすが年長者、良い案だとの皆の支持の元、氷の平原を歩き出す一行。先程、薫が獣人の群れを見つけた場所をまず目指す事に。トド顔の獣人は、まだ結構な数いるよう。

早速の遭遇に、勢い付いて倒しに掛かるパーティ。

時間はそれなりに掛かったが、敵の殲滅には取り敢えず成功した一行。しかし、獣人を6匹倒して火種のドロップがたった1つなのは、完全な期待外れと言うしかない。

移動しながら話し合うパーティ。これって意外と大変かも？

「あつ、でもその丘に4つ炎が……ああつ！」

「えっ、うわっ、変な敵が今炎を消したっ!？」

パーティが視野に入った途端、4つの炎の中央にいた敵が順々に炎を消しに掛かり始める。絶叫しつつも、遠隔範囲に入るなり攻撃を仕掛ける美井奈であった。

幸い、消された炎は1つで済んだのだけど。のそのそと動くそれは、どうやら白熊の獣人に見受けられる。やたらと上半身ががっしりしていて、手には槍とか棍棒を持っている。

そして、やっぱりやって来たスケートチャージ。美井奈の絶叫は

続く。

トド顔の獣人より、戦った感触は遙かに強かった白熊獣人。敵は2匹のみだったお陰で、程なく倒し切る事に成功して。ドロップにも火種が出て来て、ここで何と8個揃ってしまった。

これはラッキーと油断していた訳ではないが。急な襲撃は、何と氷の下から。

「わっ、わっ、何っ？ サメのヒレが見えた気がっ!？」

「ってか、今ので美井奈喰われたろっ？ ヒレを殴れっ、美井奈が死ぬっ！」

「わっっ、私が一人で離れて立ってたからっ？ 狙われるのはいつも私ですかっ！」

「わっ、イソギンチャクが氷の下から生えて来たっ？ 挟み撃ちだよっ、ハズミちゃんっ！」

瑠璃が慌てて指摘する通り、一行のすぐ近くに巨大イソギンチャクが出現して来た。そんな事より美井奈の救出が先だと、弾美がヒレにようやく近づいて一撃を見舞う。

ようやく救出された美井奈はともかく、安心する暇も無く姿を現した敵と対峙する一行。それは海のギャング、シヤチだった。どことなく凶悪なフォルムに、強そうなのは分かるのだが。

瑠璃が咄嗟に氷魔法で、離れた場所のイソギンチャクを足止めする。四人で一斉にシヤチへと向かうパーティだったが、イソギンチャクの足は元々遅いようだ。

合流前に何とか数を減らそうと、皆の削りに力が入る。

巨大シヤチの呑み込み技を、新スキルの《Z斬り》で発動阻止しまくる瑠璃。何となく誇らしそうに、そのスキルを放つ度に掛け声を掛けて自己アピールに余念がない。

負けじと恨みの言葉を放って攻撃参加しているのは、その隣の美井奈だったり。何度呑み込めば気が済むんですかと、ひたすら自分の境遇を嘆いているのだが。

呆れて気が抜けた訳ではないが、まずは薫が尾ヒレの餌食に。撥ね飛ばしの特特殊技で、遙か彼方に飛ばされてしまつて。停止後、大慌てで氷上を戻ろうと駆け出すのだが。

さすが氷の上と言うしかない。普段の倍は距離が出ている。

次いでの特特殊技はマシンガン弾で、範囲に氷の飛礫が飛んで来る大技だった。サメと戦つた時は、確か小判ザメの魚雷だったが、海のギャングはそれを上回っているよう。

強烈な攻撃は、後衛の美井奈まで届く有り様。少なくともダメーヂを喰らつて、後衛ばかりか皆が大慌て。回復を飛ばそうとした瑠璃に、さらに不幸が襲い掛かる。

巨大イソギンチャクの麻痺魔法と、次いでの水弾で畳み掛けられ大ピンチ。

「わっつ、いつの間にかイソギンチャクが来てたよっ！ 麻痺になつてHP半減しちゃつたっ！」

「平気ですか、お姉ちゃまつ！ 今コイツのタゲ取りますねっ！」

「薫っち、早く戻つてこいっ！ シャチあとHP4割だっ！」

「ごめんっ、普段の倍も飛ばされたっ。今戻るねっ！」

美井奈が素早くイソギンチャクのタゲを取つて、マラソンの準備に取り掛かる。何とか万能薬で麻痺を回復した瑠璃が、皆のHPを急いで回復して行く。

四人での行動も随分こなれて来ており、混乱から回復するのも素早くなつて来た感があるのだけれど。薫がようやく戦線復帰して、スキル技で容赦なくラストスパートに参加する。

最後のシャチの連続特特殊技も、何とか大事には至らず。程なく削

り切りに成功。

足の遅い巨大イソギンチャクは、美井奈の遠隔のいいカモだった。弾き飛ばししの複合スキル技で結構なダメージを与えて、マラソンしつつも弱らせていたように。

お陰で、弾美がタゲを取り戻すのに相当苦勞をしたものの。美井奈は反撃の《ウォータースピア》にへろへろになりつつも、安全圏へダッシュで逃げ切る。

水魔法の熾烈な攻撃も、弾美と瑠璃で華麗にスタン防御。麻痺に苦しめられつつも、大物モンスターの2匹目も何とか撃沈に成功。お楽しみドロップは、薬品が数点のみ。他にはシャチから業火の種火を、イソギンチャクからは普通の種火をゲット出来た。

違いはあるのかと、訝る一行だったが。取り敢えず、戻って試してみる事に。

炎を8つの松明に灯して行く作業は、割と滞りなく進んで行った。各自持っていた種火を順次トレードして行くと、やがて氷の山に靦面な変化が起こる。

美井奈が山のこつち側に通路が出来たと騒ぐので、皆が集合して覗き込んでみると。透明で真っ直ぐな通路が、山の中央まで続いているのが見て取れた。

一行が注意を配りながら進んで行くと。中は円形の部屋になっており、宝箱が6つ並べておいてあった。嬉々として皆で開けて行くが、ほとんどが消耗品の品揃え。

氷の蜜神と氷の術書、氷の水晶玉と闇の秘酒、大エーテルと2万ギルという結果に。

「ここまで15分くらいかな？ 目当ての装備は……もつと上かな、多分？」

「ふむっ、確かに上に上がる階段があるな。行って調べてみるか」

「氷の部屋つて、ちょっと面白いねえ……寒そうだけど」  
「そうですねえ、でも私は寒いのが苦手ですから、住みたくは無いですねえ」

上に続く螺旋状の階段は、外に向かう通路に続いていた。外と言つても山の中段の外周の棚段で、下と同じく等間隔の松明が掲げられている。無論、どれにも炎は灯っていない。

仕掛けがようやく飲み込めた一行。上を見上げると、もう一段上に誇らし気に大きな松明とその中央に宝箱が見える。薫が中段の松明の数は5つだと報告して来た。

やれやれまた種火集めだと、一行は氷原を目指す事に。

「ええと、どこまで進んだんだっけ？ さっきのシャツが出て来た場所、誰か覚えてないか？」

「んと……こつちだったかなあ？」

「確か、そんな感じかな？ まあ、大きくは間違っていない筈っ！」

瑠璃の指し示す方向に、薫が太鼓判を押す。それではそちらに向かおうと、美井奈が率先して歩き出し。こんな開けた場所だと、目印が無くてかえって大変だと愚痴をこぼしてみたり。

確かにそうだと、弾美も一応の同意を示す。メイン世界には、間違つてもこんなエリアは存在しない。手抜きとも言われかねない斬新な作りではあるが、時間制限があるのに迷子になるのは洒落にならない罠かも。

前方に、ようやく敵の群れ。今度はペンギン顔の獣人らしい。

敵も同じ位にこちらを見付けたようだ。近付いた際の一斉のスケートチャージは、一見の価値はあったのだが。喰らったダメージは洒落にならない値。美井奈は慌てて距離を取る。

後衛の杖持ちのペンギン獣人が、足止めを喰らった一行に呪文を



唱えて来た。ド派手な範囲魔法の《アイスクラック》は、チャージの後では深刻なダメージである。

瑠璃など3割までHPを減らしてしまい、大慌てで回復を唱えている。弾美は強引に、複合スキルで前衛ペンギンのタゲ取り。薫が杖持ちペンギンの魔法の追撃を潰しに向かう。

それと同時に、何故かタゲを取った筈の前衛ペンギンが猛烈に引き返して行く。まるで薫の後を追うような素振りに騙されて、慌てるパーティだったのだが。

実際は巧みな距離取り行為、2度目のチャージは弾美一人に集中する結果に。

「うぎゃっ、やばいつ、こいつら知能犯だっ！」

「わっつ、HP残り2割じゃないですかっ、隊長しつかりっ！」

「見掛けの可愛さに惑わされちゃ駄目みたいっ、こいつら白熊より強いかもっ！」

パニック状態のパーティ会話。フリッパードの連続攻撃も、ガードが間に合わない程回転が速く、チョー危険な相手のようだ。しかも前衛は5匹もいるのだ、ピンチはまだまだ続く。

瑠璃の回復と薬品使用で、何とか命を繋いでいた弾美だったが。複合スキル使用で《竜人化》を解いてしまったのは痛かった。今は《シャドータツチ》で、何とか合間のHP回復のみ。

詠唱の長さが違うので、戦闘中の《竜人化》使用はまず無理なのが痛い。それでも瑠璃と美井奈の支援で、ようやく1匹目が氷の大地に倒れ去る。

それと同時に、逃げるように距離を取ろうとするペンギンズ。追うハズミン。

そう何度も、強烈な特殊技を受けてやる必要も無い。適度に距離を置いて、合間に《竜人化》を掛け直す。敵はチャージの距離も、

魔法を潰す事も出来ずにオタオタ。

すぐ近くで、薫と杖持ちペンギンが死闘を繰り広げていた。風魔法のサイレンスは、敵の魔法を阻むと言う、割とポピュラーな弱体魔法なのだが。誰も覚えていないのが地味に痛い。

瑠璃と美井奈もすぐに追いついて、HPの少ない敵を仕留めに掛かる。3匹に減らしてしまえばかなり楽だと考えていた矢先、杖持ちペンギンが弾美も巻き込んだ氷のブレス。

侮れないと舌打ちの弾美。しかし、離れるとチャージが来てしま  
う……。

お返しの薫の《炎のブレス》は、結構な見ものだった。思いつきり弱点属性だったため、ペンギンの群れは大騒ぎ。それに付け入って、さらに美井奈が1匹撃墜に成功する。

固まった事は、敵にもマイナスだったようだ。薫、さらに容赦無くブレスの追い討ち。

これがきっかけで、ペンギン顔の獣人は総崩れ。敵の悪知恵が、反撃の呼び水になってしまふという顛末に。何はともあれ、一行は戦闘終了後の休息とポケットの補充。

6匹の獣人からの火種のドロップは3つ。まずまずの結果だが、5つには足りない。

「これで火種は4つかな？ 道を開くには、あと1つ足りないね。」

「業火の火種つてのは、1つでいいんですか？ 大きい敵しか落とさないんですかねえ、これ？」

「それは一番上で使うのかな？ 頂上の松明、ちょっと大きかった気がしたけど。」

ヒーリングしつつ、色々な推論を述べる一同だったけれど。取り敢えず、敵を探すか炎を探すかしないと謎解きが進まないのは、導

き出された確定的な事実である。

回復を終えると同時に、再び元気に進み始める一行。程無くして、次の敵は向こうから来てくれた。しかも、パーティが注意を全く払っていないかった空中から。

パラシュートで降りて来るペンギン顔の獣人と、浮遊するクラゲ。インパクトは大。

「うわっ、クラゲでかつ！ あれも敵か？」

「ど、どうだろう？ うわっ、今回は杖持ちペンギン多いなあ」

「作戦としては、魔法は使わせない方向かな？ 氷魔法強烈だもんねっ！」

「わっ、わっ、クラゲもやっぱり降りて来ちゃいそうですがつ！」

今回は、薫の《炎のプレス》頼りの作戦が良さそうだと。弾美の指示で、各所に落ちてきた杖持ちペンギンを一箇所に集める作業を始める一行。段美の《上段斬り》で魔法を封じて、瑠璃もそれを手助けして行く。

その間美井奈は、率先してクラゲの散歩に。

クラゲが奇妙な光り方で怖いと、美井奈は先程のマラソンみたいな余裕は無いよう。一方、ペンギンの相手をしているチームは、単発の氷魔法や氷のプレスに苦労しつつも。

薫の反撃のプレスで、さっきの戦闘よりも追い込みはずっと速い感じなのは作戦通りか。瞬く間に1匹、2匹と敵の魔法使いペンギンの数を減らして行くのだが。

美井奈がクラゲが分裂したとの慌てた報告。モニターを見るに、確かに数が増えている。

「こっちあと2匹だよっ、美井奈ちゃんっ！ 何なら増えたクラゲ、引き抜こうか？」

「まだ光ってますけど……ってか、増えたクラゲは種類が違うみたいですよ？」

「ん、分裂というより召還かもなあ……美井奈がタゲってるクラゲ、HP減ってるから」

なる程、確かに最初の釣る際の攻撃以外していない筈なのに、大クラゲは8割程度までHPを減らしている。さらに光ったかと思うと新たなクラゲが宙に湧き、大クラゲのHPは6割まで減。

新しく湧いたクラゲは、平べったい形状と違って、ちよつとずんぐりしていてより不気味に見えるような。弾美はここで、ちよつと嫌な予感を感じ始めてしまう。

ひよつとして大クラゲは攻撃能力が無い代わりに、召還能力だけあるとしたら？

「美井奈……大クラゲは他のリアクションしてくるか？ ひよつとしてコイツ、攻撃能力ないのかも知れない……」

「ええつと……そう言えば、光ってばかりの気が……」

「……わっ、次の敵を呼ぶ前に倒すねっ！」

大慌ての瑠璃が魔法での攻撃範囲に到達していた時には、一足ばかり既に遅かったよう。3匹目の巻貝付きの何かが召還されており、大クラゲのHPは4割まで減っていた。

つまりは、後2匹は呼ぶ体力があるのかも知れないと、瑠璃は水の魔法で大クラゲを弱らせて見るのだが。一人のパワーでは大物の体力を削り切れる訳も無く。

美井奈と協力しても、5匹目を防ぐのがやっと。

使命を果たした大クラゲは、シワシワの姿でしばらくは宙を漂っていたのだけれども。やがてフツと掻き消えて、2セットのクラゲと巻貝の礎となった事に満足した様子。

弾美と薫はペンギン顔の獣人を倒し切り、ドロップも中ポーションや火種も2つと上々。もう火種は揃ったし、これ以上は無駄な戦闘な気がしないでもない一行だったり。

さっさと戻りたいのだが、美井奈のタゲが切れていない。

「美井奈、そのままずっとマラソンしてる。俺達ちよつと中段の仕掛けをクリアして来るから」

「嫌ですよっ、そんな仲間外れはっ！ みんなでさっさと倒しましよっよ、この変な敵！」

「んっ、見た事の無い敵が多過ぎるよねえ、この限定イベントってば……どんな攻撃して来るのかなあ、コイツ等？」

「ハズミちゃん、意地悪しないでみんなで倒そうよっ！ ……私もお腹空いてきた」

瑠璃の言葉に、弾美は思わず吹き出して笑い始める。つられて皆も笑い出し、場は一転和やかなムードになるのだが。どっこい、始めた戦闘は熾烈なものに。

巻貝は自分では動けないのか、ずん胴クラゲに抱えて貰って宙を移動している。弾美が試しに挑発魔法を掛けると、そいつは物凄いいリアクションで対応して来た。

氷上に落とされた巻貝は、アンモナイトに変形。触手でハズミンを巻き取りに掛かる。

咄嗟にブロックしたものの、敵の触手は弾美を向こうの有利な陣地へと引き寄せるのに成功したようだ。頭上のずん胴クラゲからの放電攻撃で、孤立したハズミンは途端にピンチに。

慌てて駆け寄った薫は、巻貝の側面から槍での攻撃のサポートをするのだが。滅茶苦茶硬いと悲鳴をあげて、慌てて正面へと位置取りを変更する破目に。

重なると範囲攻撃が怖いのだが、そんな事も言ってもらえない。

待つてましたとばかりに、墨を吐き出すアンモナイト。前衛ズは悲鳴をあげて、急に暗くなった視界越しに苦戦を強いられる。感で適当に殴りつつ、硬い防御に舌打ち。

なるほど、貝の部分は非常に硬い。これがアンモナイトの必勝戦法らしい。

一方、回復で支援していた瑠璃なのだけけれど。弾美にずん胴クラゲの支援が不気味だと言われ、魔法で独力削りに掛かってみる事に案の定の回復呪文がクラゲから発されて、一同は再度の悲鳴をあげる。

破れかぶれでの薫の《パラライズ》が、何とか掛かってクラゲは麻痺状態に。呪文の詠唱も中断され、薫も皆も安堵のため息。雷属性同士で、掛からないかと思っていたのだが。

弾美は今の内にと、ずん胴クラゲから屠る指示を出す。

弾美の《風の鞭》からの《トルネードスピーン》が、いきなり強力にずん胴クラゲにヒット。大きくHPを削って行く。クラゲの位置が丁度巻貝の真上なので、距離を取りやすい事もあるのだが。

続いて薫の範囲プレス攻撃に加え、最後は弾美の《シャドータツチ》と瑠璃の《ウォータースパア》で、邪魔なずん胴クラゲは早くも沈没。どうやらHPは少なかったようだ。

その途端、巻貝に異変が。急に引っ込んだかと思ったら、次に出てきたのはヤドカリ。

「わっ、なんだ……？　どんな構造してんだ、コイツ！」

「中でイリュージョンが起きたのかなっ？　変な敵だね。」

「何があっただんですかっ？　そろそろマラソンも飽きて来たんですけどっ！」

美井奈の言い分も、確かにもっともではあるのだけれど。今度のヤドカリモードは、削り能力に長けているようである。鉄での連続攻撃は、容赦ない回転速度で弾美にヒットする。

防御魔法で硬くなっているとは言え、侮れないパワーに弾実も必死に盾防御。反撃を柔らかい場所に集中して、正面からのガチの殴り合いはなおも続く。

結果は、数に勝るパーティの勝利。3度目のイリユージョンは見られず。

ここまで来たら、2セット目もほぼ楽勝パターン。何しろ今度は、遠隔のエキスパートの美井奈も削りに参加出来るのだ。ずん胸クラゲ 巻貝の順で息を合わせて一気に片付けて行く。

この戦闘で、薫がレベル29に上がった。お祝いムードの中、ドロップ報告は業火の火種が1つと普通の種火が2つ。これで中段の仕掛けは平気だろうと、一向は再び冰山を目指す。

マラソン騒動で迷いかけたが、何とか目的地は見失わずに済んだよう。

それからパーティは、冰山の中段に登って5つの松明に炎を灯して行く。仕掛けは今度も順調に作動して、美井奈が斜面の氷が溶けて階段が出来たと報告して来た。

皆が集まると、確かに見事な階段が山の斜面に出現している。そしてお待ちかねの宝箱が、これ見よがしに階段の中央の踊り場に、3つ行儀良く並んでいた。

中からは氷の術書とカメレオンジェル、お金が4万ギル出て来た。

「わ〜いつ、お金が増えたね〜、かなり有り難いよっ！」

「そう言えば、さっきの宝箱から変な薬品出ませんでしたか、お姉ちゃま？」

「氷の蜜神の事かな？ これは、MPをちよつとずつオート回復し

てくれる飲み物だねえ」

「メイン世界でもあるけど、合成でしか作れないから高値だよな。薫っち、上はどんなだ？」

「大きな松明が3つと、氷の中に宝箱が1つ……これが最終装備みたいっ！」

一応、普通の火種を試しに試してみる弾美だったが、小さ過ぎて火がつかないとの返答。裏エリアにインしておよそ30分、まだまだ時間はあると言うものの。

あと一つ、業火の火種が足りないようだ。持っていそうな大物を倒すしかないと、弾美は取り敢えず指示を出すのだけれど。雑魚は無視していいのかと、美井奈が意味深に質問して来る。

「どうやら、あとちょっとでレベルが上がるらしい。」

「分かったよ、好きなだけ釣って来い、美井奈」

「ま、まあボス級の経験値でも上がりますから、別にどっちでもいいんですけどねっ！」

「でも、ここの雑魚はほとんど薬品系を落としてくれるからいいよねえ？」

瑠璃も何となく幸せそうに、言葉を足して来る。パーティの財政を預かっている手前、財布の紐は緩めたくないらしく。無駄な出費はなるべく避けて、現地調達が望ましいと言わんばかり。

確かに、実際は4人分の薬品代金もバカにならない。1エリアにつき、だいたい今は1万ギル程度、どうしても掛かってしまうのだ。1日平均2エリアは冒険するので、パーティで2万ギル以上。実際は、余程激しい戦闘で無い限りは使い切らないのだが。戦闘が激しい時には、足りなくなる事もあったりするし。

武器防具の修理代や、矢弾などの消耗品も言うに及ばず。



クエストの報酬や、要らない防具を売るなどして、苦心してお金を捻出している中。瑠璃にとっては、このエリアの雑魚はとっても懐にも環境にも（？）優しいエコ具合である。

そんな訳で、氷上を敵を求めて歩き回る事となったパーティー同。時間の限り、火種が揃うまで狩りまくる事となつて、釣り大臣の美井奈も大張りきりな様子である。

早速のトド顔の獣人を見つけ、敵のチャージが来る前にご案内。

大物に出会うまで、実に10分近く掛かったであろうか。逆に、美井奈の矢束代の心配をしてしまう瑠璃だったが、お陰で薬品の補充はホクホクの結果だった。

そして見付けた肝心の大ボスは、いつか見た雪だるまだったり。大きな図体は、キャラの4倍以上。下の身体に空いた空洞から、次々と雪ウサギを生み出している。

さらに、両脇にアイスゴーレムを2体抱え、動けないカバーをしているつもりか。

「雪ウサギとはちょこざいなっ、薫っち、やってしまえっ！」  
「らじゃーっ！」

嬉々として、芝居じみた台詞回しで雑魚を一掃する薫。雪ウサギが範囲に入ると《炎のプレス》で焼き討ちに。冗談抜きに、次々と一撃で倒されて行く雑魚たち。

アレツという表情は、逆に弱すぎる敵に不審感を覚えたせいなのだが。続いている雪だるまのブリザードと、アイスゴーレムの突撃に考える暇も無く対応に追われるパーティー。

ここでも薫のプレスは大活躍するのだが。敵の攻撃をステップで避けようとして、薫はようやく異変に気付く。何と、キャラの足が凍り付いて固まっている！

そして喰らう再びのブリザード。範囲攻撃喰らいまくりである。

先程倒した雪ウサギの仕業だと、皆が気付いた時にはもう遅い。雪だるまは大クラゲと同様に、召喚専用+範囲魔法付きのボスモンスターらしい。何とかアイスゴーレムを倒したのは良いが、次なる雪だるまの召喚を止める手立てが無かったり。

ついでのように、召喚の合間に範囲氷魔法を撃つて来る極悪さの雪だるま。瑠璃は回復に大わらわ、しかもルリルリまでが氷漬けで動けない仲間状態である。

召喚1体目、満を持して出現。まずは巨大なペンギン顔の獣人のよう。

「美井奈っ、強化全部掛けて雪だるまのHPを削ってるっ！湧いた敵はこっちで処理するから」

「了解です、隊長！範囲魔法も私が受けた方が、被害が少ないですよね？」

「お願い、美井奈ちゃんっ、さっきから回復してばかりだよっ！」

瑠璃の悲鳴も当然と言えば言えるほど、ブリザードの被害は甚大である。その度に《波紋ヒール》で回復を行うのだが、MPはどんどん減って行くばかり。

そして新たな敵は、固まっているパーティをポーリングのピンに見立ててのスケートチャージ。強烈なダメージを受けたが、お陰でやっとこさ皆が動けるように。

次いでフリッパー攻撃に、やっぱり瑠璃は回復支援。

《シャドータッチ》からの反撃に、ようやく負のサイクルから抜け出せそうなパーティ。美井奈も雪だるまに猛チャージを仕掛けて、あっという間にタゲを取ってしまった。

2箇所での熾烈な争いは続き、均衡は微妙な感じになっている。

今回の獣人はボス補正が掛かっているのか、かなり手強い仕様で簡単に片付けると言う訳にもいかない。

それを崩そうと、雪だるまが新たに召喚を仕掛けて来る。お腹の穴が鈍い光を放って、美井奈が絶叫を上げて阻止出来ないもどかしさを伝えて来るのだけれど。

2体目は白熊顔の獣人。よりマッチョな体躯が、いきなり咆哮を仕掛けて来た。

「あゝっ、頭にくるっ！ 薫っち、雪だるま壊すの手伝ってやって。瑠璃っ、白熊連れて凍らせて戻って来てくれっ！」

「ほいほいっっ、スタン解けるの待ってねっっ」

咆哮のスタン効果は、パーティ全員に及んでいたりして。その代わりと言っては何だが、召喚の代償で雪だるまのHPがようやく3割を切っていた。

薫が武器の耐久度を減らしての《貫通撃》を雪だるまに見舞う。これであと2割。

瑠璃の釣りからの足止めは、取り敢えず上手くいったよう。白熊は、咆哮すら届かない距離に取り敢えずの置き去り。回復役の戦線離脱はこの上なく痛いので、瑠璃が戻って来た事でパーティに安心感が。

白熊が戻って来るまでが勝負とばかりに、一行は最大スキル技での応酬に踏み込む。大ボスの雪だるまは、最後の抵抗に雪ウサギを数体生み出して儂く溶けて行った。

雪ウサギは美井奈の遠隔に任せ、二度目のバカを見ない内に弾美に合流する薫。

ペンギン顔の獣人も、残りのHPは3割を切っていた。格闘タイプなのか、飛び蹴りや回転クチバシ落としなど、そっち系統の技が多

彩な獣人も。四人掛かれれば割とあっという間に陥落。

戻って来た白熊顔の獣人も、やっぱり格闘技を多様に仕掛けて来る。タツクルやリアートを一身に受ける弾美は、美井奈に日々技の解説をしてやるのだけでも。

ノリの良い少女は、なる程と感心してプロレス技にも興味津々。

「今お兄さんが掛けられている技も、やっぱりプロレス技ですか？」  
「んむっ、その通りっ！ ベアクローは両手で首を締めて持ち上げる荒業だから、良い子は絶対真似しちゃ駄目だぞっ！」

「ハズミちゃんっ、HPどんどん減っていつてるよっ！ 解説してる場合じゃ……」

「瑠璃ちゃん、これは本人抜けられないみたいっ！ 取り敢えず殴り続けてっ！」

一刻も早く救出しようと、瑠璃と薫が敵を殴り続けた結果。ようやく危険技から抜けられたハズミン。そんな一幕もあったが、大ボスを倒すと言う目標は何とか達成出来たようだ。

ついでに美井奈も、入った経験値で29へとレベルアップ。はしやぐ少女は、ほとんどメイン世界と同じレベルに成長したマイキアラを眺めて感慨深そうである。

お祝いを述べつつ3つの業火の火種を持って、意気揚々と氷山に取って返す一行。

入手出来るアイテムが、大体予想ついていたとしても。やはり苦労して鍵となるアイテムを取って得た宝箱を開ける瞬間は、それなりにドキドキするものだ。

上の段に登って、大きな目の松明という最後の仕掛けを突破して。ようやくの事で、宝箱を目の前にした一行は。みんなして瑠璃に開けるようにと、目で合図を送ってみたり。

宝箱からはパーティ3つ目のレア装備、流水装備の胴部分が出て

来た。

18 流水の鎧 水スキル+5、氷スキル+5、MP+25、防+

「おめでと〜っ、瑠璃ちゃんっ!」

「おめでと〜ございますっ、お姉ちゃまっ!」

「やったな、瑠璃っ! これで見た目も結構変わるかなあ?」

「えへへ、有り難う……そうだと嬉しいけどっ」

脱出用の魔方陣は、さり気なく氷の階段の踊り場に湧いていた。

パーティは次々とその中に飛び込み、エリアを脱出。広々寒々とした裏エリアでの冒険は、これにて終了。

早速新装備を装着して、お披露目を始めるルリルリ。

狭いスペースを利用しながら、伸びやりラックス態勢を模索する一同。落ちる前作業のごたごたを乗り切って、ネットのキャラから現実へと操作を切り替えて行く。

次々とゲームからログアウトを敢行して、今日の冒険はこれにてお終い。窓際から外を窺ったり本棚のタイトルを確認したりと、それぞれが好きに時間を過ごすのだが。

部屋の主である薫にとっては、あまり気の進む時間帯では無いのは確か。それとなく昼食に行こうと誘うのだが、年少者達の好奇心はそんな事では逸れてはくれない。

ややこしい質問攻めは、始まったばかりのようだ。

「それにしても、こんな荷物だらけの部屋でよく過ごせてるよなあ。薫っちはもうちょっと、お洒落とか学問以外の趣味を持ったほうが

いいと思うぞ？」

「それは私も賛成ですね、隊長！ それより、このサボテン大きくて立派ですねえ。観葉植物も多いですけど、これも研究資料なんですか？」

「サボテンの本も本棚にありますねえ、薫さん……結構面白そうなたイトルあるけど、これって専門知識無くても読めますか？」

学問以外に、ちゃんとゲームを趣味として持つてるから問題無いとか、お洒落には興味が無い訳ではないが、そちらに掛けるお金が捻出出来ないとか、観葉植物やハーブ類は趣味で育てていて、手入れもほとんど必要無いからお薦めだとか、本棚の本は確かに専門知識が必要なものもあるが、比較的簡単なものなら見繕ってあげられるとか。

当たり障りのない返答をしながらも、何となく気もそぞろな薫だったり。

「これなんか簡単な植物実験なんかも載ってて、結構面白いと思うけど。サボテンに電極差して、簡単なウソ発見器にしたりとか、隣の部屋で野菜を切った時にどんな反応を示すかとか。これを読むと、植物への見方が変わるわよ？」

「へえ……面白そう。あつ、借りてもいいですか？」

どうぞどうぞと、薫が何冊も見繕っている間に、美井奈がピンナップの写真を発見。弾美がそれに加わって、写真の中から男の影を探そうとするのだが。

弾美や美井奈のメガネに合うような人物は、なかなか存在しないようだ。ほとんどが大学内でのゼミ仲間での集合写真のようで、教授らしき中年の人物も含まれている。

プライベートで熱々系な感じの写真は、一切無し。

「これは……薫つちには恋人、いなさそうだなあ。ウチの両親は、学生時代に知り合つて結婚したつて言つてたぞ？ 薫つちの奥手振りには困つたもんだな？」

「へえ……隊長の両親も割と早くに結婚したんですね。私の親も、授業参観とかでは浮くくらい若いですけど。薫さんに足りないのは、やっぱり女らしさのアピールですかねえ？」

「あの、二人とも……薫さん落ち込んでるから、その辺でもう……。でも、私の両親も大学時代に知り合つて結婚したらしいですから、薫さんも頑張つて？」

瑠璃のフォローも、薫にとっては最後のとどめっぽい言葉に変わつてしまつていた。落ち込む薫に、基礎は悪くないんだからとか、年下なら紹介出来るけどとか、慰めになるかならないか分からない言葉を掛けて来る少年少女達。

辛うじて笑顔で平気と答えて、自分には研究があるからと、本業を全うする気構えを見せる薫。大学院まで進んだのも、浮ついたキヤンパスライフを送る為では無いのだ。

年少組には、その熱意もあまり伝わらなかつたようだが。

「研究つて、そんなに面白いもんなのかな？ 親が仕事でやつてる研究チームも、このところ休み無しで忙しいみたいだけどさ」

「そうだねえ、私はそう言う仕事には就きたく無い気がするかなあ？ 色々な本を読んで、それを繋ぎ合わせてまとめるのは面白いと思つけど」

「瑠璃ちゃんは、でも研究者に向いてる気がするわねえ。あつ、もう部屋に戻らないなら、悪いけど廊下に置いた資料を部屋に戻しておいてくれないかな？」

狭い部屋には、もうそれ程掘り下げて追求するようなネタも転がつていないようだ。言われた通りに皆で協力して、廊下に山積み

された資料を部屋に戻して行く事に。

作業は数分で済んで、部屋は元通りの窮屈な居場所になってしまった。今度バイトで、資料の整理でも頼もうかと、薫も多少は申し訳なさげな感じではあるのだが。

そんな事で、この先この部屋が快適な空間になるかはとことん疑問ではある。

持って来たモニターなどの荷物は、取り敢えず受け付け奥の管理入室に預けておく事に。そのあと連れ立って、一行はレンガ造りの階段を降りて学園の敷地を散策し始める。

とは言っても、薫にとっては歩き慣れた道のみである。一日の3食のうちの半分以上は、実は学食を使っている生活を送っているのは、別に怠惰だからではない。

寮の各部屋にはキッチンが付いておらず、共同スペースでしか料理は作れないようになっていたのだ。そこで交代制で作る者もいるが、学食の方が便利で安いのも確かなので。

いつしか寮生の胃袋は、学食のお預かりになるのが毎年の恒例だとの事。

薫から学食の説明を聞きながら、そんな理由から休日も祝日も、学食は休む事が無いのだそう。一般人の利用者も多いみたいだが、さすがに休日はそれ程混まないと薫は請け合う。

事実、大きな食堂内には人もまばら。セルフサービスらしく、ご飯物やパスタ類は先に食券を買うシステムらしい。その他のおかずは、出来合い物が陳列ケースの中に入っているのをトレイに取って行けば、最後に清算してくれるようだ。

その値段は、皆を驚かせるのに充分だった。

「おおっ、どんぶり物が全部300円以内とはっ！ どんぶり物を



ご飯に、おかず皿を3つ取っても500円以内が可能じゃないかっ  
！」

「パスタも安いねえ……何を食べようか、美井奈ちゃん？」

「お昼はやっぱり、麺類がいいですねえ。お姉ちゃんは何にします  
？」

ワイワイと相談しながら、楽しそうにメニューをチェックして行  
く年少組。全部のメニューを制覇してしまっている薫から見れば、  
とても新鮮なりアクションには違いない。

何だかんだで5分以上、メニューの決定に時間が掛かってしまっ  
たが、他にはほとんど利用者もないようで、簡単に勘定まで済ま  
せられるのは大きな利点。

それぞれがメインとおかずを選択して、4人でそれをテーブルに  
並べてみると。結構、贅沢な昼食風景に見えなくも無い。いつも食  
べ慣れている薫でさえ、何となくウキウキ気分である。

味はいつもと変わらず、可もなく不可もない無難な感じなのだが。

「んっ、まあまあかな？ 薫っちが言うほど、期待外れって訳でも  
ないぞ」

「そうだねえ……確かに味付けに工夫は無いけど、他の料理屋さん  
と較べるのは不公平？」

「確かに、この値段ですもんねえ。素材とかを考えると頑張ってい  
る方ですか？」

平均の出費が350円くらいで、贅沢なおかずの種類を並べてい  
る訳なのだから。普段食べている給食と較べつつも、自分で好きな  
おかずを選択可能なのは学食の良い所であろうか。

グルメリポーターを気取って色々と批評しつつも、箸の止まる気  
配も無い一行。相変わらず仲も良く、おかずを分け合ったりしなが  
らの賑やかな食事風景である。

陽の当たる窓際に陣取って、明らかに他の客とは違うテンションだったり。

食事もほぼ終わる頃、弾美がこちらに近付いてくる人影に気付いた。美井奈の食べ切れなかった分も胃袋に収めた弾美は、明らかに皆の2倍は食べて満腹気味。

張った腹をさすりながら、弾美は薫にそれとなく合図を送る。大学生風のその男は、どうやら薫を目にして近付いて来た感じに見える。だからなのだけ。薫が何となく嫌そうな顔をしたのを、目ざとく気付いた弾美は。

逆にちよつとだけ、楽しそうな表情。

「辛島先輩、子供の面倒なんか見てバイトでも始めたんですか？」

最近夕方方にインする日もあるみたいですが、限定イベントの調子はいかがですか？」

「えっ、そう……そのイベントで組んでいるメンバーがこの三人なの。ちよつと遅れてる感じもあるけど、限定イベントは割と順調かな？」

「へえ……それは何より。里帰りでスタートが遅れてたみたいなので、心配してたんですけど。ウチのギルドも結構苦戦してるんで、そっちもそうかなって思ってたけど、当たりですか？」

どうやら薫のゼミの後輩らしいのだが、会話のアドバンテージを取ってちよつと偉そうな態度を終始崩さない。服装もこざっぱりしていて、外見は薫よりは余程大学生っぽいのだが。

薫はその垢抜けた若者の態度を苦手にしているのか、歯切れも悪い返答振りである。弾美達の存在も丸々無視されて、大人気ない対応にも見受けられるのだけ。

まさか、限定イベントのライバルとして見られている訳でもあるまいに。

その後も話は続いて、何となくこちらの腹を探って来るような物言いに。弾美も段々とイライラして来て、それを見て瑠璃もハラハラして来る。二人にしてみればいつもの循環。

困った薫に助け舟というよりも、自分のイライラ解消に。弾美も会話に加わり始める事に。

「大学生がサークル活動で、フランスカ内で幅利かせてるらしいけどさ……それってあんた達の事？ 暇と人数に任せての組織力で、中高生から結構なひんしゆくを買ってるって噂だけだ」

「な、何だお前は……話に割り込んで、失礼だなっ！」

噂も何も、中学生本人からの言葉に鼻白む男。取り敢えずの質問攻めから解放されて、ホツとした表情の薫だったが。反面、瑠璃は止めなさいとの慌てた表情。

こちらを無視していた自分の事は棚に上げて、やや意固地な態度を取る大学生相手に。弾美も全く引けを取らずに、年下らしくない不遜な態度。美井奈は特に驚いた風も無く、楽しそうに成り行きを見守っている。

意外と図太い神経に、薫などはちょっと感心しているよう。

「あんたが先に、こっちが話してたのに割り込んだんじゃん。自分の事は棚に上げて、最近のこの大学のレベルってどうなのさ。学業放っておいて、ゲームに偏り過ぎな気もするけどなあ……そうそう、コイツの母親知ってる？ 肩書きは確か、津嶋名誉教授だった？」

「えっ、津嶋教授の……？」

「最近はずいぶんと、あんまり講義を開けないってぼやいてたけど。聞いた話じゃ、この大学のレベルを懸念して、長男のコイツの兄は英国の大学に入れたそうなんだよねえ……」

瑠璃の兄の大学選択あたりの話は、弾美の全くの作り話だったのだが。その話を真に受けた男は、明らかに怯んだ様子。美井奈あたりがそうなのかと感心し始めるに至り、男は完全に戦意を喪失したよう。気まずそうに、そそくさと退散する事に決めたようだ。

してやったりの弾美に、瑠璃は怖い顔をして注意して来る。自分の母親と兄の名前を勝手に使われたからではなく、実は薫も結構なダメージを受けていたのだ。

やはり苦労して入った母校をけなされるのは、在籍者には辛いものがあるよう。

「ハズミちゃん、根も葉もない事言って薫さんまで傷つける事無いじゃないのっ!」

「むっ、済まん薫っち……今のはウソだから、そんなに落ち込まないでくれっ」

「薫さんって、ちょっと打たれ弱いですねえ。この先が思い遣られますよ?」

小学生の美井奈にまで心配される始末の薫だったが、そういう性格の弱さは確かに傍からも見て取れる。どうやらパーティの弄られキアラに定着しつつある薫に、積極的にその座を譲り渡したい立場の美井奈だったり。

それでも落ち込む薫に対して、今日の午後のお茶を奢るからと、何だか必死な弾美のフォロー。弾美にしてみれば、身近な知り合いを傷つける事は、してはいけない禁則事項である。

弾美は人を弄るのは好きだが、泣かせるのは子供の頃から苦手なのだ。

薫は泣きこそしなかったが、どこか気の抜けた笑顔で食器の片付けを始める。弾美は話題を変えようと、最近の風邪騒動で人手不足で手伝ったバイトの事を口にする。

獣医とマリモでのバイト代で、今は財布が潤っているので。ティ  
ータイムには、外のお洒落なお店に入っても平気。みんな楽しみに  
しているようにと、弾美は風呂敷を広げて行くのだが。

乗って来たのは美井奈のみ、通学路にケーキ屋さんがあるらしい。

「それにしても、獣医さんってお兄さんでもバイト可能なんですか  
？」

「知り合いだからな、ウチの犬も世話になってるし。補訂って言っ  
て、暴れるペットを押さえたりする作業が必要なんだよ。専門知識  
が無くて、力仕事は出来るからな」

なる程と納得する少女に、お前も医者では補訂が必要な口だろう  
と、早速からかって来る弾美。注射は嫌いだけど暴れはしめさんと、  
少女はちよつとムキになつて反論して来る。

その遣り取りを眺めていた瑠璃と薫も、ようやく笑みを浮かべて  
リラックスモードに。これからどこに行こうかと、食堂を後にしな  
がら皆で話し合うのだけでも。

なかなか意見がまとまらず、結局近場から見学する事に。

「向こうが男子寮とかの棟だけど、そんなの見ても面白くないわよ  
ね？ 弾美君はサークルの部室棟を見てみたいんだっけ？」

「うーん、開いてないんなら見ても仕方がないかな？ 友達から大  
学サークルが作った同人誌つてのを見せて貰ったんだけど、ああい  
うのがもつと見てみたいんだよなあ」

「この間、お兄さんの部屋に置いてあった本ですよ？ 確かに私  
も、あんな本があつたら欲しいですけど」

キャンパスを移動しながら、そんな話を交わす一行。薫の知り合  
いも確かにサークルにいて、先ほどの無礼な学生もそんな中の一人  
らしいのだが。

休みの日でも出入りする暇な人間は、基本的にはいなくも無いとの事。かすかな期待に部室棟に向かっていた一行は、建物の内側通路に歩く人影を発見する。

どうやら知り合いらしく、早速手を振って止めに入る薫。

「春日野君、今から部室に行くの？ ちょっとこの子達と中を見学させて貰いたいんだけど、時間あるかな？」

「そりゃあ、辛島先輩のお言葉なら構いませんよ。丁度合鍵持つてるから、今からでも全然構いませんけど……何を見たいんですか？」  
「同人誌とか、あとはどんな感じになつてるとかかな？ この子達、私の限定イベントで組ませて貰ってる冒険仲間なの」

春日野と呼ばれた学生は、それを聞いてにこやかに会釈してくる。弾美達もそれぞれ自己紹介などしつつ、薫の知り合いらしきその若者を値踏みするのだが。

気は優しいそうだが、身なりはだらしない感じ。髪もぼさぼさで、不精髭も凄まじい。急な頼み事に全く嫌がる素振りもなく、一同を気楽に部室棟の一角に案内してくれる。

薫ともかなり親しそうで、専門的な話だとか温室の水遣り当番の事などを話しているよう。

ゲームサークルの本当の名称は、ネット研究会と言うらしい。少なくとも、掲げてあるプレートにはそう書いてあった。整然と置かれたモニター群と、きちんと整頓された資料群を想像していた弾美のあては大外れ。

薫の部屋に負けない程、ぐちゃぐちゃに置かれている私物らしきものや資料の束。机の上にも下にも、モニターの前と椅子の上以外は何らかの荷物が占領している感じで。

瑠璃と美井奈が、思わずうわ〜と驚嘆を口にしたのも頷ける。

「薫うち……大学生って、こんなぐちゃぐちゃな荷物に囲まれないと気が済まないのか？」

「えっ、さあ……どうだろう？ まあ、ここの部室の半分は不要な私物だとは思っただけだ」

「全く持ってその通り！ 隣の部屋は、もう少し片付いているんだけどね。そっちはウチが出した同人誌とか、そういうのを書いたりする編集室って感じかな？」

その編集室は、隣の惨状を基盤にすれば片付いている部類に入るのだろうが。率先して編集の仕事を説明し始めた春日野だったが、弾美は製作されてある本の方に夢中のように。

美井奈と一緒にあって、面白そうな内容の本を探すのに必死になっている。話を聞く役に回ってしまった瑠璃は、失礼の無いようにと一応真面目に耳を傾けているのだけれど。

薫まで同人誌のチェックに回ってしまうと、もはやどうすれば良いのだから。

「春日野君、これって全部売り物だったっけ？」

「辛島先輩にはデータ収集を手伝って貰ってますし、ただで差し上げますよ。これなんかお薦めですね、ウチの新人がイラスト得意なんですけど」

「おおっ、これって新しいイラスト集？ たくさんあるけど、売らないと赤字なんじゃない？」

「全部売れて、ちょこつと黒字になる程度かなあ。今度、街のどこかのお店にでも置かせて貰おうかって儂い希望を持ってるんだけどね」

大学祭などの行事でしか、なかなか売れるチャンスが無いと嘆く春日野だが。文化ホールでも毎月古書市とか個人物販やってますよと、瑠璃が入れ知恵など口にする。

弾美も口コミで広めるだけで、これくらいなら簡単に学内ルートで売りさばけそうと提案してみたりして。作るばかりで、売る方の才能に欠けていた春日野にしてみれば、天からの声に聞こえたのかも知れない。

パツと顔を明るくして、アイデアを書き止め始めるのに忙しそう。

美井奈が、それならネットやゲーム内で宣伝すれば良いと、これも画期的なアイデアを出してみる。今や春日野の顔は泣きそうな程で、本当にその手の商才には欠けているよう。

案外作り手というのは、作り上げた時点で満足してしまうものらしい。薫が何となく分かった風に、そんな台詞を口にする。統計的に研究者と言うのは、その手の社会的なモノに欠けた人が実に多い人種らしいのだけれど。

年少者達は、目の前のサンプル的な人物を目にして妙に納得顔。

「ウチとか瑠璃の両親なんかは、まだマシな方なのかなあ？ 時々突飛な事するのは、まあ恭子さんくらいだしな」

「そ、そうだねえ……薫さんも、かなり常識あると思うけど？」

「それは身内びいきですよ、お姉ちゃまつ！ あの部屋の惨状を見て、そんな事言うなんてっ！」

それはそうかもと、言っただばかりの自分の意見を引き下げるしかない瑠璃。自分達が押しかけたのは、ある程度整頓が終わった後らしいのに。それでもあの現場の惨状だったのだ。

再び落ち込む薫に、それでも何とか気遣いを見せる瑠璃。今の所、裏目にしか出ていないのが悲しいけれど。何とか、薫に立ち直るきっかけを与えようとしているのは確か。

何しろ、パーティのお母さん役は瑠璃なのだから。

薫の後輩の春日野という学生と弾美は、どうやらあっという間に



親しくなったよう。って言うより、モノに釣られて弾美がひたすらご機嫌に見えるだけなのかも知れないが。

フランスカのデータ集とイラスト集をそれぞれお土産に貰い、弾美と美井奈はとても幸せそう。今度の大掛かりな限定イベントの、編集編のデータブックも作ってみたいとの編集長の言葉に。

遅解きのルートの、覚えている限りのデータを提供すると約束する弾美と美井奈。

その後は、ゲームに関するマニアックな会話を数十分。そこまでゲームの話についていけない瑠璃などは、完全に置いてけぼりな感じ。午後の気だるい時間は、ゆったりと過ぎて行く。

手近にあった本を目にすると、どうしても中の内容が気になってしまふ立派な活字病の瑠璃。ゲームの話に加わるよりはと、何となくデータ解析の教科書を読み始めてみたり。

代表値とは何かとか、散布度とは何かとか、それは統計を取るために必要な理系の教科書らしく。読み始めてみると、専門用語は別にしてなかなか面白い。

気が付くと、全員がこちらを凝視していた。

「瑠璃、ニヤニヤしながら本を読む癖をやメロ！ だいたい、そんな教科書読んで面白いのか？」

「わ、割と……」

「彼女、あの津嶋教授の娘さんなの……」

「ああ、なるほど……」

春日野の納得した表情を見て、何となく母親とひとくくりされたようで懨然とってしまう瑠璃。ゲーム討論会はいつの間にかお開きになったようで、今度は裏山の神社に散歩に行くらしい。

春日野は用事があるらしく、ここでお別れらしいのだが。また会おうと、弾美などはすっかり打ち解けた様子である。どうやら同人

誌の売り捌きを、本気で担う気満々らしい。

薫も、先ほど食堂で入野君に腹の内を探られたと、憤慨した様子で春日野に愚痴をこぼしている。どうやら入野君とやらは別のサークルの人間で、このネット研究会とは別活動らしい。

向こうの方が圧倒的に人数が多く、幅を利かせているのが実情らしいのだが。

「たまにデータ貰ったりとか、こっちは頭が上がらないんだけどね。そのせいでこっちが軽く見られたり、向こうが増長したりと困ったサイクルなんだけど。向こうはゲームが目的で、本の出版なんかはしていないみたいだけど」

「何なら、津嶋教授に一喝して貰うか？ 娘が嫌な目に合ったってチクれば、出張してくれるぞ」

「へえ、お姉ちゃまのお母ちゃまって、怒るとそんなに怖いんですか？」

春日野が慌てて首を振って、その必要はないと言って来るのだが。瑠璃を見る目が、まるで怪物にでも出くわしたような恐怖に彩られていて、ちよつと気の毒に感じてしまう。

弾美が瑠璃の母親は、怒ってもそれ程怖くないと訂正して来る。その代わり、話はくどいので叱られた者は、最長2時間はその場から動けないと言う伝説があると怖い口調。

身を持ってそれを体験した事のある弾美などは、思い出しただけでゾツとしてしまう。

「例えば、物をうつかり壊すとするだろ？ そしたらそれがどうやって、どんな思いで作られたかを一から説明して来るんだよ。その間最低1時間、こっちは謝って逃げる事も出来ないからなあ」

「そ、それは怖いわねえ……」

「でも、物の生い立ちとかを覚える事は出来るよ？」

瑠璃のフォローも、しらけた雰囲気になるだけの結果に。こいつは母親譲りの説明魔だと、弾美は呆れた調子でぼそっと口にする。本などを友達に貸しても、本人が読む前に粗筋や感想を言ってしまう事もしばしばあるのだそう。

今は弾美に矯正されたお陰で、そういう困った事態も少なくなったのだが。やっぱり新しい発見をする度に、親しい者を捕まえて説明に時間を取る癖はなくなっていない。

本人としては、その新しい発見による感動を友達と共有したいだけなのだが。

瑠璃ちゃんのそういう資質は先生に向いてるよねと、薫にお返しにフォローして貰って。美井奈も物知りのお姉ちゃまは素敵ですと、親愛の情を送って来る。

よく分からないフォロー合戦の果てに、ようやく裏山の神社まで散歩に動き出す一同。草生した小さな未舗装の道に入り込み、しばらく進んでやっと本道に辿り着く。

石で組まれた長い階段の出現に、美井奈から苦しそうな悲鳴が聞こえて来る。

後の三人にしても、それなりに早朝ジョギングなどで鍛えてはいるのだが。百段をゆうに越す長い石段を目の当たりにすると、やっぱり精神的に来るものはあるようだ。

口数も少なくなりつつ、一行は同じ歩調でのぼり道を進んで行く。人影は全くないのだが、虫や鳥の声は盛んに存在を主張して来て賑やかな生命の波動を伝えて来る。

薫に手を引かれつつ、美井奈が最後の踏ん張りを見せて登頂に成功。

「ふうっ、ふうっ、キツイですねえっ……みんなどうして平気なん

ですかっ……」

「毎朝ジョギングで鍛えてるからな。瑠璃でさえ、他の運動はまるで駄目だけど、マラソンだけは得意だぞ？」

「得意って程じゃないけど、体力だけは人並みになったかなあ？昔は本当にビリばっかりだったから、ちよつと嬉しいかも」

「へえ……私はどつちかと言うと体調管理と、早起きの習慣のついでなんだけど。美井奈ちゃんも始めてみたら？ 毎朝6時起きは、ちよつとつらいけど慣れれば爽快だよ？」

それは小学生には酷かもなどと、お気楽に話し合いながらも、境内を見回したり、山の上からの景色を眺めてみたり。思い思いに時間を潰しながら、やがてお参りもしておこうと全員が整列。

薫が正式なお参りの方法を、年少組に伝授する。それからそれぞれお賽銭を箱に放って、ゲームのクリア成功や、その他の願いをムニヤムニヤと念じ始める一行。

全員が、このメンバーに出会えた事を神様に感謝したのは、果たして偶然の一致か。

お参りが終わってから、何となく皆が照れたように顔を見合わせる。反対側にも登頂口があって、そこから街の反対側が見渡せるよと薫が照れ隠しの一言。

工事中のアウトレットモールの敷地が辛うじて見えるらしく、他に見えるのは田んぼや畑ばかりのようなのだけれど。薫の案内で、ちよつとだけ見学へと赴いた一行だが。

薫の視力が飛び抜けて良いのか、他の者は残念ながら発見出来ず。

時間はまだ2時を過ぎたばかり。3時のティータイムを前に、少し運動しようという事になって。運動公園まで一気に山下りを行って、全員が割とハードなウォームアップ作業。

弾美が早朝に独占しているバスケットコートには、あいにくの人の群れ。それでもボールは余っていたので、美井奈相手に特訓を始める事にした一同。

小学生にしては身長もあるし、体力は別にして身体の動きには軽快さが見られる美井奈。ドリブルやパスを教えて貰いながら、思い切りはしゃいだ声をあげている。

瑠璃や薫も障害物になったり、時にはパスの相手になったり。授業でポートボールをやった事があるだけにしては、なかなかのセンスだと弾美は即席生徒を褒め称える。

そんなこんなで、あつという間に1時間が経過。

「お兄さん、ちょっと休憩しましょう……結構疲れました……」

「咽が渴いたねえ……時間もいいし、お茶の時間にしようか？」

「ああ、そうだなあ。ここから近いのは、会館の喫茶店だけ。美井奈の言ってたケーキ屋さんまで、行ってみるか？」

「ち、近くでいいですっ……」

呼吸するのもしんどそうな美井奈は、あつさりと自分の提案を翻してみたり。弾美がボールを返しに行つて、その後皆で揃つて隣の敷地へと移動する事に。

散歩道を抜けると、レンガ敷きの敷地が目飛び込んで来る。日陰ばかりで涼しかった散歩道とは対照的に、大きな建物ばかりの威圧的な感じのする一角なのだが。

ガラスやレンガを多用した建物は、どこかクラシクな雰囲気開放感をテーマにしているよう。付随している喫茶店も同様で、半分はオープンカフェの作りになっている。

何となく慣例で、開放的な外の席を選択する一同。

「あつ、いつもの癖で外の席を選んじゃった。中のほうがいいかなあ？」

「もう動きたくないです、ここで充分ですよっ」

「今日は風も少ないし天気もいいから、外でも平気じゃないかな？」  
「他のお客も外で寛いでるしな、もうメニュー通しちゃおうか」

そんな訳で、ようやくの寛ぎタイム。各々飲み物と軽いものを頼んで、この後どうしようかななどの話し合い。美井奈はもう動きたくない、早くもグロッキーな様子。

弾美などは若いくせにだらしないと、一言で切って落とすのだけ。普段運動していない者が、急に激しい運動をしたからだと薰辺りは気遣いを見せる。

小学校には体育の授業がまだあるのだぞと、弾美の反論にも。授業ではあんなに一人を集中して鍛えるような事はしないと、美井奈も一応食って掛かる。

ハズミちゃんはスパルタだと、瑠璃も女性軍として一言。

分の悪くなった弾美は、運ばれて来たアイスコーヒーとケーキセツトに逃げる事に。食欲が無くてケーキを遠慮した美井奈も、皆が美味しそうに食べているのを見て羨ましそう。

結局、瑠璃に一口お裾分けしてもらい、気が済んだためか摂取した糖分のせいか元気も復活して来たようだ。瑠璃が閉館時間まで、すぐ近くの図書館で時間を潰そうと提案する。

乗っかる形で美井奈が賛成して、結局全員の賛同を得る事に。

大井蒼空町の図書館は、在庫冊子数も豊富で建物自体も大きくて立派である。学園ブロックから近い事もあって、若い人の利用の割合も多いので有名だ。

もちろん瑠璃は常連さんで、つられる形で弾美もカードを持っている。美井奈も学校行事で貸し出しカードを作って貰っていて、財布の中に入っているとの事。

限定イベントの裏エリアでネタになったお話の本を、瑠璃が1冊

だけ持っていたので。それは約束通りに、数日前に美井奈に貸してあげたのだけれども。

『ピーターパン』や『長靴を履いた猫』などの児童向けの本は、さすがに瑠璃はもう持っていなかった。ついでに今回借りてみればと、生き生きと美井奈に提案して来る。

美井奈の強化計画は、どうやらここでも健在のよう。

しばらくは、館内の瑠璃のお気に入りスペースに陣取って、各々静かに借り出す本を模索し始める。個室のスペースも存在する室内は、休日の今日も割と盛況のようだ。

あと2時間あまりで閉館なのだが、利用者で貸し出しカウンターも賑わっている。

「よしっ、美井奈の借りる本は確保出来たな。ちゃんと読んだ感想文を書いて、瑠璃に提出するようにつ。ついでに俺も、何冊か借りて帰るかなあ」

「えっ、それは……義務？　口で言っちゃ駄目なんですかっ？」

「ええと……読んでくれれば、私はそれで良いと思うけど？」

慌てた様子のメンバーの遣り取りも、周を気遣って小声でどことなくぎこちない勢い。弾美と瑠璃が借りる本を選びに出してしまうと再び周囲は静けさを取り戻す。

全員が本を選択し終わると、貸し出しカウンターが混まない内にと早くも退館の準備に掛かる。閉館間際の慌しさは、なるべく避けたいと瑠璃の申し出に従ったのだが。

かさばる荷物が増えてしまうと、さすがに寄る場所も限られて来る訳で。そろそろ帰る支度をしようとして、薫の女子寮に預けた荷物を受け取りに戻る事にした一同。

さすがに丸一日遊び倒して、皆がぐたくたながらも晴々とした表情である。

女子寮に到着すると、今日の記念にと薫が寮の管理人室からお土産を取り出して来た。乾燥保存しておいた香り用のハーブとか、鉢分けした食材用のハーブで、これで一気に持ち帰りの荷物が許容範囲を超えてしまった。

美井奈の分は、送りついでの薫が持つてくれるそうなので問題なし。弾美と瑠璃は二人で協力して、持つて来た予備モニターと貰った同人誌と、薫に借りた本と図書館で借りた本と、大物の鉢植え類を選び分ける事に。

貰った鉢植えからは独特な匂いが漂っていて、瑠璃などは楽しげに微笑んでいるのだが。薫にリュックまで借りた弾美は、両手も背中也荷物だらけの壮絶な格好に。

それでも家までは持つだろうと、男前な態度は崩さない構え。

「部屋にあった観葉植物で気に入ったのあれば、株分けしてあげるからね。サボテンはさすがに無理だけど」

「あゝ、残念です。サボテン育ててみたかったんですけど。でもこのハーブも、お母ちゃんまは喜ぶと思いますよっ！」

「それじゃあ、明日はいつも通りに俺の部屋でのインな。待ち合わせもいつも通りで、都合が悪い場合はメールか電話で知らせてくれっ」

了解との元気な返事と共に、それじゃまた明日ねの別れの挨拶が賑やかに続く。二手に別れて歩き出した一行に、温かな色の夕日が静かに色を添えて行く。

荷物が多過ぎて歩き辛い弾美を、瑠璃はちよつと心配そうに見守るのだが。自分も割と大きな鉢植えで両手が塞がっており、手助け出来ないのは辛い所。

それでも今日は楽しかったなどの弾美の言葉に、瑠璃もにっこり



笑って頷きを返す。

長く伸びた影を追うように、二人は歩道をゆっくりと歩いて行く。時折すれ違う人影は、弾美と瑠璃の持つ鉢植えを見て興味を惹かれている様子である。

植物と言うのは、咲いた花の可憐さが最上なのだと思い込んでいた二人にとって。葉っぱの形や香りを楽しむ新たな分野は、なかなか新鮮な感動を与えているようだ。

ハツカの匂いがする度に、瑠璃は手の中の鉢植えをしげしげと覗き込む。

「こういうハーブって、外国じゃあ雑草でもあり薬草や香草でもあるって、薫さんが言ってたねえ……ちよつと面白いかも」

「日本じゃヨモギみたいなものかなあ？ 他にも探せば、何かありそうだけど」

「外国の小説とかにも、ハーブとか知らない植物が出て来るシーンいっぱいあるんだけど。今までは、全然イメージしづかなかつたから有り難いなあ。想像力は無限だつてどこかで聞いた事あるけど……あれはウソだね、ハズミちゃん」

瑠璃の独特な言い回しに、思わず笑い出す弾美。瑠璃もつられて笑い出し、ほんわかとした雰囲気のまま、あつという間に住宅街まで到達してしまう二人。

その後も、本や植物の話をしながら帰路は賑やかな談話で盛り上がる。

ご主人の帰宅をかなり前から察知していた犬達が、お帰りの挨拶にと吠え始める。夕方の散歩で落ち着かせなきやと、こちらは逆に用意にあたふた。

好奇心から新しいお仲間だよと、試しにコロソネにハーブの匂いを嗅がせてみた瑠璃だったけれど。どうやら彼のお気には召さなかった模様で、ぷいっとそっぽを向かれてしまった。

弾美は二階のベランダで育てると言っていたし、自分もそうする事に。

着替えと散歩の用意を終えて、ほぼ二人同時に玄関前に集合。犬達は相変わらずのテンションで、早く散歩に行こうよと主人達をせきたてて来る。

日常の一コマの遭遇に、さっきまで遊び倒していた事もどこかに吹っ飛んで行きそう。弾美は今夜の夕食は何だろうと口にして、瑠璃は借りた本をどの順番で読もうかと計画を練り始める。

些細な日常の積み重ねも、二人にとっては幸せの形には違くないのかも。

## 19 鬼の棲家へ！（前書き）

3連休はサービス業にとっては地獄、しかも猛暑も加わって本当に辛かったですよ？ 今日だけでも、台風の到来でかなり涼しかったですけれども。

外に出ると、油断したら熱中症の餌食になりそうで怖かったです。今年の夏も暑くなりそうです、外作業の多い方々はお気を付けあれ！

節電の噂で混乱してる地域の方々は、特にそうですよね。

さて、物語はちょっと風変わりなエリアなど出て来ますが。自分のやってたオンラインゲームにも、こんな感じで風変わりな敵が設置されてるエリアも結構ありました。

某FFでは、海とか空とか、他にも新エリアが出てくる度に色々変てこなエリアや敵が増えて行ってみましたね。

某GFでも、限定イベントボスでの三姉妹とか、変なバグと一緒になのが印象的でしたけど（笑）。報酬なんかも割と良かったんですが、それも所詮は運が作用するので。

8割がハズレ景品で、トホホな結末ばかりだったり。

そんな不平不満のゲーム体験の反作用で、多分物語の中では大盤振る舞いの報酬が用意されてるのだと思います（笑）。今回も、キヤラの誰かがパワーアップされている筈。

そんな感じの19章です、ゆっくりお楽しみあれ

## 19 鬼の棲家へ！

週明けの月曜日、それぞれに休みの日を過ごした生徒達は、休憩時間には情報交換に余念が無い。弾美と進も同じく、進の手にはプリントアウトされた書類の束が。

二人が話し込んでいるのを見て、イベント生き残り組も次第に集まって来るのもいつもの事。各自が地上エリアの追い込みに急かされつつも、他チームの戦況も気になるところ。

書類を見ながら、弾美は気難しい顔。それを横から覗き込むクラスメート達。

### ステージ突破率&地上滞在率

- \*ステージ1突破率
  - \*ステージ2突破率
  - \*ステージ3突破率
  - \*ステージ4突破率
  - \*ステージ5突破率
  - \*ステージ6突破率
  - \*地上滞在率、27%（参加人数に対して）
  - …… 65パーティ
- 活動確認済パーティ

### シリーズ装備

- \*妖精シリーズ 入手率、25%（全4部位）……最終部位入手率4パーティ
- \*迅速シリーズ 入手率、68%（全8部位）……最終部位入手率8パーティ
- \*流水シリーズ 入手率、21%（全4部位）……最終部位入手率9パーティ

\*暗塊シリーズ 入手率、 9% (全4部位) …… 最終部位入手率  
4パーティ

#### 木の葉&果実入手率

\*1~3枚…… 24パーティ

\*4~6枚…… 28パーティ

\*7~9枚…… 13パーティ

「うわっ、活動確認済パーティが65パーティだって。結構減ってるなあ、何故？」

「そりゃあ、イベントエリアの振り落としがかなり厳しいらしいからな。他のエリアでも、結構手強いNMが待ち構えてるのは、弾美だって知ってるだろう？」

「それにしたって、ライフポイント制なんだからさ。残りが少なくなったら、どのパーティも慎重に行動するだろ？」

「おっ、パーティ状況の新レポートじゃん。ちょっと見せてくれっ、弾美」

友達の一人在、話に夢中な弾美からコピーの紙束をひったくる。それから、自分の所属チームの現状の報告。木の葉の入手は8枚で、残りライフは2つらしい。

残り2つは厳しいなどの言葉に、イベントエリアの最終は本当に厳しいんだとの、しかめっ面の返答。同意する人物も数人現れて、終盤の佳境を物語っているよう。

弾美が裏エリアの経験者を訊ねるが、それに対する返事は無し。

「要するに、地上エリアでは金のメダルとお金の総合力が物を言うんだよなあ。メダルが無いと、裏エリアどころか、自分のキャラの補強が出来なくて苦労する。お金が無いと、薬品が購入出来なくて、強い敵やエリア内でライフロストの危険に遭う」

「ふむふむ、確かにその通りかもなあ。冒険に注ぎ込む薬品代つて、結構バカにならないし。こればかりは、自分のキャラをどれだけ強化しても、どうしても必要になって来るもんな」

「なるほど……しかし、このシリーズ装備の入手率は、洒落にならないほどに低いなあ。弾美は最後の部位、幾つ揃えたんだっけ？」

「3つかな？ 今日中に多分、4つ目行くかも……遅解きの特権で、金のメダルには不自由しないからなあ。その代わり、木の葉はまだ4枚だなあ」

おおつというどよめきが、クラスメートの中に広がって行く。裏エリアの権利を持つ者は、実際ほとんど目にしないのだ。性能が飛び抜けて良いとの噂の装備も、持っている者はほとんどいない。

そのために、無理して金のメダルで購入するパーティもいるそうで、それでもデータ上では入手したとみなされるよう。一概に装備を持っていくからといって、裏エリアを制覇したと言う訳でも無さそうだと、進の付け足しの言葉。

弾美は性能云々よりも、裏エリアの楽しさを強調して話すのだが。昨日は大学の女子寮に潜入してゲームしたとの告白には、男子生徒達の悲鳴にも似た興奮の声が木霊する。

パーティの仲の良さを強調したかったのだが、騒ぎの大きさに引いてしまう弾美。

「ま、まあそれは置いておくとして……やっぱり弾美のチームは有利になるのかなあ？ レア装備を入手しているパーティが何かしら優遇されないと、メダル10枚も払った甲斐が無いような？」

「そんな事もないだろ。裏エリアで、レア装備以外にも結構色んな補充出来たし。進のパーティは、昨日裏エリア行ってみただっけ？」

「ああ、結構面白かったよ。迅速装備を取りに行った」

ほおつと、今度も感嘆の声が上がるが。先ほどの女子寮のくんだりほど盛り上がらないのは、やはり仕方の無い事か。話し込む内に、皆の今後の方針も見えて来る。

どのチームも、まずはイベントエリアのクリアを一番に掲げているらしい。つまりは、イベントアイテムの木の葉を8枚揃えらう事。逆にそのせいで、ライフを減らして行くチームが増えているのも事実なのだが。

そんな中、元からライフの減っている者が淘汰されて行っているのが現状らしい。

生き残りとクリアを目指し、どのチームも試行錯誤を繰り返しているよう。弾美のパーティは、そういう点では呑気過ぎるという意見が出るのも当然かも知れない。

マイペースで何が悪いと言う気持ちで、弾美当人は特に焦った感も無いけれど。今回のレポートにある木の葉の収集データ を見て、さ程遅れている風でもないようだし。

そんな感じで、情報のすり合わせは過ぎて行くのだった。

ここの所毎日会っているので、何となくこれが日常かと思ってしまうのだが。華やかなメンツにも徐々に変化が現れ、美井奈と薫もかなり打ち解けて来ている様子。

その証拠に、美井奈が今度は自分の家で合同インをしようと提案して来た。四人が揃って弾美の家へと向かう途中に、美井奈が積極的に話を盛り上げるのはいつもの事なのだが。

美井奈の家に遊びに行った事のあるのは、この中では瑠璃のみ。

「あゝっ、いいんじゃないかな？ マンネリになるより、色々と計

画立てた方が面白いもんね」

「瑠璃の所以外なら、どこでもいいと思うぞ。瑠璃の家は、恭子さんに捕まる危険性が高いからお奨めしないけど」

「そ、そうねえ。何回か、津嶋先生の講座受けた事あるけど……20分オーバーは当たり前前の、凄い密度の講座ばかりだったわねえ」  
「あつ、薫さんはお母さんの講義聞いた事あるんだあ」

ちょっと嬉しそうな瑠璃だが、薫の顔色は微妙な感じだったりして。取り敢えず美井奈に、遊びに招いても良いかを親に訊いておけると、弾美は無難に会話を締める。

母親の沙織さんとは何度か会った事はあるものの、留守中に大勢で押しかけるのにも向こうの都合は存在するだろうし。美井奈は元気に請け合って、自分の計画に実に楽しそうな表情。

そんな事を話している間に、犬達の散歩も終了。

レベルが30に達して、新たに《SPアップ+10%》を種族スキルで取得したハズミン。これで連続スキル敢行にも弾みが付き、前衛に必要な削りの瞬発力も上昇。

装備もピアスや改装備のお陰で、防御やHPなどが上昇した。特にピアスの、落下ダメージ減という特殊スキルは有り難い。何しろイベントステージには、至る所に段差が存在するのだ。

本当は美井奈にでも融通したかったのだが。防御の高さとHPのアップが魅力的だったために、結局弾美が貰う事に。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：30

取得スキル : 片手剣62 《攻撃力アップ1》 《二段斬り》  
《複・トルネードスピン》

《下段斬り》 《種族特性

吸収》 《攻撃力アップ2》



ゴニックフロウ》  
 《上段斬り》 《複・ドラ  
 》  
 《闇の断罪》  
 闇52《SPヒール》 《シャドータツ  
 》  
 《グラビティ》 《闇の腐食》  
 竜10《竜人化》  
 風23《風鈴》 《風の鞭》 土2  
 3《クラック》 《石つぶて》  
 種族スキル 闇30《敵感知》 《影走り》 《SPアップ+  
 10%》  
 土10《防御力アップ+10%》  
 装備 武器 石割りの剣 攻撃力+19、防+4《耐久10  
 /10》  
 盾 龍鱗の盾 耐プレス効果、防+18《耐久  
 15/15》  
 筒 大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+  
 5%  
 頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、  
 HP+25、防+15  
 首 鬼胡桃のペンダント HP+8、体力+2、  
 防+6  
 耳1 砂塵のピアス、土スキル+3、体力+1、  
 防+3  
 耳2 白豹のピアス 器用度+3、HP+10、  
 落下ダメージ減、防+5  
 胴 龍鱗の鎧 耐プレス効果、体力+4、防+  
 18  
 腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、  
 HP+25、防+15

防+5  
：指輪1 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、

：指輪2 古代の指輪 体力+1、防御+5

：背 砂嵐のマント 風スキル+3、敏捷度+4、

防+8

：腰 獅子王のベルト ポケット+2、攻撃力+

4、HP+15、防+8

：両脚 魔人の下衣改 攻撃力+5、体力+3、腕力

+3、防+15

：両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+

5、HP+25、防+10

細剣スキルが区切りの50へと達したルリルリは、新しく《Z斬り》という技を覚えた。今まで敵の危険なスキルを止めるのに、ダメージのほとんど出ない《麻痺撃》を使用していた瑠璃だったけれど。結構なダメージ付きの技で、これからは特殊技のストップに対応出来る。

氷スキルからも《氷の防御》という魔法を取得出来たのも、ルリリにとっては大きな改善点だろう。魔法の防御によるダメージの一定量カットに、前にも出やすいキャラになって来た。

改装備の防御力上昇も重なって、さらにはHPもMPも上昇する形となった。さらにはレア装備の最終セットとなる流水の鎧の入手により、MPが飛躍的に上昇。

魔法を唱えられる回数の上昇により、縁の下の力持ちの立場も安泰。何よりもグラフィックの統一感によって、本人がとても嬉しそうなのは言うまでも無い。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：29

取得スキル 細剣50《二段突き》 《クリティカル1》 《

複・アイススラッシュ

《麻痺撃》 《幻惑の舞い》

《Z斬り》

：水55《ヒール》 《ウォーター

シエル》 《ウォータースピア》

《ウォーターミラー》 《波紋ヒー

ル》

：光30《光属性付与》 《エンジェルリ

ング》 《ライトヒール》

：氷40《魔女の囁き》 《魔女の足止め》

《魔女の接吻》 《氷の防御》

種族スキル ：水29《魔法回復量UP+10%》 《水上移動》

装備 ：武器 戦闘ネコの細剣 攻撃力+15、敏捷度+2、

MP+8《耐久12/12》

：盾 豪華な大盾 体力+4、防+12《耐久8

/8》

：筒 大麻袋 ポケット+3、HP+5、SP+

5%

：頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+

5、MP+25、防+8

：首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP

+10%、防+5

：耳1 天使のピアス 光スキル+3、知力+2、

MP+8、防+3

：耳2 流水のイヤリング 水スキル+5、氷スキ

ル+5、MP+25、防+5

：胴 流水の鎧 水スキル+5、氷スキル+5、

MP+25、防+18

：腕輪 バトルグローブ 攻撃力+3、HP+8、防

+ 1 2

：指輪 1 光の特級リング 光スキル + 4、HP + 1 5、  
攻撃距離 + 4 %、防 + 4

：指輪 2 プラチナの指輪改 腕力 + 4、HP + 2 0、  
攻撃速度UP、防 + 8

：背 クモの巣のマント HP + 7、MP + 7、  
防 + 7

：腰 複合素材のベルト改 ポケット + 4、器用  
度 + 5、MP + 1 3、防 + 1 1

：両脚 流水のスカート 水スキル + 5、氷スキル +  
5、MP + 2 5、防 + 1 0

：両足 ソゲン鋼の戦靴 体力 + 2、HP + 6、防  
+ 1 0

マントの交換で、雷スキルが区切りに達したミイナ。その結果取  
得したのが《スパーク》という新魔法。一心の範囲魔法で、待ち構  
えての使用も出来るので、使いようによっては素晴らしい威力を発  
揮するのだが。

長杖の交換でMPも上昇したので、瑠璃に改装備を融通しても全  
然平気とは本人談。瑠璃のグラフィックの統一感を羨んでいて、自  
分も新しい帽子が欲しいと最近はおねだりモード。

そうそう簡単に、欲しい装備の入手など出来ない限定イベントだ  
が。この先どうなる事やら？

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：29

取得スキル : 弓術 4 6 《みだれ撃ち》 《近距離ショット1》

《攻撃速度UP1》

《貫通撃》

《複・スクリユーア

ロー》

:光40《ライトヒール》 《ホーリー》  
 《フラッシュ》 《フェアリーウィッシュ》  
 :風20《風の陣》 《風の癒し》 :水  
 10《ヒール》  
 :雷30《俊敏付加》 《俊足付加》 《ス  
 パーク》  
 種族スキル :雷29《攻撃速度UP+3%》 《雷精招来》  
 装備 :武器 神樹の長杖 攻撃力+25、知力+5、MP+  
 28《耐久14/14》  
 :遠隔 雷鳴の弓矢 攻撃力+17、器用度+4、  
 敏捷度+4《耐久12/12》  
 :筒 貫きの矢束 攻撃力+14  
 :頭 船長の帽子 腕力+4、SP+10%、H  
 P+5、防+10  
 :首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP  
 +10%、防+5  
 :耳1 血色のピアス 耐呪い効果、HP+10、  
 防+2  
 :耳2 金のピアス 敏捷度+2、MP+4、防+2  
 :胸 妖精のドレス 光スキル+4、風スキル+  
 4、MP+20、防御+20  
 :腕輪 星人の腕輪 光スキル+2、闇スキル+3、  
 MP+8、防+8  
 :指輪1 雷の特級リング 雷スキル+4、器用度+4、  
 攻撃速度UP、防+4  
 :指輪2 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、  
 防+5  
 :腰 複合素材のベルト ポケット+4、器用度  
 +4、MP+8、防+6

：背 白豹のマント 雷スキル+4、器用度+4、  
MP+10、防+10  
：両脚 妖精のスカート ポケット+2、光スキル+  
3、風スキル+3、防御+12  
：両足 戦闘ネコの長靴 敏捷度+2、MP+6、  
防+10

炎の術書の融通で、今やカオルの代名詞となりつつある《炎のプレス》が少しだけ強化された。その他の改善点と言えば、改装備でのちよつとした防御の上昇くらいだろうか。

本人は、武器の長槍による範囲攻撃手段も欲しがっているのだけれど。それは恐らく、複合技で無いと無理な相談。そう簡単に、ピンポイントでの入手とは行かないのも世の道理である。

じつと我慢で、今持っているカードでの勝負に徹する薰であった。

名前：カオル 属性：風 レベル：29

取得スキル 長槍64《二段突き》《攻撃力アップ1》《脚払い》《石突き撃》

《クリティカル1》《貫通撃》

：炎33《炎属性付与》《炎のプレス》

《レイジング》  
：雷20《俊敏付加》《パラライズ》  
：

風13《風鈴》  
種族スキル 風29《回避速度UP+3%》《魔法詠唱速度+6%》

装備 武器 赤龍の大槍 攻撃力+32《耐久15/15》

：筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

	：頭	迅速の兜	炎スキル+4、雷スキル+4、
	器用度+2、防+7		
	：首	進みがちな懐中時計改	S P + 1 5 %、攻
	撃速度UP、防+8		
	：耳1	サファイアのピアス	腕力+2、S P + 1
	0%、防+3		
	：耳2	銀のピアス	器用度+2、H P + 4、防+2
	：胸	迅速の鎧	炎スキル+5、雷スキル+5、
	腕力+5、防+20		
	：腕輪	迅速の腕輪	炎スキル+4、雷スキル+4、
	腕力+2、防+7		
	：指輪1	迅速の指輪	炎スキル+3、雷スキル+3、
	防+4		
	：指輪2	遺跡のリング	器用度+2、H P + 5、防+3
	：腰	迅速のベルト	ポケット+3、器用度+2、
	防+7		
	：背	迅速のマント	炎スキル+4、雷スキル+
	4、防+7		
	：両脚	迅速のスボン	ポケット+2、腕力+2、防
	御+7		
	：両足	迅速のブーツ	腕力+3、器用度+3、防
	+7		

「さて、今日はどこを巡ろう?」

「イベントエリア2つ目は決定だよな? 後は……最後の弾美君の裏装備かな?」

「昨日の調子だと、ちょっと時間余っちゃうよねえ? そしたら妖

精の泉いけるかなあ？」

「丸々3日縛りだと、夜にならないと願いを聞いてくれないんじゃないか？ 時間残して、夜に再ログインするかなあ？」

皆に平気かと訊ねる弾美だが、取り分けて不都合な者はいないよう。いつもの並びで限定イベントエリアにインを決め込んだパーティは、今からと今夜の割り決めに夢中な様子。

何より、今日の情報公開で自分達がそんなに遅れていないのが確認出来たのが大きい。この調子でも不都合は無いようだ、マイペースを守る構えだ。

急いでもいい事ないぞと、色々な方面から釘を刺された事もあるのだが。

最初の行き先の話し合いは、割と簡単に決着がつく運びに。弾美の暗塊装備を先に取って、その後イベントエリアを有利に進めようと言う案も出ただけれど。

時間がたっぷりある内に、大事な進行エリアは済ますべきだとの意見が多く。要するに、昨日と一緒の廻りで行こうと言う事で意見の決着は呆気なくついてしまった。

そんな訳で、イベントエリア2つ目にまずはチャレンジ。

昨日のプレイで、エリアの大体の感じは掴んでいるのだが。入り口に立つと、張り紙には1部屋35分リミットとの知らせが。この調子が進むと、最終エリアは何分制限？

これが皆が苦心する仕掛けだろうと、弾美がぼつり。

「みんな、ことごとく失敗してたもんなあ。最後の振り落としは要注意だぞっ！」

「こ、この部屋はまだ大丈夫なんですよねっ？ ま、まだ平気……」  
「美井奈ちゃん、まだ慌てなくっても平気だつてば」



薫がお姉さんらしく、優しい声で宥めるのだが。入ってみて、ちよつとびっくり。敵はわらわらと出て来るし、スイッチの置かれている段差は今回は5段並びとなっているし。

慌てて戦闘準備をして、群がってくる敵に対応するパーティ。前衛が頑張つて敵の数を減らしているその間も、瑠璃などはスイッチの場所をチェックしていたり。

大きな宝箱は目の前にあるのだが、敵が静まるまでは取れない感じ。

敵の強さは大した事も無く、あっさりと戦闘からは開放されたのだが。美井奈はしつかり時間チェック。余裕のある内に、感覚を掴んでおきたいようだ。

それからはスイッチを探すもの、階段の仕掛けを解くものとバラバラに行動しての時間節約。弾美はしつかりと宝箱を開けて、お助けアイテムをゲットしている。

何しろ、この先の大事な命綱なのは確かなのだから。

「ハズミちゃん、この両端の木箱を壊してくれるかな？」

「ほいさつ、2個も壊して大丈夫なのか、瑠璃？」

「うん、ただのお邪魔キャラだから」

「また何か出てくるかもですよっ！ 一応張ってましょつか！」

右側の木箱は、爆発もせず敵の伏兵も無く、ただ音を立てて壊れて行った。左側に限っては宝箱が隠れていて、中からは風の術書が出て来である意味期待外れ。

木箱を動かしても伏兵は無し、滅茶苦茶怪しむ美井奈。

肝心のスイッチは、4段目と5段目に散在しているようだ。瑠璃が木箱の位置を指定して来るのだが、今度は2段目の木箱が邪魔を

しているとの話。

2段目の茶色い木箱を壊すのは初だが、弾美は段に上がって問題なくクリア。ところが、ここで初めて見るトラップが発動した模様。弾美の画面は、急に壊れたように真っ黒に。

「どうやら、どこかに閉じ込められているようなのだが。」

「わっ、ハズミちゃんが消えちゃった!」

「ここどこだっ? 動けるけど出口が無いっ!」

「えっ、えっ、同じエリア? そこどこっ!?!」

「むむっ? 今、その木箱が赤に変わったんですけど……関係ありませんかねっ?」

一同はまさかとの思いで、美井奈の指し示した赤い木箱の前に集まる。ちゃんとタゲれる事を確認して、薫が殴ってみると。中の弾美にもしっかり衝撃が通じて、皆で驚きのリアクション。

こんな仕掛けがあっても良いのかと、ブーブー言いながら木箱を壊すと。闇の中からようやく救出されたハズミン、一同で一斉に安堵のため息をつく事に。

美井奈の注意力が無ければ、救出に時間を食っていたかも知れない。

「ってか、四人閉じ込められたら完全アウトだなっ……怖っ!」

「た、確かに……木箱を壊すのは、ちゃんと確認して1個ずつが基本かな?」

「そうですねえ……美井奈ちゃんが、今回はよく見てくれてたよっ!」

「えへへ、ちょうど視界の正面でしたから」

それ以外は特に驚く仕掛けも無く、一同は順調に3段までの道順を製作。面積にして、部屋の半分近くを木箱が床を作っているので、

動き回るのに不自由はしないのだが。

4 段目と5 段目に登って、スイッチの前に到達するには、もう少し頑張りが必要だ。少なくとも、あと3 つは木箱を壊さないと駄目だと瑠璃が報告して来るのだけれど。

ややビビリ気味の弾美。美井奈がそれなら遠隔でやっちゃいますかと軽く請け負う。

遠隔攻撃ならば、そもそも爆風も受けないし良策に聞こえるのだけれども。ものは試しで一度やってみようと、弾美は下がって傍観に回る事に。

瑠璃の指定する茶色の木箱を1 つ、2 つと何事もなく壊して行く美井奈。何の変化も無いのは良い証拠かしらんと、3 つ目に移ろうとする美井奈だったが。

今度は薫が赤い木箱を発見。例の如く、普通の木箱が変化したらしい。

「えっ、でも全員います……よね？」

「それじゃ、何が入ってるのかな？」

「2 つ壊して、変わったのは1 つだけか？ 取り敢えず、3 つ目壊して考えようか？」

訳の解らない問題は取り敢えず後回しが身上的弾美。ところが回答は、3 つ目の茶色い木箱を美井奈が壊した途端に、向こう側から差し出された。

勝手に破裂した赤い木箱からは、ミイナのドッペルゲンガーが出現。

慌てる美井奈に、矢弾の遠隔攻撃が敵から降り注ぐ。今度のパターンは強烈だぞと、弾美が接近して殴り始めるのだが。もちろんタゲが移らないのは、この敵の恐ろしい所。

ひたすら美井奈が標的にされて、必殺の《フェアリーウィッシュ》でとにかく防御に掛かるのだけど。何と、光球の1匹が勝手に敵側に付いてしまうハプニングが発生。

どこまでも恐ろしい、分身の特殊能力。

「わっつ、泥棒っ！ 私の大事な光の玉がっ！」

「さすが分身だな……見事欺いてる」

「ちよつとこれは……酷いねえ」

それでもパーティは、数の優位で美井奈の分身を削って行く。美井奈は強烈な遠隔スキルの連続攻撃に晒されながらも、こちらも遠隔スキルでひたすら反撃。魔法が解ける前に倒して下さいと、かなり必死な様子である。

その甲斐もあつて、パーティの削りスピードは加速するのだが。分身が残りHP3割となった所で、再び嫌な特殊スキルが発動。呼び出された雷の精が、ハズミン達の攻撃をガード。

殴る度に、反撃の放電が痛い痛くないのっ！

倒し終えた時には、殴っていた前衛もボロボロ、遠隔をひたすら一身に受けていた美井奈もボロボロという悲惨な状況に。ヒーリングしつつ、何となく美井奈は申し訳なさげ。

それでもドロップは上々。雷の術書と水晶玉、武器では雷鳴の弓矢改という弓矢まで出た。

雷鳴の弓矢改 攻撃力+20、器用度+5、敏捷度+5  
耐久14/14

「おおつ、かなりいい武器だなっ！ まあ、赤い木箱の仕掛けも分かったし、何よりかな？」

「ハズミちゃんもレベル上がったし、美井奈ちゃんのお陰……かなあ？」

ミイナのドッペルゲンガーを倒して、弾美が31にレベルアップ。確かに美井奈のお陰と言えるかも知れないが、本人はかなり微妙な顔付きだった。り。

休憩後に木箱を動かして終わると、それで全部のスイッチにキャラが到達可能となった。これでこの面をクリア出来ると、皆でタイミングを合わせて恒例のスイッチ押し作業。

これで赤床の面はクリア。次は……。

次の面にワープで通され、ビックリ仰天の一同。木箱の木の字も見えない真っ白なエリアで、ひたすら立体的な構造の部屋となっているのは見て分かるのだけれど。

階段があちこちに設置されていて、細い通路が迷路のように張り巡らされている。エリアの広さはさっきの赤い床のエリアよりは広いが、端が見えない程ではない。

それでも障害物が無いので、かなり広く感じてしまう。

「あれれっ、次は緑の床のエリアかと思ったのに。白いエリアってのもあるんだねえ」

「だなっ、敵の数は少ないけど……スイッチが一つも見えないなあ」

「透明なのか、下の通路の死角に隠れているのか……探すのに苦労しそうだねえ」

「俊足の魔法掛けましょうか？ これって意外と役に立ちますねえ」

全くもって美井奈の言う通りである。タイムアタックとまでは行かないが、探し物のあるエリア内では、もたもたしていると状況が変化してしまい兼ねない。

エリアの上空に漂っているのは、いつかのマンタに乗ったクラゲ人間達だった。透明な身体がとつても不気味ですなえと、魔法を掛

けながら美井奈が呟く。

他の皆は妖精チエック。ポケットを空けるとの催促は、やっぱり透明スイッチがある模様。

一行は飛び回る敵になるべく見付からないように、エリアの探索を始める。最初の広場は上層で眺めは良かったのだが、そこに留まると敵に上空から狙われそうで怖い。

下層は全く安全そうだが、眺めは最悪で進んでいる通路がどこに繋がっているのかも分からない有り様。取り敢えずは真ん中まで中層を伝って行こうと、弾美は口にするのだが。

真ん中辺りで妖精がせつついて来た。スイッチが近いらしい。

「あつ、ここかな？ やった、1個目頂き〜っ」

「おおつ、見事です薫さんっ、ちなみにノルマは一人1個ですか？」

先を越された美井奈は、いたくライバル心を刺激された様子である。次は自分の番だと、きよるきよるとキャラを動かしてスイッチが隠れていないかチエックに余念が無い。

先程までは新しい弓矢を試すのだと、敵を射る事しか考えていなかったと言っのに。

2つ目は、ちゃっかりと弾美が見つけた。下層の通路の突き当たりの目立たない場所に、普通にスイッチが設置されていたのだ。悔しがる美井奈は、視界の良い場所にキャラを移動。

その途端に、上空からシャボンの泡が降って来た。どうやら偵察部隊の1組に見付かってしまったらしい。絶対やると思ったと、弾美は冷たい視線を向けるのだが。

マンタの吹き出すシャボンは厄介で、当たると爆発してダメージを受けてしまう。

「わっ、このシャボンはどうすればいいの、ハズミちゃん？」

「ひたすら避ける。そしたら地面に落ちて、勝手に壊れて行くから。コイツ等、マンタとクラゲで部位違うから気をつける。」

「了解……ってか、コイツ等地面に降りて来てくれないのかな？」

ちよつとずつは、パーティの近くに降りて来ているのだが。薫が《炎のプレス》で応戦すると、シャボンは奇麗に消え去って、敵も一気にこちらに近付いて来た。

ここぞとばかりに迎え撃つパーティ。マンタの麻痺がウザいと、まずはそちらから。お陰でクラゲ人間には攻撃され放題。放電が始まると、弾美が《闇の断罪》でスタンさせると言ったサイクル。

マンタがようやく墜落して、あとはクラゲ人間をばこ殴り。

戦闘は、割と短い時間で終了したのだけれども。せつかく掛けて貰った俊足魔法は時間オーバーで切れていた。美井奈はひたすら恐縮して、再び魔法を掛け直す。

上空の敵は、数えてみるとあと5セットくらい。どうやら巡回する道順は決まっているらしいのだけれど。そこから逆算して、スイツチの場所を判明する事はちよつと無理っぽい。

残る手掛かりは、妖精の言葉のみ。聞けばちゃんと答えてくれるのだが。

「私の妖精は、さつきからずっと右って言うてるよ？」

「私のは逆方向だって言うてるけど……ちよつと別れてみる？」

「んじゃ、俺が瑠璃の護衛をするか……薫っちは、美井奈のお守りな」

何で私はお守りになるんですかと、美井奈はひたすらヒートアップ。事実なのだから仕方が無いと、弾美や残りのメンバーも心の中では思っていたかも知れないが。

ちゃんと護衛を勤めますと、カオルの後ろに奮起して張り付くミイナだったけど。薫チームは、肝心の道が段差で渡れない事態に陥っているようで進むに進めない。

階段は遙か向こうで、そもそも戻って来れるのかも覚束ない。

瑠璃が、こういう時のお助けアイテムだよと、さり気なく示唆してあげるのだけれど。ここで使わないでどこで使うんだと、弾美などははつきりクツキリ皮肉を口にする。

美井奈がその皮肉に敏感にムツとするのだが、薫の方は使い方の習得に夢中。程なく緑色のハスの葉っぱの架け橋が出現して、薫はおおっと驚きの様子。

薫チーム、透明スイッチに一步近付く。

瑠璃の妖精ナビゲートは、向こうに較べると至って簡単だった。近くの階段を上って、巡回中の敵に捕まらないように、上層の広場を猛然とダッシュで横断に掛かって。

ついて行く弾美も同じ速度で追従。こんな時の《俊足付加》は、本当に有り難味が分かる。瑠璃は反対側の下り階段を目指していたのだが、到達してみると何と階段は壁で行き止まり。

困惑する瑠璃に、妖精はこの向こうだとしきりに指し示すのだが。

「ハズミちゃん、飛び降りるしかないのかな？ お助けアイテム使ってみようか？」

「むっつ、数が結構あるから、全然構わないと思うけど。階段の奴か？ 空中で使えるのか疑問だけどなあ」

弾美の推測通り、妖精はこんな使い肩は出来ませんと言って来た。弾美はここで待っているから、探して来るようにと瑠璃に指示を出す。

探し当てたら、そこで瑠璃がスタンバイすれば良い。自分は簡単



に別の場所に戻る。

瑠璃は新魔法の《氷の防御》を己の身に張り巡らして、果敢にダ  
イブを敢行。とは言っても、ほんのキャラの背丈2つ分の高さの距  
離なのだけど。

魔法のお陰でノーダメージの瑠璃は、ちよつと得意満面。鼻歌交  
じりに透明なスイッチを、妖精の言葉で探し回っている。弾美は敵  
に注意しながら、段差の上からそれを眺める。  
程なく瑠璃は、3つ目のスイッチの透明化を解除したと報告。

「よしっ、あと1個だな……俺は最初のスイッチに行くかな？ そ  
っち手助け欲しいなら行くけど？」

「心配無用ですっ！ こっちももうすぐに探し当てますっ！」

「うん、近くまでは来てるんだけど……美井奈ちゃん、やたらとス  
プレー使わないでっ！ 次の面でも使うかも知れないんだからっ！」  
「あっ、そうかっ！」

呆れ顔の面々、どうやら美井奈はやたら滅法に消耗品のスプレー  
を使っていたらしい。その甲斐も無く、スイッチは順当に薫が探し  
当ててしまったのだが。

見付けたばかりのスイッチを美井奈に任せて、薫がもと来た道を  
ダッシュで戻って行く。中層の通路なので、上の敵はあまり気に掛  
けなくて済むのが有り難い。

弾美に続いて、薫もスイッチを受け持ち。これで2つ目のエリア  
も順調にクリア。

ここまで合計で、30分も掛かっていない計算だと美井奈の報告  
戦闘らしい戦闘と言えば、ミイナの分身騒ぎだけなのが好タイムの  
原因のようなのだけど。

経験値も欲しいかもと、ちょっと贅沢な悩みも心中渦巻いてしま  
うのは仕方が無い。そんな期待に応えた訳でも無いのだろうが、例  
の最終面では敵がたくさんお出迎え。

いきなりの混戦に、ややパニックであちこちで殴り合いが始まる。

エリアのつくりは、前回とだいたい似たような感じらしい。手前  
にどっしりとした3段の石造りの遺跡の断面層が存在し、中央が綺  
麗に吹き抜けになっている。

壁伝いに石畳の廊下は存在するのだが、所々壊れていたり、又は  
塞がっていたり。中央の吹き抜けの底は深い水貯めになっていて、  
上には例の浮島が存在する。

光のシャワーが、どこか神秘的にエリアに降り注ぐのも前回と一  
緒。

「あつ、スイッチ見つけましたっ！　すぐそこにあるみたいですよ  
っ！」

「いいから敵を減らして行け、美井奈っ！　くそっ、魔法で強化す  
る時間を与えて来ないとはっ！」

「あつ、今の蛮人、お助けアイテム落としたみたい。ラッキー……  
なのかな？」

「うっんっ、どうせなら薬品類が欲しいかも？」

薫の疑問符付きの言葉に、チヨー真面目に考え込んで返答する瑠  
璃だった。女性陣は当てにならないと、弾美は一人奮起して、敵  
をキープしつつ減らして行く。

鮮やかなペイントの木面をつけた茶褐色の肌の蛮人は、どうやら  
それ程強くないのだけれど。色々と特殊攻撃が厄介な上に、前衛  
と後衛で組織だった攻撃をして来る。

薫と美井奈が、息を合わせての範囲攻撃で、一気に敵の殲滅に掛  
かり始める。弾美も、その隙を利用して《竜人化》からの《ドラゴ

ニックフロウ》を敢行。

雑魚には靨面の効果のその複合スキルは、あつという間に敵を一掃。

「うわっ、やっぱり強いねえ、弾美君の複合スキル！」

「魔法を最初に掛けるのが面倒だけだな。1回撃つと解けちゃうし」

「これっ、このスイッチは私が見つけたんですからねっ！」

やや必死かつ得意な口調で、美井奈がスイッチの権利を主張する。一体何の権利だろうとか、そんな遊び方だったろうかななどの疑問は、この際どうでも良いというか。瑠璃が美井奈に良く出来ましたと、素敵なフォローを入れて。

これでこの件は、一件落着。

上機嫌の美井奈が先行しようとするのを、弾美が何とか宥めつつ。ここが仕掛けだらけのステージなのを、少女に思い出させて警戒を促すのだが。

確かに手前の壁面の彫刻や彫り物は、そう言われて見れば無気味に見えて来る。前はそこら、等身大の岩が無数に転がり出て来たのだった。

パーティが今いるのは、一番下の層である。そしてスイッチはあつとつ。

「反対側の壁際に、1個見えるね。ほら、一番上の丁度真ん中辺り」

「あつ、あるなあ……ってか、浮島に近くて嫌な場所だな。美井奈、アレ押す権利をやるのか？」

「私はここを見つけたから、ここを押しますっ！ あれはお兄さんが押して下さいっ！」

美井奈の理論の通りだと、あの危険な場所は見つけた瑠璃が押す事になるのだけれど。とにかく休憩を終えた一行は、階段を伝って中層へと辿り着く。

今度のお出迎えは、羽音も強烈な蜂の群れ。6匹程度が宙を漂いながら、制空権を主張している。掃除しない事には、通り抜けられそうに無いと、弾美は挑発魔法を掛けるのだが。

迎え撃とうと一歩踏み出した途端、仕掛けが作動。今度は落とす穴らしい。

慌てている残りのパーティメンバーに、タゲを失った蜂が襲い掛かる。下の層に落とされた弾美は、落下ダメージを喰らってやつぱり大慌て。すぐに戻ると階段を目指すのだが。待ち構えるように、スライムが階段の隙間から湧いて来てビツクリ仰天。

どうやらパーティ分断の仕掛けの続きのよう。

仕方なく2手での戦闘に入る一行。薫のステップでの前衛盾も最初こそ順調だったが、美井奈の攻撃でタゲが揺れてしまう。慌てた所に麻痺の一撃が入り、しかも蜂同士のリンク発生。

これは不味いと動き回った結果、何と薫まで落とす穴に落ちてしまった。氷魔法で足止めしていた瑠璃は、途方にくれて仕留め損なった蜂の1匹を見遣る。

こうなったら、全員で覚悟を決めて落ちようかと、美井奈と顔を見合わせるのだが。

「ようやく倒せたっ！ 瑠璃っ、階段まで連れて来いっ！」

「わっっ、待ってたよ、ハズミちゃんっ！」

ようやく弾美が仕掛けを突破したようだ。今度は蜂退治に合流して、後衛のためにがちりタゲキープ。落下仲間の薫は、3割近くHPを減らしつつ再び中層を目指す。

薫が皆に合流しようとした矢先に、やっぱり階段で2匹目のスライムに行く手を阻まれ。泣きそうな悲鳴が、薫の口から発せられる。そのスライム、結構手強いぞと弾美のアドバイス。

蜂も結構、雑魚とは思えないHPの豊富さだったり。

敵の掃除が全て終わったのは、それから結構経ってから。パカッと開いた落とし穴もそのままに、中層は移動可能な状態になったのだけれども。

まだ開いていない落とし穴があるかもと、一行は慎重に移動する。手前のフロアの端から端への横断を終えて、取り敢えず階段へは到達したのだが。

瑠璃によると、妖精はこの層にスイッチがあると知っているらしい。

左の壁沿いの石造りの細い通路を、取り敢えず弾美と薫が進んで行く事に。ところが崩れかけた通路は、四角い石像で突き当たりの行き止まりとなっていた。

妖精と言えば、まだ先の地点を示している。

「反対側から回り込めばいいのか？ あれっ、でも道続いていないかな？」

「んつと、お助けアイテムで乗り切れないかな？」

瑠璃のアイデアは大成功で、お助けアイテムの『Jの豆の木』で四角い石像のスルーに成功する。なる程、木箱でなくても平気なのだ、一同は驚きと納得の表情なのだ。

伸びた豆の木の階段は、何と真っ直ぐ上層まで続いている。これはひょっとしてショートカット出来るのではと、新たな攻略法も生まれそうな勢いなのだ。

取り敢えずは石像の両端に階段を作って、何とか2つ目のスイッ

チを見つけ出した。

上層にも、ちゃんと敵は待ち構えていた。しかも、今度も飛行型のコウモリの群れと言う設定に、一行は不審感を募らせて行く。ひよっとしたら、再び落とし穴か？

パーティは自然と、戦闘地域を狭めての予防措置で対応するのだが。敵を全て倒し終わっても、微妙な位置に透明のスイッチがあるらしい事が判明して。

どうしようかと、皆が顔を寄り合わせて相談タイム。

「えっと、落とし穴はあることが前提なの？ 場所の位置を、下と照らし合わせるとか？」

「確かに怪しいですけど……でも、下まで落ちちゃったら、怖いですよっ？」

「瑠璃が天使魔法掛けて、走り回るってのはどうだ？」

「えっ、あの魔法は宙に浮いちゃうけど、平気かな？」

流水装備が揃った事もあり、既にMPは300を超えているルリルリ。《エンジェルリング》の魔法も随分と掛けやすくなっており、一応ダメ元で試してみる事に。

半分期待してなかったその作戦だけど、信じられない事に仕掛けはパカパカと派手に作動するに至って。瑠璃の足元に大きく開いた落とし穴、その数何と6個！

作り過ぎだろうと、非難轟々。

「うわっ、こんなにあったんだっ！ ちょっと……洒落にならない仕掛けだねえ」

「隊長、この落とし穴……下層まで貫通してますよっ！」

「おおっ、俺が落ちた穴と見事に繋がってるなあ。引っ掛からなくて良かったよ！」

弾美の作戦は見事成功。空いた落とし穴を皆で眺めつつ、しみじみと話し合っている間に。瑠璃が妖精の情報を元に、3つ目のスイッチを出現させていた。

4つ目は、その丁度反対側に見える。浮島を挟んで、結構際どい崩れた通路の途中に設置されているようだ。さて次は、誰がどれを担当するかを決めないとならない。

パーティが今いる場所も、落とし穴だらけで決して戦闘に向いている場所ではない。両端の穴の無い場所におびき寄せる事が出来るなら、話は別だが。

敵の動きも未知数で、反対側の者が襲われる可能性も無いとは言えない。

「取り敢えず、一番下は美井奈が受け持って、俊足飛ばして駆けつけるでオツケーな？」

「上の層は、私と弾美君かなあ？ でも、天使魔法の掛かっている瑠璃ちゃんも素早く動けるねえ」

「そうだなあ……中層のスイッチは、戻って来るのに手間取ると怖いし。薰つちに頼むか」

「それじゃ、私が向こうに行けばいいんだね？ あっ、この落とし穴塞げるねえ」

そう言うと、瑠璃はハスの葉のお助けアイテムで、落とし穴の1つを塞いでしまった。コレは便利だと湧くパーティ。どうせもう使うエリアも無いのだし、全部使って塞いでしまう事に。

その後いよいよ、一同はそれぞれ移動して4つのスイッチの前にスタンバイ。前回と同じ仕掛けなら、これを押すと浮島から敵が出現する手筈なのだけねど。

仕掛けを全面的に信頼するのも、実は怖かったりして。

弾美の号令で、スイッチは同時に押され。同時に浮島の鳶のドームが萎れて、3匹の飛行物体が出現する。1匹は大きな蛾のモンスター。追従するのは白と黒の光を発するホタルのよう。

敵の集団は、案の定リルリ目掛けて襲い掛かって来た。宙を飛べる利を活かして、3匹同時の接近。他のメンバーは、瑠璃の脱出を祈りなら上層での合流を目指す。

瑠璃はホタルの1体を氷魔法で足止めしつつ、猛然と弾美の元へ駆け出す。

天使魔法の加護もあって、壊れかけの細い通路も何のその。弾美もフロアの端まで出張って、魔法の範囲に入るや否や挑発魔法を黒ホタルへと飛ばす。

瑠璃は続けて、蛾のマラソン。落とし穴を塞いだのが幸いし、走り回るスペースには不自由しないのが良い感じだ。美井奈が俊足を飛ばして、もうすぐ上層に辿り着きそうと報告。

弾美もレイブレードで、ガシガシと黒ホタルを削っている。

「うわっ、このホタル……殴る度にこっちのMPを吸いやがるっ！  
黒い発光も強くなってるな」

「何の仕掛けかな？ 白い方は、まだ平気？」

「足止めが解ける前に、そいつを倒したいですねえ。隊長、到着しましたっ！」

薫よりも先に到着した美井奈は、勢い込んで矢を射始めて削りのお手伝い。さらにスキル技の使用に、黒ホタルの黒い光の玉は弾美を包み込みそうな程。

これは不味いかもと思った時には、既に特殊能力は発動していたようだ。弾美のMPを吸い尽くした黒ホタルは、発光も勇ましく今度は弾美のSPを吸い始める。

弾美はスキル技を断念、美井奈に全てを託す事に。



黒ホタルがへ口へ口になった頃に、ようやく薫が中層から合流して来た。そこに白ホタルも戦線復帰、弾美はエーテルを使用して白ホタルにタゲ取り魔法を放つ。

その頃には黒ホタルがようやく沈んで、ようやくMPとSPの吸収地獄から解放されたハズミン。ホツとしつつも、今度は三人での白ホタル削りへと移行。ところが白ホタルの発光は、殴る度にこちらのHPを減らして来る始末。

どうやら与えるダメージの3割程度を、見返りに要求して来るらしいのだが。何とも無いのは美井奈の遠隔だけ、回復役の瑠璃はマラソンで忙しいと来ている。

ここまでは順調なようできて、実は危なっかしい戦況なのかも。

「わっつ、結構きついなあ、お返しのHP吸収。私と瑠璃ちゃん、交代した方がいいかな？」

「むっ、そうだな……削りは美井奈に任せて、回復役が欲しいのは確かだなっ！」

そんな訳で、マラソン役を交代する女性陣。スイッチは割とスムーズで、今度は瑠璃が弾美の支援に回る事に。この交代は、結果的には凄く良いタイミングだった。

何しろ、白ホタルの発光が増すのと同時に、通常攻撃が通り難くなったのだから。

「あれっ、攻撃ダメージが急に減っちゃいましたね、隊長？」

「むっ、本当だ……魔法はどうだ？ 瑠璃、試しに撃ってみてくれ」

「了解っつ、行くよっ」

瑠璃の放った水魔法は、難無く白ホタルのHPを削って行く。黒と白を同時に相手にしなくて良かったと、弾美は改めてぞっとする

思いだっただが。

その後は、美井奈と瑠璃とで魔法の連打。二人のMPが切れる前に、白ホタルも没。

「終わったぞ〜っ、薰っち、大ボス行こうかつ！」

「了解っ！ こいつ鱗粉の毒が痛いね〜っ、近付くだけで浴びちゃうみたい」

「MPが無いよっ、ちょっと休ませて〜っ、ハズミちゃんっ」

「同じくです〜っ、毒の治療がいらぬなら、すぐ駆けつけますけど？」

それなら休憩してMPの回復をしておこうと、弾美は予防策を張り巡らせておく事に。何しろコイツは大ボスなのだ、一体どんな攻撃をしてくる事やら。

そう弾美が思っていた矢先に、落とし穴を塞いでいたハスの葉に異変が。蛾の特殊攻撃の鱗粉に晒されたせいなのか、1箇所萎れて消え失せてしまったのだ。

1箇所くらいは、別にどうって事はないと思いつつ。前衛が殴りにと取り付いた途端に、さらに大ボスの特殊技の暴風が発動。吹っ飛ばされた前衛陣は、ビビりまくって足元確認。

そして床の有り難さを改めて実感、穴を塞いでいるハスの葉に感謝しまくる事に。

ようやく復帰して来た瑠璃に、特殊技の暴風だけは防いでくれと懇願する前衛陣。かなり必死に、弾美と二人掛かりで吹き飛ばし技だけはスタン防御で実行させない構えである。

何しろ、今や萎れたハスの葉は3つにまで増えてしまっているのだ。

「きゃ〜っ、落とし穴の半分が口を開けちゃった！ ハスの葉ガ―

ドまで折り込み済みとはっ！」

「確かに侮れないな……毒も結構ダメージ酷いし」

「あと半分だよっつ、みんな頑張ろうっつ」

瑠璃の掛け声に、力を合わせての最後の追い込み。防御力は低いらしい蛾のHPは、見る見る減って行き。残り2割となった所で、大ボスの意地なのか最後の悪あがきを見せる。

なんの事は無い、ただの連続での暴風使用だったのだが。止められなかった代償は、相当なものとなった。弾美と瑠璃が、何と仲良く落とし穴に落ちてしまったのだ。

この日一番の絶叫は、果たして誰のものだったのか。

それでも薫と美井奈の、闇の秘酒のガブ飲み連続スキル技使用によつて。何とか最後まで削り切る事々に成功したパーティ。落ちた二人は落下の手痛いダメージもそのままに、上層に戻った時には既に浮島への架け橋が固定化していたという状況。

ヤレヤレと安心しつつ、皆で合流後にゆっくりと薫の橋を渡って行く。前回と同じく、中央にフワフワと浮く紫色の木の葉を発見。その周囲に4つの宝箱があるのも前回と同じ。

ここまで45分程度、これもほぼ前回と同じ。

宝箱からは4万ギルの現金と金のメダル、闇の術書と力の果実が出て来た。他にボス戦のドロップで、白蛍のピアスと黒蛍のピアス、蝶柄の指輪がドロップ。

白蛍のピアス 光スキル+3、HP+25、防+9

黒蛍のピアス 闇スキル+3、SP+10%、防+4

蝶柄の指輪 器用度+4、体力+4、HP+12、防+5

相談の結果、黒蛍のピアスを弾美、白蛍のピアスを美井奈、蝶柄の指輪を薫がそれぞれ貰う事に。イベントエリアの装備品のドロップ

ブは、毎回良品が多くて評判も上々だ。

一行は出現した退出魔法陣に飛び込みつつ、ちよつとだけ今のステージを振り返ってみたり。

「俺のピアスの落下ダメージ減って、実は結構実用的なのかなあ？」

「あゝっ、今のエリアでは大活躍な感じ？ 同じイベントエリアで入手したんだっけ？」

「そうそう、何だかこれから先も役に立ちそうだ」

「それって、落ちる事限定じゃないですか」

美井奈が冷やかな調子で、心に思った事を口にするのだが。さつきみたいな、突き飛ばし技との凶悪コンボだって有り得るじゃないかと、弾美は反論する。

後衛に陣取る美井奈には、実はあまり関係ない話だと薫が口を挟んで来る。その割には、何かと呑み込み技などでのトラブルが多いのはどういう事だろうと、弾美などは訝るのだが。

何にせよ、中立エリアに戻った一同は、束の間羽根を伸ばして買い物や雑談などを。

買い物のためもあって、突入口の闇市へと集まるメンバーだったが。珍しく人がいるのに、やや驚きのリアクション。ここで他のキアラと出会うのは、そう言えば初めてかも。

弾美がレア装備の取得状況の低さを、データを基に口にする。あんな面白いエリアを攻略しないと、実に勿体無いと瑠璃と美井奈が文句を口にする。

確かにあんなに変化に富んだエリアも少ないと思うが。大切なのは装備の入手では？

「ところで、なんでこいつは一人なんだ？」

「さあ……あつ、でもソコの修行の塔もあつたよねえ？」

「あゝつ、そう言えば……どうやって入るんだっけ？」

「確かソコ用の、自分の修行したい部屋のチケットを買って、入り口は同じ裏エリアかな？」

「個人の強化手段も、確かにメイン世界じゃ普通だしなあ……美井奈、入ってみるか？」

美井奈は遠慮しますとそっけない返事。金のメダルは、実はまだまだ20枚近くあると瑠璃が報告する。最後の裏エリアのチケットを購入した後にも拘わらず、まだその数字である。

最近裏エリアに通い詰めで、減って行く数字の方が多いのだが販売機の値段表を見ながら、スキル60以上を伸ばすには、メダル4枚が必要らしいと確認。

それなら全員、突入可能である。

「スキルによって必要枚数が違うのか。何だ、瑠璃や美井奈だったら3枚で済むじゃんか」

「へえつ、割とお得な……修行の塔って、確か倒されても経験値とかロストなかったよね？ ライフも減らないんじゃないかな？」

「仮に減っても、実は命のロウソクも3つあるから……そう言えばライフもメダル3枚だったねえ」

そう言われれば確かに全然怖くないかもと、美井奈は簡単に前言撤回。メイン世界でも入った事が無くて、実は怖かったらしいビギナー美井奈である。

メダルがこんなに貯まるのは、メイン世界ではまず有り得ないから、今の内に慣れておくのも手だと弾美のお勧めに。美井奈もいつの間にかやら、ついついその気になって行く。

取り敢えず、いつかソロ修行の機会をつくろつと弾美は約束。

話に熱中している間に、知らない名前のキャラはどこかに消えてしまった。自分達も突入しようかと、ようやく話を中断しての攻略モードに移行するパーティ。

瑠璃が購入したチケットを、暗色系の扉の前に佇むNPCに渡す。4度目の裏エリアに、一行も既に慣れたもの。床の模様も、3つは攻略済みで消失している。

今日は謎解きの必要も無いと、瑠璃はお供え物の鬼の金棒を北東にトレード。

今回のフィールドは、今まで以上に突飛さに輪が掛かっていた。夜の深い森に、大きな満月が出ている。そのためか、夜中でも明るさに不自由は無いのだけれど。

道なりに枝に吊るされた紙ちようちんが、淡い光を投げ掛けて来ている。一行の前には大きな赤い鳥居が建っており、境内に導くように存在を誇示している様子である。

道があるにも拘わらず、一行が進むのを躊躇っているのは。境内を歩き回っている大きな人影と、鳥居の横に立っている公家の衣装を着た不気味な人影のせい。

着物を着た人影の顔は四角い布で隠されており、大きな人影は……鬼に間違いない。

「……でっかい、でっか過ぎますよ、あの敵はっ！ 建物より大きいじゃないですかっ、とても倒せませんって！」

「落ち着け、美井奈……滅茶苦茶弱いかも知れないじゃないか。それよりあれはNPC？」

「敵じゃないみたいだけど、夜中に会おうと不気味だねえ……何か手招いてるよ？」

それはそれで怖いのだが。弾美が代表して近付いて行くと、NPCの後ろの奥に大きな案内板があるのが見えて来た。境内の様子も、前の位置からよりはつきり視界に入ってきて来る。  
ものは試しと、NPCに話し掛ける弾美。

ようこそ、鬼の社へ……。ここは雑多の鬼のたむろする、異界の聖域ですじゃ……。皆様には、その鬼達と戯れる度胸がおりでしようや？

境内には、宝物庫を守るべく、鬼達が警護にあたっております。見事、彼らを欺いて宝の山に辿り着ければ、報酬はよりどりみどり……イーツヒツヒツ！

ああ、ちなみに大きな鬼は、攻撃は出来ませんが決して倒せませぬ。捕まってしまうと、パーティごとエリアの入り口に強制送還となってしまうのでお気を付け下され。

視界を避けて建物内に行くも好し、運を頼りに近道をするも好し……皆様方のご武運を……。

そう言い終えると、不気味なNPCは音も無く暗闇の中に姿を消してしまった。弾美は先程耳にした言葉の中から、何とかキーワードを抜き取りに掛かっている所。

進むルートは、どうやら2つはあるらしい。その1つは外を進む方法で、無敵の鬼に捕まってしまうとアウト。建物の中は安全……とは、どう考えても行かないだろうが。

目的地の宝物庫に無事に辿り着いたら、報酬が待っているとの事らしい。

「えっと、大きな鬼は無敵らしいなあ……宝物庫はどこだ？」

「地図あるねえ。ここが現在地で、こう……建物の梁の下越しに、隠れて移動すれば平気？」

「なる程、見付からなければ平気なんですわねっ！ 俊足魔法掛けて、ぱっと走り抜けるとか？」

皆でルートの確認をしながら、案内板の前で作戦の示し合わせ。そもそも建物の中には入れるのだろうかとの問いには、誰も言葉に詰まって答えられず。

ペナルティのエリアの入り口とはここなのかとの問いは、そんなに甘くないだろうで意見は一致した。恐らく、再びお供え物を買って、突入からのやり直しに違いない。

つまりは、金のメダル1枚分の損失が出る訳だ。

それは嫌だと、思わず真剣になる一行。しっかりと地図を頭に叩き込んで、いざ最初の建物に近付いて行く。砂利の敷き詰められた和風の景色の小道を抜け、境内の奥へと入り込み。

近くで見た大鬼は、やっぱりチョーでかかった。

「でっか！ でっか過ぎますよ、あの敵はっ……建物より大きいじゃないですかっ！」

「それはさつき聞いた。美井奈、こっそり魔法掛けてくれっ！」

「こっそりと……？ 大鬼は音にも反応するのかなあ？」

そうなると魔法を掛ける音とか、砂利を踏む音とか、色々と不利になって来るのだが。こちらに大股で近付く敵に、美井奈を始め、パーティ全員ビビリまくって慌てて物陰に隠れる。

大鬼はそのままスルー、考え過ぎは心臓に悪い。

取り敢えずは、建物の軒下は安全だと信じて、皆でダッシュを決め込む一同。大鬼がそっぽを向いている間に、掛け声と共に境内の敷地を一丸となって駆け抜ける。

見つかった気配は幸いにも無し。案内板の地図を思い出して、ド



キドキしながら鬼の目を盗んで歩を進める一行だったが。木製の建物は終わりを迎え、次なる難所が視界を遮る。

今度も大鬼は、建物の間に居座っていた。大きな瞳はどこを見ているのか。

この大鬼は、動きが少なくて今の所助かっている感じだろうか。途中、こつちが近道だと瑠璃が指し示すのは、右手にある屋根付きの板張り通路。手すりの一部開いていて、確かに入り込めるようになってる。

瑠璃の言葉を信じて、雪崩れ込むようにその通路に飛び込む一同。今度は軒下でなく建物の横に張り出した通路を進む事に。しかし、ここから手すりの迷路が始まってしまう。

大鬼の視線だけかと思つたら、こちらもかなり厄介だったり。

「あれっ、思つた建物に行けない……こつちは不味かつたかなあ？」  
「でも、さっきの建物、軒下が左半分しか無かつたですよ？ 大鬼がめつちや近くでしたし」

「だよなあ、モロ近くすり抜けるのはさすがに怖いぞっ。もういや、中に入つてみるか？」

「かくれんぼなんだか、鬼ごっこなんだか……結構嫌な仕掛けよねえ？」

とにかく思つた方向に行けない一同は、思い切つて建物の中に入る事に。建物の外を伝つて行くと、否応なしに大鬼の視界に曝されてしまうのだ。

中も木造の和風の造りで、さらに登りが畳の造りになっていた。そして、一行を迎え撃つ鬼の群れ。わんさかと普通のサイズの、ややコミカルな顔付きの鬼が襲い掛かつて来る。

顔がやたらと大きくて、髪の毛がぼさぼさ。ギョロツとした目が人目を引く。

突然の小鬼の出現に、美井奈などは大ビビリだったが。これは普通に倒せる敵だと、弾美が何とか安心させる。それでも金棒で殴りかかって来る鬼の群れは、結構な強敵だ。

久々のガチの殴り合いの感覚に、前衛は得意の武器を思う存分振るいに掛かる。敵の金棒の振り回しも然るもので、ガードのタイミングがなかなか難しい。

苦勞しながらも、敵の群れを何とか一掃し終えるパーティ。

「あゝっ、ビックリですよ。見付かって、ゲームセットかと思っちゃいました！」

「それはビックサイズだけだ……ってか、ここからどう行けばいいんだ？」

「一応魔方阵が出たけど……これは退出用じゃないよね？」

それは無いだろうと言う意見と、新たな鬼が奥からやって来たのとで、一行はその魔方阵に飛び込んでみる事に。その結果に放り出されたのもやはり室内で、ここでも戦闘が待っていた。

今度の鬼はやっぱり小柄だが、肌の色はさつきと違って青い。武器もトライデントになっていて、種類が違うのかと思っていたら。ぼろっと一匹から水の術書がドロップ。この幸運に湧き上がる一行だが、ドロップ率はすこぶる悪い感じ。

次の一団は赤鬼の群れだったが、残念ながら術書のドロップは無し。

そんな感じでワープ先の自分達の場所を窺いに、ようやく外に出られた一行なのだが。夜中の境内には間違いなさそうだが、ここがどこだか見当がつかない。

密かに地図を描いていた薫が、皆に五重の塔の位置を探すようにと頼み込む。一番目立つ建物で、境内の位置を把握する目印には持

って来いなのは確かなのだけど。

大鬼がうるつき回って、こっちが先に見付かりそうで怖い怖い。

「あつ、あつた……かな？ 左の端っこの方ですっ」

「えっと、それじゃあ……こっちの方向に、建物2つ分進むのかな？」

薫のママさが、こんな所で役に立った。こんな怖い場所で行き先を失って、拳句に大鬼に追い掛け回されるのは御免である。一行は真剣に、次の進み方の打ち合わせへと入る。

右手に見える大きな建物の軒下に入り込んで、左方向にスツと抜けてしまえば、本殿らしき建物の前に入る事が可能だ。ここからは大鬼との『達磨さんが転んだ』コースに戻ると言う事で、とにかく気合を入れ直すパーティ。最初の大鬼は、特に問題もなくスルーに成功。

ところが次の難所は、建物までの距離が遠過ぎて、しかも大鬼が2匹もいる。

「これは……外コースは諦めよう。ワープの法則、誰か分かるか？」  
「地図でチェックしてみると、近場同士の建物のワープだと思うけど。それが確定だとは、ちょっと言えないかなあ？」

「でも、ここを見つからずに渡り切るのはちょっと不可能っぽいから、中が正解じゃないかな？」

ここまで来て振り出しに戻るの嫌だと、皆の本音が眼に出てしまっていたり。そんな訳で、木製の階段をそろりと登って、近くの建物の中に入る一行。

今回は、やたらとふすまが視界を遮っていた。敵は必ずいるとの前提で、一行は部屋を通り抜けようとするのが。いきなり斬り掛かれるとさすがに驚き慌てる前衛陣。

敵の急襲は、かなり効果的だった。美井奈まで斬撃範囲に入り込まれ、そのため反撃も覚束ない。今回は赤鬼と黒鬼の混成部隊で、こいつらは腕力とスキル技の総攻撃が凄い。

一行は何とか動き回って、ふすまを逆に上手く使って敵を分散させる事に成功。美井奈がようやくフリーになると、弾美の範囲スキル技と薫のブレスでの削りが炸裂する。

瑠璃と美井奈が、弱った敵に止めを刺して行き、激しい戦闘はようやく終了。

今回は、薬品系の闇の秘酒が数個、炎の術書などのドロップも上々だ。それから今度は、移動用らしき色違いの魔方陣が2つ出現する。どっちが正解かはヒントも無く微妙な所だが。

取り敢えず移動先に近い方をおうと、そんな呑気な意見も出たりして。どっちが近いかも判然としない上、またもや新しい敵の集団がこちらの判断をせかして来る。

こうなれば奥の手しかない。美井奈に選べと、弾美がせかす。

「えっ、ええと……じゃあ手前の青い方でっ！」

「んじゃ、奥の赤いのに入ろうか」

選択は実は大正解のようだった。静かな部屋を出てみると、見事に三面からなる宝物庫が目の前に存在している。この離れの建物とあわせて、丁度四角形の小さな内庭を形成している。

砂利が敷き詰められた静謐な内庭には、スタート地点でこの境内の説明してくれたNPCが、一足先に一行を待ち構えていた。その姿は、今見てもやっぱり無気味である。

そんな不気味なNPCが、不気味な口調で宝物庫の説明をして来た。簡単に要約すると、宝箱は取れるだけ取っても良いが、後で苦労しても知らないぞとの事らしい。

全部で3部屋、順番はお好きなように。

「欲張ると、後で泣きを見るパターン……ですかね？ それからお兄さん、貸し1つですよっ！」

「そうだな……取り敢えず1つ目行ってみようか」

「あれっ、美井奈ちゃんの恨み言は、さり気なく無視？ えっと、左右と真ん中の部屋があるみたいだねえ、どれを最初に廻ろうか？」

弾美は適当に、まずは右の部屋から行こうと提案する。それに応じて早速入ってみた右の部屋には、文字通りよりどりみどりの宝箱が鎮座していて。その数は何と10個、何故か箱には数字が割り振ってあつたけれども。

よく見れば、宝箱の後ろに1から10の数の書いてある額が飾つてあつた。そして手前には、小さな日本人形が一体。クリックしてみると、日本人形がルールを説明して来た。

「どうやら簡単なクイズが出題されて、間違う度に報酬が減って行くらしいのだが。」

出された10の出題は、体育の日がある月は？ とか、12の最大公約数は幾つ？ とか、サイコロの2の反対の面の数字は幾つ？ とか、小学生でも分かるような基本的なものばかり。

プレーヤーに小学生もいるとなれば、そんなに難しい質問も出せないのだろうが。パーティのブレイン役の瑠璃にとっては、ちよつと物足りなさそうな問題ばかり。美井奈とワイワイ相談しながら、出題された質問に順次答えて行く。

宝箱の中の報酬も、最初の7つは時化したもの。水晶玉や食事アイテム、5千ギルとか薬品系の神水とか。最後の方で、やっと土龍の尻尾や光の術書などが出てきた程度だ。

それでも消耗品の補充に、瑠璃や美井奈は嬉しそう。

「わっい、大エーテル2つも出たよっ、嬉しいなっ」

美井奈ち

「やんも3つも出題答えられたし、上々だねっ！」

「えへへっ、頑張りましたよっ！」

「宝箱、数はあつたけど、大したものは出なかったなあ。つてか、暗塊装備はどこだ？」

「やっぱり最後じゃないかな？ 大ボスとか、まだ出てないしねえ……」

最後には絶対に戦闘があるだろうとの、薫の穿った読みなのだが、今までの裏エリアの流れから行くと、確かにボス級の敵は何体か出て来てもおかしくは無い。

今度は反対側の、左の部屋へと進む一行。この裏エリアに入ってもまだまだ30分程度しか経過していない筈である。この部屋の中にも整然と宝箱が10個置かれていたが、今回は特に難しいルールは無いようだ。

ただし、取り過ぎに注意と案内役の日本人形。

弾美が小手調べにと、取り敢えず近くの宝箱を開け放つ。その途端に、キャラのSP+20上昇を獲得したとの知らせのログ表示。調べてみると、なるほど確かにSPが上がっている。

どよめく一同、これは凄いかもと弾美はテンションを上げるのだが。

「弾美君、こつ言つのは引き際が肝心なんだよ？ 絶対に当たりの数は3つか、多くて4つなんだから。統計的に言つて、全部開けると損する作りにしてる筈！」

「なるほどお、確かに……全部開けて得するなら、みんなそうしちゃいますもんねえ？」

「そうだねえ、薫さんの言つ通りだよ、ハズミちゃん」

「じゃあ、後1個で！ 当たりがあと3個だとしたら、確立は3分の1じゃんか」

それは要するに33%で、外れる確立の方が遙かに高いと、瑠璃は反論するのだが。そんな事ではゲーマー魂に反するとか、あとで宝箱の中身が気になって眠れないとか。弾美はひたすらに、我が俣全開な論理で武装して次の参加者を募る。

仕方なく、瑠璃が代表して次のチャレンジャーに。当てる気の無い覇気の無さが祟ったのか、連続して外れの宝箱を引いてしまう。HP-10はともかく、MP-10はとても痛かったのだが。次に腕力+3を引き当てて、何とか面目を保つてみたり。

薫も美井奈も揃って不参加を表明して、これにて2つ目の部屋は終了の運びに。弾美はあまり納得していない表情だったのだが、強制も出来ないでとうとう諦めてしまった。

ギャンブル好きの旦那は苦勞すると、薫が瑠璃に同情する素振り。何故かしきりに頷く美井奈は、何事も程々が肝心だと何となく悟った口調。瑠璃はちょっと頬を染めて、もごもごと弾美を弁解しようとするのだが。

明らかに分が悪そうな弾美は、今回は敢えて反論せずにスルー。

真ん中の部屋には、色の違う宝箱が3つ。今回は案内の人形も置かれておらず、しかも全部の宝箱に鍵が掛かっていた。合鍵も通用しないそれは、明らかにボスを倒しておいでなさいとメッセージを発しているようなのだが。

敵はどこだと、部屋を出て周囲を見渡すパーティ。砂利の敷かれた内庭には、先程の和服のNPCと、2体の鬼が待ち構えていた。鬼は先程までのコミカルタイプとは、まるで違う。

プロレスラーのようながっちりした体躯と、恐ろし気な、まさに鬼の表情をしていた。

和服の人影に話し掛ける前に、一同は打ち合わせるまでも無くそ

れぞれ強化を掛け始める。間違いなく、アレが最後のボス級の敵だと全員が同時に気付いたようだ。

2体の鬼は、手に金棒と薙刀を持っていた。和服の人影は昔の修験者が持つような錫を手にしている。大柄な体躯の赤鬼と青鬼が、一行が近付くとゆっくりと顔を上げて行く。

和服の人影が、先手を取って呪文の詠唱に入る。弾美がそれを潰そうと動き出すのに合わせ、鬼達も盾になるべく前に出て来た。その動きは、先程までの雑魚とは迫力がまるで違う。

戦闘は始まり、まずは和服男の強化系の魔法が鬼達をパワーアップする。

「わっ、強化系唱えられるんだ、向こうの敵っ！」

「どんどん掛けられたら厄介かもな……うわっ、鬼の武器にも付与魔法が掛かってる！」

「隊長、今どつちのタゲ取ってるんですか？　ってか、後ろの魔法使い、放置してて平気？」

「うっ、そう言われれば放置は怖いかも……でも、絶対鬼が邪魔して来るよねえ」

敵の戦法が今までと違う事で、こちらの戦術もなかなか上手くまとまらない。後衛の術者を先に仕留めたいのだが、それを阻止するための2体のブロッカーが邪魔である。

その前衛を先に相手にすると、後衛の術者が遣りたい放題。ある意味、自分達がいつも取っている戦法なだけに、向こうに真似をされると無性に腹が立つとも言えるのだけど。

取り敢えず、妖精光球ガードをして、美井奈が術者を仕留める方向に。

敵の和服術者は、さらにその間にも防御系の強化を鬼達に掛けて来た。身を反らして悔しさを表現する弾美を尻目に、敵のチームワ



「クは程々に良い感じな様子。」

美井奈がそれを打ち破るべく、単独術者を削りに掛かる。いきなりの《みだれ撃ち》からの《貫通撃》に、敵の術者は美井奈をターゲットに定めたようだった。

紙吹雪を散らせたかと思ったら、矢の攻撃がガードされ始め。さらなる動きが。

「にやつ！ 向こうのボスが何か召喚してますっ、部屋にいた小鬼ですかっ！？」

「ええっ、一体何匹呼び出すのっ！？ ちょっとこれは洒落にならないよっ！」

「美井奈の範囲攻撃で何とか凌いでくれっ！ 近付いて来たら、俺と薰っちの範囲攻撃に巻き込んで何とかするしかないっ！」

「りよ、了解っ！ 吹き飛ばしですねっ！」

敵の後衛を攻撃対象に選んで、果たして良かったのか悪かったのか。どちらにせよ、嫌がらせの支援はバンバン飛んで来ただろうし、こうなったらここは凌ぐしかないのだが。

黄色い肌の小鬼の群れは、真っ直ぐこちらに突っ込んで来る。攻撃範囲に入るなり、ハズミンの《ドラゴニックフロウ》が炸裂する。さらに追い討ちにと、カオルの《炎のプレス》が小鬼の群れを焦がしに掛かる。

小鬼達のHPは、それによっていきなり半減。そこに狙い済ましたように、美井奈の範囲矢尻の《スクリューアロー》がヒットして。小鬼の群れは、成す術も無く術者の前まで吹き飛んで行った。

闇の秘酒を使用しての止めの一撃は、美井奈の雄叫びと共に放たれる。

敵の術者もこれには慌てたようだ。紙のガードも範囲攻撃に巻き込まれて、奇麗に吹き飛んでしまった様子。これで再び、美井奈の

強烈な遠隔攻撃に晒される事になってしまった敵の術者。時折、回復の合間に瑠璃の魔法攻撃も加わり、術者のHPも既に半減。

敵の反撃の口火は、いきなりの範囲魔法。土系の呪文の地震攻撃が来たと思ったら、続いて炎系の呪文の爆裂魔法がパーティに降り注ぐ。呼応するように、鬼達も口から毒霧を吐き出し、皆が悲鳴をあげつつ非難轟々。

さらに術者の、蜘蛛の糸での動きの封じ込め攻撃が始まると。回復に徹していた瑠璃も、黙って見てはられない。減ったMPを遣り繰りしての《エンジェルリング》の使用は、戦場に思わぬ効果をもたらした。

使った本人もビックリ、弱体系の魔法の除去と共に、敵が怯む気配を見せ始める。

「ぬおっ、鬼達が怯んでるっ……攻撃の間隔が鈍くなって来てるな！」

「あっ、本当だ！ 金縛りも解けたし、反撃のチャンスだよっ！」

「だなっ……もう一回、範囲攻撃に巻き込んで弱らせてやるっ！」

後衛からの好き勝手な翻弄に、いい加減頭に来ていた弾美。薫も青鬼を引き連れて、術者に接近しつつスキル技を撃ち込む。さらに追い討ちの弾美の範囲技に、術者もきつちり巻き込まれ。

止めとばかりに美井奈の《貫通撃》で、敵の後衛術者がようやく倒される運びに。パーティの歓喜の叫び声の中、気付けば鬼達のHPも残り6割近く。今度は薫の受け持つ青鬼からだど、取り決めたのは良いのだが。

倒した筈の術者の身体が、ムクリと起き上がって一同を驚かせる。

「わわっ、ボス術者が生き返ったよっ!？」

「あれっ……いえ、どうやら中身無いですねえ。着物だけが浮いてるみたいですけど?」

「何だそりゃ、そんなの構ってられるかつ。何かして来たら対応してくれ、瑠璃っ！」

青鬼の攻略に必死な削り組は、とにかく敵の前衛の一角を倒してしまいたくて仕方が無い。HPが半分を切ると、鬼の攻撃に範囲技や毒霧攻撃が混じりだして、厄介極まりない。

幸い、まだまだ瑠璃の天使の領域が生きているので、鬼の動作は緩慢なだけねど。肝心のその術の掛かっている時間も、それ程長くないのは体感で皆知っている事実。

何とか力を入れての追い込みが効を奏し、青鬼も続いて地に伏しに行く。

それとほぼ同時に、瑠璃の天使魔法も時間切れを迎えてしまった。それでも残る敵はあと1体だからと、パーティ内では既に余裕のムードが漂っていたのだが。

術者の置き土産の仕掛けを、ついすっかり忘れていた一同。その結果、上着の一番近くで警戒に当たっていた瑠璃が、何と身体を乗っ取られてしまうと言う事態に。

着たくもない着物を着せられ、ルリルリは操縦不能の我が俣放題。

「わ〜っつ、ゴメンみんな！ 天使魔法解けた途端に、着物にキヤラ操作を取られちゃった！」

「ええっ、白ガスみたいなのアレですかっ！ それって、どうやれば解けるんですかっ？」

「むっ、どうだろう……わっ、こっちに来るなっ、瑠璃っ！」

冷たく言われた瑠璃は途方に暮れるのみだが、ルリルリはとっても積極的。操られた勢いで、ハズミンをガシガシと殴り始める。貯まった恨みでもあるのかと、憤慨する弾美だったが。

薫の《炎のブレス》の試し撃ちで、着物にもHPがある事が判明

した。

敵に回った瑠璃にも、ダメージは及んでしまったのだけど。後ろから攻撃すれば、着物だけにダメージを与えられる事が分かってから、薫と美井奈がタゲの取り合い。

弾美の《グラビティ》で動きの遅くなったルリルリは、タゲを翻弄されてあっちを向いたりこっちに移動したり。そんな事をしていく間に、ようやく憑き物が落ちてくれたよう。

操作を取り戻した瑠璃も、回復役を取り戻したパーティも安堵のため息。

ここから一行は怒涛の寄り切り。最後まで残った赤鬼を叩き斬って、全員で元気にハイタッチで締める。苦しい戦闘を切り抜けただけあって、ドロップも上々で嬉しさもひとしおな感じだ。

炎と水の術書の他にも、楽しいな装備が幾つか。術者からは、陰陽ピアスと朱色の袴が、鬼達からは鬼の面や鬼の金棒など。それに加えて、お待ちかねの宝箱の鍵が3つ。

とって返して、念願の正面の宝物庫の小部屋に戻ったパーティ。宝箱からは、お待ち兼ねの暗塊の鎧をゲット。その他にも、性能の良さ気な片手剣と謎の鏡アイテムが出て来た。

4つのレア装備のコンプリートに、一行は再び盛り上がったのハイタッチ。

その後内庭に出現した魔方陣に飛び込んで、全員でエリア脱出の運び。ボス戦で操られた瑠璃が、めでたくレベル30へとアップした。パーティでは、これで30超えは2人目である。

この裏エリアで掛かった総時間は、だいたい45分くらいだったろうか。何より、かなりの数の術書が補充出来た事に、瑠璃を始めパーティもホクホク顔だったり。

ちなみに入手装備はこんな感じ。

陰陽ピアス 精神力+5、知力+5、MP+15、防+6  
朱色の袴 ポケット+2、精神力+5、MP+20、防御+

12

鬼の面 知力+5、SP+15%、HP+20、防+4

破邪の剣 攻撃力+21、HP+20、耐呪い効果《耐久1

5/15》

暗塊の鎧 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+

25

「昨日行った裏エリアでは薬品が補充出来たけど、ここは術書が凄かったねえ」

「んじゃ、それも含めて今から割り振りしようか」

「写し身の鏡って、アイテムをコピー出来るんだって………どういう感じに使えばいいのかな？」

「そりゃ、強い装備とか……呼び鈴とかでもいいのかな？」

「確かに勿体無いから、呼び鈴はよっぽどの危機じゃないと使わないもんねえ」

珍しいアイテムの入手に、パーティのテンションも上がり気味。

薫はひっそりと、両脚装備を迅速装備から袴に変更するか悩み中。

防御は上がるのだが、せっかくのセットが崩れてしまう。

別にセットを崩したペナルティも無いようなので、変えてみればとの弾美の軽い言葉。それによってMPも上がるし、ブレスの使用回数も上がるのもパーティには有り難い恩恵である。

何しろ、段々と範囲攻撃でなければ切り抜けられないピンチも多くなって来た。

中立エリアにキャラを移動させた一行は、完全にお気楽ムードに

浸っていた。和氣藹々とお喋りしながら、アイテムの分配や使用に興じている。今日は時間を夜に残す算段で、つまりは夜まではもうする事もない。落ちる前に、ハズミンの新装備のお披露目など。

暗塊装備の鎧は、暗色系のダークな感じで、格好いいと評判のよう。弾美も気に入ったのだけど、苦勞して取った龍鱗装備にも、何となく思い入れがあつて寂しい気もする。

何より、裏エリアは全て制覇してしまった。その事もやっぱり、少し寂く思つてしまう。

術書や装備の配分を、瑠璃が真面目な顔付きで行っている。各々新魔法こそ覚えなかつたが、それによつて今覚えている魔法の威力の強化にはなるのでオツケー。

そんな合間に、今日も上手くクリア出来て良かったとか、夜は何時に待ち合わせしようかななどの雑談を交わすメンバー達。渡された術書を早速使つて、キャラの強化も忘れない。

そろそろ、おいとまする時間も迫つて来た。薫が今日も、美井奈を送つて行くと申し出る。

「有り難うございます。お母ちゃまが最近、仕事が忙しくて帰宅が遅いんですよ。家に戻つても一人だし、帰り道も寂しいですからね。」

「あゝつ、その気持ち分かるなあ。私も家に人がいないのは嫌いだなあ。」

瑠璃がそう答えるのだが、薫などは既に一人暮らしが長いせいか、その感覚もよく分からなくなっている。それでも年少の美井奈に頼られている感があつて、悪い気はしないのだが。

階段を降りて、弾美の母親の律子さんとおいとまの挨拶を交わす女性陣。お邪魔しましたの言葉に対して、夕ご飯食べて行けばとの弾美の母の大らかな答え。

薫などは惹かれるものがあつたが、丁寧に断つて帰路につく事に。

「それじゃ、また今夜ねっ。美井奈ちゃん、行こうかつ」

「はいっ、お兄さんっとお姉ちゃまつ、また今夜っ！」

元気良く手を振つて別れを告げる少女に、弾美と瑠璃も和やかな表情で手を振り返す。最近見慣れたサイクルに、ほのぼのと玄関先で感慨に耽る二人。

小さくなつていく美井奈と薫の後ろ姿は、手を繋ぎあつて実にも良さそう。

「二人とも結局、仲良くなつて良かったねえ、ハズミちゃん」

「心配する事無いつて、俺が言つただろ。二人共、喧嘩出来るような性格じゃないもんな」

「本当だねえ……何だかちよつと、奇跡的なメンバーだつて思えるよ」

弾美も全く同じ思い。胸の内を見られた思いで、弾美は驚いて隣に立つ幼馴染の横顔を覗う。瑠璃はそんな弾美に微笑んで、ただ瞳のシグナルを送つて来るのみ。

奇跡はこれからも起こるのだ、シグナルはそんな風にも読み取れた。

## 20 チャージ&ダーク！（前書き）

休日の雰囲気呑まれてまったり過ごした結果、うっかり掲載作業を忘れてしまうところでした（笑）。今日は涼しかったので、本当に過ごしやすいかったです。

最近は携帯のモバゲーで、カードを集めて戦う奴にはまっています。色々種類はあるみたいなんですが、逆にこっちの方がイベントも多くて楽しかったり。

パソコンのモバゲーは、しょっちゅう不具合が出たり、意外と面白いのが無かったりで。最近はそれ程に時間も掛けなくなって、まあ家にいる時にしか出来ないし（笑）。

その点、携帯モバゲーは仕事先でも可能ですもんね。

さて、物語の方は段々と地上エリアも制覇されて行って。回っていない場所も無くなって来て、後は取りこぼしの無いように頑張るだけ？

それでもイベントエリアは難関を残しているし、使っていないトリガーもそこたま残っているし。弾美や瑠璃にしてみれば、頭を悩ませるところですね。

その見返りと言う訳では無いけれど、今回も報酬には凝っています（笑）。

あとちょっとで、投稿済みの章の再掲載が終わりますね。フォルダの中の文章ファイルの更新日時を見てみたら、何と本当に1年前の日付だったりして。

時間の流れとは、こんなに早いんだなあって実感しましたね。

そんな地上エリアの追い込みに奔走する20章、物語的には全体の3分の2を過ぎた辺りです。ライバルやエリアの仕掛けも気にな



ってはいるものの、パーティの足並みもようやく揃い始め。

彼らには元気に切り抜けて貰いたいと願いつつ、本文をお楽しみ  
あれ^^^

## 20 チャージ&ダーク!

時間は昨日の夜に、一時さかのぼる。弾美パーティは、その日は夕方のインで見事イベントエリアの2個目と裏エリアの4個目をそれぞれ攻略したのだったけど。妖精の泉に行くためだけに、再度8時半にイベント限定エリアにインする約束をしたパーティだったりして。

すっぱかす者も遅刻する者もない優秀振りで、約束の時間に全員集合を果たし。リーダーの弾美としても嬉しいのだが、音頭を取るのには完全に瑠璃にバトンタッチしている感じ。

それより気になるのは、写し身の鏡の性能である。レア装備でもオツケーなのか、コピーの回数は何回までなのか? 1回だけだと割とトホホで誰が使うか悩ましいのだけれど。

実は使う順番は、夕方の合同インで決定済み。女性陣は、弾美に最初を譲ってくれていた。

『今夜は、戦闘はほとんど無くて移動だけかな? みんなちゃんとコピーする装備と妖精にトレードするアイテム考えて来たか?』  
『うん、そう言われてもねえ……コピーは順番回って来るか未定だし、妖精は呪い装備以外は特に思い付かないし?』  
『そうですねえ……鏡が1回だけだったら、妖精に直して貰うってのはどうです?』

それは良い案だと、美井奈の裏技っぽい発言にのっけから盛り上がってみたり。皆をパーティに誘い終えた弾美は、瑠璃に進行をせつつきながらも。自分はあらかじめ考えておいた、薫の腰袋のコピーを頼む。

SPとポケットが増えるそれは、かなりの良品でハズミンにも欲しい。

鏡を持っていたのも、実は瑠璃だったのだ。薫から絹の腰袋を受け取りながら、しばし写し身の鏡の使い方を模索している様子。程なく、コピーが完了したと言って、二人に同じ品をトレード。

幸い、鏡はまだ壊れてはいないという瑠璃の報告に、パーティもやや興奮気味。それぞれ固定していない場所で、仲間の持っている装備品をチェックする時間が過ぎて行く。

結局、美井奈は保留するとの事。瑠璃と薫も決断はつかない感じだ。

『ピアス……うっん、勿体無いかあ。私も保留かなあ？』

『瑠璃はどうすんだ？ お前も腰袋をいいのに代えた方がいいんじゃないか？』

『そうだねえ、じゃあそうしようかな？』

そんな訳で、見事2回目の使用にも耐え切った写し身の鏡。お前は偉いと、よく分からない鏡への褒め言葉が飛び交う中、ようやくパーティはフリーエリアへと進行する事に。

このエリアは久々の感じもするけど、実は3日しか経過していない。その時は妖精の泉を探しつつ、トリガーを消費したり、合成素材を集めたりと忙しかったのだけれど。

今夜は進むべき道は決まっている。サーチしてみたら、今日の活動パーティの数は微妙だと判明した。弾美パーティを数に入れないと、ようやく2桁程度は多いのか少ないのか。

こちらとしても、邪魔はしたくないしされたくも無いので、それはそれで良い。

美井奈が、時間があるならタウロス族の集落で落ちてくれたら有り難いと言って来た。砂嵐の矢束を買い足したいそうで、限定イベント終了までに、あとの位必要かと訊ねて来るのだが。

考えてみたら、あと1週間でこの世界ともお別れな訳である。気付いた弾美がそう口にする、せっかく大事に育てたこのキャラはどうなるのかと、美井奈の問いも切実だ。

そう言えば、最近メイン世界のキャラと接続していない。弾美にとっても、ハズミンと言えばこちらのキャラとの刷り込みが、この短い期間の内に完成してしまっていた。

せっかく育てたキャラとの別れを想って、皆ちよっとしんみりしてしまったり。

『そうだねえ、寂しいよねえ…… たった4週間の付き合いだけど、思い入れがあるキャラだから』

『このキャラ……使えなくなるのは仕方ないけど、抹消されるのは悲し過ぎますよっ!』

『そうだなあ、短い間だけど、苦楽を共にしたキャラだもんなあ』

瑠璃にしてみても、初めて前衛デビューした思い入れのあるキャラである。失敗や手痛い目にも何度となくあつたけど、ハズミンを初めとして、色んなキャラに助けられて来た。

その冒険の過程で、ミイナやカオルと出会ってとても仲良くもなれたし。例えばイベントで入賞出来ない結末となるうとも、とても無駄だったと一言で片付けられるものではない。

それどころか、お金を出したって得られない大切な思い出である。

ほんの数週間の間が出来事などを話し合いながら、パーティーはフリーエリアを順調に縦断して行く。平均のレベルが30に近いパーティーは、今では絡まれても全く平気である。

邪魔者にもほとんど出くわさずに、10分足らずで大きな湖水が見える場所に到着。それを迂回しながら、その奥に存在する妖精の泉を目指す一行だったのだけ。

移動していたらどうしようと、美井奈などは心配な様子である。

そんな意地悪な事にはなつておらず、今回もちゃんとポイントは存在していた。時間をチェックすると、丁度9時くらい。

丸々3日、ちゃんと経過している計算である。

まずは呪い装備の解除をしようと、まずは美井奈が瑠璃から人形を受け取る。妖精は今夜も、快くこちらの要望に応じてくれた。そして、戻って来た装備の性能に一同ビックリ！

どよめきが収まらない中、薫も兜をトレード。こちらも良品に間違いない。

精霊封入の人形 HP + 50、MP + 50、SP + 10%、

防 + 1

サファイアの兜 腕力 + 5、SP + 10%、攻撃力 + 5、防

+ 1 2

『わ〜っ、人形の性能凄いい〜っ！ これは、瑠璃ちゃん用かな？』  
『そうだな……兜は美井奈だな。他のみんなは固定しちゃってるから』

『わ〜っ、有り難うございますっ！ 早速被ってみますねっ！』

美井奈かそう言つて、何故か鬼の面を被つてハズミンの前をぴよこぴよこ歩き回る。次は雪だるまのお面に変えて、その姿は実に楽しそう。ピエロのお面に変化するに至つて、ようやく弾美からツッコミが。

それを受けて今度は、瑠璃がファッションショーを開始。キツネやウサギの尻尾が、ルリルリのお尻から次々と生えて来る。ドラキユラのマントに至つては、何故か全身に変化が及ぶ始末。薫はそれを見学しながら、呑気に拍手で応えていたり。

この後は戻るだけとは言え、実におおらかなパーティである。

『二人とも、気が済んだか？ 俺は取り敢えず、妖精の呼び鈴をト

トレードしてみるぞ』

『それが出来たら、天使の呼び鈴も修理しちゃう？ ハズミちゃんの剣はしなくていい？』

美井奈がようやく、入手したばかりの兜を装着。なかなか凜々しいその姿だが、妖精の服にはやはり似合っていない。前まで被っていたのが海賊帽子なので、それよりはマシと言う程度。

瑠璃の変身は、それに較べてかなり劇的だった。何とルリルリの真後ろに、キャラの半分位の身長のお人形さんが出現。瑠璃の動きに合わせて、ぴよぴよこと付いて動き回る。

女性陣からは、盛大な盛り上がりのログが。

『うわっ、お姉ちゃまっ……凄く可愛いお供じゃないですかっ！』

『おっ、呼び鈴も直して貰えたぞっ！ ってか、限界使用回数がよく分からないからなあ』

『ハズミちゃん、見て見てっ！ お人形さんが可愛いのっ』

お人形さんと言う年齢でも無いだろうと言う言葉を、弾美は辛うじて飲み込んで。取り敢えず呪い解除を称えて、一応キャラから拍手を送ってみる。後でこじれて拗ねられても詰まらないし、なかなか似合っていると思ったのも本当だし。

ようやく気の済んだ瑠璃が、もう1つの呼び鈴をトレードする。無事に修理をして貰うと、フリーエリアでやる事ももう無い。妖精は、最後にやつぱり次は3日後だと皆に告げて来た。

また来ても良いらしいのだが、再び用事があるかは微妙。

一行は、かなりルンルン気分で泉を後にする事に。その後は美井奈の希望通り、タウロスの集落に向かいながらも、時折NMが湧いていないかだけ注意する程度。

そうそうそんな幸運には恵まれる訳も無く、時間制限が来る前に

パーティーは目的地に到着した。後は好きに落ちてくれと、事実上の解散通知。時間があまった弾美は、落ちるまでの間メールや通信チャットを始め始める。

女性陣は会話モードに突入して、まだ落ちる気配は無いようだ。

『海賊の帽子、売っちゃってもいいですかねえ？ 矢束買うのに、私はいつも金欠なんですよっ』

『買ってあげるよ、美井奈ちゃん。私結構、お金貯まってるから』『いいんですか、薫さん？ じゃあ、済みませんが1セット程……』『オツケ、普通のと範囲の奴、両方買ってあげるねっ』

美井奈と薫が矢弾などを買い物している間、瑠璃がやけに静かだと思ったら。どうやらNPCに話し掛けていたら連続クエが発生したと、戸惑いつつパーティーに報告して来る。

この前にチエリーパイを渡したNPCが、今度はブルーベリーパイを欲しいと言って来たと言うのだけど。丁度自分が使う用に使っていた瑠璃は、気安くそれをトレードした所。

そのタウロスNPCは、大喜びの上機嫌になって。食事のお礼にと、瑠璃を自宅に招待してくれたらしい。そう言えばルリルリの姿が無いと、周囲を駆け回って美井奈が報告して来る。

クエをこなした瑠璃だけの特権らしいが、部屋の中にインプを見た瑠璃はビックリ。

正確には、籠に閉じ込められていた状態の悪魔族。このインプもNPCらしく、話し掛ける事が出来たのだが……出してくれたら良い物を見ると、姦計を持ち掛けられたと焦る瑠璃。

これを受けて、パーティーはひと騒然が巻き起こる。貰っちゃえと軽くそのかす者、絶対しつぺ返しがあると思われ、賛成と反対に二分しての議論が熱く交わされる。家主らしいタウロス族は、甘い食べ物に夢中でこちらには注意を払っていないよう。

話を進めるには、やっぱり悪巧みに乗るしかないよう。瑠璃はインプを逃がす事に。

サンキユ、話の分カル奴だな……助かつタゼ人間！ 才礼の品はコレダ、コノ集落の南側二、色ソナ宝物ヲ溜め込んだ、欲張りナ奴の縄張りガ在ル。

ソコに住む奴カラ、シツカリとセシメて遣リナ。ソノ後は、俺八知らん。

『……だそうなんだけど。闇の呼び水貰っちゃった、叱られない内に逃げるねっ』

『トリガーがやたらと貯まって行くなあ。そろそろ消費しないと駄目だなっ』

『大丈夫ですか、お姉ちゃまつ！ 立ち入り禁止になってたりしませんかっ！』

仕掛けに対して、とことん疑り症の美井奈だったが。空の鳥籠に対するNPCのリアクションは、取り立てては無いらしい。そんな感じで、最後はごたごたして終わってしまったのだけれど。

そんな流れを受けての、次の日の夜8時。インしてみても、やっぱりタウロス族の集落に変化は無いとの事。幾分安心して、瑠璃は中立エリアにワープで戻って行く。

今夜はイベントエリアの3つ目の予定。上手く行けば、4つ目も行く事に。

パーティメンバーの中で、一番最後にレア装備の鎧の入手となったハズミンだったが。嬉しい防御力の上昇と共に、装備2つの効果



で新しい闇魔法まで覚えてしまった。

待望の攻撃魔法は、何と範囲効果で《闇の刺針》と言う名前。周囲の敵達の影から刺針が飛び出して、敵の本体を攻撃する感じの魔法だが、実は威力はそんなに強くない。

それでも、一瞬の足止め効果もある魔法なので、使い様によっては便利かも知れない。さらにポケットが1つ増えて、武器も新たな片手剣に新調する事となった。

最近では珍しく、急激なパワーアップに本人もご満悦。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：31

取得スキル : 片手剣64《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

《複・トルネードスピン》

《下段斬り》 《種族特性

吸収》 《攻撃力アップ2》

《上段斬り》 《複・ドラ

ゴニックフロウ》

: 闇62《SPヒール》 《シャドータツ

チ》 《闇の断罪》

《グラビティ》 《闇の腐食》

《闇の刺針》

: 竜10《竜人化》 : 風23《風鈴》

《風の鞭》

: 土25《クラック》 《石つぶて》

種族スキル : 闇31《敵感知》 《影走り》 《SPアップ+10%》

: 土10《防御力アップ+10%》

装備 : 武器 破邪の剣 攻撃力+21、HP+20、耐呪い効果《耐久15/15》

: 盾 龍鱗の盾 耐ブレス効果、防+18《耐久

15/15

：筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、SP+10%

：頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+15

：首 鬼胡桃のペンダント HP+8、体力+2、防+6

：耳1 黒虫のピアス 闇スキル+3、SP+10%、防+4

：耳2 白豹のピアス 器用度+3、HP+10、落下ダメージ減、防+5

：胸 暗塊の鎧 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+25

：腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+15

：指輪1 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、防+5

：指輪2 古代の指輪 体力+1、防御+5

：背 砂嵐のマント 風スキル+3、敏捷度+4、防+8

：腰 獅子王のベルト ポケット+2、攻撃力+4、HP+15、防+8

：両脚 魔人の下衣改 攻撃力+5、体力+3、腕力+3、防+15

：両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+10

レベルが30になったルリルリは、新種族スキルでMP量がちょっとアップした。そして背中に背負う人形で、さらに+50のMP

アップ。天使魔法も使いやすくなり、何より回復支援役としては、安定してヒールを飛ばす事が出来るようになった。

他で言えば、弾美と同じくコピーして貰った腰袋のお陰で、胴装備の交換で減ったポケットが1つだけ戻って来た事。SPも人形と合わせてかなりの上昇である。

弾美には、意地でも二刀流を取れと何度もせっつかれているのだが。今でも結構お気に入りな万能キャラに成長していると、本人は割と自画自賛だったりする。

確かに他の削りキャラに比べ、ガツンと削る能力に劣るのは確か。そこが課題と言えば、まあ課題だろうか。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：30

取得スキル : 細剣52《二段突き》 《クリティカル1》 《複・アイススラッシュ》

《Z斬り》 《麻痺撃》 《幻惑の舞い》  
: 水58 《ヒール》 《ウォーター

シエル》 《ウォータースピア》

《ウォーターミラー》 《波紋ヒール》  
: 光30 《光属性付与》 《エンジェルリ

ング》 《ライトヒール》

: 氷41 《魔女の囁き》 《魔女の足止め》  
《魔女の接吻》 《氷の防御》

種族スキル : 水30 《魔法回復量UP+10%》 《水上移動》  
《MP量+10%》

装備 : 武器 戦闘ネコの細剣 攻撃力+15、敏捷度+2、  
MP+8 《耐久12/12》

: 盾 豪華な大盾 体力+4、防+12 《耐久8

/ 8

：筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、SP+10%

：頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+5、MP+25、防+8

：首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP+10%、防+5

：耳1 天使のピアス 光スキル+3、知力+2、MP+8、防+3

：耳2 流水のイヤリング 水スキル+5、氷スキル+5、MP+25、防+5

：胸 流水の鎧 水スキル+5、氷スキル+5、MP+25、防+18

：腕輪 バトルグローブ 攻撃力+3、HP+8、防+12

：指輪1 光の特級リング 光スキル+4、HP+15、攻撃距離+4%、防+4

：指輪2 プラチナの指輪改 腕力+4、HP+20、攻撃速度UP、防+8

：背 精霊封入の人形 HP+50、MP+50、SP+10%、防+1

：腰 複合素材のベルト改 ポケット+4、器用度+5、MP+13、防+11

：両脚 流水のスカート 水スキル+5、氷スキル+5、MP+25、防+10

：両足 ゴゲン鋼の戦靴 体力+2、HP+6、防+10

前回、残念ながらもレベルが上がらなかったミイナだったけれど。

自分の分身から性能の良い武器を入手した事で、攻撃力が上昇したのは嬉しい改良点。何より耐久力の高い武器だけに、単純に《貫通撃》を撃つ回数が増えたのは大きなパワーアップである。

陰陽ピアスによって、攻撃魔法と回復魔法の基本数値が上昇したのも嬉しい。頭装備の交換で、何気に防御も上がっており、後衛キヤラながらも万能タイプに育ちつつある。

後ちよつとで30台、本人もやる気充分！

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：29

取得スキル : 弓術46 《みだれ撃ち》 《近距離ショット1》

《攻撃速度UP1》

《貫通撃》 《複・スクリユーア

ロー》

: 光44 《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》 《フェアリーウィッシュ》

: 風20 《風の陣》 《風の癒し》 : 水

10 《ヒール》

: 雷31 《俊敏付加》 《俊足付加》 《ス

パーク》

種族スキル : 雷29 《攻撃速度UP+3%》 《雷精招来》

装備 : 武器 神樹の長杖 攻撃力+25、知力+5、MP+

28 《耐久14/14》

: 遠隔 雷鳴の弓矢改 攻撃力+20、器用度+5、

敏捷度+5 《耐久14/14》

: 筒 貫きの矢束 攻撃力+14

: 頭 サファイアの兜 腕力+5、SP+10%、

攻撃力+5、防+12

: 首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP

+10%、防+5

防+9  
     : 耳1           白蛍のピアス   光スキル+3、HP+25、  
     : 耳2           陰陽ピアス   精神力+5、知力+5、MP  
     +15、防+6  
     : 胴           妖精のドレス   光スキル+4、風スキル+  
     4、MP+20、防御+20  
     : 腕輪          星人の腕輪   光スキル+2、闇スキル+3、  
     MP+8、防+8  
     : 指輪1       雷の特級リング   雷スキル+4、器用度+4、  
     攻撃速度UP、防+4  
     : 指輪2       サファイアの指輪   腕力+3、SP+10%、  
     防+5  
     : 腰           複合素材のベルト   ポケット+4、器用度  
     +4、MP+8、防+6  
     : 背           白豹のマント   雷スキル+4、器用度+4、  
     MP+10、防+10  
     : 両脚       妖精のスカート   ポケット+2、光スキル+  
     3、風スキル+3、防御+12  
     : 両足       戦闘ネコの長靴   敏捷度+2、MP+6、  
     防+10

美井奈と共に、30手前で足踏みしてしまったカオルだが。炎スキ  
 ルは順調に上がっており、範囲攻撃の《炎のプレス》の威力も少  
 ずつだが上がって来ている。

装備で言えば、両脚と指輪を変更出来た。防御やMPの上昇で、  
 何より外見が大きく変わって和風テイストが加わっているのが何と  
 もいえない感じである。迅速装備を崩しても、特に性能や特性に問  
 題は無いらしく。

ただ、ほとんどの迅速装備は固定済み。それがちょっと切ない薫

だつたり。

名前：カオル 属性：風 レベル：29

取得スキル : 長槍64《二段突き》 《攻撃力アップ1》 《

脚払い》 《石突き撃》

《クリティカル1》 《貫通撃》

: 炎35《炎属性付与》 《炎のプレス》

《レイジング》

: 雷20《俊敏付加》 《パラライズ》 :

風13《風鈴》

種族スキル : 風29《回避速度UP+3%》 《魔法詠唱速度

+6%》

装備 : 武器 赤龍の大槍 攻撃力+32《耐久15/15》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭 迅速の兜 炎スキル+4、雷スキル+4、

器用度+2、防+7

: 首 進みがちな懐中時計改 SP+15%、攻

撃速度UP、防+8

: 耳1 サファイアのピアス 腕力+2、SP+1

0%、防+3

: 耳2 銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2

: 胸 迅速の鎧 炎スキル+5、雷スキル+5、

腕力+5、防+20

: 腕輪 迅速の腕輪 炎スキル+4、雷スキル+4、

腕力+2、防+7

: 指輪1 迅速の指輪 炎スキル+3、雷スキル+3、

防+4

: 指輪2 蝶柄の指輪 器用度+4、体力+4、HP+

12、防+5  
：腰 迅速のベルト ポケット+3、器用度+2、  
防+7  
：背 迅速のマント 炎スキル+4、雷スキル+  
4、防+7  
：両脚 朱色の袴 ポケット+2、精神力+5、MP  
+20、防御+12  
：両足 迅速のブーツ 腕力+3、器用度+3、防  
+7

合同イン以外でのイベントエリアの攻略は、実は初めてなメンバーだったのだけれど。2度もエリア体験しているので、中でオタオタするような事は無いだろう。少なくとも、そう思いたいリーダーの弾美である。

3つ目のエリアの制限時間は、25分との設定らしいが。今までの攻略スピードを吟味すれば、まだまだ平気な感じもする。不測の事態、例えば余程の強敵が邪魔したりしない限りは。

パーティも着実に力をつけているし、何より謎解きの得意なメンツが多いのが心強い。

取り敢えずリーダーとして、発破を掛ける弾美だったが。25分ならまだまだ余裕だと、美井奈辺りを安心させる。その美井奈は白い部屋以外なら多分平気だと、広いエリアに苦手意識。

そんな訳で、いきなり初っ端からイベントエリアの攻略を開始するパーティ。薬品などの準備は万端。そして、まず最初に入った部屋は、例の赤い床のフロア。

ところが何と、お助けアイテムの入っている筈の宝箱が無いっ！



『あれ、あれあれっ？ お助けアイテムは、今回は無いのかな？』  
『えっつ、あれが無いと、ちょっと攻略が困った事にならないかなあ？』

『当たり前だっ、かなり困るぞ。だから何とか入手しよう』

どうやってと訊ねるメンバーに、弾美は絶対何か方法がある筈と返すのみ。無ければ次の面にもあるのだろうと、割とお気楽に攻略を進めるつもりのようなのだが。

そんな最初のエリアの木箱の配置は、かなり入り組んでいて道を作るのにも苦労しそうだったり。こんな謎解きの段階で時間を食ってはイカンと、皆で協力して階段を繋げて行くパーティ。

それに対して案の定のお邪魔モンスターの群れが、茶色い木箱を壊したり動かす度に湧き出て来る。そして有り難い事に、そいつらを倒した後のドロップに、必ず1つはお助けアイテムが。

時間を取られるのは痛いけど、お助けアイテムは欲しい一行。

『これもついでに動かしてみようか？ お助けアイテム、もうちょっとは欲しいよね？』

『もうちょっとかなあ？ じゃあそれも、薰さんお願いしますっ』

アイテムを補充しつつ、1つ目の通路を確保する事に成功するメンバー達。今度は2段目制覇だと、全員で木箱の山を登って行く。そして気付くのは、変な場所にある宝箱。

あんな場所にあつたら、取った後に木箱の檻に閉じ込められて、キャラが戻って来れなくなってしまう。どうしようかと悩んでいたら、瑠璃が相談もなしに単身飛び降りて行った。

驚く一行を尻目に、宝箱をオープン。開けた途端に結構な経験値が入って来て、薰が30にレベルアップ。そしてお助けアイテムの1つで、ちゃっかり階段を作って戻って来る。

仕掛けが分かれば、何とも単純な謎解きなのだが。

『閃きが無いと、延々と悩んでたよなあ……さすが瑠璃』

『パーティで一番、私がお助けアイテムの使用に慣れてるからねえ』  
『お待たせっ、スキル振り込み終わったよっつ、今度はどの箱動かそう？』

一行は2段目の地ならしをして、いよいよボス級の敵の待つ3段目へ。魔法を使って来る甲殻虫を割とあっさり撃破して。3段目の地ならしも、皆で素早く進め終えてしまう。

今回は4段目にもボス級の敵が待ち構えており、これが結構手強い能力持ち。弾美的には、形状も気に入らない蜘蛛型のモンスターは、敵を蜘蛛糸でがんじがらめにして、さらに毒や麻痺まで使ってくる。

1体だけだと油断していたが、なかなか侮れない。

しかも、やたらとボスの近くに茶色い木箱が設置されている仕様だと思ったら。嫌がらせのように、キャラが近付いたら爆発したり、勝手に壊れて敵が新たに出て来たり。

わらわらと湧いて出た子蜘蛛の群れは、弾美が必死に《闇の刺針》でガードする。その隙に、薫がプレスで仕留めるコンビネーションは見事。蜘蛛嫌いな弾美は、自然と必死に。

最後は必殺の《トルネードスピーン》で、ボスの蜘蛛を仕留める事に成功して。これで4段目の邪魔な敵も、完全排除となったのだが。その後のヒーリング中に、美井奈がまたまたうっかり見つけた赤い木箱。

4段目の端っこの木箱が、いつの間にか変化している。

『えっと、前は普通の色だったのは確か、美井奈ちゃん……？』

『赤は無かった筈ですよ……でも、茶箱に隠れていたのかも？』

『確かにさっきの戦闘で、たくさん派手に壊れてたしなあ。スイッ

手は4つ確保済みか？」

瑠璃はちゃんと確保済みだと答え、美井奈はインしての時間は1分44秒だと報告して来た。どうやら手元に、ストップウォッチまで使用しての周到振りのご様子。

時間は充分あるし、弾美は考えるのを放棄して木箱を破壊する事に。

用心しながらも、前衛陣が壊した箱の中から出て来たのは。敵でも爆風でも宝箱でもなく、何かの招待チケットだった。試しに読み上げてみると『金の木箱から特別ルームへのご招待』みたいな事が、仰々しく書かれてある。

入手した弾美が読み上げると、その招待チケットはキラリと光って消滅してしまった。まさか勝手に発動したのかと周囲を見回す一同だったが、金の木箱などどこにも存在しない。

何となく、キツネに摘まれた気になりながらも、この面はクリア。

美井奈がストップウォッチの再調整で、何やらどたばたしているようだったが。次は緑の床のフロアのように、この面も最初からごちゃごちゃで動きにくい仕様になっている。

そして見つかる、予言されていた金の木箱。爛々と光り輝くそれは、2段目の中央付近に目立って存在を主張していた。一行は気もそぞろで、謎解きは後にして特別ルームを伺ってみようとの話に。

邪魔な敵や木箱を片付けて、2段目への階段を素早く繋げて。ようやく辿り着いて、弾美が金の木箱を殴った瞬間。一瞬のワープで一行は先程と似たような部屋に飛ばされる。

飛び回っていた妖精が、ここにいられる時間は3分だと告げて来た。

『あれっ、やけにカラフルな箱の多い部屋ですねえ。ここで何をす

れば？』

『全部タゲれるって事は……全部動かせるか壊せるって事かなあ？』  
『時間が3分って事は、ボーナスステージかな？ ちよつと1個、赤いの壊してみよう』

とにかく試そうとの弾美の言葉に、皆で一斉に赤い木箱へと殴り掛かってみると。壊れた木箱からは、何と炎の術書がドロップ。おっと、ステージの仕掛けに興奮するパーティメンバー。

何しろキャラの周囲には、色とりどりの属性に彩られた木箱が、所狭しと置かれているのだ。そして、このエリアに滞在出来る時間は、残り後2分ちよつと……。

思い出したように、わつと散らばるパーティ。

『みんな、自分の欲しいの取りまくれ〜っ！』

『私は欲しいの無いですから、お姉ちゃまの手伝いますよ〜』

『有り難う、美井奈ちゃん！ あと2枚で水の新魔法取れるの〜』

そんな訳で弾美は黒い箱を、瑠璃と美井奈は青色の木箱を、薫は赤の木箱を必死になって壊して行く。3分と言う制限時間内では、さすがに目的の属性を探し出す事もきついのだが。

何とか制限時間内に闇と水の術書を2つずつ、炎を3つと光の術書を1つ取る事が出来た。なかなかの収穫に、一同はステージのクリアの事も忘れてご満悦。

取り敢えず地ならしを始めるのだが、何となく次の赤い木箱を捜し求めてみたり。

敵の数とかややこしい道順具合とか、先程の面とは大差は無いのだが。3段目に登ると、巨大な木槌を持った木製の操り人形が、あちこちの木箱を壊し始めるという仕掛けが作動して。

何事かとぼ〜っとしていたせいで、足場に必要な木箱が破壊され

ると言う最悪の事態に。真つ先に近付いた弾美が、さらに操り系のトラップに捕まり、事態は益々カオス化してしまった。

ハズミンを操る糸を持つ、一際大きな木製人形が、奥の木箱の陰から満を持して出現。パーティとの面前には、木槌持ちの人形が3体、プラス敵に回ったハズミンが。

パーティは混乱しつつ、このピンチに大慌ての様子。

『わくっ、ハズミちゃんが操られてるっ！ ど、どうしようっ!?!?』

『前もこんな事あったねえ、あの時は瑠璃ちゃんだっけ?』

『操ってる奴を殴ったら止まる筈っ、美井奈頼むっ!』

頼まれた美井奈は、奥の敵に矢弾での一撃。しかし、今回はそんなヤワな仕掛けでは無かった模様。弾美の敵対行動は止まらず、とうとうカオルを殴り始めてしまう。

木箱を壊されるのを一人《魔女の足止め》で防いでいた瑠璃だったが。この最悪のピンチに、ちょっと前に入手したあるアイテムの存在を思い出して使用する事に。

木人の操り糸と言う、敵を操るアイテムだ。これにより操られた者同士の対決がスタート。

『わっ、今どうなってるの? どれから倒せばいい、弾美君?』

『手前の木箱は、もうどうしようも無いなあ。お助けアイテム使う事前提で、俺を操ってる敵からやつつけてくれっ!』

『持つてるの忘れてたアイテムだったけど、上手く行ってるねえ。

それじゃ、今の内に大きい敵をやっつけようか!』

『了解ですっ、ヘナチヨコな隊長よりも頼り甲斐がありますよっ、お姉ちゃまっ!』

確かにそうだが、美井奈の当て擦りの言葉に弾美は軽い口調で反論。何しろ、操られているのでそれ位しかする事が無い。美井奈も

瞬時にログで返して来るので、相変わらず母親に文字打ちを担当して貰っているのだろうか。

女性陣が大きな人形を倒すのと、操られたハズミンが味方につけた敵を倒すのは、ほぼ一緒だった。操り状態を解除して貰った弾美は、女性陣に最大の感謝を述べつつ戦線復帰。

こうなると、敵の排除は一瞬で終わってしまう。美井奈がこの時点で、既に20分が経過したと報告して来た。寄り道やら操りトラップやらで、少々時間を取られ過ぎてしまったようだ。

ちよつと慌てつつ、瑠璃がお助けアイテムで鳶の階段を2箇所作る。第2面、クリア。

最終面は、やっぱり毎回同じ作りの遺跡のよう。下層からのスタートも同じで、今回はいきなり一同の目の前、水面近くに最初のスイッチが設置されていた。

手間が掛からない発見なのは、この後の道のりの厳しさの象徴ではないかと訝る一同。ところが、中層の仕掛けも前回よりかなり緩い感じ。敵の数にしても驚くほどには多くない。

上層のスイッチは、透明化で探すのに苦労したのだが。2つ程、左と奥の崩れかけた通路に設置されていて、しかも今回は足場の悪い場所で、敵の群れが待ち受けていた。

その敵を全滅させると、美井奈が30にレベルアップ。

大喜びの美井奈に、皆でお祝いの言葉を投げ掛けるのだが。はしやぎ過ぎの雷娘に、この後の戦闘も気を抜かないように、しっかりと釘を刺すリーダーの弾美だったり。

それで無くても、ここは結構トリッキーなエリアなのだ。

『これで4つのスイッチ、確保出来たけど……今回は上層のどつちが狙われやすいのかなあ？』

『うーん……どつちを狙われても、戦闘エリアが狭くて厳しいかな』

あ？』

『そうだな……やっぱ、上層は俺と瑠璃で、中層に薰っちで行くか』  
『了解です、俊足魔法掛けておきますね〜！』

一番離れた下層のスイッチを任された美井奈は、俊足魔法以外に自分に《風の陣》と《フェアリーウィッシュ》を掛けておく。防御にも一応万全の状態なのは、瑠璃も天使魔法を掛けていたので、ヒールリングの時間がたつぷりあったからだ。

MPが戻ったのを報告した美井奈だったが、何故かキャラの周辺に違和感を覚える。最初、ここには敵が配置されてなかったため、素通りだったため確かな事は言えないが。

異変に気付いたのは、一緒に画面を見ていた母親だった。

『かつ、階段が無いっ！ え〜っ！？』

『うん？ スイッチ押し違えたのか、美井奈っ？』

『あれっ、スイッチは作動して……うええっ！？』

美井奈の気付いた異変は、層を繋ぐ階段の消失だった。その後の薰の悲鳴の原因は、今回飛び出したエリアボスの場所。上層の浮島は、何と今回はフェイク！

下層の水面から、巨大な双面のイモリが出現したのが、上の層の三人からも確認出来ただけれども。美井奈の言葉を信用するならば、階段を指すだけ無駄である。

度胸一発飛び降りたのは、瑠璃が一番最初だった。何しろ、天使魔法でダメージが来ない身の上である。中層にいた薰も飛び降り、こちらはHPに3割の落下ダメージ。

結構痛い、ハズミンなどは上層からのダイブでHP半減である。

『いたたっ……ピアス効果あっても、半減は間逃れられないか』

『うわっ、水面からカエルと……鉄砲魚！？』

「み、美井奈ちゃん……合流に時間掛かるかもつ、雑魚の敵がいっぱいいるっ！」

「ふええっ！こいつ、接近して来ないとは言え、水系の魔法が強いんですよっ！」

大ボスらしい双面のイモリは、結構グロテスクな色彩で、攻撃は今の所遠隔のみ。続々と湧き出ているカエルや鉄砲魚は、取り敢えず雑魚なのだが数が意外と多い。

カエルはお馴染みの呑み込み技や跳び付き技、鉄砲魚はひたすら遠隔攻撃が厄介だ。三人ともに落ちた場所がバラバラなので、まずは合流を目指して敵を蹴散らして行く。

弾美が瑠璃に、水面の鉄砲魚の掃除を指示。範囲魔法で自分がタゲを取りつつ、それ以上のMP節約のために、水面を歩ける瑠璃に止めを頼んでみただが。

その甲斐あって、程なく弾美と瑠璃が美井奈に合流。薫はもう少し掛かりそう。

弾美が挑発魔法で双面のイモリのタゲを取ると、残った鉄砲魚の掃除を美井奈が引き受ける事に。妖精のバリアはとづくに切れていたのだが、根性の粘りで何とか生き延びる事に成功した美井奈。パーティからは、よく頑張ったと賞賛の嵐である。

そんな美井奈は、憂さを晴らすように遠隔攻撃にも力が入る。

双面のイモリは粘膜ガードが厄介で、それ以上に双頭での交互の攻撃と魔法詠唱が凶悪だ。特に水系の《ウォータースピア》の魔法は、4本もの強烈な多弾攻撃振りである。

弾美の《上段斬り》の詠唱禁止も効かない様で、1回魔法を喰らってしまうと、HPが一気に3割くらい削られてしまう。弾美にしてみれば、美井奈は本当に良く持ったと褒めるしかない。

自動回復能力も厄介で、何とか水際から引き離したいのだが。相



手もさるもの、その手には簡単に乗ってくれないよう。薫が合流して、ようやく削りの速度も格段に上昇したのだが。

今度は範囲攻撃の連発に、とても苦しめられるパーティ。

『わっつ、今度は範囲毒と範囲津波攻撃だよっ！ 麻痺させても、もう片方の顔が呪文を完成させちゃうよ、この子！』

『自動回復がやたらと効いてるみたいねえ、コイツ』

『瑠璃、さつき毒魔法覚えたって言っただけか？ 水属性同士だけど、試してみるよ』

ああつと、瑠璃が思い出したように相槌を返して来た。すぐさま新魔法の《アシッドブレス》が、戦闘区域に酸の霧を降り注いで行く。ダメージは何か、水属性の大ボスにも入ったようだ。

敵の回復能力は明らかに減退、勢い込むパーティ。

美井奈も調子に乗って雷魔法の《スパーク》を浴びせ掛ける。水属性のボスにはかなりの効果だが、普通に弓で攻撃した方が、実は効率が良さ気だと判明したりして。

ノコノコ前に出て来てする事かと、弾美にお叱りを受けた美井奈だったが。汚名返上の《みだれ撃ち》からの《貫通撃》は、すっかり優秀な削りキャラっぽいダメージ具合である。

その後は安定した戦闘運びで、双面のイモリは程無く水没。

歓喜するパーティの前に、上層から浮島がゆっくりと降りて来て薫の橋を作って行く。味のある演出に、皆が驚きの表情を浮かべる。そして、毎度の宝箱と葉っぱとのご対面。

宝箱からは、4万ギルの現金と金のメダル、氷の術書と器用の果実が。宙に浮かぶ黄色の木の葉を全員が触り終わると、いつも通りに退出用の魔方陣が出現する。

ちなみに、ボスからの装備品のドロップは、短剣や斧や、水属性

の首飾りなど。パーティには使えない感じのものばかりだったので、売ってお金にする事に決定した。

クリアまで、50分程度だと美井奈の報告。まだ時間は半分ある。

装備の整頓と売却に時間を使っている瑠璃はともかくとして、パーティは闇市で次の行き先を話し合っていたのだが。表通りは人が結構多くて、話に集中出来ないのだ。

真つ先に提案した弾美は、指輪のトリガー戦が良いだろうと言い、薫も大方同意した。って言うより、たくさんあるトリガーの消費なら、何でも良いとの意見のようだ。

それと言うのも、美井奈からイベントエリアの4つ目を明日にして、5つ目を合同インでしようとの案と言うかお願いが出たのだ。時間制限付きのアスレチック系は、やはり怖いらしい。

そんな訳で、余った時間の使い方を検討中なのだ。

瑠璃が、それなら妖精のクエを進めたいと言って来た。美井奈がそれに賛成し、意見は真つ二つに2対2に分かれた。両方行く時間はあるかもと、まずは瑠璃のクエを先にする事に。

薫がノートを持ち出して、太陽の鍵のクエストエリアだった筈と答えて来る。クエストアイテムは既に瑠璃が持っている。以前作って貰った『水性爆弾』をカバンに、意気揚々のルリルリ。

一同、懐かしの太陽の鍵エリアへ。

弾美が先頭に立って、確かこつちだった筈とおぼろ気な記憶を掘り起こして案内を務める。何しろ、最初から迷いながらの搜索だったため、位置の覚え方もいい加減だったのだ。

それでも5分程度で、大きな迂回も無く目的地に到着出来た。と

ころが前に訪れた時よりも、様子が明らかにおかしくなっている。川の濁りが増しており、周囲の雰囲気もやたらと暗い。

弾美がそう言くと、皆は進んで戦闘準備。変化には敏感な冒険者達。

『取り敢えず、妖精湧かせた方がいいのかな？ それともいきなりアイテム？』

『難しいとこだな……俺が最初に妖精試してみよう』

弾美の妖精トレードは、しかし何の反応も無し。それならばと、瑠璃が水源爆弾をトレードに向かう事に。アイテムトレードの瞬間、自然ダムの濁った水面に変化が起こった。

案の定と待ち構えていた一行は、今更驚きもしないのだが。敵の数が2体というのは、ちよっとだけ計算外。はつきりしているのは、狂った水の精霊と巻貝のようなモンスターの姿のみ。

狂った精霊は半裸の姿で美しいのだが、整った顔は狂気に歪んでいる。

さらに計算外だったのは、狂った水の妖精に通常攻撃がほとんど効かない事。焦った弾美と薫の声に、瑠璃が取り敢えず氷の複合スキルを撃ち込んでみると。

そちらは大丈夫で、ちゃんとダメージの表示がログに出た。その代償として、思いつきりルリルリにタゲが移ってしまったけれども。慌てる瑠璃を激励しつつ、ハズミンはダメージの通りそうな巻貝を相手に変えようとするのだが。巻貝はゴロゴロと転がって逃げ回るばかり。

仕方なく、逃げない精霊を魔法で攻撃する一同。

魔法の削りでもそこそ削れるのだけれど、MPがあつという間に底を尽いてしまう。精霊の攻撃は、水で出来た短槍を次々と宙に

出現させて投げつけて来るといふもの。

必中のそれは威力も高く、しかも近接では素手の殴りでキャラを毒状態にしてしまう。厄介な敵の特性に、次々とMP枯渇に追い込まれるパーティメンバー。

美井奈が一言断りを入れて、MP回復の休憩に入った時、次なる悲劇が。

『わ〜っ、巻貝が何か飛ばして来た〜っ!』

『美井奈、何か付いてるぞ……うわっ、ヒルじゃんか。お前HP吸われてるっ!』

『わ〜んっ、取って下さいっ、気持ち悪いっ!』

身体に張り付いてうごうごと動くそれは、確かに気持ち悪い。救出に向かった弾美にもヒルの群れは飛び掛かり、弾美は必殺の《ドラゴニックフロウ》で巻貝もろともダメージを与えて行く。

巻貝はヤドカリ形態にチェンジ、今度こそ弾美を迎え撃つ構え。

その隙に、美井奈は先程邪魔された休憩をちゃっかりと取り始める。何しろ、MPが無いと精霊が削れない。

薫も続いて休憩に入ったよう。孤軍奮闘の瑠璃は《ウォーターミラー》で魔法をはじき、《幻惑の舞い》と《氷の防御》で直接攻撃に対応。さらに《光属性付与》で直接攻撃を魔法属性に変えつつも、MPが足りなくなったら《魔女の接吻》で目の前の敵から頂戴している。

今やいっぱしの魔法戦士振り、本人は割と必死なのだが。

炎系の魔法が水の精霊に効果が無いカオルは、MPが適当に回復したら、弾美の手伝いに回る事に。美井奈は残り物の破魔矢が精霊にダメージを出せると判明し、瑠璃のサポートに。

狂った水の精霊のHPが半分を割ると、いよいよ攻撃に容赦がなくなってきた。味方の筈の巻貝まで巻き込んでの津波魔法で、大き

な痛手を被ったパーティだったが。

巻き込まれた巻貝が何と水没、これで弾美と薫がフリーに。

しかし、怒涛の連続魔法は何とも強烈だった。水圧魔法と深海魔法のコンボで、パーティ全員にダメージと動きの封じ込み、さらには魔法詠唱不可のバッドステータスに！

水系でも、これは滅多に見れない上級呪文である。水圧効果で、パーティのHPはみるみる半減して行く。動きも鈍くなって、範囲外へ逃げる事もままならない。美井奈に至っては、既にHPが3割で雷精が飛び回っている始末。

それでも、パーティの与ダメージ源はなおも潰れていないのが幸いした。瑠璃の複合スキルでの追い込みと、美井奈の破魔矢での《貫通撃》が精霊を追い詰めて行く。

闇の秘酒も勿体無いなどと言ってられない。何故か竜魔法だけは唱えられると知った弾美は、鈍くなった足取りで精霊に近付いての《ドラゴニックフロウ》を放つ。

そこに追撃の瑠璃と美井奈の追い込み。狂える精霊は、ようやく消滅して行った。

『か、勝てたつ、手強かった……！』

『瑠璃ちゃん大活躍だったじゃない、凄いよっ！ 私は後半、全く見せ場無しw』

『瑠璃もようやく、魔法戦士らしくなってきたなあ。後は二刀流だけか？』

『お姉ちゃまつ、格好良かったですよっ！ あっつ、私も魔法戦死目指そうかなあ……？』

美井奈のログを見て、思わず弾美が爆笑。よくある打ち間違いなのだが、魔法で戦死を目指すのは美井奈らしいとからかわれ、美井奈のキャラは束の間完全停止。

その間に、瑠璃が水源爆弾を使用。短い強制ムービーでは、理性を取り戻した水の精霊とピヨピヨ飛び回る妖精が競演して、パーティ全員に感謝を述べて来る。

お礼の品も滅茶苦茶豪華で、一同は驚喜のログでしばし混乱。まずは水の宝珠と短槍の複合スキルが水の精霊から。妖精からは妖精のクラウンと金のメダル、それから光の術書が。

チヨーご機嫌な様子の妖精は、最後にパーティに興味深い情報の提示をして消えて行った。このエリア内でもう一箇所、枯れ果てていた場所に変化があったよと言うのだが。

暇があれば是非覗いて行つてと、ちよつと意味深な表情。

妖精のクラウン 光スキル+4、風スキル+4、SP+15  
%、防御+10

『……お待たせしました、お母ちゃまときつちり話し合いましたから！ 悪戯が好きで、困った大人なんですよっ！』

『そ、そうなの……わざとじゃ無いかも知れないし、程々にね？』

『妖精装備は、取り敢えず美井奈かな？ 薰つちは長槍だから、ちよつと残念だったなあ』

『そうだねえ……まあ、次に期待するよっ！』

一行がいるのは、まだクエストエリア内である。分配などにあまり時間は掛けていられない。弾美は皆をせっついて、どうせだからと妖精の情報の確認に向かう事にしたのだが。森の中を進んで行くのと、次第に以前も戦った獣人達が邪魔をして来る。

視界が悪いせいで、不意に出くわす事もしばしば。ショートカットは止めて、道に戻るうかとの薰の提案も、ここまで来たのだから後ちよつとだろうと、やっぱり強引に進む一行。

こう言う時は、何かにぶつかる確率が高いのだが。

今回立ち塞がったのは、巨大な猪顔の獣人。NMらしく、立派な装備を着込んでいて、茂みの上からパーティを睨み付けて来る。何よりも立派な前口上に、パーティは驚いて立ち止まる。

要するに、前回散々手下を倒された恨みを述べているらしいのだが。たどたどしい口調の人語は、やや演出過剰かも知れないねとは一人冷静に批評する瑠璃だったり。

そんな事より、戦闘の準備をしると気苦労の絶えないリーダーの弾美。

戦闘は予想外の方向からのチャージで始まった。茂みから突進して来たウリボウの群れは、しかしパーティにぶつかって昇天してしまふ。パーティにも結構なダメージを残しつつ。

次のチャージは、しっかりとした体格の、しかし雑魚の一団だった。美井奈などは立て続けのダメージに、一気にHP的にピンチに追い込まれる。弾美に《スパーク》ちゃんと張つとけと言われ、パーティの建て直しも少しずつ進んで行く。

さらに雑魚の群れから美井奈を囲うように、陣形の形成を。

3度目のチャージ攻撃は、先程よりかなり強烈だった。ただし、美井奈の張った《スパーク》のお陰で、飛び込んで来た敵もダメージを負ってスタン状態なのは有り難い恩恵かも。

きつきの雑魚よりは強い猪獣人の一団を、必死になって駆逐に奔走するパーティ。そろそろ後ろに控える大ボスが乗り込んで来てもおかしくはない状況である。

そう思っていた途端、茂みから一際大きな影が突進して来た。話し掛けられた方向を張っていたハズミンを欺いて、ほぼ反対の方向の瑠璃に猛烈なチャージが決まる。

ボスが戦場に到着した途端に、《レイジング》状態でパワーアップする部下の獣人達。

「わわっ、大ボスこっちから来たよ、ハズミちゃんっ！」

「場所チェンジだ瑠璃っ、麻痺している内に俺が取っ！ 美井奈、敵の影はもう無いみたいだから、攻撃範囲まで離れて支援に入ってくれっ！」

「了解です、隊長っ。弱った敵から仕留めますねっ！」

今更ながらに、自分の種族スキルの《敵感知》を思い出した弾美。回復に回っていた美井奈に周囲の安全を知らせ、攻撃に回って貰うように改めて指示を出す。

これでこちらの反撃態勢も整った。弾美がボスを押さえ込んで、ガチでの殴り合いが始まる。

美井奈の遠隔削り加入で、ようやく部下の猪顔の獣人の数が減って行く。長槍を手に持つ敵の群れは、チャージを別にしてもHP豊富でパワーも強く、侮れない存在だ。

それでも薫の《パラライズ》や瑠璃の新魔法の《アシッドプレス》で、上手に敵を弱体して行き。ようやくたくさんいた敵は、大ボスを残すのみに。勢いづいたパーティは、四人で削りに掛かる。

HPが減って行くに従って、猪顔の獣人ボスの鼻息は次第に荒くなる。何が来るかと用心していた弾美だったが、繰り出して来たのは武器と口から突き出た牙の継ぎ目の無い連続攻撃。

盾での防御も間に合わず、盾役ハズミンの大ピンチ。

「わっっ、スタンも全く効果ないよっ、滅茶苦茶に暴れ始めてるっ！」

「ハイパー化してるっ、これは上位のスタン技じゃないと止められないぞっ！」

「チャージ誘ってみましようか？ そしたらこの大暴れ止まるかもっ？」



そう提案した美井奈が、妖精魔法を掛けて捨て身のタゲ取りを敢行する。妖精から貰った王冠を被つての、初の魔法使用なのだけれども。なんと、今回は光球の数が4つに増えている！

勢いを得た美井奈は、大ボスに向かって《ホーリー》からの《みだれ撃ち》を使用。さらに《貫通撃》へと繋げると、光球が2つ追従して、普段の3倍の大ダメージ。

大喜びの美井奈を襲う、目論み通りの大ボスの猪突猛進チャージ。残った光球がダメージを奇麗に消してくれて、敵の大暴れも止まっている。こちらもやっぱり、目論み通り。

《竜人化》を掛け直した弾美が、多弾スキルと魔法でタゲを取り戻す。

『おおつ、このパターンは使えそうだなあ。でかしたぞ、美井奈っ！』

『今の見ましたかっ？妖精の光が、4つに増えてましたよっ！』

『王冠の隠し効果かなっ？見た目も可愛いし、美井奈ちゃんは妖精の女王様だねっ』

瑠璃の褒め言葉に、ひたすら照れまくる美井奈だったが。戦闘の方も程なく終了、そのままの勢いで削り切る事に成功したパーティ。ひたすら無念そうな獣人ボスの最期の言葉。

ドロップは金のメダルに土の術書、猪突猛進の札というお助けアイテムが1つ。そして、一同驚きの《複合技の書：長槍》が奇跡のドロップ。知らない内に、クエストエリアは複合技のドロップ地帯になって来ているらしい。

興奮する薫だったが、残念な事に風スキルの値が足りない。

『うわっ、自分の属性スキルなのに……あと7個も足りないよっ』

『えつと……今手元に、2枚術書があるのかな？ それでも5枚も足りない！』

今の戦闘で、弾美が32にレベルアップ。スキルの割り振りを風スキルにもすべきだったと、ひたすら後悔の薫のだが。メダルの入手が、今日だけで3枚ある。

買えるんだから、戻ってから買い足そうとの弾美の言葉に、薫は飛び上がらんばかりの喜びよう。何しろ、パーティで複合スキルが無いのは、もはや自分だけだったのだから。

このエリアを早くも出て行きそうな薫を引き連れて、一行は目的の場所へ。

その場所は確か、巨大な虫が樹木を食い散らして惨憺たる景色だったのだが。パーティが再び訪れてみると、ほのぼのとした感じの風景。さらには、立派な樹木が立ち並んでいる。

この変わり様は何なのかと、一同ははしゃいで周囲を走り回るのだけれど。敵の姿などは全く見えず、その内美井奈が、巨大な木の洞うらに宝箱を見付けて嬌声を上げる。

ひととき大きなその樹木は、かつて木のトリガーを放り込んだ場所だった。

『わっつ、凄いですよっつ。みんな早くこっちに来て下さいっ！』

大つきな木の中に、宝箱がいつぱい入ってますよっつ！』

『むおっ……ここってそう言えば、滅茶苦茶ドロップの渋かったNMの湧いた場所かっ！』

『あっつ、それで時間差の帳尻合わせなのかなあ？ わっつ、7個もある、凄いねっつ！』

時間差のご褒美を、皆で順々に開けて行くと。何と両手棍と片手棍の複合技の書が1枚ずつ！ 信じられない大盤振る舞いの他にも、

金のメダルやお金で2万ギル、レベルアップ果実や水晶玉などが入っていた。

棍棒系の複合技の書はパーティでは必要の無いものなのだが。それでもメイン世界では、こんな大盤振る舞いなどまず無い事。幸せな気分になりながら、帰路につく一同。

もう少し回ってみたかったが、インして既に30分は経過している。

『美井奈、この複合技の書って、メイン世界じゃ30万とか平気でするんだぞ』

『ええっ、そんな高価なものなんですかっ。えええっ、これ1枚でっ！?』

『人気の武器のだと、50とか100とか平気でするよね〜！自分の武器以外が出ると、みんな売りに出すんだけど、飛ぶように売れて行くよっ！』

もちろん、メイン世界ではそんなものなどお目に掛かった事の無い美井奈だったのだが。弾美に、この感覚が当たり前だと思ってメイン世界に戻るなよと諫められる。

そんな話を、中立地帯に戻った後で話していたのだが。残り時間はまだ30分近くある筈だと、今度は特級リング取りでどの属性にするかの議論に移るパーティ。

薫はその間を利用して、瑠璃から渡された術書とメダルでお買い物。別の案では風の特級リングを取得して、その恩恵で風スキルを上げる手もあったのだが。メダル5枚程度なら問題ないと、リーダーの弾美の寛大な言葉に。

そして取得した《竜巻チャージ》は、複合の範囲技のようだ。

『おおっ、薫っちもとうとう複合技持ちになったか！おめでとうっ、範囲技のチャージって、俺はメイン世界では見た事ないかな

」？』

『ありがと〜！ メダルの融通、とっても感謝　それじゃあ指輪は弾美君の欲しいのでっ！』

『そうだね〜っ、ハズミちゃんも闇でいいのかな？　いっぱいあるから、ちよつと整理したい……』

『それじゃあ、必要なの以外は売るか処分しちゃえば？　どうせ時間的に、何回も行けないし』

そんな訳で、必要なさそうな指輪はまとめて処分。今夜は弾美の、闇の指輪を取りに行く事になったのだけど。月の鍵のエリアに入るのも、結構久し振りな感じ。

そう言えば、ここにも行き忘れがあったと、皆で思い出しながら語ってみたり。クエストエリアでもう1つ鍵を見つけた筈と薫が口にして、それをカバンの中に探し始めるのだが。

幾ら探しても見当たらないと、ちよつと焦った口振りの年長さん美井奈がそれなら、自分のカバンに入っていると報告して、そう言えばあの時だけ操作を交代したのを思い出す薫。

散々な迷子っぷりを思い出し、今更弾美にからかわれる美井奈。

『えつと、モノは相談なんですけど……今回は安全なルートで行きませんか？』

『そんなルートは無いっ！　取り敢えず、街中エリアを抜けるまで頑張れっ』

下水の溝の上を渡る、細い丸太の通路など当たり前のこのエリア。早速そこに突入すると、結構際どい道を落ちないように気をつけながら進むパーティ。危険区域を無事に過ぎたら、今度は平原を通じて大樹の見下ろす森に入っていく。

幸いにして、脱落者も無くここまで全員で辿り着ける事が出来たようで何より。美井奈などは明らかにほっとしており、絡んでくる

敵すら心地良く思えているみたいである。

森の奥の精霊の絵画のある集落に辿り着くまでに、10分程度掛かってしまったが。以前ボス級の敵に襲われた、トーテムポールに囲まれた森の広場も、今夜に至っては平和なもの。

ほとんど一直線に来れたのは良いが、前回のトリガー戦は熾烈だった。

『そう言えば、今回は水系の魔法が全く使えなかったんだよね、ここって？』

『今回は何だろう？ 仕掛けがあるとすれば、光系が駄目とか、真つ闇闇の中とかかなあ？』

『分からないけど……危ない仕掛けがあれば、迷わずにお助けアイテム使ってくれ、瑠璃っ』

了解と請け合つ瑠璃だったが、今回は本人的には余裕の表情である。何しろ、必要の無い複合書を2冊店売りした結果、何と5万ギル以上もの大金が入って来たのだ。

そのお金でパーティに、いつもの倍近く薬品を配布した財政大臣の瑠璃。闇の秘酒や神水などの、1個1千近くするお高い薬品も、ついでに買い貯めて配布済みである。

水晶玉も貯まりまくっているし、この辺で使いまくっても全然平気。

各自準備が出来たとの報告に、時間も勿体無いし入っちゃうぞと弾美の言葉。聖水は必要ですかねと、闇属性にちよつと嫌な思い入れのある美井奈だったのだが。

確かに必要かも知れないので、ポケットに用意しとくべしとの返答は弾美から。

突入してみると、前回と同じような丸いサークルに放り出された

感触。敵は目の前にいたが、暗闇がきつくてよく見えない。ローブを纏った、長身の人間のように見えるのだが。

敵が動かないのを良い事に、強化を掛けながら相手の反応を覗く一同。瑠璃は敵の呪い攻撃に備えて、早くも天使魔法を掛けて行く。その後、光魔法は詠唱可能だとパーティ報告。

天使の輪の光の先に浮かぶ敵は、準備の完了した弾美が一步踏み込むと反応して来た。ローブが下から風を受けたようにはためくと、何かが周囲に溢れ出して来る。

襲って来たのは、圧倒的な闇の塊だった。

『わっ、わっ、ダメージ受けたっ！ 今のは何っ、敵が良く見えな  
いよっ!?!』

『良く分からないけど、今の影は瑠璃と薫っちで頼むっ。俺と美井  
奈でボスを抑えるぞっ!』

『それは良いんですけど……あの、隊長？ さっきから、SPが全  
く貯まって行ってませんけど?』

『……ええええっ!?!!』

一同の驚き様は、ちょっと尋常ではなかったりして。ごくごく普段から、放って置いてもSPは貯まるものとの思い込みと言っつか常識が、心の中を支配していたのは確かである。

それを根本から覆われて、浮き足立ってしまったと言っつのが本音の話。妙な話だが、目の前の瘦身のローブの敵まで、急に強く見えて来てしまう始末だったりして。

それでも作戦を口に出した手前、率先してローブの敵を果敢に殴り始める弾美。念のためにと、武器をレイブレードに変更しておいたのが、唯一の心の支えであろうか。

何にしる、やっぱり殴ってもSPが貯まって行かないのはかなり凹む。

『やっべえ、やっぱりSP全然貯まる気配が無いぞっ！ 普通に殴って倒すしか無いかっ！』

『えっと……ま、魔法で追い込むとか？』

『方法はそれくらいかなあ……あっ、闇の秘酒は？』

弾美が代表して使用してみたのだが、消費した筈なのにSPは空っぽのまま。お高い薬品を、1本丸々損してしまっただけと言う結果に。瘦身の敵は、両手鎌を手にまだまだ元気。

美井奈は色々試した結果、やっぱり破魔矢が高いダメージを出す事に気付いたようだった。自身を妖精魔法と《スパーク》で固めて、万全の構えで敵を射殺しに掛かる。

スキル技が使えないとなると、雷娘の基本スペックに掛かって来るのだ。

一方、闇の塊は殺意を持って薫にはかり襲い掛かる。どうやら、天使魔法の掛かった瑠璃は苦手のようらしい。頭に来た薫のやけっぱちの《炎のブレス》で、とうとう闇の中から真っ黒なフクロウが飛び出して来たのが確認出来た。

瑠璃は素早く、それをタゲって細剣で殴り始める。さらに、うっかり美井奈の放電地帯に飛び込んだ闇から、続いて真っ黒なサルが飛び出して来た。闇の塊の中身は、一つでは無かったよう。

なおも俊敏に動き回る闇の塊は、小さくなったがまだまだ元気な様子。サルを殴りながら、薫の再度のブレス攻撃。ようやく闇の塊は消失して、最後に闇色の犬が出現する。

しかしパーティに、手の空いた者はいない。

『わっ、雑魚も結構手強いみたいっ……天使を呼んでもいいかなっ、ハズミちゃん？』

『遠慮するなっ、どんどん使えっ、瑠璃！』

混戦模様の戦場に、2度目の天使降臨。闇の支配するフィールドは、天使の輪つか2つ分明るくなったのだけど。やっぱり言う事を聞きやしない天使は、フリーの犬には興味なし。

瑠璃の殴っているフクロウに、果敢に細剣を振りかざす。

そんな訳で、フリーの闇の犬は一番近い薫の元へ。瑠璃や弾美と違って、防御は華麗なステップが命綱のカオルは。多数の敵相手だと、モロにダメージを負ってしまう悲しい定めなのだ。

仕方なく感じて、薫がマラソン役へと早変わり。瑠璃と天使の殴っていきフクロウが、今の所HPの減りが一番順調。そいつを美井奈も手伝って、さっさと沈める作戦へと変更するのだが。

マラソン中の薫に、まさかの《グラビティ》が飛んで来て、鈍くなった薫がタコ殴りの目に。掛けたのはどうやら、闇のサルの仕業らしい。さらに《シャドータッチ》でHPを吸われ、孤立していた薫はかなり危うい場面に追い込まれてしまう。

それをポーションがぶ飲みで、何とか凌ぐ薫。

美井奈の《ホーリー》で、サルのタゲは何とか取り去ったものの。今度は美井奈が鈍い魔法の餌食に。頭に来た瑠璃が、敵の中心で光の水晶玉と水の水晶玉を連続使用。

フクロウがよれよれになったよとの知らせに、美井奈がとどめの《ホーリー》をぶち込む。これで敵陣営の闇の塊から生まれたモンスターが、ようやく1匹減ってくれた事に。

天使は続いてサルを殴り始めた。瑠璃と美井奈もそれに続く。

弾美は瘦身の敵を相手に、サシでの押さえ込み。今の所、危険な技も使つて来ないが、時折混ぜてくる闇系の魔法が厄介だ。早々と潰しているが、通ると危険値が一気に上昇しそう。

薫も鈍くなった足に鞭打つての、必死のステップで闇の犬相手に応対している。せつかく覚えた複合スキル技も、使えないのは心中



複雑。俗に言う、フラストレーション溜まりまくりである。

それでも今は、なるべく敵からの被弾を避けながら、この窮地を何とか乗り切るのみ。何しろ薫のポケットのポジションは、残り2つにまで減ってしまっているのだ。

油断は命取りと、敵の動向を鋭い観察眼で覗う薫である。

『えっと……しゃがんでもMPも回復しませんねえ、ここって』

『ええっ、マジかっ！ ヒーリングも無効化なのかよ、ここっ！』

『ひ、酷いっ！ でも、多めに薬品買っておいて良かった！』

全く瑠璃の言う通り、薬品が本当に生死を分ける糧となりそう。

ホーリーの撃ち過ぎでMP枯渴の美井奈が、エーテルをケチって休憩で回復しようとした矢先の会話である。

幸い、天使も時折回復魔法や攻撃魔法を飛ばしてくれるので。闇形態の手強いサルも、程なく塵と消えて行ってくれた。あともう少しだと、エーテルをケチらずに奮起する瑠璃。

彼女の《ウォータースピア》は今やスキル70となり、出現する本数も2本に増えている。

突き刺さった複数の水の槍に、思いつきり怯む闇の犬。続いて光魔法と、天使の突進が襲い掛かる。時間を掛けていられないと、後衛陣はエーテル漬けで魔法の連打。

それでも闇形態の犬が沈む頃には、とうとう天使魔法も妖精魔法も時間切れで消滅してしまった。天使の契約はまだ平気そうで、彼女が戻って行かないのが唯一の希望の光なのだが。

最後のボスの瘦身の敵は、周りを囲まれても平気な素振り。

『最後の1体だけど……なんだろうコイツ？ 輪郭が変になって来てるんじゃない？』

『うわっ、さっきまで戦ってた闇の形態モードだねえ。気持ちは悪

いけど、これ意味あるのかな？」

「さあ……？　って、わっ、さっき倒した敵がまた出て来ましたよっ！」

美井奈の悲鳴じみた言葉は、半分だけ正解の様子。闇形態の犬は、今度は分離まで行かずに近くにいた天使に殴り掛かる。もちろん、大鎌の攻撃も継続しており、敵の攻撃手段が単純に増えた計算なのだ。

最後のボスのHPが減る度に、今度は闇形態のサルが顔を覗かせて攻撃を開始。もはや、人間の形など留めていない闇の魔物は、近くの敵を複数手段で殴り続けるのみ。

それでも限りあるMPを回復に回さざるを得ず、パーティとしてはかなり苦しい台所事情。こちらも何とか手数を頼りに、押し切る形でとどめまで持ち込んだのだが。

エーテルをほぼ使い切った後衛陣は、ちょっと冷や汗タラリ。

「うわっっ、たくさん買い込んだ薬品が……財力の勝利かな、今回は？」

「まさにそうだな……しかし、ここは毎回苦労するなあ。仕掛けが何気なく酷いのばかりだぞ」

「本当ですねえ……だけど、SP無いとスキル技撃てなくて、戦闘に締まりが無いですよ？」

「確かに……単純に、削るのも苦労するしねえw」

ドロップ品を受け取って、フィールド外に排出されたパーティだけ。31に成長したルリルリを祝いつつ、ついでに先ほどのクエストエリアで入手したレベルアップ果実で、32への成長を勧めるメンバー達。

色々話し合った結果、やっぱり縁の下の力持ちの瑠璃の成長が、パーティにとって有り難いという結論に達したのだ。そんな訳で、

ルリルリはレベルで弾美に追い付く事に。

ドロップは弾美待望の、闇の特級リング。他には闇の魂斬り鎌と言う名前の大鎌に、闇のベルトと言う装備品がドロップ。性能が良いので、指輪とベルトは弾美が所有する事に。

闇のベルト ポケット+4、闇スキル+3、SP+10%、防+10

闇の特級リング 闇スキル+4、SP+10%、SP上昇率UP、防+4

そろそろ時間も良い頃だと、中立エリアにアイテムを使つての転移で戻る事にしたパーティ。瑠璃などは、またまた薬品の買い直しだとブツブツ小言を言っているようだけれど。

明日はイベントエリアの4つ目と、貯まったトリガーの消費だと弾美が皆に活動予定の報告。イベントエリアの4つ目は、最終エリア前の最初の難所っぽいので気を引き締めて掛かるように。

承知したとの返事も、やや元気が無いのは自信の無い証拠か。

何にしろ、泣いても笑つても後1週間程度で全てが終わるのだ。

これ程長い限定イベントの開催は初めての事だが、振り落としの過酷さは別にして、冒険者達の受けは良好な様子。

弾美達のパーティにとつても、今のところは楽しい思い出の多い期間となっているようだ。それでも、その終わりがどういう形で一行の前に姿を見せるのか、そこだけは未だ定かではない。

順位など、今となつてはもうどうでも良い。四人が全員無事での、達成感に彩られたクリアの訪れを、ひたすら願う一同だった

……。

## 21 炎と氷のトリガー！（前書き）

ふうっ、ようやく追い付きましたよっ！ 肩の荷がちよっと降りた感じですかね、投稿した章のタイトル話数の話ですけど。

恐らく明日には、未投稿の章を掲載出来ると思います。それなりにお楽しみに（笑）。

さて、いつもはここを勝手にブログ的に使ってるんですけど。私生活を書き綴っても、割と愚痴っぽくなってしまいそうな気がするので止めておこうかな（笑）。

かと言って、他には特に書く事も無いですね。世の中は地デジ化がいつの間にか遂行されてたり、27時間テレビやオールスター野球が終わってたりで。

完全に取り残されてますけど、テレビは辛うじて買い換えました。噂によると、取り残された人の慌てた電話の問い合わせ数は、意外と多かつたらしいですけど。

8万人？ が、映らなくなった画面にキョトンとしたそうです（笑）。

今回の章のあらましですが、何かもうどうでもいいです（笑）。冒頭に書いたように、取り敢えずここまで無事に再投稿出来た事にホッとしてる次第です。

未投稿の章は、10作くらいになるのかな？ 確か、1年位前に書き終わったままになってた筈なのですが。はやく陽の目を見せてあげたい思いが半分、こんな結末で終わっちゃっていいのかわかって思いが半分。

完璧に満足の行く結末では無いですが、それは未完成の作家の作品の宿命。勘弁してもらえない訳で、投稿前に弄れる所だけは直しておこうかなと。

取り敢えず、今回の投稿作品も未熟ではありますが。細かい事は  
気になさらず、ゆったりした心構えでお楽しみ下されば光栄です

## 21 炎と氷のトリガー！

「イベントエリアは何とか全部クリア出来たけど……樹上エリアで最終的な順位決定の、ポイントの割り振りみたいな知らされてさ。クリア順位もそうだけど、レア装備やアイテムの入手率とか、隠しエリアの入室率とか、後は残りライフポイントやNM討伐数とか……」

進は途方に暮れている感じで、複雑な順位決定のポイント制について弾美に説明している。要するに先着順では無いという事らしく、それは遅解きも正解の一つであると発表があつた時から知れている事実ではあるのだが。

最終的には、クリアした時点でのパーティ総ポイントの多いチームが優勝らしいとの事。もちろんどのパーティも、自分がどれだけ貯め込んでいるかなど知りようが無い。

ましてや、他人のチームの事など問題外。

「それじゃあ、全部のチームがクリアしてみないと、順位なんか分からないって事だよなあ。ラリーみたいに、現在暫定1位チームとかって発表するのかな？」

「さあ……多分、最終日の27日過ぎれば確定だから、そこで発表じゃないかな？ 真っ先にクリアしたチームも、今は地上に戻ってポイント稼いでるって話だぞ」

「えっ、クリアしてもまだ地上に戻るのか？」

「ああ、いやいや……途中のイベントエリアな、5部屋ある奴。そこをクリアしても、まだ戻るのには平気だよ。その後は、本当に最終エリアらしくってさ。マジに後戻り出来ない仕掛けらしいけど」

へえっと、納得したり驚いたりりの雰囲気ของเกม会話集団。話題

の中に、ようやく最終エリアと言うキーワードが出て来て、期間限定イベントが最終局面を迎えた事を伺わせる。

いよいよな感じと同時に、長かった日々を思い遣って感慨に耽る生き残り組。

今回の限定イベントの1位から3位の賞品も、同時に発表されたと進の言葉。賞品はなかなか豪華だが、副賞みたいに商品券なども付属しているのが有り難い。

今回の限定イベント初となる、開発局の特別スタッフ登録つてのは何だと、クラスメートは混乱気味に憶測を並べているようだが。ひよっとしてゲームの開発チームに加われるのかと、興奮した声も聞こえて来る。

裏技でその意味を知っている弾美は、冷や汗タラリ。

「今や、イベントクリア組は、慌ててフリーエリアでNMを狙ったり、裏エリアへのメダル集めに奔走してらって話だけど……中でもメダル必要だから、あんまり意味無いよな」

「10枚+6枚だから、半端な数字じゃないのは確かだなあ。本当に命を売る位しないと、今からじゃあ入れないんじゃないのかな？」  
「これで俄然、裏エリア攻略組は優位に立てた気がするよな。弾美は全部回ったんだし、未だに全滅も喰らってないし。これは本当に、ベスト3位に入ってるかもなあ」

それはどうか分からないが、まだ全滅をしていないというのは有利な点に違いない。もっとも、難所はまだまだこれから挑む予定。この先の事は、本人にも分からないのだが。

裏エリアを回り切ったと言うのに、まだ金のメダルを20枚も所有している事実には驚く進達。それなら個人強化にもメダルを注ぎ込めると、皆が羨ましがっている。

パーティにのんびり屋が多いので、そんな話題にはなりにくい

だが。金のメダルを余らせるのも勿体無いので、そろそろ考えるべきかも知れないとは弾美の内心の弁。

トリガーもまだ未使用がいっぱい。事によると、まだまだメダルが増える可能性も。

その内クラスメートが、来週から中間テスト1週間前だと口にした。もうそんな時期かと、あちこちからため息が漏れる。来週には期間限定イベントも終了し、テスト範囲が発表される。

エスカレーター式のこの学校だが、もちろん節目のテスト期間は、学生達は目の色を変えて勉強に打ち込む事になる。何しろ、面目上は学業は学生の本分なのだから。

弾美もそうだが、瑠璃と言うブレインがいる分マシな方である。

瑠璃の凄い点は、理系寄りの頭脳を持ちながら、文系が好きで両方で良い点を取る所。範囲の山張りも明快で、弾美はもちろんギルド仲間などもいつもお世話になっている。

中間テストに安心して打ち込むためにも、是非限定イベントをスバツとクリアしたい物だ。

「それじゃあ……限定イベントが終わった頃には、ゲームも一旦封印だな、進。イベントの最終追い込み、お互い頑張ろうぜ！」

「そうだなあ……無事に最終エリアまでクリア出来れば、こちらも有り難いんだけど。何しろ、終盤に来てライフポイントが心許ないからなあ」

「中間テストが終わったら、またメイン世界でのオン会と、美井奈とか薰つちとか誘ってオフ会とか企画しようぜ。せつかく仲間が増えたんだしなっ」

その言葉に、進も嬉しそうに口元をほころばせる。テスト期間中の『蒼空ブンブン丸』の活動一旦休止と言うのは、メンバー同士で



決めた数少ない規律の一つ。

それが終わった後に、打ち上げ的にオン会やオフ会を企画するのも、今やギルドの決まり事のようなもの。それが何よりの楽しみなもの、ギルドに所属する者達の特権である。

苦しみの向こうには、明るい解放が待っている。だから頑張る事が出来るのだ。

そんな事を思いつつ、クラスメートの配るプリントの定時連絡に目を通して行く弾美。もうすぐ5月が終わりを告げ、じめじめした梅雨まじりの6月がやって来る。

午前の授業は既に終わっており、後は午後の授業と部活のみ。昼休憩中のクラス内は、ガヤガヤと騒音に満ちている。活気があるのは結構だが、物思いに沈むにはうるさ過ぎる。

季節は巡り、やがて節目の時を迎える事となるのだ。

8時のインは毎度の事なのだが、話題はどうやら土曜日の合同インに傾いているよう。美井奈がたまには自分の家でやろうと提案し、その方向で話が進んでいる感じなのだが。

マロンとコロンの散歩は、半ドンで部活の無い瑠璃が済ませる事にして。それが終わってすぐに、瑠璃はモニター持参で美井奈のマンションへと向かう約束となったらしい。

薫も時間が合えば、瑠璃の荷物運びを手伝ってあげると請け合っ  
て来る。弾美は部活が終わり次第、直接美井奈宅に合流する。これ  
で土曜の予定は、ほぼ決定したのだが。

本当は木曜日の合同インをとの事だったのだが、何しろ美井奈の  
自宅には予備モニターが1つしかない。一度取りに戻ってしまうと、  
最短でも確実に25分はロスしてしまう。

そんな訳で、明日は毎度の弾美の家という事で確定済み。

「土曜日はお母ちゃまはいないですけど、おもてなしはちゃんとし  
ないといけませんねっ！」

「普通でいいって、美井奈。ゲーム出来る環境であれはいいからな  
っ」

「薫さんから貰ったハーブ、お母ちゃまが感謝してましたよっ！」

有り難うございますっ（＾　＾）／」

「いえいえ、こちらこそっ。まだまだあるので、また持って行きま  
すねっ？」

冒険前なのに、何故か世俗の挨拶が入り乱れ。それもまあ、大事  
な交流の潤いの一つでもあったり。今日のエリアは難所らしいから、  
みんな踏ん張るようには、リーダーの弾美の言葉。

イベントエリアも今夜で4つ目、ここを入れて残りはあと2つだ。

順調にレベルを1つ上げたハズミンは、前回に続いて闇系の魔法  
を取得。新しい魔法は《ダーククロス》という名前で、単体ではか  
なり強烈な攻撃魔法となっている。

ダメージと共にバインド効果も与えるそれは、MPの消費が多い  
のを除けば、詠唱時間もそんなに長くなって、かなり使い勝手が良  
い魔法である。装備と術書によって闇スキルが大幅に伸びたため、  
威力も高いのは保証付きだ。

新装備のベルトによって、ポケットの数が2つ増えたのも地味に  
大きい。SP量も連続スキル技使用に困らない程、装備によって増  
大して来ているハズミン。

魔法系の飛び道具も増えて、活躍の場もさらに広まりそう。

名前：ハズミン

属性：闇

レベル：32

取得スキル : 片手剣66 《攻撃力アップ1》 《二段斬り》  
《複・トルネードスピン》

《下段斬り》 《種族特性

吸収 《攻撃力アップ2》

《上段斬り》 《複・ドラ

ゴニックフロウ》

: 闇72 《SPヒール》 《シャドータッチ

《闇の断罪》

《グラビティ》 《闇の腐食》 《

闇の刺針》 《ダーククロス》

: 竜10 《竜人化》 : 風23 《風鈴》

《風の鞭》

: 土25 《クラック》 《石つぶて》

種族スキル : 闇32 《敵感知》 《影走り》 《SPアップ+

10%》

: 土10 《防御力アップ+10%》

装備 : 武器 破邪の剣 攻撃力+21、HP+20、耐呪い  
効果 《耐久15/15》

: 盾 龍鱗の盾 耐ブレス効果、防+18 《耐久

15/15》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+15

: 首 鬼胡桃のペンダント HP+8、体力+2、

防+6

: 耳1 黒蛍のピアス 闇スキル+3、SP+10

%、防+4

: 耳2 白豹のピアス 器用度+3、HP+10、

落下ダメージ減、防+5

：胴 暗塊の鎧 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+25

：腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+15

：指輪1 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、

防+5

：指輪2 闇の特級リング 闇スキル+4、SP+10

%、SP上昇率UP、防+4

：背 砂嵐のマント 風スキル+3、敏捷度+4、

防+8

：腰 闇のベルト ポケット+4、闇スキル+3、

SP+10%、防+10

：両脚 魔人の下衣改 攻撃力+5、体力+3、腕力

+3、防+15

：両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+

5、HP+25、防+10

レベルアップ果実を融通して貰ったために、一気に2つもレベルが上昇したルリルリ。本人は魔法の方にポイントを割り振ろうと思っていたのだが……水の宝珠まで貰ってしまった、結局は武器スキルを伸ばす事にしたようだ。

その水魔法だが、前回一気に2つも取得してしまった。1つは範囲に毒の酸を撒き散らす《アシッドブレス》という魔法。これを掛けてマラソンで振り回して弱らせるという手も、メイン世界では割とポピュラーな戦法である。

もう1つの新魔法は《水の分身》という名前で、MPを200も使うので使い勝手は良くないのだが。自分のデコイを水の塊で作って、敵に突進させたり身代わりにする技のようだ。

敵が多くて自分がタゲを取りたくない時とか、時間稼ぎをしたい時など、工夫次第ではとても便利のだが。それ程生み出したデコイは強くないので、本当に時間稼ぎにしかない。

MP消費の激しい大魔法を2つも抱え、悩みの尽きないルリルリだったり。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：32

取得スキル : 細剣56《二段突き》 《クリティカル1》 《複・アイススラッシュ》

《麻痺撃》 《幻惑の舞い》

《Z斬り》

: 水70《ヒール》 《ウォーター

シエル》 《ウォータースピア》

《ウォーターミラー》 《波紋ヒー

ル》 《アシッドブレス》

《水の分身》

: 光30《光属性付与》 《エンジェルリ

ング》 《ライトヒール》

: 氷42《魔女の囁き》 《魔女の足止め》

《魔女の接吻》 《氷の防御》

種族スキル : 水32《魔法回復量UP+10%》 《水上移動

》 《MP量+10%》

装備 : 武器 戦闘ネコの細剣 攻撃力+15、敏捷度+2、

MP+8《耐久12/12》

: 盾 豪華な大盾 体力+4、防+12《耐久8

/8》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+

5、MP + 25、防 + 8  
 : 首 サファイアのネックレス 腕力 + 3、SP  
 + 10%、防 + 5  
 : 耳1 天使のピアス 光スキル + 3、知力 + 2、  
 MP + 8、防 + 3  
 : 耳2 流水のイヤリング 水スキル + 5、氷スキ  
 ル + 5、MP + 25、防 + 5  
 : 胴 流水の鎧 水スキル + 5、氷スキル + 5、  
 MP + 25、防 + 18  
 : 腕輪 バトルグローブ 攻撃力 + 3、HP + 8、防  
 + 12  
 : 指輪1 光の特級リング 光スキル + 4、HP + 15、  
 攻撃距離 + 4%、防 + 4  
 : 指輪2 プラチナの指輪改 腕力 + 4、HP + 20、  
 攻撃速度UP、防 + 8  
 : 背 精霊封入の人形 HP + 50、MP + 50、  
 SP + 10%、防 + 1  
 : 腰 複合素材のベルト改 ポケット + 4、器用  
 度 + 5、MP + 13、防 + 11  
 : 両脚 流水のスカート 水スキル + 5、氷スキル +  
 5、MP + 25、防 + 10  
 : 両足 ゾゲン鋼の戦靴 体力 + 2、HP + 6、防  
 + 10

レベル30に到達して、ミイナが新しく覚えた種族スキルは《落  
 下ダメージ減》で、実にタイムリーだとの評判なのだ。アツカ  
 ー気質の雷種族にしては、ちょっと珍しいスキルかも。

装備では、どうやら隠しレア装備の妖精のクラウンを取得したミ  
 イナ。可愛いデザインもさる事ながら、隠し性能もあるらしい事が

判明。妖精魔法の、呼び出し光球が1つ増えたのだ。

さらに、装備のスキルと術書の融通で、光魔法も覚えたミイナ。《フェアリーヴェール》という新魔法は、どうやら自身を透明化させて敵から気配を消し去る性能のようだ。

イベントエリアなどでは重宝するかもと、期待も高まる今日この頃。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：30

取得スキル : 弓術48 《みだれ撃ち》 《近距離ショット1》

《攻撃速度UP1》

《貫通撃》 《複・スクリユーア

ロー》

: 光50 《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》

《フェアリーウィッシュ》

《フェアリーヴェール》

: 風24 《風の陣》 《風の癒し》 : 水

10 《ヒール》

: 雷31 《俊敏付加》 《俊足付加》 《ス

パーク》

種族スキル : 雷30 《攻撃速度UP+3%》 《雷精招来》

《落下ダメージ減》

装備 : 武器 神樹の長杖 攻撃力+25、知力+5、MP+

28 《耐久14/14》

: 遠隔 雷鳴の弓矢改 攻撃力+20、器用度+5、

敏捷度+5 《耐久14/14》

: 筒 貫きの矢束 攻撃力+14

: 頭 妖精のクラウン 光スキル+4、風スキル

+4、SP+10%、防御+12

:首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP  
 +10%、防+5  
 :耳1 白蛍のピアス 光スキル+3、HP+25、  
 防+9  
 :耳2 陰陽ピアス 精神力+5、知力+5、MP  
 +15、防+6  
 :胸 妖精のドレス 光スキル+4、風スキル+  
 4、MP+20、防御+20  
 :腕輪 星人の腕輪 光スキル+2、闇スキル+3、  
 MP+8、防+8  
 :指輪1 雷の特級リング 雷スキル+4、器用度+4、  
 攻撃速度UP、防+4  
 :指輪2 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、  
 防+5  
 :腰 複合素材のベルト ポケット+4、器用度  
 +4、MP+8、防+6  
 :背 白豹のマント 雷スキル+4、器用度+4、  
 MP+10、防+10  
 :両脚 妖精のスカート ポケット+2、光スキル+  
 3、風スキル+3、防御+12  
 :両足 戦闘ネコの長靴 敏捷度+2、MP+6、  
 防+10

カオルもレベルが30になって、種族装備を取得した。戦闘能力  
 には関係ない《移動速度UP》というスキルだったが、本人は複合  
 スキルの取得の方が大事のよう。

その複合スキルだが、距離が無いと使えない《竜巻チャージ》と  
 いう大技である。直線状に敵がいたら問答無用で巻き込む範囲技の  
 仕様になっているが、使い心地は如何なものか。



装備の方では、弾美がいらなくなったベルトを融通して貰って攻撃やHPを上昇させた。前衛に必要な能力なのでそれは嬉しいのだが、ポケットが1つ減ってしまった。

複合スキル取得のために風スキルを、プレス強化のために炎スキルを伸ばした結果、魔法も2つ取得したカオル。風の魔法は《風の陣》で、美井奈も持っている防御系の魔法。

炎魔法の《炎獄》は、次の一撃に炎ダメージを乗せて必殺の大ダメージにする事が出来る魔法である。あくまで1回きりの効果なので、戦闘中にホイホイ唱える訳には行かないが。

《竜巻チャージ》などと合わせて使えば、かなり面白いかも知れない。

名前：カオル 属性：風 レベル：30

取得スキル : 長槍64《二段突き》 《攻撃力アップ1》 《脚払い》 《石突き撃》

《クリティカル1》 《貫通撃》

《複・竜巻チャージ》

: 炎40《炎属性付与》 《炎のプレス》

《レイジング》 《炎獄》

: 雷20《俊敏付加》 《パラライズ》

風20《風鈴》 《風の陣》

種族スキル : 風30《回避速度UP+3%》 《魔法詠唱速度+6%》 《移動速度UP》

装備 : 武器 赤龍の大槍 攻撃力+32《耐久15/15》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭 迅速の兜 炎スキル+4、雷スキル+4、

器用度+2、防+7

: 首 進みがちな懐中時計改 SP+15%、攻

撃速度UP、防+8	
：耳1	サファイアのピアス 腕力+2、SP+1
0%、防+3	
：耳2	銀のピアス 器用度+2、HP+4、防+2
：胴	迅速の鎧 炎スキル+5、雷スキル+5、
腕力+5、防+20	
：腕輪	迅速の腕輪 炎スキル+4、雷スキル+4、
腕力+2、防+7	
：指輪1	迅速の指輪 炎スキル+3、雷スキル+3、
防+4	
：指輪2	蝶柄の指輪 器用度+4、体力+4、HP+
12、防+5	
：腰	獅子王のベルト ポケット+2、攻撃力+
4、HP+15、防+8	
：背	迅速のマント 炎スキル+4、雷スキル+
4、防+7	
：両脚	朱色の袴 ポケット+2、精神力+5、MP
+20、防御+12	
：両足	迅速のブーツ 腕力+3、器用度+3、防
+7	

薬品の買い足しや武器の修理、細々とした事を終えたメンバーがイベントエリアの入り口に集合する。この時間はちよつと混む感じだが、このエリアは占有出来るのでそれ程に問題はない。

他の見知らぬパーティ連中も、あと1週間となった期間限定イベントの追い込みに必死なようだ。弾美としては、焦らずに最後まで楽しむ気持ちを捨てたくないのだが。

今までのエリアでも、驚かせようとか楽しませようと言う仕掛け

がいつぱいなものだから。難しい顔をしてゲームをしても損なだけ。

最初のイベントフロアも、まさにそんな感じでパーティのド肝を抜いて来た。今回は1部屋が20分リミットだと、メンバーが緊張気味に飛び込んだ、初っ端の部屋だったのだけれど。

何と、入り口付近以外は、ほとんどが茶色の木箱で埋もれてしまっている。階段付きの木箱がどれかとか、一見ただけでは判然としない仕組み。そもそも視界が確保出来ていないっ。

魔法で各自強化しつつながらも、口から出るのは何だコリヤとか、どうしろって言うのとかの愚痴ばかり。木箱のHPは、これではなかなかバカにならないのだが。

それでも道を作るべく、片っ端から壊し始める一行。

『わわっ、完全に下を壊しても上の木箱は落ちて来ないんだあ』

『木箱の中から、お助けアイテムが出てきたねっ。とにかく、どんどん壊して行こうっ！』

『でもでも、時間は今回20分しか……あっ、赤の木箱出ちゃった』

確かに制限時間は20分しかなかったっけと、弾美が理性を取り戻す。ただ壊すだけという単純な作業が、意外と楽しくてついついのめり込みそうだったのだけど。

薫の新スキル技の《竜巻チャージ》が、派手な上に役に立つ事が判明した。直線上に存在する木箱を、一気に3個くらいまとめて破壊出来るのだ。これは時間短縮にかなり効果的。

美井奈には、遠隔で2段目に湧いていた赤の木箱の回収を指示する弾美。瑠璃に関しては、あれを壊してだとか、こっちは足場にするから壊さないでだとか、完全に現場の総指揮官をこなしている。メンバーも完全に信頼していて、程なくして2段目へのルートを確保。

それからみんなでスイッチ探し。高い所に3つ見つかったが、後1つが無いっ！

取り敢えず瑠璃の指示する木箱を皆で壊しつつ、残りのスイッチを探す一行。瑠璃の考えだと、2段目には邪魔な木箱が半ダース近く存在するらしい。ところが2段目の木箱は、壊す端からお助けアイテムやモンスターが飛び出して来る仕組みらしく。

時間の心配をしつつ、出て来た敵の始末に追われる一行。それでも3段目に上がらないと、スイッチに到達出来ずに話にならない。瑠璃が妖精に、残りのスイッチの場所を聞いたらしいのだが。何も答えてくれないから、ただ木箱の陰で見えないだけなのかもとの事だ。

そっちの方が嫌かもと、渋い顔の搜索隊の面々。

『皆さん10分経ちましたよっ！ あと半分ですよっ！』

『3段目の敵の掃除が先だっ、ぱっと片付けるぞっ！』

上で待ち構えていたのは、今回は多足の気持ち悪い形状のゲジゲジ虫型の敵だった。それが3匹たむろしていて、こちらの攻撃を何故か華麗なステップで避けて来る仕様らしい。

そして頭上から、毒針の付いた尻尾で斬り付けての攻撃。パーティはしかし、もはやそんな事では翻弄されない。前衛でがっちりキープしつつ、確実に数を減らして行く。

範囲攻撃や弱体で弱らせて、フィニッシャーの美井奈がとどめを刺す得意戦法。

敵の掃除が終わったあとは、皆で地ならしと最後の1つの探索に必死。スイッチはどこだと、高い段に上って見回す者。適当な場所に見当を付けて、ダッシュで木箱を壊す者。

ようやく見つけた最後のスイッチは、いやらしい事に一番端っこ

の部屋の角に隠されてあった。木箱の柱の裏に見えないように設置されていて、見つけた瑠璃はおカムリ。

こんな意地悪はしちゃ駄目だと、誰に文句を言っているのだが。

『俺の言った通りだったろ、瑠璃。敵を減らした部屋は、その代わりに意地悪をしたくなるんだよ』

『さすがは、意地悪を語ると感情がこもってますねえ、お兄さん。いえ、他意はないですけど？』

『美井奈、お前は……おっと、時間がやばいぞ。みんな3秒後に押すぞ』

ぱつちりと息の合ったメンバーの手で、スイッチの仕掛けが作動。一行は何とか時間内に次の緑の床のフロアへとワープ、またも入り組んだ木箱の段が迎えてくれる。

そして爛々と輝く金色の木箱も、やっぱり同時にお出迎え。赤い床のフロアでチケットを入手していたので、当然の権利とも言えるのだけれど。美井奈や薫は、これは逆に悪辣なトラップだと言って入室に抵抗を示す。

ここでの3分は、ちよつと痛過ぎるとの理由なのだ。

『平気だって、3分くらい。前の部屋でもそれくらいは残ってただろ？』

『ハズミちゃんは言い出したら聞かないから、入っちゃおうか？』

今回のフロアは、道が3段目まで付いてるみたいだし……』

『むっつ、お姉ちゃまがそう言うんだったら……ってか、もう壊し始めてますねっ！』

時間の無いのも何のその、特別ルームへ招待された一行は、こうなれば壊さなければ損とばかりに行動を始めるのだが。今回は、特別室に置いてある木箱は、何故か茶色系のみ。

変に思いつつ壊してみると、今度は消耗品の取り放題のようだ。もちろん瑠璃は大喜びだが、性能の良い矢束も思いがけず入手出来て、途端に美井奈も興奮気味。

さらには大エーテルや氷の密酒、エリクサーなどなど。

連なりの矢束 攻撃力+17 みだれ撃ち効果UP

朱塗りの矢束 攻撃力+20 追加炎ダメージ

「なかなかの報酬だったねえっ。よしっ、今度はクリアを頑張ろう！」

「了解っ、今回は……あれっ、また1個スイッチが見えないね？」

「取り敢えずは、3段目まで一気に上げるぞ〜！」

弾美の号令で、一行はわらわらと移動を始める。3段目にはやっぱりフロアの番人が陣取っており、今回は角の生えた甲殻虫のようだ。虫の癖にかなりの大柄で、防御も硬そうな風貌である。

パーティが近付くと、丸まって体当たりを仕掛けて来た。

負けずに新スキルの《竜巻チャージ》で反撃する薫。なかなかのダメージに、本人は納得の感触を得たようだ。防御のずば抜けた敵相手に、怒涛の攻めを見せる一行。

程なく自由の地となった3段目。その後4段目への道を作ろうと茶色の木箱を壊したら、何とその中からスイッチが出て来たりしてお茶目な仕掛けに、何となく脱力の一行。

2つ目のフロアも、お蔭で無事クリア。

今度は遺跡のフロアだと、信じて疑わなかった一行だったが。何と放り出された先は、白いフロアだった。うるたえ気味の美井奈は別にして、不意をうつ仕掛けにしてやられた感の弾美。

広いフロアを見回して、状況判断を素早く実行。天を支配しているのは、今回は大トンボの群れのよう。3匹ずつで連隊を組み、微

妙な高さで地上を見据えてホバーリングしている。

瑠璃の行動も素早く、妖精との会話で透明スイッチの場所確認。

『美井奈つ、ぼさつとしてないで俊足魔法を掛けるつ。中段に下りて、真つ直ぐ進もうか』

『透明スイッチは左端だつて。ええと……あの敵の所かなあ？』

『ああ、確かに地上に1匹、目立っているなと思っただけど……フロアの番人かなあ？』

『じゃあ、皆でそつちを先に倒すか。くそつ、いきなり時間使わず気がよつ！』

広いフロアで、スイッチの場所も確定していないだけに、弾美の苛立ちも分かるのだが。番人と信じて疑わないモンスターを何とか倒してみると、何とそれがはったりだと判明！

段差違いで、下から回れば反応しない場所にスイッチがある事が分かった途端。引つ掛かったパーティは悔しさも倍増。ロスした時間を取り戻すべく、大急ぎで残りを確定して回る事に。

2つ目と3つ目は割と近くにあったのだが、モロに大トンボの索敵範囲に設置されていた。美井奈の釣りからの素早い襲撃で、3匹の大トンボは1匹1分程度で散って行く。

ここまでで約12分、確定したスイッチは全部で3つ。

あと1つは、厄介な事に透明化されていないよう。中段を駆け回って、全員で必死に白いフロアを探し回るのだが。5分が経過してもなかなか見付からず、一行に焦りが見え始める。

危険を承知でもう一度上段まで上って、弾美がフロアを見渡してみると。広いフロアの左の端つこに、窪んだ場所が確認出来る。怪しいとも言えるし、違つかも知れないし。

最初のフロアも左端に隠れていた。ダメ元で、弾美が一人確認に走ると。

『あつた〜っ！ 誰か入り口のスイッチに戻ってくれっ、時間も無いし、絡まれてヤバイっ！』

『私が戻るねっ、弾美君頑張れ〜っ！』

『えっ、絡まれてて大丈夫ですか、隊長！？』

『スイッチ押せばワープだから、それまでは持たせるっ！ 瑠璃、合図頼むっ！』

弾美は絡んで来た3匹の大トンボ相手に、必死で孤独な防戦に励む。瑠璃と美井奈は、慌ててそれぞれのスイッチに辿り着き。孤軍奮闘の、弾美の身をひたすら案じているのだが。

程なく薫が着いたとの合図、瑠璃がタイミングを計ったのスイッチ操作。

白いフロアも、どうやら無事クリア出来たようで何よりである。転移後に、近くに出現した弾美に回復魔法を飛ばす瑠璃と美井奈は、一安心だと胸を撫で下ろすのだけれど。HP半減程度で済んだ弾美も、20分は辛いと感想を述べる。

お母ちゃまが、今の面はギリギリの時間でのクリアだったと言っている、美井奈の報告に。何にせよ、チャレンジ失敗でなくて良かったと嬉しそうな面々である。それでも通常の仕様より、確実に1面多いフロアに混乱模様のバーティ。

とにかくここはいつもの最終面、遺跡のフロアの様子。ところでここ、時間設定は無いの？

『あれっ、あとはここを上って行って、宝箱を開ければいいのかな？』

『えっ、ここは完全にスルーですか、時間制限も戦闘も無し？』

『そうなのか、ちょっと見てこよう』



休憩中の後衛を残し、中層に上って行くハズミン。そこには敵の姿もスイッチも無く、宝箱が4つ程置かれていた。何故ここと思いつつも、一行が追いつくとつい開けてしまう弾美。

1つは経験値、残りの2つは薬品系、最後の1つは久々のミミックで何だか時間稼ぎな風味が満載。ちよつと変だなと思いつつ、上層を恐る恐る覗いて見ると。

やっぱりいました、大ボスとその従者。戦う気満々で、既にスタンバイ中。

『ああつ、ラスボスいたつ！ ここもひよつとして、20分制限なのかなつ！？』

『それっぽい感じですねえ、敵は3体ですか！』

『ちよつと途中で時間食っちゃつたなつ、速攻で雑魚から倒すぞつ！』

薫と美井奈との事前の打ち合わせで、連続スキル技使用の初っ端からの追い込みを話し合っていた前衛陣。敵の大ボスは人型サボテンのモンスターと、従者らしい白いサソリが2体。

どう見ても従者のサソリの方が強そうなのだが、取り敢えずは数減らしが先だと戦術決定。作戦通りに弾美が全部タゲを取って、護衛役らしい白サソリから各個撃破の方向へ。

そんな訳で、近付いての弾美の《ドラゴニックフロウ》から最終戦闘はスタート。目論見通り、敵が一齐にハズミンへと振り向く。

サソリ型の敵はそれぞれ、素早くハズミンを迎え撃つ構えを取り始めているのだけれど。真ん中の小さな体躯のサボテンのみ、両手を上げて降参？ のポーズを取っている。

何だコイツはと、弾美はちよつと近づくのに躊躇。白いサソリがボスに構わず弾美に近接。それを阻止するように、まずは薫が《炎獄》込みの《竜巻チャージ》で距離を詰めて、さらに《貫通撃》を

繋げての連続スキル技を敢行。

それに呼応するように、美井奈も連続スキルを使用する。タゲを取っても構わないとばかりに、《フェアリーウィッシュ》込みの《みだれ撃ち》から《貫通撃》へ。

さらにSPを確認して、薫と号令を掛け合つての《スクリユーアロー》の突き飛ばし技。それによって開いた距離を利用しての、薫の《竜巻チャージ》のコンボ技。吹っ飛んだ敵はもはや虫の息で、足止めの役割すら果たせていない。

スキル技の相性も、ここに来て噛み合つて来た感も。

もう1匹の白いサソリと殴り合いながら、人型サボテンの動向を気にしている弾美の方は。サポートにと待機していた瑠璃も、サボテンの動き出しが遅いのに焦れて一緒に殴り始める事に。

薫の前の敵が、早くも倒されて行く。そこからようやく、サボテンの逆襲が。

『わわっ、大きなサボテンが生えて来たっ！？ 何これ、攻撃出来るの？』

『わっっ、こつちにも！ なんですか、視界が遮られましたよっ！』

フィールドの至る場所に、大きなバルーン状のサボテンが、突然ポコポコと生えて来た。痛そうな刺も生えていて近付くのも躊躇われるそれは、どうやら通常攻撃では壊せそうも無い。

ボスに辿り着くには、その刺の山を登って移動するしかなさ気な仕掛け。それは痛そうだと言いつつも、とにかく視界確保のためにサボテンを登り始めた美井奈と薫だったが。

歩を進める度に、案の定の刺のダメージが。

ボスのサボテンは、自己回復をする以外は他にモーションは無い様子。弾美と瑠璃は、残った白いサソリを相手に奮闘中。視界を確

保出来た美井奈が削りに加わり、護衛役のサソリはもうすぐ落とせそうである。

薫はボスに向かおうかと迷いつつ、移動のダメージに怯んでいる。この嫌味な仕掛けは、一山越えただけで前衛のHPでも半減してしまっ程ダメージを負ってしまうのだ。

サボテンの上から見たら、丁度ボスの人型サボテンを囲むように山が4つ出来上がっている。その盛り上がった山の1つで、弾美と瑠璃が白いサソリを相手している感じである。

雑魚のサソリも2匹目撃沈。これでボスに行けると、薫が思った瞬間。

『なにになに〜っ、サボテンの頂上に花が咲き始めたよっ!?!』

『私の隣にも〜っ、これは避難した方がいいんですけど!?!』

『良く分からないけど、ボス倒さないと終わらないからなっ。俺はボスに行くぞっ!』

時間制限があるのならば、ボスはさっさと倒さないと話にならない。弾美は瑠璃を引き連れて、山の谷に鎮座するボスを目指す。今度はいち早く反応したボスは、針を飛ばして応戦して来る。

4つの山に囲まれた谷底では、熾烈な戦いが開始された。範囲攻撃が多いので、瑠璃は離れて支援したいのだが、何しろ距離を取ろうと動くだけでダメージを受けてしまう。

仕方なく前線で回復を飛ばしながら、弾美と肩を並べて削っているルリルリ。肝心のアタッカーの片翼の薫は、何と山の頂上の花から生まれた新たな人型サボテンに絡まれていた。

それは美井奈も同じ事。混乱したログが、弾美にも届いて来るのだが。

見かねた瑠璃が、水魔法で美井奈を殴っている敵に攻撃。ところが水を得た人型サボテンは、益々元気になったよう。体積も増して、

より凶悪に変化するという凶悪サイクル。

薫がそれを見て、目の前の分身相手に《炎のプレス》を試してみると。敵へのかなりのダメージに加え、サボテンの山が縮んで行くという事態に。それを見たパーティは、邪魔な山を消してしまえとアンコールの大合唱。

そうは言っても、全部消すまでMPが持つかが問題。

『光魔法は駄目ですかっ!? 動いたらダメージだし、お姉ちゃまと合流したら攻撃出来ないし、私はどうしたらいいんですかっ!』  
『うーん、炎が効果あるとしたら……闇魔法を撃ってみるか……ちよつと待つてろ、美井奈』

モロにボスのタゲを取っている弾美だが、美井奈の窮地も放つておけない。敵の特殊攻撃を見計らって、何とか新魔法の《ダーククロス》を美井奈を殴っているサボテンに飛ばす。

瑠璃が氷の足止め魔法を掛けてあったそいつは、闇魔法に明らかに怯んだよう。バルーン状のサボテンの山もみるみる縮まって、山の2つは既にシオシオ状態。

残りの2つの山は、パーティの誰も近付かなかったためか。頂上の花の動きは今の所無し。今の内にと、弱った雑魚のサボテンにとどめを刺して、やっとの事で4人揃ってボスへとアタック。

程なくボスの人型サボテンは没。それと共にバルーンサボテンも消滅。

『ちよつと……ああゆう仕掛けは、時間制限の無い場所でやって欲しい……』

『おおつ、時間計られてるんなら、さっさと抜け出さないとっ!』

浮島でいいのかっ?』

『えっと、あるあるっ! ゴールは一緒だねっ、葉っぱが浮いてる

よー』

そんな訳で、皆で大慌てで鳶の橋を渡つての、情緒もへつたくれも無い大慌ての宝箱開け。今回も4つの箱からは、4万ギルの現金と金のメダル、土の術書と素早さの果実が。

忘れずに皆で、宙に浮かぶ黒色の木の葉をゲットする。それと同時に退出魔方阵が出現して、どうやらクリアは間に合いそう。パーティはようやく、4つ目のイベントエリアを後にした。

終わった後に、20分は辛いと愚痴が皆からこぼれる。

ちなみに、ボスからの装備品のドロップは、片手棍や刺付きマント、サボテンレイピアなど。残念ながらも現状の装備の性能を超えず、販売リスト入りに名を連ねる事に。

裏エリアなどで入手した装備の性能が良いので、仕方ないと言えなくもないが。大きなエリアを1つこなした後で、レベルアップも性能の交換も無いと、何だか損した気分である。

レベルも30過ぎて、上がりにくくなっているのも確か。

『みんなレベルアップも装備交換も無しですか。仕方ないとは言え、ちよつと寂しいですねえ』

『失敗しなかつただけ、有り難いと思わなきゃね。白いフロアは、本当に苦しかったw』

『そうだねえ、振り落としの仕掛けは、本当に意地悪だよねえ』

そんな意地悪なイベントエリアも、残るはあと1つとなって。噂によると、今までで最大の難関が最後に控えている筈である。その攻略のためにも、力を溜めておかないと。

そついう意味も込めて、今夜の残り時間はパワーアップに充てるぞとの弾美の言葉。皆の意見を参考にして、トリガー消費に廻ろう

と決まったのは良いけれど。

トリガーも豊富で、どれを先に行くかちょっと悩んでみたり。

結局はだいたいの場所の分かっている、火のトリガーの使用場所を最初に目指す事に。フリーエリアを出た途端に見える山に、トレード場所があると言う話だったのだが。

用意が終わった一行が、元気良くフリーエリアへと飛び出して行く。フリーエリアは敵のレベルが固定なので、30前後のパーティーにとっては移動も気楽なものと成り果てている。

何しろ、絡んで来る敵は既に雑魚扱い。

『着いた〜っ、ここが獣人の集落だねっ？ 山の登り口があるって話じゃなかったっけ？』

『道はここからでも見えるけどなあ。雑魚が邪魔だから、先に倒すか』

『邪魔ですなあ、わっ、建物の上にも伏兵がっ！』

割とさつくりと倒せるとは言え、集落だけあって獣人の数は多い上に密集している。仕舞いにはボス級の大ザル型の獣人も出て来て、岩石投げの特殊攻撃で苦しめられる始末。

建物の屋根からの急襲も合わさって、パーティはひとしきり混乱模様。それでもやっぱり余裕があるのか、通信会話ではバカな事をワイワイと言いつつ場面も。

しかし、そんな余裕も猿人のNMの獣人ボスが出現するまで。

まるで映画のシーンのように、建物の影から突然出現した巨大猿人。狙ったように、一人離れていたミイナをむんずと掴み上げる。かなりの大きさに、衝撃を受けていた一同だった。

仲間を取り戻そうと、ほぼ同時に巨大猿人を殴り始めるメンバー達。その結果美井奈は、興味を失ったように放り出されてHP半減

の目に合いつつも。何とか自由の身になった事で、距離を取って援護に回り始める。

雑魚はほとんど掃除してしまっているから平気……と思ったたら。

『わっつ、何ですかっ！ 真っ暗です、私はどこですかっ！？』

『わっつ、み、美井奈ちゃんが……お猿の籠屋に連れて行かれてるっ！』

『何だそりゃ……って、本当じゃんかっ！』

恐らくNMのオプションらしいお猿の籠屋が、離れた場所にいた美井奈をピンポイントで狙ったようだ。2匹の運び手によつて籠に放り込まれた雷娘は、まさにお持ち帰りの最中のよう。

瑠璃が大慌てで、魔法で籠屋に攻撃を仕掛ける。ダメージを喰らったお猿の籠屋は、一瞬にして消滅したのは良いけれど。今度は相手に背を向けた瑠璃が、猿人に素掴み状態に。

このおバカなサイクルを止めると、弾美は結構なおカムリ。放り出された瑠璃もHP半減、NM相手とは言え、不甲斐ない戦い振りに苛立っているパーティーリーダー。

嫌らしい特異な仕掛けなので、仕方ないとも言えるのだが。

とにかく、苦勞しつつも敵を倒し終わったパーティ。それでも美井奈などはキョロキョロして、怪しい影が無いかどうか周囲を見回してみたり。ドロップには金のメダルや棍棒などがちらほら。

弾美が建物の1つに、何やら怪しい装置を発見。そろそろと皆が続き、建物の中という閉鎖空間によやく危機感を払拭出来そうな雰囲気。少なくとも連れ去られる危険は去ったが、代わりに謎解きの仕掛けにご対面。

壁の一面に、時計か金庫のようなパネルと、その下にトレード可能な物置台のセットが。パネルは5面に区切られていて、無>空>山>敵>宝と進むようになってる。

台を調べてみると、身に纏う消耗品を捧げよとの指示が返って来た。

『身に纏う消耗品って……武器とか盾の事かな？ 知らない奴あつたっけ？』

『さっきのお猿さんが落とした棍棒とかならあるよ？ トレードしていいの、ハズミちゃん？』

やってみないと分からないからと、瑠璃が試しにトレードしてみた結果。時計回りに12回転します、よろしいですか？ との念押しが返って来た。慌ててキャンセルして、パーティに改めて相談する瑠璃。

色々話し合ったが、どうやら12という数字は耐久度の事らしいと判明した。スタートの針の場所は、無の場所なのは見たら分かる。12回転したら山という文字を指す事になる筈。

それはそれで、目的地に繋がる事になるので良いのだが。宝と言う文字が、どうしても気になってしまっ一行。4か9か14の耐久度の、いらぬ武器は無いかと確認作業。

瑠璃が何とか、古い武器の中から発見。売らなくて良かったと、ちよつと安堵の表情。

『さすが瑠璃だなっ、しかも2度と使わないような武器じゃないか』  
『』

『お金にならないから取っておいたのかな？ ちよつとよく覚えて無いや……まあ、トレードするね』

『楽しみですよっ、何が出るんでしょうかっ？』

美井奈の期待に伝えるべく、瑠璃が耐久度9のちやちな細剣をトレードする。壁のパネルに設置された針は、ぐるぐると回転して宝の文字の位置でピタツと止まった。



一瞬の後、パーティは薄暗い地下に自動的にワープ。どうやらそこは宝物庫の中らしく、雑多な物に紛れて宝箱が7つ置かれていた。嬉々として、片っ端から開けに掛かるメンバー達。

弾美の機嫌も、この騒ぎにすっかり直った様子。

宝箱の中の、5つはそれ程の値打ちも無いアイテムばかり。炎の水晶玉や、1万ギル、闇の秘酒などなど。一段上に別に置かれた2つの宝箱からは、金のメダルとカメレオンジェルが。

最後の宝箱を開けてしまうと、一同はさっさと元の部屋にワープで返されてしまった。思わぬ報酬に喜びを分かち合いつつ、皆がもう一度壁の仕掛けパネルに目をやると。

針は元の無の位置に戻っている。さて、次はどうしよう？

『もう1回宝の部屋を目指しても、やっぱり無理と言つか無駄だよなあ？』

『開きつ放しの宝箱しか無いですよw 欲張り過ぎです、隊長はっ』

『山に向かうよっつ、時間も勿体無いしねっつ？』

今度の針の仕掛けは12回ほど力チカチと進み、しっかり目的の山の文字を指し示した。その途端に、部屋の扉と反対側の壁が、ガタツと大きな音を立てて隙間を作る。

どうやら隠し扉らしいと、薫がそこから顔を覗かせて周囲を伺うと。ちよっとしたトンネルが続いており、その向こうに小さい原っぱのような場所が存在しているのが見えた。

一行は用心して進んでみるが、これと言った危険な存在は無い様子。その代わりに裏から山に登る道が見付かって、その麓に小さな滝が涼しげに流れを示している。

その先の泉にカーソルが移動する場所があると、先行した薫が発見を知らせて来る。一行が何気なく近付いて調べてみると、連続ク

エストの苔付きのレンガを発見。

これで3つ目だが、まさかこんな場所にあるとは。

それから弾美を先頭に、慎重に山を上る一行だが。上がるにつれて、確かに炎のポイントが存在してそんな熱気が伝わって来る。山肌の亀裂からは煙が立ち込め、活火山の雰囲気。

上がって行くにつれて、敵の姿もちらほら目にするように。ここを縄張りにする敵は、麓よりは少し強いが数は多くないようだ。程なく道は行き止まりとなり、山の中腹辺りまで登ったのだろうか。そこでようやく、トリガーをトレードするポイントを発見する。

戦闘準備をしっかりととして、いよいよ瑠璃が炎の呼び水を使用。

トリガーによって出現したNMは、炎を纏った敵つい人の姿をしていた。どうやら精霊か何かの類いらしいが、殴り掛かっただけで反撃の炎ダメージを喰らってしまう。

弾美がタゲを取ってのいつものパターンに持ち込むが、範囲の炎のプレスも厳しいダメージ。瑠璃がさらに後衛へと距離を取り、回復と水魔法での攻撃へとシフトする。

武器による直接攻撃が、いつもの半分の数値しか出ない前衛陣はやや苦戦気味。狂える水の精霊の時もそうだったが、肉体を持たない敵の厄介な特性である。

それでもスキル技を交えつつ、何とか敵を追い込んで行く一行。

敵の武器は片手剣と鞭の二刀流。鞭の金縛り技も辛い、HPが半分を切ったからの攻撃力の上昇も凄まじい。スキル技での応戦で何とか残りの生命力を削り取ろうとする一行。

しかし、残りHPあとわずかで敵が無敵化。炎の柱と化して近付く者を焼き尽くさん勢い。

『むっつ、直接攻撃が全く効かなくなった……瑠璃、とどめ刺して

くれっ』

『水の魔法かな、んじゃ行くよっ！』

戦闘の後半は味方の被害が甚大で、回復に従事していた瑠璃だったが。皆にとどめを譲られて、必殺の水魔法を勢いよく詠唱して解き放つ。

これにより、炎の柱はシオシオと沈静化。しばらくその場で揺らめいていた炎の残滓は、やがてゆっくり消え去って行った。パーティは各々ガッツポーズ、激しい戦闘の終焉を皆で祝い合う。

この戦闘で薫が31へとレベルアップ、皆から祝って貰いつつスキル振りなど。

敵のドロップは炎獄のブーツと金のメダル、炎の術書や水晶玉など。マントも出たけど外れ性能で、他にも薬品やギルもそれなりに補充出来る結果となった。

ここまで掛かった時間が、35分くらい。ちょっと微妙な時間の残り方だ。

炎獄のブーツ 炎スキル+2、腕力+2、HP+10、防+12

『ブーツは性能いいねえ、これ誰かいる？ 私も欲しいから、鏡でコピーしようか？』

『ああ、それはいいアイデアだな。俺は固定してるから無理だけど』  
『赤いブーツは格好良いかなあ……じゃあ私も貰っていいですか、薫さん？』

相談の結果、瑠璃と薫が写し身の鏡を使って、同じブーツを取得装備する事に。パーティは転移の棒切れで中立エリアに戻りつつ、各々お召し変えや分配などをしてみたり。

赤いブーツはルリルリにはちよっと浮いてる気もするが、既製品

からの装備の変化は本人も嬉しそう。MPこそ増えなかったが、防御の上昇だけでも有り難い。

その他、武器の修理をしたり薬品を買い足したり。

『あつ、そう言えばクエストアイテム……苔付きのレンガを手に入れたんだっけ？』

『あつ、えつと報告は……こっちのNPCだったかな？』

薫の先導で、長い間受けている気のするクエストの報告に出向く一行。アイテムを渡すと、どうやらこれでお終いの様。NPCはお礼と共に、氷の密酒を報酬にくれた。

以後、この薬品も買えるようになったっぽい。

『これって、徐々にMP回復でしたっけ？ 戦闘前に使うと便利ですよねえ、これ！』

『そうなんだよねえ、ちょっと買い足しておこうかな？ 10000ギルは高いけど……』

MPの使用頻度の高い瑠璃は、エーテルと併用出来るこの薬品もストックしておきたいようだ。幸いにも、ここに来てお金の余裕もかなり出て来て懐も温かい。弾美に遠慮するなど後押しされて、イベントの終盤戦に向けてカバンに幾つか放り込む瑠璃。

その間にもパーティ会話で、残り30分程度でどこに行けるかを会議中。クエストエリアをふらつけば、またNMに出会えるかもと言つ意見が薫から出て。それならば、未探索の場所のある月の鍵のエリアへ行こうと言つ話に。

回収してない宝箱も、確かあそこにはあった筈。

『あつたつけ、そんなの？』

『鍵付きの宝箱を、確か見掛けたかな？ 番人がいそうだから、迷子の美井奈ちゃんを引き返す直前に見たよw』

『あゝっ、合同インの時だったですよええ、あの時は迷惑お掛けしましたっ！』

美井奈の迷惑はいつもの事だとの弾美の言葉を、女性陣は華麗にスルー。それじゃあそこに行こうかと、優しい口調で先導されて。次の行き先は、こんな感じで決定となった。

薫がノートを引つ張り出して、ついでに昔の記憶も引つ張り出す。クエ大臣の案内により、パーティは月の鍵のエリア探索へ。廃墟と化した街の下水へと飛び降りて、何故か繋がれて用意されている筏に飛び乗る。

暗い色の下水の流れは結構急で、しかもなかなか岸边に寄り付こうとしない。薫がもうすぐ飛び降りるポイントだと知らせて来て、皆がそのタイミングを計っていると。

言われた通りにスピードが落ちて来て、岸に近付く筏。

全員が飛び降りると、筏はそのまま流れ過ぎて行ってしまった。薫は、この先で満月の鍵を拾ったと言うのだが。どこで使うかは全くの謎だけど、この先に扉があったのは確かである。

ここからは弾美を先頭に、伏兵を見据えて慎重に歩を進めるパーティ。汚れた感じの水溜まりなどが点在していて、細い地下路地は嫌な雰囲気満載だ。

薄汚れた下水道の地下探索は、やがて突き当たりに辿り着いて終了する。以前薫がミイナの視点で見た、紋様の描かれた扉と、鍵付きの宝箱はまだ健在。

『おゝっ、ここかあ。そう言えば、前に見た気もするかなあ？』

『宝箱、まだあるねえ……満月の鍵は、扉の方に使うのかな？』

『合鍵使ってみようか、宝箱の方に?』

瑠璃が宝箱の開錠を試すが、合鍵は合わずに戻って来たとの知らせ。美井奈の持つ満月の鍵で、今度は大扉の鍵を開けに掛かると。こちらはすんなり成功して、新たな道が開ける結果に。

ただし、仕掛けの方も作動したらしく、あちこち変な場所に真っ黒い穴が出現する。宝箱の存在のせいで、襲撃もある程度予想していた一行。戦闘隊形を整えて、不測の事態に備えている。

強化も終了済みで、敵の姿を探すのだが。

突然のつペリとした不気味な死霊顔のモンスターが、パーティの背後のホールから出現して来た。上半身だけ姿を見せて、特殊な形状の大鎌でこちらに斬りつけて来る。

さらに、別の方向からは細長い黒い犬型のモンスターが出現。こちらもヒット&アウェイで、瑠璃に噛み付いた後にさっさと別のホールへと姿を消してしまう。

こんな調子で、8つ位のホールを上手に使う敵のペア。

『なんだっ、モグラ叩きかよっ！ タゲ固定すらさせて貰えないぞっ！』

『美井奈ちゃん、スパーク張って！ 魔法で対処しようっ！』

『そ、そうかつ……足止め系で動きを止める感じかな？ ハズミちやんも《グラビティ》あるしっ』

なる程と、薫と瑠璃の閃きに、自分の魔法を改めてチェックに走るメンバーの面々。それでも素早い敵の動きは、発動の遅い魔法で捕まえる事は難しいのだが。

何度か殴られながら、とうとうミイナの《スパーク》の放電地帯に入った犬をまずは捕獲。そこに弾美の《闇の刺針》が炸裂して、何故か一緒に捕まる死霊顔のモンスター！

美井奈の《スクリユーアロー》で弾き飛ばされた犬から、まずは料理しようとメンバー間の通知がなされ。今度こそ弾美の《グラビティ》で、ホールから離しての捕獲完了っばい。  
こうなったら、薫の《竜巻チャージ》などのスキル技の格好の餌食だ。

それでも無視していた死霊から呪いを受けたり、犬が意外と攻撃力が高かったりと、一筋縄では行かない扉の番人ペア。終いには、ホールから黒い霧が湧き出て、SPが減ってしまったたり毒を受けたりと酷い仕打ち。

ステップを使って、じりじりとホールに逃げ込もうとする黒い犬を、何とか全員で阻止しつつ。全員一丸で体力を削る努力がようやく報われて、何とか1匹目を撃沈。

残りの死霊は美井奈に呪いを掛け、再びホールの中へ。

「わっ、聖水もうあと1個しか無いですよっ！」

「頑張れ美井奈っ、もう1回吹き飛ばしで移動阻止するぞっ！」

今度はどのホールから出て来るかと、パーティみんなで張り込みしつつ。見た目はちょっと間抜けに見えるけれど、張っている方はかなりドキドキな時間が経過する。

ハズミンが張ってたホールから、闇色のロープを纏った死霊が飛び出して来た。大鎌の一撃をブロックしつつ、反撃の一撃。美井奈がそれに合わせるように、吹き飛ばしスキルを使用する。

ところがホールから上半身しか出していない死霊は、美井奈の吹き飛ばし技を頑として拒否してみせる。思わぬ反応だったが、取り敢えずダメージを与える事には成功した。

他のメンバーも、飛び道具やチャージ技で引っ込む前にと殴り掛かる。

戦闘は、終始そんな感じで進んで行った。不意打ち的にこちらもダメージを受けたり、油断していたら魔法での遠隔攻撃で離れたホールから攻撃されてしまったり。

さらには、気付いたら何と自走式の大鎌が3本も追加されていたり。サメの背びれのように地面を走り回って、パーティに足元から斬り付けてダメージを与えて来る。

思わぬ攻撃方法に、悲鳴を上げて逃げ回る後衛陣。

「わっつ、ちよつと何ですかコレッ！ 変な生き物に攻撃受けてますよっ！」

「鎌の刃みたいだねっ……足元注意だけど、まずは敵をやっつけなにとー！」

「もうすぐ半分削れる……っつて、うわっ！」

油断していた訳では無いが、タゲを取っていた弾美に3方向からの特殊攻撃が炸裂。スクリューの回転に巻き込まれたような、強烈な衝撃がハズミンを襲う。

大鎌の派手な特殊攻撃に、ハズミンのHPは一気に半減。メンバーが慌ててフォローに入るが、程なく死霊はホールの中へ。一気に畳み込めない敵の仕様に、苛立ちも極まって来る。

気付けば戦場に異変が。敵の移動用のホールの数が、半分位に減って行っている。そして死霊のHPが、その分回復しているようだ。穴の数が減る度に、強烈な鎌の特殊技が炸裂する。

弾美は気迫のステップで、後半それを避けまくる。

結果的には、移動用のホールが消えてくれてパーティは大助かり。最後はストレス発散と、怒涛の追い込みで敵に息つく暇も無い程のスキル技のラッシュを敢行。

時間の掛かった戦闘は、ようやくの終焉を迎えたようだ。そして、死霊と犬からそれぞれ宝箱の鍵のドロップ。その他にも使えそうな



装備や金のメダルや闇の術書などがちらほら。

この戦闘で、美井奈が31へとレベルアップした。純粹に喜ぶ少女に、皆がおめでとうの言葉を掛ける。30を越えてレベルも上がり難くなったと、美井奈の感想も愚痴っぽい。

犬の落とした首輪は、なかなかの性能で弾美が貰う事に。

番人の首輪 攻撃力+3、腕力+2、体力+3、防+8

『大鎌とか毛皮は売ってもいいよね？ でも、どうして鍵が2つ出たのかなあ？』

『もう1個、どこかに宝箱があるんですかね？ 取り敢えず、その宝箱を開けましょう！』

美井奈の言う宝箱は、扉の隣にこれ見よがしに置かれていたもの。先ほど瑠璃が合鍵での解錠に失敗して、中身がとも気になっていた。再び瑠璃が近付いて開けてみると、昨日に続いて《複合技の書：両手鎌》を入手出来た。

興奮に湧くパーティは、そのままの勢いで扉を潜って中に入る。襲撃を用心していたが、敵の姿は無いようだ。中は簡単に3つの部屋に区切られていて、一番小さい部屋には魔方陣が1つ。

魔方陣は、どうやら脱出用の物らしい。

もう2つは、下にと続く階段のある部屋と、仕掛けの設置されているちよつと広い部屋。仕掛けの内容は四角いレールの枠の中心に、ポツンと宝箱が設置されていると言うもの。

レールは稼動していて、全部で外中内と3周分ある。その間は段差になっていて、レールに乗らないと中心まで辿り着けそうに無い。外周のレールと内周のレールは、ランダムに渡された短いレールで繋がれていた。

上から見ると、宝箱の乗った四角い床を、3周分のレールの枠が取り巻いている感じだ。

『これは……何だか、あみだクジみたいな仕掛けですねえ？』  
『あゝっ、言われてみればそんな感じw 4つの面から入れるけど、意味はあるのかな？』  
『中心の宝箱に、外れのクジの人は辿り着けないようになってるのかなあ？』

試してみますと勇ましく、美井奈が何故か左の面からの突入を敢行。美井奈のキャラは自分の意志とは無関係に、レールの動き通りに次第に中心へと運ばれて行く。

レールを外れようと動き回っても、それは完全に無理なよう。レールの上で色々試すのだが、結局は予定通りに中心に辿り着くと言うか流れ着いたミイナだったのだけれども。

そこではたと立ち止まって、それ以上進もうとしない。

『あゝっ、これは……私の丁度左が当たりのコースですかねえ？』

私、これ以上進むと魔方陣踏んじゃいます。この魔方陣、どこに繋がってるんでしょうか？』

『なるほど、外れはやっぱり宝箱を開けないのか。ってか、見たところバリバリ鍵付きだから、鍵を持つてる瑠璃じゃないと意味無いなっw』

『あれっ、今……レールの流れの向きが変わったような？』

言われてみればその通り。内側から順に逆流れとなって、意地悪にも解答者を混乱させて来る。行き場のない美井奈は、取り敢えず前方の小さな魔方陣を踏んづけてみる事に。

有り難い事に、パーティのすぐ近くに転移で戻って来れた美井奈。それで安心した雷娘は、もう一度トライしてみますと、今度は右側の面から突入したのだが。

世の中そんなに甘くはない。外周レールを1周して、ポイツと放

り出されるミイナ。

『あつはっはっw 美井奈、お前は人気の無い回転寿司のネタ皿かよっw』

『うっ……弾美君、上手い事言っつw』

『何ですかっ、二人ともっ！ 私の尊い自己犠牲でのデータ採取を笑わないで下さいよっ！』

笑われている美井奈を尻目に、今度は瑠璃が移動に挑戦。反対側まで回り込んで、何かをじっと待っている様子なのだが。再度のレールの流れの逆転は、まさに読み通り。

素早くレールに乗ったルリルリは、弾かれる事も無く中心の宝箱の乗った床までまっしぐら。大人しくオプシヨンの人形が追従する姿は、傍目にはちょっと笑える見世物かも。

何はともあれ、開錠のログと共にパーティは命のロウソクをゲット。

『おおっ、美井奈の尊い犠牲で、メダル3つ分のアイテムゲットだよw』

『その言い方は変ですよっ！ 何で笑うんですかっ！』

『本当に美井奈ちゃんのお陰だよ、有り難う』

転移の魔方陣で戻って来ながら、瑠璃が素直なお礼を口にする。

それだけで、美井奈の機嫌は安直に元通りに。次はどこに進むのかと、未知のエリアをうろちよる動き回る。

弾美が気を引き締めると口を尖らせつつ、最後の部屋から続く下り階段を全員で臨む事に。道は所々ツララが出来ていて、何だかひんやりとした空気が漂って来る感じだ。

階段を下り切ると、そこは円形のドーム部屋だった。ツララだらけなのは、途中の通路と一緒に。中央の氷の塊にはポイントが存在し、

何と氷のトリガーをトレード出来るようになっていた。  
全く手掛かりの無かった、氷の呼び水の使用場所らしい。

ここがそうだったのかと、弾美はちよつと呆れた感じ。ノーヒントだったのかヒントを見逃していたのか分からないが、とにかく溜め込んだトリガーを消費出来る事は嬉しい知らせだ。

そう思っていたのだが、何とトリガー使用前に全員の2時間縛りが発動。今日は色々、あちこち移動などの時間が多かったせいで、交戦率の少ない割に早く時間切れとなったようだ。

弾美は一言、神水を使おうと全員に指示。引き返す気は皆無らしい。

『ここまでまた来る時間が勿体無いからな。さつと倒して、今日は終わるぞ〜っ！』

『了解、最後気合入れて行こうっ！』

弾美と薫の気合入れに乗っかる形で、瑠璃が勢い良くトリガー投入を敢行する。氷のトリガーはポイントに吸い込まれ、辺りに一層の冷気が立ち始め始める。

パーティの前方に、まずは変化が現れた。人が入れそうな大きさのアイスドームが地下からズンと顔を出し、1部開いた穴からペンギンの群れが飛び出して来て。

どこかで見た演出だと思ったら、流水装備を取得した裏エリアがこんな感じだった。さ程の驚きも無く、即座に対応するパーティ。

薫の炎のプレス攻撃など、相手の弱点の範囲技が炸裂する。

雑魚仕様のペンギン達は、ひとたまりも無く消失。

次は何だと構える一行だが、小山の氷のドームの新たな変化には呆気に取られる思い。氷のレンガで出来ているドームの隙間から冷気が噴出。視界を一瞬遮った後に出て来た物は、ドームの頂上に背

凭れも豪華な椅子と、そこに女王のように座る氷の精霊。

頂上から麓までの階段も氷で出来上がっているが、氷の女王は降りて来る気はないようだ。護衛の2体の騎士も氷の彫像仕様で、パーティを悠然と見下ろしている。

メインディッシュの登場に、一同のテンションも上がる。

強化も補助魔法も、全て掛け終わっている前衛陣。向こうが降りて来ないのならこちらからと、短い階段を駆け上って行く。氷の騎士も反応したが、女王の魔法のブリザードも超強烈。

それでも乱戦になれば、武器が届く範囲の敵に強烈な一撃を見舞うのに躊躇いは無い。まずは立ちほだかる氷の騎士からと、弾美と薫で1体ずつのタゲ取り。

弾美は椅子に座ったままの女王にも、魔法でちょっかいを掛けてみる。後衛に手を出させないためにタゲを取ったのは良いが、天井からのツララ撃は結構なダメージ。

薫のタゲを取っている騎士に、まずは攻撃を集中。数減らしは途中までは順調に進む。

『わっ、氷の壁に攻撃を塞がれたっ！ 弾美君、そっちは平気？』

『こっちは平気だけど……これは騎士の特殊能力だなぁ。女王の魔法がウザいけど、なかなか止められないから痛いっ！』

『弓矢が届きませんっ！ その壁、何とかして下さいっ！』

鉄壁の氷の防御の出現に、追い込みを阻止されたパーティ。氷の壁を壊せば済む問題なのだが、これがなかなかHPが高くて厄介。その間、騎士は回復しつつも魔法攻撃で敵に対峙する。

回復されては敵わないと、弾美が《トルネードスピン》で氷の壁を壊すお手伝いに参加する。さらに薫の《貫通撃》で、邪魔な壁は思ったよりはスムーズに破壊される運びに。

再び姿を現した騎士に、美井奈の渾身の連続スキル技。嫌な特殊

技を持つ敵は、さつさと倒してしまいたい感バリバリなのが。タゲもついでに取ってしまい、氷の階段を降りて行く騎士。

距離が空いたのを見計らって、薫の《竜巻チャージ》が炸裂。

『いい感じっ！ 瑠璃ちゃん、追撃お願いっ！』

『ほいほいっつ、連続スキル技行くよっつ！』

範囲魔法を警戒して、後衛で回復支援していた瑠璃だったけど。

美井奈が燻し出した騎士を相手に、溜まっていたSPで追い込みのスキル技を見舞う。さらには強化した《ウォーターピア》で、最初の1体目の撃破に成功。

喜ぶ間もなく、単身前線を維持していた弾美のピンチに慌てる女性陣。HPが半分を切っているのは、氷の女王の横槍的な魔法攻撃の厳しさゆえらしいのだが。

いつの間にか豪華な椅子から立ち上がっている氷の女王は、やる気モード全開のよう。ポジションの使用で、ハズミンは何とか魔法での猛攻と騎士の攻撃を凌いでいる状態。

さつきと同じパターンで、美井奈が騎士のタゲを強引に取りに掛かる。同時に瑠璃の回復魔法が弾美を援護。ところがHPが半減した途端に、やっぱり騎士は氷の壁を作り上げて、その場でその身をガードしてしまう。

当ての外れたパーティは、氷の壁に向かって絶叫してみたり。

とにかくタゲの外れた弾美は、氷の壁にスキル技を叩き込んだ後に、すぐさま女王に密着に掛かる。護衛の氷の騎士を女性陣に任せ、厄介な魔法を何とか防ごうと必死。

残った騎士を任された女性陣は、やっぱり邪魔な氷の壁から崩しに掛かるしかない訳で。薫が近付いて殴り掛かり、SPを溜め込みつつの壁の撤去作業に大わらわ。

もう一度、先ほどのコンビでの畳み掛けを使用する気満々である。

氷の女王は、接近戦での攻撃力もかなりのものだった。てつきり杖か何かを手持ちの武器だと思っただが、特殊な形状のダガーを手にしての二刀流で、前衛能力もバッチリ備えている。

追加の氷ダメージも侮れない上、弾美のようなスピンの斬り付け技も持っている始末。それを一気に喰らうと、弾美と言えどもHPは危険領域に落ち込んでしまう。

ひたすら慎重に、ボスの相手をする弾美。何しろ2時間縛りの衰弱もあるのだ。

「やった〜っ、護衛の残りも倒したよ、弾美君！　すぐにカバーに向かうねっ！」

「オツケ〜、瑠璃も前衛でボスの魔法を潰してくれっ！　攻撃だけじゃ、なかなか止まらないっ！」

「ほいほい〜っ、氷の魔法は単体も範囲も痛いもんね〜」

瑠璃の言葉は、後衛をやっているだけあつて的を得た本音。氷系は全属性の中で、一番強烈な魔法も存在するとの評判なのだ。瑠璃も、メイン世界では幾つかお世話になっている。

前衛を三人に増やした結果、魔法のダメージは軽減出来たのは目論見通り。心配していた範囲魔法は、今の所なし。美井奈も張り切っつて、後ろから遠隔での削りに熱を入れている。

ただし、前衛は殴る度に反撃のダメージを喰らって大変な目に。魔女の氷のヴェール魔法は、ダメージを軽減してくれる上、一定で殴った者に麻痺効果を与えるのだ。

その結果《Z斬り》で止める予定の、敵の範囲魔法が通ってしまった。う目に。

今度は下からの氷のツララの出現に、パーティはパニック状態。串刺しで殴りのスピードは半減、移動も不可となってしまっている。

こんな凶悪な魔法も、氷スキルならでは。

HPが半減している氷の女王に、容赦と言う文字は無い。さらに範囲魔法のブリザードが炸裂し、総HP量の少ない瑠璃ばかりか、メインでタゲを取っている弾美も大ピンチ。

ただ一人、HPの満タンの美井奈は、自分の回復量では全員救えないと思ったようだ。《フェアリーウィッシュ》からの連続スキル技で、一旦ボスのタゲを取りに掛かる。

敵のHPを減らしつつ、パーティの安全を確保する。これぞ美井奈流？

雷少女の目論みは、何とか効を奏した様だ。魔法の標準が、ミイナに切り替わっているのがその証拠。さらに《スクリューアロー》で無理やり移動させ、強引に魔法を止める美井奈。

なかなか様になっていく遠隔のスペシャリスト振り。こちらも負けてはいられないと、瑠璃が《エンジェルリング》でパーティに掛かっている弱体を取り外しに掛かる。

MPは氷の密酒と背後の人形で、かなり余裕がある瑠璃である。さらに《波紋ヒール》で、皆の体力を回復。ここで一気に決めないと、時間縛りの弱体がつくなったらお終いだ。

パーティー丸で、必死の追い込み。まずは薫の《炎獄》入りの《貫通撃》から。

怒涛の追い込みも、ルリルリの天使魔法の加護の元ならば、反撃の麻痺効果も怖くない。弾美の連続スキルも加わると、氷の女王のHPもようやく3割を切って行く。

分厚い氷の壁を出現させてからの、再度のツララ金縛り技が、女王の最後の悪あがき。瑠璃の天使魔法のお陰で、攻撃速度の減少は免れているパーティは。邪魔な壁を壊したSPを利用しての、最後のスキル技ラッシュを敢行する。

最近では瑠璃がエーテルを使い切る事態も、そう頻繁には訪れない



のだけれど。回復と天使魔法に追われまくった瑠璃は、奇麗にエーテルを使い切る始末だったり。

その分、倒した後の見返りのドロップには、一同満足の様子。

『勝った〜っ！ 時間縛りがきついせいかなっ、この苦戦の理由はっ？』

『強かったよねえ〜！ 女王の魔法が凄くこっちを削って来るから、回復が大変だった〜』

『氷の壁がチョー邪魔でしたねえ……私の光球の方が、動ける分性能は良いですけどっ！』

何を張り合ってるのか分からないが、勝ち誇った感じの美井奈のコメント。勝利の余韻もそこそこに、パーティは中立エリアに転移の棒切れで飛んで返る羽目に。

明日は合同インだからと、面倒な分配などは明日に回す事に決定する。何より、今夜は既に10時半に近い時間。いつもより少々押しているため、皆で早々に落ちようとの話し合い。

明日は第2関門クリアだと、弾美が最後に目標を示唆する。

『明日も一緒に頑張ろうね〜っ、お休み〜』

『お休みなさい〜っ、また明日〜！』

『明日は、いつも通りに合流しますね〜っ』

お休みの挨拶を口にして、順次落ちて行くパーティメンバー達。今日の激しい戦闘も、どこ吹く風な感じである。あの位で弱音を吐いていたなら、冒険者は務まらない。

ネットを抜けて電源を落とすと、画面はすぐに空虚な暗闇へと変わってしまう。それでも自分達のキャラは、確かにこの向こう側に存在するのだ。仮初の命と言っなかれ、少なくとも繋がっている間だけは命の息吹を感じる弾美である。

魔女を倒すと言う使命を帯びて、やる気満々の状態で。

それでも通信を切った今は、向こうも同じように戦闘に疲れた肉体を癒しているのだろう。パーティメンバーと労わりの声を掛け合いなから、今日も何事も無かった事に感謝しつつ。

血肉の通わないデータのみの存在だとしても、ついそんな想像をしてしまう。

何のために強くなる？ 膨大なデータの海に、もしもそんな問い掛けを投げかけたならば。ただ、己の存在を知らしめる為に。皆との繋がりを得る為に。

そんな答えが返って来そうな、柔らかい画面の中の闇だった。

## 22 攻略失敗と難関突破と（前書き）

今日も暑かったみたいですが、高校野球の県予選を観ながら何となく和んでみたりして。もうこんな季節なんだなあって思いつつも、勝負の世界の厳しさを垣間見た感じ？

勝って喜ぶ者もいれば、負けて悔しさにまみれる者もいる。自分の地元は広島なんですけど、ベスト4の中に印象深いチームと言うか、高校の名前がありました。

一昨年ですか、甲子園の初戦に2度も雨天再試合を言い渡されて、結局は一回戦負けをしたチームです。雨で流れたその2試合は、両方とも途中までは有利に試合を進めていて。そのまま行けば、二回戦に勝ち残っていたというのに。

何という、運命の翻弄かと思っただけです。

現実にもたまにありますよね、小説よりも奇怪なこんなドラマ。特にスポーツは筋書きの無いドラマって言われているくらいで、思わぬ終焉に驚かされる事も結構あります。

高校野球なんて、特にプロには無い意外性に彩られる事も多くって面白いです。今年は被災地の県の代表校の応援、みんなで頑張ります！

もちろん、地元の県の応援もですが（笑）。

さてさて、ようやく未投稿の章の掲載にこぎつける事が出来て何よりです。完全版の方を、この22章からでも良かったのですが、一つの投稿作品としての見栄えが良くないかなって思ってしまったって。そんな今回の物語ですが、まあ一つの節目を迎えたと言えなくも無い感じですか。相変わらず美井奈はトラブルメーカーだし、それでもパーティの仲はこれ以上無いくらいに上々だし（笑）。

弾美と瑠璃の仲も……まあそれは、置いておくとして（笑）。

修行の塔に関しては、もうちょっと良いアイデアをひねり出したかったのが本音だったりします。個人的には、あんまりソロ強化の必要性と云うか、楽しみが見出せなかつたせいかも。

そんな今回の物語ですが、取り敢えずお気楽にお楽しみ下さい^^

## 22 攻略失敗と難関突破と

小さな公園内に点在する、数少ない遊具は全部コンクリ製だった。隅っこに設置されたベンチも同様で、お手入れ要らずで管理の点では有り難いのだろうが。

その代わり、遊具の種類は本当に限られて来る。飛び石だとか半円の子供がかがんで入れるトンネルだとか、ボールを投げて遊べるペンキで印のついた壁だとか。

50センチ位の大きさの、形がともユニークな石像も、石が混じったコンクリ製。モデルは恐らく動物なのだろうが、誰もその正体が分からない事で町内では有名である。弾美は小さい頃はサイだと思っていたが、最近はカバに見えるように。

瑠璃は一貫して、アルマジロが丸まって昼寝している姿だと言いつ張っているが。

「自分の尻尾に噛み付いているワニじゃないですか？ 私はそんな感じに見えますけど」

「うーん、恐竜のウンチだって言ってた子供よりは建設的な意見だな。薫っちは何に見える？」

「そうねえ……この突起が曲者なのよねえ。美井奈ちゃんはこれをワニの背びれだと思ってるんでしょ？」

弾美はサイの角か、それともカバの歯だと思つと譲るつもりは無い構え。薫は考えあぐねた様子で、トリックアートの一種ではないかと、なる程な感じの大人の意見を披露する。

誰かの意見が本当ではなく、わざと何にでも見えるように作られている訳だ。それが外れだった場合は、ちよつと悲しい気もするが。そんな会話に参加していない瑠璃は、ひたすら眠た気。

昨日の深夜の読書が、ちよつと度を過ぎたよう。

学校はとうに終わった時間。いつも通りに放課後に、パーティが集合を果たしての散歩途中なのだけ。頑張って授業を受けた後のダメージで、気が緩みっぱなしの瑠璃である。

心配そうな薫をよそに、弾美は自業自得だと素っ気無い態度。美井奈は自分の元気を分けるべく、後ろから抱き付いてはしゃいだ声をあげたりするのだが。

弾美の気付けが一番効いたよう。犬達に命じて、顔中舐め回させたのだ。

「わっぷ……ひあつ、やめて〜っ」

「あはは、私も確かに、これやられるとはつきり目覚めるなあ！」

「な、何で二匹とも、こんなに素直にお兄さんの命令に従うんでしよう？」

従ったんじゃないかと、これは犬達のスキンシップだと、弾美は簡単にネタばらし。自分はほぼ毎日その洗礼を受けていると、薫も実に楽しげに瑠璃の惨状を見て笑う。

顔中べちゃべちゃの瑠璃は、完全に意識の覚醒には成功したようだったが。トボトボと水飲み場に顔を洗いに歩き出すと、犬達もご相伴に預かるうとついて来る素振り。

それを見て、また笑い出す弾美。

美井奈がようやく1冊読み終えたと、図書館で借りた本の感想を喋り始める。童話の話は短くて助かると、読書家ビギナーの少女は本当に素直な本音を述べてみたり。

最初はそういう短編本からが良いと、瑠璃が戻って来て会話に参加。ぼうつとしていたら、また何をされるか分からないと思ったのか、ちよっと顔に警戒がにじみ出ている。

犬達は悪びれもせず、ちよこちよこと瑠璃の周囲を走り回ってい

る。

散歩の帰り道は、美井奈が犬達の手綱を持たされる事に。運動した後のテンションなら御しやすいだろうと、毎回その役を自ら買って出るのだけれど。

二匹の大型犬のパワーは侮れず、弾美が付きつきりでペース管理をするのも毎度の事。他の犬や動物とすれ違う時など、見張っておかないと非常に危険なのだ。

そんな二人に少し遅れて、瑠璃と薫が趣味の話に興じながらつき従うのもいつもの事。

そんな感じで、ゲーム前のコミュニケーションを行う一行。意識は特にしていないが、それがスムーズなゲーム中の意思疎通に繋がっているとも言える。

逆に、ゲーム前にこれ程ゲームの話をしていないのも珍しいパーティーかも。

ハズミンの成長は、前回の冒険では残念ながらこれと言って無しの結果に。武器や防具の変更も特に無く、首装備の変更による攻撃力と防御力の、少しだけの上昇のみ。

魔法やスキルの追加取得も無かったので、本当に取り立てて操作性の変更は無し。レベルも30まで上がって来ると、そんなに劇的な変化も望めないのは確かである。

毎日使い込んでいるキャラなので、特に操作性に文句は無い。欲を言えば、強力なタゲ取りとか色々足りない能力も出て来るのだが、それは仕方の無いところ。

他のキャラとの兼ね合いで、補って行くしかないのだろう。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：32

取得スキル : 片手剣66《攻撃力アップ1》 《二段斬り》

《複・トルネードスピン》

《下段斬り》 《種族特性

吸収》 《攻撃力アップ2》

《上段斬り》 《複・ドラ

ゴニックフロウ》

: 闇73《SPヒール》 《シャドータッチ

》 《闇の断罪》

《グラビティ》 《闇の腐食》 《

闇の刺針》 《ダーククロス》

: 竜10《竜人化》 : 風23《風鈴》

《風の鞭》

: 土25《クラック》 《石つぶて》

種族スキル : 闇32《敵感知》 《影走り》 《SPアップ+

10%》

: 土10《防御力アップ+10%》

装備 : 武器 破邪の剣 攻撃力+21、HP+20、耐呪い

効果《耐久15/15》

: 盾 龍鱗の盾 耐ブレス効果、防+18《耐久

15/15》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+15

: 首 番人の首輪 攻撃力+3、腕力+2、体力

+3、防+8

: 耳1 黒虫のピアス 闇スキル+3、SP+10



%、防+4  
     : 耳2      白豹のピアス    器用度+3、HP+10、  
 落下ダメージ減、防+5  
     : 胴      暗塊の鎧    闇スキル+5、土スキル+5、  
 HP+25、防+25  
     : 腕輪    暗塊の腕輪    闇スキル+5、土スキル+5、  
 HP+25、防+15  
     : 指輪1    サファイアの指輪    腕力+3、SP+10%、  
 防+5  
     : 指輪2    闇の特級リング    闇スキル+4、SP+10  
 %、SP上昇率UP、防+4  
     : 背      砂嵐のマント    風スキル+3、敏捷度+4、  
 防+8  
     : 腰      闇のベルト    ポケット+4、闇スキル+3、  
 SP+10%、防+10  
     : 両脚    魔人の下衣改    攻撃力+5、体力+3、腕力  
 +3、防+15  
     : 両足    暗塊のブーツ    闇スキル+5、土スキル+  
 5、HP+25、防+10

魔法やスキルが結構増えて来て、その分使いこなせていないモノも出て来ており、ちよつと不安のあるルリルリだけだ。MPも順調に増えて来ていて、特に文句は無い成長振りである。

盾とブーツの交換で、防御力やグラフィックも様変わりを見せた。魔法戦士も、やっぱり防御力はあった方が良いに決まっている。それより、装備の上下がそれぞれ氷と炎の意匠なので、ややちぐはぐ感はないが仕方が無い。

本人的には、バッチグーである。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：32  
取得スキル : 細剣56《二段突き》 《クリティカル1》 《  
複・アイススラッシュ》

《麻痺撃》 《幻惑の舞い》

《Z斬り》

: 水70 《ヒール》 《ウォーター

シエル》 《ウォータースパア》

《ウォーターミラー》 《波紋ヒール》

《アシッドブレス》

《水の分身》

: 光30 《光属性付与》 《エンジェルリ

ング》 《ライトヒール》

: 氷43 《魔女の囁き》 《魔女の足止め》

《魔女の接吻》 《氷の防御》

種族スキル : 水32 《魔法回復量UP+10%》 《水上移動

》 《MP量+10%》

装備 : 武器 戦闘ネコの細剣 攻撃力+15、敏捷度+2、  
MP+8 《耐久12/12》

: 盾 氷の盾 知力+4、MP+20、防+14

《耐久12/12》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+

5、MP+25、防+8

: 首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP

+10%、防+5

: 耳1 天使のピアス 光スキル+3、知力+2、

MP+8、防+3

: 耳2 流水のイヤリング 水スキル+5、氷スキ

ル + 5、MP + 25、防 + 5  
     : 胴 流水の鎧 水スキル + 5、氷スキル + 5、  
 MP + 25、防 + 18  
     : 腕輪 バトルグローブ 攻撃力 + 3、HP + 8、防  
 + 12  
     : 指輪 1 光の特級リング 光スキル + 4、HP + 15、  
 攻撃距離 + 4%、防 + 4  
     : 指輪 2 プラチナの指輪改 腕力 + 4、HP + 20、  
 攻撃速度UP、防 + 8  
     : 背 精霊封入の人形 HP + 50、MP + 50、  
 SP + 10%、防 + 1  
     : 腰 複合素材のベルト改 ポケット + 4、器用  
 度 + 5、MP + 13、防 + 11  
     : 両脚 流水のスカート 水スキル + 5、氷スキル +  
 5、MP + 25、防 + 10  
     : 両足 炎獄のブーツ 炎スキル + 2、腕力 + 2、  
 HP + 10、防 + 12

レベルの上昇で、弓術スキルが区切りを越えたミイナ。それによ  
 って《影縫い》という新スキル技を覚えたのだが。本人は、ダメー  
 ジがほとんど出ない技だと不満顔。  
 スタン用の技なので元々そういう仕様なのだが、美井奈のお気には  
 召さない様子。パーティで一番派手指向なのは、実はこの雷娘だ  
 ったりするのもも知れない。  
 その破壊力に振り回されている、操作性の難しいキャラに育って  
 いるのには違いない。

名前: ミイナ 属性: 雷 レベル: 31  
 取得スキル : 弓術50 《みだれ撃ち》 《近距離ショット1》

《攻撃速度UP1》

《貫通撃》 《複・スクリユア

ロー》 《影縫い》

：光50《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》

《フェアリーウィッシュ》

《フェアリーヴェール》

：風24《風の陣》 《風の癒し》 ：水

10《ヒール》

：雷31《俊敏付加》 《俊足付加》 《ス

パーク》

種族スキル ：雷31《攻撃速度UP+3%》 《雷精招来》

《落下ダメージ減》

装備 ：武器 神樹の長杖 攻撃力+25、知力+5、MP+

28《耐久14/14》

：遠隔 雷鳴の弓矢改 攻撃力+20、器用度+5、

敏捷度+5《耐久14/14》

：筒 朱塗りの矢束 攻撃力+20 追加炎ダメ

ー  
ジ

：頭 妖精のクラウン 光スキル+4、風スキル

+4、SP+10%、防御+12

：首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP

+10%、防+5

：耳1 白蛍のピアス 光スキル+3、HP+25、

防+9

：耳2 陰陽ピアス 精神力+5、知力+5、MP

+15、防+6

：胸 妖精のドレス 光スキル+4、風スキル+

4、MP+20、防御+20

:腕輪 星人の腕輪 光スキル+2、闇スキル+3、  
 M P + 8、防+8  
 :指輪1 雷の特級リング 雷スキル+4、器用度+4、  
 攻撃速度UP、防+4  
 :指輪2 サファイアの指輪 腕力+3、S P + 10%、  
 防+5  
 :腰 複合素材のベルト ポケット+4、器用度  
 +4、M P + 8、防+6  
 :背 白豹のマント 雷スキル+4、器用度+4、  
 M P + 10、防+10  
 :両脚 妖精のスカート ポケット+2、光スキル+  
 3、風スキル+3、防御+12  
 :両足 戦闘ネコの長靴 敏捷度+2、M P + 6、  
 防+10

カオルもヘレベルが上がって、基本性能も上昇を見せたが、スキル技や魔法の取得は無し。装備で迅速シリーズのセットを崩して、ブーツを取り替えた程度の変更のみ。

自分の属性とは違う炎スキルのこれ程の上昇は、本人にも予定外だったのだが。前衛をこなす身としては相性の良い魔法が多く、なかなか使い勝手も良い様子。

この調子で、前衛の一角として使命を全うしたいと願う薫であった。

名前:カオル 属性:風 レベル:31  
 取得スキル :長槍66《二段突き》 《攻撃力アップ1》 《脚払い》 《石突き撃》

《複・竜巻チャージ》

《クリティカル1》 《貫通撃》

《レイジング》

《炎獄》

：炎43《炎属性付与》

《炎のブレス》

：雷20《俊敏付加》

《パラライズ》

：

風20《風鈴》

《風の陣》

種族スキル

：風31《回避速度UP+3%》

《魔法詠唱速度

+6%》《移動速度UP》

装備

：武器

赤龍の大槍

攻撃力+32《耐久15/15》

：筒

絹の腰袋

ポケット+4、HP+10、S

P+10%

：頭

迅速の兜

炎スキル+4、雷スキル+4、

器用度+2、防+7

：首

進みがちな懐中時計改

SP+15%、攻

撃速度UP、防+8

：耳1

サファイアのピアス

腕力+2、SP+1

0%、防+3

：耳2

銀のピアス

器用度+2、HP+4、防+2

：胸

迅速の鎧

炎スキル+5、雷スキル+5、

腕力+5、防+20

：腕輪

迅速の腕輪

炎スキル+4、雷スキル+4、

腕力+2、防+7

：指輪1

迅速の指輪

炎スキル+3、雷スキル+3、

防+4

：指輪2

蝶柄の指輪

器用度+4、体力+4、HP+

12、防+5

：腰

獅子王のベルト

ポケット+2、攻撃力+

4、HP+15、防+8

：背

迅速のマント

炎スキル+4、雷スキル+

4、防+7

：両脚

朱色の袴

ポケット+2、精神力+5、MP

+20、防御+12

：両足

炎獄のブーツ

炎スキル+2、腕力+2、

HP+10、防+12

「影縫いってスキル技、レベル上がって覚えたんですけど……あれはダメージ少ないですねえ」

「アホ、それは敵の特殊攻撃を防ぐスタン技だ。離れた場所から相手の魔法や技を防げるから、かなり便利んだけど……果たして美井奈に使いこなせるか？」

そうだったのかと、ようやく納得顔の少女。弾美に昔同じような事を質問して、同じように呆れられた過去を思い出して、瑠璃はちよっと微笑ましくなってみたり。

急激な戦法の変更は、かえって混乱を招くかもと弾美は少し思案顔。美井奈にあれこれ押し付けた拳句、思い切りの良さを消してしまっただけは逆効果である。結局は、スキル潰しは引き続き瑠璃が背負う事に決まったようだ。

縁の下キャラはルリルリのままで、継続される気配のよう。

ネット接続の最中に、そんな作戦会議を行いながら。昨日までの冒険の過程を思い出そうと、それぞれが気軽に喋りしながら、試行錯誤を繰り返している感じだ。

キャラを見ればある程度思い出すのだが、ゲームを始めてしまう前にしておくべき事も多々あるのも本当。覚えただけのスキルの発表などは、積極的にしておくべし。

それによって、パーティ戦術に変更があるかも知れないからだ。

「それはそうと、金のメダルがまた増えて来たかなあ？ 昨日だけで6枚も取れたよ」

「昨日の最後の、氷のトリガーの敵のドロップはいいのあったか？」  
「うん、ヴェールが筒の部位の装備なんだけど、氷スキル+5なのでも、腰袋を取るとポケットが減るから交換するかは迷い中」

「また例の手で、スキル上げで使う手もあるな。瑠璃が持つておけよ」

最後の氷の女王とその護衛のドロップは、金のメダルや氷の術書などの普通のアイテムの他にも。氷のダガーや薄氷のヴェール、氷の盾などの高性能装備も多数存在した。

盾は瑠璃が貰い、ヴェールもスキル上げに使う予定。

薄氷のヴェール 氷スキル+5、知力+4、MP+20

氷の盾 知力+4、MP+20、防+14 《耐久12/12》

昨日のアイテムを分配などしつつ、武器の修理や薬品の補充などにお金を掛ける一行。瑠璃がお金の勘定を持ったり、まるでお母さん役のようなのは最近では毎度の事。

いらぬ複合書売ったお金が余って来ているので、普段よりも余計に薬品類を補充に掛かってても平気である。それと言うのも、今日は最後の難関が待ち受けているとの話だから。

知り合いのパーティーからも、散々このエリアの噂は聞いているメンバーである。ここでは軒並み1度か2度は、失敗していると報告が上がっているのだ。その情報に一番びびっているのは、実は美井奈だったりする。

次第に画面の前で、緊張で勢いを減じて行く少女。

「美井奈ちゃん、あんまり緊張し過ぎないで。所詮はスイッチ見つけて、押すだけなんだから」



「そうだよねえ、敵をぱつと倒すか無視しちゃえば、それ程時間は取られないよ」

「うちのパーティには、俺と瑠璃の足止め魔法があるからな。他のパーティよりは有利かも」

「そうそう、後は美井奈ちゃんの俊足魔法もあるしねえ！ あんまり固く考えないでいいかも？」

年長の薫などは、場の空気を和ませようと案外お気楽な口調なのが。最後のイベントエリアの前に到達すると、やっぱり緊張が身体を支配して行くのは皆一緒なのだろう。

張り紙を読んでみると、ここは1部屋15分制限らしい。前回と同じづくりならば、恐らく4部屋存在する筈だ。5分の時間縮小がどこまでマイナスに作用するかが肝となるかも。

それは充分承知なのだが……キャラが時には勝手に動くのも、ゲームならではの事。

突入して最初に目に付いたのは、3段目を勝手に動き回る青い木箱と、木製人形の敵の群れ。いきなりの戦線の出来上がりに、パーティはちよつと慌てながらも。

弾美を中心に前線の盾を張ってしまえば、弱った敵から美井奈が片付けて行くのはいつものパターンである。敵の群れにはボス級が2体混じっているようで、初っ端から苦戦の一行。

倒し終わった時には、5分の時間経過とお助けアイテムのドロップが多数。

「いきなりの戦闘はいいとして、強い敵が混じってたなあ……上はどうなってる？」

「上には、ボスはいないかな？ 代わりに動く木箱が2つあるけど……ああ、これ使えば向こうに渡れるみたいだよ？」

「時間が少ないのに、初の仕掛けはちよつと怖いねえ……信用して

もいいのかしら？」

疑心暗鬼の薫の心配も、もつともではあるのだけれど。それを使わないと、お助けアイテム3つは使わないと向こう側には渡れない仕組みのようだと言璃が調べて報告して来る。

反対側に、スイッチは2つ。どうにかして、二人は移動しないとクリア出来ない。

その3段目に上るまでの道を作りながら、茶色の木箱の仕掛けにでんてこ舞いの一行。相変わらず、爆発したり木製の敵が出現したりで、大切な時間が切り取られて行く。

一気に3段目までの道を作れたのは良いが、スイッチが1つ見付からない。妖精の反応が無いところを見ると、どうやらまた物陰かどこかに隠れているようなのだが。

中央の壊せる木箱の山が怪しいと、それを壊し出すメンバー達。念の為に、言璃のみ反対側の捜査に向かう事に。恐る恐る動く木箱に乗るが、今の所不都合は無いようだ。10分はとうに過ぎており、焦り始めるパーティ。

そんな中、ようやく壊した木箱の1つから、推測通りスイッチ出現。

「よっし、4つ目ゲット！ 押せる台確保しろっ！」

「その階段付き木箱、壊さないで良かったあ！ 私がこれ受け持つから、弾美君が言璃ちゃんの方お願いっ！」

「了解っ！ じゃあ、美井奈がこの上のスイッチな……おおうっ、後2分かっ！」

リアルな残り時間を耳にして、パーティ内にさらに焦りの色が芽生えてしまうけど。それでも1人、2人とスイッチの前に陣取って行くと、最初の面のクリアは目前となって来る。

弾美の号令で、最初の面のスイッチは順調に作動した。2面目はやはり、緑の床のフロアとなっているようだ。安堵する暇も無い内に、再び始まる時間制限の仕掛け。

一行はそれに追われるように、早速フロアの仕掛けを解きに掛かる。今回は何故か、やたらとカラフルな木箱が目立つ。よくよく見ると、ボーナスステージで見掛けた属性箱のようだ。

ボス級の敵は、今回は2段目に配置されているよう。木製の恐竜が、大小織り交ぜて数体闊歩している。そこをまず掃除しないと、上のスイッチに辿り着けないのは確かである。

一行は、まずは2段目の掃除から始める事に。

何とか5分以内に敵を倒さないと、探索の時間が果てしなく厳しくなる。リンクしまくりの敵に、狭い場所での戦闘と悪条件は重なるものの。パーティは勢い込んで、攻撃を集中させて敵の殲滅を図るのだが。

戦場になった土台の箱も、範囲攻撃に巻き込まれて壊れて行くという大惨事に。まあそのお陰で、風と水の術書が入手出来たのだが。肝心の3段目までのルートに問題が生じる結果に。

そんな時のお助けアイテムと、Jの豆の木で階段を作って3段目に到達する一行。動く敵の姿は、視界内には既になし。ただし、属性木箱が甘美な誘惑を仕掛けて来たり。

スイッチの確保も大事なのだが、物欲もそれに勝るとも劣らず。

「こ、氷の術書……あと2まいあればあ……」

「わははっ、瑠璃が物欲に負けてるぞっ！ 氷は何色だったっけ？」

「空色の木箱だねっ、その奥の2段目がそうじゃない？」

「私が壊してますから、皆さんはスイッチの確保を！」

スイッチの姿は、ここの部屋では今の所2つしか視認出来ないでいる状態。瑠璃が妖精の言葉を頼りに、部屋の端っこの透明スイッ

手をまずは確保に成功する。

続いて弾美と薫が、茶色の木箱の固まっているあからさまに怪しい場所を上段の奥に見つけ。今までのパターンを頼りに、その木箱の群れを急いで壊しに掛かる。

時間との戦いで焦りまくりだったのだが、何とか4つ目の破壊で陰に隠れていたスイッチを発見出来た。時計を見ると、残された時間はまだ後ちよつとだけありそう。

残された時間で、パーティはさらにもう1つの氷の術書を取ると言う荒業を敢行。

3つ目のフロアに辿り着いた時には、そんなこんなで心にゆとりも出て来た一行のだが。白いフロアの初お目見えの仕掛けを見て、そんな余裕も吹っ飛んでしまう。

広い上層の各所では、ぐるぐると横回転するやたらと長い棒状の障害物。風車の軸みたいに、スピードはそれ程でもないのだが。広い床の場所には大抵設置されており、どうやらキャラの通り抜けを邪魔する仕掛けのようである。

さらに上空を飛び回る、団子状に連なつた羽根突きモンスター。何匹かできつついて大きなモンスターの形状となっているようで、頭役の1匹はコミカルな顔付きだが凶悪そう。

見渡す限りでは、上層に2つのスイッチが既に確認出来るのだが。

「だから、時間の無い面で新しい仕掛けを出すのはヤメロ！」

「こんな時に限って、上層に2つもスイッチあるねえ。親切のつもりかも知れないけど、辿り着くのに障害物と空中の敵が厄介だなあ……」

「妖精が近くに透明スイッチあるって言ってるみたい。先にそつちを見つける？」

瑠璃の提案通りに、まずは移動のために中層に移動しようと言う

事になったのだが。そうするにも、階段に辿り着くために回転する棒状の障害物が邪魔になる。

皆で上手にタイミングを取って、棒につつかえない様に声を掛け合っただけの移動。お蔭で無事に下り階段へ到達。雪崩れ込むような勢いで、妖精の案内で白い小道を進んで行く。

程なく、透明スイッチの1つを確保したパーティ。妖精の話だと、もう1つあるらしい。

ところがその方向に進むには、中層と下層の道が通じていなくて無理っぽい。一応、思いつきり遠回りすれば可能なのだが、時間がそれを許してくれそうもないので。

仕方なくお助けアイテムで橋を作って、階段も作って上層へと再び上って行ったパーティだが。お邪魔な回転棒がやっぱりグルグルと張り切って一行を遮っている様子。

近い場所に敵も飛んでいる。注意しながら、端っこを抜けようとした瞬間。

一番最後に抜けようとした美井奈が、ほんの一瞬タイミングを遅らせてしまって。回転棒の端っこに捕まって、ズルズルと半周以上引きずられてしまおうと言う事態に。

絶叫を上げる少女に、案の定空中の敵が反応。羽根付き団子の3兄弟が、空中で分解しながら舞い降りて来る。パーティは回転棒に分断されてしまい、いきなりの大ピンチ！

引き返した弾美達が、必死に近付いてタゲ取りを行う。

「3匹に別れたかつ！ くそっ、1匹なら魔法で引きずり回せるのにつ！」

「美井奈ちゃん、今の内にこっちに！ 弾美君、こいつら倒しちゃうっ？」

「数を2に減らそうか、そしたら足止め魔法で何とかなるっ」

何とか美井奈も合流したのは良いが、羽根付き団子の特殊攻撃もなかなかエグい。胴体と尻尾の団子には顔など無いのだが、代わりに身体を中心に時計がはめ込まれている様。

時間制限を連想させて嫌なのだが、こいつらはそれとは関係ないよう。タイマー作りのそいつらは、想像通りの時限爆弾らしく。時間が来ると、勝手に盛大に自爆してしまった。

被害は甚大だが、敵が減った事は素直に嬉しい一同。

残った頭部分の団子は、氷付けにしつつ重力操作。念入りに足止めをした後に、スイッチの探索に戻る一行だったのだが。このちょっとした移動が、事態の悪化を招く事に。

頭部分の羽根付き団子の足止め魔法は、早々に切れてしまっって追跡の開始が始まり。そして近辺の飛行団子もリンクしてしまうと言う、最悪の事態が発生する。

気付いた時には、上空から団子の雨が降り注いで来ていた。

「うわっ、しまった！　こんなに早く魔法が解けるのかよっ！」

「わっっ、やばいっ！　これはもう、全部倒すしかないねっ！」

「うっ、ごめんなさいっ……私が絡まれたばかりにっ！」

懺悔や後悔は戦闘の後だと、パーティは絡んで来た敵を迎え撃つ構え。頭以外の団子の特殊能力は、既に体感して理解している一行。HPが半減したら爆破してしまうため、一気にスキル技で倒さないと駄目みたいだ。

その戦術が上手く行って、団子の数は順調に減って行くのだが。今度は頭部分がブレスを吐いたり、吹き飛ばし技を使用して来たりと、意外な戦闘能力を示して来る。

そのせいで苦戦しながらも、何とか全部を倒し終わった時には。残り時間はあとわずかとなって、パーティは大慌て。ハズミンのレ

ベルが33に上がった事も、喜んでいる暇も無いほど。そして襲い来る、時間制限のリミット切れ。

画面に大きく、任務失敗の文字と妖精の罵声が。

初めての攻略失敗とライフポイントの喪失に、部屋の中には落ち込んだ雰囲気が高く押し掛かる。幸いにも、経験値やお金やアイテム類のロストは無い様なのだが。ライフポイントと言えば、金のメダルに置きかえれば3枚分相当の価値である。

それがパーティ四人分だと、12枚分に相当……そう考えると、大変な損失には違いない。それでも弾美は、気分を切り替えるように、まあ仕方ないなと口にする。同意の返事も、元気が無いながらも上がる中。

それを聞いた途端、美井奈が号泣。

「ごめんなざいつ、私のせいでみんなが……！」

「そ、そんな事無いよ……ゲームの失敗なんか、私もいっぱいしてるし」

「そうそう、リンクしたのは美井奈ちゃんのせいじゃないし。弾美君も仕方ないって言ってるし」

宥める瑠璃に抱きついての実井奈の大泣きに、弾美はやや呆れ顔。ポコポコと優しく少女の頭を叩いて、宥めてるのか泣いてる事を非難しているのか。

中立エリアへと強制送還された、任務失敗パーティの一同。まだ1時間以上ある時間をどうするかと、美井奈抜きで話し合おうとするのだが。いきなり再挑戦も嫌だとの意見が多く、30分程度をどこかで潰す事に。

それならば、裏エリアの修行の塔に行こうかと、ようやく行く先が決定。

「美井奈つ、いい加減に泣き止めよつ。お前、修行の塔とか入った事無いだろつ？先にちよつとやって見せるから、どんなエリアかよく見ておけよっ!？」

「そうだね〜つ、いきなり入っても戸惑うだろうから、私と弾美君が先行して入って見せようか？ 瑠璃ちゃんは、こういう塔とか入った事ある？」

「私もメイン世界じゃ、武器スキルはからつきしだから……ちよつと見て、覚えておきたいかな？」

そんなこんなで、一行は闇市へと移動する事に決定。まずは弾美と薫が、金のメダルを4枚払ってチケットの購入から。個人修行場へのチケット代金は、武器スキルの数値で決まるらしい。

薫が闇市の情報屋から、事前に色々と修行場の仕様を聞き出していた。メイン世界と違う所も割とあって、そこら辺は前もつての調査はとても大切である。

魔法や薬品がが一切使えず経験値も入らないのは、メイン世界と一緒にのだけれど。失敗してもライフのロストが無いのは、イベント限定エリアの有り難い仕様のようだ。

薫の説明を聞いた弾美は、頷いて早速インしてみる事に。

「おつ、装備は白装束かぁ……武器もレンタルだし、ここら辺もメイン世界と一緒に。あれれつ、時間制限が30分と短いなあ？ ふうむむ……3部屋回るか4部屋にするかで、時間の割り振りが違って来るのかぁ」

「えつと、3部屋だと1部屋10分使えるのね？ 4部屋回ると、1部屋が7分半になつちゃうのかぁ」

弾美と薫の真剣な呟きに、未だ泣き顔の美井奈もちよつと興味を惹かれたよう。瑠璃に抱きついたまま、弾美の画面に目をやると。瑠璃がさり気なくティッシュを渡してくれる。



有り難くそれを使って、美井奈はようやく泣き止んだ様子。瑠璃と一緒に、何だか手強そうな裏エリアの傍観に回り始めるのだが。修行の塔はちょっと和風テイストな建物のようで、そんな木造建ての塔内に二人のキャラは佇んでいる。

今は案内人のお爺さんに、ルートの決定を伝えている所。

「俺は4部屋にするかな？ 薰っちはどっちにする？」

「私も4つ回ろうかなあ？ 4部屋目が、かなり楽しそうな名前だしっ！」

「スキル技取得の間っていう部屋ですか？ うわあ、本当に取れたら金のメダル4枚は安いねえ、ハズミちゃん！」

「だなっ……1部屋7分半だと、全部屋ぐだぐだになる可能性もあるけど（笑）」

本当にそうになったら、笑い事ではない事態なのだけれど。弾美は4部屋に決定したようで、自動的に開け放たれた開き戸を潜って、最初の部屋の中へと通される。

木目張りの部屋の中央の床には、1体の木人形が設置されていた。どうやらここは熟練度を上げる部屋のようにだと、経験組の弾美と薰はそれ程の混乱も無いようなのだが。

早速木人形に向けて、ひたすら武器を振るう二人。小気味良い打撃音と共に、熟練度は割と順調に上がって行く。この部屋の仕様で、敵の反撃も無いために、安心して時間内は熟練度を上げるのに集中出来るのだ。

単調な作業に、あっという間の7分半は終了。

次の広間は、ちょっとした柱や段差などで多少入り組んだ構造のよう。移動や視界が遮られる奥行き広いエリアには、刺客役の敵が点在していた。頭巾のようなもので顔を覆い、灰色と赤の2種類の装束を着込んだタイプがいる様子。

圧倒的に灰色タイプが多いのだが、そいつは外れキャラだと二人の言葉。この室内では、ひたすら敵を倒して指南書のドロップを狙うのだそうなのだけど。

赤の敵は必ず指南書を落とすのだが、ドロップ率の悪い灰色の装束の刺客も絡んで来る。出来れば赤い敵だけ倒したいけど、狙い撃ちはかなり難しい。二人はかなり熱くなりながらも、絡んだ敵を倒す作業に熱中している。

いつの間にか、声援モードの瑠璃と美井奈。

「くわっ、赤い奴やつと殴れたかと思つたら、灰色もリンクしやがった！ そんなに強くないけど、死んだらトライも中断だからキツいなっ！」

「あ、あれっ……ポーションも無しですか？ 回復は全く無し？」  
「そうだよっ、修行の塔はそういう持ち込みとかは一切駄目だから。最初の方で死んだら、物凄く勿体無い思いを味わう羽目になっちゃうのっ！」

ようやく血色の戻って来た美井奈の顔が、それを聞いて途端に青ざめて行く。なかなかに厳しい塔の掟に、早くも尻込みしてしまいそうな少女だったけれども。

弾美と薫のドロップ結果は、割と好調な様子で何より。時間切れとなった時点で、二人とも仲良く7ポイントずつの入手に。もう少して新しいスキル技も取得出来そうな雰囲気である。

そして間をおかず、次の部屋へとワープで導かれる二人。

今度の部屋はお城か何かの屋根裏のような造りで、思いつきリアスレチックエリア仕様だった。この部屋は何が貰えるのかとの美井奈の問いに、確か所有しているスキル技を強化してくれると薫の答え。

ただし、無事にここをクリアしないとチャラだと弾美が付け足し

て来る。

「アスレチックエリアだねえ、美井奈ちゃん。私はここは、10分あっても自信ないよっ」

「わ、私もですよっ、お姉ちゃまっ！ わっ、床から槍がっ！」

梁のめぐらされた動きづらいエリアの上、床下から槍が飛び出して来たり、振り子仕掛けの障害物を避けたり。忙しく動き回るハズミンとカオルを、手に汗握って応援する少女達。

嫌な記憶を呼び起こす、横回転する棒状の障害物も出て来るに至って。それを見つめる少女達の悲鳴は頂点に。そこを何とかノーミスで、両者ともに通り返ける事に成功。

そうすると、梁の向こうに昇降機が見えて来た。

太い柱が幾本か複雑に重なり合う構造物は、遥か上空まで続いているように見える。今度は登りのアスレチックらしい。一度落ちてしまうと、思いつきり時間をロスしてしまう。

残り時間も迫って来ていて、プレッシャーは如何程のものか。

「残り時間は、後4分位か……？ やべっ、1回のミスも許されないんじゃないかっ!？」

「そ、そうかも……ゴールはどこだろう？」

ゴールまでの道筋は、矢印で示されているのみ。距離までは分からないのが、逆にもどかしい気もするのだが。落下に気をつけつつも、弾美と薫は慎重に距離を稼ぐ。

登りの仕掛けも、実に嫌な感じ。細い丸太の道や、崩れやすい丸太道、その他にも回転式の障害物などもたくさん存在する。敵が出て来ないのが、唯一の救いだらうか。

やがて構造物の上に平らな空間が出現。

「あっ、あれがゴールかな？ もうすぐだよっ、ハズミちゃん！」  
「時間がもう無いですよっ、お兄さんっ、はやくはやくっ！」

応援の声に急かされるように、頂上を極める弾美のキャラ。続いて薫も、何とか到着出来たようだ。平らなスペースに設置されていたスイッチを、二人がちよこんと触り終わると。

クリアおめでとうの文字が浮き出て、続いてどのスキル技を強化するかを選択画面が出現する。複合スキルは除外されているようで、弾美は仕方なく《二段斬り》を選択。

薫もそれに倣って《二段突き》を選択。先に弾美が選択したのを、横目で見ていた薫だったのだが。スキル技の強化に伴って、呼び名が変わったのを目にした衝撃が大きかったためだ。

弾美の《二段斬り》は《三段斬り》へと名前が変更された。薫も同じく、とても嬉しそう。

「わわっ、これは凄いつ！ この塔ってば結構な大盤振る舞いだねえ……せいぜい、与えるダメージが上がる位かと思ってたけど」  
「本当だなあ、さすが限定イベント仕様だよな。ここを先に入って強化してたら、もう少し楽に色んなエリア回れてたかもなあ……」  
「あゝっ、個人強化って良く分からなかったですからねえ。全然範疇に入って無かったですよ」

美井奈の言葉もその通りだが、弾美も個人強化よりレア装備取得の裏エリアの方を優先していたのも確か。何より楽しかったし、それはそれで全く後悔していないのだけど。

やってみればこちらにも楽しいと、次のステージにも期待大の弾美だった。

最後の部屋も、やっぱり7分半でクリアは必須らしい。今までの

部屋の中では小さい部類のフィールドに、出現したのはたった1体の敵。派手な和服を着た、鬼の仮面を被った長身の人型タイプのようだ。ラスボスっぽく、見た目はかなり強そうな。

弾美の前の敵は片手剣を、薫のは両手槍を手にしている。

「おおっ、最後の部屋は、1対1の戦いですかっ！ これに勝てれば新スキルですか？」

「かなあ？ でも、回復手段無いから正直キツイかもっ……！」

薫の心配そうな返事もごもつとも。今までの部屋の仕掛けで減ってしまったHPは、辛うじて回復して貰っているもの。敵の攻撃と、時折繰り出されるスキル技はとても強烈。

何とかステップを駆使しつつ、通常攻撃をかわす二人。見た事のないスキル技は、避ける事も困難である。ダメージの蓄積もかなりきついのだが、泣き言は言っていない。

反撃の刃を撃ち込みつつ、敵を時間内に倒す作業にひたすら集中する。

一発のダメージの高い両手槍を相手にしている薫の方は、かなり苦戦しているようだ。弾美は自身のHPも豊富で、高い防御にも助けられ。薫よりは、割と余裕もあるようなのだが。

それでも持ち前の削り力を生かして、時間内に何とか敵を倒し切る事に成功する薫。残りHP1割の激戦を制して、戦い終わった後の息もゼイゼイと荒かったり。

その少し後に、時間とHPに余裕を残してクリアする弾美。こちらにも余裕を残したとは言え、時間にして1分少々、HPも3割だからお世辞にも楽勝とは言えなかったけど。

取り敢えずはハイタッチで、お互いの勝利を称える弾美と薫。

弾美は最終ステージのクリアのご褒美に、範囲技の《グランバス

ター』と言うスキル技を取得した。土スキルも20必要との事なのだが、一応伸ばしてあったので問題ナシ。

薫の方も、新しく複合スキル技として《幻影神槍破》と言うのを取得した。範囲技でこそ無いが、先ほど敵が使って来た技らしく、結構派手なエフェクトで威力も高そうだ。

雷スキル20も問題ナシ、速攻で使える事にホツとする薫。

「おめでとうっつ、二人ともっ！ 無事終われて良かったねえ！」  
「ナイスクリアですよっ、個人強化も楽しそうで良いものですねえ！」

「そうだなあ、これは本当に先にクリアしておけば良かったかも…  
…よしっ、今度は瑠璃と美井奈の番なっ！」

弾美の満を持しての振りに、はじかれたように萎縮する美井奈。心配するなど、チケットの購入を瑠璃に指示して、ちゃんと後ろで見えてやると約束する。

薫もそれに参加して、瑠璃の後ろへと移動する。バックアップ体制はバツチリだと、瑠璃の肩に手を置いてリラックスさせる素振り。美井奈もそれを見るなり、後ろに弾美を招く素振り。

もしピンチになったら、操作を代わって貰う気満々である。不正は許さないと、弾美は美井奈にヘッドロック。代わって貰った事のある瑠璃は、あれは不正だったのかと微妙な表情。

そんな奇妙な雰囲気の中、瑠璃と美井奈のキャラは修験場へ突入。

茶々を入れる弾美と薫は、もはや気楽なものである。最初のスキルを上げたい武器のレンタル場面で、美井奈が戸惑って弓矢を選択。ちゃんと矢もついてくるからと、安心させる弾美。

一足先に、ルート決定の間に案内された瑠璃だったのだが。自信の無さを前面に打ち出して、3部屋でのルートに決定。スキルが上がれば自然と技も覚えるからと、ちょっとだけ逃げ口上。

美井奈もそれに追従して、一部屋10分に決定。

「なんだよ、二人ともビビリだな……まあ、複合技増やすよりは、強化した方が混乱しないか」

「そうだねっ、数が増えても使いこなせないと、結局は宝の持ち腐れだし」

激しく頷いて、薫の言葉に同意する操作組の二人。そして程なく通された、最初の熟練度を上げる部屋。美井奈の部屋はちよつと様子が変わっていて、遠くに的が見えている。

どうやらそれを射るらしく、始めた二人は途端に真剣な表情に。小さく気合いを入れながら、必死に修行に励む二人。メダルの元くらは取れよと、弾美は相変わらずお気楽モード。

美井奈はともかくとして、殴る機会が最近減っていたルリルリは、この修行で結構な数値の上昇振り。本人も順調な滑り出しに驚いているが、まだまだ余白の部分はありそうだ。

負けずにと頑張る美井奈も、時間を有効に使用している。

次の部屋も、さつき見慣れた感じの配置でちよつと安心。その辺は、先にプレイして貰って感謝な二人である。ただし、やっぱり美井奈の遠隔仕様は別モードとなっているよう。

移動式的が、障害物の間を左から右に通り返けて行っている。隠れ切る前に、撃ち落とせばポイントが貰えるらしいのだが。タイミングが割とシビアで、弾美もこれにはお手伝い。

力を合わせて、必死に弓を射るタイミングを計っている。

「美井奈っ、赤的が出たっ！ ほらっ、今だっ！」

「わっ、ここですかっ！ よしっ、ど真ん中ですよっ！」

「瑠璃ちゃん、集中してっ！ リンクしちゃうっ！」

「にゃっ、ちよつと油断してたっ！」

瑠璃は大慌てで、キャラの動きを修正する。本当は、楽しそうな隣が微妙に気になっていただけれど。こんな所でリタイアしては、後で何を言われるか分かったものではない。

必死に目の前の敵を屠って行きながら、何とかポイントを稼ぐるリルリ。

頑張った甲斐があつて、瑠璃は8ポイント、美井奈は9ポイントの武器スキルをゲット。弾美達より2分半ほど長い挑戦だったとは言え、こんなに稼げるとは思っていなかった二人は。お互いを称え合いながらも、次の部屋への威勢も満々。

それでも次の部屋がアスレチック仕様だったと思いついた途端、二人とも一気に萎縮してしまったり。後ろからの時間はあるから焦るなどの励ましに、とにかく前へと進み始める健気な少女達。

先ほど弾美と薫がチャレンジしたフィールドそのままなのは、正直助かった気分の二人。忘れない内にと、道順を思い出しながらキヤラを進め始める瑠璃と美井奈。

前半は記憶の甲斐あつてか順調だったのだけど。後半は10分補正の障害物が。

「わっ、これは何ですかっ!?! 隊長っ、樽が邪魔で通れませんよっ!」

「こっちにも設置されてるっ……あっ、でもこれは壊せるのかな!」

ワイワイ言いながら、瑠璃が試しに武器を振るって壊しに掛かる。続いて、美井奈が距離を取っての遠隔攻撃。時間は無情に過ぎて行くが、何とか登りエリアまでは大したロスも無い。

落ちないように、慎重に上を目指す二人のだが。慎重過ぎて、道中に時間が掛かるのは仕方の無い事かも。それでも余剰分の時間



に救われて、何とか頂上が見えて来た。

ヘルプに頼らずのクリアに、何となく驚き顔の二人だった。

「おおっ、ちゃんと全部屋クリア出来ましたよっ！ お兄さんっ、どの技を強化しましたよ？」

「瑠璃はどうなった？ ってか美井奈、寄っかかるな！」

「美井奈ちゃんは甘えん坊だねっ？ 瑠璃ちゃんも、ちゃんとクリア出来たよっ」

瑠璃も同じく《二段突き》を強化し、修験場でのトライはまずまずの結果となった。美井奈は散々迷って、よく使う多段スキルが良さそうとのアドバイスを信じて《みだれ撃ち》を強化。

スキルポイントの取得によって、瑠璃は補正スキルの《クリティカル2》も得る事となった。弾美も新たに《追撃》と言うスキルを取得。たまに攻撃回数の増える補正スキルのようだ。

薫は攻撃スキルの《大車輪》と言う技も、ポイントによって新たに得たようだ。多段攻撃スキル技のようで、これで削りながらSPを増やす手段も得る事となった。

パーティで合計14枚も金のメダルを使ったが、それだけの価値はあったようだ。

修行によって強化されたキャラは、時折混乱も招く事もある。各々が新スキルのチェックなどを行いながら、イベントエリアの5つ目の再挑戦に備えつつ。弾美が美井奈のキャラも、ついでにチェックなどしながらも。色々と戦闘や危機回避のアドバイスなど口に出しているよう。

完全に忘れ去られていた新魔法の《フェアリーヴェール》は、姿を消し去る事が可能な性能のようだ。姿を消しても動く事が出来るので、敵に絡まれる心配もほとんど無い。

今度はこれを掛けて動けと、実的確な指示。

「すっ、済みませんっ……すっかり忘れてましたっ！ さっき掛けておけば良かった……」

「終わった事はもういいから、次はしっかり頑張れよっ」

「あっ、私も水の分身出しておこうかな……これも意外と敵の目を欺くのに便利かもっ」

今度は絶対にクリアするのだと、真剣にイン前の打ち合わせを行うメンバー達。瑠璃が念の為と、ライフポイントが3に減ったメンバーに命のロウソクを配布する。

今までの冒険の報酬に、何と4つも獲得しているので全く問題は無い。薫のみライフは最初から5つあったので、これで全員4に揃って1つロウソクが余る勘定だ。

ロウソクを使用しつつも、これ以上減らす予定は無いと、弾美の鼻息は荒い。

その勢いが乗り移ったのか、瑠璃と美井奈も今度はやる気モード全開での突入。失敗したとは言え、一度下見の終わっているエリアだと言うのも大きな利点だ。

ところが入ってみて、一同はちよつとした驚きに見舞われる。てつきり最初のフロアからやり直しかと思っただが、一行が通されたのは失敗した白い床のフロアだったのだ。

ちよつと得した気分で、今度はスイッチの場所は変わっていないかのチェックを行うパーティ。天空の敵にも注意を向けながら、いざと言う時のための魔法強化も忘れずに。

幸い、スイッチの場所の変化も無いようだ。

「あっ、変な場所に大きな宝箱が置いてある……ハズミちゃん、お助けアイテムはあの中かな？」

「そつだろつなあ……よしつ、それじゃあ薰つちが奥の透明スイッチの確保してくれ。瑠璃と美井奈は、俺に続いて宝箱から上層を制覇するぞっ」

「ほいほいつ、了解……じゃあ魔法の分身試してみるかなあ？」

瑠璃のその言葉に、美井奈も透明化魔法の使用に踏み切る事に。

光球魔法と透明魔法の重ね掛けは、結構不慮の事態の対応力が強そう。大量MPの消費を、ヒーリングで回復して。

瑠璃の水分身は、もう少し派手な感じだ。透明な水で出来たルリルリのそっくりさんが、瑠璃の面前にプヨツと出現する。そしてマント部位の人形と同じく、ルリルリの動きに付随して移動。

二人の回復が終わつたのを見て、弾美が動き出す。

ミイナが透明化で見えない分、瑠璃のお供がやたらと賑やかなのはちよつと笑えるかも。上空の敵に注意しつつ、まずは最初の仕掛けの回転棒を順当にクリア。

宝箱を開けて、親切に設置されていたお助けアイテムをゲット。

「よしつ、面倒だからこのままお助けアイテム使つて行くか。アイテム数も、結構多いしな」

「了解……んつと、その階段一旦降りて、橋を作って向こうに渡ろつか」

作戦参謀の瑠璃のルート通りに、忠実に移動する弾美。お助けアイテムのお蔭で、時間をかけずにスイッチのある断層に足をかける三人。中層の階段を上つて、再び障害物のある上層へ。

この場所は先ほど回転棒に分断されて、敵に絡まれて思いつきり失敗した例のポイントである。時間のある内に端つこのスイッチを確保しようと、弾美の計画らしいのだが。

ちよつと心配になつて、思わず美井奈にお伺い。

「大丈夫か、美井奈。見えないけど、ちゃんとついて来ているか？」  
「いますよ〜っ、お姉ちゃんの後ろに。お姉ちゃんは子だくさんです  
ねえ」

「えっ、これは……子供？」

後ろの人形と水分身は、確かにカルガモの子供のようにルリルリに付き従っているけれども。美井奈もその群れに加わっているらしく、そう言われると何だか変な感じ。

それはともかく、リラックスしている感じの美井奈に、弾美は一齐に通り抜けの合図を送る。今度は全員での通過に成功して、透明化したスイッチをあつという間に探し出す事に成功。

それを美井奈に任せて、弾美と瑠璃は来た道を取って返す。

薫がもう1つの透明スイッチを確保したと報告して来る。これで残るは、上層に2つ点在するスイッチのみ。もう1ブロック奥に1つと、右の端っこに1つ設置されている。

天空の敵の動きを見て、瑠璃が奥のスイッチは自分に任せてくれと請け合う。敵の一団は時折通過するが、スイッチを押す瞬間だけスタンバイすれば問題ないとの事。

それを受けて、弾美は中層からひたすら離れたスイッチを目指す。

「私のはいつでも押せますよ〜っ！ 時たま敵が上を通るんで、ちょっと怖いんですけど」

「私のは中層のスイッチだから、全然平気だけど。ちょっと安全な場所に離れてて、合図を受けたらスタンバイすれば、美井奈ちゃん？」

「私もちょっと離れた場所で待機中〜。合図あったら、すぐにスタンバイするよ〜」

女性陣の用意が整ったのを確認して、弾美もラストスパート。何とか迷わずにスイッチのあるブロックへと到達して、天空の敵の動きを確認しながら上層へと伺おうとするのだが。

敵がなかなか、階段の上から離れて向こうへと移動してくれない。仕方なく、安全そうな場所にお助けアイテムで鳶の階段を作ると。有り難い事にスイッチは目と鼻の先にあった。

用意は出来たと、弾美は皆に合図を送る。

美井奈が慌てた感じで、透明化魔法を解除した。透明なままの状態では、スイッチが操作出来ないらしいのだ。天空の敵を気にして、早めの合図を催促するのだが。

それが瑠璃のスタンバイ場所には、思いがけず災いする事に。弾美のカウントダウンに、やっぱり慌てた瑠璃の移動に。どうやら天空の敵の一団が反応してしまったらしく。

悲鳴を上げて逃げようとする瑠璃だが、隣から画面を見ていた弾美は、分身のガード振りに驚嘆の叫び。敵のタゲを全て身に受けて、時間稼ぎには充分な働きである。

その間にルリルリはスイッチに到達。全員の操作によって、白いフロアのクリアに成功。

全員の喜び様は、まるで完全クリアしたかの如く。MPヒールの時間とは言え、ちょっと油断し過ぎの気もする弾美。何しろこの遺跡のどこかに、エリアボスがまだ潜んでいるのだ。

呑気なパーティの女性陣は、初使用の魔法の感想などを語り合っているのだが。上の方から獣のような野太い咆哮が聞こえて来た途端、お喋りもぴたりと止んでしまう。

敵は既に、出迎える準備は万端のようだ。

「ここで負けたら、元も子も無いからなっ。新スキルとか、各自ちやんとチェックしておけよっ!」

「あつ、そうか……私なんか2つも覚えてる。ちょっとぶつつけ本番は怖いかも」

「基本スペックも上がってますしねえ……今回は追い込み頑張りますよっ！」

不安や緊張がない交ぜになつた雰囲気の中、後衛の休息も程なく終わりを迎えた。魔法の強化も無難に終えた一行は、ハズミンを先頭に上層を目指しに掛かる。

今回上層に控えていたのは、竜型の敵が1体と巨大なハンマーを持った直立歩行のカエルが2体。両方真つ白い容姿で、ハンマーの緋色がアクセント的に良く目立つ。

竜型の敵は翼の先端がムチ状になっていて、顔も敵めしい感じ。体軀も立派で強そうな敵の出現だが、白いカエルは逆に小さくて殴りにくそう。それでもイベントエリア最後の敵には相応しいと、弾美は気合を入れて突進して行く。

竜型の敵の、毒のプレスで戦闘はスタート。

「ボス抑えるぞ〜っ、カエルから減らしてくれっ！」

「了解っ、瑠璃ちゃんは右のをお願いっ！」

瑠璃は自身に、再度の水分身を掛けての戦闘参加。薫の言葉に応じて、右のカエルに氷の足止め魔法を撃ち込んで、がっちりキープに成功する。その間に、薫の前のカエルを潰してしまおうと、女性陣の攻撃は1匹に集中して行く。

薫は、新スキル技を試すように《大車輪》から《幻影神槍破》を使用してみる。最初の多段スキルの《大車輪》は攻撃力も高く、エフェクトも派手で薫のお気に召した様子。

それに対して次の《幻影神槍破》は、単発のみの移動攻撃を行つて、その後に自身の幻影を纏う守りの技のよう。ターゲットしていた相手を見失い、オタオタする白カエル。慌てたのは、知らずに夕

ゲの後ろに移動した薫も一緒。

再度のスキル《貫通撃》で、しっかりタゲを取り戻す。

後衛からの美井奈の削りも、なかなか容赦が無い。修行の塔で強化済みの《みだれ撃ち》でSPを貯めながらの削りを敢行しつつ、同じく《貫通撃》で強烈なダメージを与えて行く。

《スパーク》も掛けてあるので、タゲを取っても一応は大丈夫。

瑠璃はやや距離を置いての、後方支援に掛かりきり。余裕があれば、水の攻撃魔法で薫前の白カエルに攻撃を仕掛けるのだが。魔法防御のせい、同じ水属性のせい、ダメージはそれ程芳しくないよう。

そんな事をしている内に、足止め魔法が切れてしまったようだ。それでも自身の水分身が、絶好のブロックを見せてくれるので、安心感は以前と全然違う。

再度距離を置いて、後方支援に回る瑠璃。

敵の白カエルの攻撃が熾烈さを増したのは、やっぱりHPが半減してから。空を切っていた白カエルのハンマーが、2匹揃って盛んに地面を叩き始めたのだ。

その度に防御ステップがかく乱され、さらには土属性のダメージを受けてしまうパーティ。一撃の威力はそんなに強烈では無いのだが、クラック魔法の連打は結構痛い。

ステップ封じからの強烈なハンマーの打撃技は、カオルに痛烈なダメージを与えて来た。白カエルのコンボ技に余計なダメージを受けて、薫は本気で悔しそう。

追撃の特殊技の水泡攻撃で、さらにキャラの動きの封じ込みを企む白カエル達。

「わっ、この水泡ってば、ブレスじゃ消えないっ！ 炎属性は無効

なのかなっ!？」

「うっつ、最後の追い込みしたいのにつ! 隊長っ、もうしばらくご辛抱くださいっ!」

「男前だな、美井奈……そうだ、新スキル試してみようか」

弾美の言葉と共に、新スキルの《グランバスター》が大地を揺らす。しかし、白カエルにはダメージを与えた新スキルも、浮かんでいる水泡には効果は全くなし。

邪魔な障害物を前にして、距離を詰めれない薫。敵と言えば、地面叩きで地味にダメージを与えて来ている。頭に来た美井奈は、とうとう範囲矢弾での《スクリューアロー》を敢行。

どうやら風属性での破壊は可能な水泡は、ほとんど数を減らして行く。それを見て、薫も《竜巻チャージ》をお見舞いする。上層の端まで吹き飛ばされた白カエルは、既に虫の息。

とどめを見舞おうと武器を構えた薫の目の前。白カエルは空気を吸い込み自爆モード。

「びゃっつ、破裂したっ! カエルが破裂っ! ってか、床まで壊れて落下ダメージ受けたっ!」

「早く戻って来てっつ、薫さんっ! もう1匹がハイパーモードになってるみたい!」

「きゃっつ、お姉ちゃまがハンマーの餌食につ!」

薫の絶叫も美井奈の絶叫も、全て呑み込む勢いの赤いハンマーの連打。既に水分身も倒された身の上の瑠璃は、白カエルのハンマーの振り回しに抵抗する手段が無い。

敵のHPもまだ8割程度残っているので、ハイパー化のきっかけはどうやら相方の死亡のようだ。瑠璃のピンチを見兼ねた美井奈が、強引にスキル技の連発でタゲを奪って行く。

そこからのマラソンに、ようやく瑠璃も立ち直りのきっかけを得



る。

「こ、怖かった……盾を装備してなかったら死んでたかもっ」  
「ごめん、瑠璃ちゃんっ！今、合流するからっ」

下層に落とされた薫がようやくの合流。一方の美井奈は、華麗にマラソンで敵のハイパーモードを無効にしている。なかなかの策士振りに、パーティ内からも賞賛の嵐。

少女は照れつつも、瑠璃の回復と薫の合流を待つ。

弾美のキープは安定を見せており、噛み付き攻撃や先端のムチ攻撃を、盾でのブロックで凌いでいる。削り過ぎると反撃が熾烈になるので、その所は程々に。

薫が白力エルの削りに参加して、いよいよ囲み込みが完成する。今度は瑠璃も殴りに参加、先ほどの恨みを晴らすべく、スキル技を振るってHPを減らしに掛かる。

体力の半減がきっかけの、敵の再度の特殊技が発動するも。美井奈と薫の範囲技で、今回も難なく切り抜けて。最後の自爆技は、瑠璃の天使魔法で落下を防ぎに掛かるパーティ。

その甲斐あって、今回は戦線離脱者は皆無の運びに。

まだ10分は経っていない筈だが、残り時間は気になるところ。

休む暇も無く、ラスボスに対する一行。範囲の反撃を念頭に入れて、微妙に間を取っての必殺の囲いでの攻撃に。

四人揃っての削り力は、個人強化の成果も相まって凄まじい瞬発力を見せる。そのため危うく見せ場も無いままに、倒されそうになるラスボスだったのだけど。

ブレスを潰された後の尻尾の範囲攻撃から、敵は何とか距離を置く事に成功。

「うおつ、出来損ないの竜が飛び上がったぞ。何かやるのかっ!？」  
「時間も無いし、遠慮しませんよっ! たぐっ!」  
「やっちゃんえ、美井奈ちゃん! あと残り2割程度だよっ!」

敵は何らかの特殊能力を、最後に絶対使って来ると構えていた弾美達だったけれど。ところが空中で停滞していたラスボスは、美井奈の一撃を受けた途端にはじけ飛ぶ。倒したと喜ぶメンバーを尻目に、分離した欠片は白いコウモリとなって、エリアを無尽に飛び回り始めた。

一瞬クリアだと喜んだのも束の間、これは悪辣な時間稼ぎだと悟った一同。近い敵を何とか撃ち落とし、悲鳴を上げながらも残りの数を数え上げる。もちろん、1匹でも撃ち漏らしていたら、最後のゲートは開かないままなのだろう。

層を上がつたり降りたりしている暇は無い。崖つぶちに陣取って、下の層の遺跡に逃げ込もうとする敵を必死に撃ち落とす弾美と薫。壁際の通路を回り込んで、魔法で撃墜に掛かる瑠璃。

一番の撃墜王の美井奈は、得意の遠隔で次々とコウモリの数を減らして行く。

不測の事態に見事対応したパーティ。最後の1匹が倒されると、浮島に向かって緑の橋が浮き上がって行く。喜びの声を上げながら、皆で一斉に渡りきった先には。

宙に浮かぶ白色の木の葉と、その周辺に設置された宝箱。今回は奮発の6万ギルの現金と金のメダルが2枚、雷の術書と水晶玉、生命と魔力の果実が箱の中に入っていた。

宝箱を確認し終えた一行は、出現した退出魔方陣に一目散に飛び込んで行く。

「最後はビックリ仰天の仕掛けだったなあ……遠隔使いがいて、正直助かったぞ、美井奈っ!」

「本当だねえ、最後の白コウモリは弱かったけど、たくさんいたから大変だったよ」

「これでイベントエリアは全部クリアだねえ……あれっ、残り時間はまだ結構あるのかな？」

「ひよっとして、30分くらいあるのかもな……でももう6時過ぎてる、美井奈は家に電話入れる時間じゃないか？」

「あゝっ、そうでした！ じゃあちよつと電話お借りしますねっ、お兄さん」

個人強化の修験の塔に、2チームで2回に分けて入ってしまった為に。いつもなら丁度時間を使い切っている予定なのに、今日は30分ほど余ってしまったようなのだ。

また夜にインして、この前みたいに妖精の泉にでも行こうかとの案も出たのだが。呪いを解除するような装備も手元に無いので、今度は泉に出掛けてもあまり意味が無い。

時間が余っているのなら、トリガーNMか特級リング取りに行きたいと薫がおずおず発言する。30分ならそれ位が良いと、弾美もその案には乗り気なのだが。

このままプレイすると、終了が7時近くなってしまう。

それはそうと、最終エリアのボスのドロップを配分に掛かる瑠璃隣に家がある瑠璃は気楽なものだが、やっぱり熱中し過ぎて親から小言を受けるのも考えもの。

夕食の支度の手伝いは、自分から進んで始めた約束事だとは言え、自分の都合で今日は出来なかったと申し開きするのも、ちよつと違う気がする真面目な性格の瑠璃である。

ちよつとそわそわと、時間を気にし始めるのもその真面目さ故か。

取り敢えずの話し合いの結果、マントは弾美でピアスは薫の手に渡る事に。武器では朱色の両手持ちハンマーなども出たが、それは

売り払う事に決定した。

白翼のマント 器用度 + 4、HP + 10、攻撃速度UP、防  
+ 1 1

白蛙のピアス 器用度 + 2、MP + 15、防 + 6

階下から、弾美を呼ぶ声が聞こえて来た。どうやら仕事から戻って来た母親の律子さんが、何か用事があるらしい。美井奈も何故か、電話を掛けに部屋を出たまま戻って来ない。

何かあるのかと、残された瑠璃と薫は不思議そうに顔を見合わせているのだが。なかなか戻って来ない二人に、業を煮やして二人で様子を伺いに降りてみる事に。

1階では、何故か美井奈が律子さんと話し込んでおり、弾美の姿はどこにも見えず。しばらくすると、玄関先に瑠璃の両親を連れて弾美が戻って来た。何事かと戸惑う瑠璃だが、話を聞いて思わず笑みを浮かべる少女。

夕食を一緒に食べる事に、いつの間にか決まっているらしい。

「あれ、お食事会するの、お母さん……手伝った方がいい？」

「ああ、平気平気。手巻き寿司にするらしいから、美井奈ちゃんのお母さんが来るまでは、あんた達は遊んでていいわよ」

「美井奈も電話終わったから、あと30分だけで遊んでようぜ。」

沙織さんが来るまで、その位掛かるらしいから

「ああ、それじゃあ……って、私もお呼ばれしていいの？」

薫の驚きもなんのその、勝手に進められていた話は、もはや修繕不可能となっているようだ。夕食の支度を弾美と瑠璃の母親に任せ、子供達は再び2階へと駆け上がる。

大急ぎで薬品を買い込んで、一同は再び冒険の準備。

「面倒だし時間も無いから、通い慣れている場所でいいよな？ 薫  
うちの指輪を取りに、例のクエストエリアのトレード場所に行こう  
か？」

「ほいほい、炎のリングをキープしてるけど、これでいいのかな  
？」

「あつ、それをお願いします。わつ、ちょっと緊張するなあ」  
「自分の装備取りの時って、確かに緊張しますよねえ。よしっ、締  
めの戦闘頑張りましょう！」

張り切る美井奈の言葉に、勇ましさが見え隠れなどし始めている  
のも自信の現れか。先ほどの緊張からは完全に解放されている少女  
は、歳上の薫をリードする素振り。

その自信も束の間、月の鍵のクエストエリアでの細い端を渡  
る際には、いつもの美井奈に逆戻り。皆に待ってて貰いながらの、  
トホホの駄目駄目っ振りを披露する。

戦闘ではいい所を見せろよと、辛辣な弾美の言葉もさもありなん。  
取り敢えず、トリガー挿入口の集落までは無事に辿り着いた一行  
ここに通うのも3度目で、その点は心配は無い感じ。ポケットの整  
頓などをしながら、突入の準備に余念が無いのだが。

夕食を前にして変なテンションになっているのが約二名ほど。

「寿司は好きかつ、美井奈っ!？」

「はいっ、大好きですっ!」

「よしっ、スパッと勝って食べまくるぞっ!」

「はいっ、隊長っ!」

妙な師弟関係での遣り取りなどを交えつつ、瑠璃が行くよとトリ  
ガーを投入する。一行がここに挑戦するのも、既にこれで3回目の

事。いい加減、突入慣れはあるのだが。

今度のフィールドは、いつにも増して変な雰囲気が漂っていた。地面はクレーターのようになぐれた個所が目立ち、窪みには溶岩らしき液体があちこち溜まっている。

円形のフィールドには大きな樽が各所に設置されており、そこから炎が勢い良く噴き出している。完全にここは炎の陣営だと強調されており、分かりやすいのは確かではある。

唯一出張っている炎の鳥を前に、強化に走るパーティなのだが。

「あ、あれっ？ 氷魔法が使えないねっ…… 氷魔法は使用禁止なのかな？」

「むっつ、まあそれ位は仕方が無いか…… 今までのパターンからして、ボス1匹だけなのが逆に不気味だなあ」

「確かにねえ…… 特に大きくも強そうでも無さそうなのが、ちよつと気になるわねえ」

魔法の強化が終わると、美井奈はちよつと下がって赤くたぎる溶岩のチェック。ダメージがあるかどうか、踏み込んで確かめて見るべきかと迷っている様子である。

絶対あるに決まっていると、軽く一蹴して来る弾美なのだが。マラソンする時は気をつけると、敵が1匹しか見えないのに言うのもどうかな的な言葉を口にしてみたり。

戦闘開始からの一気呵成のアタックは、互いに炎の熾烈さを見せる。

敵の炎の鳥は、クチバシとかぎ爪の多段攻撃が通常の攻撃方法らしい。さらに炎のプレスが時折前方範囲に吹き荒れて、タゲのキープはダメージ減少の必須条件だ。

ところが、ボスの強さは通常の敵とさほど変わりが無いようで、何とも呆気なく撃沈されてしまった。拍子抜けした一行は、炎の上

るフィールドでポツンと佇んでみたり。  
そして数秒後に不死鳥の如く蘇るボスを面前に、やはりとの感想を漏らす。

「やっぱり、一筋縄じゃ行かないみたいねえ……だんだん強くなるパターンかな？」

「その樽から、炎が一瞬吸収されたけど……ひよつとして、あの樽は補給用？」

「あれっ、いつの間にか樽がタゲれるようになってますよっ？ さつきは無理だったのに！」

美井奈の指摘通り、3つ設置されている樽が、いつの間にかタゲれるようになっていた。攻撃の対象にも選べるようで、瑠璃の推測通りの補給用ならば、先に壊しておきたいかも。

素早い相談の結果、美井奈が試しにと弓を射掛けてみると。確かにダメージが通る上、フィールドにも新たに変化が。樽を守るように、土の下から炎のゴーレムが出現する。

新たな敵の出現に、大慌てで対応するパーティ。

ボスの火の鳥も、確実にさつきより強くなっている。何度も蘇らせていては、戦況がどんどん悪化して行くのは目に見えているのでボスをキープしてるから樽を先に壊してくれと、弾美の願いを聞き届けるべく。

薫がゴーレムの相手をしている内に、美井奈が遠隔で樽を壊しに掛かるのだが。樽にダメージを与える度に、樽の中から小柄な火トカゲが発生するのは如何な事か？

文句を言いつつ、ようやく樽が壊れる頃には。火トカゲが8匹も生まれている事態に。

「わっ、わっ、何だか敵がいっぱい増えちゃいましたよっ！ 樽は

あと2つもあるのにつ！」

「むむっ……ってか、火の鳥が一回り大きくなったぞ！ 樽があつたら補給されて、無くなればハイパー化する仕掛けかなっ!?」

「火トカゲは弱いけど数が多いなあ……お助けアイテム使っつていい、ハズミちゃん？」

「おうっ、遠慮せずにどんどん使えっ！」

弾美の言葉に、火トカゲをブロックしながら、瑠璃が『猪突猛進の札』を使用。その途端に、どこからか出現するイノシシの群れ。火トカゲの群れに突進して、勇ましく蹴散らして行く。

ダメージを負った火トカゲを、美井奈が弓矢の一撃で始末しつつ。気がつけば、割と素早く瑠璃と美井奈がフリーになっていた。ほぼ時を同じくして、薫も炎のゴーレムを撃破。

弾美の負担を減らすべく、続いて2つ目の樽を壊しに向かう女性陣。

2つ目の樽は、一行の後ろの奥に設置されている。炎を吹き出すそれは、見た感じ今にも爆発しそう。美井奈が二人のスタンバイ状況を確認した後に、素早い遠隔攻撃を仕掛けると。

今度の守護者は炎を纏ったサル顔の獣人。そして美井奈が樽を壊すと、炎の骸骨がやはり8体ほど出現する。とても対応し切れない瑠璃は、ここで『天使の呼び鈴』を使用。

今度の敵は、獣人も骸骨も強敵のよう。

「うわっ、時々強烈な炎ダメージが来るなあ。ごめん、サル倒すのにもう少し掛かりそうっ」

「ピンチなら妖精も呼びますよっ？ ハズミちゃんは平気？」

「さらに火の鳥がでっかくなっただけ……今度は殴る度に炎の反撃が来るようになった」

「骸骨も強いですねえ……そうだっ、水晶玉使いますねっ！」



雷の水晶玉と水の水晶玉の使用で、敵の一団にかなりのダメージが通った模様。それをきっかけに、戦局は大きく動き始め。雑魚の骸骨が、瑠璃と美井奈と天使の手で減らされて行く。

順調に進む数減らしの一方で、薫が炎のサルに張り手で吹き飛ばしを喰らっていた。飛ばされた先で溶岩に落ちた薫は、継続ダメージに慌てて脱出を図ろうとするのだが。

突進して来る炎のサルと、地面から生えて来たマグマの手がそれを阻止しに掛かる。薫のピンチに、美井奈の範囲スキル技が炸裂。マグマの手は、奇麗に破壊されて行った。

予断を許さない状況に、とうとう『妖精の呼び鈴』による最後の助っ人投入！

炎のサルの、炎の防衛やオート回復能力に手間取っていた女性陣も。三人の足並み揃ったの追い込みに、大柄な体躯のサル顔の炎獣人もようやく地に崩れ落ちる運びに。

ガッツポーズで喜びを表現してから、薫が最後の樽の場所を指し示す。美井奈がそれを射抜きに掛かるのだが、今度は何故か厄介な護衛の姿は出現しなかった。

代わりに地面の至る場所にあるクレーター状の窪みから、火の玉が噴き出し始める。

「うおっ、フィールドが何か凄い事になっているぞっ。ボス鳥も、一気に膨らんだっ！」

「樽を全部壊し終えました、隊長っ！ うわっ、火の玉がびゅんびゅん飛んでますねっ」

「うあっ、危ないっ！ これは……安全地帯なんか無いかもっ」

火の玉の派手に飛び交うフィールドは、薫の言う通りに安全な場所など無い感じだ。せっかく召喚した天使と妖精の助っ人も、哀れ

にもどんどんHPを減らして行ってしまう。

こんな危ない場所に長くはいられないと、ボスの火の鳥を囲いに掛かるパーティ。ところが巨大化した最後の敵は、物凄いタフネス振りで行の攻撃にも涼しい顔。

ダメージは与えているのだが、不死身ではないかと思える自動回復を備えている火の鳥。この火のフィールドのせいかも知れないが、この場から逃れる術があるわけでも無し。

とにかく最大スキルで、火の鳥に対する一行。

瑠璃の必殺の《ウォータースピア》で、一気に敵のHPを削る事に成功したパーティだが。敵の逆襲の炎の竜巻は、凄まじい威力で一行に大ダメージを与えて来る。

畳み掛けるような火の鳥の急降下チャージに、ハズミンのHPは3割まで落ち込む。先ほどまでは使って来なかった特殊技に、潰そうにもモーションが判然としなかったのだ。

大慌ての後衛は、回復支援からのタゲ取りに必死。

「わっつ、怖い技使って来たっ！ ハズミちゃん、大丈夫？」

「ちよつとヤバイかも……竜の強化無かったら死んでたな」

「敵もあとHP半分だよっ……ってか、炎の竜巻でこっちも被害甚大だっ！」

助っ人の天使と妖精も、火の玉と竜巻の相乗効果のダメージですでに召喚切れの身。敵のHPも半分を切っているが、こちらも全員かなりの満身創痍状態である。

何しろ、治す端から火の玉でHPを削られているのだ。かなり危険な状態なのは、フィールドにいる皆が一緒の事。ポケットに潜ませた薬品が最後の命綱なのだが、盾役の弾美はポケットを入れ替えている暇も無い。

既にポケットにポーションは無し。後衛もMPの余力は無い。

後衛陣が、エーテルを使い切る勢いでMPを回復し始めた。最後の追い込みのために、魔法の準備に掛かる段取り手段を行っているらしく。天使魔法と妖精魔法で、せめて自分の受けるダメージを減らしてしまおうという作戦らしいのだが。

ここまでフィールドが激変するとは思わなかった為に、二人とも大量MP消費魔法は自粛していたのだけれど。もはや、そんな事は言っていられない状況である。

しかし、何とこの天使魔法が状況を一変させる事に。天使の輪つかを頭に頂いたルリルリが近付いた噴火口は、火の玉の噴出を停止させる事が判明したのだ。

危険地帯から脱出したフィールドで、黙々とMP回復に努める瑠璃。

「火の玉止まったみたいっ、ちょっと休憩するね〜」

「よしっ、瑠璃が休憩終わったら総攻撃開始するぞ！」

「了解ですっ、隊長！今の内に、ポケットにSP回復薬入れておきますねっ！」

追い込みに向けて、着々と水面下で準備を進めるパーティ。2度目の炎の竜巻は、弾美の《闇の断罪》で辛うじて潰す事に成功した。その代わりにプレスを受けてしまい、ハズミンのHPは再び5割を切る勢い。

瑠璃の掛け声と共に、後ろから回復魔法が飛んで来た。弾美の体力を安全圏に回復させつつ、前衛に出張った瑠璃が細剣でのスキル技の一撃を喰らわせると。

天使の輪の効果だろうか、何と火の鳥が1サイズ縮小してしまった。バニッシュ込みの《Z斬り》は、敵ばかりか味方のど肝をも抜くダメージを叩き出す。

その代償として、天使の輪の効果が全て消え去って、フィールド

は再び火の玉地獄に。

「わっ、わっ、火の玉が復活しちゃった、ごめんみんな」

「いやっ、ボスはサイズが縮んでかなり弱ってる！ 今の内に畳み掛けるっ！」

「了解ですっ、妖精の加護がある内に、連続スキル攻撃行きますよっ！」

美井奈の元気な突撃合図と共に、必殺の連続スキルが炸裂する。

1段階前のサイズに戻されたボスの火の鳥は、完全に美井奈の遠隔攻撃に翻弄されてしまう。

闇の秘酒を注ぎ込んでの連続スキル技の敢行に、とうとうタゲすら取ってしまう美井奈。そこに畳み掛けるように、薫の追撃の《竜巻チャージ》からの《貫通撃》が炸裂。

弾美がポケットの補充をしている間に、敵は見る見る弱って行く有り様。瑠璃の水魔法での追撃が行われるに至ると、弾美は近付いておざなりに殴るだけで終焉となってしまう。

怒涛の追い込みは、完全に弾美の想像の上を行ったようだ。

凄いなあとの弾美の素直な感想に、何となく誇らしげな女性陣。

息もぴったりの戦術に、パーティの底力を見た思いだ。今日最初のミッション失敗のダメージも、既に完全に払拭されている様子である。先に待ち受ける最終ステージ攻略に向けて、頼もしい限り。

エリア排出の画面転換のあとに、報酬のドロップ報告がなされた様子。恒例のハイタッチを全員でしながら、今回のリングの性能にワイワイと意見を述べ合う一行。

エリア脱出を転移の棒切れで行うと、一同は中立エリアでしばし休息。

この戦闘の経験値で、瑠璃が33へとレベルアップした。戦闘よ

りも謎解きが多いイベントエリアのお陰で、経験値も入りにくくな  
って来ているのは確かである。

今回のエリアのドロップは、リングとグローブの他にも兜とマン  
トがあつたのだが。性能は微妙で換金リスト入りとなった。他にも  
炎の神酒が人数分出たのは何かの洒落だろうか。

リングは薰が貰い、グローブは瑠璃が持つ事に。

炎の特級リング 炎スキル+4、腕力+4、攻撃力+20%、  
防+4

炎のグローブ 攻撃力+4、HP+14、時々炎獄効果、防  
+14

まだ時間があるならば、権利を取得した樹上の見学か、明日の時  
間短縮の為にタウロス族の集落に移動しておこうとの意見が出たの  
だが。弾美が確認に降りて伺うに、美井奈の母親が到着するまでは  
まだ平気との事。

それなら明日の為にタウロス族の集落に行こうと、一同大急ぎで  
移動に取り掛かる。すっかり景色にも慣れたフリーエリアを横断し  
ながら、絡んで来る敵は雑魚扱いで始末する。

何とか10分ちよつとで横断を終える頃には、時計も7時に近付  
いていた。

ログアウト後に、全員で手を洗ったりお皿を並べたりと夕食の準  
備を手伝う子供達。普段食事をしているダイニングのテーブルでは、  
とても人数分の席が取れないので。

リビングにテーブルを追加して、即席の宴会場を作り上げる年少  
組。弾美を先頭に、テーブルを物置から出して来たり、人数分の座  
布団を用意したりと忙しく動き回る。

美井奈も楽しそうに、お手伝いに駆け回っている。

大人達も賑やかに、談話しながら夕食の準備を進めているようだ。普段はあまり飲まないビールもテーブルにセッティングし、週末でもないのに本気で宴会モードのよう。

酔飯の入ったお櫃と具の取り揃えられた大皿が用意されて、何となく皆のテンションも上がって行く。他のおつまみ的なおかずもテーブルを賑わせ始める頃に、ようやく美井奈の母親が到着。

子供達がやんやの喝采をあげたのは、ようやく食事でありつく事が出来る為。

「遅れて済みません、ちょっとお土産を買いに寄ってたもので……遅れそうだったけど、手ぶらで来るのも気が引けたものですから」  
「あらまあ、そんなに気を使わないでいいのに。さあさあ、お入りなさい、子供達がお腹を空かせて待っているわよ」  
「そうね、まずは食事を始めちゃいましょうか。恭ちゃん、音頭を取って頂戴」

相変わらず他人の家でも我が家振りを発揮する恭子さんに、律子さんも慣れたもの。ホスト役を早々に諦めた律子さんは、とにかく食事を始めてなあなあにする気満々のよう。

全員が着席するのを見計らって、恭子さんが食事の開始の合図。大人達はビールの満たされたグラスで乾杯をして、薫のグラスも一応大人仕様なのだが。

飲み慣れない飲み物を口にして、早くも顔が朱色の薫だったり。

場は巻き寿司の食事会に浮かれる年少組と、アルコールの力でハイ状態の大人組の2組に分かれ。薫は乾杯には付き合わされたものの、まずは空腹を満たすべく食事組に参加。

瑠璃と一緒に、弾美や美井奈の分の巻き寿司を作りながら、自分

の分も調達するのだが。美井奈も作ってみたいと、嬉しそうに見様見真似でチャレンジする。

「お兄さんっ、どの具がいいですかっ？ お姉ちゃまが食事中は、私が作りますよっ！」

「それはいいけど、お前酢飯を詰め込み過ぎだっ。海苔が破れかけてるぞっ」

「手作り感があふれてて、いい感じじゃないの？ 大食いの弾美君専用っぽくて」

薫が笑いながら、会話で油断している隙に。薫の飲みかけのビールを、弾美が失敬して口にする場面も。弾美もあっという間に顔が赤くなり、薫同様にお酒に弱い事が判明した。

とは言っても、こちらの組もアルコールに頼らず賑やかで騒がしい食事風景なのは間違いなく。ある程度空腹が満たされるまでは、騒がしいほどオーダーが飛び交う羽目に。

ここでもお母さん役の瑠璃は、皆のオーダーにてんてこ舞い。

大人組は、最初はさすがの威厳で静かな談合から始まっていたのだが。恭子さんのピッチが上がるにつれて、つられる形で女性陣がグラスをどんどん空にして行く始末。

お酒を口にしていないのは、瑠璃の父親ただ一人。後で車で送って行く為と、元々お酒には強くないためなのだが。女性陣のピッチの早さに、やや頬が引きつっている様にも見受けられたり。

弾美の父親も、美人の美井奈の母親にお酌して貰って満更でも無い感じ。

「沙織さんも、結構いける口なんだな。向こうが荒れて来たら、あんまり近付かない方がいいぞ？ 特に恭子さんに捕まったら、逃げれなくなる恐れが」

「そうだねえ……律子さんくらいだよ、それを止められるのは」

「お母ちゃまがあんなに飲むの、実は初めて見ましたけど。明日も朝から仕事あるのに、平気なんですかねえ？」

「むうっ、大人は付き合いで一杯って言葉があるからなあ。薫っちを人身御供に、沙織さんを救出した方が良くないか？」

美井奈の言葉を真に受けて、顔を見合わせる年少組だったが。弾美の悪巧みに乗っかる格好で、年長の威厳を示しつつ薫がお酌係を買って出る事に。夕食をご相伴に預かった薫の、まあせめてもの恩返しと言ったところだろうか。

同時に美井奈が、デザートの催促を母親にねだる作戦に打って出る。お土産に持って来たものが、スイーツなのをお見通しの上での年少頭の脳戦なのだ。

それが効を奏して、作戦通りに沙織さんがコーヒーの欲しい人の集計をして来る。年少組に混じって、少し申し訳無さそうな感じで瑠璃の父親も挙手して来たり。

瑠璃が席を立て、何故かお隣さんの家の台所をご案内。

「おっ、シュークリームだっ、美味しそう！」

「少しテーブルを片付けた方がいいかな？ ハズミちゃん、ちょっと手伝って」

その手伝いには美井奈も参戦して、何とか母親を年少組のエリアに隔離する事に成功したよう。ホッとしつつも薫を窺えば、案の定恭子さんの話し相手から逃げ切れていない。

気の毒に思いつつも、コーヒーとシュークリームで食事を締めくくる甘党な面々。沙織さんも酔い覚ましに丁度良いといいつつ、その顔にはそれほど酔った形跡は窺えない。

どうやら体質的に、お酒の類いには強いようだと推測する年少組だけ。娘と弾美達の気遣いには気付いていたようで、そっ感謝



の言葉を述べて来るのはさすがである。

それと同時に、向こうの大人達は明日は平気なのかしらと、そんな気遣いも。

「いいんじゃないの、あれはあれで。研究に行き詰まる度に、結構暴走する事あるから。恭子さんの研究スタッフチームは、そんな事じゃもはや驚かないと言う噂が……」

「そ、そうなの……職種は違えど、やっぱりどこも大変なのねえ……」

「沙織さんは、どんなお仕事してるんですか？」

瑠璃も会話に加わって、こちらはこちらで話が盛り上がる。沙織さんの仕事は、ネット通販系の小さな会社なのだそうで、服飾から小物やファッションの分野を取り扱っているそう。

美井奈も時々、母親の手伝いでモデルとして活躍するのだと、本人的には大威張り。子供服などは、実際に着ている写真の方が遥かに売れ行きが良いそう。

瑠璃も今度モデルしてみないかと誘われて、本人は動揺しまくりの場面も。

是非一緒にモデルをやりましょうと、美井奈あたりは明るくノリノリに誘って来るのだけれど。本人はかなり消極的で、とても自分には務まりそうにないと辞退の言葉。

しょっぱい奴だなと、弾美も幼馴染の消極性に呆れ顔である。モデルから連想する体型や顔立ちに、とても自分は当てはまらないからと、こんな時だけ饒舌に語りだす瑠璃だったり。

良かったら考えておいてねと、沙織さんはやんわりと誘いのモーション。

夜も良い具合に更けて来て、そろそろお開きなムードに。何しろ

母親同伴とは言え、小学生が混じっているのだ。瑠璃の父親がテーブルから立ち上がり、美井奈親子と薫を送って行く構え。

恭子さんと律子さんは、まだまだ飲み明かしたい様子ではあるものの。それでも玄関先までお客様を送り出し、また今度ねとの挨拶を忘れない。何より久しぶりに破目を外した感に、二人の母親は大満足な様子である。

何となく引きつった顔の薫が、にこやかに会釈を返す姿が印象的かも。

子供達もお別れの挨拶を終えたのは良いが、瑠璃は残ってテーブルの片付けを始める素振り。なにしろ母親が腰を落ち着けて、帰る気配をちつとも見せないものだから。

仕方なく弾美が手伝いながら、瑠璃が洗ったものをふきんで拭って食器棚に戻して行く作業をこなし始める。隣の瑠璃がモジモジしているのに、気付くくらいは近い距離で。

不審に思った弾美は、瑠璃の顔色を窺ってみるのだが。

「私……モデルって柄じゃないよねえ、ハズミちゃん？」

「お前……まだそんな事考えてたのかつ、アホだなあ」

「だって、やつぱりねえ……私は美井奈ちゃんとかと較べると、地味だと思っし」

ここでお前は綺麗だよなどは、口が裂けても言えない弾美は。

困った顔付きで視線を彷徨わせたついでに、隣から成り行きを覗いている親達の顔を発見して真っ赤に。

ヒューヒューと冷やかしの声が掛かるにつけ、瑠璃も恥ずかしそうに顔を伏せてしまう。お母さんは飲み過ぎだから今日は帰ろうと、瑠璃の言葉もいつになく恨めし気。

そんな感じで、今夜は様々な波紋を呼んだ食事会だったり。

### 23 光と闇のトリガー！（前書き）

世間の学生さんは夏休みのようで、うちのクラブにも子供率が急上昇して大変です。体験レッスンも大口の予約が増えて、小学生19人とか、課外授業のついでに150人以上の子供の波とか。相手をするだけで、かなりの労力だったりしますよね（笑）。

そんな忙しさの合間の休みですけど、原稿の更新作業だけは忘れちゃいけない。昨日の夜はさすがにヘトヘトでしたが、お休みの今日は何とか頑張りますよっ？

実際、免許の更新もそろそろ行かないと駄目なんですけど。面倒なので、既に3週間くらい延ばしているという……今日ももう、諦めました（笑）。

とにかく疲れを取らないと、夏バテしてる場合じゃないし。

さて、今回も未投稿作品という事で、ちょっとドキドキしながらの更新作業なのですが。アクセス数も心なしか増えてる感じで、以前に読んでいてくれた人が気付いてくれてるのかなって安堵してみたり。

光とか風の属性外の宝珠も出て来て、こちら辺は次回作への伏線だったりもしますけど。取り敢えずは、弾美達にテストケースとして使用してもらって。

そんな悪巧みも、進行中だったり（笑）。

気付いたら、もう地上エリアもほぼ行き尽くした感じですねえ。後に残すは、最難関の樹上エリアのみ。ストーリーを考えるのにも、とても苦労しました。

何せ、ボスである魔王の背景を、ほとんど考えていなかったものですから（笑）。出て来る敵を倒して、立ち塞がる謎を解き明かし

て、ゲームはそれでも盛り上がりますけど。

物語の厚み的には、何か読者に語りかけるメッセージが欲しいもの。以前に買ったファンタジー小説で、全文章の8割が戦闘シーンと言っているのがある。

さすがにちょっと辟易しました、バランスって大切だなあって。

まあ、自分の書いた小説が、ちゃんとバランス取れているかは謎ですが（笑）。

取り敢えず今回の、光と闇の物語、心行くまでお楽しみ下さい

### 23 光と闇のトリガー！

班ごとの給食の時間が終わって、茜はいつも昼休憩と一緒に過ごす友達を探し始める。2年A組の教室は、他のクラスに較べると静かで落ち着いた印象らしいのだが。

それでも食事を終えて、昼休憩を思い思いの場所で過ごそうとする学生の波は、結構な騒がしさである。瑠璃とも静香とも班が違うので、食事中は二人と話の出来なかつた茜だったけれど。

昼休憩はまだ30分以上ある、焦る事も無い。

ところが瑠璃のいる班を見て、茜はちょっと焦り顔。同じ班の男子生徒に捕まって、瑠璃が抜け出せなくて困り顔なのが見て取れる。最近はこの様な事が多いと、本人もなにやら戸惑う現象が生じているそう。

フランスカの限定イベントの情報や戦略を聞き出すとする輩が多く、違う人に何度も同じ話を聞かれるそうなのだ。それは大変そうだと、ドロップアウト組の茜や静香には、言ってみれば他人事なのだ。

発見した時には、なるべく助け舟を出すようにしている最近の茜だったり。

方法は、遠くから名前を呼ぶという消極的なやり方なのだが。それでも瑠璃は一瞬嬉しそうな表情を浮かべると、男子生徒に断りを入れてこちらに早歩きで近付いてくる。

感謝の表情なのは、長年の付き合いで分かる。もう一人、静香の席を見遣ると、着席したまま動く気配はなし。それでもよく見れば、指先だけがひらひらと宙を舞っている。

どうやら、架空のピアノの鍵盤に触れているよう。

二人に輪を掛けてぽうつとした性格の静香だけに、それ程突飛な行動に見えないのが不思議である。茜はそろりと近付いて、後ろからちよんと友達の肩を突付いてやると。

長い髪がサラリと揺れて、整った顔が嬉しそうにこちらを見上げて来る。和風な感じの大人びた顔立ちなのだが、大きな瞳は性格に比例して優しさがにじみ出ているよう。

クラスどころか、学年でも評判の美人さんである。

「今日はどっちに行こうか、音楽室開いてたらそっちに行く？」

「図書室は、人がいたらお話出来ないもんねえ。司書さんがいたら、お茶出して貰えるけど」

「取り敢えず、特別教室の棟まで行こうか？」

そんな感じの遣り取りの後、いつものように三人で連れ立っての移動を始める。生徒の中にはグラウンドや体育館で運動するもの、そのまま教室で座談するもの、学内の空いている部屋で談話するものなど、それぞれ好きに昼休憩の時間を費やしている。

皆が好きに時間を過ごす事を前提に、昼休みは校内の施設も割と自由に使わせて貰えるようになっていたのだ。そんな訳で瑠璃達も、音楽室のピアノを目当てに通う事もしばしばである。

演奏するのは、ピアノ教室に通っている茜と静香の役目なのだけだ。去年はクラスが違ったので、こんな方法でよく昼休みをコミュニケーションションの時間に使っていたのだ。

そんな名残りで、同じクラスになった今年も校舎をうるつく習慣が。

「さつきも期間限定イベントの事を聞かれてたの、瑠璃ちゃん？」

「うん……最近は最終局面に向けての予想や戦略なんかをよく聞かれるよ。みんな真剣なのは分かるけど、私はついて行ってただけだから上手く答えられなくて」

「私と静ちゃん、参加資格を早々に失っちゃったからねえ。ちょっと残念だけど、ゲーム下手なんだから仕方ないか。この中学校にも、まだ頑張ってる人も多いんだねえ」

「この中学校内では、多分5チーム位じゃないかってハズミちゃんが言ってたけど。高校生とか大学、社会人チームには押されてるみたいなのは確かなのかなあ？」

なる程と、納得顔の茜。5チームが全員中学生での構成としたら、約20人程度だろうか？ それだと1クラス平均、1〜2人は未だに資格を持っている計算になる。

友達の瑠璃から話の筋や冒険内容などは、毎日聞いている二人なのだが。こちらから提供出来る話が無いのは、やっぱり寂しいと感じている茜達だったり。

基本、おっとり系で引つ込み思案な静香と茜なのだけれど。ネットゲームなどでの多人数参加でのプレイは、正直嫌いでは無かったりする。もちろん、ファンタジー系の物語の内容や冒険話も同じくお気に入り。

そこら辺は、やっぱり瑠璃の親友だけはあるのだが。

最近はおっぱら聞き役に回っていて、瑠璃から美井奈の勇ましい変貌振りを聞いて目を丸くしてみたり。今までに無い限定イベントの作り込みにも、いい加減驚かされていたが。

瑠璃の話す物語は、静香や茜にはいつも新鮮で楽しいスパイスには違いないのだ。瑠璃もかなりの語り上手で、こればかりは母親より勝っていると茜は太鼓判を押している。

瑠璃から見ても、二人のピアノ演奏を聞くのは大好きで、それはお世辞でも何でもない。二人の発表会は、小学生時代から欠かさず招いて貰って通っている経歴もある事だし。

そんな感じで、良関係を続けている三人である。



「大樹の試練つて、何だか不思議な気もするよねえ。瑠璃ちゃんは、環境問題の提示が根本にあるんだって推測してるんだっけ？」

「うん、魔女が敵だつてポスターやタイトルで打ち出している割には、あんまり出て来ないし。どっちかって言うと、人と大樹との関係性？ に重点が置かれてる気がするの」

「悪い魔女つて、もつと意地悪でもいいって気もするよねえ？ 大ボスだから、あんまり先回りして出て来れないのかも……そう言えば、最近メイン世界にも大樹と魔女の噂が流れてるよ？」

「えっ、そうなの？ 限定イベントとリンクしてるって事？」

ビックリ仰天な瑠璃は、思わず大きな声で聞き返してしまう。最近メイン世界で、茜や静香たちドロップ組同士で、よくレベル上げを開催しているらしいのだが。

その合間の息抜きに、最近新しく追加されたマップで冒険を楽しんだりしていると。そういう限定イベント関係の噂的なモノが、たまに耳に入ってくる事があるそうなの。

そんな事実も手伝って今度のバージョンアップで、ひよっとしたらイベントで使用されたエリアとメイン世界が、繋がるんじゃないかと皆が推測しているそうなのだが。

そしたら今度は皆でワイワイと楽しめるねと、無邪気に喜ぶ三人だったり。

目的地の音楽室についても、そんな取り止めのない話がメインになつてしまい。ピアノが他の学生が陣取つていて使用出来ない事もあり、雑談ばかりで昼休みを過ごす結果に。

それでも意外に盛り上がりを見せる、ゲーム関連の話題。普段の学生生活では、毎日同じ日課と言つか時間割りばかりでときめきなど無いのは当然なのだが。

ファンタジー世界での冒険のドキドキ感、自分達に非日常を提供してくれる。元々が内向的で、あまり出歩く機会のない少女達で

も、ネット世界ではいつぱしの冒険者なのだ。

何とか試験週間前には、自分達のキャラをレベル55にしたいと告白する二人。

「そしたら、私とのレベル差もあまり気にならなくなるねえ。ほら、前に話した女子ばかりの高校生ギルドみたいに、女の子ばかりで冒険を楽しめるかも知れないよっ」

「あゝっ、それはいいかもっ。この間、初めてエリアに開設された擬似美術館とか音楽ホールを訪ねてみたんだけど。やっぱり男の子と一緒にじゃ、間が持たないと言うか……」

「そうだねえ、鑑賞する時間が全然違うから、こっちも落ち着いて滞在できなかつたよ」

フランスカ内には、その大容量の回線速度を活かしての、色々な催し物も存在していて。現実開催されている美術館の展示物の一部紹介したり、有名なクラシック音楽を解説付きで楽しんだり、はたまた市民アンケートに参加したり。

実に門戸の広いつくりも、ケーブル回線の恩恵と言えるのだが。最近は限定イベントエリアばかりでのプレイの瑠璃も、ちよつとメイン世界での冒険を思い起こしてほんわかしつつ。

順調にメイン世界でのキャラを成長させている二人に、頑張つてとのコール。

珍しく、ゲームの話ばかりで昼休みを過ごしてしまった一行だったが。またこの前みたいな、大掛かりなギルドでのオン会をしたいねと、架空世界では積極的な意見も出してみたり。

ネットの中の自分の分身に、かなり愛着も湧いて来た感のある静香と茜なのだが。まだまだ育成方針も固まっておらず、色々と聞きたい事もあるような素振り。

今度、知り合いから貰ったデータ集の同人誌を見せてあげると、

瑠璃は何とか先導役を果たせそう。この前の日曜日の大学での出来事も、弾美だけが得をした訳でもないようだ。

一晩で読み終えた瑠璃にも、満足の行く内容だったのだ。

女性陣の企みは、そんな感じで無邪気な事この上ないのだが。ゲームを楽しんだり愛している気持ちは、他の男性ギルドメンバーと同じ程度には強いよう。

いつか頼れるキャラになるのかは、不確定な未来予想図ではあるけれども。

レベルアップと修験の塔でのスキルポイントの取得で、一気に武器スキルが上昇したハズミン。取得スキルも一気に2つ増えて、補正スキルの《追撃》で、手数も少し増える事となった。

さらに複合技の《グランバスター》は、土属性の範囲ダメージ技である。先に覚えている《ドラゴニックフロウ》ほどは強力ではないものの、先に竜魔法を掛ける手間が無いお手軽さが良さげである。ただし、土属性なので、飛んでいる敵には無効のようだ。

以前に取得していた《二段斬り》の強化も、なかなかに使え勝手が良くなってグッド。さらにマントの交換による攻撃速度の上昇も、前衛としては有り難い仕様なのだが。

ボスキープが、最近はメインの仕事となってしまったハズミンにとって。攻撃力の上昇よりはHPや防御力のアップの方が、実はありがたい気もする今日この頃である。

レベル上昇のステータスの補正ポイントを、結構な確立で体力に注ぎ込んでいる甲斐もあって。HP総量は、美井奈のほぼ倍にまで達しているハズミン。

パーティの盾役として、まさに真価を發揮出来るキャラとなって

いる。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：33

取得スキル : 片手剣75《攻撃力アップ1》 《三段斬り》

《複・トルネードスピン》

《下段斬り》 《種族特性

吸収 《攻撃力アップ2》

《上段斬り》 《複・ドラ

ゴニックフロウ》

《複・グランバスター》 《

追撃》

: 闇73《SPヒール》 《シャドータッチ

》 《闇の断罪》

《グラビティ》 《闇の腐食》 《

闇の刺針》 《ダーククロス》

: 竜10《竜人化》 : 風20《風鈴》

《風の鞭》

: 土25《クラック》 《石つぶて》

種族スキル : 闇33《敵感知》 《影走り》 《SPアップ+

10%》

: 土10《防御力アップ+10%》

装備 : 武器 破邪の剣 攻撃力+21、HP+20、耐呪い

効果《耐久15/15》

: 盾 龍鱗の盾 耐ブレス効果、防+18《耐久

15/15》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、

HP+25、防+15

:首 番人の首輪 攻撃力+3、腕力+2、体力+3、防+8  
 :耳1 黒虫のピアス 闇スキル+3、SP+10%、防+4  
 :耳2 白豹のピアス 器用度+3、HP+10、落下ダメージ減、防+5  
 :胸 暗塊の鎧 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+25  
 :腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+15  
 :指輪1 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、防+5  
 :指輪2 闇の特級リング 闇スキル+4、SP+10%、SP上昇率UP、防+4  
 :背 白翼のマント 器用度+4、HP+10、攻撃速度UP、防+11  
 :腰 闇のベルト ポケット+4、闇スキル+3、SP+10%、防+10  
 :両脚 魔人の下衣改 攻撃力+5、体力+3、腕力+3、防+15  
 :両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+10

ルリルリモレベルが1つ上がって33へと達した上、個人強化によって武器スキルも上昇。それによって、補正スキルの《クリティカル2》を獲得して、さらにクリティカルが出易くなった。

嬉しい強化なのだが、やはり依然として出現しない二刀流のスキルに、弾美などはイライラ。本人はここまで来たら、今変更されても対応し切れない部分もあるのだが。

メンバーからのジエルの融通で、氷魔法の取得もあつたルリルリ。これは裏技的なやり方で、+5の装備を強引にカメレオンジェルで同化させてしまう方法なのだけれど。

ジエルは金貨3枚の価値、それで術書5枚分の取得は+2お得なまさに裏技である。こんな方法を見つけるのも、まあゲーム世界では楽しいイベントではあるのかも。それにより取得した新魔法は、何と《ブリザード》という範囲攻撃可能なもので、パーティとしても頼もしい限りである。

装備面では、グローブで防御力やHPが上昇したのだが。手と足の部分が炎系の暖色のグラフィックに変化して、見た目も結構統一感が出て来た感じだろうか。

本人的には、実はそれが一番嬉しい事だったり。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：33

取得スキル : 細剣66《三段突き》 《クリティカル1》 《  
複・アイススラッシュ》

《麻痺撃》 《幻惑の舞い》

《Z斬り》 《クリティカル2》

: 水71 《ヒール》 《ウォーター

シエル》 《ウォータースピア》

《ウォーターミラー》 《波紋ヒー

ル》 《アシッドブレス》

《水の分身》

: 光30 《光属性付与》 《エンジェルリ

ング》 《ライトヒール》

: 氷50 《魔女の囁き》 《魔女の足止め》

《魔女の接吻》

《氷の防御》 《ブリザード》

種族スキル : 水33 《魔法回復量UP+10%》 《水上移動  
》 《MP量+10%》

装備 : 武器 戦闘ネコの細剣 攻撃力+15、敏捷度+2、  
 MP+8 《耐久12/12》  
 : 盾 氷の盾 知力+4、MP+20、防+14  
 《耐久12/12》  
 : 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S  
 P+10%  
 : 頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+  
 5、MP+25、防+8  
 : 首 サファイアのネックレス 腕力+3、S  
 P  
 +10%、防+5  
 : 耳1 天使のピアス 光スキル+3、知力+2、  
 MP+8、防+3  
 : 耳2 流水のイヤリング 水スキル+5、氷スキ  
 ル+5、MP+25、防+5  
 : 胸 流水の鎧 水スキル+5、氷スキル+5、  
 MP+25、防+18  
 : 腕輪 炎のグローブ 攻撃力+4、HP+14、時  
 々炎獄効果、防+14  
 : 指輪1 光の特級リング 光スキル+4、HP+15、  
 攻撃距離+4%、防+4  
 : 指輪2 プラチナの指輪改 腕力+4、HP+20、  
 攻撃速度UP、防+8  
 : 背 精霊封入の人形 HP+50、MP+50、  
 SP+10%、防+1  
 : 腰 複合素材のベルト改 ポケット+4、器用  
 度+5、MP+13、防+11  
 : 両脚 流水のスカート 水スキル+5、氷スキル+  
 5、MP+25、防+10  
 : 両足 炎獄のブーツ 炎スキル+2、腕力+2、

HP + 10、防 + 12

レベルの上昇こそ無かったが、個人強化で弓術スキルが9つも上昇したのは大きな点である。《みだれ撃ち》にも強化が入り、お得意の連続スキルでの追い込みにも拍車がかかる事に。

固定化された装備が多過ぎて、装備の変更が容易でない現状のミイナのだが。取り敢えずは矢弾の変更によって、色々と戦闘の幅を広げる手段をマスターしている。

最初の頃のビギナーっばいへボ振りからは、考えられない成長を見せる雷娘だが。最近の瞬発力の高い削り力は、弾美さえも目を見張るものがあるのは確かである。

弾美からは『キラビー』の愛称も賜って。益々凶に乗る美井奈だった。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：31

取得スキル : 弓術59 《みだれ撃ち》 《近距離ショット1》

《攻撃速度UP1》

《貫通撃》 《複・スクリユーア

ロー》 《影縫い》

: 光50 《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》

《フェアリーウィッシュ》

《フェアリーヴェール》

: 風24 《風の陣》 《風の癒し》 : 水

10 《ヒール》

: 雷33 《俊敏付加》 《俊足付加》 《ス

パーク》

種族スキル : 雷31 《攻撃速度UP + 3%》 《雷精招来》

《落下ダメージ減》



装備 : 武器 神樹の長杖 攻撃力+25、知力+5、MP+28  
 ≪耐久14/14≫  
 : 遠隔 雷鳴の弓矢改 攻撃力+20、器用度+5、敏捷度+5  
 ≪耐久14/14≫  
 : 筒 朱塗りの矢束 攻撃力+20 追加炎ダメージ  
 : 頭 妖精のクラウン 光スキル+4、風スキル+4、SP+10%、防御+12  
 : 首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP+10%、防+5  
 : 耳1 白蛍のピアス 光スキル+3、HP+25、防+9  
 : 耳2 陰陽ピアス 精神力+5、知力+5、MP+15、防+6  
 : 胸 妖精のドレス 光スキル+4、風スキル+4、MP+20、防御+20  
 : 腕輪 星人の腕輪 光スキル+2、闇スキル+3、MP+8、防+8  
 : 指輪1 雷の特級リング 雷スキル+4、器用度+4、攻撃速度UP、防+4  
 : 指輪2 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、防+5  
 : 腰 複合素材のベルト ポケット+4、器用度+4、MP+8、防+6  
 : 背 白豹のマント 雷スキル+4、器用度+4、MP+10、防+10  
 : 両脚 妖精のスカート ポケット+2、光スキル+3、風スキル+3、防御+12  
 : 両足 戦闘ネコの長靴 敏捷度+2、MP+6、

防+10

美井奈同様、カオルもへレベルの上昇は先送り。その代わりに個人強化でのスキルポイントの取得によって、武器スキルの上昇を見せた。それによって取得した《大車輪》は、待望の多段スキル。これで武器の耐久度を消費する《貫通撃》を乱用しなくて済むようになった。

もう1つ覚えた《幻影神槍破》は、どちらかと言うと防御的な技のよう。ダメージを与えると同時に、自分の幻影を纏いつつ、敵の反対側に移動してしまうのだ。

1対1の戦闘だと、確かにかく乱に持って来いの技なのだが。弾美がタゲを取っている敵相手だとあまり意味が無い。そういう点では、やはり威力のある《貫通撃》は手放せない必殺技。

防具では待望の特級リングの取得で、炎スキルと攻撃力が両方もかなりの上昇を見せた。他の防具はほぼ同化してあるので、もう弄れる場所も少なかったりするのだが。

限定イベントもゴールが近い。チームの何でも役をこなしつつ、頑張る気満々の薫であった。

名前：カオル 属性：風 レベル：31

取得スキル : 長槍73《三段突き》 《攻撃力アップ1》 《脚払い》 《石突き撃》

《クリティカル1》 《貫通撃》

《複・竜巻チャージ》

《大車輪》 《複・幻影神槍破》

: 炎47《炎属性付与》 《炎のプレス》

《レイジング》 《炎獄》

: 雷20《俊敏付加》 《パラライズ》

風20《風鈴》 《風の陣》

種族スキル : 風31《回避速度UP+3%》 《魔法詠唱速度+6%》 《移動速度UP》

装備 : 武器 赤龍の大槍 攻撃力+32《耐久15/15》  
 : 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、SP+10%  
 : 頭 迅速の兜 炎スキル+4、雷スキル+4、器用度+2、防+7  
 : 首 進みがちな懐中時計改 SP+15%、攻撃速度UP、防+8  
 : 耳1 サファイアのピアス 腕力+2、SP+10%、防+3  
 : 耳2 白蛙のピアス 器用度+2、MP+15、防+6  
 : 胴 迅速の鎧 炎スキル+5、雷スキル+5、腕力+5、防+20  
 : 腕輪 迅速の腕輪 炎スキル+4、雷スキル+4、腕力+2、防+7  
 : 指輪1 迅速の指輪 炎スキル+3、雷スキル+3、防+4  
 : 指輪2 炎の特級リング 炎スキル+4、腕力+4、攻撃力+20%、防+4  
 : 腰 獅子王のベルト ポケット+2、攻撃力+4、HP+15、防+8  
 : 背 迅速のマント 炎スキル+4、雷スキル+4、防+7  
 : 両脚 朱色の袴 ポケット+2、精神力+5、MP+20、防御+12  
 : 両足 炎獄のブーツ 炎スキル+2、腕力+2、HP+10、防+12

『何か、学校で聞いたんだけど……木の葉8枚集めただけじゃ、イベントエリアを制覇した事にはならないらしいなあ。最後のゲートを潜って、果実に換えて貰わないと駄目らしい』

『へっつ、そうなんですかあ。じゃあ後で行きましょうか、今はタウロス族の集落ですし』

『あれっ……でもクリア順位も、確か総合順位の対象になるんじゃないかっただけ？』

薫の意見は確かに的を得ていて、返す言葉も無い一同。弾美もクリア条件を満たしていなかった事を耳にした時には、愕然としてやっちゃったと後悔したのだけれど。

昨日の内に10分ちよつと掛けて、タウロス族の集落に既に来てしまっているのだ。今更後戻りは出来ない、今夜は前もって決めてあったルート通りに冒険を行う事に決定。

その後に、時間を作って果実の交換に行く事に。

そんな訳でのタウロス族の集落からのスタートに、ちよつとケチのついた形になったけれども。今夜最初の戦闘予定の、光のトリガー使用場所はもう目と鼻の先だったり。

薬品の補充もバツチリで、メンバーのヤル気も充分。様々な冒険でパワーアップを果たした一行は、後は突入の指示を待つのみ。時間は夜の8時過ぎ、明日から待望の週末に入る。

前もつての打ち合わせでは、その3日間でクリアまで持って行く予定だ。

『んじゃ、入るぞっつ。瑠璃、トリガーぶち込めっ！』

『ほいほいっつ、みんな用意はいいかな？』

『オツケ、いつでもどうぞっ！』

まずは今夜の初戦、カバンの中の残り少なくなったトリガーを使用する瑠璃。何が待ち受けているのかと、ドキドキしながら待ち受ける一行。お決まりの円形のフィールドに転送されて、さすがに集落でドンパチやる訳では無くてほっとしてみたり。

フィールド内には、2つの敵影。ひとつは人型で、女性のようなが仮面を被っていて顔までは窺えない。ただ、頭上には天使の輪が浮かんでいるので、正体はバレバレだ。

もうひとつは、真っ白な有翼の豹のようだ。イベントエリアのボスで対した記憶が、一行の脳裏に蘇る。かなりの強敵だったが、飛行さえ封じれば何とかなつた筈。

弾美は光属性の敵相手だと文句を言いながら、仮面の天使をブロツクに。

戦闘はいきなり痛烈な技の応酬から入った。仮面の天使の範囲バニッシュから、白豹の飛行モード。薫が白豹にプレスを打ち込むと上空からの三連撃の特殊技が炸裂。

怯むパーティだが、何とかタゲをそれぞれキープ。ところが仮面の天使とハズミンの相性は最悪なのがすぐに判明した。光属性の削りで、相手のダメージが倍化してしまうのだ。

特に止められない詠唱の短い連打魔法は、弾美をこの上なく苦しめる。

『ぐわっ、もうHP半分喰われたっ！ こいつ魔法の連撃を通常攻撃に混ぜて来てるっ！』

『属性の相性が最悪だからねえ……盾役替わった方がよくない？』

『私が行こうか……？ マラソン出来る相手なら、美井奈ちゃんがいいのかな？』

『妖精魔法掛けて、私がマラソンしましょうか！ お姉ちゃまは回

復役で必要でしょうしっ!』

そんな訳で、のっけからの作戦変更。光球を4つまとわり付かせたミイナが、スキル技の連打でタゲを取って行く。俊足魔法も《スパーク》も全て掛け終えていて、マラソン対策はばっちり。

それでも、お怒りの仮面天使が近づいて来ると、美井奈は悲鳴を上げて逃げて行く。

ようやく相性の重荷から解放された弾美は、回復後に白豹の削りに参加する事に。しかし、こちらも素早い動きの敵に翻弄されて、思うような成果が上がっていない様子。

何しろ、敵は左右のステップの他にも、上空にまで逃げ込む事が可能なのである。反対に、敵の咆哮と白雷のプレスは、範囲仕様なので完全に防ぎ切れないのだ。

盾役の弾美の戦闘参加に、正直有り難い思いの薰である。自分がなかなかダメージを与えられず、削りを美井奈に任せてしまうと、タゲの移動が厄介なのだ。

その点、弾美とタゲを取り合っても何の問題も無い。

しばらく美井奈の様子を窺って、フォローが必要ないかのチェックをしていた瑠璃だったけれども。順調なのを確認すると、安心して白豹の削りに参加する。削りでは特に、弾美の《ダーククロス》は抜群の効きを見せている様子。

三人相手でも、全く怯む様子の無い白豹のHPを、闇の魔法は一気に削って行く。さらに困い込んでの3方向からの直接攻撃で、次第に白豹のHPは減って行く事に。

痛烈な牙と爪の攻撃を何とかいなしながら、息を合わせたの追い込みは続く。白豹のHPが半分を切ると、今まで使って来なかった特殊攻撃も解禁されたようだ。

翼から放たれる矢羽根が、一行の動きを麻痺させて行く。こっち

の攻撃の封じ込めに、麻痺を解きながらの必死の反撃。瑠璃の天使魔法の発動で、ようやく麻痺攻撃を封じたと思ったら。

今度は白豹の2つの翼が、大きなゲンコツに変化。加速する連撃。

『うわっ、麻痺から逃れられたと思ったら、今度は連撃かよっ！』

『まだ終わりませんか？』、天使の魔法がびゅんびゅん飛んで来て、チヨー怖いですっ！』

『もうちよっと我慢してっ、美井奈ちゃんっ。あとちよっと、頑張ってっ！』

互いの状況を確認しつつ、お互いを励ましあって戦闘は続く。白豹相手でもキープを苦戦している弾美だが、直接攻撃ならば盾の防御が有効な分マシである。

先ほどの天使の魔法連弾に較べれば全然平気と、がっちりキープしつつ。こちらも連撃での反撃、複合スピン技から一気に追い込みを掛けて行く。壮絶な肉弾戦は、お互いの身を削り合いながらもパーティー側に有利に傾きつつあるよう。

残りHP2割で、とうとう白豹が宙へと逃げ出した。今度はその場からの咆哮とプレス攻撃に、一行も仕方なく魔法で応戦する。数の差で何とか最後の止めを目論むパーティ。

最後は弾美の《ダーククロス》のダメージで、白豹はノックアウト。

壮絶な削り合いのダメージを、何とか身内で補完し合っつて。続いては最大に厄介な敵、仮面の天使に相対するパーティ。美井奈の妖精魔法は、既に3回目の掛け直しらしい。

その掛け直し最中に受けた魔法のダメージで、結構HPがスタスタになっていく美井奈だが。弾美と薫のタゲ取り合戦が加わって、ようやく瑠璃の回復に救われる形に。

最後のボスは、タゲフリーで行こうとの話し合いに。

『コイツはもう、全員で殴って倒すしかないな……とにかく速攻で倒そう!』

『了解ですつ、私も遠慮せずに行きますよっ!』  
『範囲魔法が強烈だから、何とか阻止してみるね』

各々やる事を相談しつつも、まずは手始めにちよっかいを掛け始める一行。仮面の天使のHPは、強烈なオート自己再生によって完璧に回復しているよう。

削るのならば一気に持つて行かないと駄目だと、弾美が《グラビティ》を掛けて美井奈に全力を出させる構え。削りの主力は、あくまで美井奈と薫なのだから。

弾美と瑠璃も、タゲがぶれても魔法で削れるよう、エーテルで魔力を回復済み。

調子を合わせての一斉攻撃は、仮面天使を完全に翻弄していた。手に持つ細剣が獲物を求めて宙を切り、魔法の詠唱はパーティのスタン技で寸前でせき止められる。

仮面の天使のHPは見る見る減って行き、パーティの底力を見せつける展開に。翻弄されて反撃の手段を見出せない仮面の天使は、やはりHP半減から奥の手を披露する。

局面打開の特殊技は、まずはフラッシュからの目潰し効果から。その隙を突いての即時召喚で、天使の背後に宙に舞う妖精が2体出現する。小さくて遠目では判然としないが、それぞれ武器に弓矢を持っているよう。

その代償として浮遊能力を失った仮面の天使の反撃が始まる。

妖精の弓矢による遠隔攻撃の矢面に立ったのは、遠くから順調な削りを見せていた美井奈だった。小さな2体の同時攻撃は、これになかなかの強烈振りを発揮しているようだ。



あつという間に張り巡らせていた妖精魔法の光球が、1つ2つと輝きを消して行く。美井奈の悲鳴に、弾美がフォローに入って妖精に殴り掛かってみるのだが。

すかさずワープでフィールドを逃げ回る妖精達。

『うわっ、どこに行った？ 妖精を捕まえろっ！』

『妖精は攻撃力ありそうっ……でも、天使もフリーに出来ないよっ？』

『妖精は俺が1匹受け持つから、もう1匹は美井奈が撃ち落とせっ！』

『りよ、了解しましたっ、隊長！』

弾美の闇魔法と美井奈の遠隔での反撃が開始され、ようやく妖精に少なからぬダメージが。一方、パーティの攻撃の手を緩められた天使も、薫に対して反撃の構え。

辛うじて瑠璃が魔法を止めるのだが、詠唱の速さにそれも次第に厳しくなって来た。天使の攻撃に細剣のスキル技も加わると、瑠璃も薫も徐々に翻弄され始め。幻惑技で、こちらの攻撃をヒラリと余裕でかわし始める天使。

さらに、スタンを無効にしてからの再度の魔法連弾が一行に浴びせられる。

弾美の叱咤も何のその、天使の追撃は止みそうに無い。いつしかHPも徐々に回復しており、7割程度まで上昇している始末。頭に来た弾美が、範囲攻撃での戦術に切り替えるように指示。

まずは先陣を切って、瑠璃の《ブリザード》が炸裂。範囲に敵が全て入るように計算して、氷属性のダメージが炸裂する。追い討ちを掛けるように、弾美の《ドラゴニックフロウ》が見舞われて。

たまたらずに動きを止める、天使と妖精達。

美井奈の《スクリユーアロー》と薫の《竜巻チャージ》で、天使はともかく妖精はへ口へ口に。作戦通りの流れに気を良くして、弾美が《ダーククロス》で妖精達にとどめを刺して行く。

こうなればこちらのペースだと、再度天使を困い込むメンバー達。これ以上の魔法連弾の的にされると、薬品の消耗具合からして本当にヤバイ状況になってしまう。

頼みの瑠璃のエーテル保有数も、そろそろ打ち止め状態だとの報告が入っており。弾美や美井奈にしても、今回はやたらと魔法に頼る戦法で、MPがもうあやしい状態となっている。

この追い込みで決めないとギリ貧に陥ると、弾美の再度の檄も熱い。

『もっかい足止め行くぞっ、今度こそ最後まで削り切れっ！』

『了解ですっ、隊長！今回は、全て注ぎ込みますよっ！』

『頑張るよっっ、もうMPが持たないから決めないと不味いよっっ』

そんな悲壮な台詞の後押しも手伝って、全力でスキル技を撃ち込む四人のメンバー達。反撃の魔法を何とか封じつつ、とにかくHPを削る事のみに意識を集中させて行く。

再度、仮面の天使の体力が半分を切ったが、今回は何も無くて一安心。HPの減少に、段々と天使の頭上の輪っかの光が増えて行くのを除けば順調そのものなのだ。

どうやらそれに比例して、仮面の天使の細剣にクリティカルが乗るようになる仕様のようだ。モロにそれを喰らった薫と弾美は、自分の喰らったダメージにぞっとする思い。

残り2割の天使の反撃は、ある意味見ものだった。

急にスピードのギアを変えて、天使は自分の幻影をばら撒き始める。分身によって追撃のスキル技を次々とかわし、クリティカルの一撃で弾美のHPを一気に半減させる。

ところが、この華麗な動きが結局は仇となったようだ。美井奈の懐に滑り込むように飛び込んだ天使が、必殺のレイピア弾をお見舞いした途端。何と削り過ぎて、反撃の雷精召還でのスタン状態に追い込まれてしまう。

天使の一瞬の動きの制止を、見逃す冒険者達ではない。薫の《竜巻チャージ》から始まって、弾美と瑠璃の追い込み魔法で、さすがの仮面の天使も動きを止める。

フィールドに鳴り響くファンファーレは、ちよつと場違いな感じも。

とにかく長い激闘を制した一行は、ようやくフィールドから排出された。それと同時に獲得アイテムがパーティのドロップ所持欄に表示され、ようやく歓喜のコメントがちらほら湧き上がる。

報酬の中には優秀な武器や、金のメダルやカメレオンジェル、光の術書や水晶玉などが。武器はレイピアや弓矢、さらには矢束のセツトで、瑠璃と美井奈が仲良く分け合う事に。

特に妖精の弓矢はポケットのついている、世にも珍しい武器となっている。

光のレイピア 攻撃力+17、器用度+4、MP+25《耐久14/14》

妖精の弓矢 攻撃力+23、ポケット+2、敏捷度+5《耐久15/15》

最初のフィールドに要した所要時間は、だいたい20分程度。てこずった感はあるものの、まだまだ時間はたっぷりあると言って良い。しかし、次の現場に行くのに少々困ったトラブルが。

薬品の買い込みは、この地でも出来るので問題ないとして。聖水のパーティ保有数が、意外と少ない事が判明。今から闇のトリガーを使うと言うのに、これでは心許ないと意見が上がる。

闇系の敵が全て呪いを使う訳ではないのだが、やはり心配ではある。

『どうしよう、ハズミちゃん……一旦中立エリアに戻って、買い足した方が安全かなあ？』

『時間が勿体無いだろ、それじゃあ。初志貫徹、このまま進むぞっ！』

『そうですねえ、呪いを使って来ない敵かもしれないですし。この集落から近いんなら、時間節約で行きましょうかっ』

多数決で押し切る形で、一同は準備不足のままフリーエリアに乗り込む事に。それでもやはり、心配だし怖いのは仕方が無い。念の為、他の薬品はかなり多めに買い込んでおいた瑠璃。

何しろ初っ端の光のトリガー戦で、かなりの苦戦を強いられたのだ。次の闇のトリガー戦でも大変だろうとの思いは、メンバーの胸中に芽生えているのは確かである。

それでも、トリガー使用場所の捜索に入ってしまうと、そんな思いはどこ吹く風。トレード場所はどこだと、ワイワイガヤガヤ騒がしく。道中も賑やかにエリアを突き進むのだが。

タウロス族の縄張り横断は、それなりの気苦労と戦闘を生む結果に。

一行が、と言うか瑠璃が逃がしたインプから聞き出した情報では、トレード場所はタウロスの集落から真っ直ぐ南下した場所らしいのだが。それらしき場所に辿り着くのに、たった5分で済んだのは僥倖だったのだろう。

何と言っても、どこから見ても怪しい場所はここしか無いとの全員の見解。黒く濁った水溜まりと、天と地とはびこる禍々しい形状の蔦の群れ。かなり目を引く、沈滞した場所。

そこに彩りを添える、鮮やかな毒々しい色の花の乱舞も目立つ事

この上なく。美井奈が見つけた植物の大きな果実の形状が、一同に嫌な想像を巡らせてしまうのだが。

『かぼちゃに似てますね、ここに生えている果実ですけど……』  
『そうだなあ……いや、そのトレード場所とは関係無い……だろ？』

『関係無いといいけどねえ……パンプキンヘッドは呪いとか嫌だもんねえ……』

招くから口にするなど、何となく逃げ腰な弾美なのだが。取り敢えず、闇のトリガーの使用場所は判明したのだ。持ち数の少ない聖水を、各々念のためにとポケットに放り込みつつ。

それではトリガー使うよと、あまり緊張感の無い瑠璃の一言。

出現した敵は、案の定のパンプキンヘッド。一同からやっぱりとかヤメロとかの怒声が響く中、強制的に戦闘は開始される。フィールドの転移は無し、敵はカボチャ頭1体のみ。

弾美が進み出て、まずはタゲ取り魔法を放つのだが。妙な力場が働いているのか、後退を始めるパンプキンヘッド。手にした小柄な傘を持ち、飛ぶように、跳ねるように。

美井奈が遠隔で、まずはお試しのジャブ攻撃。敵の呪い攻撃が嫌なので、近付いているのは今のところ弾美のみ。その間にと、瑠璃が天使魔法で呪いの阻止に掛かるのだけれど。

輪っかの光に反応して、周囲の植物が活性化。驚いた瑠璃は、思わず後ずさり。

『は、ハズミちゃん……薦のモンスターが、光に誘われてこっちに来てるっ？』

『えっつ、そんな仕掛けってアリ？ ひよっとして、美井奈ちゃんの妖精魔法も駄目って事？』

「うっ、数が多いな……範囲攻撃で一気に倒すか、魔法を引っ込めるか……」

「私も魔法を使いたいですし、ここは倒しちゃいましょう、隊長っ！」

そんな美井奈の我が侘後押しもあって、取り敢えずは弾美の《格蘭バスター》からの《闇の刺針》が炸裂する。鳶のモンスターはその攻撃であつという間に散り散りになりはしたのだが。その間に放置していたカボチャ頭も、そろそろ始動の予感。

手始めに呪いを振り撒きながら、飛ぶようなステップでパーティーの周りを跳ね回る。

まだまだ瑠璃の天使魔法が掛かっているので、呪い攻撃は平気なパーティー。薰と美井奈で攻撃を仕掛けながら、瑠璃が足止め魔法を必死に掛けようと試行錯誤する。

しかし敵も然るもので、瑠璃の魔法はレジストされてちつとも止まらない。逆にカボチャ頭は闇魔法の《闇の刺針》での反撃に転じて来て、全員少なからぬダメージを受けてしまう。

取って返した弾美の攻撃も、軽やかなステップでかわすカボチャ頭。戦場のエリアに変化が無い訳ではなく、再び鳶の生長がパーティーの背後から襲い掛かって来そうな気配。

さらには、転がっている自然のカボチャが、ウルウルと不気味な蠢きを見せ始める。

「えっ、弾美君……カボチャが動いてるっ！これはちょっとヤバくない？」

「むむっ、光系魔法潰しが露骨だなあ。仕方無い、カボチャ2体はやバ過ぎるっ……瑠璃、魔法を止めてくれっ！」

「う、うん。じゃあ、これからは光魔法は禁止だね？」

仕方ない決断とは言え、かなり厳しい制限を負ったのは確かである。その犠牲の甲斐あって、取り敢えず背後からの飛び入り参加の敵は、招かずに済みそうなのだが。

取り敢えずの数の有利を確保した一行は、それに乗じて敵を削りに掛かるのだけでも。大きなダメージを稼げる光魔法が使えないのが、一行に微妙に影を落としているのも確かである。

弾美の《グラビティ》もレジストされて、ステップを潰す手段にも限界が。それでも、作戦変更での美井奈の吹き飛ばし技からの隅への追い遣りが効を奏した。端に追い詰めて、弾美と薫でガリガリと削り始める戦術は有効と思っただ瞬間。

手に持つ傘がパツと開いて、よく分からないガードを始めるカボチャ頭。ところがこれが、カウンターへの呼び水となっていたようだ。攻撃の素振りの無い敵からの、よもやの反撃。

それがまた強烈この上ない。恐るべしカウンター攻撃。

それでも敵の体力が減って行くのは、確実に感じる一行。美井奈の遠隔攻撃は、カウンターの餌食にもされずにパーティの大事な与ダメージ源となっている。

その結果、とうとう後衛の美井奈がタゲを取ってしまう不味い事態に。横着なカボチャ頭は、地面に伸びた蔦を使って、ミイナを自分の面前まで運んで行くという荒業を使用。

そして振り撒かれる呪いの言葉。瑠璃を除く三人が餌食となってしまう、頭に大きな花が生えて来て戦闘不能状態に。養分を吸われているのか、HPがどんどん減って行っている。

慌てて全員、聖水を使用。これで在庫切れの者が多数出現。

『やばいですっ、聖水を使い切っちゃいましたよ、私っ！ お姉ちゃまつ、どうしましょっ！？』

『私はまだあるけど……他の人はまだ平気なら、美井奈ちゃんに1個渡すよ？』

ところが薫も在庫0だとの白状に、これはヤバイ感が急上昇。勢いに乗ったカボチャ頭は、積極的に攻勢に出て来たよう。傘を折り畳んで、レイピアのような突きを見舞い始める。

これがまた、クリティカル込みの嫌なダメージを弾美に与えて来て嫌な仕様この上ない。さらには美井奈の下手な反撃で、カボチャ頭のHPが半分を切ってしまった。再度の特殊技を警戒する一同に、本日何度目の呪い技が降りかかる。

今度も呪いを受けたのは、瑠璃以外の三人であった。何故かパンブキンヘッドを含んで、四人が仲良く輪になって。皆で踊りつつ行く先は、暗く濁った底なし沼のような水溜まり。

その中へと、何の迷いも無く楽しそうに踊りながら進む一行。

『わっ、みんな……何でそんなに楽しそうなのっ？』

『助けてっ、瑠璃ちゃんっ！好きで楽しそうに踊っている訳じゃないのw』

『うーん、このまま沈んで行くのも人生か？w』

『何を諦めてるんですか、お兄さんっ！私は絶対に、最後まであがきますよっ……ってか、聖水が無いですっ！』

瑠璃が何とか《水の分身》からの《ウォータースピア》で、敵の注意を惹き付ける事に成功すると。パーティの踊りもようやく中断して、変てこりんな入水自殺も未遂に終わる。

そのまま分身で時間を稼いで、呪いの自動解除を待つルリリ。目論見通りに何とか自由の身に帰って来た三人は、ここぞとばかりに恨みのこもった総攻撃を再開する。

特に美井奈は、闇の秘酒を使い潰しての総攻撃。スキル技の連続使用に、取り替えたばかりの弓矢が唸りを上げる。負けじと薫も、次々とスキル技の連弾を見舞って行く。

二人のアタッカーの頑張りに、カボチャ頭もタジタジな様子。そ



して残りHP2割で見せる、物凄い最後の悪あがき振り。一同を騒然とさせるには十分な迫力だった。

いきなり巨大化した、カボチャ頭。巨大化したのは、頭の部分だけだった。

『うわっ、カツコ良いですねっ！……そうでも無い？』

『美井奈、お前の感覚はよく分からんな。とにかく潰すぞっ！』

『最後の追い込み、行くよっ！』

己の発した合図と共に、必殺の《竜巻チャージ》を敢行する風の申し子だったけれども。何と巨大頭がカウンターでの頭突きを見舞い、逆に大ダメージを受けてしまう薫。

驚きの声は誰のものだったか。それでも自分には無効だろうと、美井奈が《貫通撃》をお見舞いする。確かにダメージは通ったが、お返しの魔法攻撃で、何と金縛り状態に。

闇の霧がミイナの身体を覆い、移動どせどころか攻撃も不可能になっってしまったと嘆く美井奈。敵のHPはあと少しだと、反撃を恐れずに弾美の《三段斬り》からの《トルネードスピン》。

実に8連撃の多段攻撃に、カボチャ頭のHPもあと数ミリ。

この連撃にはカウンターを取る暇も無かった相手だけれど。しかしカボチャ頭の反撃の頭突きは、技の撃ち終わりに待ちうけていた。多大なダメージと座り込みスタン状態のハズミンに、黒い霧の監獄が追い討ちを掛けて来る。

残ったのは瑠璃だけだったが、その少女は既にカボチャ頭の背後を取っていた。他のキャラには削り力は劣るとは言え、これでも皆に頼られている存在には変わらないのだ。

クリティカル込みの《三段突き》と、それに続く《アイススラッシュ》で、厳しい勝負はようやく決着がついた。弾美達を困っていた闇の呪縛も、次第に薄く霧散して行く。

難敵の撃破に、一行から上がる歓声。

祝い合うパーティの中で、薫が待望のレベルアップ。32への上昇に、ちよつとだけキャラの風格も増したようである。肝心のドロップには、武器装備の類いは無かったとは言え。呪いのマントは良品に化ける可能性はありそうな気配。

その他のアイテムを見てみると、金のメダルや闇の術書や闇の水晶玉。その他にも、大物アイテムの命のロウソクまでは定番でありふれた物だったのだが。

ドロップの中に裏チケットと怪しいお供え物を見た一同は、揃って首を傾げてみたり。

『裏チケットとお供え物のセットって……これは、闇市から入る例の裏エリアの事？』

『むうっ……ここまで40分くらいか？ まだまだ余裕はたくさんあるけどなあ』

『取り敢えず、中立エリアに戻って補充とか休憩入れようか……おトイレ行っていい？』

そんな訳で、思いがけないルートへの扉が開いてしまった形となった弾美パーティ。本当は、時間があればどこかのクエストエリアを散策しよう程度の申し合わせだったのだが。

転移の棒切れで中立エリアへと戻った一行は、トイレ休憩と薬品の買い込みで各々の時間を使う事に。使い切ってしまった聖水の買い込みも、もちろん教会で忘れずに。

何しろ、お金は充分にあるのだから。

『あれっ……裏チケットの確認より先に、イベントエリアのクリア

が先かな、弾美君？」

「おつとそうだな、何か樹上に小さな街があるらしいんだけど。売店とかもあるみたいだぞ」

「ただいま〜っ、今夜はちよつと冷えるね〜」

「おかえり〜っ、確かに肌寒いねえ……また風邪をひかないようにね、瑠璃ちゃん」

そんな気遣いも欠かさない、最年長の薫である。美井奈もモニタ1前に戻って来て、ようやく皆での移動が開始されて。先にイベントエリアのクリアを行うと、案内役を買って出るお姉さん。

何度もくぐった例のイベント入り口を通り抜け、細い螺旋状の上り階段を列を作って上がって行く。5つのエリアの入り口を横目に見ながら、辿り着いたのは行き止まりの小さな門。

門に触ってみると、それぞれの画面で強制イベントがスタート。今まで苦勞して集めた8色の木の葉が、小さな門を前にしてキャラのカバンから舞い上がって行く。

気が付くと、木の葉は光り輝く果実に換わっていた。小さな門も消えていて、その先の景色が目に飛び込んで来る。キャラが輝く果実を手を取った所で、映像は終了。

側に立つNPCが、ようこそとパーティを歓迎する素振り。

「おつ、みんなちゃんとイベント見たか？ 果実を貰い損なった奴はいないよな？」

「ちゃんと貰えましたよっ、何だか感無量？ ですねえ……ここまで長かったですよっ」

「まだ終わりじゃないよ、美井奈ちゃん……あれっ、NPCが23番目の突破だつて言ってるねえ」

「うわあ、結構クリアしてるパーティ多いんだねえ。私達は遅い方？」

一概にそうだとは言えないとは、弾美の言葉。何しろ、10日以上前に中立エリアで活動していたパーティは、実に90近くあったのだから。振り落としの熾烈さ故に、今の活動パーティは3分の2程度までに減っている状態らしく。

それを考えると、むしろ良く巻き返したと言えるかも知れない。

一行は少しだけ時間を使って、小さな街中を見学して歩く事に。ここも中立エリアと同じく、2時間縛りとは関係無いエリアらしい。安心してNPCに話し掛けたり、お店の売り物をチェックしたり。各々が好き勝手に、見知らぬエリアでの時間を過ごして行く。

NPCには人型の者は逆に少なく、妖精の姿が多くて変な感じだ。限定イベントの得点ルールを話してくれるNPCも見付かったが、そいつは何故か眼鏡を掛けたキノコ人間だった。

武器や防具屋の類いは無かったが、薬品系のアイテムは一箇所完璧に購入出来るようになっていて便利ではある。中立エリアではクエスト攻略時のNPCにわざわざ話し掛けて、そこで購入していたのだ。

あとは鍛冶屋とか中立エリアと繋がっている転移の魔方阵とか。

『みなさん、ここから下の街に戻れるっばいですよ。あと、もう一つ魔方阵があるんですけど、これは……何？』

『もう一つは、確か次へ進むルートだったかな？ 何か、果実が大事だって進が言ってたような』

『明日から3日間で、ちゃんとクリア出来るのかな？ まあ、予備で1日あるから平気かな？』

行く末が心配なのは、誰もが同じ事。妙な緊張感も押し寄せて来て、何だかドキドキしてみたり。小さなエリアなので、全て見終わるのに10分もあれば事足りてしまう。

一同は美井奈の見つけた魔方阵で、中立エリアに戻る事に。

中立エリアでも、少々時間を取ったのキャラ修正。瑠璃の使っていたバトルグローブを美井奈がお古で貰って。カメレオンジェルで同化を促進しての交換作業を行っていたのだ。

先ほど出た術書などの類いも全て配布を終わらせて、キャラの強化も一通り終了。そんなこんなで弾みをつけて、残り時間を使って怪しげな裏のエリアへと向かう事に。

正しくは、裏チケットの使用場所はそしか無いとの推測なのだが。闇市に入室した一行は、恐る恐る門番にトレード。かつて何度も通ったやり方で、裏エリアの扉は開いてくれた。

ちゃんと入れた事に、何となく感動する一同。

『わーい、ちゃんと使えたねえ、チケット。本当の裏エリアになるのかな、これって？』

『そうだろうな、発見出来たパーティは、かなり少ない気もするけど……問題はここからか？』

『お供え物のトレード場所？ でも、今回は台座1つしか無いよ？』  
『あつ、本当だ、悩まなくて済んだねつ。それじゃあ、トレードいかな？』

何の問題もひねりも無く、チケットと一緒に出た怪しいお供え物を台座にトレードする瑠璃。今回の裏ルートに限っては、恒例となっていた最初の謎解きは必要ないようだ。

早速転移したパーティは、薄暗く不気味なフィールドに排出される運びに。どことなく気味が悪いのは地面も天井も一緒に、かなり大きな洞窟の中のような感じなのだ。

所々聳え立つ柱は、骸骨のようなものでデコレーションされているよう。地面には、所々にダメージ池が。遠くの壁や地面には、恐竜か何かの巨大な骨が半ば埋もれているのが伺える。

何より目を引くのは、近くに浮遊するNPCのインプ。

久シ振りだナ、人間。キッと来ると思ったぜ。ここのルール八簡単だ、強い奴が生き残ル。脱出したケリヤ、モウ一度俺に話し掛ケルか、向こうノ集落の反対側カラ抜け出シナ。

たダシ、集落ノ中モ外モ一筋縄ジヤ行カナイケドナ。ソノ後は、俺ハ知らン。

『あの時のインプだっつ、ちょっと親切？ 集落が向こうにあるらしいね』

『あつちに見える、あの変な構造物かな？ 壁がちょっと、グロテスクだけど』

『敵が結構、ウヨウヨとしてるなあ……ちょっと進みながら、経験値を稼いでみるか？』

『了解しましたっ、魔法強化したら、ちょっと釣って来ますよっ！』

インプによるおざなりで投げやりなルール説明に、何となくやるべき事を見出した一行だが。敵がいるなら経験値を稼いでみようとかちょっとやる気モードに突入の面々。

不気味なエリアに点在しているのは、やはり闇属性の敵が多いようだ。インプはもちろん、そいつが呼び寄せる魔人系の敵やら、鎧を着込んだ、隙間から青い炎を発している敵やら。

そして、裏エリアで見た鬼形の敵に、鬼面の獣人もチラホラ。

どいつも結構な強さで、必ず3〜4体セットで列をなしている様子だ。その反面、ドロップと経験値はかなり良好。金属製の武器装備とか、さらには金や銀のメダルもチラホラ稼げる感じ。

こいつは凄いと、さらに狩りにも拍車が掛かる。割と良い確率でドロップする武器や装備も、売れば幾らかは稼げそう。30分も続けると、いよいよ集落が面前に見えて来た。

そして集落の入り口には、鎧を着込んだ敵とインプのセットが。

『結構稼げたね、美井奈ちゃん、レベルアップおめでとぅ〜』  
『有り難うございますっ！ メダルも結構稼げましたね〜（＾－＾）  
／』  
『えっと……金が4枚、銀が7枚かな？ また20枚まで増えちゃ  
った』  
『うーん、最終ステージでメダルは必要無いだろうし……使い切っ  
ちやった方がいいのか？』

集落の門番を前に、そんな話を話し合う一同。集中して行った狩りの結果、美井奈も32へとレベルアップ。その結果、遠隔ポイントが区切りの60を迎えて、補正スキルの《速射》を習得したそう。メダルの収集も上々で、最後のキャラ強化に注ぎ込めと言わんばかり。

このまま門番を倒して集落に入るか、もう少し狩りを続けるかを話し合うパーティだが。中の方もちょっと面白そうでもあり、何より外の敵の数かなり減って来ているし。

時間はあるが、入ってしまえと門番との戦闘開始。

鎧武者は中身は空洞のようで、隙間からは青白い炎を発している。見た目硬そうな上に、手にした大斧の威力も高そうだ。こいつは弾美が請け負って、キープしておく事に。

インプの方は、先ほど散々相手して戦い方も分かっている。不利になれば絶対に魔人を呼ぶコイツは、本体はそれほど強くない。さつさと倒してしまいたいが、一撃で落とせる程弱い訳も無く。

弾美はちよつと考えて、今回は自分がマラソン役を受け持とうと口にする。マンネリの戦闘方法より、新しいチャレンジも必要。薫の盾役で機能するならば、その方が殲滅速度は速いはず。

何しろ専属アタッカーが二人も削りに参加するのだ。

互いの接近から、案の定のインプの魔人召還。鎧武者と途中参加の魔人のタゲを取って、マラソンを開始するハズミン。それを見ながら《俊敏付加》とタゲ取り魔法の《風鈴》を自分に掛けて、張り切って盾役を担う薫だが。

ステップは完璧で、インプの通常攻撃を次々とかわして行く薫。ところが防御が一級過ぎて、タゲもちよつと微妙な感じに。攻撃に割く時間も減ってしまったって、結果として美井奈が完全にタゲを取ってしまう事に。

瑠璃は回復に手が掛からず、大助かりだったのだが。

「うっ、やっぱりアタッカー二人だと、チェンジ使えないと無理っばいかもっ。美井奈ちゃん、逃げてっ！ こっちSPまだ貯まってないっ！」

「わっ、ごめんなさいっ！ よく加減が分からなくてっ……ひあっ、魔法使ってきた！」

「足止めするねっ、それともハズミちゃんと交替しようか？」

交替ならば自分ごと、薫がようやくSPを貯め込んでの《竜巻チヤージ》で、2体の敵をがっちりキープに回る。新しい戦術が実らず、ちよつと気落ちした弾美が殲滅組に合流。

殲滅スピード重視ならば、この組み合わせの方が確実に速いのは事実だろっけど。やはり遠隔使用のキャラの立場は、使い方が難しいと思ひ知る羽目になってしまった。

攻撃の威力は物凄く高いのだが、それが仇となり易いのだ。

インプの闇の監獄という魔法に苦しめられていた殲滅組だが、弾美の参入で何とか立て直しを図る。タゲの固定が済んでからの削りも上手く行き、インプのHP半減の特殊技も単なるダメージ技で済んでホツとするパーティ。

再度の召還技だと、洒落にならないとのパーティ会話だったのだ



が。

『もうすぐ終わるけど、そっちは大丈夫か、薫っち？』

『平気だけど、ちょっと魔人の拳動が変かも？ 時々そっちに向かいそうになる？』

その度にプレスで攻撃しているらしいが、召喚者の意向も気になつてい様子な律儀な魔人。インプが倒れる際には、完全にそちらに向かい始めており、薫のちよつかいも完全無視。

次の獲物が向こうから来てくれるのは、それは全く問題無いのだけれど。インプが倒れる際に2体目の魔人を呼んだ事で、事態は思わぬ方向へ転がり始める。

混乱するパーティは、2体の魔人が無敵状態なのに気付いて、さらに大混乱に。

『えっ、攻撃が通じませんよ、この2体の敵っ！』

『うおっ、何でだっ？ 何か条件が揃ったのか？』

『前にもこんなのがあったね、あの時は同時攻撃で削れたんだっけ？』

『おおっ、ちょっとやってみようか？ 美井奈は光属性試してみろっ！』

試した結果、弾美の《グランバスター》はダメージ有り、美井奈の《ホーリー》はダメージ無し。前回の双子座の敵の仕様と一緒にだと、それぞれ範囲攻撃をスタートする一行。

ついでに薫の連れていた敵も範囲内に引き連れての、範囲攻撃のオンパレード。瑠璃の氷魔法から薫のプレスなど合わさって、一見派手なエフェクトが炸裂するのだが。

範囲攻撃のコストはバカにならない為に、連続攻撃で追い込む事など不可能である。魔人のHPは多くて、先に尽きるのはどうして

もパーティ側のMPやSPになつてしまう。

それでもようやく、弾美の《ドラゴニックフロウ》で魔人達のHPが半減。それがきっかけで、魔人達の身体に変化が起きた。1体はコウモリのような翼を生やして、もう1体は腕がムチ状に。

敵はハイパー化の代わりに、無敵状態を手放したようだ。

攻撃力は数段上がったが、今度は通常攻撃が通じるようになった訳である。今度こそ敵をマラソンで分散させて、一行はようやくの集中攻撃。痛烈な反撃を受けながらも、フィニッシャーの美井奈が大技でとどめを刺して行く。

魔人が片付くと、最後まで残った鎧武者が大斧を振り回してパーティを威嚇して来る。範囲攻撃での削りの結果、既にHPは半分近くまで減つてしまっているのだが。

雑魚の鎧武者は、道中に何匹も倒しているため。それ程には、注意も注目もしていなかったパーティだったりする。ところがこちらの中ボス仕様の鎧武者は、少々多芸な様子。

HP半減からの特殊技で、パーティは大パニック。

『うわっ、敵が分解したっ！ 鎧の一部に捕まっちゃった！』

『これって操られ状態？ 勝手に変な方向に向かつてるよっ？』

『私は味方に攻撃してるっ！ 鎧の部位によつて、操られ方が違うのかもっ？』

薫の推測通り、鎧の足の部位に捕らわれた瑠璃は戦線離脱を始める始末。手の部位に捕らわれた薫は、味方の瑠璃を追い掛けながら攻撃し始める。手と足の部位を飛ばした鎧武者は、案山子のような立ちんぼう状態。

唯一フリーな美井奈が、皆の状況にパニック寸前。慌てながらも敵を倒そうと、遠隔攻撃を仕掛けるのだが。実はそれも巧妙な罠で、鎧の胸の部位に捕らわれていたのはハズミンその人。

身代わりに攻撃を受けて、弾美のHPは一気に半減して行く。

『うわっ、俺を殺す気か、美井奈っ！　ってか、俺も捕らわれてるっぽいぞっ！』

『わっっ、ごめんなさいっ、隊長っ！　どっ、どうすれば良いんでしようっ！？』

『あっ………聖水で解除出来たっ！　今から戻るねっ、ちょっと敵に絡まれたけどっ』

瑠璃の素っ頓狂なコメントも、状況を変化させる大事なアドバイスには違いない。続いて薫が呪いの解除に成功し、瑠璃の連れて来た雑魚を受け持つ事に。

次いで弾美が呪いの解除に聖水を使用。今までのお返しとばかりに、多段スキルでの反撃に踏み切る。硬い外殻の鎧武者も、仕掛けを破られてからは勢いが無い。

呪いが来るのを計算していなかった瑠璃は、慌てて天使魔法をスタンバイ。

絡んで来た雑魚の討伐に続いて、何とか曲者の鎧武者も倒し切る事に成功したパーティ。安堵の空気が流れる中、ドロップ品の確認などに追われる一行であった。

金のメダルは2枚もドロップ、さらには闇の術書や闇の秘酒、土竜の尻尾や呪いの大斧など。ギルもこの裏エリアで順調に増えており、瑠璃の顔もほころびっ放し。

集落と言うからには、色々と便利なものが売ってるかも知れない。一同は各々期待しながら、門番がいなくなった扉を潜る事に成功。エリアチェンジの暗転後に、一同が目にしたのは。

闇市よりもダークな、そこは確かに集落だった。

『うわっ、ちょっと気持ち悪いかも……ダークな感じだねえ？ 牢獄みたいな部屋がいつぱい』

『だなあ、ひよっとして襲撃とかあるかも。一応、警戒しながら進もうか？』

『了解ですっ、後ろからついて行きますねっ！』

案外ビビリな美井奈は、この場の雰囲気呑まれたのか尻込みしている感じを受ける。そんな訳で弾美が先頭に立って、奇妙なつくりの集落探検へと進み出す。

通路は行き止まりも多く、ちょっとした迷路模様。何とか見つけた先に行く道は、牢屋のような一室へと続いていた。そこに佇んでいたのは、小さなインプNPC。

一行が話し掛けると、相手はおもてなしをと近くのテーブルを指し示した。

よく来たナ、客人。何も無いが、テーブルのものは自由に口にしてくれ。その後何が起こつても、俺八知らンがナ、ヒッヒッヒッ……。

『いかにも怪しいな……いらないから、お前が食えっ』

『あれっ、弾美君はチャレンジしないの？ 1個くらい当たりがあるかもよ？w』

『あるのかな？ 無視しても、この人は怒らない？』

NPCのインプ相手に何の気遣いなのか、無視は失礼だと熱く語る瑠璃。真面目な少女らしい感想だが、怪し過ぎるとパーティには不評のよう。こんなの放つておいて先に進もうとした一行は、前で閉まる鉄格子に愕然の表情。

相変わらずにこやかなインプだが、台詞はやや刺々しくなっている。これには、ますます不信感を募らせる一行。それでも誰かがお

もてなしを受けない事には、先に進めないらしい。

意を決して、弾美がテーブルに5つ置かれた皿から1つをチョイス。その結果は、やっぱりな感じの毒ダメージ。インプは高笑いを残して、ドロンと消えてしまう。

道は開いたが、毒ダメージは消えず。インプの捨て台詞によると、エリア滞在中は消えない様。

毒づきながらも、とにかく先へと進む一行。しばらくは牢屋の繋がったような、奇妙な迷宮みたいなつくりが続く。道の繋がりを確かめながら、集落の核心部へと向かおうとするのだが。

上へと向かう二人乗りの昇降機に突き当たり、一行はちょっと躊躇してみたり。2台あって、一度に進むのに問題無いのだが、果たしてどちらとも同じ場所に運んでくれるのだろうか？

他には道が無いので、仕方なく二手に分かれて昇降機に乗り込むパーティ。同じ場所に辿り着けて、ホツとするのも束の間、美井奈と薫の乗った昇降機に毒ガスの仕掛けが。

弾美が喰らったのと同じく、エリア滞在中は消えないタイプのよう。

一行はさらに毒づきながら、継続ダメージを受けたまま道を進む。2時間縛りのダメージのようで、気が気ではないのだけれど。階段を上っていくと、またも牢屋のような小部屋が。

そこにデンと座り込んでいたのは、闇市にもNPC店員で見掛けたソウルイーターだった。ここで見るとさらに不気味なのだが、お前怖いぞと文句をつけてもどうしようも無い。

代表して弾美が話し掛けると、そいつは強引に取引を持ち掛けて来る。

『うわっ、また選択しろだって……後ろの宝箱の中から、1つ選んで開けろってぞ』

『どれどれ……ライフ・1かレベルアップ果実か、それとも命の口ウソクが貰える？ 当たりが2つとは言え、ライフ取られるのは嫌かなあ？』

『でも、予備の口ウソクがカバンに2つあるし。今度無視したら、襲い掛かられるかもよ？』

瑠璃の脅しのような言葉に、メンバーの顔は引き攣りまくり。昔に対戦した時の苦戦を思い出して、冷や汗をかきつつ作戦会議。あの時は瑠璃の天使魔法で、辛うじてライフのロストを防ぐ事が出来たのだったが。

こんな狭い部屋の中で、再戦などしたくは無いのが皆の本音である。これでは美井奈の遠隔攻撃が全く期待出来ない上、敵の呪いやその他諸々から逃れようも無い。

何より、毒ダメージを受けている者がパーティーに三人もいるのだ。

『じゃあ、美井奈まず選べ。代表して俺が開けるから』

『えっ、例の方法ですか……私、最近は的中率高いですよ？』

『外れても口ウソクで補充出来るから平気だよ、美井奈ちゃん。外したらハズミちゃんのせいだし』

それもそうかと、気楽に真ん中の宝箱の前に立つ美井奈。それを受けて、弾美は左端の宝箱を勢い良く開け放つ。その瞬間、背にしたソウルイーターが不穏な動きを。

思い切りビビりまくるパーティーだが、入手したのはレベルアップ果実だったよう。そのせいで相手が怒ったのかと、不利な状況ながらも対応しようと動くメンバー達だったが。

ソウルイーターはそのまま大人しく消えてしまい、良かったと心底安堵する一行。怖かったとの台詞も漏れる中、さっさとこの小部屋を離れたい気満々の一行である。

移動の道順は、今度は下りになっている。その一本道を、逃げる

ように進んで行く一行。

何だかんだと怖い思いをしながらも、一応は順調にアイテムを手しているパーティなのだ。払った犠牲が大きい気がするのは、仕掛けの嫌らしさ故だろうか。

集落のくせに全然人がいないと文句を言いながら、取り敢えずは正しい道順だと信じて進むパーティ。毒のダメージも気になり始め、そろそろゴールを見つけない気もし始めたり。

そんな中、ようやく人やお店の姿がチラホラと見え始めて来た。

『おつ、ようやく集落つぽくなって来たなあ。ってか、そろそろ出たいぞ、ここー!』

『ですねえ、NPCもいつぱい出てきたけど……話し掛けないと駄目?』

『お店つぽいのもあるから、取り敢えず話し掛けてみた方がいいんじゃない?』

仕方なく、付近の聞き込みを開始するメンバー達。その結果、この辺りは屋台の通りだと言う事が判明。見てみると、意外と面白い店が多い事が分かって、弾美の機嫌も一気に良くなる。

まずは呪いのアイテム売り場。呪いのピアスや指輪はメダル1枚、兜やブーツやグローブなどの装備品はメダル3枚。呪いの人形や盾は、金のメダル5枚もするらしい。

呪いの武器を売っている店も別にあつたが、そちらは片手武器が2枚、両手武器が一律4枚での販売との事。呪いの装備は大体の性能の予想がつくが、武器となるとハテナな感じ。

それぞれ既の良い武器を持っているので、ここで大枚をはたく価値があるかどうか。

他にも打ち直しの鍛冶屋があつて、何と銀のメダル2枚で改装備

にしてくれるらしい。これは全員でしようとの話し合いでの決定だが、やっぱり一人1回のみとの話のようだ。

金のメダルで買い物出来るショップは、なかなか大した品物が並んでいた。写し身の鏡とか悪魔の尻尾、他にもグラウンドイーターの果実も売り切れておらず販売中。

武器装備の類いも、裏エリアでドロップする物は店頭に並んでいる。

一行はワイワイと相談しながら、買い物プランに夢中になっていたのだが。薫がある宝珠と術書の取扱店の中に、見た事の無い『魔の宝珠』というアイテムを発見して。金のメダル10枚で販売されているそれは、かなりのレア物っぽい雰囲気バリバリ。

これは竜の宝珠以来の当たりアイテムだと、騒然となるメンバー。買うのは当然として、誰が使うかで大モメ。魔という響きとこんな物騒な場所での購入に、とんでもない物の予感がヒシヒシ。

MPの多い瑠璃が持つのが良いと、弾美が交渉に入るのだが。

『瑠璃、お前が使って覚えるよ。MPコストが高かった場合、やっぱり有利だからな』

『そ、それは嫌かなあ……天使魔法を持つ身としては、そういうのはちょっと……』

『わ、私も嫌ですっ！これって拒否権ありますよねっ!？』

『二人の内、どっちかだなあ……取り敢えず今日は買っておいて、明日じっくり話し合おうか?』

むしろ優しい弾美の台詞に、瑠璃と美井奈は身の危険を感じてしまったり。それよりも時間とダメージで死なない内に、とにかく買い物を済ましてしまおうと話し合いはヒート模様。

相談の結果、まずは銀のメダルを使つての装備の打ち直し。

白豹のピアス改 器用度+4、HP+15、落下ダメージ減、



防 + 8

炎獄のブーツ改 炎スキル + 2、腕力 + 3、HP + 15、防 + 17

複合素材のベルト改 ポケット + 4、器用度 + 5、MP + 13、防 + 11

獅子王のベルト改 ポケット + 2、攻撃力 + 6、HP + 20、防 + 13

それから問題の魔の宝珠と、呪いのブーツとグローブをセットで購入。ややお高い呪いの盾も、ついでに購入してしまうと、金のメダルはほぼ使い切った形になった。

その後、命のロウソクをメダルに交換して、レベルアップ果実を1つ購入。これで全員がレベル33へと、足並みが揃った格好だ。これで、心置きなく最終試練へと臨める事に。

この裏エリアに突入して、そろそろ50分。退出しても良い時間だ。

『退出魔方阵はこれだな。それじゃあ買い物もおわつたし、ここを出ようか』

『品揃えの凄くいい出店通りだったねえ。もつと早い時期に来たかった気もするかな？』

『そうですねえ……でも、裏でも隠しエリアっぽいから、やっぱり簡単には来れなかったかも？』

『あ、それはあるかも。レベルアップ果実も売り切れてなかったしねえ』

そんな感想を口にしながら、一同は長居していたエリアを脱出する。突入した闇市に出た後に、一同はそれぞれ買い物や休憩に時間を費やして英気を養うのだが。

まだ時間が残っているのをどうするかと、のんびり全員で話し合

った結果。取り敢えず2つほど候補が挙がったのは、クエストエリアの探索と妖精の泉での呪い解除。

妖精の泉は、既に3日は経過しているので時間的な問題はナシ。ただし、今となっては貯まったギルもあまり使い道が無いので、お金を使用して教会に頼んでも良い感じはするが。

クエストエリア搜索の場合は、NMが見付かるかも知れない期待に賭けて、30分程度うるつく事になるのだが。何も見付からなかったら、完全に時間の無駄となってしまう。

しかし、上手く行けばまた複合技の書が手に入るかも知れない。

終了予定の10時には、まだちょっと時間があるので。どちらかに行くのは決定しているのだけれど。パーティ内で多数決を取ったら、弾美と薫がクエストエリアが良いと言ったので。

瑠璃と美井奈も、つられる形でそちらに賛同してしまう。どう考えても、波乱が起こりそうなのはそっちには違いない。そんな妙な期待を皆がしてしまうのは如何なものか。

何にしろ、全員一致で波乱の最終戦を選択するパーティー同。

週末の夜は、そんな風に過ぎて行き。それぞれ離れた場所でプレイするメンバー達だったが、孤独とは全く無縁である。心は確かに同じ場所にあるのを、何となく確認出来てしまうから。

明日の予定を確認し合いながらも、楽しみだねと合同インの良さを思い出す素振り。やっぱり離れながらのログでの会話は、ちょっと味気ない気もするメンバー達だったり。

最終ステージに向けて、心のベクトルは奇麗に揃う四人であった。

## 24 少女達の秘密の饗宴（前書き）

8月の初めは子供の夏休みイベントで、連日うちのクラブは大賑わいでした。誇張でなくて、本当に一日に150人近くの小学生が体験学習に訪れてたんですよっ（笑）。

それをとつかえひつかえ相手して、しかも猛暑が重なると地獄だったり。まあ、来てたお子さんの大半が楽しんでくれていた様子で、それで救われた気がしないでも無いか？

何にせよ、無事に乗り切れて良かったですよ。

実際、冬は雪に苦しめられた山の上の立地なんですけど。夏は街中より明らかに涼しくて、ちよっとは快適に過ごせる感じですよ。今年はそのなかにピーカン照りな日も多くなくて、その点でも助かっている気がします。

そんな盛況で多忙な週を乗り切った今日のお休み。やっぱりどこにも出掛ける気力が湧かなくて、暑いのに一日中部屋の中に閉じこもってました（笑）。

免許の更新に行けるのは、一体いつになるのやら？

ちよっただけ、ゲームの話を。最近はパソコンよりも、携帯のモバゲーの方が面白くて、そっちにかなりハマってます。メインは『大争奪！！レジェンドカード』って奴で、暇な時には『大進化！！英雄カードバトル』ってのも。

限定イベントがちよくちよくあって、なかなかユーザーを楽しませようって気概が伝わって来るのは良いのですが。仕事が忙しくて、合間にちよこつと繋いで遊ぶってのが出来ない日には、ストレス溜まりまくりです（笑）。

目的のカードが集まらず、何度泣いた事か^^；

さてさて、今回の章は美井奈のやつちやった話がメインですけど。こんなうっかりミスなんて、読者さんにも1つや2つ、必ずあるはずっ（笑）。

捨てちゃダメなアイテムをうっかり捨てたとか、マクロミスのキヤラの誤作動とか。大事な場面で寝落ちしたとか、使っちゃいけない魔法をうっかり唱えちゃったとか……。

自分もちろんあつて、忘れられないのは変な場所での帰還魔法<sup>デジョン</sup>。戦闘中でも使えるので、戦ってる仲間を置いてけぼりにしちゃった事が何度か……はいっ、反省してます（笑）。

みなさんも、画面の前で顔面蒼白になった経験がある筈っ！

今回の章の中に出てきた、レトロなゲームの説明ですが……歳がばれるので、詳しくはしません（笑）。実は、薰くらいの年齢でも知らない筈の筐体ゲームですね。

初期のファ○コンよりもう少し前、イン○ダーゲームが流行った少し後……くらいかな？ 『パツ○マン』と言うゲームで、敵にぶつかるとうゲームオーバーなので、とにかく逃げ回りながらボールを取って行くルールだったような。

唯一の逆襲方法は、色違いのボールを取って無敵状態になる事。昔はこんな感じで、何もかもシンプルだったんですよ（笑）。

ロールプレイングゲームなんて、海外のパソコンでの夢物語でしたね。

そんな感じで、昔のゲームの話を始めるとかなり長くなってしまいます。ハードにしてもソフトにしても、色々な進化を遂げて来たわけですね。

そんな話はさておいて、今回の秘密の饗宴……たっぷりお楽しみを

## 24 少女達の秘密の饗宴

時間は一度、昨日の夜にさかのぼる。残り時間を星の鍵のエリア探索に費やす事に決めた一行だったが、散々うろついて出会えたのは川の付近での魚取り網の仕掛けくらい。

引っ張ってみるかと思われたので同意すると、水の中から網と一緒に魚のNMが出現。ピチピチと元気なソイツは、結構な強敵だったのだが。何だかんだで結構あっさり倒してしまうと。

割と平凡なドロップで、がっかりしてしまう場面も。

最初に向かった例の墓地も、時間が合わなかったのかNMの姿は見えず。その後には薫が遺跡エリアで見つけた地図を頼りに、怪しい場所に移動する事に決めたのだが。

川沿いの移動で、ようやく1つ仕掛けを見つけたのが精々な感じで、そのまま終わるかと思われた瞬間。川辺の背の高い水草の隙間に、美井奈が怪しく動く敵影を発見。

「どうやら亀とザリガニの獣人らしいのだが。」

「あれっ、今何かいましたよ？ 薫さんの言ってた、怪しい場所ってここですか？」

「ん〜、地図には獣人の旗のマーク？ が書かれてたんだけど……一番分かりやすい怪しい場所って言えば、やっぱり獣人の拠点かと」  
「時間もあと10分くらいあるし、ちょっと行ってみるか？ 明日は土曜日だし、美井奈もまだ平気だろ？」

「平気ですよ、まだ眠たくないし、行っちゃって下さいっ！」

そんな訳で、最後の悪あがきのなアタック開始。複合技の書とまでは行かないでも、メダルの1枚でも残り時間で取ってしまおう的な、本当に最後の悪あがきなのだが。

強化魔法を掛け終えて、前衛陣が率先して視界の通らない草の衝立の向こう側へ進み出る。突入してみてビックリなのは、予想以上の数の敵がウヨウヨとたむろっていた事。

あまりの獣人の数の多さに、さすがに拠点的な雰囲気はバリバリと感じるものの。リンクしまくりの現場には、タゲ取り役とか後衛とかの役割もまるで関係ない感じ。

とにかく美井奈以外の三人が前線を維持するのが精一杯。

敵は亀型の獣人と、ザリガニ型の獣人の混合部隊らしい。亀獣人は盾と片手武器で武装しており、とにかく硬くて頑丈で盾役に相応しい。攻撃力は、実はそれほどでもないようなのだが。

ザリガニ獣人は両手の鋏での攻撃の他、尻尾が大斧仕様となっているよう。通常攻撃にも使用してくるので、とにかく手数が多くて捌くのが大変だ。反面、体力はそれ程でもない。

そんな敵達がごちゃ混ぜになっていて、中には魔術師タイプも何匹がいるとなると。相手をするのも相当大変で、前後を挟まれてのハチャメチャな戦闘振りは仕方なく。

弾美の《グランバスター》の範囲に、一体何匹の敵が入っていたか。

『うわっ、すげ〜っ！　こんなに範囲技で敵にダメージ与えたの、初めてかもっ！w』

『弾美君、タゲ取り過ぎじゃない？　はっちゃけ過ぎだっつてばw』

『私もさっき買った闇系の矢弾使ってみていいですか？　範囲攻撃出来るらしいんですよっ！』

どんどん行けとのテンションの高い弾美の号令で。美井奈ばかりか瑠璃も薫も、魔法を連続で使用し始める。敵の群れのHPが満遍なく減って行く中、フィニッシャーの美井奈が遠隔スキル技で次々ととどめを刺して行く。

パーティはその威力に戦慄のコメント。回転力はともかく、一撃は目を見張るものが。前回の個人強化や武器の新調を機に、スキル技のダメージが2割くらい上昇している気がする。

負けじと薫も、スキル技で戦場を縦横無尽に駆け回る。美井奈と好対照なのは、敵を翻弄する動きを伴った技の組み合わせ。《竜巻チャージ》と《幻影神槍破》で、敵に反撃のきっかけを与えない動きはさすがベテランだ。

そんなこんなで、ようやく戦況が落ち着いて来た。

ごちゃごちゃの戦闘の中、一番危なかったのは実は瑠璃だったのだけ。皆がタゲ取りと数減らしに頑張つて、何とか危機を脱出。タゲを集中して取っていた弾美も、本当は一時期危なかったのだが、防御の高さに加え、回復役の瑠璃がしっかりしていたので、何とか事なきを得る事が出来た訳だ。

敵の数が数えられるまで減つて来ると、何とかなるものだとの軽口も増えて来る。実際、戦闘中は割と必死で大忙しかったのだが。気楽なコメントが出るという事は、危機は脱した証だろう。

雑魚とは言え、レベル補正が効いていたので敵の強さもかなりのものだった。それでも乗り越えられたのは、ごちゃごちゃしていた事で、かえって敵の動きが制限されていた為か。

程々の爽快感さえ味わいつつ、雑魚の獣人退治は終了。

「わっ、勝っちゃいましたね！ 雑魚とは言え、結構たくさんいたのにつ……経験値も凄いです！」

「だなあ……入ってみて数を確認した時は、結構焦ったけど。敵の特殊技が、スペース不足で発動しなかったせいで大助かりだったよ」「あゝっ、あれって味方がぎゅうぎゅう詰めだから発動しなかったんだあ……何でミスばかりしてるのかと不思議だったんだけど」

「このゲーム、遠隔とかそういう武器の距離感割とシビアだからねえ。魔法なんかは敵味方の判定とか、勝手にしてくれる癖に」

確かに魔法の自動判定が無ければ、範囲魔法など使いにくくて仕方が無いけれど。逆に武器での当たり判定は、距離感がとてもシビアに取られてしまうのはこのゲームの持ち味でもある。

いかにテンポ良く、空振りしないで攻撃を当てて行くかがこのゲームでは鍵となる。前衛の上手い下手を吟じる上では、とても大切な見極めポイントとなって来る事になるのだ。

遠隔攻撃のみ魔法と同等で必中扱いなのは、ある意味プレイヤーの間口を広げる逃げ道と取れるかも知れない。美井奈など、モロにその良い例だったりするのも事実である。

そしてそのゲーム方程式は、そのまま敵にも通用するよう。

とにかく静寂の戻った空き地は、改めて見るとそれ程広くも無いよう。近くに漁村のような古びた集落が存在しているが、人間の造った建築物とは完全に分かれて離れている。

地面には沼地のような湿地帯も点在しており、枕木を敷き詰めたような通路が集落の奥へと続いているようだ。集落の向こうにも、獣人らしき動く影は少しは見受けられる。

一行は注意しつつも、あちこちを点検しながら奥に向かって集団で歩き始める。何かを見付けると言うよりも、この変てこな集落の構造を見極めるつもりだったのだが。

反対側には割と大きな沼が存在しているようで、奇妙な形の社とその前の空き地は、まるであつらえられたフィールドのよう。何を祭っているのか、パツと見では想像しようも無いが。

絡んで来る獣人も、今のところいない。

『集落抜けちゃいましたねえ……敵は全部倒し終わってた？』

『そんな事より見てみる、美井奈。社の中に、お供え物があるぞ。』

アレ、取れるんじゃないか？w』

『あゝ、その手の仕掛け多いよねえ……引つ掛かる人はいないと思



うけどw』

『えっと……あの、そんな事は無くもない？』

言いよどむ瑠璃を遮るように、弾美が過去の魔神騒ぎを楽しそうに報告してみたり。過去の傷をえぐられた美井奈は、完全にへそを曲げる破目に。それを見かねた瑠璃と薫が、必死のフォーローで宥めにかかる。

それでも今回は、NMを湧かして倒すのが目的なのだし。恐らくお供え物を取る事が、NM出現のきっかけには違いなく。戦闘準備を素早く行い、今夜最後の獲物に相応しい敵を望みつつ。

弾美の掛け声と共に、最後の戦闘スタート！

罰当たりにもお供え物に弾美が手を出して、NMの出現を煽り立てると。案の定、強制イベント動画込みの迫力で、水面から2つの大きな影が出現して来る。

1体は亀の獣人で、もう1体はザリガニの獣人なのは予測出来た事なのだけど。もう1つ、小さな影が付き従って来ていて、どうやら巻貝のように見受けられる。

大きな2体は完全に神様仕様のよう。煌びやかな衣装を身に纏い、手に持つ武器も異様なオーラを発している。亀は片手斧に大きな盾、ザリガニは大斧を手にしていて、尻尾の先も武器っぽいのは雑魚と同じ仕様である。

獣人の神達は、罰当たりな冒険者の群れを睨み据えると攻撃準備に。

『うっ、数が多いな……攻撃の強そうなザリガニから倒すかつ！』

『小さい巻貝が気になるのは、私の気のせい？ あれってマラソンで引つ張れるのかな？』

『私が2匹マラソンですか？ ここは広いから、楽だとは思いますが

けど』

強化済みで待ち受けていたパーティも、敵の数と種類に合わせて作戦を微調整。2体までなら前衛の薫がキープ作戦で良いが、3体以上になると美井奈のマラソンが通常なのだが。

足の無い巻貝が、果たしてマラソンについて来てくれるのかと、ちょっと戸惑う冒険者一行。弾美が取り敢えずザリガニの獣神をキープしつつ、美井奈が巻貝に遠隔でちょっかいをかける。

これで近付いて来てくれたら、美井奈が亀の獣神と一緒にマラソンの予定なのだが。薫の心配が当たったようで、半透明な液体を噴き出して硬化してしまう巻貝。

断固として動くつもりは無い様子。

それならば獣神の方を離してしまえと、じりじりと空き地の端っこに移動して行くハズミン。戦闘しながら、皆への指示を出す勇姿はさすがに頼りになるリーダーである。

それでも出会った事の無い戦闘スタイルには、さすがに万全では挑めない。結局薫が亀の獣神を受け持って、固まった巻貝は取り敢えず無視する方向に。

社の前に、ぽつんと残された巻貝は何を思うのか。

『こんだけ離れば安全かな？ 瑠璃は回転技を潰してくれ、薫たちはそこで平気かも』

『おっけ、ここでキープしてるねっ！ 亀の技のチェックしながら待ってるよ〜』

『削り始めて平気ですか？ いっちゃんいますよ〜！』

美井奈の威勢の良い号令から、ザリガニ獣神への反撃がスタート。安全そうな場所に落ち着いた弾美は、大斧の二重奏に苦勞しながらも、さすがに上手なタゲキープを続けている。

それに乗じての、削り屋ミイナの遠隔攻撃がスタート。弾美のさらに奥に居座り、周囲の安全確認もバツチリである。入手したばかりの多彩な矢弾を確認しながらも、ちゃっかりとダメージも確実に出して行く。

さすがに神様だけあって、追加ダメージタイプの魔法効果はほとんど上乘せされないよう。攻撃タイプの癖に外殻の防御力も高いザリガニ獣神は、侮れない敵には違いないが。今の所、雑魚との相違は基本スペックのみのよう。

特殊技はまだ隠されているのか、使って来ない。

薫の方も同様で、硬い敵だとぼやきを交えつつも。置き去りにした巻貝が余程心配なのか、時折チエックも欠かさずに行ってみたり。現状では、全く変化なしとの事。

瑠璃も次第にノッて来て、前衛に出張ってスキル技での削りに参加する。弾美も強化魔法は切らさずに、時折魔法でHPを奪ったりスキル技でヘイトを稼いだり。

敵に動きが起こったのは、やはりHPが半減してから。

『わっ、ザリガニが怒った！ 真っ赤になっちゃったよっ』

『茹で立てみたいだけど、これってハイパー化……うわっ、攻撃貫通扱いかよっ、盾防御が効かないっ！ 逃げろっ、瑠璃』

『ええっ、お兄さん血だるまじゃないですかっ！ かつ、回復っ！』

ハイパー化したザリガニ獣神の特殊技は、攻撃に貫通撃が混ざるといふ、盾使いには最悪の相性の悪さのものだったようだ。お陰でモロに両手武器のダメージ技を喰らった弾美は、あたふたと逃げ回る羽目に。

敵の追撃をステップ防御でかわし始めながらも、途端に肝を冷やしっ放しの弾美。瑠璃も改めて距離を置きつつ、回復と魔法での攻撃に切り替えているのだが。

水属性相手の《ウォータースピア》は、思ったよりは効きが悪いよう。幸い防御力が落ちてきているみたいだと、美井奈は妖精魔法での突貫攻撃の許可を求めてくる。

まだ削り切るのは無理だからヤメロとの、弾美の制止も何のそのお姉ちゃまと力を合わせれば平気と、どうやら2時間近くのプレイで、集中力も途切れ掛けている少女。

仕方なく、天使魔法からのバニッシュ込みのスキル技を見舞うルルリ。それに乗じて、美井奈の妖精の光球込みの《貫通撃》からの連続技が派手に炸裂するも。

当然、弾美の読み通りに削り切るには至らず。

『おバカ美井奈っ！ だから言っただろうがつ、タゲ取ってどうする気だっ！』

『わっつ、ごめんなさいっ、隊長っ！ 助けてくださいっ！』

『相手は神様みたいだから、光属性の耐性強いのかな？ まだ4割くらい削れてない……』

それくらい推察しようと、弾美はあくまで素っ気無いのだが。奇跡的に闇魔法の《グラビティ》が掛かった上、美井奈の《スパーク》にもさらに足止めを喰らうザリガニ獣神。

遠隔攻撃の能力は、敵には備わっていないだろうと。ちょっと油断のパーティは、時間稼ぎしつつタゲの再固定を凶ろうと模索するも。時間経過にハイパー化は解けたものの、無礼を許すものかと新たな特殊技が炸裂。

飛び上がりからのボディプレスに、美井奈がペチャンコ。

『わっ、なにになに？ そっちはどうなってるのっ、今何か飛んだっ！？』

『わっつ、美井奈ちゃんが敵に潰されたっ！ 海老反りプレス技だっ！』

予期せぬ大技の飛び道具に、一同は度肝を抜かれる思い。喰らった本人は、何がどうなったのか分かっていないようだ。HPをみれば、久々の雷精を招く3割減の状態に。

それによって敵も痺れてスタン状態、ミイナも潰されてまるでダブルノックダウン状態。パーティ内では笑えない状況だと、弾美が必死に再度のタゲ取り挑発を敢行する。

近付いてのスキル技の連発と、瑠璃の回復魔法が交錯する。

美井奈は瑠璃の回復を受けて、何とか安全圏に逃げ延びる事に成功。ところがどっこい、目の前に現れた変てこの物体が、雷娘の混乱をさらに引き起こす破目に。

先ほどからずっと無視していた巻貝が、硬質化を解いて目の前に佇んでいたのだ。少女の悲鳴がこだまする中、容赦の無い巻貝の範囲攻撃が巻き起こる。

スプラッシュブレスが、再び美井奈を瀕死状態に追い込んだ。

『えっ、いつのまにか3匹目がこっち来てるっ！ 美井奈ちゃんがピンチだよっ、ハズミちゃん！』

『毎度のトラブルメーカーだなっ、いいから離れてコイツを削れっ』！

『何で急に貝のスイッチ入ったのかな？ わっ、何もしてないのにこっちに来たっ！』

瑠璃が驚くのも当然で、無軌道な巻貝の行動は誰も先読み出来ない。後衛のドタバタに呆れつつも、弾美が範囲スキル技の《グランバスター》で巻貝に攻撃を仕掛けるも。

全く相手にされずに、再び沼の方向にワープで逃げてしまった。

良く分からない敵の行動にペースを乱されつつも。1匹目のザリ

ガニ獣神のHPは後わずか。弾美の頑張りで順調に削りを続行し、瑠璃が怖い特殊技を潰して追い込んだ結果。

最後はフィニッシュャーの美井奈も戦線復帰に間に合って、何とか最初の敵の撃破に成功する。帳尻り合わせの活躍だけでも、何とかリーダーからもお褒めの言葉を貰ってご満悦の美井奈。

ところがやっぱりペースを乱す、巻貝の特殊攻撃。

『わっ、変な粘液掛けられたっ……うわっ、移動出来ないよ、これっ！』

『何だコリヤ、とことん嫌がらせキャラだなっ……美井奈、先に倒しちまえっ！』

『了解ですっ……あれっ、振り向けないから弓矢が使えませんっ！』

とことん駄目キャラっ振りを発揮する美井奈に、弾美は魔法での攻撃を指示。弾美の《グラビティ》にも、ワープを移動手段にする巻貝にはあまり効果は無い様だった。

続いて放たれた《ダーククロス》には、少なくともダメージを喰らったよう。

薫がこちらの惨劇に気付いて、それならこれを相手してと、2匹目の敵を誘導して来てくれた。その間にポケットの整頓をしたりと、追撃準備に余念が無い弾美達だったけれども。

なかなか移動不可の制限が解けなくて、ちよつとイライラしている感じは否めない。その間巻貝は、ブレスを吐いたり呪いを振り撒いたり、変にスイッチが入った様子だ。

慌てて天使魔法を使用する瑠璃は、足止め魔法も交えて巻貝の攻撃を無効化しようと孤軍奮闘。美井奈も同じく、妖精魔法を掛け直してこれ以上のダメージを防ぐ構え。

これ以上株を落としたくない少女は、エーテルガブ飲みでそれなりに必死。

ようやく足止めから解除された弾美は、亀の獣神と足を止めての殴り合いに突入。ピーキーな巻貝は瑠璃に任せたと、薫と一緒に硬い獣人の神相手にHPを削り取って行く。

弾美のタゲが固定された頃に、ようやくアタッカーの美井奈にお声が掛かった。瑠璃のお手伝いをしていた少女は、やたらと張り切って2体目の削りに参加する。

薫によっていい具合に削られていた亀の獣神は、自慢のアタッカー達の火力によって、見る間に体力を減じて行く。硬さに自信があるようだが、さすがに両手武器使いの前衛アタッカーが二人相手だと、あまり関係無いようだ。

そして訪れる、HP半減からの特殊技。

『あれっ、ダメージが1桁しか出なくなっちゃった！ コイツの特殊技かなっ！？』

『うぬっ、これはしばらく解けないかもなっ……魔法はどうだ？』

『わっっ、スキル技も全然ダメージ出ませんよっ、魔法試してみますねっ！』

薫の炎のプレスも美井奈の光魔法も、何とか2桁届くかどうかの情けないダメージに終わる結果に。それでも殴っていないとSPは貯まらないので、静観している訳にも行かず。

早く硬化よ解けると皆が念じる変な空間の中、瑠璃が慌てて通信して来る。天使魔法が解けた途端に、再び巻貝がそちらにワープして行ったそうなのだが。

美井奈の目の前に出現したそいつは、ちゃっかり亀の獣神を相手にしていた三人を範囲に巻き込んだの魔法を行使したようだ。毒とか呪いを振り撒きながら、あざ笑うように再びワープ。

怒髪天をつく弾美に、畳み掛けるように亀獣神からの一撃。

弾美パーティの戦線は、敵の盾での吹き飛ばし攻撃も加わるに至り。修正不可能なまでに、一気に崩された感じである。呪いで反撃を封じられた薫が、次なる標的に選ばれピンチに。

敵のハイパー化は、一撃を見舞う度に追加ダメージとHP吸収の効果に乗っかる酷い仕様のようだ。騒がしく悲鳴をあげながら、辛うじてカバンから聖水を使用する薫。

回復を飛ばしながらも、ゴメンねとのコメントを付け加えてくる瑠璃。巻貝の動きが全く予測がつかないので、仕方ない事とは言え、意表を突かれた瑠璃は、とつても悔しそう。

それぞれ何とか聖水の使用も終わって、キャラの操作を取り戻した一行は。プツンと行きそうな怒りのぶつけ所を模索して、フィールドをキョロキョロと見回す素振り。

ところが肝心の亀の獣神も巻貝も、ぴたりと動きを止めてしまっていた。

次の瞬間、甲羅を残して水と溶けてしまった亀の獣神に一同は驚き顔。何故にとのビックリのコメントが飛び交う中、それなら巻貝だけでも自分達の手で始末しようと物騒な台詞も。

何か絶対に仕掛けあるよと用心深いのは、最年長の薫のみ。つられる形で、瑠璃も皆に回復を飛ばしつつポケットの整理。ヒーリングの最中に、前衛組は巻貝に殺到していた。

そろそろ時間も無いからと、容赦の無い攻撃を浴びせるつもりが。

『あれっ、大きな甲羅の下から……何か出て来たみたい。ホラ、溶けた水が流れた水溜まり!』

『ザリガニの神様の死体も、消えてないなあって思ってたけど。ひよつとして、これは不味いパターンだったりしますか?』

『神様は不死身だからね、ってか、あれは完全に泥ゴーレム?』

『泥ゴーレムに見えるなあ……おっ、ザリガニと亀の甲羅が合体し始めたっぼいぞ?』



呑気に実況しているメンバーも、好きでそうしている訳でもなく、止める手立てが無い神様の骸の合体は、溶けた水が泥の粘土となつてベースを構成しているようだ。

そのための亀の自爆だったのかと、手の込んだ誘導には一同ちよつと呆れ気味ではあるが。とどめに巻貝がワープで消えて、再び現れたのはその泥ゴーレムの頭頂部。

巻貝の穴からは、敵ついえらの張った半漁人の顔が出現したようだ。まずは挨拶とばかり、そいつは咆哮を放つて全員をスタン状態に追い込む。合体を完了した敵は、先程より体軀も一回り以上大きくなっているよう。

両手には片方ずつ大斧を持っていて、その破壊力は想像に難くない。

それでも一同の本音は、訳の分からない巻貝を相手にするよりは数倍マシと感じたりもして。どこか悟つたように、力を合わせて合体獣神の相手を始めてみたり。

脱力した感も否めなくは無く、どうにでもなれるな雰囲気かブンに漂っている。敵は硬い上に攻撃力も強く、巻貝から出た顔からはプレスや呪いが放たれるというハイスペック。

だからどうしたと、こちらは普段通りのチームワークで立ち向かう一行である。天使魔法が切れる前に倒してねと、瑠璃だけが心配そうな素振りを見せるのだけでも。

どこか気の抜けた戦闘は、さつきより余程順調に終盤に差し掛かっていた。

敵のHP半減からの特殊技も、最終局面でのハイパー化も、どちらも先ほどの二番煎じでしか無く。範囲技は瑠璃がきっちりスタンで止めれば、二人のアタッカーがこれでもかと言うパワーとスピードで敵の体力を削ぎ取っていく。

それを支える弾美のキープ力も、もちろんパーティ戦術で一番の鍵となっているのは間違いない。縁の下の存在の瑠璃の存在も、もちろん語るまでも無いところ。

そんな訳で、意外とあっさり獣神の究極形は撃破されたのであった。

『やった〜、2時間縛りが発動したから、途中ちよっと焦ったけど良かった!』

『うっ、社の前に宝箱が3つ……期待して良いものやらって感じだな』

『素直に期待しようよ、ハズミちゃん……それより雑魚が湧き始めるし、さっと箱の中身を取って戻った方がいいかな?』

『そうだねえ、美井奈ちゃん開けていいよ?』

苦労を労い合いつつも、2時間縛りのダメージでヒーリング出来ない一行。いち早く宝箱の前に駆け寄った美井奈に、薫がどうぞとの掛け声が掛かる。今日もいっぱい良い写真が取れたと、満足そうな言葉は美井奈だったかその母親だったか。

宝箱の中身は、今まで見た事の無いアイテムも混じっていて大当たりと言って良いかも。配分は明日とのいつもの言葉と、明日の合同インの場所確認などを交えつつ。

転移の棒切れで、このエリアを脱出に掛かる冒険者一同。湧き始めた雑魚達が、こちらを恨めしそうに見つめている気がする。さらに社の前の開きっ放しの宝箱の絵は、何だか賽銭泥棒みたいで嫌だとの薫のコメントに。

神様を倒した時点で罰当たりだから気にするなと、弾美のよく分からないフオロー。

悪あがきのエリア探索の結果にしては、ドロップは上々の結果となった。まずはお馴染みの金のメダルや水の術書や水晶玉。武器指

南書や、水棲の小斧という性能の良い武器も。

宝箱の中身は、盾の宝珠と《複合技の書：大斧》という複合書、それから巻貝の呼び鈴と言うお助けアイテムが1つ。それぞれレアもので、思いも寄らぬプレゼントな感じだが。

巻貝はもう見たくない、嫌な感じの刷り込みが發揮されていたり。

とにかくみんな頑張ったよと、年長者の薫が必死に締めを担おうとの努力を見せて。そうだね、明日は心置きなく最終ステージに向かえるねと、瑠璃もさり気なく乗っかってみる。

弾美と言えば、最後のドロップで戦闘で溜まったイライラも解消されたよう。美井奈と明日の予定を話し合いながら、子供はもう寝るとお兄さん振りを示しているつもりか。

これを意地悪と取るか気遣いと取るかは微妙な所。

そんな一幕もはさみつつ、地上エリアの冒険は幕を閉じたのだった。

集合場所がいつもの公園になったのは、お出掛け前にマロンとローンの散歩を済ませたいと瑠璃が口にしたため。昨日の夜の打ち合わせ通り、瑠璃と薫がそこで合流を果たす。

昼食は美井奈の家でごちそうになるため、まだ二人とも食べていない。犬の相手をしながら、世間話など交えつつ。弾美はやっぱり、4時過ぎに合流になりそうと伝言を口にする。

ひよっとしたら、部活が休みになりそうない気配もあつたらしいのだが。

一度津嶋家まで戻った二人は、予備モニターを荷物に加えて美井奈のマンションを指す事に。薫は張り切ったの率先振り、荷物を持ったり美井奈からの伝言を確認したり。

美井奈家の準備は整っているらしいのだが、浮かれ気分的美井奈を果たして当てにして良いものか。とにかくゲームの出来る環境だけは、確保出来ている事を願うのみだ。

そんな事を、弾美は部活に出る前に瑠璃に漏らしていたのだが。何しろ薫の部屋の例もあるしと、とことん疑心暗鬼なパーティーリーダー。そんな台詞は、間違っても本人には言えないけれど。

一度伺った事のある瑠璃は、心配ないと請け合うのだが。

薫の方も、それ程心配はしていない様子。ただ、家の人とかち合っつて、前回のような宴会騒ぎにならないかと変な心配が頭をよぎる。美井奈の母親は、優しそうではあったけれど。

沙織さんはともかくとして、美井奈の父親には瑠璃も会ったことが無いと言うと。今日はあんまり長居しないようにしようと、急に不安そうな感じになる薫だったり。

美井奈の話だと、毎晩帰りは遅いそうなのだが、職種までは聞いていない。

「弾美君は、じかに来るって？ それじゃあ4時位まではする事ないのかな？」

「妖精の泉で呪い解除位なら、ハズミちゃんのキャラも連れて行っていいって言ってましたけど。多分、最終エリアは2時間も掛からないから時間は平気だった」

「そうかあ、じゃあフリーエリア行って、最終エリアの突入準備をして弾美君を待つてようか？」

それが良いだろうと、瑠璃も素直に同意しながらも。私服姿の二人は、美井奈のマンションに向かって週末の昼下がりの街中を歩い

て行く。今日は風はちよつと強いが、良い天気である。

お互いに学校では、最終ステージ資格所持者として、結構有名になつていと報告し合つたりして。あまり目立ちたくない二人には有り難くない現状だが、それも後数日で終わる。

トライするからには頑張りたいねと、どこかのんびり意気投合する瑠璃と薫。

荷物を手にして、美井奈の通学路をお喋りしながら歩く二人。やがて美井奈のマンションと、美井奈本人が視界の中に入って来た。どうやら迎えに降りて来ていたようで、嬉しそうに手を振って向こうもこちらを見つけた様子。

合流を果たした女性陣は、楽しそうに挨拶を交えつつ建物の中に消えて行く。

「どうぞ、いらっしやいっ！ あっ、お姉ちゃまは2度目でしたよねっ。お母ちゃまがサンドイッチを作ってくれてるんですけど、足りなかつたらピザとか頼んでいいそうですっ」

「ハズミちゃんが部活だから、足りない心配は無いと思うけど。それじゃ、お邪魔します」

「お、お邪魔しますっ。わっ、室内にも大きな水槽あるんだあ」

初めての訪問の薫は、あちこちと珍しそうにマンションの中を見回している。瑠璃は時計を見ながら昼食の準備を始め、美井奈はいそいそとそのお手伝いなど。

用意されたサンドイッチは、三人で食べるには充分過ぎる量だった。お茶のカップを人数分用意しながら、テーブルがランチ仕様にセッティングされて行く。

学校が休みだった美井奈は、午前中は暇だったようで。図書館で借りた本は、お陰で全部読み終えたそう。ちよつと誇らしげなその報告は、褒めて欲しいとの意思がバリバリに伺える。

偉いねえとの瑠璃の言葉は、まるで本当のお母さん。

「午前中に、図書館に借りた本を返しに行つて、ついでにまた数冊借りて来ましたっ！ 今度はもうちょっと長いお話に挑戦ですよっ！」

「おおつ、凄いねえ、美井奈ちゃん！ この調子で、瑠璃ちゃんみたいに読書を趣味にしちゃえばいいんじゃない？」

それも良いかもと、薫の提案に勢いを得る美井奈。昼食を食べながら、そんな他愛の無い会話で盛り上がりつつも。その後、瑠璃に月に何冊位読んでいるかとの質問を投げかけた美井奈は、答えを聞いて絶句。

多い時で20冊だと、いきなりやる気をへし折るような数字に。人それぞれだからと、薫が苦笑いしながらのフォロー。続けて行けば、読む速度も上がるからと励ましも忘れない。

どちらにしろ、瑠璃の読書量は特殊だと注釈も忘れずに。

食事を終えて、薫が予備モニターのセッティングをリビングで行っている。お母ちゃまが着なくなった服があるのだけにと、美井奈が収納ボックスを奥の部屋から引つ張つて来た。

興味を惹かれたのは瑠璃も一緒に、特に洒落に感心がある訳ではないけれども。美井奈によれば、サイズの合うものは持つて行つてくれて構わないとの母親の言葉らしい。

事の発端は、どうやら少女が貧乏な大学生の服装の少なさを、母親にチクツたかららしい。

そういつ、悲しみに彩られた背景が見え隠れはするものの。古着なのだから、遠慮は全然いらないと美井奈の言葉。あっけらかんとした表情で、悪気はこれっぽっちも無いようだ。

瑠璃は既に、楽しそうに物色を開始しているよう。ほとんどがサ

イズが1つか2つ上っぱいが、トレーナーなどは裾を折れば平気か  
もとご機嫌にあれこれと手に取っている。

薫は完全に気後れしていて、そこまで積極的になれないだけの  
だけでも。瑠璃が全く遠慮無しなのが不思議な薫は、思わずその  
理由を尋ねてみたりして。

瑠璃の性格からしても、こんな無遠慮なのは珍しい。

「あの、瑠璃ちゃん……服って割とお高いものなんじゃない？ 本  
当に、もういらなからって、貰っちゃっていいものなのかなあ？」  
「えっ、だってもう着ないものなんですよ？ 服は天下の廻り物  
っていうか、お下がり貰わないと損ですよ？ 私はよくハズミち  
ゃんのお姉さんのお下がり貰ってたし、ハズミちゃんは私のお兄ち  
ゃんのお下がり貰ってたし。親戚に貰ったりは普通だし、友達から  
もたまに貰いますよ？」

「あ、私は一人っ子だから私のちっちゃくなった服は、全部親戚  
の所行きですねえ。確かに、服は天下の廻り物ですね、さすがはお  
姉ちゃまですっ！」

なる程と、割とショックを受けつつも、薫は今まで知らなかった  
風習を理解するのだが。育った環境が違つと、そういう感性もまる  
で違つて来るものなのかも知れない。

美井奈の母親にしてみれば、薫達に古着のプレゼントとしよう  
との思い付きは。何の気兼ねもなく受け取って貰えるものだとの、昔  
からの解釈から生まれた好意なのだろう。

そう思うと、ちょっと感謝の念も湧いて来る薫なのだが。

瑠璃と一緒に、収納ボックスの中から女性用の服を眺めつつ。そ  
こに美井奈も参加して、これが似合うとかサイズはどうかとか、段  
々たるでお人形遊びのノリになり始める。

拳句の果てには、着ているものを剥ぎ取られて、本当に着せ替え

大会のスタート。美井奈のお気に入りは裾の短いワンピーススタイルが多くて、それには薫は赤面して抗うものの。

クローゼット部屋の大鏡に映った自分を見て、別人のような変わりようには戸惑ってみたり。元の素材は良いのだからと、容赦の無い年少組の賛美なのだか批評なのだか。

結局は、あれやこれやと言われるままに試着を繰り返す薫。

「薫さんも胸が大きいから、襟元の広い服はセクシーに見えて格うですな。お母ちゃまは、お出掛け衣装は派手な多いんですけど。若い人にも合うんじゃないかって」

「部屋着も結構、華やかなのが多いんだね。私、これ気に入っちゃった。薫さんが良ければ貰っちゃいますよ？」

「ちよつと着てみて下さいよ、お姉ちゃまつ！」

瑠璃も着せ替え人形のターゲットにされて、結局は狭い室内でのお披露目会。なる程と、薫は着替えの終わった瑠璃を目にして、似合っているその姿に変な感情の歓喜を覚えて。

美井奈の気持ちも、自分の中ではちよつと理解出来た気がしてびっくり。実は自分の中にも少女っぽい感情がある事に、改めて新発見した思いである。普段は化粧なども全くせず、ゼミでの研究や論文書きの毎日なのだ。

趣味と言えばネットやゲームで、同世代で遊びに行く事もあまり無い。友達に行動派の村つちもいるが、これも色気の無いタイプで、どこか気兼ねなく付き合えるとの安心感があるのも確か。

大鏡の前でポーズを取って、確かめるように自分の中の女性を強調してみる薫。

「おおつ、ノツて来ましたね、薫さんっ！　じゃあ、次はこれを見てみましょうっ！」

「髪型もちよつといじって見ましようか、せつかくのセミロングな



んだし？」

「なる程、さすがお姉ちゃまですっ、道具持って来ますねっ！」

完全に年下の少女達の玩具になってしまった気もする薫だけれど、甘んじてそれを受け入れつつも、何となく色々とファッションの講義を受ける気分にもなったりしてるのだが。

母親の化粧道具から、櫛やヘアピンを持って来た美井奈は、得意げにそれを見せびらかす。瑠璃と一緒にきゃいきゅい騒ぎながら、恐らく本人達は人形遊びがおままごと気分。

辛うじて瑠璃に軌道修正して貰いつつ、滅多にしないおめかしを何故か他人の家で行う薫。ちよっと自分自身のテンションも上がって来て、鏡の中の自分に問い掛けるのは。

こうして見ると、なかなか見栄えもよろしいのでは？

そんなこんなで、年下の少女達に弄られ続ける事1時間以上。最終的には美井奈のリボンが似合うと言う事で、髪型は美しいというよりは可愛い仕上がりになってしまったが。

衣装も上下を何度も取り替えられて、大抵の服はサイズが合う事を確認出来たのは良いのだが。年下の少女達にとっては、等身大の着せ替え遊びの時間だった様子。

むしろやり遂げた感の強い美井奈は、これで母親に顔向けが出来ると誇らしげ。先週貰ったお土産のお返しがあったのは本当のようで、母親と色々遣り取りがあったのだろう。

その想いがやたらと嬉しい薫であった。

狭いクローゼット部屋から、やっとリビングに場所を移し。今度は、美井奈自慢の冒険写真の鑑賞会を。今までの軌跡がほとんど全て収められており、その数ファイルに3冊とちよっと。

ほとんどの写真が、期間限定イベントの冒険の様子なようで。厳

選された写真の下には、日記のようにメモが書かれている。美井奈の率直な思いや感想は、読んでみると結構面白い。

弾美隊長と瑠璃に出会った時の感謝の書き込みなど、思わずホロリとしてしまう程。

「恥ずかしいから日記は読まないで下さいよっ！ 薫さんはメンバーに入るまでの冒険知らないから、これで補って貰おうと思ったんですっ！」

「ああ、なる程ねえ。へえっ、三人はこんな出会いだったのかあ！

美井奈ちゃんも序盤は苦労したんだねえ……」

「だから、文章は読まないで下さいよっ！ わっ、お姉ちゃままで熟読しないで下さいっ！」

「えっ、美井奈ちゃんは文章の才能あるねえ。感情豊かで面白いよ？」

思わぬ瑠璃の好評価に、ちょっと照れてしまう美井奈だったが。

二人がアルバム日記を没頭して読み始めると、今度は照れと同時に退屈になって来てしまう少女だったり。

瑠璃など特に、読み始めると何も耳に入らないタイプだったりするので。とうとう爆発した美井奈は、二人から自主作成の冒険の書を取り上げて、他の遊びをしようと提案する。

顔は真っ赤で、どうやら自分の書いたものを読んで貰う事には慣れていない様。

それじゃあ時間のある内にゲームの中の始末をつけようと、提案したのは年長者の薫。弾美の伝言で、時間があつたら呪い解除をしておいてくれとの事だったので。

それなら自分も参加出来ると、勢い込んでの美井奈の賛成の拳手。そんな訳で、皆で揃ってコントローラーを持ち出す事しばし。弾美の分もと、瑠璃が召喚の用意に励む。

やや変則だが、時間の短縮には必要な事である。

ようやくゲームに接続した一行は、打ち合わせ通り時間の有効利用を開始する。闇の屋台で入手した呪い装備を持って、妖精の泉へと出向く事に。ハズミンのキャラも、メモったパスワードから瑠璃が召喚しており、そのサチコメには本人不在との書き込みも忘れない。

万一ハズミンに通信が入っても、これで答えなくても済む段取りだ。ややこしい事になりませんようにと、他人のキャラの操作の時には特に気を使うのは仕方が無いのだけれど。

美井奈も本人不在を良い事に、ハズミンの性能を自分と見比べて遊んでいる。キャラのステータスを見れば、育て方の違いなども一目瞭然でなかなか面白い。

腕力や器用度は、完全に自分の方が上なのに、ご満悦の美井奈。楽しそうにそれを皆に報告しながら、HPなど向こうが完全に上の数値は無視する事に決めたよう。

それでも防御の合計数値には、目を丸くしていたが。

瑠璃が念の為にと、教会にわざわざ出向いて呪い解除の金額を聞いてみたようなのだが。合計で10万近く掛かるようでは、妖精の泉を頼るしかないと思痴をこぼして来る。

幸い、木曜日の夜には3日縛りが解けているので、四人で行けば4つの願いが叶えられる筈。一応念の為にと、薬品や転移アイテムを買い込んで、フリーエリアへの出発準備は完了。

フリーエリアでの指揮を薫に完全に任せる形で、三人で4キャラを操作して泉へ向かう変則パーティ。美井奈がハズミンを操作したいと言い出して、事態は思わぬ方向へ。

前衛キャラの講義が、薫先生によって開かれる運びに。

「片手武器は、とにかく回転が速いから気を付けてね。四角ボタンでブロック操作、ステップは今回は教えないけど、上手な前衛はいかにダメージを受けないかに掛かってるから」

「これだけ防御力が高ければ、少々はへっちゃらじゃないですか？前衛のスキル技って、ちょっと使ってみたかったんですよっ！」

「まあ……フリーエリアの敵が相手なら、平気だとは思うけど。万一、ライフロスしたら、弾美君にこっそり搾られる覚悟だけはしておいてね？」

「……ええと、四角ボタンがブロックでしたっけ？」

途端に顔を青くして、真面目に操作の練習を始める美井奈。心配そうなのは瑠璃も一緒だが、敢えて反対はしないよう。自分も、そういう他キャラへの憧れの感情は分かるので。

薫の号令で、パーティはフリーエリアへ突入。ミイナは薫が同時操作して、オートでの自動追尾を使ってカルガモ状態にしておく。本人が席を立っている時などに、便利な機能なのだけ。

そういう事が出来るとは知らなかった美井奈は、軽くショックを受けていたり。

初っ端に存在する獣人の分布エリアでは、期待していた戦闘はまるで無し。どうやらこちらのレベルが上昇し過ぎていて、絡まれようもないレベル差を生んだようである。

つまらないと連呼する美井奈のために、一行は仕方なしに軽く練習でバトルをする事に。待ってましたと、美井奈は興奮気味にハズミンを操作するのだけ。

テンション通りには滑らかに動いてくれないキャラに、美井奈はひたすら文句を投げ掛ける。

「ん、そんなに簡単には前衛は無理だねえ。キャラが変な方向向  
いちちゃってるよ、美井奈ちゃん？　まずは、向き固定から覚えな  
い」と

「む、つ、以外と難しいですねえ……ひよつとしたら魔法戦士も楽  
しいかと思ってたんですけど。お姉ちゃまはどの位で慣れましたか  
？」

「私は馴染んだのは1週間経ってからくらいかなあ？　でも、今も  
上手とは言えないけどねえ」

「毎日やってれば、嫌でも馴染むとは思うけど。メイン世界の遠隔  
使いは、お金が掛かるから続けて行くのは大変なのは確かかも？」

ベテランにそう言われて、揺れる乙女心？　の美井奈は、再び悩  
み始めた模様。そんな事を話し合いながら、パーティは3度目の願  
い事のために妖精の泉に到着した。

それから遠慮なく、闇の敵のドロップと闇の市で購入した呪いア  
イテムを、次々に泉の精霊に預ける一同。あまり時間を掛け過ぎて  
後の最終エリアに響くような事になったらつまらない。

ブーツとグローブとマントが、サファイア装備に変化して行く。  
精霊封入の盾は特に良品のようで、一同は驚きと歓喜の表情。高か  
っただけはあると、薫などはご満悦だが。

難点なのは防御と耐久力の低さ。ハズミンよりはルリルリ向きか  
もと、感想を述べる。

精霊封入の盾　HP + 40、MP + 40、防 + 10 《耐久7

/7》

サファイアの腕輪　腕力 + 5、SP + 10%、攻撃力 + 5、

防 + 12

サファイアのマント　腕力 + 5、SP + 10%、攻撃力 + 5、

防 + 12

サファイアの長靴　腕力 + 5、SP + 10%、攻撃力 + 5、

防 + 12

弾美が合流してから分配は行おうと、薫は年少組に転移の棒切れの使用を指示する。スムーズに行き過ぎて意外とあっけない幕切れに、美井奈などは不満顔なのだ。

それでも薫に欲しい部位を決めておいてと言われると、機嫌を直して呪い解除装備のチェックを始める少女。瑠璃もつられて、一緒に性能を見ながら歓声を上げている。

瑠璃が思い出したように、まだ残ってる写し身の鏡の事を口にする。欲しい部位が重なった場合は、これでコピーしてしまおうとの提案に。それは良い案だと、薫もキヤラを見比べる。

長靴は自分と美井奈ちゃんですつ欲しいかもと、パーティ強化は今日も順調。

「わっ、鏡がとうとう割れちゃった！でも長靴はちゃんと2つに増えたよっ」

「やったねっ、腕輪も美井奈ちゃんが持った方がいいかなっ？分配してても、弾美君は怒らない気がするけど、もうしておく？」

「ハズミちゃんは、全然怒らないと思うけど。マントは全員固定してるけど、ハズミちゃんが使つかないかなあ？お金は足りてるから、売るのも勿体無い気がするけど」

確かに呪いを解除したマントは、売り払うには勿体無い性能ではあるものの。パーティに余っているメダルで、 Jewel を購入して無理やり固定解除も選択は可能。

弾美の今使っているマントも性能が良いので、交換するかは微妙な感じではある。使うとしたら美井奈だが、メダルを勝手に使うのもリーダーに悪いと消極的な女性陣。

瑠璃などは、ハズミちゃんは怒らないよとの一点張りなのだ。

それよりも、薫が昨日同じく闇市の屋台で購入した『魔の宝玉』

の事を持ち出して来る。瑠璃のカバンの中に入っているそれを、さつさと誰が覚えるか決めておかないと。

装備の交換を順調に行いながら、美井奈もその存在を思い出したよう。弾美に内緒でハズミンに覚えさせておこうとの、過激な意見も美井奈から飛び出したのだけ。

結局は瑠璃が折れて、自分が使うと申し出る結末に。

「これはもう、仕方がないよねえ……誰かが犠牲にならなきゃ、メダル10枚が勿体無いもんねえ」

「まあまあ、そんなに酷い魔法じゃ無いと思うよ？ 多分、魔法とか魔力の『魔』じゃないかな？」

「そうですねえ、悪魔の『魔』じゃ無い事を祈りましょう！」

美井奈の不用意な言葉に、ぴきつと動きが止まりそうになる瑠璃だったけど。何とか気を取り直して宝珠を使ったルリルリは、まばゆいエフェクトの光に一瞬だけ包まれて。

ログの魔法を覚えましたとのコメントを目にして、瑠璃が魔法欄を慌ててチェックすると。新しく覚えたのは《マジックブラスト》と言う名前の、攻撃系の魔法らしい事が判明した。

純エネルギーのダメージ系の魔法らしいのだが、魔法スキル10程度で攻撃力が期待出来るのかは謎。試し撃ちにどこかのエリアに入ろうかとの薫の言葉に、元気に美井奈も挙手。

手にはハズミンの操作コントローラー。どうやら、まだ諦めていないらしい。

宝珠騒動で昨日の戦利品を思い出した瑠璃は、ハズミンに盾の宝珠をトレードする。代理に受け取った美井奈は、盾スキルの存在を初めて知ったようで驚いているが。

本格的な盾キャラは、まず間違いないく伸ばしているスキルである事は間違いないと薫の言葉。さすがに今回のような短期限定イベント

トでは、皆どうしても武器スキルを優先するだろうが。  
こんな終盤に出て来るのは、何かの縁かただの意地悪か？

「使ってみていいですか、お姉ちゃまつ？ 盾スキルってどんなのあるか見てみたいですよっ！」

「う、うん……多分、それ位では怒らない……で欲しいかなあ」

超小声での瑠璃の呟きは、はしゃいでいる美井奈の耳には届かなかったよう。手にした宝珠を勢い良く使用すると、先ほどのルリリと同じようなエフェクトが画面を白く染める。

ハズミンが新しく覚えた盾スキルは《ブロッキング》という技で、薫の説明によれば初歩の技には間違いないとの事。挑発系の技で、使用頻度も高い使い勝手の良い技らしい。

SP使用もほんの少力で、盾キャラには無い方が不自然らしいのだが。

「今頃覚えるって、どういう事ですかっ！ さては私が毎回逃げ回る羽目になるのも、お兄さんのズボラな性格のせいですかっ!？」

「えっ、それは……美井奈ちゃんのごによごによさが……」

「薫さんっ、今何て言いましたっ!？」

何でもないと、薫は慌てて言葉を濁す素振り。とても自業自得とは言い出せずに、ヒートアップする少女にタジタジな感じの年長さん。改めて考えると、この微妙なパーティバランスでよくその快進撃な気もするけれど。

瑠璃はあくまで冷静で、自分の新魔法のコストに首を傾げて思案顔。天使魔法のようにバカ高いMP量かと思っていたのだが、実際覚えてみるとそうでも無いようだ。

カバンの中には昨日の戦利品がまだ残っている。それを分配したら、弾美に言われた事はほぼ終了。まだ時間もあるし、薫の提案に



乗って試し撃ちに出掛けるのも悪くないかも知れない。  
ぶつつけ本番は、いくらゲーム内とは言え怖いものだ。

武器指南書を、アタッカーのどちらかが取るかを検討して貰いつつ。自分は水の術書を、2枚連続使用する。片方が2ポイント上昇を見せ、合計3ポイントの上昇に気分上々な瑠璃。

同じく昨日取得した光の術書を、美井奈に使っていいよと瑠璃が口にする。それなら薫さんが指南書を貰って下さいと、どうやら譲り合いの決着は付いたよう。

微妙に残っている術書と言えば、風とか土系の類いなのだが。区切り良く魔法を覚えるほどの枚数が揃ってなくて、そのまま保留していた端切れのような存在なのが悲しい。

薫は要らないというし、きっと弾美も同じコメントに違いないのだろう。

「ん、地上エリアを去る前に処分出来ないのは勿体無いよねえ。

時間があるなら物々交換を誰かに持ちかけてもいいんだけど……ちよつと知り合いインしてるか見てみるね」

「確かに知らない人との物々交換は、ちよつと嫌な思い出があるしねえ。サチコメに交換希望書いて、しばらく放置しておいてもいいけど……」

「あ、前に知らない人に乱暴な口を聞かれた事がありましたねえ……そう言えばあの時も、ウチからのインでしたね、お姉ちゃまつ」

そうだったねえと懐かしむ瑠璃に、限定イベントは皆の気性が荒くなってるからと薫の忠告が飛ぶ。やっぱりこう言う場合は、ギルド単位で動くか知り合いを頼るのが良い方法には違いなく。

それでも最後の追い上げに向けて、他のパーティもアイテムの処理に困っているかも知れないと。薫を中心に、最終試練に向けての最後のアイテム入手に走るメンバー。

蒼空ブンブンのもう1チームは、常に金欠気味で時には術書さえも売ってしまう有り様らしい。何しろメインの癒し手がないので、とにかく薬品に頼っての攻略なのだ。

コストも当然上がってしまい、こちらを気にする余裕は無いかも。

薫が何とか1人召喚出来たと、瑠璃に交換可能なアイテムの種類を訊ねて来る。こちらも懐が潤う以前は金策の足しにと、古いアイテムや装備品は売ってしまっただけで無いのだが。

自分のカバンを調べてみると、価値のありそうなのは辛うじて昨日入手した複合技とか呪いの大斧とか。後は、武器が少々と1つだけ残ってしまった命の口ウソクとか。

薫が最終エリアの攻略に入ると、もう地上エリアには戻れないと言っ情報を入力していたので。金のメダルも、使うならば今日のイン前までが最後のチャンスになってしまう。

ただ、リーダーの弾美がないので、どこまで勝手をして良いのやら。

『こんにちは、皆さんお久し振りです、春日野です』

『ご苦労様、突然呼んでごめんね？』

リーダーをしていた薫が、パーティに空きを作って自分が呼び寄せたキャラを招く。チルチルという名前の炎属性のキャラは、しばらくして一行の前に姿を見せるのだが。

ガチガチの前衛仕様のアタッカー風の勇姿に、手にしている武器は両手鎌。瑠璃と美井奈も挨拶をしながら、紹介された名前から誰だったかと推察に頭脳をフル回転させる。

思い当たったのは、やっぱり瑠璃が最初。

「あ、薫さんの知り合いの大学の方ですね。この前の日曜に会って、同人誌くれた人」

「そうそうっ、彼らのギルドも何とか1チームだけ生き残っているみたいだね。この間、情報交換とか攻略とかで力を合わせようって話し合ったばかりなのよ」

「へっ、薫さんは年上女房ですか。ちょっと趣味には疑問ですが、尽くしてくれそうな男性なのはグーですねえ！」

「えっ、そういう間柄だったんですか？ それは……おめでとうございます?」

ちょっと驚きつつも、色恋沙汰に興味津々な年少組。嬉しそうな瑠璃の言葉に、薫は真っ赤になって否定して来る。話を振った美井奈と来たら、照れなくても良いのにと平然とした顔。

良く分からないダメージを受けつつも、とにかく渡しても良いアイテムのリストを読み上げて行く薫。本当に違うからねと、必死になって誤解を解こうとする姿は、ちょっと痛ましい気も。

だらだらと変な汗をかきながら、お互いにリストを出し合う時間が過ぎる。

「あつ、大斧と大鎌の複合技の書は欲しいですねえ。スキルの足りてる属性の技が出てくれればいいんだけどな。こっちの複合技の書と交換しませんか?」

「片手剣と細剣の持ってるんですかっ、わっ凄いつ、ぜひお願いします! 後は、土の術書かカメレオンジェル持ってたら欲しいんですけど……」

春日野はジェルは無いけど土の術書は余っていると言い、3枚なら用立て可能との事。お礼のお返しは何が良いだろうかと、瑠璃と薫がカバンの中身を見直すのだが。

結局は呪いの大斧を、教会で呪いを解除してプレゼントする事に1万ギル以上解除費用が掛かってしまったが、まだ10万ギル近く資本金は残っているので全然平気。

自分の所持しているのより性能の良い武器に、春日野も感謝の様子。

『こんな所かな？ 他に風の術書とか、氷のダガーとかあるけど、そっちで使う？』

『うん、ダガーは必要無いですね。風の術書も、特にはいらないうです。こっちに闇と雷の術書が2枚ずつ余ってますけど、そちらで使いますか？』

『伸ばしている人はいるけど、区切りには遠いかなあ？ こっちで渡せるのは、もう命のロウソクくらいしか無いしなあ』

今はリーダー不在だから、あまり勝手は出来ないと薫が弁明するのだが。こちらには必要無いから、そちらで使ってくれとトレードして来る春日野。人の良さをバリバリに発揮して、こちらもひたすら恐縮してしまう事に。

ただで貰うのは申し訳ないと、結局瑠璃も命のロウソクをトレードする事に。ついでに同化を解除出来れば交換しようと思っていた、サファイアのマントを半ば強引に渡してしまう。

これもアタッカーには嬉しい性能で、素直に喜ぶ春日野。

「物々交換タイムは、これくらいかなあ？ 片手剣と細剣の複合技の書を貰えたのは、かなりラッキーだったねえ？」

「そうですねえ、薫さんの彼氏にお礼を言わなきゃですねえ！」

「だから、彼氏とかじゃないってば……」

やや脱力気味に、薫が言葉を返すのだが。相変わらずハズミンを操作している美井奈は、瑠璃から土や闇の術書と《複合技の書：片手剣》を貰ってはしゃいだ声をあげている。

これでジェルを探して歩く必要も無くなったと、パーティ内では割と気楽な感想がもれる中。それより術書で地味に魔法スキルが伸

びたハズミンは、土スキルが区切りの30に到達。

《レイジングアース》という魔法を覚えて、闇スキルも78という信じられない数値に。何と、ボーナスを振り込み続けた武器スキルよりも、高い数字を弾き出している。

本人に勝手に術書を使いまくっている美井奈に、薫などは青褪めているのだが。

ついでにと、交換で貰ったばかりの複合技の書を使う瑠璃と美井奈。こまで来たら、何をしても一緒な感じである。悟ったような表情の薫、瑠璃も同じく止める者はもはやいない。

本人不在の内に、暴走してるかの様にどんどん強くなるハズミン。書で覚えた《闇喰い斬》と言う複合技は、ハズミンにピッタリな闇スキルを20を必要とするスキル技である。

この幸運な引きの強さには、瑠璃を始め、使用した本人でさえ驚いた表情である。これは絶対喜んで貰えると、ようやく瑠璃と薫は安堵の表情にと変わるといふ一面も。

ちなみに、瑠璃の覚えた技は《ハニーフラッシュ》という、どこかで聞いた事のある冗談のような技名だったり。光スキルが20程必要な幻覚系の技のようで、攻撃と同時にフラッシュ効果を与えて、敵の反撃を封じてしまうようだ。

幻覚系の技の多い細剣なので、これはまあ順当かなと薫談。

順当でないのは、実は他人のキャラ操作に夢中な美井奈だった。春日野の操るチルチルをパーティ会話に入れるため、不在のハズミンを一度外した薫なのだが。

別れの挨拶と共に去って行くチルチルを見送りつつ、再度ハズミンをパーティに誘ったのだが。何故だか分からないけど反応の鈍さに、不審に思った薫が隣の少女を見遣ると。

もつと訝しげな表情をした美井奈が、ハズミンのカバンのアイテムに首を傾げていた。

「どうしたの、美井奈ちゃん？ まさか……間違つて、大事なアイテム捨てちゃったとかっ！！」

「そんな事しませんよっ、バレたら隊長に殺されちゃうじゃないですかっ！ ちょっと荷物の中に変なものがあつて、さっき術書と間違えて使いそうになつて焦つたんですけど……」

「えっ、コレ？ ってか、呪いのアイテムだあ……使わなくて良かったね、美井奈ちゃん。使つてたら確実に、ハズミちゃんの罰ゲームの餌食になつてたよっ！」

ワイワイと皆でその存在に驚いているのは、ハズミンのカバンの中に入っていた、その名も呪いの巻物。形が確かに術書にそっくりで、美井奈でなくても間違えそうな雰囲気である。

いつの間に弾美が入手したのかと、一行は顔を寄せ合つて記憶を手繰る作業。敵のドロップならば、ルリルリが自動ロツトするようにセットされているので、ハズミンのカバンには入らない筈。

前にもこんな事があつたようなと、美井奈が思い出しつつ口にする。そう言えばお供え物を取つたミイナのカバンに、呪いのアイテムが入つたと瑠璃の口からポロツと言葉がこぼれる。

その途端、三人の口から揃つて同じ言葉が。

「……お供え物だっ！」「」

そう言えば昨夜の最後の戦闘で、NMを湧かせるためにハズミンが社のお供え物を取つたのだつた。尊い犠牲の事を今まですっかり忘れていた一行は、ちよつとバツの悪い思い。

呪いのアイテムで終わるのは、実はまだ良いパターンだったりする。後に完全に呪われてしまうケースもあるらしく、本当に罰が当

たったキャラも多々報告されているのだ。

薫がそう言うと、知らずに取ってしまった事のある美井奈は、今更ながら顔を青褪めさせる。パーティにハズミンを加えながら、どうしようかと小声でお姉さん達に窺うと。

教会に行けば呪いを解いてくれるからと、安心させるような返事。

時計を見れば、まだようやく3時過ぎ。弾美が来るにはもう少し時間が掛かるよう。お茶にしますかと、美井奈が楽しそうに母親の作りおきの焼き菓子の事を口にする。

瑠璃がお茶の支度に席を立ち、美井奈と薫がキャラ操作で全員を教会に導く役を買って出る。地上エリアの教会は、キャラバン隊の作っただけの小さな造りのモノ。もちろん規模も大きくはないし、外から見てもそれ程立派な建物ではないのだが。

中も当然小さくて、NPCもたった二人しか存在しない有り様である。冒険者達がここを使用するのは、主に聖水を買いに来たり呪いのアイテムの鑑定だったりする訳で。

ハズミンとミイナを操作していた美井奈は、早速呪いの巻物を見て貰おうとして。

「あつ……………」

「えつ、どうしたの、美井奈ちゃん？」

「あの…………神父さんにトレードするんですけどっけ？ 間違っで使用しちゃった…………かも」

えつと言う顔をして、薫は画面を注視すると。モニターの中でハズミンが、何やら酷く苦しんでいる様子。黒いもやがキャラの周囲を包み、不穏なBGMなど鳴り響いたりして。

完全に呪いの音楽だと察した薫だが、もはやどうする事も出来ず。先ほどの勝手な強化と違い、今度は言い逃れ出来ない事態。本人不在のハズミンは、一体どこへ向かうと言うのか？

トレイにお茶の用意をしてリビングに戻って来た瑠璃が、固まっている二人に不審顔。

「お、お母ちゃんに電話しますっ！一緒に謝って貰わないとっ…」

「おっ、落ち着いて、美井奈ちゃんっ。正しい判断だと思うけど、ゲームの失敗でお母さんの手を煩わせるのはどうかと思うのっ！」「えっ、失敗って何がどうなったの？」

薫から説明を聞いた瑠璃は、全く慌てる素振りも無い。ハズミンの画面を観察しながら、呪われたキャラのステータスチェック。一般的な呪いというのは、装備品の呪いは外れなくなって、キャラが時々勝手な行動を始めるのがポピュラーなだけだ。どうやらこの巻物タイプは、ステータスの低下を招いているよう。

ハズミンのステータスの全てが半減、HPやMPもかなり減っていて、顔には紋様のようなものが浮き上がっている。メイン世界でも何度か見た姿、リーダーの役割はハードなのだ。

ここは教会だから、呪いを解いて貰えるよと瑠璃が平然と答える。薫は余程、気が動転していたのだろう。なる程そうだったと、ちよつと頬を染めて気を落ち着ける素振り。

早速、美井奈はハズミンで神父に話し掛けての必死のヘルプコール！

ところが神父は、呪われたハズミンを目にして驚きうつろたえた表情を見せる。自分の力は到底及ばないかと、パーティの残りメンバーに早々に代案を提示して来る素振り。

要するに、自分は力不足でこの呪いには手が出ないのだが。呪いの元である魔法プログラムの基礎部分を破壊すれば、被害は最小限で済むかも知れないと言うのだ。

この教会の奥の部屋に、呪いをフィールドに転換する魔法陣が存



在する。つきましては、その使用料に2万ギル……いやいや、呪いを解く代金としては格安ですじょ？

何となく胡散臭いその口振りに、しかし藁にもすがり付きたい美井奈は飛び付く勢い。

「お姉ちゃまつ、お金の工面をお願いしますっ！ お兄さんがここに来る前に、何とか元の姿に戻すの手伝って下さいっ！」

「うん、それはいいけど……お茶が冷めちゃう、まずはおやつにしましょう」

「瑠璃ちゃんは、何と言うか……度胸が据わってて、肝っ玉母さんみたいな？」

マイペースな瑠璃の落ち着き振りに、美井奈も薰もちよっと呆れ顔なのだが。興奮して咽が渴いていたのも確か、カップに手をつけると、二人とも一気におおって紅茶を飲み干す。

それからのんびりティーブレイクを楽しむ瑠璃を急かして、何とかお金を融通して貰うと。色々と経緯はあったものの、神父に通された奥の部屋で、独りハズミンが魔方陣の犠牲に。

その結果、小さな部屋は光と闇の力オス状態。先ほど神父が口にしていた、呪いをフィールドに転換するとか、呪いの元である魔法プログラムの基礎部分を破壊するという本当の意味を。

身を以って知る事になる、残りのパーティメンバー。

「あれっ、ここはどこですかっ？ 何で、敵のいるフィールドに出ちゃいますかっ？」

「あれっ、あれれっ？ ひょっとして、呪いの何とかの破壊って……私達がしなさいって事？」

「あゝっ、神父さんは自分には手に余るって言ってたから……そういう事かも？」

慌てまくる一行が通されたのは、四角い見晴らしの良いフィールド。ただし、腰までの石の垣根が迷路状の通路を形成しており、道を見失って勝手に動き回る事は不可能のようだ。

美井奈の言う敵とは、フィールド中央に固まって佇んでいて、形状は大きなスライムのような。緑色とオレンジ色の軟体生物で、動きは鈍そうなのだが3体は確認出来る。

フィールドで他に変わった点と言えば、道なりに宙に浮かんで存在する光球だろうか。青色のバレーボール位の大きさの物体が、等間隔で見渡す限りに存在している。

石の垣根の上にも存在していて、たまに赤いボールも混ざっている。

中央に、丁度お立ち台のような台があって、細いボールが立っているのだが。その上に4面からなるパネルの集合体が設置されており、不意に神父の顔がそこに映り込んだ。

パネルの中の神父が、厳かな顔で忠告するには。何とか呪いをフィールドに転換するには成功したが、この場合は10分しか持たないとの事。10分以内に、この場のボールを全て取れば、呪いの魔法プログラムは完全に破壊されるらしいのだが。

もちろんそれを邪魔するべく、敵も配置されていてこちらを攻撃して来る。呪いも強力な為に、徐々にフィールド内での力の解放も難しくなるらしい。具体的には3分後には武器の使用不可、6分後には魔法の使用不可、9分後にはアイテムの使用不可になる事が確定している。

トライは本人以外のパーティにより1度きり。今なら離脱可能、  
トライOR離脱？

「わっ、戦闘が始まっちゃった。私のコントローラーどこっ？」

「これは……昔のゲームのパックマンってのに、ルールが似てるなあ。ひょっとして、色違いのボール取ると敵が倒れるとか？」

「えっ、そんなんですか？　つてか、ボールの数多いですねえ……垣根の塀の上にもあるじゃないですか、登り口どこですかっ？」  
「あっ、本当だ……作戦立てようっ！　私と美井奈ちゃんが敵を受け持って、瑠璃ちゃんが反対側のボールをひたすら取って行く感じで。塀の上のボールは後回しで、色違いのボール取る前には一声掛けてねっ！」

了解ですと、元気な返事が2つ返って来たのは良いのだけれど。弾美不在の戦闘な上、しかも時間制限付きの厳しいこの場を、果たして女性陣だけで切り抜けるかどうか。

リーダー代理の薫は、緊張しつつも的確な状況確認を。美井奈に俊足魔法を瑠璃に掛けるのを忘れないようにと指示を飛ばし。それからゆっくり、画面の選択肢からトライをチョイス。

敵がゆっくりと動き出し、中央の4面パネルにはカウントダウンの数字の表示が。

魔法強化ももどかしく、それでも瑠璃は分身魔法も天使魔法も両方掛けるという大盤振る舞い。時間制限があるので、逆に最初から飛ばさないと駄目だという気構えらしい。

美井奈も同じく、薫の注文にも素早く応えてから自己強化。先に強化を終えた瑠璃が、ボールに体当たりしながら中央に駆けて行くポコポコと、ボールゲットの音が心地良いかも。

薫も同じく、風と炎系の強化を終えると、敵を迎え撃ちに前に出る。

石垣の塀が、意外に邪魔だと言う事はすぐに判明したのだけれど。乗り越える訳にも行かず、とにかく道なりに移動を余儀なくされる瑠璃と薫。美井奈はある程度移動したら、敵を引き付けるべく攻撃を開始するのだが。

緑色のスライムは、キャラ並みには移動速度が速い事がすぐに判

明した。一方のオレンジ色のスライムは、移動速度が遅い代わりに塀を平然と乗り越えて来る卑怯な仕様。

一直線に向かって来られると、動きが遅いとは言えちょっと怖いものがある。

「反対側に抜ける通り道が、左右2箇所しか無い感じだね〜？  
こっちに渡る時には注意が必要かも……今抜けたよ〜っ」

「了解っ、向こうのボール、全部取っちゃって！ こっちは敵を相手しながら二人で取るつもり」

「なる程、そういう作戦ですかっ！ ってか、もう1匹倒せちゃいますよっ！」

初っ端からスキル技を大盤振る舞いした結果、遠距離攻撃で早くもスライム1匹平らげてしまった美井奈。薫が慌てて制止する間もなく、敵のスライムは消滅の憂き目に。

そしてすぐさま中央のお立ち台で復活。オレンジ色のスライムは、近くにいた瑠璃を追尾に掛かる構えを見せる。驚き顔の二人に、ジエネレーションギャップを覚える薫のだが。

知らなかったのは仕方が無い。敵の数が倒せば減るなら、こんな楽なゲームはありはしないだろうに。それなら作戦など立てずに、皆で敵を倒して皆でボールを取ってますっ！

とにかく作戦修正、なにしろ武器を使える最初の3分がカギなのだ。

「作戦変更、瑠璃ちゃんは逃げながら中央付近のボールから取って頂戴！ 美井奈ちゃん、私の前の敵釣って、自分に近付いたら倒して！」

「りよ、了解っ！」

薫のハキハキした口調に、二人の背筋がしゃんと伸びる。気合い

を瞬時に入れ直し、再度の状況確認。幸い混乱によるダメージは軽微、ルリルリも順調に迷路を伝って逃げおおせている。

美井奈の方も、早めに倒すと逆に迷惑だと分かった様子で。攻撃を控えながら、奥に逃げつつボールの確保などしている模様。飲み込みの早さは、誉めて上げたいほど。

生憎今は、とてもそんな暇も無いのだが。何とか中央までやって来た薫は、炎のプレスで瑠璃に付きまとうスライムの確保に成功する。お礼を言いつつ奥へと遠ざかる瑠璃。

キープした敵をあしらいなから、瑠璃と反対側へと誘う薫。

美井奈の悲鳴が不意に上がり、薫も同じく異変を察知。どうやら3分が経過して、武器の使用に制限が掛かったようだ。薫は慌てずに、色付きボールに近い人はそれを取ってと指示を出す。

瑠璃が近いですと名乗りを上げて、まずは1個目の赤い光球の確保に乗り出すと。途端に放たれていたスライム群は消滅し、3匹まとめて中央のお立ち台に復活を果たす。

おおっと、歓声を上げる年少組。

「凄いつ、こつやって危険を遠ざけて、ルートを確保する作戦があるんだあ！」

「さすが年の功ですねっ、だてに私の2倍年を取ってる訳じゃありませんねっ！」

「……年の事はいいいから、今の内に美井奈ちゃんもこつち側のボール全部取るっ？」

再び元気な了解の合図。瑠璃の方はかなり順調で、片方の端っこを含めて半分位は取ったとの報告。後半に備えて赤い玉を残して置きつつも、もう半分のエリアを制覇に向かう。

美井奈も端っこから、俊足を飛ばしてのボール獲得はなかなかのもの。薫も種族スキルに移動速度UPを持っているので、再び湧い

た敵をまとめてキープして逃げるのに不便は無い。

ただし、オレンジの垣根無視スライムには注意が必要だが。逃げ道を塞がれても、瞬殺されないのは有り難い。そんな事を思っていたら、新たな敵がフィールドに出現して一行を驚かせる。

そいつは何と、自由に宙を飛ぶ軟体飛行生物だった。特性を思う存分利用するソイツは、真っ直ぐ石垣に乗っているミイナ目掛けて飛んで行く。悲鳴の大きさは、果たして美井奈と薫、どちらが大きかったか。

弾美の気苦労をまざまざと思い知り、薫の神経はプツン寸前。

「美井奈ちゃんっ、石垣に登るのは後だって言ったじゃないっ！」

「ごめんなさいっ、だって近くに垣根に登る階段があったからっ！」

今度放たれた敵は、垣根などまるで関係無い移動手段を持つ敵だ。しかもこちらは、武器が使えない状態。美井奈を獲物と決めた敵は、張り巡らされた《スパーク》に一瞬怯みながらも。

まとわり付くのは止めずに、雷娘をついばみに掛かる。

5分が経過した頃には、フリーの瑠璃がほぼフィールドの半分のボールを一人で取り終わったと報告。赤いボールも最後に触って、これで美井奈や薫も一度フリーの身に戻される。

続いて近くの階段から垣根の上に登った瑠璃に、2匹に増えた飛行生物が近付いて来た。石垣の上に浮遊するボールの数は、そんなに多くは無いとは言えども。

2匹にまとわり付かれながらそれを取るのには、なかなか至難の業である。氷の蜜酒のお蔭でMPも全快していた瑠璃は、近づく敵にお試しの《マジックブラスト》を放ってみる事に。

初魔法の威力は、まるでマシンガンさながら。

純粹な魔力をぶつけまくるこの魔法は凄い威力。その度に敵の身

体は、派手にウネウネ跳ね回る。一度唱えただけで、敵の群れはもうへ口へ口になっていて、これは断然必殺技の候補かも。

放たれた魔力に酔っているかのように、魔法を喰らった敵の動きは鈍っている。その間に瑠璃は、ちょこまかと塀の上を移動してボールの回収に務める事に。

最初は覚えるのを躊躇っていた魔法だが、使い勝手はなかなか良いよう。

「瑠璃ちゃんの新魔法、かなり凄い威力だねえ！」

「そうみたい、追加で麻痺か何かが付くのかな？ まだ敵の動きが鈍ってるみたいで嬉しいっ」

「薫さんっ、赤のボール以外、こっちも回収終わりそうですっ」

美井奈の嬉しそうな報告と共に、6分が経過したとのモニターの表示。これで魔法も使えなくなって、キープ役は最初に見付かる以外はタゲ取り手段が無くなった。

瑠璃が中央付近の塀の上のボールを回収したのを見計らって、美井奈が赤いボールを使用。後半は、ほぼ薫の作戦通りに事が運んでいて、このまま行けば順当にクリア出来そう。

これからは本当の追いかっこだと、リーダー代理の真剣な言葉に。気合の入った返事が返って来て、最終の追い込みに必死な顔で臨む心意気の女性だけのパーティ。

ところが、新たな敵がさらに2体湧いて、場は予断を許さない局面に。

空の敵を引き付けようと動いた瑠璃の方に、その新たな敵は向かって行ってしまった。水分身が辛うじて残っていた瑠璃は、そのお陰でたかられる事は回避出来ているのだが。

新たな敵は大きな口の大蛙で、のそのそと動き自体は遅いのだが、特殊能力は厄介で、何度かの交戦で水分身を呆気なく呑み込んでし

まう。一転ピンチの瑠璃は、しかし抗う術が無い。  
何しろ武器も魔法も使用不可なのだ。

「さっ、最後の手段……呼び鈴使うねっ！」

「あっ、それがありませんかっ！」

「こっちももうちよっと、瑠璃ちゃん頑張って時間稼いでっ！」

お互いに声を掛け合って、本当に奥の手の呼び鈴使用の助っ人召喚に踏み込む。前もってポケットに入れておいた瑠璃は、とっておきの巻貝召喚をここで利用する事に。

呼び出された巻貝は、相変わらず傲岸不遜な存在感を發揮している。ルリルリと敵の集団の中央に陣取って、大蛙の呑み込み技にもまるで動じる気配はナシ。味方につくと、本当に頼もしい限りのキヤラである。

その際に、瑠璃は最後のボールをゲット、こちらは全て取ったと報告を出す。

反対側で敵の引き付けに苦勞する、美井奈と薫のペアはと言えば、相変わらず薫がスライムを受け持って、美井奈が俊足魔法でボールを取る手段を取っていたのだが。

最後に赤いボールを残す手段をと、取り方の順番にこだわるあまり。一人で取っていた瑠璃に対して、かなりの遅れをとってしまう有り様。パツと見、あと僅かではあるものの。

美井奈らしいと言えばそうなのだが、薫のフォロームも入って安全な移動は保障されている。敵を引き連れ逃げ回っている薫は、何度か殴られたらしく体力が半分まで落ち込んでいる。

ポーシヨンも余裕があるとは言えず、結構厳しい状況だ。

「これ最後っ、取った〜っ！ 赤も取っちゃいますよ、本当の最後ですっ！」



「やった〜、時間内で終了〜っ！」

わっと言ひつつ、転移の瞬間を待つ三人だが。何故かタイマーも止まらず、再び復活した敵達も活動を止める様子は無し。それどころか、新たに小蛙が1匹混じっていて、魔法使用の仕草。

途端にパニックに襲われる一同。それでも巻貝のブロックが何とか健在の瑠璃は、少しだけ気持ちの余裕もあつたよう。動き回る敵影の中に、以前は無かつた物体を発見。

中央のお立ち台に、新たな金色のボールを発見して報告して来る。

「あれっ、敵の復活する場所に新しくボールが湧いてるっ！」

「ひいつ、そんなのアリっ！？ とにかく、私が敵を一箇所に引き付けるから誰か取って！」

「あのステージ、どこから登るんですかっ！？」

巻貝のブロックを有効に利用して、瑠璃は何とか近くまで迷路の道を辿って近づく事に成功。薫を追い掛けているのは丁度半分で、小蛙の魔法攻撃がチョー痛そう。

もう半分は、相変わらず近くに陣取って傍若無人な態度を示す巻貝を敵と見定めたよう。ぼこられている巻貝のHPが危ういと知った瑠璃は、念の為に別の助っ人を呼ぼうとするのだが。

いつの間にかアイテム利用不可の縛り、つまりは後1分しか無い事に気付いて瑠璃は顔面蒼白。パニックに襲われながら、丁度倒された巻貝の後ろをすり抜ける。

リアルに悲鳴をあげつつ、ステージの登り口を必死に探す瑠璃。

段へ上がる階段は、丁度瑠璃の受け持つ陣地側に作られていたようだ。それ1つだけしかないらしく、反対側の美井奈や薫からは発見出来ないのも当たり前。

後ろからの複数の攻撃に、ルリルリのHPがどんどん減って行く。

キャラも悲鳴を上げているのを感じながら、それでも強引に最後の1段を登り切って。体当たりするように、自分のキャラがボールに触れた瞬間。

フィールドの全てが動きを止めて、やがて待望のクリアの合図が脱力しつつも、泣きそうな程の安堵を覚えた瑠璃は。一瞬誉めて貰おうと、弾美の姿を探す自分に気付いて照れてしまう。

代わりに美井奈が抱きついて来て、しばらくは収集のつかない事態に。

「あれっ、経験値がまとめて入って来たけど……一応クリアのご褒美貰えるんだあ」

「美井奈ちゃん、ハズミちゃんのキャラを確認してみて。ひよっとして、呪いの反動あるかも」

「へっ、これでハッピーエンドじゃないんですかっ?」

呪いはそんなに甘くないと、瑠璃がメイン世界での経験を元にする口にする。リーダーをやっているだけあって、そういう汚れ役を買って出るハズミンを何度も見ていた瑠璃だけに。

そっち系の酷いペナルティには、瑠璃はいつの間にか詳しくなっていたりして。恐る恐る、魔方陣に独り佇むハズミンを、美井奈は陣の外へと移動させてみると。

その途端にログに表示される、ステータス減の表示。

ただし今度は-1とか-2とか、そんな微小な程度で済んだよう。減少しない数値も半分以上、呪いとしてはまあ標準かも。同時にハズミンにも経験値が入ったようで、変なタイミングでのレベルアップを敢行。

だから今は本人不在なのにと、瑠璃や薫は何度心の中で思った事か。それでもレベルアップおめでとうと、虚空に向かって律儀にお祝いを忘れない三人の仲間達。

ログチェックしていた瑠璃は、さらにパーティに報酬が入った事を今更知る事に。

「あつ、クリアした時に、パーティに果実が5個貰えたっばいですね、薫さん。後は個人に、振り分けポイントがステータスとスキル用に1ポイントずつ？」

「ああつ、本当だ……全然気付かなかった！ 経験値だけで儲かった気分だったから。果実を弾美君に融通すれば、一応丸く収まる……かなあ？」

「うつつ、これが知れたら……私もう仲間に入れて貰えないかも……」

悲壮な感じの美井奈の言葉に、瑠璃はそんな事無いから安心して宥めているのだが。短い間だけとは言え、リーダー代理を請け負った薫として見たら、正直もう懲り懲りな気でいっぱい。

弾美君はこんな大任を毎回背負って凄いなあ、などと内心ではしきりに感心しつつ。何か報われる事が1つでもあるのだろうかと、ちよつと不思議な気もしてみたり。あるから大任を果たしているのだろうか、自分には理解出来ない気も。

せめて残り少ない限定イベント中だけでも、自分なりに補佐したいと思う薫。

隣でお母さんのような役割を果たしている少女も、恐らくそんな気持ちで幼馴染の少年に付き従っているのだろう。縁の下の役割を担って、普段は目立たない少女なのだが。

瑠璃がいないと、このパーティはたちまちの内にギクシャクして空中分解してしまうだろう。そんな気がするのには、薫も瑠璃の事をリーダー以上に頼りにしているから。

ある意味、パーティの核とも言える人物かも知れない。

そんな事を考えている内に、時間は4時を廻っていたようだ。橋本家の家の呼び鈴が鳴って、美井奈が驚いたように飛び上がる。マンションの入り口に辿り着いた弾美を招き入れつつ、少女は何だか不安げな表情。

テーブルの上を片付けつつも、瑠璃だけがやたらと落ち着いた顔を浮かべている。やっと到着した幼馴染の少年に、何か食べるかもと残り物のチエックをしている様子。

わざわざエレベータ前まで迎えに出た美井奈は、やがて弾美と連れ立って戻って来る。少女の笑顔がぎこちないのは、やはりこれまでの経緯を鑑みれば仕方ない事か。

部活動の練習後の弾美の方が、余程生き生きとして見えてしまったり。

「いらっしやい、ハズミちゃん。残り物だけど、サンドイッチとかお菓子とか残ってるよ？ 飲み物はアイスコーヒーがいいかな？」

「おっつ、サンキュー瑠璃、それお願い」

「いらっしやい、弾美君。練習お疲れ様っ！」

弾美は初めて入る部屋に、珍しげに周囲を伺いながら。自分の席を定めて座りつつ、普段と違う薫の容姿には驚き顔。何をしてたんだと変な勘繰りも、実はそれ程的外れではなかったりして。

それからネットに繋がれている自分のキャラをチエックしようとして、美井奈の不自然な話題変換に不審な顔。運ばれて来た食べ物を手当たり次第に口に運びつつ、取り敢えずは瑠璃の説明に耳を澄ませる。

呪いの装備を妖精の泉で使えるようにしたり、複合技の書を知り合いと交換したり。瑠璃が宝珠で魔法を覚えるついでに、ハズミンも盾の宝珠や貰った術書を使用したと聞くと。

それをチエツクしながらも、弾美は驚いた声を出す。

「うおっ、知らない内にスキルや魔法が増えてるなっ！」

「ひっ、ごめんなさいっ！」

「あっ、ホラ……勝手にハズミちゃんのキャラを使って、怒られるんじゃないって思ってるみたい。美井奈ちゃんったら、他キャラ見るのが楽しかったみたいで」

そんな事じゃ怒らないぞと、食欲を満たしながら弾美はご機嫌のよう。それでも武器スキルが増え過ぎて、セツトし直さないと新スキルが使えない事態には戸惑い気味ではある様子。

どれを外そうかと、コントローラー片手に熟考する弾美。こちらの準備は整っているから、ハズミちゃんの準備が終わったら大樹に登ろうと、瑠璃は進行を買って出ている。

呪い解除マントは人と交換しちゃったとの瑠璃の言葉には、了解と弾美の返事。

「攻撃力とSP上昇より、攻撃速度とHPの方が有り難いしなあ」

「あ〜っ、やっぱり？ さっきの時点でマントも春日野さんに上げて良かったですねえ、薫さん」

「えっ、うん……確かに最終ステージに入ったら、他のパーティと接触出来ないって話だけど」

「あれっ、俺のキャラいつの間にかレベルが上がってる？」

びくっと跳ね上がる美井奈の肩に、弾美は再度の不審顔。それを受けて、瑠璃が弾美にお供え物のくだりから、さり気なく要所を誤魔化しつつあらましを説明して行く。

未開のフィールドで呪い解きの冒険をしたとの話には、弾美も興奮した様子。限定イベントにはエリア開拓率つてのがあったっけと、良くやったと逆に皆を誉める有り様に。

お陰でステータスで下がったのがあるよと、瑠璃は前のログを追っ掛けながら提示する。代わりに報酬で貰った果実をあげるからと、さり気ない表情で取り繕う瑠璃だったり。

女性陣の微妙な空気に、弾美はとうとう気付かず終い。

「あつ、盾はどうする？ 今は私が持つてるけど、そっちで使う？」

「むつ、HPとMPは上がるけど、防御が下がるのか……じゃあそのまま、瑠璃が持つてるよ」

「了解、他に何か分配するのありましたっけ、薫さん？」

「えつ、あつ、その……特に無いかな？ いつでも準備オツケー！」

突然話を振られた薫は、ちょっとオドオドしながら変なテンション。何で髪型変えたのと、弾美も変なツツコミを見せるのだが。年下二人にセツトして貰いましたと、照れつつも事実を告げる薫。

やたらと大人しい様子の美井奈は、拳句の果てには弾美に心配されるに至って。とうとう良心の呵責に耐え切れなかったのか、泣き出しながら自分の所業をばらしてしまう有り様。

ここからは何だか良く分からない、慌しい懺悔のような時間が過ぎて行き。自分がいない間に行われた、正確なキャラの扱いを聞いた弾美は呆れた表情を浮かべるしかなく。

それでも感情的に怒る訳でもなく、弾美は諦めたような悟ったような雰囲気醸し出し。今から最終ステージなのだから、気持ち盛り上げて行けと注文をつけて来る。

泣きべそ美井奈の、明日はどっちだ？

## 24・5 最終ステージ〜大樹の章

「いい加減メソメソするなっ、美井奈っ。俺が苛めたみたいじゃないかっ！」

ある意味、弾美が原因なのだが、元は美井奈の不注意が巻き起こした事。今はスンスンと鼻を噉っている少女は、バツが悪そうに首を引っ込めて瑠璃の影に隠れる素振り。

派手な戦闘はあるのかなと質問する瑠璃は、ちよつと緊張し始めているよう。話題変えの意味もあるのだが、ここで決定的なミスをして全てを台無しにしたくない。そんな様々な心中も見え隠れする一行は、場所を樹上の街へと移動して行く。

インしてみれば分かると、盾のスキル技を使いやすい場所に移動させながら弾美。

「あれっ、何で振り込みボーナスが3ポイントもあるんだ？ スキルとステータス、いつもは両方2ポイントなのにっ」

「ああっ、それは多分……呪いのフィールドの、クリアボーナスじゃないかな？ 私達も全員1ポイントずつ貰ってるから。お陰で、武器スキル80の大台に乗っちゃった」

「ふむっ、でもハズミンは参加してないんだろ？ まあ、ステータス下がっただけじゃ、こっちも損ばっただけだからな」

「ごめんなさいっ……」

責められていると思った美井奈が、再び泣きそうな声で謝罪して来る。だから気にするなど、そろそろ弾美の声も荒くなってきた。それを察知した瑠璃は、とうとう二人に抗議する。

ゲームを始める前にちゃんと仲直りしないと駄目だと、その場を仕切りに乗り出す瑠璃。いつもは大人しくて裏方の瑠璃の、突然の

強い口調に驚く一同。もつとも弾美は慣れたものだが。

幼馴染のお節介な性格は、既に折り込み済み。

弾美は急なお姉さん口調の少女を、眉をひそめて睨みつけるもの。考えてみれば、確かに今日は最終関門に挑む大事な第一歩。未開の地へのトライに、ケチは付けたくない。

こんなテンションで臨む事態も、弾美にしてはもつての外である。ここは一つ、瑠璃のお手並みを拝見するのも悪くない。素早くそこまで考えた弾美は、少女の台詞を促す仕草。

弾美のそんな視線を改められて振られると、特に何も用意していなかった瑠璃は逆にピンチ。急にモジモジし始めて、良い策を考えながらも皆の視線を気にする素振り。

弾美が仕方なく、子供の頃の兄弟喧嘩の事をそれとなく思い起こさせる。

そう言えばと、弾美も自分の姉や瑠璃の兄とは、良くじゃれ合っ  
て喧嘩したものだ。てっきり弾美は、瑠璃が恭子さんモードになっ  
て懇々とお説教すると思つてたのだが。

妹を持つという立場自体慣れていないので、確かにどうして良い  
のか良く分からない。昔は瑠璃が、一緒に謝ってあげるからと弾美  
を説得する場合が多かった気がするけど。

もしくは泣かされた弾美と一緒に大泣きして、兄や姉が謝って来  
るのを待つパターン。

そんな昔の事を思い出した弾美は、益々気恥ずかしくなつて何と  
なく照れた顔付きに。そもそも一人っ子と言うのは、兄弟喧嘩など  
した事が無いから余計に話がややこしい。

困っていると、薫が笑いながらあなた達は本当の兄弟みたいと言  
つて来た。薫にも弟が2人いるそうで、田舎に帰るとしよっちゅう  
その2人の喧嘩を目撃するらしい。



その後の、仲直りしたいと言い出せない気まずさといったら、今の状況そっくり。

「そう、そうなんですよねえ……ハズミちゃんも、昔っから意地っ張りだから。私がいつつも、一緒に謝りに言っただけからって宥めてはっかりで」

「あるよねえ、そう言うのって。やっぱり喧嘩の後は、お互い素直に謝らなくちゃ。その方が気持ちスツキリするもん」

「ちよつと待て……俺は今回、何も悪くないような気がするんだけど……」

確かに弾美の主張は正しいとは言え、兄弟喧嘩は泣いてしまった者勝ちだとは瑠璃の弁。泣かしてしまったその事自体を謝らないと駄目だと、瑠璃お姉ちゃんも厳しい表情。

弾美は呆れつつも、確かに昔の記憶からそれは正しいとの判断に至る。親や先生達はとにかく、泣かした兄や姉や上級生ばかりを責めるのは、恐らく世の常識なのだろう。

ここは素直に乗っておこうと、改めて少女に向き直る。

「悪かったな、美井奈。俺はリーダーなのにその場にいらなくて、その間にあつた事に文句を言えた義理じゃ無いよな。だからお前も、その事はもう気にするな」

「だって……私が変に触つたせいで、お兄さんのキャラが弱くなつてたら。それでもし、ゲームがクリア出来なかったら、やっぱり私のせいだと思う……」

「分かった、じゃあ今日を入れてあと3日だな。俺のキャラは、絶対に死なないから。だから、力を合わせて全員で限定イベントクリアしような！」

照れ臭さの勢いに任せて、バンと少女の背中を力強く叩く弾美。

美井奈は一瞬つられて笑顔を作った後、急に顔をくしゃくしゃにして弾美に抱きついて号泣し始める。

どうやら許して貰えなかったらどうしようかと、少女なりに相当思い詰めていたよう。ギャラリーの薫などはプロポーズみたいな台詞だねえと、弾美を冷やかして来るのだが。

瑠璃はその台詞に、少しだけ複雑な表情。

何しろ美井奈は、傍目から見ても将来相当な美人になりそうな素質が満載なのだ。それでも現状を鑑みれば、泣き虫のトラブルメーカー以外の何者でも無かったりして。

そんな訳で、美井奈家のリビングでの騒動が治まるのは、もう少し先になりそう。

既にインしているキャラ達は、待ちくたびれたように街中の喧騒に溶け込んでいたり。

美井奈の攻撃力上昇に伴って、キープ力がパーティ戦術での絶対条件になって来た今日この頃。そんな中での盾スキルの取得は、まさにタイムリーな吉兆であろうか。

新スキルの《ブロッキング》は、実は盾スキルの代表的な技である。敵を足止めしつつ、挑発を行ってタゲを取る、盾キャラには無くてはならないスキル技である。

SPの多さで何とかカバーして、連続スキル技でのタゲキープで誤魔化してきたハズミン。闇系の魔法も、結構敵の注意を引き付けやすかったのだが、これで戦術も変わってくるかも。

打ち直しではピアスを選択、呪い解除装備は盾を期待していたのだが、防御力が下がるので瑠璃に融通してしまった。そんな訳で、

ピアス以外は大幅な装備の変更も無し。

その代わりに、最終ステージに向けて新しい片手剣スキルを取得する事に。複合技の《闇喰い斬》は、闇属性のハズミンにはピッタリのダメージ技になるだろう。

それほど上げるつもりも無かった土スキルからは《レイジングアース》という魔法を取得。防御力とヒール効果を備えるこの魔法は、もろに盾用キャラ御用達の魔法である。

さらに闇スキルに術書とボーナスポイントを振り込んで、新しく《闇系コスト減》という補正スキルを取得した。闇系の魔法やスキルのMPやSPコストが減る補正スキルで、種族に該当するものは出やすいとの噂なのだが。

ある意味強力なスキルである事は間違いなく、嬉しいレベルアップである。

名前：ハズミン 属性：闇 レベル：34

取得スキル : 片手剣76 《攻撃力アップ1》 《三段斬り》

《複・トルネードスピン》

《下段斬り》 《種族特性

吸収》 《攻撃力アップ2》

《上段斬り》 《複・ドラ

ゴニックフロウ》

《複・グランバスター》 《

追撃》 《複・闇喰い斬》

: 盾10 《ブロック》

: 闇80 《SPヒール》 《シャドータッチ

》 《闇の断罪》 《グラビティ》

《闇の腐食》 《闇の刺針》 《ダ

ーククロス》 《闇系コスト減》

: 竜10 《竜人化》

: 風20 《風鈴》

《風の鞭》

イジングアース

：土30《クラック》 《石つぶて》 《レ

種族スキル 　：闇33《敵感知》 《影走り》 《SPアップ+10%》

：土10《防御力アップ+10%》

装備 　：武器 破邪の剣 攻撃力+21、HP+20、耐呪い効果《耐久15/15》

：盾 龍鱗の盾 耐プレス効果、防+18《耐久15/15》

：筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、SP+10%

：頭 暗塊の兜 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+15

：首 番人の首輪 攻撃力+3、腕力+2、体力+3、防+8

：耳1 黒虫のピアス 闇スキル+3、SP+10%、防+4

：耳2 白豹のピアス改 器用度+4、HP+15、落下ダメージ減、防+8

：胴 暗塊の鎧 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+25

：腕輪 暗塊の腕輪 闇スキル+5、土スキル+5、HP+25、防+15

：指輪1 サファイアの指輪 腕力+3、SP+10%、防+5

：指輪2 闇の特級リング 闇スキル+4、SP+10%、SP上昇率UP、防+4

：背 白翼のマント 器用度+4、HP+10、攻撃速度UP、防+11

：腰 闇のベルト ポケット+4、闇スキル+3、  
SP+10%、防+10  
：両脚 魔人の下衣改 攻撃力+5、体力+3、腕力  
+3、防+15  
：両足 暗塊のブーツ 闇スキル+5、土スキル+  
5、HP+25、防+10

ルリルリは、前回の冒険でのレベルの上昇は無し。ただし、変化がないと言う訳ではない。前回からキャラの削り能力がいきなり上回った事に、本人は結構戸惑っているようだ。

補正スキルの《クリティカル2》と腕輪部位の時々炎獄効果が相まって、3回に1回は通常ダメージを上回るダメージが出るようになって。細剣も二刀流無しでも悪くないと思い始めたよう。

ただし、二刀流なら攻撃回数が単純に2倍なので、削りにさらに特化出来るのだが。それでも呪い解除の盾を貰って、さらにHPとMPが上昇したのは嬉しい改善点である。

武器も天使から入手した上質のものへと交換し、打ち直しではブーツを選択して。攻撃力も防御力も上昇して、何も問題ないと言えるはずなルリルリなのだけれども。

イレギュラーとも言えなくもない、押し付けられた新魔法。強力なのは、使ってみて間違いのない《マジックブラスト》という魔法にも。本人からしてみれば、自分のキャラに合っていない気がしてみたり。

もう一つ、思い掛けなく舞い込んできた細剣の新スキルの《ハニーフラッシュ》という複合スキルだが。こちらは光スキルが源流なので、使っても良いかなと言う気も起きるもの。

ただ、元ネタはちよつとHな漫画だと薫に聞いて、はたと悩む瑠璃であった。

名前：ルリルリ 属性：水 レベル：33  
取得スキル : 細剣67《三段突き》 《クリティカル1》 《  
複・アイススラッシュ》

《Z斬り》 《クリティカル2》  
《麻痺撃》 《幻惑の舞い》

《複・ハニーフラッシュ》  
: 水74 《ヒール》 《ウォーター

シエル》 《ウォータースピア》  
《ウォーターミラー》 《波紋ヒール》 《アシッドブレス》  
《水の分身》 : 魔10 《マジ

ックブラスト》  
: 光30 《光属性付与》 《エンジェルリ  
ング》 《ライトヒール》  
: 氷50 《魔女の囁き》 《魔女の足止め》

《魔女の接吻》  
《氷の防御》 《ブリザード》

種族スキル : 水33 《魔法回復量UP+10%》 《水上移動  
》 《MP量+10%》

装備 : 武器 光のレイピア 攻撃力+17、器用度+4、M  
P+25 《耐久14/14》

: 盾 精霊封入の盾 HP+40、MP+40、  
防+10 《耐久7/7》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S  
P+10%

: 頭 流水の髪飾り 水スキル+5、氷スキル+  
5、MP+25、防+8

: 首 サファイアのネックレス 腕力+3、SP  
+10%、防+5

: 耳1 天使のピアス 光スキル+3、知力+2、  
 M P + 8、防 + 3  
 : 耳2 流水のイヤリング 水スキル+5、氷スキ  
 ル + 5、M P + 2 5、防 + 5  
 : 胴 流水の鎧 水スキル+5、氷スキル+5、  
 M P + 2 5、防 + 1 8  
 : 腕輪 炎のグローブ 攻撃力+4、H P + 1 4、時  
 々炎獄効果、防 + 1 4  
 : 指輪1 光の特級リング 光スキル+4、H P + 1 5、  
 攻撃距離+4%、防 + 4  
 : 指輪2 プラチナの指輪改 腕力+4、H P + 2 0、  
 攻撃速度U P、防 + 8  
 : 背 精霊封入の人形 H P + 5 0、M P + 5 0、  
 S P + 1 0 %、防 + 1  
 : 腰 複合素材のベルト改 ポケット+4、器用  
 度 + 5、M P + 1 3、防 + 1 1  
 : 両脚 流水のスカート 水スキル+5、氷スキル+  
 5、M P + 2 5、防 + 1 0  
 : 両足 炎獄のブーツ改 炎スキル+3、腕力+3、  
 H P + 1 5、防 + 1 7

レベルアップ果実の取得で、一気に2つレベルの上がったミイナ。  
 その甲斐もあり、前回に続き新スキルを取得した。《速射》と言う、  
 攻撃速度の遅い遠隔使いには有り難い補正スキルである。

武器の交換と伴って、ますます凶悪な削り能力に磨きが掛かるミ  
 イナなのではあるが。実はこっそりと裏エリアの店で、色々怪  
 しい矢束も購入していたりして。

装備の面では、色々呪い解除の装備を融通して貰った形になっ  
 たミイナ。写し身の鏡は結果壊れてしまったが、S Pや攻撃力はか

なりの上昇を見せる事に。

打ち直したのは、瑠璃に融通したのと同じベルト。キャラの外観はと言えば、サファイアも煌びやかな妖精っぽくなってしまったのだが。本人は結構気に入っているようだ。

矢弾の種類が増えて、それが混乱の引き金にならないように祈る美井奈である。

名前：ミイナ 属性：雷 レベル：33

取得スキル : 弓術64 《みだれ撃ち》 《近距離ショット1》

《攻撃速度UP1》

《貫通撃》 《複・スクリユーア

ロー》 《影縫い》 《速射》

: 光51 《ライトヒール》 《ホーリー》

《フラッシュ》

《フェアリーウィッシュ》

《フェアリーヴェール》

: 風24 《風の陣》 《風の癒し》 : 水

10 《ヒール》

: 雷35 《俊敏付加》 《俊足付加》 《ス

パーク》

種族スキル : 雷33 《攻撃速度UP+3%》 《雷精招来》

《落下ダメージ減》

装備 : 武器 神樹の長杖 攻撃力+25、知力+5、MP+

28 《耐久14/14》

: 遠隔 妖精の弓矢 攻撃力+23、ポケット+2、

敏捷度+5 《耐久15/15》

: 筒 朱塗りの矢束 攻撃力+20 追加炎ダメ

ー  
ジ

: 頭 妖精のクラウン 光スキル+4、風スキル



+ 4、S P + 1 0 %、防御 + 1 2  
 : 首 サファイアのネックレス 腕力 + 3、S P  
 + 1 0 %、防 + 5  
 : 耳 1 白蛍のピアス 光スキル + 3、H P + 2 5、  
 防 + 9  
 : 耳 2 陰陽ピアス 精神力 + 5、知力 + 5、M P  
 + 1 5、防 + 6  
 : 胴 妖精のドレス 光スキル + 4、風スキル +  
 4、M P + 2 0、防御 + 2 0  
 : 腕輪 サファイアの腕輪 腕力 + 5、S P + 1 0 %、  
 攻撃力 + 5、防 + 1 2  
 : 指輪 1 雷の特級リング 雷スキル + 4、器用度 + 4、  
 攻撃速度U P、防 + 4  
 : 指輪 2 サファイアの指輪 腕力 + 3、S P + 1 0 %、  
 防 + 5  
 : 腰 複合素材のベルト改 ポケット + 4、器用  
 度 + 5、M P + 1 3、防 + 1 1  
 : 背 白豹のマント 雷スキル + 4、器用度 + 4、  
 M P + 1 0、防 + 1 0  
 : 両脚 妖精のスカート ポケット + 2、光スキル +  
 3、風スキル + 3、防御 + 1 2  
 : 両足 サファイアの長靴 腕力 + 5、S P + 1 0  
 %、攻撃力 + 5、防 + 1 2

カオルも果実とレベルアップで、一気に2つレベルが上がった。  
 魔法には追加取得は無いものの、スキルは指南書の融通と呪い解除  
 のクリアでのボーナスポイントの取得で、区切りの80に到達する  
 運びに。

その結果覚えたのは《種族特性吸収》という、ハズミンも持って

いる補正スキル。風属性のカオルの場合は、攻撃すればするほど敏捷度を吸収して、攻撃速度が速くなる訳だ。

装備交換での改良点と言えば、闇市でベルトを打ち直して貰い、ブーツも呪い解除の良品を入手出来る事となった。ただし、武器はもう長い間変更出来ていないのが寂しい限り。

風の種族は、ステータスやその他の数値が平凡なだけに。装備には格別に気を使いたい所ではあるのだが。固定してしまった部位が多過ぎて、案外レアな迅速装備も困り者な感じ。

今更そんな愚痴も言っていられず、最終ステージに全力を尽くす所存な薰だった。

名前：カオル 属性：風 レベル：33

取得スキル : 長槍80《三段突き》《攻撃力アップ1》《

脚払い》《石突き撃》

《クリティカル1》《貫通撃》

《複・竜巻チャージ》

《大車輪》《複・幻影神槍破》

《種族特性吸収》

: 炎45《炎属性付与》《炎のブレス》

《レイジング》《炎獄》

: 雷20《俊敏付加》《パラライズ》

風20《風鈴》《風の陣》

種族スキル : 風33《回避速度UP+3%》《魔法詠唱速度

+6%》《移動速度UP》

装備 : 武器 赤龍の大槍 攻撃力+32《耐久15/15》

: 筒 絹の腰袋 ポケット+4、HP+10、S

P+10%

: 頭 迅速の兜 炎スキル+4、雷スキル+4、

器用度+2、防+7

：首	進みがちな懐中時計改	SP + 15%、攻
撃速度UP、防+8		
：耳1	サファイアのピアス	腕力+2、SP+1
0%、防+3		
：耳2	白蛙のピアス	器用度+2、MP+15、
防+6		
：胸	迅速の鎧	炎スキル+5、
腕力+5、防+20		
：腕輪	迅速の腕輪	炎スキル+4、
腕力+2、防+7		
：指輪1	迅速の指輪	炎スキル+3、
防+4		
：指輪2	炎の特級リング	炎スキル+4、腕力+4、
攻撃力+20%、防+4		
：腰	獅子王のベルト改	ポケット+2、攻撃力
+6、HP+20、防+13		
：背	迅速のマント	炎スキル+4、雷スキル+
4、防+7		
：両脚	朱色の袴	ポケット+2、精神力+5、MP
+20、防御+12		
：両足	サファイアの長靴	腕力+5、SP+10
%、攻撃力+5、防+12		

何とか話がついて、喜んでるのはメンバー全員同じ事。これから先も、意地を張ったり意見の食い違い、悪ふざけの行き過ぎやら何やらで、喧嘩になる事もあるだろうけども。

素直な心と思いきや、きつとその時も今日と同じく大丈

夫だろう。仲直り騒動の後、何となく心をほんわかさせながら、最終ステージの魔方陣に入り込む一行。

4週間の集大成だと言うのに、どこか気が抜けているのも否めないが。

魔方陣に光が灯り、ポケットの中の妖精が勢い良く飛び出して来る。小さな案内役の始める説明は、期間限定イベントの最終ステージに向かう冒険者への注意事項。

小さな妖精は、その身に似合わず厳かな口調で話し始める。

さて、冒険者の皆さん。このイベントを選択したら、もう二度と地上ステージには戻れません。その上、他のパーティとの接触も出来ず、進めるのは新たな3つのステージのみ。

通信もパーティ間のみとなり、この最終ステージで限定イベントは終了となります。樹上に滞在するNPCの話の通り、限定イベントの得点評価方法は多岐に渡るため。評価を伸ばしたいパーティは、未開のエリア探索やNMとの戦闘をお薦めします。

もつとも、時間内にクリア出来なければ評価自体が無意味になります。

さて、こちらで出せる指針と致しましては、残り3つのステージの攻略期間程度でしょうか。イベント主催側と致しましては、1ステージを約2時間でのクリアを目安に創っております。

もちろんその気であれば、もっと速いルートを選択して、時間短縮でのクリアも可能です。そのあたりを吟味して、メンバー内でご相談されて挑んで頂きたいと思う次第でございます。

最終ステージは強制ムービーが多く、戦闘も避けようと思えば可能な柔軟な創り。それこそ選択肢によって、最後のエンディングも変わって来る仕様になっています。

ステージ中の選択肢は、多数決方式となっていて、リーダーのみ2ポイント、その他のメンバーは1ポイントの計算です。もちろん、パーティでの話し合いで決めて貰っても結構。

その辺は柔軟に、納得の行くように方法は事前にお決め下さい。

それでは、最終ステージに臨みなければ、アイテムから『輝く果実』をご使用頂ければオツケーです。なお、このアイテムは最終ステージに入る、大事な鍵となっております。

次回以降も、最終ステージに入る際には、こちらの使用からお願い致します。

「読み終わったか？ 何か説明口調で、小難しく感じたけど」

「読んだよ、要するに準備が出来たら果実を使えって事でしょ？」

「後、選択肢を多数決で決めれるって言ってたね、マルチエンディングだった〜」

「はあ、バッドエンディングとかもあるって事でしょうか？」

「あるかもな、リーダーだけ2ポイントだけ？ 誰かリーダーやりたい奴いるか？」

誰も弾美の申し出には返事をせず、いつも通りの消極的な女性陣だった。結局は、分岐はみんな意見をもとめようとの瑠璃の提案が通る事に。それが良いとの全員の賛成を得て、まずは一件落着を見せる運びに。

1日1ステージ攻略も、話し合った結果それで良いとの意見でまとまる。今日がスタートだと1日余ってしまうが、どこかで失敗してしまって、時間が足りなくなった時の予備日と言う事で。

後は、強制ムービーはちゃんと見ようねと、瑠璃が釘を刺す場面も。

「後で知り合いに説明出来るように、ちゃんと粗筋とか覚えておこ

うねっ。どうせ、一人だけスキップしても、他のメンバーの合流待たないと駄目なんだから」

「お前はなあ、自分の趣味を人に押し付けるなってば……まあ、その辺は臨機応変にな」

「……何と言うか、お姉ちゃまの言葉にはもう逆らえません」  
「……同じく、私も」

仲直りのくだりから、妙なキャラの立ってしまった瑠璃だったりして。そのせいで、他のメンバーは変なプレッシャーを感じつつ。なんのかわんで、一行はようやくの最終ステージに入る構え。自分の力バンから『輝く果実』を使用して、インに身構えていると。

強制ムービーが発動、どうやら精神体になって天上へと昇って行っているようだ。それだけで、大樹の大きさと緑の茂みの豊かさを感じるメンバー達。

しばらくムービーは続き、壮大な音楽がそれにかぶさって来る構成のよう。

それは大樹、グランドイーターと呼ばれる、恐らくこの世界で最大の樹木の潜在意識だった。大樹の果実を食べたせいで、その意識を垣間見るきっかけになったのかも知れない。

それとも、これは誰かの差し金だろうか？ 何しろ大樹の果実を好きなだけ収集出来た魔女は、既に人の域を飛び越した存在なのだ。たった四人の駆け出し冒険者が、到底敵う相手では無い。

それでも何かを期待した、意思の介入が存在しているのか。

その魔女に対して、唯一手出しが出来るとするならば。それはこの、精神体での接触以外には有り得ないのも確かな真実。あるいはそれは、大樹の懺悔なのかも知れない。

そう、一行が面しているのは、大樹の偽らざる心の暴露だった。

事の起こりは、何の変哲も無い生存競争だったように思える。周囲はその頃、大地にも空にも生命の息吹が活発な活動を見せており、もちろん大樹もその中の一員だった。

何時からだっただろうか……自分の幹が規格を逸れて行き、自分の根が大地深く喰い込み始めたのは？ 近くに存在する、全ての生命を糧とし始めたのは？

周囲の大地はやがて荒廃し、それでも大樹は生長を止めなかった。

荒野は自分を中心に、年々拡がりを見せていた。その頃には、大樹は地中や大気中から魔素を取り込む方法を覚えていた。その結果大地は益々荒廃して行き、人々はそこを死の大地と呼ぶようになった。

それでも生長を止めない大樹は、やがて知性を持つようになる。そして知るのは、自分はイレギュラーだと言う事実。そして、自分は孤独だと言う真実……。

長い年月を、ただただ孤独に過ごした気がする。太陽は昇り、地平線の向こうへと消えて行く。その下に、他の生物が命の営みを、必死に全うしているのは知っていた。

だが、自分に近づくものは誰もいない。何故なら自分が、糧にしてしまうから……。

その強欲なまでの生存能力は、もはや自分の意志では止め様が無いのも分かっていった。自分の身体は大きくなり過ぎていて、それを維持する栄養はどうしても必要なのだ。

ある時は自分の意志で、余分な枝を切り落としさえたのだが、結果は同じで、ありあまる生命力に歯止めは掛かる事はなかった。

命のサイクルは、他者の命を認めない空転を見せつつ、己を高めへと押し上げて行く……。

それはまるで、神話に出てくる神への反逆者のように。

自分の能力を少しだけ制御出来るようになるのに、一体どれ程の長い年月が必要だっただろうか。その間、大樹の枝で羽を休める鳥の姿も、大樹の作る木陰で休む獣の姿も存在しなかった。

ただの1羽も、ただの1頭も……。大樹はひたすら孤独な存在で、それ故に自分の能力の制御に全力を注ぐのだった。いつしか自分に寄り添う、温かな命の存在を信じて。

鳥でも獣でも、何でも良かった。そう、あの自己中心的で傲慢な人間でさえも。

やがて幾重もの時の果て、その願いが叶う時が訪れた。何らかの理由で荒野に追放された一人の女が、自分の心の声を聞いてとうとう荒野を渡り切ったのだ。

その時の女は心身共に疲れ果て、大樹を目にしてポロポロと涙をこぼしさえした。大樹はやっと、自分以外の命の輝きと暖かさを知り、それは知性を持って初めての感動だった。

二つの命の、悲しい迷走が始まった。

その人間は、内包する魔力によって、簡単に大樹の知性とコンタクトを取る事に成功した。その人間は魔女と呼ばれる存在で、その力は封じられていたが強力だった。

大樹は乞われるままに、その力の解放を手伝い、あまつさえ己の魔力を分け与えました。大樹の取った方法は、とても簡単なものだった。果実に魔力を込めればよいのだ。

自分の子孫を作り出すその実も、無の荒野で芽を出す能力は無く、大樹の仲間を増やすには至らなかつたのだが。魔女を元気な身に戻し、その力を増す役には立ったようだ。



そして魔女の願いは、次第に私欲に染まっていった。

一緒の時間を共に過ごすにつれ、大樹は段々と魔女の所業が心配になって来た。この地で得た強大な魔力を、魔女は復讐と永遠の生につき込み始めたのだ。

それは大樹の持っていた願いとは、真反対だった。滅びる運命の在りようを、まさに待ち焦がれていた大樹は、共に永遠に生きようと語る魔女に異議を唱えた。

魔女は鼻で笑い、さらに強力で合理的に魔力を得る方法を編み出した。それが、魔方陣による遠隔獲物捕獲システムだった。捕らえた獲物は、さらに地中に転移して糧にするのだ。

その結果、魔女も大樹も、さらに力を得る事になった。

不測の事態が起こった。力の一部が暴走して、周囲に魔法生物が氾濫するようになったのだ。それは両者の意図した事ではなかったが、少しだけ賑やかになったのも事実。魔方陣での捕獲を始めてから、地上の生き物を糧にする能力を、大樹は制御出来るようになっていたのだ。

魔法生物の一部は魔女の兵隊となり、魔女は次第に遠征を繰り返すようになった。その目的が殺戮のためと知った大樹は、魔女に力を与えた事を後悔した。それから、魔女に対する裏切りと知りつつも、とうとう秘密裏に天使を召喚した。

異界の通路を開くだけの魔力は、既に自分には備わっていたのだ。

天使は、大樹の願いを聞き終えるところ言った。魔女は今や強力になり、こちらの手には負えないかも知れない。だから地中に捕らえた冒険者の中からも、貴方が試練を与えて選りすぐりを見つけなさい。

そのための妖精の案内と、地上や樹上でのバックアップはこちらで手配しましょう。ただし、その冒険者がこちらの願い通りに動く

かどうかは、それは貴方の訴え次第でしょう。貴方を滅ぼせば、魔法の力も衰えるのは知っています。

しかし……それは私には出来ない。

そんな大樹と天使の遣り取りを、魔法は敏感に察知した。裏切られたと知った魔法は、激しい怒りを天使に向けたのだが。大樹との繋がりには、どうしても断ち切る事は出来なかった。

その訳とは？天使が大樹をそのかし、裏切りを仕組んだと思っただから

？大樹と自分の力の源が同じなので、大樹が枯れると困るから

？大樹を、我が子のように愛していたから

「うおっ、いきなり選択肢が出たっ！ 3択だな、どれもありそうだけど……」

「うーん、どのストーリーが面白そうかなあ？」

「根源にあるのは裏切りか利害か、それとも愛情かって話でしょ？」

確かに、どれもありそう」

「最初は、ちよつと綺麗なテーマを選ぶのもアリですかね？」

それもそうだねと、美井奈の意見が採用されて。割と簡単に皆で3番をチョイスしてみると。イベント動画はようやく終わり、パーティは見慣れぬワールドに転送された。

樹海のような感じなのだが、一番目に付くのは目の前に聳え立つ1本の立派な樹木。大樹のように大きくは無いが、洞の部分に古い小さな祠が見受けられる。

一行が近付いて行くと、何かを語りかけるように淡い光が宙に溢れ出し。それと同時に、木の裏側から樹木モンスターの群れがババツと散るように逃げ出して行くのが見えた。

驚きつつも、これも何かの仕掛けかと警戒する弾美達なのだが。

それ以降は何の変化も見られない。瑠璃が、何かのトレードポイントが祠にあるのを発見。お供え物かと首を捻りつつ、何となく先ほど逃げたモンスターが気になる弾美は。

まずは迷子にならない程度に、付近の搜索をメンバーに提示してみる。特に、さっきここから逃げた敵は、仕掛けと関わりが大であると予測。何が何でも倒す気満々なのだけれど。

フィールドには結構、昆虫や獣型のモンスターが設置されていて、パーティの行く手を阻んで来る。先ほど逃げた敵はどこだと、弾美は新スキルの使い心地を確かめつつ移動して行くと。

大半はまた逃げ出したものの、何とか1匹を仕留める事に成功。

「あつ、何かアイテム落としたねえ。ハズミちゃんの予想通り、今の敵が鍵を握ってるっぽい？」

「ふむつ、逃げると追い掛けたくなるのは当然。残りの敵を追え、美井奈つ！」

「了解ですつ！ でもでも、雑魚がまだ奥にいますよ、隊長？」

「ここにいる敵は全部、魔法使つて来て危険だねえ。一人で突っ込むのは危ないから、みんなで行こうか、美井奈ちゃん」

そんな訳で、残りの樹木モンスターを追い掛けて、一行はさらに樹海の奥に移動。ドロップしたアイテムは、想いの欠片と言うらしく、何やらイベント的に意味ありげ。

2度目に追いついた場面で、パーティは強引に足止め魔法や範囲攻撃の使用に踏み切る。お陰で結構な大リンクが発生したものの。何とか踏ん張りを見せて、乗り切るベテラン振りを発揮。

それぞれが上手に力を発揮して、キープと削りを頑張りつつも。美井奈の数減らしの一撃を待つという、パーティお得意の戦術を実行して行った結果。

敵の数は時間を追うごとに減って行き、逃げまくりの樹木モンス

ターも全て倒し終わる事に成功した。欠片と名のつくアイテムも、カバンを見ると合計4つ集まったと瑠璃の報告。

これで揃ったかなと、判然としないルールに戸惑いつつも。

道に迷う事も無くパーティが取って返すと、最初の祠は依然としてそこに存在しており。よく見れば、トレードのポイントがさつきよりも燦然と輝きを放っているのにはびっくり。

推理は正しかったと、取り敢えず1個だけ欠片の投入を促す弾美。それに従って瑠璃がトレードすると、樹木に変化が。幹に浮き出る女性の姿は、恐らく大樹の精神体だろうか。

同時に、宙に淡く浮かび出る光球が1つ。光球にはタイトルが付随しており、どうやら選択肢の1つらしいのだが。仕掛けが安全だと理解した瑠璃は、全部の欠片を投入してしまう。

合計4つの光球は、それぞれ別のステージになっているらしい。

「むむつ、これ全部行ける所ですか？ 全部廻らないと駄目って事なんですかね？」

「どうだろうなあ……でも、全部廻らないと謎が残って、ちょっと嫌かも？」

「そうだねえ、じゃあ戦闘の少なそうな場所から廻ろうか？」

「ふむふむ、タイトルだけで判断するに……この、ノアの箱舟ってのが気になるかなあ？」

それじゃあそこから行こうと、薫の提案にあっさり乗る一行。タゲって選択を実行すると、すぐに転移が始まった。その瞬間、幹に浮き出た女性が身じろぎしたと瑠璃が目ざとく発見。

それが何を意味するかは不明だが、ステージをクリアして戻ってくれば話を聞けるかも知れない。何しろメンバーは、ここのクリア条件すらまだ分かってないのだから。

そんな思いの中、再び強制ムービーが発動。

天使との契約の中、大樹の一番の強い思いと言えば。近付くもの全てを自分の糧にして来た、悔恨に他ならなかった。知性を得た大樹は、今や命の輪廻の意味を知っている。

そこからはみ出した存在の自分が、塵へと滅び行く前に唯一出来る事。そう、大樹の願いはイレギュラーのこの巨大な幹葉を、次の世代の糧にして貰う事だった。

命とは強かな物で、大樹は幹や枝の隙間に、風で運ばれて来た様々な種子を蓄えていた。その種子達は強情で強靱で、こちらの意思を全く受け付けず。ただただ、その内側に物凄いパワーを秘めながら、次世代へのチャンスを伺っているよう。

そう、命の発芽の時期を待ちわびているのだ。

自分を、神話に出て来るノアの箱舟になぞる大樹。内に蓄えた命の束を、荒野という大海をかき分けて実りの地へと誘うのだ。一つ違う点があるとすれば、実りの大地は己の枯れた枝葉が担うと言う点。

後は時間が、より良き世代の輪廻を紡いで行ってくれるだろう。今度はより自然のままの、イレギュラーの存在しない自由競争が始まるのだ。不当な搾取の無い、楽園が出来上がる筈。

それが自分の、ただ一つの願い。

天使はその役割の手伝いを、冒険者に託せと言った。だから語るのだ、自分の思いを。だから語るのだ、自分の願いを……それがたとえ、天の理に反するものでも。

ただ一つ心配なのは、魔女の横槍で冒険者が消えてしまう事。可能な限り密かに、試練と報酬で育てた奥の手なのだが。天使はどこまで、魔女を抑えておく事が出来るだろうか。

そつだ、魔女の影が差さないうちに、もう少し冒険者達に力を貸そう。

その導きは？ハトにして貰おう

？カラスにして貰おう

「あうっ、何か急に選択肢が出て来るねえ。集中して文字読んでるから、変な気分」

「確かにねえ、ちょっと悲しい物語だから、しみりしちゃう……」

「そうですねえ……私も髪や眼の色がクラスメイトと違うから、自分がイレギュラーだって思う気持ちが良い分かります」

「そんな事で苛める奴がいたら、俺に知らせる実井奈、とっちめてやるから。それよりさっさと、どっちについて行くか決めないと」

その選択肢は簡単だと、物知りな瑠璃と薫が揃って口にする。ノアの箱舟の神話によれば、洪水の後に乾いた大地を見つけようと、放たれたハトとカラスの顛末は。

ハトが先に乾いた大地を見つけ、それ以来吉兆のシンボルとされる事になったそう。逆にカラスは不幸の代名詞とされ、人々から敬遠される存在に成り下がったと言われている。

そんな訳で、全員一致でハトを選択。次いでフィールド転送。

自信のある回答からの転送先で、一行はちょっとした混乱に巻き込まれる。樹木で囲まれた小さな空き地には、転移の魔方陣と、ガーディアン守護する盾と槍の祭られた台座が。

ガーディアンは白い大きなカンガルー顔の獣人で、民族衣装のようなものを着込んでいる。低い台座に不動の姿勢で座り込んでいて、その前にはトレードポイントが。どこかでお供え物か何かを入手出来たのかも、これでは正しい選択肢を選んだ甲斐も無く。

一行はしばし、逃した戦闘回避の手段を嘆いてみたり。

「まあいいや、盾と槍は欲しいから、コイツやっつけよう！」

「うん、持つてるものトレードしてみたけど、まるで反応なしだ

ねえ」

「両手槍……久し振りの武器交換になるかもっ」

物欲が勝るメンバーは、魔法の強化後に境界線に足を踏み入れる。さて戦闘だと、気合いを入れる面々の前に。のそりと動き出す、こちらもヤル気のカンガルー獣人。

手にしているのは、どうやら片手棍と盾のよう。魔法中心なのかと思いきや、鉄製の片手棍はなかなかの破壊力。早速の《ブロッキング》を使用しつつ、盾役の弾美はその威力を思い知る。

時折の尻尾での範囲攻撃が強烈で、瑠璃はそれをスキル技で止める事にすると言宣。前衛に参加しながら、細剣での削りと敵の特殊技潰しに活躍している。

敵は幸い1匹、力を合わせて速攻で倒す戦法が有効だ。

ところが敵も、尻尾を軸にした両脚キックで戦線に混乱を招いて来る。派手に撥ね飛ばされて戦線離脱したハズミンは、その場で座り込みスタン状態。俗に言うカンガルーキックの炸裂だと、弾美は呑気に美井奈に解説する。

目の前まで飛んで来た盾役に、美井奈はビツクリな表情。驚いているのは、他の前衛も同じ事。急にタゲられたのは何故か瑠璃で、敵は盾を捨ててルリルリを拉致の構え。

急に獣人に抱えられたルリルリを、カンガルー獣人はあやす様な素振り。ステップを駆使して、何故か戦場を後にして。手にした片手棍は、いつの間にかガラガラに変わっている。

赤ん坊をあやすように、敵のステップは柔らかくで優しげ。

「えっ、あれっ、瑠璃ちゃんどこっ？ 敵、攻撃していいんだよねっ？」

「ここどこ？ なんかHPもMPも……回復してるっ！ 敵のポケットの中かなあ、とても快適？」

「頼むから寝返るな、瑠璃！ うっ、スタンがやたらと長い……美井奈、こつちにタゲ持って来い」

「とにかく攻撃ですねっ！ うえっ、お姉ちゃまにダメージ行きません様にっ！」

その願いを乗せた美井奈の遠隔攻撃は、カンガルー獣人の動きを止める事に成功。その面前に、捕らわれのルリルリが出現。救出成功のようだが、今は睡眠状態のよう。

カンガルー獣人は今度は勇猛なステップで、一番近い薫に襲い掛かって来た。ステップ合戦の戦闘に、ようやく回復した弾美も参戦。美井奈と共に敵の動きを封じに掛かる。

ところが再び、範囲尻尾攻撃からの吹き飛ばしキックのコンボが炸裂。またもや弾美が飛ばされて、残ったカオルがポケットイン状態に。慌てた美井奈の攻撃も、ガラガラ防御でダメージ0。

瑠璃は、まだ寝たまま復帰出来ない状況。

「わっっ、今度は私が拉致られたっ！ これってやつぱり、睡眠効果来るかなあ？」

「私まだ起きれない……これって結構不味いサイクルっ？」

「むっっ、遠隔攻撃に転ずるべきか？ 美井奈っ、魔法試してみろっ！」

美井奈の《ホーリー》に続いて、弾美の《ダーククロス》が獣人に命中。ちゃんとダメージも入ったのだが、今度は何故か薫のHPも魔法の着弾に合わせて減る事態に。

その隙に、やっとこさ瑠璃が戦線復帰を果たす。代わりに眠りに落ちた薫は、あーうーと嘆きながら悲しそうに自キャラを眺めるのみ。近づく敵に、弾美が《グラビティ》で足止めする。

そこからはひたすら、魔法と矢弾での遠隔削りに専念するパーティ。



瑠璃の新魔法の《マジックブラスト》が、事の他削りに良く効く。酔っ払いの追加効果も、戦局にはかなり優位で嬉しい限り。敵のHPは半分を切り、こちらのMPもグイグイ減って行く。

何か仕掛けて来るかと警戒していた一行に、カンガルー獣人の思い掛けない反撃。恐らくポケットから取り出したであろうバズーカ砲で、容赦ない遠隔での範囲攻撃はチョー強力。

それは反則だろうと、地団駄を踏む弾美。

「アレは四次元ポケットかつ！？　つてか、遠隔の反撃が痛すぎるっ！」

「わっ、やっと起きたっ！　敵は今の武器召喚で、HP減らしてるっぽいね？　一気に行く？」

「あゝっ、範囲回復するから固まってて、美井奈ちゃん」

「だって、爆弾で全員被害にあってますよっ！　私、HP低いから死んじゃいますっ！」

「おバカ美井奈、お前がタゲられてるんだ、逃げても標準はお前のままだって！」

混乱に拍車を掛けるように、カンガルー獣人が手にしたガラガラを振るう素振り。今度は美井奈が睡眠状態に陥って、パニックからの逃亡をあっさりと敵に阻止される事に。

とにかく止まってくれた少女に安心して、瑠璃が回復魔法を掛けてみると。美井奈の睡魔はそれと同時に退散し、脱兎の如くの逃げを見せ。何故か回復で睡眠状態が解けると知って、一同大いに奮起する。

状態異常回復魔法では、全く治らなかつたと言っのに。

それ以降は、弾美と薫を前衛に、後衛を瑠璃と美井奈で押しまくるパーティ。時折混ざる睡眠や尻尾攻撃や爆弾攻撃は、甘んじて全

て受ける方向へと作戦変更。

突き飛ばしスタンだけは痛過ぎるので、弾美が《闇の断罪》でシヤットダウンを狙ってみたり。土魔法の《レイジングアース》も程良い効果で、弾美のHPは安全圏を常にキープし続けている。

突飛な敵の特殊技の数々に、翻弄され続けた戦闘も。最後は奇麗に決着がつき、強くなった事を確信する一行。それでも戦闘が終わった後には、一同揃って安堵のため息をつく有り様。

カンガルーって強いですねえと、美井奈の感想に虚ろな同意。

とにかく難関を突破して、ようやく手にした盾と両手槍は。神木の名を冠していて、結構な良性能である。弾美が盾を、薫が両手槍を貰い受けて、二人ともに嬉しそう。

神木の盾 HP + 30、MP + 15、防 + 23 《耐久10 /

10》

神木の槍 HP + 30、精神力 + 3、攻撃力 + 40 《耐久1

1 / 11》

「ああっ、攻撃力が40超えたっ！ チョッ嬉しいっ！」

「HPも増えたし、防御も上がったし。何だか難敵が、これから続けて出そうな気配だなっ」

「あゝ、それに備えてのプレゼントですか。こっちはヒーリング終了しました、隊長」

「こっちも終わったゝ、さっき言ってた大樹の試練なのかなゝ、取り敢えず転移で戻ろっか」

最終ステージにインして、まだ30分余り。色々あったせいで、何故かもっと時間が経っているような気が。強制ムービーも多く、キャラの移動や戦闘時間は、まだそれ程行ってないのだが。

いつもと違う勝手に、パーティの調子も少しずれ気味なのは否めない。次の選択肢を楽しみにする瑠璃や、装備したばかりの槍を

試したくてウズウズしている薫や。

弾美はクリア目的に神経を張り詰め、美井奈は何も考えていない様子。

誰が正しいと言う訳でもないが、戻った一行が目にしたのは何か言いたげな大樹の精神体。カーソルが移動出来るように修正されていて、今や立派な一人のNPC扱いだ。

代表して瑠璃が語りかけると、大樹は今までの非礼と辛い試練の数々を詫びて来た。自分の意図した事ではないとは言え、それを利用してここまで招いたのは事実だと独白。

全ての事象は、自分の存在に端を発しているのだ。

無礼を承知での最後の願いは、あなた達を呪縛から解放する代わりに。自分の内包する魔力を弱めて、天使の手伝いをして欲しい。結果、自分が滅びようとも、魔女が滅びようとも。

それを自分は受け入れるだろう。むしろ自分の滅びこそが、本当の願いでもあるのだ。そのために人間の手を借りよと言う天使の助言は、恐らくは正しい摂理なのだろう。

何故なら人間は、自然の輪廻から外れた独自の存在だから。

「環境破壊の達人〜って、アレを婉曲に言うところなるのか？」

「婉曲過ぎる気もするけど、酷い言われようなのは確かかな？ ゲームの世界でも、人間はそういう位置付けなんだねえ」

「え〜と、宙に浮くステージの中で、願いを聞き届けてあげればいいのかなあ？」

「う〜んっ、そんな感じに思えますけど。それじゃあ、次はどこに行きましようか？」

話し合った結果、次は永遠の生命というタイトルのステージに決定となった。題名的にここがちよっと当たりっぽいと、相談の結果

に浮かび上がったステージなのだが。

一行が勇んでインしてみると、先程みたいに目を引く舞台も無い感じ。ただ、広い原っぱのような場所に、ゴロゴロと果実のような物が転がっているだけのようで。

その内の1つがタゲれると、美井奈がフィールドでの発見を報告して来た。戦闘の用心もしながら、皆がそこに集合。何と周囲の全てがレベルアップ果実らしく、皆の気分は少しソワソワ。

タゲった果実からは、恒例通りに3つの選択肢が。

落ちている果実を？1個ずつ、パーティに行き渡るように

？魔女との戦闘に備えて、たく

さん取る

？取らない。自信があるので

「うっ、これは……欲張ると酷い目に遭いそうだけどっ」

「ですねえ……取るなら1個か、全く無しかですかね？」

「じゃあ、多数決するか？ 1か無しか、どっちかで取るぞ？」

多数決の結果、女性陣は前もって決めていたように無しとの挙手。欲がなさ過ぎるぞと、リーダーの弾美などは思っただが。こんな最終局面で欲張って、全滅などしては元も子もない。

それではと、皆で無しの選択肢をチョイスすると。

急にフィールドの空が翳って、怪しげな雰囲気を出して来る。

何事かと一行が身構えていると、すぐ先の場所に敵らしき影が出現。その瞬間、弾美と薫がげつと声をあげた。

闇属性でも強烈に嫌われている敵、ソウルイーターと双壁をなすその敵の名は。簡易的にレベルイーターと呼ばれているが、本当はちゃんとしたややこしい名前がある。でも、冒険者はレベルイーターとしか呼ばない。

レベルを落とす特殊技の印象が、とにかく強いので。

「うっ、せっかく欲を出さなかったのに、選択失敗？」

「どうだろう……わっ、こっち来たっ！」

「うっ、戦いたくないっ。ひよっとして、レベル吸われるの前提での果実だったのか？」

珍しく消極的なベテラン陣なのだが、敵はやる気満々で攻撃を仕掛けて来る。弾美がブロックして、戦線は確定。戦闘はなし崩しにスタートして、嫌々ながらも戦端は開かれる運びに。

敵の姿は、メタボ体型のソウルイーターとは対極の、痩せた手足の長い死霊タイプ。ボロボロの衣類を纏っていて、皮膚は所々剥けていて筋肉繊維が剥き出しな場所も。

とことん気持ち悪い外見だが、基本能力はすごぶる高いこの敵。気を抜いていると、特殊技以前にボロボロにされてしまう。気合いを入れつつ、弾美は天使魔法を要請するのだが。

天使の輪っか効果なのか、レベル奪取を使つて来ない死霊モンスター。

「あれっ、呪いは使つて来るけど、レベル奪取は来ないね？ ひよっとして、制限されてる？」

「あっ、選択肢のせいで、使わない設定になっちゃったのかな？ ラッキーかもっ」

「おおっ、それはナイスだっ！ このまま削り切るぞっ！」

そんな訳で、難敵レベルイーターも大きな見せ場も無く撃沈される運びに。途中に死霊召喚で最後の悪あがきをしつつも、最後は瑠璃の《ハニーフラッシュ》を浴びて消滅。

そのエフェクトの派手さは、なかなかの見ものだったのだが。スキル技の名前の由来を薫に聞いて、弾美は大笑い。ダメージは閻魔性には強烈で、使い勝手は良さそうだったのだが。

使ったびに笑われるのはショックなので、瑠璃はこの技を自粛の方向に。

この戦闘の結果、ルリルリがレベル34にレベルアップ。ポーナスポイントを振り込みつつ、後衛が休憩している間に。このステージは結局、他に報酬がない事を確かめつつ。

端っこの砂地に魔方阵を見つけて、元のエリアに飛んで戻る一行ちよつとずつだが、こつやつて全部を廻れば良いのだと、何となく仕組みを皆で理解し始めながら。

大樹の目線で考える事が大事かなと、瑠璃などは結構な乗り気のよう。ナレーションの多い最終ステージに、ややテンポはかく乱されるものの。ちゃんとした物語の締めは全員期待していて、それは恐らく正しい向き合い方なのだろうけど。

単にボスを倒して終わりでも、それで良いじゃないかと話し合う弾美と美井奈。

「えっ、そんなのはつまらないよっ！　ちゃんと物語を用意してくれてるんだから、読まないよ」

「だって、前半は戦闘メインで目的も定かじゃなかったのに。急に実はこうだったと言われても」

「確かにそうだよなあ、ここからモチベーションを戦闘じゃなく、物語に求めるって言われても。せつかく育てたキャラの見せ場が無くなつちゃうじゃないか」

確かにそれは、弾美の言う通りなのだが。一応戦闘も組み込まれていて、そこはしっかり考えられている作りのよう。初のステージに、パーティ内でも賛否両論で紛糾している模様。

とにかく次に行こうと、ちよつと制限時間を気にし始める一行だったり。何しろ先に勝手に進めて広がってしまった女性陣の冒険で、どれだけ時間を取られたか判然としないので。

戻ったエリアの大樹の精神体の目の前で、残り2つの選択肢を前にして。パーティはいかにも最終戦闘っぽい、魔女の名前の付いているタイトルを最後に残す作戦に。

自然と次は、食物連鎖と言うタイトルのエリアに決定。

ワープで跳んだ先も、やっぱり似たような樹海の湿地帯だった。アシのような植物が群生し、つたの絡まった樹木も至る場所に存在している。そんなフィールドの端っこに動く姿を見掛けて、パーティは一塊になつてその場に移動する。

倒れて腐りかけている木の元に集まっていたのは、キノコのモンスター群。5匹以上がたむろしていて、一体何をしているのやら。一行が近付いても、特に反応するでもなく。

困った一同は、顔を見合わせて思案顔。

周囲を見回しても、特に他には変わった物がある訳でもなく。敵を倒せば変化があるかもと、お気楽な美井奈の言葉に。他に方法も無さそうで、ちょっとかいを掛けて様子を窺うと。

途端にナレーションが鳴り響き、天空が早送りのような雲の動きを見せ始める。樹海の全ての木々もざわめき始め、不穏なプレッシャーがパーティに襲い掛かって来る。

ニンゲンヨ、才前タチ二命ノレンサヲ乱スケンリガ在ルノカ？

「うわっ、何か怒られちゃった？ 攻撃したら駄目だったのかなあ？」

「いや、待っててもイベント始まらなかつただろうし。ってか、ここでは選択肢無し？」

「食物連鎖って、植物を草食動物が食べてって、アレですよね？」

何か関係あるんですかね？」

美井奈の疑問は、間もなく解決される事に。倒木の隙間から、若

木のモンスターがワラワラと出現し、パーティに襲い掛かってくる。止む無く応戦すると、再び先程のメッセージが。

続いて湿原から虫柱が発生し、やはり一同にたかり始める。次いでカエルが発生し、その次には蛇が発生。1匹倒すごとに敵は撤退して、それから次の敵が現れる仕組みらしい。

最終的には猛禽類が空から舞い降りて、小さな蛇は消滅した。

巨大な猛禽の目がこちらを射抜めており、気付けばそれはグリフオンだった。強そうな外見だが美しくもあるその敵は、間違いない食物連鎖の頂きにいる存在。

頂点ニイテ、底辺モ担ウ存在ノ人間ヨ。才前達ノ傲慢サハ、全テノ命ノ源ニモソノ刃ヲ向ケル程デアロウ。才主達ハ、己ノ存在意義ヲ何ト心得ル？

人間は？破壊者である

？創造者である

？管理者である

「わっ、また難儀な選択肢が出たねっ……これも選択次第で戦闘が楽になるとか？」

「うっん、それなら環境破壊問題とか、リアルに悩まなくて済むけど……」

「瑠璃、お前はどんだけ優等生振りたいたんだっ！ここは、逃げて管理者とかは嫌かなあ？」

「えっっ、でも破壊者は自虐的だし、創造者は思い上がり過ぎだし。管理者が、一番無難だよ？」

「お兄さんたらっ、何で平気でお姉ちゃまの悪口言ってるんですかっ！お兄さんは、文句なく破壊者ですよっ！」

それならば破壊者を選ぼうかとの、弾美の悪ふざけ的な発言から。良い子ぶっても仕方ないと、いつの間にかそれがパーティ意見に。



それからいそいそと、戦闘準備を始める一行。

本当に良いのかとか、後で文句言っても知らないぞとの脅しのよ  
うな言葉の末、とうとう全員一致で？番をチョイス。グリフォンが  
羽ばたきを始め、音楽が戦闘用のそれに。

なし崩し的に始まった戦闘も、気を引き締めるようにとのリーダ  
ーの喝が飛ぶ。

グリフォンが強敵なのは、メイン世界の常識からも間違いなく。  
先程の特殊技を封じられた敵より、かなり厄介になるとの弾美の予  
想なのだが。予想は大当たり、風の精を2体同時召喚したグリフォ  
ンの、攻撃力と体力は強大と言うほか無く。

メイン世界でも結構ボスキャラ敵な存在で、大事な場面を任せら  
れるんだぞと、弾美が美井奈のために解説をして来る。それじゃあ強  
いんだと、改めて気を引き締める少女に。

召喚された風の精が殺到して、慌てて瑠璃と薫が必死のブロック  
に入る。弾美は既にグリフォン本体で手一杯。爪とクチバシの強烈  
な連続攻撃で、のっけから苦戦模様だ。

さつさと雑魚を倒して、弾美を手伝いたいメンバーの心理は一緒。

しかし、雑魚の風の精もなかなかの強敵振り。懐が深いつくりで、  
攻撃がヒットしにくい上、魔法にも耐性がある様子。削りの速い薫  
の方を、美井奈が手伝って数を減らそうとするのだが。

ガッツリ行き過ぎるとタゲを取ってしまうジレンマに、具合を確  
認しながらの慎重な攻撃。スキル技のタイミングを声で計れるのは、  
隣に仲間がいるから出来る、合同インならではの有利点。

それを利用しない手は無いつ。

「まだ平気ですか、薫さんっ？ まだ撃つていい？」

「もちよっとは平気！ 瑠璃ちゃんがヤバくなったらマラソン出来  
るように、SP半分は残しておいてね、美井奈ちゃんっ」

「こつちは魔法の防御と幻影技で、何とかなってるっ。キープが精一杯で、全然削れてないけど」  
「それでいいから、無理すんなっ。後半がつつと来るぞっ！」

召喚された雑魚のクセに、弾美の言う通りに厄介な特殊技を使って来る風の精。体力が半分を切った途端に、案の定カマイタチを範囲に飛ばして来るようになって。

おまけに、遠隔攻撃に対してお返し、矢弾でのみだれ撃ちを使いして来るやんちゃ振り。思わぬ反撃にあった美井奈は、多段攻撃の反撃に驚いて悲鳴をあげている。

そのせいもあって、追い込みにも迫力が無いのも仕方の無い事かも。お陰で敵の策略に嵌まった形で、雑魚の処理にモタモタと時間を掛けてしまう女性陣。

いい加減にしろと弾美に尻を叩かれつつ、ようやく1匹目撃破。

「びびってないで、どんどん削れっ！ 何のためにポケットにポーション入れてんだっ！」

「そ、それはそうですけど……遠隔で攻撃されるって怖いんですよっ！」

「ダメージも高いしねえ……それより2匹目、ちゃっちやと削ろうっ！」

「了解っ、特殊技に注意ねっ！ カマイタチ止めてね、瑠璃ちゃんっ！」

先程の三人での冒険のせい、割とスムーズに指令の言葉が出て来る薫。今までは、一番歳上なのに最後にパーティに入った引け目もあって、控え目過ぎたきらいがあったのだが。

限定イベントの最後のステージに来て、ようやくパーティ内の役目が確定されて来た感のある弾美チームだったりして。ようやく出て来た勢いに乗って、2匹目の風の精もスムーズに撃沈。

パーティは素早く囲い込みに入り、ボスを仕留める構えに。

グリフォンの体力を見ながら、美井奈と薫がいきなりの連続スキル技攻撃を開始する。弾美の防御魔法の再使用とポケットの整頓の時間を稼げたらとの判断だが、削り過ぎて敵の特殊技が発動してしまつたら元も子もない。

幸い、この簡易スイッチは上手に行つて、再び《ブロッキング》と連続スキルでタゲを取り戻すハズミン。しかし、一時タゲを取っていた薫はボロボロで、咆哮からの爪の多段攻撃を見事に喰らつてしまつていた。

専門の盾役がパーティ内にいる事を感謝しつつ、瑠璃の回復を受けるカオル。それを受けた後に、専用の回復役にも感謝する素振り。何しろ、一度の回復量が半端ないのだ。

考えてみたら、かなりバランスの良いパーティかも。

そんなパーティバランスに感謝しながら、専属アタッカーの渾身の削りは続いているのだが。咆哮からの反撃もきつくて、それをなかなか潰せない瑠璃はキレる一歩手前。

モーシヨンのほとんど無い咆哮は、敵の一番嫌な特殊技。先にこのスタン技を喰らつてしまうと、何もかもが後手に廻つてしまい、被害はとことん甚大になつて行くのだ。

メイン世界でも恐れられている、強敵グリフォンの能力の一部だ。そんな訳で、戦闘は終始殴り合いの形に導かれて行き、瑠璃は前衛の回復に追われる形に。

弾美の防御力の高さが無ければ、さらに後手に廻っていたかも知れない。苦勞の甲斐あつて敵の体力がようやく半分を割り、やつぱりようやくの後半戦に突入する。前衛で頑張つていた瑠璃は、敵の怪しいモーシヨンを目撃。

羽ばたき始めた両翼を見て、瑠璃が渾身のスキル潰し。

「わっ、今飛ばうとしたっ？ そろそろ怖い技使って来るよねっ？」  
「もう一回、風の精呼ばれるのもウザいよなっ！ 他にも結構、多彩な特殊攻撃あったような？」

「そうそう、風系の敵は突き飛ばしとチャージのコンボが……って、それ来たっ！」

「わっ、スキル潰しっ？ 私も使った方がいいですかっ、何て名前でしたっけ、影縫い？」

戦線はまさにカオス状態。前衛陣が次々と、頭突きや魔法の風の爪で吹き飛ばされ始め。慌てた美井奈は、自分の持っているスキル潰し技を使おうかと進言するのだったが。

時既に遅いな感じで、チャージ潰しに近付いた弾美は敵の鋭利な爪に捕まって浮上。アレよと言う間に地面に叩き付けられ、さらに空中からの垂直チャージを喰らってしまう。

エレベータチャージとの二つ名で、全プレイヤーから畏怖されているその技は。見た目は派手なのだが、その前にパーティが崩壊するため、滅多にお目にかかれないので有名な技。

そして、盾役すら一発で殺されてしまうのも有名な技。

「あっ、危なっ！ まさかここで喰らうとはっ！ HP残り、あと18で生き残ったっ！」

「うわっ、凄い威力だねえっ！ ってか、この技浴びて生き残ったキャラ、私初めて見たよっ！」

「隊長は体力オバケですからねえ。しっかし、今のは凄い派手な技でしたねっ！」

「かっ、回復っ！」

瑠璃だけが慌てて回復を飛ばす中、弾美はすっかり自分のポーションも使って体力を安全圏に戻す。珍しいものを見たという事で、何故か一同ハイテンションな様子。

他のキャラが喰らったらヤバいと警戒しつつも、実はこの技は一度掴まれたら防ぎようが無い。突き飛ばされたら、大人しく普通のチャージを受けようとの薫の作戦の提示に。  
それ位しか無いかなと、弾美も降参気味。

結局は、それが功を奏したのかも知れない。頭突きとチャージ&咆哮と爪の多段攻撃のダブルコンボには、一行はかなり苦しめられたものの。何とか死人を出さずに削り切りに成功。

倒した場所に魔方阵が出現し、このステージを制覇した事を知らせて来る。しかし、休憩の後にそこに入ろうとしたパーティは、戦闘前の選択肢の意味をようやく知る事に。

強制ムービーの割り込みで、何やらイベントが発生したのだ。

破壊の化身である人間達よ。もしもその強大な破壊の力を、護る為の糧としたければ……この転移の扉の中心に、お前達の所有する武器をトレードするがよい。

ただし、そなた達が所持する最強の武器でなければ、効果はないであろう。この取り引きを無視するならば、そなた達は破壊の化身として、この先つけ狙われる事となる。

畏れられる存在を目指すならば、それもまた善し。

「ぐえっ、何か変な縛りが出た……体のいい、パーティの弱体狙いのトラップかっ?」

「んっ、前の選択肢を間違ったペナルティって事? そんな感じはしないけど、これ自体も一応は選択肢なのかなあ?」

「うっ、私の両手槍……短い付き合ってたなあ……」

「ああっ、薫さんがさっき入手した槍が、パーティで一番強い武器ですかっ!」

それを聞いた弾美は、しばし考える素振り。それからカバンの中

のアイテムをチェックして、レイブレードがあつたと口にする。確かに攻撃力だけなら、40と同じ数値である。

片手で振るえる分優秀だが、耐久度が2しか無いので、最近はおつかなくて使っていないかったのだ。特に薫がメンバーに入ってから、削りはアタッカーの二人に任せている。

コイツが無くなつても、この先で不自由はしないだろうと、弾美はそれをトレードする事に。薫は飛び上がって喜んだのだが、瑠璃は何となく浮かない表情である。

何しろその削り能力で、何度もパーティのピンチを救ってくれたアイテムなのだ。

「仕方ないよねえ、うん。今まで守ってくれて有り難う、お守りみたいに思ってたけど……」

「そう言われれば、そうだなあ。さよならレイブレード、儂い所を含めて結構好きだったぞ」

「そっかあ、そうですねえ……隊長、最後に装備している所を写真に！ 1枚だけお願いしますっ」

ちよつとおセンチな気分で、美井奈に促されるまま、卒業写真の撮影のようにパーティが集合。ハズミンが武器をレイブレードに構えてポーズを取ると、光の集約されたその刀身は、まるで淡い命そのものの様にゆったりと光を明滅させる。

いつしか美井奈は泣いており、つられて瑠璃まで瞳を潤ませ始めている。ゲームをクリアしたのならともかく、武器を手放すイベントでこんなふうに来るとは思わなかった。

それは弾美も同じ事で、手放すのは苦楽を共にした相棒である。その思いを断ち切るように、片手剣をトレードすると。先程のナレーションが、取り引きは為されたと囁いて来た。護る為の力を、あなたの身に与えよう。

そして眩しい光に包まれるハズミン。

どうやらこの選択肢は、レア装備のパワーアップのために用意されたもののよう。パーティに偶然、両手槍を使うキャラがいたので弾美チームは迷ってしまっただが。この最終ステージで、レア装備の防御力を上げる仕組みに用意されていたみたいだ。

そんな訳で、弾美の暗塊装備は軒並みパワーアップの運びに。4部位の防御力が全て+5されたとのログ表示で、装備はより強靱に生まれ変わりをを見せてくれた。

実は前の選択肢で、トレードするものが変わっていた可能性が。破壊者を選択したから武器を手放す事になったのだらうとの瑠璃の推理も、多分当たりかなと一行は納得。そう思うと複雑だが、貰ったばかりの盾を手放すよりは良かったかも。

魔方阵が再び光を放ち始めて、移動可能と知らせて来る。

何度も移動を繰り返していると、スタート地点の印象が薄れて来るのだが。一行が戻ってみると、大樹の精神体は相変わらずパーティに悲しげな眼を向けて来た。

残るステージは1つで、魔女の手掛かりと部下の存在を示すタイトルになっている。戦闘は必至な感じ。宙に浮いた、未来を写す水晶玉のような空間には、マッチョな敵の姿が窺える。

この最終ステージのラスボスだらうと、一行が最後に残しておいたのだが。

戦闘準備を整えて、各々が新たに気合いを入れ直して。最終戦に向けて、弾美は皆で意思の統一を図りに掛かる。その後で敵かに、リーダーが代表してステージをクリック。

すぐに転送かと思いきや、強制イベントが挿入される。

男もやはり、生き物の影の無い荒野を何日も彷徨って辿り着

いた者だった。大樹によって助けられた大男は、やがて魔女の力にひれ伏し、その軍門に下る。

今は魔女の護衛などを任されていて、侵入者であるパーティの居場所によやく見当をつけた所だった。彼にとっては、それはしがらみを消して行く作業に過ぎない。

魔女が正しいとか、誰が間違っているかとか、この小さな空間の中で議論しても始まらない。ここでは力を持っている者が正義に他ならない、力が無いと干乾びてしまうのだ。

その点から言えば、これから対面する冒険者達もひとつの正義なのである。そして間違いなく、自分と同等かそれ以上の力を持っている。その力でもって、この3すくみの状況を打破しようとしている。

男は戦う前に問うてみたかった。

その正義の力を？大樹の願いのために使う

？魔女を助ける手助けにする

？天使の味方となって行使する

「これもまた、微妙な選択だなあ……」

「だねえ……どれもありそうな、なさそうな……」

「ん、私は大樹ですかねえ？ 天使と魔女は、争ってばかりですもん」

「それもそうだねえ、じゃあ私も大樹に1票かなあ？」

それじゃあそうしようと、皆で大樹の願いに票を入れる事に。強制動画は滑らかにフィールドの大男に焦点を合わせて行き、そこは間違いなく戦闘に用意された場所だった。

大男は頑丈そうな甲冑を身にまとい、手には大きな刺付きハンマーを所有していた。足元に、2体の木人形を従えているのが不気味どこかで見た、糸で操るカラクリ人形のような風体だ。

部位モンスター扱いなのか、人形達は大男にピタリくっついて



離れない。

御託を並べても仕方が無いだろう。これは正義のための戦いではないのは、お互い分かっている事だし。だが、お前達の我を通すと大樹の力が弱まって、魔女も俺も大変な事になってしまうのでね。

何度も言うが、これは互いの我を通すための戦いだ。お前達が大樹の側に付くのなら、俺は全身全霊を掛けてそれを阻止するだけの事。なに、こちらが負けても文句は言わないさ。

用意が出来れば、参るっ！

「見事な前口上だけど……魔女についてたら、コイツは仲間になったのかな？」

「さあ……でも、一緒に天使を倒そうってなお話になっても嫌ですよねぇ？」

「シナリオが破綻するような選択肢は出て来ないと思うけど、確かに悪ふざけで変なストーリーになったら嫌だねえ。これからは、真面目に選択肢を選ぼうね？」

確かにそうだと、強化魔法を掛けながら話し合う一同。あまり待たせても、啖呵を切った敵にしても退屈だろうとのたまいながらも、ついでにヒーリングで、MPまで回復してしまったり。

そんな感じの最終戦は、思った通り壮絶な闘いになった。大樹の側についた事になったパーティは、当面の敵である魔女を弱体化させるために、この闘いに勝利せねばならないらしい。

そんな小難しい理屈とは関係なく、ライフポイントを減らしてなるものかと必死な一行。この限定イベントを皆でクリアする目標は、チーム結成から変わっていない。

順位の良し悪しは、今となってはあまり気にならないメンバー。

「うわっ、人形が足元にまとわり付いて邪魔くさいなっ！ 多分ステップ封じだろうな、俺には関係無いけどウザいっ！」

「ステップ封じておいて、あの大きなハンマーで殴る戦法？ じゃあ、人形は無視して平気？」

「どうかなあ？ 特殊技で変なの持っていないといいけど……別にHP持ってるし」

「範囲技で、ちよつとずつ削っておきますか？ 私なら、矢弾を交換するだけで可能ですけど」

念の為にそうしておいてくれと、弾美が提案に乗つかる形で指示を出す。自分も時折で、特殊な動きの人形の気を引いて、アタツカグランバスターー達の安全を確保。

大男の一撃はとにかく強烈で、時折通常の攻撃が範囲化してしまふ効果があるらしい。体力もかなり豊富で、防御力も高い仕様なのは見た目通りではあるのだが。

時折土系の魔法も使って来て、防御を上げたり回復したりとウザ過ぎる。

「くそっ、使用スキルのスロット上限で《上段斬り》を封じちゃったからなあ。魔法がなかなか止められないから、敵が図に乗ってるぞっ！」

「やばいねえ、防御を強化された上に回復まで掛かってるよっ！

瑠璃ちゃん、天使魔法でキャンセルとか出来ないかなあ？」

「えっ、どうだろう……試してみますねっ」

ただでさえ硬い相手なのに、土系の魔法はほとんど反則である。

再三見せる強烈な範囲ハンマー技を潰すのに忙しかった瑠璃は、魔法にまで手が廻らないのだ。

その上足元の人形が、時折こちらの攻撃を邪魔したり、こちらの魔法を妨害したりと厄介この上ない。やっぱりコイツは邪魔だと、

弾美はとうとう破壊要請をアタツカーに依頼する。

瑠璃の《アシッドブレス》が程よく効いていて、人形はじんわり弱っている。

さらに瑠璃の天使魔法で、一行の望むキャンセル効果が働いたよう。闇系の魔法以外は効果が無いと思っていたパーティーには嬉しい誤算。ここから反撃だと、意気が上がる一同。

これで敵の大男の強化魔法は、全て取り払われたよう。それでも作戦通りに、若干柔らかくなつた大男を後回しにして、邪魔な人形を先に倒そうとスキル技を叩き込むアタツカー陣。

程なく1匹倒した途端に、戦場に異変が。

倒れた人形から上空に向かって、透明な糸が一瞬見えたと思つたら。上に茂っている樹木の枝の隙間から、髪の毛のぼさぼさの瘦躯の人間が落ちて来て、いきなり薫に襲い掛かつて来た。

慌てながらも対応する薫に、もう1匹の人形ももうすぐ倒れるとの報告が。それはやめたと、悲鳴のような薫の返事。何しろ新しく参戦して来た敵も、かなりの強さであるらしく。

弾美も慌てて、範囲技禁止の号令を出す。

「うーん、毒が入ってるからそのうち勝手に倒れちゃうかも？ とにかく新しい敵を先に倒すね、ハズミちゃん？」

「うわっ、コイツ二刀流だっ、結構強い……範囲浴びないように、ちよつと離れるね？」

「通常矢弾に変えましたよ、隊長っ！ 薫さんっ、早くタゲ固定して下さいっ！」

流れはこちらにあった筈なのに、何故か劣勢に立たされているパーティーだった。乱入した瘦躯の男は二刀流とステップ捌きで、タゲを固定しようと躍起になる薫を翻弄している。

瑠璃が横から、足止め魔法とスキル技での援護。薫も連続スキル技をお見舞いして、ようやく撃破態勢が整う事に。そこに危惧していた事態、人形が毒に倒れて戦場に新たな変化が。

今度の人形遣いは、小太りでまさかりを担いでいる。同じように操る人形が無くなって樹上から降って来たらしい。そいつは嫌らしい笑い声を上げて、混乱している戦線に参加。

腹を立てた弾美は、範囲スキルでそいつのタゲも取ってしまう。

ボスとその新たな手下の、2体の難敵を相手取って。弾美は果敢にも、独りでキープを続けるつもりのように。2体とも両手武器の使用なので、攻撃にスピードは無いものの。

一度攻撃を浴びてしまえば、結構なダメージを負う事態は免れない。それでもフォローに入ろうとする瑠璃を制止して、回復支援のみで平気だと言い放つパーティの盾役。

顔中に笑みを広げ、2体の敵の攻撃に意識を集中している。

「さつき防御が20も上がったからな。重力魔法とステップも交えれば、案外行けそう」

「ぐむつ、逆にこの二刀流使いが滅茶苦茶敵しいつ。攻撃当たると、結構な確立で麻痺とか毒とか受けちゃうのよっ！ 天使魔法ですぐ相殺されるけど、足が止まってステップ封じられちゃう」

「んと、じゃあ幻想系と目潰し系で、被害を押さえた方がいいのかな？ 美井奈ちゃん、回復とか支援をお願い、ハズミちゃんの方もっ」

「りよ、了解しましたっ！ 回復と支援……支援……」

必死に自分の役割を確認する美井奈。皆と離れた後方になるので、戦況を把握しやすくはあるのだが。取り敢えず《フラッシュ》を部下に掛けると、途端に空振りが増えた感じが。

弾美に誉められ、途端に気をよくした美井奈。これは行けるかも

と、次は《影縫い》での支援を実行する。慣れないアタッカー以外の仕事だが、これはこれで楽しいと感じる少女。

噛み締めるように、敵の動作や味方の体力ゲージに忙しく視線を走らせる。

一方瑠璃と薫のコンビは、幻覚技と目潰しで、敵の二刀流を封じ込める作戦に。瑠璃の《ハニーフラッシュ》や《Z斬り》などで目潰しやスタンを引き起こしつつ。さらには薫の《幻影神槍破》で、反撃の的を絞らせない。

それからSPの具合を見て、ガツンと《貫通撃》で敵の体力を奪う。瑠璃の合図で、美井奈の遠隔攻撃もそれに参加。なかなか上手く行っている新戦法に、手下のHPもどんどん減って行く。

反撃の特殊攻撃を空振りさせた時には、女性陣から気合いの入った声も。

「よしっ、特殊技を空振りさせたっ！ これを見れるから、前衛も快感なのよねえ！」

「た、確かに楽しいかも……ハズミちゃん、もうすぐこっち終わるよっ！」

「おっけ、美井奈の支援も、なかなか上手だなっ。薫うちのタゲを美井奈が取りそうな時は、この戦法もアリだなあ」

滅多に誉められた事の無い美井奈は、結構な有頂天振り。そんな事をしている間に、ようやく二刀流使いは昇天する。怒涛の追い込みを演出したのも、やはり調子に乗った美井奈の弓術。

小太り男を引っこ抜いて、2匹目の部下の退治へと移行しようとする女性陣。実行しようと近づいた途端に、ボスのハンマーでの範囲攻撃は、果たして偶然か嫌がらせか。

何にせよ、勢いに乗って数減らしを実行するメンバー達。新たに対峙するまさかり使いは、炎系の魔法も使うようだ。範囲攻撃を受

けて、こちらにも避けられない被害が出てしまう。

特に炎のプレスは、敵方に使われるとその威力が良く分かる。

それでも苦勞しつつ、敵のHPを削って行く女性陣。幸い小男は、破壊力はあるがHPは少ないよう。最後の悪あがきのまさかりアタックを何とか凌ぎ切り、これで手下の殲滅は終了。

被害の甚大さは、薬品の消耗を見ればよく分かる。ポケットを慌てて入れ替えて、今度はボスとの対決に備える女性陣。弾美もポケットの整頓をしないと、スイッチの提案をして来る。

それを受けて薫が、チャージからの連続スキル技をお見舞いする。ところがボスの大男は、盾を装備すらしていないのに、何故か防御スキルを実行すると言つ反則技。

途中からの技に割り込みを掛けられ、カウンターの餌食になるカオル。

「うわっ、カウンターって防御スキルじゃなかったっけ？ 盾持っていないのに使うのはずるいっ！」

「うげっ、強烈なダメージだなあ。美井奈、仕方ないから代わりにタゲ取ってくれっ！」

「了解しましたっ、連続スキルは……使っちゃ駄目？」

遠隔ならば平気だろうとの返事に、美井奈は張り切ってスキル技を敢行する。ところがこれにも割り込みが入り、何と後半は《アースウォール》で完全ブロックされる始末。

こいつは面倒な敵だぞと、邪魔な壁を壊しながらのパーティ会話。考えてみれば、こんなに防御に特化した敵とは、今まで闘った事が無かった気が。最後は瑠璃の魔法の連弾で、何とか注意を弾美から外す事には成功した一行。

外周をマラソンしながら、弾美のポケットの交換を待ってみたり。

ちまちまと前半削っていた事もあり、ボスのHPは半分程度には落ち込んでいる。再び弾美の《ブロッキング》がら、がっちりキープした敵に向け。再度、アタッカーの削り合戦が始まる。

敵の防御は硬いのだが、弾美の《闇喰い斬》がいい感じ。どうやら敵の防御力を無視するスキル技の特性があるらしく、アタッカーにも負けないダメージを叩き出す。

美井奈と薫は《貫通撃》くらいしか、通常のダメージを出せる技が無い。スキル技と言えど、他の技は分厚い鎧にダメージが阻まれてしまつて、不満足な効果しか上がらないのだ。

そんな訳で、瑠璃は離れて魔法での削りと回復役に。美井奈が練習代わりにと、《影縫い》でのスキル潰しにトライしている。何しろスキル技での追い込みを掛けると、割り込みで酷い目に合つてしまふのだ。

それでも順調な速度での削りは、パーティの潜在能力故だろう。

瑠璃の《マジックブラスト》で、大きく体力を削がれた大男。そのダメージで、とうとうハイパーモードに突入したようで、大男の武器のハンマーの形状が変化する。

それは実際、なかなかの見ものだった。ハンマーの先が取れてしまつて、独楽の形に変形して行くと。地面に落ちた2つのそれが、刃を飛び出させて暴れ始める。

驚いたのは前衛も後衛も一緒。何しろその暴れ独楽は、後衛にも容赦なく襲い掛かつて来たのだから。武器なのでHPは存在せず、一周したら消えてしまつたのだが、その間の被害は甚大。

瑠璃が慌てて範囲回復、事無きを得はしたものの。

「うおっ、びびつた〜っ！ しかも強化魔法消されてるしっ！」

「うわっ、本当だ……ひどいなあ、取り敢えず掛け直すね〜」

「今のも特殊技ですかあ、嫌な技いっぱい持ってますねえ、この人」

「一応、ステージ最終ボスだもんねえ。ハイパーモード気をつけな

きや  
」

強化魔法を掛け直しながら、それもそうだと一同は気を引き締めつつ。魔法をある程度掛け終わって、MPをこっそり使ってしまった瑠璃が、エーテル節約にヒーリングに入る頃。

ボスの豊富なHPも、残りは3割程度までは削られていた。再度のハイパー化を警戒しつつ、天使魔法を掛けた瑠璃が、魔法の封じ込めにと後衛から距離を詰める。

特殊技までは封じてくれないだろうが、アタッカーの追い込みにかウンターや割り込みを喰らう事態は避けたいとの思いだ。SPの貯まった美井奈と薫は、じりじりと機会を窺う。

一気に倒し切れれば、反撃も気にならず理想的だ。

弾美の《闇喰い斬》を皮切りに、一気呵成のパーティー攻撃が始まった。瑠璃は《マジックブラスト》を、美井奈と薫は得意の貫通系のスキル技をそれぞれ振るい始める。

ボスの防御スキルが、薫の連続スキルにかウンターを合わせる。しかし、全ての攻撃には対応出来ず、みるみる内に弱って行く大男。瑠璃の魔法効果で、ちよつと酔っ払い気味な感も。

そのまま削り切りたいパーティーに対して、ボスの最後のハイパー化が襲う。

今度のハイパー化もかなり厄介だった。魔法のクラックが弾美達を襲い、一時の足止めからハンマーでの吹き飛ばし。追撃を上手く封じ込めつつも、敵自身は超硬質化している模様。

美井奈の遠隔攻撃が、何とたった一桁まで落ち込んでいる。弾美と薫と言えば、少し離れた場所で何故か地中に埋まって動けない状態。見た目はモグラ叩きのモグラ状態。

その頭上には、突如出現した魔法のハンマーが、ピコピコとダメージを与えて来ている。屈辱の攻撃方法に、しかし脱出手段は見当



たらず。それでも天使魔法の掛かった瑠璃が近付くと、魔法のハンマーだけは消滅したようだ。

妖精魔法からの光球ダメージでとどめを刺せと指示された美井奈は、地響きを立てて近付く大男に本気でびびって逃げ出す始末。その際に魔法で仕留めようとしていた瑠璃は、ハイパー化の際に大男が魔法ロックを掛けていた事を悟って焦りまくる。

美井奈の本気の悲鳴が、たった一人フリーの瑠璃をさらに焦らせる。

「ぐぬぬっ、まだ動けないっ！ ボスのHP、あとちょっとだぞっ、何とかしろ、瑠璃っ！」

「魔法が使えないのっ、土系に魔法ロックって魔法ってあったの？」

「ああ、あったような気がするけど……ハイパー化が解けないと、物理系の攻撃も通じないような気もするなあ」

「ひぎゃっ、捕まっちゃった！ 死ぬっ、死んじゃうっ！」

他のメンバーも、確実にそう思ったのは確か。何しろたった一撃で、ミイナのHPは半減してしまったのだから。しかし、前もって掛けてあった電撃魔法が、辛うじてボスの進撃を止める。

それを見た瑠璃にも閃くものが。前もって掛けてあった天使魔法が消えてしまうが、このままでは美井奈が死んでしまう。必死に駆け寄って、勢い良くバニッシュ込みのスキル技を見舞う。

美井奈も2撃目を受けており、久々の雷の精を召喚。残りのHPはたった一桁、その代償に再度の雷ダメージの報復と、瑠璃の大慌ての一撃が寸前のところで効を奏したよう。

大男は完全に動きを止めて、ようやく弾美と薫も生き埋め状態から解放。

「こ、怖かった……スタンしてたのに2撃目来た時は死ぬかと思いました」

「土属性は雷には強いからな、ダメージもほとんどいってなかっただろ」

「そうだねえ、瑠璃ちゃんのスキル技でとどめ刺した感じかな？」

最後は私と弾美君、完全に封じられて何も出来なかったし」

「あつ、イベント動画始まったみたい」

瑠璃の言葉通り、大男の苦しそうな姿と最期の言葉が画面に映し出される。どうやら、魔女の直属の部下は4人いるようで、その一人でも欠けると大樹との魔力ネットワークに狂いが生じるらしいのだ。

大樹の操る魔力と大樹の巨大な質量が、最近は逆に仇となって来ているらしく。それを支えるための術式に、どうしても分散してリスクを低くする必要があったらしい。

大樹の口からは直接聞けなかったが、その術式の消滅こそが大樹の望んだ事らしい。大男からは、大樹の側にお前達がつくのならば、悲しい結末をその目にするだろうと警告が発せられる。

命の間際の言葉を、真剣に聞くキャラ達。

大男が倒れてしまい、自然に轉移されるパーティメンバー。大樹の精神体の場に出るものと思いきや、一番最初の轉移魔法陣、つまりは樹上の街に送られてしまう。

そこに出た途端に、大量のギルと経験値、それから武器やアイテム類のドロップの報告がログに流れる。今回は、さすがに使い道の無い金のメダルの類いは無し。

その代わり、大ポーションなど価値の高い薬品類が大量にドロップした様子。

エリア放出されて完全に気を緩めるパーティは、しかし次の瞬間にとんでもない物を目にして愕然としてしまう。目の前に見えるそれは、ひとつの滅びの空間だった。

大男の言っていた事は、本当だったのだと気付くメンバー達。そこにあつたのは、枯れかけている大樹そのものだった。魔力の正常な流れを阻害され、至る所に崩壊が始まっている。

大きな幹に添って、黄色い何かか滝のように流れ落ちて行く。良く見ればそれは葉っぱで、大量のそれは、本当に水のように下へ下へと途切れる事無く流れを作っていた。

樹皮も完全に枯れて剥がれている場所が目立っていて、苔や他の雑草が芽吹き始めている。大樹の願った新しい生命のサイクルは、必要な養分を得る事で世知辛く廻り始めたよう。

たくましく勇ましく、当然の権利を主張するかのような、命そのものの輝きを発しながら。

一行が一番驚いたのは、大樹の中心の巨大な空洞だった。以前は街の床と言うか通路だったのだが、その上辺が崩落したために出現してしまった様子。かなりの大きさのそれは、幅も高さも申し分なく、その存在がひとつの小さな世界のよう。

下を見下ろすと、古い洋風の館が空洞の壁にへばりつくように建っていた。魔女の館のイメージそのまま、薄暗い空間にどこことなく不気味な外見を漂わせている。

その館の窓の一つが、次のステージはここだよと挑発するよ  
うに瞬いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1503t/>

---

街中がネットファイター(完全版)

2011年9月3日20時58分発行